主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書

—本　文—

1 9 8 5

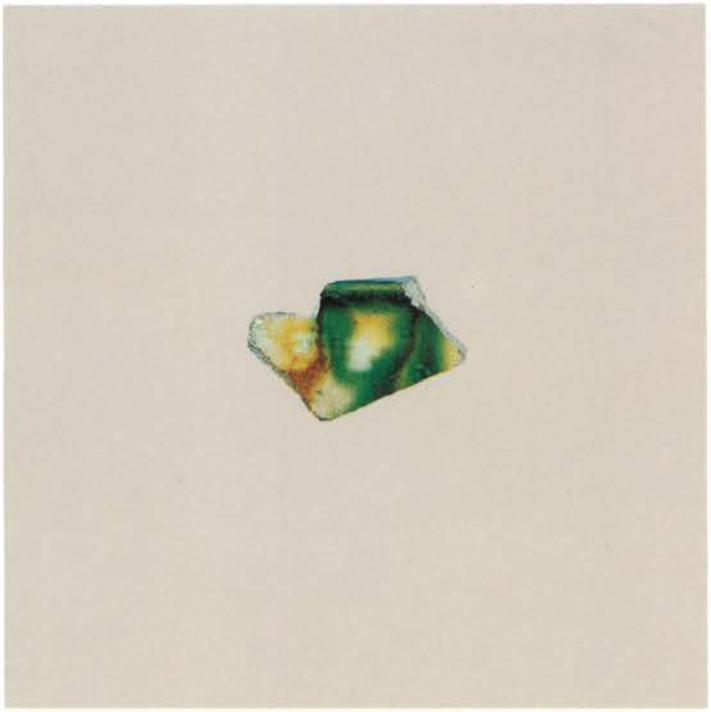
千　葉　県　土　木　部
財団法人　千葉県文化財センター

主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書

—本　文—

1 9 8 5

千　葉　県　土　木　部
財団法人　千葉県文化財センター



向台遺跡谷出土唐三彩・陶枕

埴生郡衙推定地航空写真(調査区は大畑Ⅰ遺跡・南上空より)

大畑 I 遺跡航空写真(東より)

序　　文

千葉県の北部に広がる下総台地は自然環境に恵まれ、先土器時代から歴史時代に至る多くの遺跡が所在することで知られています。特に印旛沼と利根川の中間に位置している栄町は奈良時代前期様式の重要文化財「銅造薬師如来坐像」で有名な竜角寺をはじめ、房総の歴史を解明する上で重要となる遺跡が数多く所在し、古くから注目されてきたところです。ところで、農業地域としての栄町も隣接する成田市には国際空港が建設され、また、東京への通勤圏として組み込まれ、町の様相もしだいに変化をみせてきている現況です。このような状況に対応するため、千葉県土木部では、成田ニュータウンへの交通量緩和と、新東京空港への交通路を確保するため、成田市街地と栄町を結ぶバイパスを計画しました。

千葉県教育委員会では、道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部道路建設課をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、路線変更が困難であるためやむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもと、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、昭和55年度から年次を追って計画的に調査を実施してきたところです。

このたび、昭和55年度から58年度にわたり実施した、栄町に所在する9遺跡の整理が終了し、その成果を「主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書」として刊行する運びとなりました。

本報告書に収録した遺跡のうち、大畑Ⅰ遺跡では官衙跡と考えられる大規模な掘立柱建物群が検出され、また、向台遺跡からは唐三彩の陶枕など貴重な遺物が多数出土しました。これらの遺構や遺物は古代下総国を解明していく上で重要な資料となるものです。

この報告書が、学術的な資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史に対する理解を深めるために、広く活用されることを望んでやみません。

最後に地元関係者、千葉県土木部、県印旛土木事務所、千葉県教育委員会、栄町教育委員会の御協力、御指導に深く御礼申し上げるとともに、寒さ暑さの中で協力された多くの調査補助員の皆様に対して心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

例　　言

1．本書は主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）の施行にともない事前調査された印旛郡栄町に所在する9遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡は前原Ⅰ遺跡、前原Ⅱ遺跡、五丹歩遺跡、池上りⅠ遺跡、池上りⅡ遺跡、大畑Ⅲ遺跡、大畑Ⅱ遺跡、向台遺跡、大畑Ⅰ遺跡の9遺跡である。

3．発掘調査の実施は、千葉県土木部の依頼により、文化庁ならびに千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行なった。

4．発掘調査は昭和55年度～57年度の3ケ年にわたって実施されたが、58年度においても2ケ月の発掘調査を実施したため、あしかけ4ケ年の調査期間になる。

5．整理作業は、基礎整理を昭和56年度から実施したが、本格的な整理作業は昭和58年の1年間である。本書の刊行は昭和59年度である。

6．発掘調査、整理作業の各年度の担当者は序章に記してある。

7．本書の編集は石田広美がおこなった。縄文式土器については小林清隆、横山仁が、大畑Ⅰ遺跡出土の埴輪については萩原恭一が執筆し、他は石田が執筆した。

小林清隆　第4章第3節、第5章第3節の縄文式土器の部分

横山　仁　第1～3、7、8章第3節の縄文式土器の部分

萩原恭一　第8章第3節Cの埴輪の部分

8．本書に使用した空中写真は、有限会社エアー・フォト・サービスに委託したものである。

9．前原Ⅰ遺跡における花粉分析ならびに鉱物分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託したものであり、分析報告を掲載した。

10．縄文式土器に関しては西川博孝、新井和之、原田昌幸の諸氏に御教示を得た。

11．古墳時代、歴史時代に関しては下記のかたがたから御教示を得た。

松村恵司、金子真土、伊東信雄、岡田茂弘、平川南、西弘海、巽淳一郎、服部敬史、雪田孝、白鳥良一、森田勉、斉藤孝正、田辺昭三、須田勉、原田享二、佐久間豊

12．発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育委員会、千葉県土木部、印旛土木事務所、県立房総風土記の丘資料館、栄町教育委員会、地元関係諸機関各位の御協力をいただいた。

13．発掘調査から報告書刊行に至るまで、献身的な協力をしてくれた青山学院大学大学院学生石戸啓夫君に感謝の意を表する。また、現地作業から出土遺物の整理の過程で御協力いただいた多数の調査補助員の方々に感謝の意を表するものである。

14．特に大畑Ⅰ遺跡及び向台遺跡に関しては現地説明会、「日本歴史」等において発表した事と違いがあれば、本書をもって優先するものである。

凡　例

1．本書中において使用している遺構番号は現地作業に際して用いたものを改訂している。その新旧番号は対照表を作成してあるので参照されたい。特に遺物には旧番号で注記してあるので、実物の検索の時には注意してほしい。

2．向台遺跡、大畑Ⅰ遺跡においては遺構名を以下のように略記した。ＳＩ＝竪穴住居跡、ＳＢ＝掘立柱建物跡、ＳＥ＝井戸、ＳＤ＝溝、ＳＡ＝塀、ＳＸ＝性格不明遺構、ＦＰ＝炉穴、ＴＰ＝陥し穴、Ｋ＝古墳、Ｔ＝塚

3．遺構の縮尺は竪穴住居跡は1/60で統一してあるが、他の遺構は任意の縮尺であり、その旨、各図に表示してある。

4．掘立柱建物跡の模式図は縮尺には関係ない。２重丸は柱痕跡のあるもの、黒丸は柱痕跡を確認できないものである。

5．方位はすべて座標北である。磁北は西偏6°10′である。

6．主軸方向は、竪穴住居跡ではカマドを有するものに限り表示した。それは、座標北に対するカマドを通る住居跡の中軸線をなす角度で示した。掘立柱建物跡の主軸方向は、座標北に対する棟方向のなす角度で示した。

7．遺構図中における遺物番号は、遺物実測図、図版の遺物番号と一致する。

8．遺物の縮尺は土器1/4、縄文土器拓影図1/3、土製品・石製品1/2である。その他は任意の縮尺であるが、その旨、各図に表示してある。

9．縄文式土器の群別名称は統一して使用している。群別の基準等は第４章において記述されている。

10．遺物出土状況図において使用している記号は下記のようになっている。

	向台遺跡 大畑Ⅰ遺跡	前原Ⅰ遺跡 他６遺跡
●	土器	土器
▲	鉄器・スラグ	鉄器
■	砥石	砥石
★		土玉
◉	土玉	石製品
⦶	紡錘車	石器
◎	土製品	土製品
⦶		支脚
☆	貝	
＊	瓦	紡錘車

本文目次

序　文
例　言
凡　例
目　次

序　章 …… 1
第1節　発掘調査に至る経過 …… 3
第2節　遺跡の立地と環境 …… 3
i　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
ii　周辺の歴史的環境 …… 9
第3節　発掘調査の経過 …… 10

第1章　前原Ⅰ遺跡の調査 …… 15
第1節　遺跡の位置及び立地 …… 17
第2節　遺跡の概要及び調査の方法 …… 17
第3節　検出された遺構と遺物 …… 21
A　先土器時代 …… 21
B　縄文・弥生時代 …… 40
C　古墳時代 …… 43
D　飛鳥時代 …… 72
竜角寺108号墳 …… 72
第4節　結語 …… 83

第2章　前原Ⅱ遺跡の調査 …… 89
第1節　遺跡の位置及び立地 …… 91
第2節　遺跡の概要及び調査の方法 …… 91
第3節　検出された遺構と遺物 …… 91
A　縄文時代 …… 91
B　古墳時代 …… 98
第4節　結語 …… 110

第３章　五丹歩遺跡の調査 ……111
第１節　遺跡の位置及び立地 ……113
第２節　遺跡の概要及び調査の方法……113
第３節　検出された遺構と遺物 ……116
A　縄文時代 ……116
B　古墳時代 ……123
C　奈良・平安時代 ……132
D　江戸時代 ……137
第４節　結語 ……140

第４章　池上りＩ遺跡 ……141
第１節　遺跡の位置及び立地 ……143
第２節　遺跡の概要及び調査の方法……143
第３節　検出された遺構と遺物 ……144
A　縄文時代 ……144
B　その他 ……157
第４節　結語 ……189

第５章　池上りII遺跡 ……191
第１節　遺跡の位置及び立地 ……193
第２節　遺跡の概要と調査の方法 ……193
第３節　検出された遺構と遺物 ……193
A　縄文時代 ……193
B　古墳時代 ……214
竜角寺75号墳 ……214
第４節　結語 ……216

第６章　大畑II遺跡の調査 ……225
第１節　遺跡の位置及び立地 ……227
第２節　遺跡の概要と調査の方法 ……227
第３節　検出された遺構と遺物 ……227
第４節　結語 ……235

第７章　向台遺跡の調査……237
第１節　遺跡の位置及び立地……239
第２節　遺跡の概要と調査の方法……239
第３節　検出された遺構と遺物……244
A　先土器時代……244
B　縄文時代……248
C　古墳・飛鳥・奈良・平安時代……249
i　集落跡……249
1　竪穴住居跡……249
2．掘立柱建物跡……324
3．柵・その他……327
ii　谷出土の遺物……329
1．施釉陶器……330
2．搬入土師器……331
3．土師器……333
4．須恵器……342
5．墨書土器……370
6．陶硯……387
7．瓦塼類……389
8．石製品・土製品……392
9．羽口……393
第４節　結語……399

第８章　大畑II遺跡の調査……405
第１節　遺跡の位置及び立地……407
第２節　遺跡の概要及び調査の方法……409
第３節　検出された遺構と遺物……409
第４節　結語……410

第９章　大畑Ｉ遺跡の調査……411
第１節　遺跡の位置及び立地……413
第２節　遺跡の概要及び調査の方法……414
第３節　検出された遺構と遺物……417

A　先土器時代 …… 417
B　縄文時代 …… 432
i　炉穴 …… 433
ii　陥穴 …… 439
iii　その他 …… 442
C　古墳時代 …… 451
i　竪穴住居跡 …… 451
ii　竜角寺７号墳 …… 562
iii　竜角寺112号墳 …… 564
D　飛鳥・奈良・平安時代 …… 583
i　竪穴住居跡 …… 583
ii　溝跡 …… 595
iii　井戸跡 …… 596
iv　掘立柱建物跡 …… 606
第４節　結語 …… 643

巻首図版

1．向台遺跡谷出土唐三彩・陶枕
2．埴生郡衙推定地航空写真（調査区は大畑Ⅰ遺跡・南上空より）
3．大畑Ⅰ遺跡航空写真（東より）

付　　図

1．成田安食線関係周辺地形図及び調査地点
2．大畑Ⅰ遺跡遺構配置図
3．成田安食線関係土器変遷図

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置及び周辺地形 …… 4
第 2 図　遺跡の位置 …… 5
第 3 図　歴史時代関連遺跡分布図 …… 6
第 4 図　各遺跡標準土層柱状図 …… 7
第 5 図　前原Ⅰ遺跡発掘区及び周辺地形図 …… 18
第 6 図　前原Ⅰ遺跡遺構配置図 …… 19
第 7 図　表採土器実測図 …… 20
第 8 図　先土器時代遺物出土状況図 …… 22
第 9 図　出土石器実測図① …… 23
第 10 図　出土石器実測図② …… 24
第 11 図　出土石器実測図③ …… 25
第 12 図　出土石器実測図④ …… 26
第 13 図　出土石器実測図⑤ …… 27
第 14 図　グリッド出土土器拓影図① …… 41
第 15 図　グリッド出土土器拓影図②、実測図 …… 42
第 16 図　第 1 号住居跡実測図 …… 44
第 17 図　第 1 号住居跡遺物出土状況図 …… 45
第 18 図　第 1 号住居跡出土土器実測図① …… 46
第 19 図　第 1 号住居跡出土土器実測図② …… 47
第 20 図　第 1 号住居跡出土土器実測図③ …… 48
第 21 図　第 1 号住居跡出土砥石実測図 …… 49
第 22 図　第 1 号住居跡出土土玉実測図 …… 50
第 23 図　第 2 号住居跡実測図 …… 52
第 24 図　第 2 号住居跡遺物出土状況図 …… 53
第 25 図　第 2 号住居跡出土土器実測図① …… 54
第 26 図　第 2 号住居跡出土土器実測図② …… 55
第 27 図　第 2 号住居跡出土土玉実測図 …… 56
第 28 図　第 3 号住居跡実測図及び遺物出土状況図 …… 57
第 29 図　第 3 号住居跡出土土器実測図 …… 56
第 30 図　第 3 号住居跡出土玉類未成品及び原石実測図 …… 58

第 31 図　第 4 号住居跡実測図 ……59
第 32 図　第 4 号住居跡遺物出土状況図 ……60
第 33 図　第 4 号住居跡出土土器実測図 ……61
第 34 図　第 4 号住居跡出土玉類未成品及び原石実測図 ……62
第 35 図　第 4 号住居跡出土原石実測図 ……63
第 36 図　第 5 号住居跡実測図 ……64
第 37 図　第 5 号住居跡出土土器実測図 ……65
第 38 図　第 6 号住居跡実測図 ……66
第 39 図　第 6 号住居跡出土土器実測図 ……67
第 40 図　第 6 号住居跡出土砥石実測図 ……67
第 41 図　第 1 号土坑実測図 ……68
第 42 図　第 1 号土坑出土土器実測図 ……69
第 43 図　第 2 号土坑実測図 ……70
第 44 図　第 2 号土坑出土土器実測図 ……71
第 45 図　K108号墳墳丘実測図……73
第 46 図　K108号墳墳丘断面図……74
第 47 図　K108号墳実測図……75
第 48 図　K108号墳主体部実測図……76
第 49 図　K108号墳主体部実測図……77
第 50 図　K108号墳主体部掘方実測図……80
第 51 図　K108号墳出土遺物実測図……82
第 52 図　K108号墳出土須恵器……82
第 53 図　攻玉技法模式図（第 4 号住居跡出土原石⑪） ……85
第 54 図　前原II遺跡発掘区及び周辺地形図 ……92
第 55 図　前原II遺跡遺構配置図 ……93
第 56 図　グリッド出土土器拓影図① ……94
第 57 図　グリッド出土土器拓影図② ……95
第 58 図　表採土器実測図 ……96
第 59 図　表採土玉、砥石実測図 ……97
第 60 図　表採石製品実測図 ……98
第 61 図　第 1 号住居跡実測図 ……99
第 62 図　第 1 号住居跡出土土器実測図 ……100
第 63 図　第 1 号住居跡出土土玉実測図 ……101

第 64 図　第 2 号住居跡実測図 …… 101
第 65 図　第 2 号住居跡出土土器実測図 …… 102
第 66 図　第 2 号住居跡出土土玉実測図 …… 103
第 67 図　第 3 号住居跡実測図 …… 103
第 68 図　第 3 号住居跡出土土器実測図 …… 104
第 69 図　第 4 号住居跡実測図 …… 106
第 70 図　第 4 号住居跡出土土器実測図 …… 107
第 71 図　第 4 号住居跡出土土玉実測図 …… 107
第 72 図　第 5 号住居跡実測図 …… 108
第 73 図　第 5 号住居跡出土土器実測図 …… 109
第 74 図　第 5 号住居跡出土土玉実測図 …… 110
第 75 図　五丹歩遺跡発掘区及び周辺地形図 …… 114
第 76 図　五丹歩遺跡遺構配置図 …… 115
第 77 図　グリッド出土土器拓影図① …… 117
第 78 図　グリッド出土土器拓影図② …… 118
第 79 図　グリッド出土土器拓影図③ …… 119
第 80 図　グリッド出土土器実測図 …… 120
第 81 図　グリッド山土土錘実測図 …… 121
第 82 図　グリッド出土石器実測図 …… 123
第 83 図　第 1 号住居跡実測図 …… 124
第 84 図　第 1 号住居跡遺物出土状況図 …… 125
第 85 図　第 1 号住居跡出土土器実測図① …… 126
第 86 図　第 1 号住居跡出土土器実測図② …… 127
第 87 図　第 1 号住居跡出土土器実測図③ …… 128
第 88 図　第 1 号住居跡出土鉄斧実測図 …… 129
第 89 図　第 2 号住居跡実測図 …… 130
第 90 図　第 2 号住居跡出土土器実測図 …… 131
第 91 図　第 1 号蔵骨器出土状況図 …… 132
第 92 図　第 1 号蔵骨器実測図 …… 133
第 93 図　第 2 号蔵骨器出土状況図 …… 133
第 94 図　第 2 号蔵骨器実測図 …… 134
第 95 図　第 3 号蔵骨器出土状況図 …… 135
第 96 図　第 3 号蔵骨器実測図 …… 135

第 97 図　第 1 号土坑実測図 …… 136
第 98 図　第 1 号土坑出土土器実測図 …… 137
第 99 図　145号塚実測図及び周辺関係図 …… 138
第100図　145号塚断面図 …… 139
第101図　池上り I 遺跡発掘区及び周辺地形図 …… 144
第102図　池上り I 遺跡遺構配置図 …… 145
第103図　第 1 号炉穴実測図 …… 146
第104図　第 1 号炉穴出土遺物実測図 …… 147
第105図　第 2 号炉穴実測図 …… 148
第106図　第 3 号炉穴実測図 …… 149
第107図　第 3 号炉穴出土遺物実測図 …… 149
第108図　第 4 号炉穴実測図 …… 150
第109図　第 4 号炉穴出土遺物実測図 …… 151
第110図　第 5 号炉穴実測図 …… 152
第111図　第 6 号炉穴実測図 …… 152
第112図　第 7 号炉穴実測図 …… 153
第113図　第 8 号炉穴実測図 …… 154
第114図　第 9 号炉穴実測図 …… 155
第115図　第10号炉穴実測図 …… 155
第116図　第11号炉穴実測図 …… 156
第117図　第12号炉穴実測図 …… 156
第118図　第13号炉穴実測図 …… 157
第119図　第14号炉穴実測図 …… 157
第120図　第 1 号土坑実測図 …… 158
第121図　第 2 号土坑実測図 …… 159
第122図　遺物出土状況図① …… 160
第123図　遺物出土状況図② …… 161
第124図　第 I 群土器拓影図 …… 163
第125図　第 II 群土器拓影図① …… 164
第126図　第 II 群土器拓影図② …… 165
第127図　第 II 群土器拓影図③、実測図 …… 166
第128図　第 II 群土器拓影図④ …… 167
第129図　第 II 群土器拓影図⑤ …… 168

第130図　第II群土器拓影図⑥……169
第131図　第III群土器拓影図①……175
第132図　第III群土器拓影図②……176
第133図　第III群土器拓影図③……177
第134図　第II・III群土器底部実測図……178
第135図　第IV群土器拓影図……179
第136図　第V群土器拓影図①……182
第137図　第V群土器拓影図②……183
第138図　第VI・VII群土器拓影図①……184
第139図　第VII群土器実測図②……185
第140図　グリッド出土石器実測図……188
第141図　池上りII遺跡発掘区及び周辺地形図……194
第142図　池上りII遺跡遺構配置図……195
第143図　第1号炉穴実測図……196
第144図　第2号炉穴実測図……196
第145図　第3号炉穴実測図……197
第146図　第4号炉穴実測図……197
第147図　第5号炉穴実測図……198
第148図　第6号炉穴実測図……198
第149図　第7号炉穴実測図……199
第150図　第8～10号炉穴実測図……200
第151図　第11・12号炉穴実測図……201
第152図　遺物出土状況図……202
第153図　第II群土器拓影図①……203
第154図　第II群土器拓影図②……204
第155図　第II群土器拓影図……205
第156図　第III群土器拓影図……206
第157図　第II・III群土器底部実測図……208
第158図　第IV群土器拓影図……209
第159図　第V群土器拓影図……211
第160図　第VI・VII群土器拓影図……212
第161図　土製品実測図……213
第162図　K75号墳墳丘実測図……214

第163図　K75号墳周堀実測図・断面図 …… 215
第164図　大畑Ⅲ遺跡発掘区及び周辺地形図 …… 228
第165図　大畑Ⅲ遺跡遺構配置図 …… 229
第166図　第１号炭窯跡実測図 …… 230
第167図　第２号炭窯跡実測図 …… 231
第168図　第３号炭窯跡実測図 …… 232
第169図　第４号炭窯跡実測図 …… 233
第170図　第５号炭窯跡実測図 …… 234
第171図　向台遺跡発掘区及び周辺地形図 …… 240
第172図　向台遺跡遺構配置図 …… 241
第173図　グリッド呼称図 …… 243
第174図　先土器時代遺物出土状況図 …… 244
第175図　出土石器実測図① …… 245
第176図　出土石器実測図② …… 246
第177図　グリッド出土土器拓影図、石器実測図 …… 248
第178図　ＳＩ１、ＳＩ２実測図 …… 250
第179図　ＳＩ１、ＳＩ２遺物出土状況図 …… 251
第180図　ＳＩ１出土土器実測図① …… 252
第181図　ＳＩ１出土土器実測図② …… 253
第182図　ＳＩ３実測図 …… 254
第183図　ＳＩ３遺物出土状況図 …… 255
第184図　ＳＩ３出土土器実測図 …… 256
第185図　ＳＩ３出土瓦実測図 …… 256
第186図　ＳＩ４実測図 …… 258
第187図　ＳＩ４遺物出土状況図 …… 259
第188図　ＳＩ４出土土器実測図① …… 260
第189図　ＳＩ４出土土器実測図② …… 261
第190図　ＳＩ４出土埴輪実測図 …… 262
第191図　ＳＩ５、ＳＩ９実測図 …… 262
第192図　ＳＩ５出土土器実測図 …… 263
第193図　ＳＩ５出土土玉実測図 …… 264
第194図　ＳＩ９出土土器実測図 …… 264
第195図　ＳＩ６実測図 …… 265

第196図　ＳＩ６出土土器実測図 …… 266
第197図　ＳＩ６出土土玉、軽石実測図 …… 267
第198図　ＳＩ７実測図 …… 269
第199図　ＳＩ７出土土器実測図 …… 270
第200図　ＳＩ８実測図 …… 271
第201図　ＳＩ８遺物出土状況図 …… 271
第202図　ＳＩ８出土土器実測図① …… 272
第203図　ＳＩ８出土土器実測図② …… 273
第204図　ＳＩ８出土瓦実測図 …… 274
第205図　ＳＩ10実測図 …… 276
第206図　ＳＩ11、ＳＩ12実測図 …… 277
第207図　ＳＩ11出土土器実測図 …… 278
第208図　ＳＩ12出土土器実測図 …… 279
第209図　ＳＩ12出土砥石、土玉、軽石実測図 …… 280
第210図　ＳＩ13実測図 …… 281
第211図　ＳＩ13出土土器実測図 …… 282
第212図　ＳＩ13出土土玉実測図 …… 283
第213図　ＳＩ14実測図 …… 283
第214図　ＳＩ14出土土器実測図 …… 284
第215図　ＳＩ15実測図 …… 286
第216図　ＳＩ15出土土器実測図 …… 287
第217図　ＳＩ16実測図 …… 288
第218図　ＳＩ16遺物出土状況図 …… 289
第219図　ＳＩ16出土土器実測図① …… 290
第220図　ＳＩ16出土土器実測図② …… 291
第221図　ＳＩ16出土土器実測図③ …… 292
第222図　ＳＩ16出土土器実測図④ …… 293
第223図　ＳＩ16出土土器実測図⑤ …… 294
第224図　ＳＩ16出土土器実測図⑥ …… 295
第225図　ＳＩ16出土土玉、石製品実測図 …… 297
第226図　ＳＩ17実測図 …… 298
第227図　ＳＩ17出土土器実測図 …… 299
第228図　ＳＩ17出土瓦実測図 …… 300

第229図　ＳＩ17出土土玉実測図 ……300
第230図　ＳＩ18実測図 ……302
第231図　ＳＩ18出土土器実測図 ……302
第232図　ＳＩ18出土紡錘車実測図 ……303
第233図　ＳＩ19実測図 ……304
第234図　ＳＩ19出土土器実測図 ……305
第235図　ＳＩ19出土紡錘車実測図 ……305
第236図　ＳＩ20実測図 ……306
第237図　ＳＩ20出土土器実測図 ……307
第238図　ＳＩ21実測図 ……309
第239図　ＳＩ21出土土器実測図 ……310
第240図　ＳＩ21出土土玉実測図 ……311
第241図　ＳＩ22実測図 ……312
第242図　ＳＩ22出土土器実測図 ……313
第243図　ＳＩ23実測図 ……314
第244図　ＳＩ23出土土器実測図 ……315
第245図　ＳＩ24実測図 ……316
第246図　ＳＩ24出土土器実測図 ……317
第247図　ＳＩ24出土紡錘車、土玉実測図 ……318
第248図　ＳＩ25、ＳＩ26実測図 ……319
第249図　ＳＩ25出土土器実測図 ……320
第250図　ＳＩ27実測図 ……321
第251図　ＳＩ28実測図 ……322
第252図　ＳＩ28出土土器実測図 ……323
第253図　ＳＸＩ実測図 ……328
第254図　掘立柱建物跡配置図 ……325
第255図　ＳＢ６出土土器実測図 ……326
第256図　谷出土唐三彩陶枕実測図 ……331
第257図　谷出土畿内産土師器実測図 ……332
第258図　谷出土東北産土師器実測図 ……332
第259図　谷出土土師器実測図、皿類 ……333
第260図　谷出土土師器実測図・杯Ａ（ロクロ未使用） ……334
第261図　谷出土土師器実測図・杯Ａ・Ｂ（ロクロ使用） ……337

第262図　谷出土土師器実測図・甕① ……338
第263図　谷出土土師器実測図・甕② ……339
第264図　谷出土土師器実測図・甕③、鉢、その他 ……340
第265図　谷出土須恵器実測図、A群杯A① ……344
第266図　谷出土須恵器実測図・A群杯A② ……345
第267図　谷出土須恵器実測図・B群杯A① ……347
第268図　谷出土須恵器実測図・B群杯A② ……348
第269図　谷出土須恵器実測図・B群杯A③ ……349
第270図　谷出土須恵器実測図・C群杯A① ……352
第271図　谷出土須恵器実測図・C群杯A② ……353
第272図　谷出土須恵器実測図・C群杯A③ ……354
第273図　谷出土須恵器実測図・合子 ……355
第274図　谷出土須恵器実測図・長頸瓶・壺類 ……356
第275図　谷出土須恵器実測図・蓋① ……357
第276図　谷出土須恵器実測図・蓋② ……358
第277図　谷出土須恵器実測図・皿A・B ……359
第278図　谷出土須恵器実測図・杯B① ……360
第279図　谷出土須恵器実測図・杯B② ……365
第280図　谷出土須恵器実測図・杯A・椀 ……366
第281図　谷出土須恵器実測図・甕① ……367
第282図　谷出土須恵器実測図・甕② ……368
第283図　谷出土須恵器実測図・甕③、甑、片口鉢 ……369
第284図　谷出土墨書土器実測図 ……373
第285図　谷出土刻書土器実測図 ……374
第286図　谷出土陶硯実測図 ……388
第287図　不明須恵器実測図 ……389
第288図　谷出土瓦拓影図・平瓦① ……390
第289図　谷出土瓦拓影図・平瓦② ……391
第290図　谷出土瓦塼拓影図・丸瓦・道具瓦・塼 ……392
第291図　谷出土紡錘車・浮子・砥石実測図 ……393
第292図　谷出土土玉実測図① ……394
第293図　谷出土土玉実測図② ……395
第294図　谷出土土玉実測図③ ……396

第295図　谷出土羽口実測図① ……397
第296図　谷出土羽口実測図② ……398
第297図　谷出土羽口実測図③ ……399
第298図　大畑II遺跡発掘区及び周辺地形図 ……407
第299図　大畑II、大畑Ⅰ遺跡発掘区域図 ……408
第300図　第１号住居跡実測図 ……409
第301図　大畑Ⅰ遺跡発掘区及び周辺地形図 ……415
第302図　大畑Ⅰ遺跡調査年次と調査地区名称 ……414
第303図　先土器時代遺物出土状況図 ……418
第304図　Ｆ－９－５グリッド遺物出土詳細図 ……419
第305図　出土石器実測図① ……420
第306図　出土石器実測図② ……421
第307図　出土石器実測図③ ……422
第308図　出土石器実測図④ ……423
第309図　出土石器実測図⑤ ……425
第310図　出土石器実測図⑥ ……426
第311図　出土石器実測図⑦ ……427
第312図　出土石器実測図⑧ ……428
第313図　縄文時代遺構配置図 ……433
第314図　炉穴実測図①（ＦＰ１～３、10～12、17） ……434
第315図　炉穴実測図②（ＦＰ４～９） ……436
第316図　炉穴実測図③（ＦＰ14～16） ……438
第317図　ＴＰＩ実測図 ……439
第318図　ＴＰ２実測図 ……440
第319図　ＴＰ３実測図 ……441
第320図　ＴＰ４実測図 ……442
第321図　ＴＰ５実測図 ……443
第322図　縄文式土器拓影図① ……444
第323図　縄文式土器拓影図② ……445
第324図　縄文式土器拓影図③ ……447
第325図　縄文式土器拓影図④、土製品実測図 ……448
第326図　縄文時代石器実測図 ……450
第327図　ＳＩ７実測図 ……452

第328図　ＳＩ７出土土器実測図 …… 452
第329図　ＳＩ７出土石、土製品実測図 …… 452
第330図　ＳＩ８実測図 …… 453
第331図　ＳＩ８出土土器実測図① …… 454
第332図　ＳＩ８出土土器実測図② …… 455
第333図　ＳＩ８出土土玉実測図 …… 456
第334図　ＳＩ９実測図 …… 457
第335図　ＳＩ９出土土器実測図 …… 458
第336図　ＳＩ９出土土製品実測図 …… 459
第337図　ＳＩ10実測図 …… 460
第338図　ＳＩ10出土土器実測図 …… 461
第339図　ＳＩ11実測図 …… 462
第340図　ＳＩ11出土土器実測図 …… 463
第342図　ＳＩ11出土土玉実測図 …… 463
第342図　ＳＩ12実測図 …… 464
第343図　ＳＩ12出土土器実測図 …… 465
第344図　ＳＩ12出土土玉実測図 …… 465
第345図　ＳＩ13実測図 …… 466
第346図　ＳＩ13出土土器実測図 …… 467
第347図　ＳＩ13出土土製品実測図 …… 467
第348図　ＳＩ14実測図 …… 468
第349図　ＳＩ14出土土器実測図 …… 469
第350図　ＳＩ14出土土玉実測図 …… 470
第351図　ＳＩ15実測図 …… 471
第352図　ＳＩ15出土土器実測図 …… 472
第353図　ＳＩ16実測図 …… 473
第354図　ＳＩ16出土土器実測図 …… 474
第355図　ＳＩ16出土土玉実測図 …… 476
第356図　ＳＩ17、ＳＩ18実測図 …… 476
第357図　ＳＩ19実測図 …… 477
第358図　ＳＩ19出土土器実測図 …… 478
第359図　ＳＩ20実測図 …… 480
第360図　ＳＩ20出土土器実測図 …… 480

第361図　ＳＩ21実測図 …… 481
第362図　ＳＩ21出土土器実測図 …… 481
第363図　ＳＩ22、ＳＩ23実測図 …… 482
第364図　ＳＩ22出土土器実測図① …… 483
第365図　ＳＩ22出土土器実測図② …… 484
第366図　ＳＩ22出土土玉実測図 …… 485
第367図　ＳＩ23出土土器実測図 …… 486
第368図　ＳＩ24実測図 …… 487
第369図　ＳＩ24出土土器実測図 …… 488
第370図　ＳＩ25実測図 …… 489
第371図　ＳＩ25遺物出土状況図 …… 490
第372図　ＳＩ25出土土器実測図① …… 491
第373図　ＳＩ25出土土器実測図② …… 492
第374図　ＳＩ25出土土器実測図③ …… 493
第375図　ＳＩ25出土土器実測図④ …… 494
第376図　ＳＩ26、ＳＩ35実測図 …… 496
第377図　ＳＩ26出土土器実測図 …… 496
第378図　ＳＩ27実測図 …… 497
第379図　ＳＩ27出土土器実測図 …… 498
第380図　ＳＩ28実測図 …… 499
第381図　ＳＩ28出土土器実測図 …… 499
第382図　ＳＩ28出土紡錘車実測図 …… 500
第383図　ＳＩ29実測図 …… 501
第384図　ＳＩ29出土土器実測図 …… 502
第385図　ＳＩ30実測図 …… 502
第386図　ＳＩ30出土土器実測図 …… 503
第387図　ＳＩ31実測図 …… 504
第388図　ＳＩ31出土土器実測図 …… 505
第389図　ＳＩ32実測図 …… 506
第390図　ＳＩ32出土土器実測図 …… 507
第391図　ＳＩ33実測図 …… 508
第392図　ＳＩ33出土土器実測図 …… 509
第393図　ＳＩ34実測図 …… 510
第394図　ＳＩ34出土土器実測図 …… 511

第395図　ＳＩ37、ＳＩ38実測図 ……512
第396図　ＳＩ37出土土器実測図 ……513
第397図　ＳＩ37出土土玉実測図 ……513
第398図　ＳＩ38出土土器実測図 ……514
第399図　ＳＩ38出土土玉実測図 ……515
第400図　ＳＩ39実測図 ……516
第401図　ＳＩ40実測図 ……517
第402図　ＳＩ40出土土器実測図 ……517
第403図　ＳＩ41実測図 ……518
第404図　ＳＩ41出土土器実測図 ……519
第405図　ＳＩ41出土土玉、石製品実測図 ……520
第406図　ＳＩ42実測図 ……521
第407図　ＳＩ43実測図 ……521
第408図　ＳＩ43出土手捏土器実測図 ……522
第409図　ＳＩ44、ＳＩ45実測図 ……523
第410図　ＳＩ44出土土器実測図 ……524
第411図　ＳＩ45出土土器実測図 ……525
第412図　ＳＩ45出土石製品、土玉実測図 ……526
第413図　ＳＩ46～ＳＩ48実測図 ……527
第414図　ＳＩ46出土土器実測図 ……528
第415図　ＳＩ46出土石製品、土玉実測図 ……528
第416図　ＳＩ47出土土玉実測図 ……529
第417図　ＳＩ48出土土器実測図 ……529
第418図　ＳＩ48出土土玉実測図 ……530
第419図　ＳＩ49、ＳＩ51実測図 ……531
第420図　ＳＩ49出土土器実測図① ……533
第421図　ＳＩ49出土土器実測図② ……534
第422図　ＳＩ49出土土器実測図③ ……535
第423図　ＳＩ49出土土製勾玉、紡錘車、土玉実測図 ……537
第424図　ＳＩ50実測図 ……538
第425図　ＳＩ50出土土器実測図 ……539
第426図　ＳＩ51出土土器実測図 ……539
第427図　ＳＩ51出土石製品、土玉実測図 ……540

第428図　ＳＩ52、ＳＩ53実測図 ……541
第429図　ＳＩ52出土土器実測図 ……542
第430図　ＳＩ52出土土玉実測図 ……542
第431図　ＳＩ53出土土玉実測図 ……543
第432図　ＳＩ54、ＳＩ55実測図 ……544
第433図　ＳＩ54出土土器実測図 ……545
第434図　ＳＩ54出土石製、土製、勾玉実測図 ……546
第435図　ＳＩ54出土支脚実測図 ……546
第436図　ＳＩ55出土土器実測図 ……547
第437図　ＳＩ55出土石製品、紡錘車、土玉実測図 ……548
第438図　ＳＩ56実測図 ……548
第439図　ＳＩ56出土土器実測図 ……549
第440図　ＳＩ56出土石製品実測図 ……549
第441図　ＳＩ57実測図 ……550
第442図　ＳＩ57出土土器実測図 ……551
第443図　ＳＩ58実測図 ……552
第444図　ＳＩ58出土土器実測図 ……552
第445図　ＳＩ58出土土玉実測図 ……552
第446図　ＳＩ59、ＳＩ60実測図 ……553
第447図　ＳＩ59出土土器実測図 ……554
第448図　ＳＩ59出土紡錘車、土玉実測図 ……554
第449図　ＳＩ60出土土器実測図 ……555
第450図　ＳＩ60出土臼玉実測図 ……555
第451図　ＳＩ61実測図 ……556
第452図　ＳＩ62、ＳＩ63実測図 ……557
第453図　ＳＩ62出土土器実測図 ……558
第454図　ＳＩ62出土土玉実測図 ……558
第455図　ＳＩ63出土土器実測図 ……559
第456図　ＳＩ63出土土玉実測図 ……560
第457図　ＳＩ64出土紡錘車、土玉実測図 ……560
第458図　ＳＩ65出土土器実測図 ……560
第459図　ＳＩ66出土土器実測図 ……561
第460図　ＳＩ67出土土器実測図 ……562

第461図　Ｋ７号墳実測図 ……563
第462図　Ｋ７号墳周堀内出土土器実測図 ……563
第463図　K112号墳周堀実測図……564
第464図　K112号墳周堀断面図……565
第465図　K112号墳周堀内出土土器実測図……566
第466図　K112号墳周堀出土鉄器実測図……567
第467図　埴輪拓影図① ……569
第468図　埴輪拓影図② ……570
第469図　埴輪拓影図③ ……571
第470図　埴輪拓影図④ ……573
第471図　埴輪拓影図⑤ ……574
第472図　埴輪実測図 ……576
第473図　参考資料・Ｋ９号墳表採埴輪拓影図 ……576
第474図　ＳＩ１実測図 ……584
第475図　ＳＩ１出土土器実測図 ……585
第476図　ＳＩ２実測図 ……585
第477図　ＳＩ２出土土器実測図 ……586
第478図　ＳＩ３～ＳＩ６実測図 ……587
第479図　ＳＩ３出土土器実測図 ……588
第480図　ＳＩ４出土土器、硯実測図 ……589
第481図　ＳＩ６出土土器実測図 ……590
第482図　ＳＩ36実測図 ……591
第483図　ＳＩ36出土土器実測図 ……592
第484図　ＳＩ36出土瓦実測図① ……593
第485図　ＳＩ36出土瓦実測図② ……594
第486図　ＳＤ１出土鉄鏃実測図 ……595
第487図　ＳＥ１平面図 ……597
第488図　ＳＥ１断面図 ……598
第489図　ＳＥ１出土土器実測図 ……599
第490図　ＳＥ２実測図 ……600
第491図　ＳＥ２出土土器実測図 ……601
第492図　ＳＥ２出土瓦実測図 ……602
第493図　ＳＥ３実測図 ……603

第494図　ＳＥ４実測図 ……604
第495図　ＳＥ４出土土器実測図 ……605
第496図　ＳＥ４出土瓦実測図 ……605
第497図　ＳＥ４出土土玉実測図 ……606
第498図　掘立柱建物跡遺構図① ……613
第499図　掘立柱建物跡遺構図② ……614
第500図　掘立柱建物跡遺構図③ ……615
第501図　掘立柱建物跡遺構図④ ……617
第502図　掘立柱建物跡遺構図⑤ ……619
第503図　掘立柱建物跡遺構図⑥ ……625
第504図　掘立柱建物跡遺構図⑦ ……626
第505図　掘立柱建物跡遺構図⑧ ……629
第506図　掘立柱建物跡掘方断面図① ……630
第507図　掘立柱建物跡掘方断面図② ……631
第508図　掘立柱建物跡掘方断面図③ ……632
第509図　掘立柱建物跡掘方断面図④ ……633
第510図　掘立柱建物跡出土土器実測図 ……637
第511図　掘立柱建物跡出土土製勾玉実測図 ……638
第512図　墨書土器実測図 ……638
第513図　表採・須恵器実測図 ……639
第514図　表採・土師器実測図① ……640
第515図　表採・土師器実測図② ……641
第516図　銅滓付着土器実測図 ……643
第517図　表採・石製品、土玉実測図 ……643
第518図　大畑Ｉ遺跡古墳時代遺構配置図 ……646
第519図　大畑Ｉ遺跡歴史時代遺構配置図 ……646
第520図　大畑遺跡歴史時代主要遺構変遷図 ……648

表 目 次

第１表　前原Ｉ遺跡出土先土器時代石器組成・石材一覧表……21
第２表　前原Ｉ遺跡出土先土器時代石器一覧表……28
第３表　試 料 表……30
第４表　主要花粉胞子化石ダイアグラム……35
第５表　花粉帯一覧表……36
第６表　重鉱物組成図及び主要重鉱物の産出変化図……38
第７表　五丹歩遺跡出土土錘一覧表……122
第８表　向台遺跡出土先土器時代石器一覧表……247
第９表　向台遺跡掘立柱建物跡一覧表……327
第10表　向台遺跡出土墨書土器一覧表……371
第11表　大畑Ｉ遺跡出土先土器時代Ａ群石器組成・石材一覧表……419
第12表　大畑Ｉ遺跡出土先土器時代Ｂ群石器組成・石材一覧表……424
第13表　大畑Ｉ遺跡出土先土器時代石器一覧表……429
第14表　大畑Ｉ遺跡出土土錘一覧表……449
第15表　大畑Ｉ遺跡出土埴輪一覧表……579
第16表　大畑Ｉ遺跡掘立柱建物跡一覧表……634
第17表　大畑Ｉ遺跡出土墨書土器一覧表……636

別表・遺跡番号新旧対照表

前原 I 遺跡	
新番号	旧番号
第1号住居跡	001
第2号住居跡	002
第3号住居跡	003
第4号住居跡	004
第5号住居跡	005
第6号住居跡	006
第1号土坑	008
第2号土坑	009

前原 II 遺跡	
新番号	旧番号
第1号住居跡	001
第2号住居跡	004
第3号住居跡	005
第4号住居跡	006
第5号住居跡	007

五丹歩遺跡	
新番号	旧番号
第1号住居跡	001
第2号住居跡	003
第1号蔵骨器	002
第2号蔵骨器	004
第3号蔵骨器	005
第1号土坑	006

池上り I 遺跡	
新番号	旧番号
第1号炉穴	FP1
第2号炉穴	FP2
第3号炉穴	FP3
第4号炉穴	FP4
第5号炉穴	FP5
第6号炉穴	FP6
第7号炉穴	FP7
第8号炉穴	FP8
第9号炉穴	FP9
第10号炉穴	FP10
第11号炉穴	FP11
第12号炉穴	FP12
第13号炉穴	FP13
第14号炉穴	FP15
第1号土坑	FP14
第2号土坑	FP16

池上り II 遺跡	
新番号	旧番号
第1号炉穴	001
第2号炉穴	002
第3号炉穴	003
第4号炉穴	004
第5号炉穴	005
第6号炉穴	006
第7号炉穴	007
第8号炉穴	B－FP1
第9号炉穴	B－FP2
第10号炉穴	B－FP3
第11号炉穴	B－FP4
第12号炉穴	B－FP5

大畑 III 遺跡	
新番号	旧番号
第1号炭焼窯跡	001
第2号炭焼窯跡	002
第3号炭焼窯跡	003

第4号炭焼窯跡	004
第5号炭焼窯跡	005
向　台　遺　跡	
新　番　号	旧　番　号
SI1	001A
SI2	001B
SI3	004
SI4	005
SI5	006
SI6	007
SI7	008
SI8	009
SI9	010
SI10	011
SI11	012
SI12	013
SI13	014
SI14	015
SI15	016
SI16	017
SI17	018
SI18	019
SI19	020
SI20	021
SI21	022
SI22	023
SI23	024
SI24	025
SI25	026
SI26	027
SI27	028
SI28	029

SB1	030
SB2	031
SB3	032
SB4	—
SB5	—
SB6	—
SB7	—
SB8	—
SA1	—
SA2	—
SX1	002
大　畑　III　遺　跡	
新　番　号	旧　番　号
第1号住居跡	006—001
大　畑　I　遺　跡	
新　番　号	旧　番　号
SI1	005
SI2	007
SI3	009
SI4	010
SI5	011
SI6	012
SI7	013
SI8	014
SI9	015
SI10	016
SI11	017
SI12	018
SI13	019
SI14	020
SI15	021
SI16	022

S I 17	023
S I 18	024
S I 19	025
S I 20	026
S I 21	027
S I 22	028
S I 23	029
S I 24	030
S I 25	031
S I 26	032
S I 27	033
S I 28	034
S I 29	035
S I 30	036
S I 31	037
S I 32	038
S I 33	039
S I 34	040
S I 35	041
S I 36	042
S I 37	043
S I 38	044
S I 39	045
S I 40	046
S I 41	047
S I 42	048
S I 43	049
S I 44	050
S I 45	051
S I 46	052
S I 47	053
S I 48	054

S I 49	055
S I 50	056
S I 51	057
S I 52	058
S I 53	059
S I 54	060
S I 55	061
S I 56	062
S I 57	063
S I 58	064
S I 59	065
S I 60	066
S I 61	067
S I 62	068
S I 63	069
S I 64	070
S I 65	071
S I 66	072
S I 67	073
S B 1	101
S B 2	102
S B 3	103
S B 4	104
S B 5	105
S B 6	106
S B 7	107
S B 8	108
S B 9	109
S B10	110
S B11	111
S B12	112
S B13	113

S B14	114
S B15	115
S B16	116
S B17	117
S B18	118
S B19	119
S B20	120
S B21	121
S B22	122
S B23	123
S B24	124
S B25	125
S B26	126
S B27	127
S B28	128
S B29	129
S B30	130
S B31	131
S B32	132
S B33	133
S B34	134
S B35	135
S B36	136
S B37	137
S B38	138
S B39	139
S B40	140
S B41	141
S B42	142
S B43	143
S B44	144
S B45	145

S B46	146
S B47	147
S B48	148
S B49	149
S B50	150
S B51	151
S B52	152
S B53	153
S B54	154
S B55	155
S B56	156
S B57	157
S B58	158
S B59	159
S B60	160
S B61	161
S B62	162
S B63	163
S B64	—
S B65	—
S E 1	302
S E 2	303
S E 3	305
S E 4	306
S D 1	202
S D 2	203
S D 3	204
S D 4	207
S D 5	208
K 7 号噴	002
K112号噴	301

序　　章

序　　章

第1節　発掘調査に至る経過

主要地方道成田安食線は、成田市寺台を起点に栄町の都市計画道とドッキングする同町竜角寺までの総延長6.7km区間である。このバイパス計画は現在の県道が狭いところが多く、しかも路線が至る所で曲がりくねっているため、また、新東京国際空港への交通路の確保、成田ニュータウン内への交通量を緩和するため等の目的で、昭和51年頃から県土木部道路建設課で出発した。それは住宅都市として発展しようとする栄町の計画とも一致するものであった。

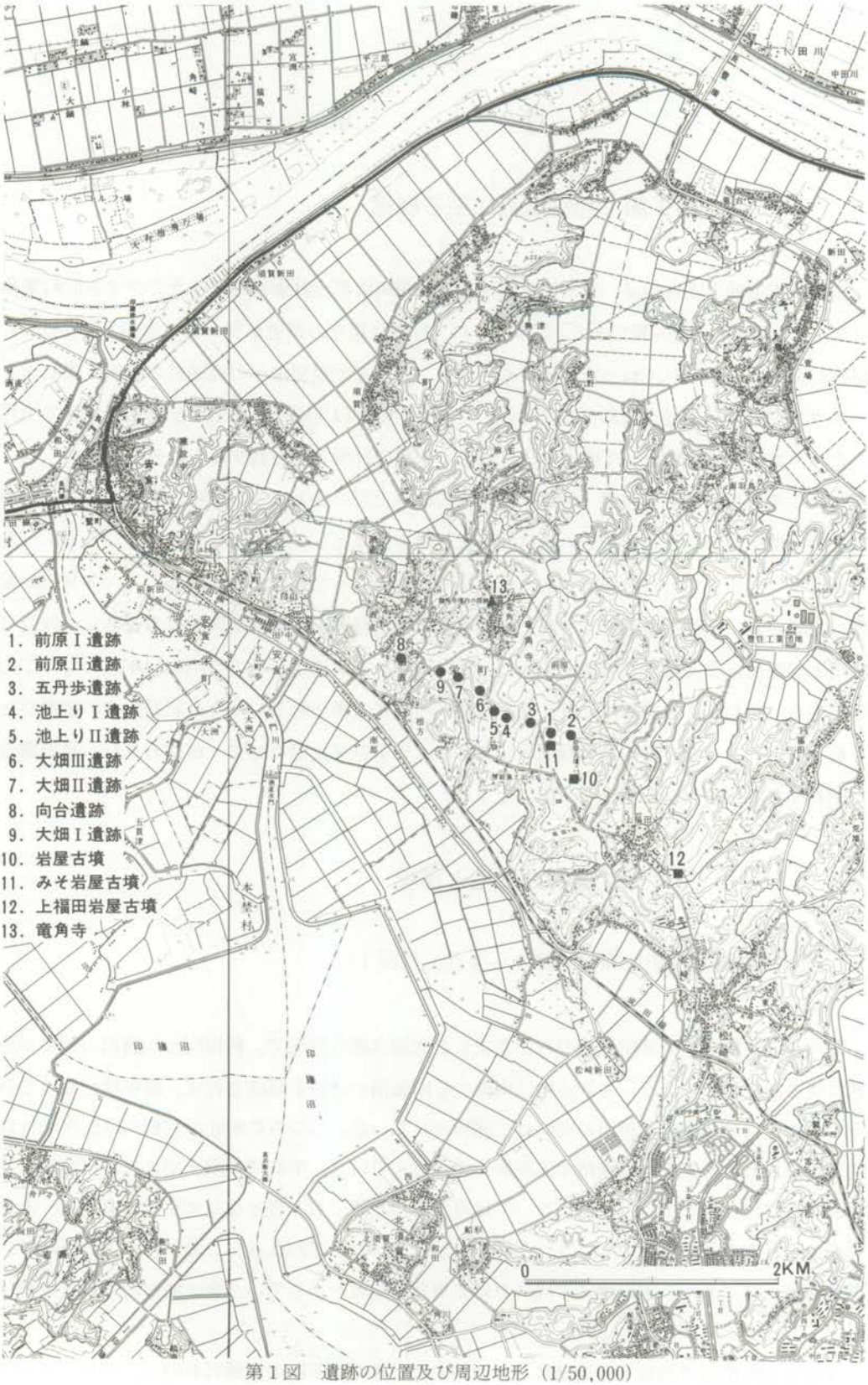
しかしながら、栄町竜角寺一帯は千葉県立房総風土記の丘として広域に自然と文化財を保護している地域であり、この周辺一帯は埋蔵文化財の宝庫として、つとに有名なところであったため、ルート決定にも紆余曲折があった。ルート案はいくつか提出されたが、すべて文化財保護の立場から、変更を余儀無くされ、千葉県土木部道路建設課と千葉県教育委員会文化課及び栄町とが幾度となく慎重な協議を重ねて、最終ルート案が決定したのは昭和54年度になっての事である。それにより路線内に9ケ所の遺跡が所在する事が判名したため記録保存の措置がとられることになった。その調査機関とし財団法人千葉県文化財センターが指名され、発掘調査を昭和55年4月1日から実施する事になった。

第2節　遺跡の立地と環境

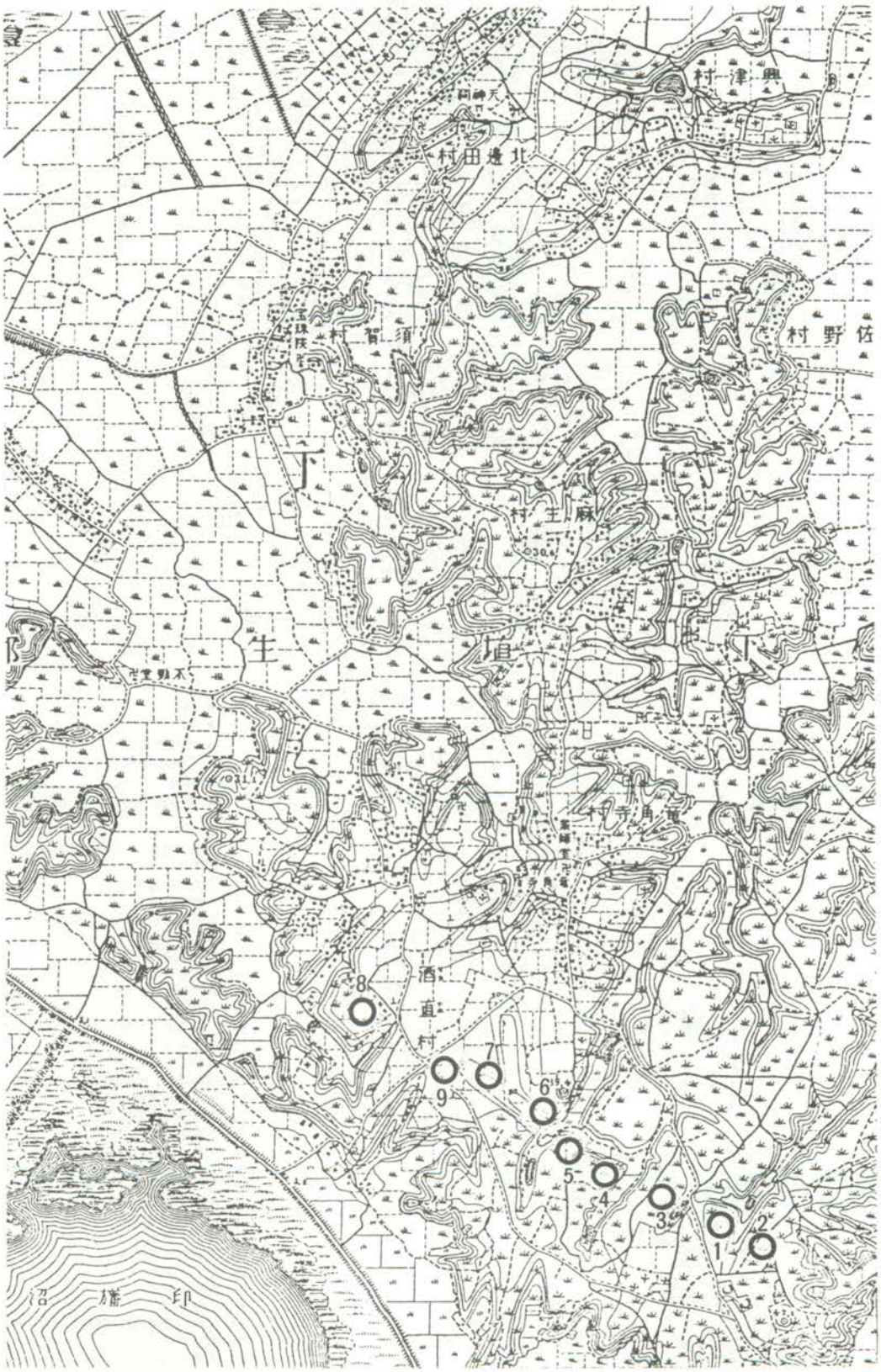
i　遺跡の位置と歴史的環境（第1～4図、付図1）

竜角寺の台地は標高30m前後の谷の発達した北総台地の西端で、利根川と印旛沼の間に半島状に突き出た台地である。この台地は南面する印旛沼には谷が形成されず、断崖状になっている。谷はすべて北側の利根川に向かって開析されている。ちなみに現在の利根川は江戸時代以前までは鬼怒川を主とした流路で太平洋に流れ込んでいた。平安時代頃までは鬼怒川流路は手賀沼、印旛沼とつながり、下流においては霞ケ浦、北浦とも一帯となり太平洋に流れる一大水系をなし、古鬼怒川湾とでもいうべき様相を呈していたと思われる。この一大水系の南岸で、印旛沼の入口にあたる本台地は古代において重要な位置を示していた事は地形的にもうなずける。

成田安食線関係で調査した遺跡はこの台地上で、東西約2kmの範囲において、それぞれ小さ



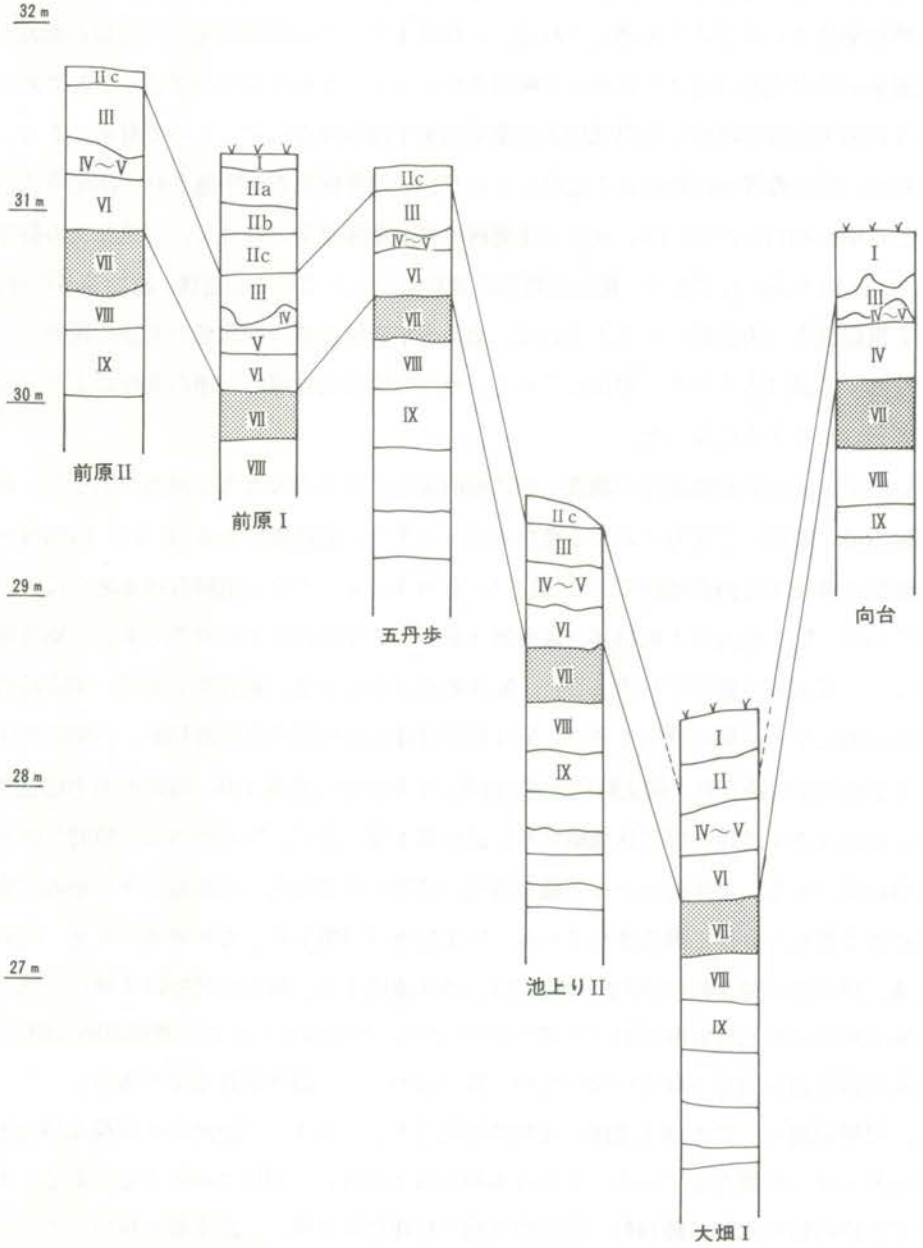
第1図　遺跡の位置及び周辺地形（1/50,000）



第2図　遺跡の位置（第1師管地方迅速測図・佐倉近傍第11号「安食村」明治17年　2万分の一）（番号は第1図と同じ）

第3図　歴史時代関連遺跡分布図 (1/200,000)

な谷で区切られ、9ケ所ある。東端より前原II遺跡、前原I遺跡、五丹歩遺跡、池上りI遺跡、池上りII遺跡、大畑III遺跡、大畑II遺跡、大畑I遺跡、向台遺跡である。この9ケ所の遺跡の立地は、大畑I遺跡が一番広い台地であるが、標高は一番低く、一番高い前原II遺跡とは3m近い高低差がある。全体的な傾向としては東から西へ徐々に低くなり、池上りII遺跡あたりから急に低くなり、大畑I遺跡で一番低くなり、西端の向台遺跡になると、また、高さは東側と同じになる。なお、細かな立地等については各遺跡において詳論する。



第4図　各遺跡標準土層柱状図

この台地上は従来から竜角寺古墳群として関東地方の代表的な後期古墳群として著名なものであり、幾度となく紹介されており、現在では千葉県立房総風土記の丘として広域に保存、活用されている。竜角寺古墳群は現在112基の古墳が確認されている（註１）。その内訳は前方後円墳35基、方墳５基、円墳72基である。この中には方墳としては全国２位の規模(80m(南北)×79m（東西)、高さ12.4m）である岩屋古墳も含まれている（註２）。この古墳群の成立時期であるが、台地先端部に立地する前方後円墳（K91、K98）が存在することや、前原Ｉ遺跡において和泉式期の玉作工房跡が検出されたこと等により、すくなくとも古墳時代中期にはこの地域に古墳が築造されはじめたと考えられる。それはまた、この時期に先立つ五領式期の大形の方形周溝墓が酒直遺跡（註３）において検出されていることからもうなずけることである。

竜角寺は関東地方では珍しい白鳳様式の薬師如来坐像が現存しているので有名である。遺構は金堂基壇、塔心礎等が比較的よく遺存しており、一部発掘調査が実施され、法起寺式の伽藍配置をとる事が判名した(註４)。瓦は三重圏縁単弁８葉蓮華文の軒丸瓦、三重弧文の軒平瓦の組合せで、山田寺系の瓦である。他に瓦塔等の遺物も出土している。遺構、遺物等から考えて、創建は７世紀後半（天武朝）と考えられる。竜角寺が岩屋古墳の被葬者の系譜で氏寺として建立されたとする説は古くから一般化しており、今回の成田安食線の一連の調査により、より具体的に考えられるようになった。

この台地上は成田安食線関係の調査の他に相前後して２ケ所の大きな調査があった。東側の方は岩屋古墳に隣接して北方にのびる竜角寺ニュータウン遺跡群である(註５)。西側は大畑Ｉ遺跡の南側に隣接する酒直遺跡である(註６)。竜角寺ニュータウン遺跡群は６地点に分けて調査されている。№１地点は土坑11基、蔵骨器４基で、平安時代前半の時期である。№２地点は遺構はなく、縄文式土器が少し出土した。№３地点は土坑４基、蔵骨器３基で、平安時代のものである。縄文早・前期の遺物も多い。№４地点は縄文時代竪穴住居跡15軒、古墳時代住居跡１軒、平安時代住居跡５軒、縄文時代土坑213基、平安時代火葬墓４基、時期不明土坑３基である。№５地点は縄文時代の竪穴状遺構２基、蔵骨器１基である。№６地点は古墳時代終末の横穴状遺構12基である。全体的にみると縄文時代の遺物と平安時代の火葬墓が多い地域である。酒直遺跡は２地点に分けて調査されている。№１地点は円墳１基、方形周溝墓５基、円形周溝遺構１基、竪穴住居跡５軒(五領２、鬼高３)、溝状遺構１条、掘立柱建物跡４棟、土坑75基である。№２地点は竪穴住居跡70軒（古墳～平安時代)、土坑94基である。酒直遺跡に関しては、まだ正式な報告書が刊行されていないため、数量はおそらく訂正されるであろう。

また、県単道路として大畑Ｉ遺跡の北側隣接地である大畑Ｉ－２遺跡の小規模な調査と確認調査を当センターが調査している。これは本報告書と前後して刊行される予定である。本調査において古墳時代竪穴住居跡14軒、奈良時代掘立柱建物跡９棟、土坑１基を検出した。そして確認調査において古墳時代竪穴住居跡27軒以上、奈良時代掘立柱建物跡10棟以上を確認してお

り、大畑Ⅰ遺跡と同一性格の遺跡である事が判名し、南側の酒直遺跡№2地点と好対照をなしている。

以上のようにこの竜角寺の狭い台地上において、相次いで調査がなされ、また、昭和57年度から3ケ年計画で、千葉県立房総風土記の丘資料館が竜角寺古墳群のなかの3基を調査し、竜角寺古墳群の成立、展開等を解明すべき努力しているところである。このように、この一帯は急速に調査例が増え、地域史を構成するに足る資料が集積されており、今後に残す課題は大きなものがある。

註1）竜角寺古墳群の基礎調査として昭和57年に公刊された『竜角寺古墳群測量調査報告書』には、成田安食線関係の古墳調査例も加えて111基としてあるが、昭和57年度中に、円墳の周溝の一部を調査し、さらに1基追加することになった。そのため、現在では112基である。

註2）大塚初重　「千葉県岩屋古墳の再検討」　駿台史学　37　1975年

註3）『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報―昭和55年度』　千葉県教育庁文化課　1982年

註4）『昭和46年度下総竜角寺調査報告』千葉県教育委員会　1972年

註5）『竜角寺ニュータウン遺跡群』　竜角寺ニュータウン遺跡調査会　1982年

註6）『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報―昭和56年度』　千葉県教育庁文化課　1983年

ii　周辺の歴史的環境（第3図）

ここでのべる周辺の歴史的環境は大畑Ⅰ遺跡、向台遺跡が歴史時代の大遺跡であるため、またそれと大いに関連する竜角寺との関連についてのみ触れることにする。第3図においてポイントをしるしたのは竜角寺と同系の三重圏縁八葉単弁蓮華文の軒丸瓦を出土している寺院跡、郡衙と推定される遺跡、奈良・平安時代の須恵器窯跡、それに国府、国分二寺、香取神宮、鹿島神宮である。いずれも下総を中心として北は常陸、南は上総の範囲内のみをしるした。この地形図は地質図をもとにして、水系を中心にして作図してある。当時の地形、土地利用状況についての実態を示すものとはいいきれないが、現況よりはかなり実態に近いものと思われる。遺跡の占地、立地の共通性が地域性および同時代性をよくあらわしているものと思われる。

第3図を見ると明瞭に見てとれるが、竜角寺及び大畑Ⅰ遺跡の位置は東関東のほぼ中央に位置しており、下総と下野、常陸を結ぶ水系のほぼ中央にあたる重要な地点である事が理解できる。この地域が進取の気風にとんでいたのもうなづける。また、下総北部と常陸南部が太平洋からの水系で1つの文化圏を形成しているのが1目瞭然である。特に須恵器の共通性、これは向台遺跡において多量に出土している須恵器の分類によるA、B群と呼ばれるものの存在、また、土師器の甕で胴部下半部に細いヘラミガキを施すものの分布はもっと広く、鬼怒川流域に

まで広がる文化圏を形成している。これらは人的な移動、物の交流が盛んな事を示している。しかし、寺院における瓦当文の採用となると様相は一変してしまう。竜角寺を最古、原形とする山田寺系の三重圏縁単弁8葉軒丸瓦は下総の北部の水系に面した所、上総の太平洋岸と国府周辺に点在しているが、常陸には1点も見出せない。この瓦当文の分布も極めて興味深いものがある。この寺院跡と思われるものは堂塔が確認されているものは少ないが、本格的な伽藍配置をもった寺院は竜角寺だけかもしれない。

郡衙遺跡は下総では相馬郡衙（日秀西遺跡）の正倉、常陸では鹿島郡衙の正庁、正倉、上総では山辺郡衙の一角が確認されているにすぎない。まだ類例が少く、比較が難しい段階である。今後は類例が増加する遺跡である。

この分布図を見て一番興味をひくのは、下総においては現在のところ須恵器窯が確認されていないことである。上総、常陸はそれぞれ深い谷にそれぞれ窯跡が分布しているが、下総にはない。これはおそらく地形の差により、もともと存在していない可能性が高い。下総は一面台地で、森林、林が形成されにくい土地である。上総、常陸と決定的に違うのはこの点である。粘土の問題と考える説もあるが、これだけではないと思う。げんに、各寺院に使用する瓦は焼成されているのだから、耐火度がないとはいいきれない。寺院においての造瓦は限定された期間において行うために薪は調達できるであろう。しかし、須恵器生産において日常的に使用する薪の供給地をもたない土地では不可能に近い行為である。そのために下総では須恵器生産は大規模なものは存在できないのであろう。ただ、単発的な小生産程度の窯は今後発見される可能性は否定できない。下総において上総の水田、不入窯製品の流通は印旛沼西岸どまりである。本地域には搬入されていない。そのために、常陸の製品は多く入っている。良質なものとしては木葉下窯製品がある。大多数はA、B群須恵器である。今後早急に下総における窯跡確認の徹底と、常陸における諸窯の実態と流通範囲を確認する事が必要である。それにより下総の須恵器の実態が明ろになり、ひいては独自な展開をするロクロ土師器の問題の解明にもなってくると思われる。

第3節　発掘調査の経過

成田安食線関係の発掘調査及び整理作業、報告書刊行は昭和55年4月1日より昭和60年3月31日までの5ケ年を要している。この概要、調査組織等を年度毎に記述していく。

〔昭和55年度〕

昭和55年4月1日付で、千葉県土木部と「主要地方道成田安食線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査」の委託契約を締結し、調査部第5班（班長　天野努　調査員2名）が担当すること

となった。当初計画は大畑Ⅰ遺跡（№1）の発掘調査と他の5遺跡の確認調査であったが、用地買収の問題等があり、大幅な変更をした。調査総面積は10,975㎡である。

前原Ⅰ遺跡(329—001)　2,600㎡(古墳1基を含む)　印旛郡栄町大字竜角寺字前原1,045他

確認調査　5月6日～5月27日

本 調 査　7月1日～9月30日

前原Ⅱ遺跡(329—002)　2,500㎡　印旛郡栄町大字竜角寺字前原1,048—1他

確認調査　6月5日～6月21日

本 調 査　10月1日～11月10日

五丹歩遺跡(329—003)　塚1基（225㎡）　印旛郡栄町大字竜角寺字五丹歩1044—2他

本 調 査　6月23日～7月10日

五丹歩遺跡(329—003)　2,800㎡　印旛郡栄町大字竜角寺字五丹歩1028他

本 調 査　11月10日～2月28日

池上りⅠ遺跡(329—004)　1,250㎡　印旛郡栄町大字竜角寺字池上り978他

本 調 査　1月7日～2月28日

池上りⅡ遺跡A地点(329—005)　600㎡　印旛郡栄町大字竜角寺字池上り978他

本 調 査　3月1日～3月31日

大畑Ⅱ遺跡(329—014)　500㎡　印旛郡栄町大字竜角寺字大畑849他

本 調 査　3月1日～3月31日

大畑Ⅰ遺跡(329—006)　500㎡　印旛郡栄町大字竜角寺字大畑870他

本 調 査　3月1日～3月31日

調査部長　白石竹雄
部長補佐　栗本佳弘
班　　長　天野　努
調査研究員　石田広美
　　木川邦夫

〔昭和56年度〕

昭和56年4月1日付で、千葉県土木部と「主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財調査」の委託契約を締結し、調査部第6班（班長清藤一順　調査員2名）が担当することとなった。本年度も用地買収の問題で、当初計画が大きく変った。大畑Ⅰ遺跡が用地問題でメドがたたず、向台遺跡の面積の追加があったなどした。また、前年度調査分の基礎整理を実施することになった。

池上りII遺跡B地点(329—005)　100m²（古墳1基を含む）　印旛郡栄町大字竜角寺字池上り978

本 調 査　4月6日～6月30日

大畑III遺跡(329—013)　2,500m²　印旛郡栄町大字竜角寺字大畑907他

本 調 査　5月6日～6月30日

大畑I遺跡(329—006)　956m²　印旛郡栄町大字竜角寺字大畑891他

本 調 査　7月1日～9月16日

向台遺跡(329—012)　4,393m²　印旛郡栄町大字酒直字向台467—1

本 調 査　9月10日～3月11日

他に整理作業は前原II、五丹歩、池上りI、大畑I遺跡の4遺跡は水洗・注記までを行ない、前原I遺跡は復元までを実施するようになった。

調査部長	白石竹雄
部長補佐	天野　努
班　　長	清藤一順
調査研究員	石田広美
	木川邦夫

〔昭和57年度〕

昭和57年4月1日付で、千葉県土木部と「主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財調査」の委託契約を締結し、調査部第7班（班長　高橋賢一　調査員2名）が担当することとなった。本年度の当初計画は大畑I遺跡の残り（大部分）の部分の発掘調査と大畑I遺跡を含めた整理作業であった。しかしながら、大畑I遺跡は用地取得の問題、道路の迂回路の確保等の問題で、発掘区がその都度、変更とコマ切れにあり、また、予想外の大遺跡である事が判名したため、大幅な変更が行なわれた。それにともない整理作業も大幅に削減された。しかしながら、大畑I遺跡の一部はまだ用地問題が解決せず、発掘調査は次年度に持ち越された。

大畑I遺跡(329—006)　3,901m²　印旛郡栄町大字竜角寺字台内他

A地区　4月12日～12月14日

B地区　7月1日～10月31日

C地区　6月1日～11月30日

道路A　1月8日～1月31日

道路B　2月12日～3月26日

道路C　3月18日～3月26日

他に整理作業は、前年度まで調査した遺跡の図面整理までを実施することとなった。

調査部長　白石竹雄
部長補佐　岡川宏道
班　　長　高橋賢一
調査研究員　石田広美
　　岩井　正

〔昭和58年度〕

昭和58年4月1日付で、千葉県土木部と「主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財調査」の委託契約を締結し、調査部第5班（班長　清藤一順　調査員3名）が担当することとなった。本年度の当初計画はすべて整理作業というものであったが、現実には、大畑Ⅰ遺跡の残りの部分の発掘調査が、移転終了後に実施するという不確実な前提のもとに出発した。そのため、整理作業にも一貫した措置がとれず、かなりの浪費をしいられた。

大畑Ⅰ遺跡(329—006)　1,140㎡　印旛郡栄町大字酒直字向台463—4

裏庭部分　10月7日～10月31日

豚舎部分　11月14日～12月21日

他に、整理作業は本年度の大畑Ⅰ遺跡の発掘調査分も含めて、すべて原稿執筆までである。

調査部長　白石竹雄
部長補佐　岡川宏道
班　　長　清藤一順
主任調査研究員　石田広美
調査研究員　小林清隆（10月1日～3月31日）
　　横山　仁（11月1日～1月31日）

〔昭和59年度〕

昭和59年4月1日付で、千葉県土木部と「主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財調査」の委託契約を締結し、調査部第5班（班長　鈴木定明）が担当することとなった。ただし、本年度は印刷刊行だけのため、直接に担当する調査員の配置はない。しかし、残務や雑事が多くあるため、それには石田があたった。

調査部長　鈴木道之助
部長補佐　根本　弘
班　　長　鈴木定明

第 1 章
前原 I 遺跡の調査

第１章　前原Ｉ遺跡の調査

第１節　遺跡の位置及び立地（第１・２・５図）

前原Ｉ遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字前原1,045他に所在する。調査区域に接して、方墳のＫ107号墳があり、さらに70m南にはみそ岩屋古墳（Ｋ106）が同じ台地上にあり、今回調査したＫ108号墳も含めると、方墳が密集する地域である。さらに南に400m行くと方墳としては全国第２位の規模を誇る岩屋古墳がある。このように、竜角寺古墳群の終末を飾る方墳群のある特殊な地域に立地している。

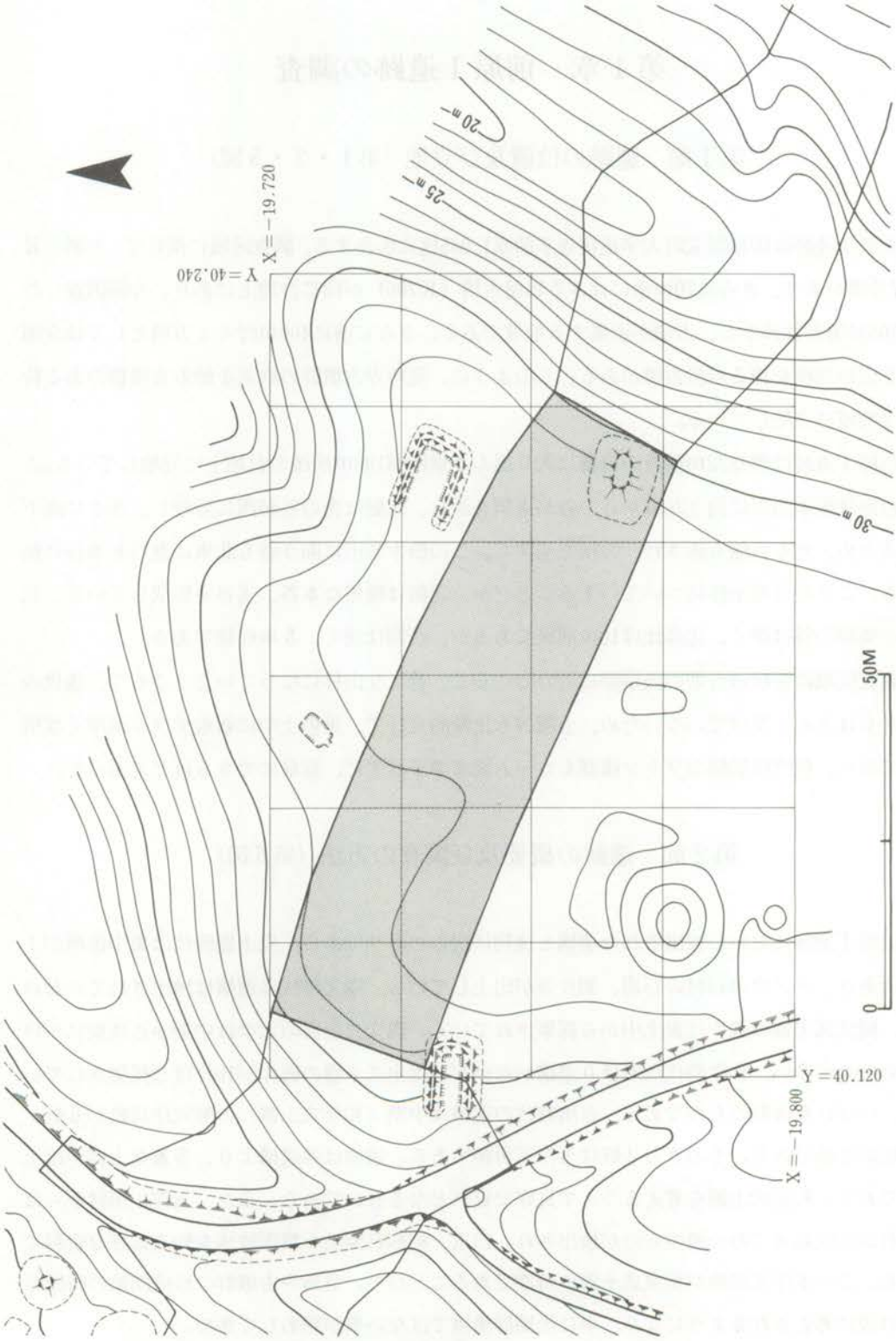
前原Ｉ遺跡は標高32m前後の複雑に入り組んだ東西幅100m前後の台地上に立地している。この台地は根木名川に向う北東からの谷が東側を画し、北側は先の谷が西に分岐し、さらに南下するため、北も西側も画され、舌状を呈する。この根木名川に向う谷も北東に進むと本谷に接する。ここの台地全体についていえることだが、北側は複雑な本谷、支谷を形成している。北側と東側の谷は深く、比高比は10m前後であるが、西側は浅く、５m前後である。

調査区域は舌状の台地の先端部に近いところで、昔より山林になっていたところで、後世の攪乱もほとんど受けていないため、土層等も比較的良好で、黒色土中に新規テフラが厚く堆積しており、竪穴住居跡のプラン確認もローム面まで下げずに、容易にできるほどであった。

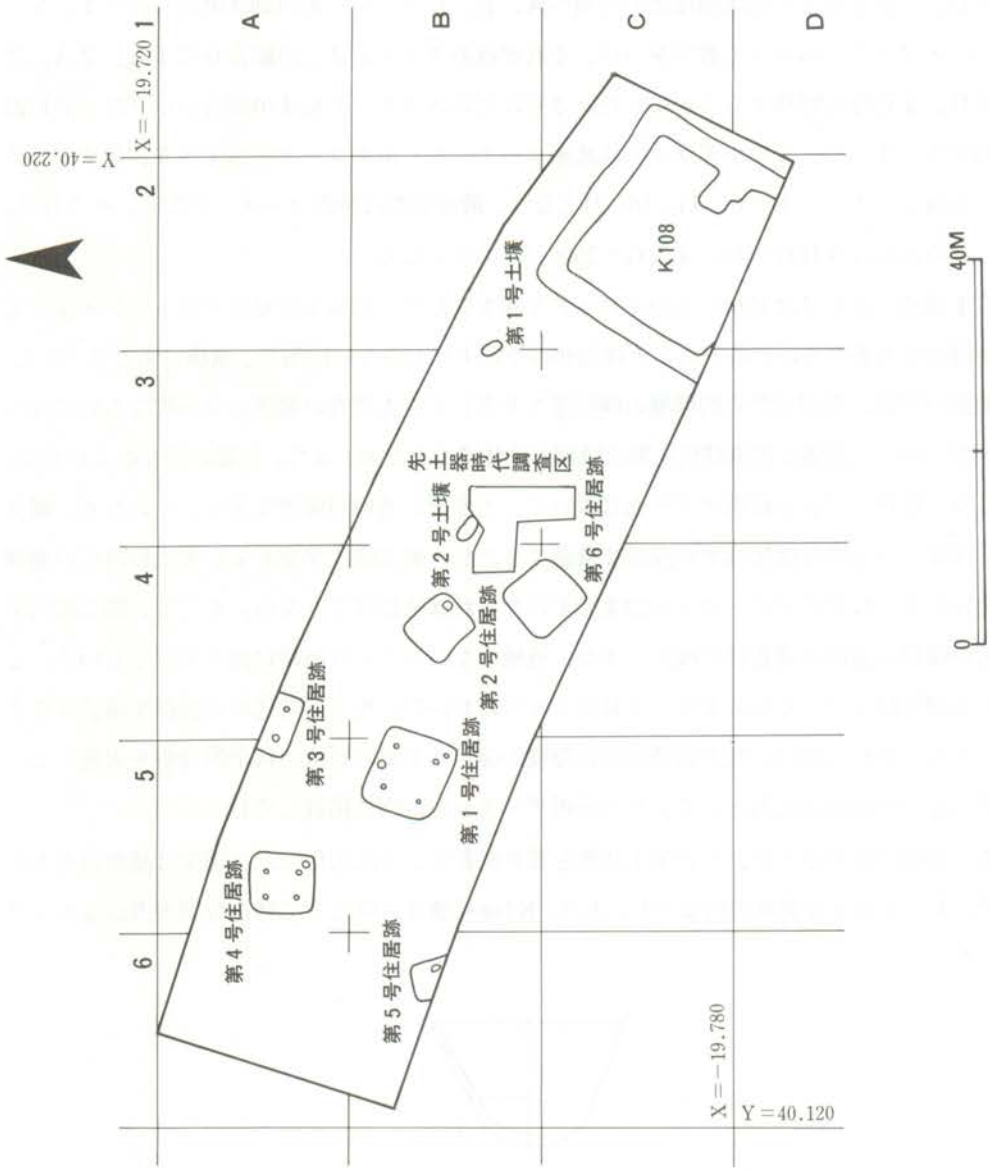
第２節　遺跡の概要及び調査の方法（第６図）

前原Ｉ遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代は集中箇所が１ケ所あり、メノウの石材の石器、剝片等が出土している。縄文時代は遺構は検出されていないが、縄文式土器の破片は表土中から採集されている。縄文式土器の大半は中期から後期にかけてのものが多い。弥生時代はやはり遺構がないが、弥生式土器の破片が10片ほど採集されている。いづれも後期のものである。古墳時代の遺構は中期（和泉式土器）の竪穴住居跡が６軒、土坑が２基である。そのうち２軒は玉作工房跡である。遺物は各遺構より、多量な土器が出土しており、和泉式土器を考えるうえで良好な資料となるものである。また、玉作工房跡からは原石から成品までの一連のものが検出され、臼玉、剣形石製品の製作技法を知る良好な資料である。この玉作工房跡が和泉式土器の時期であることから、竜角寺古墳群の形成開始の時期もこの辺に考えられるようになり、単に後期群集墳ではない事が判名してきた。

他に竜角寺古墳群において新発見の方墳を１基調査した。この方墳はＫ108号墳と命名された。



第５図　前原Ｉ遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）



第６図　前原Ｉ遺跡遺構配置図（1/800）

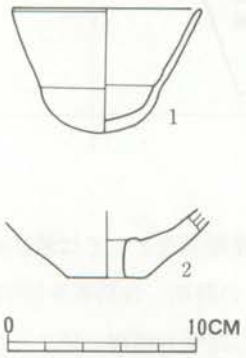
竜角寺古墳群中の方墳の全面的な発掘調査としては最初のものであり、東側に集中している方墳群（岩屋、みそ岩屋古墳を含む）の時期、性格等を解明する上で大きな成果をあげた。また、これにより、竜角寺古墳群の終末の時期も理解しやすくなった。しかしながら、残念な事に、古墳中より出土した唯一の土器である完形の長頸瓶が、保管していた事務所から、盗難にあい紛失してしまったのである。全く遺憾な事であるが、本報告においてはその実測図、写真等の記録類を掲載することができない。ただ、輪郭のスケッチのみを提示するにすぎない。

発掘調査は公共座標ののった基準点の設置からはじめた。そして、調査区域内に20m方眼の大グリッドを設定した。ただし、最大25m幅の範囲内であるため、基準点は６点しか設置でき

なかった。これをもとに南北軸は北から南へA、B、C……、東西軸は東から西へ１、２、３……とアルファベットと数字をつけ、それぞれのグリッドはこの組合せで１A、２A、２B、３B、３C等と呼称することにした。さらにこの大グリッドを４m四方の小グリッドに25に分割する。そして、この小グリッドは北東コーナーから南東コーナーへ１～５、北東コーナーから北西コーナーへ１、６、11、16、21となり、最後の25は南西コーナーになる。そうして、グリッドの表記は３BG―13、４AG―25というようになる。

前原Ｉ遺跡においては最初にこのグリッドを基本にして、25％を目安にするトレンチ法による確認調査を実施した。このトレンチは当初の予定よりも少ない段階で、遺構にあたり、また、調査範囲の問題、周辺の歴史的環境の解明等を考慮して、本調査の範囲は全面的なものになった。本跡における遺構は古墳時代中期の時期が主体であるため、また、土層の残りがよいため、一面に厚く堆積している新規テフラ面において、大部分の遺構が確認できた。そのため、縄文時代前期までの遺構と遺物は早い段階で確認できたが、縄文時代早期および先土器時代の遺構と遺物はもう一枚下のソフトローム面まで下げなければ確認はできない。そこで、縄文時代早期以前の確認は遺構の調査終了後と、また、遺構のないところは同時に掘り下げるという。２段階の手順を踏んだ。それにより、３Bグリッドにおいて、先土器時代の石器群を確認することができた。それに伴い、先土器時代の古環境の復元と土層の層位の科学的分析を実施して、分析例のない当地域の先例として、その分析データーを同時に掲載しておく。

遺構と遺物は出来るだけ、その出土状態を写真撮影し、また図化した。図面は基準点をもとにして、すべて遣り方実測で行なった。また、K108号墳は古墳として独自な調査方法をもって発掘した。



第７図　表採土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
表―１	坩	10 × 6.3 ×	黄褐色、不良、ハケ調整の後、全面ヘラミガキ	
―２	甑	× × 4	赤褐色、良、ヘラケズリの後外面ヘラミガキ、単孔	

第３節　検出された遺構と遺物

前原Ｉ遺跡において検出された遺構と遺物は先述したように時代と種々なものがあるので、時代別に分けて記述していく。

Ａ．先土器時代（第８～13図、ＰＬ19～21）

位置・層位・出土状況（第８図）

利根川面より入りこんだ支谷の最深部にあたり、東西に浅い谷面をもつ台地平坦面に位置している。標高は32.9mである。

石器群は遺構確認面である第II層（耕作土層）下部において検出され、最深部はIV～Ｖ層（ハードローム層・第Ｉ黒色帯）からも数点出土しているが、第III層（ソフトローム層）上部を中心として出土している。メノウを主体とした一群の石器群と思われるが、３ＢＧ－24を中心にして東西に拡散した部分と、３ＢＧ－25南端に小さく集中した個所が見られる。両者間において主要石材であるメノウの資料では接合関係はみられないが、同一個体と思われるものもある。一群の石器群と考えられるが、２つのブロックとして分離される可能性もあることから、両者を区分して石器群を図示した。前者をＡ群、後者の小集中部をＡ′群とする。石器類の他に焼けた礫片が数点出土しているが、礫群や焼土等の遺物は検出されていない。

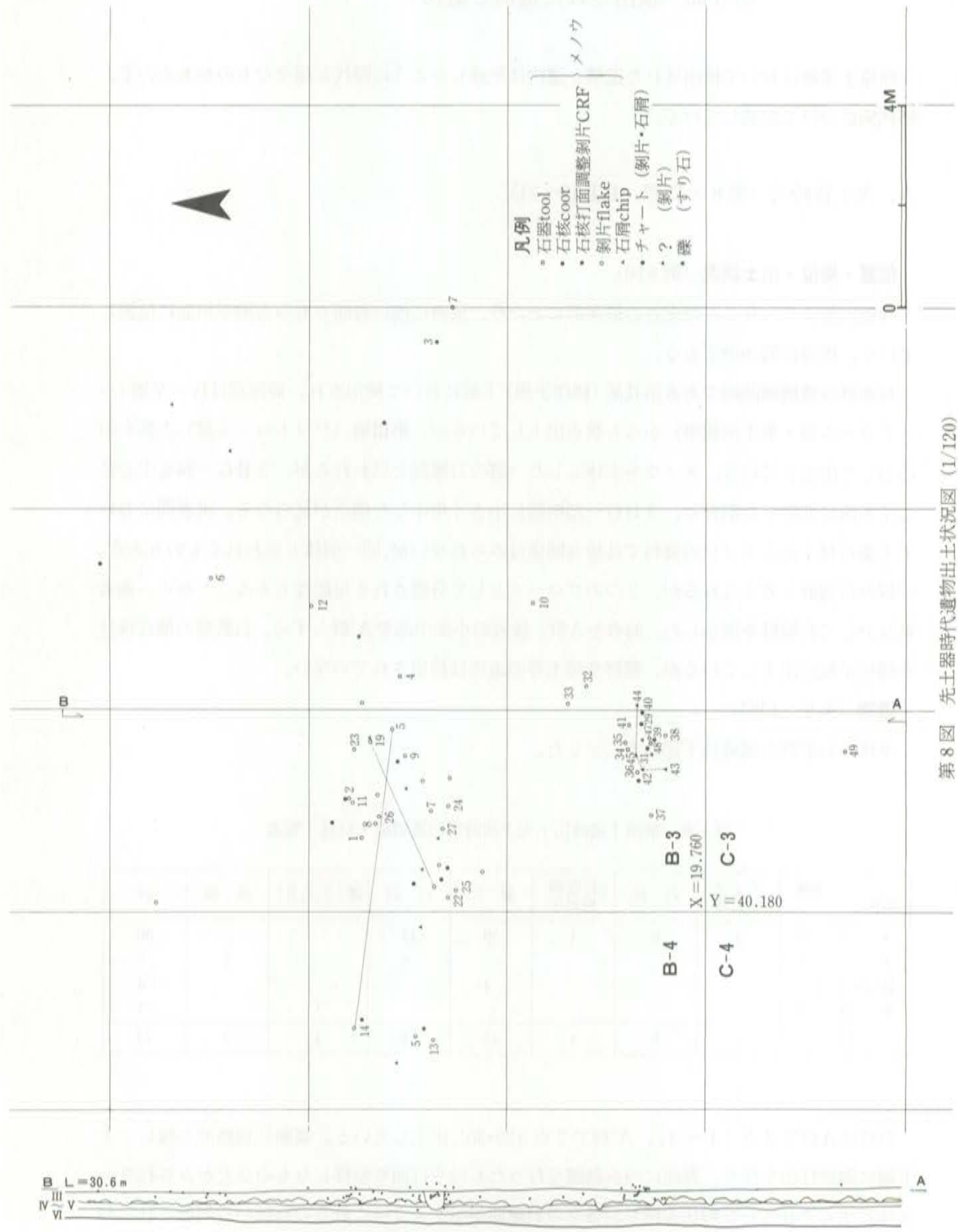
遺物（第９～13図）

全体の石器群の構成は下記の表に示した。

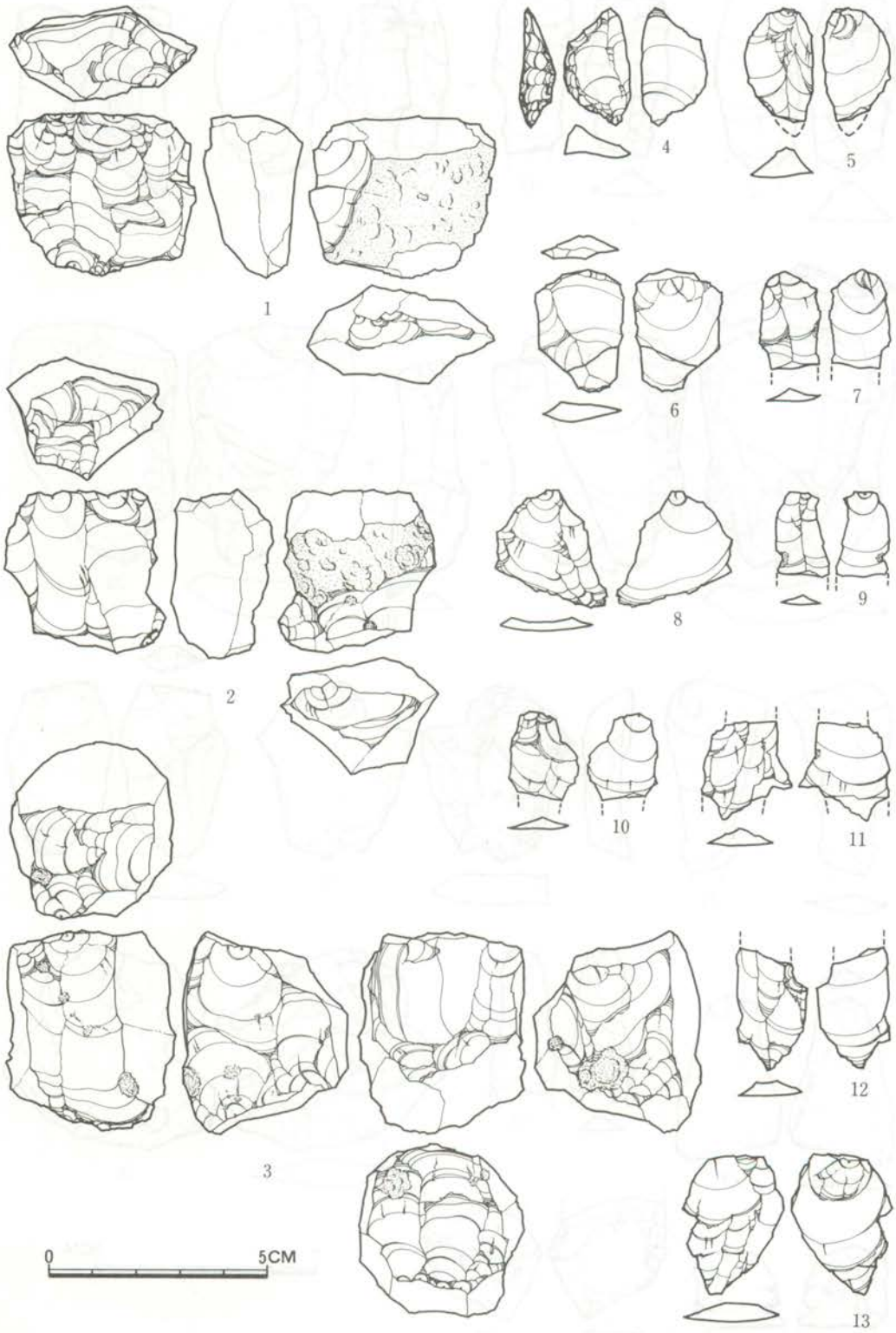
第１表　前原Ｉ遺跡出土先土器時代石器組成・石材一覧表

器種／石材	ナイフ形石器	石核	打面調整剥片	剥片	石屑	礫（スリ石／タタキ石）	焼礫	計
メノウ	1	6	4	39	10			60
チャート					6		2	8
砂岩（？）				4				4
硬砂岩						1		1
計	1	6	4	43	16	1	2	73

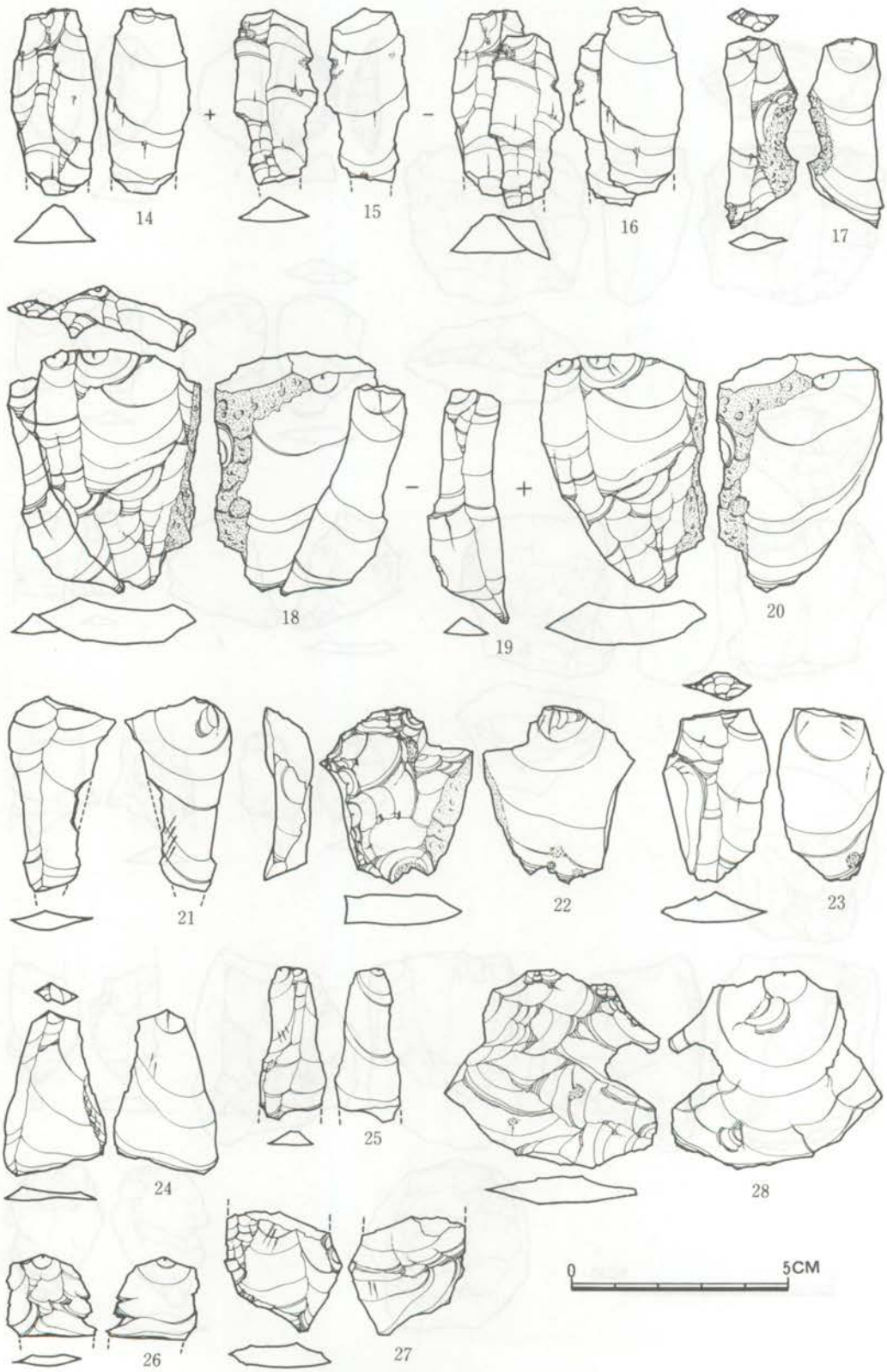
石核はＡ群で３点（１～３）、Ａ′群で２点（29･30）出土している。裏面に自然面を残し、上下端に調整打面を作り、表面にのみ剥離を行ったものや打面を転移したものなどがみられる。全体にずんぐりとした形状を持ち、各々の剥離面が示すようにこれらの石核から剥取された剥片類は、丈の短い縦長の剥片（７・９～12）、あるいはやや幅広で丸みを持ったもの（５・６・



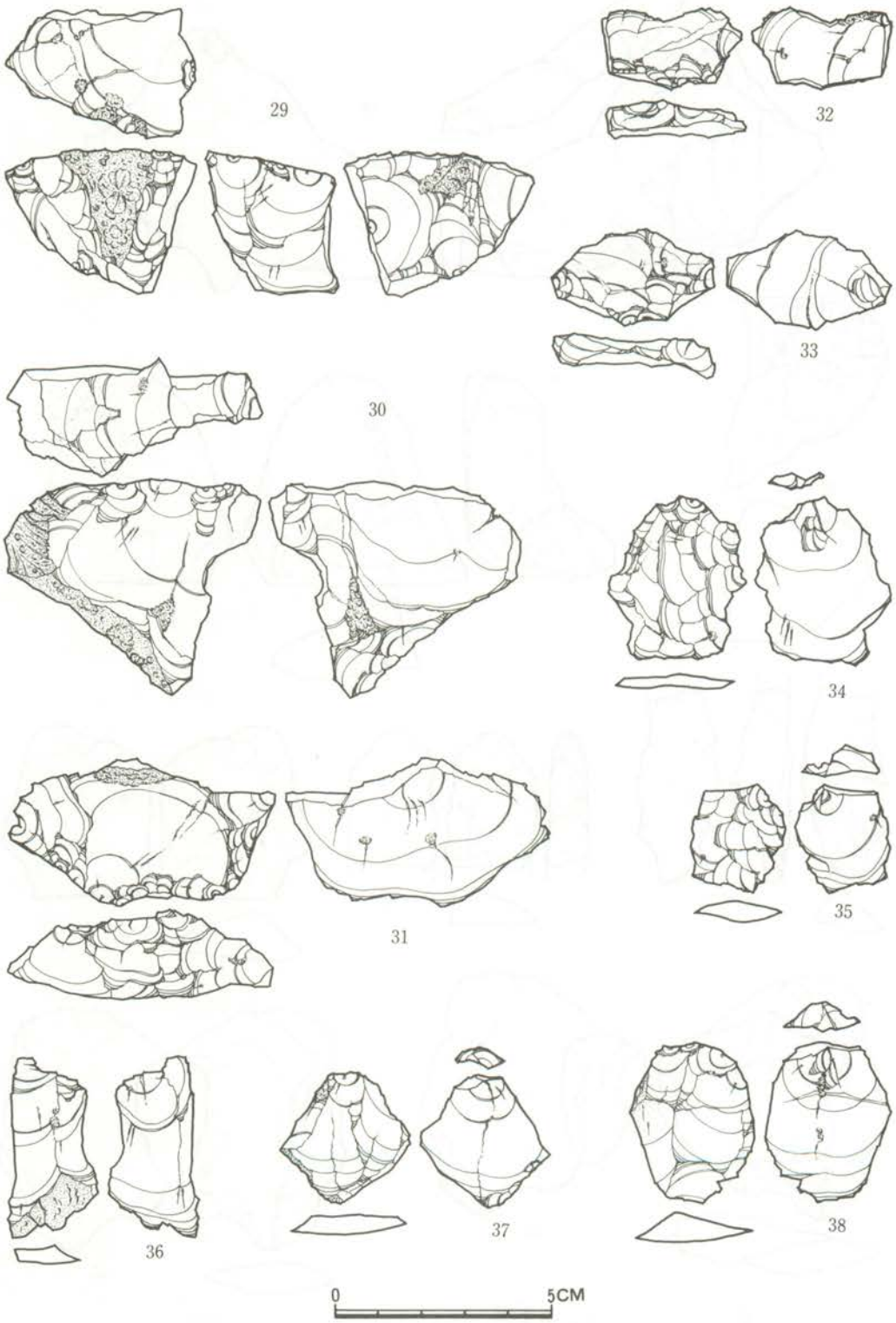
第８図　先土器時代遺物出土状況図（1/120）



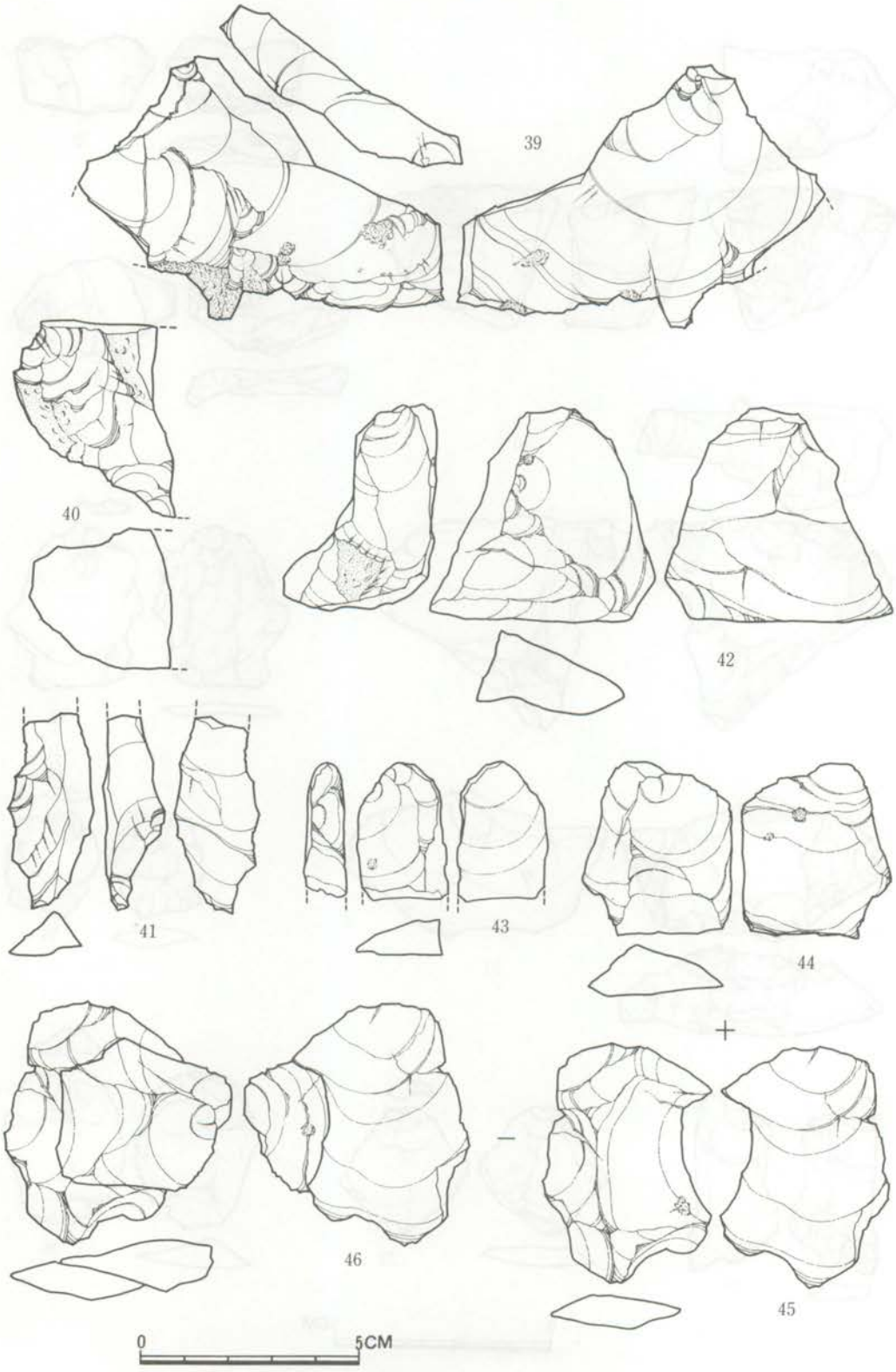
第９図　出土石器実測図 ①（2/3）



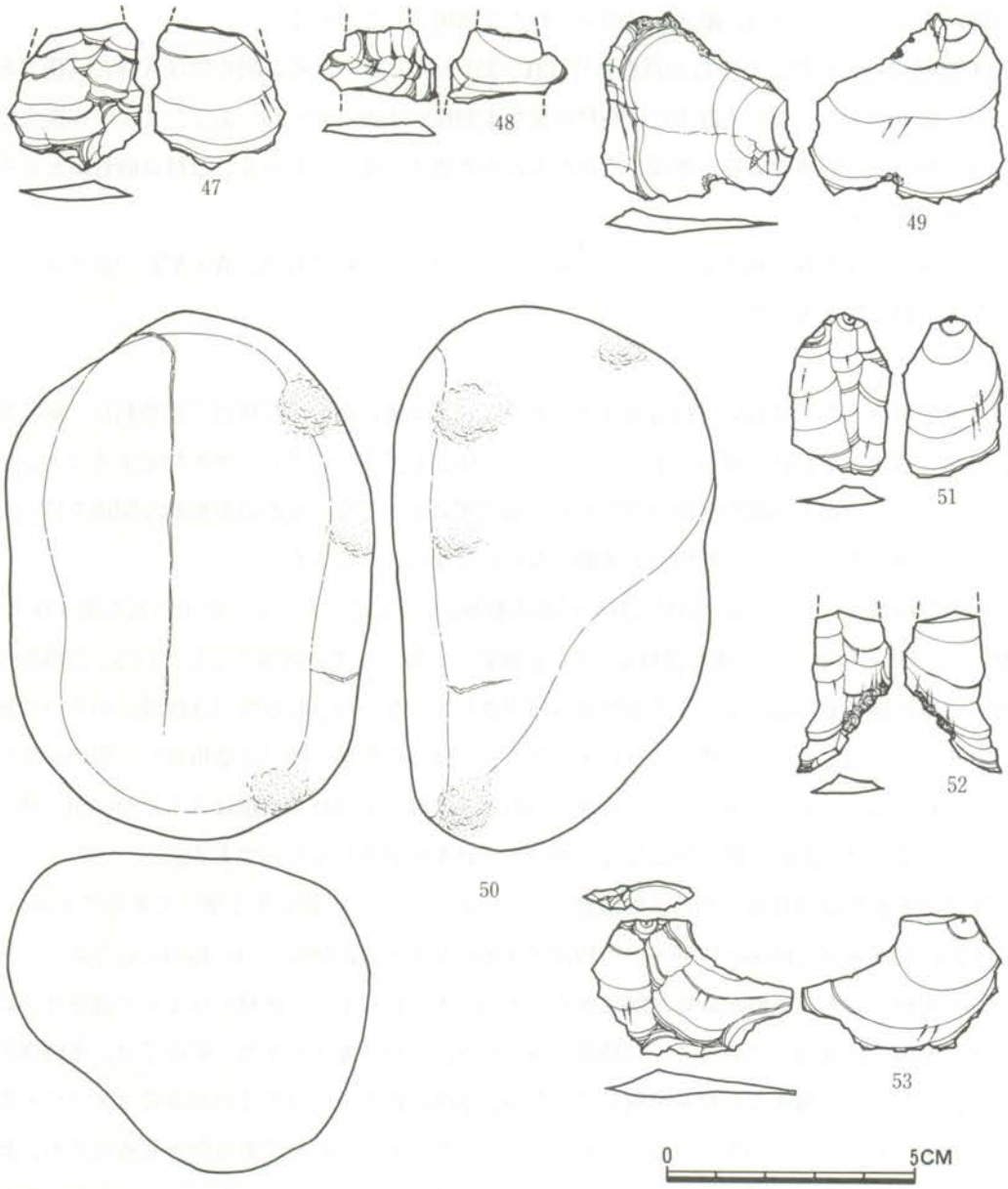
第10図　出土石器実測図 ②（2/3）



第11図　出土石器実測図 ③（2/3）



第12図　出土石器実測図 ④ (2/3)



第13図　出土石器実測図 ⑤（2/3）

8・13）である。全体に小形ではあるが、整った剝片類である。後者の剝片を素材とした小型のナイフ形石器（４）が唯一の石器であるが、（５）例の剝片などは類似の素材となるものであろう。この他剝片の接合２例（14～16・18～20）からは、縦長の整った剝片を産出する石核をも想定される。剝片類は全体に整った良好なものである。(22)は石核の打面再整剝片と思われる。(28)なども類似の剝片であろうか。この他、Ａ群には石器群からやや離れた位置に硬砂岩の円礫（50）が出土している。一面に磨耗した平坦な面を持ち、側部数個所には敲きつぶれた

痕跡がみられる。スリ石、敲き石に用いられた生活用具と思われる。

A′群には特に石核、石核打面再整剝片（31～35）が多くみられる。剝片類はA群と同様であるが、稀少である。この小群中には石材の異なる剝片が4点（42～46）あり、2片のみ接合しているが同一の個体である。焼成をうけたものか表面は赤変してもろく、石材は砂岩系とみられるが不明である。

（49～53）は表採資料である。これらもすべてメノウを用いており、A・A′群の剝片類に共通し、一群に属すものであろう。

A・A′群の小群間において接合例はみられないが、両者の石核、石核打面再整剝片、剝片類には同一個体と思われる資料があることから、全体として1つのブロックを想定することが出来る。しかし、出土状況や各群の内容から、両者間においてなんらかの有機的な関連を持った2つのブロックとしての可能性をも考慮しなければならないだろう。

石器群の数量は少ないが、石核に伴い打面再整剝片、そしてそれらから産出された剝片類(素材)、さらに石器という一連の資料をもち、石器製作の場としての内容を示している。石器群の他には生活面を具体的に示しうる遺物等は検出されていないが、石器群（A群域）からやや隔たりをもって出土している礫（スリ石・タタキ石）は、石器群と礫（生活用具）の関係を論じた1資料になるものであろうか。この他、いわゆる礫群とよばれる痕跡はみられないが、焼けた小礫片2点は石器群の周辺部になんらかの生活跡を推測されるものである。

本例の石器群は第Ⅱ層下部から第Ⅲ層（ソフトローム層）上部面の出土層位であることから、先土器時代終末期（phase Ⅳ期・小田1977・phase Ⅴ期・道沢1983）の一群のものであり、メノウを用材とした石器群が北総地域に多く出土例がみられる中で、他材をほとんど混在せずにメノウを単一に使用していることに特徴がみられる。石材の産出地を欠く県内では、各時期の石器群においても種々な石材を併用しているが、本例の時期に相当する石器群にはメノウ・安山岩を主体とするものが多い。安山岩を主とする一群にも単一石材である例が見られるが、概してこの時期の資料は数量的にも乏しく、明確な石器類を欠いている。しかし、細石器、尖頭器等を主体とする石器群もみられ、県内の当該出土層内の石器群には流動的であり、またバラエティに豊んだ内容が考えられるのではないだろうか。

第2表　前原Ⅰ遺跡出土先土器時代石器一覧表

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	剝　片	メノウ	Ⅱ　層	30,735	A′		第12図49
0002	〃	〃	〃	30,644	〃		第11図37
0003	石核片（？）	〃	〃	30,693	〃		第11図30
0004	剝　片	？	Ⅲ　層	30,593	〃	加熱により赤変、もろい	第12図42
0005	〃	？	〃	30,553	〃	加熱により赤変、0011と接合、0004・0038と同一・接合不可	第12図45

0006	剝　　片	メノウ	II　層	30,650	〃		第11図35
0007	石屑(チップ)	〃	〃	30,700	〃		
0008	石核打面再生	〃	〃	30,676	〃		第11図31
0009	剝　　片	〃	〃	30,661	〃	上・下端欠失	第13図48
0010	〃	〃	〃	30,603	〃	打面部欠失	第13図47
0011	〃		〃	30,735	〃	加熱により赤変、もろい、0005と接合、0004、0038と同一・接合不可	第12図44
0012	剝　　片	メノウ	III　層	30,510	A	下端部欠失、素材可能、0022に接合	第10図14
0013	〃	〃	〃	30,540	〃	一部に細かいＲか？	第９図５
0014	礫（焼）	チャート	II　層	30,692	〃	焼けた礫小片	
0015	剝　　片	メノウ	III　層	30,557	〃	打面調整の剝片か？	第10図22
0016	石屑(チップ)	チャート	〃	30,588	〃		
0017	剝　　片	メノウ	II　層	30,689	〃		第10図25
0018	〃	〃	〃	30,710	〃	素材可能	第10図24
0019	石屑(チップ)	チャート	〃	30,710	〃		
0020	剝　　片	メノウ	〃	30,656	〃	素材可能　特徴的な剝片	第10図23
0021	〃	〃	〃	30,673	〃	素材可能、0053に接合	第10図19
0022	〃	〃	〃	30,628	〃	打面部欠失、素材可能、0012に接合	第10図15
0023	ナイフ型石器	〃	〃	30,633	〃	小形のナイフ	第９図４
0024	剝　　片	〃	III　層	30,560	〃		第10図17
0025	石　　核	〃	〃	30,532	〃		第９図３
0026	礫（焼）	チャート	〃	30,567	〃	焼けてもろい、小片	
0027	剝　　片	メノウ	II　層	30,625	〃	打面部欠失・一部抉り痕か？	第９図12
0028	〃	〃	III　層	30,529	〃	表面一部に自然面残す	第９図６
0029	石屑(チップ)	〃	〃	30,506	〃		
0030	欠		II　層	30,558	〃		
0031	石屑(チップ)	メノウ	〃	30,585	〃		
0032	〃	チャート	〃	30,574	〃		
0033	礫		〃	30,626	〃	円礫・すり石様	第13図50
0034	剝　　片	メノウ	III　層	30,515	〃	素材可能、特徴的な剝片	第９図13
0035	石屑(チップ)	チャート	III　層	30,380	A		
0036	〃	メノウ	〃	30,358	〃		
0037	〃	チャート	〃	30,530	〃		
0038	剝　　片	？	〃	30,473	A'	加熱により赤変、0004、0005、0011と同一個体、接合不可	第12図43
0039	剝　　片	メノウ	〃	30,455	〃	素材可能、特徴的な剝片	第11図38
0040	〃	〃	〃	30,465	〃	大形、不整、ＣＲＦ様か？	第12図39
0041	石屑(チップ)	〃	〃	30,414	〃		
0042	剝　　片	〃	〃	30,566	〃		第11図36
0043	〃	〃	〃	30,530	〃	素材可能	第11図34
0044	〃	〃	〃	30,488	〃		第12図41
0045	石　　核	〃	〃	30,517	〃		第11図29
0046	石核片（？）	〃	〃	30,549	〃	半欠損か原材か？自然面を多く残す	第12図40
0047	剝　　片	〃	〃	30,562	〃	打面調整の剝片か？	第11図32
0048	〃	〃	〃	30,490	〃	ＣＲＦか？	第11図33
0049	〃	〃	〃	30,464	A	外郭部調整の小剝片	
0050	〃	〃	II　層	30,772	〃	下端部欠失・小剝片	第９図７
0051	〃	〃	III　層	30,433	〃	打面部分のみ	
0052	〃	〃	〃	30,500	〃		
0053	〃	〃	〃	30,525	〃	素材可能、一部に自然面残す、0021に接合	第10図20
0054	〃	〃	IV　層	30,365	〃	下端部欠失	
0055	石屑(チップ)	〃	〃	30,354	〃		
0056	剝　　片	〃	III　層	30,433	〃	小形	
0057	〃	〃	位置不明	30,523	〃	位置不明、素材可能	第10図21

0058	〃	〃	Ⅲ　層	30,402	〃	下端部欠失・小剝片	第9図9
0059	〃	〃	〃	30,455	〃		第9図10
0060	石屑(チップ)	〃	Ⅴ　層	30,190	〃		
0061	剝　　片	〃	Ⅳ　層	30,333	〃		
0062	石屑(チップ)	〃	〃	30,237	〃		
0063	剝　　片	〃	Ⅲ　層	30,720	〃	下端部欠失	
0064	石屑(チップ)	〃	〃	30,510	〃	石核の調整剝片か？	
0065	〃	チャート	Ⅴ　層	30,214	〃		
0066	欠		Ⅲ　層	30,378	〃		
0067	石屑(チップ)	メノウ	〃	30,559	〃		
0068	剝　　片	〃	〃	30,540	〃	打面部欠失	第10図27
0069	欠		Ⅴ　層	307287	A		
0070	剝　　片	メノウ	Ⅲ　層	30,595	〃		第9図8
0071	〃	〃	Ⅱ　層	30,643	〃	下端部欠失	第10図26
0072	〃	〃	Ⅲ　層	30,490	〃	上下端部欠失・小剝片	
0073	〃	〃	〃	30,485	〃	上下端部欠失	第9図11
0074	石　　核	〃	〃	30,445	〃		第9図2
0075	〃	〃	〃	30,432	〃	裏面は自然面、1側面のみ剝離	第9図1
0076	欠		〃	30,547	〃		
0077	欠		〃	30,465	〃		
0078	剝　　片	メノウ	〃	30,450	〃	大形・小整形	第10図28
表採	剝　　片	メノウ				素材可能、整う	第13図51
〃	〃	〃				打面部欠失	第13図52
〃	〃	〃				CRFか？	第13図53
〃	〃	〃				不整	
〃	〃	粘板岩				不整形・小片	

付、前原Ⅰ遺跡・花粉分析及び鉱物分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

〔花粉分析〕

1．試料

花粉分析試料は、柱状試料で第Ⅰ層～第Ⅷ層までの12点と、別地点で採取した1点の計13点である。第1表はこれらの試料の試料表である。

第3表　試　料　表

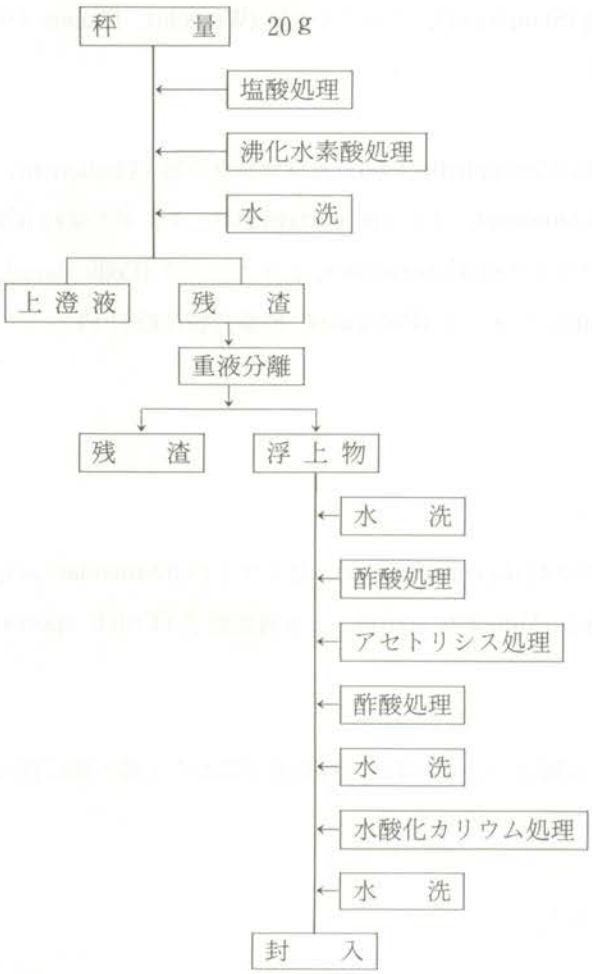
試料番号	土　　質	花粉・胞子化石産出傾向*
Ⅱ a 層No.1	黒褐色ローム質　土　（表　　土）	C
Ⅱ b 層　2	暗褐色ローム層	C
Ⅱ c 層　3	暗褐色ローム層	R
Ⅲ　層　4	暗褐色ローム（ソフトローム層）	A

Ⅲ　層	5	〃　（ソフトローム層）	C
Ⅳ・Ⅴ層	6	〃　（ハード～ソフトローム層）	R
Ⅴ　層	7	褐色ローム（ＢＢ１に相当）	R
Ⅴ　層	8	〃　（ＢＢ１に相当）	R
Ⅴ　層	9	〃　（ＢＢ１に相当）	R
Ⅶ　層	10	〃　（ＢＢ２に相当）	R
Ⅶ　層	11	〃　（ＢＢ２に相当）	C
Ⅶ～Ⅷ層	12	〃	R
	13	黒　色　土	R

※A：Abundant：多い、C：Common：普通、R：Rare：少い

2．分析方法

花粉分析工程は、下図に従った。



3．分析結果

花粉分析結果は、検出された花粉胞子化石総数は基数とする百分率で、各試料に於ける花粉、

胞子化石の割合を算出し、第3表として後掲した。このなかで主要なものについては、ダイアグラムで表わし、同様に第3表に掲載しておく。

今回の分析によって、以下に列挙した花粉、胞子化石が検出された。

針葉樹花粉（ＡＰ－１）

モミ属 (Afies)、マツ属 (Pinus)、ツガ (Tsuga siefol-dii)、スギ科 (Tax odiaceae)、スギ属 (Cryptomeria)、イチイ科、ヒノキ科、スギ科の何れかに属するも判断としない。(T. C. T)

広葉樹花粉（ＡＰ－２）

クルミ属 (Juglans)、ヤナギ属 (Salix)、ハンノキ属 (Alnus)、ハシバミ属 (Corylus)、クリ属 (Castanea)、クリカシ属 (Castanopsis)、コナラ亜属 (Lepidobalanus)、エノキ属 (Celtis)、ケヤキ属 (Zelkova)、モクレン科 (Magnoliaceal)、マンサク科 (Hamamelidaceae)、シラキ属 (Sapium)、カエデ属 (Acer)、ハイノキ属 (Symplocos)、タニウツギ属 (Weigela)、Prunus（サクラ）、アカガシ亜属 (Cyclobalanopsis)

草本花粉 (NAP)

サナエタデ属 (Persicaria)、ナデシコ科 (Caryophyllaceae)、カラマツソウ属 (Thalictrm)、オミナエシ属 (Patrinia)、キク亜科 (Carduoideae)、ヨモギ属 (Artemisia)、タンポポ亜科 (Cichouideae)、イネ科 (Gramineae)、カヤツリグサ科 (Cyperaceae)、シオガマギク (Pedicularis)、バラ科 (Rosaceae)、ソバ属 (Fagopryrum)、ヒメハギ (Polygala)、形態分類花粉 (FP)

三溝型花粉 (Tricolpate pollen)

三溝孔型花粉 (Tricolporate pollen)

無口型花粉 (Inaperturate pollen)

半歯類胞子

イノモトソー属 (pteris)、ヒカゲノカズラ科 (Lycopodiaceae)、ゼンマイ科 (Osmundaceae)、ウラボシ科 (Polypodiacae)、単条溝型胞子 (Monolete spore)、三条溝型胞子 (Trilete spore)

その他

淡水生藻類 (Pseudoschizaea)

次に、検出された花粉、胞子化石の主な属についての産出の特長を下部から上部へ順に述べる。

（針葉樹花粉）

マツ属、スギ科ナスギ属が主に検出された。

○マツ属

Ⅶ層の№10から66.1％と非常に多く検出されたことは、前後の試料と比較して異常であるが、概して№12～№4にかけて、№10をピークとするゆるやかな凸型の消長がみられた。№3～№1になると、一度減少したマツ属は再度増加に転じ№1では14.0％検出された。

○スギ科＋スギ属

全般を通じて、産出割合は低く、産出もＶ層の№７以浅から主に検出された。

（広葉樹花粉）

クリ属、クリカシ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、カエデ属、ハイノキ属、ハシバミ属等が主に検出された。

○クリ属

主に№４以浅から検出され、割合も№４では7.0％と多かったが浅くなるに従い減少する。

○クリカシ属

№５以浅から主に検出され、№３の7.0％をピークとする凸型の消長がみられた。

○コナラ亜属

ほぼ全試料を通じて散見されたが、割合としては、2.0％以下で少ない。

○アカガシ亜属

№６以浅に限って検出される。割合は№４から7.0％検出された他はあまり多くはない。

○カエデ属

№８、６、４、から若干検出された。

○ハイノキ属

Ⅶ属の№11～№９に限って検出されたことは特長的である。割合は№10の4.9％をピークとする小さな凸型の消長がみられた。

○ハシバミ属

Ⅶ層の№10、９に限って検出された。割合は№10が3.2％検出された他は僅かであった。（草本花粉）

イネ科、ヨモギ属、バラ科、キク亜科、カラマツソウ属、タンポポ亜科、スゲ科が主に検出された。

○イネ科

ほぼ全試料から多量に検出され、産出の特長は多少の増減をくりかえすものの№13～№６にかけて、№11の68.5％をピークとする凸型の消長がみられる。

№４以浅は、№１の10.0％を除いて多くはない。

○ヨモギ属

ほぼ全試料から高率に検出され、№10～№８、№７～№５、№４～№１では、それぞれ急峻な全居歯状の消長がみられた。

○バラ科

バラ科の植物には、樹木と草本があるが今回の分析結果では、草本に相当するものと考えられる。産出の特長は№４から61.0％と非常に多く検出されたことである。この他、№６、５か

ら僅かながら検出された。

○キク亜科

全試料から検出され、産出の特長は№13～№8では低率であったが、№7～№5及び№3～№1では約5～6％検出され多かった。

○カラマツソウ属

№6以浅から主に検出されたが、割合としてはあまり多くはない。

○タンポポ亜科

№5、3、1、から僅かながら検出された。

○スゲ科

№7、6、1、から若干検出された。

（羊歯類胞子）

単条溝型、三条溝型の胞子、イノモトソー属、ウラボシ科、等が検出された。

○単条溝型胞子

下部の№12から61.4％検出され優占したが、№11～№8になると激減し、約3％前後検出された。№7になると19％に急増し、その後減少し、№3～№1では再び増加し、№2の51.5％をピークとする凸型の消長がみられた。

○三条溝型胞子

ほぼ全試料から散見され、割合は低率であった。

○イノモトソー属

№3、2、に限って検出された。

○ウラボシ科

№7以浅で僅かながら散見された。

以上、主要花粉、胞子化石の産出の特長から当遺跡試料を花粉帯に分けて古植生、古気候について述べると以下のようになる。

A花粉帯（№12）

羊歯類を優占とし、イネ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本が生育する草地が推定される。

B－1花粉帯（№11～№9）

イネ科を優占とし、ヨモギ属、キク亜科などの草本からなる草地が存在していたと推定される。草地の周囲には、マツ属、ハシバミ属、ハイノキ属等の樹木が良好に生育していたことが考えられる。とくに№10ではマツ属がとくに多く生育していたと推定される。

古気候は、古植生より温帯～暖温帯に相当すると考えられる。

B－2花粉帯（№8～№5）

B－1花粉帯と同様、イネ科とヨモギ属によって特長付けられるが、この花粉帯ではヨモギ

属の方がイネ科に比較して多産すること及び単条溝型胞子がＢ－１花粉帯よりも多く検出されることが特長である。よって、ヨモギ属を主体とし、イネ科、キク亜科、スゲ科、それに羊歯類が良好に生育する草地が存在していたと考えられる。

また、周囲には、マツ属をはじめ、スギ科やスギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属等の樹木類も僅かながら生育していたと推定される。

古気候は、古植生から温帯に相当すると考えられる。

Ｃ花粉帯（№４）

バラ科が多産することによって特長付けられる。よって、バラ科を優占とし、ヨモギ属などが生育する草地が考えられる。周囲には、アカガシ亜属、クリ属、クリカシ属などが主体となって生育する照葉樹木的な植生が存在していたと考えられる。

古気候は、古植生から暖温帯に相当しよう。

Ｄ花粉帯（№３～№１）

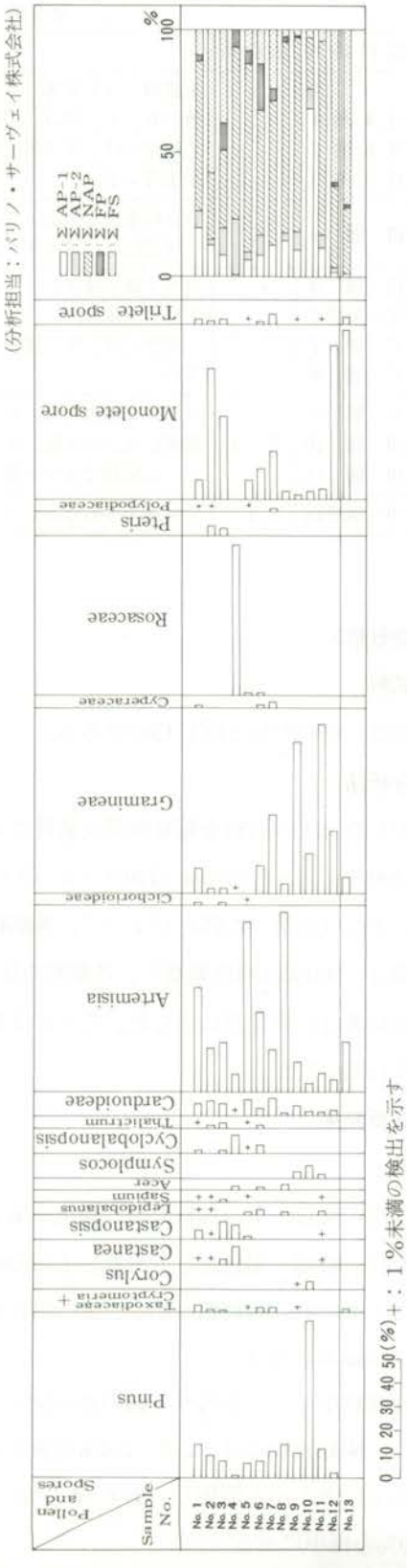
羊歯類とヨモギ属、キク亜科、イネ科等の生育する草地が存在していたと考えられる。とくに、№３、２、では羊歯類が多かったといえる。

周囲には、マツ属を主体とし、スギ科やスギ属、クリカシ属、アカガシ亜属などの樹木類が生育していたと考えられる。

古気候は、古植生から温帯～暖温帯に相当しよう。

なお、別の地点で採取された№13は、花粉、胞子構成の特長から、Ｄ花粉帯の下部に対比されると考えられる。

以上のことを簡単に表にまとめると、第４表のようになる。



第４表　主要花粉胞子化石ダイアグラム

第5表　花粉帯一覧表

試料番号	花粉帯		古気候
No. II a 層 1 II b 層 2 II c 層 3	D	羊歯類、ヨモギ属、キク亜科、イネ科の生育する草地。とくに、II層のb、c、では、羊歯類が多く生育していたと考えられる。 周囲には、マツ属主体とし、スギ科、クリカシ属、アカガシ亜属が生育する。	温　帯 〜 暖温帯
III　層　4	C	バラ科を優占とし、ヨモギ属等の生育する草地が推定される。 周囲には、アカガシ亜属、クリ属、クリカシ属等が生育	暖温帯
III　層　5 IV〜V層 6 V　層　7 V　層　8	B－2	ヨモギ属主体とし、イネ科、キク科、キク亜科、スケ科、羊歯類の生育する草地。 周囲には、マツ属、スギ科、コナラ亜属、アカガシ亜属等が若干生育。	温　帯
V　層　9 VII　層　10 VII　層　11	B－1	イネ科を優占とし、ヨモギ属、キク亜科等の生育する草地。 周囲には、マツ属、ハシバミ属、ハイノキ属等の樹木が良好に生育。 とくにNo.10ではマツ属が主体となった植生が考えられる。	温　帯 〜 暖温帯
VII〜VIII層12	A	羊歯類を優占とし、イネ科、ヨモギ属、キク亜科の生育する草地。	?

〈鉱物分析〉

1．試料

試料は、花粉分析と同じ13点である。

2．分析法

採取したままの試料を超音波発生装置により粘土分を除いた。

¼mm（60メッシュ）と⅛mm（120メッシュ）の篩を用いて、¼〜⅛mmの砂分を抽出し、テトラブエロムタン（比重≒2.96）によって、重鉱物を分離した。

検鏡は、300個体程度観察し、各鉱物の比重を考慮して、鉱物組成を算出した。

分析結果は、第5表に示した。これには重鉱物量の変化、各鉱物の産出変化、重鉱物組成をそれぞれ図示した。

3．分析結果

○色調

下半部のNo.12〜7の試料では、褐色を呈する。同じ褐色の中でもNo.9はやや明るい。

No.6は、暗褐〜褐色をしており、上部の暗褐色と下部の褐色との中間的な色調を示す。

No.5〜2では、暗褐色を示し、上へ黒さが増して、No.1では黒褐色となる。

○¼〜⅛mmの砂分量

乾燥試料中における¼〜⅛mmの砂分量は、最上部のNo.1（7.3%）を除いて、5%未満の低率を保つ。No.12〜10では、2.2〜2.4%の値である。

No.9（3.4%）から増加し、No.8（4.0%）で極大となった後、上方へ向って減少し、No.5〜4で2.0%の極小に至る。

No.３～１においては、急激に砂分量が増加し、No.１は7.3%を示す。

○¼～⅛mmの砂分中の重鉱物量

No.12～10における、¼～⅛mmの砂分中の重鉱物量は、70%前後の高い値を占める。No.９～７では、重鉱物量がやや減少し、60%前後の値を示す。No.６で69.5%と増加し、１つの極大となる。No.５～１では、上方に向って、一定の割合で重鉱物量の漸減が見られ、No.１で20.9%となる。

各鉱物の産出変化

カンラン石

カンラン石の産出は、特徴のある変化曲線を描いている。No.12（51.0%）から、やや増加し、No.11で55.9%の最大値をとる。No.10～８で、カンラン石は激減し、No.18（19.1%）において極小となる。No.５（28.3%）で少し減少するものの、No.８～No.４でカンラン石は漸増し、No.４において、38.3%の極大値に達する。No.３～１では、再びカンラン石が急減し、No.１は8.5%を示すにすぎない。

観察されるカンラン石は、自形から他形に至るまで様々の形態を示し、表面が風化によって褐色を示すものも少なくない。

斜方輝石

No.12～11では、斜方輝石が少ないものの、No.11(26.4%)で極小値をとったのち急増し、No.７において50.8%の最大値に達する。No.６～４では、斜方輝石が減少し、No.４で33.7%となる。No.３～１において、再び斜方輝石が増加し、No.１では49.0%に達する。

斜方輝石の形態は、自形から他形までいろいろだが、自形一半自形のものが比較的多い。

単斜輝石

重鉱物中に占める単斜輝石の割合は少なく、最大でも10.8%（No.１）である。No.12～10の単斜輝石は５%前後と少ない。No.９（9.7%）で、極大値を示したのち、単斜輝石は、ゆるやかに減少してNo.５で4.0%の極小値をもつ。No.４～１において単斜輝石はゆるやかに漸増し、No.１では10.8%の最大値に達する。

単斜輝石の形態は、半自形～他形のものが多いが、No.９～８において、自形結晶もいくらか認められる。

角閃石

角閃石の産出は、きわめて少なく、No.12～４においては、１%以下である。No.３～１は、比較的角閃石がみられ、1.6%（No.３）から2.9%（No.１）と上方へ向って増加する傾向がみられる。

角閃石の形態は、半自形～他形である。

不透明鉱物

№12（8.2%）から、しだいに不透明鉱物が増加して、№8で20.2%の極大値に達する。№7（13.4%）で減少した後、不透明鉱物は漸増し、№5で23.2%となる。№4（21.2%）でやや減少がみられるものの、№3は増加し、31.0%の最大値をもつ。№3～1において不透明鉱物はゆるやかに減少し、№1では、24.5%の値となる。

火山ガラス

軽鉱物中の火山ガラスについて定性的にみると、№9～8付近で、バブル型の火山ガラスの多産が観察される。№12～11には、火山ガラスはあまり含まれない。№10からバブル型火山ガラスが増加し、№9～8でもっとも多産し、№7から上位に向って火山ガラスの減少がみられる。

第6表　重鉱物組成図及び主要重鉱物の産出変化図

4．考察

本地点の重鉱物組成の特徴を簡単に以下にまとめてみる。

カンラン石は、2つの極大をもち、それぞれVII層とIII層とに位置する。VI～V層では、斜方輝石の極大、カンラン石の極小、火山ガラスの極大がみられる。不透明鉱物は、上方へ増加する傾向がある。

以上のような重鉱物組成の特徴は、近隣の成田空港の各遺跡（№7、№14、№60）と同様の傾向をもつ。空港№60遺跡の場合、VII層とIII層とにカンラン石の極大があり、VI層では、カンラン石の極小・斜方輝石の極大・火山ガラスの極大が存在し、不透明鉱物は、上方へ増加する傾向がみられる。

従って、本遺跡の土層区分と重鉱物分析結果との関係は、空港地区の各遺跡の立川ローム層のものとよく一致する。

さて、本遺跡のVII層は、野外において黒色帯として認められる。VII層は、カンラン石の極大・

斜方輝石の極小が特徴であり、火山ガラスの極大がみられるⅥ層の下位に位置する。

これらの特徴は、成田空港地区や常盤道地区の黒色帯の特徴と一致する。武蔵野台地の立川ローム層中では一般に、第１黒色帯と第２黒色帯の２枚が認められている。

武蔵野台地において、「第１黒バンド直上に輝石の極大があること、第２黒バンド直上にガラスの極大があること。」が小林ほか（1971）の共著者の１人の羽鳥によって報告されている。

本遺跡における黒色帯（Ⅶ層）が火山ガラスの密集帯の直下に位置することから、Ⅶ層は武蔵野台地における立川ローム層、第２黒色帯に対比することができる。

武蔵野台地における第１黒色帯は、カンラン石の極小部でかつ斜方輝石の極大部に位置する。また、これは重鉱物量が増加する途中に相当する。

第１黒色帯は、羽鳥の言うように「直上に輝石の極大がある。」場合もあるが、輝石の極大が第１黒色帯に含まれる場合が、武蔵野台地においてもみられる。

本地点において、Ⅶ層より上位に黒色帯は認められないが、武蔵野台地における第１黒色帯の重鉱物組成の特徴を示しているのは、本地点の№８～７付近であり、ほぼⅤ層に対応している。

№９～８にバブル型の火山ガラスの極大があることが、定性的ながらわかった。

この層準では、カンラン石の減少・斜方輝石の増加がみられ、¼～⅛mmの砂分中の重鉱物量も減少する。また、層序的には、第２黒色帯に対比される。Ⅶ層の直上に位置している。

以上の性質は、空港№60遺跡・花前Ⅱ－Ⅰ遺跡・中山新田Ⅰ遺跡などでも共通していることから、№９～８は、町田・新井（1976）の姶良 Tn 火山灰（ＡＴ）に対比される。

なお、姶良 Tn 火山灰（ＡＴ）は、姶良カルデラから21,000～22,000年前に広域にもたらされた火山灰である。

次に武蔵野地域との比較を簡単に述べる。

Ⅶ層は前述したように立川ローム層の第２黒色帯に対比される。Ⅵ層はＡＴの層準に対比される。

№８～７付近の重鉱物組成は、武蔵野台地の立川ローム層第１黒色帯のものと類似する。

カンラン石の極大と斜方輝石の極小とが、№４（Ⅲ層）においてみられるが、武蔵野台地においても、Ⅳ層（ハードローム）からⅢ層（ソフトローム）の付近において、カンラン石の極大・斜方輝石の極小が存在する。

以上のように、今回の分析結果と、武蔵野台地の重鉱物組成とは、類似性が非常に高いことがわかった。

従来の研究により、立川ローム層は、富士火山・箱根火山に由来する火山灰からなるとされている。

参考文献

小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男　(1971)野川先土器時代遺跡の研究　第四紀研究　Ｖ．10．Ｐ．231～252
町田　準・新井房夫　(1976)　広域に分布する火山灰－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義　科学46、Ｐ．339～347

Ｂ．縄文・弥生時代

縄文式土器（第14～15図）

第Ⅳ群土器（第14図１）

表面に横位の、内面には「Ｖ」字状の条痕文が施される。胎土には繊維を含む。茅山上層式に比定される。

第Ⅵ群土器（第14図２～12）

１類土器（２～６）

阿玉台式に比定されるものを本類とした。

２・５は口唇上に刻み目を有し、隆帯による楕円区画の内側に２条を単位とする細い有節沈線文が施される。また、内面は稜を有し、傾きはやや外反する。胎土には砂粒と金雲母が含まれる。

３も同様に、口唇上に刻み目が施され、内面に稜を有する。口縁部文様は半截竹管による沈線文が無雑作に施されている。胎土には砂粒と雲母が多量に含まれる。

４は隆帯をはさんで１条ずつの有節沈線文が施される。突起を有する。胎土には砂粒と雲母が多量に含まれる。

６は爪形文が横位に連続的に施されている胴部片である。胎土には雲母と砂粒が多量に含まれる。

２類土器（７～12）

加曽利Ｅ式に比定されるものを本類とした。

７は口縁部片である。隆帯による区画文を施し、その隆帯に沿って太い沈線がなぞられている。

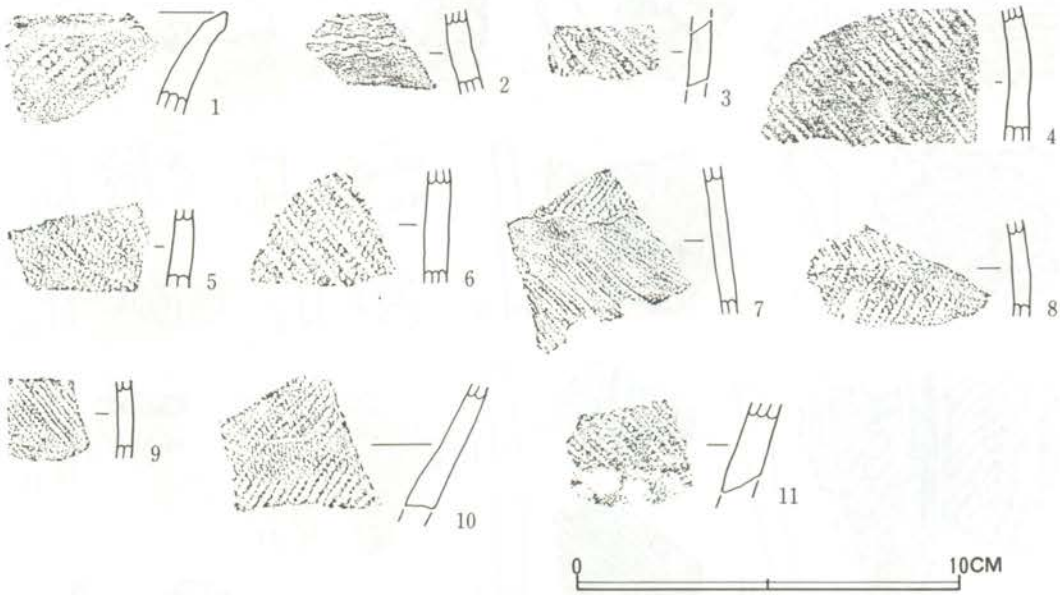
８～11は沈線で区画された磨消懸垂文を施す胴部片である。地文は８・９が複節ＲＬＲ（縦回転）、10が単節ＲＬ（縦回転）、11が単節ＬＲ（縦回転）の斜縄文である。

12は撚糸文Ｌが施された胴部片である。

なお、７～12は加曽利ＥⅢ式に比定される。

第Ⅶ群土器（第15図、13～24）

１類土器（13）



第14図　グリッド出土土器拓影図 ①（1/2）

堀之内式に比定されるものを本類とした。

13は半截竹管による沈線の幾何学文が施された胴部片である。

２類土器（14～18）

２ａ類（15～18）

加曽利ＢＩ式に比定されるものを一括する。

15～17は口縁部片で、18は頸部片である。すべて、単節ＬＲ（横回転）の斜縄文を地文とし、指頭圧痕を施した隆帯が口縁部と頸部に貼付されている。内面の口縁には１、２条の沈線がめぐっている。斜縄文は粗雑に施文されている。

２ｂ類（14）

加曽利ＢII式に比定されるものを一括する。

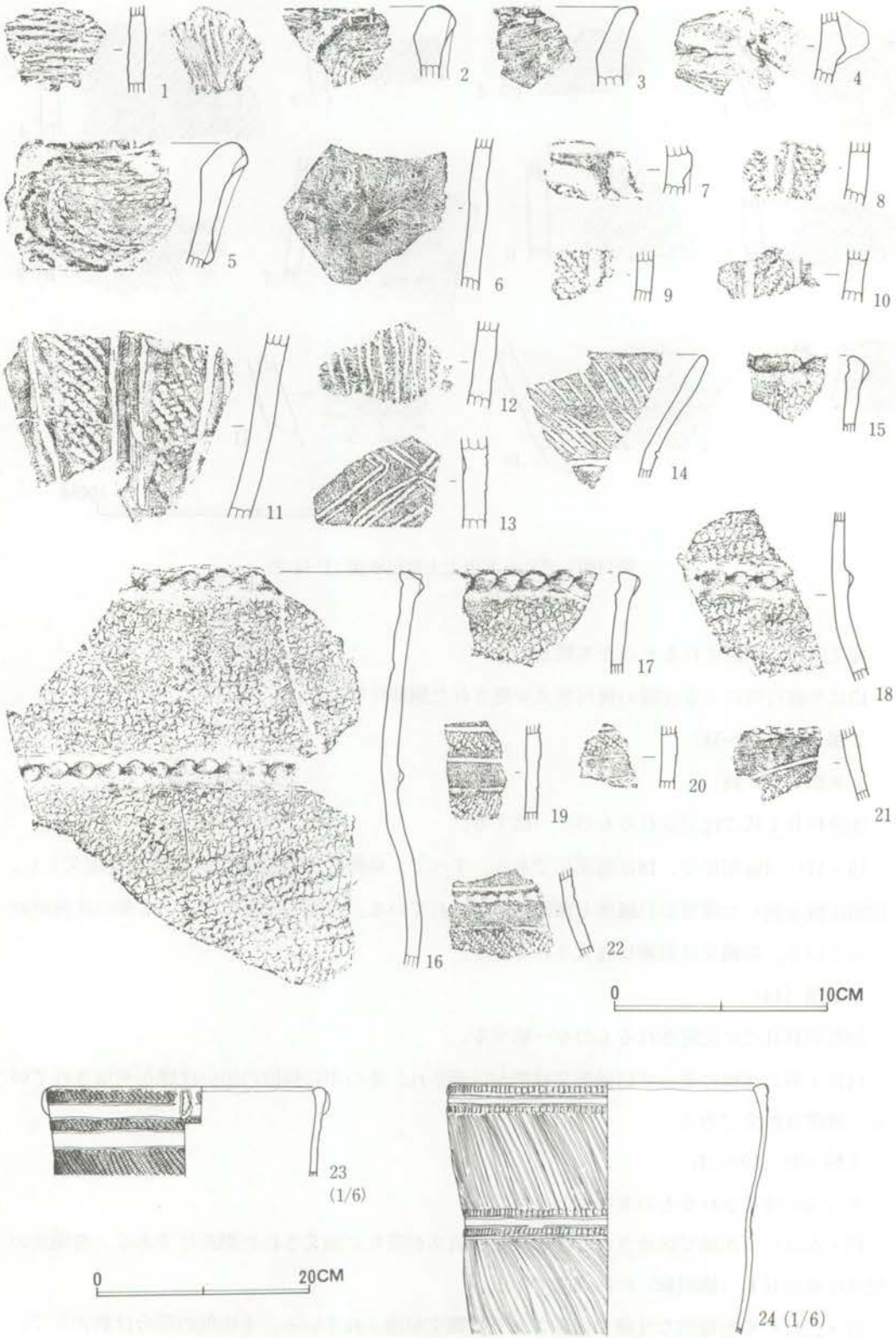
14は１条の沈線によって口縁部文様帯が区画され、その中に斜位の短い沈線が充填されている。頸部は無文である。

３類土器（19～24）

安行式に比定されるものを本類とした。

19・20は平行沈線で区画された帯縄文と磨消文が交互に施文された胴部片である。帯縄文の原体は単節ＲＬ（横回転）の斜縄文である。

21・22はやや曲線的な沈線で区画された帯縄文が施されている。その他の部分は磨消文で、１条の有節沈線文が見られる。ところで帯縄文の原体は単節ＲＬ（横回転）の斜縄文である。



第15図　グリッド出土土器拓影図 ②（1/3）・実測図（1/6）

23は平行沈線で区画された帯縄文と磨消文が交互に施された口縁部片である。帯縄文の原体は単節ＲＬ（横回転）である。口唇部は丸味をもち、胴部と比べてやや厚味がある。口唇に沿って短い隆帯が縦位に貼付している。

24は口唇部と頸部に平行沈線で区画された磨消文の上下に爪形文が沿っている。他はすべて右下りの条線文が施されている。口唇部は丸味をもち、胴部と比べて厚味がある。

すべて、安行Ｉ式に比定される。

弥生式土器（第15図）

本遺跡から出土した弥生土器は、ほとんどが弥生時代後期に属する。

１、３、５、６、11は附加条縄、２は結節文、４、９、10は斜縄文、７、８は羽状縄文が施されている。１だけ口縁部片で口唇が鋭角である。

Ｃ．古墳時代

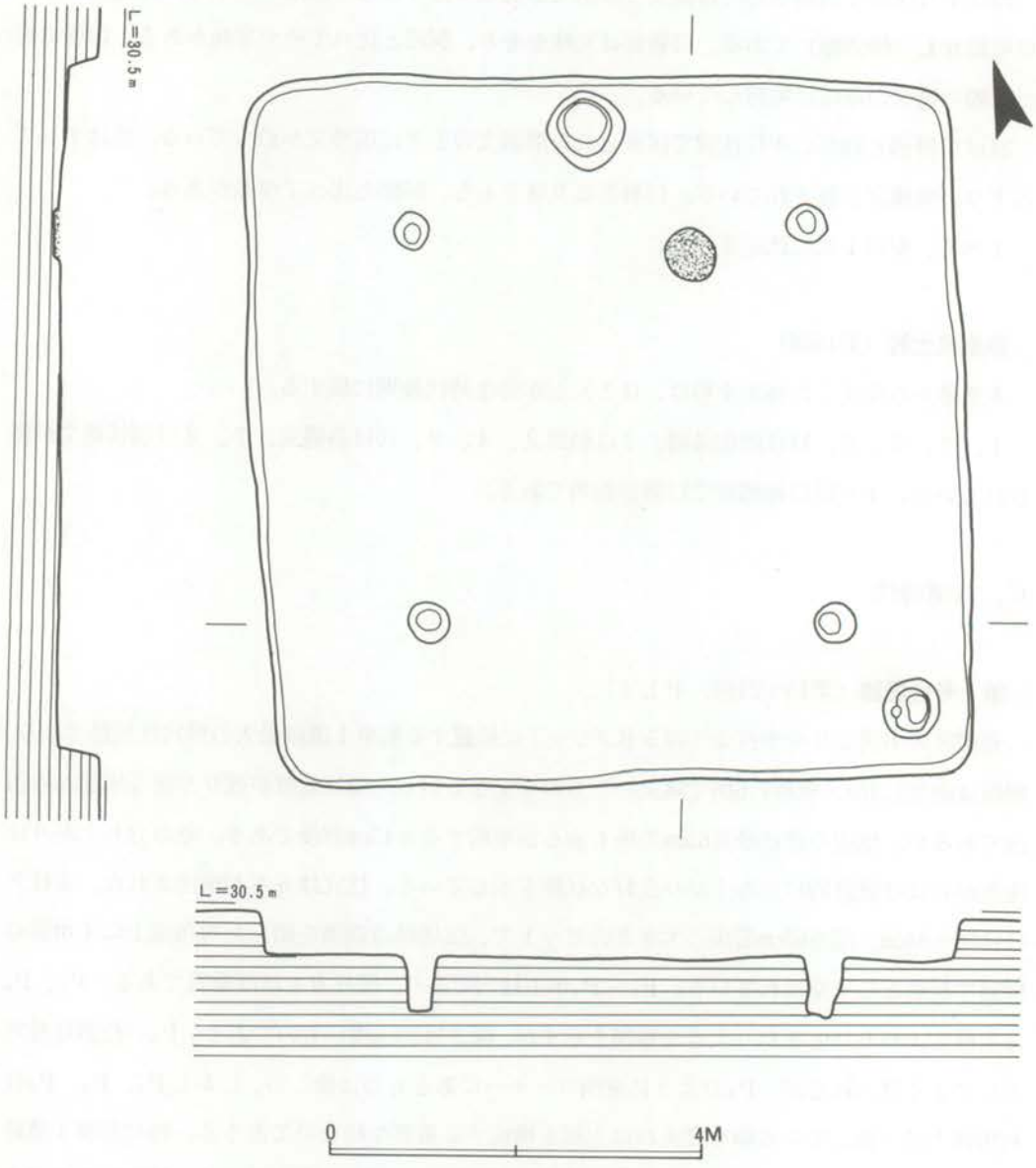
第１号住居跡（第15～21図、ＰＬ４）

発掘区の中央よりやや西よりの５Ｂグリッドに位置する前原Ｉ遺跡最大の竪穴住居跡である。規模は南北7.4m、東西7.6mで隅丸の正方形を呈している。壁は北壁が残りが悪く床面から24cmであるが、他辺の壁は最高65cmの所もあるが平均すると45cm前後である。壁の立ち上がりは床面からほぼ垂直的に立ち上がり良好な状態を示している。柱穴は６本が検出された。主柱穴は径36～44cm、深さ65cm前後の大きさのピットで、住居跡の四隅を結んだ対角線上に４m強の間隔で規則正しく穿たれている。P_1～P_4が主柱穴であり、掘り方もほぼ垂直である。P_5、P_6は主柱穴よりもひとまわり大きな規模を示すが、深さは20cm浅いものである。P_5の位置は柱穴としてよく見られるが、P_6のように東南コーナーにあるものは珍しい。しかしP_1、P_3、P_6は対角線上に一致している事を考えれば上屋を構成する重要な柱なのであろう。特に前原Ｉ遺跡においては東南コーナーに柱穴をもつ竪穴住居跡が他に２軒ある事を考えると特殊なものであると考える必要はないのかもしれない。床面はハードロームを10cm程掘り下げ、ハードローム面の凹凸を茶褐色土で埋めて踏み固めている。その範囲は主柱穴を結んだ内側がよく踏み固められているが外側に向かって軟弱になってくる。

炉は住居跡の北側に寄っており、P_2の西に位置している。規模は径60cmで深5.5cmで、良好に焼けている。

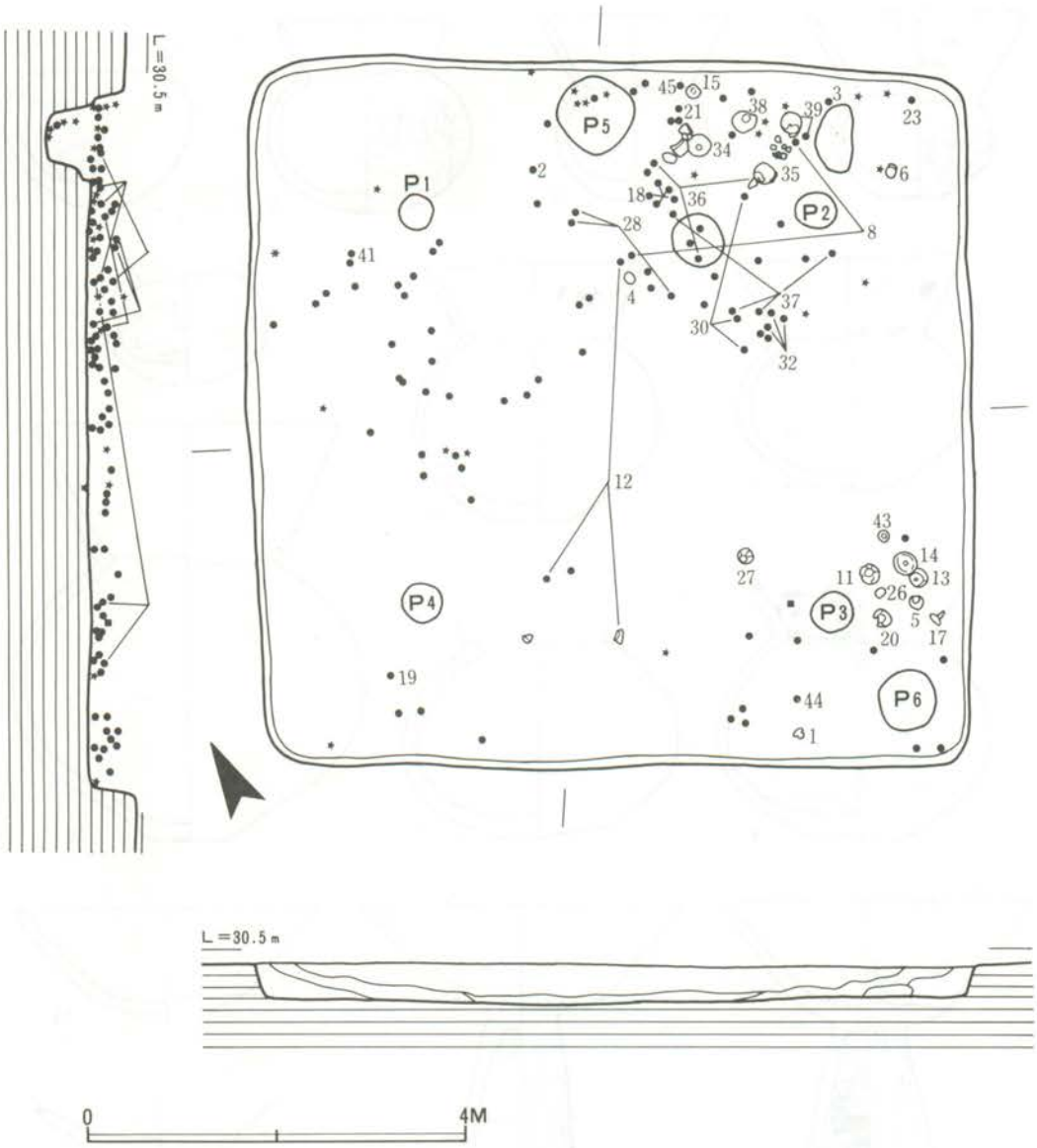
覆土は自然埋没の状態をよく示している。

遺物は土器、砥石、土玉、紡錘車が良好な状態で出土している。特に土器と土玉の数は多い。土器の出土状態は大きく分けると南東コーナー付近に集中する高杯と手捏土器の一群と炉周辺



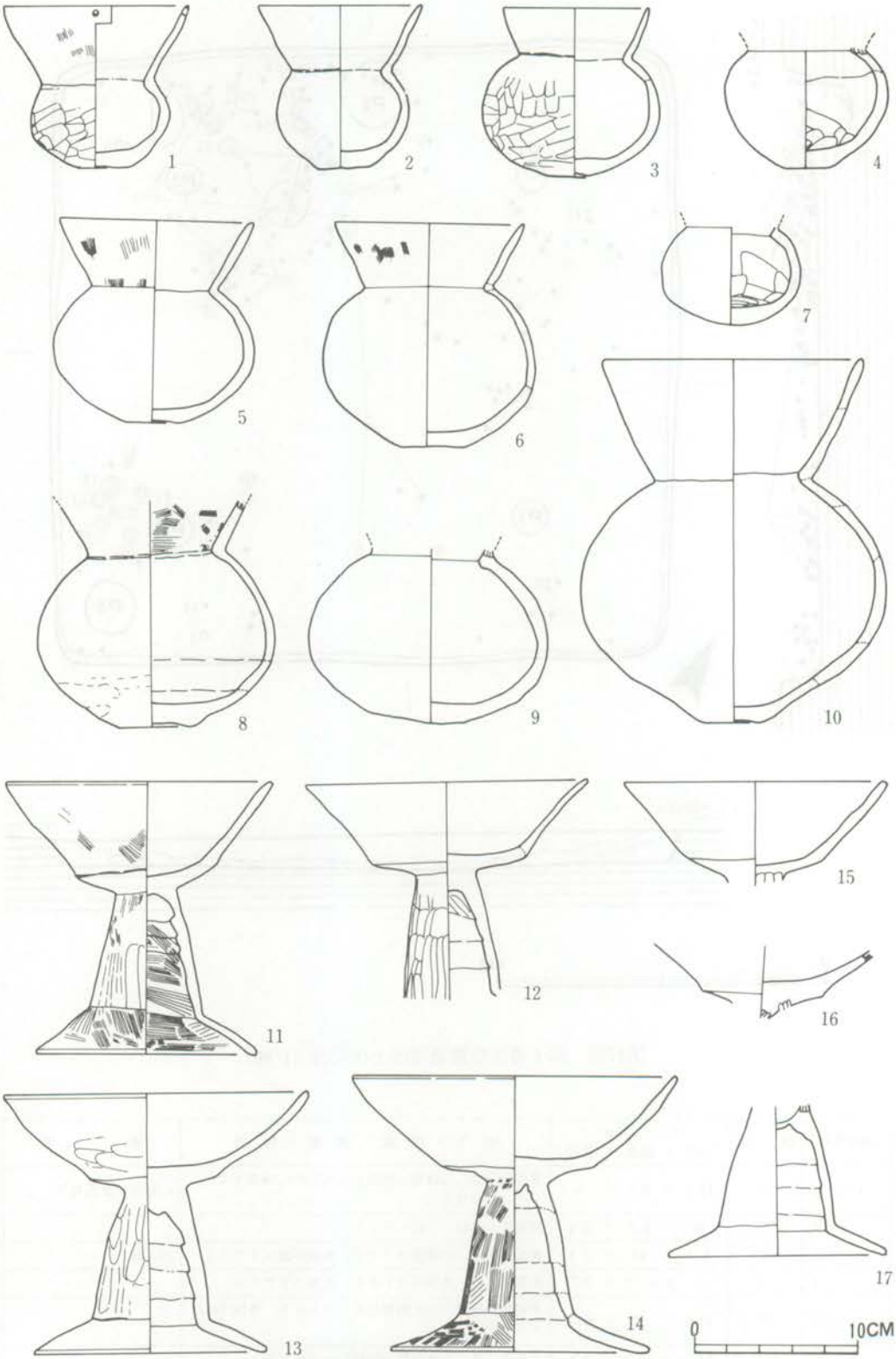
第16図　第１号住居跡実測図（1/40）

から北辺の壁に集中する坩と甕の一群の２ケ所になる。ほとんどの土器が完形に近い事も特長であり、当時の使用状況をよく示している好例である。ちなみに器種と数量は坩13、高杯13、甕８、小形甕１、甑２、壺１、手捏５である。他に45のような埴輪形の土製品の破片もあるが詳細は不明である。土玉は南東コーナーを除くところには散在してあるが、炉付近に多く集中しているのは興味深い。紡錘車も出土したが盗難のため、詳細は不明である。

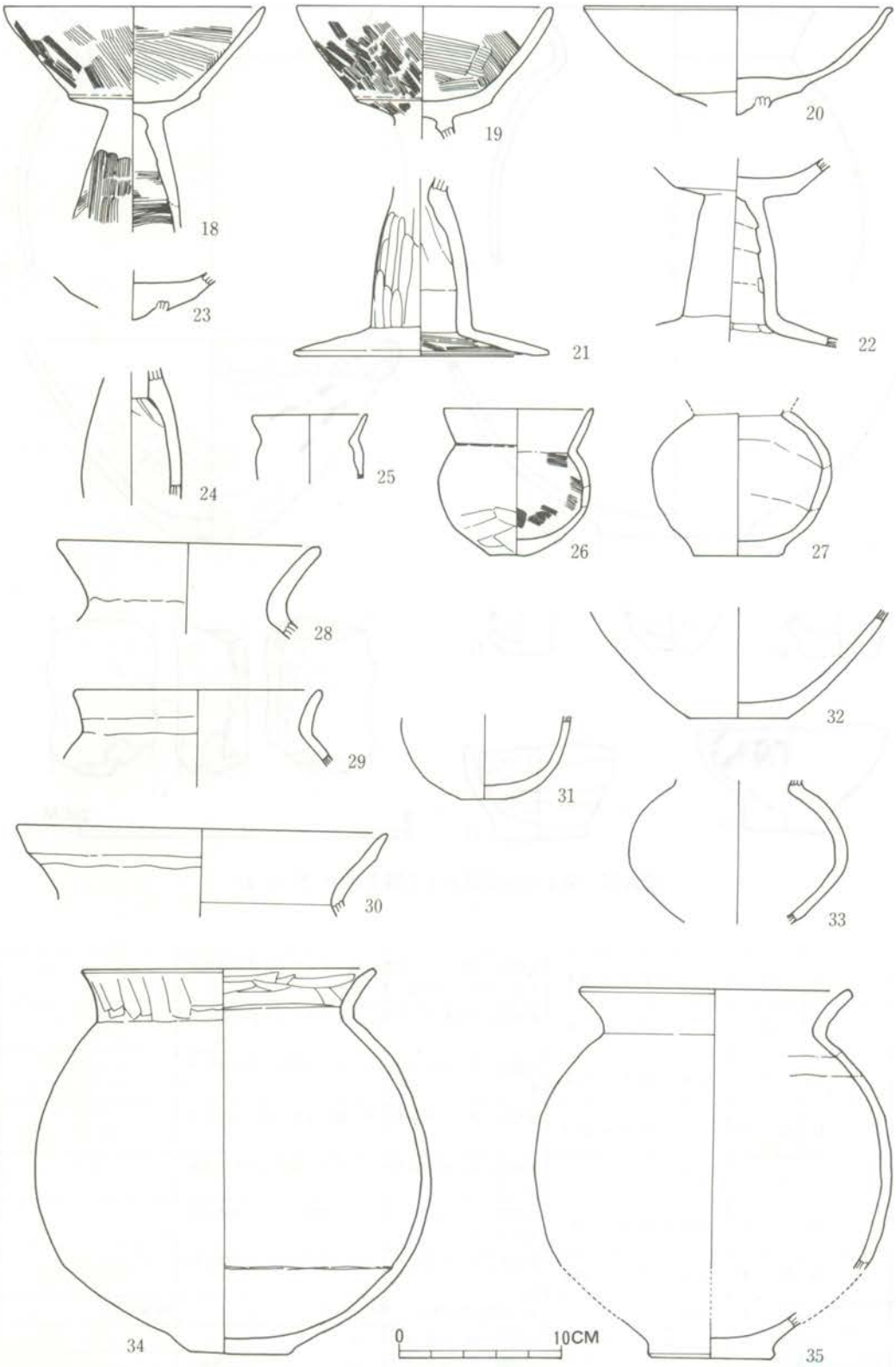


第17図　第1号住居跡遺物出土状況図（1/80）

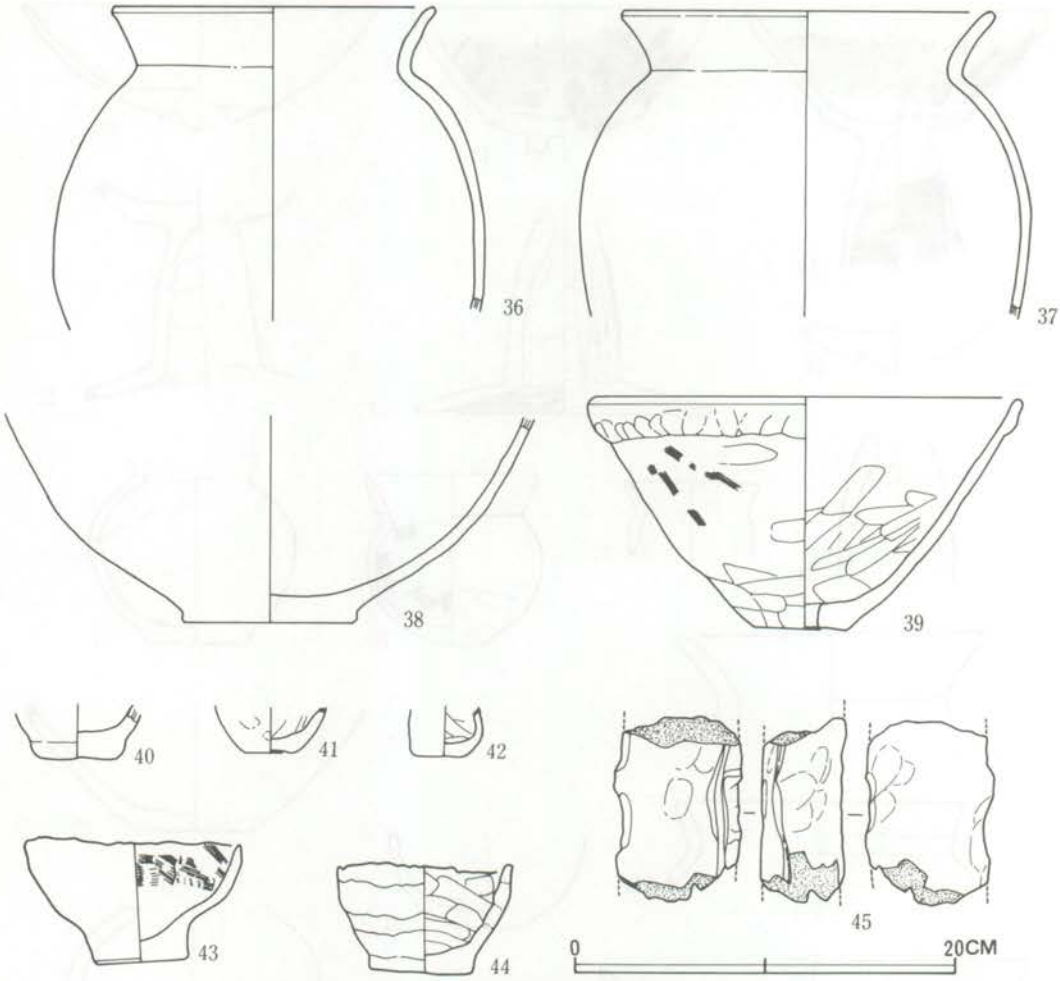
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1住－1	坩	11.2 × 9.6 × 3	黄褐色、良好、口縁部～外面をヘラミガキ、体部下半にヘラケズリが残る	口縁部に穿孔有り
－2	坩	10 × 9.7 × 3.4	黄褐色、良好、全面ヘラミガキ	
－3	坩	8.9 × 10 × 2.3	黄褐色、良、口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	凹み底
－4	坩	× (7) × 2.7	黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	
－5	坩	11.6 × 12 × 3.3	赤褐色、良好、ハケ調整の後ヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ	
－6	坩	11.5 × 13.3 × 3.8	赤褐色、良、ハケ調整の後軽いヘラミガキ	
－7	坩	× (5.9) ×	黄褐色、良好、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	



第18図　第１号住居跡出土土器実測図 ①（1/4）

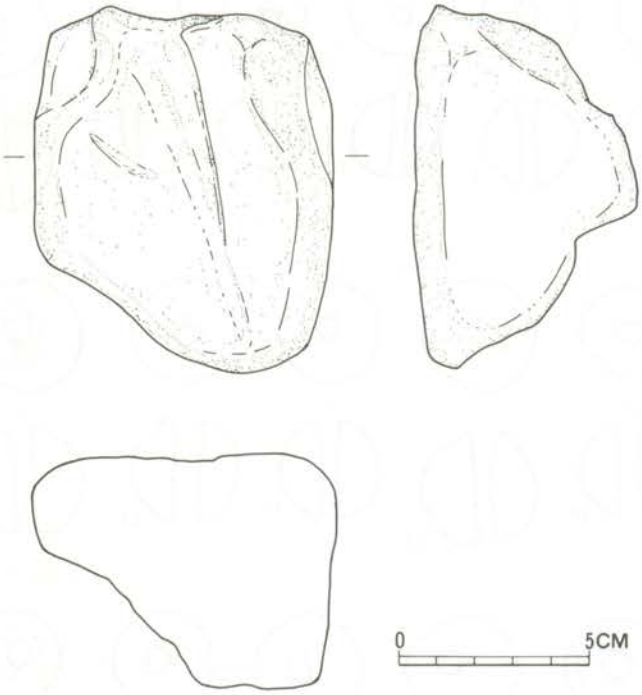


第19図　第１号住居跡出土土器実測図 ②（1/4）



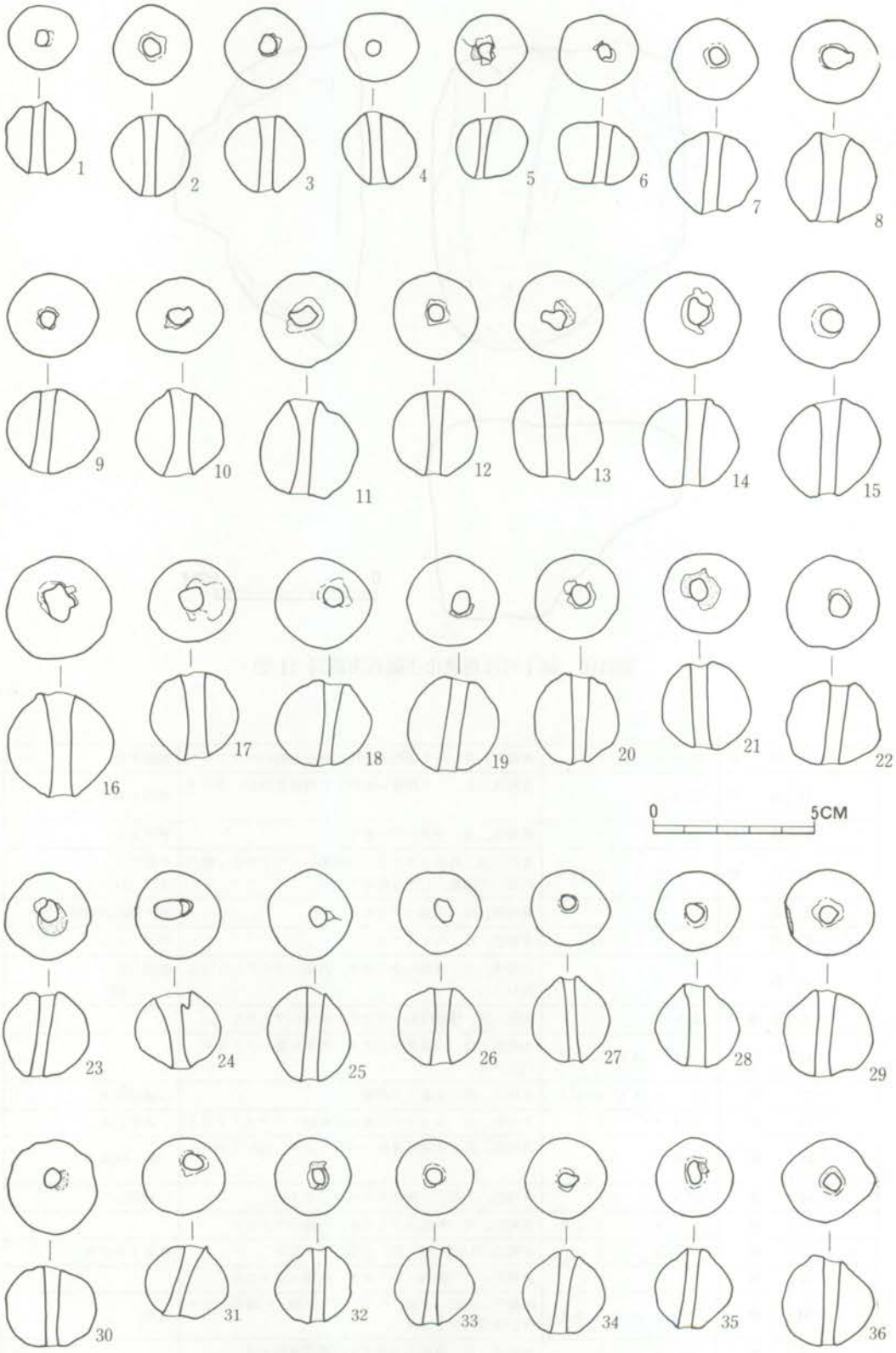
第20図　第1号住居跡出土土器実測図 ③ (1/4)

−8	坩	×(13.3)× 4.4	赤褐色、良好、ハケ調整の後ヘラミガキ、体部外面下半はヘラケズリの後ヘラミガキ	
−9	坩	×(10.4)× 5.8	黄褐色，赤色粒子、良好、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	
−10	坩	15.8 × 21.7 × 3.5	赤褐色、良、体部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	
−11	高　杯	16 × 16.3 × 13.3	黄褐色、良、ハケ調整の後、脚部外面を軽いヘラミガキ	
−12	高　杯	17.2 × ( ) ×	黄褐色、良、杯部全面ヘラミガキ、脚部はナデの後外面ヘラケズリ	
−13	高　杯	18.4 × 16.1 × 14	赤褐色、良、外面ヘラケズリの後軽いヘラミガキ、内面ヨコナデ	
−14	高　杯	19.8 × 17 × 15.8	赤褐色、良、杯部ヘラミガキ、脚部外面ハケ調整、内面はナデ	
−15	高　杯	15.8 × ×	黒色(内面暗赤褐色)、不良、全面ヘラミガキ	脚部欠失
−16	高　杯	× ×	赤褐色、良、全面ヘラミガキ	
−17	高　杯	× × 13.2	黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ、内面にコブ状突起有り	杯部欠失



第21図　第１号住居跡出土砥石実測図（1/2）

−18	高　杯	15.8 × ×	黄褐色、良、ハケ調整の後杯部外面を軽いヘラミガキ	裾部欠失
−19	高　杯	15.6 × ×	黄褐色、良、ハケ調整の後脚との接合部分をヘラケズリ	脚部欠失
−20	高　杯	18.5 × ×	黄褐色、良、全面ヘラミガキ	脚部欠失
−21	高　杯	× × 15.6	黒色、良、外面ヘラケズリの後軽いヘラミガキ、裾部内面ハケ調整、しぼり痕有り	杯部欠失 ホゾ穴有り
−22	高　杯	× ×	黄褐色、良、全面ヘラミガキ	杯・裾部の端部を欠失
−23	高　杯	× ×	赤褐色、良、ヘラミガキ	杯部のみ
−24	高　杯	× ×	赤褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、しぼり痕有り	脚部のみ ホゾ穴有り
−25	小型甕	6.8 × ×	黒色、良、体部内面ヘラナデの他はヘラミガキ	
−26	坩	9 × 8.8 × 2.2	赤褐色、良、口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ	
−27	坩	× (8.8) × 5.4	赤褐色、良、全面ナデ調整	口縁部欠失
−28	甕	15.8 × ×	黄褐色、良、ヨコナデの後外面を軽くヘラケズリする	口縁部のみ
−29	甕	14.8 × ×	黄褐色、良、体部外面軽いヘラミガキ、内面ヘラケズリ	口縁〜胴部上半
−30	甕	22.5 × ×	黄褐色、不良、口縁部下半ヘラミガキ	口縁部のみ
−31	坩	× × 2.8	黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	
−32	甕	× × 6	赤褐色(内面黒色)、良、全面ヘラミガキ	体部下半のみ
−33	坩	× ×	黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	
−34	甕	17.6 × 23.4 × 6.2	暗褐色、砂粒、不良、ヘラケズリの後、口縁部ヘラナデ、体部ヘラミガキ	完形
−35	甕	16 × ×	赤褐色、良、体部ヘラケズリ、底部外面ナデ	
−36	甕	15.7 × ×	黄褐色、良、体部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	底部欠失



第22図　第１号住居跡出土土玉実測図（1/2）

−37	甕	19.2 × ×	赤褐色(内面灰黒色)、良、体部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	底部欠失
−38	壺	× × 8.8	黒色(底部付近赤褐色)、良、体部内外ヘラミガキ底部外面ヘラケズリ	体部下半のみ
−39	甑	22.3 × 12 × 4.8	黄褐色、良、口縁部ユビオサエ、体部下半内外面ともヘラケズリ、単孔	完形
−40	手捏ミニチュア	× × 4	黄褐色、良、ヘラケズリの後ナデ調整	
−41	手捏ミニチュア	× × 2.5	黒色、良、ヘラケズリの後外面ヘラミガキ	
−42	手捏ミニチュア	× × 2.5	黄褐色、良、全面ナデ調整	
−43	手捏鉢形土器	11.2 × 7.7 × 4.6	黄褐色(内面黒色)、良、ハケ調整の後、外面ナデ、内面ヘラケズリ	完形
−44	手捏鉢形土器	9.2 × 5.6 × 5.5	黄褐色、良、外面ナデ、内面ヘラナデ	
−45	手捏土製品	× ×	黄褐色、良、ユビオサエ、ナデの併用	

第2号住居跡（第22〜26図、ＰＬ５−１）

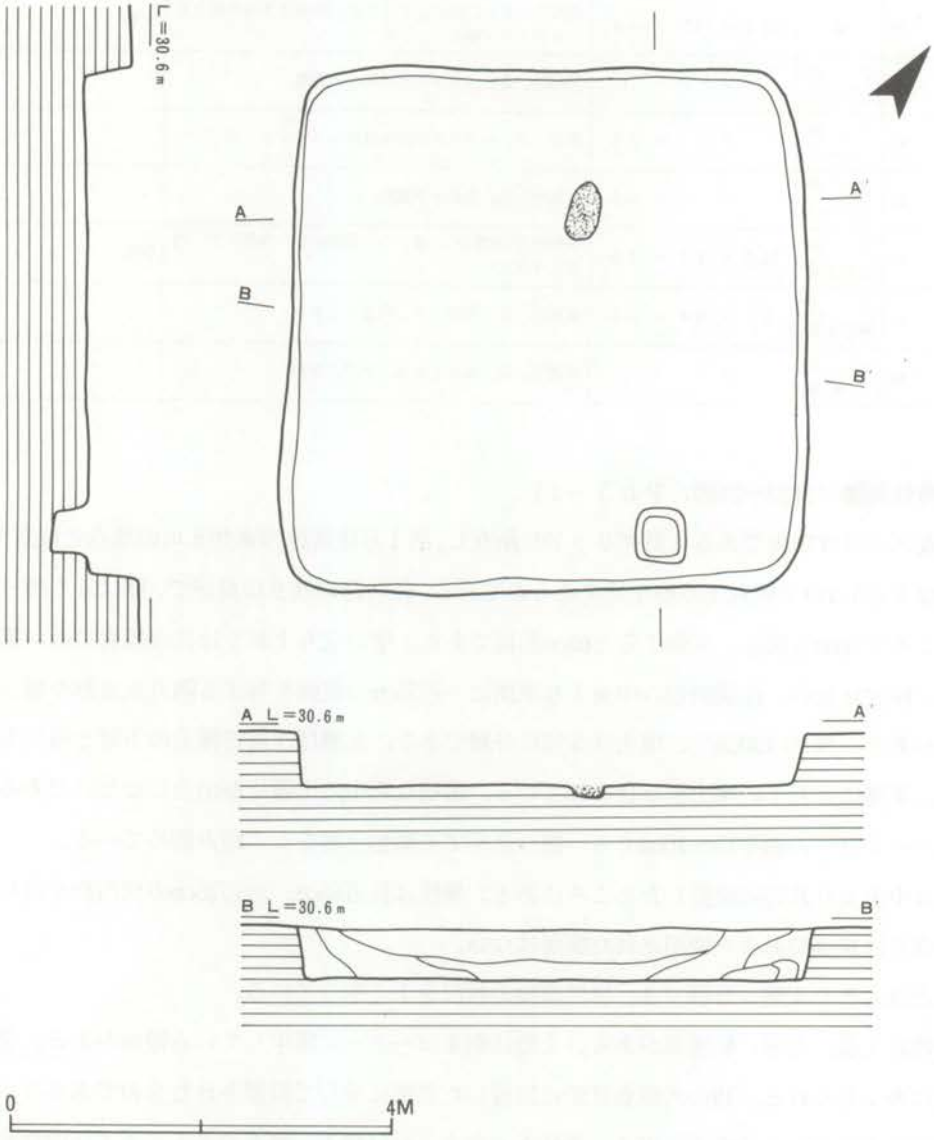
調査区のほぼ中央である４Ｂグリッドに所在し、第１号住居跡の東側８ｍの地点に位置する。規模は１辺5.4mで隅丸正方形を呈するものである。住居跡の残りは良好で、壁はよく残っているところで78cmを測る。平均すると65cm前後である。壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い感じである。柱穴はない。住居南辺の中央より東側に一辺55cmの規模を有する隅丸正方形を呈した貯蔵穴がある。深さは30cmで、埋土は３層に分層できる。上層は住居跡覆土の下層と同じものであり、下層には若干の焼土粒が含まれている。遺物は若干の土器片が出土しただけである。床面はハードローム面を15〜10cmぐらい掘り込んで茶褐色土層をよく踏み固めている。

炉は中央より北辺に位置したところにある。規模は長辺65cm、短辺35cmの楕円形を呈している。深さは10cmであまり使用された痕跡はない。

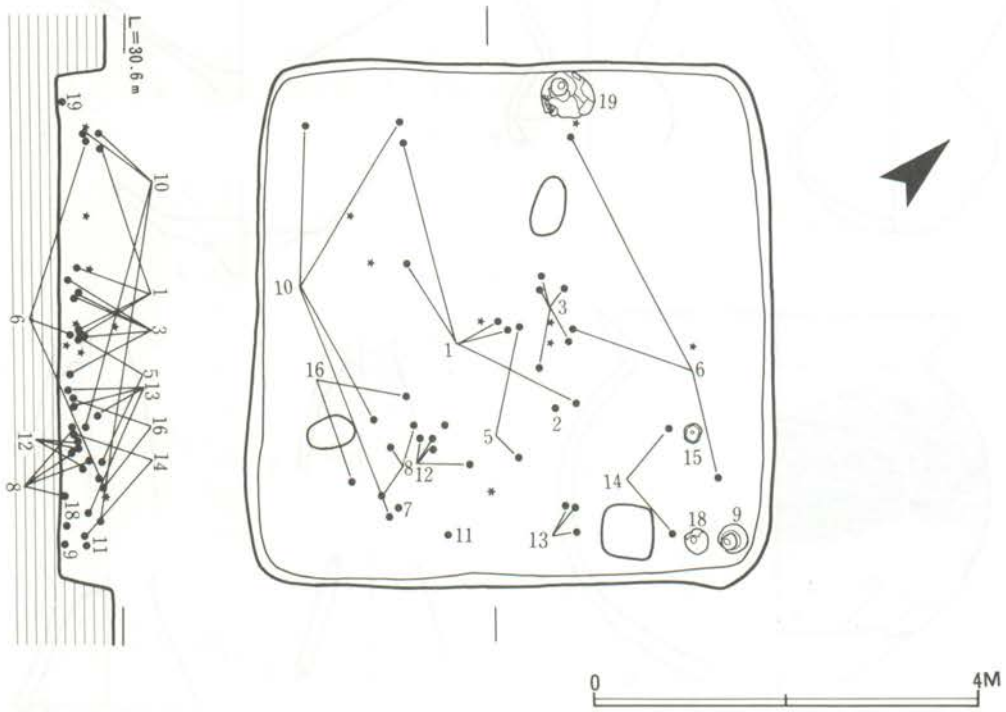
覆土は大きく４層に分層でき、自然埋没の状況をよく示している。

遺物は土器、土玉、紡錘車がある。土器は南東コーナーに集中している傾向がある。全体に南辺に多く見られる。19の大型壺は炉に近接した北壁に接して設置されたものであろう。器種と数量は次のとおりである。坩２、高杯５、壺３、台付甕１、甕８である。土玉は中央部にまとまっているようである。紡錘車は盗難にあい不明である。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
２住−１	坩	12.2 × 7.2 × 4	赤褐色、不良、外面ヘラミガキ、内面ナデ	
−２	坩	7.2 × ×	黄褐色、良	
−３	高杯	16 × ×	赤褐色、良、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	脚部欠失
−４	高杯	× ×	黄褐色、良、内外面ともヘラミガキ、コブ状突起有り	杯部のみ
−５	高杯	× ×	黄褐色、良、外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面にしぼり痕	脚部のみ

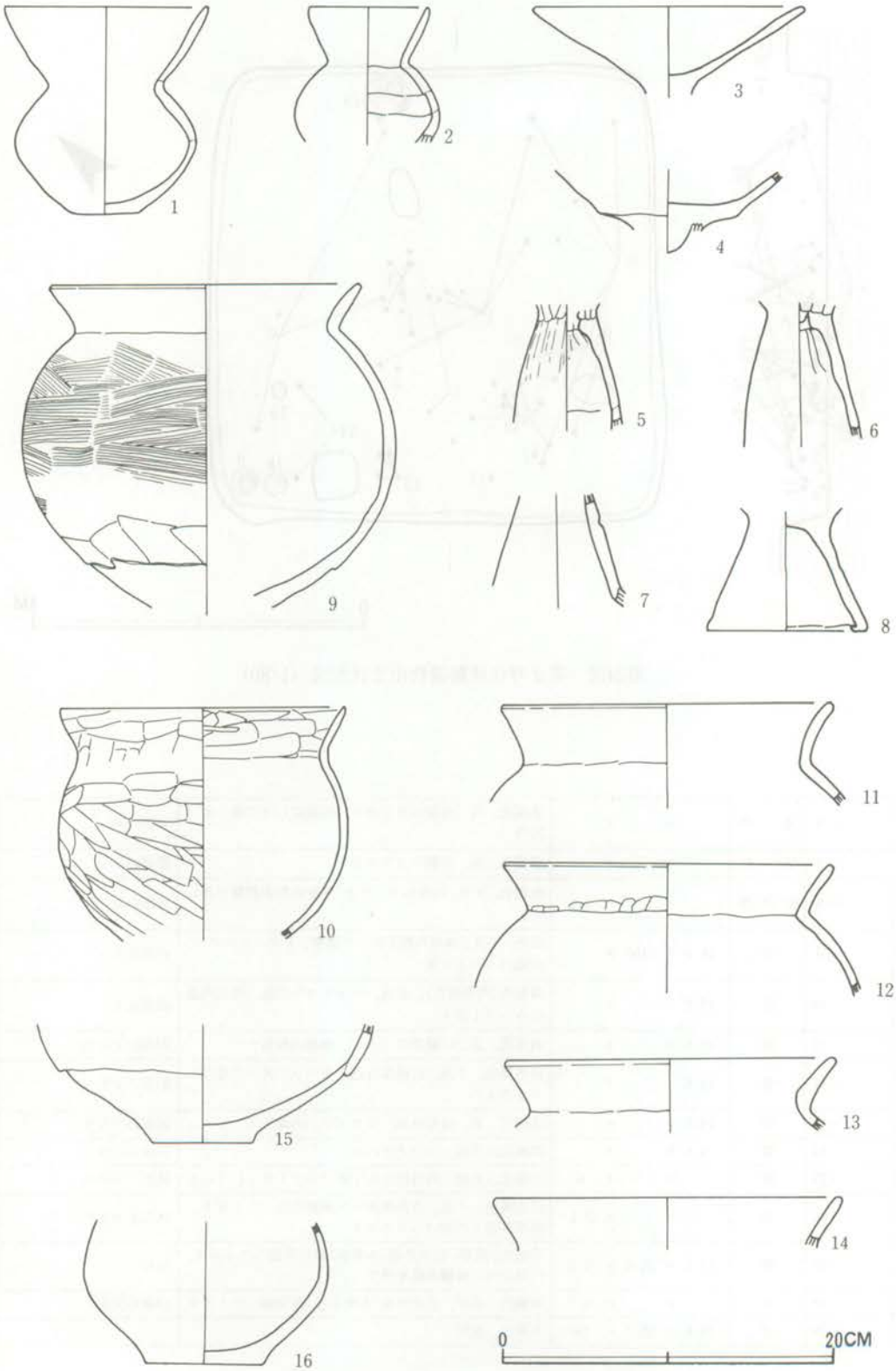


第23図　第2号住居跡実測図（1/80）

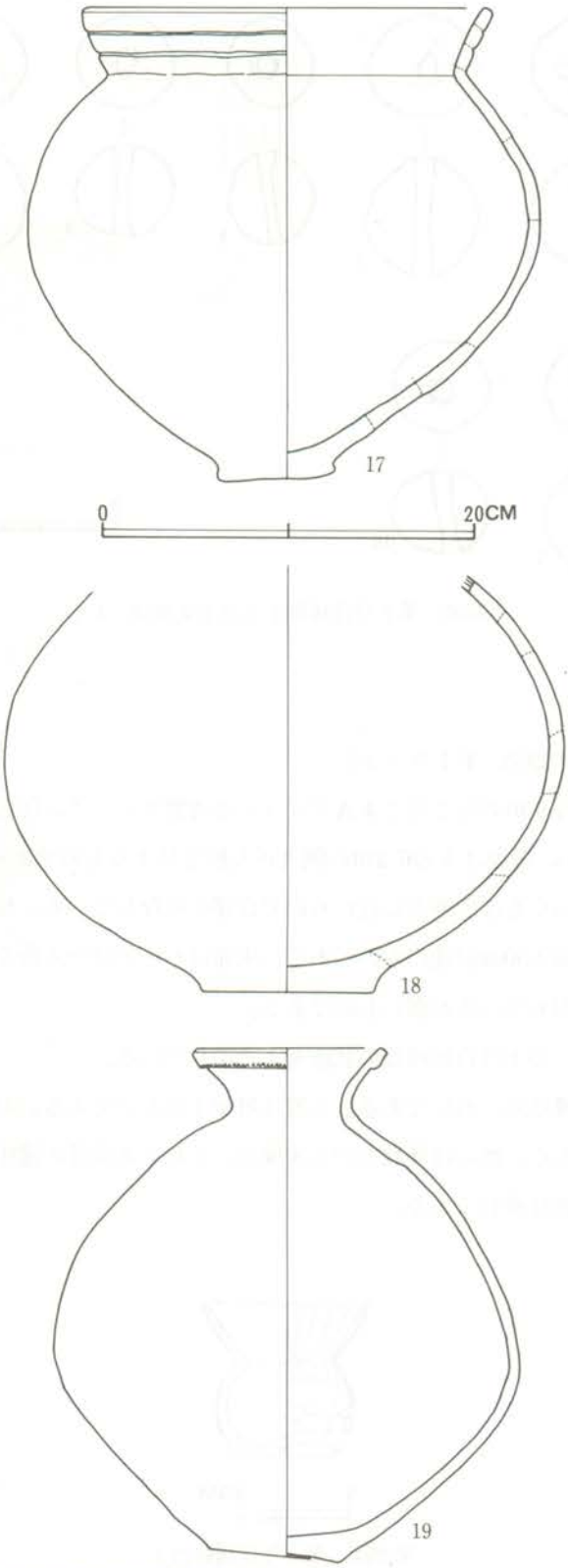


第24図　第2号住居跡遺物出土状況図（1/80）

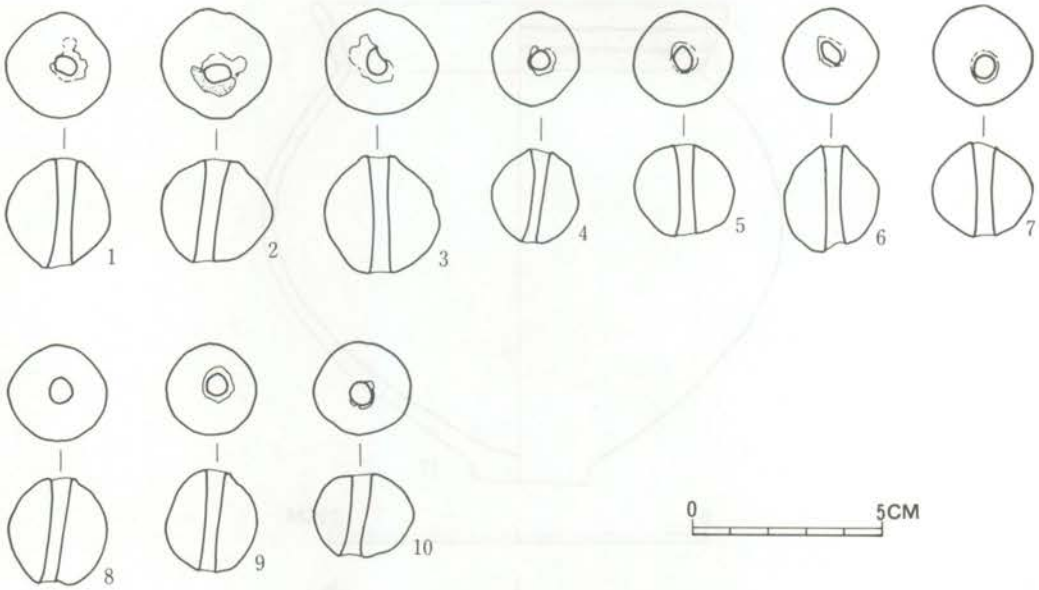
−6	高　杯	×　×	赤褐色、良、外面ヘラミガキ、内面にしぼり痕、ホゾ接合	脚部のみ
−7	高　杯	×　×	黄褐色、良、外面ヘラケズリ	脚部のみ
−8	台付甕	×　× 9.5	橙褐色、不良、内面ヘラミガキ(外面の器面剥離が著しい)	台部のみ
−9	甕	18.6 × (19) ×	黒色、不良、体部外面上半ハケ調整、下半ヘラケズリ、内面はヘラミガキ	底部欠失
−10	甕	17.2 ×　×	黄褐色(内面黒色)、不良、ヘラケズリの後、体部内面のみヘラミガキ	底部欠失
−11	甕	19.8 ×　×	黄褐色、良、口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	胴部以下欠失
−12	甕	19.8 ×　×	淡黄褐色、不良、口縁部外面下半ヘラケズリの他はヘラミガキ	胴部下半欠失
−13	甕	19.7 ×　×	赤褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ	胴部以下欠失
−14	甕	20.8 ×　×	暗褐色、不良、ヨコナデのみ	口縁部のみ
−15	壺	×　× 6	赤褐色、良好、内外面とも丁寧にヘラミガキしている	体部下半のみ
−16	甕	×　× 7.1	暗赤褐色、不良、体部外面ハケ調整の後ヘラミガキ、底部外面・内面はヘラミガキ	体部上半欠失
−17	甕	21.2 × 24.6 × 6.3	赤褐色、良好、底部外面(木葉痕)以外全面ヘラミガキ、口縁部外に輪積み痕を残す	完形
−18	壺	×　× 9.2	黄褐色、良好、底部外面(木葉痕)以外全面ヘラミガキ	口縁部欠失
−19	壺	19.8 × 55.2 × 14	茶褐色、良好	



第25図　第2号住居跡出土土器実測図 ①（1/4）



第26図　第２号住居跡出土土器実測図 ②（1/4・19は1/8）



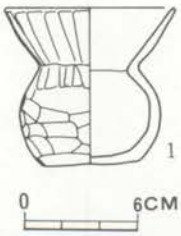
第27図　第２号住居跡出土土玉実測図（1/2）

第３号住居跡（第27～29図、ＰＬ５－２）

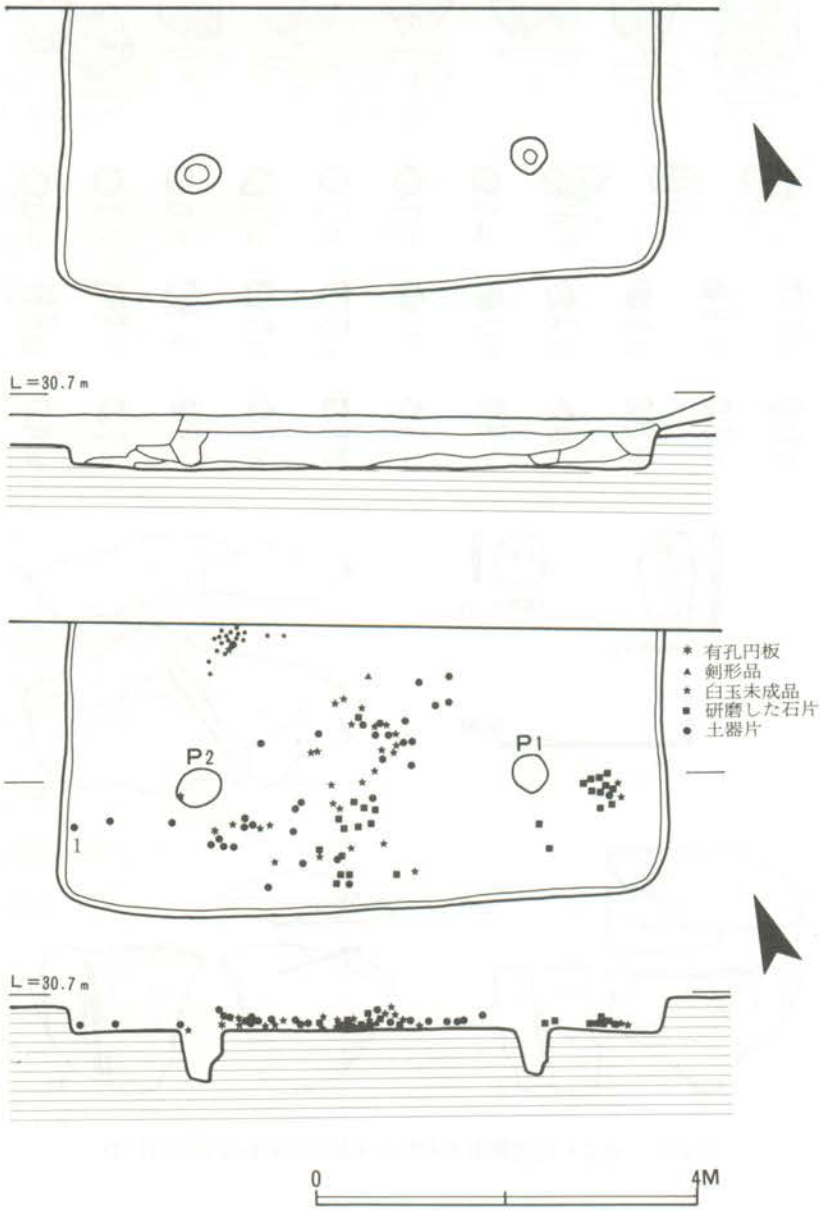
第１号住居跡の北方９ｍのところで４Ａグリッドに位置する。この住居跡は北半が調査区域外のため完掘できない。規模は１辺6.2ｍの隅丸正方形を呈するものであろう。壁は35cmぐらい残っており、立ち上がりもほぼ垂直に近いもので良好に残存している。柱穴は２本が検出された。径は40cm内外、深さ50cm前後のものである。床面はハードローム面を若干掘り込み、その中に黄褐色土で踏み固めているが弱いものである。

炉は検出されない。覆土は自然埋没の状態をよく示している。

遺物は土器、石製模造品、石片である。土器は坩が１点だけである。石製品には有孔円板、剣形模造品が各１点ある。他には多数の臼玉未成品、それに未成品の途中の研磨した石片、チップが多数ある。石質は滑石である。

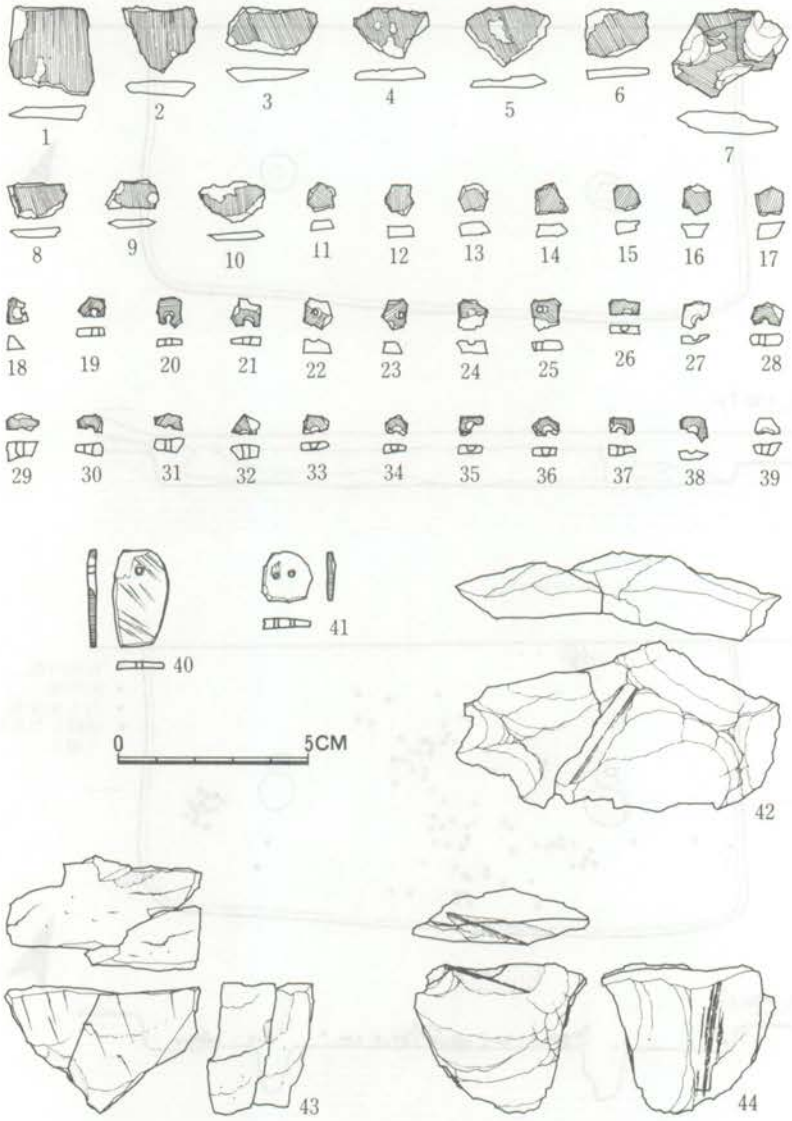


第29図　第３号住居跡出土
土器実測図（1/4）



第28図　第３号住居跡実測図及び遺物出土状況図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
3住－1	坩	8.8 × 8.4 × 5	黄褐色、良、全面ヘラケズリ	完形



第30図　第３号住居跡出土玉類未成品及び原石実測図（1/2）

第４号住居跡（第30～34図、ＰＬ６－１）

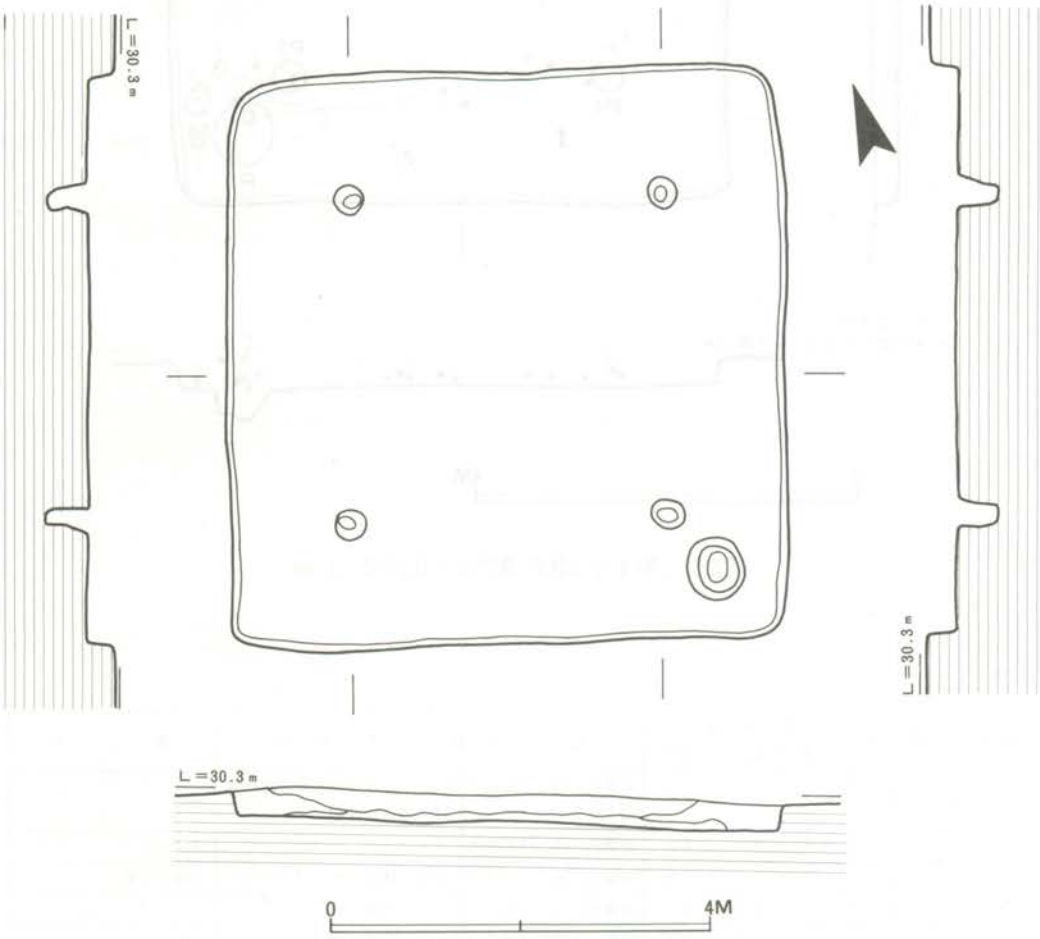
調査区の西側５Ａグリッドに位置し、第１号住居跡の北西９ｍの地点に所在する。規模は１辺5.9mで隅丸正方形を呈するものである。壁は30cm前後残り、立ち上がりはほぼ垂直である。柱穴は５本検出された。P_1～P_4の４本が主柱穴で径32cm内外、深さ40cm前後である。P_5は南東コーナーにあり、規模は70×60cm、深さ30cmである。第１号住居跡にもある南東コーナーの柱穴と同じ構造を示すものであろう。本住居跡においてもP_1、P_3、P_5は住居跡の対角線上において一列をなしている。床面はハードローム面まで掘り下げ、黄褐色土を入れて踏み固めて

いるが弱いものである。

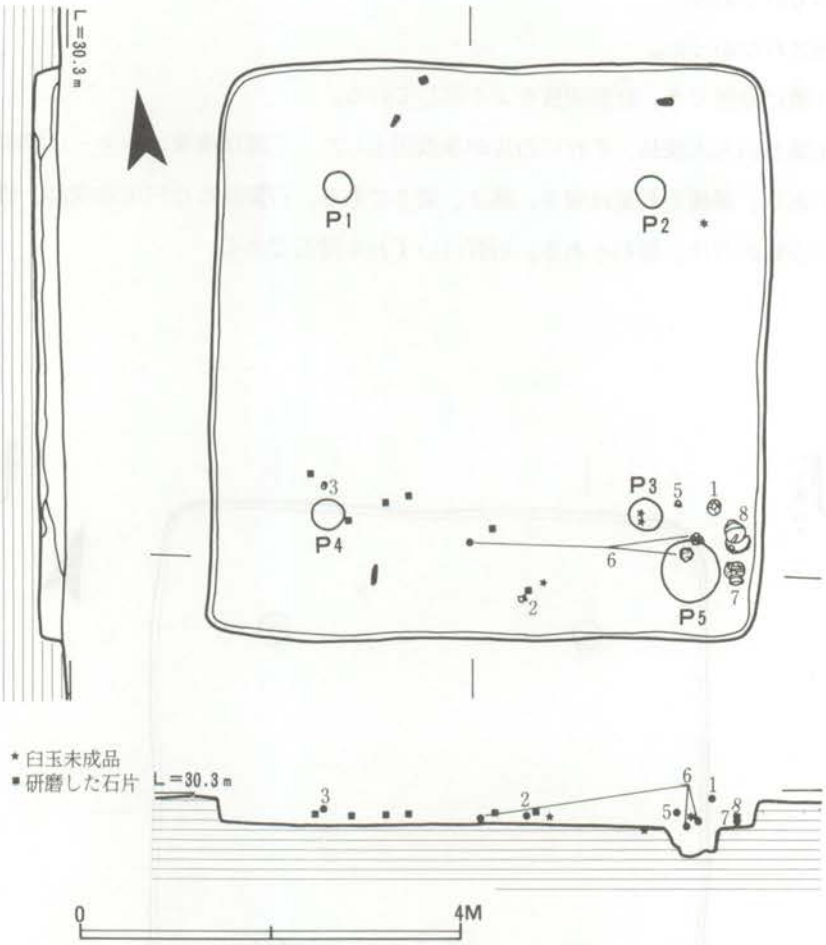
炉は検出されなかった。

覆土は３層に分層でき、自然埋没をよく示している。

遺物は土器と臼玉未成品、それに石片が多数出土した。土器は南東コーナーに集中しているのが特徴である。器種と数量は坩３、鉢２、甕３である。石製品には臼玉未成品、研磨した石片、それに多数の石片、原石もある。石質はいずれも滑石である。

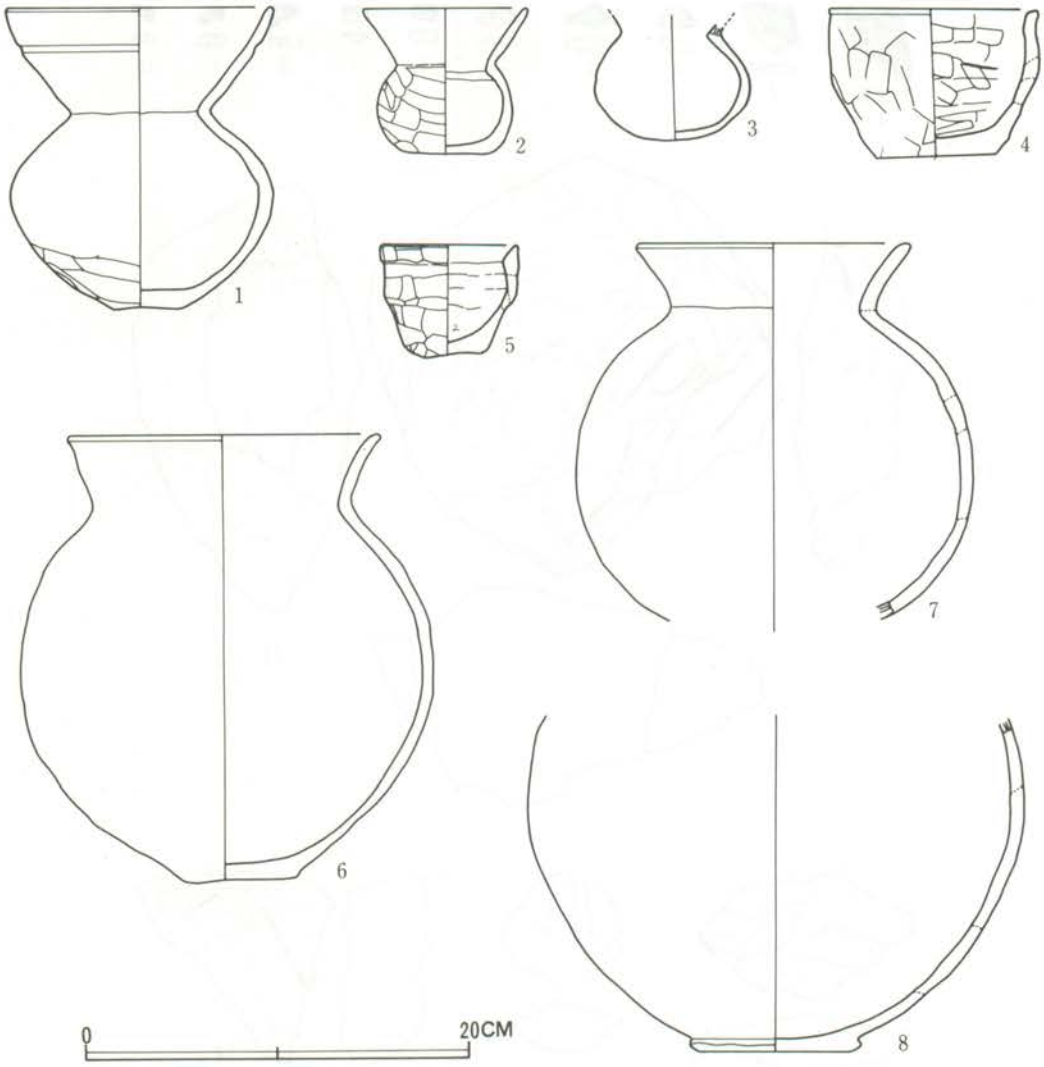


第31図　第４号住居跡実測図（1/80）

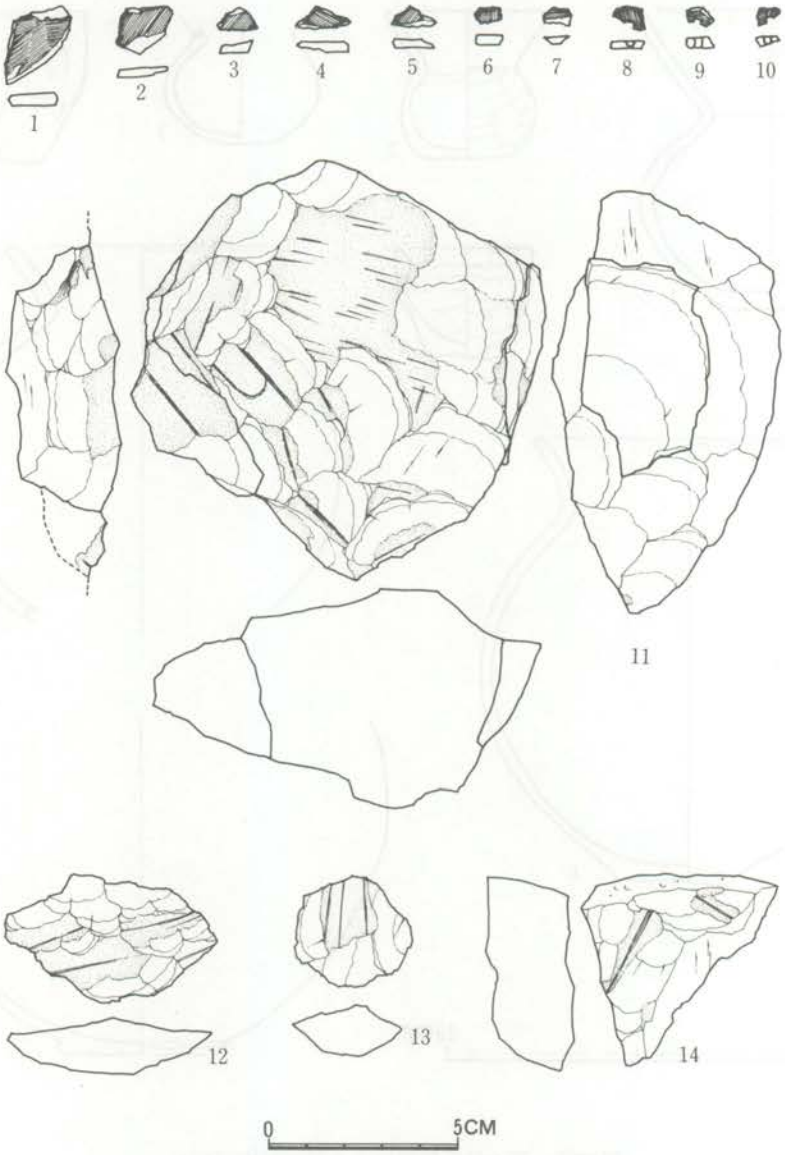


第32図　第4号住居跡遺物出土状況図（1/80）

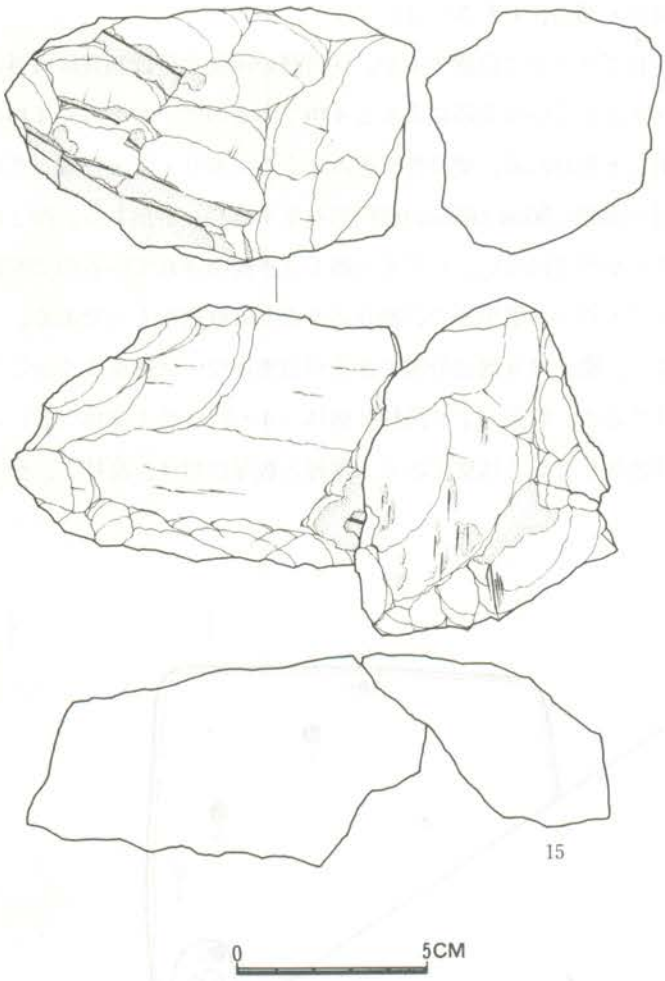
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
4住－1	坩	13.9 × 15.3 × 3.6	赤褐色、良、口縁部下半以下ヘラケズリの後、体部外面上半をヘラミガキ、口縁部外面に沈線	完形
－2	坩	8.7 × 8.5 × 4.3	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ	ほぼ完形
－3	坩	× × 3.6	黄褐色、良、ヘラケズリの後、体部外面ヘラミガキ	口縁部欠失
－4	鉢	10.7 × 7.75 × 6.2	黄褐色、良、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	
－5	鉢	7 × 5.8 × 4.1	黒色、不良、外面ヘラケズリ、内面ナデ	完形
－6	甕	16 × 22.8 × 5.8	赤褐色、良、体部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	
－7	甕	14 × ×	黄褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後、口縁部外面ヘラナデ	底部欠失
－8	甕	× × 8	赤褐色、良、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ	口縁部欠失



第33図　第４号住居跡出土土器実測図（1/4）



第34図　第４号住居跡出土玉類未成品及び原石実測図 ①（1/2）



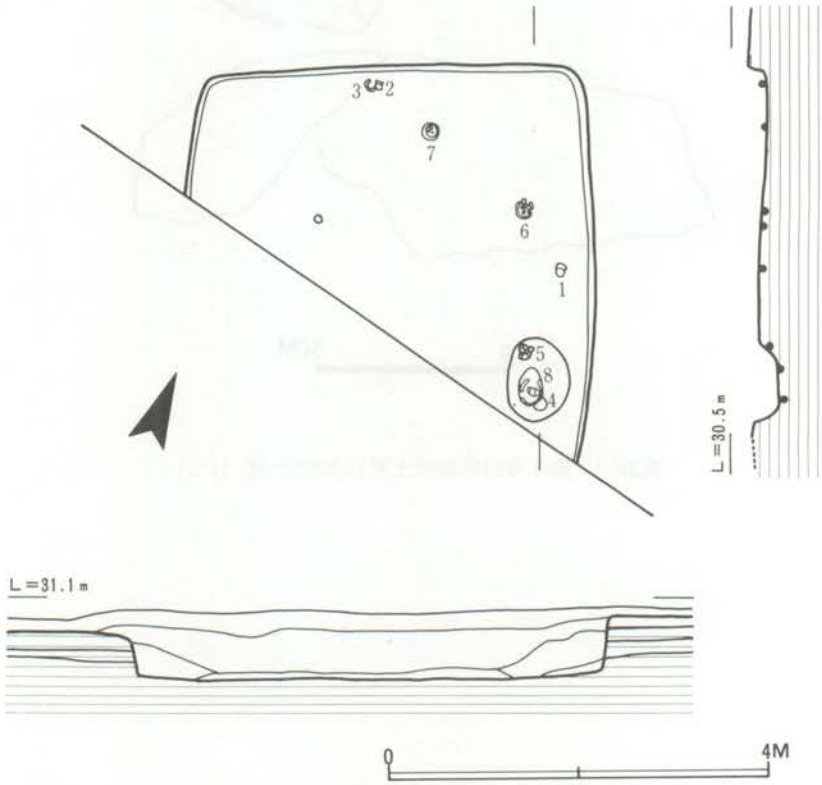
第35図　第４号住居跡出土原石実測図 ②（1/2）

第５号住居跡（第35・36図、ＰＬ５－３）

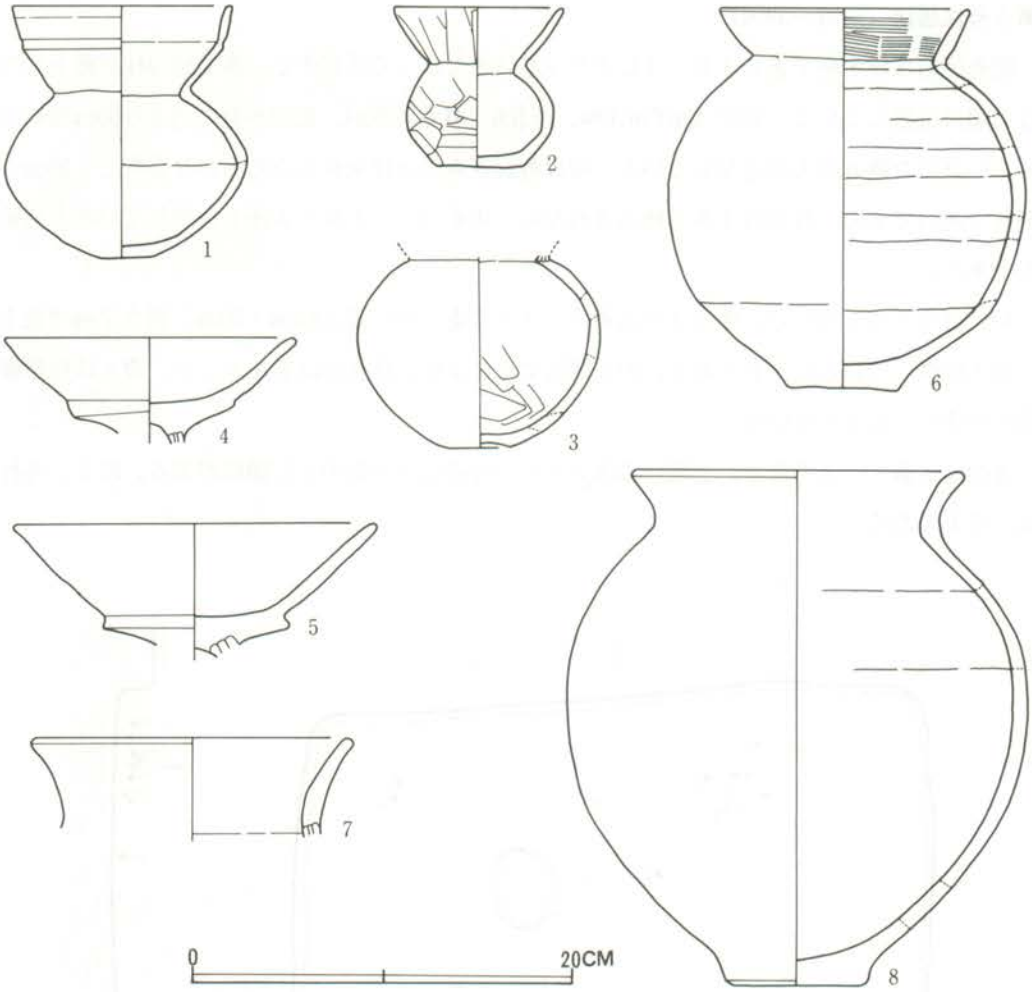
調査区の西端６Ｂグリッドに位置するが、住居跡の南側半分は調査区域外のため未調査である。規模ははっきりとしている北辺によると４ｍであるので、おそらく４ｍ四方の隅丸正方形を呈するものであると思われる。壁は外反ぎみに立ち上がり、20cm程残っている。柱穴は検出されないが、東辺の南側に90cm×65cmの楕円形を呈するピットがある。深さは25cm程で覆土中に若干の焼土を含むが炉ではない。むしろ土器も３点検出されているので貯蔵穴の一種と考えられる。床面はソフトローム層中までの掘り込みのため軟弱なものである。

炉は検出されない。覆土は６層に分層できるが自然埋没の状態をよく示している。

遺物は土器だけである。貯蔵穴より高杯２個体（４・５）、甕１個体（８）の３個体が集中して出土した以外は散在している状態である。器種と数量は坩３、高杯２、甕３である。



第36図　第５号住居跡実測図（1/80）



第37図　第5号住居跡出土土器実測図（1/4）

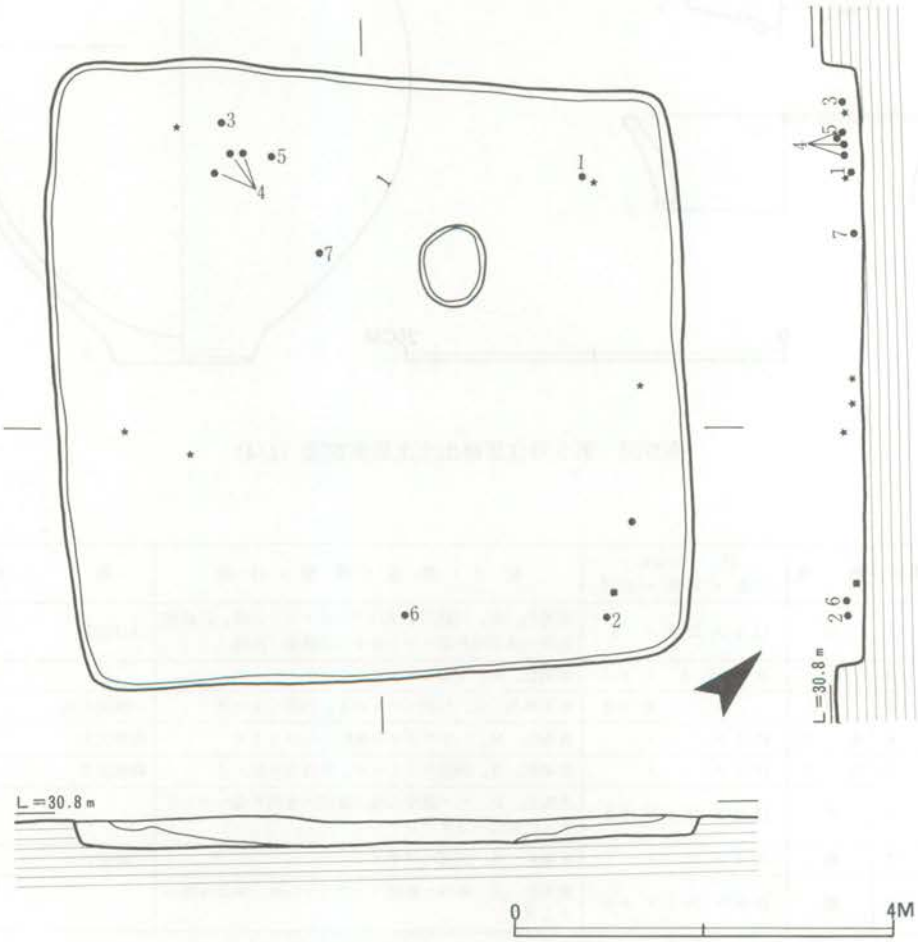
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
5住－1	坩	11.4 × 12.8 × 3	黄褐色、良、口縁部下半以下ヘラケズリの後、口縁部外面、体部内外面ヘラミガキ、口縁部に沈線	ほぼ完形
－2	坩	8.9 × 8 × 4.7	黄褐色、良、全面ヘラケズリ	
－3	坩	× × 3.2	暗黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	口縁部欠失
－4	高　杯	15.2 × ×	黄褐色、良、ヘラケズリの後軽いヘラミガキ	脚部欠失
－5	高　杯	18.9 × ×	黄褐色、良、内面ヘラミガキ、杯底部外面ナデ	脚部欠失
－6	甕	12.9 × 19.4 × 5.8	赤褐色、良、ハケ調整の後口縁部～体部外面ヘラミガキ、内面はヘラケズリ	
－7	甕	16.4 × ×	黄褐色、良、内面ヘラケズリ	口縁部のみ
－8	甕	16.8 × 26.4 × 6.6	黄褐色、良、体部～底部ヘラケズリの後、体部外面ヘラミガキ	

第６号住居跡（第37～39図）

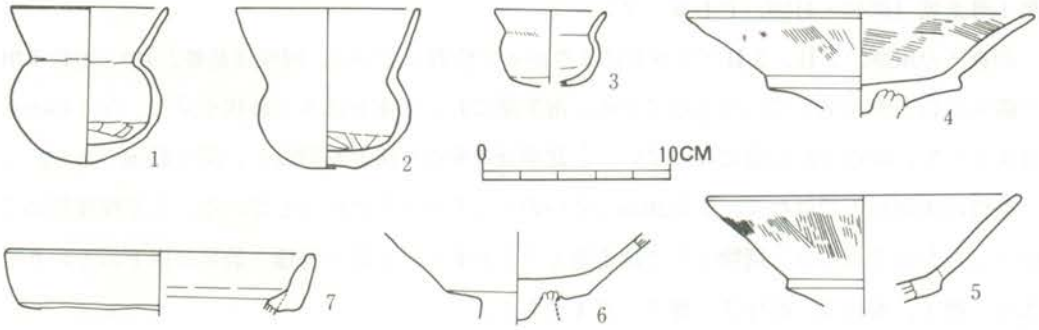
調査区のほぼ中央である４Ｂ、４Ｃグリッドにまたがって所在する。本遺跡の住居跡としては東端に位置している。規模は東西6.6m、南北6.2mであるが、東辺が他の辺より50cm短いため、いびつな隅丸正方形を呈している。壁は外反ぎみにほぼ垂直に立ち上がり平均して30cmの残りぐあいである。柱穴は１本も検出されない。床面はソフトローム面を使用しているため軟弱である。

炉ははっきりしないが、中央より北東コーナーに寄った位置に80cm×70cm、深さ７cmで焼土が若干堆積しているピットがある。炉と認定するには焼け具合がほとんどない。覆土は自然埋没の状態をよく示している。

遺物は土器と土玉である。土器は北西コーナー付近にやや集中する傾向がある。坩１、高杯３、壺１である。

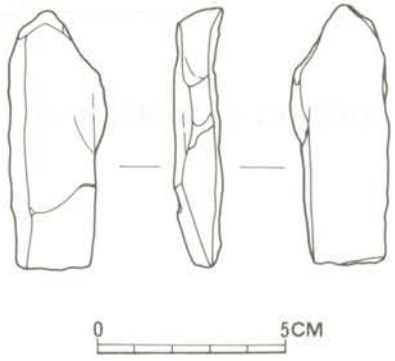


第38図　第６号住居跡実測図（1/80）



第39図　第6号住居跡出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
6住－1	坩	8.2 × 8.05 ×	黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、丸底	ほぼ完形
－2	坩	9.6 × 8.3 × 2.5	橙褐色、良、ヘラケズリの後口縁部～体部外面ヘラミガキ	
－3	坩	5.5 × × 3.6	黄褐色、良好、外面ハケ調整の後ヘラミガキ、内面ナデ	
－4	高　杯	18 × ×	黄褐色、良、ハケ調整の後ヘラミガキ、コブ状突起有り	脚部欠失
－5	高　杯	16 × ×	黄褐色、良、ハケ調整の後ヘラミガキ	脚部欠失
－6	高　杯	× ×	黄褐色、良、ヘラケズリの後ヘラミガキ、コブ状突起有り	脚部欠失
－7	壺	15.8 × ×	黄褐色、良、口縁接合部外面ヘラケズリ、複合口縁	口縁部のみ

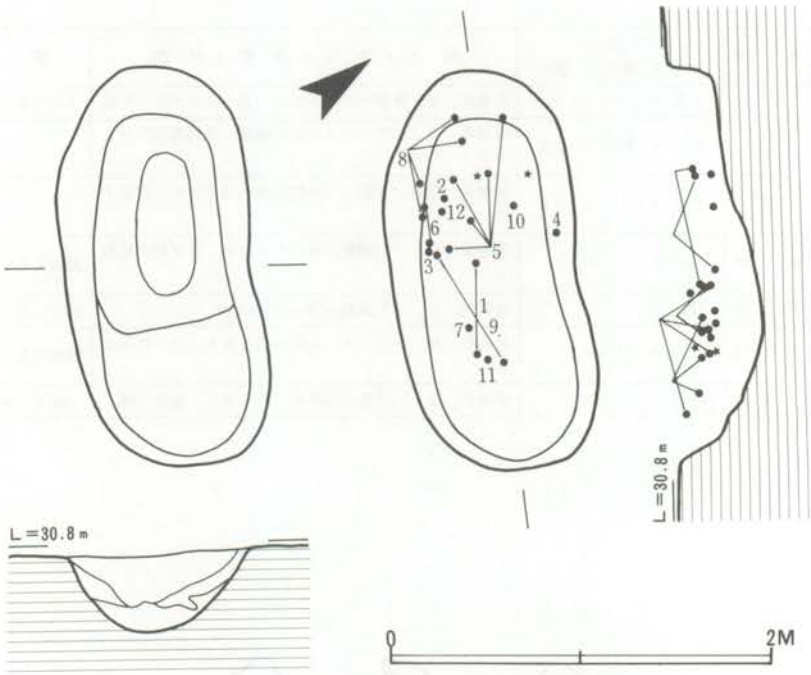


第40図　第6号住居跡出土砥石実測図（1/2）

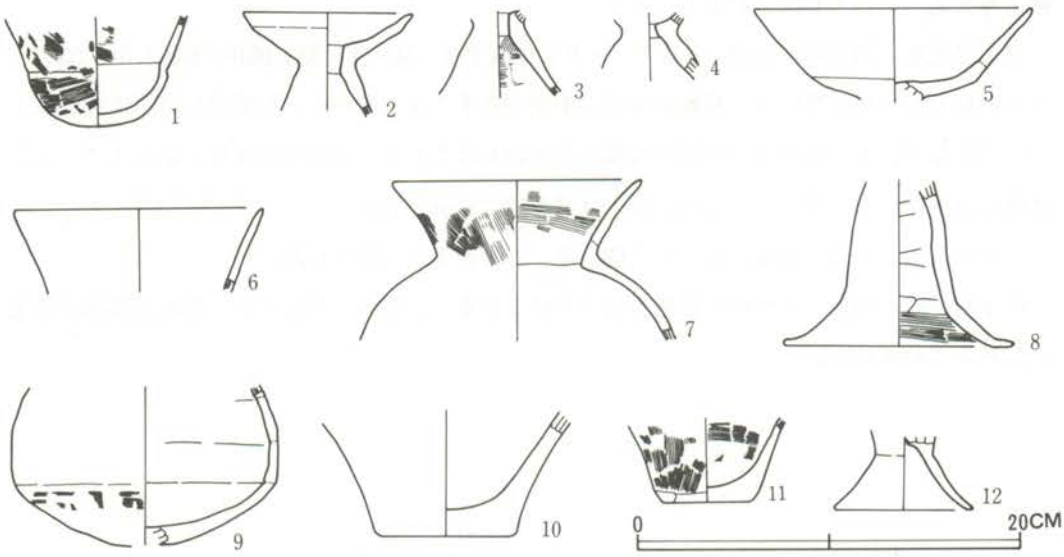
第１号土坑（第40・41図、ＰＬ６－２）

調査区の東側、２Ｂ、３Ｂグリッドにまたがって位置している。規模は長軸2.1m、短軸１ｍで隅丸の長方形を呈している土坑である。南半部において床面はスリ鉢状を呈し、深さ45cmを最深として、ゆるやかに壁になっていく。北半分は平らな床面を形成し、深さ25cmである。

遺物は床面からではなく、上面20cmぐらいのところに水平に出土している。ある程度埋めて使用したものであろう。遺物としては土器と土玉がある。土器の器種と数量は以下のとおりである。坩１、器台３、高杯３、甕３、壺４である。



第41図　第１号土坑実測図（1/40）



第42図　第1号土坑出土土器実測図（1/4）

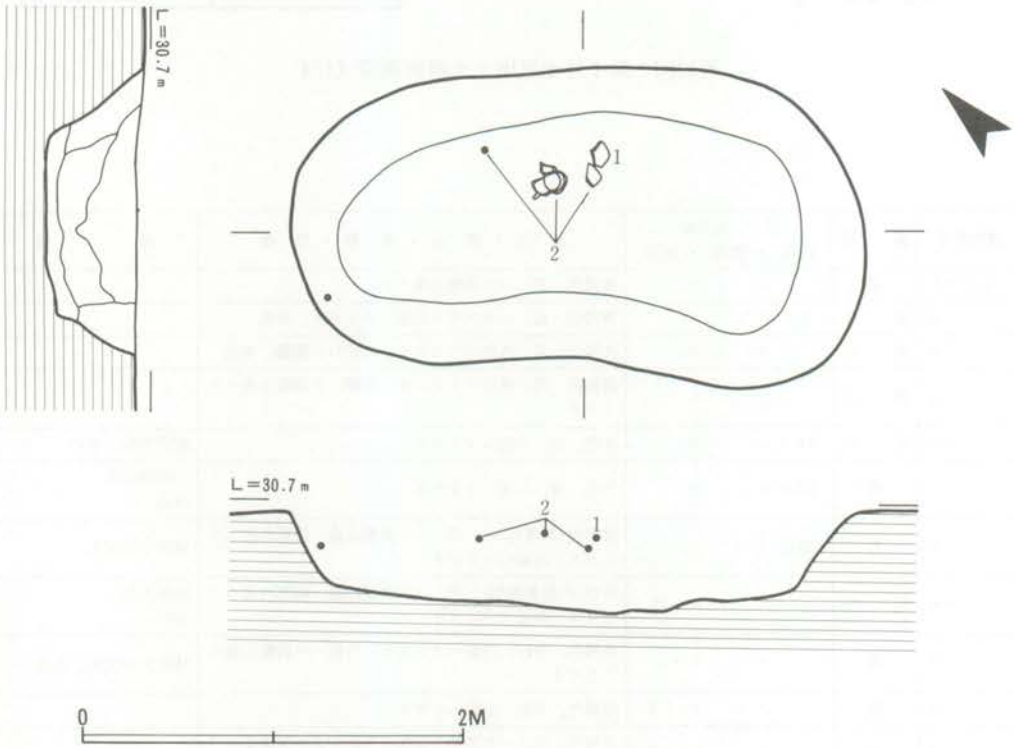
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1土－1	坩	×　×	黄褐色、良、ハケ調整の後ナデ	
－2	器　台	8.9 ×　×	黄褐色、良、ヘラケズリの後ヘラミガキ、単孔	
－3	器　台	×　×	赤褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ハケ調整、単孔	
－4	器　台	×　×	黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ハケ調整の後ヘラミガキ	
－5	高　杯	14.4 ×　×	赤色、良、全面ヘラミガキ	脚部欠失、赤彩
－6	壺	13.0 ×　×	赤色、良、全面ヘラミガキ	口縁部のみ 赤彩
－7	壺	13.0 ×　×	黄褐色(黒斑有り)、良、ハケ調整の後、体部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	体部下半欠失
－8	高　杯	×　× 12	赤色(内面黄褐色)、良、ハケ調整の後、脚部内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキ	杯部欠失 赤彩
－9	壺	×　×	赤褐色、良好、内面ヘラケズリ、外面ハケ調整の後ヘラミガキ	体部上半欠失、赤彩
－10	甕	×　× 7.4	暗褐色、不良、全面ヘラケズリ	
－11	甕	×　× 4.5	黄褐色、良、ハケ調整の後底部外面および周縁をヘラケズリ	
－12	高　杯	×　× 7.1	黄褐色、良、ヨコナデのみ	脚部のみ

第２号土坑（第42・43図、ＰＬ６－３）

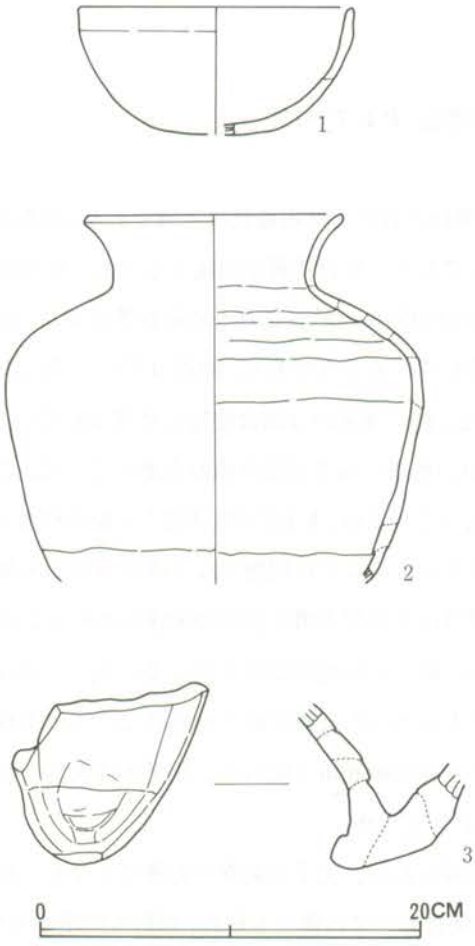
第１号土坑の西20mの地点、３Ｂグリッドに位置する。規模は長軸3.05m、短軸1.5mであり、隅丸の長方形を呈している。長軸の東側が中央で若干くぼんでいる。形態的には第１号土坑と同じであるが、本土坑の方は一回り規模の大きいものである。床面は第１号土坑のようにスリ鉢状は呈さないが、平らではない。深さは最深部で55cmである。

遺物は上面より10～20cmのところで椀、壺、支脚の３点が出土した。

第１号土坑と同様、どういう性格を示す土坑であるのか理解に苦しむが、祭祀に関係する土坑と考えておきたい。



第43図　第２号土坑実測図（1/20）



第44図　第２号土坑出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
２土－１	椀	14.2 × 6.5 ×	赤褐色、良、全面ヘラミガキ	
－２	壺	13.2 × ×	黒色(内面暗黄褐色)、不良、体部外面ナデ、内面ヘラケズリ	
－３	支　脚	× ×	黄褐色、良、外面ヘラケズリおよびヘラミガキ、内面輪積み痕を残す	

Ｄ．飛鳥時代

竜角寺108号墳（第45～52図、ＰＬ７～13）

〔立地〕

Ｋ108号墳は竜角寺古墳群においては新発見の古墳である。竜角寺古墳群の東側は方墳が５基（本墳も入れて）集中しており、その特異な地域として古くから注目されていた。その中心は岩屋古墳であり、その北側約250mの地点にみそ岩屋古墳があり、分布の点からすると大きくこの２つのグループを形成しているようである。前者のグループにはＫ100号墳、後者のグループはＫ107号墳と本墳である。特に後者の３墳は接近して営まれている。本墳より西へ50mの地点にＫ107号墳、南西へ60mの地点にみそ岩屋古墳が立地している。ここで興味深いのは本墳とみそ岩屋古墳とは主軸が同一であるが、Ｋ107号墳は違う主軸方位をとっている。この主軸方位は岩屋古墳と同一のものである。ここでは問題となるのは分布と主軸方位は混在していることである。いずれにせよ本墳はみそ岩屋古墳と密接な関係にあることは否定できない。

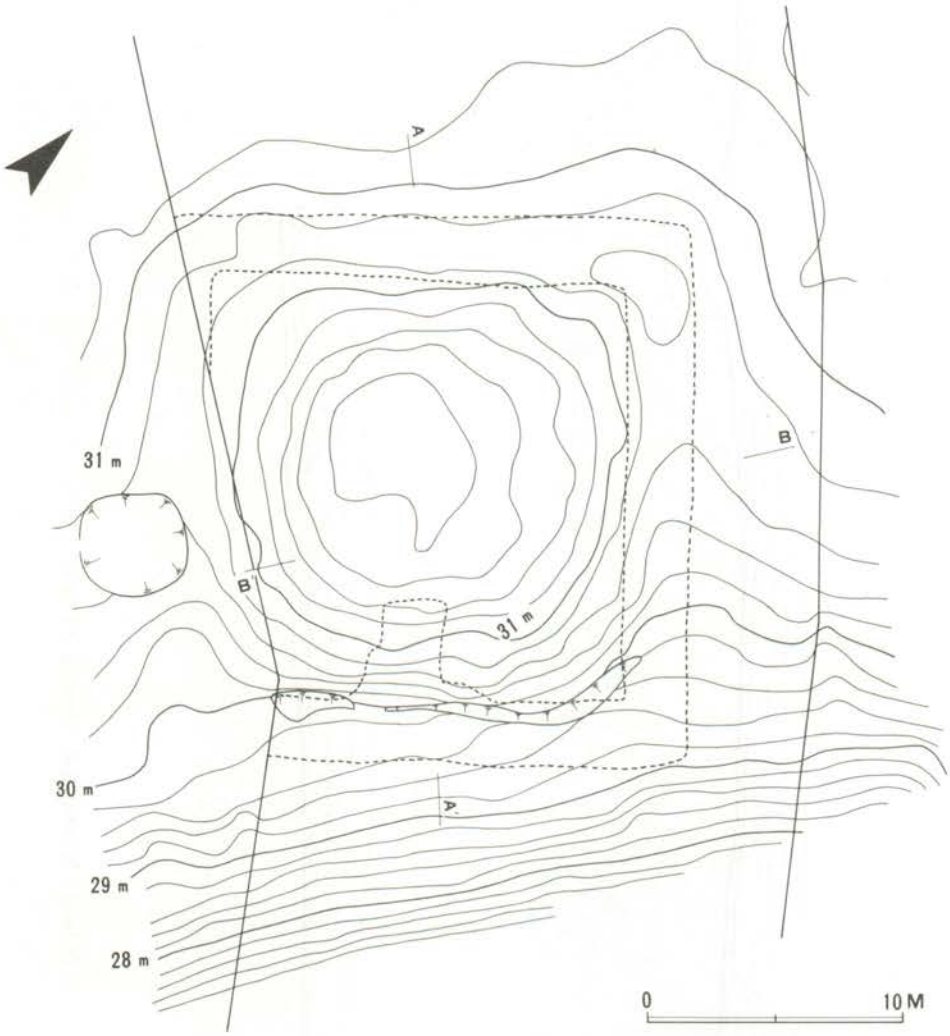
本墳は標高32mの支谷に面した台地端部に立地している。この台地は根木名川に開析された本谷から、さらに大きく中に入った支谷に臨んだもので、この支谷の谷頭の縁辺にみそ岩谷古墳は立地している。この支谷は幅20mと狭いが、比高差は大きく12m程ある。

〔墳丘〕（第45～47図、ＰＬ７～９）

西側の一部が調査区域外のため、完全な調査を実施できなかったため、一部に規模の不明確な部分がある。墳丘は現状においては盛土も崩れ、墳形も円墳か方墳かも判別できなかったし、非常に墳丘そのものも低いために墳丘測量のコンターを20cm間隔で実測し、細部の表現に努力した。それでも、やや方墳らしいと思われる程度のものであった。それよりも周堀の痕跡により、方墳である可能性が強くなった。そこで、方墳であるという前提のもとに土層観察用セクションベルトを十文字に残し、墳丘を旧地表まで掘り下げた。その結果により、方墳である事が確認された。

方墳としての規模は西辺が調査区域外のためやや不明な点はあるが、正方形と考えれば次のようになる。墳丘は一辺16m、高さは北側で90cm、南側で1.8m、東西で１m前後であり、墳頂部の平坦面は本来的に狭い構造のものであったと思われる。また、北側より南側の方が高いのは、台地端部の傾斜変換線よりも下から構築されているために、みかけの高さが加わるためである。本来の墳頂部の高さは一定であったが、地盤の高低によるみかけの問題である。このことは、この古墳が台地上の平坦面である北側よりは、谷からあるいは谷をはさんだ台地上から、すなわち南側から見る事を意識しているのかもしれない。それは南側に主体部がある事とも関連する問題であろう。

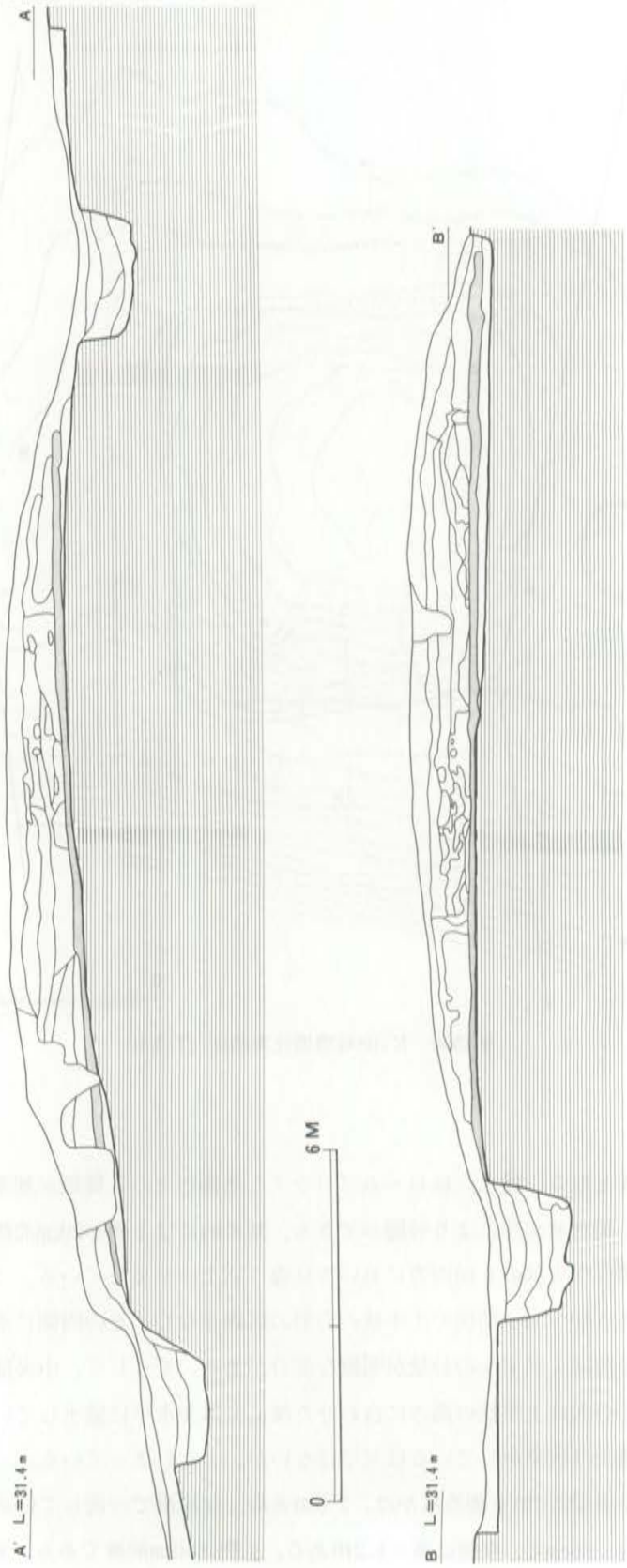
盛土は旧地表面より行なわれ、厚いところは1.2mあるが、平均すると１m前後であり、薄い



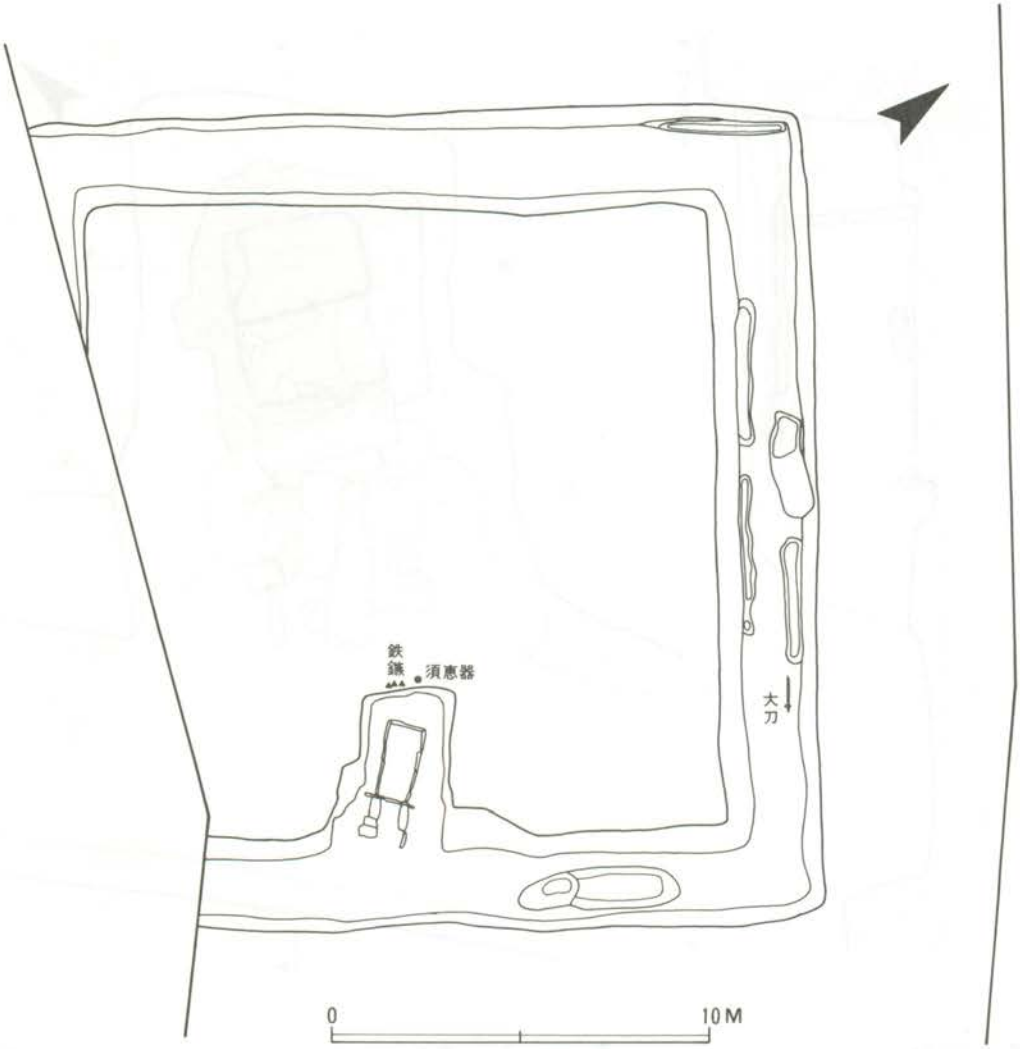
第45図　K108号墳墳丘実測図（1/300）

ところは50cm前後となる。盛土にはロームブロックと黒褐色土の２種類が基本的に使用され、この２種の単層と組合せの差により分層ができる。基本的には１層が20cm前後の水平な堆積を示しているが、墳丘中央部の６ｍ四方においては違う盛土法を見せている。ここの盛土法は旧地表において、高さ40～50cm前後の土手状の方形の区画をなし、その内側にそって、土を入れている。この土の塊は１回ずつの分量が明瞭な部分がある。そうして、中央部のみが凹んだ状態の時に一度に土を入れ土手状の高さに合わせた後に全体を水平に盛土していっていると思われる。ただこの盛土は版築をしているほどではないが、よくしまっている。

周堀は東側の中央で2.8ｍを測るほかは、2.5ｍと均一な規模で一周していると思われる。深さは南側が一番浅く50cmで、東側は深く1.2ｍある。北側は80cm前後である。全体的な傾向とし



第46図　K108号墳丘断面図（1/120）

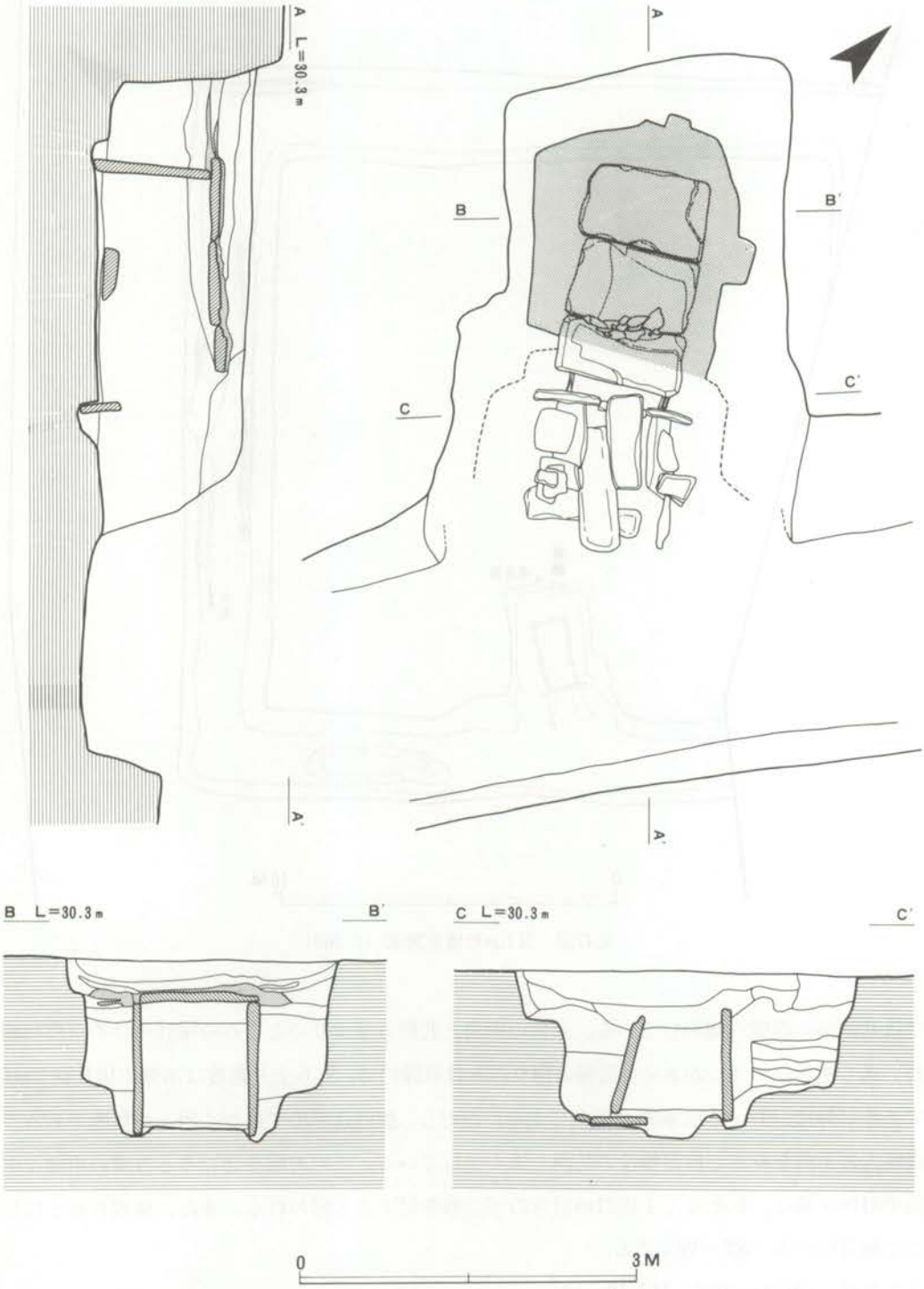


第47図　K108号墳実測図（1/200）

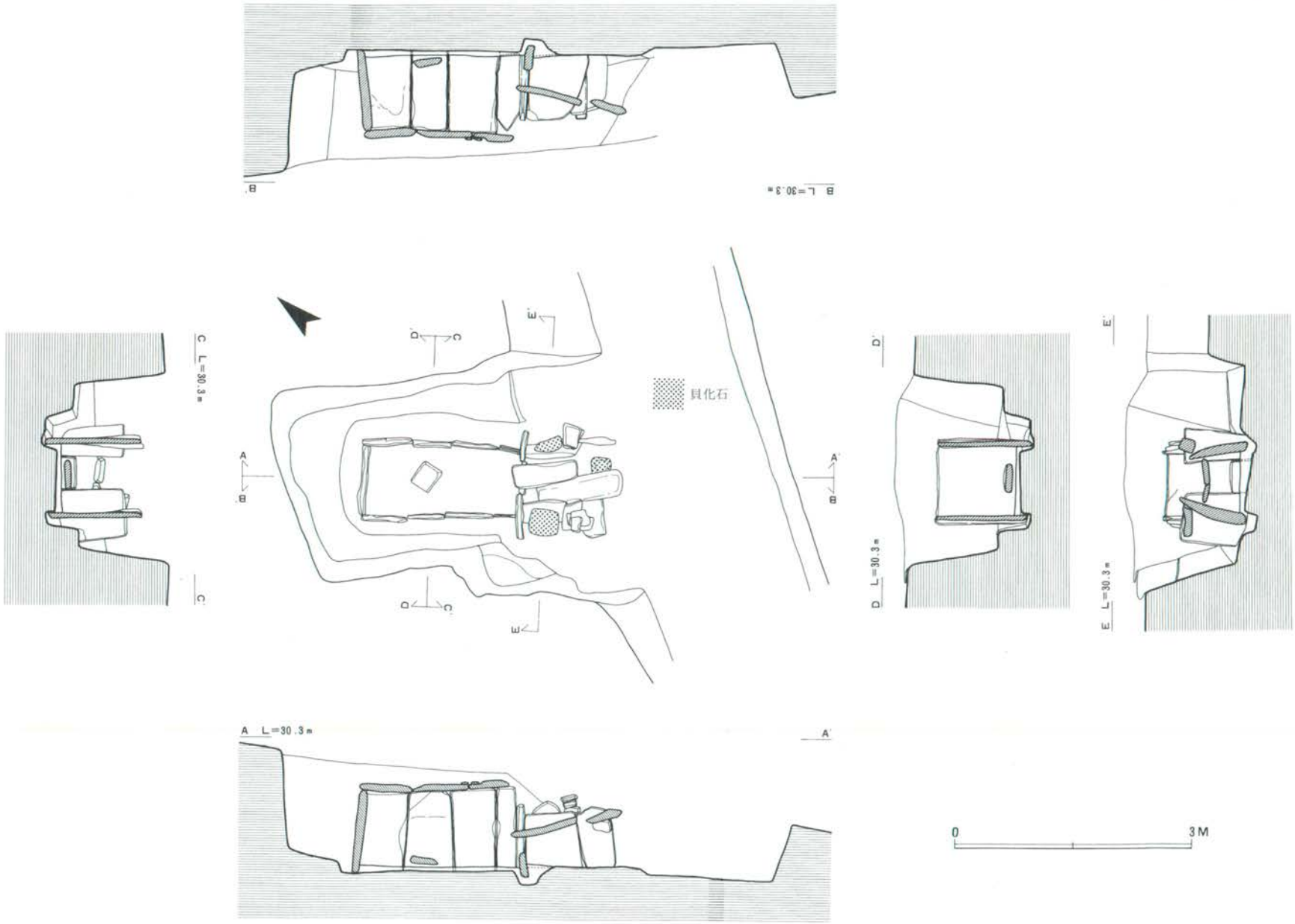
ては北側から南側へ傾斜している。東側の中央と北側の東よりのところの掘底には不自然な細長い落ち込みがいくつかある。周掘の掘り込みは直線的で、立ち上り角度は南側の墳丘側で60°である以外は、すべて75°前後と鋭角である。ただし、掘底は平坦ではなく凹んだ状態である。周堀内の土層をみると自然埋没の状況をよく示している。この周堀を含めると方墳の規模な南北で21mを測る。おそらく１辺21m前後の正方形を呈すると思われる。また、周堀をもとにした主軸方位はN―53°―Wである。

〔主体部〕（第48～50図、ＰＬ10～13）

主体部は南辺のほぼ中央に、南東に開口した板石組の石棺式石室である。この特殊な形態の主体部は近隣の公津原古墳群の瓢塚41号墳（注１）に見られるだけである。この主体部は基本的な形態としては横穴式石室であるが、機能的には箱式石棺であるため、やや概念は曖昧であ



第48図　K108号墳主体部実測図（蓋石粘土被覆状態 1/60）



第49図　K108号墳主体部実測図（1/60）

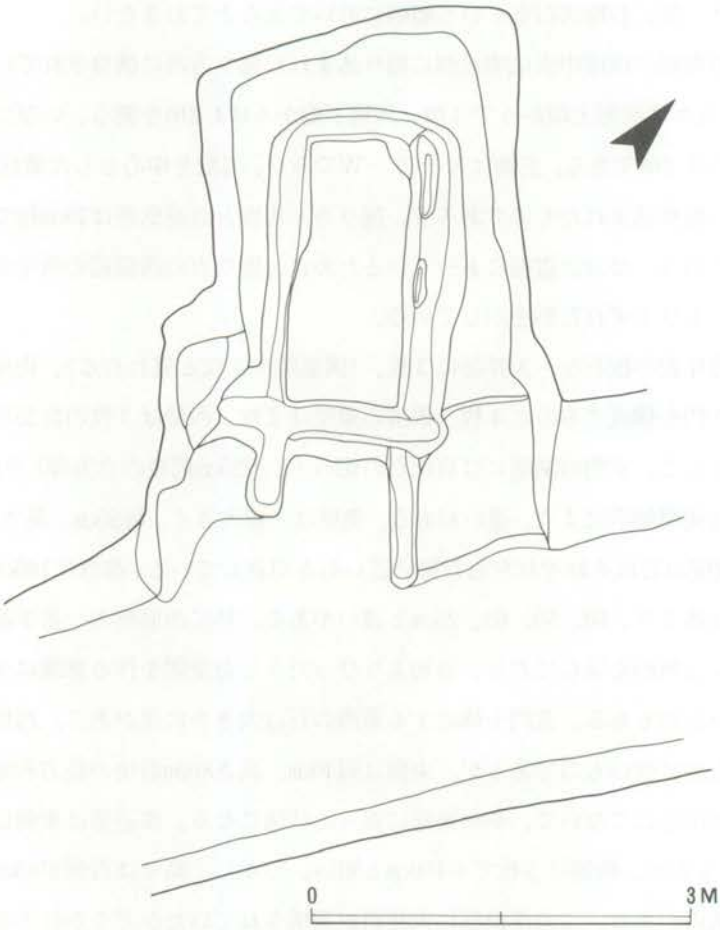
るが、ここでは一応、石棺式石室という範疇においてとらえておきたい。

石室は南辺の周堀のほぼ中央に墳丘側に掘り込まれた掘り方内に構築されている。この掘り方は幅2.5m、長さは周堀上端からで３m、周堀下端からは4.2mを測る、いびつな長方形を呈し、深さは1.4～1.2mである。主軸はN－49°－Wであり、周堀を中心とした墳丘とのずれは４°である。同時に掘り込まれたものであろう。掘り方と周堀との高低差は10cm程で、掘り方の底面が上になっている。なお、盗掘にあっているために、掘り方の西側辺の南半分は50cm前後で削られており、よりくずれた形を示している。

石室は絹雲母片岩の板石を、天井部に３枚、（構築時は４枚と思われる）、両側壁に各４枚、奥壁に１枚、玄門を構成するのに４枚、羨道の東壁は２枚、西壁は３枚の計25枚を使用して構築している。そして、玄門の閉塞には貝化石の切石（１辺35cm前後の立方体）を使用している。各石の大きさは使用箇所により、違いがある。奥壁は一番大きく、幅90cm、高さ105cm、厚さ10cmである。両側壁の石はそれぞれ左右対称に近い石を用意している。高さは105cm前後で一定しているが、幅は奥より、60、50、60、25cmと違いがある。特に西側壁の一番手前の石は上面が四角形ではなく三角形を呈しており、当初よりぴったりした空間を作る意識に欠けていると思わざるをえないものもある。玄門を構成する東西の石は大きさに差がある。西側は幅70cm、高さ80cmのやや台形に近いものであるが、東側は幅40cm、高さ80cm前後の長方形を呈している。そのため入口が中心にこないで、やや東側に寄った状態になる。羨道部は東側は２枚の板石で115cmの長さになるが、西側は３枚でも100cmと短い。しかし、高さは西側が85cmで東側は65cmで、20cmの高低差がある。この羨道部に天井石が架構されていたかどうかは不明であるが、現在の石材数から考えると、天井部になると思われるものが見あたらないので、当初より天井石は架構されていなかった可能性が強い。そのために羨道部の板石は東西ともに内傾しているのであろう。

天井石は３枚が原位置を保っていた。それによると、天井石の大きさは石室の外側にぴったり一致したものを用意している。というよりも、奥壁、天井石の原材の大きさにより石室の大きさが規制された可能性がある。一番北側の天井石は奥壁と両側壁にぴったり合致させている。二番目の天井石は北側はぴったりと接しているが、南側のやや小ぶりな天井石との間にすきまがあるため、小さな石を集めて間を埋めている。天井石を架構したのちに、天井部だけを白色粘土で覆っている。その範囲は天井石の外側50cm前後で、厚さは天井石の上で３～10cm、天井石と側壁の接合部で13cm前後ある。粘土被覆はおそらく天井部とその側壁の接する部分は全面にわたって施されていたと思われる。石室内には盗掘を受けた際に流入したと思われる土砂以外は入っていなかったため、西側壁の一番手前の三角形を呈した石も、そのすきまは粘土被覆によって埋められていたと思われる。

石室の構築に際して、１ケ所だけ違う工法を採用している箇所がある。全体的には掘方内に



第50図　K108号墳主体部掘方実測図（1/60）

石室プランの溝を掘り込み――これは板石を立てるために掘り込むのと同時に床面を作り出す意識の方が強いように思われる――溝の内側に板石を接して埋め込んでいる。この溝は内側は直線的で垂直に近いが、外側はだれた感じの立ち上りである。溝の幅は東側壁部分と玄門部分で50cmをはかるが、他は20～35cmで、深さは15cm前後である。ただし東側壁の奥から一番目と二番目の板石は他より長いために、さらに溝を掘り込んで埋設し上面部分の高さを合せている。しかしながら、羨道部の西側の一番奥の板石は下に一枚の板石を敷いてその上に立てている。この工法はこの部分だけに見られるものである。これはおそらく、この部分にあてる板石の高さによるためであろう。つまり、東側の板石に比べると12cm低いため、高さを合せるための工夫と思われる。当初において用材の寸法とは関係なく、プランの溝掘りをしたため、溝の分だけ高低差がよりついたための方策である。沈下を防ぐという意識はほとんどないと思われる。

床面は先において触れたように、地山を作り出しただけのものである。床石は当初より存在

しなかった。発掘時において床面直上に35cm×30cmで、厚さ14cmの板石が一枚あったが、これは盗掘時において、石室を構成する部材の一部が破壊され、流入したものと思われる。床面は作り出したのちに各板石を各場所に設置したのち、地山の上に３～10cm程の暗褐色土とロームブロックの混合土を固めて水平にして、最後の床面の仕上げをしている。ただし、この床面はそれほど固くてしまったものではない。むしろ、水平にするために充塡していると思われる。奥壁部分から玄門部分にかけて徐々に薄くなっている。

掘方内に設置された石室は版築状に埋められている部分と、そうでない部分がある。東側の石室の南半分の部分は版築状である。ただし、かなり雑なもので、厚さ７～10cm前後の互層でたたきながら埋めている。それほどにひきしまってはいない。粘土とロームブロックの互層である。他の部分は大きく３回に分けて天井石の下まで埋められている。この中層は厚くて60～70cmであるが、中にはロームブロック、粘土、暗褐色土の混合土が入り非常にしっかりと充塡している。そして、天井石が架構され、粘土で被覆した後は全体的に版築状に掘方上面まで充塡している。この部分の版築状の埋め方もそれほど固くひきしまったものではない。

〔遺物の出土状態〕（第47図）

主体部の盗掘は新しいものではない。調査中の所見によると、まだ周堀が埋っていない段階に盗掘を受け、そのまま放置され、周堀と同じ埋れ方をしている。場合によっては埋葬直後に荒された可能性もある。そのため、石室内には遺物が１点も残存していなかった。石室内の埋土はすべてをフルイにかけてもなに１つなかった。このように徹底的な盗掘を受けた事にこの古墳の意義があるようですらある。

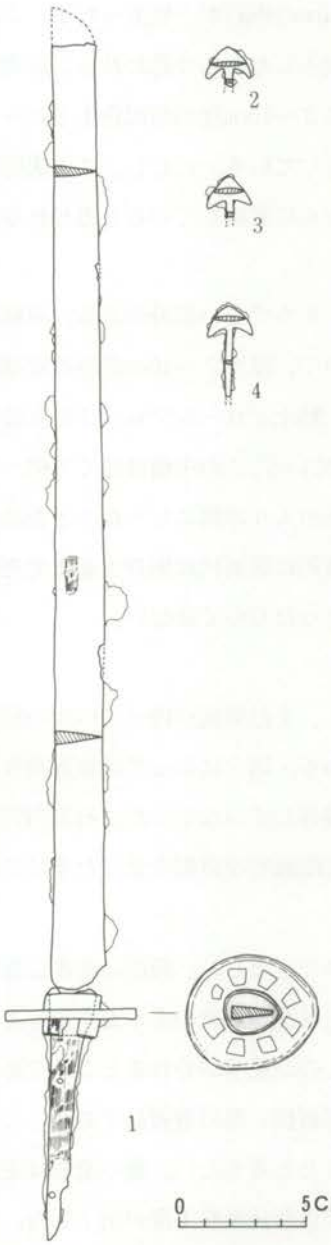
遺物は大刀が東側周堀の中央より南に寄った位置に１点だけで出土した。底面に密着した状態で、刀身を周堀に並行させ、鋒を北に向けている。この出土状況が本来のあり方を示しているのか、あるいは先に述べたように早い段階での盗掘を示すものか見解が分れるところであるが、ここでは後者をとっておくことにする。すなわち、主体部盗掘の際の遺留品である。このことにより、盗掘は埋葬直後から早い段階においておこなわれたと考えたい。他の遺物は主体部掘方の北側に接し、掘方面より50cmぐらい上に鉄鏃３本と須恵器長頸瓶１個が出土した。これらの遺物は石室の蓋をした後に墳丘を盛土している段階での墓前祭式の際に使用したものと考えられる。盛土中においてもこのように遺物がまとまって出土する事は古墳造営中に何度も祭式を行なった証明にあるであろう。ただ、残念なのは先述したように、ここで出土した完形の須恵器が盗難にあってしまい、実測図を提示できないことである。年代を知る有効な手だてが失なわれた事は誠に遺憾な事である。

〔出土遺物〕（第51・52図、ＰＬ24－４）

大刀（第51図１）は鋒部分が欠けているだけで、ほぼ完形に近いものである。また、刀装具も部分的にはよく残っている。刀身長は96cmを測る非常に大形のものである。刃部の長さは78

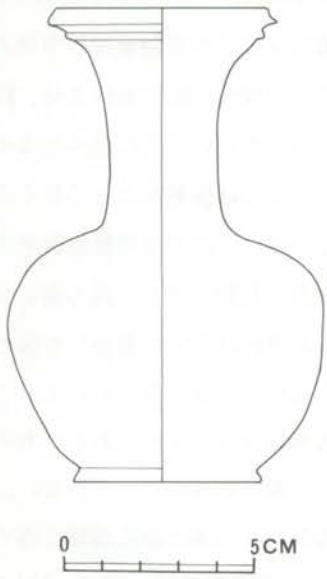
cm、幅は3.5～４cmである。茎の長さは18cmで、幅は１～2.5cmで、先端は鋭く細くなっている。目釘孔は径４㎜のが２つある。この間隔は９cmである。鋒は欠失しているがややふくらみをもつものであろう。刀身は平造りで、背は平背で８～10㎜である。関は刀装具の下になり、はっきりしない。刀装具は鍔と鍔元、把元がよく遺存している。また茎部分には把間の木質部がよく付着している。鞘の部分の木質も部分的に付着しているが、良好なものではない。鍔は長径10.4cm、短径9.1cmの倒卵形をしている。厚さは８㎜である。中に不揃いではあるが1.2cm前後の台形を呈した透し孔をいれてある。鍔元は長さ3.4cm、幅4.7cm、厚さ２～３㎜で、片方に形がくずれ、ややいびつになっているが倒卵形を呈している。

鉄鏃は３点出土している。３点とも広根式の有茎の鏃である。２は長さ1.4cm、幅1.8cm、厚さ２㎜の腸抉の深いものである。刺逆の先端は鋭くない。茎は幅３㎜、厚さ１㎜の扁平なものである。３は長さ1.3m、幅は1.8cm、厚さ２㎜の腸抉の浅いものである。刺逆は鋭い。茎は幅３㎜、厚さ２㎜の角柱状のものである。４は長さ1.2cm、幅1.8cm、厚さ２㎜の腸抉の深いものである。刺逆は直線的であるが鋭い。茎は幅2.5㎜、厚さ２㎜の角柱状を呈している。



第51図　K108号墳出土遺物実測図（１は1/6,他は1/3）

盗難にあった須恵器長頸瓶は簡単なスケッチが残っているだけである。それが第52図である。厚さ、製作技法等は不明のままである。口径11cm、底径9.8cm、器



第52図　K108号墳出土須恵器（1/4）

高は24.9cmである。口縁端部の下端は大きく外へ挽き出されている。そしてその直下に1本の突帯をつけている。頸部は直線的であるが、突帯の下から、口縁にかけて急に大きく開く。胴部はゆるやかな肩で丸みをもち、上半分に最大径がくる。高台はしっかりしたものである。色調は全体的に灰白色であるが、口縁から肩にかけては自然釉が全面にかかり、薄緑色を呈している。胎土は非常に精製されており、緻密で、中にやや大きめの砂粒が混ざる。焼成も良好で非常に堅緻である。この製品は一見して東海地方産のものである事が判名する。

第4節　結　　語

以上が前原Ⅰ遺跡の発掘調査の概要であるが、何分にも限られた調査範囲であるために遺跡の全体を把握することは非常に難しい問題である。しかしながら、後期古墳群として著名な竜角寺古墳群に隣接している──特にみそ岩屋古墳とは接近している──地点の発掘調査は初めての事であり、古墳形成の問題、終末の問題、竜角寺との関連等の問題などに各方面からの関心も高いものがある。そこで前原Ⅰ遺跡の要点を時代別に述べて結語としたい。

1．先土器時代について

北総地域における先土器時代の発掘調査は富里町の東内野遺跡、成田市の新東京国際空港内の各遺跡以外ではほとんどない状態である。特に印旛沼東岸においてはいままでに調査例がなく、最初のものである。資料的には総数73点と少いが、石材はほとんどメノウで占られている。ここでの一番の特徴は数量に比して石核が多く、ツールがほとんど見当らないことである。出土層位はⅡ層下部からⅢ層（ソフトローム層）にかけてのものであり、この時期に北総地域に共通しているメノウを使用している事から、先土器時代終末の様相を示しているものと理解してよいであろう。

2．古墳時代集落について

竜角寺古墳群周辺はややもすれば古墳にその目が奪われ、集落という視点に欠けていたきらいがある。今回の調査により初めてメスが入り、古墳と集落の関係、または古墳群の形成過程についても具体的に論じる事ができうる素材を得た事になる。

前原Ⅰ遺跡においては竪穴住居跡6軒、土坑2基が検出されている。竪穴住居跡同士の重複関係はなく、いずれも和泉式土器の時期に比定されるものである。しかし、竪穴住居跡より検出した土器群を観察すると2時期に分ける事が可能である。すなわち、前者は第1、2号住居跡、後者は第3～6号住居跡の2者の差異である。前者にはまだ五領式土器の雰囲気があり、後者にはまったく見られない。和泉式土器を2段階に分類するとすればこの2者によって可能

であろう。また第1、2号土坑出土土器は竪穴住居跡出土土器よりも一段階古いものであり、五領式土器の最終末に相当するものである。

今回の調査はきわめて限定された範囲であるため集落構造までには言及できないが、竜角寺古墳群の形成を裏づける集落を確認できた事は大きな収穫である。前原Ⅰ遺跡において一番古い遺構は第1、2号土坑の五領式土器の最終末である。おそらく、この時期から集落が形成されはじめるのであろう。この時期には方形周溝墓が西側の酒直遺跡群の中に存在している事と考えあわせれば同一の現象としてとらえる事ができる。同時にそれは集落と墓域の空間利用が当初よりあった事を示すものであろう。本跡における2基の土坑を墓とするなら、その集落は谷を隔てた前原Ⅱ遺跡と考える事ができる。もう1つ問題となるのは竜角寺古墳群の南側に、印旛沼に面する狭い尾根上に前方後円墳が1基ずつ存在している。これらの古墳は占地の方法、墳形等から考えても前期古墳と考えてさしつかえないようである。これも五領式末期、あるいは和泉式前半期の集落の存在を考えるとあながち無理な問題ではなさそうである。

しかしながら、竜角寺古墳群の本格的な形成は和泉式後半期である。これは本跡の第3・4号住居跡が玉作工房跡であり、まさしくこの時期に相当するからである。集落内に玉作工房が出現してくる事はこの地に大きな変革があり、ひいては古墳群形成への大きなはずみになった事は想像にかたくない。また、この時期は北総地域において玉作集団が盛行する時期でもある。特に本跡周辺は奈良時代になって埴生郡玉作郷であった事が、北側の大畑Ⅰ—2遺跡より出土した「玉作」銘の文字瓦によっても検証され、かなりの規模の玉作集団をようしていたと思われ、後世に残ったものと思われる。

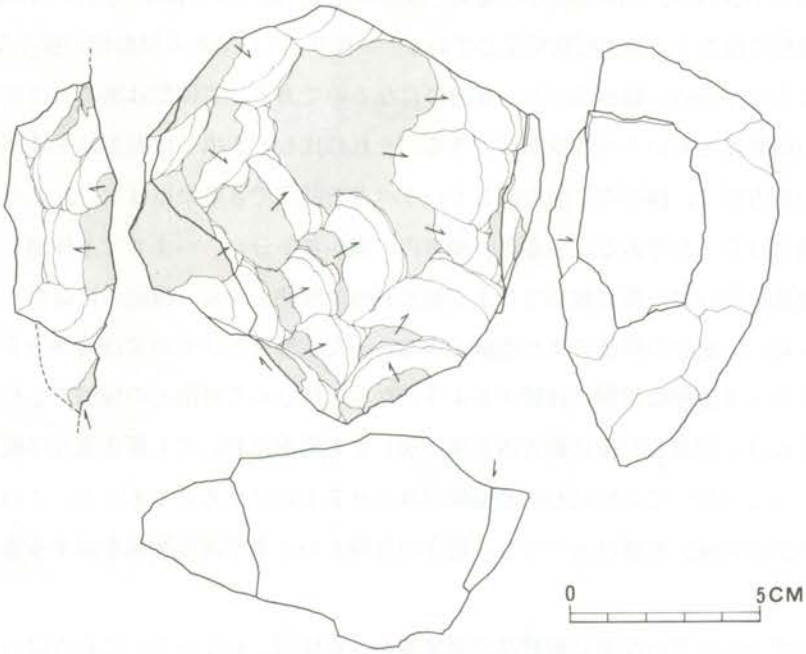
わずか6軒の竪穴住居跡の検出にすぎないが以上のような竜角寺古墳群に対するアウトラインを描く事ができるようになった。

3．玉作工房跡について

本跡では同時期と思われる2軒の玉作工房跡を検出した。第3号住居跡は約半分だけしか調査ができなかったが、2軒ともに石屑等の数量はすくないが、荒割段階のものは割合に多い。また成品は1点も検出していない。2軒ともに共通しているのは臼玉の未成品であるが、剣形、双孔円板は第3号住居跡のみに見られる。ここでの特徴は管玉等の玉類のバラエティーも少く、そして、工房内に工作用ピットが見られない事である。

攻玉技術においても大きな特徴を有している。荒割から形割の段階で剝片を取るのに打撃や押圧剝離ですのではなく、クギ状のものを使用して剝ぎ取っているのである。これを模式化したのが第53図である。矢印の所にクギ状のもので溝をつくり、そこから力を入れて剝ぎ取っているのである。これは寺村光晴氏によって八代玉作遺跡の中に一部分のみに「矢」あるいは「クギ」を使用した痕跡と報告しているものと類似するものであろう（註2）。本跡においては

この技法のみがみられ、他の技法は存在していない。ここにも玉作集団の差異を見出せる。



第53図　攻玉技法模式図（第４号住居跡出土原石⑪）（1/2）

４．竜角寺108号墳について

本墳は竜角寺古墳群中にあって初めて全面発掘されたものであり、しかも岩屋古墳、みそ岩屋古墳に隣接しており、竜角寺古墳群の終末を考える上に重要な役割をはたす方墳である点においても画期的な調査であった。それにもまして、この一帯の古代史を考える上において重要な意味をもつ。それは岩屋古墳の年代にも大きな影響を与え、また、竜角寺の造営年代にも関係してくるものである。

本墳は１辺21mの正方形をし、墳丘は１m前後と極めて低い小規模な方墳である。またこの規模は方墳群のなかにあっても最少のものである。この小規模な方墳であるということが時代性をすでに表現しているのかもしれない。しかしながら、発掘調査によってはっきりした年代を提示できるものは盗難にあった須恵器長頸瓶以外にはない状態である。そこで、主体部と長頸瓶によってある程度の年代を導き出したい。

主体部は機能的には箱式石棺であるが、形態的には石棺式石室という特殊なものである。ただ、それを板石によって表現しているところに、在地の性格が表われている。ただ、この地域においては石材の供給地がないため、巨石利用の伝統がないのも大きく影響していると思われる。ここで注目すべき事はいずれにおいても、板石による箱式石棺を基本として、観念として

は明らかに石棺式石室を模しているという事実である。この形態をもつものは現在のところ、近隣の公津原古墳群のなかの瓢塚41号墳にのみ見られるものである。瓢塚41号墳は墳形では本墳より一回り小さいが、主体部掘方の規模と形態が違う。掘方は主体部に比して非常に大きく、形態は長方形ではなく、羽子板状を呈している。つまり、入口である周掘側が狭くなっており、すこし中に入ってから、幅が広がり、長方形になるのである。主体部は奥の方に寄っており、手前は広い前庭部ともいうべき空間ができる。それに比して本墳では掘方は主体部の一回り大きい規模の長方形で、掘方内に前庭部ともいうべき空間はできる余裕はない。この差は以外に重要な問題になりそうである。つまり、掘方内の奥から半分ぐらいまでで主体部を作っている事は、埋葬後において一度に埋めてしまう箱式石棺の葬法となんら機能的には変らないのである。これは新しい観念の葬法をまだ理解できなかった状態を示すものではなかろうか。ところが本墳になると羨道部は周掘に接続するようになり、はじめて外部との接触をとれるようになる。こうなれば、埋葬した後に掘方内を埋め戻しても周掘においても葬送儀礼は続けられると思われる。ここにおいて石棺式石室の機能がはたせるものになるのであろう。このように考えれば、主体部の規模、形態は同じでも、観念の理解という事で前後関係を論ずる事ができそうである。

瓢塚41号墳からは幸いな事に副葬品の須恵器が3点検出されている。これらはいずれも7世紀第2四半世紀の所産と思われ、瓢塚41号墳の年代を考える上において決定的なものとなる。次に本墳から出土している遺物を見ると鉄鏃と大刀がある。これらはいずれも7世紀中頃によく見られるものである。最後に盗難にあった須恵器長頸瓶はやはり公津原古墳群中の瓢塚39号墳出土の長頸瓶によく似ているものである。この須恵器は7世紀第3四半世紀のものと思われる。本墳出土の須恵器もそう考えてよいだろう。以上の事を考えると鉄鏃、大刀に古い要素があり、須恵器が新しい要素をもっている。本墳における遺物の出土状態をもう1度考えてみると、大刀は単独に周掘底から出土しているが、須恵器は鉄鏃と同じ地点から出土している。主体部を埋納したのちに墳丘を作る途中に同時に埋められたものである。これにより須恵器の新しい年代を採用して、本墳の年代は7世紀第3四半世紀とする事ができるだろう。ちなみに瓢塚41号墳は7世紀第2四半世紀のものと考えておきたい。

本墳の年代は先に7世紀終末から8世紀初頭にかけての終末期古墳とする考えを提出したが（註3）、ここで以上のように訂正しておきたい。これにより、竜角寺古墳群中における5基の方墳の年代も若干の変更がでてくる。7世紀代になり、竜角寺古墳群における首長墓は前方後円墳から方墳に墳形を変えていった。この傾向は中央との関係において、比較的スムーズに移行している。すなわち、浅間山古墳以降は首長墓と認定できる前方後円墳が存在しなくなることからもうなづける。そして6世紀代までと違い、方墳は東側の台地縁辺にかたよる傾向がある。ここに5基の方墳が首長墓として7世紀代に継続して営まれたと思われる。このように方

墳を首長墓と考える前提に立てば、それぞれ年代が違ってくる。その順序は現在のところ以下のように考えている。岩屋古墳→K100号墳→みそ岩屋古墳→本墳→K107号墳となる。本墳が7世紀第3四半世紀という年代に立てばK107号墳は7世紀第4四半世紀の所産の竜角寺古墳群の最終末古墳となる。みそ岩屋古墳は7世紀中葉になり、岩屋古墳は7世紀前半という年代になってくる。この考えはあくまでも本墳の年代観をもとにした類推であるために今後の調査、研究により訂正されていくものである。

ここで興味深いのは岩屋古墳とK100号墳が同じ主軸をとっており、みそ岩屋古墳と本墳とK107号墳が同じ主軸をとっていることである。5基の方墳は2つの主軸をもつグループに分ける事ができる。これが7世紀中葉以前と以後の時間差を考える一つの根拠でもある。そしてもう一つ興味深いのは後述する大畑Ⅰ遺跡における埴生郡衙の掘立柱建物の主軸とみそ岩屋古墳グループの主軸が一致している事である。これは7世紀第4四半世紀には成立した官衙の主軸をも規定する大きなもののようである。また、現在のところ竜角寺の造営は7世紀第3四半世紀（天智朝）と考えられるため、本墳の被葬者とはきわめて年代的に近く、造寺の発願者であった可能性も非常に高いものがある。これは岩屋古墳の被葬者以来の系譜が印汲国造家をもしのぐ新興豪族として富の集積をした結果によって初めてできる大事業である。当然、中央豪族との関係も抜きにはできないが、地方豪族としてはいち早く進取の文物を取り入れた結果である。後に建郡された埴生郡はあまりにも小さすぎ、印旛郡との格差がありすぎる。この分割問題も竜角寺を象徴とするように、中央と印波国造家の包囲作戦であったのかもしれない。このように地域史を概観すると、本墳の調査は非常に重要な意義をもっており、今後の竜角寺古墳群の研究に欠く事のできないものとなるであろう。

註1．『公津原』　千葉県企業庁、(財)千葉県地域振興公社　1975

註2．寺村光晴　『下総国の玉作遺跡』　雄山閣　1974

註3．石田広美　「文化財レポート・大畑Ⅰ遺跡の調査」　日本歴史　429号　1984

第 2 章
前原 II 遺跡の調査

第２章　前原II遺跡の調査

第１節　遺跡の位置及び立地（第１・２・54図）

前原II遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字前原1048他に所在する。前原Ｉ遺跡の東側の谷を隔てた台地上に位置している。この台地は標高32m前後で、幅80m程の細長いものである。東側は根木名川に開析された本谷に直接とりつく支谷の谷頭にあたり、水田との比高差は20m以上ある。西側は前原Ｉ遺跡とを隔てる深さ10m程の谷である。この台地は南側で広くなり、南東の台地端部には岩屋古墳がある。北側は東西に複雑に入り組んだ支谷により、狭長な舌状台地になっている。

第２節　遺跡の概要及び調査の方法（第55図）

前原II遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代のものは遺構、遺物は皆無である。縄文時代は遺構は検出されていないが、縄文式土器の破片は表土中から採集されている。縄文式土器の大半は中期から後期にかけてのものが多い。古墳時代の遺構は前期から中期（五領式土器～和泉式土器）にかけての竪穴住居跡が５軒である。遺物は各竪穴住居跡ともに、前原Ｉ遺跡よりは少ない。しかしながら、集落形成は前原Ｉ遺跡よりいくらか早くはじまり、また、玉作工房跡をともなわないといった、集落構造の差異もあり、興味深いものがある。

発掘調査の方法は基本的には前原Ｉ遺跡と同様である。グリッドの名称も同じである。

第３節　検出された遺構と遺物

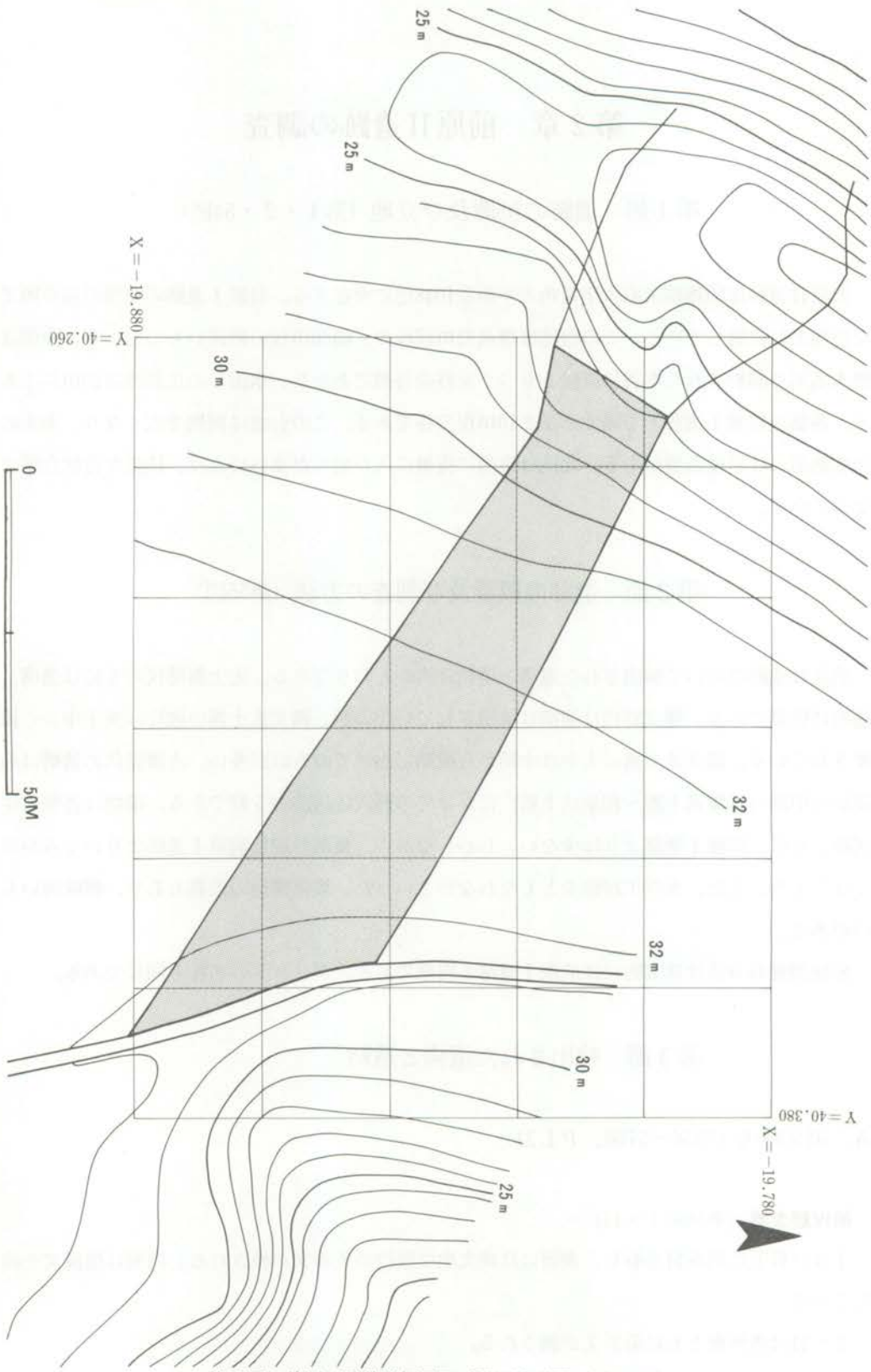
Ａ．縄文時代（第56～57図、ＰＬ31）

第Ⅳ群土器（第56図１～11）

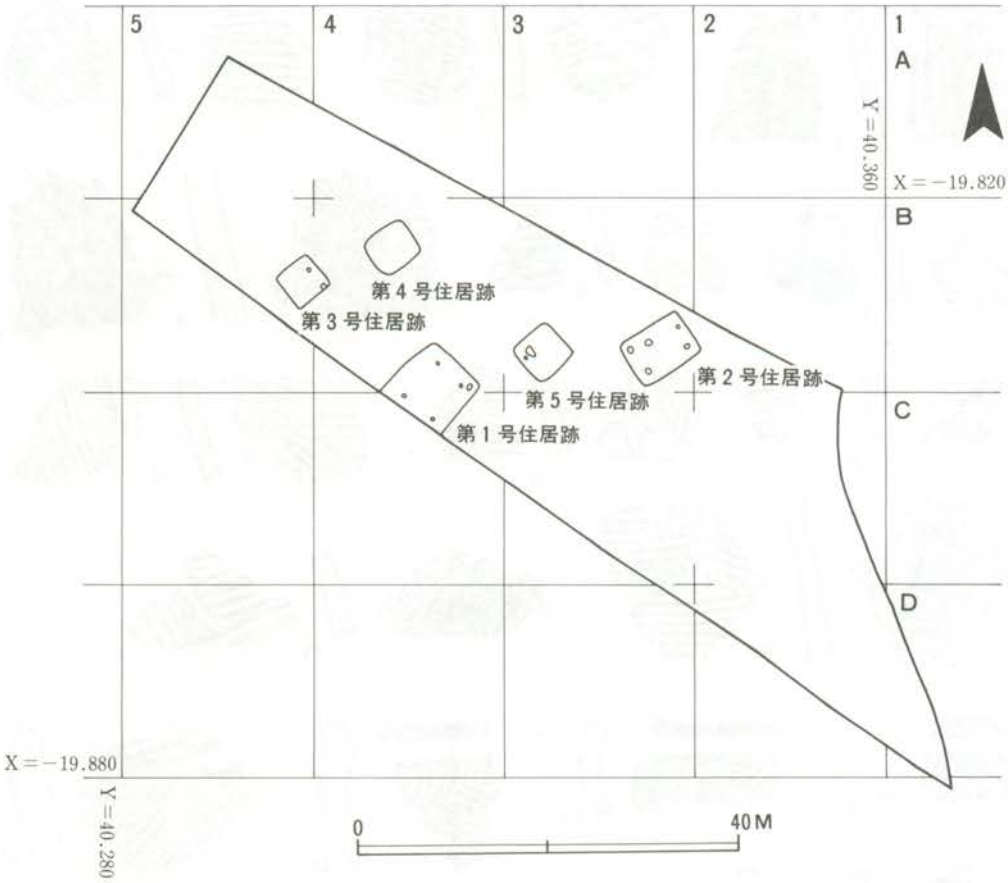
１は口唇上に刻み目を有し、表面には縄文地に縦位の条痕文が施される。内面は擦痕文を施している。

２～11は内外面ともに条痕文が施される。

すべて、胎土中には植物質の繊維を含む。茅山上層式に比定される。



第54図　前原Ⅱ遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）



第55図　前原Ⅱ遺跡遺構配置図（1/800）

第Ⅵ群土器（第56図12～15）

12･13とも口唇下に１条の凹線文を有し、胴部には単節ＬＲ（縦回転）の斜縄文が施される。また、口唇は丸く、厚味がある。

14は12・13と同様に口唇下に１条の凹線文を有するが、胴部の文様は羽状縄文が施される。

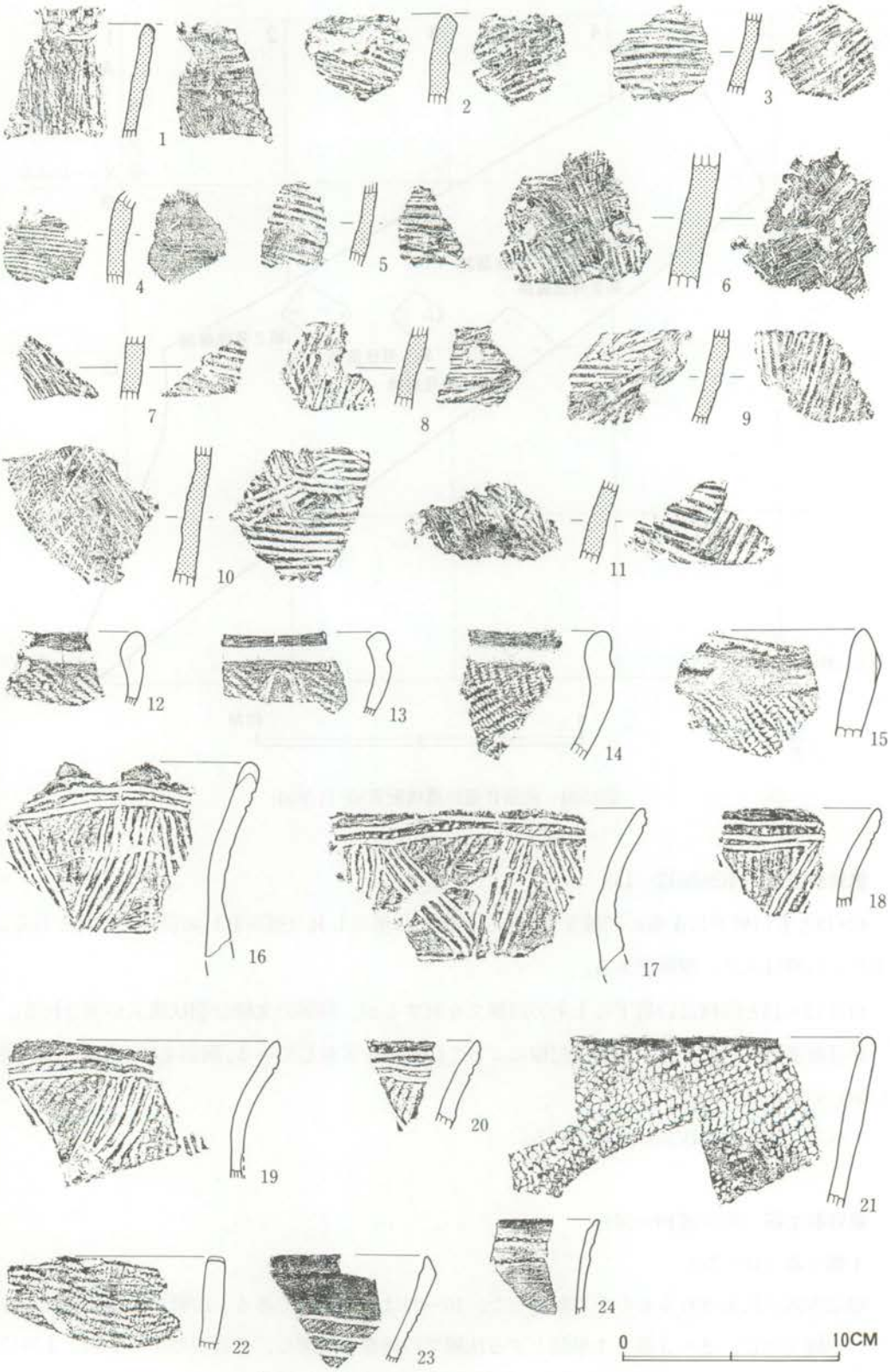
15は断面が三角形を呈する微隆起線によって口縁部を区画している。胴部文様は単節ＬＲ（縦回転）の斜縄文である。

すべて、加曽利ＥⅣ式に比定される。

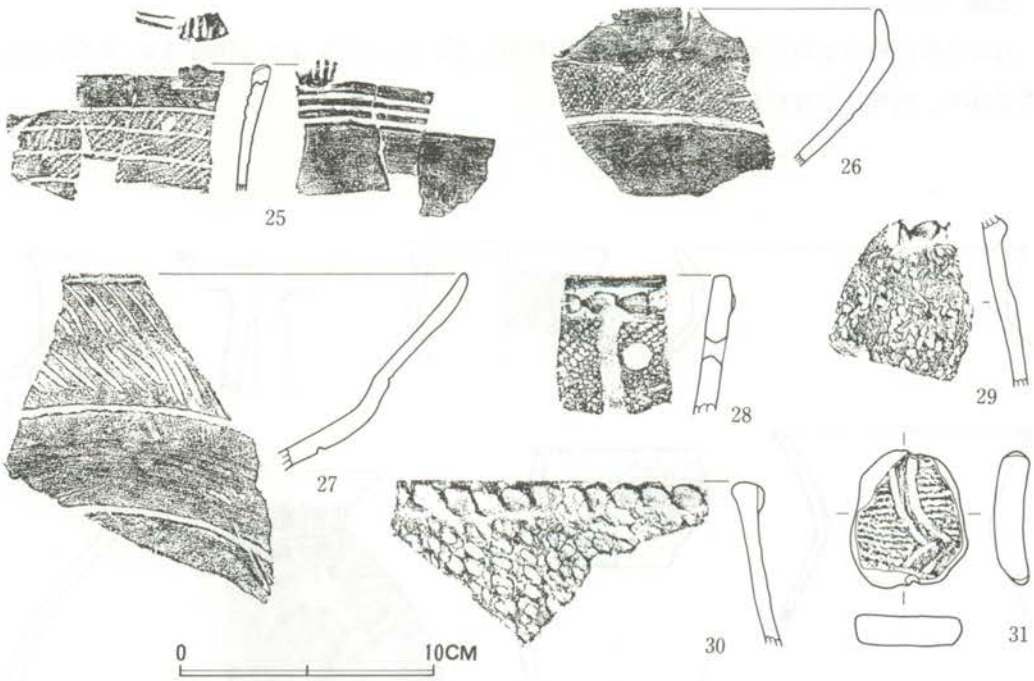
第Ⅶ群土器（第57図16～30）

１類土器（16～20）

堀之内式に比定されるものを本類とした。16～20は同一個体である。口唇には山形突起を有し、斜縄文地に、２～３条を１単位とする沈線で口縁部を区画し、その中に４～５条を１単位とする沈線でジグザグ文を施す。堀之内Ⅰ式に比定される。



第56図　グリッド出土土器拓影図 ①（1/3）



第57図　グリッド出土土器拓影図 ②（1/3）

２類土器（21～30）

加曽利Ｂ式に比定されるものを本類とした。

21・22とも単節ＬＲの縄文が全面に施される。21は内面の口縁部に１条の沈線がめぐり、22は口縁がやや波状を呈する。

23は沈線で区画した磨消縄文が施される口縁部片である。口唇は鋭角である。内面の口縁部に、１条の凹線がめぐっている。

24は口縁部に刺突文が施された２本の微隆起線が貼付している。胴部は細沈線で区画された磨消縄文が施される。内面の口縁部に１条の凹線文がめぐる。

25は口唇上に３条の刻み目がある瘤状の突起が１個ついている。文様は、沈線で区画された磨消縄文である。内面の口縁部には３条の平行沈線文が施される。

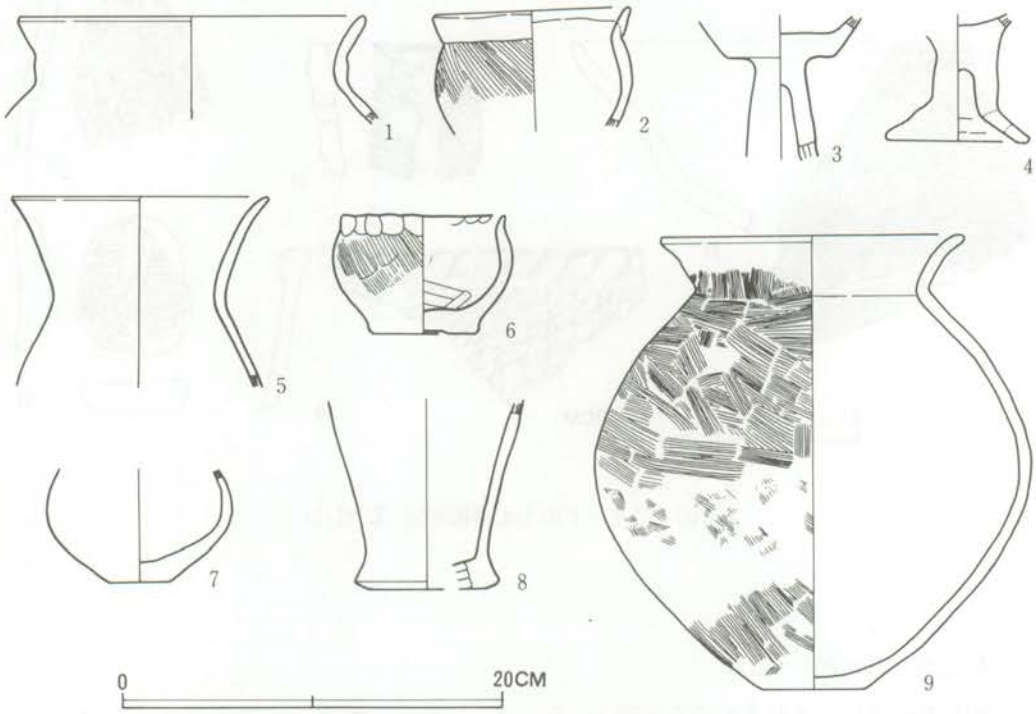
26は文様が沈線で区画された磨消縄文である。傾きは逆「く」の字状に内曲し、口唇はやや鋭角である。

27は平行沈線で区画した中に斜条線が充塡される。口唇はやや鋭角で、傾きは外反する。

28～30は指頭圧痕のある隆線が１本口縁にそって貼付される。胴部には粗雑な斜縄文が施される。28には補修孔がある。

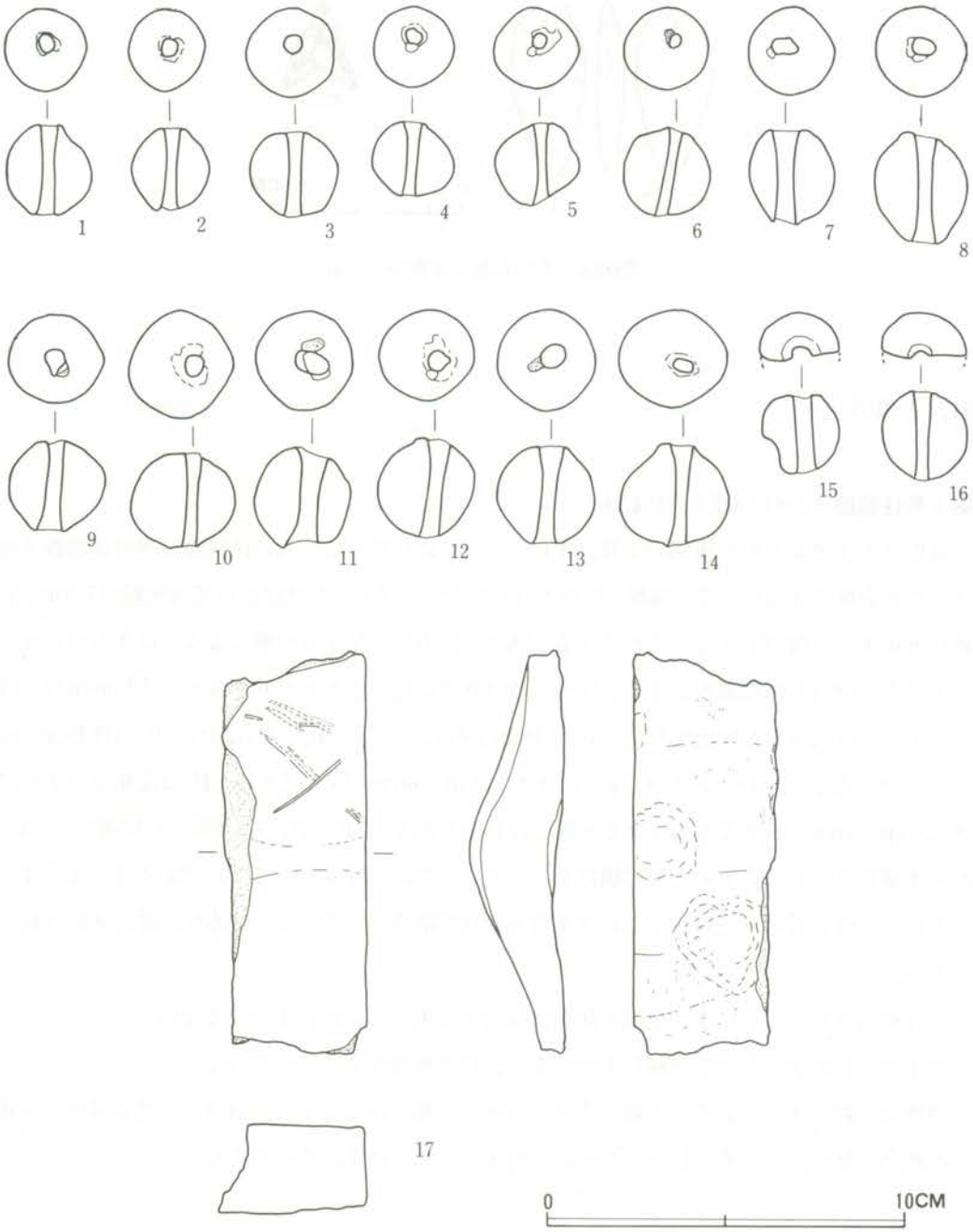
土錘（第57図31）

31は長楕円形の土器片錘である。胴部を再利用している。器長5.3cm、器幅4.4cm、器厚1.2cm、重量36ｇ。時期は加曽利Ｅ式期。



第58図　表採土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
表－1	甕	18 × ×	黄褐色、良、体部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	口縁部のみ
－2	甕	10.2 × ×	黄褐色、良、ナデの後体部外面上半をハケ調整	底部欠失
－3	高　杯	× ×	淡黄褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ナデ	
－4	高　杯	× × 7.5	暗赤褐色、不良、脚部内面ナデの他全面ヘラミガキ	
－5	甕	13.2 × ×	赤褐色、良、体部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	体部下半欠失
－6	椀	8.6 × × 55	暗赤褐色、不良、口縁部指おさえ、体部ナデ後体部外面上半ハケ調整	
－7	坩	× × 3.3	赤褐色(内面黒色)、不良、ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	口縁部欠失
－8	甕	× × 7.6	淡黄褐色、良、体部内外面ヘラミガキ、底部外面に網代痕	
－9	甕	16 × 23.3 × 5.4	黄褐色、良、ハケ調整の後口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	



第59図　表採土玉・砥石実測図（1/2）

第60図　表採石製品実測図（1/2）

Ｂ．古墳時代

第１号住居跡（第61～63図、ＰＬ26－１）

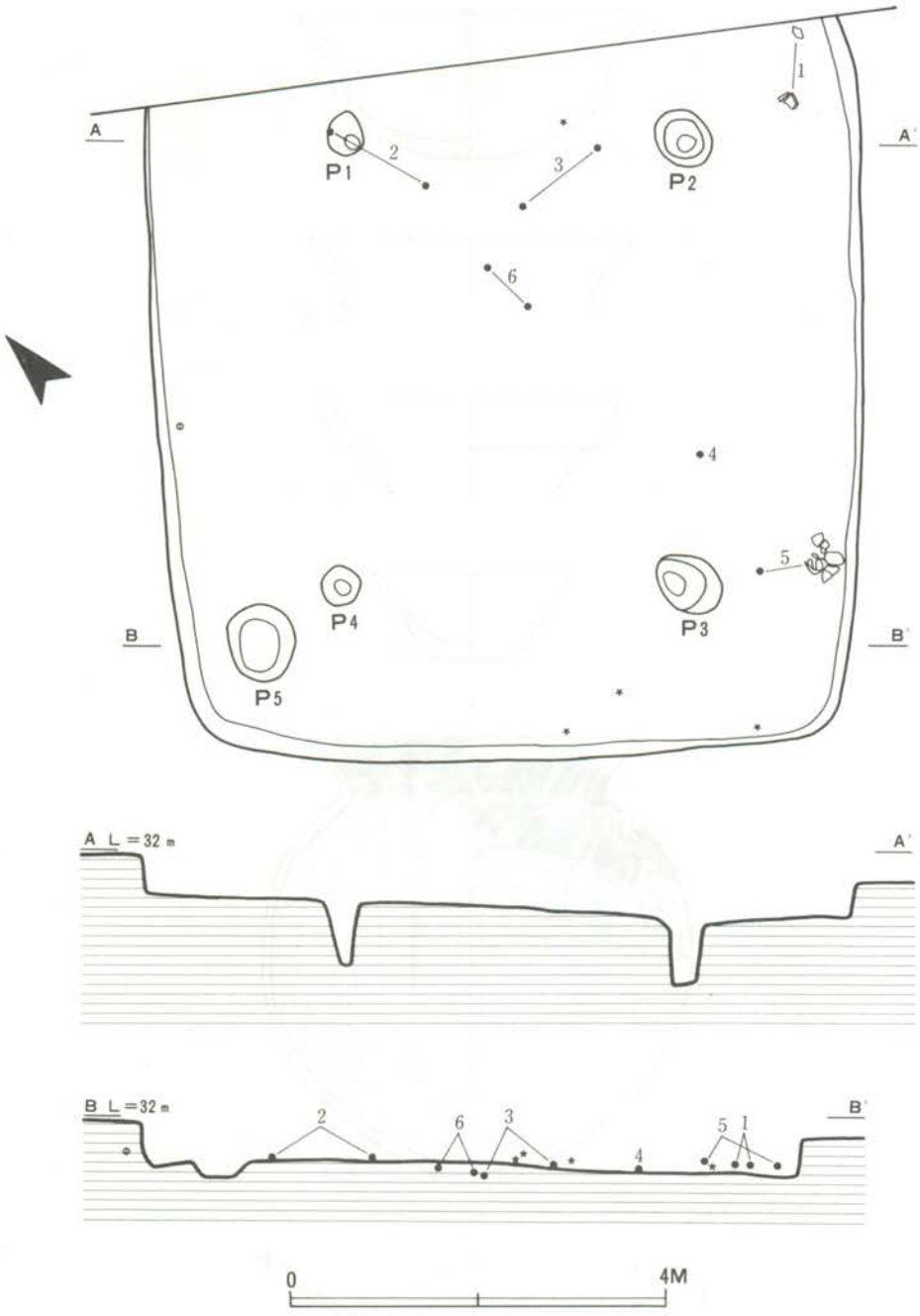
発掘区の中央よりやや東側の４Ｂ、４Ｃグリッドに位置している。住居跡の南壁は調査区域外のため完掘できないので、規模、形態等は不明な点が多い。現状においては短軸は7.2m、長軸は８ｍまでは確認できる。これによると隅丸の長方形を呈する形態になるのはまちがいないであろう。壁は全体に遺存がよく、床からほぼ垂直に近い立ち上がりをみせ、平均40cm程の残りである。柱穴は５本検出された。P_1～P_4が主柱穴である。P_2、P_3はP_1、P_4の径45cm前後より一回り大きいものであるが、深さは４本とも61～66cmと同じである。P_5は北東コーナーにある80cm×70cmの大きなものであるが深さは15cmしかない。P_2、P_4の対角線上に位置　　こめ、前原Ⅰ遺跡に見られるものと同じ構造を示しているため、柱穴としてよいであろう。床面はハードローム面まで掘り込み、そこに黒褐色を入れて踏み固めているが、本住居跡の床面は軟弱である。

炉は検出されてない。本住居跡の床面には火を使用した痕跡がまったくない。

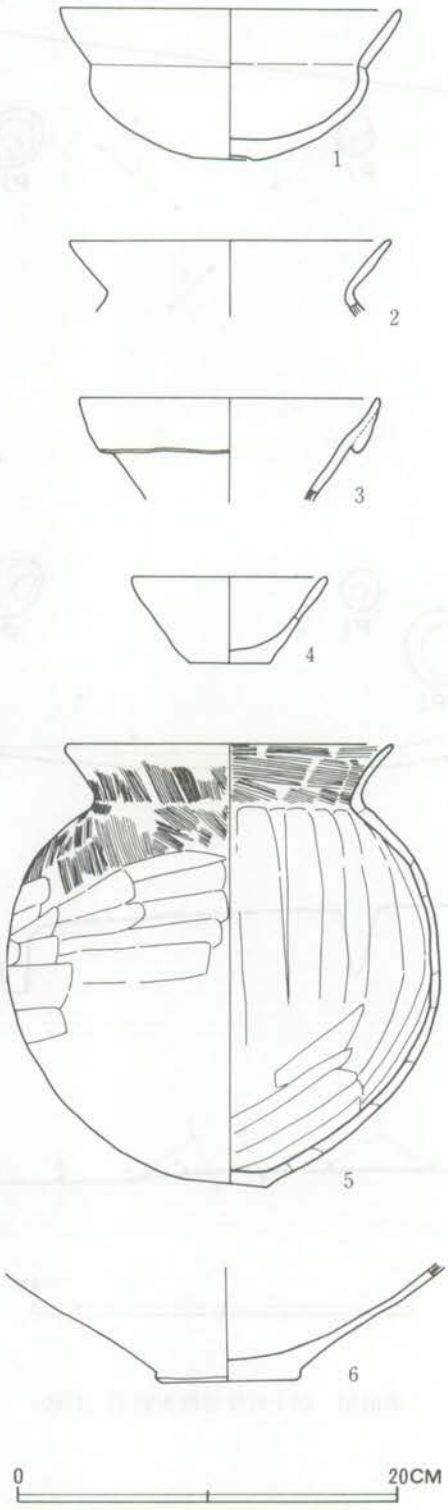
覆土は２層のまったくの単純なものであり、自然堆積をよく示している。

遺物は土器と土玉がある。土器は大形の住居跡の割には少ない。土器の出土地点は中心を除いた地点に散在している。図示したものは椀１、壺１、鉢１、甕３である。

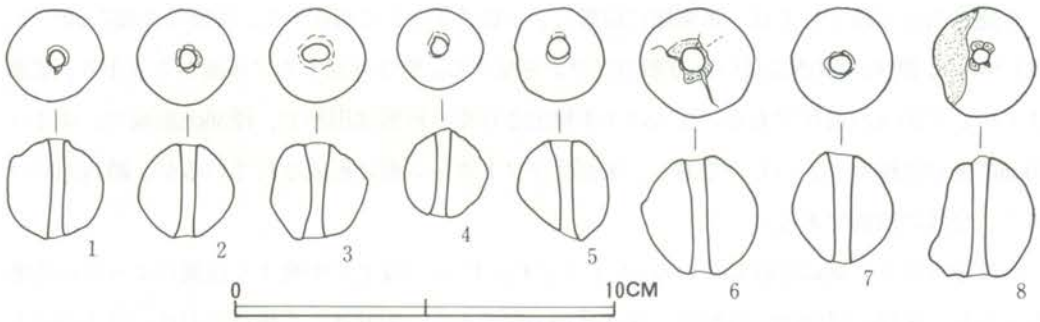
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
１住－１	椀	18 × 7.7 × 3.4	黄褐色、良好、全面入念なヘラミガキ	
－２	甕	16.9 ×　　×	暗褐色、良、ハケ調整の後ヨコナデ	口縁部のみ
－３	壺	15.8 ×　　×	橙褐色、良、ハケ調整後口縁部ヨコナデの他はヘラミガキ	
－４	鉢	10.2 × 4.45 × 4.2	赤褐色、良、全面ヘラミガキ	
－５	甕	17.2 × 22.8 × 4.5	茶褐色、良、ハケ調整の後、体部内外面をヘラケズリ	



第61図　第１号住居跡実測図（1/80）

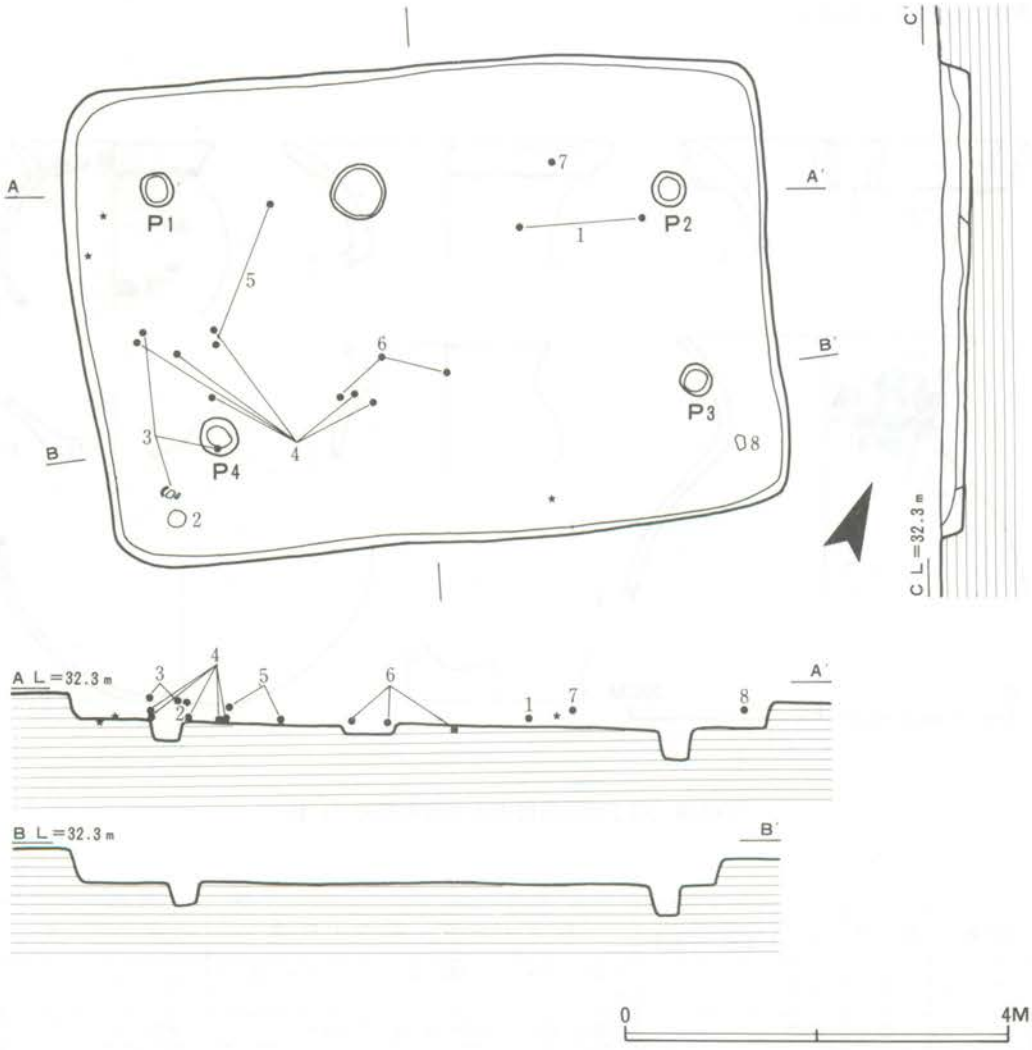


第62図　第１号住居跡出土土器実測図（1/4）



第63図　第１号住居跡出土土玉実測図（1/2）

第２号住居跡（第64～66図、ＰＬ26－２）

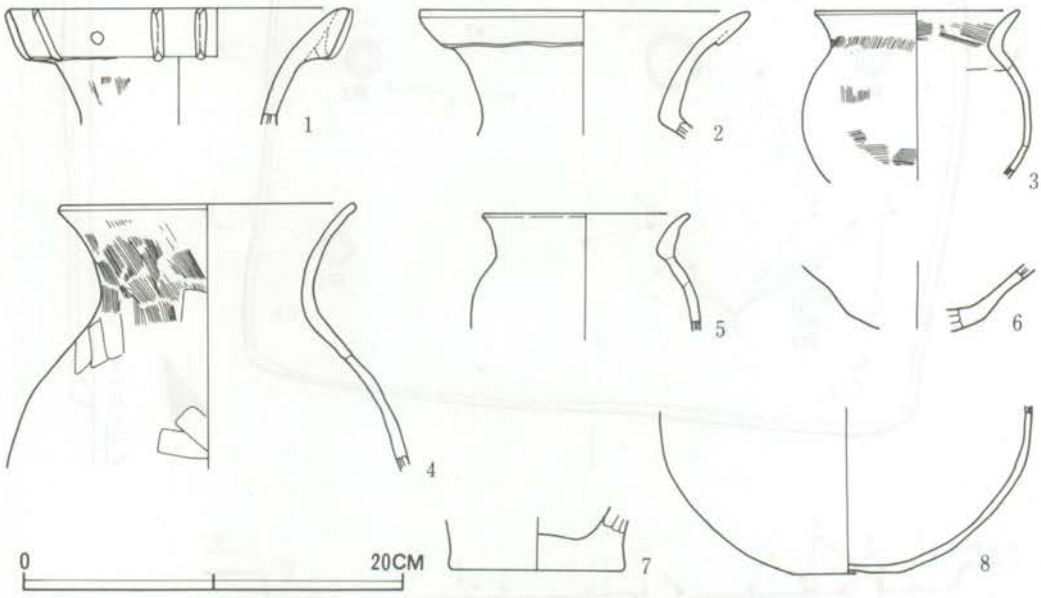


第64図　第２号住居跡実測図（1/80）

本遺跡の住居跡としては一番東側に位置し、３Ｂグリッドに所在する。規模は長軸7.2m、短軸4.9mで、隅丸の東西に長い長方形のプランを呈する。壁は外反ぎみに床面から立上り、壁高は平均して30cmの遺存である。柱穴は４本検出された。形態は円形で、径36cm前後で、深さは30cm前後の規模の小さいものである。床面はソフトローム面に形成されているが、踏み固めは弱く、全体に軟弱である。

炉は中央より北側に位置している。ちょうどP_1、P_2の直線上で中央より西側によっている地点である。規模は径60cmの円形で、深さは10cm程である。炉壁はよく焼けており、埋土中にも焼土は多量に含まれていた。

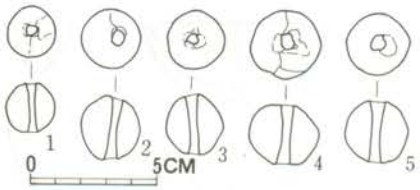
覆土は単純な２層からなり、自然埋没をよく示している。遺物は土器と土玉である。遺物は散在して出土しているが、南西コーナー付近にやや集中性が認められる。図示したものは壺４、甕３、高杯１である。



第65図　第２号住居跡出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
２住－１	壺	17.5 ×　　×	赤褐色、良好、ハケ調整の後全面へラミガキ、複合口縁	口縁部のみ
－２	壺	17.2 ×　　×	黄褐色、良、ハケ調整の後全面へラミガキ	口縁部のみ
－３	甕	10.6 ×　　×	黄褐色、良、ハケ調整の後へラケズリ	底部欠失
－４	壺	15.2 ×　　×	黄褐色、不良、ハケ調整後体部外面上部へラミガキ	

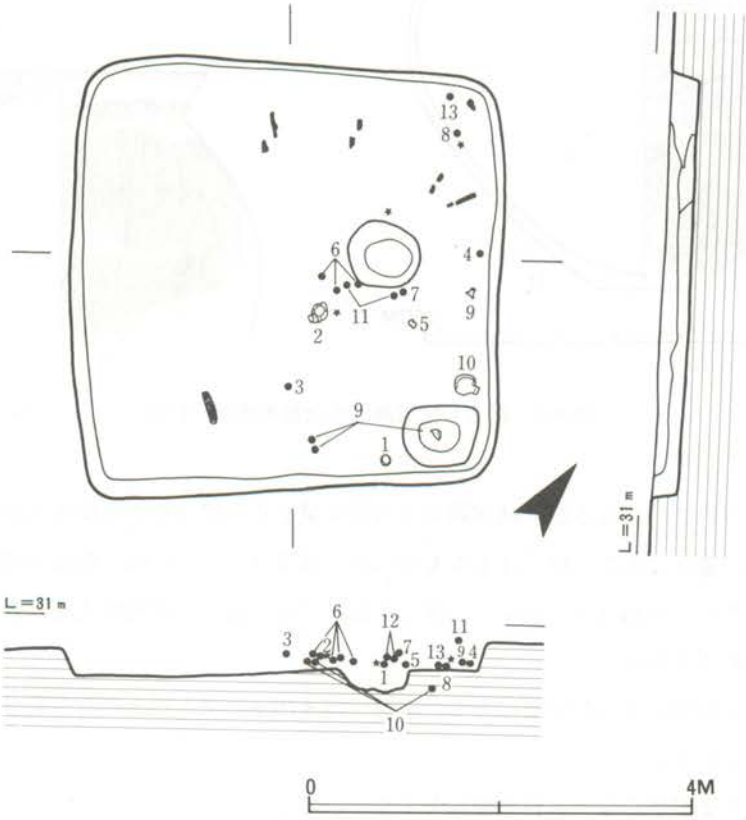
－5	高　杯		赤褐色、良、内外面ともヘラミガキ	杯部胴のみ
－6	甕	10.8 ×　　×	暗黄褐色、良、ハケ調整の後ヨコナデ	
－7	甕	×　　× 9	赤褐色、良、体部内外面ヘラケズリ底部に網代痕	
－8	壺	×　　× 4.8	黄褐色、不良、全面ナデ	体部下半のみ



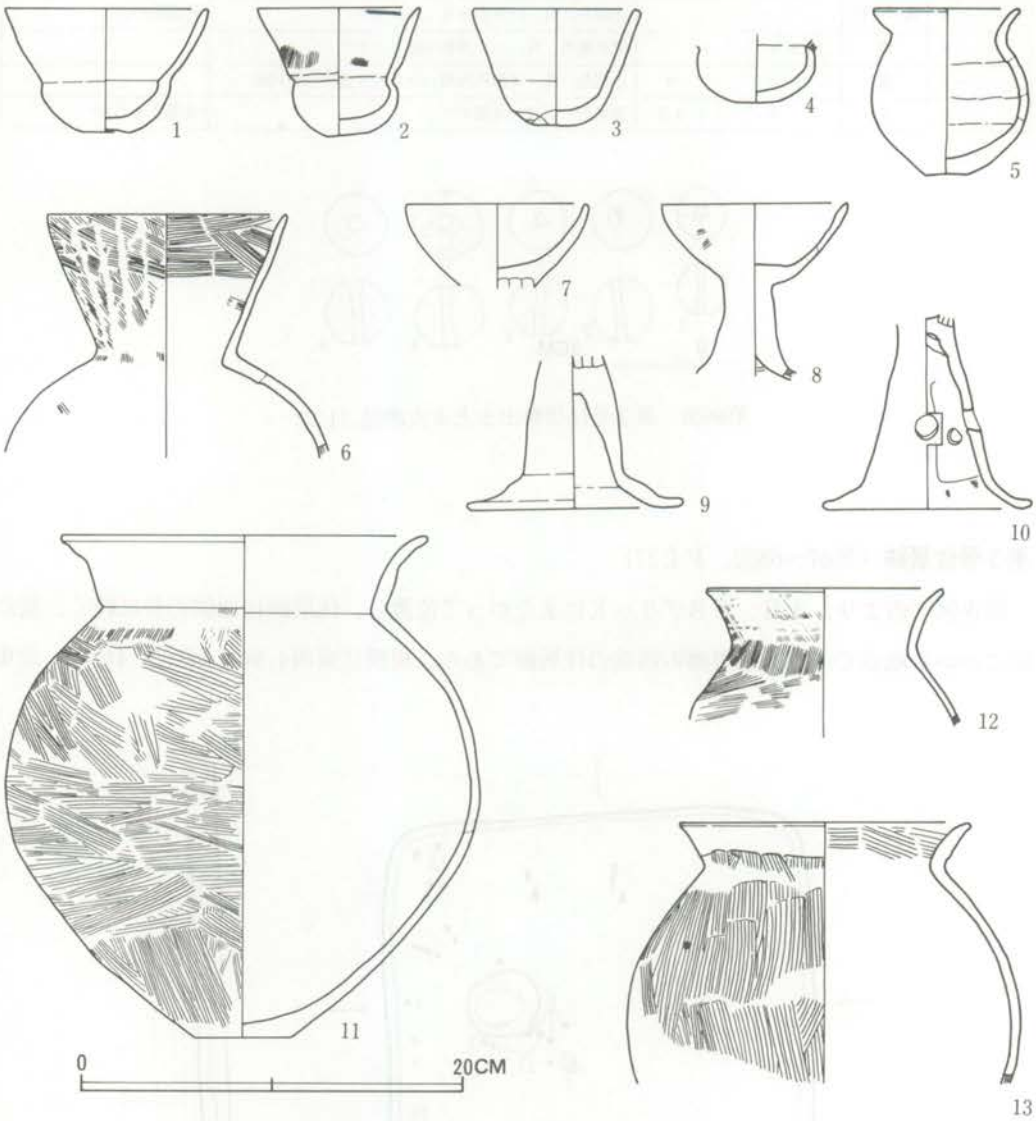
第66図　第２号住居跡出土土玉実測図（1/2）

第３号住居跡（第67～68図、ＰＬ27）

調査区の西より、４Ｂ、５Ｂグリッドにまたがって位置し、住居跡は西側の谷に続く、緩斜面にかかる地点であり、本遺跡の西端の住居跡である。規模は東西4.5m、南北4.4mで、北東



第67図　第３号住居跡実測図（1/80）



第68図　第３号住居跡出土土器実測図（1/4）

コーナーでややいびつになるが、ほぼ隅丸正方形を呈する。壁はやや外反ぎみに立上がり、壁高は平均35cmの遺存である。柱穴は１本もないが、南東コーナーに80×60cmの貯蔵穴がある。深さは25cmである。床面はハードローム面の上面まで掘り込み、黄褐色土を入れて踏み固めているが全体に軟弱である。

炉は中央から東側によった位置にある。規模は75×70cm、深さ25cmの円形を呈している。全体によく焼けている。

覆土は大きく２層からなり、自然埋没をよく示している。

遺物は土器と土玉と炭化材である。遺物は東半分に片寄った状態で出土している。炭化材の

出土傾向も同じである。土器は坩４、高杯４、壺１、甕４であり、火災にあっているため良好な一括資料である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
3住－1	坩	10.6 ×　　× 2.5	黄褐色、良、全面ヘラミガキ、凹み底	
－2	坩	8.4 ×　　× 2.5	黄褐色、良、口縁部ハケ調整、体部ヘラケズリの後全面ナデ	
－3	坩	8.6 × 5.9 × 3	黄褐色、良、口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリの後ヘラミガキ	
－4	坩	×　　×	茶褐色、不良、全面ヘラミガキ	口縁部欠失
－5	甕	7.5 × 8.6 × 2.1	黒色、不良、口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	
－6	壺	12.6 ×　　×	赤褐色、良好、ハケ調整の後全面ヘラミガキ	体部下半欠失
－7	高　杯	7.5 ×　　×	赤褐色、不良、ハケ調整の後ナデ	脚部欠失
－8	高　杯	7.7 ×　　×	赤褐色、良、脚部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	裾部欠失
－9	高　杯	×　　× 11.4	赤褐色、長石粒、良、全面ナデ	
－10	高　杯	×　　× 10.9	淡橙褐色、やや良好、全面ヘラミガキ	
－11	甕	19 × 25.7 × 5	茶褐色、良、体部外面ハケ調整、内面ヘラケズリの後ナデ	
－12	甕	12.4 ×　　×	黄褐色、良、外面ハケ調整、内面ヘラケズリ	体部下半欠失
－13	甕	15.3 ×　　×	暗褐色(黒斑有り)、良、ハケ調整後体部内面ヘラケズリ	体部下半欠失

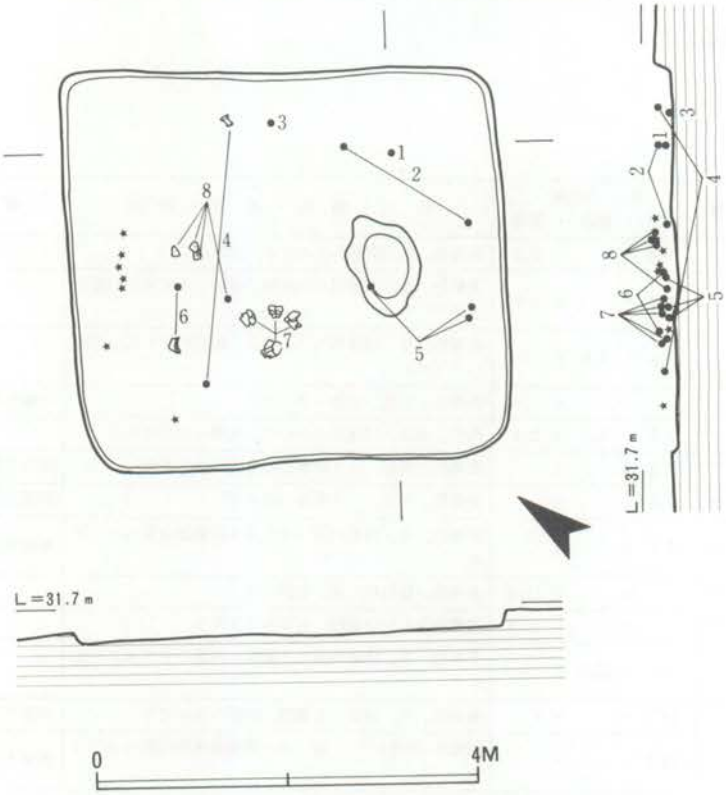
第４号住居跡（第69～71図、ＰＬ28－１）

第３号住居跡の北東に位置し、４Ｂグリッドに所在する。規模は南北４ｍ、東西4.6mの北西コーナーが大きく孤を描く隅丸長方形である。壁は外反ぎみに立上がり、壁高は平均16cmのあまり遺存のよくないものである。柱穴も貯蔵穴もない。床面はソフトローム面であり踏み固めも弱く軟弱である。

炉は中央から東側によった位置にある。規模は１ｍ×0.7mの不整楕円形であり、深さは10cm弱のものである。炉は浅いが良好に焼けている。

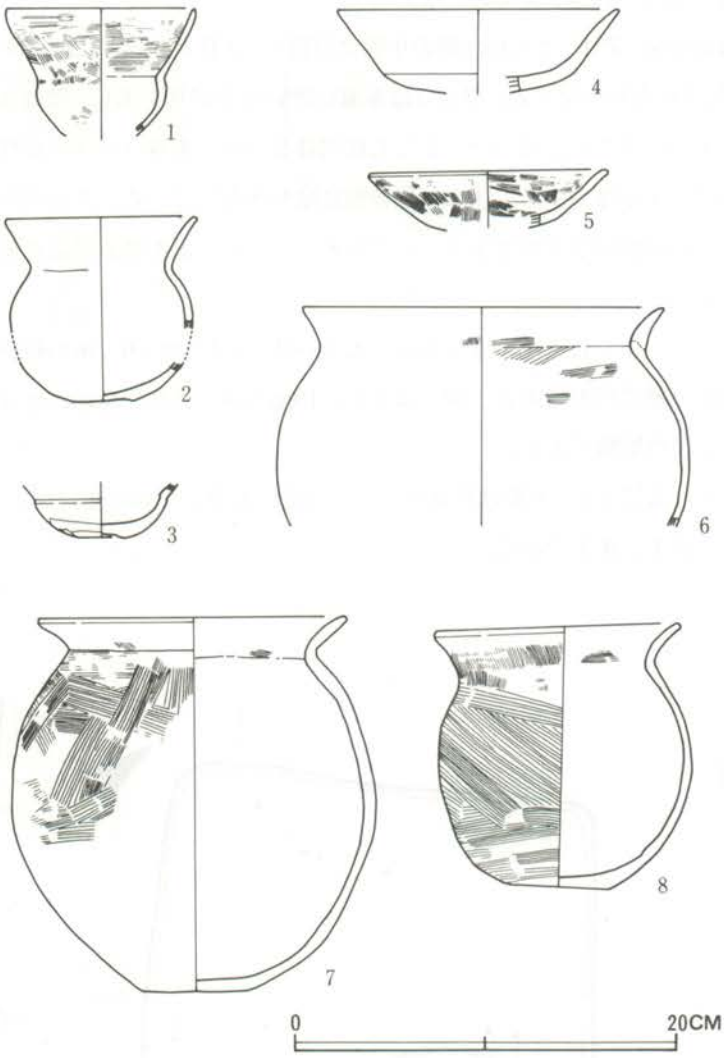
覆土は１層であり、自然堆積である。

遺物は土器と土玉である。遺物の出土状態は散在した状態である。土器は坩３、高杯２、甕３である。

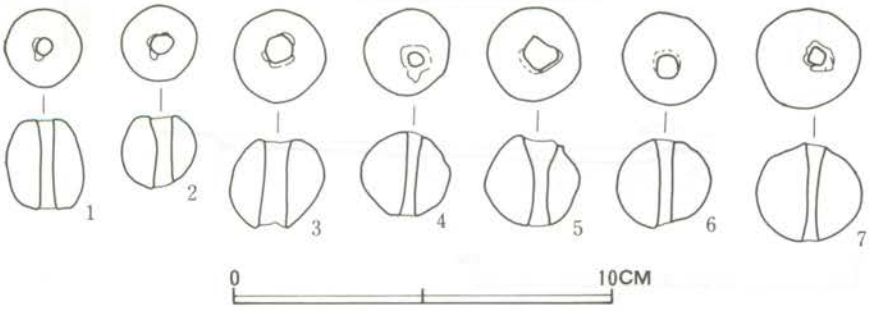


第69図　第4号住居跡実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
4住－1	坩	15 × ×	黄褐色、良、ハケ調整の後体部内外をナデ	底部欠失
－2	坩	9.8 × 9.5 × 3.2	暗褐色、良、体部外面へラミガキ、内面はナデ	
－3	坩	× × 2.1	黄褐色、良、体部下半へラケズリ	口縁部欠失
－4	高　杯	14.8 × ×	赤褐色、良、ハケ調整の後へラミガキ	脚部欠失
－5	高　杯	12.2 × ×	茶褐色、良、ハケ調整の後ヨコナデ	脚部欠失
－6	甕	18.9 × ×	暗褐色、不良、ハケ調整の後ナデ	体部下半欠失
－7	甕	16.2 × 19.2 × 5.7	黒色・長石粒、良、ハケ調整の後、体部外面下半・体部内面へラケズリ	
－8	甕	12.1 × 8.7 × 4.8	黄褐色、良、外面ハケ調整、内面ナデ	



第70図　第４号住居跡出土土器実測図（1/4）



第71図　第４号住居跡出土土玉実測図（1/2）

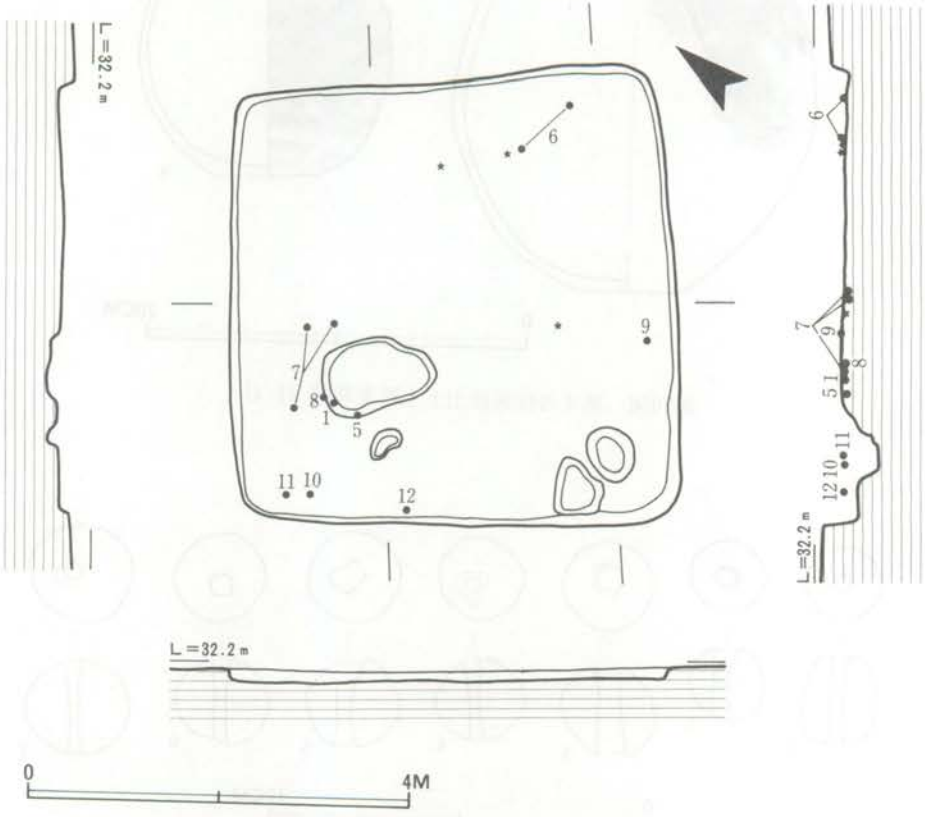
第５号住居跡（第72～74図、ＰＬ28－２）

調査区のほぼ中央、第１、２号住居跡の中間に位置し、３Ｂグリッドに所在する。規模は4.6×4.5mで、隅丸の正方形を呈する。壁はほぼ垂直に近い立上がりを示し、壁高は平均20cmであまり遺存のよいものではない。はっきりとした柱穴はないが、南東コーナーに径50cm内外、深さ20cmの規模のピットが２つある。床面は部分的に貼り床をしている。その場所は炉を中心とした東側とピットの北側の２ケ所である。いずれもハードロームを踏み固めたものであり、良好な床面をしている。

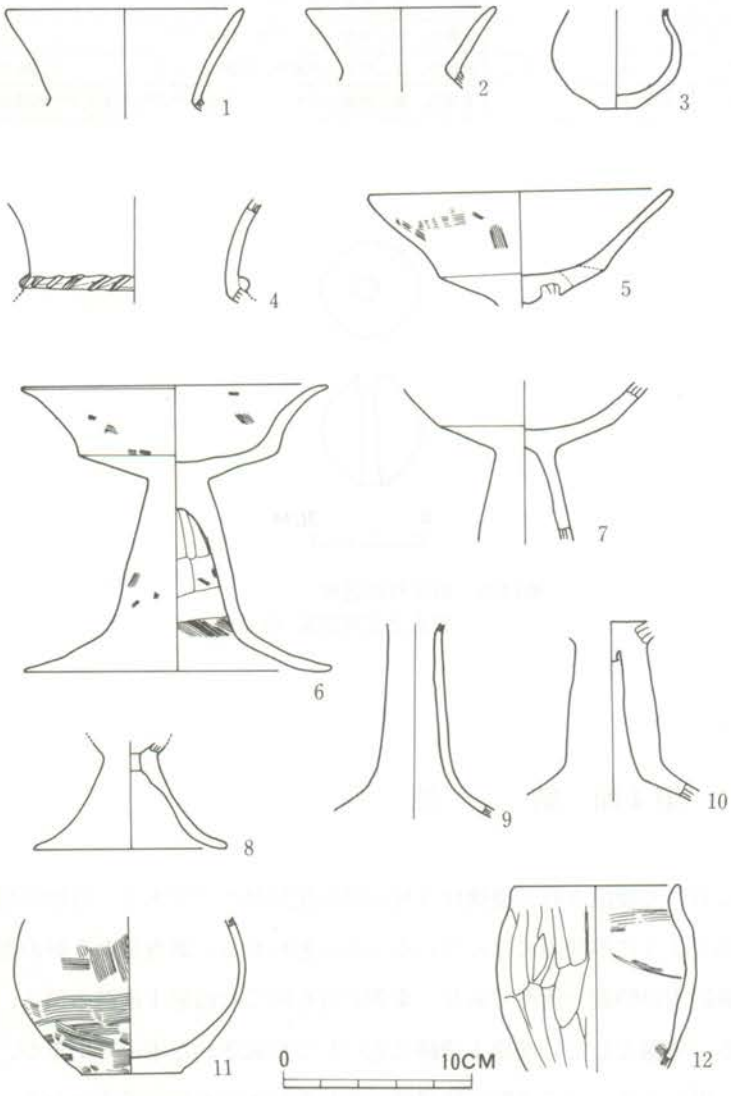
炉は北西コーナーよりに大小の２つある。大きいほうは1.2m×0.7mの楕円形、小さいほうは40cm×20cmの不整楕円形である。深さはともに10cm内外であり、良好に焼けている。

覆土は１層で自然堆積である。

遺物は土器と土玉である。土器は北東コーナー付近に集中している傾向がある。土器は坩３、高杯６、壺１、甕１、鉢１である。



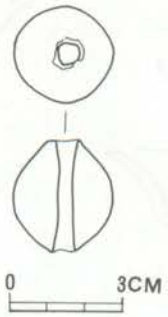
第72図　第５号住居跡実測図（1/80）



第73図　第5号住居跡出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
5住－1	坩	9.8 × ×	淡赤褐色、良好、全面ヘラミガキ	
－2	坩	12.3 × ×	暗黄褐色、良、全面ヘラミガキ	
－3	坩	× × 1.9	赤褐色、不良、外面ヘラミガキ内面ナデ	口縁部欠失
－4	壺	× ×	黄褐色、良、全面ナデ？頸部に一条の突帯を持つ	
－5	高　杯	15.6 × ×	暗紅色、良好、全面ハケ調整のあとヘラミガキ	
－6	高　杯	16 × 14.0 × 16	暗赤褐色、良、ハケ調整の後脚部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	
－7	高　杯	× ×	赤色(内面淡黄褐色)、良、脚部内面ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	赤彩
－8	高　杯	× × 10.1	茶褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ナデ、単孔	

−9	高　杯	×	×	暗紅色、良、外面ヘラミガキ、内面ナデ	
−10	高　杯	×	×	赤褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ナデ	
−11	甕	×	× 12.2	黄褐色、良、外面ハケ調整、内面ヘラケズリ	口縁部欠失
−12	鉢	8.4 ×	×	赤褐色、良、外面ヘラケズリ、内面ハケ調整の後ナデ	底部欠失



第74図　第5号住居跡
出土土玉実測図（1/2）

第4節　結　　語

前原II遺跡において検出された遺構は5軒の竪穴住居跡だけである。台地平坦面のほぼ中央に2重の孤を描くように等間隔に並んでいるものと思われる。調査した5軒の竪穴住居跡はいずれも五領式最終末の時期の所産であり、東側の谷を隔てた前原I遺跡の第1、2号土坑と同時期と思われる。集落としては前原I遺跡に先行して形成された場所であるが、すぐに前原I遺跡に移ったと思われる。ここの竪穴住居跡はそれぞれ床面が軟弱であったり、また新しい要素の竪穴住居跡もみられないために短期間しか使用されなかったと思われる節がある。

以上のように考えると、この一帯においてはまず台地の一番東側にあたる本跡において、五領式最終末の時期に集落が形成されはじめて、集落はやがて徐々に西側に移行していくものと思われる。ただし、古墳群の形成される中央部は墓域として、当初より意識されていたものかもしれない。

第 3 章
五丹歩遺跡の調査

第３章　五丹歩遺跡の調査

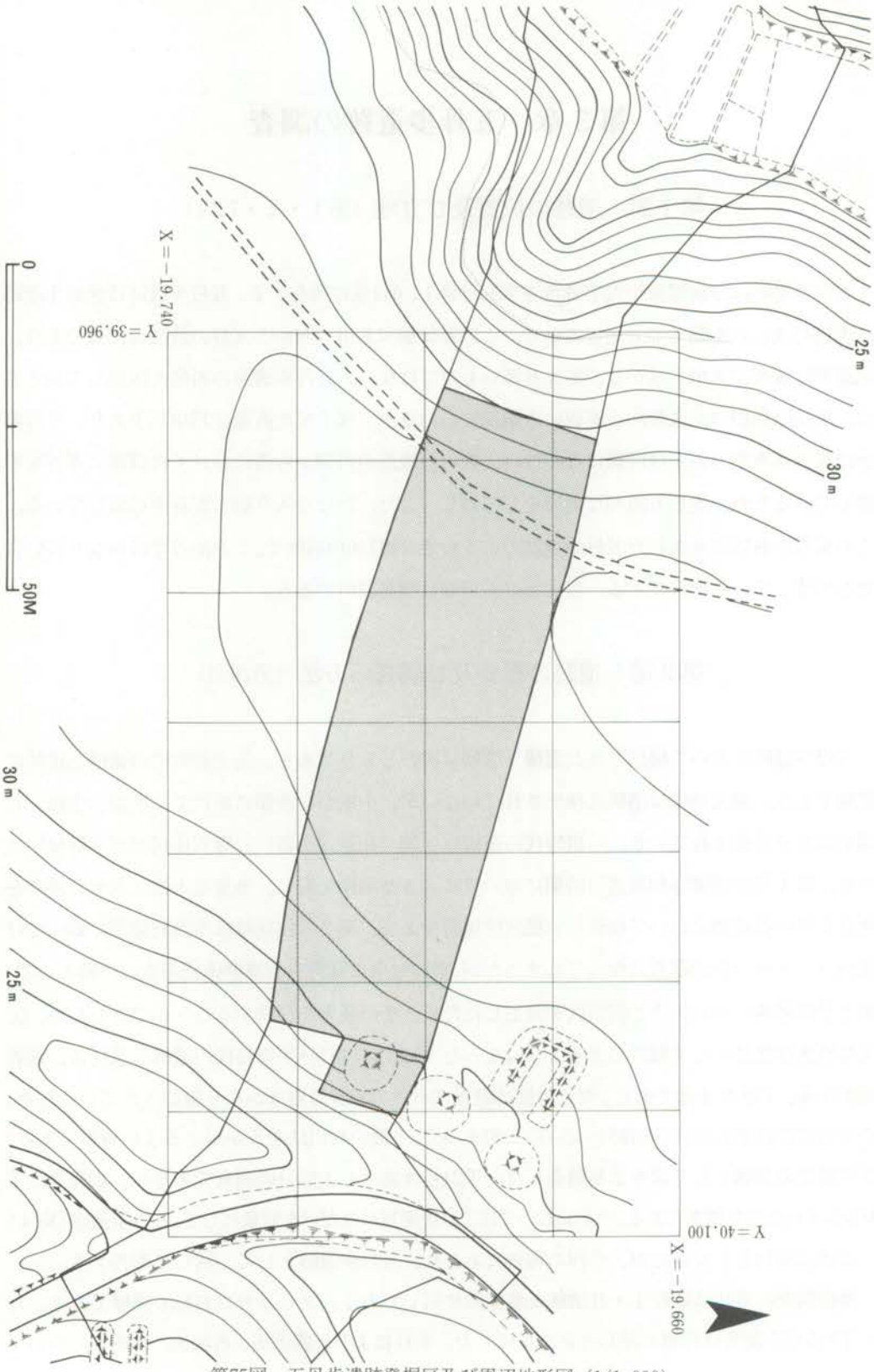
第１節　遺跡の位置及び立地（第１・２・72図）

五丹歩遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字五丹歩１，044他に所在する。五丹歩遺跡は前原Ⅰ遺跡の西側の浅い谷を隔てて立地している。この谷は根木名川へ向かう支谷の最後の部分であり、比高差は最高で８ｍをはかり、あまり深いものではない。五丹歩遺跡の西側を区画している谷は、現在の利根川へ直接向う本谷の末端部にあたるが、深くて比高差は15ｍ以上あり、その開析の鋭さは東側の谷とは問題にならない。五丹歩遺跡の西側から西にかけては直接に本谷を形成しているため、地形も鋭利な表情をしており、また、かなり入り組んだ谷を形成している。この東西の谷にはさまれた五丹歩遺跡ののる台地は幅100ｍ前後で、この周辺ではかなり広い台地を形成している部分である。台地上の平坦面は標高32ｍである。

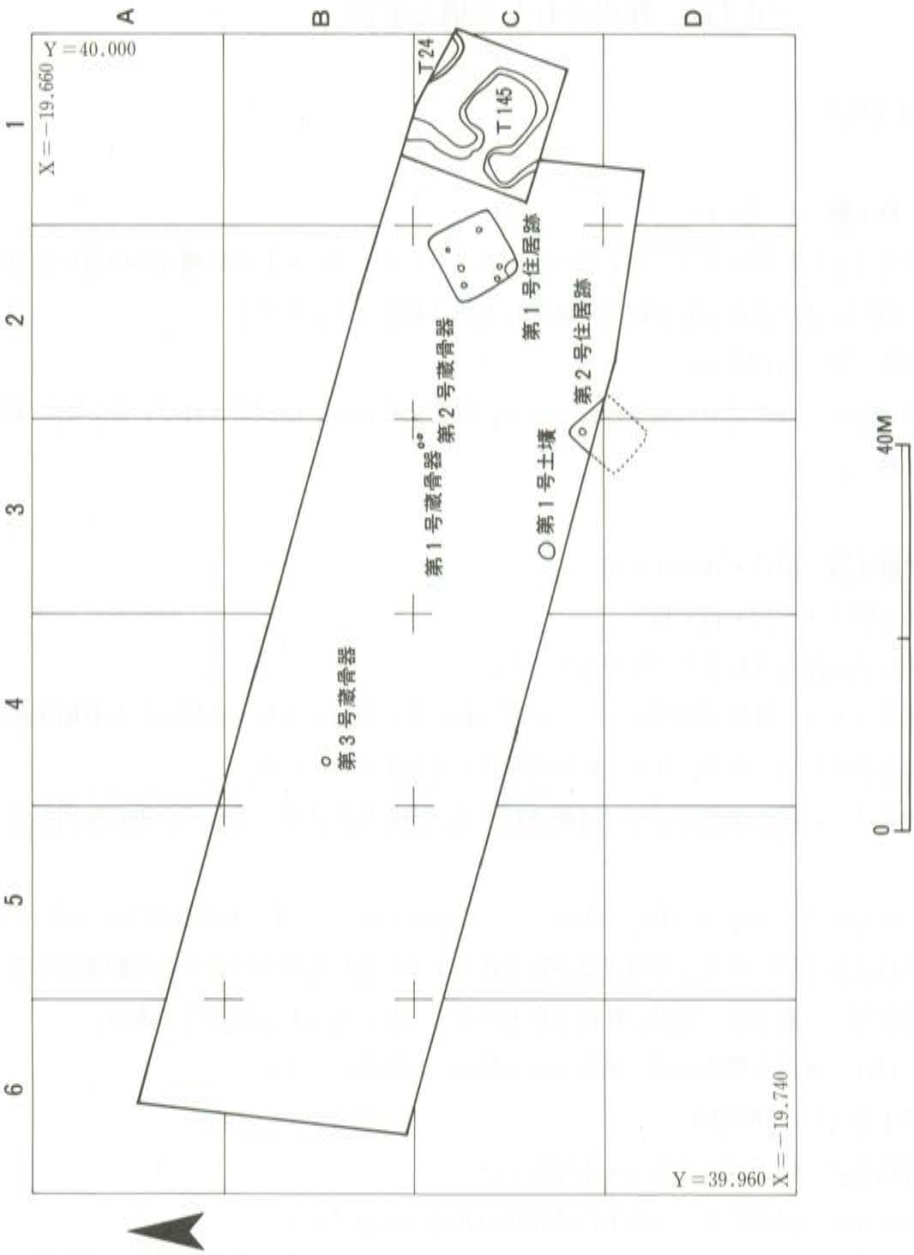
第２節　遺跡の概要及び調査の方法（第76図）

五丹歩遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代の遺構と遺物は皆無である。縄文時代は遺構は検出されていないが、中期から後期にかけての土器、土錘、石器がかなり表採されている。古墳時代の遺構は中期（和泉式土器）の竪穴住居跡が２軒検出された。第１号住居跡は和泉式の時期においては大きな規模を有し、多量な土器と大形の鉄斧を所有している該期においては珍しい竪穴住居跡である。第２号住居跡は本調査範囲においては北西コーナーのみの調査になってしまったが、幸いな事に竜角寺古墳群確認調査の一環として、第２号住居跡にトレンチと拡張区を設定したため、その成果を反映することができたため、完全な竪穴住居跡として報告できるようになった（註１）。奈良・平安時代の遺構と遺物は、蔵骨器が３基、土坑が１基である。周辺の確認調査においても蔵骨器はかなり確認されているため、この周辺に該期の竪穴住居跡がないのと相まって、土地の利用法をうかがえるよい資料である。江戸時代の遺構として塚を２基調査した。Ｔ24号は盛土の１部分の調査であるが、新発見のＴ145号は全面的な調査である。当初においてはこの新発見の塚だけを対象にして、五丹歩遺跡（№４）とは別に№13としていたが、今回の報告にあたり、五丹歩遺跡として一括して報告する。

発掘調査の方法は前原Ⅰ・Ⅱ遺跡と基本的に同じである。グリッドの名称も同様である。ただＴ145号の調査は古墳と同じ方法を採用した。それにより、盛土法、占地法、計画等について明らかになった。



第75図　五丹歩遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）



第76図　五丹歩遺跡遺構配置図（1/800）

註１）　万崎博昭・矢戸三男　「龍角寺古墳群確認調査報告書」　千葉県教育委員会　昭和51年

第３節　検出された遺構と遺物

A．縄文時代

第Ⅰ群土器（第77図１）

口唇部はやや厚味があり、丸くなっている。そして、単節ＲＬの斜縄文が口唇に沿って施される。胴部文様は撚糸文Ｌが縦位に施される。井草式に比定される。

第Ⅱ群土器（第77図２）

縦横に沈線と連続刺突が施文されている。器面はていねいに研磨されている。田戸下層式に比定される。

第Ⅵ群土器（第77・78図３～23）

１類土器（３～12・14・15）

阿玉台式に比定されるものを本類とした。

３・６・８は口縁部が隆帯によって区画され、その中に２条を１単位とした有節沈線がジグザグに施文される。なお、６と８には鶏頭状の突起がついている。

４・５は口縁部が隆帯によって区画され、その中に有節沈線によって二重に楕円形の文様が施されている。

７は山形把手を有し、口縁部が隆帯によって区画され、その中に有節沈線文が施されている。

９～11は無文地に交互に指頭圧痕が施された１本の蛇行隆線文が施された胴部片である。

12は無文地に断面が三角形の隆線文が逆「Ｕ」字状に施される胴部片である。

14・15は口縁部を微隆起線で区画された無文の口縁部片である。

２類土器（13・16～23）

加曽利Ｅ式に比定されるものを本類とした。

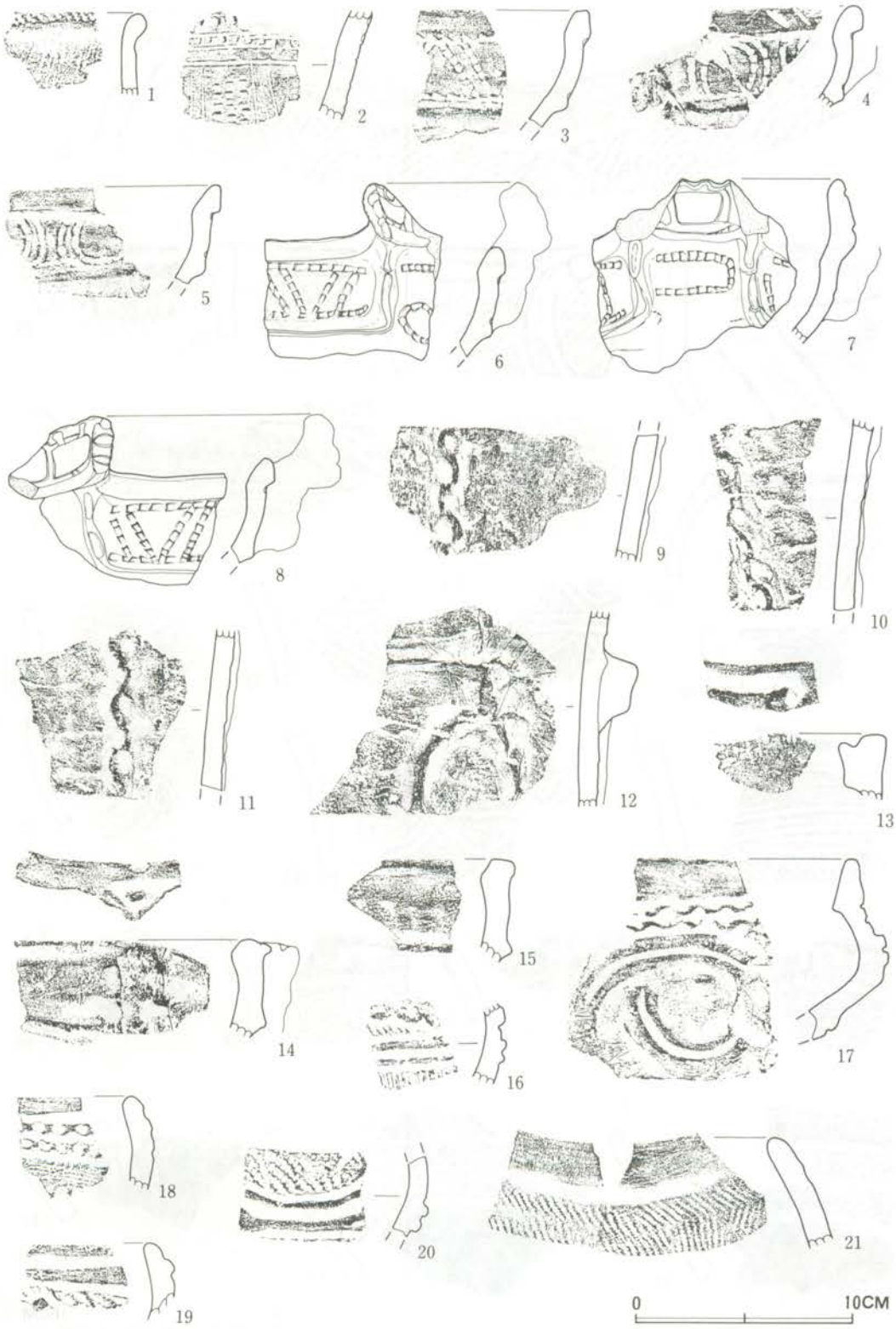
13は浅鉢の口縁部片で、口唇上に渦巻状の沈線文が施される。

16は櫛目文を地文として、その上に交互刺突による１本の波状隆線と２本の平行隆線文が施される。それぞれの隆線には沈線がそえてある。

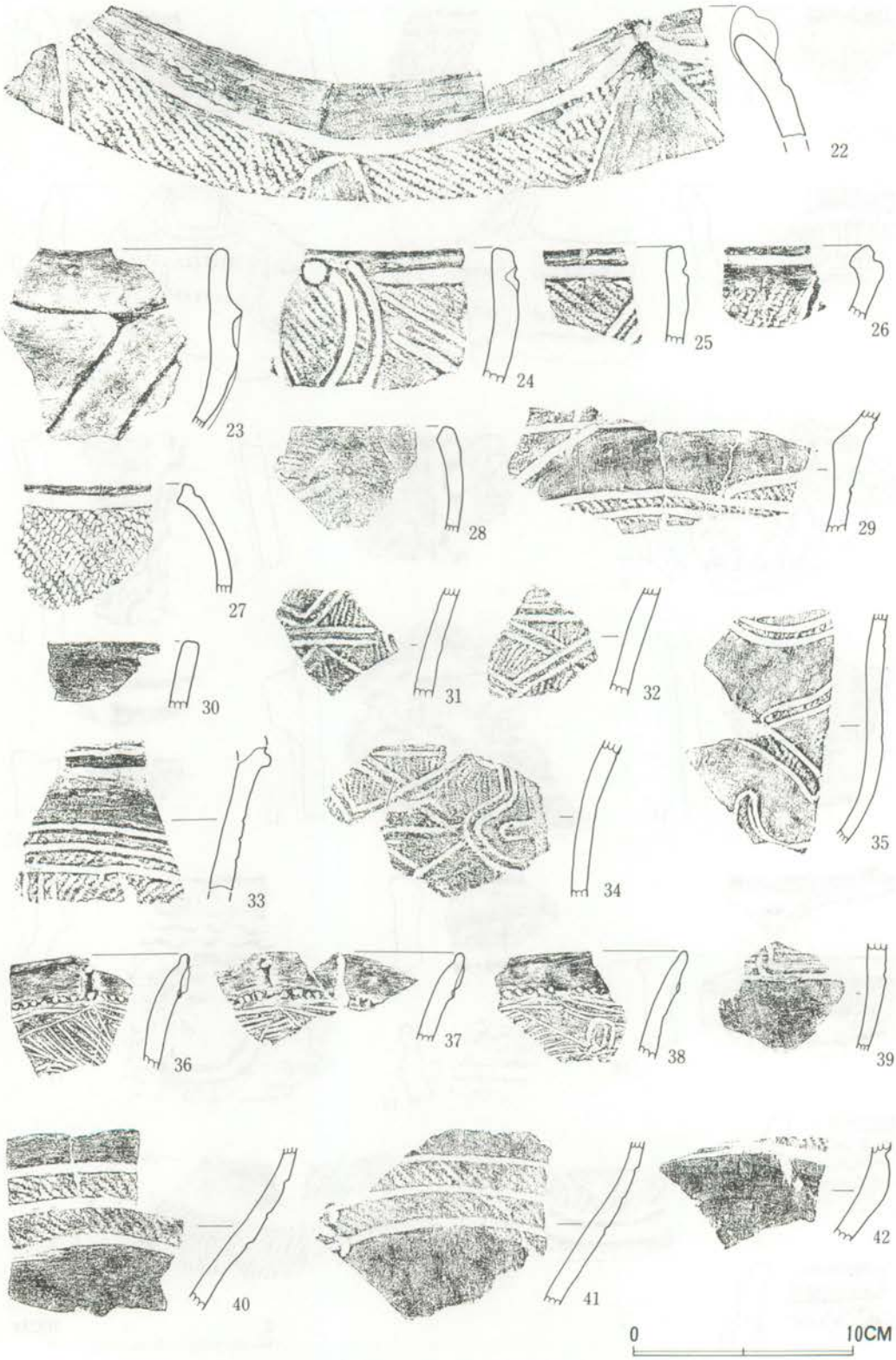
17は口唇にそって隆帯が貼りつけてあり、その下に交互刺突による２条の波状隆線文が施されている。口縁部文様は隆帯による渦巻文が施され、その隆帯上に沈線がなぞられている。内側に稜が見られる。

18は口縁部が３条の平行沈線の間に円形の連続刺突文が施されている。胴部文様は縄文である。

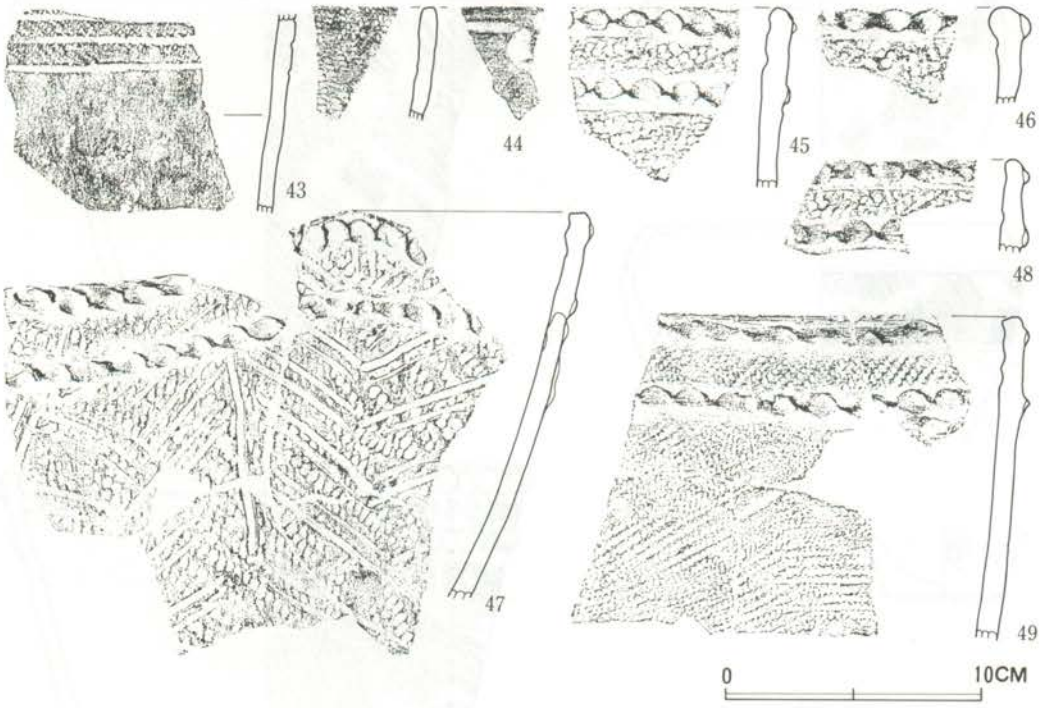
19、20は斜縄文地に隆帯が施される口縁部片である。



第77図　グリッド出土土器拓影図 ①（1/3）



第78図　グリッド出土土器拓影図 ②（1/3）



第79図　グリッド出土土器拓影図 ③（1/3）

21は口唇下２cmぐらいのところに沈線をめぐらせ、口縁部と胴部を区切っている。口縁部は無文帯が、胴部は単節ＲＬの斜縄文が施されている。右側は縄文原体の施文方向の相異により羽状となっている。

22は口唇部に山形突起を有する。口縁部は沈線で区画され無文帯となっている。胴部は単節ＲＬ（横回転）の斜縄文を地文とし、沈線で区画された磨消懸垂文が施されている。

23は微隆起線文だけによる文様が施されている。なお、交差して隆起しているところには、紐類をとおしたと思われる孔があげられている。

第Ⅶ群土器（第78～80図24～55）

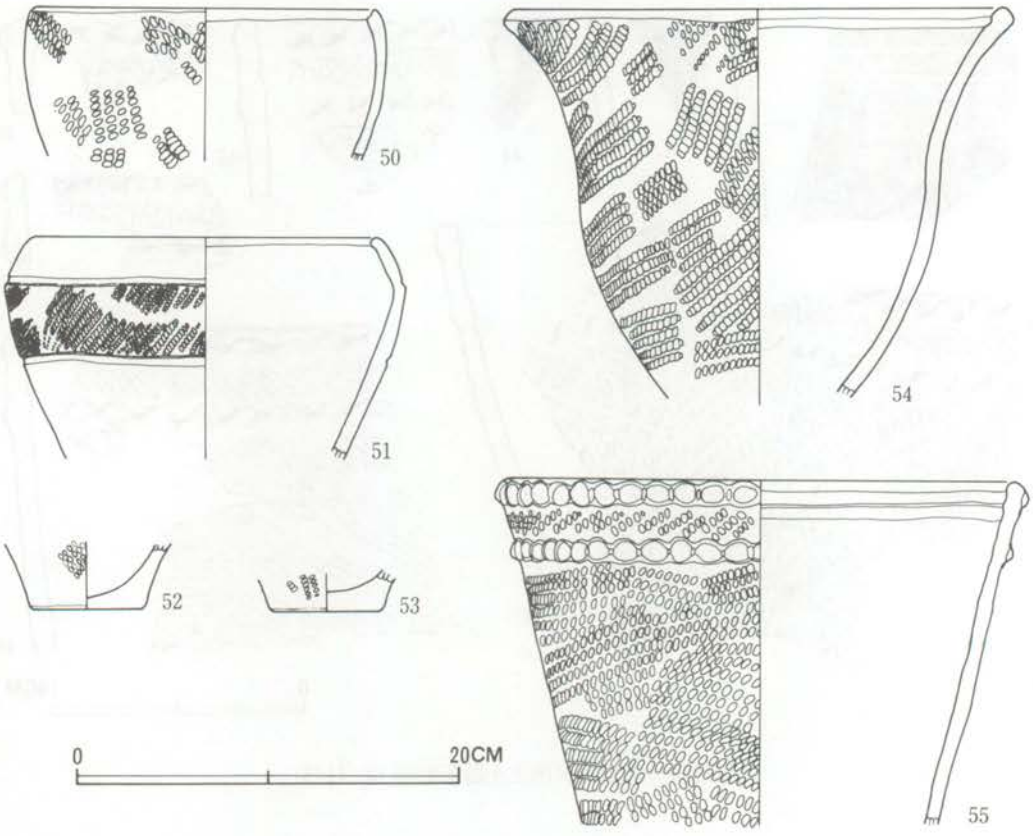
１類土器（24～38）

堀之内式に比定されるものを本類とした。

24・25は同一個体である。単節ＲＬ（横回転）の斜縄文地に、円形刺突文を中心に、平行沈線が施されている。

26・27は口縁に沿って１条の沈線が施されている口縁部片である。26は単節ＬＲの斜縄文を27は単節ＲＬの斜縄文を地文とする。

28は粗雑な縄文が施された口縁部片である。内側の口唇部は急斜度に削られている。



第80図　グリッド出土土器実測図（1/4）

29・35は沈線で区画された磨消縄文が曲線的に施されている。

30は無文の口縁部片である。

31・32・34は同一個体で、単節ＬＲ（横回転）の斜縄文を地文とし、半截竹管によって幾何学的に施されている。

33は胴部が単節ＲＬ（縦回転）の斜縄文を地文とし、３条からなる平行沈線文が縦横に施されている。

36～38は同一個体である。口縁部は連続刺突文が施された微隆起線文によって区画され、無文帯となっている。その中を両端に円形の刺突文が施された縦位の隆線によって区画されている。胴部は条線文が粗雑に施されている。内側の口唇部には１条の沈線が口唇にそって施されている。

２類土器（39～55）

加曽利Ｂ式に比定されるものを本類とした。

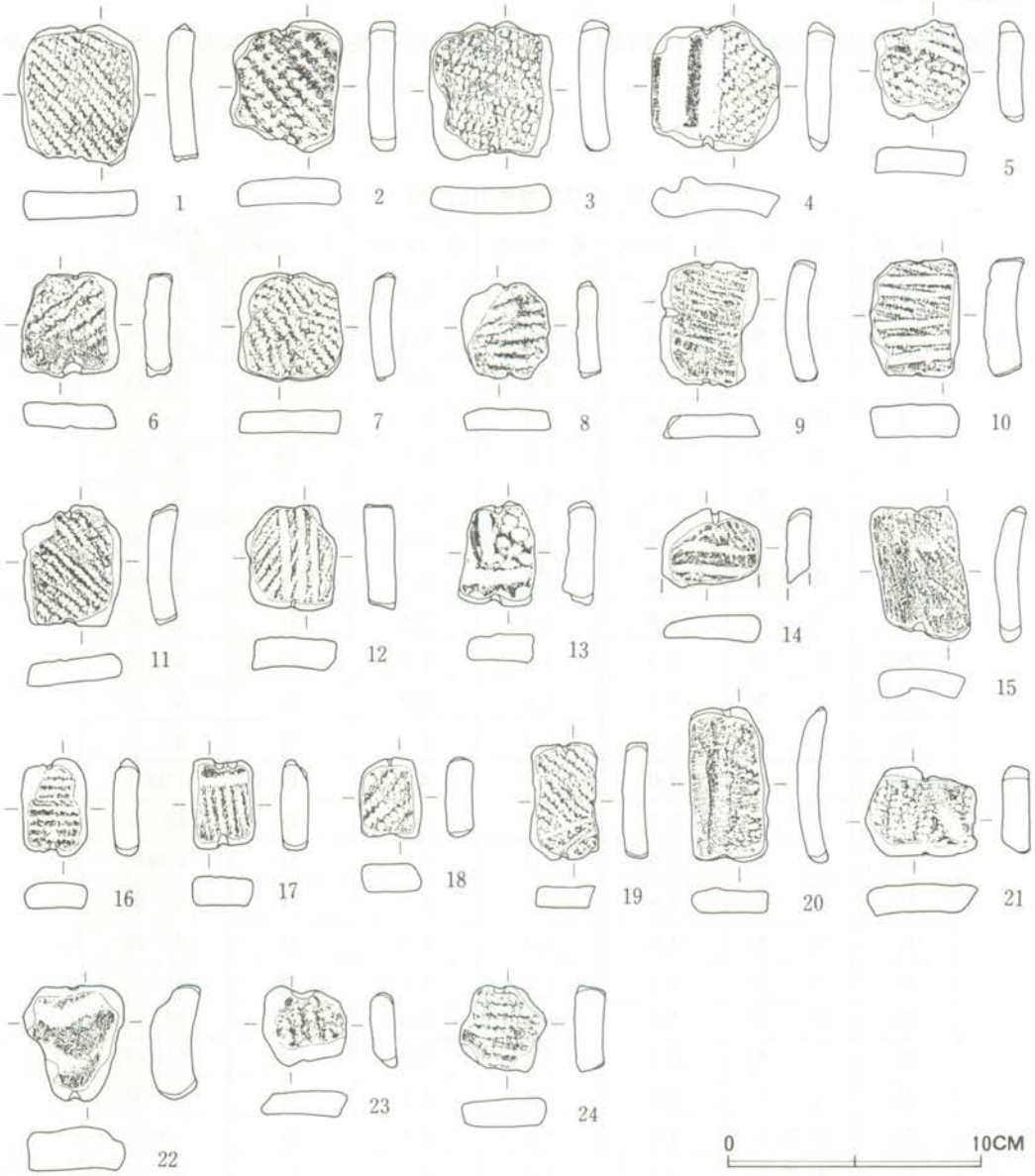
39は無文地に平行沈線文が施されている。また、アクセントをつけるかのように、その中に

「Ｃ」字状の短沈線が２本施されている。

40～43は平行沈線で区画された磨消縄文が施されている。すべて、地文は単節ＲＬ（横回転）の斜縄文である。なお、41には「Ｃ」字状の短沈線が線文部内に３本縦位に施されている。

44は粗雑な縄文が施され、内面の口縁部に１条の沈線がめぐっている。

45～49、55は口縁部に２本の指頭圧痕の施された隆線が貼付されている。内面の口縁部には２～３本の沈線がめぐっている。



第81図　グリッド出土土錘実測図（1/3）

47は波状口縁で斜縄文地に半截竹管による条線文が施されている。

50は単節ＲＬの斜縄文が粗雑に施されている。口唇は内そぎになっているため鋭角である。

51は平行沈線で区画された磨消縄文である。無文帯の部分はていねいに研磨されている。傾きは口縁部のところで内湾する。

52、53は底部片である。平底を呈し、斜縄文が若干施されている。

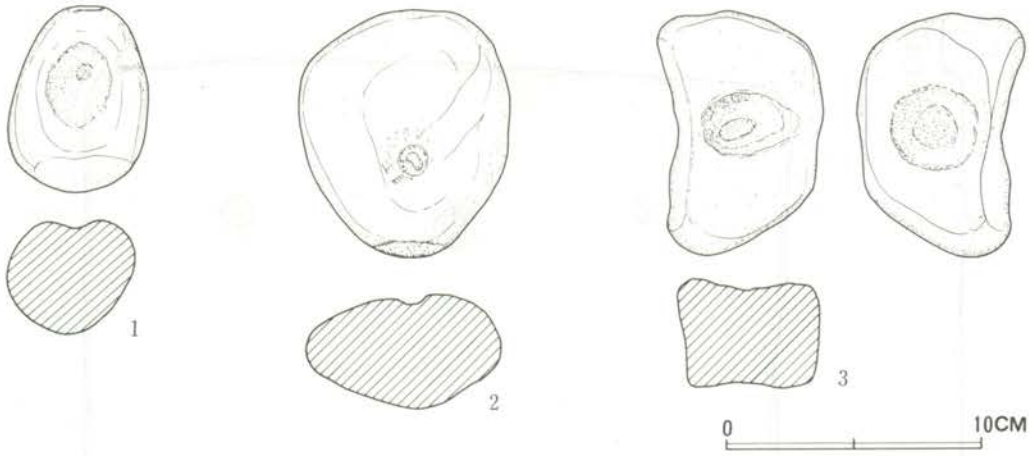
54は単節ＬＲの斜縄文が施されている。内面の口唇部に１条の沈線がめぐっている。傾きは胴部でふくらみをもち、口縁部のところで外反する。

石器（第82図）

石器は３点の凹石が出土しているにすぎない。１は自然石をそのまま使用し、やや平坦とな

第７表　五丹歩遺跡出土土錘一覧表

番　号	器　形	器　長(m)	器　幅(m)	器　厚(m)	重　量(g)	再利用した部　分
1	方　形	5.0	4.7	1.1	36	胴　部
2	台　形	5.0	4.0	1.1	31	胴　部
3	方　形	5.2	4.9	1.0	40	胴　部
4	楕円形	5.0	5.1	1.1	39	口縁部
5	方　形	3.7	3.5	1.0	19	胴　部
6	方　形	4.0	3.8	1.0	21	胴　部
7	方　形	4.1	3.9	0.9	22	胴　部
8	楕円形	3.8	3.3	0.9	16	胴　部
9	方　形	4.8	3.5	0.8	24	胴　部
10	方　形	4.5	3.6	1.2	31	胴　部
11	方　形	4.7	3.8	0.9	22	胴　部
12	方　形	3.7	3.3	1.2	22	胴　部
13	方　形	4.0	2.9	1.1	19	口縁部
14	方　形	2.9	3.9	1.1	14	胴　部
15	方　形	5.0	3.3	0.8	25	口縁部
16	方　形	3.8	2.6	1.0	14	胴　部
17	方　形	3.6	2.4	1.0	13	胴　部
18	方　形	3.1	2.3	1.1	12	胴　部
19	方　形	4.6	2.4	0.8	15	胴　部
20	方　形	6.2	3.1	0.8	27	口縁部
21	方　形	3.6	4.4	1.1	21	胴　部
22	不整形	4.9	3.9	1.1	33	口縁部
23	不整形	3.3	3.2	1.1	12	胴　部
24	不整形	3.5	3.3	1.1	16	胴　部



第82図　グリッド出土石器実測図（1/3）

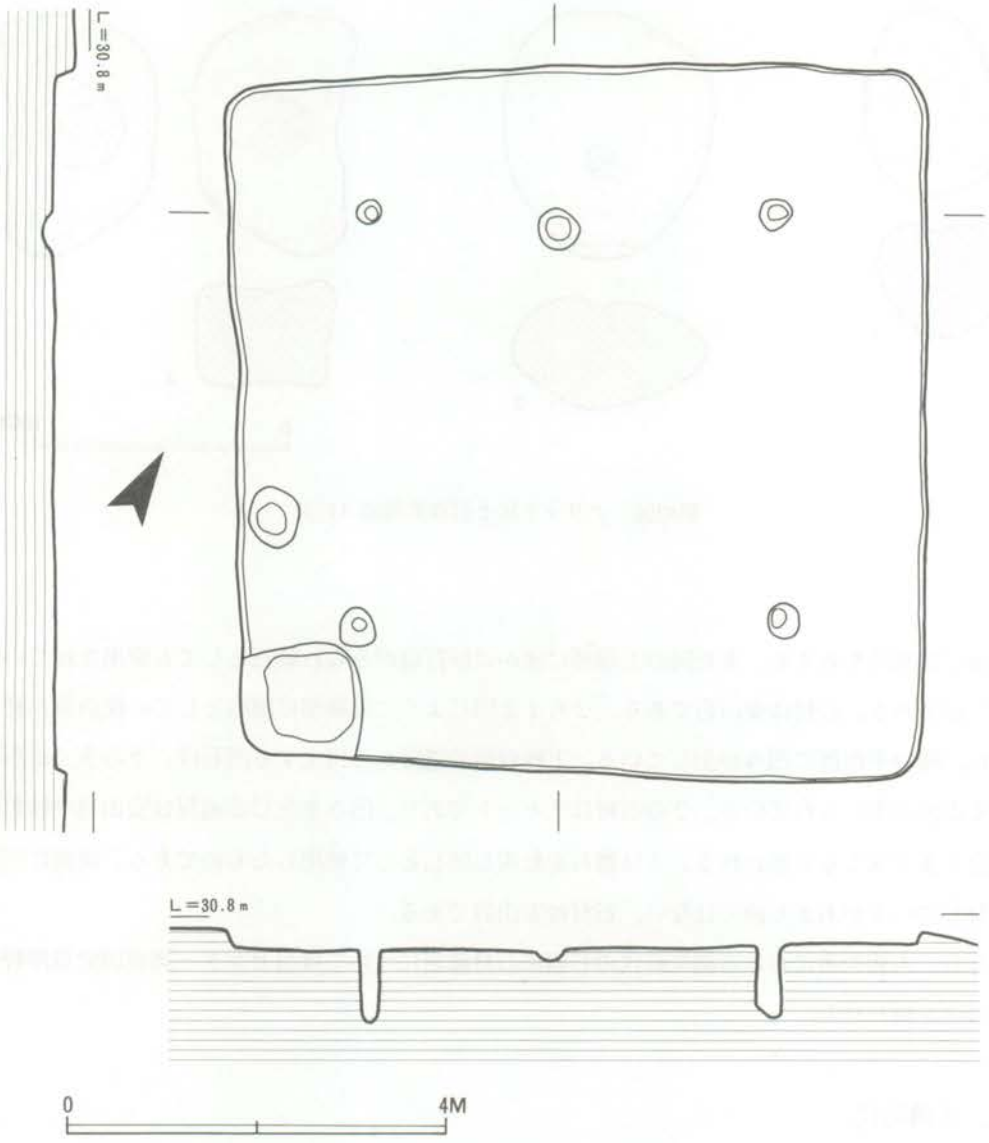
る面に凹部分を有する。また図の上端部に僅かに敲打痕がみられ敲石としても使用されていたことが分かる。石材は安山岩である。２も１と同じように先端部に敲石としての使用痕が認められ、礫の平坦部に凹みが生じている。下総台地の遺跡から出土する凹石は、その多くが石材に安山岩が用いられている。２の石材はチャートであり、凹みを生じる過程は安山岩や砂岩の場合と多少異なると思われる。３は磨石を転用し凹石として使用したものである。両面に凹部を有しているがあまり深くはない。石材は安山岩である。

なお、本報告書における縄文時代の石器の石材鑑定については当センター調査研究員澤野弘氏の手を煩わせた。

B．古墳時代

第１号住居跡（第82～83図、ＰＬ33・34）

調査区のほぼ東端である２Ｃグリッドに位置する。規模は7.3m×7.2mと大形の隅丸方形の住居跡である。壁は床面より外反ぎみに立上がっている。壁高は住居の東側半分が斜面にかかっているため東辺と南辺は遺存が悪く５～10cm程である。他の辺の壁高は平均すると20cm程の遺存である。柱穴は５本検出された。P_1～P_4は主柱穴で径40～32cm、深さ70cm前後の規模のものである。主柱穴はそれぞれ各コーナーの対角線上に位置し、等間隔に配置されているが、P_4だけがややずれる。P_5は主柱穴より規模が大きく70×55cm、深さ40cmのものである。位置が西辺の中央より南に寄った壁際であり、中より土器が出土しているところから貯蔵穴の可能性はある。ちゃんとした貯蔵穴は南西コーナーにある。規模は1.2×1.3mで深さ30cmである。プラ



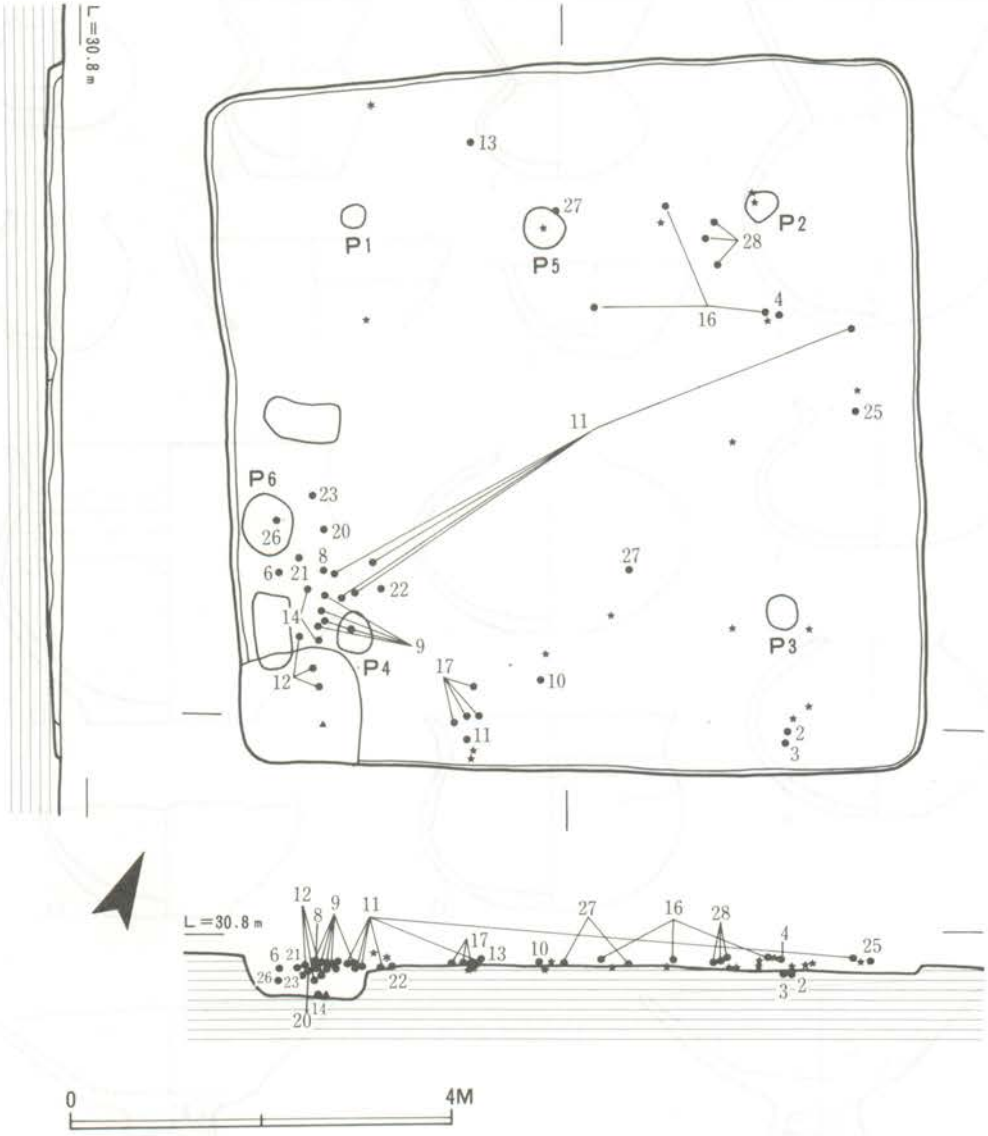
第83図　第1号住居跡実測図（1/80）

ンは正方形を呈し、土器もかなり出土している。床面はハードローム上面まで掘り込み、茶褐色土で踏み固めているが、全体に軟弱である。

炉はP_1とP_2の直線上に並びかつその中間に位置している。規模は径42cm、深さ10cmで底面は摺鉢状を呈しており、よく焼けている。

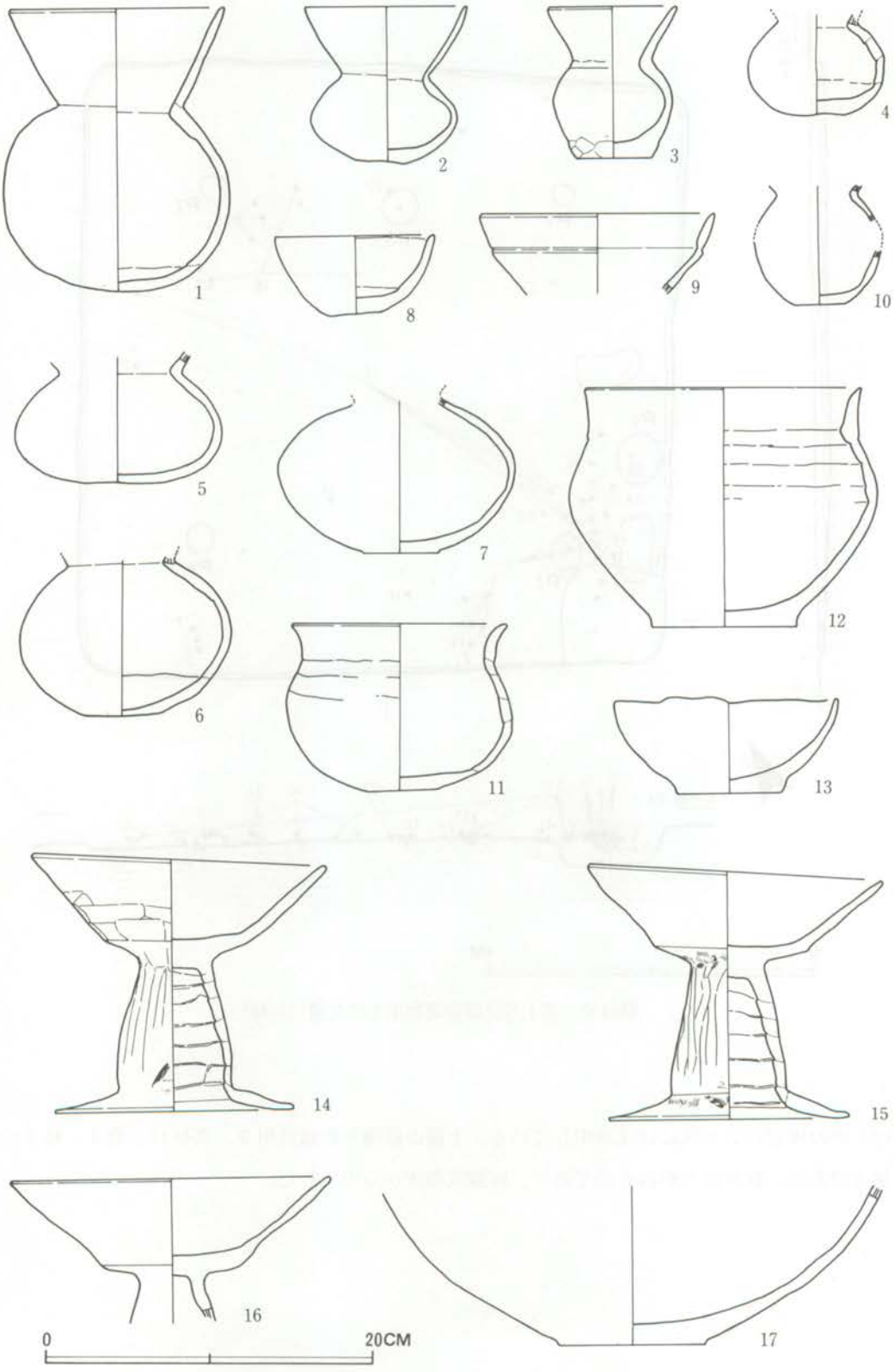
覆土は2層で単純な自然堆積をよく示している。

遺物は多量な土器と土玉、鉄斧が出土している。遺物の出土状況は南西コーナーの貯蔵穴周

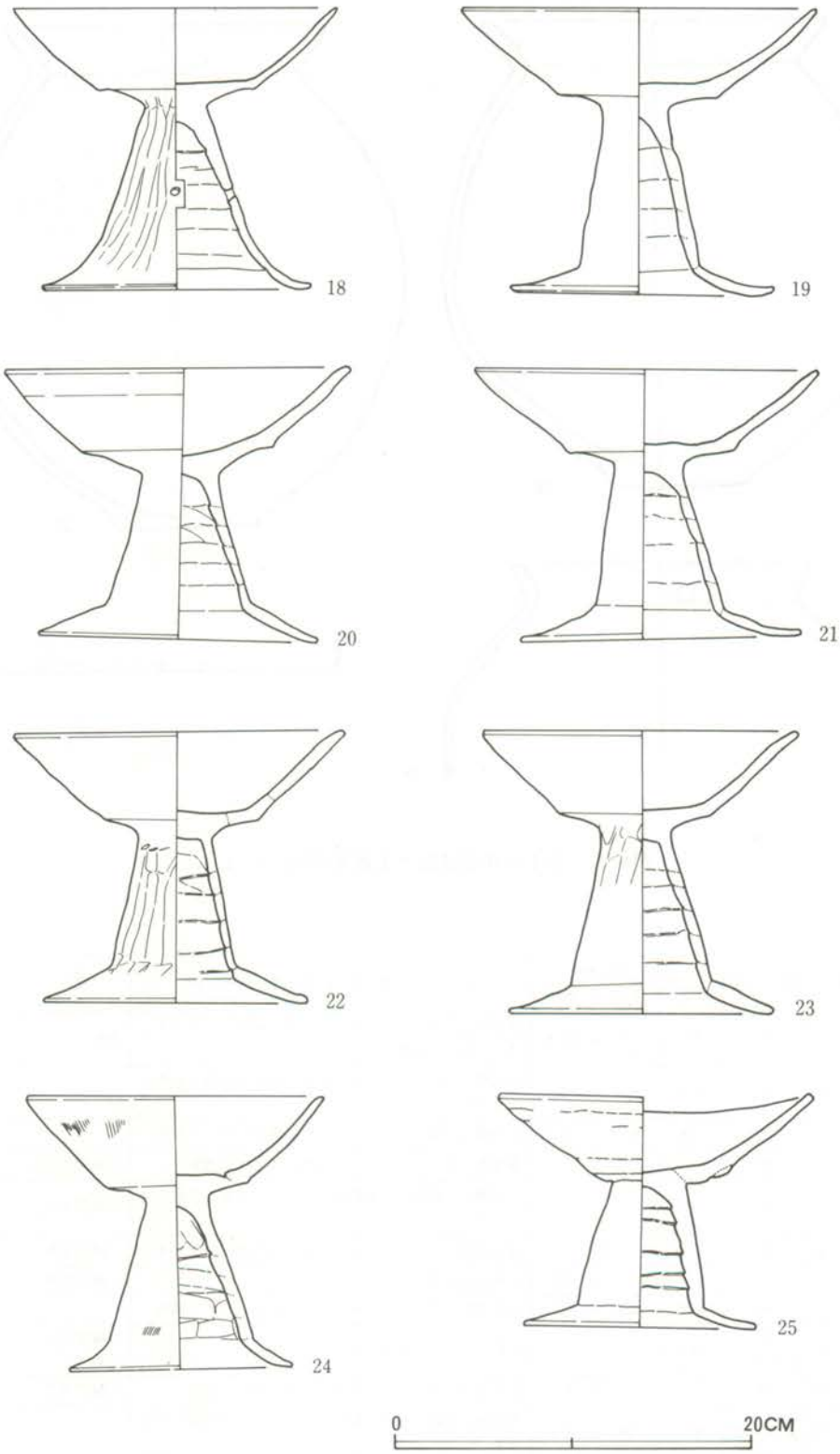


第84図　第１号住居跡遺物出土状況図（1/80）

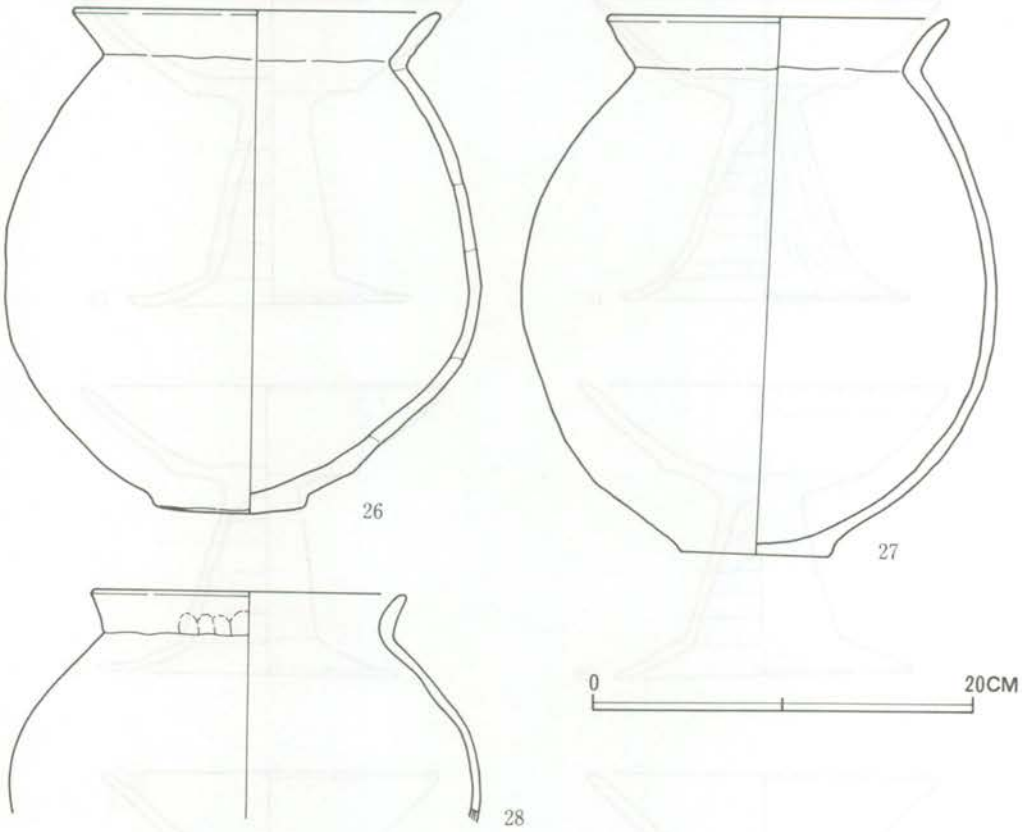
辺と炉の周辺の２ケ所にほぼ集中している。土器の器種と数量は坩９、高杯11、壺３、鉢２、甕３である。鉄斧は大形のものであり、貯蔵穴の床から出土した。



第85図　第１号住居跡出土土器実測図 ①（1/4）



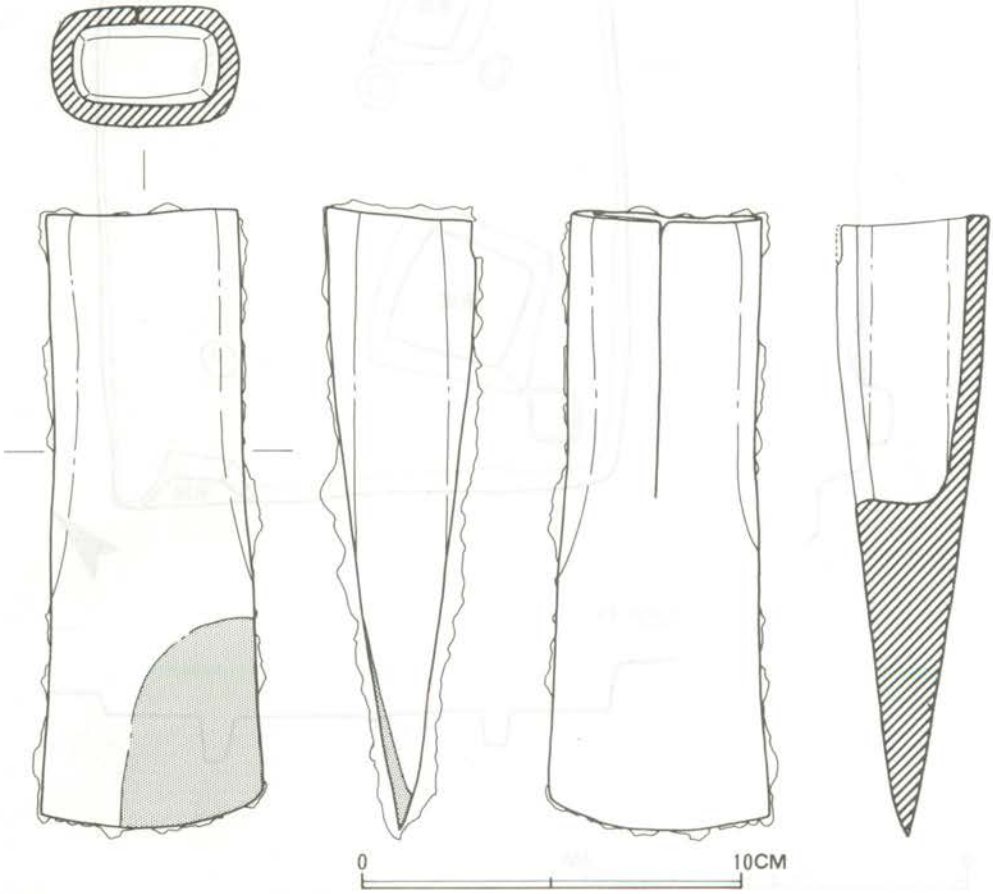
第86図　第１号住居跡出土土器実測図 ②（1/4）



第87図　第1号住居跡出土土器実測図 ③ (1/4)

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1住－1	坩	13 × 17 × 13.8	淡黄褐色、良好、ヘラケズリの後口縁部ヘラミガキ、体部外面ナデ調整	完形
－2	坩	9.9 × 9.5 × 3	暗褐色、不良、ヘラケズリの後口縁部・体部外面をヘラミガキ	完形
－3	坩	7.8 × 9.1 × 4.7	暗黄褐色、良、ヘラケズリの後、体部外面ナデ調整	
－4	坩	× ×	黄褐色、良、ヘラケズリの後体部外面ナデ調整	口縁部欠失
－5	坩	× ×	淡赤褐色、良好、内面底部ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	口縁部欠失
－6	坩	4.9	淡赤褐色、良、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ	口縁部欠失
－7	坩	× × 4.6	暗赤褐色、良、全面ヘラミガキ	口縁部欠失
－8	鉢	4.8 × 4.8 × 3	淡黄褐色、良、底部ヘラケズリの他は全面ナデ調整	
－9	壺 (坩？)	14.2 × ×	赤色、良好、全面入念なヘラミガキ	口縁部のみ赤彩
－10	坩	× × 3.2	暗黄褐色、不良、ヘラケズリの後外面ナデ調整	口縁部欠失
－11	広口壺	13 × 10 × 4.4	赤褐色、良好、体部内面ヘラケズリ、体部外面ヘラミガキ	
－12	広口壺？	16.8 × 14.3 × 8.9	茶褐色、良好、体部内外面ともナデ調整	
－13	浅　鉢	13.6 × 5.7 × 6.5	淡黄褐色、良、底部ヘラケズリ体部ナデ調整	

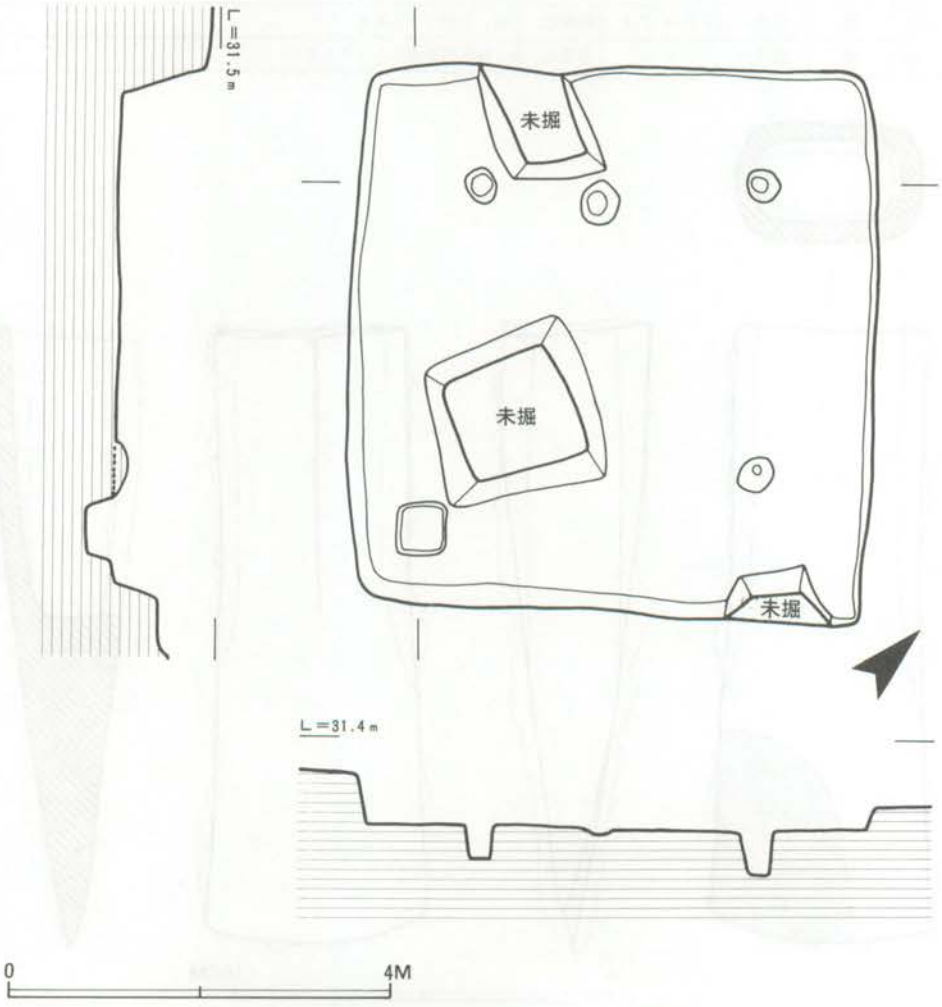
−14	高　杯	18 × 15.6 × 14.5	淡赤褐色、良、杯外面下半、脚部外面ヘラケズリ脚部内面ナデ調整	
−15	高　杯	18 × 15.5 × 14.7	暗赤褐色、良、ハケ調整の後裾部を除きヘラミガキ	
−16	高　杯	19.4 × ×	黄褐色、良、脚部内面ナデ調整の他全面ヘラミガキ	脚部下半欠失
−17	壺	× × 9	黄褐色、良、底部ヘラケズリの他全面ヘラミガキ	胴部下半のみ
−18	高　杯	18.2 × 15.5 × 15.2	暗赤褐色、良、杯部ヘラミガキ、脚部外面ヘラケズリ、脚部中位に2ケ所の穿孔	
−19	高　杯	20.3 × 15.8 × 15		
−20	高　杯	19.4 × 15.1 × 15.7	赤褐色、良好、杯部〜外面ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデ	
−21	高　杯	19 × 15 × 15.7	暗赤褐色、良好、杯部〜外面ヘラミガキ、脚部内面ナデ調整	
−22	高　杯	18.6 × 15 × 14.8	黄褐色、不良、脚部外面ヘラケズリ、脚部内面ナデ調整	
−23	高　杯	17.6 × 15.5 × 14.5	黄褐色、良、ヘラケズリの後杯部ヘラミガキ脚部ナデ調整	
−24	高　杯	16.7 × 15.6 × 12.5	赤褐色、良、外面ハケ調整の後杯部〜外面ヘラミガキ脚部内面ヘラケズリ	
−25	高　杯	17.3 × 13.2 × 13	黄褐色、不良、脚部外面ナデ調整	
−26	甕	19.2 × 25.7 × 7.8	淡赤褐色、良、体部内外面ともヘラミガキ	
−27	甕	17.6 × 27.9 × 7.7	暗褐色、不良、全面ヘラミガキ	
−28	甕	16.2 × ×	茶褐色、良、体部内外面ともヘラミガキ	



第88図　第1号住居跡出土鉄斧実測図（1/2）

第２号住居跡（第89～90図、ＰＬ34－２）

第１号住居跡の南西16mの地点、２Ｃ、３Ｃグリッドに位置している。本住居跡は北西コーナー部分のみが本調査の範囲で、他の部分は用地外になってしまった。しかし、幸いな事に竜角寺古墳群確認調査の対称として五丹歩遺跡南地点として本住居跡にトレンチと拡張区を設定したため、本住居跡は植木の部分を除いて完掘することができた。規模は１辺5.6mの隅丸正方形である。壁は外反ぎみに立ち上がるが、東辺を除いて遺存状態はよく0.5～１ｍぐらいの壁高がある。柱穴は４本が検出されたが、木の下にもう１つの柱穴があるはずである。主柱穴４本と支柱穴１本のタイプの住居跡である。P_1～P_3が主柱穴でP_4が支柱穴である。規模は径35～40cm内外、深さは40～60cm前後である。南東コーナーに55×52cm、深さ30cmの貯蔵穴がある。床面はハードローム面まで掘り込み、黄褐色土で踏み固めている。特に主柱穴の間は良好に踏み



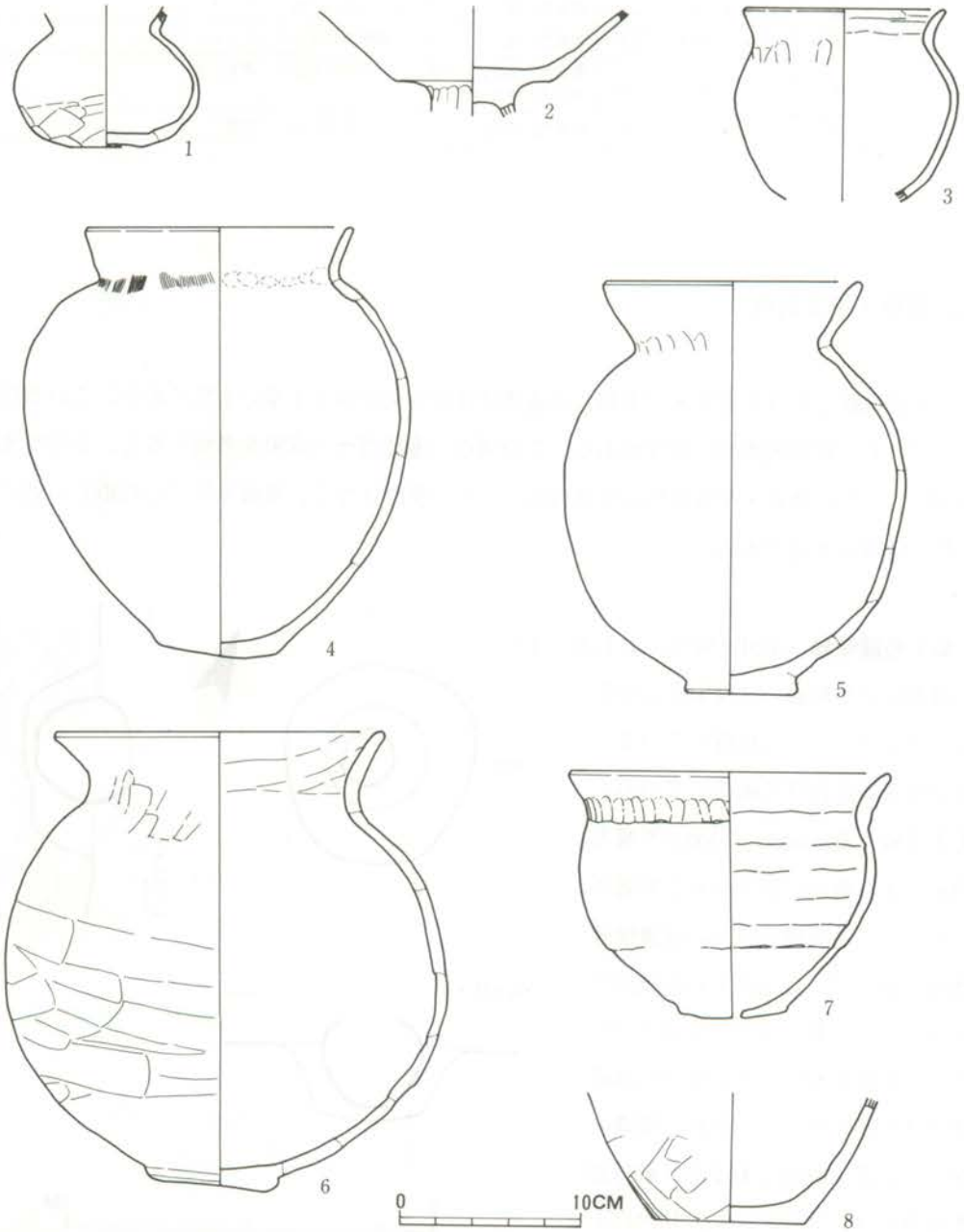
第89図　第２号住居跡実測図（1/80）

固められて堅緻である。

炉は確認されていない。

覆土は自然堆積を示していた。

遺物は土器が貯蔵穴に集中して出土した。坩１、高杯１、甑１、甕５である。



第90図　第２号住居跡出土土器実測図（1/4）

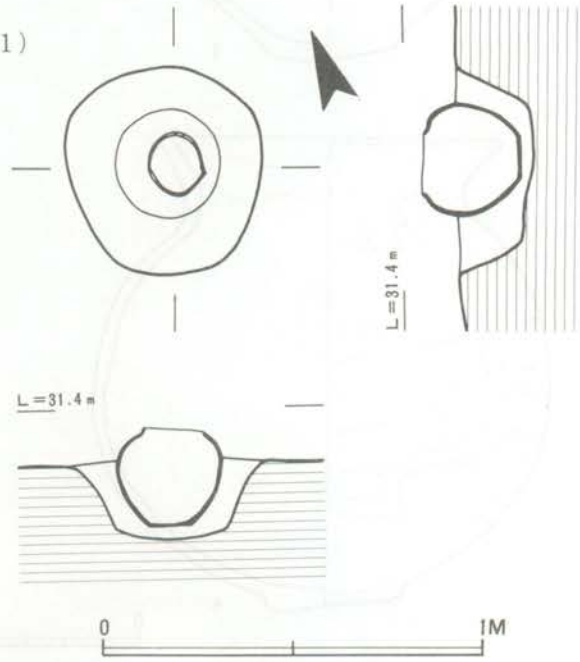
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
2住—1	坩	×　× 3.8	黄褐色、良、ヘラケズリの後口縁部・体部外面上半ヘラケズリ	
—2	高　杯	×　×	赤褐色、良、杯部ヘラミガキ、脚部外面ヘラケズリ脚部内面ナデ調整	口縁部および脚部欠失
—3	甕	10.8 ×　×	暗赤褐色、良、ヘラケズリの後体部内外面ともナデ調整	
—4	甕	14.4 × 22.8 × 6.5	黄褐色、良、ハケ調整の後体部内外面ともナデ調整口縁部内面に指頭痕	
—5	甕	13.8 × 22 × 5.7	暗褐色、良、ヘラケズリの後体部内外面ヘラミガキ	
—6	甕	17.8 × 24.8 × 6.6	黄褐色、良、ヘラケズリの後体部外面上半ヘラミガキ	
—7	甑	17 × 13.3 × 5.9	黄褐色、良好、ヘラケズリの後体部外面ナデ調整、体部内面ヘラケズリ	
—8	甕	×　× 8	黄褐色、不良、ヘラケズリの後体部内面ナデ調整	

C．奈良・平安時代

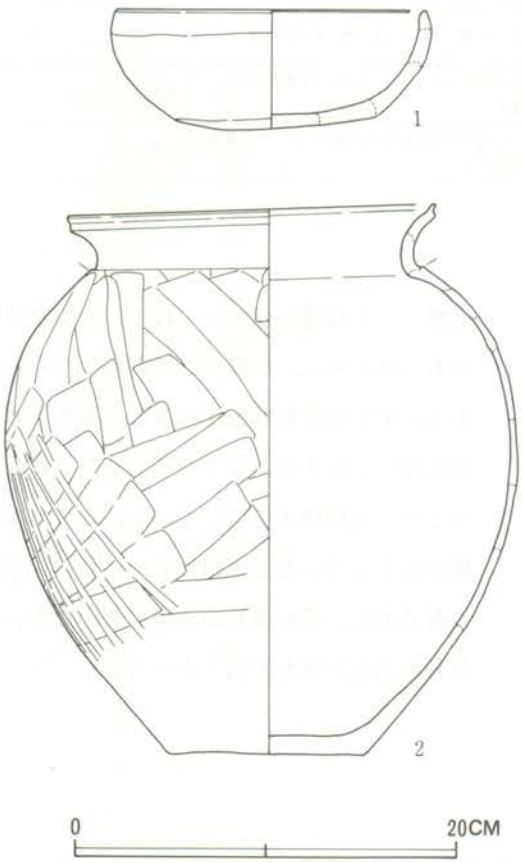
五丹歩遺跡における奈良・平安時代の遺構は3基の蔵骨器と1基の土坑である。この土坑も場合によると埋葬施設の可能性がある。この周辺の確認調査の成果を考慮すると、五丹歩遺跡周辺においては奈良・平安時代の生活の場としての痕跡はなく、墓域としての利用しか見てとれない特殊な地域である。

第1号蔵骨器（第91・92図、ＰＬ35—1）

調査区の平坦面のほぼ中央に所在し、3Ｃグリッドに位置している。第2蔵骨器の西側に隣接している。第1号蔵骨器は52cm×53cmの不整方形を呈する墓坑に正立の形で埋置されていた。蔵骨器そのものは遺構確認時において、表土直下から確認されていたが、墓坑のプランはソフトローム上面まで掘り下げなければ確認できなかった。そのため、遺構の深さとしては22cmであるが、蔵骨器そのものは、その面よりも10cm以上上から検出されている。当初におい



第91図　第1号蔵骨器出土状況図（1/20）



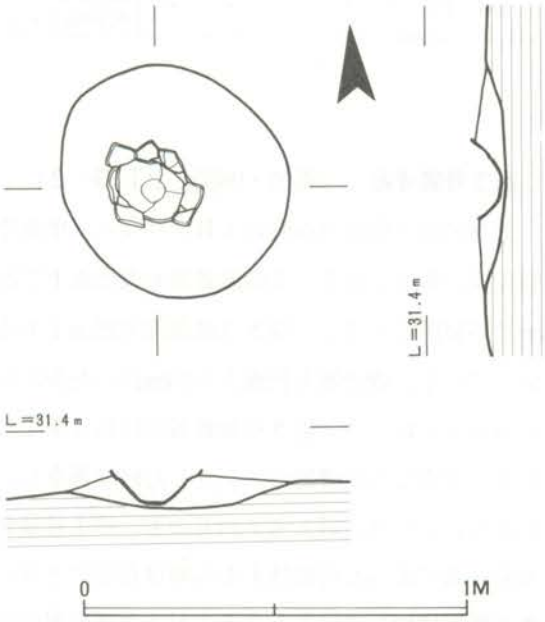
第92図　第１号蔵骨器実測図（1/4）

ては、現地表面とかわらぬ高さから掘り込んだものと思われる。蔵骨器そのものを正立させることができる余裕の墓坑を掘るだけのものであり、他に施設はみられない。

現地においては、蔵骨器は土師器の甕１点だけと思っていたが、整理作業の際に、人骨の有無に気をつけながら、甕の中につまっている土を注意深く取り除いていたら、甕の頸部より下の部分から、土師器の杯が、正立の状態で検出された。この段階になり、蓋が存在していたのが明らかになった。この場合の蓋は土師器の杯であるが、伏せて使用していないところに興味がある。場合によっては、この杯は本来の蓋ではなく、下に納めてある火葬骨の境に使用したものかもしれない。本来の蓋は、すでに削平を受けてしまったのかもしれない。この土師器の杯の下から、粉々になった火葬骨片がかなりつまっていたが、すべて、粉末状に近く、取り上げは困難であり、サンプリングすらできなかった。蔵骨器としての甕、杯は土器表を参照。

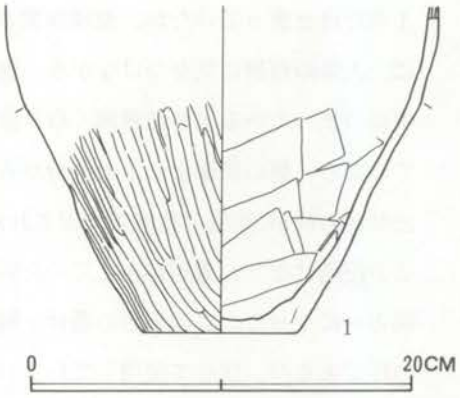
第２号蔵骨器（第93・94図、ＰＬ34－２）

第１号蔵骨器の東側に隣接して営まれている。規模は径60cm前後の不整円形を呈している。本遺構の遺存は非常



第93図　第２号蔵骨器出土状況図（1/20）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1蔵－1	杯	16.3 × 6.3 × 10.4	黄褐色、良好、全面ヘラミガキ(外面には連孤状のヘラミガキが入る)	完形
－2	甕	19.4 × 28.5 × 10.3	赤褐色、良、ヘラケズリの後体部外面下半ヘラミガキ、体部内面入念なナデ	完形



第94図　第2号蔵骨器実測図（1/4）

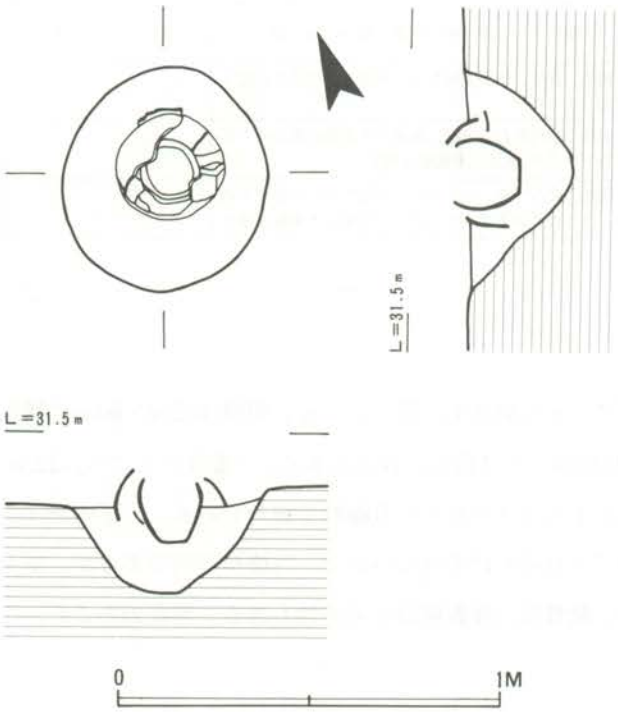
に悪く、土師器の甕がつぶれている出土状態があったために、かろうじて判名したものである。第1号蔵骨器と比べると、墓坑が蔵骨器に比して大きいようであり、また、底面もゆるやかな摺鉢状を呈している。ここもまた甕は正立していたと思われるが、蓋の存在は不明である。甕も残りが非常に悪いため、火葬骨の遺存状態も不明であった。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
2蔵－1	甕	× × 8	暗黄褐色、良、ヘラケズリの後、体部上半内外面ナデ体部外面下半ヘラミガキ	

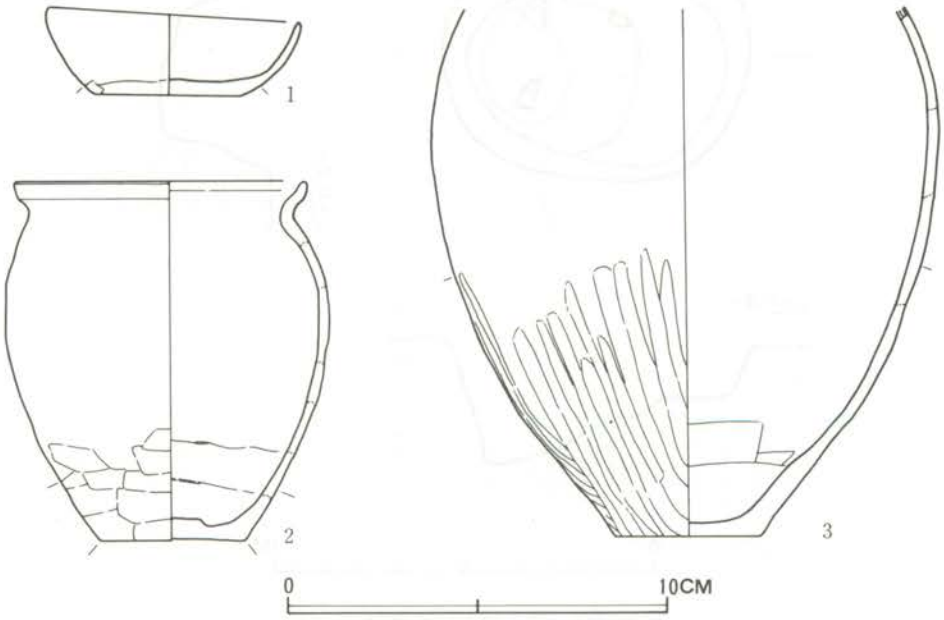
第3号蔵骨器　（第95・96図、ＰＬ35－２）

調査区の平坦面の西側の４Ｂグリッドに単独で位置している。この地点は西側の谷に向う傾斜変換の場所である。この蔵骨器も表土直下において確認されている。墓坑の規模は58cm×53cmで不整円形を呈し、深さは最深部で28cmである。ここの底面には平坦面がなくて、円錐状を呈している。蔵骨器も底面より13cm浮いた所から正立した状態で埋置されているのと関係があるのかもしれない。第3号蔵骨器の特長は第1、2号蔵骨器と違い、外容器を持っている点にある。正立した蔵骨器に、正立した杯で蓋をし、さらに、甕を倒立させて外容器としている。しかし、この外容器と考えたものも、第1号蔵骨器のところで述べた事を考慮すると、これが本来の蓋であった可能性もある事は否定できない。ただ、蔵骨器としての甕よりも倍近い大きさの甕を使用しているところを見ると外容器の可能性の方が強いと思われる。いずれにしても、良好な出土状態のものがないために、決定することができない。ここの蔵骨器の中にも火葬骨

片が粉末状になって、多く遺存していた。



第95図　第３号蔵骨器出土状況図（1/20）

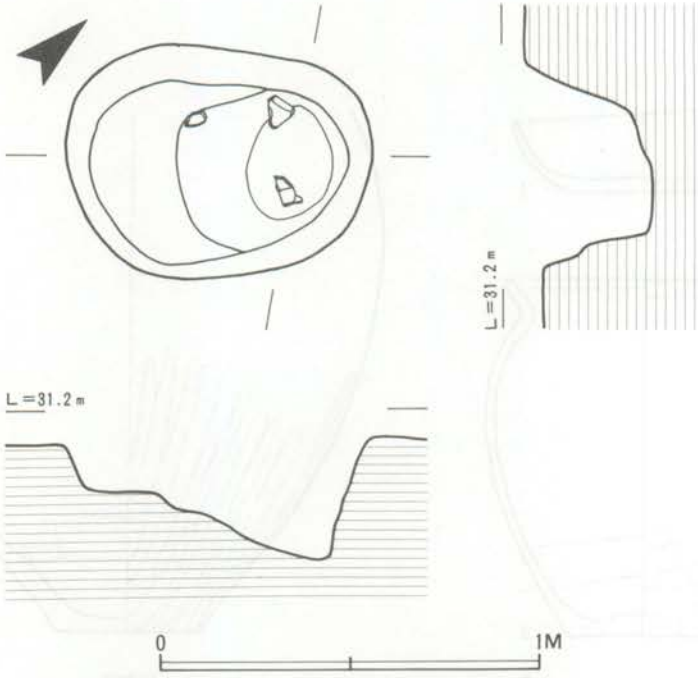


第96図　第３号蔵骨器実測図（1/4）

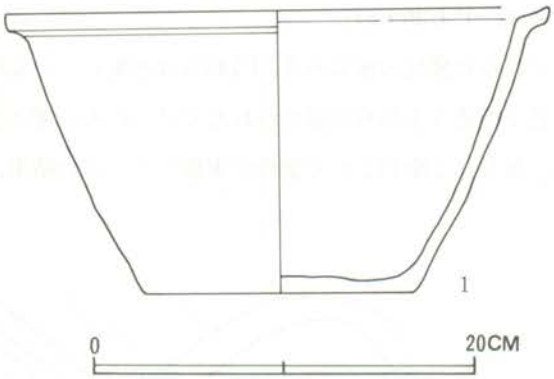
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
3蔵－1	杯	13 × 4.4 × 7.7	茶褐色、良好、体部下端および底部ヘラケズリの他は全面ヘラミガキ	
－2	甕	15.2 × 18.9 × 7.6	茶褐色、雲母長石、良好、体部ナデ調整の後外面下部をヘラケズリ、底部に木葉痕を残す	ほぼ完形
－3	甕	× × 7.8	黄褐色、長石、良、ヘラケズリの後体部内外面ナデ調整、さらに外面下半ヘラミガキ、底部に木葉痕を残す	

第1号土坑（第97・98図）

調査区平坦面の東側である、3Cグリッドに単独で位置している。規模は82cm×60cmで隅丸長方形を呈している。深さは南より北に向かって3段階の深さがある。一番浅いところは12cm、一番深いところは35cmである。壁の立ち上がりはそれぞれ直線的で鋭角である。土坑内部は焼けたり、また、覆土に特殊な状況が見てとれるわけではないので、性格が不明であるが、覆土中より須恵器の甕が出土しているので、蔵骨器の埋置施設の可能性もある。現在のところ、これ以上は不明である。



第97図　第1号土坑実測図（1/20）



第98図　第1号土坑出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1土－1	甕 （S）	28.5 × 14.6 × 14	灰色、良、内面～体部上半ナデ調整、体部下端へラケズリ	

D．江戸時代

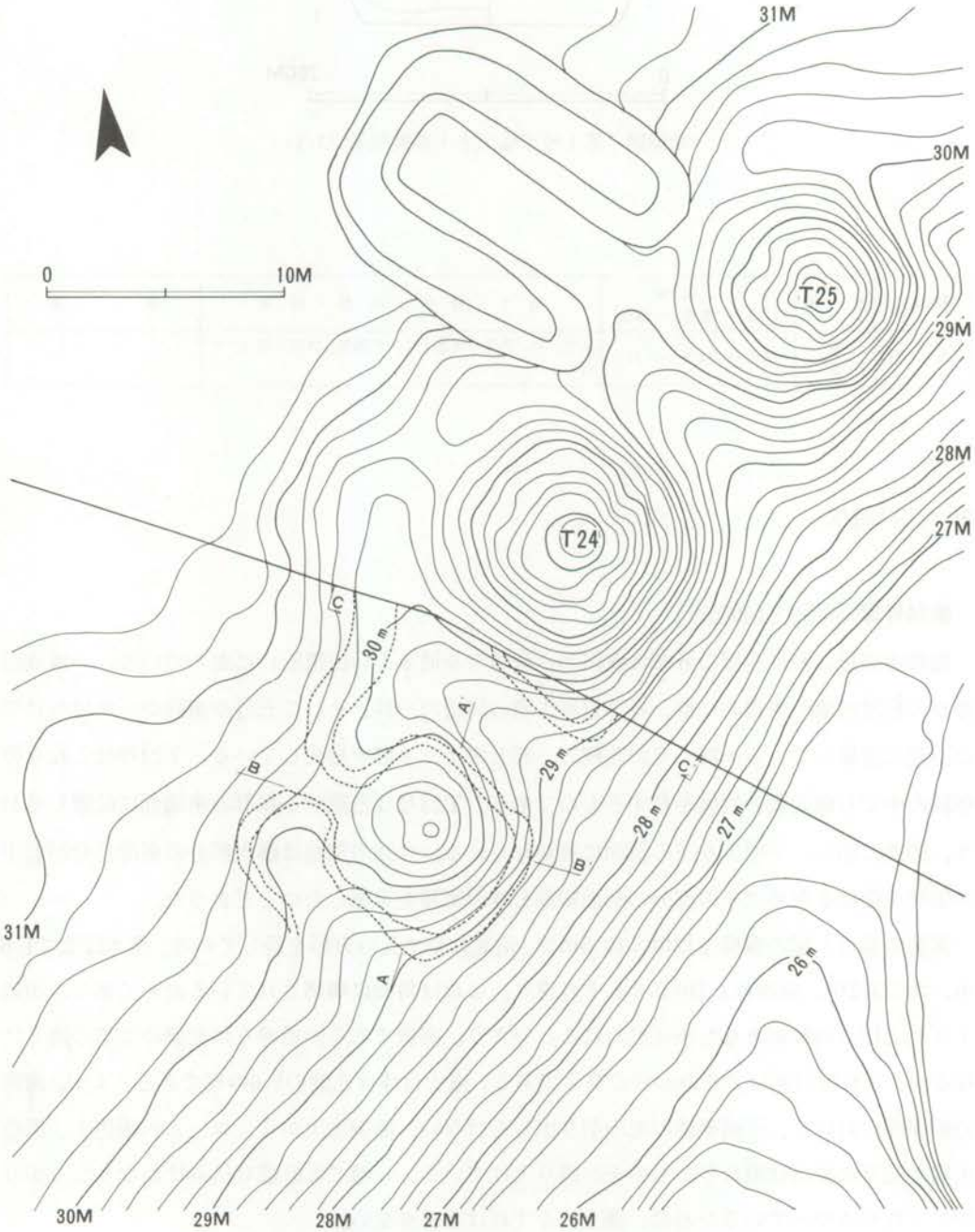
第24号塚（第99・100図）

竜角寺周辺における塚の分布は成田から竜角寺を通る古い街道沿いに並んでいる。一番成田寄りの岩屋古墳の周辺の一群、みそ岩屋古墳の周辺の一群、そして五丹歩遺跡から北にかけての旧道に密集している一群、その北側の一群と大きく4群を形成している。T24号はこれらの塚群の中でも最大級の規模を有するものである。T24号は密集する塚群の南端部に位置しており、街道に面し、平坦より下の斜面に築かれている。今回の調査は盛土部分の南端部分が若干の削平を受けるためにその部分の断面観察と塚の実測を実施したにとどまった。

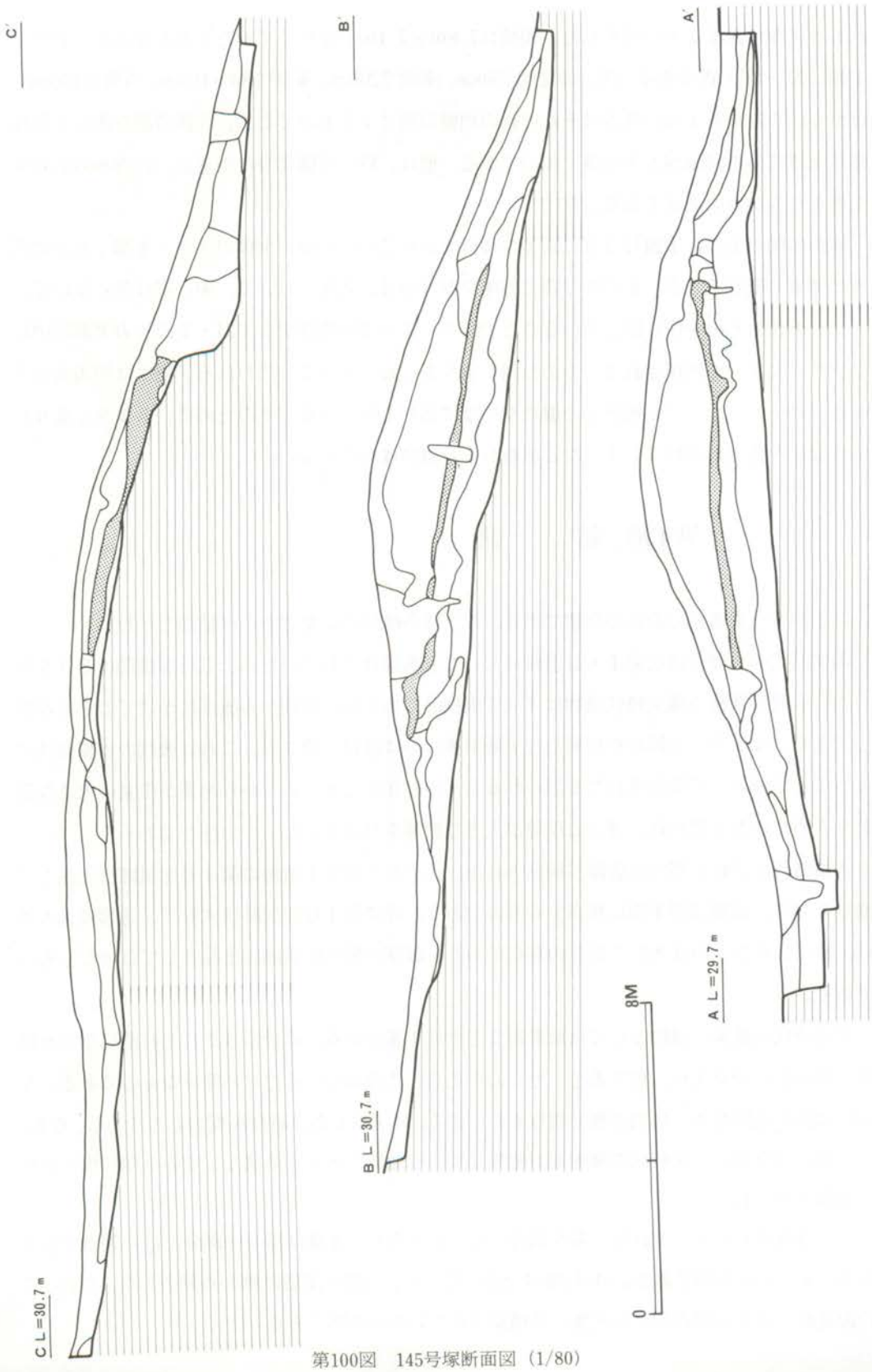
実測に基づく塚の規模は12m×10.5mで、南北にやや長い方形を呈している。高さは北で1.6m、南で3.2m、東西は2.2mとそれぞれ違う。これは斜面に構築されているためであり、街道より見上げる効果があるためと思われる。つまり、南側である街道寄りは北側の2倍の高さになるが、これは斜面によるみかけの高さである。盛土自体は北側の1.6m程である。まず、南側の斜面部において、平面形態の地山削り出しを行ない、旧表土上から、ローム、褐色土、黒色土等を交互にまたは混合したものを、盛り上げている。一層ごとの盛り込みはかなりしっかり押さえながらやっているために、盛土のくずれはあまりない。

第145号塚（第99・100図、ＰＬ36・37）

Ｔ24号の南に隣接している新発見の塚である。Ｔ145号は密集している塚群の南端に位置している。当初においては若干の盛り上がりが認められただけのため、塚としては認められずにいたが、本調査に際して、塚としてNo.13として別枠で実施した。その結果、小さいながら、まぎ



第99図　145号塚実測図及び周辺関係図（1/300）



第100図　145号塚断面図（1/80）

れもなく塚であることが判名した。規模は7.8m×7.4mのややくずれた正方形を呈しており、主軸はN－42°－Wである。高さは北側で80cm、南側で200cm、東側で80～100cm、西側で120cmをはかる。このまちまちの高さはそれぞれの地盤の差によるものであり、北側の削り出して直接盛り上げている80cmが本来の盛土部分である。他は、特に南側部分は街道沿いの方からの効果を考えたみかけの高さである。

地山の削り出しはT24号ほどに顕著には行なわれていないが、全体のプランを描くために四周に簡単に施している。その中で特に興味をひくのは、北側において、中心部は削らないで、ブリッヂ状のものを作り出していることである。この事は隣接するT24・T25号の実測図中にコンターによって表現されているのも同じ事をあらわしていると思われる。盛土は旧表土の上から、ロームブロックと褐色土の混合を一度に盛り上げている。そのために、あまりしまりがよくなく、盛土が崩れてしまったと思われる。遺物はなにもない。

第4節　結　　語

以上が五丹歩遺跡の調査の概要である。以下に各時代別に要点をのべ結語としたい。

縄文時代の土器片は前原Ⅰ・Ⅱ遺跡においても表採はされていたが、五丹歩遺跡ほどはなかった。五丹歩遺跡の縄文時代遺物はすべて表採品であるが、中期から後期にかけてのものが中心である。なかでも土器片を利用した土錘が多いのは注目に値する。これは後代の古墳時代になっても土錘として使用されたと思われる土玉の存在により、古くから漁業が生業の大きな部分を占めていたと思われ、周辺の環境が大きな影響を与えていた一つの証左であろう。

古墳時代は2軒の竪穴住居跡が検出された。いずれも前原Ⅰ遺跡の第1号住居跡出土品と共通しており、和泉式前半期に相当するものである。特に第1号住居跡は大形で、遺物の量も多い。特に目をひくのは大形の鉄斧の存在であり、該期の竪穴住居跡出土品としては珍しいものである。

奈良時代の遺構、遺物としては蔵骨器3と土坑1基がある。蔵骨器はそれぞれ簡単な穴を掘り、甕の中に骨を入れ、杯で蓋をしたものを正立して埋めているだけの簡単なものである。なかには甕の周囲をさらに別の甕で覆うものもある。いずれも奈良時代後期のものである。なお、この周辺は奈良、平安時代の蔵骨器が密集している地域であり、墓域としての土地利用がされた地域と思われる。

江戸時代のものとしては塚2基を調査した。そのうちの1基は裾の一部分だけの調査であるため、まったく不明である。145号塚は全掘したため、当初の築造計画から判名した。ただ、この街道沿いにこの周辺だけに密集して構築されたのかは不明である。

第 4 章
池 上 り I 遺 跡

第4章　池上りⅠ遺跡の調査

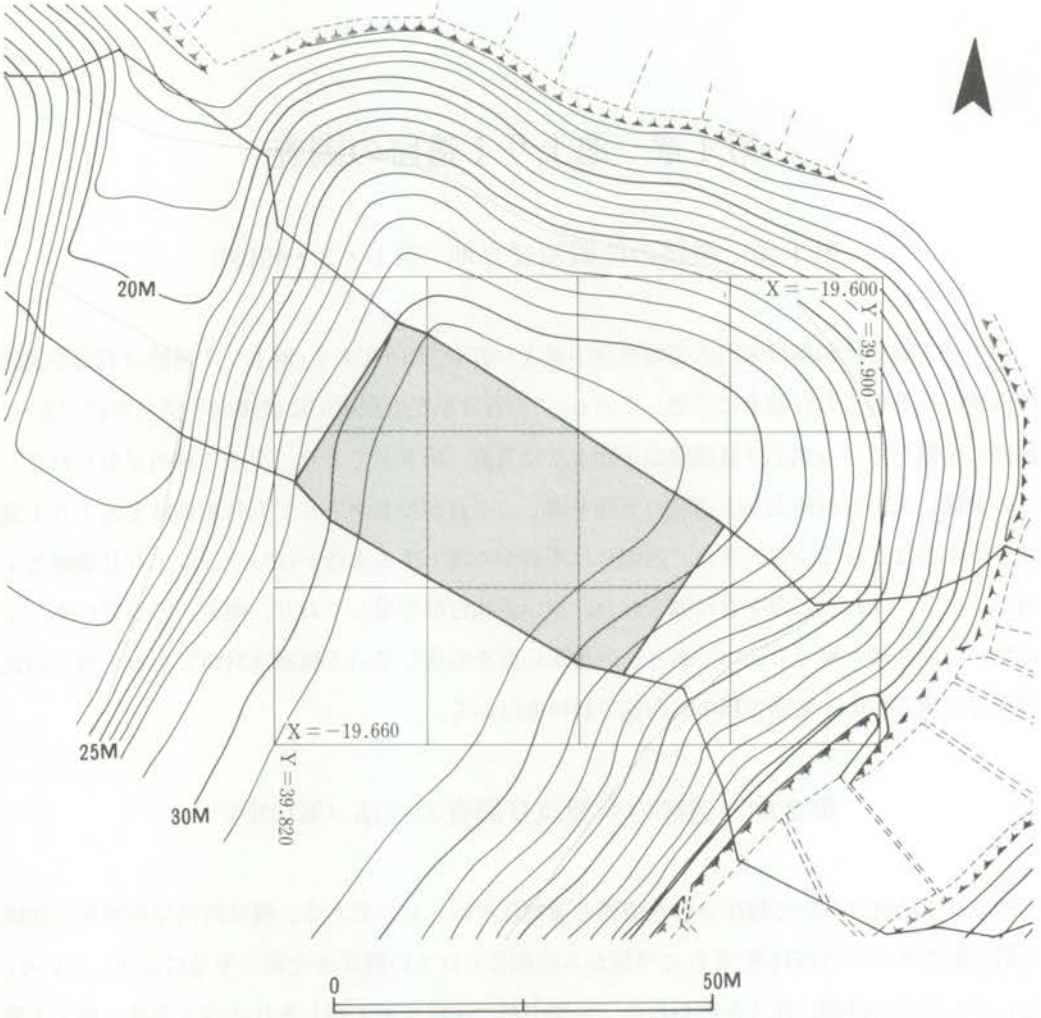
第1節　遺跡の位置及び立地（第1・2・101図）

池上りⅠ遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字池上り978他に所在する。池上りⅠ遺跡は五丹歩遺跡の西側の谷を隔てた台地上に立地している。この谷は現在の利根川に直接向う狭い本谷であり、西側に位置している池上りⅡ遺跡の正面までは真直に南下しており、そこで東西に分かれる。その東側に来た谷が池上りⅠ遺跡の北側を画し、それがなお南下して五丹歩遺跡と池上りⅠ遺跡を画す谷になっている。また、西側には本谷から南下する支谷がはいり、池上りⅡ遺跡とを画している。これら三方を谷に囲まれた、狭い舌状台地を呈しており、南方へのびている。この狭い台地は最大幅でも50mであり、一番広い面を形成している標高は31mである。谷との比高差は北側で16m、東側で15m、西側で11mをはかる。

第2節　遺跡の概要及び調査の方法（第102図）

池上りⅠ遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。縄文時代早期中葉の沈線文系土器を伴う炉穴が14基、それに早期から後期にかけての縄文式土器が多量に出土している。なかでも炉穴の時期に伴うと思われる、早期中葉の沈線文系土器とそれに伴う多量な無文土器は該期の土器を考えるのに良好な資料と思われる。これらの土器はソフトロームの上面に、調査範囲のほぼ全域にわたって散乱した状態で出土している。他に時期性格が不明な土坑が2基検出されている。

発掘調査の方法は、池上りⅡ遺跡と同じであるが、他の遺跡とはだいぶ異なるのでここで記しておく。まず、グリッドそのものは20m方眼で同じであるが、グリッドの名称のつけ方が異なる。つまり、調査範囲が狭いために、各グリッドに固有の名称を付した。つまり1～7グリッドとそれぞれに命名したのである。次に調査法であるが、縄文早期の包含層である事を確認した後は、調査範囲内すべての遺物出土状態を1点ずつ、平面ポイントと出土レベルを記録して取り上げた。その際は各グリッドが1つの単位として機能している。そうして記録して取り上げたのちに、最終的な遺構確認を行い、炉穴を検出し、掘下げた。



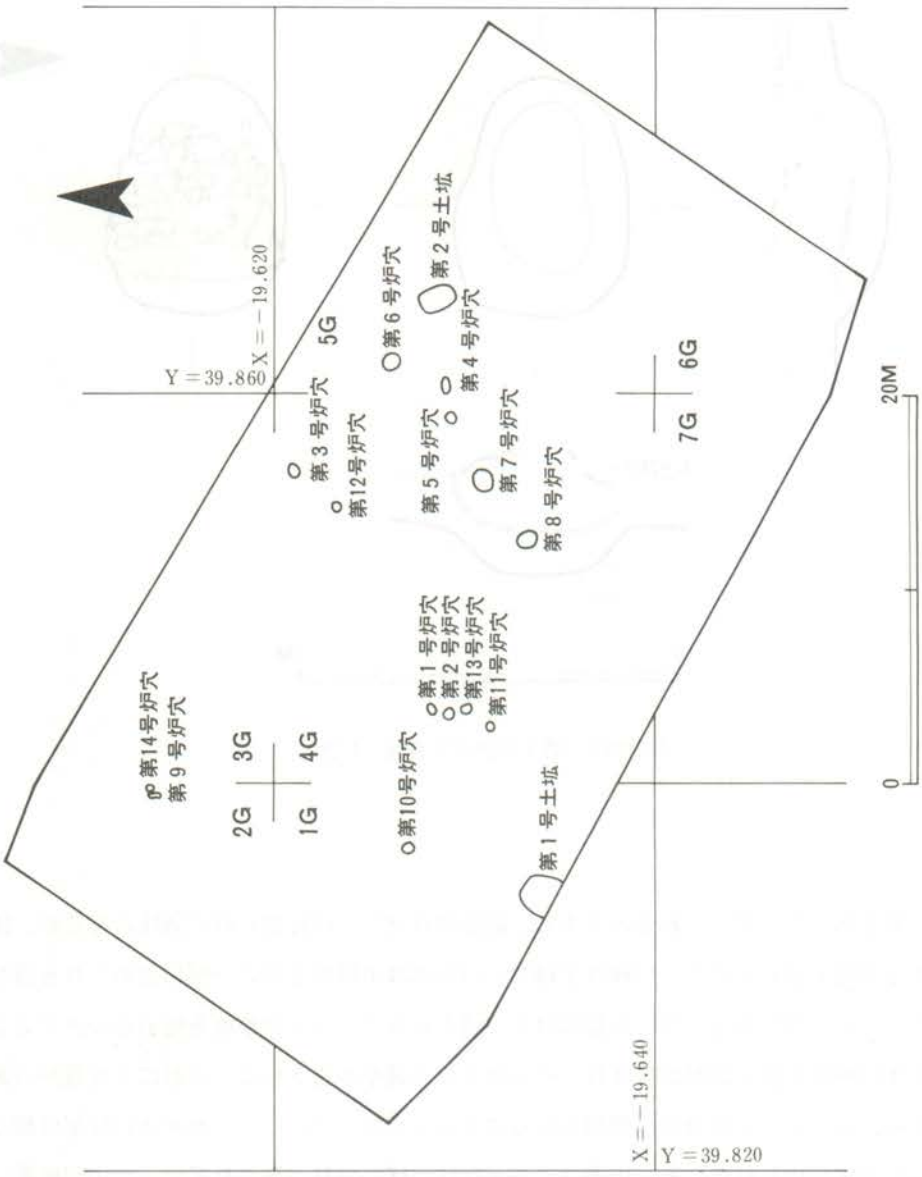
第101図　池上りⅠ遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）

第3節　検出された遺構と遺物

A．縄文時代

第1号炉穴（第103・104図、ＰＬ44・49）

調査区の中央である4グリッドの西端に位置し、第2・11・13号炉穴と同じグループを形成する。規模は62cm×47cmで不整な楕円形を呈している。深さは14cmで、底面はゆるやかな凹面をなし、そのまま壁になる。底面はよく焼けており、焼土もよく堆積している。その焼土の上に1個体分の土器が長軸にそって、つぶれた状態で出土している。この土器は出土状況から、

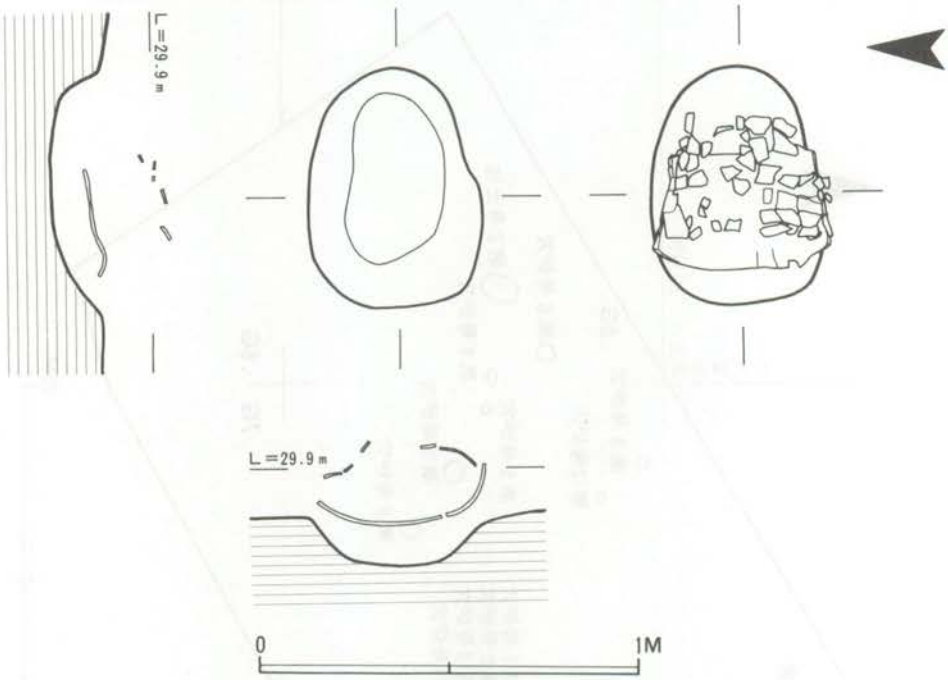


第102図　池上りⅠ遺跡遺構配置図（1/400）

炉穴の最後の時点、あるいはそれ以後のものと考えられるが、土器の中に焼土が混入していることから、炉穴の最終時のものと考えてよいであろう。

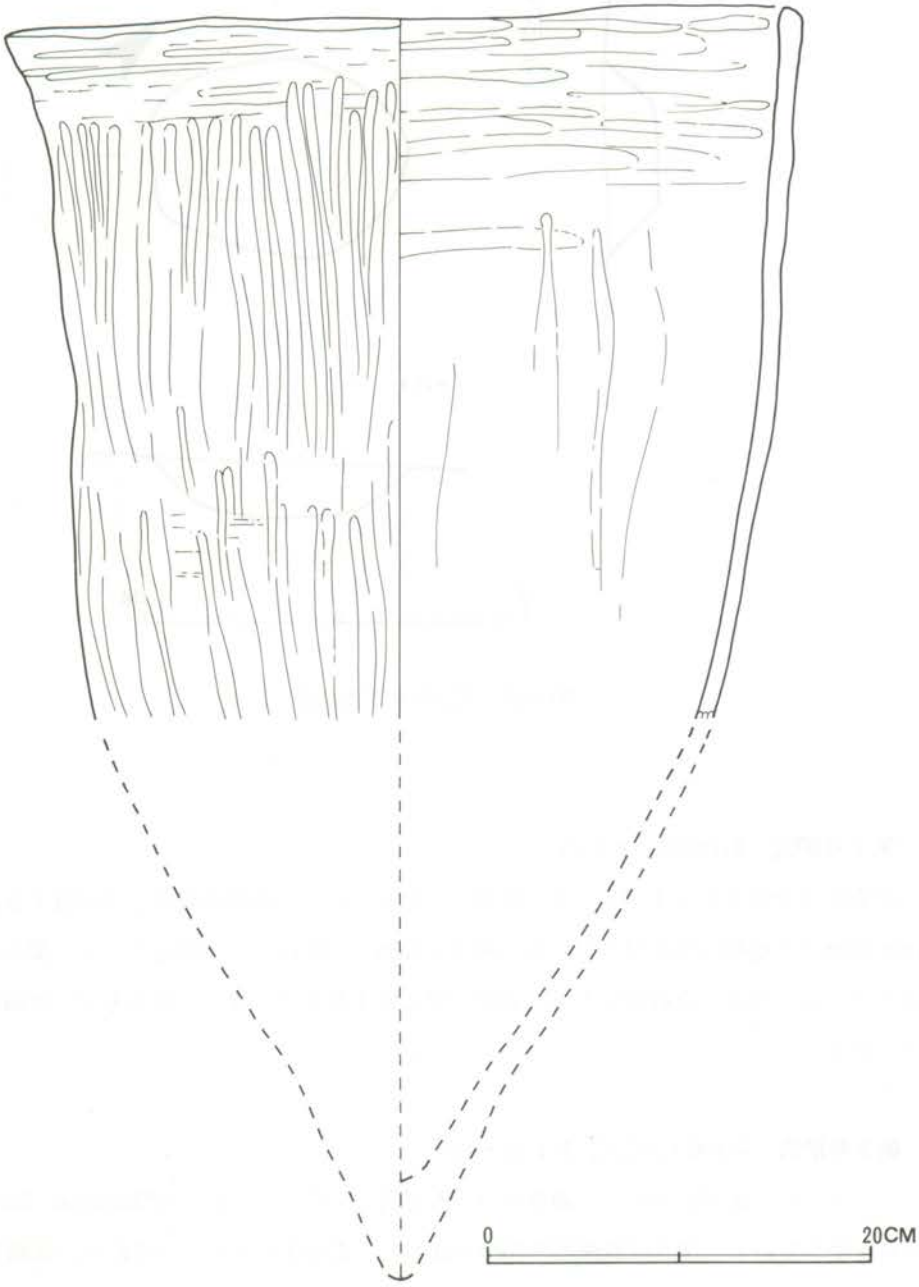
出土遺物（第104図）

胴下半部から底部を欠損する無文の深鉢形土器である。底部はかなり急な開き具合で立ち上がる尖底であったと考えられる。胴上半部と口縁部は4分の3が復元された。復元の結果口径は38.8cmを測り、胴部は36cm程遺存する。これから推定すると器高60cm以上となり、かなりの

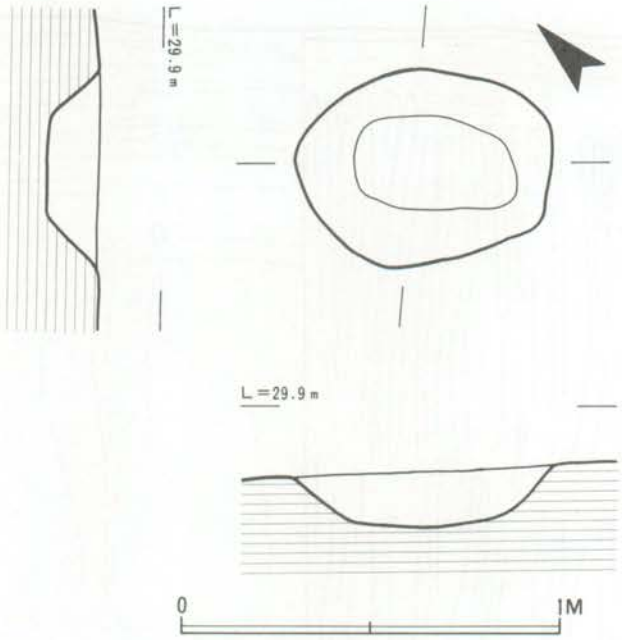


第103図　第1号炉穴実測図（1/20）

大形土器であったと考えられるのである。胴部は直立し、口縁部も直立気味になるが、僅かに外反する部分も認められる。口縁は平縁で、口唇部は第Ⅲ群土器の一部に認められる僅かに外面に切ったような形を示している器面は全く飾られることなく調整痕を留めるのみである。外面は全体に擦痕を残す調整が施され、その後ミガキ調整が施される。これにより最初の調整痕は消され、ほんの少し部分的に観察されるにすぎなくなっている。ミガキは口縁部は横方向に胴部は縦方向に行われている。内面は外面とほぼ同様な調整が施されているが、口縁部における横位調整はやや胴部下位まで及んでいる。ただ出土状況からしても二次焼化を受けていることは十分考えられ、そのためもあり胴下半部の調整痕ははっきりとは残っていない。胎土は石英と、長石と思われる細粒を多量に含み、第Ⅲ群土器と共通の特徴をもつ。また全体に少量の繊維が混ぜられている。二次的な焼化を受けているのにもかかわらず、器壁がぼろぼろとした状態にまでなっていないので、一次の焼成は良好であったと思われる。色調は外面が明褐色、内面は褐色を呈している。



第104図　第１号炉穴出土遺物実測図（1/4）



第105図　第2号炉穴実測図（1/20）

第2号炉穴（第105図、ＰＬ45）

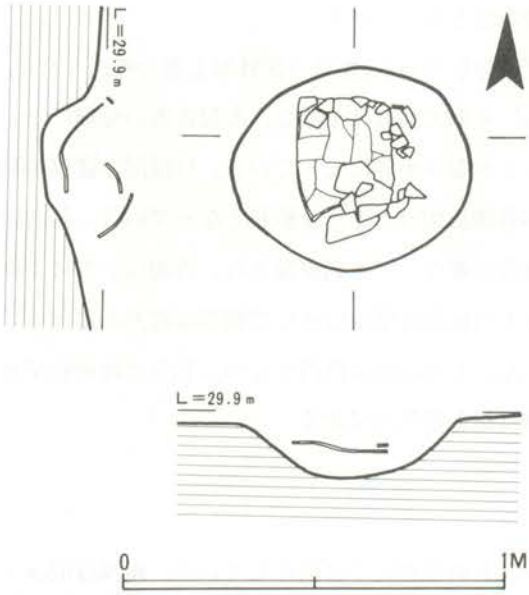
調査区の中央である4グリッドに所在し、第1号炉穴の南側に隣接して位置する。規模は68cm×50cmで不整楕円形を呈している。深さは15cmで、底面はやや凹んでいる。壁の立ち上がりはゆるやかであるが直線的である。底面と壁はあまり焼けてなく、焼土も少し堆積しているだけである。

第3号炉穴（第106・107図、ＰＬ44・49）

4グリッドの北東に所在し、調査区の一番北側に位置している。規模は63cm×53cmで不整楕円形を呈している。深さは最深部で15cmをはかり、摺鉢状を呈しているため、底面と壁の立ち上がりの境界は不明である。底面と壁にそって、主軸に直交するように一個体の土器がつぶれて出土した。土器より下の堆積はすべて焼土である。また、底部はよく焼けている。

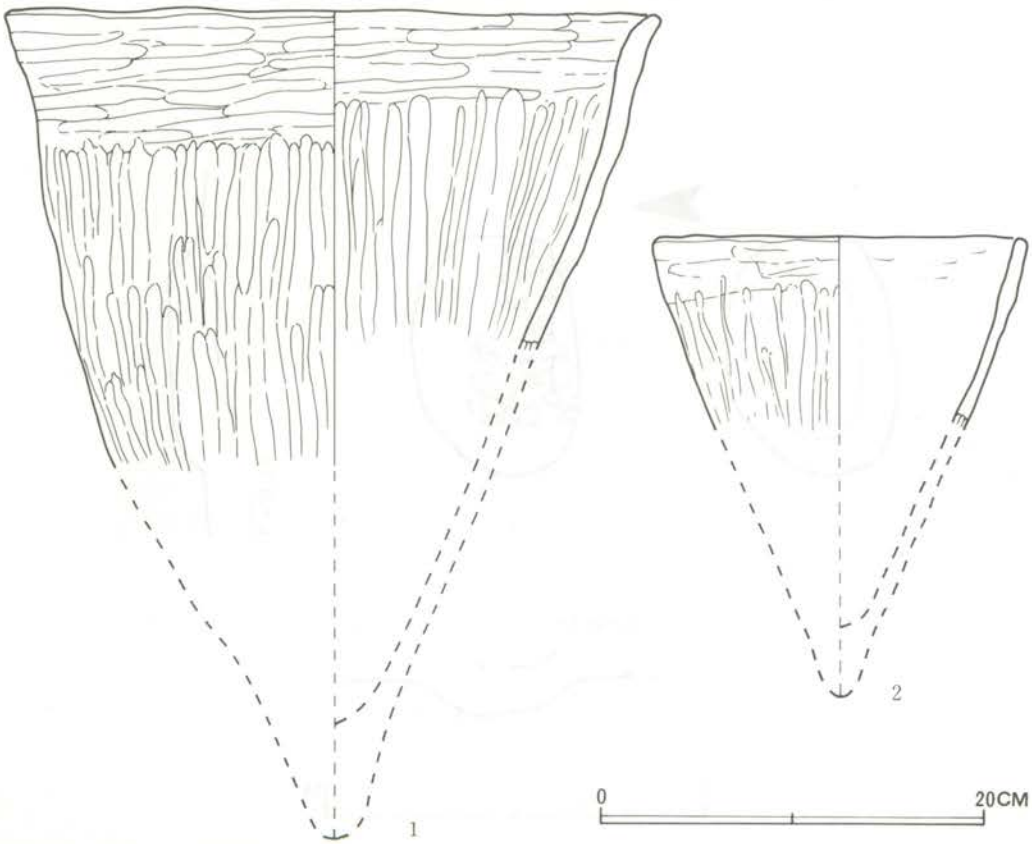
出土遺物（第107図）

1は底部からあまり変化をもたないで口縁まで開く無文の深鉢形土器である。口縁部から胴部上半の5分の4が遺存するが、底部を全く欠いている。おそらく底部は急角度で立ち上がる尖底であったと想像できる。口縁は平口縁で口唇端部は僅かに外削ぎ状となる。またそれほど外反はしないが、口縁上部の器厚は他の部位より厚さを増している。口径33.5cm、残存器高は



第106図　第3号炉穴実測図（1/20）

23.5cmを測る。調整はナデの後ミガキ調整が施される。外内面とも口縁部は横方向にそして胴部には縦方向にミガキ調整が加えられている。ナデの擦痕はミガキが行き届かなかった部分に表われている。内面については二次焼化のため器面がざらつき、外面に比べると調整痕も不鮮明となっている。胎土には砂粒と、僅かに繊維を含む。繊維は少量ながら全体的に含有され、内面にはその抜け落ちた痕跡を認める。二次的な焼成を受けているが、焼成自体は良好であったと思われる。色調は外



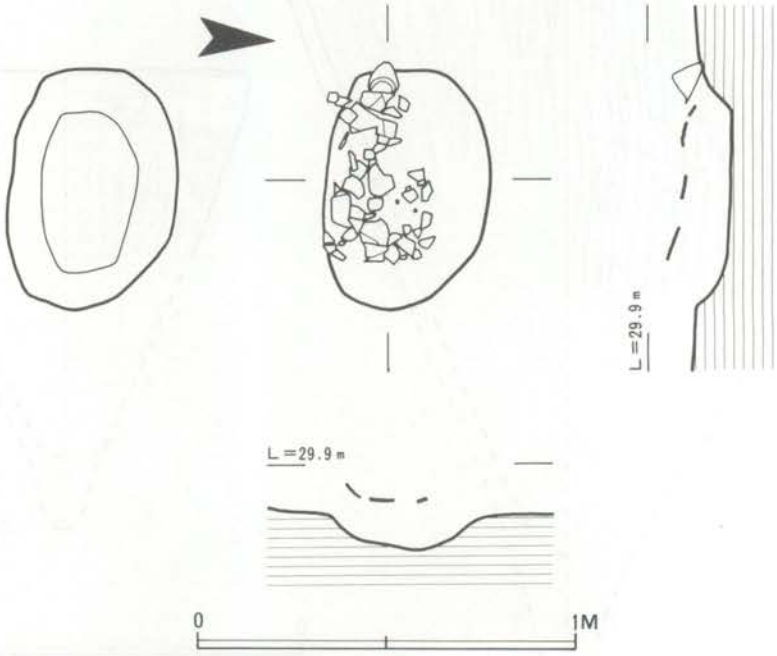
第107図　第3号炉穴出土遺物実測図（1/4）

面明褐色、内面褐色を呈し、内面が外面より暗い色となっている。

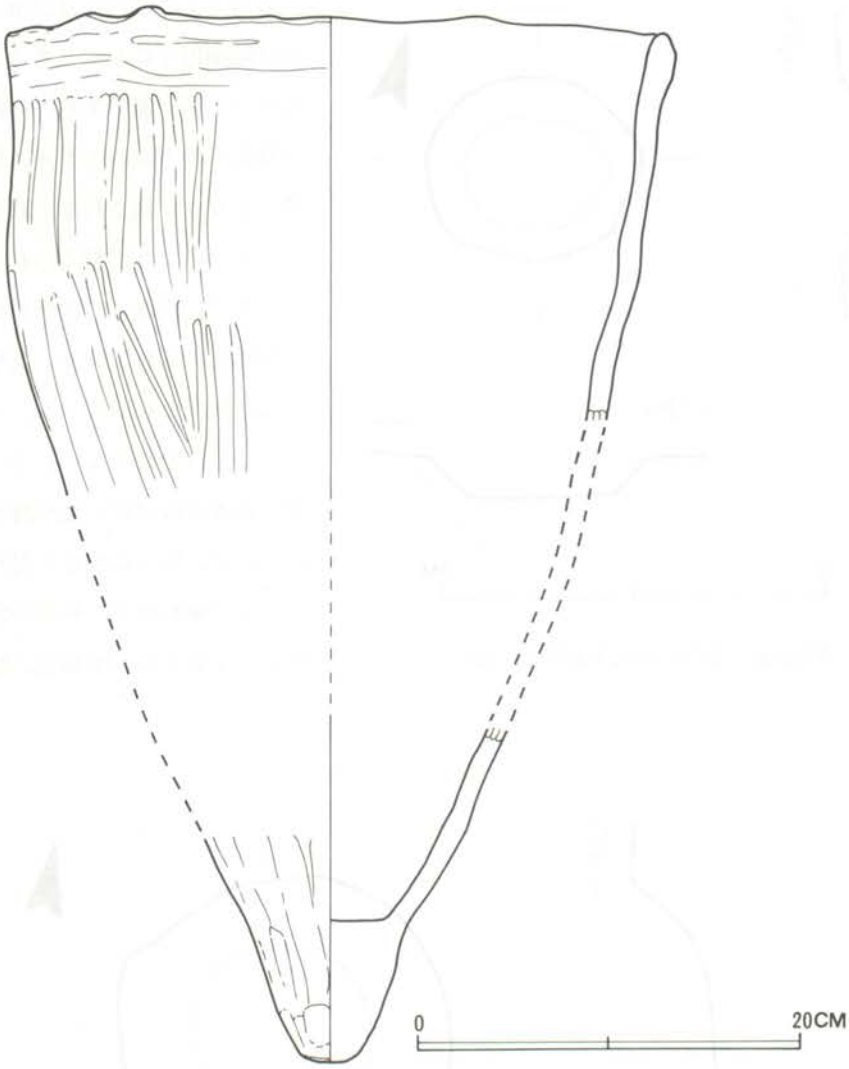
２は胴部上半から口縁部にかけて４分の１程遺存している。無文の深鉢形土器と考えられる。遺存部からして尖底となる底部から土している。その大部分は土器で、本報告書の分類でいう第Ｉ群土器から第Ⅶ群土器の出。１と比較するとかなり小形になっている。口縁部の器厚は胴部よりも厚さを増し、口唇部は丸味を有するが外側に切ったような断面となっている。器面調整は外面と内面とでは多少違いがみられる。外面は雑なミガキ調整施され、内面はナデによる調整が行われている。調整の方向は外面内面とも口縁部は横位にそして胴部は縦方向に行っているのが認められる。あまり丁寧に仕上げていないので器面は凹凸をもつ。胎土には砂粒が多く含まれているが、焼成は良いといえる。色調は暗茶褐色を呈する。

第４号炉穴（第108・109図、ＰＬ44・49）

調査区の東側に位置し、４グリッドと５グリッドの境界近くに所在している。規模は62cm×43cmで不整楕円形を呈している。深さは最深部で15cmであるが、底面はあまり一定していない。確認面において土器が１個体分、主軸にそって出土している。底面からは12cm浮いた位置である。焼土は土器の下にかなり堆積しているが、底面、壁はあまり焼けていない。



第108図　第４号炉穴実測図（1/20）

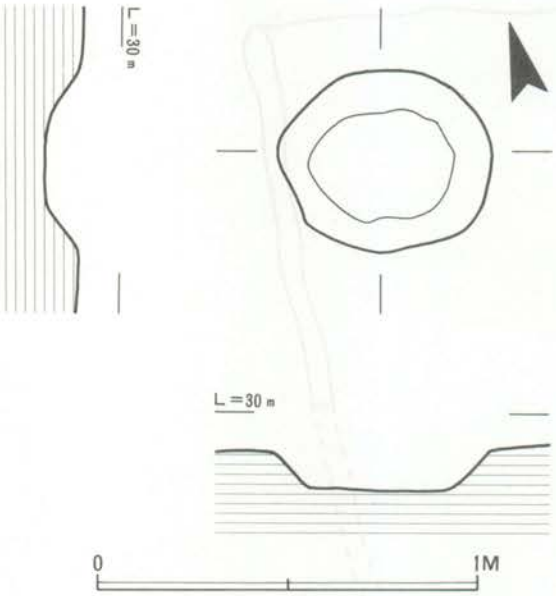


第109図　第4号炉穴出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第109図）

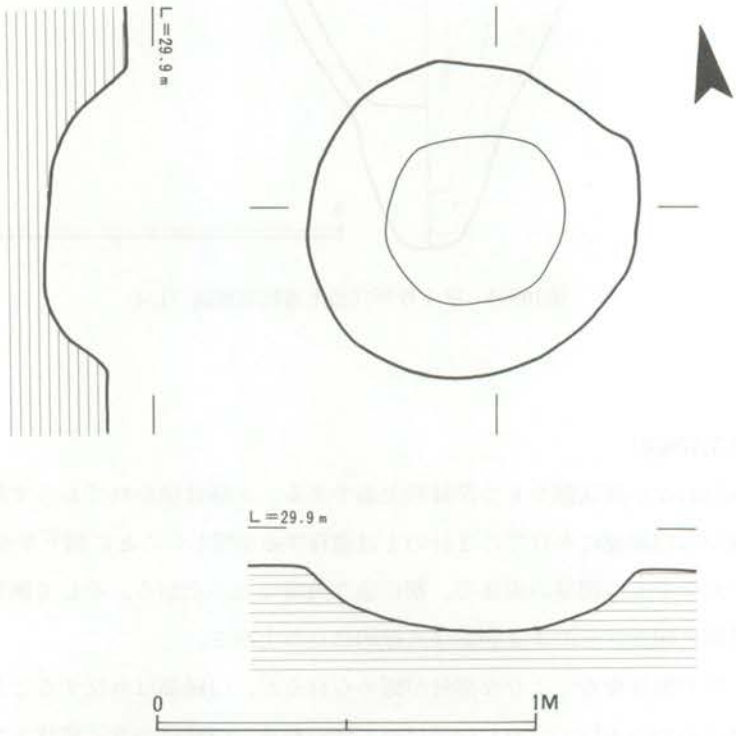
口縁部に部分的な小波状部をもつ深鉢形土器である。文様は描かれておらず無文である。底部と胴上半部から口縁部にかけての2分の1は遺存するが惜しいことに胴下半部を欠いている。底部は先端に丸味をもつ部厚い尖底で、割に急な角度で立ち上がる。そして胴部との接合部あたりでやや外側に開き、そのまま胴部は直線的に立ち上がる。

一部胴部上半で張りをもつような部分が認められるが、口縁部は外反することなく開いていく。口唇部はそのやや下位で肥厚し端部は丸く作られる。口縁は小さく波状となる部分も認められる。これは意識的に波状としたのか成形上偶然に波状を呈してしまったのかはっきりしな



第110図　第5号炉穴実測図（1/20）

いものである。口径は35cmを測り、器高は55cm近くになると考えられる。かなりの大型土器である。外面の調整は、口縁部が横方向のミガキ、胴部も縦方向にミガキが施される。底部は縦方向のケズリによって整えられるごつい感じがする。内面は二次焼化によるためか全体的に荒れており、調整痕がみられない状況となっており、はっきりとしたことは分からない。この荒れた器面に繊維の抜け出した痕跡が表われているので、胎土に繊維が混ぜられていたことが窺われる。外面の色調は部位によって異なり、暗褐色、暗黄褐色、



第111図　第6号炉穴実測図（1/20）

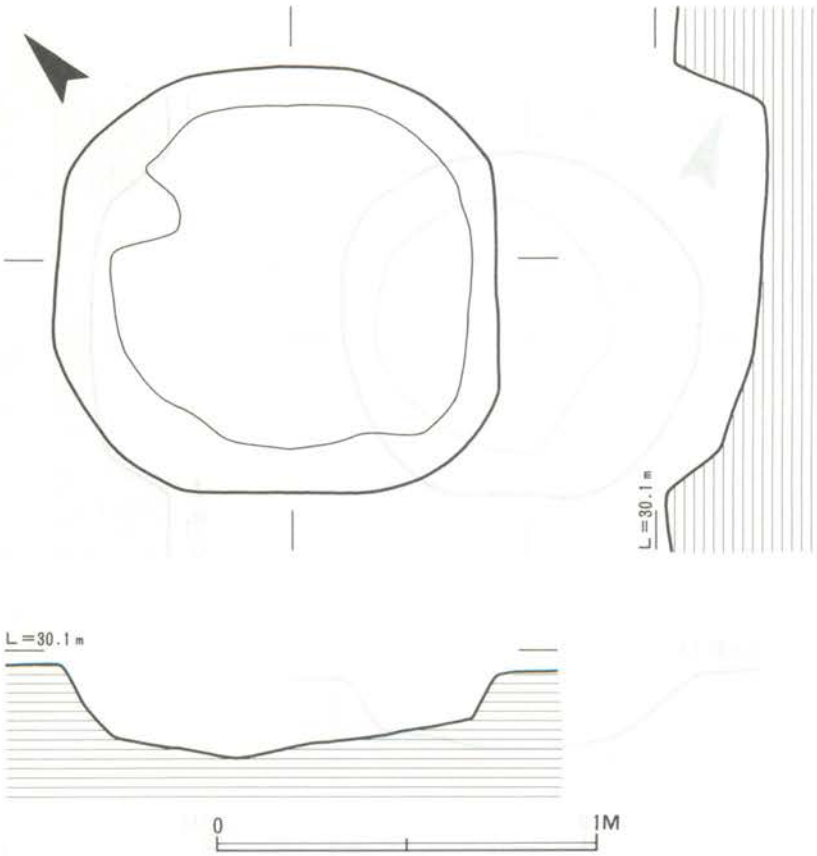
暗茶褐色などとなっている。内面は暗茶褐色を呈し、全体的に同じような調子を示している。

第５号炉穴（第110図、ＰＬ45）

４グリッドの東端に所在し、第４号炉穴の西側に隣接して位置している。規模は57cm×46cmで不整楕円形を呈している。深さは10cmで、底面は比較的平らである。壁の立ち上がりも明瞭で直線的である。焼土は少なく、底面、壁も焼けた痕跡があまりない。

第６号炉穴（第111図、ＰＬ45）

調査区の東側の５グリッドに所在し、本遺跡において一番北東にしている。第４号炉穴の北側に隣接する。規模は87cm×82cmで、不整円形を呈している。深さは最深部で18cmをはかり、全体に摺鉢状の底面、壁を呈している。底面はよく焼けているが、焼土の堆積はそれほど多くはない。



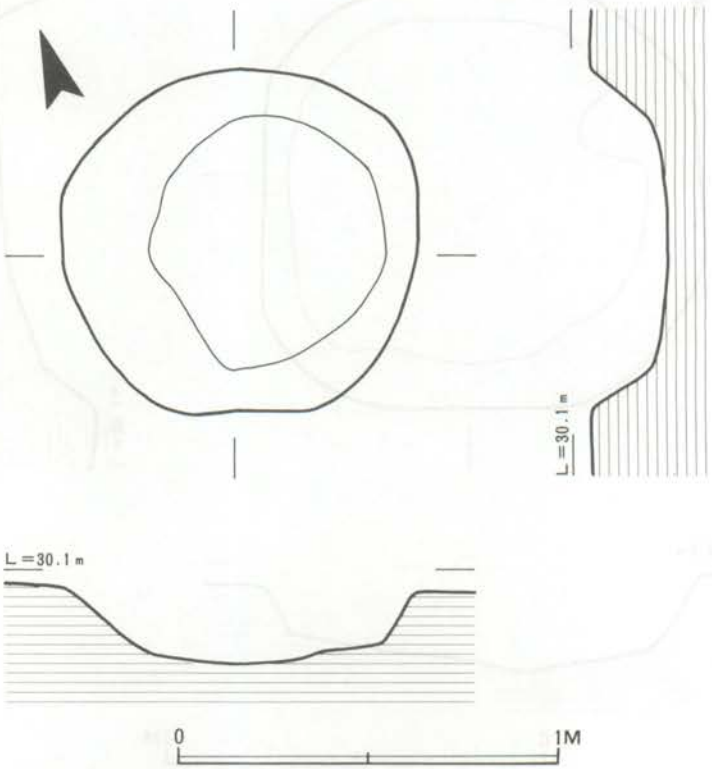
第112図　第７号炉穴実測図（1/20）

第７号炉穴（第112図、ＰＬ45）

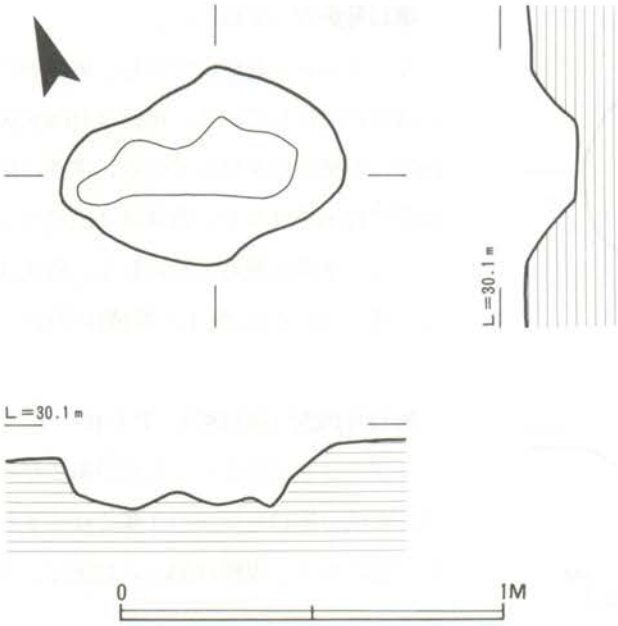
４グリッドの東側に所在し、第５号炉穴と第８号炉穴の中間に位置している。この東側においては第４～８号炉穴がほぼ等間隔に南北に雁行しており、一群を形成していると思われる。その中でも本炉穴は一番規模の大きいものである。規模は116cm×109cmで、隅丸方形を呈している。深さは最深部で25cmをはかり、底面は北西の部分に傾斜している。壁の立ち上がりは明瞭で直線的である。底面はよく焼けているが、焼土はあまり堆積していない。

第８号炉穴（第113図、ＰＬ46）

４グリッドの中央で、ほぼ調査区の中央に所在し、第７号炉穴の南西に隣接している。規模は95cm×89cmで、不整円形を呈している。深さは最深部で20cmをはかり、底面は全体的に凹んだものであり、壁の立ち上がりはゆるやかであるが、直線的である。底面は非常によく焼けているが、壁面は火熱を受けた痕跡があまり見られない。焼土・灰の堆積は底面に集中しているだけである。



第113図　第８号炉穴実測図（1/20）



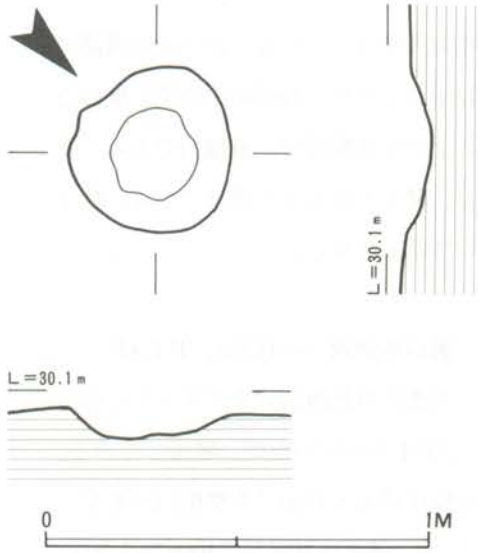
第114図　第９号炉穴実測図（1/20）

第９号炉穴（第114図、ＰＬ47）

調査区の北西にある２グリッドに所在し、第14号炉穴の西側に隣接して位置している。規模は75cm×52cmで、くずれたひし形を呈している。深さは最深部で15cmをはかり、底面は一定せず、小さな凹みが３つあり、３度の掘込が考えられる。底面の凹みはよく焼けており、焼土・灰がよく堆積している。

第10号炉穴（第115図、ＰＬ46）

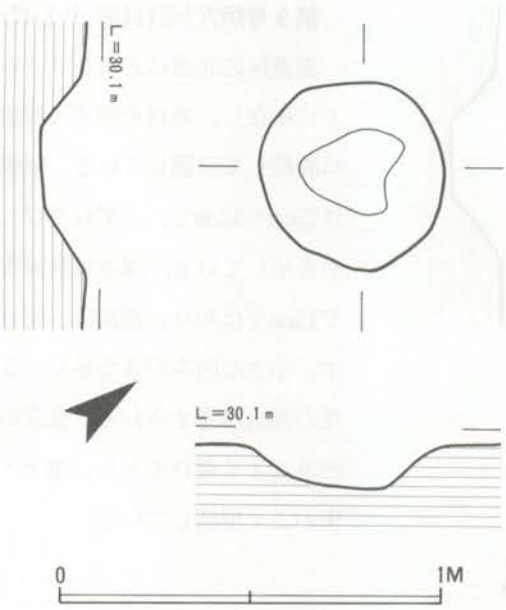
調査区の南西部の１グリッドに単独で位置している。規模は43cm×42cmで、不整円形を呈している。深さは最深部で８cmと非常に浅いものであり、底面に２つの凹みがあり、２度の掘込が考えられる。規模が小さいわりには底部と壁がよく焼けており、焼土もよく堆積している。



第115図　第10号炉穴実測図（1/20）

第11号炉穴（第116図、ＰＬ46）

４グリッドの西側に所在し、第13号炉穴の南側に隣接している。規模は48cm×48cmで、不整円形を呈している。深さは最深部で12cmをはかり、底面は平らであるが、北側へ傾斜している。底面が若干焼けている程度で、焼土の堆積は非常に少ない。



第116図　第11号炉穴実測図（1/20）

整方形を呈している。深さは最深部で14cmをはかり、底面は平らで、壁の立ち上がりは明瞭で、直線的である。底面、壁ともにあまり焼けてなく、焼土の堆積も少ない。

第14号炉穴（第119図、ＰＬ47）

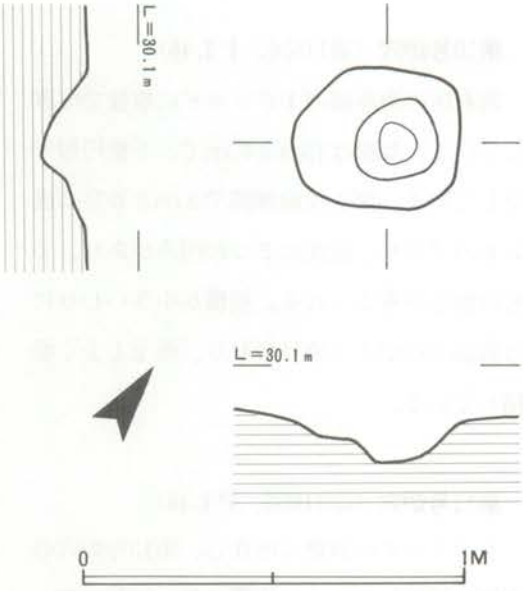
調査区の北西端の２グリッドに所在し、第４号炉穴の東側に隣接している。規模は47cm×42cmで不整楕円形を呈している。深さは最深部で10cmをはかり、底面、壁は全体的にゆるやかな凹みを呈するものであり、よく焼けており、焼土も多く堆積している。

第12号炉穴（第117図）

４グリッドの北側に位置し、第３炉穴の南西に隣接している。規模は44cm×36cmで、不整方形を呈している。深さは最深部で12cmをはかり、底面は２段になっている。２度の掘込と思われる。底面はよく焼けているが、焼土の堆積は少ない。

第13号炉穴（第118図、ＰＬ46）

４グリッドに所在し、北側の第２号炉穴、南側の第13号炉穴の２基にはさまれた位置にある。規模は53cm×43cmで、不

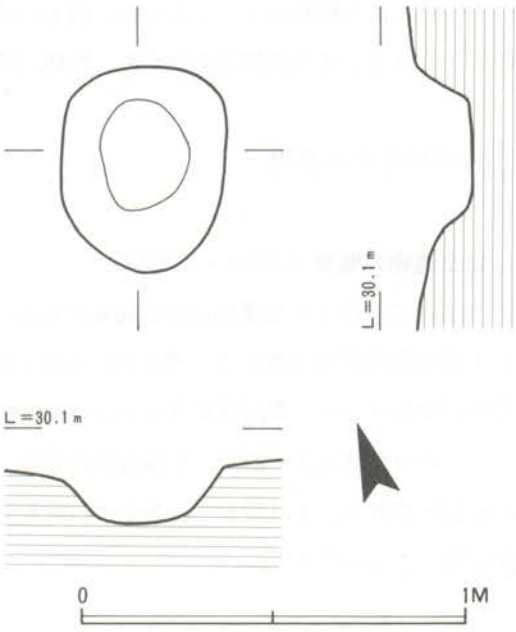


第117図　第12号炉穴実測図（1/20）

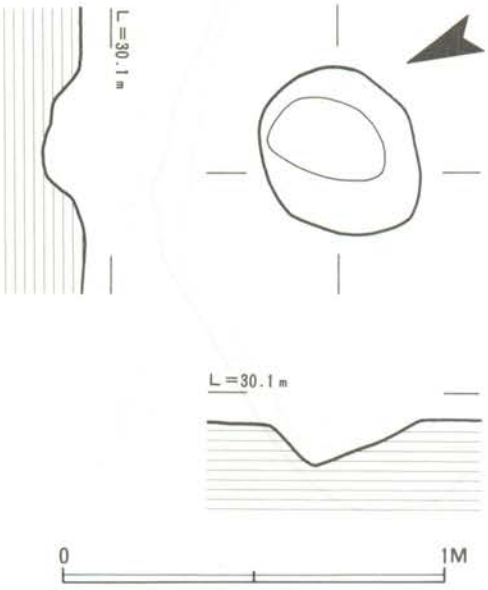
Ｂ．その他

第１号土坑（第120図、ＰＬ48）

調査区の南西にあたる１グリッドに所在し、南側は調査区外のため、一部未調査である。規模は東西が2.23mであるが、南北は不明である。現在までのところは2.25m確認されているので、基本的には南北に長い不整円形である。深さは最深部で23cmをはかり、底面は平らでなく、かなりの凹凸がある。南端の部分には焼土が集中している範囲がある。この範囲は幅40cmでかなりの量の堆積である。しかしながら、土鍛内には焼けた痕跡を示す箇所はない。壁の立ち上がりは東西においては直線的に立ち上がっているが、北側はゆるやかな立ち上がりである。覆土は黒色土の単一層であり、一度に埋まった状態を示している。全体的にしっかりした掘り方を示しておらず遺物も出土していないため、性格、時期等は不明である。



第118図　第13号炉穴実測図（1/20）



第119図　第14号炉穴実測図（1/20）

第２号土坑（第121図、ＰＬ48）

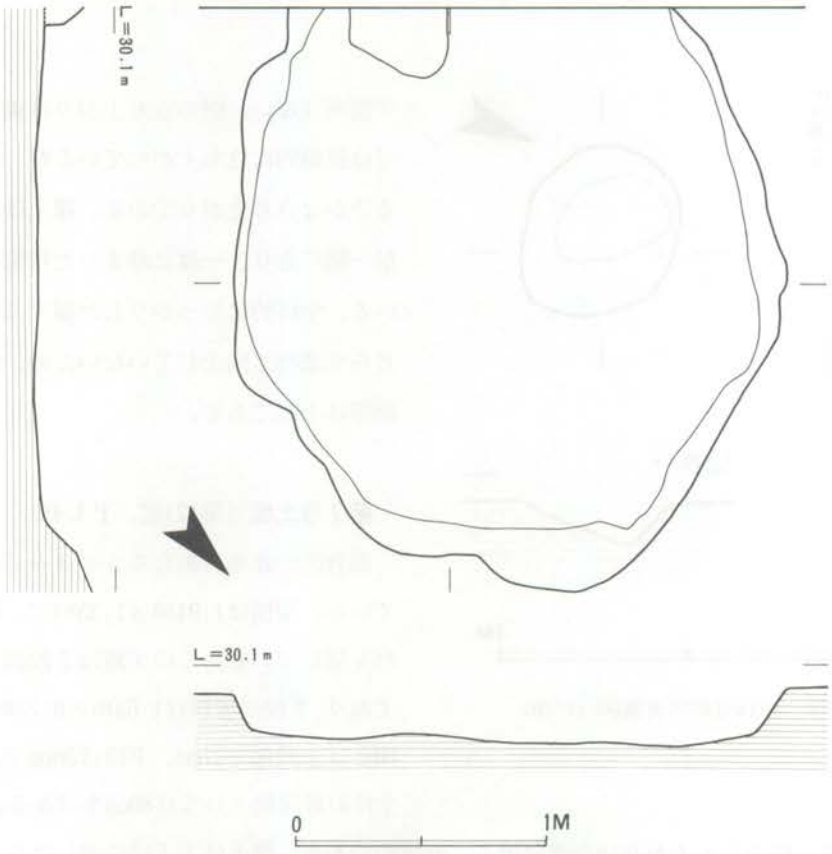
調査区の北東にあたる５グリッドに位置している。規模は1.94m×1.25mで、隅丸長方形を呈している。この土鍛は２段掘りになっており、下段の規模は1.53m×0.73mである。深さは上段部で27cm、下段は50cmであるが、全体の最深部としては80cmをはかる。底面はほぼ水平で、壁の立ち上がりは垂直に近く、直線的である。覆土は上下段に違いはなく、黒色土の単一層である。

形態的には木棺墓のようであるが、覆土の状態を考えると、そうでもないようである。遺物の出土もなく、また単独であるため、性格、時期等は不明である。

包含層出土の遺物

出土遺物の概要（第122・123図）

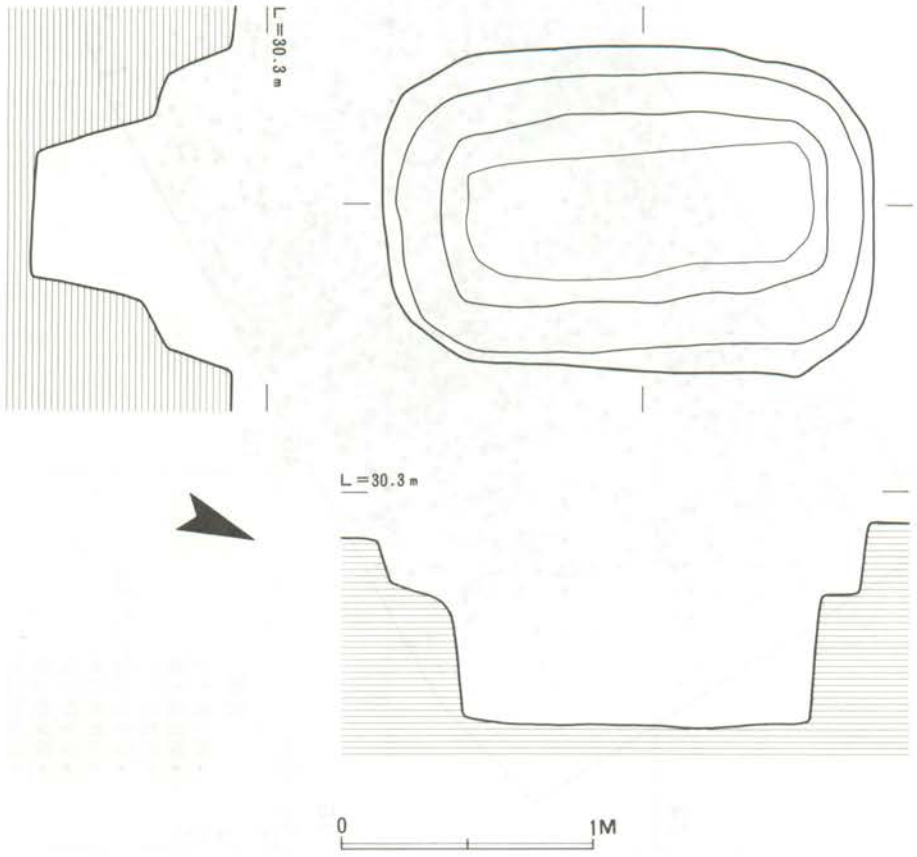
当遺跡で検出された遺構は総計16基である。時期のはっきりしない1基を除くと、他はいずれも縄文時代早期に属すると考えられるものである。遺構に直接伴って出土した遺物は数量的に僅かであったが、表面採集及び包含層からは縄文時代早期から後期にわたる遺物が出土している。その大部分は土器で、本報告書の分類でいう第Ⅰ群土器から第Ⅶ群土器の出土が認められるわけである。また若干ではあるが石器も出土しており、この地における縄文人の生活の足跡を窺うことができる。



第120図　第1号土坑実測図（1/30）

調査区内から出土した遺物総数は3,734点で、土器が3,552点、石器７点、礫175点となっている。出土土器の分類については、大別に関しては本書に共通したもので下記に示すとおりである。

第Ｉ群土器　早期前半の撚糸文系土器（41点）
第II群土器　早期中葉の沈線文系土器（456点）
第III群土器　早期中葉の無文土器（2,485点）
　　第II・III群土器底部（38点）
第IV群土器　早後後半の条痕文系土器（13点）
第Ｖ群土器　前期に比定される土器（139点）
第VI群土器　中期に比定される土器（24点）
第VII群土器　後期に比定される土器（205点）
　　時期のはっきりしない小破片（151点）

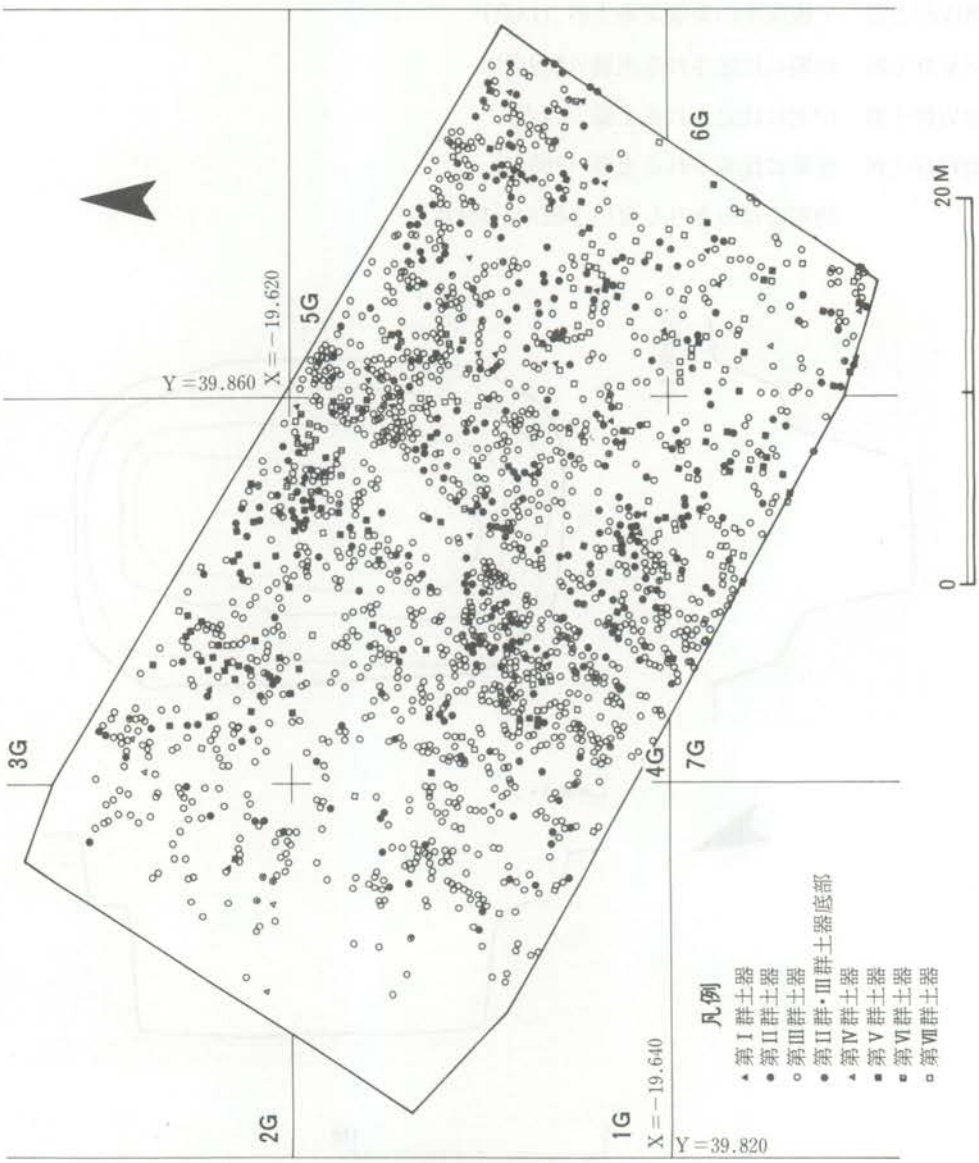


第121図　第２号土坑実測図（1/30）

以上のように出土土器の大別とその数量を提示してみた。数量については型式誤認もあるかと思われ、多少数値が変わるかもしれない。ただ全体的な割合は変化しないと考えている。

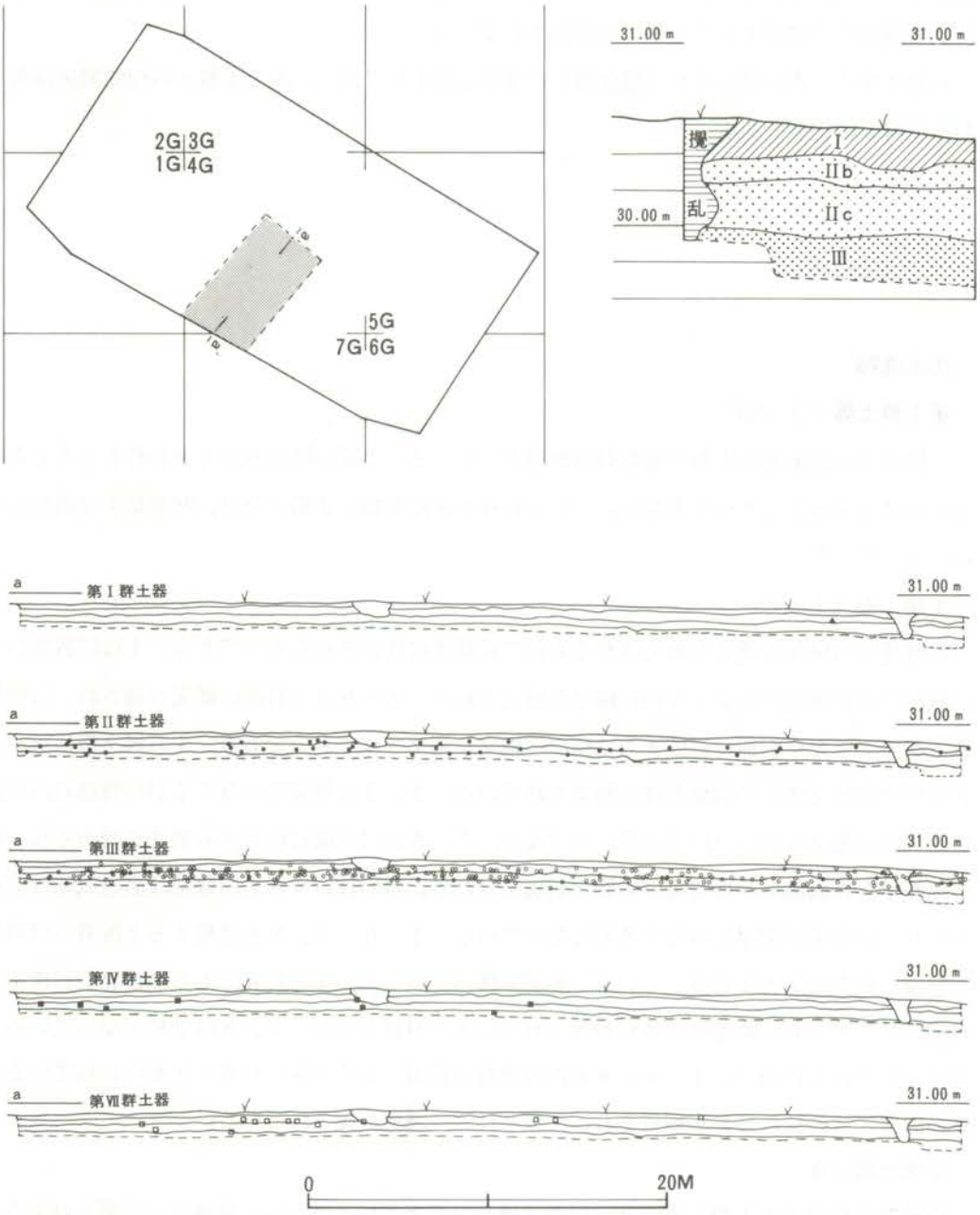
次に遺物出土状況について簡単にふれておきたい。まず土器の平面的な遺物分布を第122図に示してみた。表面採集及び表土層から得た遺物については除外してあるが一応分布の傾向はつかめると思う。また第123図については、スクリーントーンを掛けた部分について、土層断面図に垂直分布を投影してみた。

当跡での縄文期における活動のピークは遺構、遺物から考えれば早期中葉ということになる。



第122図　遺物出土状況図 ①（1/400）

そして該期の土器でも当跡での特徴となるのは、出土土器総数の約70％を占める第Ⅲ群土器である。その第Ⅲ群土器は第Ⅱ群土器の一つのバラエティーとして考えられるものであり、出土量の差こそあれ、両者は底部と伴に調査区内から万遍無く出土している。出土層位も２ｂ～２ｃ層にかけて出土し、２ｃ層の上位に中心的な分布を置くようである。このような出土状況も



第123図　遺物出土状況図 ②（1/400）

第II・III群土器の時期的併存の一つの証左ともなろうか。第Ｉ群の撚糸文系土器、第II群の条痕文系土器は出土量も少なく、分布も散発的である。前期の第Ｖ群土器も数点ずつが近接して出土する場合もあるが、特に集中することなく全体的に散らばって出土している。第VI群土器は個体数も限定されるため調査区北側中央付近に集まって出土している。後期は数型式をまとめていて、調査区内に広く散見されるが、東側から多く出土している傾向が認められる。出土層位について、第Ｖ群土器ははっきりとしたことを述べることができないが、第VII群に関しては２ｂ層から主に出土していることが示されている。

石器と礫は、表土層かまたは包含層から単独で出土しており、出土土器との相関関係は明らかにし得ない状況である。

出土遺物の概要

出土遺物

第Ｉ群土器（１～29）

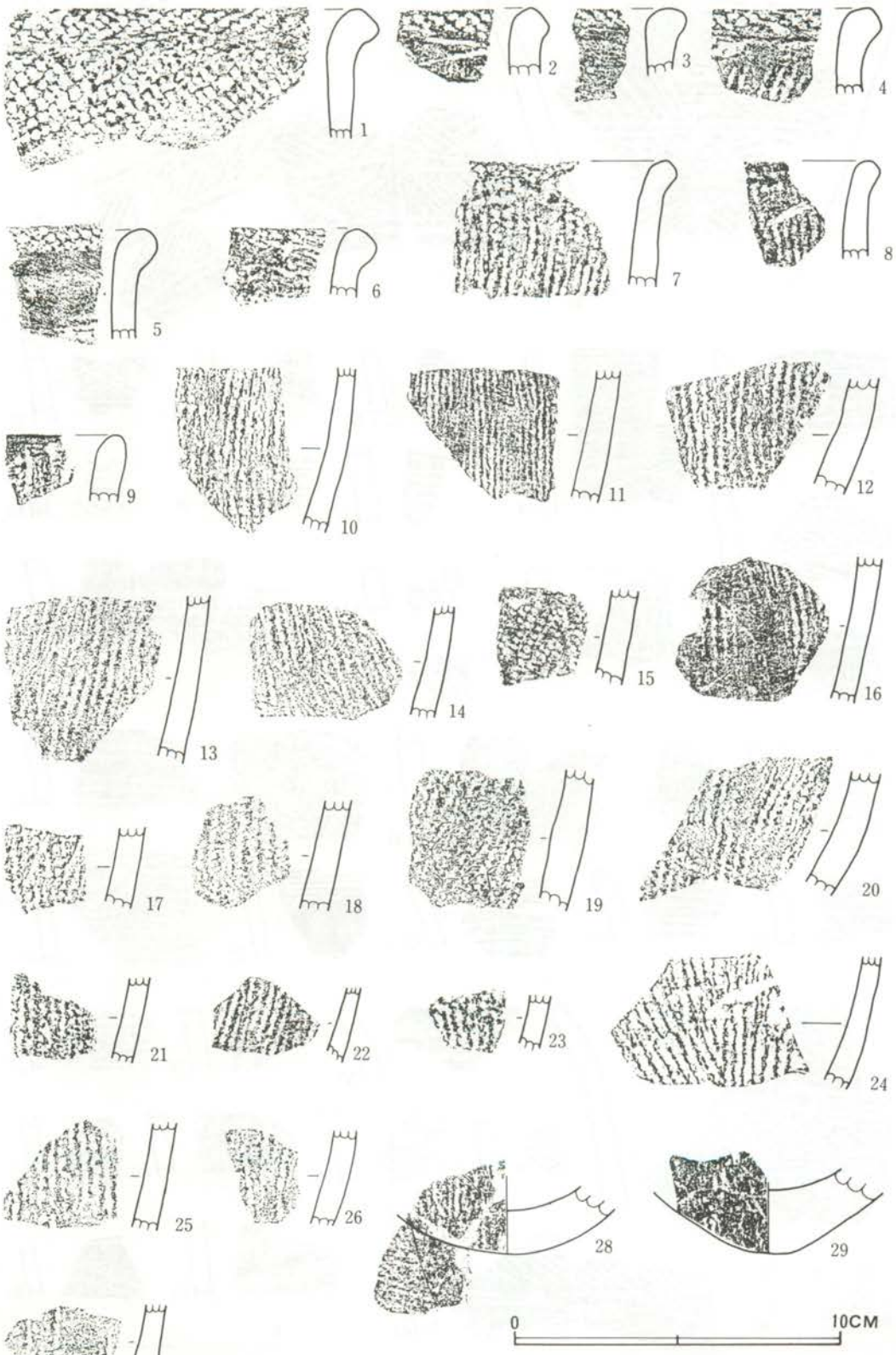
早期前半の撚糸文系土器で総数41点が出土している。土器の属性が最も表われると考えられる口縁部は図示した９片で少ない。一応これらを次の１類と２類に分け、胴部および底部については一括した。

１類土器（１～８）

口唇部と口縁部に縄文が施文されるもので井草式に比定されるものである。１は口唇部から口縁部にかけ連続するような斜行縄文が施文される。２～６は口唇部に縄文が施され、口唇部直下が無文となり胴部に斜位または横位の縄文が施文されるものである。４の無文帯は狭く、５はやや間隔を置いて胴部文様が施文されている。２、３は無文帯を有するが口唇部のみの破片で胴部の施文方向については明らかでない。７、８は口唇部に斜行する縄文が認められ、口唇部直下から胴部にかけて縦位の縄文が施文される。器形はいずれも口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部が肥厚し外反する形となっている。１～６と７、８を比較すると後者の口唇部の肥厚の度合は前者より衰えている。施文原体については、１がＬＲである他はＲＬが使用されている。１～６の胎土には砂粒が含まれているのが目立つが、７、８は細粒となっている。焼成はいずれも普通で、１～６、８の内面調整は指頭によると思われるナデが行われている。７の内面には砂粒の移動が観察され、ケズリに近い調整が施されている。

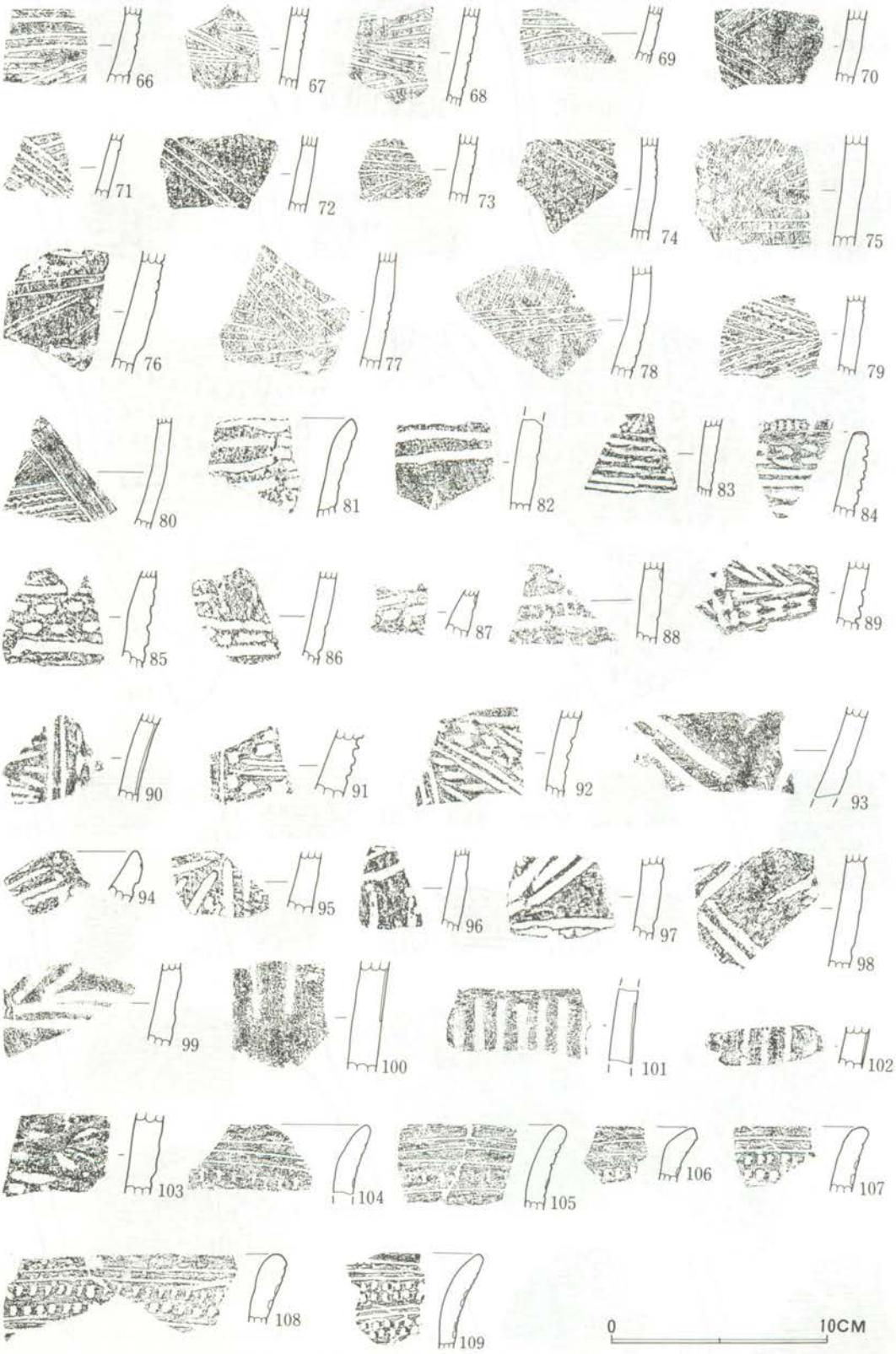
２類土器（９）

口唇部が肥厚せず１類と異なり口唇部に縄文が施文されていない。夏島式に比定されよう。図示した１点の小破片が認められたにすぎない。口唇部は丸味をもち口唇部下位から縄文が施

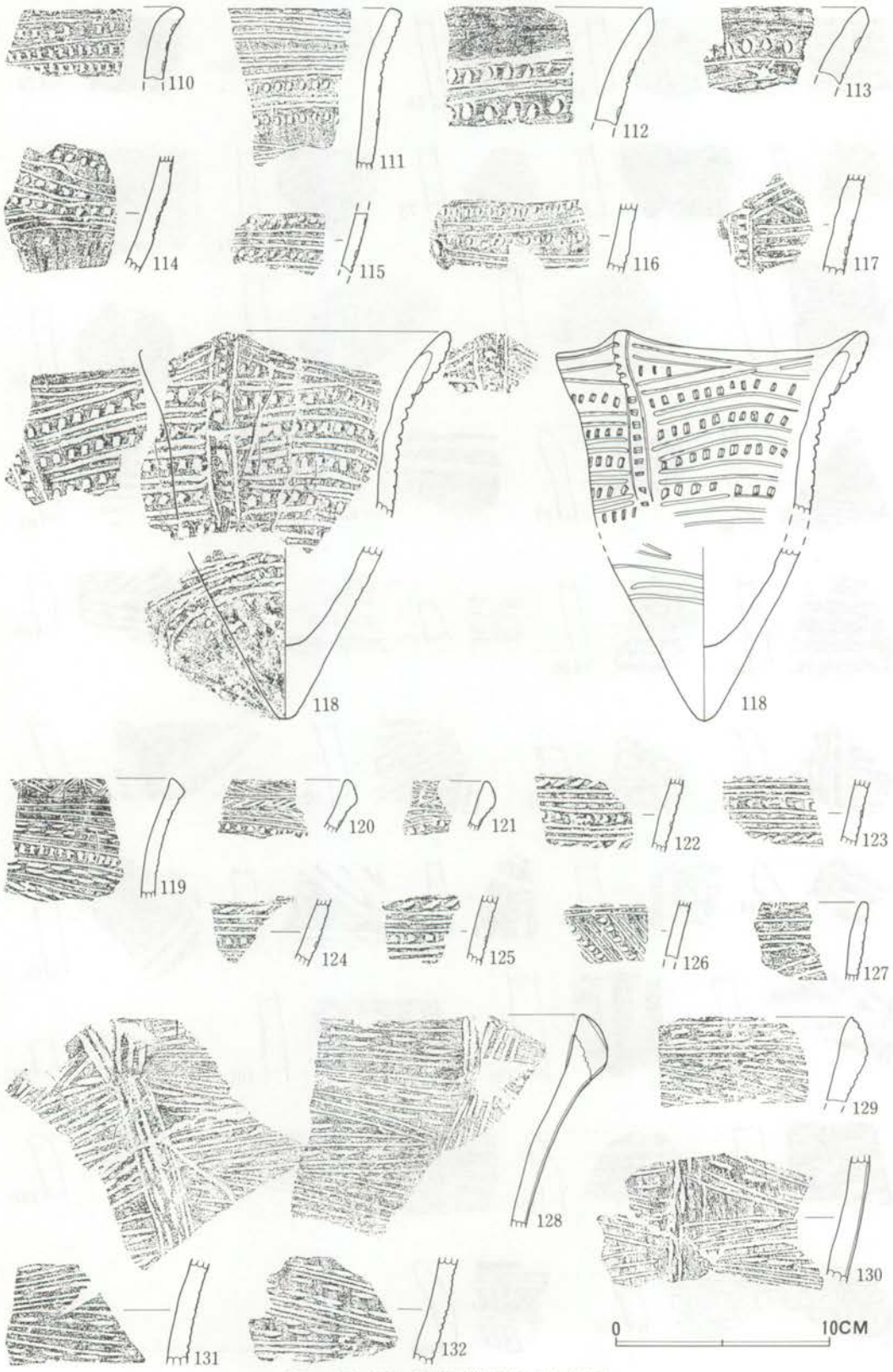


第124図　第Ｉ群土器拓影図（1/2）

第125図　第Ⅱ群土器拓影図 ①（1/3）

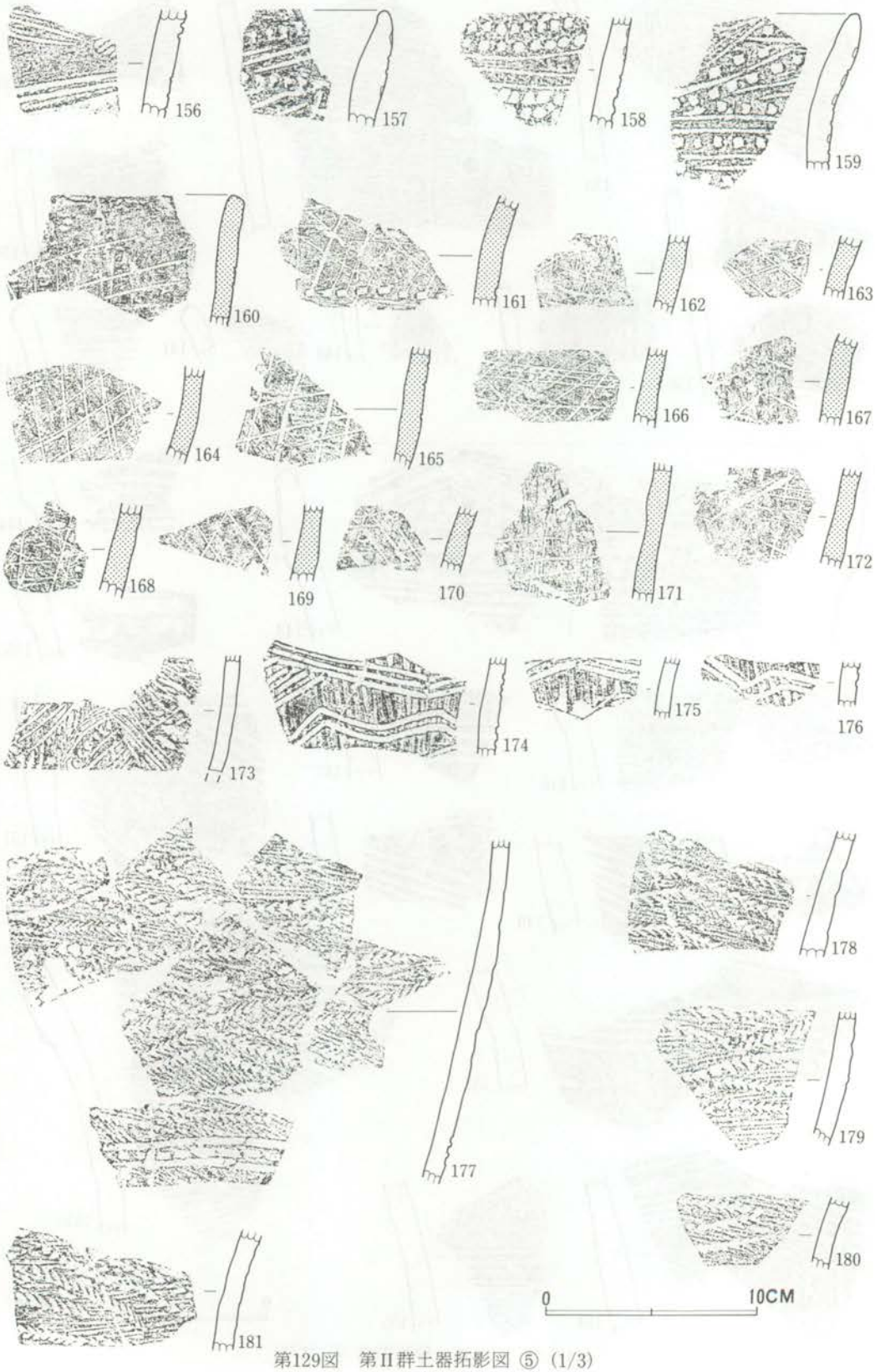


第126図　第Ⅱ群土器拓影図 ②（1/3）

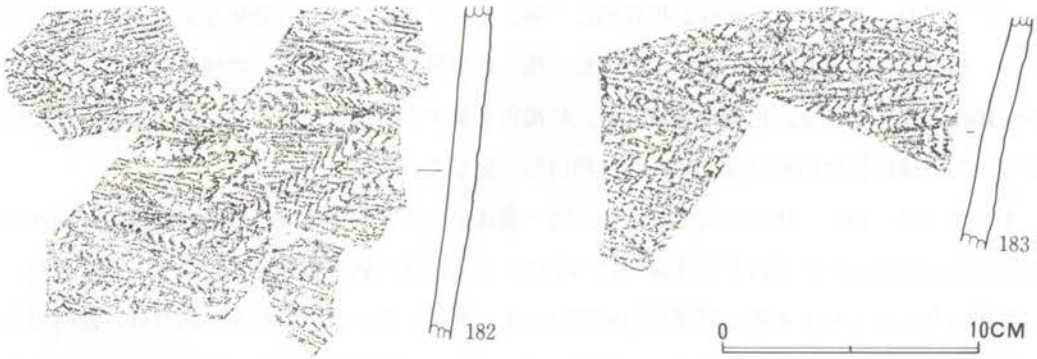


第127図　第Ⅱ群土器拓影図 ③ (1/3)

第128図　第Ⅱ群土器拓影図 ④ (1/3)



第129図　第Ⅱ群土器拓影図 ⑤ (1/3)



第130図　第Ⅱ群土器拓影図 ⑥ (1/3)

文される。遺存部が僅かであるためはっきりしないが原体はＲＬかと思われる。色調は暗褐色を呈している。

胴部および底部（10～29）

10～27は胴部の破片でそのうち20、24は底部に近い部分である。器表面は磨滅気味でざらついている。施文原体はＬＲの15を除くとＲＬが施文されている。28、29は底部で、丸底となり厚さはそう部厚くならない。色調は暗褐色、褐色、暗黄褐色を呈す。

第Ⅱ群土器（30～183）

早期中葉の沈線文系土器を一括する。出土点数は456点で第Ⅲ群土器に次いで出土量が多い。第Ⅲ群土器についても本来時期的には本群に含まれるものであるが、一応ここでは文様の描かれているものをまとめている。

１類土器（30～47）

三戸式土器と考えられるものを本類とし、文様のうえからさらにａ～ｃに分けた。

１ａ類（30～40）　口縁部と平行する沈線が２本あるいは３本単位で間隔を置いて数段施文され、その間に幾可学的に斜行したり格子目状となる沈線が配されるものである。30、32は平行沈線内に鋸歯状に沈線を施文し、その中を斜行する沈線で埋めている。30の口縁部については方向が異なる沈線が交錯し、斜行子状となっている。34などは鋸歯状の沈線内に方向が異なる斜行沈線が充塡される段と、一方向の斜行沈線が施文される段とが交互に行われている。口縁部は平縁でさほど外反していない。また口唇部については角頭状とまではならないが上端部がやや平らになっている。胎土は石英の細粒と思われる混和物が多く認められるのが特徴である。器面調整は全体に丁寧に仕上げられているといってよいであろう。まず表側については沈線施文の後やや乾燥するのをまって、軽くミガキ調整を施したと思われるものも存在する。こ

れによって34～37などは、沈線が視覚的に一層シャープに映るという効果をあげている。内面は39、40を除くとミガキかナデによる調整が施され平滑になっている。焼成は良い方で器厚は6～10㎜となっている。色調は暗黄褐色、暗褐色を呈する。焼成後の穿孔を有するものが2片ある。30の補修孔は円形に穿たれ、32は楕円形を呈している。

1b類（41～45）　接合が完全でないが同一個体になる。文様構成は口縁部に縦位の細沈線を施文し、胴部にかけては平行沈線間にヘラによる爪形状の刺突を加えるというものである。口唇部は丸味をもち1a類と同様に口縁部はあまり外反しないと思われる。調整は外面内面とも擦痕が観察され1a類と比較すると丁寧とはいえない。胎土は乳白色の微細粒が多く含まれまた小石も混ざっている。焼成は普通で器厚は10㎜前後となる。色調は暗褐色を呈する。

1c類（46、47）条痕文のみが施されたものである。2点とも斜方向の条痕が認められ他の文様は加えられない。内面については1a類にみられたようなナデ調整によって平滑にさせている。46は口縁部でその口唇部は平坦になっており若干内側に削いだような形となっている。胎土には長石と思われる乳白色の微細粒が多く含有させ、スコリア、石英粒も認めることができる。器厚は46が9㎜、胴部の47が11㎜となっている。焼成は普通で色調は暗褐色を呈している。

2類土器（48～142）

三戸式土器に続く田戸下層式土器を本類とする。器形では新たに波状口縁となるものも現われ、文様も複雑な構成となる。主たる文様要素は細沈線や太沈線であるが、それに短沈線、刺突文、貝殻文が加えられたりまたそれらが組み合わされたりしバラエティーに富むものである。文様の特徴から下記のa～hに分けることとする。

2a類（48～52）　横方向の沈線のみが施されるもので当遺跡での出土は僅かである。沈線の幅は2㎜弱で、ヘラ状工具か棒状工具の先端を使用し一本一本施文している。口縁部はゆるやかに外反しており、48、50の断面をみると口唇端部から15㎜程下位でやや肥厚しているのが窺える。胎土は密で焼成も良い。器厚は7～9㎜となる。48～50の口縁部内面はミガキ調整され、51、52には縦位の調整痕が残されている。色調は52が暗黄褐色で他は暗褐色を呈している。

2b類（53～59、63）　口縁部と平行する数条の沈線を間隔を置いて施文し、その間に短沈線か刺突を加えたものである。53～59は平行沈線帯間に横位のハの字状の沈線を配している。63は方向の異なる斜行沈線が段を変えて充填される。沈線の幅は53～57、63が2㎜程度で58、59はそれよりも細くなる。施文工具はいずれもヘラ状工具によると思われる。54～56、63は工具の先端を土器に対しやや上向加減にして施文したと考えられる。それは沈線の溝底が土器の上部側が鋭く、下部側がゆるやかになっていることから窺える。55、57、58の横位ハの字状文は沈線というより、ヘラ先の刺突に近いものである。胴部は直立気味に立ち上がると考えられ、口縁部は54、55のようにゆるやかに外反するような器形になると思われる。胎土には砂粒が含

まれるが、小石のような目立つ含有物は表面にみえていない。調整は53がミガキ調整されている他は内面はやや荒れ気味となっている。そのような状況であるので焼成は普通か、あまり良くない部類となる。器厚は7～10㎜で、色調は暗茶褐色、暗褐色を呈している。

2ｃ類（60～62、64～78）　斜行する平行細沈線が引かれるものである。単に斜行するものと、角度を変え且つ交錯しないように施文するものとがある。沈線の幅は大部分が2㎜程であるが70、74、78のように1㎜と細くなるものもある。胎土に砂が含まれるが、その他に目立つ含有物は含まれない。器厚は71が5㎜と薄く、76の12㎜が最大となっている。その他は8㎜前後の厚さを示している。内面調整はミガキ調整が行われ、外面もまた軽くミガキを施しているものが多い。色調は暗褐色、橙褐色、暗黄褐色を呈する。焼成は普通である。

2ｄ類（79、80）　細沈線と貝殻腹縁文が組み合わされたもので図示した2点が出土したにすぎない。79は方向を異にして施文された平行沈線間に貝殻腹縁文を充填している。80もほぼ同様であるが貝殻腹縁文が付加されない部分がある。胎土は砂粒を含むが密である。器厚は8㎜である。内面調整は基本的にはミガキが施されるが、一部に砂粒の移動が残るところもみられる。色調は茶褐色で、80には黒褐色となる部分もある。

2ｅ類（81～103）　太沈線を主に文様を構成するものをまとめた。刺突や短沈線と組み合わされるなどバラエティーをもつ。81～83は平行沈線が施文されているものである。81の太沈線は各横位沈線が収束する部分に同一工具による刺突を加え、またその端部はやや盛り上がった状態となる。83の断面は浅いU字形となり凹線文というべきものかもしれない。84～92は平行沈線と刺突が組み合わされ、先に提示した2ｂ類と、後述する2ｈ類と同様な文様構成をとるものである。84は直立する口縁部で口唇部上面は平坦となっており、そこに棒状工具による圧痕が施される。91は沈線は比較的細くなっているが、刺突はその幅を大にしている。刺突文については91ばかりでなく、それぞれ器壁に深く施文されており、はっきりとしたものになっている。93～99は斜行する太沈線で、2ｃ類にみられたように方向の異なる平行沈線は互いに交錯しないよう配されている。100～102は縦方向に太沈線が施文されたもので、103は不規則な凹線が認められる。器厚は81、83、96が8㎜程で、他は10～14㎜とやや厚くなっている。焼成は普通で胎土には砂粒が含まれている。内面調整は81、85～89、100～103など砂粒の移動痕を残し丁寧でないものと、ミガキ調整により平滑にされるものとがある。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

2ｆ類（104～118、126）　細沈線と刺突の組み合わせにより文様を描出するものである。104～113は口縁部と平行する細沈線間に刺突を加えるものだが、その組み合わせ方は少しずつ変化している。104～106は平行沈線帯に例の刺突が入り、それが2例となるのが107～109である。110は沈線と刺突が交互に施文されている。111は口縁部に6条の沈線帯があり、その下位に例の刺突2段が2条の沈線帯を間にして施文される。112、113は爪形の刺突が無文帯を挟み施文されて

いる。口縁部は全体的にゆるやかに外反し、106、110は口唇部を外反させる。114～118は沈線間が刺突と無文とが交互になるものである。116～118は縦位方向の構成が加えられる。126は斜行する沈線と刺突、平行沈線が組み合う。胎土は砂粒が含まれているが密である。105、108、110、111には石英の微細粒が、また多くのものに乳白色の微細粒が僅かに含有されている。内面調整はナデかミガキによる。上記のような混和剤が含まれるため、ナデを施す104～110にその移動が認められる。111は比較的丁寧に磨かれている。色調は111が暗黄褐色、114が赤褐色、117、118は暗赤褐色を示し、他は暗褐色に近い。器厚は115、126が6㎜で薄く作られ、8㎜～10㎜の厚さになるのが通有であるようだ。118は本類土器の中で唯一器形全体が窺える資料である。おそらく、ゆるやかな3つの波頂部を有すると思われる深鉢形土器である。器形は60度の傾斜をもって開く尖底から胴部は直立するように立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部はやや丸味を帯び、波状部は肥厚している。復元すると口径は13cm、器高は18cm程となる。文様をみると、波頂部から垂下する2本の沈線と、その中を刺突で埋めるという縦方向の区画に、横位文様が連結し整った構成を成している。口縁部は、波底部で収束部が向い合う綾杉状に沈線を施し、波状部の空間を埋めている。これはちょうど縦位沈線帯を挟むものの菱形のようにみえる。胴部下位は縦位の区画もなく、横走する沈線が施文され、底部は文様をもたない。器面調整は外面は底部に縦方向のミガキ痕が認められるが、内面については不鮮明である。しかし口縁部の一部には磨きの跡が残されているので、上半部は同様な調整が行われたと推測される。底部はナデのみによって仕上げられたと思われる。

2g類（119～125）　細沈線、短沈線、刺突により文様を構成するものである。119～121の口縁部は、口唇部の断面が三角状に肥厚している。その口唇部に119は鋸歯状に、他の2点は斜行する沈線を施文している。胴部は横位あるいは斜行する平行沈線に刺突と短沈線が加えられている。短沈線はヘラ状工具の先端を押し付けて描出されたようなもので、長さは1cm以下である。胎土は119～121に関しては砂の含有があまり目立たず、122～125は砂の混和が認められるものである。内面はいずれもミガキ調整が行われ、口縁部の3点は比較的丁寧に仕上げられている。器厚は7㎜程を示し、色調は茶褐色、暗褐色を呈する。

2h類（127～142）　沈線と短沈線により文様を構成するものである。128～135は接合はしなかったが、同一個体になると考えられる。器形は直立気味の胴部上半からしだいに外反し、口唇部を三角形状に肥厚させる。口縁部はゆるやかな波状口縁となる。文様構成は118と同様縦区画を基調としている。すなわち波頂部から垂下する沈線が縦位の区画を成し、その区画間に文様が展開するのである。118は基本的には縦位区画の沈線帯に対し垂直方向の平行沈線が施文されている。それに対し、128～135の場合は縦区画内は斜方向の沈線によって構成される。それも一方向ではなく、区画内を九十九折状に方向を変化させ充填されている。胴部下位になると縦区画も薄れるようで、134では縦位沈線帯の終わる部分にボタン状の貼付文がみられる。

137～140は短沈線とは若干異なる爪形状の刺突が縦区画として施文されている。141、142は口唇部に短沈線が認められるもので、口縁部全体は明らかでない。同一個体となる128～135の胎土には石英粒が含有され、器表面にそれをみることができる。127、136～142にも細砂粒が含まれる。焼成は概して良い方といえるだろう。128～140の内面はミガキ調整によって平滑にされており、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に磨いた跡を残している。127、141、142はナデ調整が施されていると思われる。色調は127が暗褐色、128～135は黄灰褐色、136～142までは黄褐色を呈している。

3類土器（143～183）

田戸上層式として考えられるものをまとめた。2類土器と共通する文様要素に新たに突起、押し引き文等が加わる。また胎土に僅かながら繊維を含むものも認められる。以下文様構成からａ～ｆに分類した。

3ａ類（143～156）　細沈線、太沈線、刺突が組み合わされ、小突起が貼付される。2個体分の破片で、143～151、152～156が同一個体となる。まず特徴となるのは、口縁部と胴部との境に隆帯でも貼り付けたかのような段が付くということである。そして143、153両者ともその境の上には刺突が施され、さらに途中に小突起が置かれる。この隆帯状の肥厚帯によって口縁部文様帯と胴部文様帯が明瞭に分かれている。143の口縁部は幅5㎜の太沈線により三角形の区画が描出され、その中に刺突文を入れている。153は雑な感じの沈線が密に横走している。2個体とも胴部には刺突は加飾されず、数条単位の方向の異なる斜行沈線が施文されている。器形は直立するような胴部からその上半に至り僅かに屈曲するが、それほど外に開くことなくやや肥厚させた口縁部に続く。口唇部は丸味を有し幾分内傾するかのようにみえている。胎土には砂が多量に含まれ、石英と長石粒の多さは目立っている。また一部に繊維が抜け落ちたような痕跡を残している。焼成はあまり良好ではなく器面がざらついている。色調は黄褐色を呈している。内面はナデ調整が施されていると思われるが、焼成不良のためかはっきりとしないものも存在する。器厚は10㎜以上となり143では16㎜程の厚さとなっている。

3ｂ類（157～159）　文様が沈線と刺突により描出される点では2ｆ類に近いといえる。しかし、刺突の周辺が盛り上がったままであったり、沈線もゆるやかなカーブをもったりし、また口縁部の形態なども異なるものである。157、159は波状口縁の一部で、157は口唇端部をやや内側に向けている。159では直立する口縁部を肥厚させ、13㎜の器厚を示している。157も14㎜の厚さになり、胴部の158は10㎜の器厚となっている。胎土は砂の他159にはスコリアが含まれる。色調は暗褐色、赤褐色、黄褐色である。

3ｃ類（160～172）　細い沈線を異なる方向へ斜行させ、それが交差し斜格子目状となるものである。断面にスクリーントーンを入れてあるが、これは僅かであるが繊維の混入が認めら

れたためである。格子目は雑となる場合が多いようで、163～165が割に整然としている。格子目文は主に胴部に配されたと思われ、160では口縁部上位は無文となっている。161には横走する刺突が加えられる。厚さは10㎜前後で、内面には擦痕状の調整痕を残している。色調は暗褐色、暗黄褐色等である。

3ｄ類（173）　斜行したり湾曲する沈線と、刺突が複雑に組み合わされている。刺突は爪形を呈するものと半月状を成す2種類が認められる。胎土はスコリアを含むが密で焼成も良い。内面はミガキ調整され平滑になっている。表面の色調は暗褐色を示しているが、断面は真黒に近い色となっている。器厚は7㎜でそう厚くはない。

3ｅ類（174～176）　同一個体になるであろう。これまでみてきた土器とは地文をもっていることでかなり趣が変わっている。まず竹管状工具を数本まとめ、これを縦方向に密に撫で一見条痕状を呈する地文が施される。そのうえに同様な工具で力強い沈線が1本1本描かれている。文様は途中で屈曲する斜行沈線と、ゆるやかな波状となる沈線から構成される。沈線の幅は2.5㎜で断面の形状は箱形を呈している。胎土、焼成とも良好で、内面も研磨されている。器厚は6～7㎜、色調は暗茶褐色である。

3ｆ類（177～183）　貝殻条痕を地文とし、そのうえ《状の押し引き文が展開するものである。同一個体と考えられる。条痕は横位施文を主とし、器面全体を密に埋めている。押し引き文は先端が三角形となっているヘラ状工具を右方向に進展させている。この《状の押し引き文については、田戸上層式の一分派として考えられる明神裏3式に認められるもので、東北地方との関係を窺わせるものである。胎土は砂粒を含み、その中に石英粒を割に認める。条痕は外面のみに施され、内面はミガキ調整される。焼成は普通で、器厚は10㎜前後となり、色調は暗褐色または黒褐色を呈する。

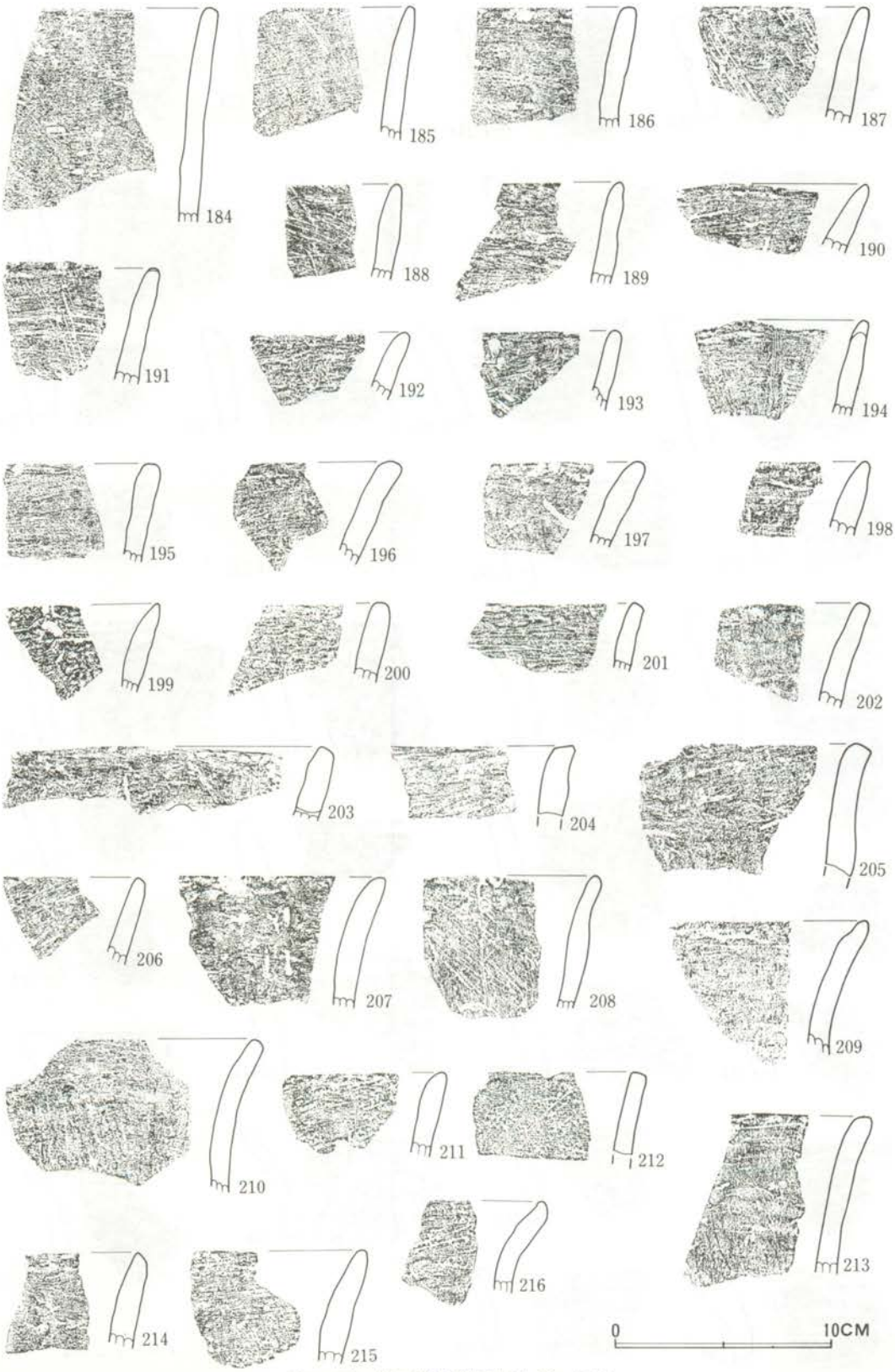
第Ⅲ群土器（184～280）

無文の土器で2,485点出土している。これは出土土器総数の70％に当たり、当遺跡での特色となっている。文様が施文されていないので分類の基準をどう設定しようかと考えたが大きくは胎土に繊維を含む類とそうでないものとに分けることとした。また口縁部の形態も様々であり、細別は調整痕によった。

1類土器（184～270）

胎土に繊維を含まないもので本群の大部分を占める。調整痕には次のような違いが認められる。

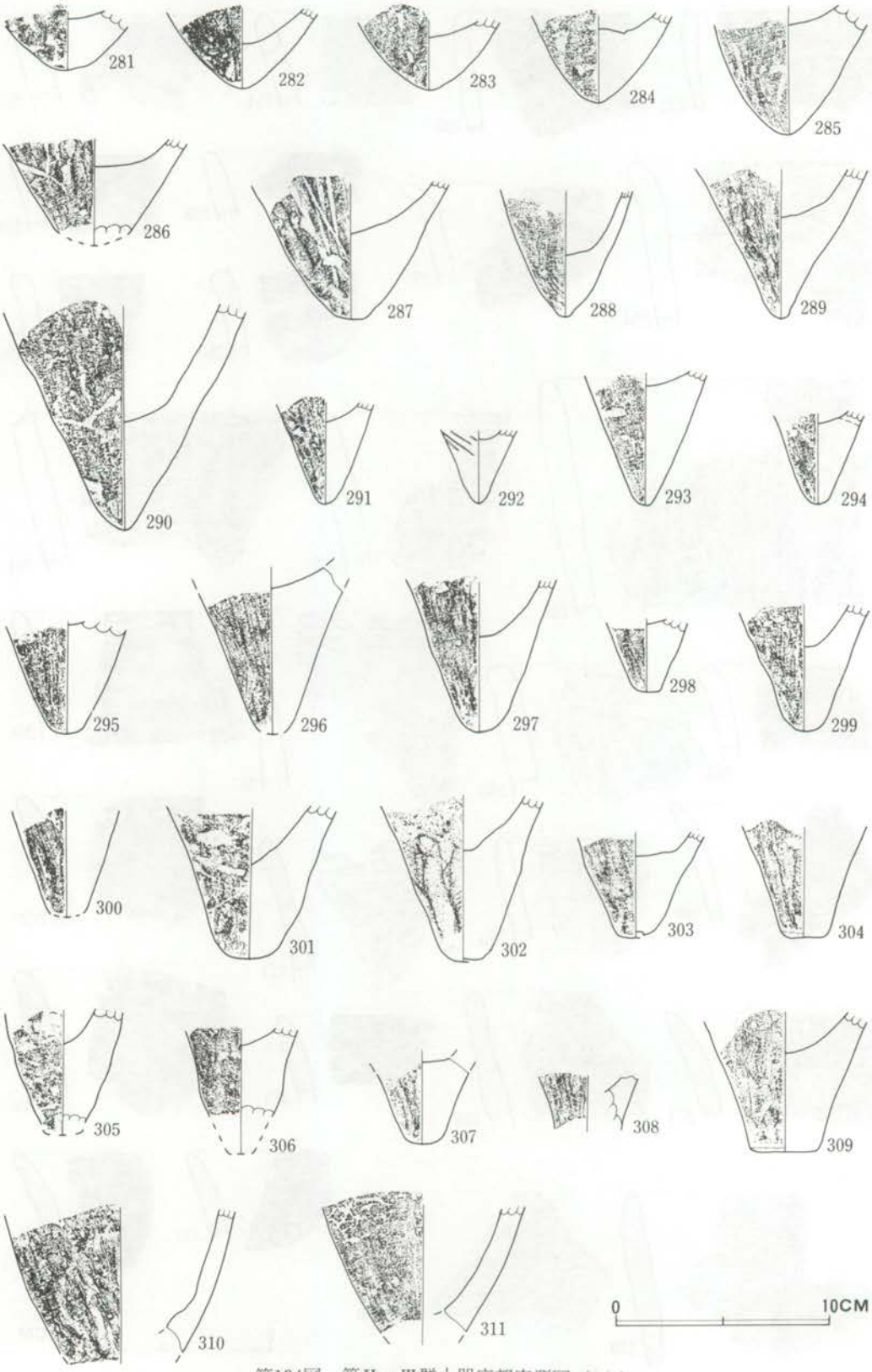
1ａ類（184～216）　外面に擦痕状の調整痕を残すものである。擦痕をそのままに留める場合は少なく、ナデ調整を加えるものが多い。187、191は条痕条の調整が斜方向に走りその後ナデ調整を施している。調整は横位を主とするが、194、210は縦位に施され、特に194は文様的な



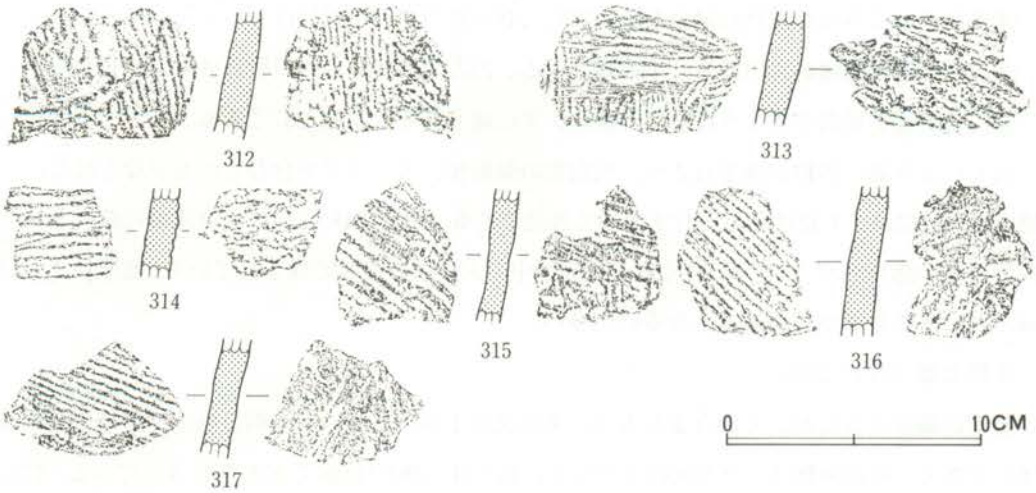
第131図　第Ⅲ群土器拓影図 ①（1/3）

第132図　第Ⅲ群土器拓影図 ②（1/3）

第133図　第Ⅲ群土器拓影図 ③ (1/3)



第134図　第Ⅱ・Ⅲ群土器底部実測図（1/3）



第135図　第Ⅳ群土器拓影図（1/3）

効果を生んでいる。内面は平滑にされるものとナデのみのものが同数程度認められる。212、213は丁寧に研磨され、また184、185、187、191はII群１ａ、１ｃ類に近似する調整痕を残している。204、209の内面調整は面となるようなナデが施され、同様な調整が前期にもみられるので、時期的に本群と異なるものかもしれない。口縁部はゆるやかな波状口縁となる194を除くと平口縁である。外反するものは少なく、直立気味に開口し口唇部に丸味を有するものが多い。なかには203、205、214のように外に切ったかのような断面形態を示すものや、216のように口唇部先端が内傾する例もみられる。191の口唇上面は指頭による圧痕が加えられている。胎土には概して石英の細粒が混ぜられており、乳白色の微細粒も184、186、187、191、195に比較的多く含まれている。器厚は９～14㎜程度であり焼成は普通である。色調は黄褐色、茶褐色、黒褐色等で、黄褐色を多く認める。

２ｂ類（217～270）　外面が指頭によるナデかミガキによって調整されるものである。内面についても外面とほぼ同様な調整によって仕上げられるが、例外的に内面調整が外面と比較し劣るものもある。262、264の外面は丁寧なミガキ調整によって平滑になっているが、内面は横方工に単にナデを加えるか、擦痕状の調整痕を残したままになっている。

口縁部は様々な形態を呈しているが説明が煩雑となるので、下記に認められる５形態を示しておきたい。

①直立気味に開き平口縁となる。口唇部に丸味を有するもの。232のように肥厚するもの。また262～264は外側に斜めに切ったような口唇部が認められる。

②口縁部に至りゆるやかに外反し平口縁となる。口唇部は237、244のように端部がやや尖るか、丸味をもって肥厚するものが多い。

③ゆるやかに外反し波状口縁となる。238、248が該当し、口唇部はやや尖った形となる。

④口縁部上部を僅かに内湾させ平口縁となる。252、253である。口唇部は丸みを有する。

⑤口縁上部が屈曲するように急に外反し、平口縁となる。249、257である。

胎土には共通に砂粒が含まれるが、乳白色の微細粒、スコリアを含むものも少なくはない。焼成は、特に良、不良は認められず概して普通である。225、248、254には焼成後に穿孔された円形の孔が認められ、223、255はそれが穿孔途中の未貫通の状態で残されている。器厚は7～12㎜の間に落ち着くが10㎜程度となるのが多い。

2類土器（271～280）

胎土に繊維を含むが、その含まれ方は、条痕文系土器、あるいは前期の繊維土器に比べれば僅かである。外面調整はヨコ方向のナデが主に施され、280だけがミガキ調整されている。273、279には擦痕が観察されるが、280の内面が同様の調整となっている。口縁部は274、279、280が若干内傾気味で、他はゆるやかなカーブをもって開口する。276が波状口縁となる。口唇部は全体的に丸味を有する。焼成は繊維を含むことにより1類より脆い感じを受ける。色調は暗黄褐色～暗橙褐色といったところである。器厚については1類と大差はない。

第Ⅱ、Ⅲ群土器底部（281～311）

第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器は併存していたと考えられるが、両群とも底部まで復元可能となったのは1点ずつである。第Ⅱ群では118であり、第Ⅲ群は遺構から出土した土器が復元された。底部だけが遺存するもののうち、文様が描かれている例は少なく、多くは調整痕のみを残している。したがって、どの類の底部であるということは判別し難い状態となっている。しかしそれぞれに差はあるものの幾つかの形態に分類することができる。それらを下記のa～dに分けてみたいと思う。なお底部との接合部を残す310、311を含め合計38個の底部が出土している。

a（281～287）　開き方がゆるやかで底部先端が尖らないで丸味をもつものである。底部の断面が胴部の器厚と比較し特に厚くはならないのが281～283で、284～287は部厚く作られている。底部内側も外形に対応し湾曲するが、284、286は平坦となる部分もある。外面調整は281、284がナデで、その他はミガキ調整されており、内面はどれもが雑なナデを施している。287は縦位に施文された沈線が3条底部に及んでいる。

b（288～294）　開き具合が70度前後と急で、底部先端が尖るものである。また断面もかなりの厚みをもつ。288、289はいわゆる乳頭状の尖底に近い形態と思われる。胎土は288、291～293に砂粒以外に乳白色を呈する微細粒が含まれているのが目に付く。また290には僅かに繊維が含まれる。外面調整は288、291、293、294に縦方向のミガキ痕が認められ、289、292は縦位に擦痕状となるナデの痕跡を残している。290はやや器面が荒れているがナデ調整が施されていると思われる。内面はaと同様ナデを主とするがやや丁寧である。292は先端近くまで斜行沈線が施

文されている。288の内面底部には平坦となる部分が設けられているが他は丸味を付けている。焼成は概ね普通であろう。色調は288、294が黒褐色、291が暗黄褐色で他は茶褐色を呈している。

c（295～300）　開く角度はbと変わらないが尖底の先端が尖らないで丸味を有するものである。器厚もbと同様厚く作られる。外面は295～298が縦位に良く磨かれており、299は289と同じような調整が施されている。300の調整については表面がかなり磨滅しているためはっきりしない。内面は不明な300以外丸味を有しており、bと変わらない調整の跡が認められる。胎土は298を除くと、石英粒と乳白色の微細粒が含有されている。焼成は300は不良であるが、295～299は普通かあるいは良好といえるであろう。色調は298が暗黄褐色で他は茶褐色を呈している。以上のように形態の一部に違いが認められるが、基本的にはbと大差はない。

d（301～309）　開く角度はb、cと同様70度前後と急である。しかし底部の先端が平坦となったり、凹みが付いたりする。306、308は断定はできないが、底部の上方で若干屈曲して開くので、おそらく同じ類になると考えられる。外面は301、306がナデ、305、308がミガキ、303、304、307、309が擦痕を残すナデによって調整されている。302はケズリによって器形を整えたと考えられ面が生じている。胎土、焼成については301に僅かに繊維が含まれ、焼成もあまり良くない。他はこれまでの例と変わるところはない。色調は301、303、306、308が暗黄褐色、他が茶褐色である。310、311は胴部が尖底との接合部で剝がれたものである。接合部がそのままの状態で残存しているので、底部の乾燥がある程度進んだ時点で胴部の製作が行われたと思われる。

第Ⅳ群土器（312～317）

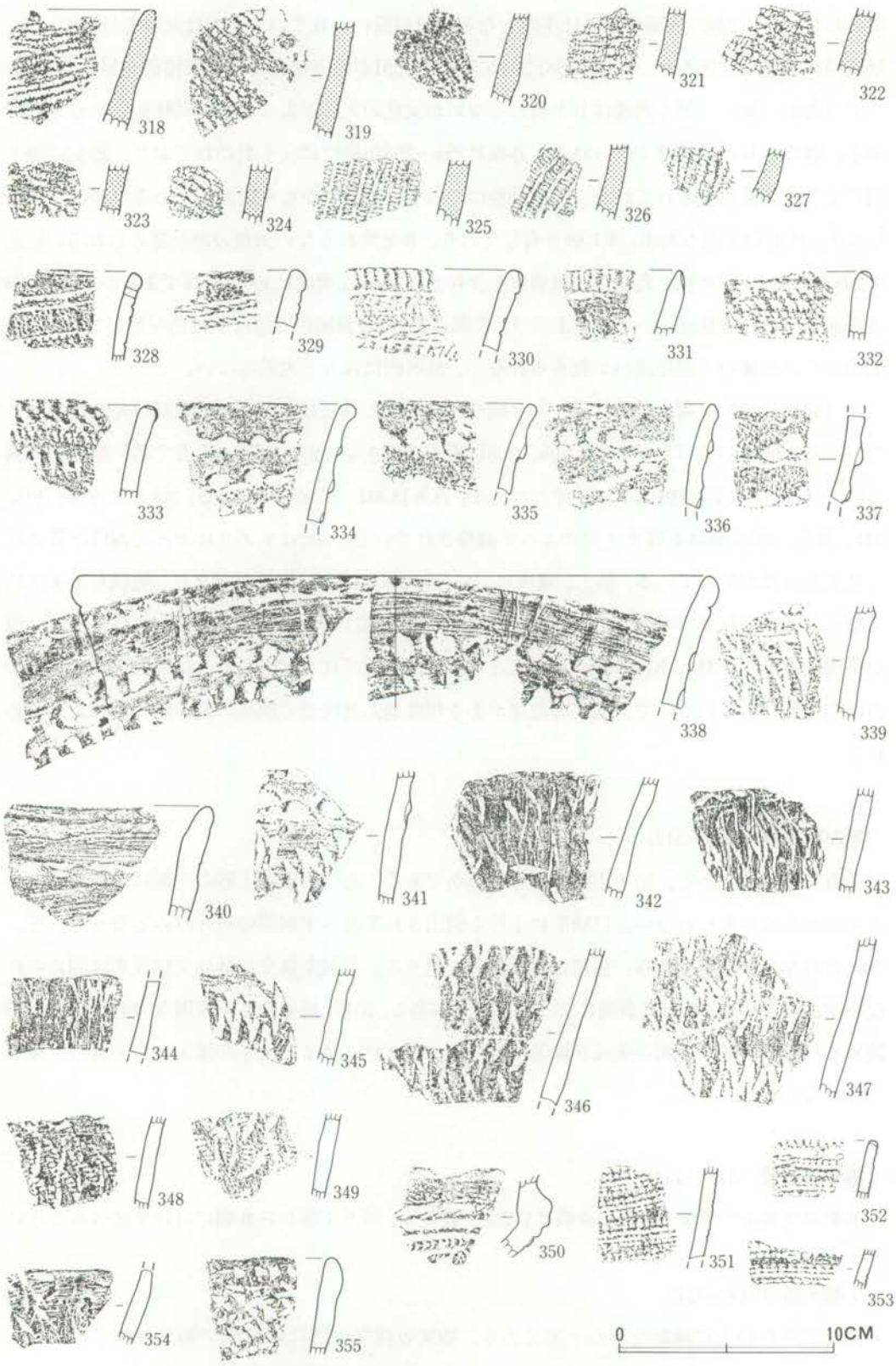
条痕文系土器である。出土点数は13点と僅かである。ただ第Ⅲ群土器の一部に本群に含まれるものがあるかもしれない。口縁部は1片も検出されておらず胴部の破片のみとなっている。それぞれ胎土に繊維を含み、色調は暗黄褐色を呈する。貝殻条痕文以外の文様要素は認められないが、条痕の施され方は表裏によって多少差がある。312は両面とも不規則な方向への施文が認められるが、他は内面の条痕が顕著ではない。いずれにせよ出土量が僅かなため詳しくは述べられない状況である。

第Ⅴ群土器（318～353）

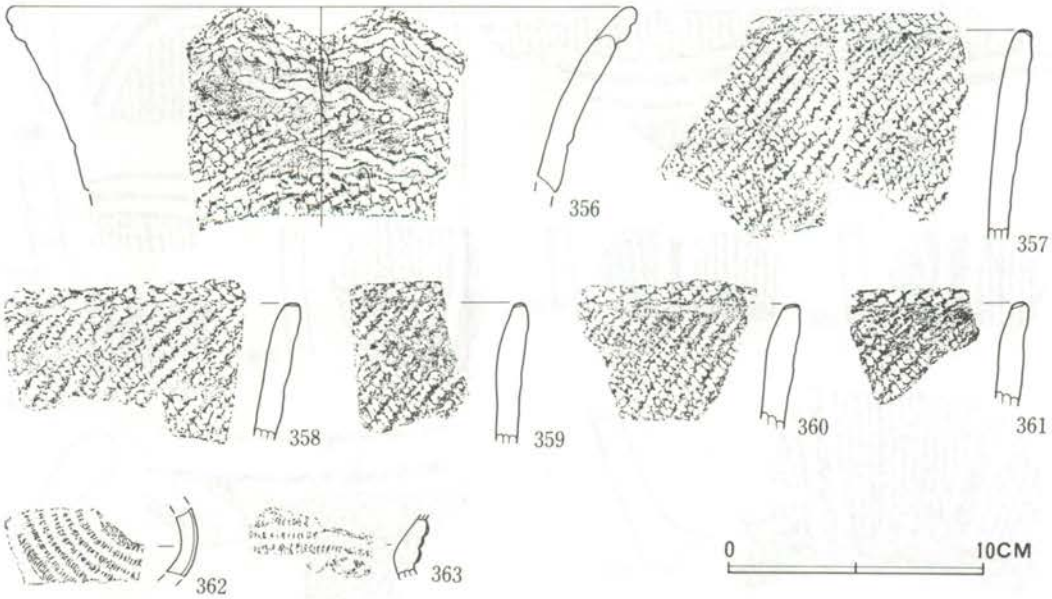
前期の土器を一括する。出土点数は139点を数える。以下1類から6類に分けて述べることにする。

1類土器（318～327）

前期前半の胎土に繊維を含む土器である。地文の縄文以外には文様が加えられていない。318～324、327は単節の縄文が施文され、325、326には付加条の原体が使われている。318は外



第136図　第Ⅴ群土器拓影図 ①（1/3）



第137図　第Ⅴ群土器拓影図 ②（1/3）

反せずに開口する口縁部で、僅かに残る口唇部は丸味を有する。他は胴部の破片である。全体に脆い焼成となっており、色調は暗褐色、暗灰色を呈する。器厚は8～10㎜程になる。

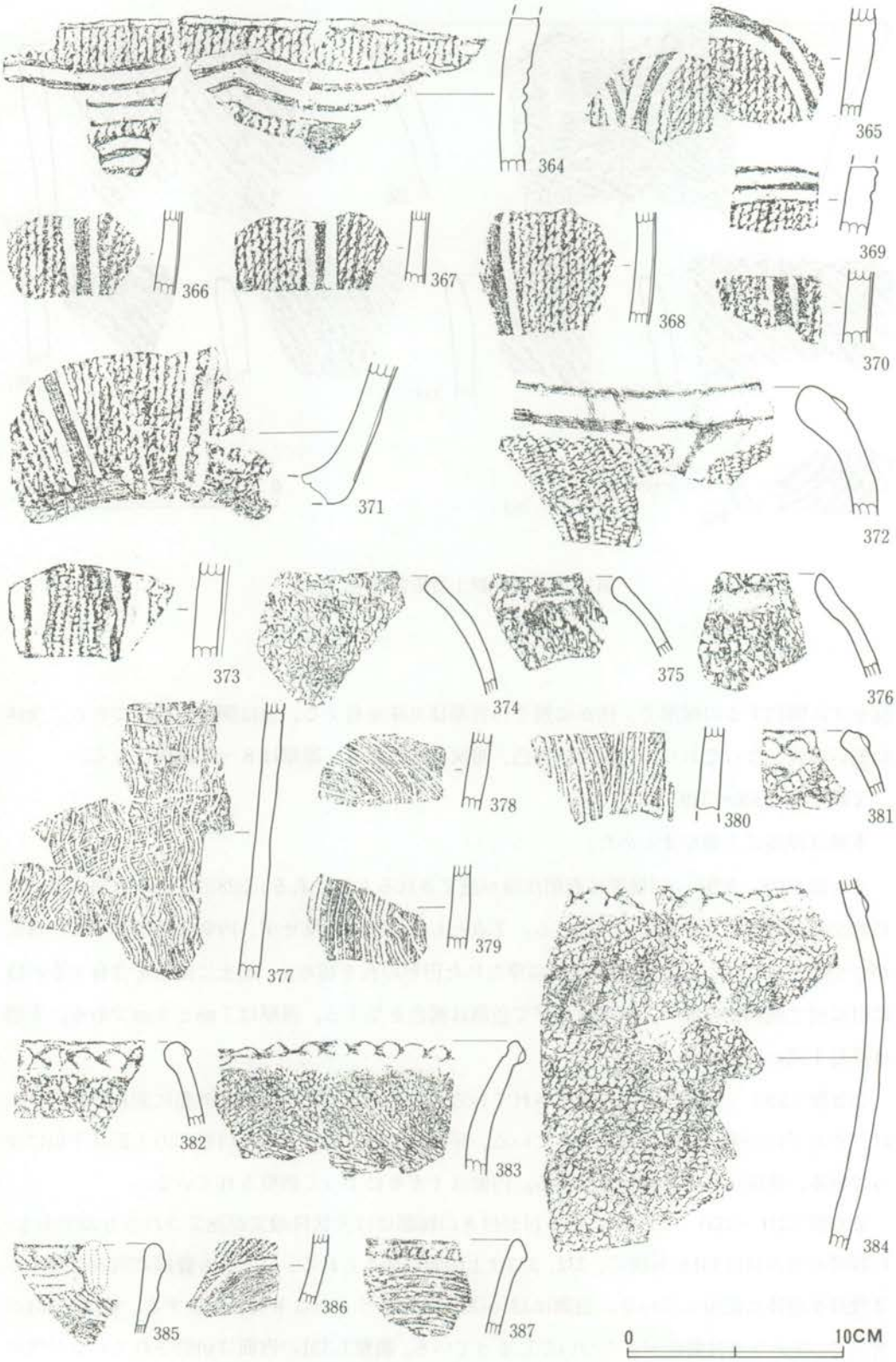
2類土器（328～349、354、355）

本類は浮島式土器をまとめた。

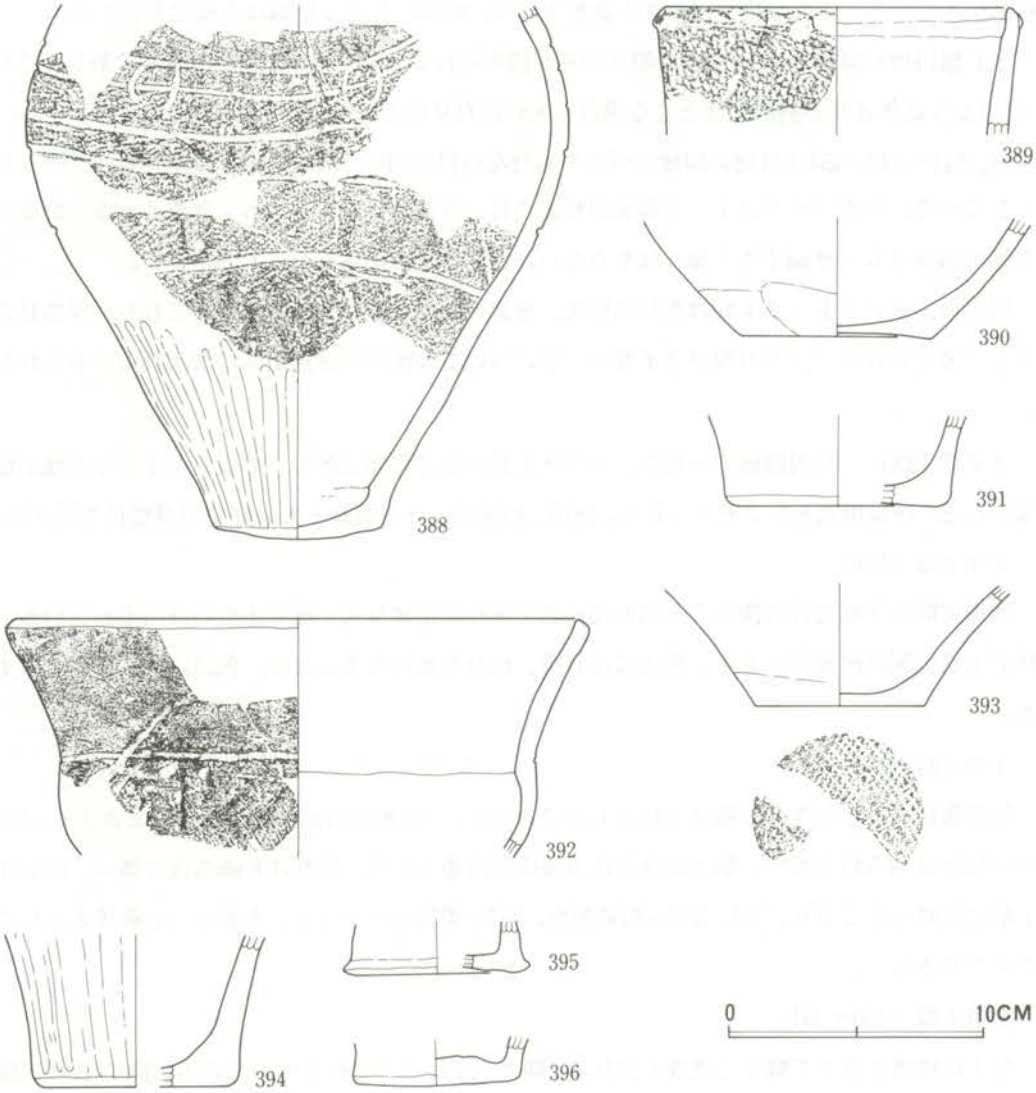
2a類（328、329）　口縁部に有節沈線が施文されるものである。328は3条の有節沈線の他に地文として撚糸文が施文されている。2点とも口縁部は外反せず、内側に稜を有する口唇部がやや肥厚している。328には焼成前に穿たれた円形の孔を認める。胎土に砂粒を含有するが特に目に付く混和物はない。焼成は良好で色調は褐色を呈する。器厚は7㎜と9㎜である。本類は浮島Ⅰ式に比定されよう。

2b類（330）　変形爪形文が施文されているものである。また口唇部外面に刻み目が付けられ、その下に一条の沈線が施文されている。平口縁であると考えられ口唇部の上面は平坦になっている。焼成は良く黄褐色を呈する。内面はミガキによって調整されている。

2c類（331～333）　口唇部に刻み目が付き口縁部には波状貝殻文が施文されるものである。口唇部の刻み目は331が外側に、332、333は上端面に加えられる。いずれも腹縁に刻みを有する2枚貝を原体に使用している。色調は331が黒褐色、もう2点は茶褐色を呈する。焼成は331が普通で、後の2点は器面がざらついてしまっている。調整も331の内面は研磨されているが他は不鮮明である。



第138図　第Ⅵ・Ⅶ群土器拓影図 ①（1/3）



第139図　第Ⅶ群土器実測図②（1/3）

2ｄ類（334～339、341）　輪積痕を残しその上に棒状工具による圧痕を加え装飾化したものである。この接合部の圧痕は一見指頭によったかのようにみえる。口縁部はナデ調整の痕跡のみを残すが、胴部に至ると339、341のように波状貝殻文が施文される例もある。338は口唇部にも輪積痕を残しているが圧痕は加えていない。本類の内面調整は外面に比べると丁寧で、ナデかミガキによって調整され、338の外面に認められる擦痕状の調整は内面に用いられていない。焼成は普通で器厚は6～10㎜程である。色調は暗黄褐色を呈すものが多い。

2ｅ類(340)　2ｄ類と同様に輪積痕を残しているが、接合部に圧痕を付けないものである。2ｄ類で押捺が加えられた部分には、左から右方向へ削ったような跡を残し、擦痕状に砂粒の

移動がみられる。内面は横位にミガキ調整される。焼成は普通で色調は茶褐色を呈する。

2ｆ類(342～349、354)　波状貝殻文のみが認められるものである。胴部の破片であり、339、341のように2ｄ類の胴部文様となる場合も大いに有り得る。2枚貝の腹縁を施文原体としているが、342～347、354は貝殻の腹縁に刻みをもたない貝を用い、348、349は腹縁の刻みがはっきりしている。外面はナデによって器面が整えられ、内面はミガキによって調整される。焼成は普通で器厚は6～9㎜でそう厚くはならない。色調は暗黄褐色となるものが多い。

以上のように2ｂ～2ｆ類は変形爪形文、波状貝殻文を主な文様要素にしており、浮島Ⅱ式として考えられる。ただ331及び2ｆ類の一部については後出の浮島Ⅲ式に含まれるかもしれない。

2ｇ類(335)　貝殻腹縁の一部か、ヘラ状工具の先を器面に押し当て引いたような文様が施文される。浮島Ⅲ式として考えられる。焼成、内面のミガキ調整とも良好で暗黄褐色を呈する。

3類土器(350)

沈線文間に半截竹管内側による爪形文が施文された諸磯ｂ式土器で1点のみ出土している。鉢形土器の胴部屈曲部である。胎土には石英、長石の細粒を多く含む。色調は明茶褐色を呈する。

4類土器(351～353)

貝殻腹縁の押し引き文が施文されるものであるが、一見細い有節沈線のようにもみえる。352の口唇には刻み目をもつ。胎土に砂を含み焼成は普通である。器厚は6㎜前後で薄い。内面は丁寧に研磨されており、351、352が暗黄褐色、353が黒褐色を呈する。本類は一応興津式として考えておきたい。

5類土器(356～361)

胎土に繊維を含まず概して焼成も良好で、縄文が主に施文されるものである。356は波状口縁となり、口縁に沿って撚紐側面の圧痕文を施文し、口唇部と口縁部下位に縄文が施される。胴部との接合部で剝がれており、口縁部と胴部の境に僅かに段が付くようである。357～361は同一個体で、口唇部上面と口縁から胴部にかけて斜行縄文が施文されている。原体はＬＲが使用される。内面はミガキ調整で平滑にされ、357～361は丁寧な仕上げとなっている。色調は356が黒褐色、他は暗黄褐色に近い。本類は粟島台式と呼ばれる土器に比定されよう。

6類土器(362、363)

ゆるやかなカーブをもちつつ近接して貼られた浮船上に、半截竹管状工具の内側による爪形状の押し引き文が密に施文される。浮線上の押し引き文の施文方向は左右両方向が認められる。胎土に石英を含み、焼成は良好である。器面の色調は黄灰褐色を呈するが、断面が真黒となっているのが特徴的である。十三菩提式か、それと併行する土器であると考えられる。

第Ⅵ群土器（364～373）

中期に比定される土器を本群とする。出土総数は24点と少なく、すべて加曽利Ｅ式土器の破片である。364～371は胴部上位に連弧状の沈線が回り、胴部から底部にかけて２本の逆Ｕ字状に沈線が垂下する。同一個体である。地文に撚糸文を使用していることでは、下総台地にあっては希な部類といえるだろう。372、373もキャリパー形となる深鉢形土器の同一個体である。断面が三角形となる隆帯が口縁部及び胴部に貼られる。時期的には、372、373が中期末で、364～371はそれよりやや古くなる。両者とも焼成は普通で、色調は黄褐色を呈する。

第Ⅶ群土器（374～396）

後期の土器を一括する。出土総数は205点で、堀之内、加曽利Ｂ、安行Ｉ式土器が断片的に出土している。

１類土器（377～380）

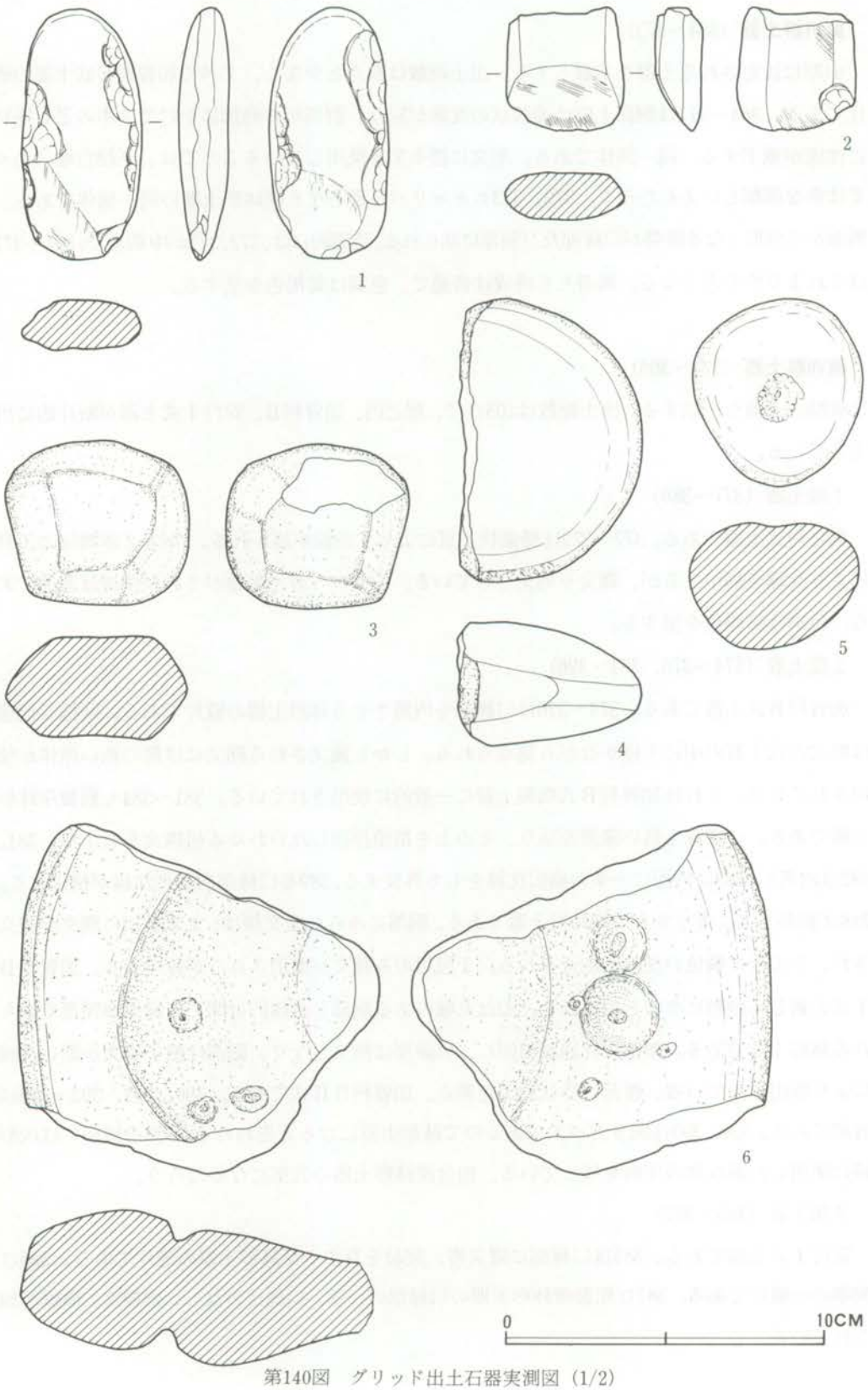
堀之内式土器である。377～379は櫛歯状工具によって条線が描かれる。378も２本単位の工具により沈線を描出するが、縄文を地文としている。内面はミガキ調整がされ、焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。

２類土器（374～376、381～396）

加曽利Ｂ式土器である。374～376は口縁部を内湾させる鉢形土器の破片である。同様な形態は堀之内式土器の中にも僅かながら認められる。しかし施文される縄文には節の粗い原体が使用されており、これは加曽利Ｂ式粗製土器に一般的に使用されている。381～384も粗製深鉢形土器である。いずれも低い隆帯を貼り、その上を指頭押捺したいわゆる紐線文を有する。381、382は内湾し、383は内面に一条の幅広沈線をもち外反する。389も口縁部内面に沈線が横走する。388は胴部上半に張りをもつ深鉢形土器である。胴部にみられる文様は、まず最初に縄文が施文され、その後に横位の沈線が加えられる。１段目のみ縄文が磨消されるが雑である。加曽利ＢＩ式の新しい段階になると思われる。392は丸味のある胴部と直線的に開く口縁部が頸部で絞られる鉢形土器である。頸部に沈線が周回し、口縁部は無文となり、胴部は格子目文が細い沈線により描出されている。復元口径は23cmを測る。加曽利ＢII式である。390、391、393～396は底部である。390、393は開き方が大であるので鉢形土器になると思われる。393の底面には成形時に使用した編み物の圧痕を残している。他は深鉢形土器の底部になるだろう。

３類土器（385～387）

安行Ｉ式土器である。385は口縁部に縄文帯、突起を有する深鉢形土器の破片である。386は胴部の一破片である。387は粗製深鉢形土器の口縁部の一部。口縁は外反し、紐線文、横線が施されている。



第140図　グリッド出土石器実測図（1/2）

石器（第140図）

当遺跡から出土した石器は合計7点と極めて少ない。器種別では石斧2点、磨石2点、敲石1点、凹石2点となっている。ここでは遺存が半分会以下なっていた磨石1点を除く。他の6点について触れておきたい。

1は楕円形を呈する扁平な礫に僅かな調整を加えた礫石斧である。両側縁に形を整えるための調整が施され、刃部は研磨によって作出されている。基端部には何らの加工も認められない。両刃の形となる刃部は縁に丸味を有し、使用によるためのものか、小さな剝離痕が残っている。石材は安山岩で、器長7.8cm、器幅3.6cmを測る。2は基部上半部を欠損する磨製片刃石斧である。石材は玄武岩。両面と刃面については入念に研磨されているが側面はやや雑である。刃縁部には小さな刃こぼれが認められる。器幅は3.7cmとなる。

3は安山岩製の磨石である。平面形は亀甲形を呈し、断面も六角形状となっている。磨石としては特異な形状といえるだろう。これは使用により面が形成されると、次の曲面を使用し、また面ができると使用する部分を変え、これを順次繰り返して行った結果と考えられる。幅は5.7cm、厚さ3.1cmを測る。

4は磨石として使用していた円盤状の礫が半分に割れ、敲石として再度使用したものである。使用した部位は割れ口側の側縁で、割れの面も使用されていた可能性がある。石材は砂岩である。

5、6は凹石である。5は安山岩の自然礫をそのまま用い、僅かに平坦となる部分に使用のための浅い凹みがつく。6はかなり使い込まれた石皿が、破損の後凹石に転用されたものである。表に3ケ所、裏面に5ケ所の凹みを有する。石材は安山岩である。

第4節　結　　語

以上が池上りⅠ調査の概要である。ここでは、縄文時代早期中葉の炉穴が14基検出され、さらに該期の縄文式土器が多量に検出された。これまで、この周辺は竜角寺古墳群と竜角寺のみが注目されていたが、縄文時代の遺構、遺物も多く検出されてきている。特に炉穴に関しては、本跡と隣接する池上りⅡ遺跡、それに西側に位置している大畑Ⅰ遺跡においても多く検出されており、この台地一帯に該期の遺構、遺物が分布している事が判名したのは大きな収穫である。

なお、遺跡の内容等については、後章の池上りⅡ遺跡と共通しているため、後章において一括して述べる事とする。

第 5 章
池 上 り II 遺 跡

第5章　池上りII遺跡の調査

第1節　遺跡の位置及び立地（第1・2・141図）

池上りII遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字池上り978他に所在する。池上りII遺跡は池上りI遺跡の西側の支谷を隔てた台地上に立地している。この台地は三方を谷に囲まれた舌状台地で、調査範囲はこの先端部に近いところであるため平坦面は少く、標高は30～32mのところである。谷との比高差は北側で18mで、東側は12mをはかり、東側の池上りI遺跡よりは若干高い。

第2節　遺跡の概要及び調査の方法（第142図）

池上りII遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。縄文時代早期の炉穴12基、早期から後期にかけての縄文式土器が検出された。縄文式土器はなかでも、早期中葉の沈線文系土器、それに伴う無文土器、早期後半の条痕文系土器、後期の土器が特に多いのが興味深い。とくに、池上りI遺跡と同じ様相をしている縄文時代早期については隣接しているだけに、関連性のある遺跡として考えていく必要がある。古墳時代においては前方後円墳であるK75号墳の後円部の一部を調査し、簡単な周堀のみを確認した。

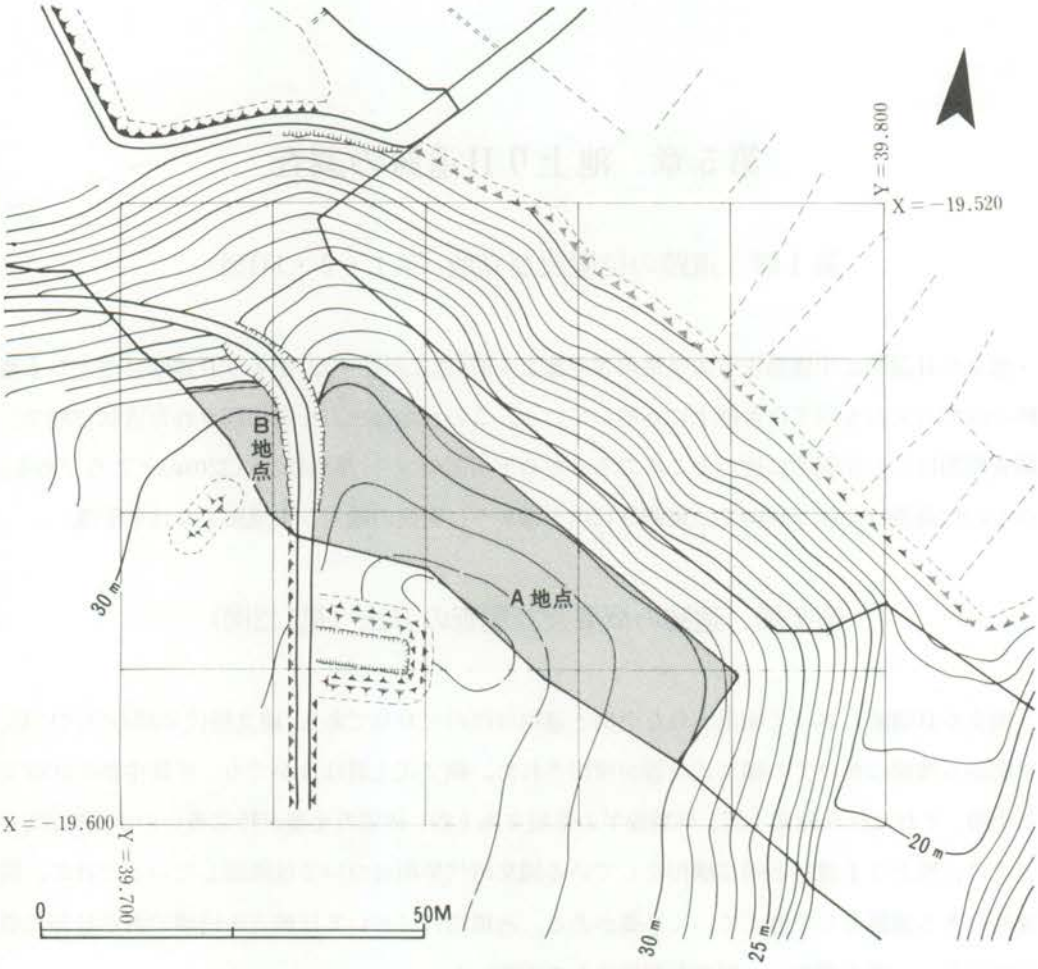
調査の方法を池上りI遺跡と基本的に同じである。ここでも各グリッドは固有の名称を付してある。なお、調査地点をA、B地点と2ケ所を分けたのは、調査年度の差と、いわゆる白鳳道と呼ばれている道に分断されているためである。また、B地点は当初はK75号墳のみを対象としていた事もある。本報告においては一括して記述している。

第3節　検出された遺構と遺物

A．縄文時代

第1号炉穴（第143図、PL65）

調査区の中央北側にあたる6グリッドに単独で存在する。規模は径51cmで、不整円形を呈している。深さは最深部で12cmをはかり、底面は北から南へかなり傾斜している。壁の立ち上がりはゆるやかである。底面、壁ともにあまり焼けていないが、焼土は多く堆積している。



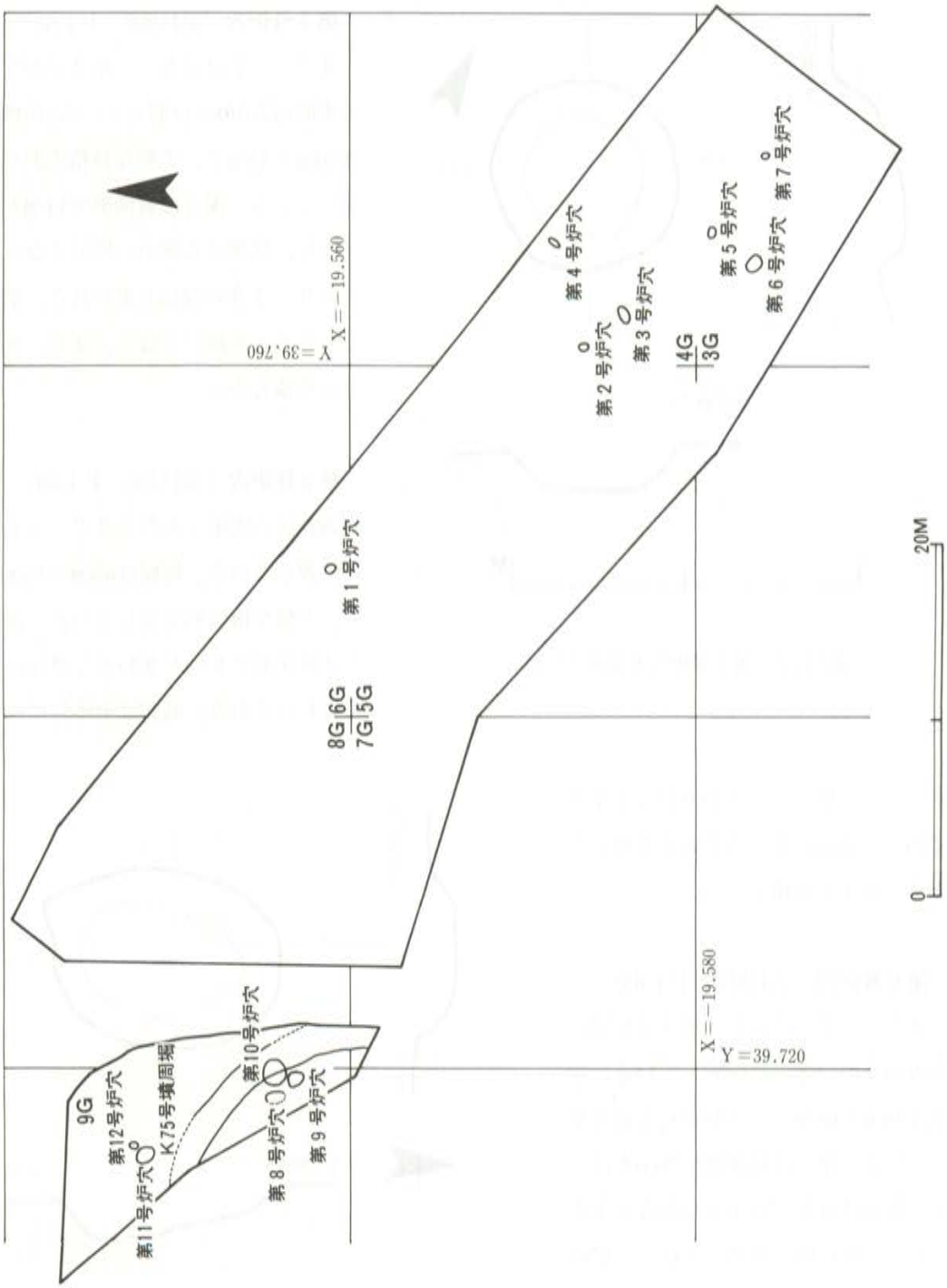
第141図　池上II遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）

第2号炉穴（第144図、ＰＬ65）

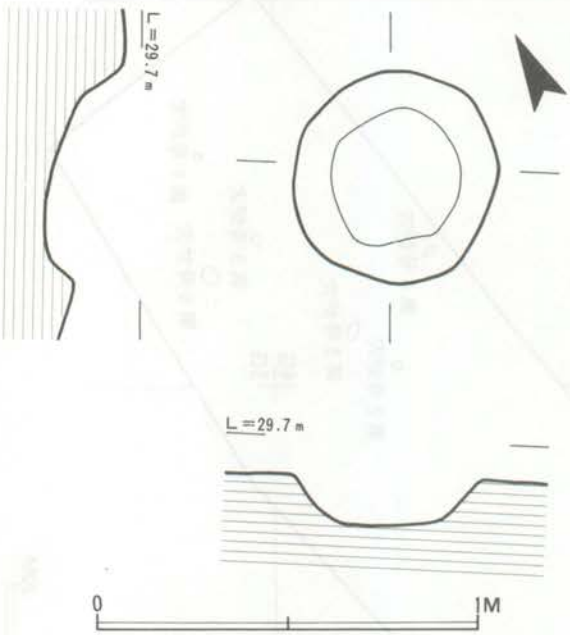
調査区の北東にあたる4グリッドに位置している。規模は62cm×48cmで、不整楕円形を呈している。深さは最深部で11cmをはかり、底面は2段の凹みを有しているため、2度の掘込と思われる。底面は北から南へ傾斜しており、壁の立ち上がりはゆるやかである。底面、壁ともによく焼けており、焼土、灰の堆積も多い。

第3号炉穴（第145図、ＰＬ65）

4グリッドに所在し、第2号炉穴の南東約2.5mのところに位置している。規模は111cm×60cmで、不整な長楕円形を呈している。深さは最深部で17cmをはかり、底面はかなりの凹凸を有しているため、数回の掘込が考えられる。底面と壁の境は明瞭ではないが、壁は直線的である。底面、壁ともによく焼けており、焼土、灰の堆積も多い。



第142図　池上りII遺跡遺構配置図（1/400）



第143図　第1号炉穴実測図（1/20）

第4号炉穴（第146図、ＰＬ66）

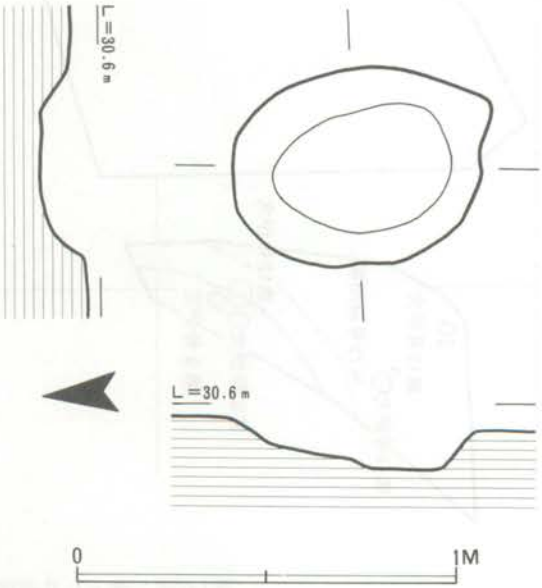
4グリッドに所在し、第2号炉穴の東側約2.5mに位置している。規模は80cm×44cmで、不整な長楕円形を呈している。深さは最深部で14cmをはかり、底面は北側が一段低くなっており、2度の掘込と思われる。壁ともにあまり焼けてなく、また、焼土の堆積も少い。

第5号炉穴（第147図、ＰＬ66）

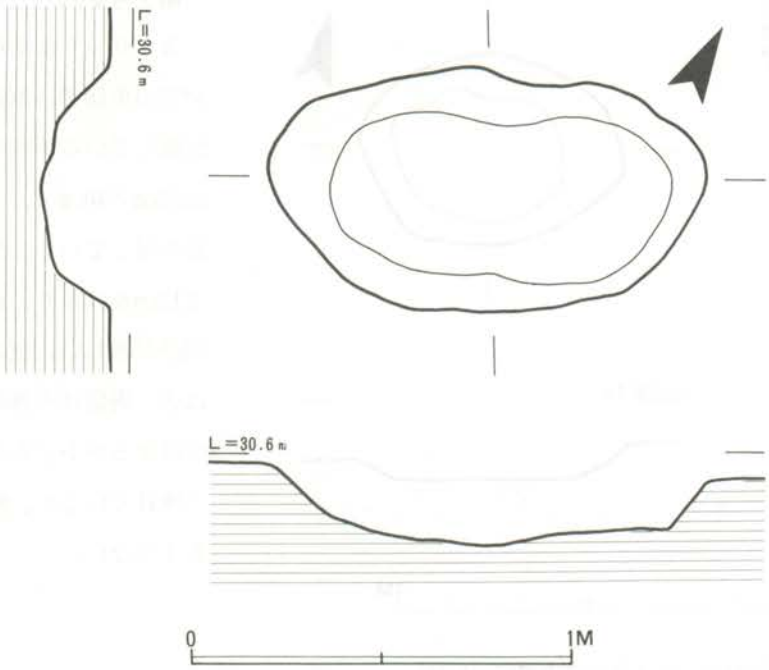
調査区の南東にあたる3グリッドに位置している。規模は65cm×47cmで、不整な楕円形を呈している。深さは最深部で8cmときわめて遺存の悪いものである。底面は全体的に水平であり、壁の立ち上がりはゆるやかである。底面、壁ともにあまり焼けてなく、焼土の堆積も少い。

第6号炉穴（第148図、ＰＬ66）

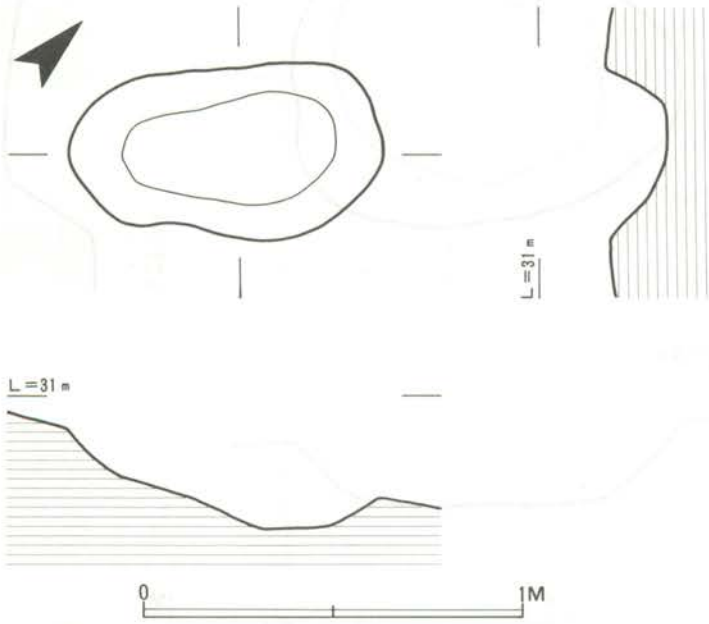
3グリッドに所在し、第5号炉穴の南西約2mの地点に位置している。規模は98cm×68cmで、不整な長方形を呈している。深さは最深部で20cmをはかり、底面には2つの小さな凹みがあるため、2度の掘込が考えられる。壁の立ち上がりはゆるやかであるが、直線的である。底面、壁ともによく焼けており、焼土、灰の堆積も多い。



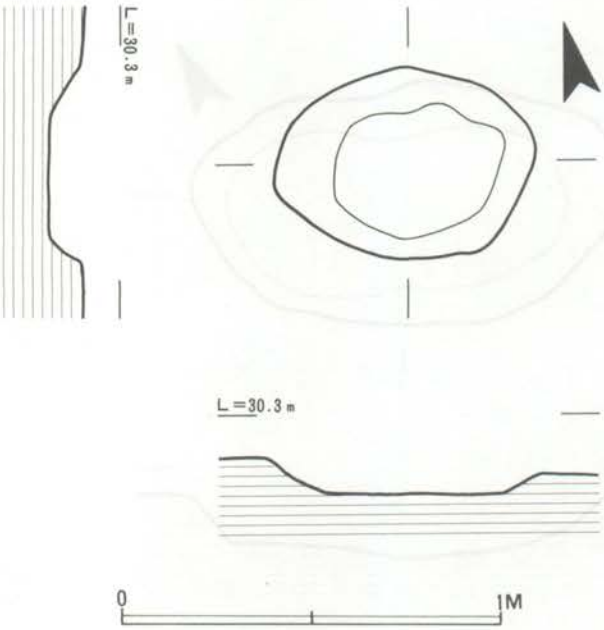
第144図　第2号炉穴実測図（1/20）



第145図　第３号炉穴実測図（1/20）



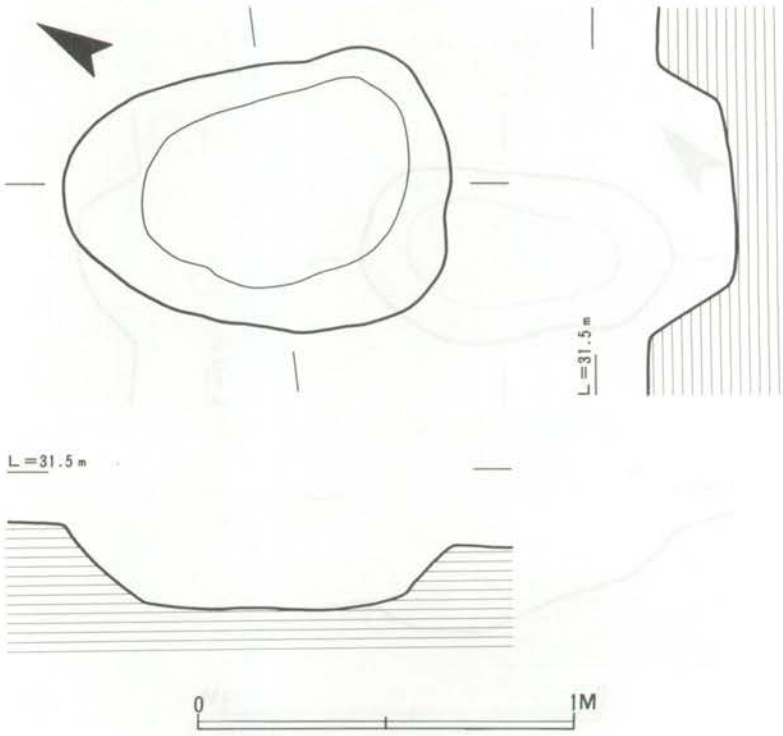
第146図　第４号炉穴実測図（1/20）



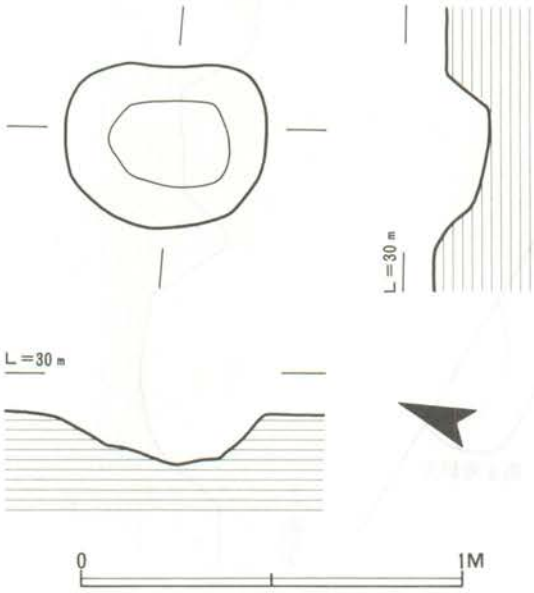
第147図　第5号炉穴実測図（1/20）

第7号炉穴（第149図、PL66）

3グリッドに所在し、第6号炉穴の東側で、本遺跡の東端に位置している炉穴である。規模は51cm×40cmで、不整な隅丸方形を呈している。深さは最深部で12cmをはかり、底面はかなり凹凸が激しい。壁の立ち上がりは東、南側は直線的であるが、他はゆるやかである。底面はよく焼けているが、焼土の堆積はあまりない。



第148図　第6号炉穴実測図（1/20）



第149図　第7号炉穴実測図（1/20）

第8号炉穴（第150図、ＰＬ67）

第8～12号炉穴はＡ地点と白鳳道をはさんだ小範囲の調査地域であるＢ地点に集中している。特に第8～10号炉穴は9グリッドに所在し、Ｋ75号墳の墳丘下に築かれている。第8号炉穴は3基が隣接している一番西側に位置しており、西側半分は墳丘調査の際に削平してしまったために不明な点が多い。規模は45cm前後×35cm前後で、不整な楕円形を呈していたと思われる。深さは最深部で5cmで、遺存の悪いものである。底面は摺鉢状を呈しており、壁とともに、あまり焼けてなく、焼土もパラパラと混在する程度である。

第9号炉穴（第150図、ＰＬ67）

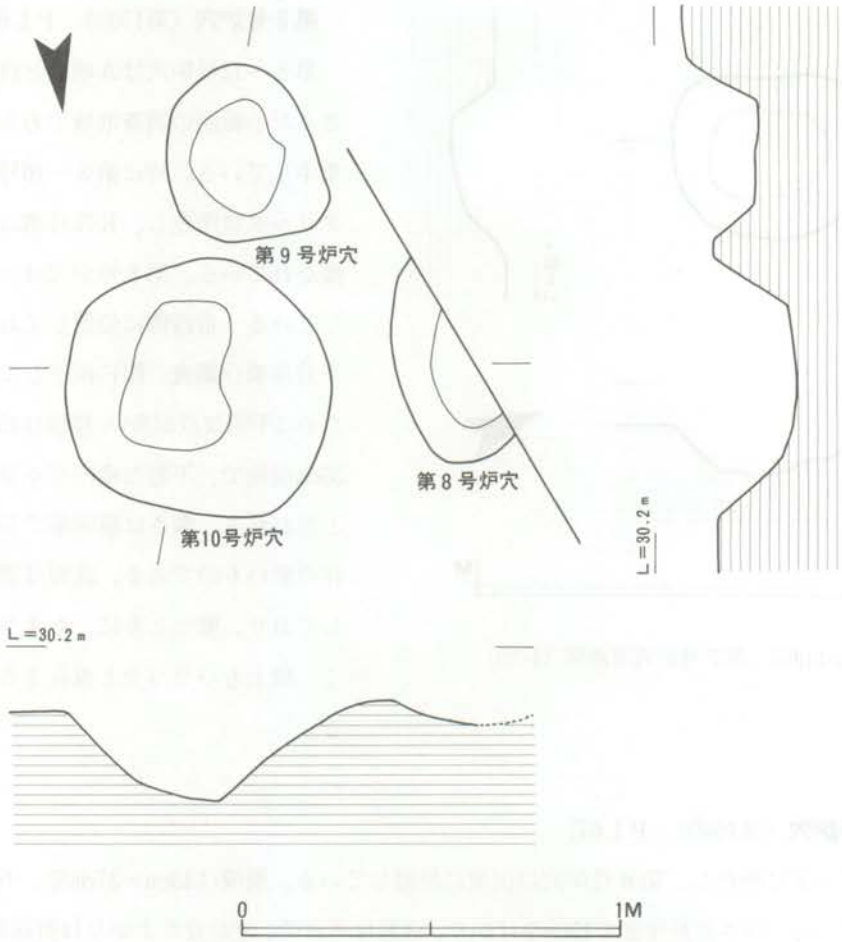
9グリッドに所在し、第8号炉穴の南東に位置している。規模は43cm×37cmで、不整な方形を呈している。深さは最深部で15cmをはかり、底面は平らで、壁の立ち上がりは直線的である。底面はよく焼けており、焼土の堆積も多い。

第10号炉穴（第150図、ＰＬ67）

第9号炉穴の北側に隣接している。北側はＫ75号墳の周溝の下から検出された。規模は66cm×63cmで、不整な5角形を呈している。深さは最深部で23cmをはかり、底面は東側に片寄り、凹みをもっている。壁の立ち上がりは南北において直線的であるが、東西においては底面との境界もあいまいである。底面壁ともよく焼けており、焼土、灰の堆積も多い。

第11号炉穴（第151図、ＰＬ67）

Ｂ地点の9グリッドに所在しているが、第8～10炉穴とは別のグループを形成して、北側に第12号炉穴と存在している。規模は52cm×37cmで、不整な楕円形を呈している。深さは最深部で8cmをはかり、底面はほぼ水平で、壁の立ち上がりも明瞭で直線的である。底面、壁ともにあまり焼けてなく、焼土もまばらである。



第150図　第8～10号炉実測図（1/20）

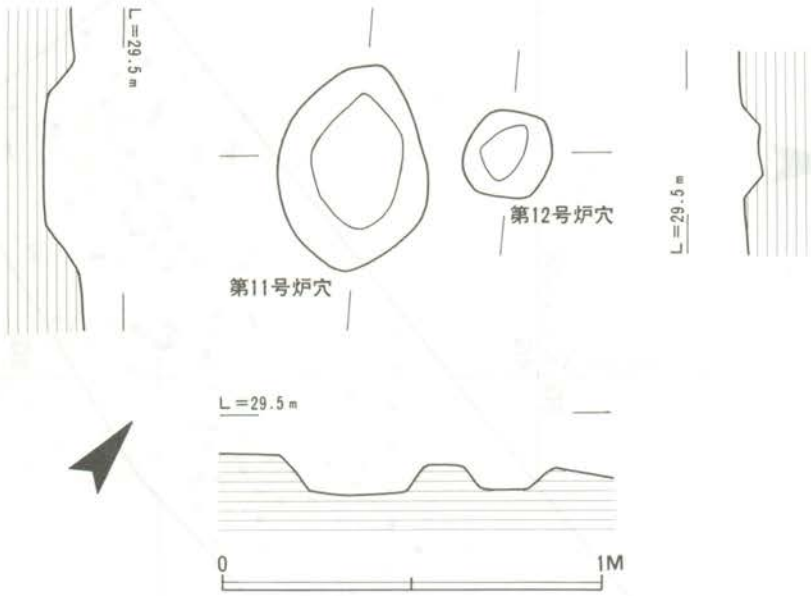
第12号炉穴（第151図、ＰＬ67）

第11号炉穴の北東に隣接している。規模は22cm×21cmで、不整な方形を呈する規模の少さなものである。深さは最深部で5cmと非常に浅いものである。底面は水平で、壁の立上りは直線的である。底面、壁ともにあまり焼けておらず、焼土の堆積も多い。

包含層出土の遺物

出土遺物の概要

本跡は池上りＩ遺跡とは浅い谷を隔てて向い合う位置に立地している。環境にも大きな変化はなく、そのためか出土遺物も時期的に極めて近い内容となっている。出土遺物数では池上りＩ遺跡の約4分の1となり総数879点を数える。このうち土器が859点、土製品2点、礫18点で



第151図　第11・12号炉穴実測図（1/20）

石器は１点も出土していない。出土土器の分類別数量は下記に示すとおりである。

第Ⅰ群土器　早期前半の撚糸文系土器（５点）

第II群土器　早期中葉の沈線文系土器（60点）

第III群土器　早期中葉の無文土器（257点）

第II・III群土器底部（４点）

第IV群土器　早期後半の条痕文系土器（114点）

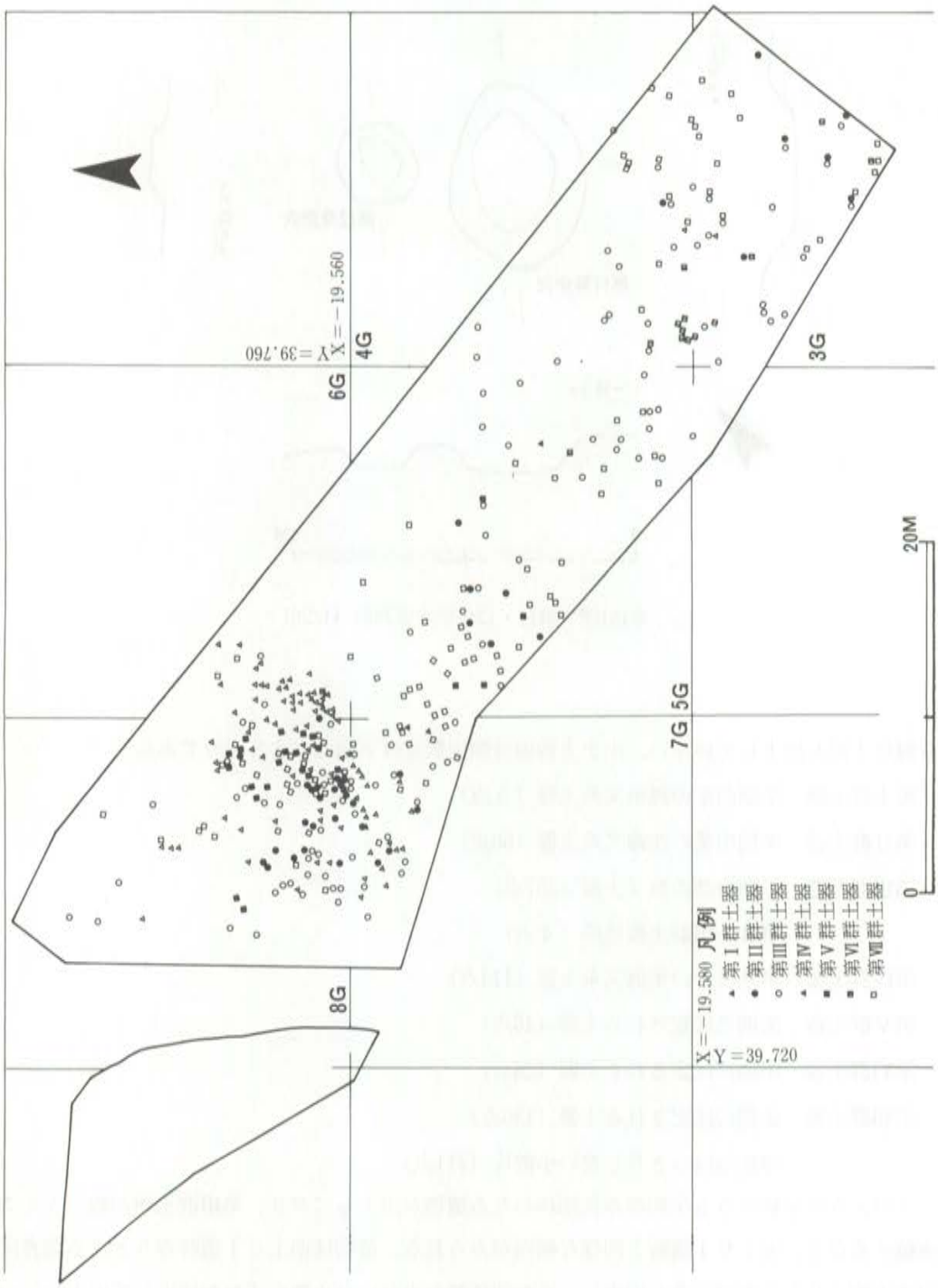
第Ⅴ群土器　前期に比定される土器（46点）

第VI群土器　中期に比定される土器（26点）

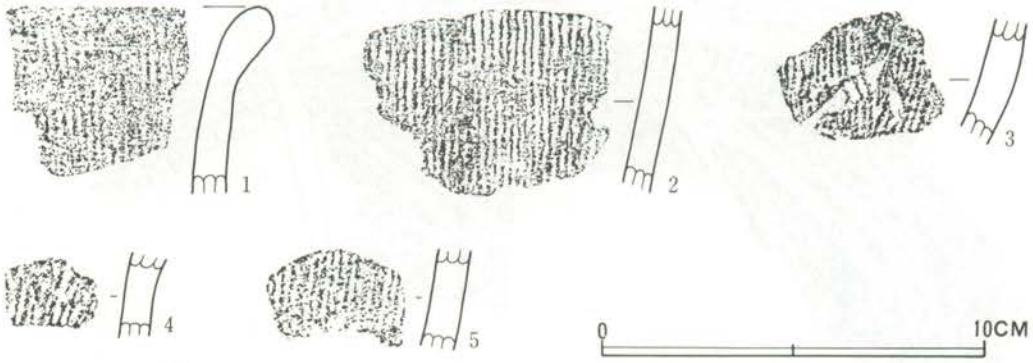
第VII群土器　後期に比定される土器（136点）

時期のはっきりしない小破片（211点）

このように本跡からも早期から後期にわたる遺物が出土しており、第III群土器が数のうえで卓越するなど、池上りⅠ遺跡と同様な傾向がみられる。遺物は池上りⅠ遺跡寄りとなる調査区の南東側よりも北西側で多く出土し、また個体数も少ないため数点ずつが接近して出土している。礫については単独で出土しており取り立てて述べるところはない。なお各群内の細別については、当跡出土の土器に即して行なうことにしたい。



第152図　遺物出土状況図（1/400）



第153図　第Ｉ群土器拓影図（1/2）

出土遺物

第Ｉ群土器（１～５）

撚糸文系土器は図示した５点が出土したにすぎない。口縁部が１点、４点が胴部破片でそのうち３は底部に近い部分と思われる。胎土から判断すると１と５、２～４がそれぞれ同一個体であると考えられる。１は口縁部上端が外反し、口唇部はやや肥厚し丸味を帯びる。縄文は口唇部から施文されているが、器面が荒れており、くっきりとは残っていない。縄文の原体はＲＬである。２～４の別個体の胴部にも原体はＲＬが使用されている。１、５の胎土には多量の石英粒が含まれており、色調は黄褐色を呈する。２～４は砂を含み焼成は普通で茶褐色を示す。内面はいずれもナデ調整が施されている。

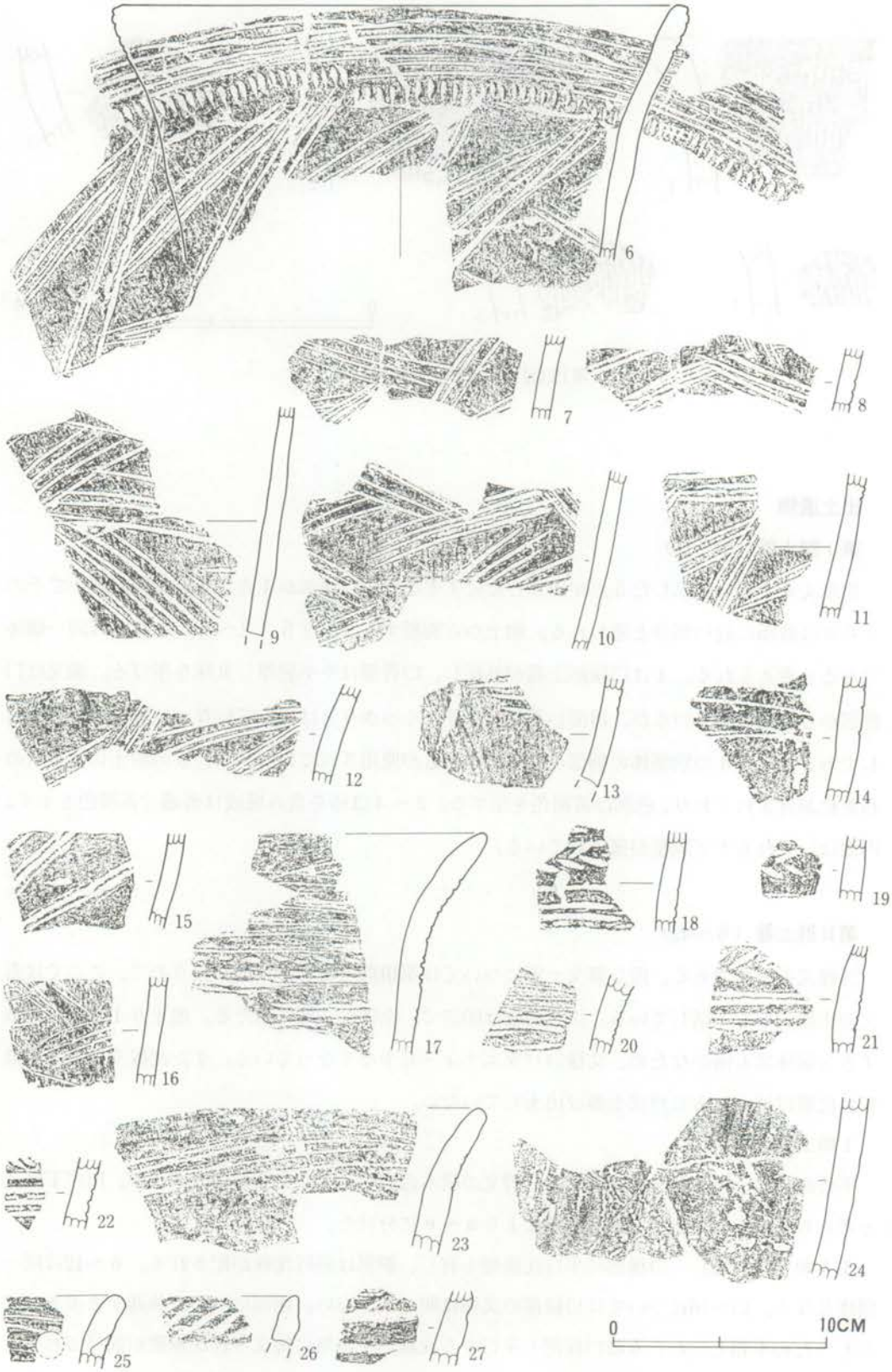
第II群土器（６～42）

沈線文系土器である。但し無文土器については第III群土器として取り扱うので、ここでは有文の土器のみを一括している。出土総数は60点で、全体の７％に当たる。池上りＩ遺跡と比較すると個体数も僅かなため、文様のバラエティーも少なくなっている。また沈線文系土器の最初に位置付けられる三戸式土器は出土していない。

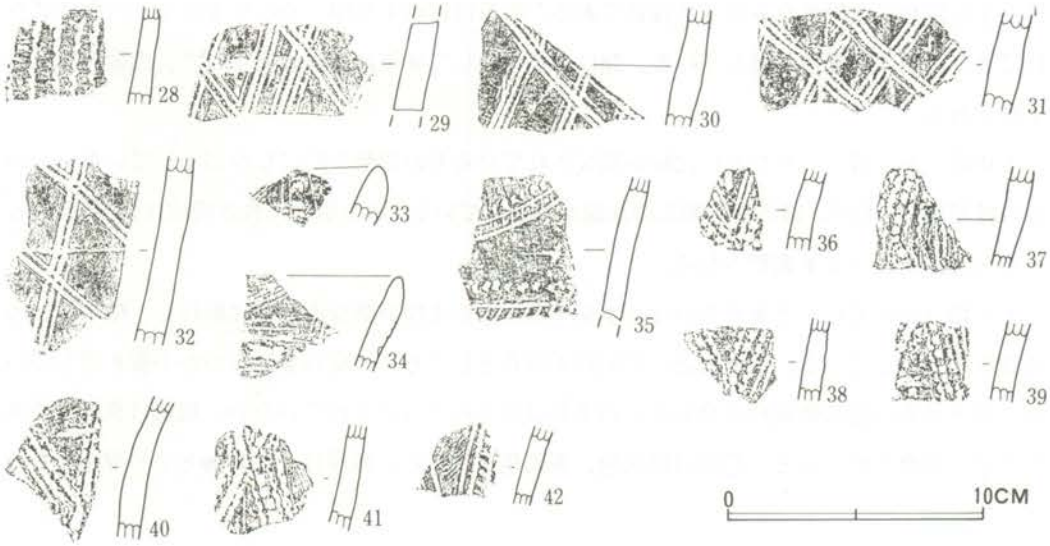
１類土器（６～16）

平行沈線文、短沈線文、刺突文、貝殻文の組み合わせにより文様が構成される。田戸下層式と考えられるものである。文様要素によりａ～ｅに分けた。

１ａ類（６～16）　口縁部に平行沈線帯を有し、胴部は斜行沈線が配される。６～12は同一個体となる。13～16については口縁部の文様は明らかでない。胴部について共通するモチーフをもつため本類とした。６は口縁部と平行する沈線が１本毎に施文され沈線帯が設けられる。胴部は方向の異なる斜行沈線が互いに交錯しないよう施文される。また頸部に爪形状の刺突を



第154図　第II群土器拓影図 ①（1/3）



第155図　第II群土器拓影図 ②（1/3）

巡らす。７～16も異方向の沈線が交錯することなく描かれている。６～12は直立気味に胴部が開き、爪形状刺突が加えられるあたりから口縁部をゆるやかに外反させる器形となる。やや肥厚する口縁上部はその上面を平坦にしている。口縁は平口縁で復元すると口径は26cmを測る。胎土には石英の微細粒を多く含み、所々にスコリアの混入を認める。外面は沈線を施文する前にナデによって平滑にされていることが分かり、内面もミガキ調整によって仕上げられている。焼成は良好な部類であろう。しかし、器表面の剝落が認められない口縁部に対し、胴部はやや荒れた状態を呈している。９の内面には煤状の付着物が認められ、一次的な焼成の他に、二次的な焼成を受けたことを示唆している。色調は暗褐色を呈する。

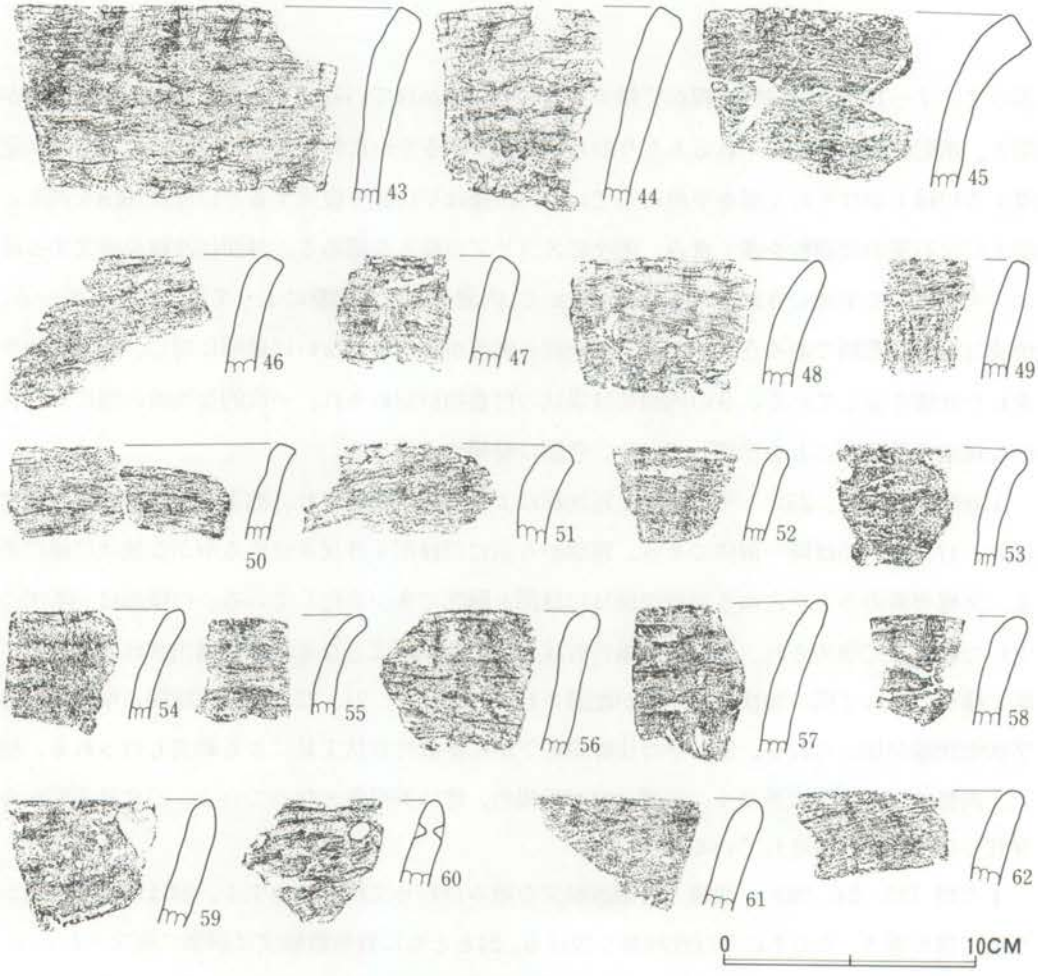
１ｂ類（17～22、25）　平行沈線と短沈線により文様が構成され、池上りＩ遺跡の２ｂ類に近い。17、20、25は同一個体である。頸部から割に口縁部を外反させゆるやかな波状口縁に至る。文様要素の多くを占める平行沈線は口縁部と胴部で多少変化している。口縁部は一本ずつ引いた細沈線で埋められ、胴部は半截竹管状工具で若干幅広となる沈線が描出される。そして両文様帯の間に２例の短沈線状刺突が配置される。18、19、21、22は平行沈線間に横位の八の字状短沈線が加えられる。21は平行沈線帯の下位に半截竹管状工具による刺突も付される。胎土、調整は１ａ類と大差なく、色調は21が暗褐色、他は茶褐色となっている。25には両面から穿孔した補修孔が残されている。

１ｃ類（23、24、28）　沈線と貝殻腹縁文を組み合わせ文様を描出する。23は口縁部に僅かな無文帯を置き、その下に平行沈線帯を設ける。24とともに貝殻腹縁文は胴部に施文されるが、その間隔は大変粗になっている。２点とも施文方向は縦位と斜方向である。胎土は砂、スコリ

ア、また僅かに繊維を含み焼成は普通である。器厚は12㎜あり厚い感じを受ける。内面は磨かれており色調は暗褐色を呈している。28は2点に比して縦位に密に施文されて、内面の調整も丁寧である。

1d類（26、27）　やや太い沈線が施文されているもので断片的にしか出土していない。26は口縁部に斜方向に、27は浅く幅広の沈線が横走している。砂を胎土に含み焼成は普通である。2点とも内面はミガキ調整される。

1e類（29～32）　2本あるいは3本を単位とする沈線が異なる方向に斜行し、格子目状の文様を描き出している。類例に乏しく田戸下層式として考えて良いものなのか不安を残している。胎土は乳白色の微細粒を含むが、石英粒は目立っては含まれていない。焼成は良好で内面も丁寧に研磨されている。色調は暗褐色、茶褐色を呈する。器厚は9～11㎜とやや厚手となっている。



第156図　第III群土器拓影図（1/3）

2類土器（33～42）

田戸上層式として考えられるものである。

2a類（33～35）

沈線と刺突を組み合わせ文様を構成するということでは、田戸下層式と大差はない。しかし口縁部の形態、湾曲する沈線等に後出的な特徴を見出すことができる。33、34は波状口縁の一部である。口唇部は肥厚し、内傾するかのように丸味を有している。34は刺突が加えられる位置で小さく段が付くように、器厚も7㎜から10㎜と厚さを増す。35は湾曲する沈線間を刺突で埋めている。いずれも胎土に砂を含み焼成はあまり良好ではない。

2b類（36～42）　条痕に類似する地文が施され、その上に貝殻腹縁文、有節沈線を加飾するものである。有節沈線は押し引き文に近く、2条の貝殻腹縁文間に施文されている。地文は40のように顕著に認められないものもある。胎土には石英の微細粒及び乳白色の微細粒が含まれ、焼成は普通である。内面は擦痕あるいはナデの跡を残している。色調は暗褐色を呈する。

第III群土器（43～62）

沈線文系土器に伴うと考えられる無文の土器を一括する。池上りI遺跡同様、本群の出土総数に占める割合は高く、全体の30%となり総計257点を数えている。池上りI遺跡では胎土に繊維を混入するか否かで大きく分類してみた。当調査区からはこの胎土に繊維を含む類は出土していない。一応ここでも調整痕別に説明を加えたいと思うが、調整痕の差が即本群土器の時間的な差を示すとは考えていない。

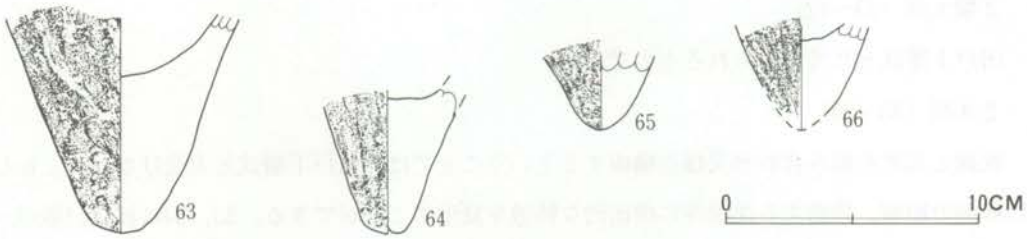
a（43、44、46、47、55）　外面の調整に比して内面の調整が雑になる。外面はミガキが丁寧なナデにより平滑にされるが、内面は擦痕状の調整痕を残し、浮いた砂粒が散見される。

b（49、55、59）　外面、内面ともにナデによる調整のみで雑な感じがするもの。49の外面は横方向と縦位の擦痕状の調整痕が認められる。

c（45、48、50～53、56～58、60～62）　内面とも同じような調整を施す。両面ともミガキを主としており、同一工具によって調整されたと思われる。

以上のような器面調整の違いが観察されるわけであるが、この違いが形態別の表徴とはなっていない。口縁部は大きく外反する例が概して少なく、真直に開くか、口唇部を僅かに外反させるものが多い。43、55は外反する例で、他は直立気味に開く。43、48、49、51は口縁上部を肥厚させ、43～45の口唇部は外削状となっている。45のみ波状口縁となる可能性がある。

口縁部の形態に文様を有する土器と共通する特徴を見出すことができるが、胎土に関しても同じようなことがいえる。混和物の中でも特に石英の細粒が目立ち、また長石と思われる乳白色の微細粒が含まれるのである。ただ本群土器の方が、総体的に大形になると思われ、器厚も8～12㎜の間で落ち着いている。色調は43が黄褐色、48、57、59が明褐色で、他は暗褐色を基



第157図　第II・III群土器底部実測図（1/3）

調としている。60には補修孔が認められるが、両面から穿孔を開始しているものの未貫通の状態である。

第II・III群土器底部（63～66）

４点の底部が出土しているが、遺存部に文様は描かれていない。いずれも65度前後の傾斜で開き、尖底部に厚味をもつものである。64の底には凹みが生じており、他は丸味を帯びる。63の外面はナデによって調整されたと思われ粗雑な感を受ける。内面もまた同様である。64は一度削りによって形を整えたうえで磨かれ、65、66の器面も縦位のミガキによって調整される。胎土にはII、III群土器と共通な含有物が認められ、色調は暗褐色を呈する。

第IV群土器（67～90）

早期後半の条痕文系土器で114点を数える。時間的には限定されているようで、初期及び早期終末の条痕文土器は出土していない。差はあるものの、胎土に繊維を含むことと、際立った装飾が付けられないのが総体的な特徴である。細部について下記のａ～ｅに分けることとした。

ａ（67、72、86、87）　外面、内面ともに条痕のみが施されるものである。67、72は斜方向に比較的鮮明な貝殻条痕が残り、口唇部の断面は内側に削がれたような形となっている。また胴部破片の86、87は施文方向が不規則で86は条痕の上を軽く撫でている。

ｂ（68、69、74、76～85）　条痕文が施される他に刻み目が付けられているものである。刻み目は口縁部か胴部の低隆帯上に付けられるのが普通であるようだ。68は平口縁で、口唇部は内側に削がれており、その内側の稜に刻み目を入れている。69も平口縁であるが、口唇部は尖ったようになり、外側と内側両方に刻み目を施している。74はゆるやかな波状口縁となり、やひり口唇部の両側に刻み目を有している。またこの口唇部の外側は低隆帯でも貼ったかのように肥厚している。76～85は胴部が屈曲し段が付く。そして屈曲する位置には低い隆帯が貼られ、その上に連続した刻み目が加えられているものである。条痕は全面に施したであろうが、強弱によるものか粗密が認められる。

第158図　第Ⅳ群土器拓影図（1/3）

ｃ（70、71、73）　条痕が顕著にみられないものである。口縁部上位の外面には一部条痕が残されているが、下位及び内面には条痕はみられない。条痕が施されない部分はナデによって器面が調整されているが、条痕の後を撫でたのか、初めからそうした調整を行ったのか明らかでない。口唇部は内削ぎとなり、その鋭くなった先端部に刻み目が付けられている。

ｄ（75）　ｃと同じように条痕は施文されていないが、竹管状工具による押し引き状の文様を施文している。器面調整はナデで条痕の付された様子は見当たらない。口唇部の上端には、やや深い刻み目が付く。

ｅ（88～90）　外面にのみ条痕が施文されたものである。内面はナデによって仕上げられている。

器面に残された調整痕には以上のような違いを認めることができるが、器形は概ね胴上部に段を有し、口縁部は直立気味に開く器形になると思われる。口縁は平口縁と、74のようなゆるやかな波状となる２種類が考えられる。器厚は７～９㎜で極端に厚くなったり薄くなったりはしない。胎土には繊維の他に砂粒やスコリアが含まれているものもある。色調は暗褐色、暗黄褐色、黒褐色等様々で、表裏によって色調を異にするものもある。

第Ｖ群土器（91～113）

前期に比定される土器を一括する。総数は46点で小破片が多い。

１類土器（91～95、97～100）

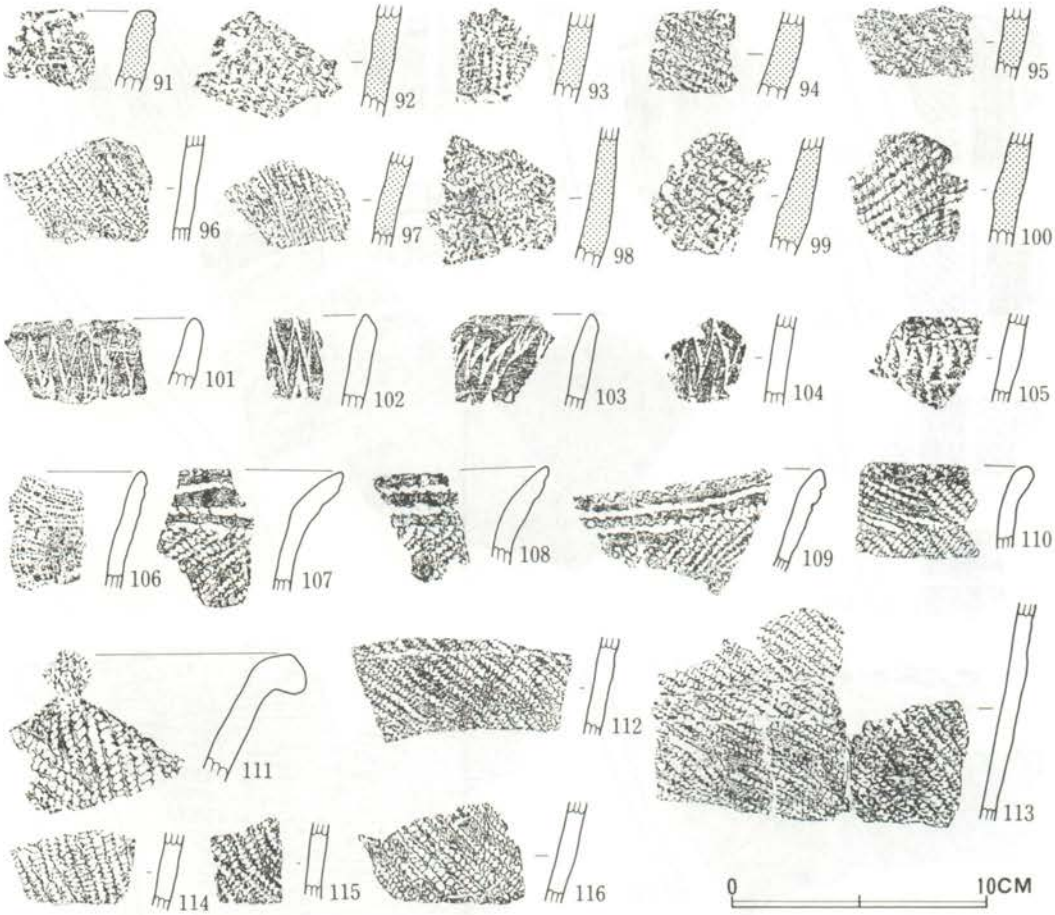
縄文のみが認められるもので胎土に多かれ少なかれ繊維が含まれる。縄文の原体は91、95、97がＲＬ、その他はＬＲが使用されている。焼成は不良で繊維の抜け出した痕跡を多く残し、ぼろぼろとした状態になっている。色調は暗黄褐色、黒褐色を呈する。本類は黒浜式土器として捉えられるものである。

２類土器（101～105）

波状貝殻文が施文されるものである。いずれも二枚貝の腹縁を右方向に連続的に押圧していると思われる。105は貝殻の刻みが特に鮮明に押圧されている。口縁は直立し、口唇部をやや尖らせている。内面はナデによって調整され、色調は黒褐色、暗褐色を呈する。本類は浮島II式に比定できるであろう。

３類土器（106）

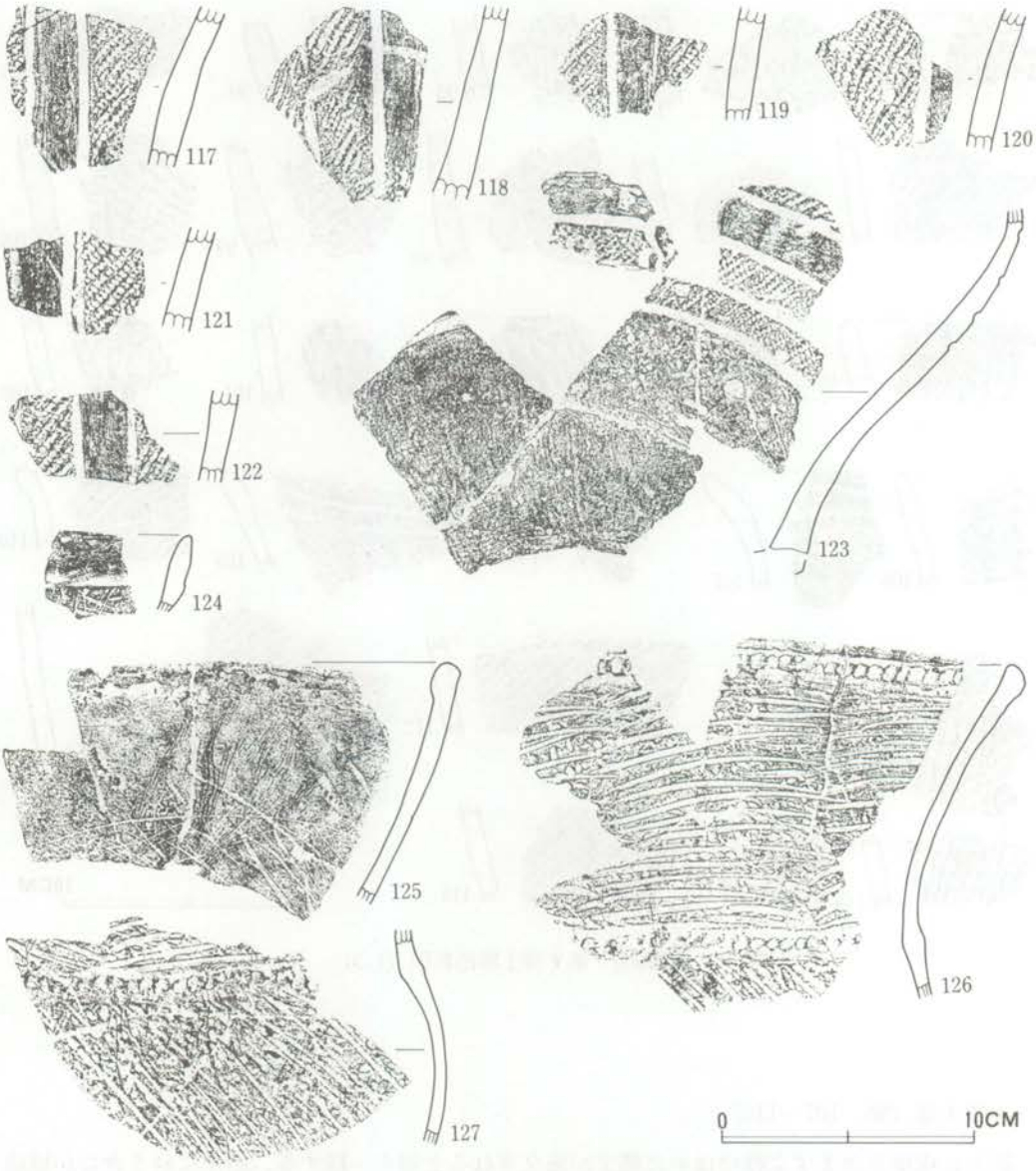
波状となる口縁部の破片で、細い有節平行線が施文されている。有節平行線は口縁部に沿うか枠状に施文されているが、１点のみでありどのような構成になるのかは不明である胎土に金雲母を含み、焼成は普通で色調は暗褐色を呈している。器厚は６㎜と割に薄く、内面はナデ調整されている。おそらく前期末様の竹管文系土器と同系統の類になると思われる。



第159図　第Ｖ群土器拓影図（1/3）

４類土器（96、107～116）

胎土に繊維を含まず文様には主に縄文が施文される土器を一括する。胎土に砂を含むが焼成は概して良好である。107～109は口縁上部に２条の撚紐の側面押圧文を付し、その下位には縄文が施文されているものである。107、109は口唇部にも縄文が施文され、さらに109の撚紐押圧文間には竹管の刺突が加えられている。口縁部は外反し109は波状となる。色調は107が黒褐色、もう２点は明褐色を呈する。96、110～116は縄文のみが施文される。口縁部は110はやや外反し平口縁となり、111は波状口縁となっている。110の口唇部は縄文が施文され、111の波頂部は先端を折り曲げたかのような突起が付けられる。口唇部の外側にはやはり縄文が施文されている。胴部はいずれも原体ＲＬの斜行縄文が施されている。112、113は、土器製作時の接合部分と思われる所に弱い段がみられる。色調は111、113が茶褐色で、他は明褐色となっている。内面はミガキかナデ調整によって仕上げられ平滑になっているが、一部に擦痕状の調整痕を留めてい



第160図　第Ⅵ・Ⅶ群土器拓影図（1/3）

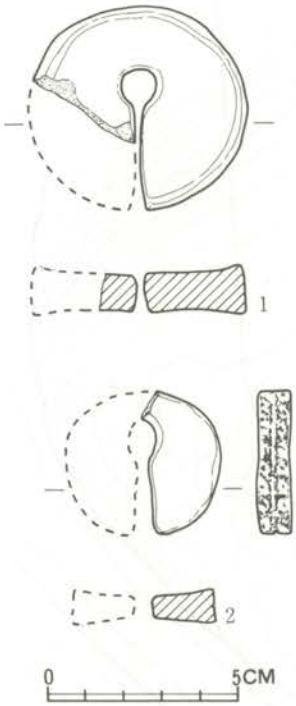
る。本類は粟島台式土器と呼ばれている土器群と共通する要素を認めることができる。

第Ⅵ群土器（117～122）

中期に比定される土器は総数26点と少量である。図示したような、加曽利E式土器の同一個体か、あるいは同時期と考えられる破片が出土しているだけである。いずれも胴部の破片で垂下する沈線間が磨消されている。加曽利E式の中でもそう古くはならないと考えられる。

第VII群土器（123～127）

本群は136点の土器片を数える。123は体部上位が張り、口縁部は内傾する鉢形土器になると思われる。体部は平行線の磨消縄文によって飾られ、その間に縦位のＳ字状沈線文が付加される。底部外面及び内面はミガキ調整が施されているが焼成は不良である。加曽利ＢＩ式土器である。124は無文の口縁部と、格子目文が付けられる体部が稜によって分けられている。おそらく浅い鉢形土器になるであろう。125も胴上部に１本の沈線が巡り、それより下位が有文となる。直立気味に開く口縁はその端部を肥厚させている。以上２点は加曽利ＢII式である。126、127は粗製土器である。器形は胴部にやや張りがあり、頸部で絞られ、口縁部と頸部には低隆帯上に指頭押捺を加えた紐線文が付く。地文には節の粗い縄文を施文し、さらに口縁部には横線、胴部には斜線が引かれる。



第161図　土製品実測図（1/2）

土製品（第161図）

縄文時代の土製品としては玦状耳飾２点が出土している。

１は３分の１程を欠損しているが、直径56㎜のほぼ円形になると思われる。断面形は凹レンズ状に近い形となり厚さは周辺部で13㎜、中央部で10㎜を測る。最も薄くなる部分は、側縁部から中央部の間に認められる。中央孔の直径は９㎜で、切れ目は両面から作られ、最も幅が狭くなる所で２㎜弱となっている。表裏両面及び側面は丁寧にミガキ調整が施されており、切れ目の両側縁も雑ではない。文様は描かれず色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。

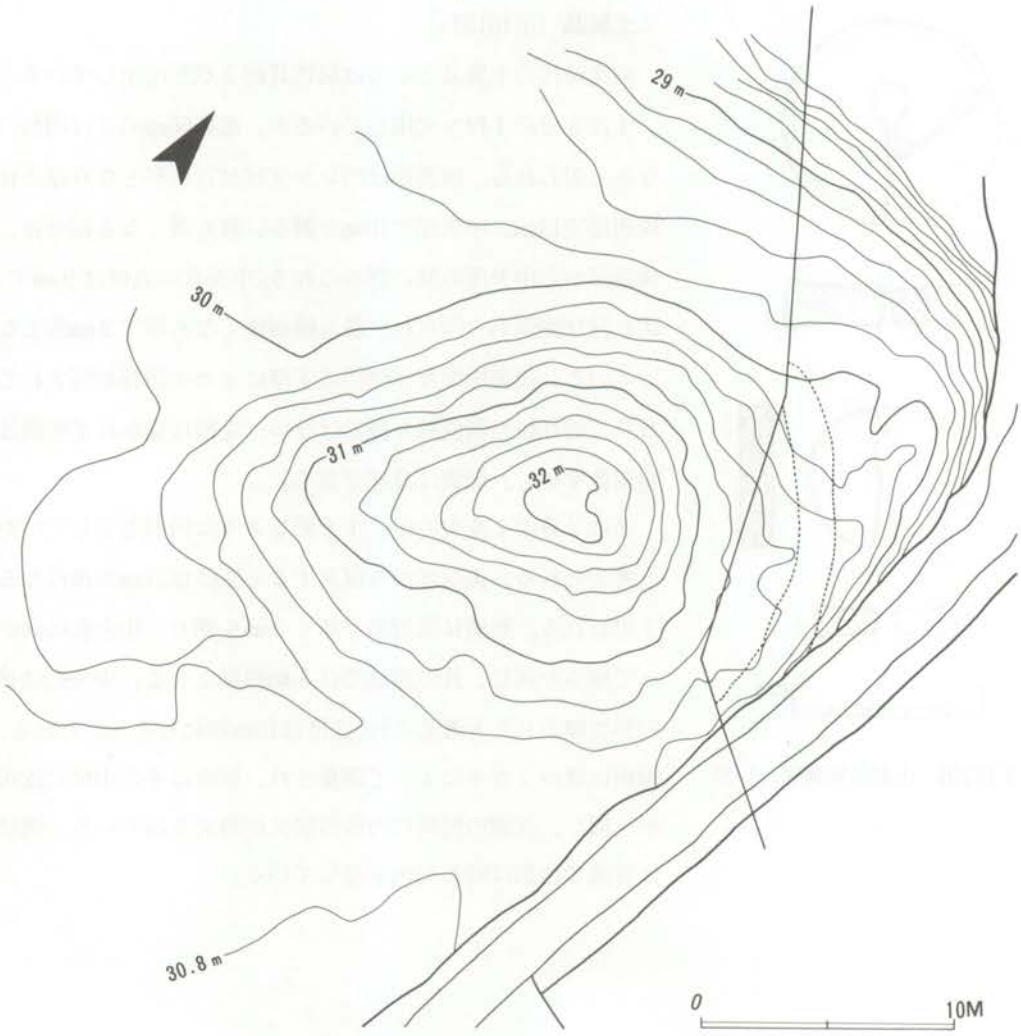
２は２分の１を欠くが、１と同じように円形を呈していたと考えられる。遺存部から復元すると直径は37㎜前後になると思われる。断面は周辺部が厚く９㎜を測り、中央孔に向かって厚さを減じ、孔の側縁では５㎜程度となる。中央孔は楕円形に穿たれたと考えられ、長径は10㎜程になると思われる。両面は軽いミガキによって調整され、側面はその中央に沈線が一周し、沈線の両側に円形竹管文が施文されている。焼成は普通で色調は暗茶褐色を呈している。

B．古墳時代

竜角寺75号墳（第162・163図、ＰＬ68）

〔立地〕

本墳は竜角寺古墳群のほぼ中央の位置に所在するが、群集することなく、台地縁辺に単独で存在する小形の前方後円墳である。この台地は標高30mで一番広い平坦面を形成している。本墳ののる台地の谷をはさんだ北側には竜角寺古墳群中で最大の前方後円墳である浅間山古墳（K111号墳）が位置し、本墳の南側60mの地点にK73号墳、南西60mの地点にK74号墳がある。また、その南側にはK71、K72号墳がほぼ等間隔に位置している。これらの古墳はいずれも小形の前方後円墳で、主軸方向もそれぞれ異なっている。この地域には円墳がないのも特徴である。



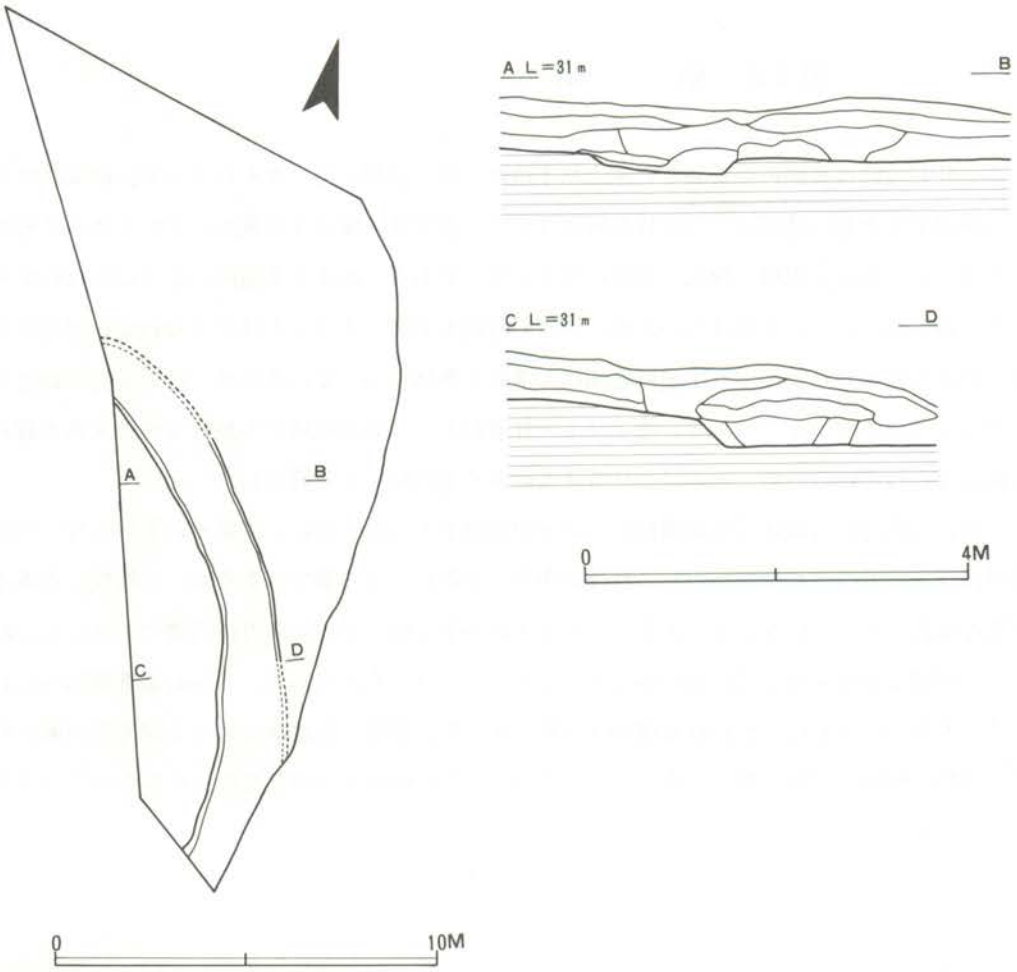
第162図　K75号墳丘実測図（1/300）

本墳は通称白鳳道に面しており、この道路が作られた時点において、後円部の一部が若干削平された可能性がある。

今回の調査対象は工事範囲が後円部の一部を削平するため、その範囲内に限定された。そのため、全体の墳丘実測図を作成し、その後に墳丘の断面観察用のセクションベルトを残して掘り下げた。

〔**墳丘**〕（第162・163図、ＰＬ68）

本墳の墳丘は非常に崩れており、規模等の正確なデータは全面的な発掘調査をしなければ判名しない。今回の調査により、判名した事は後円部に周堀がかろうじてある事である。この周堀は掘り込みが浅く、確認できなかった部分もあるが、幅は２～1.5mで、深さははっきりしているところで20～30cmである。地山への掘り込みは浅く、また、周堀の掘り込み面と墳丘の関



第163図　Ｋ75号墳周堀実測図(1/200)・断面図(1/80)

係も浅すぎて、表土化しているため、はっきりと断面で観察することができなかった。周堀は墳丘側はわりとしっかりしているが、外側は不明瞭な点が多い。

この調査した周堀の一部の弧より、後円部の径を復原すると、17mとなる。そして、この後円部に長さ7m、幅7mの前方部がとりつくと思われる。この数値は墳丘実測図に見られる形態とは違う姿をしている。つまり、墳丘実測図においては、後円部と前方部の間のくびれ部と思われるくびれが図上に表われているので、見誤ることがある。しかし、これは墳丘のくずれと後円部の造成の仕方に関連しているかもしれない。ただ、以上の計測値は図上の復原案であり、確証のあるものではない。いずれにしても前方部の小さい前方後円墳である事はまちがいのないところであろう。墳丘の高さは後円部で2m、前方部で1mである。本墳の場合は台地縁辺に立地しているのだが、前方後円墳としての見かけの大きさは一つも考慮されていない。主軸方位はS—55°—Wである。

遺物はなにもない。

第4節　結　　語

池上りII遺跡は東側の谷を隔てた池上りI遺跡とは内容的に同一なものである。縄文時代早期の沈線文系土器の時期の炉穴が12基検出された。炉穴は西側に3基集中しているものは規模が大きいが、他は小規模で焼土も非常に少ないものである。池上りI遺跡のように炉穴に使用した土器が遺存している例はないため、炉穴の時期を明確にすることはできないが、周辺の土器の散布の仕方から、池上りI遺跡と同様な遺跡の性格を示しているため、時期も同時期と考えてさしつかえないようである。池上りI・II遺跡からは北総地域でも良好な沈線文系土器の資料が得られているため、ここに小林清隆氏の論考を掲載して結語としたい。

なお、竜角寺75号墳は北側の墳裾の一部分の調査であったために、古墳そのものについての知見はほとんど得られなかった。これは竜角寺古墳群にいえる事ではあるが、小規模な古墳は明確な周堀を有していない事である。これは本墳が小規模とはいえ前方後円墳であるにもかかわらず明瞭な周堀を有していない事によってもうなづけるものである。今回の調査範囲内においては本墳に伴うものと思われる遺物は皆無であった。竜角寺古墳群における前方後円墳の時期、性格の解明に大きな期待があったが、結局のところ何の手がかりも得られなかったのは残念な事である。

池上りⅠ・II遺跡出土の沈線文系土器について

小　林　清　隆

道路建設に伴う限定された範囲での発掘調査であったが、縄文時代の遺物は量の多寡を別にすれば各遺跡で出土した。そのなかでも池上りⅠ遺跡と、それに近接して立地する池上りII遺跡から出土した縄文時代早期の沈線文系土器は、北総台地周辺においては比較的充実した内容であった。ここでは両遺跡から出土した沈線文系土器について、他の遺跡から出土した土器と対比しながら、どのような位置付けがなされるのか、問題点を含め検討したい。

三戸式土器

今回三戸式土器に比定される土器は、池上りⅠ遺跡から20数点の破片が出土しているにとどまる。池上りⅠ遺跡第II群1類である。文様の特徴から1a～1cに分類した。これらの三戸式は三戸遺跡から出土している三戸式土器（赤星1936）とは多少趣が異なるものである。1a～1c類については次のようなことが特徴としてあげられる。まず1a類は平行沈線間に鋸歯状や斜行する沈線を充塡することによって文様が構成されている。そしてこの構成は胴部下半に及ぶことが考えられる。器形はおそらく砲弾形の尖底をもち、あまり開かない状態で立ち上がる胴部に移り、口縁部も直立気味に開く形をとると考えられる。口唇部は平坦になるか、僅かに丸味を帯びるかである。次に調整についてみるならば、裏面の調整が丁寧であることが指摘できる。基本的にはミガキ調整によって仕上げを行っているにもかかわらず、そのミガキ痕をも残さないように平滑にされている。これらが1a類の特徴となる。続いて1b類の文様構成は、口縁部に縦位の沈線、その下位に平行沈線帯を設けるという特徴をもつ。器形を復元できる状況ではないが1a類と大差ないと考えている。1c類は貝殻条痕が単に斜方向に施文されるのみで他の文様は施文されていない。

以上のような特徴をもつ出土土器のうち、注意しておかなければならないのは1a類の存在である。これは古くは埼玉県大原遺跡（吉田1941）などでは田戸下層式に比定され、最近では稲荷原類三戸式土器（西川1980）と呼ばれるようになっている土器と共通する特徴を有するものである。西川博孝氏のいう稲荷原類は、埼玉県稲荷原遺跡（三友・安岡1966）の第IV群2類土器を代表とする。つまり池上りⅠ1a類と同じように、「原則として、口辺に対し、数条の平行する沈線が施され、その下部に斜行したり、格子目状等の沈線文様帯がめぐり、さらにその下部は、口辺部と同様、平行沈線が並列する。したがってこの二つの文様帯の繰り返しによっ

て全体の文様が構成されている」のである。県内での出土地は僅かであるが下記の遺跡に出土例を求めることができる。

我孫子市日秀西遺跡（清藤他1980）

印旛郡印西町高根北遺跡（中山他1976）

印旛郡印西町鶴塚遺跡（鷹野1974）

山武郡芝山町新東京国際空港予定地内№7遺跡（西川他1984）

千葉市有吉遺跡（大野他1983）

以上の遺跡で断片的ながら稲荷原類が確認されている。また新東京国際空港予定地内№7遺跡から出土している完形の三戸式土器を稲荷原類とした場合遺跡数は若干増加する。口縁部は稲荷原類と同様であるが胴部に別の文様が展開するというものである。№7遺跡以外では下記の二遺跡に認められる。

流山市桐ケ谷新田遺跡（朝比奈他1979）

印旛郡栄町竜角寺ニュータウン遺跡群№3地点（越川、新井他1982）

池上りIと上記の遺跡を含め、県内の遺跡で1a類を層位的に捉えた遺跡は現在のところ調査されていない。1a類を田戸下層式より古く位置付けることについては今日問題のないところと考える。しかし1a類の具体的な時間的位置付けとなると、沈線文系土器の発生にもかかわる重大な問題が残されている。すなわち西川氏の新しい部類になるとする意見と、福島県いわき市竹之内遺跡（馬目、吉田他1982）の報告において示された「三戸・大平式土器以前に位置づけられなければならない」とする全く異なる見解の提示である。西川氏は三戸類に後続するのが舟塚原・稲荷原類として捉え、馬目氏は「竹之内式土器」を提唱し、三戸式に先行する型式としているのである。この両者の見解に対し、この場で早急に愚見を述べることは資料不足もあり避けたいと思う。これについては機会を改め検討したいと考えているが、現在おぼろげながら抱いている1a類に対する感触について述べておくことにしたい。まず文様についていえば、横位平行沈線文は田戸下層式にも認められる文様要素であるが、鋸歯状の区画または格子目文の充塡はうまくつながっていかないように思える。また調整では、竹之内遺跡、長野県浪人塚下遺跡（宮坂1975）出土例が示すような胴部に荒々しい擦痕を残す調整は、竹之内遺跡で伴出した無文土器と同様、沈線文系土器に先行する平坂式（岡本1953）に認めることができる。いずれにせよ、三戸式土器の発生を考える場合、木の根遺跡（宮他1981）第I群5類土器の評価と、それ以後の撚糸文系土器の系譜は重要となるであろう。また福島県大平遺跡（竹島1958）第1類土器、岩手県蛇王洞洞穴（芹沢・林1965）第VI層出土土器、盛岡市大新町遺跡（八木他1983）の押型文、沈線文土器なども無視できないと考えられる。

次に1b類であるが口縁部に縦位の沈線帯を設けていることが特徴である。縦位沈線帯の下部に平行沈線帯を置く例は横須賀市鴨居上ノ台遺跡（山田他1981）等にみられるが、本例に類

似する資料は少ないと思われる。城ノ台貝塚（吉田1955）第三Ａ類土器の一部から考えればより後出的な色彩が強いと考えられる。

１ｃ類については三戸遺跡をはじめとし、東京湾周辺の遺跡から出土する三戸式土器では、主な文様要素として貝殻条痕文が用いられている。木更津市笹子込山遺跡（石井・堀越1974）、同市清水谷遺跡（中山他1975）から出土している三戸式土器では、約半数が貝殻条痕文をもつもので占められている。また東金市山田水呑遺跡（石川他1977）においても貝殻条痕文を施す土器が、沈線文を有する土器より卓越している。一方利根川下流域の遺跡では茨城県鹿島町木滝台遺跡（原田他1984）での出土が報告されているが、佐原市神田台遺跡（池田他1978）では出土土器中に１点しか認められず、また常陸伏見遺跡（小野他1979）では沈線文が主体となり貝殻条痕文を施文するものは出土していない。このように貝殻条痕文は地域的な差や遺跡による違いが認められる。沈線文と共伴する貝殻条痕文は、その施文方向や構成には強く沈線文の文様構成が意識されていると考えられる。清水谷遺跡に多く認められる格子目状施文、込山遺跡にみられる横と斜方向への組み合わせなどは顕著であり、時間的な隔がないことを示している。池上りＩの場合出土数も僅かであるし、沈線を施文した土器との関係も明らかでないため、時間的位置付けについては残念ながら保留せざるをえない。

田戸下層式土器

田戸下層式は神奈川県横須賀市田戸遺跡（赤星1935）を標式遺跡とし、吉田格氏は次のような点を文様の特徴としてあげている（吉田1973）

○ヘラや棒の先端で描いた太く力強い沈線文が主体となり細い沈線文を組み合わせて文様が構成されることが多い。

○半截竹管文を押した円形、ヘラの先を使った連続刺突文や貝殻の口縁を押した文様が存在する。

以上のような文様上の特徴と三戸式土器を比較した場合、組み合わせ文様が発達し、文様が変化に富むことなどに両者の差違を認めることができる。しかし、施文工具には大きな変化はなく、したがってすでに指摘されているように、「個々の遺物に即して識別していくことは実際に大きな困難が伴う」（佐々木他1982）という問題は必然的に生じ、「土器総体の特徴として前後の差が認識されるのであり、こわれた土器の細片では決められない」（石井・堀越1974）ということもいえるのである。

第II群土器のうち、田戸下層式の占める割合は、池上りＩで約85％、池上りIIで約70％であった。池上りＩでは個体数は多いと考えられるが器形全体を知り得る個体となると限られ、池上りIIでは個体数は10に満たない。また先に述べたとおり、組み合わせ文様が発達するため、ここでは細片に残された文様を逐一取りたてることよりも、三戸式と田戸上層式との中間に位置付けられる土器であることを主眼に文様構成の変化について考えることにしたい。

まず両遺跡で分類した土器について下記のように整理しておきたい。

A　沈線文のみが施文される（池上りＩ２ａ・２ｃ、池上りII１ｅ）。

B　沈線文と短沈線文が組み合わさる（池上りＩ２ｂ・２ｈ、池上りII１ｂ）。

C　沈線文と貝殻腹縁文が組み合わさる（池上りＩ２ｄ、池上りII１ｃ）。

D　沈線文と刺突が組み合わさる（池上りＩ２ｆ）。

E　沈線文と短沈線文が組み合わさる（池上りＩ２ｇ）。

F　太沈線文、力強い刺突によって文様を描出する（池上りＩ２ｅ、池上りII２ｄ）。

さてA～Fのうち Aのように細沈線文のみが施文されるものは三戸式との区別を最も困難にさせる文様要素である。例えば縄文土器大成１（岡本1982）の参考図版60に示されている三戸式には池上りＩ２ａ類と同じように平行沈線文しか認められない。また、池上りII１ａ類６の土器では、平行沈線文は口縁部の文様としか用いられていない。そして池上りＩ２ｃ類のように斜行する沈線文は、池上りＩ２ｂ類54や池上りII１ａ類６の土器の胴部の文様を構成する場合もある。城ノ台貝塚でA類としたものは、沈線文に斜行または平行する直線とか、縦方向の平行沈線、鋸歯文が組み合わされている。こうみると田戸下層式では沈線文単独で土器全体に文様を描出することは稀で、他に短沈線文とか刺突文などと組み合わされる場合が多いということがわかる。しかし、池上りＩ２ａ類を三戸式と区別する方法は細部の観察によるしかないと思われる。つまり一般にいわれるように口縁部の断面形態を比較するとか、内面の調整具合、沈線の引かれ方などである。池上りＩ30と池上りII６の土器すなわち三戸式と田戸下層式の内面調整を比較すると、両方ともミガキ調整ではあるが、その痕跡とか感触は全く異なるのである。また田戸下層式と考えられる方は沈線を引いた際の粘土のめくれ上がりが、そのまま残されている状態が多いのではないかと思われる。このように沈線文による直線を多用する土器は口縁部も平口縁に作られるものが多いので、田戸下層のなかでも古い段階と考えられる。池上りII１ｅ類は調整から田戸下層式と考えたが、格子目状の構成を成すものは田戸上層式とされるなかにも認められるため、比定は難かしいところである。

田戸下層式には波状口縁をもつ土器が存在するが、これが平口縁土器より後出であることは明らかである。池上りＩ２ｂ・２ｈ類は施文のし方に違いがあるが、文様の組み合わせという点でBとしたものである。ここで両者が決定的に異なるところは、２ｂ類には平口縁しか認められず、２ｈ類は波状口縁をもつという器形自体の違いに求めることができる。２ｂ類に近い土器として我孫子市布佐余間戸遺跡（高野他1981）第４群５類土器、印旛郡栄町あじき台遺跡（小林他1983）出土土器11～18をあげることができる。これらもまた平口縁と考えられる。Dとした池上りＩ２ｆ類には平口縁と波状口縁が認められる。同じように波状口縁をもつ２ｈ類128～132と２ｆ類118の比較は田戸上層式への推移を考えるうえで興味深い。まず118の胴部の文様だけをみると平行沈線間に刺突が加えられている点では平口縁の文様構成と大差はない。

大きな変化は波状部を埋める文様構成の出現である。また118の場合縦位の区画が2本の平行沈線によって明瞭に設定されている。次に128は縦位区画は短沈線文へと簡略化され、胴部文様は118の口縁部文様と同様な文様構成で埋められている。これは縦位区画をはさんで菱形に近い構成となるものである。逆に口縁部はその形態の変化とともに文様構成にも変化をみせている。同様な構成は神奈川県夏島貝塚（杉原・芹沢1957）における夏島IIIc式、木の根№6遺跡第II群土器に認めることができる。この縦位区画がさらに簡略された段階が、新東京国際空港予定地内№14遺跡（野口他1983）から出土している第1群22である。しかし本例は口縁は平口縁となる。そして城ノ台貝塚出土の図版I下段の完形土器は縦位区画は消失し、新たに小突起が貼り付けられており、より新しい要素が窺われる。

以上からいえることは、田戸下層式は平口縁から波状口縁が出現するという器形の変化をたどり、さらに文様構成は波状口縁の波頂部から垂下される縦位区画文間への重塡が発達し、またくずれをみせる過程を経て田戸上層式へ推移するということができる。西川博孝氏は田戸下層式から上層式への変化を、新東京国際空港予定地内№7遺跡の田戸上層式を分析するなかで「おおよそ縦の分帯の消滅、区画文の簡略化と横への文様の連続化」として評価している。これは池上りIの田戸下層式の変化から考えても頷けることである。

Cとした貝殻復縁文が施文されるものと、Fの太沈線文を主として文様が構成されるものは量的に僅かであった。太沈線に関して、その文様構成については細沈線文による構成と大差はないものと思われる。細沈線を引く工具を太沈線を引く工具に代替させて描出したものと考えられる。茨城県鹿島町西谷A遺跡（田口他1981）では太沈線文と細沈線文が組み合わされて全体の文様を構成している例が目立っている。また布佐・余間戸遺跡でも太沈線文が施文されるものは多く出土している。遺跡によって細沈線文と太沈線文の割合は較差があると考えられる。同じように貝殻復縁文にしても、その施文工具入手の難易によるものか遺跡による差が認められるようである。

第III群土器については別途考えなければならないところがあるが、一応特徴から考えて大部分は田戸下層式期に比定されると思われる。炉穴から出土した土器から器形が復元でき、それは沈線を施文する田戸下層式と同じとみることができる。そして器形が大形であることと、波状口縁となるものが認められることから、田戸下層式の新しい段階に盛行したと考えることができる。従来田戸下層式に伴う無文土器は僅かであると考えられてきた。確かに他の遺跡では無文土器の割合は有文土器よりも下回っている。現在のところ池上りI・IIの多量の無文土器の出土は、田戸下層式の遺跡のなかでは例外的存在であるとしか考えられない。さらに詳細な検討を必要とする。

田戸上層式土器

いわゆる曲線文が発達する田戸上層式は僅かしか出土しておらず、直線文による構成を残し

ているものが多い。池上りⅠ143～156は特に前型式の色彩を強くとどめており、田戸上層式のなかで最も古い段階になると考えられる。波状口縁となる口縁部文様は太沈線による鋸歯状の区画内への刺突の充填によって飾られ、胴部は菱形を構成する斜行沈線が施文されている。口縁部と胴部は低隆帯によって分離され、器形も口縁部が屈曲するような形となっている。田戸下層式からの発展形式としての特徴は、胴部に展開する縦位区画が全く取り去られた菱形となる文様構成に如実に現われている。

次に東北地方との関連を知り得る資料が出土しているのでこれをとりあげておきたい。池上りⅠ177～183の土器に施文されている《状押し引き文（佐藤他1982）という特徴的な文様は、宮城県白石市明神裏遺跡（白石市史編さん委員1976）を標式遺跡とする明神裏3式に認められるものである。明神裏3式について、型式設定者の林謙作氏は田戸下層式に後続し、「広義の田戸上層式の一分派」（林1962・82）として位置付けている。177～183は同一個体と考えられ地文に条痕文を施文しているのが特徴である。地文に条痕文を有する例として、茨城県那珂湊市ムジナⅠ遺跡（藤本1980）出土土器があり、これが本例に最も近いと考えられる。時間的には池上りⅠで出土している田戸上層式が古い段階のものであるので、おそらく明神裏3式も143～156に並行すると思われる。池上りII36～42についても東北地方に分布する土器との対比が可能であるかもしれないが、細片であるため比定は難しい。

最後に池上りⅠ・II遺跡の整理作業に際し、沈線文系土器については新井和之、高野博光、西川博孝、原田昌幸の各氏から御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献

赤星直忠　1935　「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」『史前学雑誌』第7巻第6号

赤星直忠　1936　「古式土器としての三戸式土器に就いて」『考古学』第7巻第9号

朝比奈竹男他　1979　『流山市桐ケ谷新田遺跡』　日本住宅公団東京支社　流山市桐ケ谷新田遺跡調査会

池田大助他　1978　『佐原市神田台遺跡』　千葉県教育委員会

石井則孝・堀越正行　1974　「木更津市笹子込山遺跡の研究―縄文時代早期三戸式土器をめぐって―」『史館』第2号　史館同人会

石川日出志他　1977　『山田水呑遺跡』　日本道路公団　山田遺跡調査会

大野康男他　1983　「有吉遺跡―第3次―」『千葉東南部ニュータウン』14　千葉県文化財センター

岡本勇　1953　「相模平坂貝塚」『駿台史学』第3号

岡本勇　1982　『縄文土器大成』1　講談社

小野真一他　1981　『常陸伏見』　伏見遺跡調査会

越川敏夫・新井和之他　1982　『龍角寺ニュータウン遺跡群』　龍角寺ニュータウン遺跡調査会

小林克他　1983　『あじき台遺跡―千葉県印旛郡栄町所在遺跡の調査―』　あじき台遺跡調査団

佐々木藤雄他　1982　『向原遺跡』　神奈川県教育委員会

佐藤洋他　1982　「宮城県白石市・蔵王町における縄文早期遺跡の踏査報告」『赤い本』創刊号　赤い本同人会

白石市史編さん委員　1976　『白石市史別巻―考古資料篇』　白石市

杉原荘介・芹沢長介　1957　『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』

清藤一順他　1980　『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』　千葉県教育委員会　千葉県文化財センター

芹沢長介・林謙作　1965　「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号

高野博光他　1981　『布佐・余間戸遺跡』我孫子市教育委員会

鷹野光行　1974　「鶴塚遺跡出土の縄文式土器」『古代』第58号　早稲田大学考古学会田口崇他　1981　『萩原内遺跡・西谷A遺跡』　茨城県鹿島町考古学資料刊行会

竹島国基　1958　「福島県双葉郡大平遺跡略報」『石器時代』第5号

中山吉秀他　1975　『清水谷遺跡』　清水谷古墳発掘調査団

中山吉秀他　1976　「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財発掘調査報告書』IV　房総考古資料刊行会

西川博孝　1980　「三戸式土器の研究」『古代探叢』

西川博孝他　1984　『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』IV　千葉県文化財センター

野口行雄他　1983　『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』III　千葉県文化財センター

林謙作　1962　「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』第9巻第2号

林謙作　1982　「縄文早・前期の土器―北海道南部・東北地方―」『縄文土器大成』1　講談社

原田昌幸他　1984　『木滝台遺跡』　鹿島灘考古学研究会

藤本彌城　1980　「ムジナI遺跡」『那珂川下流の石器時代研究』II

馬目順一・吉田生哉　1982　『竹之内遺跡』　いわき市教育委員会

三友国五郎・安岡路洋　1966　『稲荷原』　大宮市教育委員会

宮重行他　1981　『木の根』　千葉県文化財センター

宮坂光昭　1975　『浪人塚下遺跡』　下諏訪町教育委員会

八木光則他　1983　『大館遺跡群―大新町遺跡―』　盛岡市教育委員会

山田昌久他　1981　『鴨居上ノ台遺跡』　上ノ台遺跡調査団

吉田格　1941　「埼玉県大原遺跡調査報告」『古代文化』12―2

吉田格　1955　「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第1号

吉田格　1973　『関東の石器時代』　雄山閣考古学選書8

第 6 章
大畑 II 遺跡の調査

第6章　大畑III遺跡の調査

第1節　遺跡の位置及び立地（第1・2・164図）

大畑III遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字大畑907他に所在する。池上りII遺跡と谷をはさんだ北西に位置する台地の斜面である。標高は17～27mである。この谷は根木名川へ向かう本谷にあたり、台地縁辺には竜角寺古墳群中最大の前方後円墳である浅間山古墳がある。このかなりの傾斜をもつ斜面と下の平坦面を調査対象としたのは、浅間山古墳の存在により、斜面になんらかの施設、あるいは生産遺跡の存在の有無、それに白鳳道といわれている道の存在、あるいは、水田の問題等もあり、大畑III遺跡はこの特殊ともいえる立地のなかに認定されたのである。

第2節　遺跡の概要及び調査の方法（第165図）

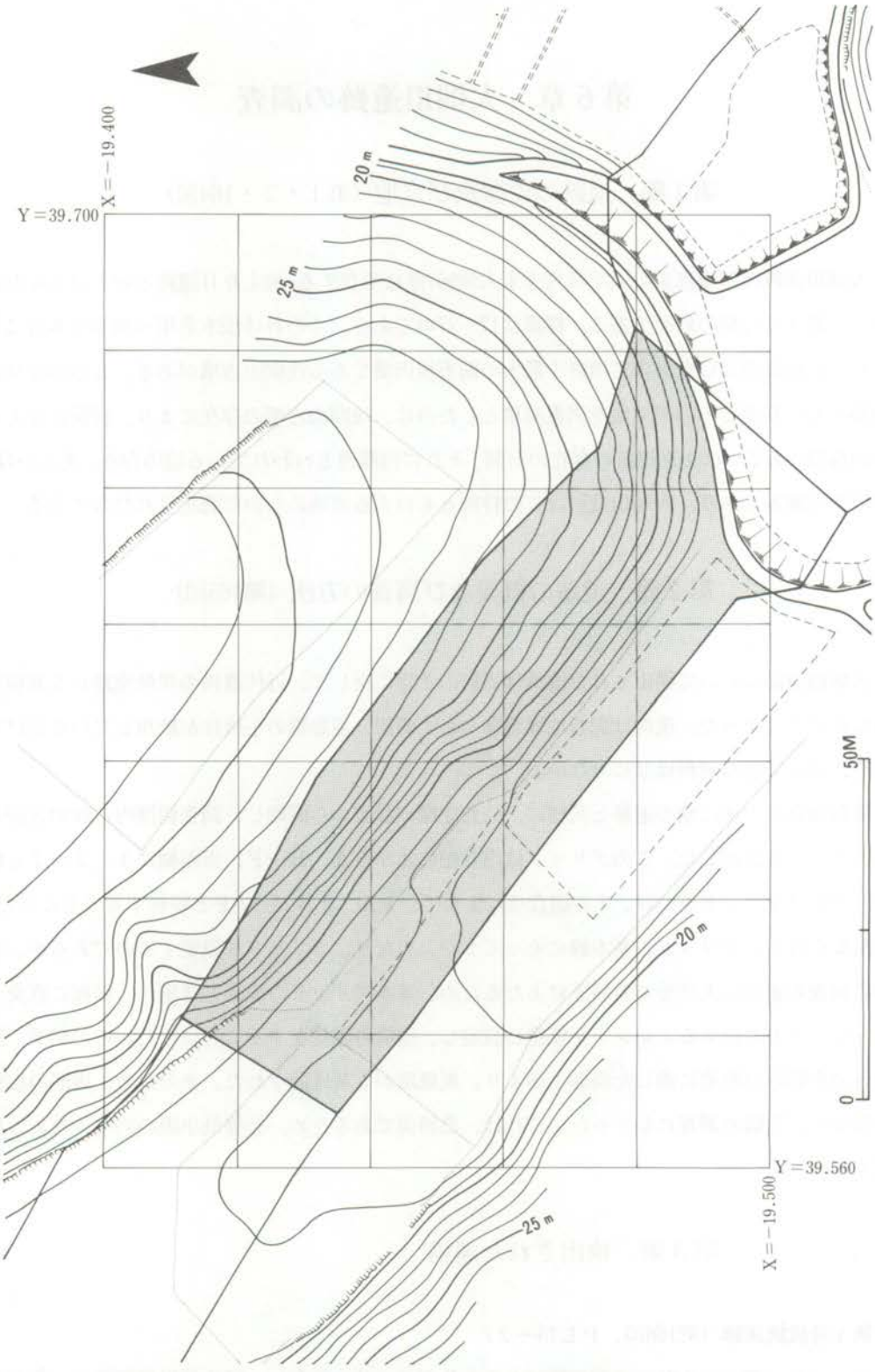
大畑III遺跡において検出された遺構は当初の予想に反して、近代遺構の炭焼窯跡が5基検出されたにとどまった。遺物は調査地域全体から土師器、須恵器の小破片が散布しているだけであり、図示できる資料はなにもない。

発掘調査の方法は他の遺跡と同様に、公共座標の設置から開始し、調査範囲内に20m方眼の大グリッドを設定した。このグリッドは南北軸に北からA、B…F、東西軸に1、2…7と数字とアルファベッドをつけ、その組合せによって、1A、2B、…7Fと呼称することにした。本来ならばこのグリッドの基本線にそってトレンチなり、グリッドを設定するのであるが、本跡の調査対象地の大部分が急斜面にあたるため、基本グリッドの設定とは別に、斜面に直交するトレンチと並行するトレンチを任意に設定し、遺構の確認をすることにした。その結果、調査区の東側の白鳳道に面した斜面下端より、炭焼窯が5基確認された。そのため、周囲の拡張を行ない、遺構の調査にかかった。これは、急斜面であるため、必要最小限の効率のための措置であった。

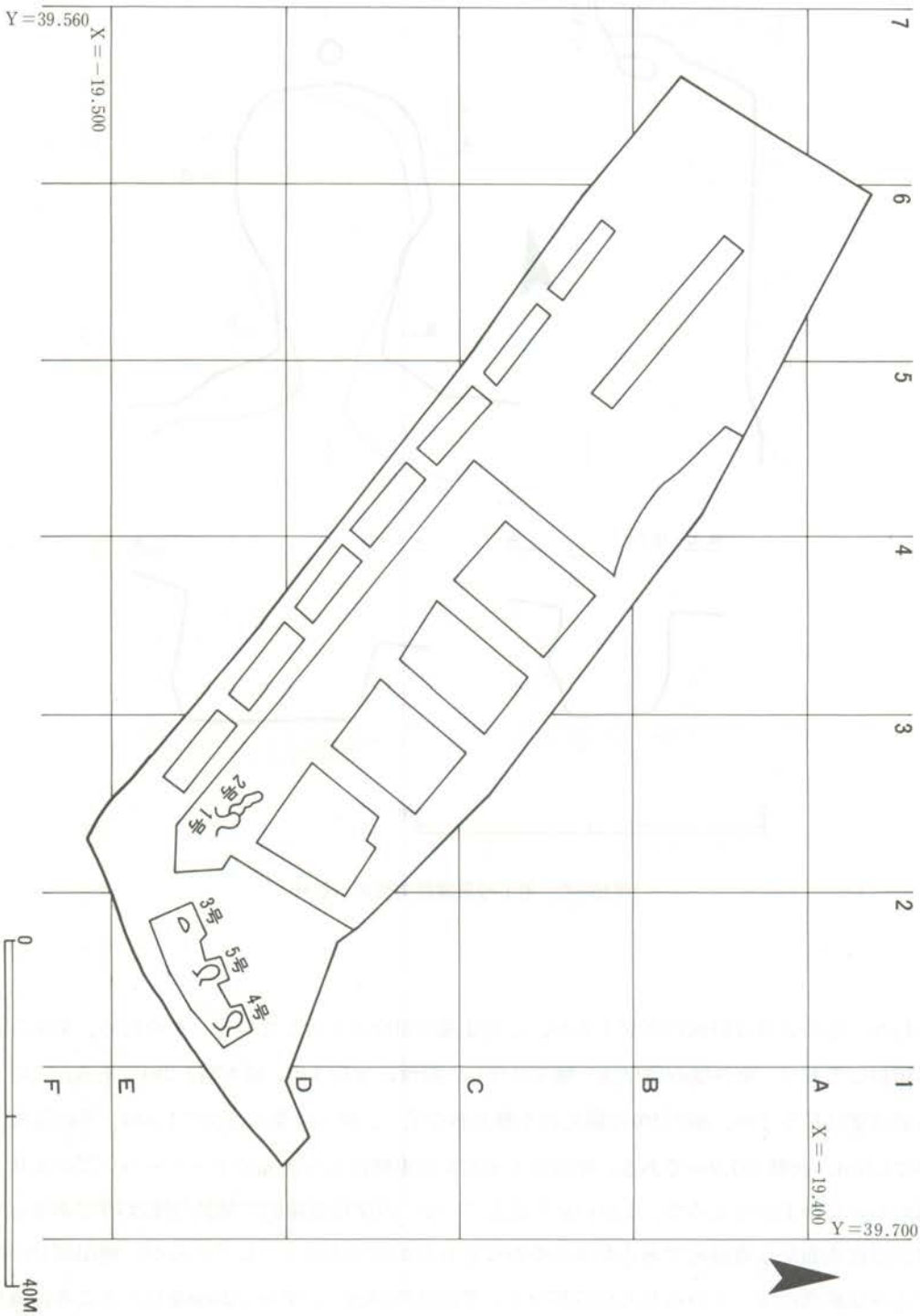
第3節　検出された遺構

第1号炭焼窯跡（第166図、PL75－2）

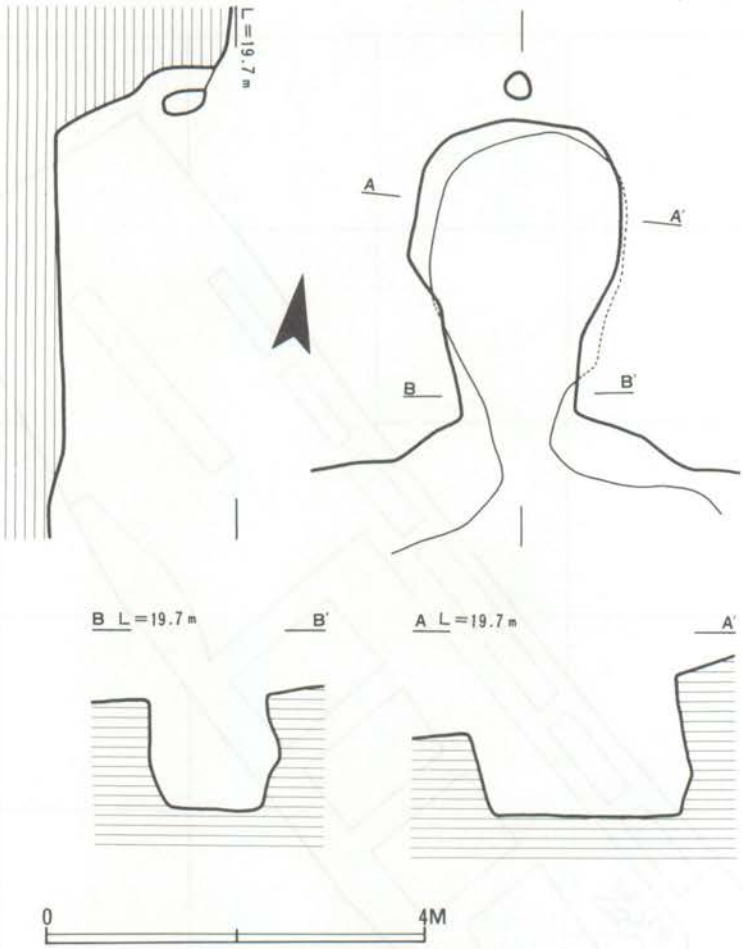
第1号炭焼窯跡は本跡の南端東側である3Eグリッドに所在し、第2号炭焼窯跡の一部を壊して構築している。この2基の炭焼窯跡は他の3基と構築する際の立地に大きな差がある。す



第164図　大畑III遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）



第165図　大畑Ⅲ遺跡遺構配置図（1/800）



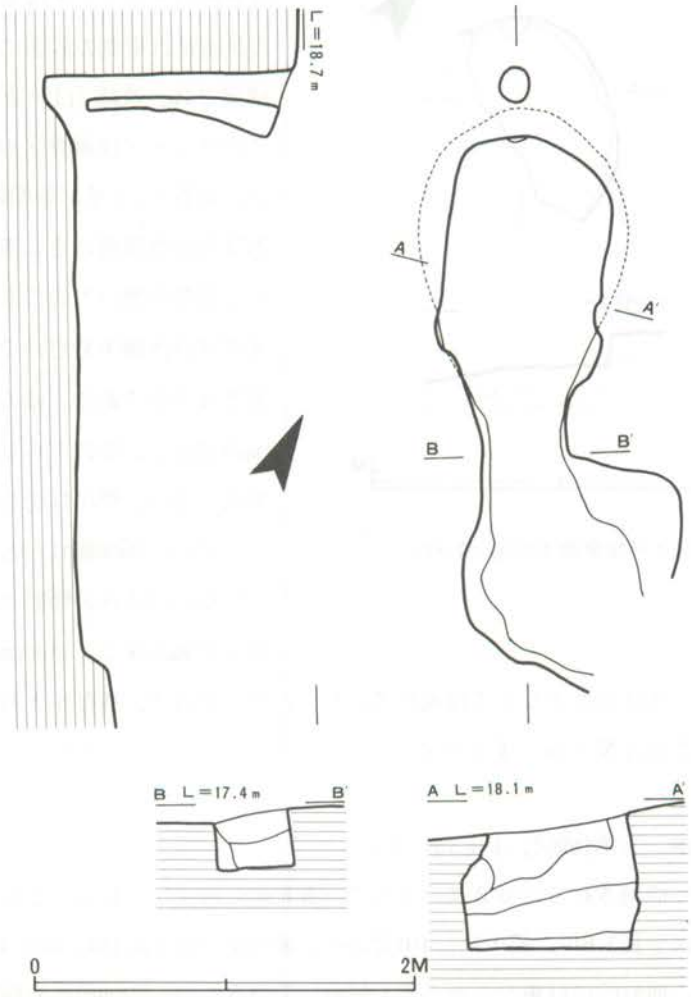
第166図　第1号炭窯跡実測図（1/80）

なわち、他の3基は斜面に直交するが、この2基は斜面に並行している。そのため、東から西へ傾斜しており、東西壁の遺存は一様ではない。規模は全長3m、最大幅2.2mである。このうち焼成室は長さ2m、幅2.2mの隅丸の不整方形を呈し、深さは奥の部分で1.8m、その他は東壁で1.5m、西壁で0.9mである。壁の立ち上がりは東壁は5～20cmのオーバーハングがあり、底面から45cm上のところで、よけいにくぼんでいる。西壁は直線的で傾斜角度は70°である。奥の部分は底面から直線的であるがゆるやかな立ち上がりを中程までしているが、煙出部分の掘り込みは垂直になっているために段がつく。煙出は径30cmで、壁から20cm離れたところに掘り込まれている。焚口は長さ1m、幅1.2m、深さ1.2mの筒形を呈しているが、西側がやや広がるために　いびつな形になる。焚口の特徴は壁の中段が一番膨らんでおり、焼成室東壁のくぼみと同じものである。焚口の前面は20cm程の段差をもち、大きく広がっている。床面は焚口か

ら焼成室の奥へゆるい傾斜をしている。東西には水平である。全体によく焼けており、床面と壁の一部にはタール状のものが付着している。壁は15cm程中まで赤変している。主軸方位はN－９°－Wである。

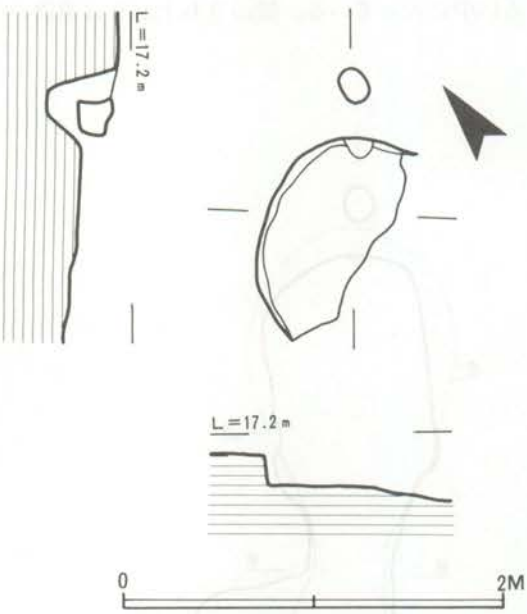
第２号炭焼窯跡（第167図、ＰＬ75－２）

３Ｅグリッドに所在し、第１号炭焼窯跡に東南部の一部が切られている。第１号炭焼窯跡と同様に斜面に並行して立地している。規模は全長４ｍ、最大幅1.7ｍである。焼成室は長さ2.4ｍ、幅1.7ｍで隅丸長方形を呈しているが、主軸に対してかなりずれた形態をしている。第１号炭焼窯跡と同様に東から西へ傾斜しているが、それほどの段差はなく、20cm前後である。壁は全体にオーバーハンクをしており、16～30cmぐらい中に入っている。壁の立ち上がりは垂直に



第167図　第２号炭窯跡実測図（1/80）

近く、直線的であるが中程において、大きく中へ入り、断面はドーム形を呈している。深さは奥の部分で2m、東壁で1.4m、西壁で1.2mである。煙出は径36cmで、壁から40cm離れたところに垂直に掘り込まれている。この掘り込みは床面よりも31cm以上深く掘込まれている。焚口は長さ1.6m、幅90cmの長方形を呈しており、高さは62cmである。壁の立ち上がりは垂直に近く、直線的である。床面は焼成室から焚口まで水平で段差はない。焚口の前面は第1号炭焼窯跡に切られているために不明であるが、大きく広がるものではないようである。全体によく焼けているおり、特に煙出部分にはタールが付着している。壁は10cm前後まで赤変している。主軸方位はN—27°—Wである。



第168図　第3号炭窯跡実測図（1/80）

第3号炭焼窯跡（第168図、PL75—1）

南側の斜面に構築された第1・2号炭焼窯跡のグループとは違い、第3～5号炭焼窯跡は東側の斜面に直交するように構築され、道路（白鳳道）に面している。このグループは調査区の東壁2Eグリッドに位置し、3基が等間隔に並んでいる。第3号炭焼窯跡はその南端にあり、きわめて遺存の悪いものである。残存部分は焼成室の西側半分だけであり、規模、形態等は不明である。壁の高さは最高で30cmの遺存で、壁の立ち上がりは直線的で垂直に近い。煙出は径38cmの楕円形を呈し、壁から36cm離れたところに掘り込んでいる。掘込みの傾斜はややゆるく、床面より36cm深く、径60cmの楕円形を呈する穴にしてある。全体にあまりよくは焼けていない。そのために、遺存がきわめて悪いのかもしれない。主軸方位はN—40°—Eである。

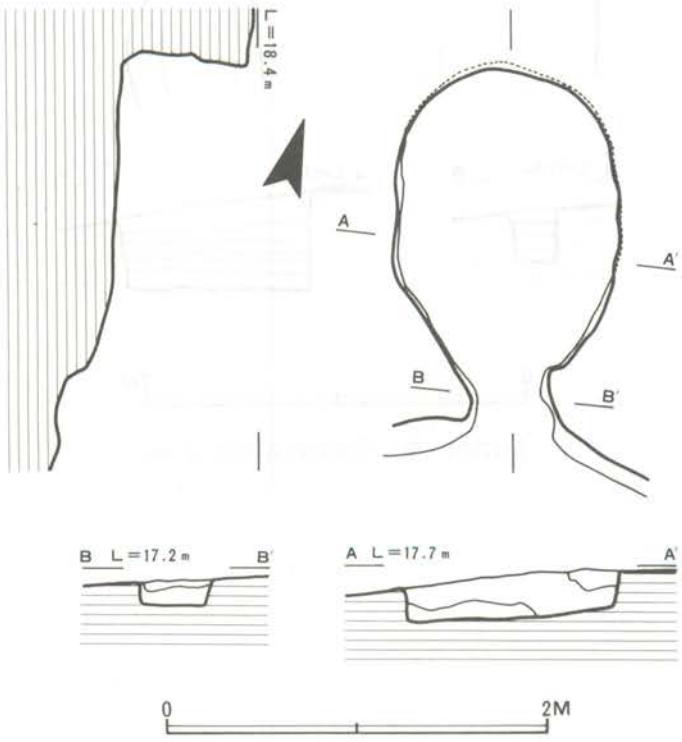
第4号炭焼窯跡　（第169図、PL75—4）

斜面に直交して構築されている3基のうちで一番北側に所在しており、2Eグリッドに位置している。規模は全長3.6m、最大幅2.4mである。焼成室は長さ3.1m、幅2.4mで不整な楕円形を呈している。地形的には東から西へ若干傾斜しているため、20cm前後の高低差がある。壁は東側から奥にかけては若干のオーバーハングがあるが、西側は垂直に近い。立ち上がりは全

体に直線的である。深さは奥の部分で1.3mあるが、北から南へ急な傾斜をしているため、中ほどで深さは40cm前後になる。第４号炭焼窯跡での大きな特徴は煙出の穴が外にないことである。これは内側に煙出の施設をもうけた事であると思われる。焚口は幅１m、長さ50cmの焼成室に対して東によれているものである。深さは30cmほどで直線的な立ち上がりをしている。床面は焼成室においては南北はほぼ水平であるが、東西は東から西へ傾斜している。その差は10cmほどである。床面は焚口に来るとゆるやかな傾斜を示し、焚口前面に来ると30cm前後の段差がつき、大きく広がっている。壁、床面ともによく焼けており、20cm前後まで赤変している。主軸方位はN－16°－Wである。

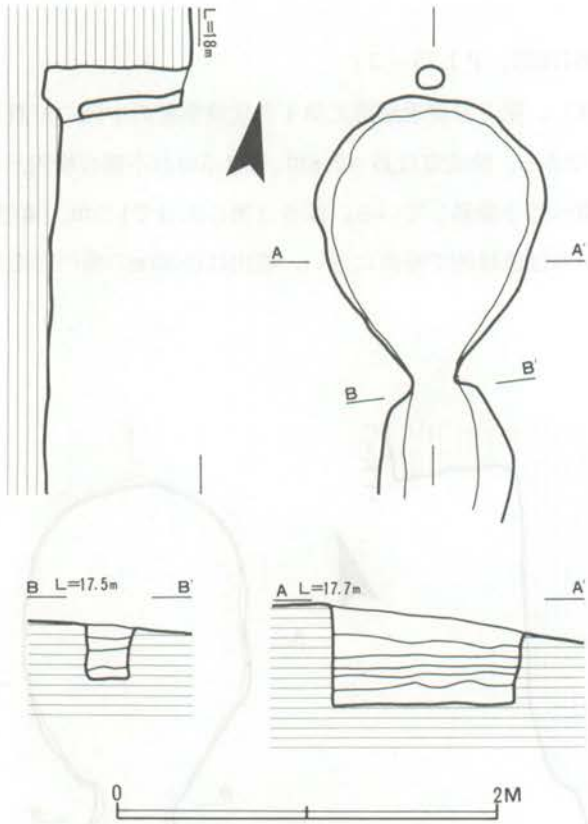
第５号炭焼窯跡（第170図、ＰＬ75－３）

２Ｅグリッドに所在し、第３号炭焼窯跡と第４号炭焼窯跡の中間に位置している。規模は全長３m、最大幅2.5mである。焼成室は長さ2.8m、幅2.5mの不整な楕円形を呈している。第５号炭焼窯跡は西から東へ若干傾斜している。深さは奥の部分で1.3m、東壁で80cm、西壁で1.1mある。壁の立ち上がりは直線的で垂直に近い。煙出は径30cmの楕円形を呈し、壁から10cmの



第169図　第４号炭窯跡実測図（1/80）

所にほぼ垂直に掘り込んでいる。また、この掘り込みは径40cmで、床面より20cm深く掘り込まれている。焚口は長さ24cm、幅45cmの狭くて短いものである。深さは56cmで、壁の立ち上がりは垂直に近いのであるが、凹凸が目につく。床面は焼成室から焚口前面まで同一レベルであるが、かなりの凹凸がある。焚口の前面は若干ひらき気味である。壁、床面ともによく焼けており、特に煙出にはタールが付着している。壁は20cm前後まで赤変している。主軸方位はN－12°－Wである。



第170図　第5号炭窯跡実測図（1/80）

第4節　結　　語

以上が大畑III遺跡の調査概要である。当初の予想とは意に反し、検出された遺構は近代以降の炭焼窯跡5基だけであった。これらの炭焼窯跡は通称白鳳道と呼ばれる道に面して構築されており、大正時代頃まで使用されていたと地元の古老の証言がある。白鳳道の古道としての問題解明になる遺構、遺物の検出は残念ながらなにもない。また、竜角寺古墳群中最大の前方後円墳である浅間山古墳の付属施設も大畑III遺跡の範囲内にまではのびないことが判名した。ただ、細片になってしまっているが土師器、須恵器がこのような土地利用上下適当なところに散布していることは、遺構は伴わないが、なんらかの利用をしていた痕跡として、生活空間を考える上において無視できないものを多く含んでいる。

第 7 章
向 台 遺 跡 の 調 査

第７章　向台遺跡の調査

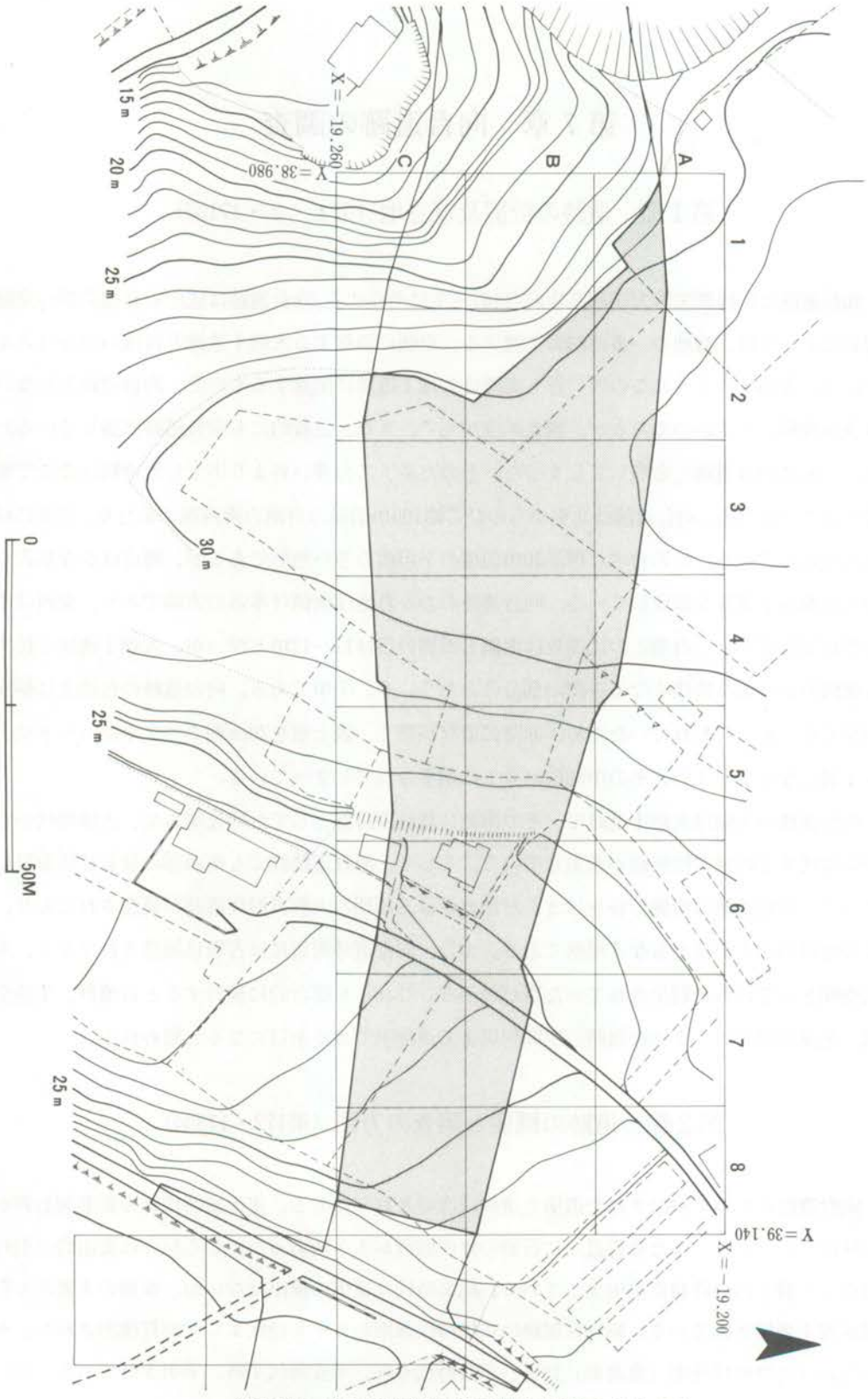
第１節　遺跡の位置及び立地（第１・２・171図）

向台遺跡は印旛郡栄町大字酒直字向台467－７に所在する。向台遺跡は成田安食線関係の発掘調査においては、台地の一番西端に位置する。東側に隣接する大畑Ⅰ遺跡とは浅い谷をはさんでいる。後述するようにこの浅い谷も実際は大畑Ⅰ遺跡に関連するもので、向台遺跡としないほうが理解しやすいのであるが、調査年度が先で、また、位置的にも向台遺跡に接しているために、先に向台遺跡と命名してしまった。そのため、この浅い谷より出土した遺物はここで報告することになる。向台遺跡は北東からのびる幅100m前後の台地の南西端にあたり、三方に谷が入り込んでいる。この台地は標高30m前後の平坦面の多い地形であるが、周辺はかなり入り組んだ本谷と支谷を形成している。向台遺跡ののる台地は南側は本谷の末端であり、東西はそれぞれ支谷である。台地との比高差は南側と西側の谷は11～12mと深いが、大畑Ⅰ遺跡と接する東側の谷は徐々に浅くなる谷頭の部分にあたり、６、７mである。向台遺跡の台地上は耕作が早くからおこなわれていたため、非常に遺存が悪く、表土層を20cm剝ぐとすぐにハードローム上層になってしまい、その中間部がすでに削平されてしまっている。

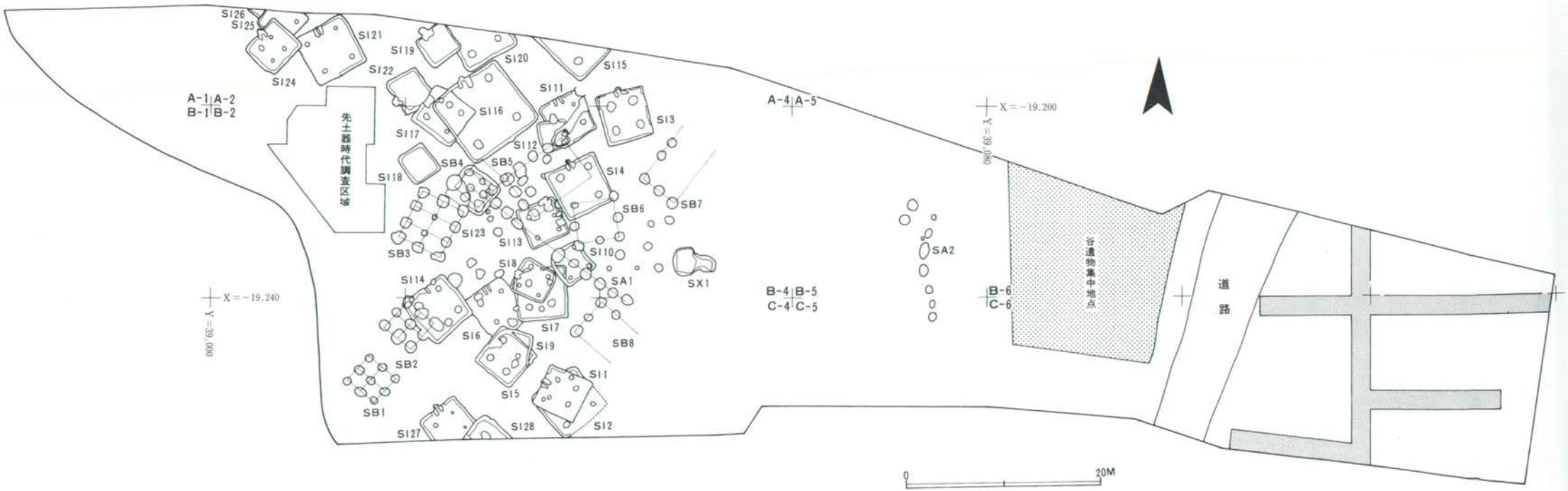
向台遺跡の東側は大畑Ⅰ遺跡で、その南側は酒直遺跡群として台地先端まで、古墳時代から平安時代までの竪穴住居跡が密集している。そして、酒直遺跡群でも南西部の独立丘陵を呈している、向台遺跡の南側の谷をはさんだ地点には五領期の大形方形周溝墓が築造されており、この地帯のさきがけともなる場所である。また、向台遺跡周辺には古墳は築造されてなく、生活空間としてのみに利用されていた事がわかる。これらを総合的に検討すると古墳群、生活空間、生産空間というような当時の空間利用までが解明できる糸口になると思われる。

第２節　遺跡の概要と調査の方法（第172・173図）

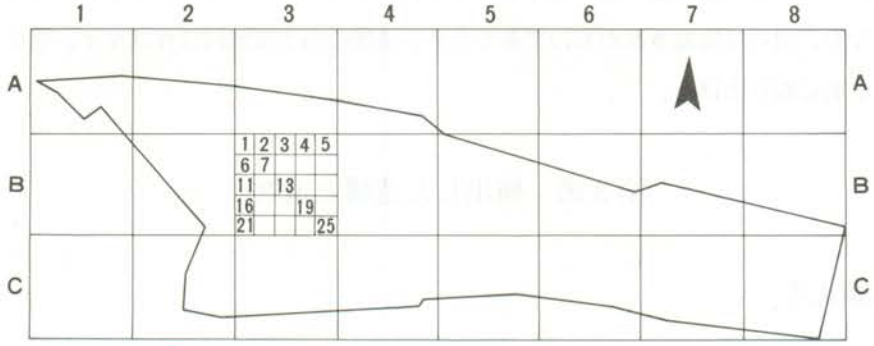
向台遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代は刃部磨製石斧が単独出土しており、またその近くに石器の集中個所が１ケ所あった。ここからは安山岩の剝片12点と石屑２点の計14点が出土している。縄文時代は遺構の検出はないが、後期の土器片と石器が若干表採されている。竪穴住居跡は古墳時代後期から平安時代までで28軒検出された。その内訳は古墳時代後期（鬼高期）10軒、奈良時代６軒、平安時代７軒、不明５軒である。他に奈良・平安時代の掘立柱建物跡８棟、塀あるいは柵が２本、性格不明な土坑が１基である。以



第171図　向台遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）



第172図　向台遺跡遺構配置図（1/400）



第173図　グリッド呼称図

上の遺構は調査区域の狭い平坦面に密集している。これから類推するとこの台地上の平坦面には古墳時代後期から平安時代までの遺構が密集していると思われる。向台遺跡の谷を隔てた南東に位置する酒直遺跡群と同じ様相を呈するものと思われる。

向台遺跡の調査において特筆すべきものは谷部の調査を実施した事により、奈良時代の多量の遺物を検出できたことである。多量な土器類の中には畿内、東北の搬入土師器、多種多様な須恵器、東国で初めて検出された唐三彩陶枕、多量な羽口、瓦等が含まれ、一括あるいは数回にわたって廃棄されたものである。調査時においてはこれらの多量な遺物をどう考えればいいのか見当がつかなかった。台地上の竪穴住居跡からはこれらの遺物と共通するものがなにもないので、単に集落のものではなく、単純に竜角寺に関連するものであろうと考えていた。しかしながら、次年度に大畑Ⅰ遺跡の調査を実施したら、予想もしていなかった大規模な掘立柱建物群が検出され、ようやく、こちら側に伴う遺物である事が判明した。そして、これらの多量で良質な遺物群と大規模な掘立柱建物群の両者を考え合せて、下総埴生郡衙の有力な推定地とする事になった。そのため、谷出土の遺物は向台遺跡の集落のものではなく、大畑Ⅰ遺跡の郡衙関連遺物として把握したい。

発掘調査の方法は他の遺跡と同様に公共座標の設置からはじめ、20m方眼のグリッドを設定した。そして、南北軸は北から南へA、B、Cとアルファベットで、東西軸は西なら東へ１、２、・・・８まで数字で表現し、大グリッドはA－１、B－２、C－８というように呼称する。そして、この大グリッドの中をさらに４m方眼の小グリッドで25に分割する。この小グリッドの番号は北西コーナーを１、北東コーナーを５、南西コーナーを21とし、南東コーナーを25で終りとする。以上の両者を組合せて、それぞれの地区名称を呼ぶことにした。それはA－１－１、B－２－15、C－８－25という表記をする。向台遺跡の台地上の平坦面の遺構は他と同様の調査である。谷の部分に関しては、最初に遺構の有無を確認するため、大グリッド上と調査区縁辺に幅２mのトレンチを粘土層まで掘り下げた。その結果、遺構は存在しないが、B－６、

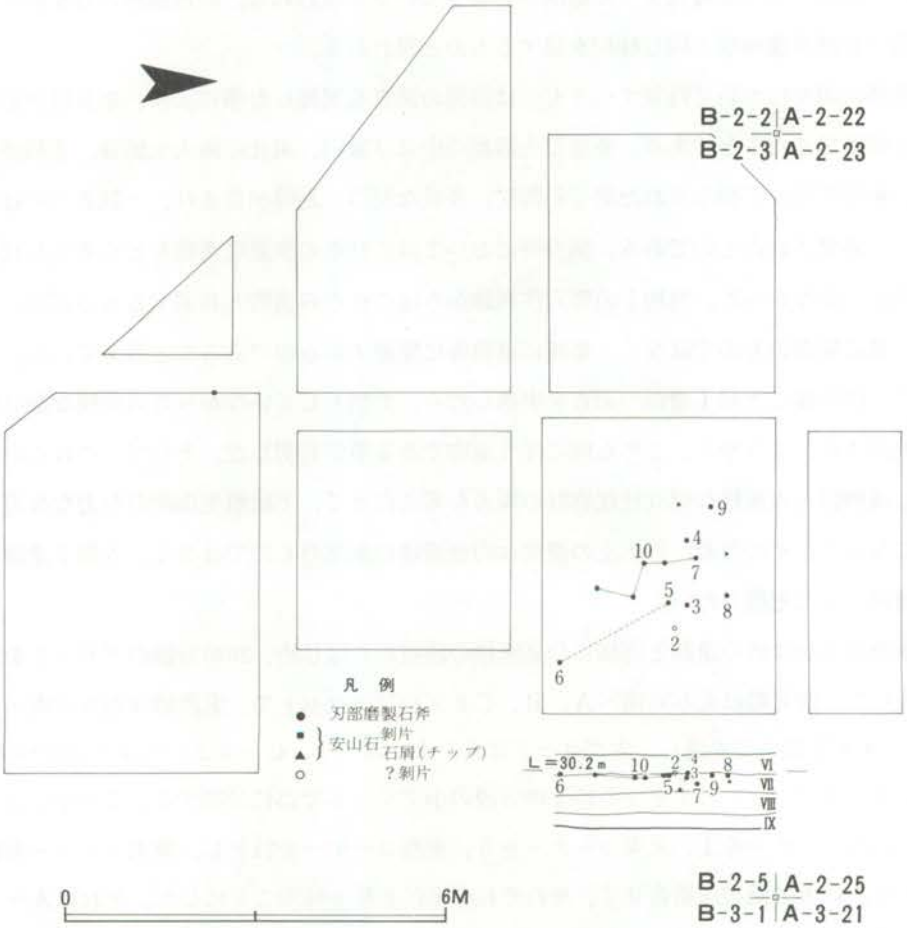
Ｃ－６地区には多量な遺物包含層が厚くある事が判明したため、この地区を全面掘り下げる事にした。なお、遺物は廃棄されたものであるため、遺物の出土状況図は作成せず、層位ごとに小グリッド別に取り上げた。

第３節　検出した遺構と遺物

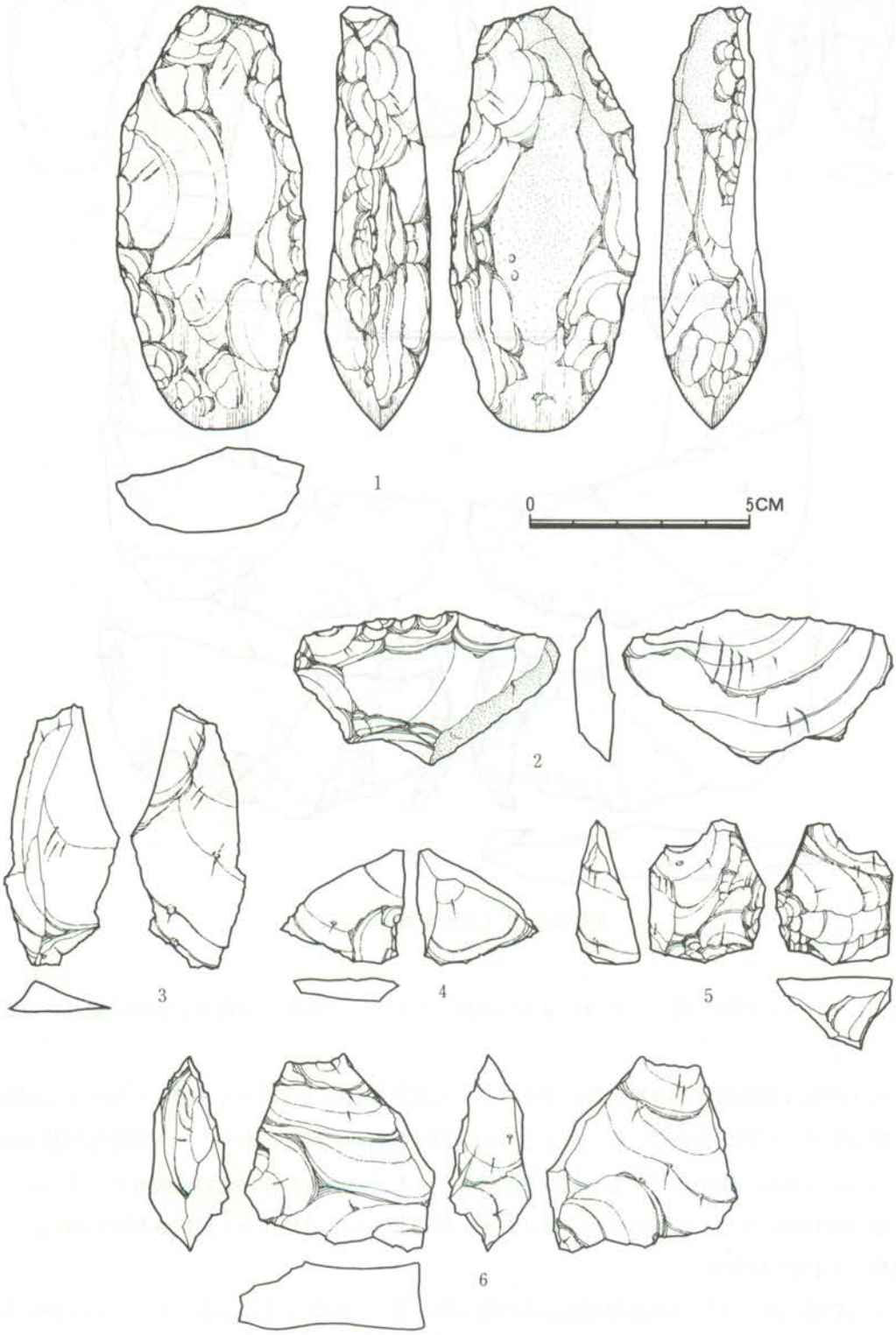
Ａ．先土器土代

位置・層位・出土状況（第174図）

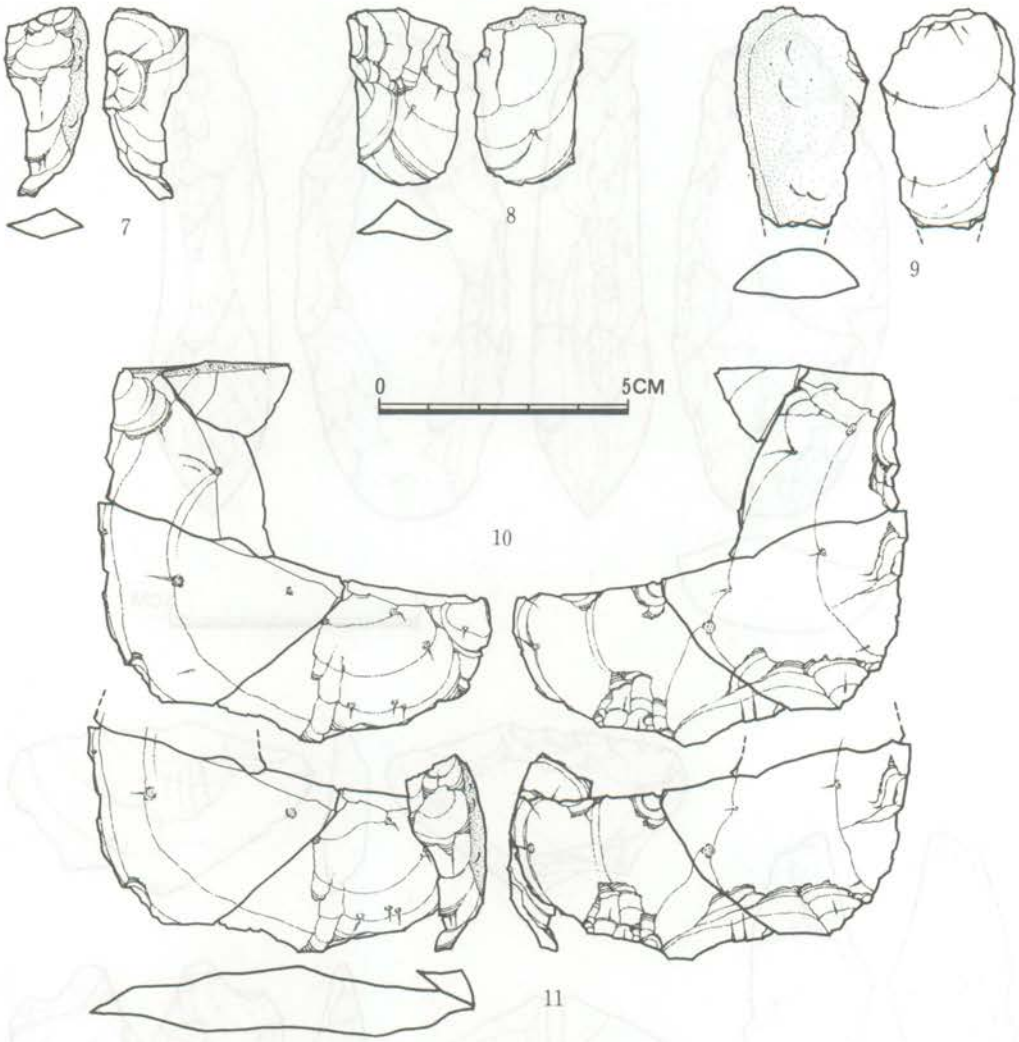
竜角寺古墳群が広がる台地西端に位置し、印旛沼に面した標高約31mの台地突出部平坦面に



第174図　先土器時代遺物出土状況図（1/120）



第175図　出土石器実測図 ①（2/3）



第176図　出土石器実測図 ②（2/3）

立地している。利根川面からの浅い支谷を北位にもつが、谷面からは最深の台地先端部に位置している。

出土層位は第Ⅶ層（第Ⅱ黒色帯）であるが、上層の第Ⅵ層（丹沢パミス層）と接する上部面に特に集中して検出されている。出土した石器類は数量的に稀少であり、やや散逸な状態ではあるが約３m内に集中している。調査の契機となった刃部磨製石斧は先の石器群からかなりの距離（約12m）をおいて単独で出土しており、周辺部からの遺物は全く検出されていない。

遺物（第175～176図）

刃部磨製石斧（１）は調査現場施設を構築の際に出土、採集されたものである。出土層は第Ⅵ層下部からⅦ層上面部位であることが確認されている。石材は流紋岩を用いており、県内の類例に共通する石材である。扁平な円礫片を素材とし、片面に自然を残すが、両面ともに周辺

部に入念な打調を加えて整形されている。先端は両面からの研磨によって鋭利な刃部を作り出している。長さ9.5cm、幅4.3cm、やや小形ではあるが重厚な形状を持つものである。

集中個所の石器群（２～11）は総数14点である。剝片12点、石屑２点。石材は安山岩を用いているが、剝片の１点（２）に砂岩(?)がみられる。剝片類として図示した中には石核片と思われるもの（５・６）等があるが、類推し得る剝片類を欠くことから断定は出来ない。第176図に示した剝片類は、片面、打面部に自然面を残しており、調整段階での剝片類と思われる。接合資料（10）は一部を欠失しているが、一側に自然面を残した小剝片が接合（11）している。大形の剝片に対して周辺部への打調を加えたものであろうか。

近年県内においても当該層位からの石器群の出土例が増加し、下総台地のほぼ全域に確認されている。しかし、数遺跡例を除くと資料の稀少させ、明確な石器類を伴出していないことなどから、当時期の石器群にはその内容に不明確な点が残されている。

本例においても単独出土ではあるが刃部磨製石斧を特徴とするとはいえ、これに伴う明瞭な石器類は皆無であり、さらに資料の稀少さは、その内容を知る上で困難なものとしている。しかしながら、出土層位を確認された刃部磨製石斧と他の石器群を共存するものとし、その出土層位であるⅥ層下部からⅦ層上部に位置する一群の資料であることを提示しておく。編年的位置としては、いわゆる Phase Ⅰ の後半期（小田編年・1977）に属するものであろう。

第８表　向台遺跡出土先土器時代石器一覧表

遺物番号	類　別	石　質	山土層	標　高	備　考	挿図番号
0001	剝　片	安山岩	Ⅶ・上	29.951	一部両面に加工、両端は欠損か、(石核？)	第175図６
0002	〃	〃	〃	29.932	一部に自然面	第176図10
0003	〃	〃	〃	29.880	接合＋0011	
0004	〃	〃	〃	29.888		
0005	〃	〃	〃	29.968	一部に自然面	
0006	〃	〃	〃	29.976	0001に類似・一端欠損（石核？）	第175図５
0007	剝　片	?	〃	30.002	一側に自然面、表面に粗い剝離	第175図２
0008	〃	〃	〃	29.858		第175図３
0009	〃	〃	〃	29.937		第176図８
0010	石屑(チップ)	〃	〃	29.818		
0011	剝　片	〃	Ⅶ・中	29.800	片側に自然面、0002～0005に接合	第176図７
0012	〃	〃	Ⅶ・上	29.963		第176図４
0013	石屑(チップ)	〃	Ⅶ・下	29.685		
0014	剝　片	〃	Ⅶ・上	29.934	表面は自然面	第176図９
0015	刃部磨製石斧	緑泥片岩？	Ⅵ～Ⅶ		調査現場施設構築の際に出土・採集、状況からⅥ～Ⅶ層	第175図１

B．縄文時代

第Ⅶ群土器（第177図　1～15）

1類土器（1～7）

堀之内式に比定されるものを本類とした。

1は斜縄文地に半截竹管による沈線文が施されている。

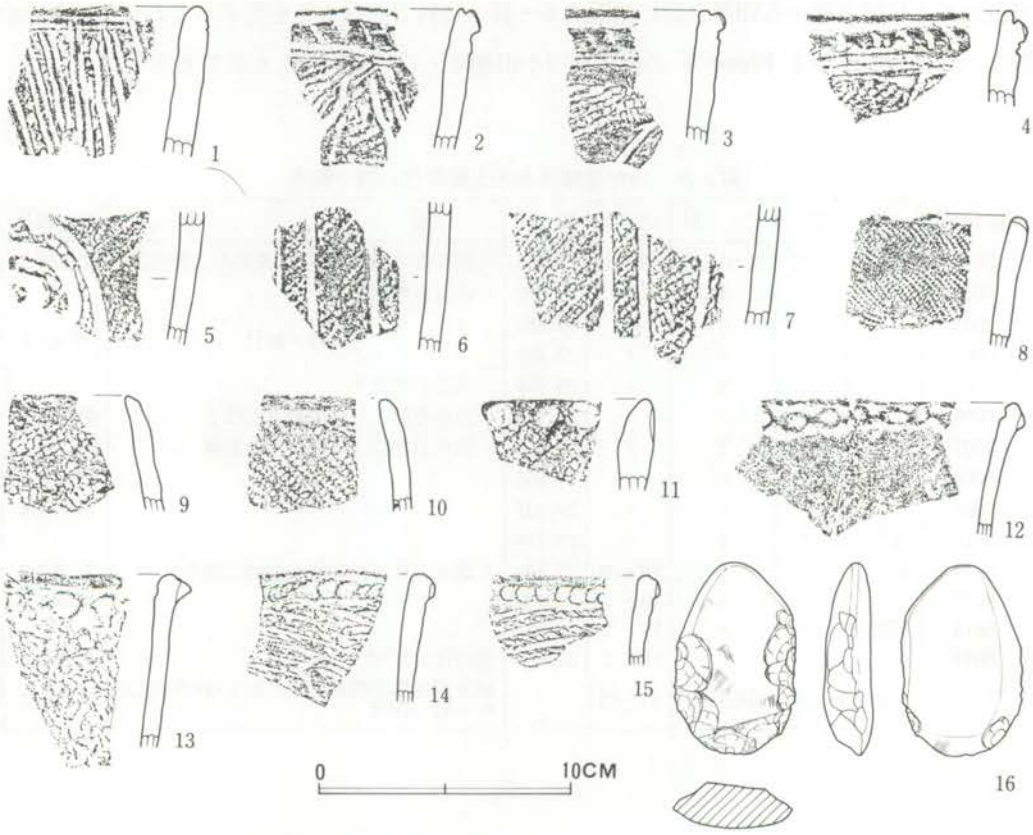
2～4は同一個体である。口唇部には、刻み目を呈する隆線が貼付されている。胴部は、斜縄文地に半截竹管による沈線文が施されている。

5～7は斜縄文地に沈線文が施されている。5は曲線的に、6・7は平行沈線が縦位に施されている。

2類土器（11～15）

加曽利B式に比定されるものを本類とした。

11は口唇にそって指頭圧痕文が施されている。それ以下は単節ＬＲの斜縄文が施されている。



第177図　グリッド出土土器拓影図・石器実測図（1/3）

12～15は口唇に沿って指頭圧痕の施された隆線がめぐる口縁部片である。胴部文様は12、13が粗雑な縄文で、14・15は縄文地に斜位の条線文が施されている。

３類土器（８～10）

型式不明のものを本類とした。

８～10は斜縄文が施されている口縁部片である。８は細かい斜縄文である。

石器（16）

16は当跡から出土した唯一の石器である。楕円形の礫に加工を施した礫石斧である。調整剝離は主に片面両側縁に施され、他は自然面を多く残している。刃部は片刃の形に作出され、刃縁部寄りの刃面に剝離の後研磨が加えられ、刃部磨製石斧としている。石材は玄武岩で器長9.8cm、器幅4.8cmを測る。

Ｃ．古墳・飛鳥・奈良・平安時代

ｉ．集落跡

ＳＩ１（第178～181図、ＰＬ77－２）

調査区平坦面の南側に位置し、Ｃ３グリッドに所在する。ＳＩ２を切って構築されている。規模は4.5m×4.5mで正方形を呈し、主軸はＮ－65°－Ｗである。壁は30cm程残っており、立ち上がりはやや外反ぎみである。壁溝は北西コーナー部分のみにある。幅は西辺部が10cm、北辺部が広く20cmで、深さは５cm前後である。柱穴は４本が検出され、等間隔に並んでいる。規模は平均して50cm前後×40cm前後の楕円形を呈し、深さは50cm前後である。P_1は浅く35cmである。床面はハードローム面を利用しているため、堅緻である。

カマドは西辺の中央に構築されている。規模は全長110cm、幅90cmである。袖は砂質粘土を15～20cm程積み上げている。天井部は完全に崩落していた。掘り方は幅40cm、壁外に20cmほど三角形に掘り込んだもので、立ち上り傾斜は70°である。燃焼部の床掘り込みはほとんど行なわれていない。燃焼部には焼土の量は多くない。

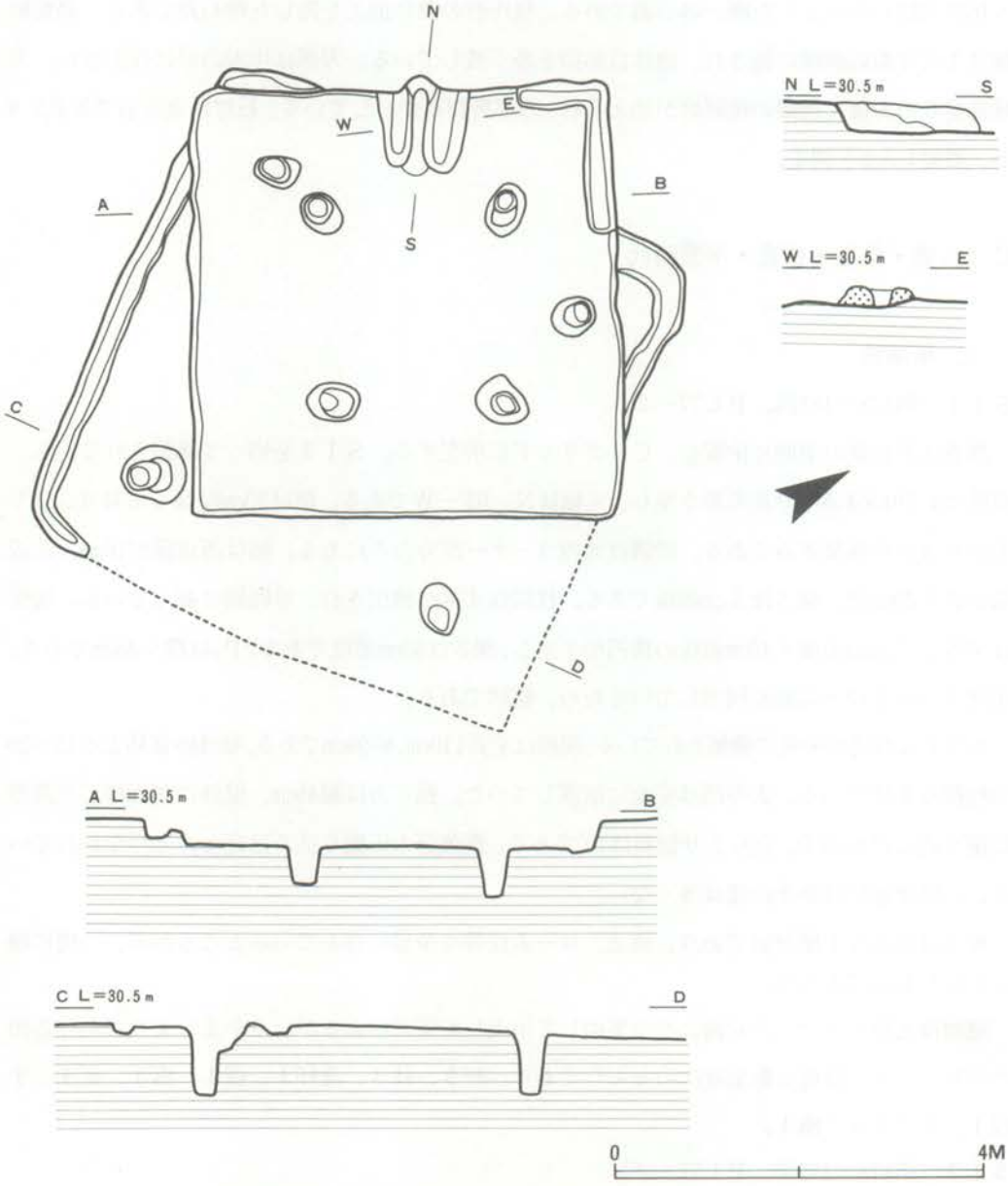
覆土は単純な１層だけであり、焼土、ローム粒等を多量に含んでいるところから、一度に埋められたものであろう。

遺物は土器がカマドの対面にやや集中して出土した傾向があるが、ややまとまりにかける出土状態である。器種と数量は次のとおりである。杯９、鉢３、高杯１、壺１、甑１、甕４、手捏１、ミニチュア甑１。

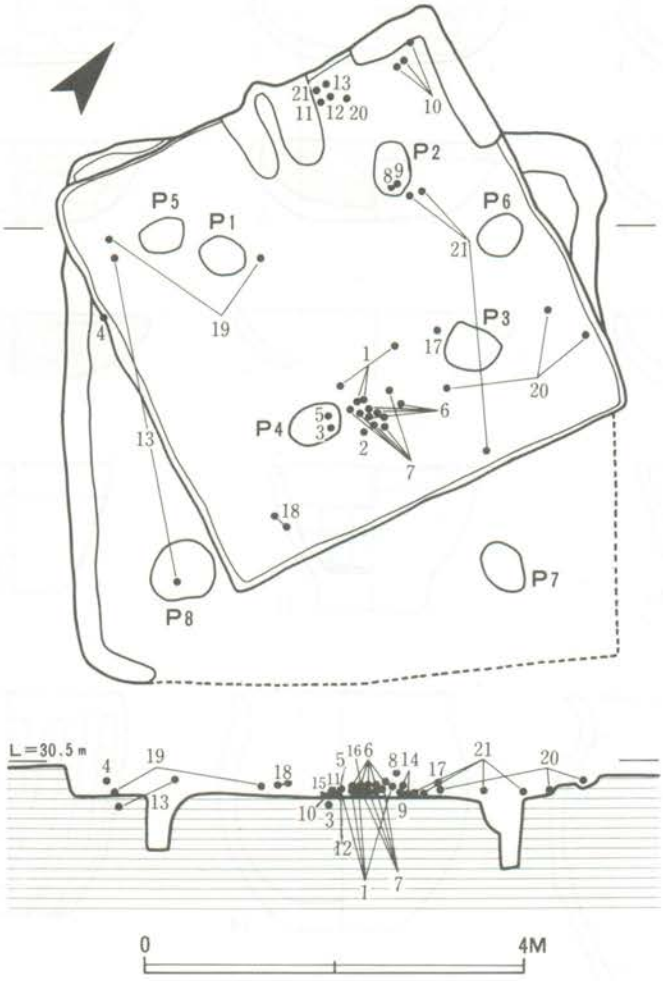
ＳＩ２（第178～179図、ＰＬ77－２）

ＳＩ１にすっぽり切られ、東側は攪乱を激しく受けており、全容を知る事ができない。残存している範囲で推定すると、規模は5.6×5.6mの正方形で、主軸はＮ－40°－Ｗである。壁は西

辺と北東コーナー部分しか残っておらず、高さも溝底から15cm程しかない。壁溝も壁と同様の部分しか残存していないが、もとは全周していたと思われる。北東コーナーは幅が広く40cmを測るが、西辺は狭く、30cm前後である。深さは２～５cm程のもので、しっかりしたものではない。柱穴は４本検出され、3.5mの等間隔で並んでいる。規模はP_8が66×56cmで、深さ80cmと他より１回り大きいが、他のろ穴は50cm内外で深さ60cm前後のものである。床面はハードローム



第178図　SI１・SI２実測図（1/80）



第179図　SI1・SI2遺物出土状況図（1/80）

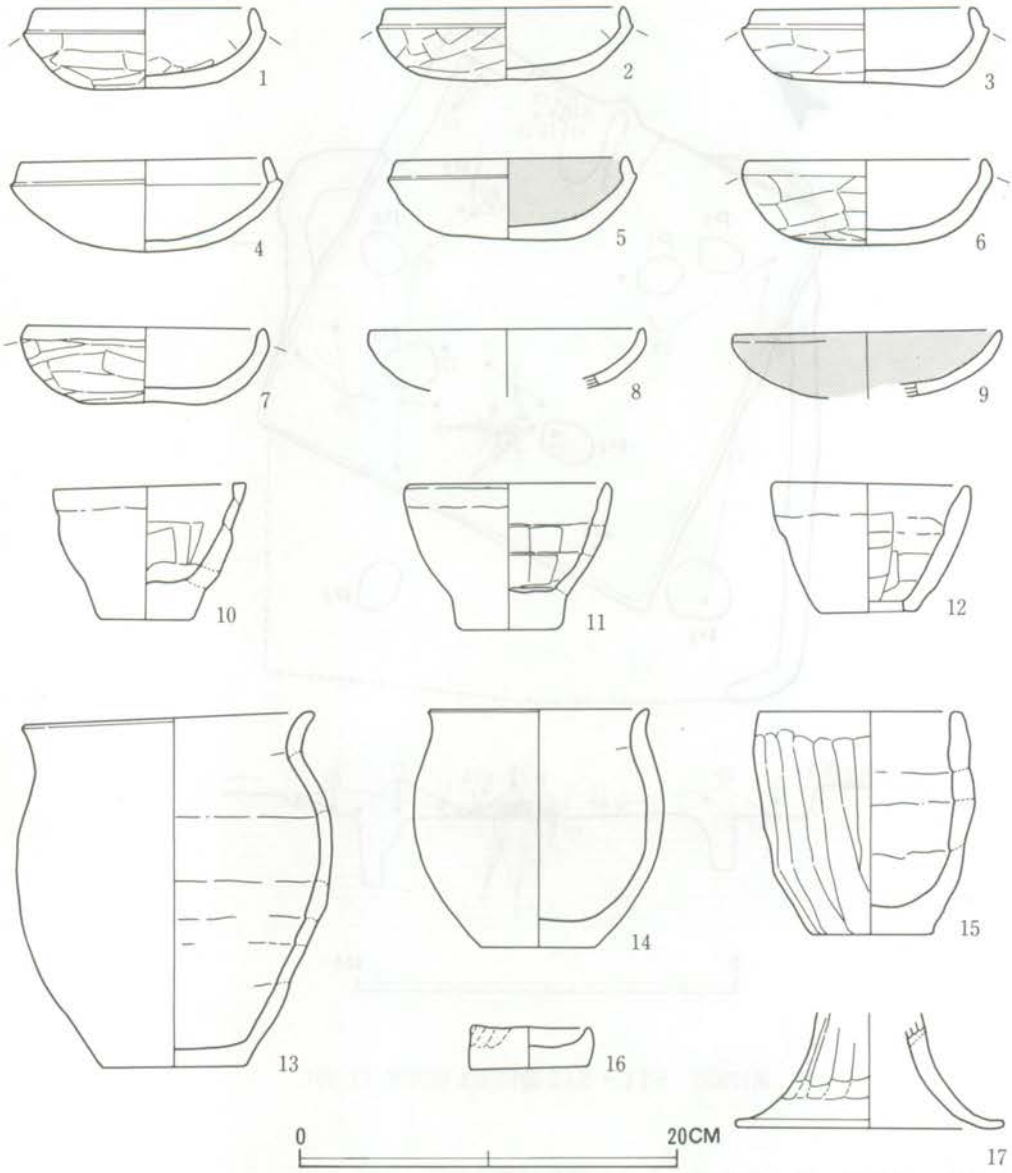
面を使用して良好に踏み固めているが、凹凸が激しい。

カマドはおそらく北辺部中央に存在したと思われるが、ＳＩ１に切られてしまい、痕跡すら検出できなかった。

覆土は単純な１層だけであり、おそらくＳＩ１構築の際に埋められたのであろう。

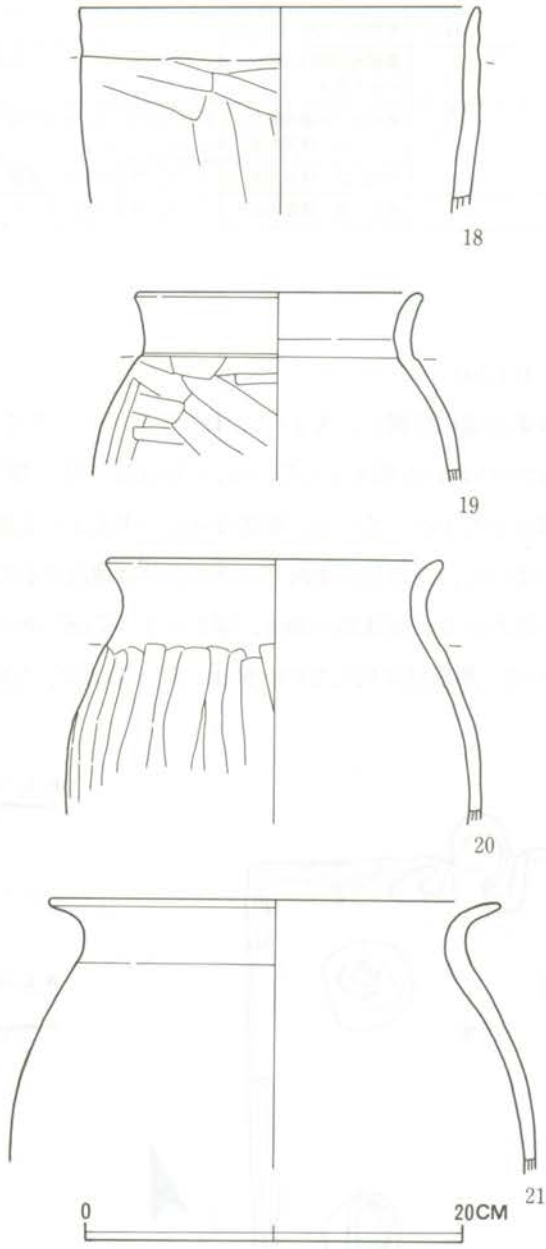
遺物は土器片が若干出土しただけである。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ１－１	杯	11.5 × 4.2 ×	黄褐色、良好、体部内外面ヘラケズリ	完形
－２	杯	12.6 × 3.8 ×	黄褐色、良好、体部内外面ヘラケズリ	完形
－３	杯	10.8 × 4 ×	黄褐色、体部内外面ヘラケズリ	完形
－４	杯	13.1 × 4.6 ×	暗褐色、良好、体部内外面ヘラミガキ	完形



第180図　SI１出土土器実測図 ①（1/4）

－5	杯	12.3 × 4.1 ×	黄褐色、良好、体部外面ナデ、体部内面へラミガキ	完形、黒色処理
－6	杯	12.5 × 4.3 ×	黄褐色、良好、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ調整	完形
－7	杯	12.4 × 4 ×	淡黄褐色、良好、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ調整	
－8	杯	14.4 × ×	茶褐色、良好、へラケズリの後全面へラミガキ	⅙
－9	杯	14.5 × ×	黒褐色、良好、全面へラミガキ	⅙、黒色処理
－10	鉢	7.1 × 7 × 5	黄褐色、不良、外面ナデ調整、内面へラケズリ	完形
－11	鉢	10.5 × 7.4 × 5	暗褐色、不良、外面ナデ調整、内面へラケズリ木葉痕口底部に認められる	½



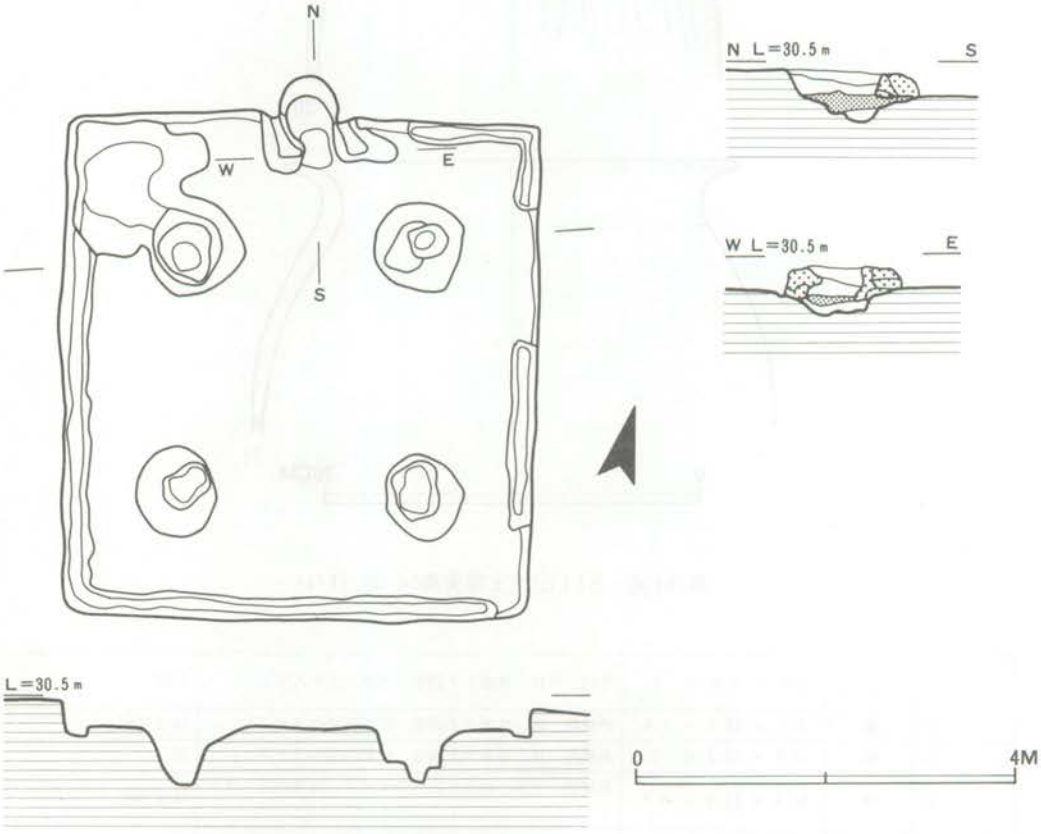
第181図　SI1出土土器実測図 ②（1/4）

−12	甑 ミニチュア	1.0 × 6.6 × 5	黒色、不良、外面ナデ調整、内面ヘラケズリ	完形
−13	甕	1.5 × 18.3 × 7.6	黄褐色、良、外面ナデ調整、体部内面ヘラケズリ	ほぼ完形
−14	甕	11.7 × 12.2 × 6	黄褐色、良、外面ナデ調整、体部内面ヘラケズリ	⅔
−15	鉢	10.5 × 11.4 × 6.3	黄褐色、不良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	ほぼ完形
−16	手　捏	6.2 × 2.3 × 6.3	黄褐色、良、内面〜口縁部ユビオサエ、その他はナデ調整	ほぼ完形

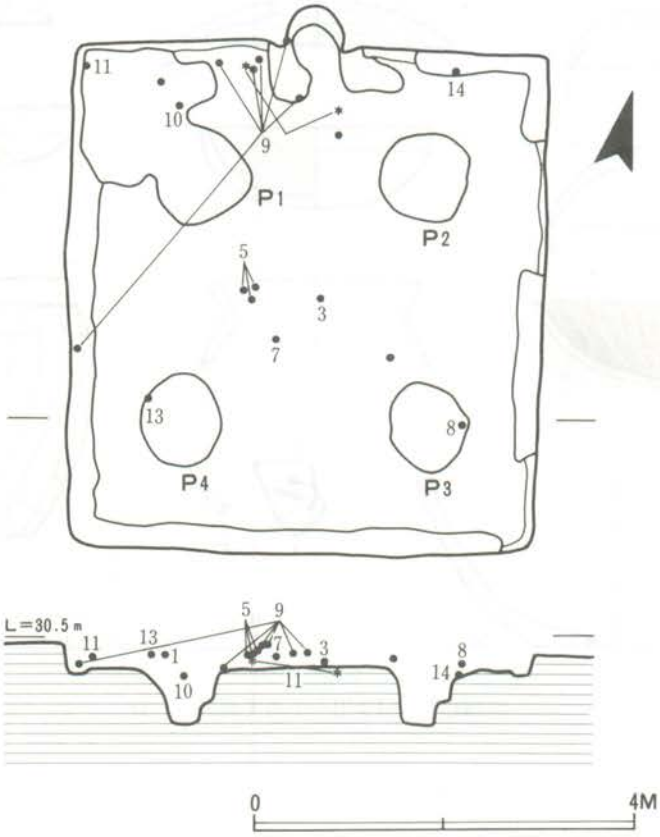
−17	高　杯	×	× 14.2	黄褐色、良好、内外面ともにヘラケズリ	脚部¼のみ
−18	甑	20.4 ×	×	黄褐色(内面暗褐色)、良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	体部上半⅕
−19	壺	15 ×	×	黄褐色（外面黒斑有り）長石・雲母、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	胴上半⅕
−20	壺	17.4 ×	×	黒色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴部下半欠失
−21	壺	23.6 ×	×	黒色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	

ＳＩ３（第182～185図、ＰＬ78）

竪穴住居跡群の中では東北端に位置し、Ａ２・３、Ｂ２、３グリッドにまたがって所在する。規模は5.3×５ｍの南北にやや長い方形を呈している。主軸はＮ−13°−Ｗである。壁は溝底から20～40cmあり、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は東辺の中央より北側部分とコーナー部分にないだけで、他は巡っている。ただし、北西コーナー部分は攪乱されているためなんともいえないが、巡っていたと思われる。幅は25～30cm、深さは５～７cmである。柱穴は４本検出され、2.5m等間で並んでいる。規模は平均して90×90cm、深さ55cmで、大形の掘方で、みな２段



第182図　ＳＩ３実測図（1/80）



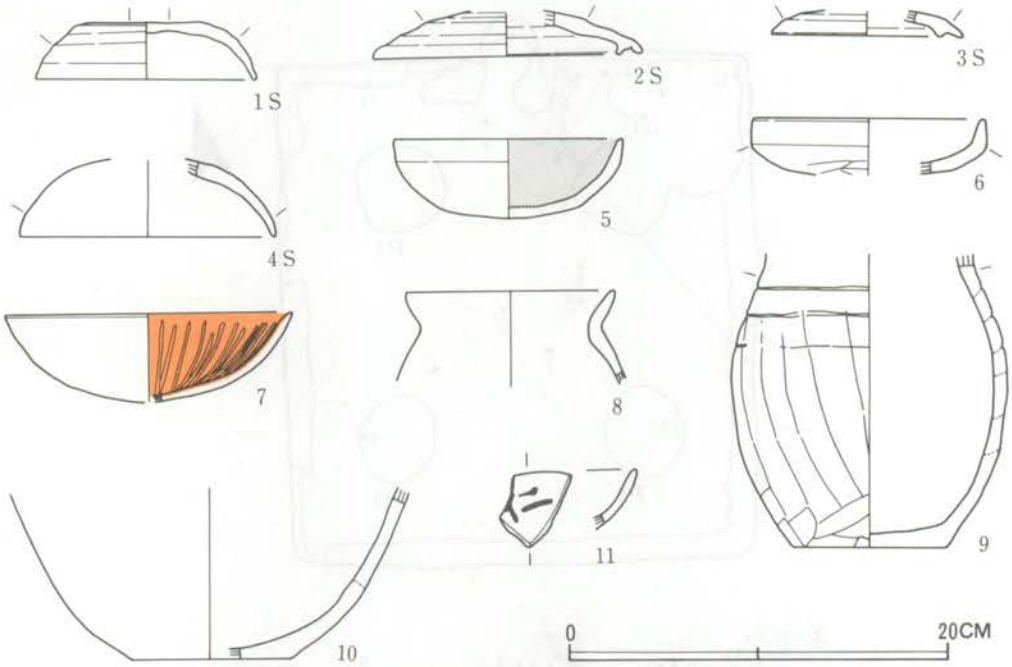
第183図　ＳＩ３遺物出土状況図（1/80）

掘りをしている。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。

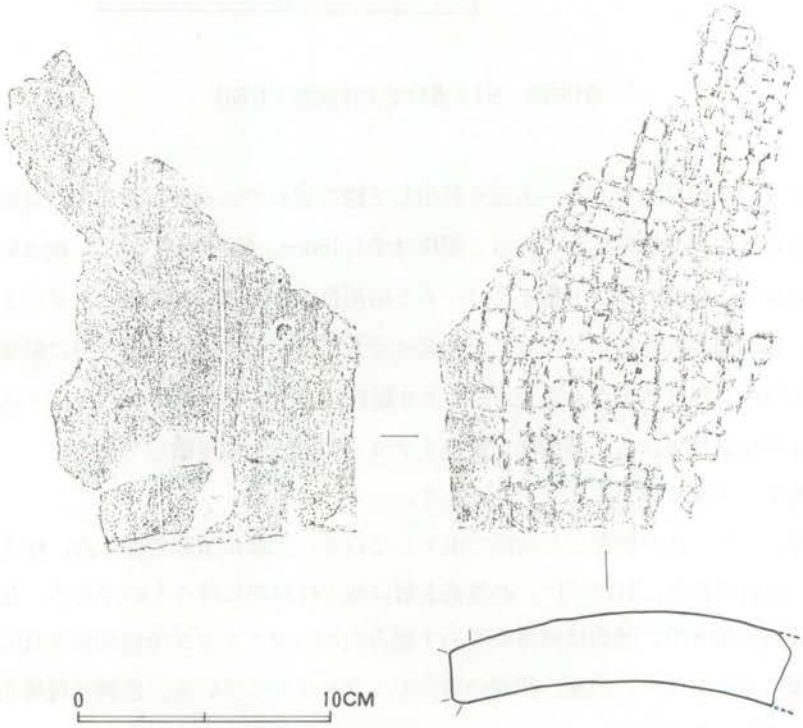
カマドは北辺の中央に構築されている。規模は全長160cm、幅140cmである。袖は砂質粘土を主体にしているが、東側の袖は一番下にロームと暗褐色土をまぜて基礎とし、その上に砂質粘土をのせて、20cm程の高さにしている。天井部は完全に崩落していた。掘り方は幅60cm、壁外に40cmほど半円形に掘り込んだもので、立ち上り傾斜は60°である。燃焼部の床掘り込みは最深25cmで、摺鉢状を呈している。燃焼部には焼土ブロックが20cm程堆積していた。

覆土は単純で、一度に埋められたものである。

遺物は土器、土玉、瓦が散在した状態で出土している。土器は須恵器蓋４点、杯３、甕３がＳＩ３に伴う土器であり、11の「仁」の墨書土器は掘立柱建物に伴うものである。瓦は平瓦の破片で凸面は格子叩きで、凹面は模骨痕を消す縦方向のヘラケズリが全面に施されている。側縁は糸切り後にヘラケズリ、凸面、凹面の端部もヘラケズリしている。色調は黄褐色で、焼成はやや甘い。厚さは３cmある。



第184図　SI３出土土器実測図（1/4）



第185図　SI３出土瓦実測図（1/3）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ３－１	蓋 (S)	11.5 × 4 ×	灰褐色、堅緻、回転ヘラ切り－Ｒ－体部上半～天井部周辺回転ヘラケズリ	½
－２	蓋 (S)	14.2 × ×	淡灰色、良好、？－Ｌ－天井部回転ヘラケズリ	⅙
－３	蓋 (S)	10 × ×	灰黒色、雲母、不良、？－Ｒ－天井部回転ヘラケズリ	⅙
－４	蓋 (S)	13.4 × ×	灰褐色、長石、良好、？－Ｌ－天井部回転ヘラケズリ	⅓
－５	杯	12.2 × 4.1 ×	暗黄褐色、良好、体部内外面とも入念なヘラミガキ	½、黒色処理
－６	杯	12 × ×	黒色、良好、体部外面ヘラケズリ・体部内面放射状のヘラミガキ	⅙
－７	杯	15 × 4.5 ×	暗黄褐色、良好、全面ヘラミガキ内面に放射状暗文	⅓、赤彩
－８	甕	11 × ×	黒色(内面淡赤褐色)、雲母、良好、頸部以下内外面ともナデ調整	⅓
－９	甕	× × 8	暗赤褐色(黒斑有り)、良好、体部外面～底部ヘラケズリ、内面ナデ調整	口縁部欠失⅓
－10	甕	× × 8.2	茶褐色、長石・雲母、良好、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリの後ナデ調整	胴下部⅓
－11	杯	× ×	赤褐色、良好、内外面ともヘラミガキ	口縁部破片、内面に「仁」の墨書

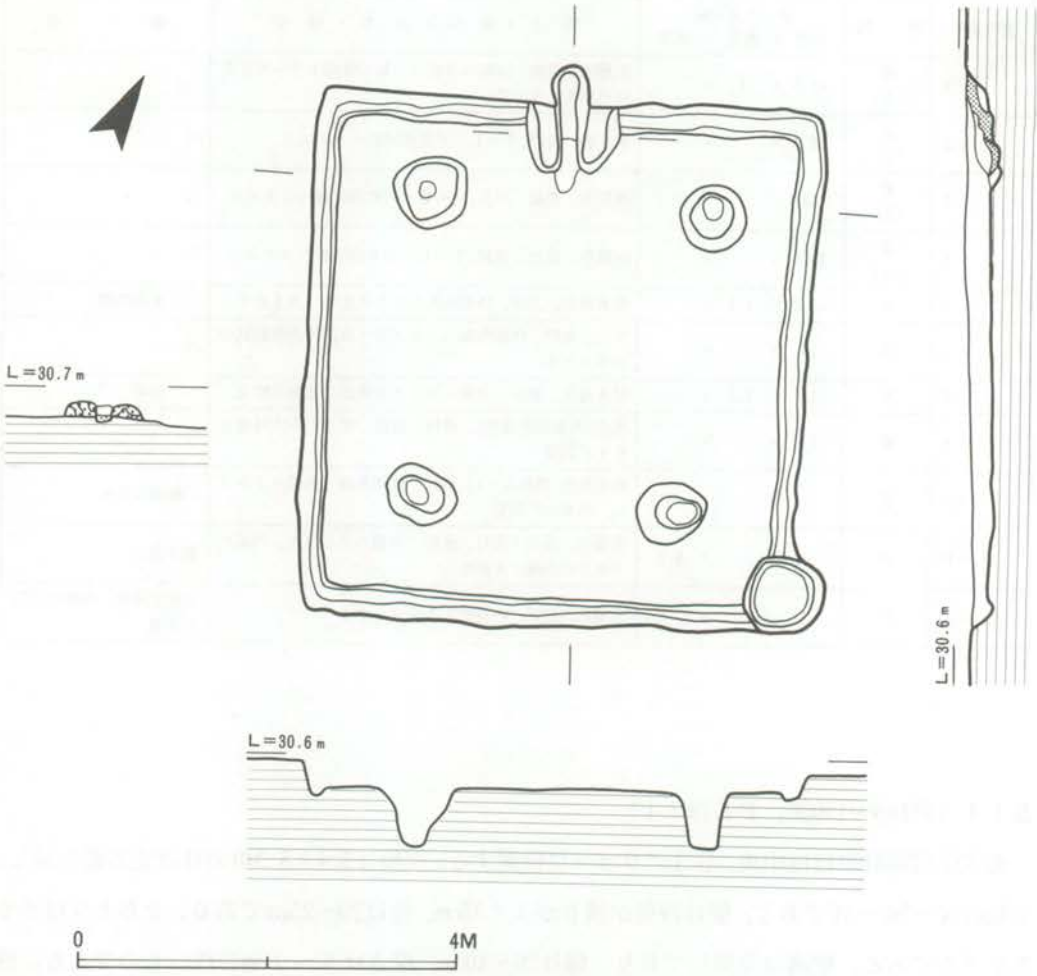
ＳＩ４（第186～190図、ＰＬ79－１）

竪穴住居跡群のほぼ中央、Ｂ３グリッドに位置する。規模は5.4×5.3mのほぼ正方形を呈し、主軸はＮ－26°－Ｗである。壁は西壁が残りがよく35cm、他は20～25cmである。立ち上りはやや外反ぎみである。壁溝は全周しており、幅は20～40cm、深さは５～７cmの浅いものである。柱穴は４本検出され、ほぼ３ｍ等間で並んでいる。規模は平均して70×60cm、深さ50cm前後である。床面はハードローム面を踏み固めているために非常に堅緻である。

カマドは北辺の中央に構築されている。規模は全長110cm、幅100cmである。袖は砂質粘土とロームを互層にしたもので、15cm程積み上げている。天井部は完全に崩落している。掘り方は幅40cm、壁外に40cmほど卵形に掘り込んでおり、立ち上り傾斜は40°である。燃焼部の床掘り込みは８cmぐらいで、楕円形に掘られており、そこに焼土が堆積している。

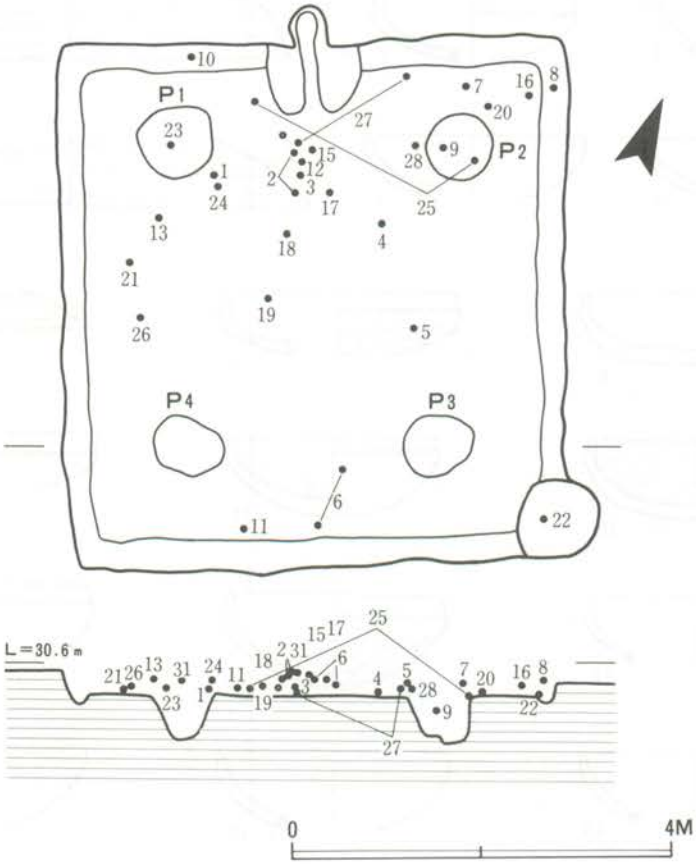
覆土は単純な単一層で一度に埋められていることをよく示している。

遺物は多量な土器と埴輪片がある。土器はカマド前面に集中している傾向を示しているが、全体的には北半分によっている。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋３、杯15、椀２、甕５、甑、壺、皿各１である。埴輪は円筒埴輪の基底部破片である。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。外面は縦ハケ調整で、内面は縦指ナデを施している。基底部で厚さ2.2cmであるが、その上は1.4cmである。



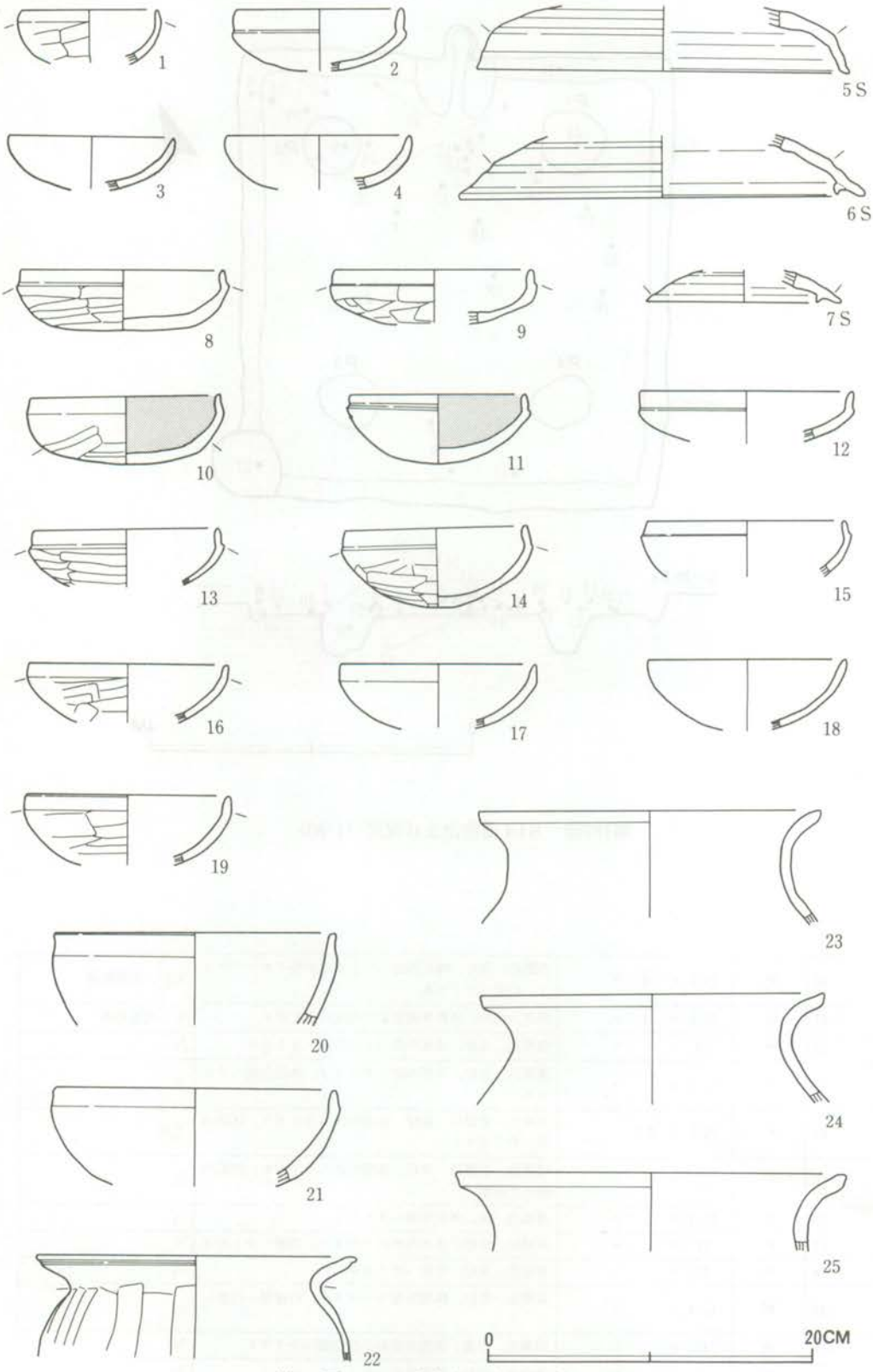
第186図　SI4 実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI4－1	杯	8.2 × ×	赤褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	1/3
－2	杯	11.2 × ×	淡黄褐色、良好、全面ヘラミガキ	1/2
－3	杯	10 × ×	淡黄褐色、良好、全面ヘラミガキ	1/3
－4	杯	11.2 × ×	淡黄褐色、良好、全面ヘラミガキ	1/4
－5	蓋(S)	23 × ×	灰黒色、長石・雲母、良好、？－R－天井部回転ヘラケズリ・天井部内面ナデ調整	1/8
－6	蓋(S)	25 × ×	灰黒色、長石、良好、？－R－天井部回転ヘラケズリ・天井部内面ナデ調整	1/6
－7	蓋(S)	12 × ×	灰褐色、良石、良好、？－R－天井部回転ヘラケズリ	1/10
－8	杯	12.4 × 3.6 ×	暗赤褐色、不良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	1/2
－9	杯	12 × ×	黄褐色(黒斑有り)、不良、体部外面ヘラケズリ、内面底部ナデ調整	1/4

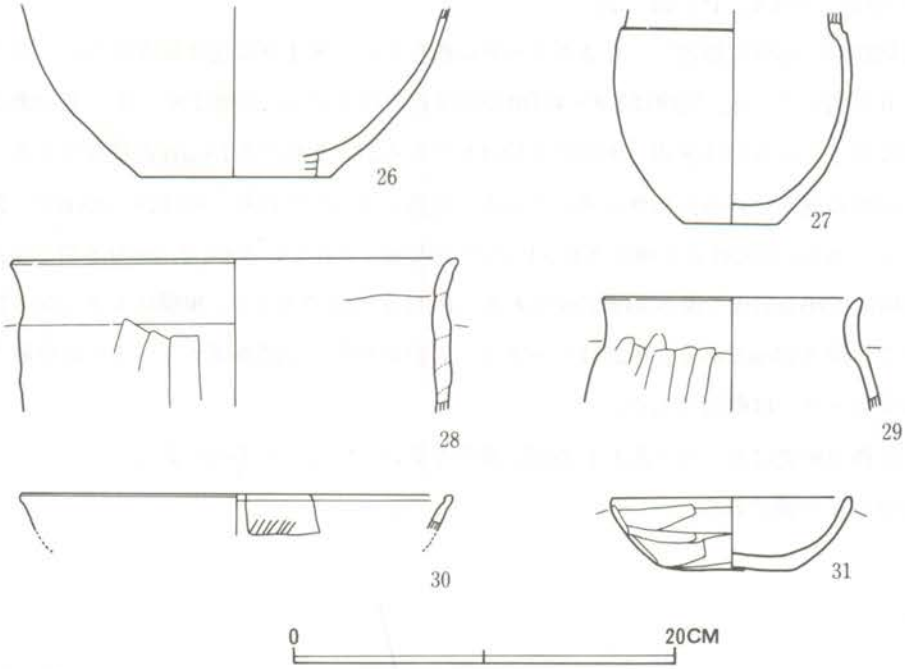


第187図　ＳＩ４遺物出土状況図（1/80）

−10	杯	11.5 × 4 ×	赤褐色、良好、体部外面へラミガキの後下半へラケズリ、内面へラミガキ	完形、黒色処理
−11	杯	10.8 × 4 ×	黒色、良好、体部外面および内面へラミガキ	⅚、黒色処理
−12	杯	13 × ×	黄褐色、良好、体部外面および内面へラミガキ	⅙
−13	杯	11.2 × ×	黄褐色、良好、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	¼
−14	杯	11.2 × 4.8 ×	赤褐色、金雲母、良好、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	完形
−15	杯	12 × ×	暗褐色、金雲母、良好、体部外面へラミガキ、体部内面ナデ調整	⅕
−16	杯	12.1 × ×	黄褐色、良、体部外面へラケズリ	⅕
−17	杯	12 × ×	黄褐色、良好、体部外面へラケズリ、内面へラミガキ	⅙
−18	杯	12 × ×	黄褐色、良好、全面へラミガキ	⅕
−19	杯	12.4 × ×	黄褐色、良好、体部外面へラケズリ、口縁部〜内面へラミガキ	⅙
−20	椀	17 × ×	明褐色、不良、体部外面および内面へラミガキ	⅕
−21	椀	17 × ×	黄褐色、良好、体部外面へラミガキ	⅙

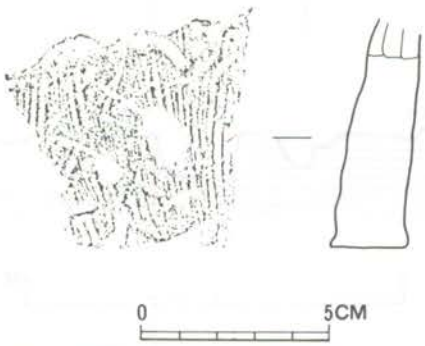


第188図　SI４出土土器実測図 ①（1/4）



第189図　ＳＩ４出土土器実測図 ②（1/4）

−22	甕	19.4 ×	×	暗赤褐色、良好、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半、⅓
−23	甕	21 ×	×	黄褐色、長石・雲母、良、全面ナデ調整	胴部以下欠失、¾
−24	甕	21 ×	×	黄褐色、長石・雲母、良、体部内外面ともナデ調整	胴部以下欠失、¼
−25	甕	24 ×	×	淡黄褐色、長石・雲母、不良、頸部内外面ナデ調整	胴部以下欠失⅙
−26	甕	×	× 10.1	黄褐色、良、全面ナデ調整	⅓
−27	甕	×	×	黄褐色、良好、体部内外面ナデ調整、底部外面へラケズリ	口縁部欠失、⅓
−28	甑	23 ×	×	黄褐色、不良、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	⅛
−29	壺	13.6 ×	×	黄褐色、良好、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ調整	⅓
−30	皿	(22.5) ×	×	赤褐色、良好、内外面へラミガキ、内面に斜放射状暗文	口縁部½



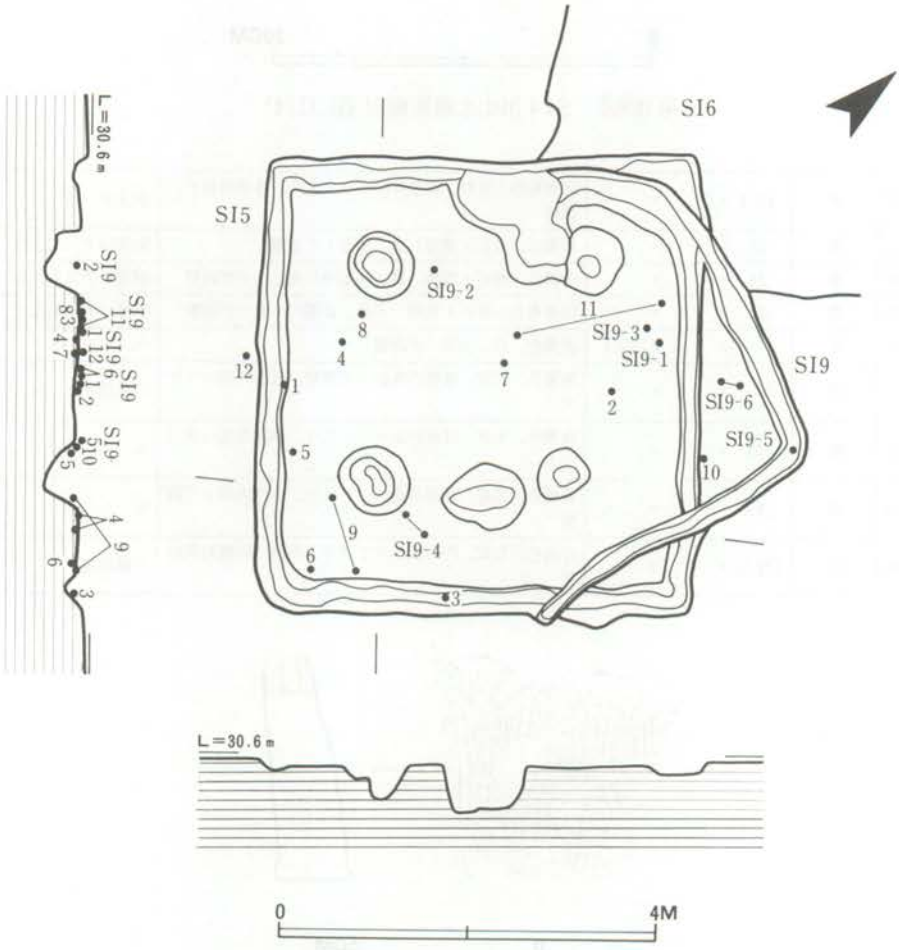
第190図　ＳＩ４出土埴輪実測図（1/2）

ＳＩ５（第191～193図、ＰＬ79－２）

竪穴住居跡群の南側に位置し、Ｃ３グリッドに所在する。ＳＩ９に北半部を切られ、南西部ではＳＩ６を切っている。規模は4.8×4.7mでほぼ正方形を呈し、主軸はＮ－41°－Ｅである。壁は良好に残っているのは南辺と東辺の半分ほどであるが、それでも15cm程の残存である。立ち上りは崩壊が進んでいるため外に開いている。壁溝は全周しており、幅は20～30cmで、深さは５cm前後である。柱穴は５本検出され、P_3がやや内側にずれているが、2.3mの等間で並んでいる。規模は径70cm前後で深さ30cm前後である。P_5は支柱穴であるが、規模は大きく50×70cmの楕円形で、深さ53cmである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻であるが、南東コーナーは軟弱である。

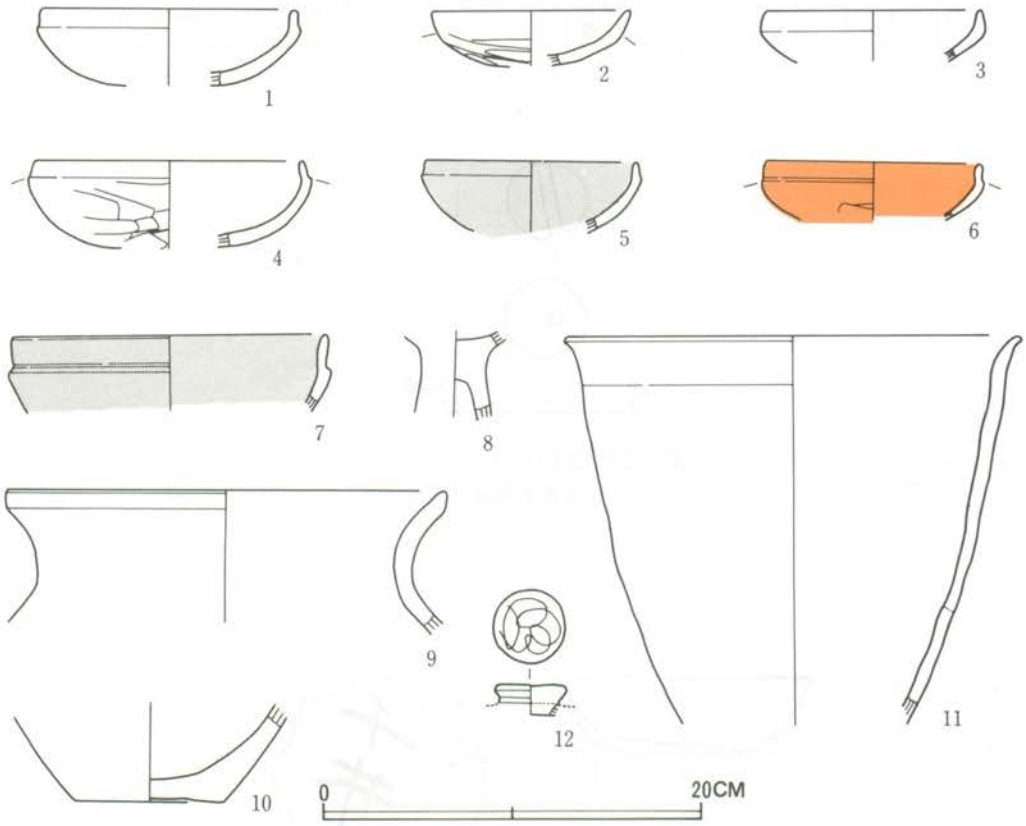
カマドは西辺中央にあったと思われるが、攪乱を受けているため不明である。

覆土は単一な土層である。



第191図　SI5・SI9実測図（1/80）

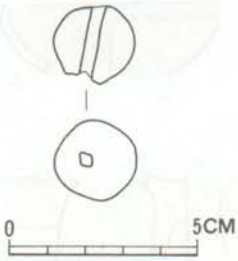
遺物は土器が散乱した状態で出土していた。器種と数量は次のとおりである。杯7、高杯1、甕2、甑1、蓋1である。蓋は紐の部分だけであるが、上面にラセン暗文を施しており、畿内産のように思われる。またこれは本住居跡に伴うものではない。



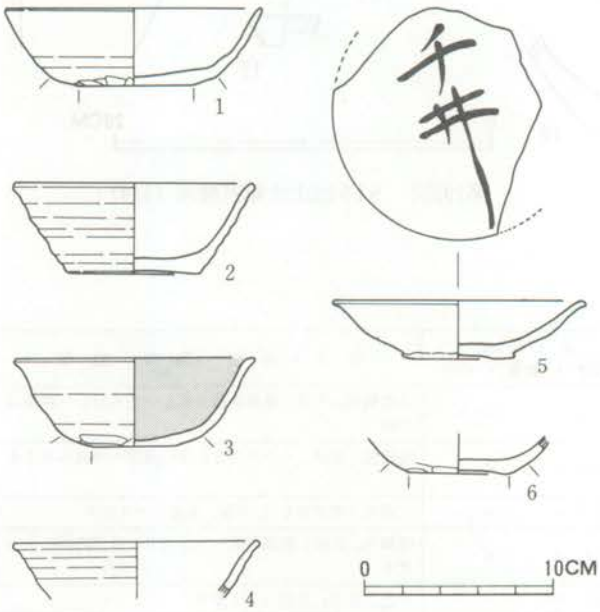
第192図　SI5出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI5－1	杯	13.2 ×　×	淡黄褐色、不良、器面剝離が著しいため詳しい調整は不明	¼
－2	杯	10.5 ×　×	暗褐色、良好、ヘラケズリの後口縁部～外面ヘラミガキ	⅙
－3	杯	11.2 ×　×	淡褐色（黒斑有り）、不良、全面ヘラミガキ	⅙
－4	杯	14 ×　×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	⅕
－5	杯	11 ×　×	黒色、良好、全面ヘラミガキ	⅙、黒色処理
－6	杯	11 ×　×	赤褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、口縁部～内面ヘラミガキ	⅕、赤彩

−7	杯	16.4 × ×	黒色、良好、全面ヘラミガキ	1/10、黒色処理
−8	高　杯	× ×	暗褐色、不良、杯内面・脚部外面ヘラミガキ・脚部内面ヘラケズリ	脚部のみ
−9	甕	22.8 × ×	淡褐色、長石・雲母、不良、口唇部を除きナデ調整	口縁部のみ、1/4
−10	甕	× × 8	暗褐色、長石・雲母、不良、外面ヘラケズリ、内面ナデ	底部のみ、1/4
−11	甑	23.8 × ×	淡赤褐色、良好、体部ヘラケズリの後内外面ともヘラミガキ	1/6
−12	蓋	× ×	茶褐色、良好、平端部ヘラミガキ、鈕上面平端部にラセン暗文	鈕部分のみ



第193図　SI5出土
土玉実測図（1/2）

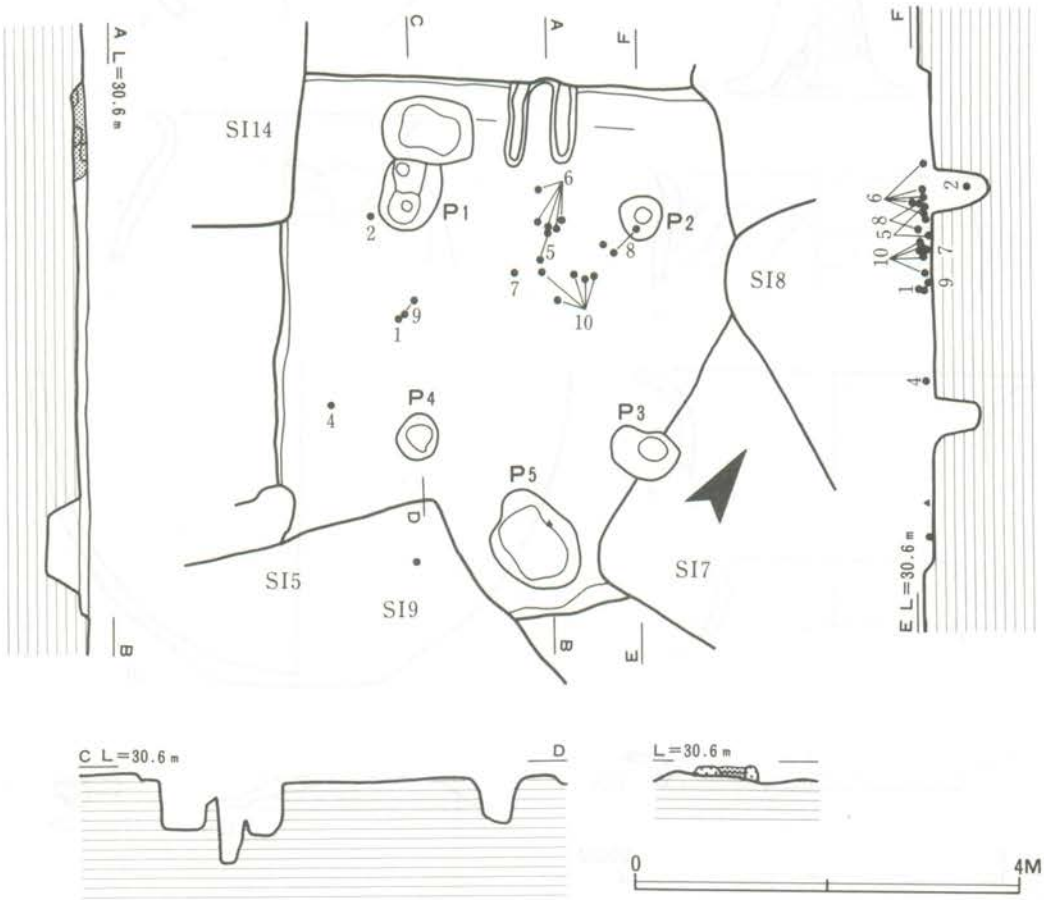


第194図　SI9出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ９－１	杯	13.4 × 3.9 × 6	黄褐色(黒斑有り)、良好、回転糸切り－Ｒ－底部周縁手持ちヘラケズリ	⅓
－２	杯	12.3 × 4.7 × 7	赤褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－無調整	⅓
－３	杯	12.3 × 4.8 × 4.4	黄褐色(内面黒色)、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下端手持ちヘラケズリ	⅓、黒色処理
－４	杯	12.6 × ×	淡黄褐色、良好、？－Ｌ－？	底部欠失⅙
－５	皿	13.3 × 2.9 × 5.9	淡黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－無調整	⅚、内面に「千井」の墨書
－６	杯	× × 5.2	暗褐色、不良、回転糸切り－Ｒ－体部下端手持ちヘラケズリ	口縁部欠失、½

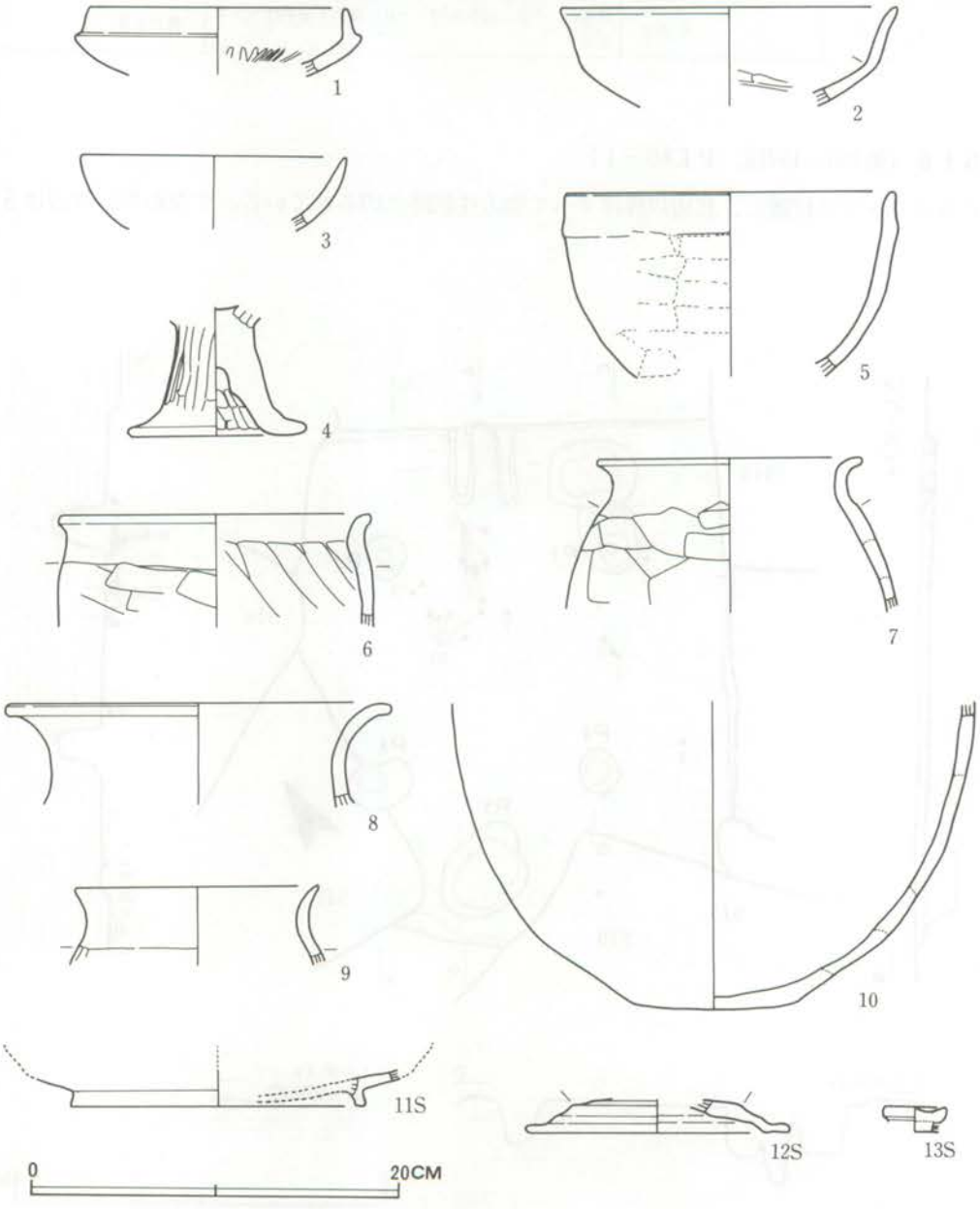
ＳＩ６（第195～197図、ＰＬ80－１）

Ｃ３グリッドに位置し、北辺以外はすべて他の住居跡に切られている。すなわち、東辺はＳ



第195図　ＳＩ６実測図（1/80）

Ｉ７、８に、南辺はＳＩ５に、西辺はＳＩ15にである。なお、その他に攪乱も多く受けている。規模は南北5.5mであるが、東西は不明であるが、おそらく同規模で正方形を呈するものになるであろう。主軸はＮ－32°－Ｗである。壁は北辺と西辺の半分、それに南辺のほんの一部が残っているにすぎない。10cm程の残存で、外に開きぎみである。壁溝はない。柱穴は５本検出され、P_1～P_4が主柱穴で、P_5は支柱穴である。主柱穴は2.5m等間で並び、規模は径50cm前後で、深



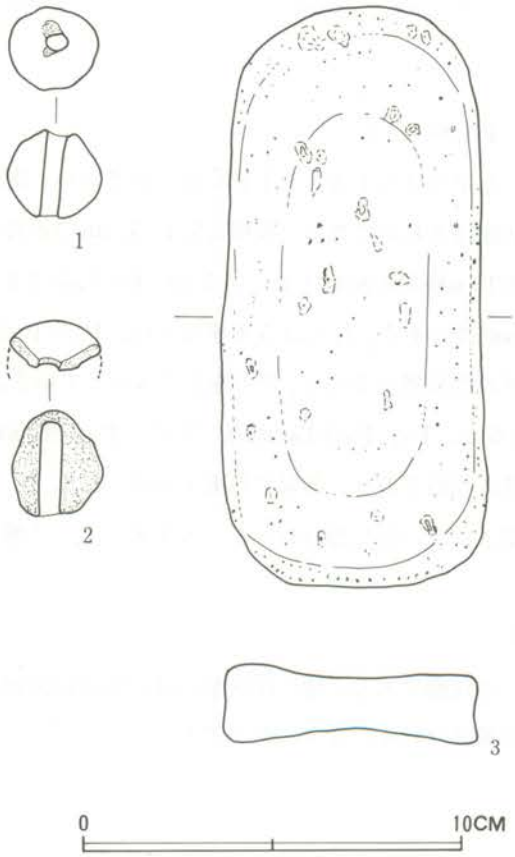
第196図　SI６出土土器実測図（1/4）

さは60cm前後である。ただし、P_1は建替えがあったようで一回り大きく、また、P_4は深さが82cmと深い。P_5は110×80cmと規模は大きいが、その割には深さが48cmと浅い。P_6は貯蔵穴であろう。P_1を切り、100×70cmの長方形で、深さは50cmである。床面はハードローム面を利用して、踏み固めているが、軟弱である。

カマドは北辺中央に構築されている。規模は全長90cm、幅75cmである。袖は砂質粘土と暗茶褐色土を混ぜたものを10cm程積み上げている。ただし、上面はだいぶ削平されているため天井部等の構造は不明である。掘り方の壁外への掘り込みはなく、立ち上り傾斜は70°である。燃焼部の床面掘り込みもなく、焼土も少ない。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器、土玉、軽石が出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯２、高杯２、椀１、甕４。11～13は本住居跡に伴うものではない。



第197図　SI６出土土玉・軽石実測図（1/2）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ６－１	杯	13.8 ×　　×	黒色（内面暗褐色）、良好、全面ヘラミガキ	⅙
－２	高　杯	18.2 ×　　×	口縁部赤色・体部黒色、良好、口縁部外面下半ヘラナデ、体部内外面ヘラミガキ	脚部欠失、⅓
－３	杯	14.2 ×　　×	暗赤褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅙
－４	高　杯	×　　× 4.7	黄褐色、良好、脚部外面および内面ヘラケズリ	杯部欠失
－５	椀	17.2 ×　　×	黒色、良好、体部外面ヘラケズリの後軽いミガキ、内面ナデ調整	底部欠失、⅓
－６	甕	16.8 ×　　×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	¼
－７	甕	14.2 ×　　×	淡赤褐色、長石・砂粒、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	¼
－８	甕	21 ×　　×	淡褐色、長石・雲母、不良、頸部外面ナデ調整	口縁部のみ、⅓
－９	甕	13.2 ×　　×	淡赤褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	胴部以下欠失、⅓
－10	甕	×　　× 8.8	暗褐色、雲母、不良、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	胴部上半欠失、⅓
－11	高台付盤 （S）	×　　× （高台径－16）	灰褐色、良好、？－？－？	口縁部底部欠失、¼
－12	蓋 （S）	14.4 ×　　×	灰黒色、長石・雲母、不良、？－Ｌ－天井部回転ヘラケズリ	鈕欠失、⅙
－13	蓋 （S）	×　　×	灰黒色、良好	鈕のみ

ＳＩ７（第198・199図、ＰＬ80－１）

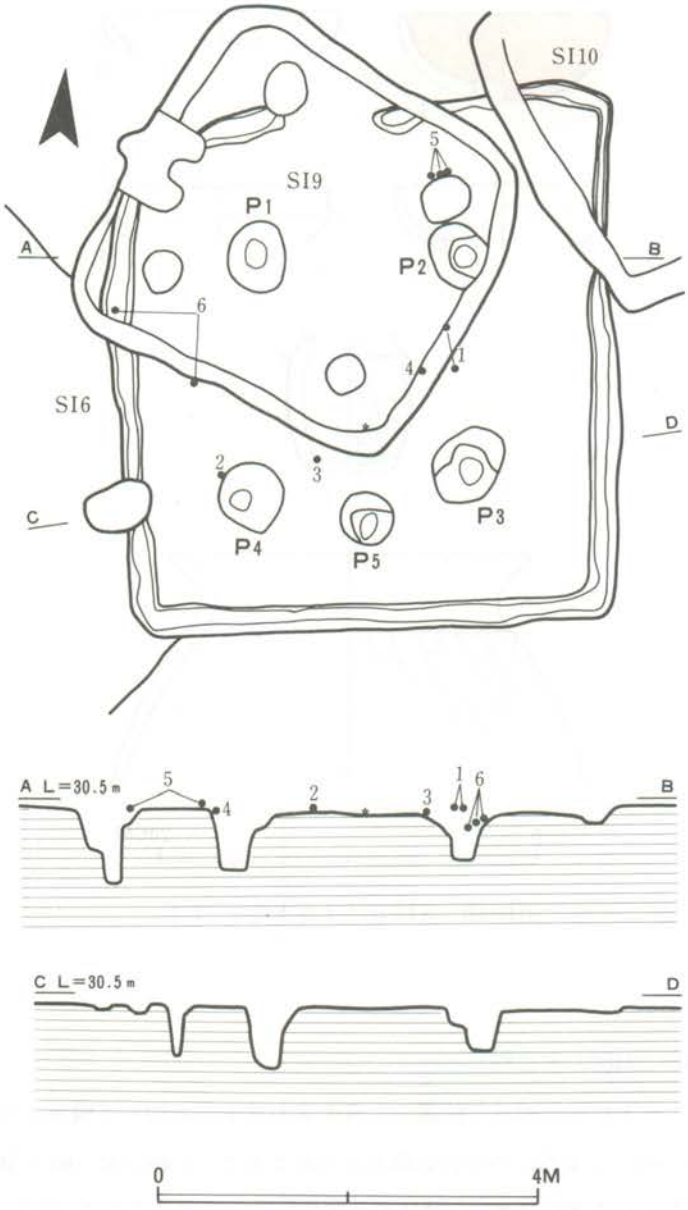
Ｃ３グリッドに位置し、北半分はＳＩ８、ＳＩ10に切られており、南西部分はＳＩ６を切っている。そのため、遺存状態はきわめて悪い。規模は5.4×5.3mで正方形を呈し、主軸はＮ－５°－Ｗである。壁は南壁が15cm程あるが他はすべて５cm以下の残存である。壁溝は全周しており、幅10～20cm、深さ５cm前後である。柱穴は５本検出され、P_1～P_4が主柱穴で、P_5が支柱穴である。主柱穴はP_4がずれた位置にあるが、対角線上にはのっている。規模は径65cm前後で、深さはP_1、P_3は60cmであるが、P_2、P_4は45cm前後である。P_5は径55cmで、深さ40cmである。床面はハードローム面を踏み固めており、非常に堅緻である。

カマドは北辺中央に構築されていたと思われるが、ＳＩ８によって壊されてしまっているため不明である。

覆土は単一な土層である。

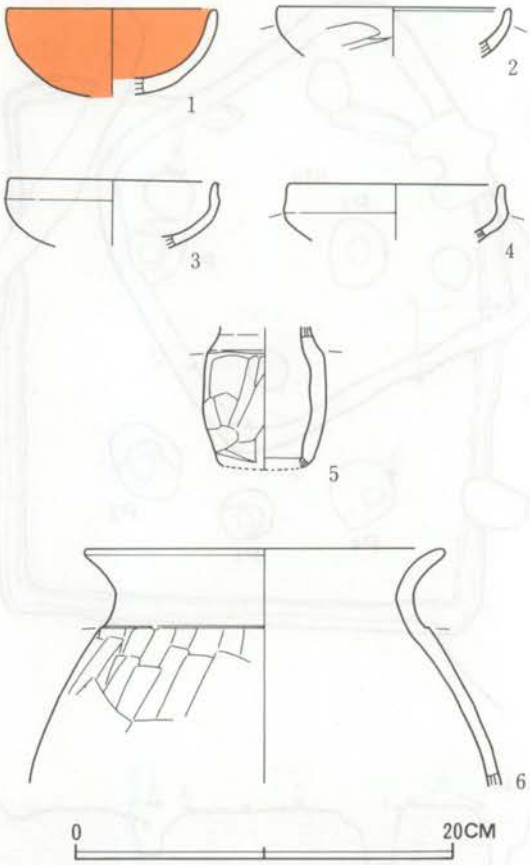
遺物は土器が散乱している状態である。他に住居跡のほぼ中央の床面から貝の破片が１点出土している。土器の器種と数量は杯４、壺１、甕１である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ７－１	杯	10.8 ×　　×	赤色、良好、全面ヘラミガキ	½、赤彩
－２	杯	12.2 ×　　×	暗褐色、不良、体部外面ヘラケズリ	⅒



第198図　SI7実測図（1/80）

−3	杯	10.8 ×	×	暗褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	1/6
−4	杯	11.2 ×	×	黄白色、不良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	1/10
−5	壺	×	×（5）	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	口縁部欠失、1/2
−6	甕	19 ×	×	暗褐色、不良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半1/8

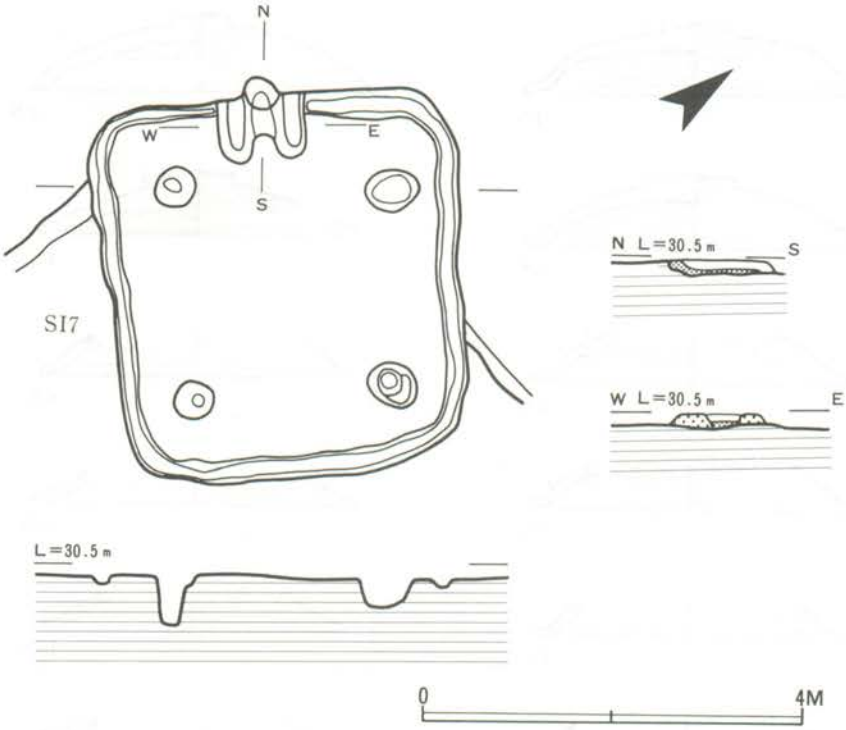


第199図　ＳＩ７出土土器実測図（1/4）

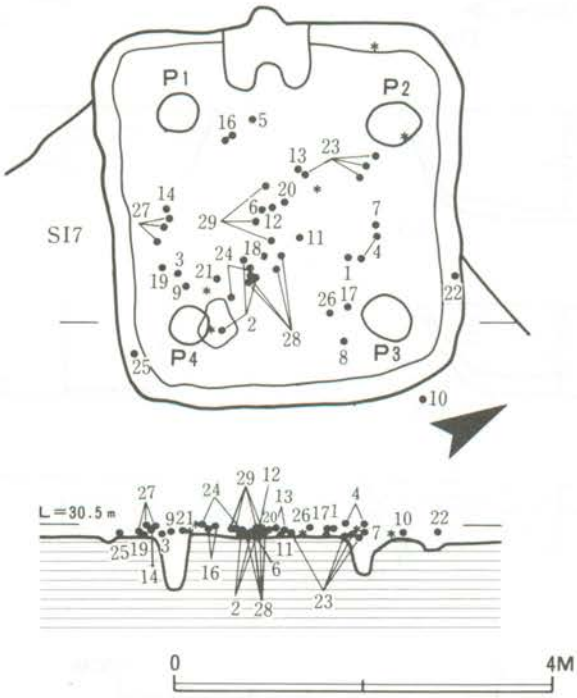
ＳＩ８（第200～204図、ＰＬ80）

Ｂ３、Ｃ３グリッドにまたがって位置し、ＳＩ７の北半分を切って構築されている。規模は東西４ｍ、南北3.8ｍで、東西にやや長い隅丸正方形である。主軸はＮ－60°－Ｗである。表土層から床面までが浅いため遺存は悪く、壁は８cm残存しているだけである。壁溝は全周しており、幅は15～30cmで、深さ５cm前後である。柱穴は４本検出された。P_4がややずれているが、ほぼ2.2ｍの等間に並んでいる。規模は平均して径40cmであるが、P_2とP_4は楕円形を呈している。またこの２本は深さが30cmと浅いが、他の２本は50cmである。床面はＳＩ７の床面に暗黄褐色土を３～５cm敷きつめ、踏み固めているため非常に堅緻である。

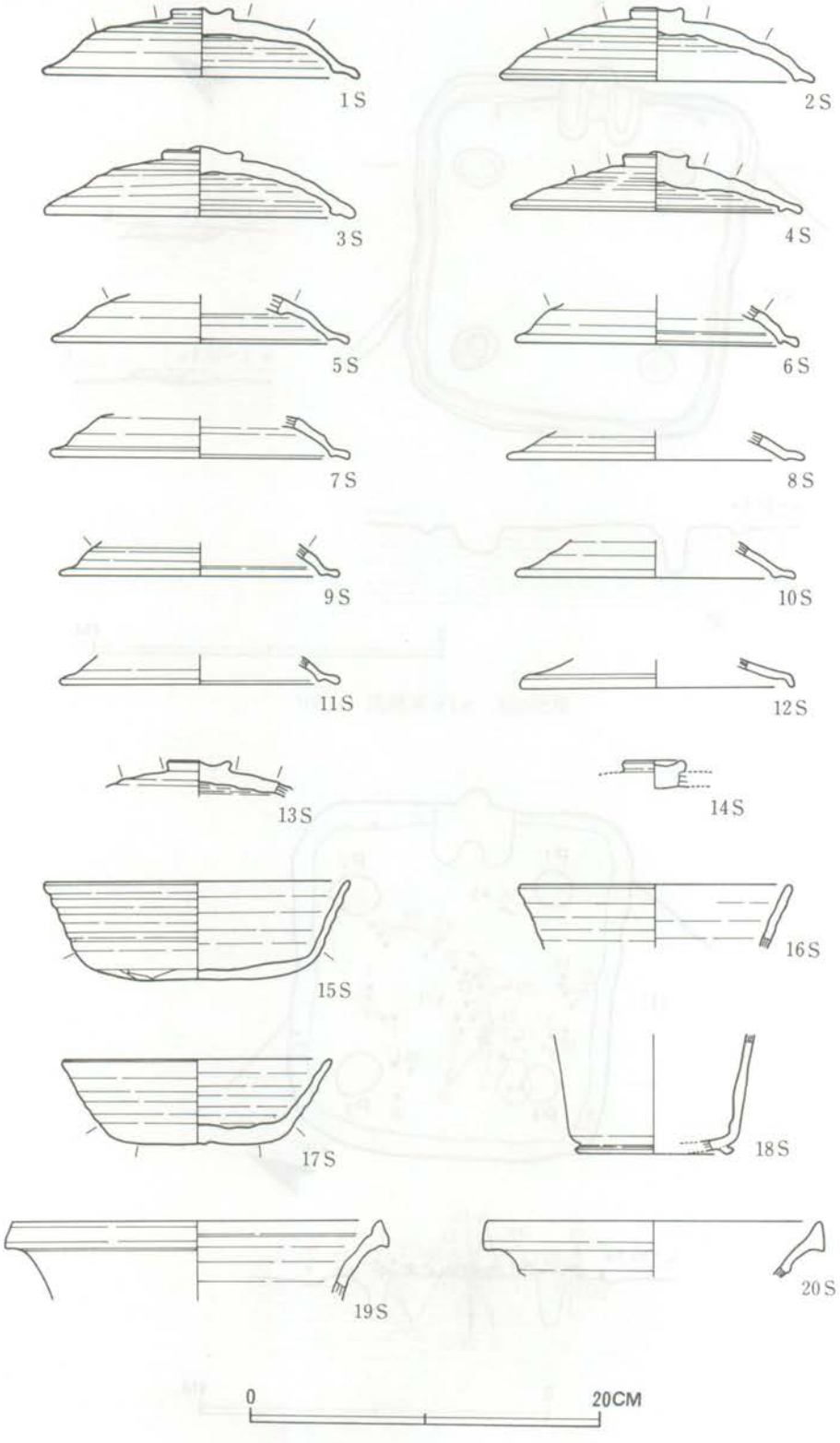
カマドは西辺中央に構築されている。規模は全長90cm、幅90cmである。袖は砂質粘土を主体とし、暗褐色土を混ぜたものを10cm程積み上げている。上面がだいぶ削平されているため天井部等の痕跡は見あたらない。掘り方は幅35cm、壁外に15cm程、半円状に掘り込んでおり、立ち上り傾斜は70°である。燃焼部の床面への掘り込みはほとんどなく、また焼土等も少い。



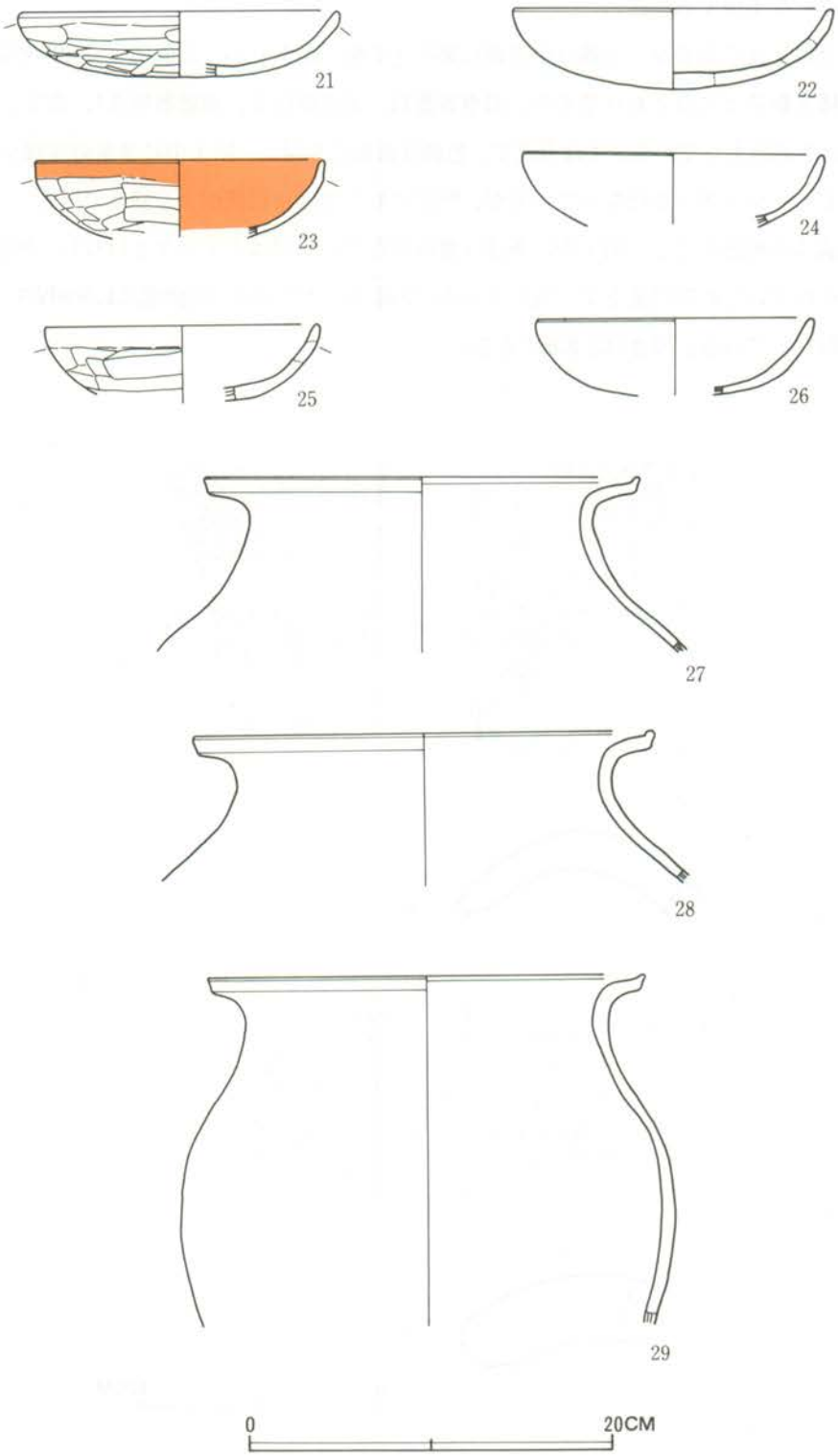
第200図　ＳＩ８実測図（1/80）



第201図　ＳＩ８遺物出土状況図（1/80）



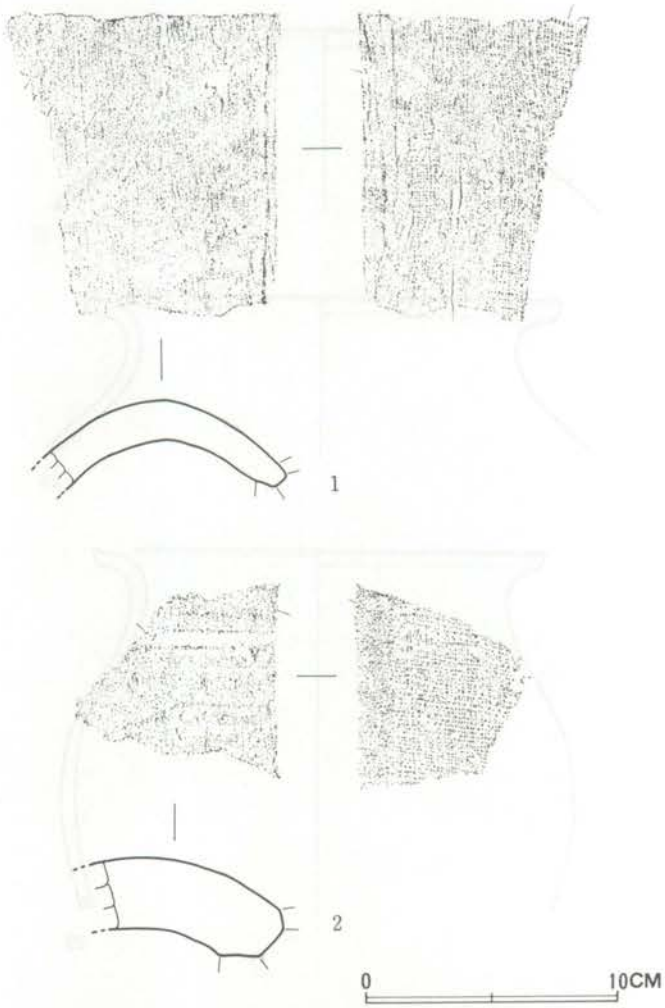
第202図　SI８出土土器実測図 ①（1/4）



第203図　ＳＩ８出土土器実測図 ②（1/4）

覆土は単一な土層である。

遺物は土器と瓦であるが、土器は中央部に集中する傾向があるが、北側による傾向がある。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋14、須恵器杯３、須恵器椀Ａ1、壺２、皿６、甕３。瓦は２点出土している。１は丸瓦で、色調は黄褐色を呈し、胎土中に多量の雲母を含む。凸凹面ともにヘラケズリを行なっているが、凹面においては布目痕がよく残っている。２は平瓦で、色調は赤褐色を呈し、胎土中に多量な雲母を含む。凸面はナデツケを行ない、凹面には調整を行なわないため布目痕をよく残している。側縁はヘラケズリ、凹面端部1.5cm程をヘラケズリで面取りしている。厚さは2.8cmである。



第204図　ＳＩ８出土瓦実測図（1/3）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI8－1	蓋 (S)	18 × 3.8 ×	淡黄灰褐色、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	3/4、内面に「井」の刻書
－2	蓋 (S)	18 × 4 ×	淡黄褐色、不良、長石・石英、不良、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/2
－3	蓋 (S)	18 × 4 ×	淡黄褐色、長石・石英、不良、?－R－天井部回転ヘラケズリ	2/3
－4	蓋 (S)	16.4 × 3.3 ×	淡褐色、長石・雲母、不良、?－R－天井部回転ヘラケズリ	2/3
－5	蓋 (S)	18.8 × ×	淡灰褐色、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/8
－6	蓋 (S)	16 × ×	灰褐色、雲母、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/6
－7	蓋 (S)	17 × ×	黄褐色、雲母、不良、?－R－?	1/8
－8	蓋 (S)	17 × ×	淡灰白色、雲母、不良、?－R－?	1/8
－9	蓋 (S)	16 × ×	灰白色、雲母、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/8
－10	蓋 (S)	16 × ×	淡灰白色、長石、不良、?－R－?	1/8
－11	蓋 (S)	16 × ×	暗褐色、長石、不良、?－R－?	1/6
－12	蓋 (S)	15.3 × ×	灰白色、堅緻、?－R－?、外面に降灰有り	1/8
－13	蓋 (S)	× ×	灰青色、長石、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	天井部のみ
－14	蓋 (S)	× ×	淡灰白色、長石・石英、良、?－R－ヨコナデのみ	鈕のみ
－15	杯 (S)	17.2 × 5.5 × 12	灰黒色、長石・雲母、堅緻、?－R－体部下端回転ヘラケズリ・底部手持ちヘラケズリ	2/3
－16	杯 (S)	15 × ×	淡灰褐色、長石、不良、?－R－調整不明	1/10
－17	杯 (S)	15.2 × 4.6 × 8.6	淡灰褐色、赤色粒子、雲母、回転ヘラ切り－L－体部下端および底部口縁手持ちヘラケズリ	1/2
－18	高台付椀 (S)	× × 9	暗赤銅色、堅緻、?－R－入念なロクロヨコナデのみ	口縁部欠失、1/3
－19	壺	20.8 × ×	灰白色、良好、口縁部内面下半不整ナデ、内面に1条の沈線	口縁部のみ、1/4
－20	壺	18.8 × ×	灰白色、良好、ロクロヨコナデのみ	1/8
－21	皿	17.2 × 3.5 ×	淡赤褐色、赤色粒子、良好、外面ヘラケズリの後荒いヘラミガキ、内面入念なヘラミガキ	2/5
－22	皿	17.4 × 4.3 ×	暗赤褐色、良好、ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	1/2
－23	皿	15.5 × ×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	1/3、赤彩
－24	皿	16.2 × ×	黄褐色、赤色粒子、良好、ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	1/6
－25	皿	15 × ×	黄褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリの後軽いミガキ、内面ヘラミガキ	3/5
－26	皿	14.8 × ×	黄褐色（黒斑有り）、赤色粒子、良、全面ヘラミガキ	1/4
－27	甕	23.7 × ×	黄褐色、長石、不良、体部外面および内面ナデ調整	胴部以下欠失1/6
－28	甕	2.5 × ×	黄褐色(内面暗褐色)、長石、不良、体部外面および内面ナデ調整	胴部以下欠失1/6
－29	甕	23.8 × ×	暗褐色、長石、良、体部外面および内面ナデ調整	胴下半欠失1/3

ＳＩ９（第191・194図、ＰＬ79－２）

Ｂ３グリッドに位置し、ＳＩ５を切っている。しかし、西辺、南辺はＳＩ５の覆土中に築かれ、なおかつ攪乱を受けており、確認することができなかった。規模はおそらく3.5m前後の正方形を呈すものであろう。主軸はＮ－12°－Ｅである。壁は北辺と東辺の北半分が残っているだけである。外に開きながら直線的に立ち上り、15cmの高さがある。壁溝は北辺と東辺しか残存していないが、おそらく全周していたと思われる。幅は30～25cm、深さは７～10cmである。柱穴はない。床面はＳＩ５の床面の上に５cm程の暗褐色土を踏み固めたものであるが、部分的にしか検出されなかった。

カマドは西辺中央にあったと思われるが、攪乱を受けており、確認できなかった。

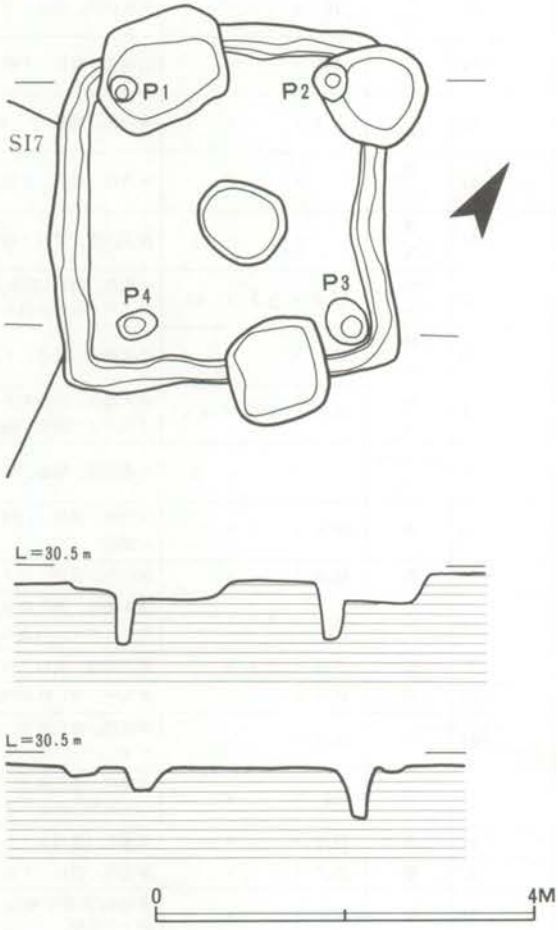
覆土は単一な土層である。

遺物は散在した状態で土器が出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。杯５、皿１である。

ＳＩ10（第205図、ＰＬ81－１）

Ｂ３グリッドに位置し、ＳＩ７を切って構築されている。規模は3.7×3.5mの南北にやや長い正方形で、主軸はＮ－32°－Ｗである。壁は掘立柱建物跡にも多く切られているため、非常に遺存が悪い。良好な部分で10cm程度である。壁溝は全周しており、幅10～30cmで、深さは７～15cmである。柱穴は４本検出された。柱穴はすべて各コーナーによっている珍しいものである。規模は径40cmであるが、P_3だけは50cmある。深さはP_4だけが24cmと浅いが、他は60cmである。床面はソフトローム面を利用しており、踏み固めもあまりしてないため軟弱である。

カマドは構築されたかされなかったか不明である。北辺に掘立柱建物跡の攪乱が大きくはいっているため



第205図　ＳＩ10実測図（1/80）

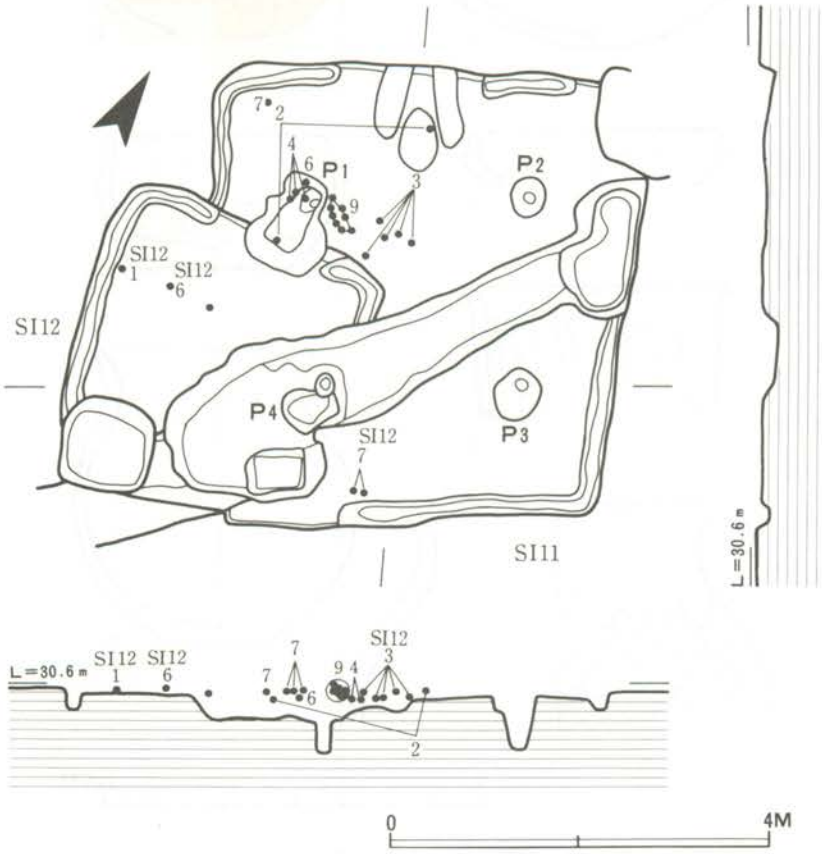
わからない。ただし、構築されていたとすれば中央ではなく、どちらか一方に寄った場所になる。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器の破片が出土しているが、図示できるものはなかった。

ＳＩ11（第206・207図、ＰＬ81－２）

Ｂ３グリッドに位置し、ＳＩ12に切られている。また、北東から南西へ溝が走り、大きく攪乱されている。規模は4.7×4.6mの正方形を呈し、主軸はＮ－20°－Ｗである。壁は遺存状態が悪く、良好なところで17cm程度の残存である。壁溝は全周に近いが、北辺でカマドの手前で途切れ、南辺においても途切れてしまうようである。幅は30cm、深さ10cm前後である。柱穴は４本検出された。２ｍの等間で、P_1とP_4は攪乱があるため規模は判名しないが、他は径50cm前後で、深さ60cm前後である。床面はソフトローム面をそのまま使用したため軟弱である。

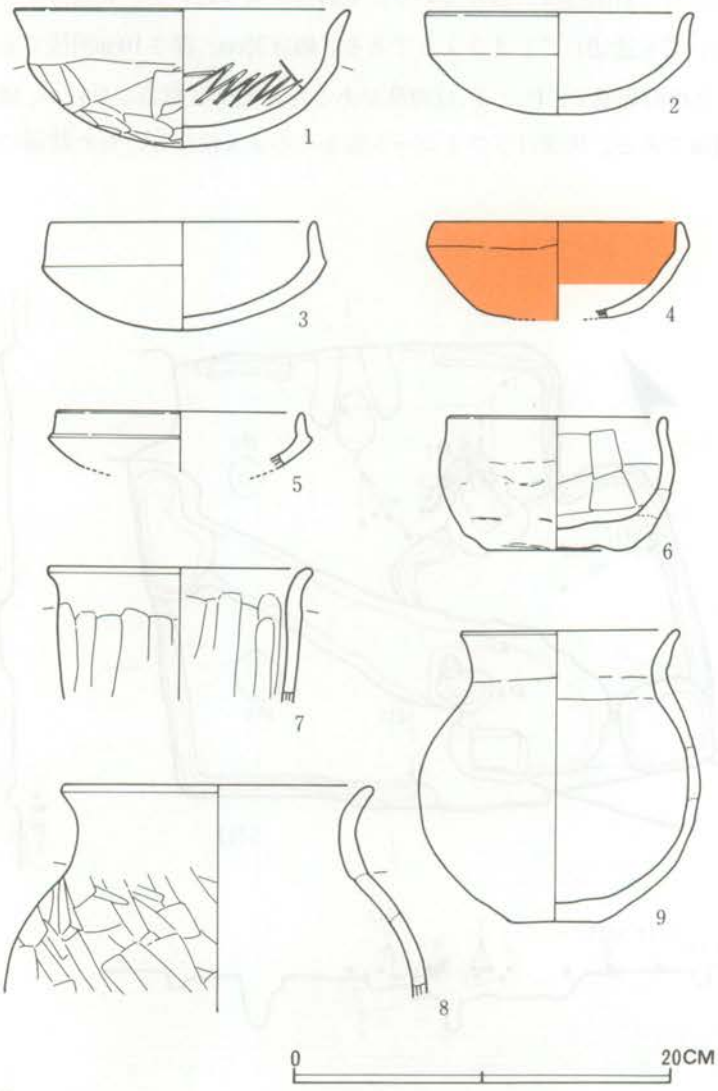


第206図　ＳＩ11・ＳＩ12実測図（1/80）

カマドは北辺中央に構築されている。しかし残りが悪いため、床面に残存した部分から推測する。全長、幅とも80cmである。袖には山砂を使用している。掘り方は壁外には出ない。燃焼部には若干の掘り込みがあるが、焼土はすくない。

覆土は単一な土層である。

遺物はカマド前面よりやや西側に土器が集中して出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。杯５、椀１、鉢１、甕１、壺１である。

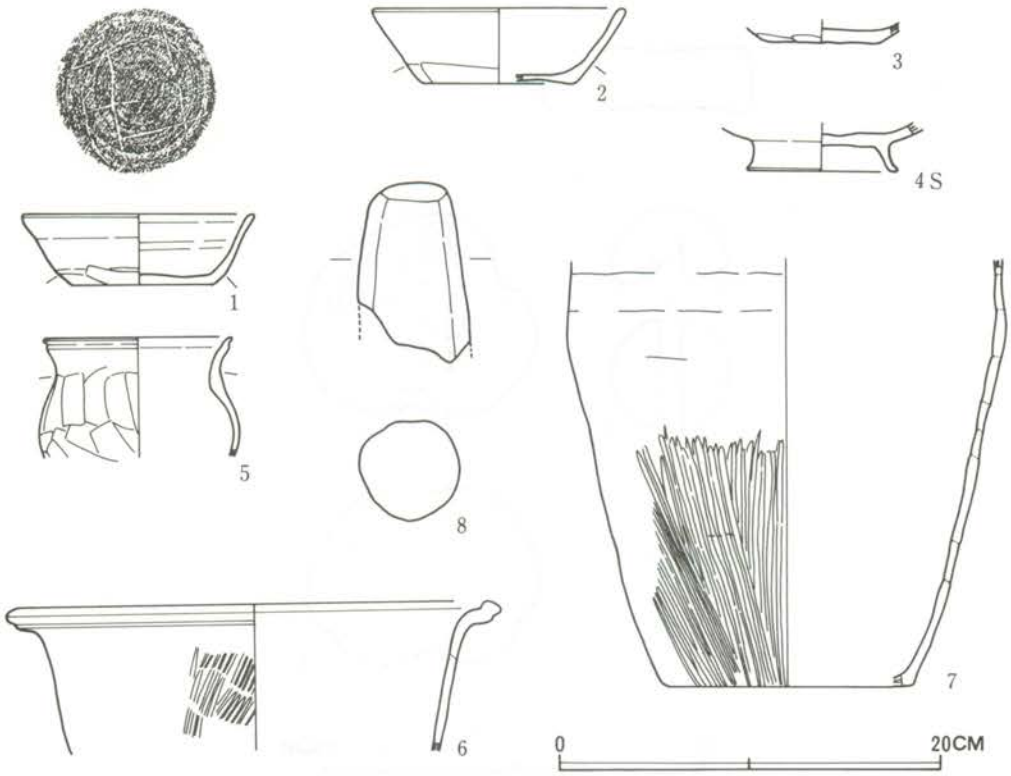


第207図　SI 11出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ11－1	杯	17.5 × 7.1 ×	暗褐色(内面赤褐色)、良好、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ、内面に放射状暗文	½
－2	杯	14 × 5.3 ×	黒色、不良、へラケズリの後体部内外面ナデ調整	⅘
－3	杯	13.8 × 5.5 ×	黒色、良好、体部外面へラケズリの後全面へラミガキ	⅘
－4	杯	13 × 5 ×	暗褐色、良好、体部外面へラケズリの後、体部内外面へラミガキ	⅙赤彩
－5	杯	12.8 × ×	黒色、良、体部内外面へラミガキ	⅒
－6	椀	11.2 × 6.9 × 7.6	暗褐色、不良、外面ナデ、内面へラナデ調整	⅔
－7	鉢	13.6 × ×	暗赤褐色(外面黒斑有り)、不良、体部内外面ともにへラケズリ	⅙
－8	甕	16 × ×	赤褐色(内面暗褐色、外面に黒斑有り)、良好、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ調整	⅓
－9	壺	11.5 × 15.2 × 5	暗褐色、不良、体部外面～底部ナデ調整、体部内面へラケズリ	⅗

ＳＩ12（第206・208・209図、ＰＬ81－２）

Ｂ３グリッドに位置し、ＳＩ11を切っている。溝と掘立柱建物跡によって大きく攪乱されている。規模は３×2.8mのいびつな方形を呈し、主軸はＮ－10°－Ｗである。壁は西辺しか良好に



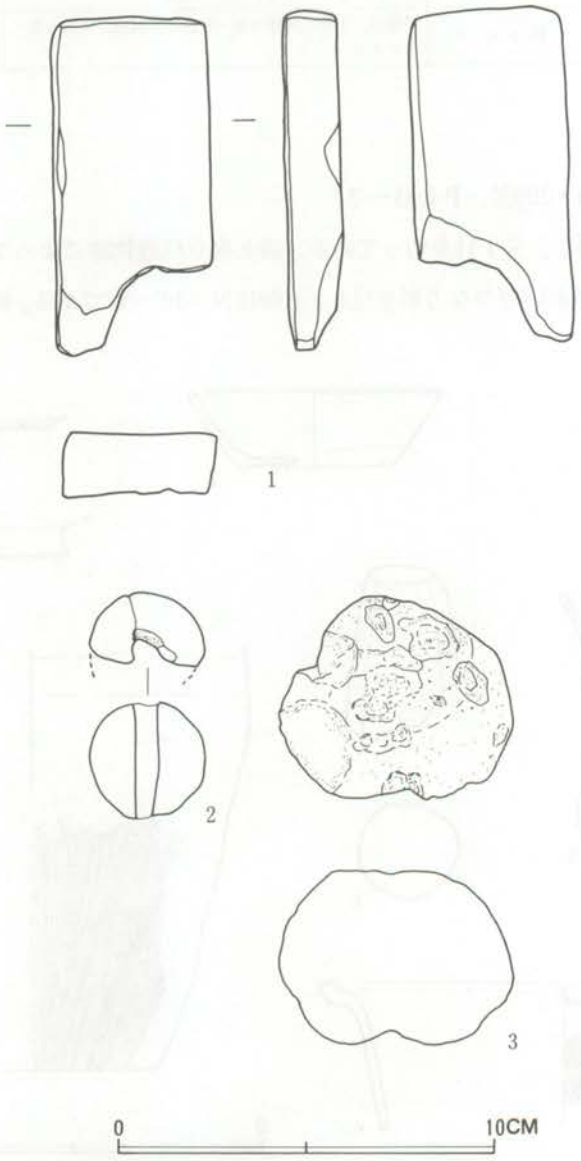
第208図　ＳＩ12出土土器実測図（1/4）

残っていなく、20cm前後である。壁溝はカマドをのぞいた部分に全周していたと思われる。幅25cm、深さ４～10cmである。柱穴は１本もない。床面はソフトロームを利用しているが、踏み固めが弱く軟弱である。

カマドは北辺中央に構築されたと思われるが、攪乱により不明である。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器が散乱した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯A１、杯３、甕２、甑１、支脚１である。他に砥石、軽石、土玉等も出土している。

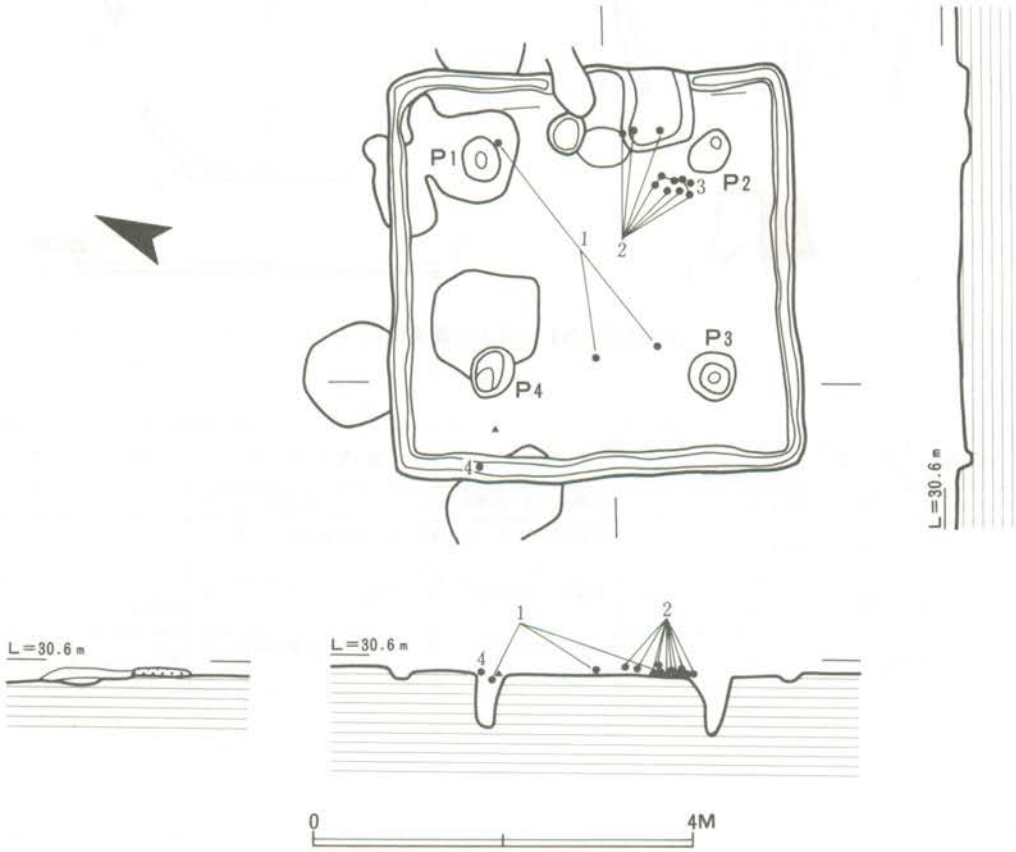


第209図　ＳＩ12出土砥石・土玉・軽石実測図（1/2）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ12－１	杯	12 × 3.7 × 7.4	茶褐色(黒斑有り)、良好、回転ヘラ切り－Ｒ－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	⅚
－２	杯	13 × 3.9 × 8	黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	¼
－３	杯	× × 6	暗褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下端および底部周縁手持ちヘラケズリ	底部のみ
－４	高台付杯（Ｓ）	× × 7.8	灰褐色、不良、？－Ｒ－底部全面回転ヘラケズリ	底部のみ
－５	甕	9.5 × ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	½
－６	甑　？	26 × ×	灰褐色、長石、良好、外面平行タタキ、体部内面ナデ調整	⅙
－７	甕	× ×	暗褐色、長石・石英、不良、体部内外面ナデ調整の後外面下半ヘラミガキ、底部はヘラケズリ	¼
－８	支　脚	× ×	赤褐色、砂粒、赤色粒子、不良	½

ＳＩ13（第210～212図、ＰＬ82－１）

Ｂ３グリッドに位置し、ＳＩ４に東辺を接している。東辺と北辺は掘立柱建物跡により攪乱



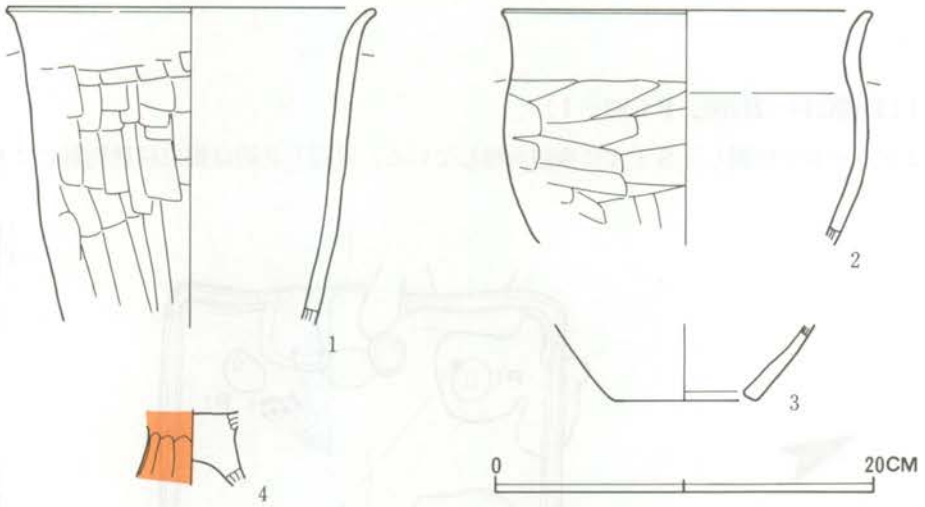
第210図　ＳＩ13実測図（1/80）

されている。規模は4.2m四方の正方形を呈し、主軸はN－65°－Eである。壁は残存状態があまりよくなく、12cm程である。壁溝は全周しており、幅は平均16cm、深さ６cmである。柱穴は４本検出され、2.4m等間に並んでいる。規模は径50cm前後で、深さ60cm前後である。床面はソフトローム面を利用し、踏み固めが弱いため、軟弱である。

カマドは東辺中央に構築されている。攪乱が激しいため、右側の袖の基底部のみしか残存していない。残存部は全長85cmで、山砂をもって構築していることがうかがえる。

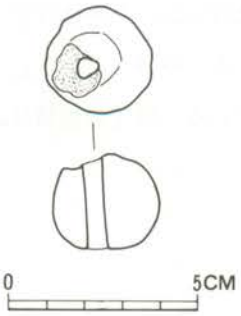
覆土は単一な土層である。

遺物は土器と土玉が散乱した状態で出土した。土器は甑２、甕１、高杯１である。



第211図　ＳＩ13出土土器実測図（1/4）

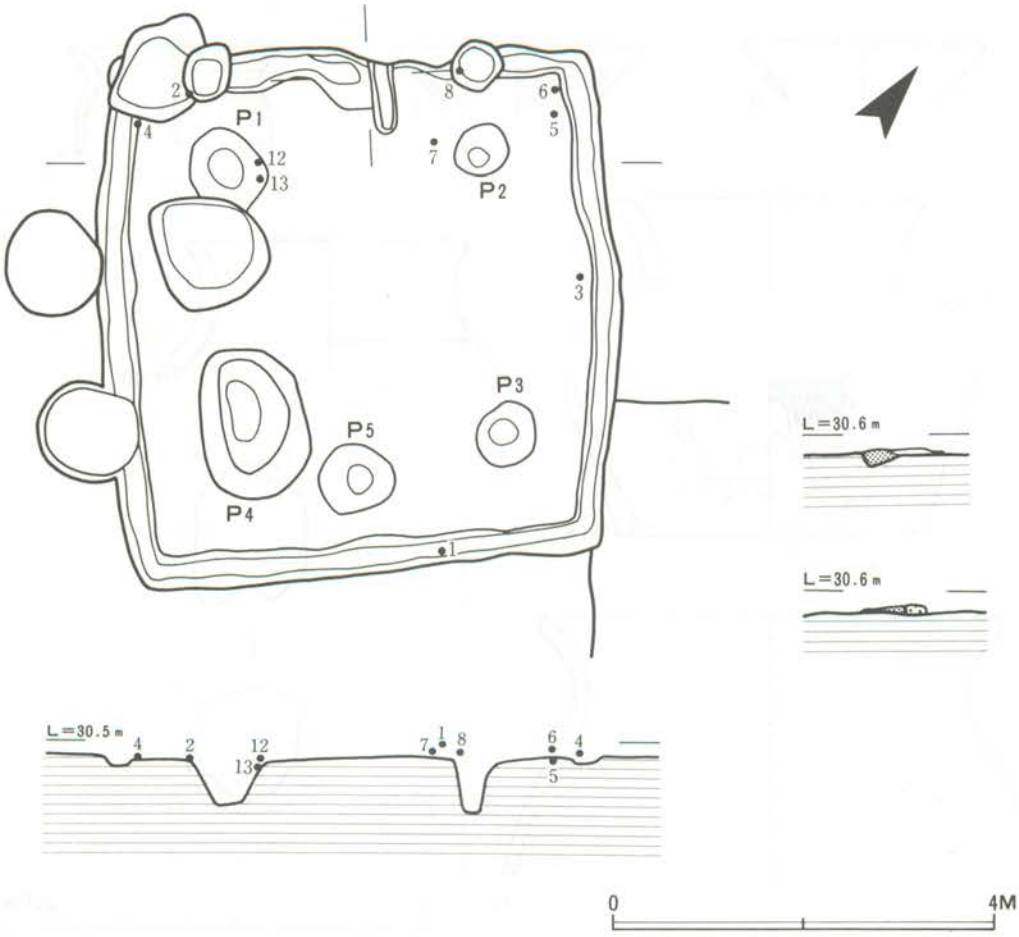
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ13－1	甑	19.4 ×　　×	暗褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	¼
－2	甕	19.5 ×　　×	赤褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにヘラケズリ	⅓
－3	甑	×　　× 6.5	黄褐色(内面赤褐色)、良、内外面ともヘラケズリ、単孔	底部¼
－4	高　杯	×　　×	黄褐色(脚内面黒色)、良、杯部内面ナデ脚部内面ヘラケズリ	脚部のみ、赤彩



第212図　ＳＩ13出土
土玉実測図（1/2）

ＳＩ14（第213・214図、ＰＬ82－２）

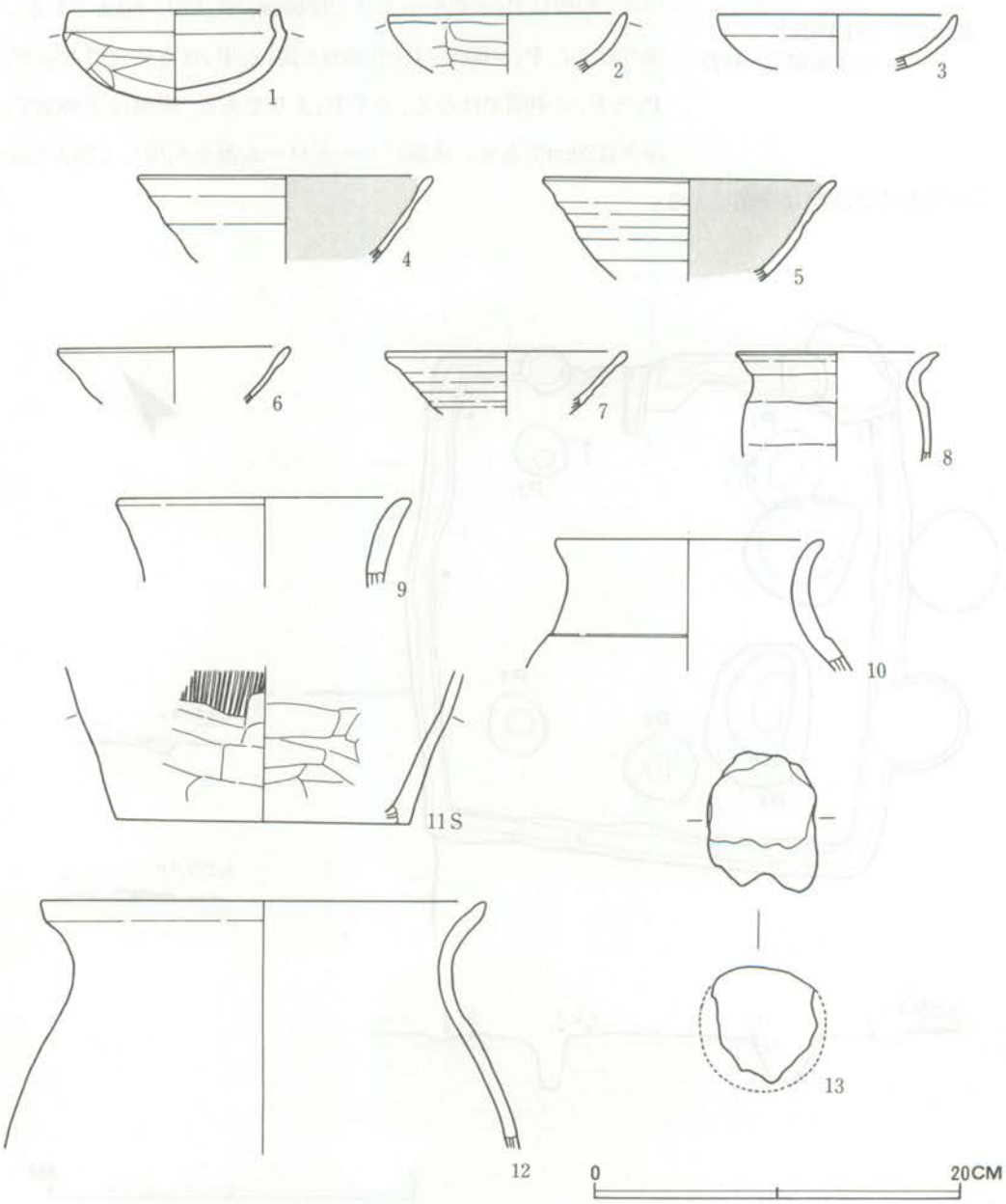
Ｃ２、Ｃ３グリッドにまたがり位置し、東辺でＳＩ６を切り、西辺でＳＢ２に切られている。規模は5.5m四方の正方形を呈し、主軸はＮ－41°－Ｗである。壁は遺存が悪く、10cm程である。壁溝は全周しており、幅30～40cm、深さ７～10cmである。柱穴は５本検出された。P_1～P_4が主柱穴であり、2.8m等間で並んでいる。規模はP_2がやや小ぶりで径60cm、他は70～80cmである。深さはP_1、P_2が60cm、P_3が30cmと浅い。P_5は支柱穴であるが、P_3とP_4の中間ではなく、ややP_4よりである。規模は径80cmで、深さは20cmである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。



第213図　ＳＩ14実測図（1/80）

カマドは北辺中央に構築されている。攪乱を受けているわけではないが、左袖は確認できなかった。右袖の残存長は75cmで、10cm程積み上げた山砂が残っている。壁外への掘り込みはなく、燃焼部における床面への掘り込みは15cmあり、摺鉢状を呈している。焼土の堆積はあまりない。

覆土は単一な土層である。



第214図　ＳＩ14出土土器実測図（1/4）

遺物は土器がカマドの周辺に散乱した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。杯７、甕３、壺１、須恵器甕１である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ14－１	杯	11.3 × 4.8 ×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	完形
－２	杯	13 × ×	茶褐色、良、体部外面ヘラケズリその他はナデ調整	⅛
－３	杯	13 × ×	黒色、良、体部外面ヘラケズリ、その他はヨコナデ	⅒
－４	杯	16 × ×	黄褐色(内面黒色)、良好、体部外面下半および内面全体ヘラミガキ	½、黒色処理
－５	杯	15.8 × ×	赤褐色（内面黒色)、良好、？－Ｒ－体部下端手持ちヘラケズリ・内面ヘラミガキ処理	⅙、黒色処理
－６	杯	12.6 × ×	黄褐色、良好、？－？－？	⅙
－７	杯	13 × ×	黒色、良好、？－？－？	⅙
－８	甕	10.8 × ×	赤褐色（～暗褐色)、良、体部内外面ともナデ調整	胴上半¼
－９	甕	15.8 × ×	茶褐色、良、ヨコナデ	口縁部⅙
－10	壺	14.4 × ×	黄褐色、不良、体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ	口縁部¼
－11	甕 (Ｓ)	× × 16	灰褐色、長石・石英・雲母、良好、体部下端内外面ともにヘラケズリ	胴下半⅓
－12	甕	24 × ×	黄褐色、長石・石英・雲母、良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半¼

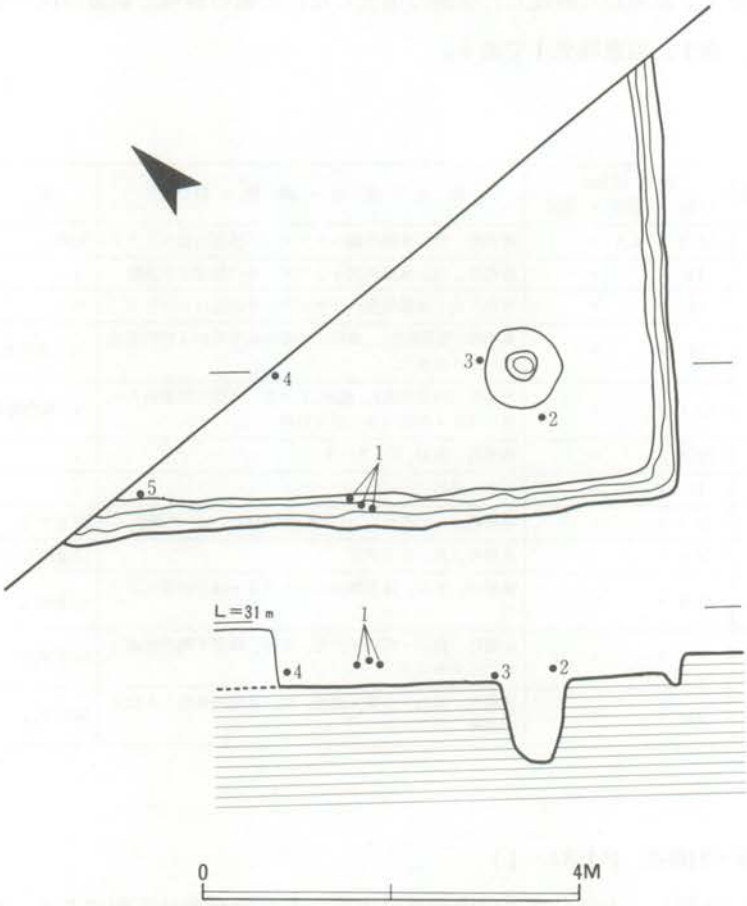
ＳＩ15（第215・216図、ＰＬ83－１）

Ａ３グリッドに位置し、大部分は北側境界外に出ているため全容は不明である。規模ははっきりした一辺がないため、判名しないが、南辺では6.5m以上あるので、おそらく、７m以上の正方形を呈する大形住居跡であろうと思われる。壁は残りがよく30cmあり、溝底より垂直に近い立ち上りを示している。壁溝は調査した範囲内においては巡っているため、おそらく全周するタイプであろう。幅20～40cm、深さ６～12cmである。柱穴は南コーナー部分の１本だけである。規模は径84cm、深さ83cmの大形のものである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。

カマドは不明である。

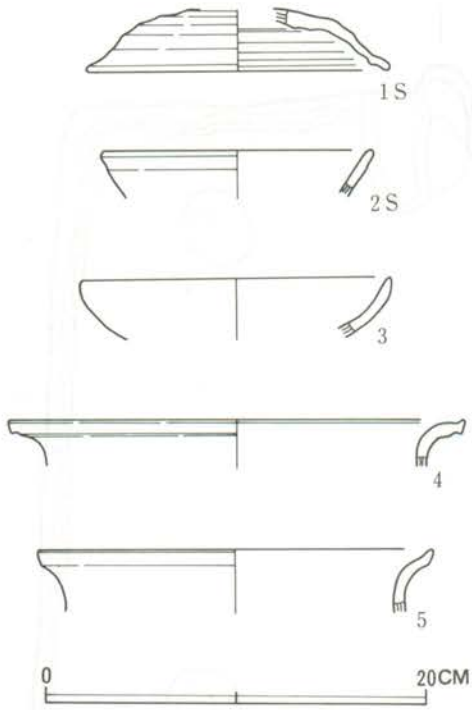
覆土は２層からなるが、一度に埋められた状態をよく示している。

遺物は土器が散乱した状態で床面より10cm浮いて出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋１、須恵器杯１、杯１、甕２である。



第215図　SI15実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI15－1	蓋 （S）	16　×　　×	灰褐色、長石・石英、良好、？－R－天井部回転ヘラケズリ	鈕欠失、1/8
－2	杯 （S）	14　×　　×	灰白色、良好、？－？－？	1/10以下
－3	杯	16　×　　×	茶褐色(黒斑有り)、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	1/10以下
－4	甕	24　×　　×	茶褐色、長石・石英、良、ヨコナデのみ	1/10以下
－5	甕	20.5　×　　×	暗褐色、長石・石英、良、ヨコナデのみ	1/10以下



第216図　SI15出土土器実測図（1/4）

S I 16（第217～225図、P L83－2）

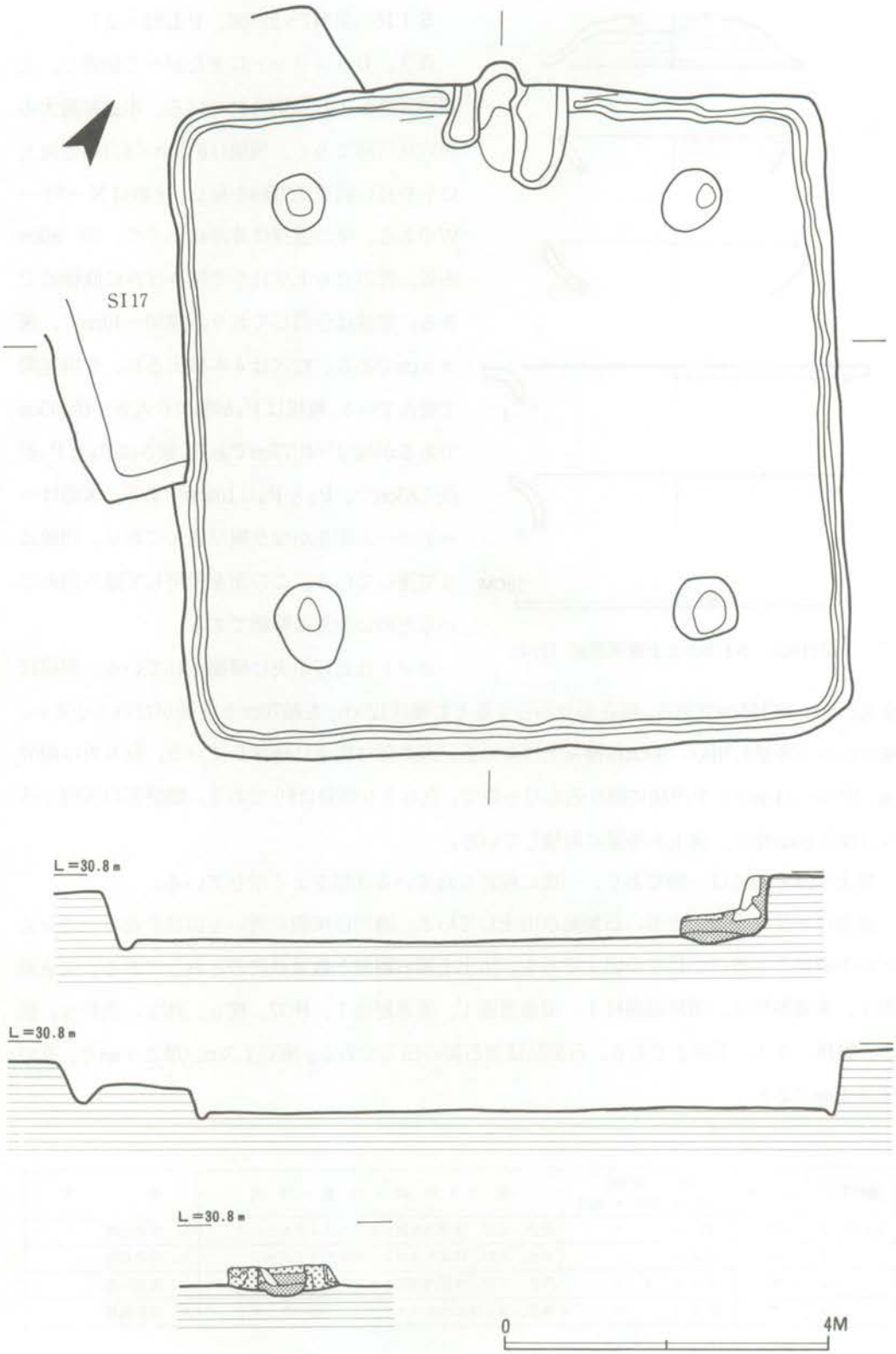
A 3、B 3グリッドにまたがって位置し、北西部分をS I 17に切られている、本遺跡最大の竪穴住居跡である。規模は8.3m×8.1mで南北にやや長い隅丸正方形を呈し、主軸はN－33°－Wである。壁の遺存は非常によくて、70～80cmある。壁の立ち上りはやや開きぎみに直線的である。壁溝は全周しており、幅30～40cmで、深さ5cmである。柱穴は4本検出され、5m等間で並んでいる。規模はP_4が他より大きく径105cmであるが他は平均75cmである。深さはP_1とP_4が浅く83cmで、P_2とP_3は105cmである。床面はハードローム面をかなり掘り込んでおり、Ⅶ層にまで達している。この面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。

カマドは北辺中央に構築されている。規模は全長145cm、幅155cmである。現在部分からすると右袖は120cm、左袖70cmと左袖がだいぶ小さい。袖は山砂を多量に用い、30cm程積み上げている。天井部は完全に崩落している。掘り方は幅57cm、壁外へ24cmほど半円状に掘り込んだもので、立ち上り傾斜は80°である。燃焼部の床掘り込みは深さ10cm程で、焼土が多量に堆積している。

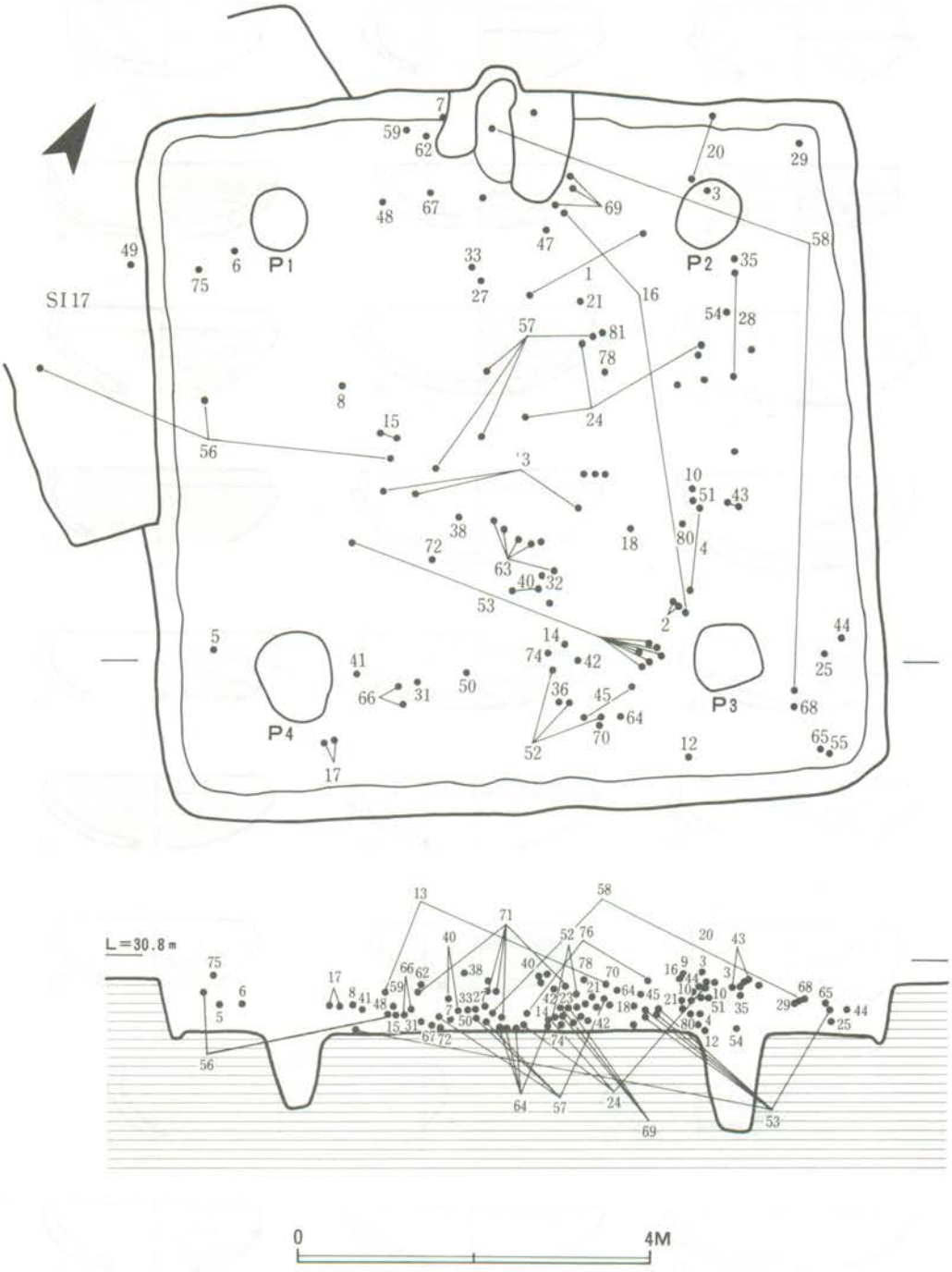
覆土は基本的には一層であり、一度に埋められている状態をよく示している。

遺物は多量な土器と土玉、石製品が出土している。遺物は床面に近いものは少なく、ほとんどが中層から上層にかけての出土である。出土土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋1、須恵器杯2、須恵器高杯1、須恵器壺1、須恵器瑞1、杯37、椀5、鉢2、高杯3、甑2、甕18、壺3、手捏2である。石製品は滑石製の臼玉である。直径1.3cm、厚さ7mmで、孔の径は4mmである。

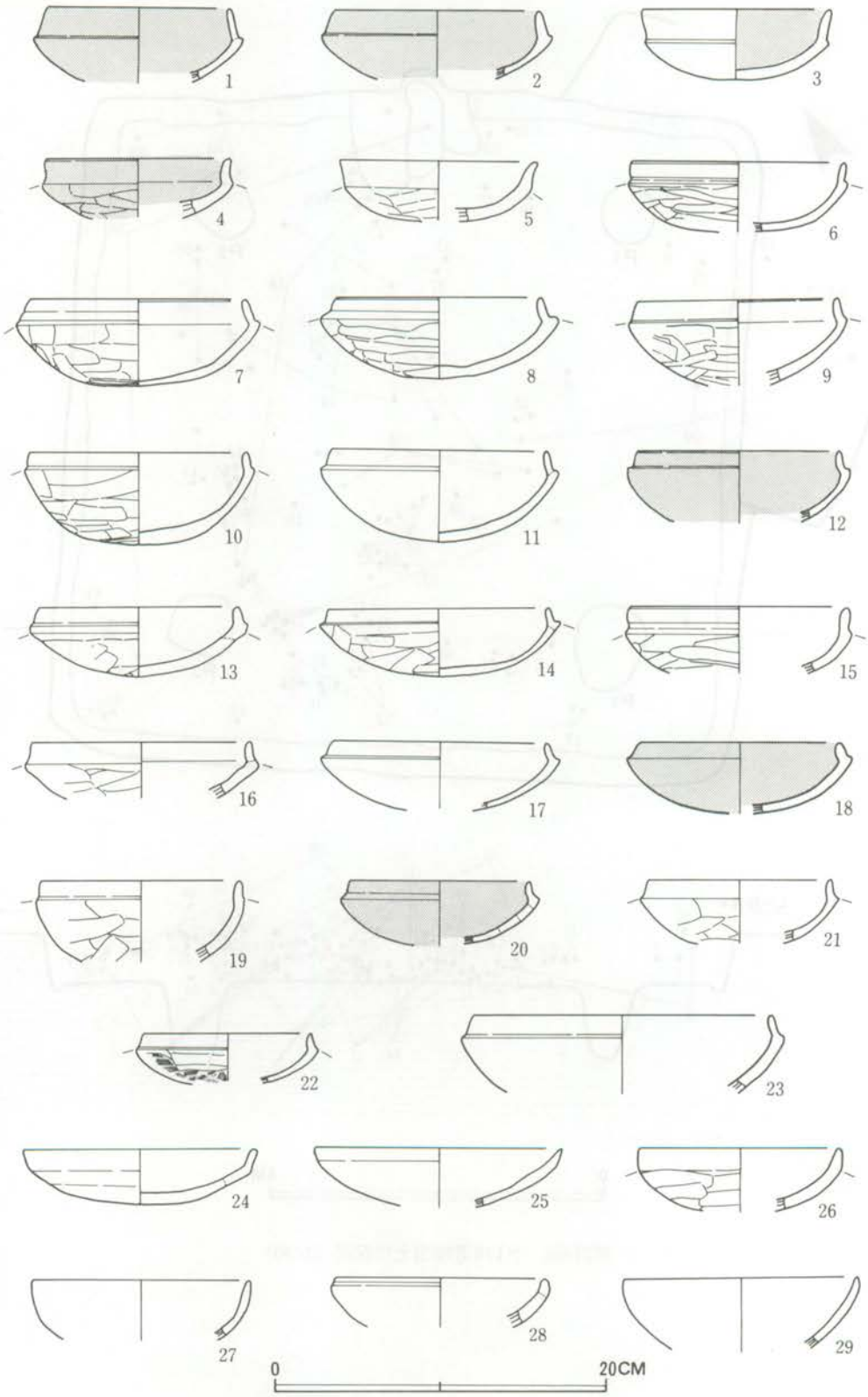
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
S I 16－1	杯	11 × ×	黒色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	⅙、黒色処理
－2	杯	12.2 × ×	黒色、良好、体部外面および内面ヘラミガキ	⅓、黒色処理
－3	杯	11.2 × 4 ×	黒色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	¼、黒色処理
－4	杯	10.8 × ×	黒色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	⅙、黒色処理



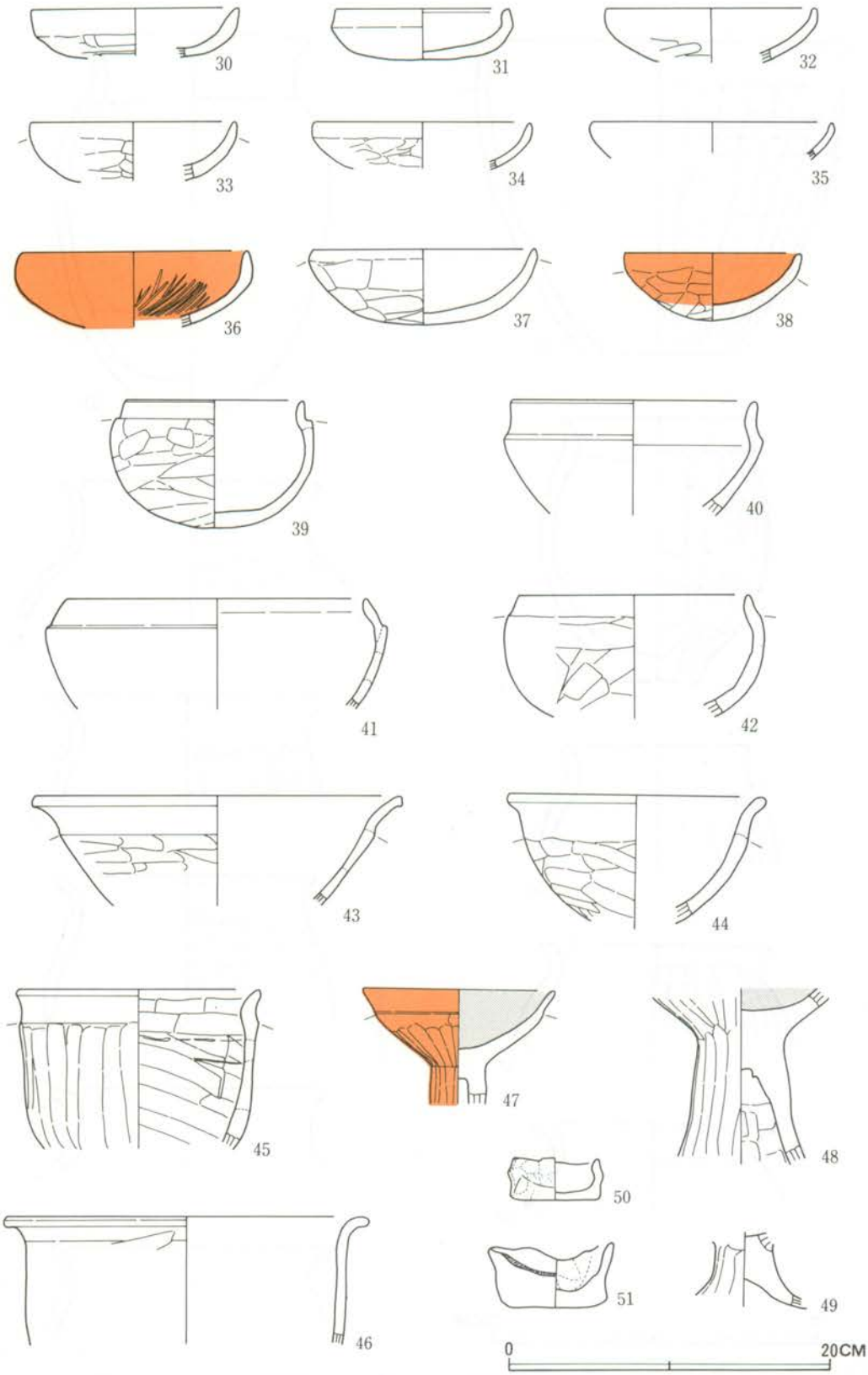
第217図　SI16実測図（1/80）



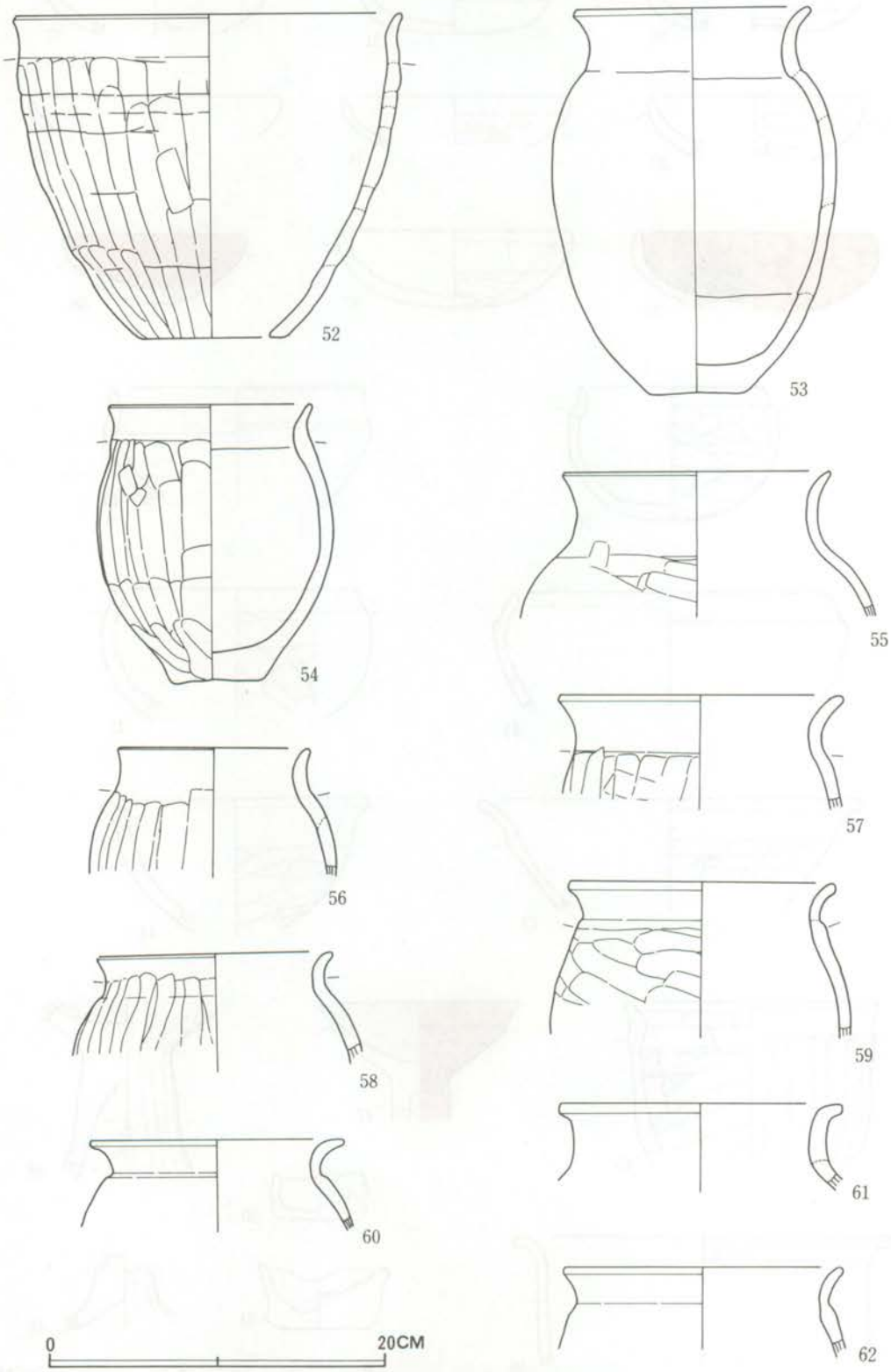
第218図　SI16遺物出土状況図（1/80）



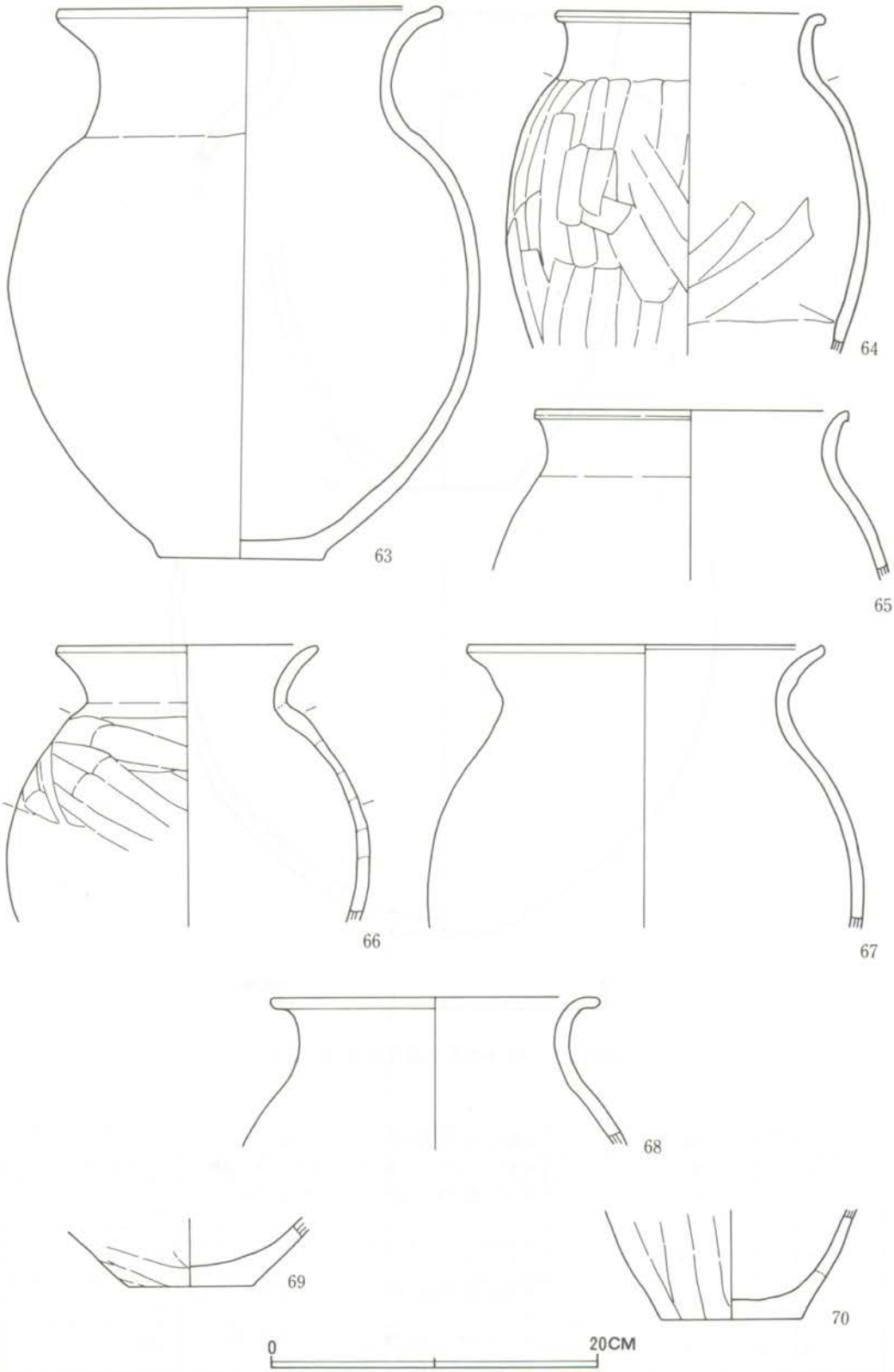
第219図　SI16出土土器実測図 ①（1/4）



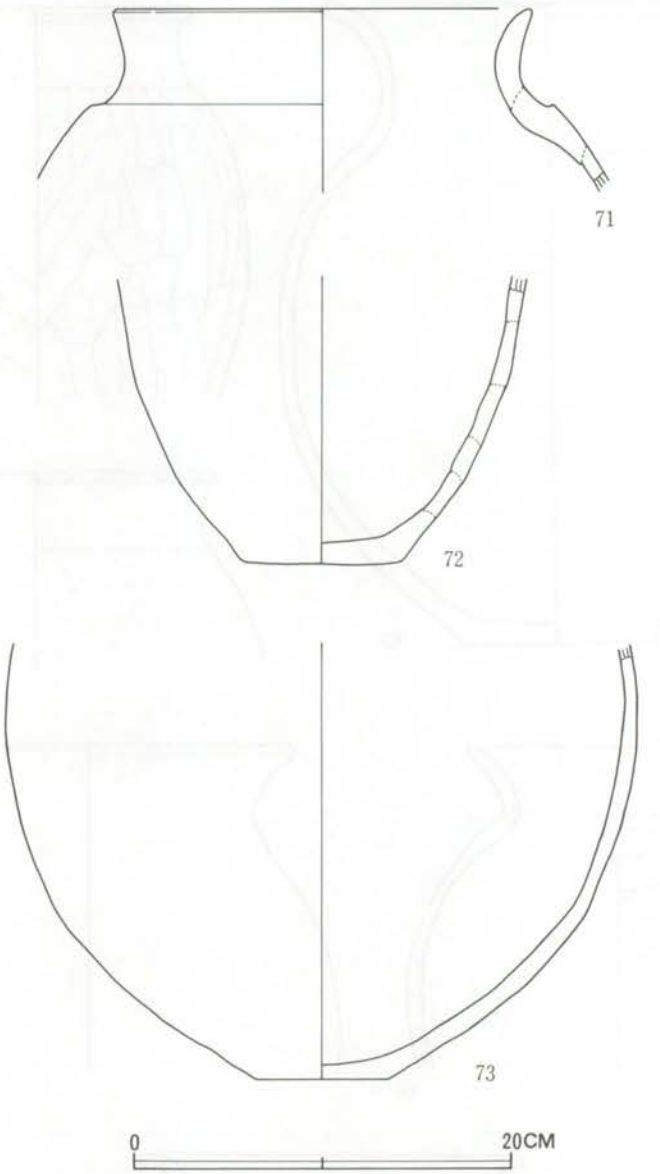
第220図　ＳＩ16出土土器実測図 ②（1/4）



第221図　SI16出土土器実測図 ③ (1/4)

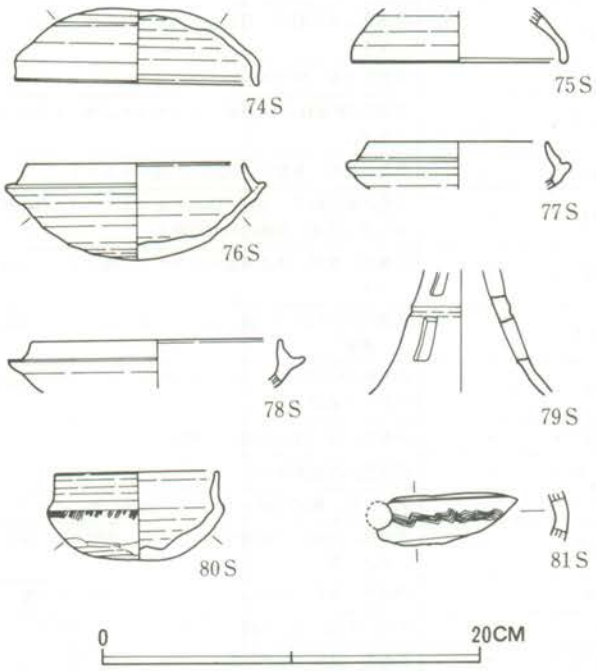


第222図　SI16出土土器実測図 ④ (1/4)



第223図　ＳＩ16出土土器実測図 ⑤ (1/4)

−5	杯	12 × ×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	⅛
−6	杯	10.8 × 3 ×	黄褐色（内面黒色）、良、体部内外面ともナデ調整	⅓、黒色処理
−7	杯	13.2 × 5.1 ×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラミガキ	½
−8	杯	12.3 × 4.7 ×	淡茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリの他は全てヘラミガキ	完形
−9	杯	12.2 × ×	黄褐色、良、体部内面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	¼
−10	杯	13 × 5.3 ×	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラミガキ	完形
−11	杯	13 × 5.3 ×	淡茶褐色、赤色粒子、良好、全面ヘラミガキ	⅜

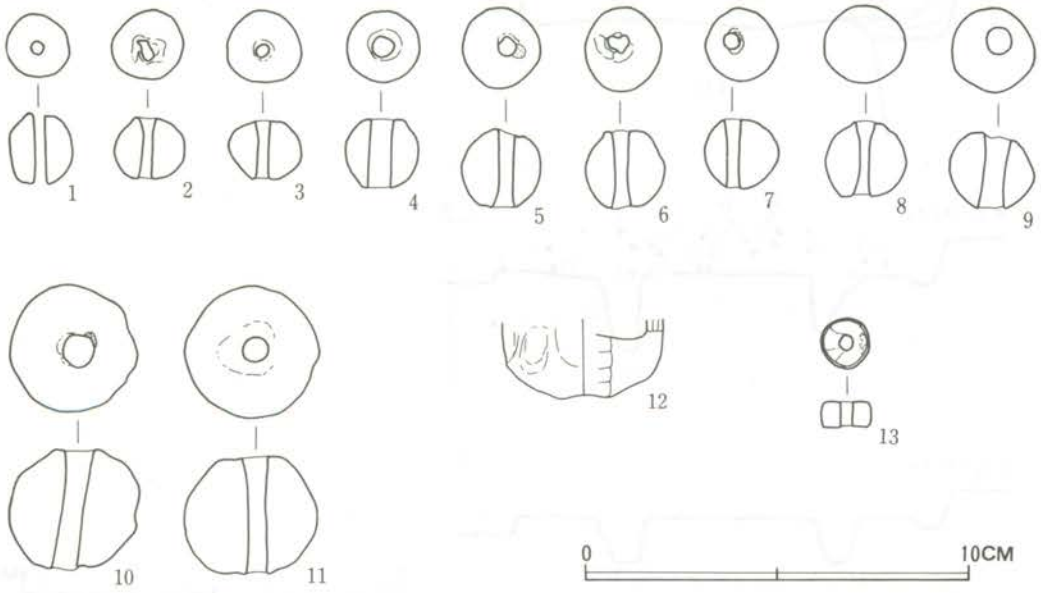


第224図　SI16出土土器実測図 ⑥（1/4）

−12	杯	12 × ×	黒色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	⅕、黒色処理
−13	杯	10.8 × 4.1 ×	暗褐色（外面黒斑有り）、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	⅓
−14	杯	13.2 × 4 ×	茶褐色(黒斑有り)、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	⅙
−15	杯	13 × ×	茶褐色、良好、体部外面ヘラケズリ	¼
−16	杯	12.8 × ×	黄褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ	⅛
−17	杯	13 × ×	全面ヘラミガキ	⅗
−18	杯	12 × ×	黒色、良好、体部内外面ヘラミガキ	¼、黒色処理
−19	杯	12 × ×	暗黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリの他はすべてヘラミガキ	¼
−20	杯	10.8 × ×	黒色、良好、体部外面および内面ヘラミガキ	⅓、黒色処理
−21	杯	11 × ×	暗褐色(内面赤褐色)、良好、体部外面ヘラケズリの他すべてヘラケズリ	⅙
−22	杯	10 × ×	黒色(内面茶褐色)、良好、体部外面ハケ調整後上半ヘラケズリ、口縁部−内面ヘラミガキ	¼
−23	杯	18 × ×	暗褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅛
−24	杯	13.8 × 3.3 ×	暗褐色(黒斑有り)、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラミガキ	⅕
−25	杯	15 × ×	暗褐色、良好、体部外面ナデ調整、内面ヘラミガキ	⅛
−26	杯	12 × ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリ	⅓
−27	杯	12.8 × ×	暗黄褐色（黒斑有り）、良好、体部外面ナデ調整	⅙
−28	杯	12.5 × ×	黒色、不良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	⅓
−29	杯	14 × ×	淡茶褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅒
−30	杯	12.8 × 3 ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	⅙

−31	杯	12.8 × 4.1 ×	淡茶褐色（黒斑有り）、良好、体部外面ヘラケズリ	¼
−32	杯	13 × ×	暗褐色、赤色粒子、良好、ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	⅛
−33	杯	12.7 × ×	黒色、不良、体部外面ヘラケズリ	⅛、黒色処理
−34	杯	13.5 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	⅛
−35	杯	15 × ×	黒色、良好、外面ナデ調整、内面ヘラミガキ	1/10
−36	杯	14 × ×	赤色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ、内面に放射状暗文	⅙、赤彩
−37	杯	14 × ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリの他はすべてヘラミガキ	⅜
−38	杯	10.8 × ×	赤褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	¼、赤彩
−39	椀	11 × 7.8 ×	暗褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	⅜
−40	椀	15 × ×	黄褐色、良、体部名面ナデ調整	⅙
−41	椀	18.6 × ×	暗褐色（内面黒斑有り）、良好、全面ヘラミガキ	⅙
−42	椀	14.2 × ×	黒色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	⅓
−43	鉢	22.8 × ×	黄褐色、良好、口縁部外面ヘラナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	¼
−44	椀	16 × ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	¼
−45	鉢	15 × ×	黒色、不良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	¼
−46	甑	22.8 × ×	赤褐色、良好、体部外面ナデ調整、内面ヘラミガキ	⅙
−47	高　杯	12 × ×	赤色(杯内面黒色)、口縁部を除き外面ヘラケズリ、杯内面ヘラミガキ	脚部下半欠失、外面赤彩、内面黒色処理
−48	高　杯	× ×	淡茶褐色、赤色粒子、良好、外面および脚部内面ヘラケズリ、杯部内面ヘラミガキ	杯口縁部および杯部欠失、杯部内面黒色処理
−49	高　杯	× ×	赤色、良好、ヘラケズリの後、杯部および脚部内面ナデ調整	脚部のみ、赤彩
−50	手　捏	× 2.8 × 5.3	淡茶褐色、不良、ユビオサエ・ユビナデ	完形
−51	手　捏	× 4.2 × 6	暗褐色、不良、ユビオサエ・ユビナデ	⅙
−52	甑	23 × 19 × 8.6	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ、単孔	⅜
−53	甕	14 × 22.5 × 5.8	淡茶褐色(黒斑有り)、不良、体部内外面、底部いずれもナデ調整	完形
−54	甕	12 × 16.2 × 5.4	暗黄褐色、良好、体部外面および底部ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	完形
−55	甕	16 × ×	暗褐色、良好、全面ナデ調整	胴上半¼
−56	甕	11.2 × ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	胴上半¼
−57	甕	17 × ×	赤褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	胴上半のみ
−58	甕	14 × ×	暗褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半⅜
−59	甕	15.6 × ×	暗黄褐色、不良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半、¼
−60	甕	15 × ×	暗茶褐色(黒斑有り)、不良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半¼
−61	甕	17 × ×	茶褐色、良、外面および体部内面ヘラケズリ	口縁部¾
−62	甕	16.6 × ×	暗褐色、不良、体部内外面ともナデ調整	胴上半¼
−63	甕	23.4 × 33.3 × 10	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面もナデ調整、底部に木葉痕を残す	¼
−64	甕	16.6 × ×	茶褐色(外面黒斑有り)、良好、体部外面ともヘラケズリの後内面のみヘラケズリを施す	胴上半⅓
−65	甕	19 × ×	黄褐色、不良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半¼
−66	壺	16 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後体部外面下半・体部内面ナデ調整	胴上半⅜

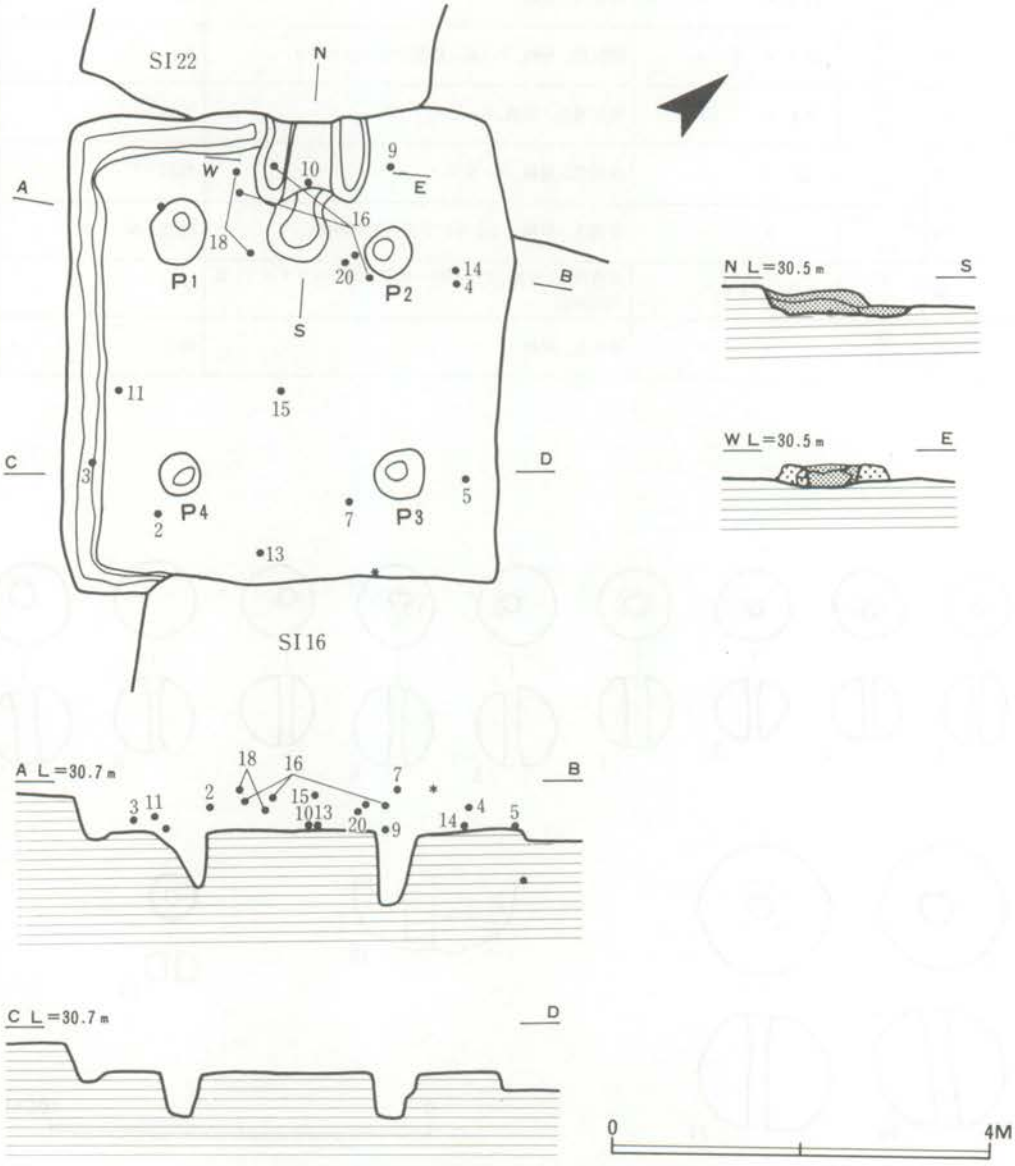
−67	甕	21.7	×	×	暗褐色、不良、体部内外面ともタデ調整	胴上半⅕
−68	甕	20.2	×	×	淡黄褐色、石英・雲母、良好、体部内外面ともナデ調整	胴上半⅙
−69	甕		×	× 7.5	暗黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整、底部に木葉痕を残す	底部のみ
−70	甕		×	× 8.4	暗褐色、不良、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	底部¾
−71	壺	22	×	×	黄褐色、不良、体部内外面ともナデ調整	胴上半⅙
−72	甕		×	× 8.5	暗褐色(内面黒色)、不良、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	胴下半⅓
−73	甕		×	× 7	暗褐色、不良、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	胴下半½
−74	蓋(S)	12.7	×	× 3.7	暗灰色、堅緻、?−R−天井部回転ヘラケズリ	⅗
−75	蓋(S)	11.2	×	×	灰褐色、堅緻、?−?−?	⅒
−76	杯(S)	11.5	× 5	×	暗灰色、堅緻、?−R−体部回転ヘラケズリ	⅓
−77	杯(S)	9.4	×	×	暗灰褐色、堅緻、?−?−?	⅒以下
−78	杯(S)	13	×	×	灰褐色、堅緻、?−R−?	⅒以下
−79	高杯(S)		×	×	灰褐色、堅緻、３ケ所に２段の長方形透し	脚部のみ
−80	壺(S)	8.2	× 4.6	×	淡青灰色、堅緻、?−不明−底部手持ちヘラケズリ、肩部に刻目	完形
−81	鬲(S)		×	×	青灰色、堅緻	破片



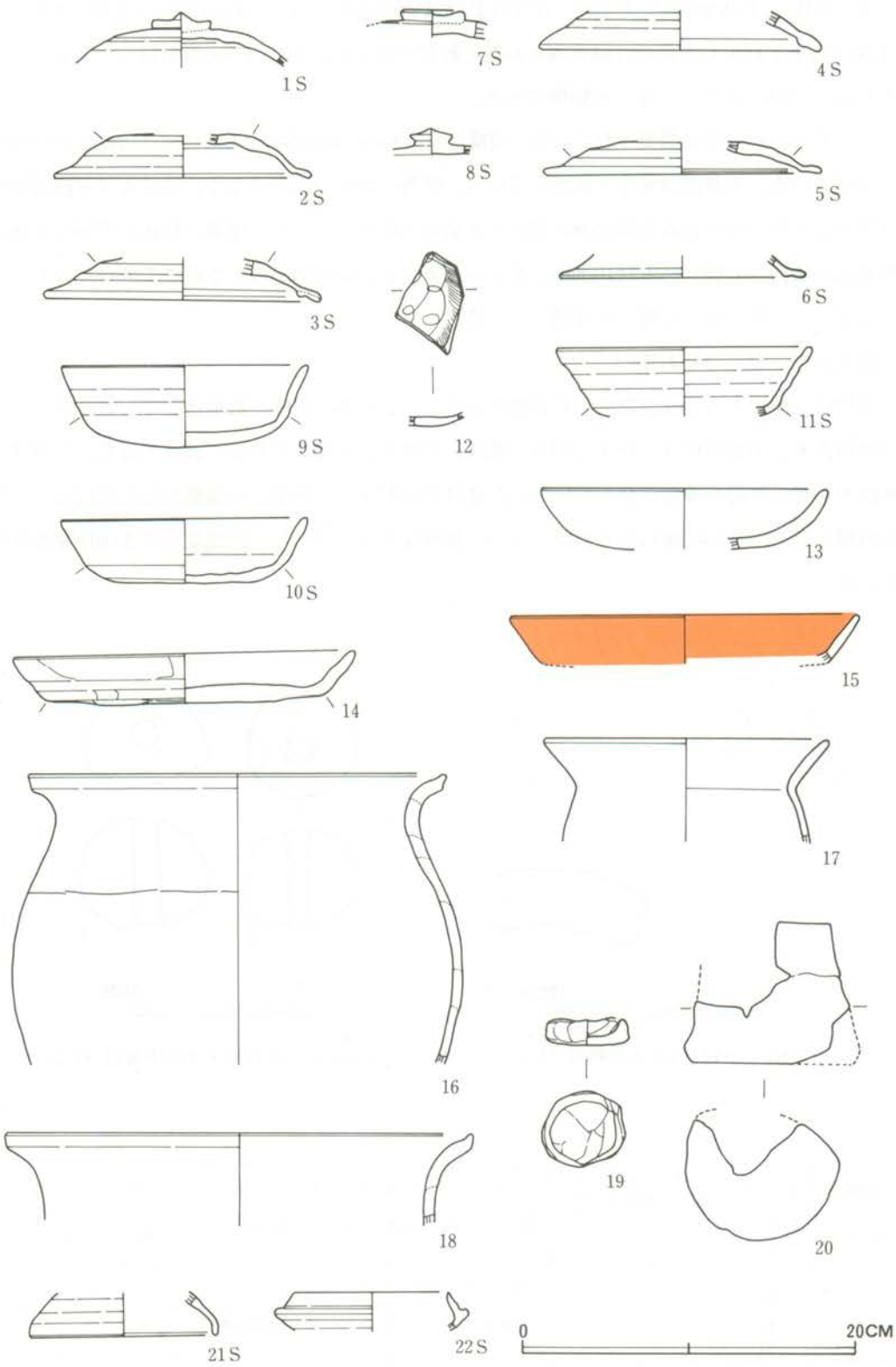
第225図　SI16出土土玉・石製品実測図（1/2）

ＳＩ17（第226～229図、ＰＬ84－２）

Ｂ２、Ｂ３グリッドに位置し、ＳＩ16の北西コーナーとＳＩ22の南東コーナーを切っている。規模は4.9m×4.6mの南北にやや長い正方形を呈し、主軸はＮ－55°－Ｗである。壁は北東コーナー部分に近世の墓坑により攪乱され、また北辺と東辺のＳＩ16の覆土中に作られた壁は確認できず、不明である。西辺半分と南辺の壁は40cm程の遺存度である。壁溝は全周していたと思われるが、前述のように壁の確認できなかった部分は同様に不明である。幅は40cmで、深さ８cmである。柱穴は４本検出された。並び具合に間隔のバラツキがあるが、対角線上では並んで



第226図　ＳＩ17実測図（1/80）



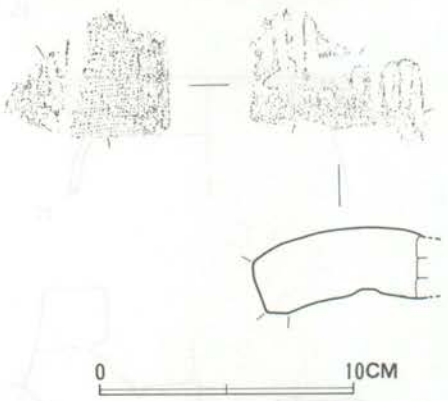
第227図　SI 17出土土器実測図（1/4）

いる。規模は径50cm前後であるが、深さはP_1とP_2が80cmで、P_3とP_4は50cmである。床面はSI16の覆土を利用した部分は踏み固めが弱く軟弱であるが、それ以外の部分はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

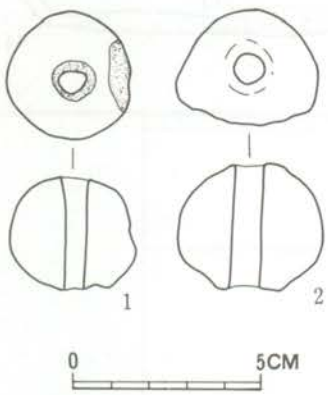
カマドは西辺中央に構築されている。規模は全長85cm、幅120cmである。袖は山砂を20cm程積み上げている。天井部は完全に崩壊している。壁外への掘り込みはなく、逆にカマド設置部分は当初より壁の掘り込みを幅80cmの部分を手前10cmは残している。煙道の存在が不明である。燃焼部の床面への掘り込みは10cm程であるが、カマドの前面70cmのところまで続いている。ここにブロック状になった焼土が堆積している。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器と土玉と瓦が散乱した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋8、須恵器杯3、杯1、皿3、甕3、手捏1、支脚1である。瓦は平瓦で、色調は赤褐色を呈し、雲母を多量に含んでいる。凸面は平行叩きで、凹面には調整がなく布目痕および布の綴じ合せ部分が明瞭にあらわれている。側縁はヘラケズリし、凹面端部は1cm程面取りしている。



第228図　SI17出土瓦実測図（1/3）



第229図　SI17出土土玉実測図（1/2）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI17－1	蓋 （S）	×　×	灰褐色、黒色粒子、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ	口縁部欠失、½
－2	蓋 （S）	15.6 ×　×	灰褐色、雲母、良好、？－R－回転ヘラケズリ	鈕欠失、⅙
－3	蓋 （S）	16.6 ×　×	淡黄褐色、石英・雲母、不良、？－R－天井部回転ヘラケズリ	鈕欠失、⅙
－4	蓋 （S）	17 ×　×	灰褐色、良好、？－R－？	口縁部のみ破片

−5	蓋（S）	16.8 × ×	灰白色、長石・石英、良好、？−R−天井部回転ヘラケズリ	鈕欠失、1/8
−6	蓋（S）	14.8 × ×	黄白色、雲母、不良、？−？−調整不明	口縁部のみ1/8
−7	蓋（S）	× ×	灰褐色、長石・石英、良好、？−R−天井部手持ちヘラケズリ	体部欠失
−8	蓋（S）	× ×	灰白色、長石、良好	体部欠失
−9	杯（S）	14.8 × 4.8 ×	灰褐色、雲母、良好、？−R−体部下半および底部に不明瞭な手持ちヘラケズリ、外面に「メ」の線刻	3/4
−10	（S）	14.7 × 3.8 × 8.2	灰褐色、長石・雲母、良好、？−R−体部下半および底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
−11	杯（S）	15 × ×	淡灰褐色、雲母、良好、？−？−底部手持ちヘラケズリ	底部欠失1/4
−12	杯	× ×	暗褐色、良好、内外面ナデ調整、斜放射状暗文、ラセン暗文が施されている。	底部破片
−13	皿	17 × ×	赤褐色、良好、全面ヘラミガキ	1/10以下
−14	皿	20.5 × 2.8 × 16.8	赤褐色、黒色粒子、良好、外面ヘラケズリ、内面入念ヘラミガキ	3/5
−15	皿	20.8 × 4 × 18	赤色、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	1/10以下、赤彩
−16	甕	25 × ×	暗黄褐色、長石・石英・雲母、良好、体部内外面ナデ調整	胴部下半欠失、1/4
−17	甕	17 × ×	黄褐色、良好、体部内外面ともナデ調整	胴部上半1/8
−18	甕	28 × ×	淡茶褐色、長石・石英・雲母、良好、全面ヨコナデのみ	口縁部1/4
−19	手　捏	× 1.7 ×	黄褐色、良好、ユビナデ・ユビオサエ	完形
−20	支　脚		底部に木葉痕を残す	

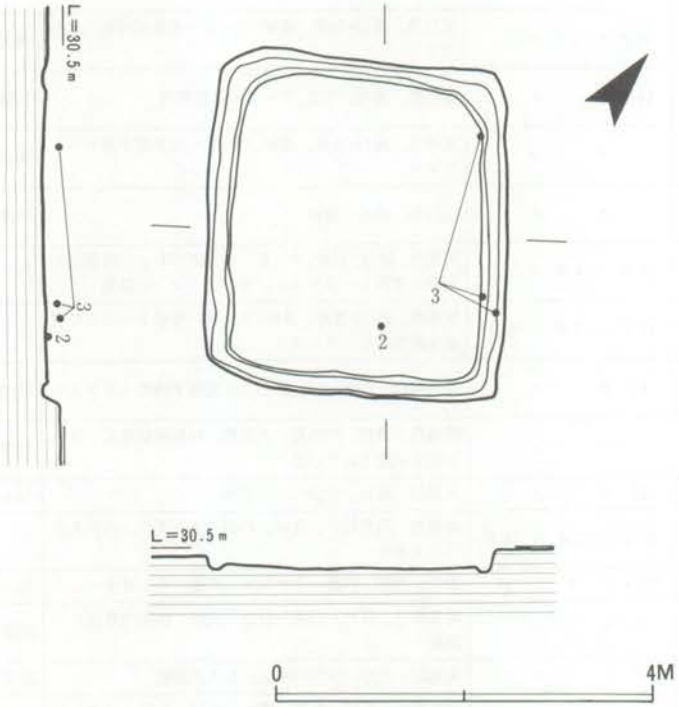
Ｓ１18（第230〜232図、ＰＬ85−１）

Ｂ２グリッドに位置する。規模は3.4m×3.2mの隅丸の正方形を呈し、主軸はＮ−32°−Ｗである。壁の遺存はあまりよくなく、13〜20cmである。壁溝は全周している。北辺の２コーナーが大きくふくらんでいる他は一定の規模である。幅は20〜30cmで、深さは５cmである。柱穴はない。床面はソフトローム面を利用して、踏み固めがあまりしてないために軟弱である。

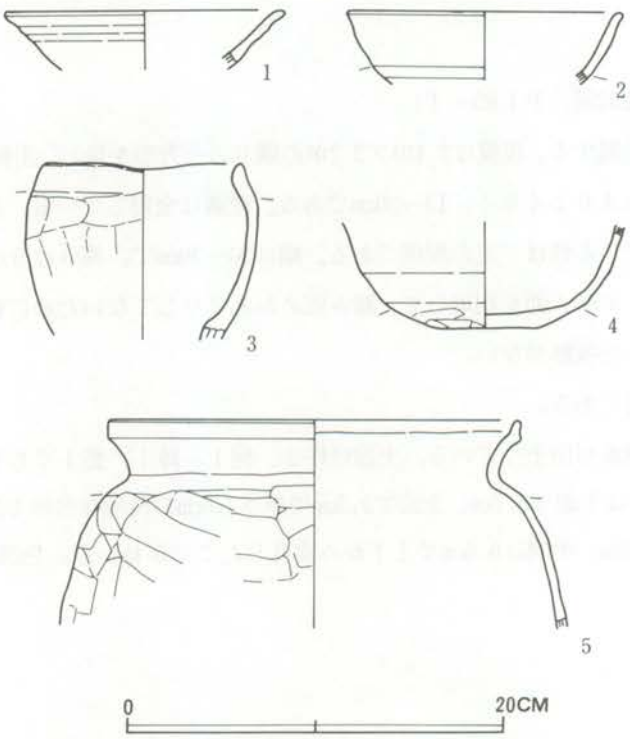
カマドは構築された痕跡がない。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器と紡錘車が出土している。土器は杯２、椀１、鉢１、甕１である。紡錘車は土製で半欠品である。径は下面で5.7cm、上面で2.3cmで厚さ2.6cmの極端な台形を呈している。孔は上面1.1cm、下面0.9cm、中間は0.6cmで上下から穿孔したことがわかる。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。

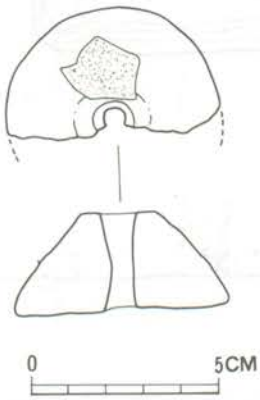


第230図　SI18実測図（1/80）



第231図　SI18出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ18－１	杯	14.4 ×　　×	黄褐色、良、？－？－？	体部1/6以下
－２	杯	14.2 ×　　×	淡茶褐色、良好、？－Ｒ－体部下半回転ヘラケズリ	体部1/6以下
－３	鉢	10.4 ×　　×	淡黄褐色、不良、体部外面・内面ヘラケズリ	底部欠失1/3
－４	椀	(1.5)×　　× 5.5	淡黄褐色（内面黒色）、良好、？－Ｒ－体部下端および底部全面手持ヘラケズリ	口縁部欠失、1/6
－５	甕	21.8 ×　　×	暗黄褐色、石英、不良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半1/3



第232図　ＳＩ18出土土製
紡錘車実測図（1/2）

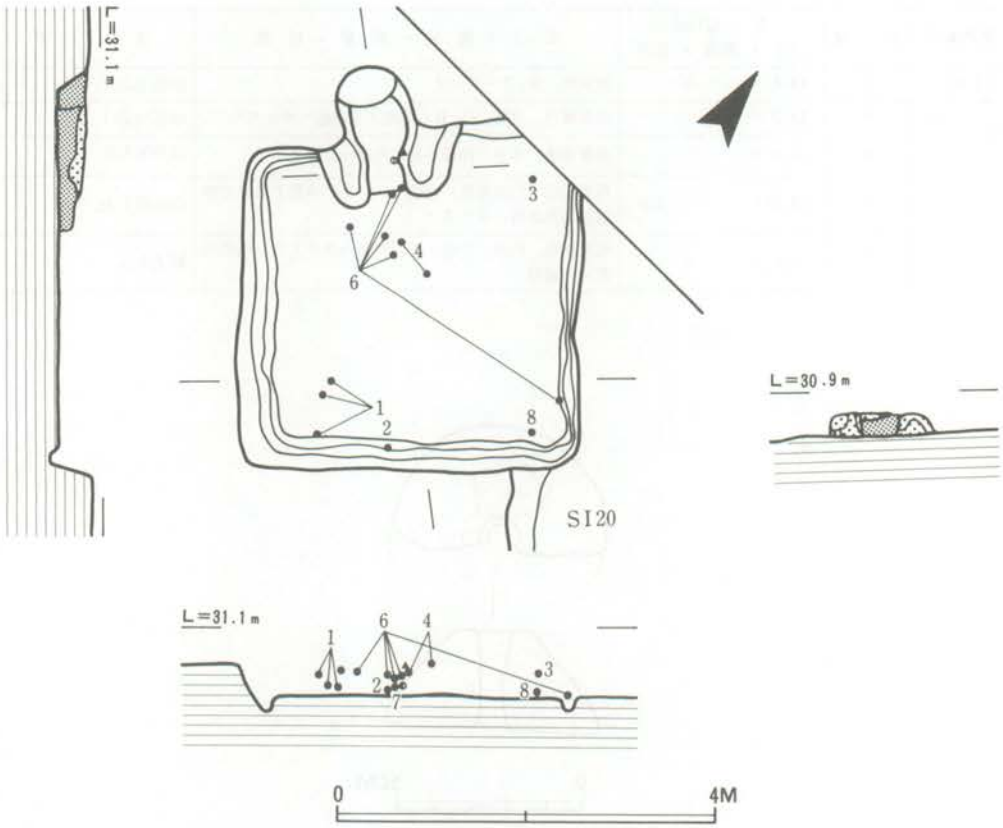
ＳＩ19（第233～235図、ＰＬ85－２）

住居跡の北側に位置し、Ａ２、Ａ３グリッドにまたがって所在し、ＳＩ20を切っている。北東コーナーは境界外になってしまい、未掘である。規模は3.6m四方の正方形を呈し、主軸はＮ－46°－Ｗである。壁は比較的に残りがよく、30～40cm程である。壁溝は全周している。幅は東辺が狭く20cmであるが、他は40cmである。深さは５～12cmである。柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。

カマドは北辺中央に構築されている。規模は全長、幅ともに1.4mである。袖は砂質粘土を主体とし、部分的に黒褐色土を混ぜて、25cm程積み上げている。天井部は完全に崩壊している。掘り方は幅75cm、壁外へ70cm楕円形に掘り込んだもので、立ち上り傾斜は80°である。燃焼部の床面への掘り込みはないが、焼土、灰が多量に堆積している。

覆土は単一な土層である。

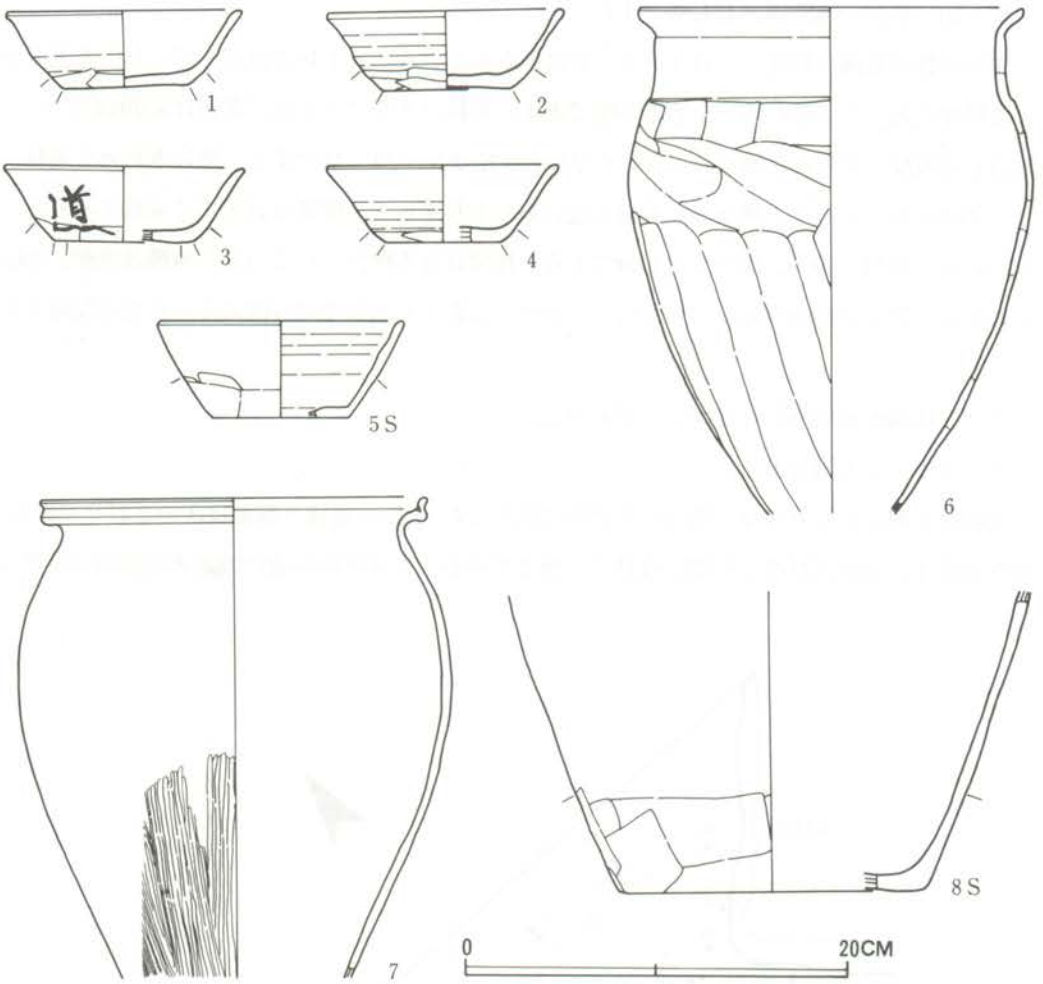
遺物は土器と紡錘車が散在した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯１、須恵器甕１、杯４、甕２である。紡錘車は土製で上面2.3cm、下面3.5cm、最大径は



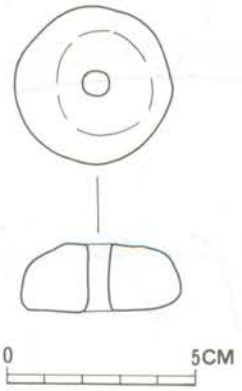
第233図　SI19実測図（1/80）

中位にあり4.2cmである。厚さは1.9cmで、孔は6㎜である。全体に丸みをもち扁平なものである。色調は赤褐色で、焼成は甘い。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI19－1	杯	12.2 × 3.9 × 6.7	淡赤褐色（黒斑有り）、良好、？－R－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	⅓
－2	杯	12.3 × 3.9 × 6.8	淡黄褐色（黒斑有り）、良好、？－R－体部下端および手持ちヘラケズリ	⅓
－3	杯	12.4 × 3.9 × 7.2	茶褐色、良好、回転糸切り－R－体部下端および底部周縁手持ちヘラケズリ	¼、外面に「道」の墨書
－4	杯	12 × 4 × 6	淡褐色、良好、？－R－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	½
－5	杯 （S）	12.5 × 4.9 × 7	淡褐色、雲母、不良、？－？－体部下半および底部全面手持ちヘラケズリ	⅙
－6	甕	20 × ×	淡茶褐色、良、体部内外面ヘラケズリの後内面のみナデ調整	底部欠失
－7	甕	20.2 × ×	暗褐色（内面黒色）、長石・石英・雲母、不良、体部内外面ナデ調整の後体部内外面ヘラミガキ	底部欠失、¼
－8	甕 （S）	× × 16	淡黄褐色、雲母、不良、体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ、内面ナデ調整	胴下半⅓



第234図　SI19出土土器実測図（1/4）



第235図　SI19出土土製
紡錘車実測図（1/2）

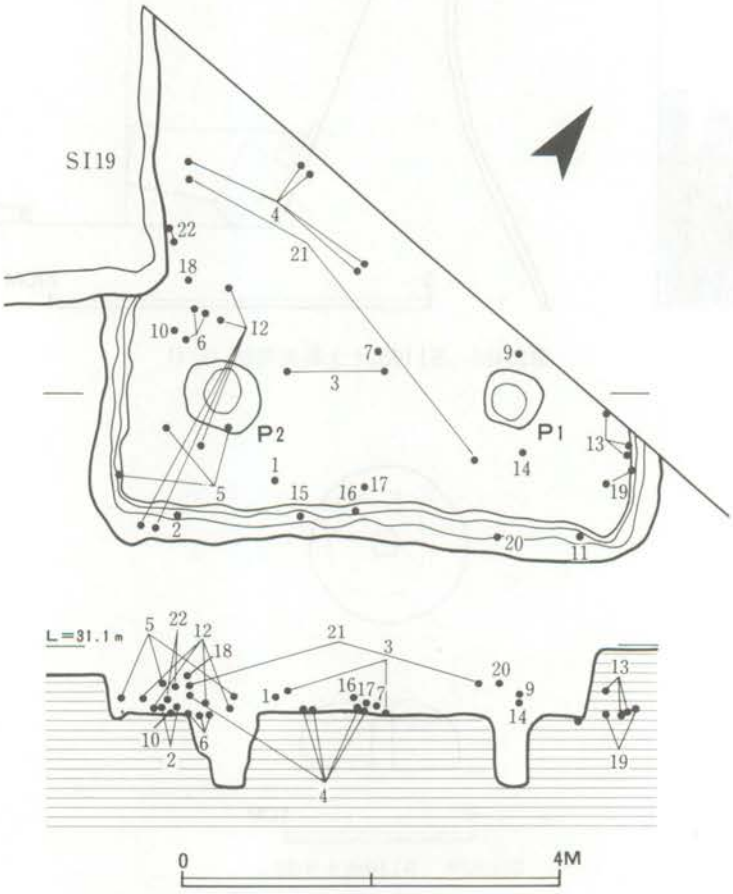
ＳＩ20（第236・237図、ＰＬ86－１）

住居跡群の北端に位置し、Ａ３グリッドに所在している。ＳＩ19に西辺を切られ、北側半分は境界外に入っているため、全容は不明である。規模は不明であるが、南辺は5.9mあるので、他辺も同規模と思われ、隅丸の正方形を呈し、主軸はＮ－29°－Ｗである。壁はきわめて遺存がよく50cmを有しており、溝底から垂直に近い立ち上りを示す。壁溝はおそらく全周するものと思われる。幅34～40cm、深さ５～10cmである。柱穴は２本検出されている。規模は径80、60cmであるが、深さは75cmである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

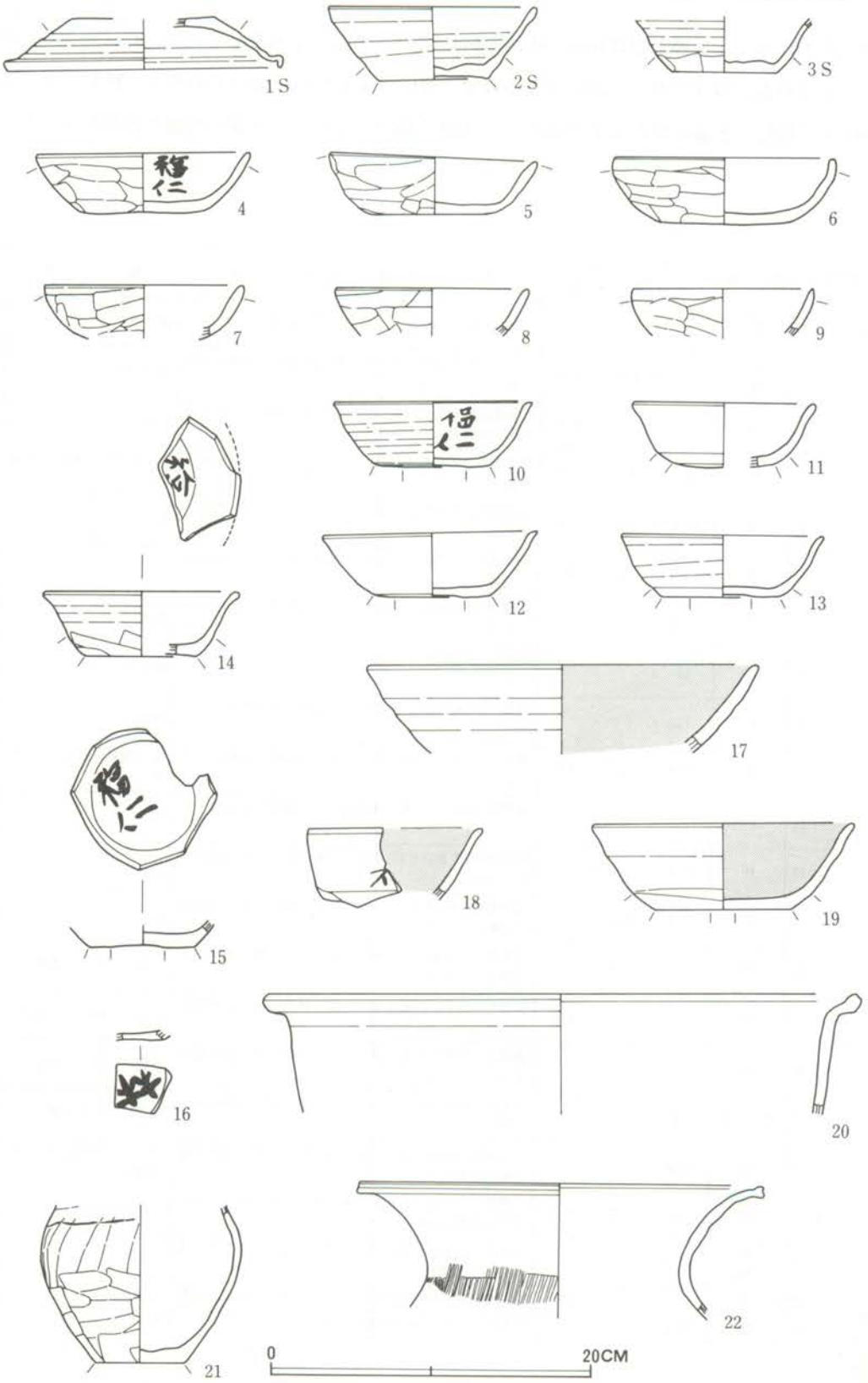
カマドは調査範囲外に存在すると思われる。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器がかなり多量に散在した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋１、須恵器杯２、杯13、浅鉢１、椀２である。本住居跡の遺物の最大の特徴は墨書土



第236図　ＳＩ20実測図（1/80）



第237図　ＳＩ20出土土器実測図（1/4）

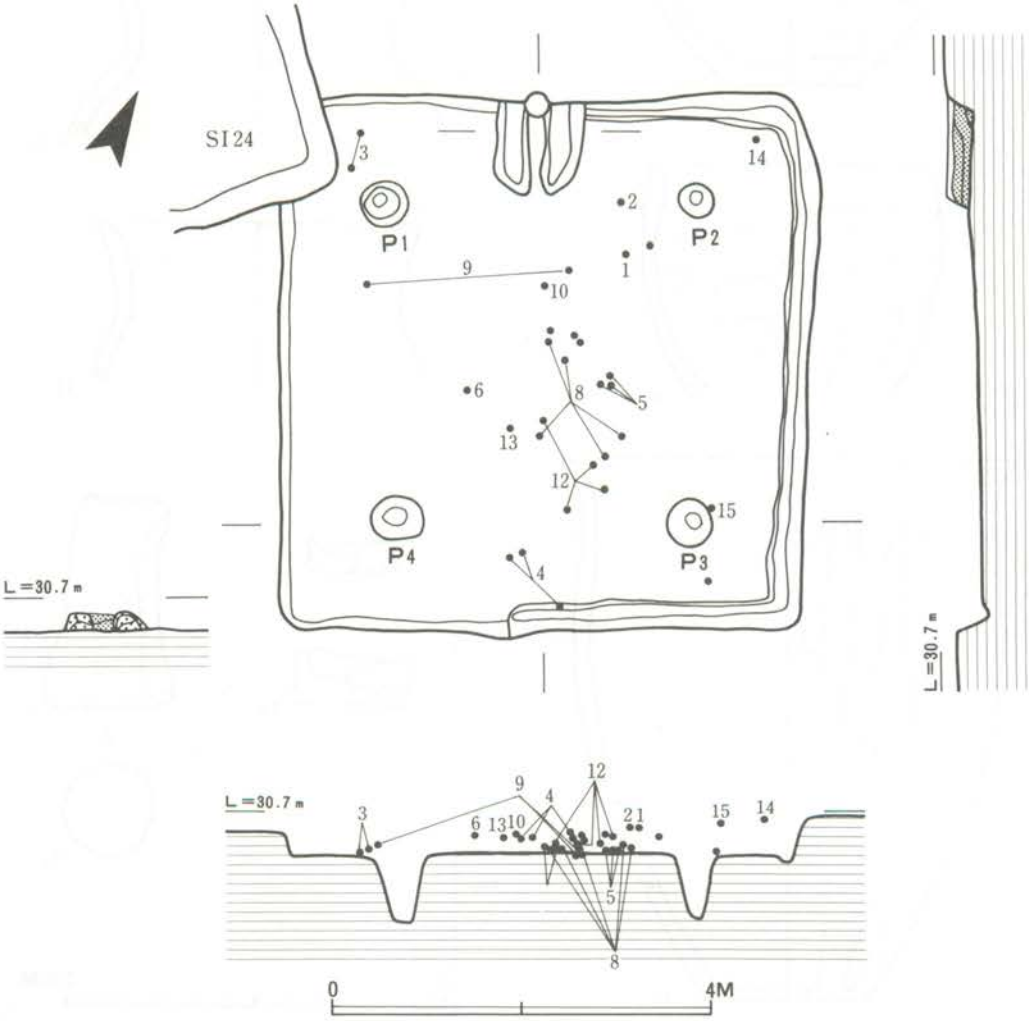
器の多さである。墨書土器は16の「林」以外はすべて「福仁」である。４、10、15は完全に「福仁」と読める。14は「福」と認定できるので「福仁」はまちがいないであろう。18も「ネ」はやはり「福仁」と書かれたものであろう。この「福仁」はすべて土器の内面に書かれている。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ20－１	蓋 （Ｓ）	17 ×　　×	灰褐色、長石、堅緻、？－Ｌ－天井部回転ヘラケズリ	鈕欠失、¼
－２	杯 （Ｓ）	12.8 × 4.6 × 6.9	灰白色、雲母、良好、？－Ｒ－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	ほぼ完形
－３	杯 （Ｓ）	×　　× 6.5	暗灰褐色、長石・雲母、良好、？－Ｒ－体部下半および底部全面手持ちヘラケズリ	口縁部欠失、⅓
－４	杯	13 × 3.6 × 7.8	淡赤褐色、赤色粒子、良好、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	⅔、内面に「福仁」の墨書
－５	杯	12.8 × 3.7 × 7.8	淡茶褐色、赤色粒子、良好、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	⅓
－６	杯	13.5 × 4 × 8	淡黄褐色、赤色粒子、良好、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	⅓
－７	杯	12.2 ×　　×	黄褐色(内面黒色)、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	体部½
－８	杯	12 ×　　×	暗褐色(内面黒色)、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	体部¼
－９	杯	11 ×　　×	淡褐色(内面黒色)、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ	体部⅙
－10	杯	12.4 × 4 × 7.3	黄白色、良好、回転糸切り－Ｒ－底部周辺回転ヘラケズリ	⅚、内面に「福仁」の墨書
－11	杯	11.2 × 4 × 6.3	黄褐色、良好、？－Ｒ－体部端および底部回転ヘラケズリ	⅓
－12	杯	13.2 × 3.9 × 7.4	暗赤褐色(黒斑有り)、不良、回転糸切り－Ｒ－底部回転ヘラケズリ	⅔
－13	杯	12.4 × 3.8 × 7.2	淡茶褐色(黒斑有り)、不良、回転糸切り－Ｒ－底部周辺回転ヘラケズリ	⅓
－14	杯	12.2 × 3.9 × 7	赤褐色、赤色粒子、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下半手持ちヘラケズリ	内面に「福」の墨書
－15	杯	×　　× 6.6	黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下半および底部周辺手持ちヘラケズリ	内面に「福仁」の墨書
－16	杯	×　　×	黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下半～底部周辺手持ちヘラケズリ	外面に「林」の墨書
－17	浅　鉢	24 ×　　×	明褐色（内面黒色）、良好、？－回転不明－内面ヘラミガキ	体部¼、黒色処理
－18	椀	15.8 ×　　×	淡赤褐色（内面黒色）、雲母、良好、？－？－体部下端回転ヘラケズリ	体部¼、黒色処理、不明墨書有り
－19	椀	16 × 5.3 × 8.3	淡暗褐色、雲母、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下端および底部周辺回転ヘラケズリ	½、黒色処理
－20	甕 （Ｓ）	37.2 ×　　×	淡灰色、長石・石英、良好、体部外面平行タタキ、体部内面ナデ調整	口縁部⅕
－21	甕	×　　× 5.6	茶褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	口縁部欠失、⅛
－22	甕	25.4 ×　　×	黒褐色、良好、体部外面平行タタキ	⅕

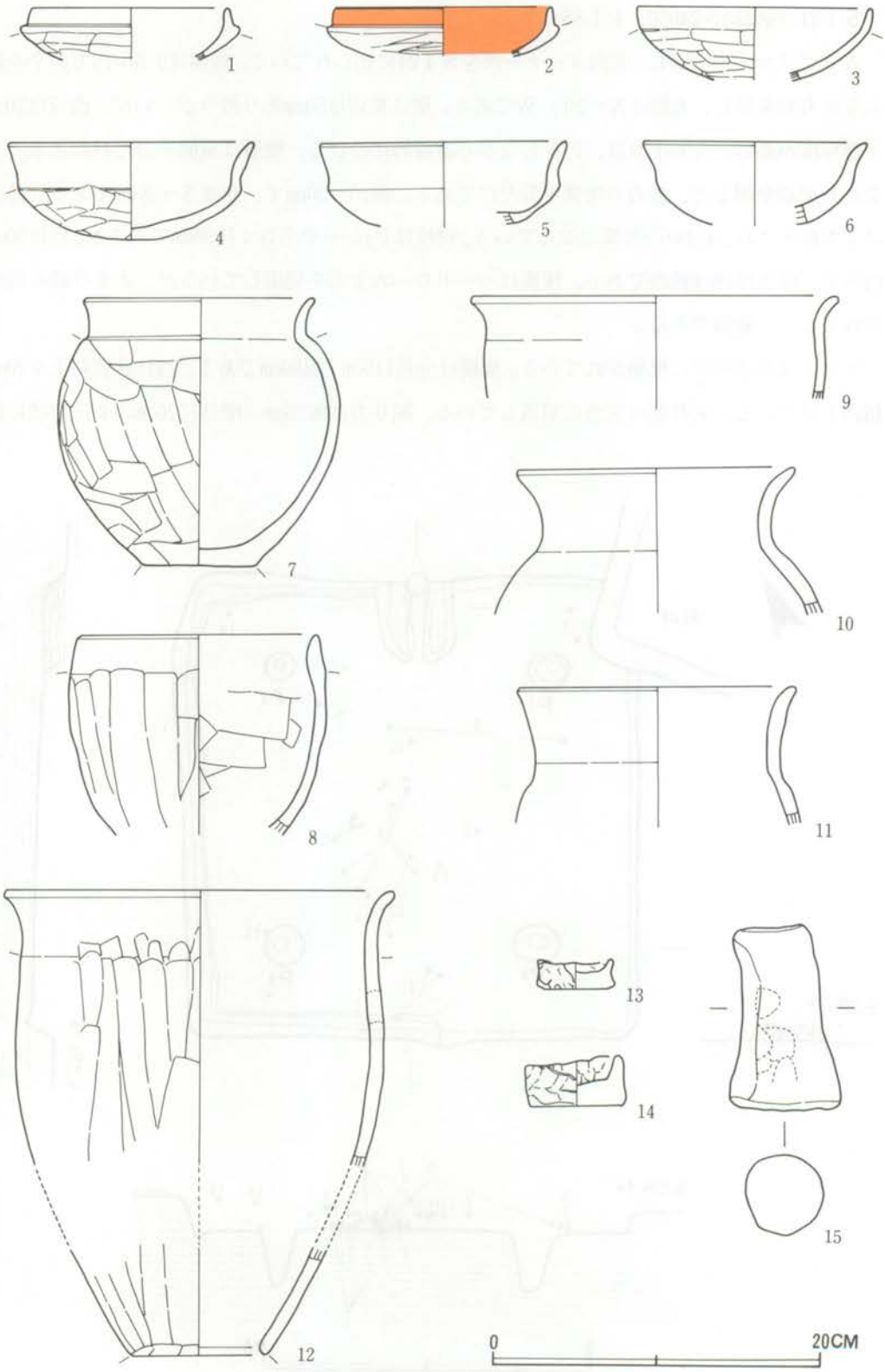
ＳＩ21（第238～240図、ＰＬ86－２）

Ａ２グリッドに位置し、北西コーナー部をＳＩ24に切られている。規模は5.5m四方のやや隅丸な正方形を呈し、主軸はＮ－20°－Ｗである。壁は東辺は50cmあり残りがいいが、西辺は20cmと遺存度が悪い。立ち上りは、外反しながら直線的にのびる。壁溝は東側半分だけにある。すなわち東辺全部と北、南辺の東側半分だけである。幅25～30cmで、深さ５～８cmである。柱穴は４本検出され、3.3mの等間に並んでいる。規模はP_2がやや小さく径35cmであるが、他は50cm内外で、深さは70cm前後である。床面はハードローム上面を利用しているが、あまり踏み固められてなく、軟弱である。

カマドは北辺中央に構築されている。規模は全長110cm、幅90cmである。袖は砂質粘土を20cm積み上げている。天井部は完全に崩落している。掘り方は幅25cm、壁外に20cmの半円形状に掘



第238図　ＳＩ21実測図（1/80）

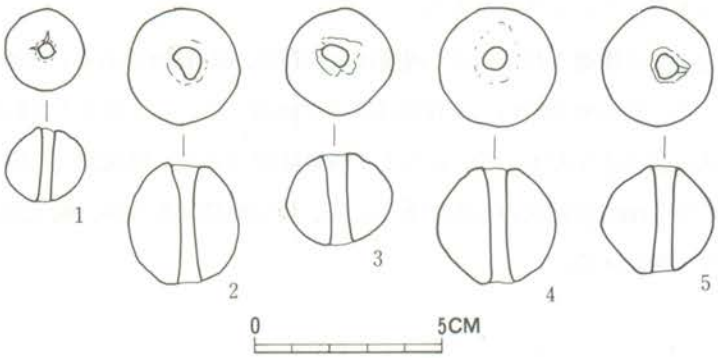


第239図　ＳＩ21出土土器実測図（1/4）

りこんだもので、立ち上り傾斜は64°である。燃焼部の床面への掘り込みはないが、焼土、灰はよく堆積している。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器と土玉がカマドの前面に集中する傾向を示して出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯６、甕３、鉢１、甑２、甕３、手捏ね３、支脚１である。



第240図　ＳＩ21出土土玉実測図（1/2）

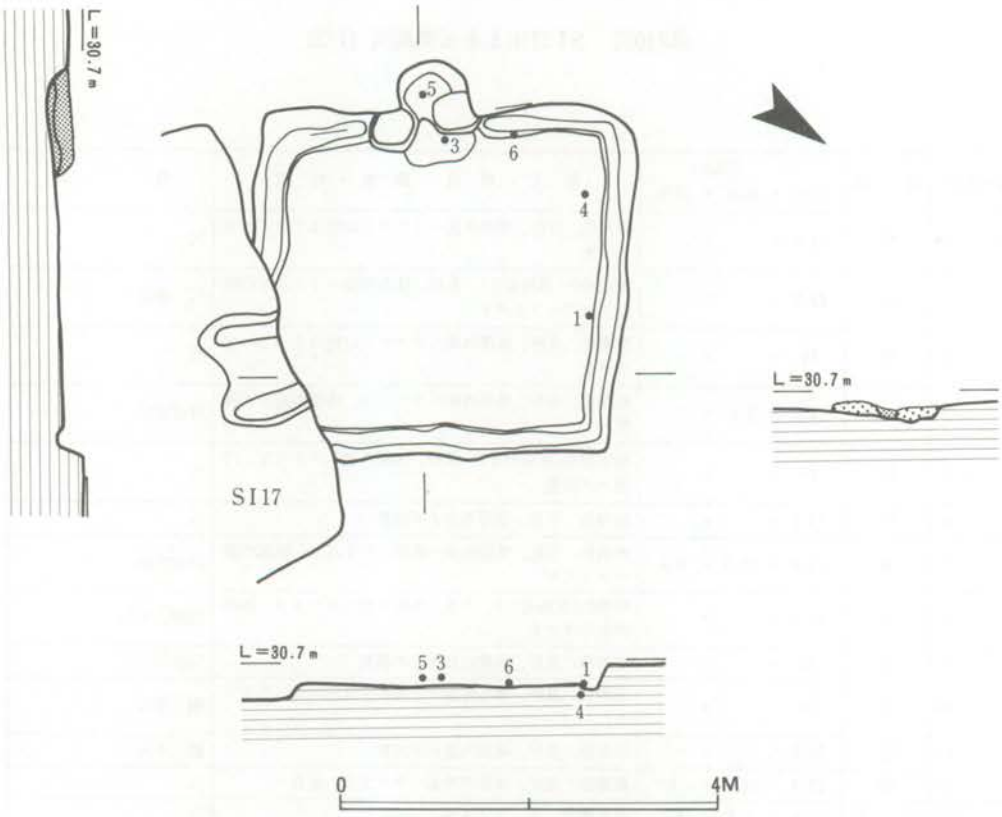
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ21－1	杯	11.8 ×　　×	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリの他はすべてヘラミガキ	¼
－2	杯	13.2 ×　　×	暗黄褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリの他はすべてヘラミガキ	⅙、赤彩
－3	杯	14 ×　　×	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリの他はすべてヘラミガキ	¼
－4	杯	14.6 × 5.8 ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	ほぼ完形
－5	杯	15 ×　　×	暗赤褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	¼
－6	杯	13.4 ×　　×	暗褐色、不良、体部外面ナデ調整	⅙
－7	甕	13.9 × 15.9 × 6.8	黄褐色、不良、体部外面～底部ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	ほぼ完形
－8	鉢	14.3 ×　　×	橙褐色(黒斑有り)、不良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	底部欠失½
－9	甑	22 ×　　×	赤褐色、良好、体部内外面ナデ調整	口縁部¼
－10	甕	16 ×　　×	赤褐色、良好、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラケズリ	胴上半¼
－11	甕	16.8 ×　　×	赤褐色、良好、体部外面ナデ調整	胴上半⅙
－12	甑	23.4 × 28.4 × 8	黄褐色、良好、体部内外面ヘラケズリ、単孔	⅛
－13	手　捏	4.5 × 1.8 × 4.7	淡茶褐色、良、ユビオサエ	½
－14	手　捏	5.6 × 2.9 × 5.8	暗茶褐色、不良、ユビオサエ	⅝
－15	支　脚	× 11 ×	淡茶褐色、良好	完形

ＳＩ22（第241・242図、ＰＬ87－１）

Ａ２グリッドに位置し、ＳＩ17に南東コーナーを切られている。しかし、この重複関係は出土遺物の比較によると逆転していることが判名しているので、南東コーナー付近は不明になっているのは遺憾である。規模は４ｍ×3.5ｍの南北に長い長方形を呈し、主軸はＳ－57°－Ｗである。壁は全体に25cm程の残りで均一な遺存度である。壁の立ち上りは外反ぎみである。壁溝は全周していたと思われるが、南東部分が不明である。幅は32～40cm、深さ10～15cmである。柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻であるが、南東部分には床がはっきりしないところがある。

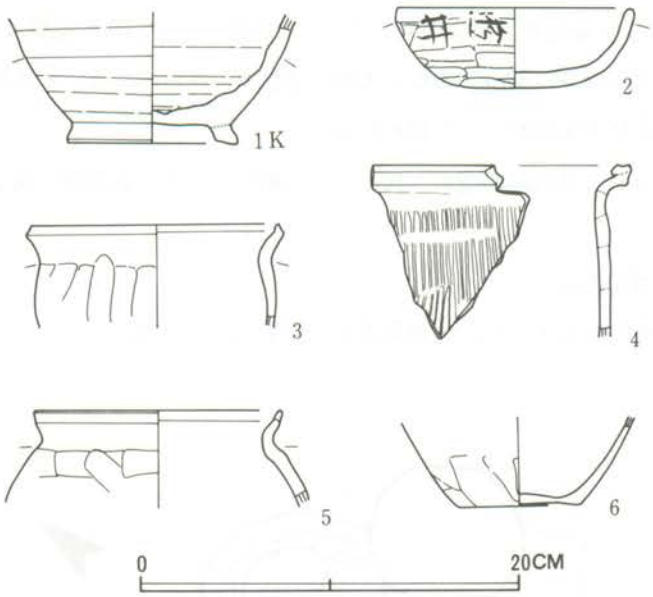
カマドは西辺中央に構築されている。規模は全長75cm、幅118cmである。袖は砂質粘土を15cm程積み上げている。袖がやや短い。天井部は完全に崩落している。掘り方は幅80cmで、壁外に60cmの半円形状に掘り込んだもので、立ち上り傾斜は60°である。燃焼部の床面への掘り込みは一番深いところで５cmの摺鉢状のものである。灰、炭の堆積はあるが、焼土はあまりない。

覆土は単一な土層である。



第241図　ＳＩ22実測図（1/80）

遺物はカマドを中心に北側に土器が散在している。土器の器種と数量は次のとおりである。灰釉長頸瓶１、杯１、甕３、甑１である。２の杯は体部に「□井」の墨書があり、おそらく「遊井」の可能性がある。１の灰釉陶器は本跡における唯一の例である。



第242図　ＳＩ22出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ22－1	壺 (K)	×　×　9	灰白色、堅緻、？－Ｌ－体部下半および底部全面回転ヘラケズリ	底部½
－2	杯	12.2 × 4.1 × 9.6	黄褐色(黒斑有り)、良好、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	完形
－3	甕	13 ×　×	茶褐色(内面黒色)、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半⅓
－4	甑	×　×	淡灰褐色、長石、内面上半回転ヘラナデ、下半ナデ調整	口縁部破片
－5	甕	13 ×　×	茶褐色（内面黒色)、不良、体部内外面ヘラケズリ	胴上半⅓
－6	甕	×　× 6.3	暗赤褐色、良好、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	

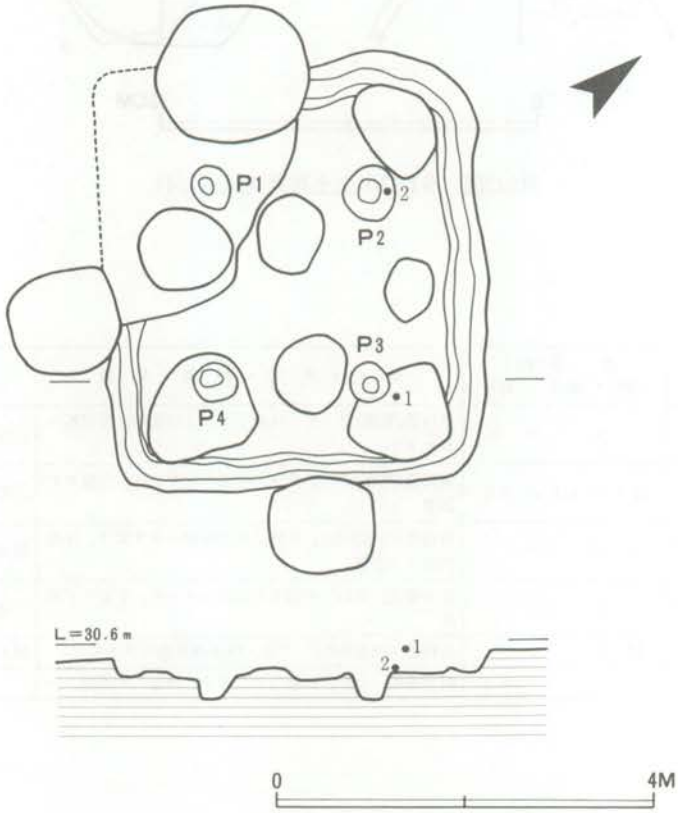
ＳＩ23（第243・244図、ＰＬ87－２）

Ｂ３グリッドに位置し、ＳＡ１、ＳＢ４に切られ、なおかつ南西コーナー付近を大きく攪乱されている。規模は4.4m×４mの東西にやや長い隅丸方形を呈し、主軸はＮ－51°－Ｗである。壁の遺存はあまりよくなく20cm前後である。壁溝は全周していたと思われる。幅は30～50cmでバラツキがあるが、北、西辺が幅広い。深さは３～６cmと全体に浅い。柱穴は４本検出された。P_2を除き攪乱されているため正確な規模とプランは不明である。P_2の規模は径60cmで、深さ47cmである。他のろ穴の深さは30cmである。床面は遺存率がきわめて低い。残存している部分からすると、当初は良好な床面だったと思われる。

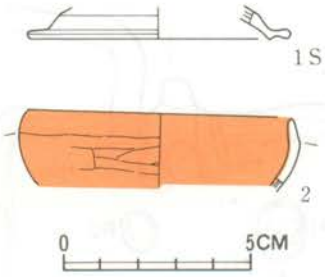
カマドは現状においては痕跡が認められないため攪乱されている部分に構築されていたと思われる。

覆土は単一な土層である。

遺物は土器が散在して出土した。須恵器蓋１、杯１が出土している。



第243図　ＳＩ23実測図（1/80）



第244図　ＳＩ23出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ23－1	蓋	14　×　　×	淡灰褐色、良好、？－Ｌ－？	口縁部⅙
－2	杯	14　×　　×	暗赤褐色、良好、体部外面ヘラケズリ	体部⅙、赤彩

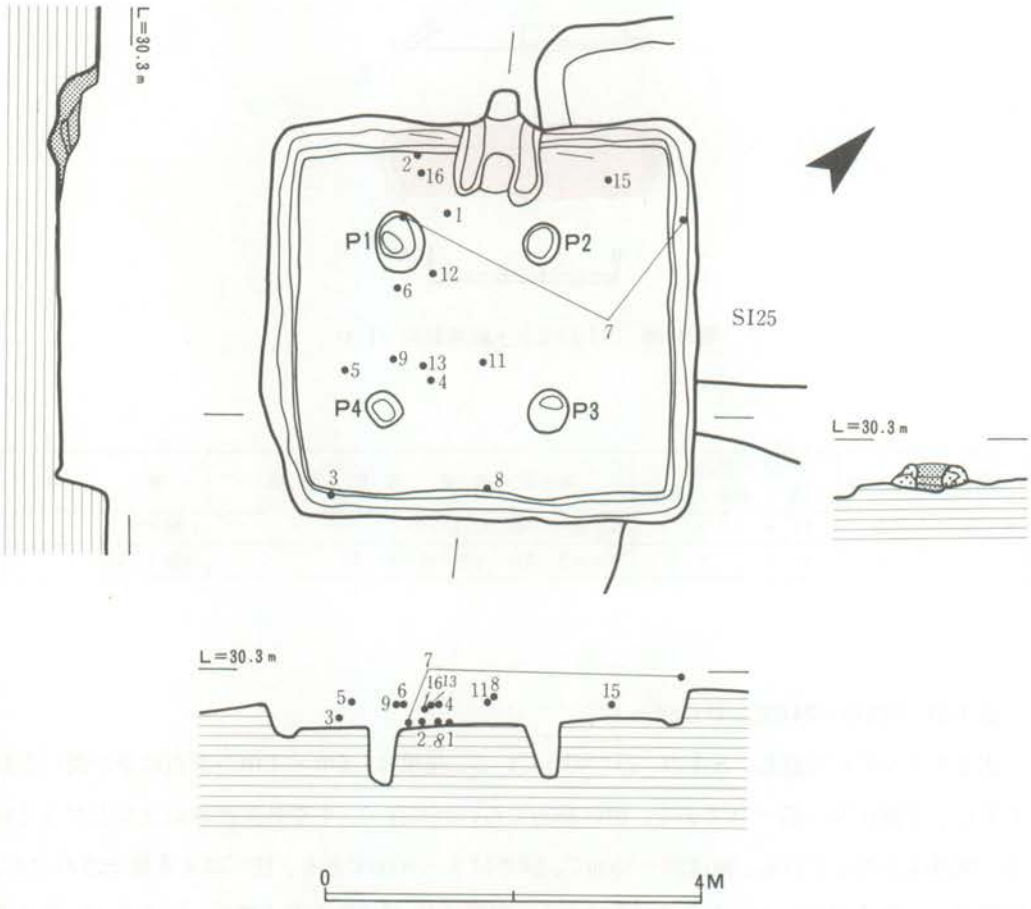
ＳＩ24（第245～247図、ＰＬ88－１）

Ａ２グリッドに位置し、ＳＩ21、25を切っている。規模は4.6m×４mの東西にやや長い方形を呈し、主軸はＮ－45°－Ｗである。壁は35cmぐらいの残存で、やや外反ぎみに立ち上がっている。壁溝は全周している。幅は20～35cmで、深さは５～８cmである。柱穴は４本検出されたが、間隔がやや狭くバラツキのある並び方である。規模はP_1がやや大きく径60cmであるが、他は径40cmである。深さはP_4が34cmと浅いが、他は51cmである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。ただ、南西コーナー付近はソフトローム面であるためはっきりしない。

カマドは西辺中央に構築されている。規模は全長120cm、幅95cmである。袖は砂質粘土を20cm程積み上げている。天井部は崩落している。掘り方は幅70cm、壁外へ35cm程長方形に掘り込んでおり、立ち上り傾斜は65°である。燃焼部の床面への掘り込みは一番深いところで10cmある、摺鉢状を呈するものである。焼土、灰は厚く堆積している。

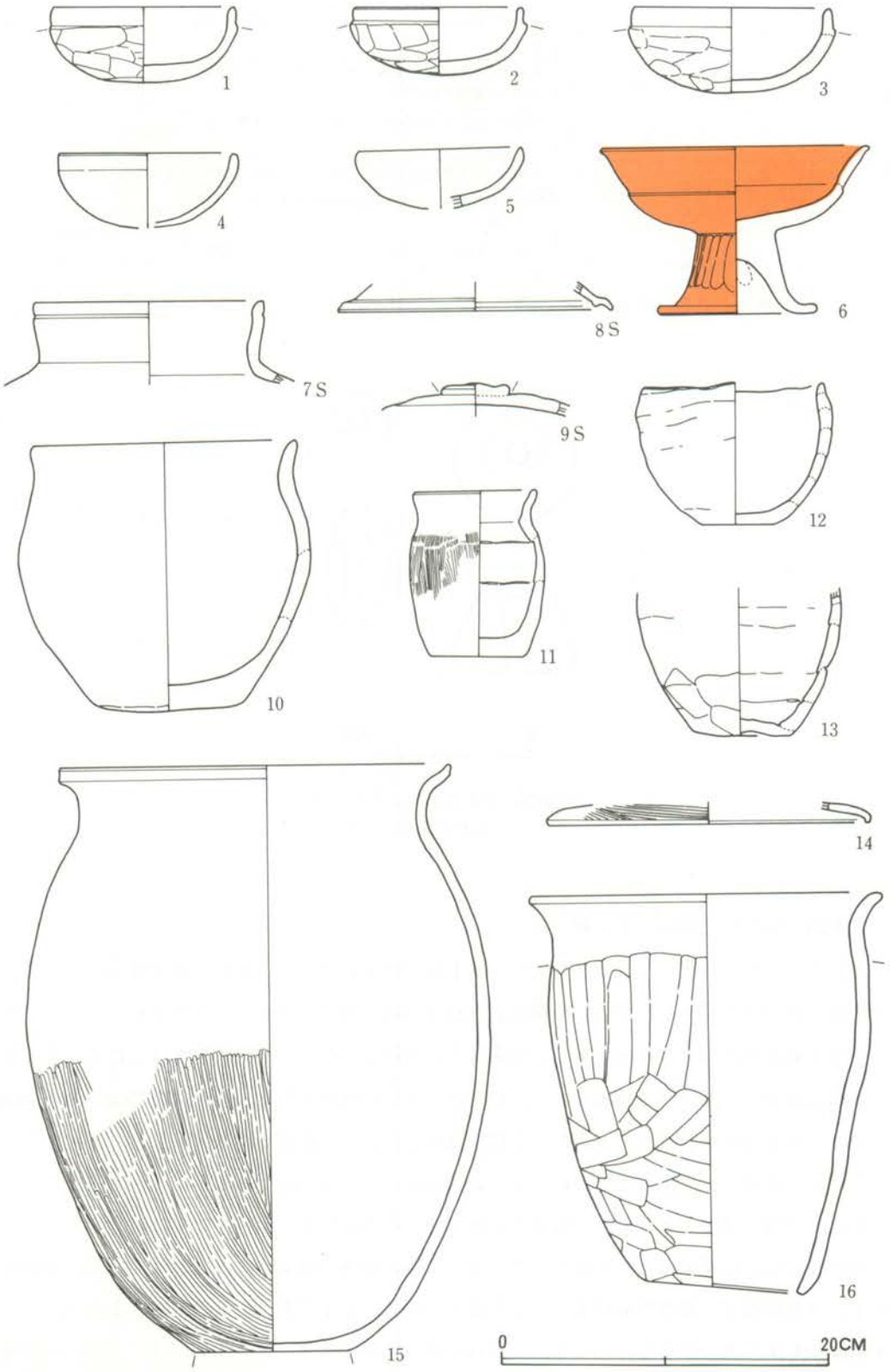
覆土は２層に分層できるが、一度に埋め戻された状況をよく示している。

遺物は土器、土玉、紡錘車がカマド付近と中央に集中して出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器壺１、須恵器蓋２、杯５、高杯１、甕４、鉢、蓋、甑が各１である。土製紡錘車は上面２cm、下面3.8cmで厚さ2.6cmである。孔は径６mmで、形態は稜の甘い台形をしている。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。



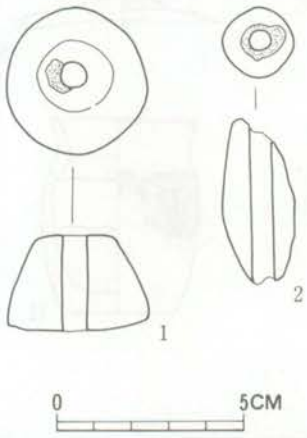
第245図　SI 24実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI24－1	杯	11 × 4.5 ×	茶褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、底部に木葉痕を残す	完形
－2	杯	10.3 × 4.1 ×	茶褐色(内面黒色)、不良、体部外面ヘラケズリ、底部に木葉痕を残す	完形
－3	杯	11.8 × 5.1 ×	淡黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、底部に木葉痕を残す	3/5
－4	杯	10.8 × 4.4 ×	黄褐色、良好、全面ヘラミガキ	1/2
－5	杯	10 × 3.5 ×	黒色、良好、全面ヘラミガキ	1/4
－6	高　杯	16.4 × 10 × 10	赤色(脚部内面黄褐色)、良好、杯外面～脚部外面ヘラケズリ、脚部内面指ナデ	3/4、赤彩
－7	壺 (S)	14 × ×	灰黒色、長石、堅緻、体部内面ナデ調整	口縁部
－8	蓋 S	17 × ×	灰白色、不良、?－?－?	口縁部1/4
－9	蓋 (S)	× ×	灰褐色、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	



第246図　SI 24出土土器実測図（1/4）

−10	甕	16 × 16 × 9	黄褐色、長石・石英、不良、体部内外面・底部ナデ調整	ほぼ完形
−11	甕	7.7 × 10 × 5.6	淡茶褐色、良好、ハケ調整の後、体部内外面ナデ調整、底部に木葉痕を残す	ほぼ完形
−12	鉢	11 × 8.5 × 4.3	茶褐色、良、体部内外面ナデ調整、底部に木葉痕を残す	ほぼ完形
−13	甕	× × 6	茶褐色（内面黒色）、内外面ヘラケズリの後ナデ調整	胴部のみ
−14	蓋	19.6 × ×	明茶褐色、堅緻、外面入念な暗文状ヘラミガキ、内面ナデ調整	口縁部1/10以下
−15	甕	23.6 × 35.7 × 9.3	淡褐色(黒斑有り)、石英、良、体部内外面ナデ調整の外面下半ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	ほぼ完形
−16	甑	21.6 × 24.4 × 9.5	茶褐色、良好、体部内外面ヘラケズリ	ほぼ完形



第247図　SI 24出土土製紡錘車
土玉実測図（1/2）

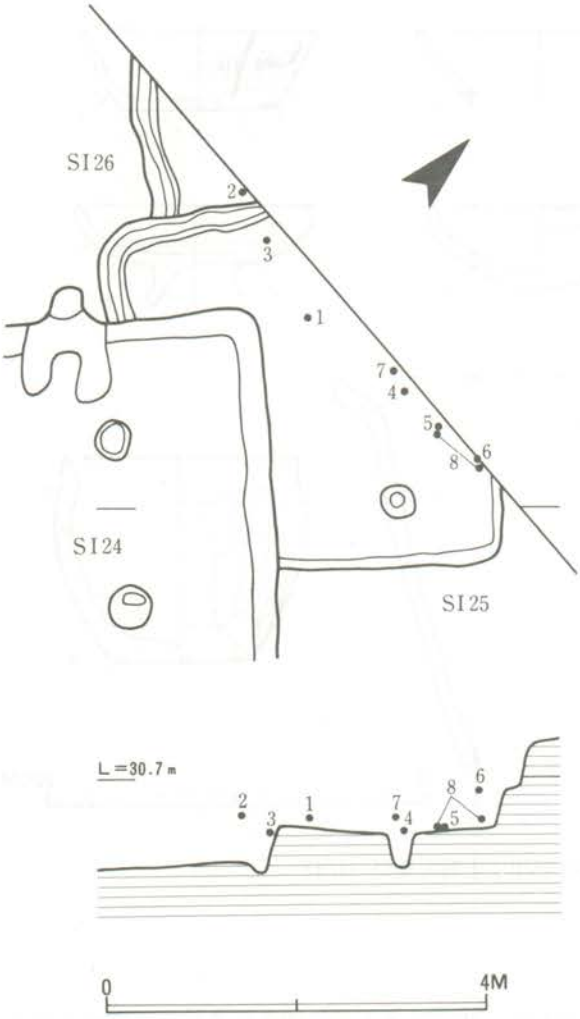
ＳＩ25（第248・249図、ＰＬ88－２）

Ａ２グリッドに位置し、ＳＩ26を切り、ＳＩ24に切られている。北側が境界外にはいっているため、全容ははっきりしない。規模は4.2m×3.8mの南北にやや長い方形を呈している。壁の残存は東辺だけがよく30cmである。壁溝は北、東辺にはなく、南、西辺だけにあるようである。幅は30cmで、深さ６～10cmである。柱穴は１本だけ検出された。規模は径35cm、深さ38cmである。床面はソフトロームを利用して踏み固めているが、軟弱である。

カマドは構築されていると思われるが、北辺か西辺からは不明である。

覆土は２層に分層できたが、一度に埋め戻している状況をよく示している。

遺物は土器が境界線にそって出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯１、須恵器蓋１、須恵器高杯１、須恵器甑１、杯３、甕１である。このうち、１～３、７の４個体は本住居跡に伴うものではなく、流れ込みのものである。３の体部には「立井」の墨書がある。

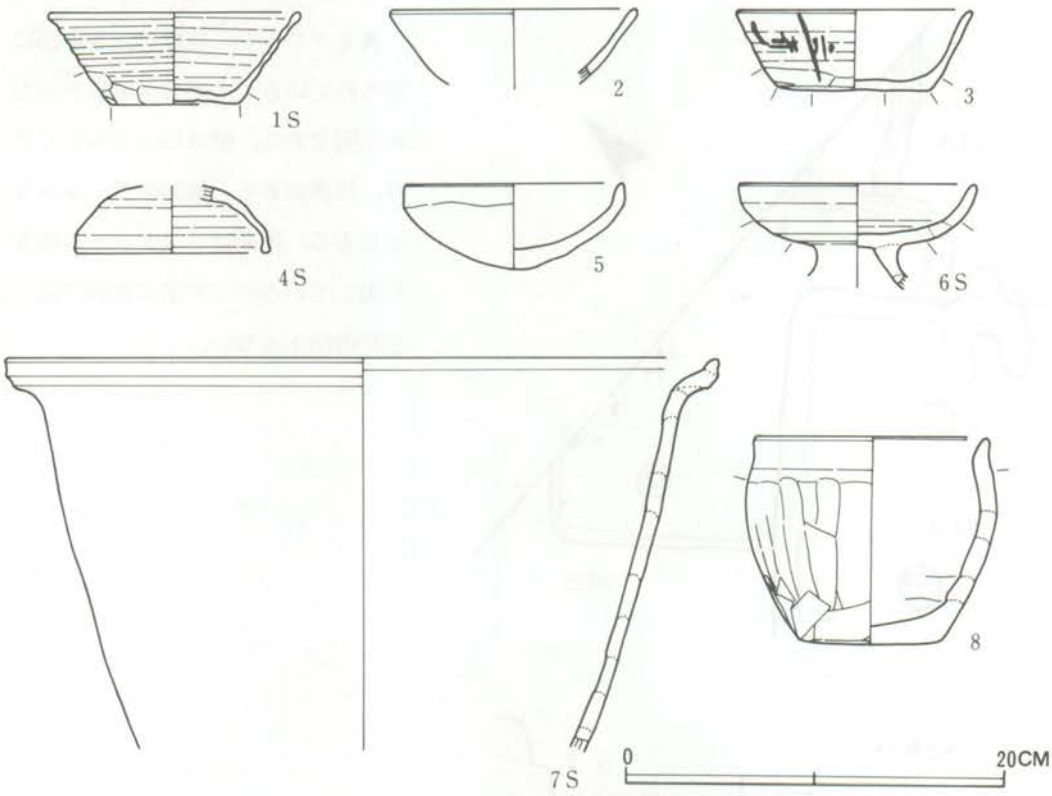


第248図　SI 25・SI 26実測図（1/80）

ＳＩ26（第248図ＰＬ版88－２）

Ａ２グリッドに位置し、ＳＩ25に切られている。大部分が境界外のため不明である。壁は13cmの残存であり、壁溝がある。幅30cmで、深さ５cmである。床面はソフトローム面を利用しているので非常に軟弱である。遺物の出土もない。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ25－１	杯 （Ｓ）	13 × 4.7 × 6.8	黄灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－Ｒ－体部下半・底部全面ヘラケズリ	3/5
－２	杯	12.8 × ×	暗褐色（内面黒色）、良好、？－？－内面ヘラミガキ	体部1/4、黒色処理
－３	杯	12.2 × 4 × 8	黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下端・底部周辺手持ちヘラケズリ	3/4
－４	蓋 （Ｓ）	10 ×（4）×	灰褐色、堅緻、？－？－内面天井部不整ナデ調整	3/5
－５	杯	11.4 × 4.4 ×	黄褐色（内面暗褐色）、良好、全面ヘラミガキ	3/5
－６	高　杯 （Ｓ）	12.4 × ×	淡灰褐色、良好、杯外面下半回転ヘラケズリ（回転－Ｒ）	裾部欠失、3/5
－７	甑 （Ｓ）	37.6 × ×	灰褐色、雲母・石英、良好	底部欠失、1/4
－８	甕	12 × 10.4 × 7.4	暗褐色、良好、体部内外面・底部ヘラケズリ	3/5



第249図　ＳＩ25出土土器実測図（1/4）

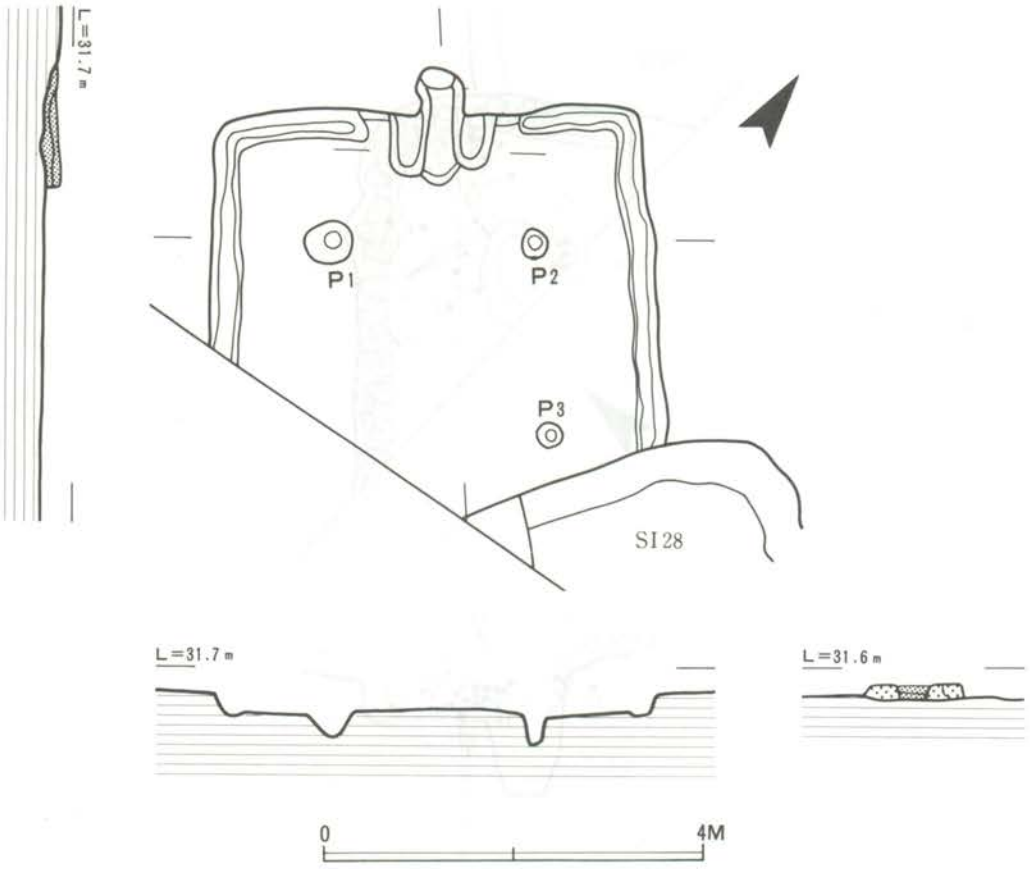
S.I 27（第250図、ＰＬ89－１）

Ｃ３グリッドに位置し、ＳＩ28に切られている。東辺はＳＩ28に切られており、南辺の半分は境界外にあるため、全容は不明である。規模は南北が4.6mであるだけが判名している。主軸はＮ－36°－Ｗである。壁は20cm程の残存で、やや外反ぎみに立ち上がっている。壁溝はカマドの両脇30cm手前でとまっているが、他は全周するものと思われる。幅は25～30cm、深さ５cmである。柱穴は３本検出され、２m等間で並んでいる。規模はP_1が大きく径45cmで、他は径25cmである。深さは逆でP_1が22cmと浅く、他は40cm前後である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは西辺中央に構築されている。規模は全長115cm、幅110cmである。袖は砂質粘土と暗茶褐色土を15cm程積み上げている。天井部は崩落している。掘り方は幅44cm、壁外へ43cmほど楕円形状に掘り込んでおり、立ち上がり傾斜はほぼ直角である。燃焼部の床面への掘り込みはないが、焼土は多く堆積している。

覆土は２層であるが、一度に埋められている。

遺物は土器の破片が少量出土しているが、実測にたえるものはない。



第250図　ＳＩ27実測図（1/80）

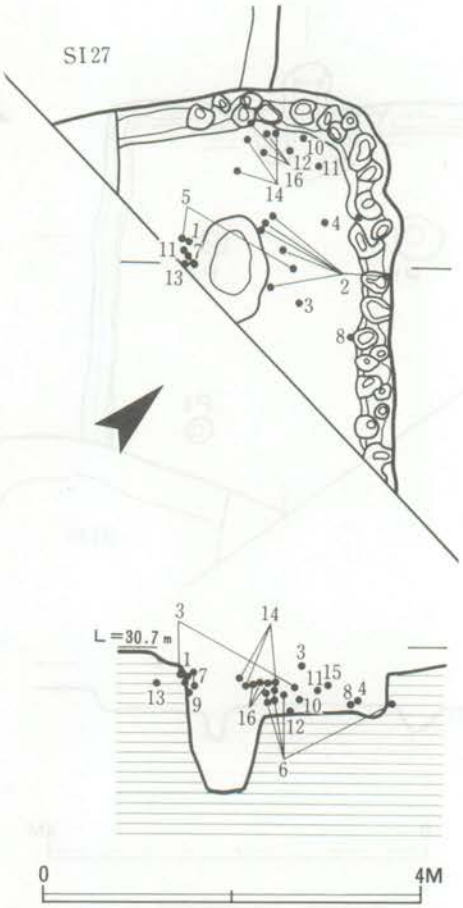
ＳＩ28（第251・252図、ＰＬ89－２）

Ｃ３グリッドに位置し、ＳＩ27を切っている。大部分が境界外にあるため、全容は不明である。規模も不明である。壁は45cm程ある比較的良好な遺存度である。立ち上がりはほぼ垂直である。柱穴は１本だけ検出され、径１ｍと大形である。深さは75cmある。注目すべきは壁柱穴がカマドの袖から70cm離れたところからびっしりと並んでいることである。径は20cm前後、深さ10～20cmである。本遺跡においては唯一の構造である。床面はハードローム面をかなり掘り込んで、よく踏み固めているために非常に堅緻である。

カマドは右袖の一部分を西辺において確認しただけであるので構造は不明である。

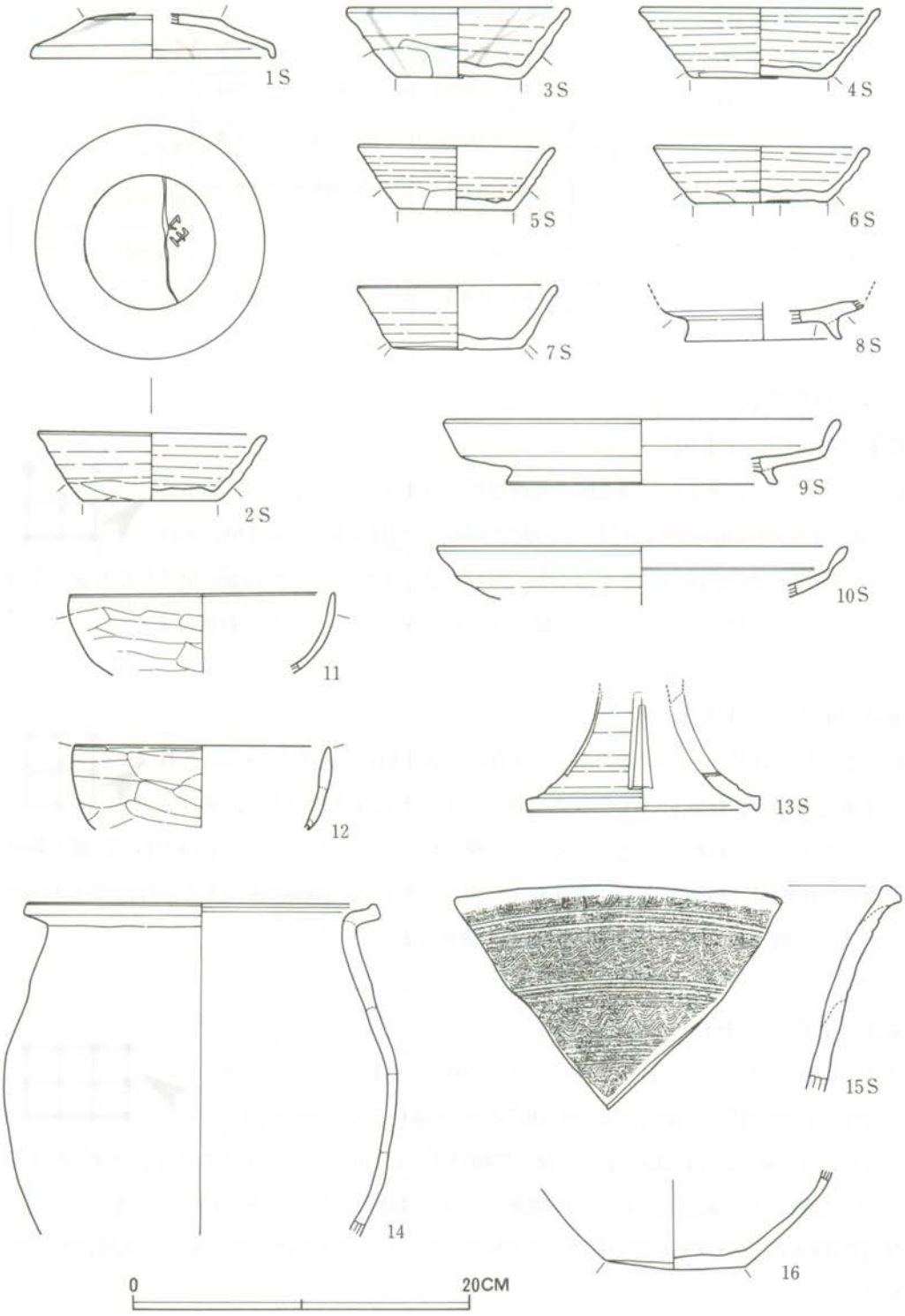
覆土は単一な土層である。

遺物は面積のわりには多く出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋１、須恵器杯４、須恵器高台付杯１、須恵器高台付皿、須恵器皿１、須恵器高杯１、須恵器甕１、杯４、甕２である。



第251図　SI 28実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI28－1	蓋 （S）	14 × ×	淡灰褐色、雲母、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ、火ダスキ痕有り	鈕欠失1/4
－2	杯 （S）	13.3 × 4 × 8.1	灰褐色、長石、良好、？－R－体部下端・底部全面手持ちヘラケズリ、内面に不明刻書	3/4
－3	杯 （S）	13 × 4 × 7.6	淡灰褐色、雲母、堅緻、？－R－体部下半・底部全面ヘラケズリ、火ダスキ痕有り	ほぼ完形
－4	杯 （S）	13.9 × 4 × 8.1	灰黒色、長石・雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端・底部全面手持ちヘラケズリ	3/4
－5	杯 （S）	11.5 × 3.7 × 6.8	灰黒色、長石、良好、回転ヘラ切り－R－体部下半・底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
－6	杯 （S）	12.5 × 3.3 × 7.9	灰褐色、長石・雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端・底部全面手持ちヘラケズリ	3/4
－7	杯 （S）	11.8 × 3.7 × 7.9	灰褐色、長石、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端・底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
－8	高台付杯 （S）	× × 11.6	灰褐色、堅緻、？－？－底部全面回転ヘラケズリ	底部1/2
－9	高台付皿 （S）	22.8 × 3.7 × 21.6	灰白色、雲母、良好、？－？－全面ナデ調整	1/4

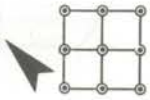


第252図　SI 28出土土器実測図（1/4）

−10	皿（S）	22.2 × ×	暗褐色、雲母、良好、?−R−?	口縁部1/10
−11	杯	15.6 × ×	明茶褐色、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	体部1/4
−12	杯	15 × ×	淡黄褐色、赤色粒子、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	体部1/4
−13	高杯（S）	× × 13.8	灰白色、黒色粒子、良好、4ケ所に1段の長方形透しが入る	脚部1/4
−14	甕	20.6 × ×	暗褐色、石英・雲母、良好、体部内外面ナデ調整の後外面下半ヘラミガキ	胴上半1/4
−15	甕（S）	× ×	灰黒色、堅緻	口縁部破片
−16	甕	× × 8.2	淡茶褐色、赤色粒子、良好、体部内外面ナデ調整、底部ヘラケズリ	底部のみ

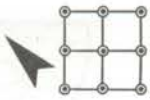
2．掘立柱建物跡

SB1（第254図、PL91）



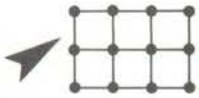
C−2グリッドに所在し、調査区の南西端に位置する。桁行2間（1.85m等間）、梁行2間（1.7m等間）の総柱式の建物である。規模は桁行が3.7m、梁行が3.4mである。掘方は0.7〜1mの不整な方形を呈しており、深さ50cm前後でわりと深いものである。柱穴は径20cm前後である。主軸はN−43°−Wである。小形の倉庫である。

SB2（第254図、PL92）



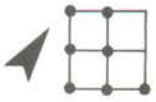
C−2、C−3グリッドにまたがって所在し、SI14に切られている。SB1の北東に隣接し、柱筋をほぼそろえている。桁行2間(1.85m等間)、梁行2間（1.85m等間）の総柱式の建物である。規模は桁行、梁行ともに3．7mである。掘方規模は不揃いで0.8〜1.6mまである。深さもまちまちであるが、70cm前後はある。柱穴は径20cm前後てある。主軸はN−43°−Wである。小形の倉庫である。

SB3（第254図　PL93−1）

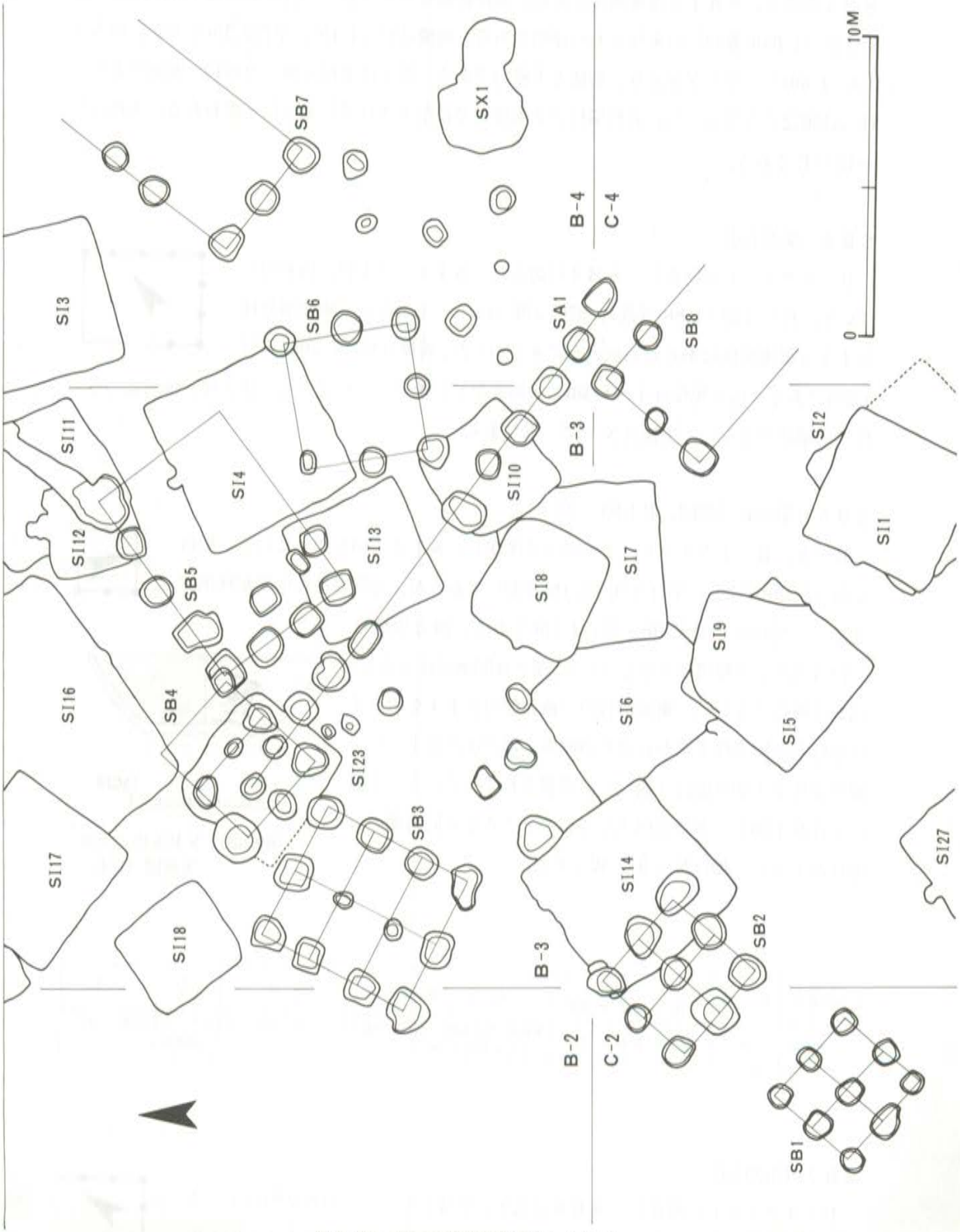


調査区のほぼ中央であるB−3グリッドに所在し、SI23を切っている。桁行3間（1.8m等間）、梁行2間（2.4m等間）の束柱をもつ建物である。規模は桁行5.4m、梁行4.8mである。掘方規模は1〜1.4mとバラつきがあるが、ほぼ方形を呈している。深さは40cm前後である。南側妻柱部分には建替の痕跡がみられるが、他にはない。束柱は径60cmで、深さ20cmである。柱穴は確認できたものは径20cm前後である。主軸はN−29°−Eである。

SB4（第254図）



B−3グリッドに所在し、SB3の北側に隣接している。SI23、SI16、



第254図　掘立柱建物跡配置図（1/200）

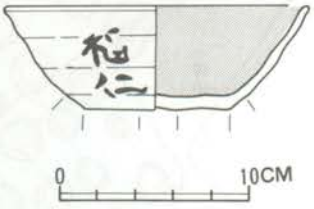
ＳＢ５を切り、ＳＡ１と重複関係にある。遺存状態は非常に悪い。桁行２間(2.05m等間)、梁行２間（1.65m等間）の束柱をもつ建物である。規模は桁行4.1m、梁行3.3mである。掘方は0.8～1.6mとバラつきがあり、形態も不揃いである。深さは遺存が悪いため10～20cmである。柱穴は確認できなかった。北側梁行の２本はすでに削平されてしまったと思われる。主軸はＮ－42°－Ｅである。

ＳＢ５（第254図）

Ｂ－３グリッドに所在し、ＳＢ４に切られ、ＳＩ４、ＳＩ12、13を切っている。桁行４間（1.8m等間)、梁行３間（1.7m）であるが、東側部分はＳＩ４と重複関係にあるため検出ができなかった。規模は桁行7.2m、梁行5.2mである。掘方規模は１～1.3mで方形を呈し、統一がとれている。深さは50cm前後ある。柱穴は確認できない。主軸はＮ－52°－Ｅである。

ＳＢ６（第254、255図、ＰＬ93－２）

Ｂ－３、Ｂ－４グリッドにまたがって所在し、ＳＩ４、10を切っている。桁行２間（2.15m等間)、梁行２間（2.1m等間）であるが、北側妻柱の中間が検出できない。規模は桁行4.3m、梁行4.2mである。掘方規模は0.7～1.2mで不整円形を呈している。深さは50cm前後である。柱穴は確認できない。東側桁行の一番北側のＳＩ４を切っている柱穴の掘方埋土中から完形の内黒土器が１点出土した。器形は杯で体部外面に「福仁」と墨書されている。この「福仁」はＳＩ20から多量に出土しているところから同時期の可能性がある。主軸はＮ－９°－Ｗである。



第255図　ＳＢ６出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＢ６	杯	16 × 5.4 × 7.7	黄褐色(内面黒色)、良好、回転糸切り－Ｒ－体部下端および底部周辺回転ヘラケズリ	完形、黒色処理、「福仁」の墨書有り

ＳＢ７（第254図）

Ｂ－４クリッドに所在し、ＳＢ６の北東に隣接している。桁行２間以上、梁行２間（2.1m等間）である。規模は桁行５m以上、梁行4.2mである。掘方規

模は0.9～1.3mの不整な方形を呈し、深さは20～30cmである。柱穴は確認できない。全体に遺存が悪く、浅いために他の柱穴は削平されてしまったと思われる。主軸はN－38°－Eである。

ＳＢ８（第254図）

Ｃ－３、Ｃ－４グリッドにまたがって所在し、ＳＡ１の南側に隣接している。
遺存が非常に悪く、西側の梁行と北側の桁行１間分だけしか検出できなかった。
梁行は２間（2.15m等間）で4.3mである。掘方規模は0.8～1.3mでほぼ方形を呈している。深さは20～40cmである。柱穴は確認できない。主軸はN－46°－Wである。

第９表　向台遺跡堀立柱建物跡一覧表

遺構	位置	規模	主　軸	桁行全長 m（尺）	梁行全長 m（尺）	廂 m（尺）	柱穴(廂柱穴) m	時　期	備　考
ＳＢ１	Ｃ－２	２×２	N－43°－W	3.7(12)	3.4(11)		0.7～1		総柱式
ＳＢ２	Ｃ－２ Ｃ－３	２×２	N－43°－W	3.7(12)	3.7(12)		0.8～1.6		総柱式
ＳＢ３	Ｂ－３	３×２	N－29°－E	5.4(18)	4.8(16)		0.6～1.4		総柱式(束柱)
ＳＢ４	Ｂ－３	２×２	N－42°－E	4.1(14)	3.3(11)		0.8～1.6		
ＳＢ５	Ｂ－３	４×３	N－52°－E	7.2(24)	5.2(17)		1～1.3		
ＳＢ６	Ｂ－３ Ｂ－４	２×２	N－９°－W	4.3(14)	4.2(14)		0.7～1.2		
ＳＢ７	Ｂ－４	×２	N－38°－E		4.2(14)		0.9～1.3		
ＳＢ８	Ｃ－３ Ｃ－４	×２	N－46°－W		4.3(14)		0.8～1.3		

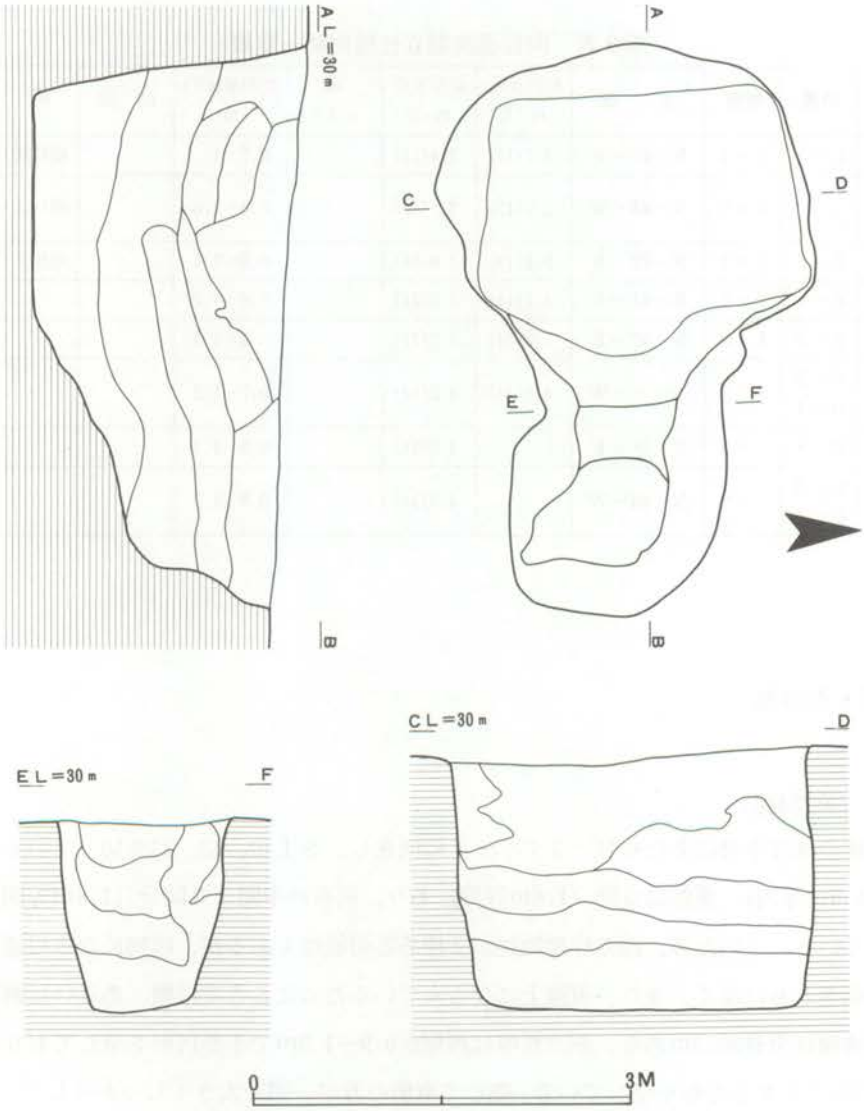
３．柵・その他

ＳＡ１（第254図）

調査区のほぼ中央にあたるＢ－３グリッドに所在し、ＳＩ10、13、23を切っている。西側に３間（1.5m等間）、東側に５間（1.8m等間）あり、両者の中間は３間分（1.8m等間）が空白になっている。このため、掘立柱建物跡が２棟ある可能性もあるが、建物になる可能性のある柱穴が両者ともになく、また、直線上にならんでいるためにここでは柵、あるいは塀と考えておく。規模は全長20.3mある。掘方規模は西側が0.9～1.3mで不整円形を呈しており、東側は１～1.5mで不整な方形を呈している。概して東側の方が一回り大きくしっかりしている。深さは50cm前後である。柱穴は確認できない。主軸はN－52°－Wである。

ＳＡ２（第172図、ＰＬ94－２）

調査区の平坦面と谷部との中間にあたるＢ－５、Ｃ－５グリッドにまたがって所在している。平坦面から谷に向う緩斜面の変換点にあたる位置に弧状を描くようにして、ピットが７個並んでいる。規模、形態等はまちまちであるが、おそらく一連の柵列と思われる。全長は南北に11ｍある。規模は0.6～1.8ｍで不整楕円形を呈し、深さは20cm前後である。全体に浅いのは遺構確認においては、表土層に直下はすぐに常総粘土層になってしまい、きわめて遺存の悪いものであるためと思われる。この前後においては何も検出されていないので、一連のものとして柵列と考えたいのだが、柱の並び方の不規則さ、弧状を描く点など、疑問な点はまだ多い。



第253図　ＳＸＩ実測図（1/60）

ＳＸ１（第253図）

調査区平坦面の東側であるＢ－４グリッドに所在し、遺構密集地の東端に位置している。全長4.8mのＴ字形をした性格不明の土坑である。西側は３×2.2mの不整な方形を呈し、深さは２ｍ前後で、底面はほぼ水平である。東側は1.8×1.6mの不整な長方形を呈し、深さは1.2mで段がつき、あとは西側の底面へ傾斜して接続される。以上の事からすると東側が入口にあたり、西側の広い所を使用する施設であると思われる。掘り込みは深く、常総粘土層を掘り込んでいる。粘土を採取したものかどうかも不明である。また、東側から掘り込み、西側を掘抜いたもので、天井があったのかどうかも覆土からは判断できない。覆土の埋土状況は下部の方は人為的に埋戻された形跡をよく示している。

ⅱ．谷出土の遺物

遺物の出土状況

ここでいう谷とは向台遺跡の東側と大畑Ⅰ遺跡の西側の間に南側から入り込んでいる幅70mの谷である。調査範囲はこの谷の谷頭に近い部分であるために比高差はそれほどなくて、最大でも５ｍである。当初この谷に遺構が存在するのかを確認するために20m方眼の基準杭にそって幅２ｍのトレンチを入れてみたところ、予想より深く、土質は粘質で水ぽいために遺構の存在するところではない事が判名した。しかしながら、Ｂ―６、７グリッド、Ｃ―６、７グリッドの範囲から多量な土器が出土しはじめたのである。特にＢ―６、Ｃ―６グリッドからは第２層から粘土層までの深さ約２ｍの間に多量な遺物が包含されている事がわかった。そのため、Ｂ―６、Ｃ―６グリッドにまたがって、東西17m、南北18mの範囲で拡張を行なった。これは西はすでに削平されて大きく段差がある所から東は道路までの間にあたる。

遺物はこの拡張した範囲内において集中して出土した。包含層は厚いが、層位的な差異は確認できなかった。この集中地点において多量な遺物群はすべて混在した状態で出土しており、なんらかの傾向をつかむ事はできない。ただ、遺物の集中はＢ―６グリッドの北側に集中してあるため、中心は調査区域の北側になる可能がある。いずれにしても今回検出した遺物群はその一部にすぎないと思われる。問題となるのはこれらの遺物のあり方についてである。ここの遺物は向台遺跡の集落から出土しているものとは趣を異にしており、官衙的な性格の強い遺物である。そのため、大畑Ⅰ遺跡に伴う遺物と考えた方がより妥当であると思われる。この谷は当初から向台遺跡と称していたが、これらの遺物を検討する事により、大畑Ⅰ遺跡の範囲と考えた方がよいであろう。次にこれらの遺物は一括廃棄されたものなのか、数回にわたって形成されたものなのか、あるいは常時すてて形成されたものなのかであるが、土器を観察すると時期差があるため一括廃棄は考えにくい。また、常時すてられていたというのも考えにくい。一

番可能性の高いのは数回にわたって廃棄された結果によるものであろう。それは土器群のなかに数時間の差異を見出すことができる事によってもうなづける。ただ心配なのは、ここでの遺物操作は純粋に机上操作になっている事である。

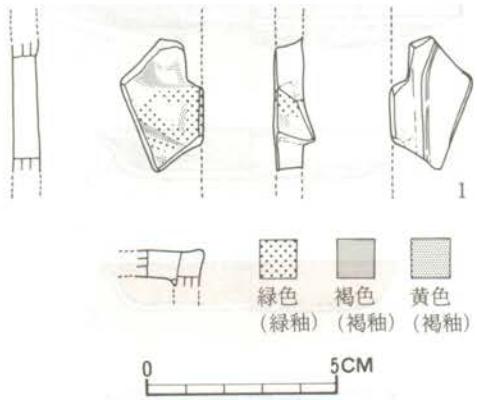
土器の器種名称と分類基準について

関東地方における奈良・平安時代の土器の器種名称は集落跡出土のものを中心にして付してあるため、それほどのバラエティーが見られない。また、研究史的な問題があるために、器種名称についても、関西地方――特に平城宮跡を中心とするもの――と異なるものが多い。そのために、同時代性の理解をさまたげる要因にもなっている。向台遺跡の谷出土土器群はきわめてバラエティーに富んだ器種構成をしており、きわめて中央志向――平城宮を中心とする都――の強いものであるために、基本的には『平城宮跡発掘報告書』にならって器種名称を付した。なお、従来の器種名称の使用とは大いに異なる部分もあるが、遺跡の構造、性格等を明確にするために、あえて、関東地方においてはまだなじみの少い名称を使用することにした。例えば、関東地方において一般に盤と呼ばれているものは皿と呼称する。また一般に高台付杯と呼んでいるが、ここでは高台のつかないものはA、つくものはBとする。すなわち、杯A、杯B、皿A、皿Bと呼称することにする。ただ、すべてが一致しているわけではないので、各項目において、その都度説明することにする。

分類基準は各器種においては法量を中心にして行なった。口径、器高の法量をグラフ上に落し、それぞれ法量の差による群にわけて第1の分類とする。例えばこれは杯AⅠ、杯BⅡ、皿AⅢというように呼称する。次にこの同じ群のなかで、それぞれ形態、調整技法の差により、a、b、c……と細分する。すなわち、杯AⅡa、杯BⅢbと呼称するようになる。これが分類した土器の最終的な器種名称であり、属性を示すものである。原則として、この呼称は土師器、須恵器に共通するものである。細かい説明はやはり、各項目においておこなう。ここで、法量を一番重要視する点は奈良時代における食器制の問題、土師器、須恵器の互換性の問題があるからである。つまり、前者は律令国家における中央と地方の対比を容易にする事ができる。後者は下総という1国内の問題である。つまり、須恵器生産がおそらくおこなわれていなかった下総国内においては他地域よりも早く、ロクロ使用の土師器（以下ロクロ土師器と呼ぶ）の生産が確立して、独自の展開をとげている。そのため、須恵器との法量対比をすることにより、ロクロ土師器生産の過程と実態が明らかになると思われる。その予察のもとにあえて煩雑と思われる法量による分類をおこなってみた。

1．施釉陶器（第256図、巻首図版1）

出土した施釉陶器には唐三彩、緑釉陶器、灰釉陶器がある。いずれも小片が1片ずつあるだ



第256図　谷出土唐三彩陶枕実測図（1/2）

けである。出土状況は唐三彩が包含層最下層で粘土層に密着していた。おそらく、包含層の形成においては最も古い段階のものであろう。緑釉、灰釉陶器は包含層の上層から出土している。

唐三彩は陶枕の側面部分の小破片である。全体をうかがえる資料ではない。現存部分は3.2cm×2cmである。厚さは6mmで一定している。胎土は白色の水簸粘土で、非常にきめ細かく、緻密である。焼成は良好で、きわめて固くなっている。側面と上面の接合は片方に小さな凹みをつけておこなっている。この凹みは茶色がかっており、やや変色している。そして接合面の補強のために、内には同一の粘土をコーナー部分に貼り付けている。そののちにこの部分を刷毛目状のもので仕上げをしている。釉の遺存はきわめてよい。施釉順序は白釉を全面に塗り、その後に緑釉を部分的に塗り、最後に褐釉を塗る。この時に緑釉の部分と重なるところがある。白釉は胎土の白さを強調するようにＹＲ系の白色を呈し、緑釉はＧＹ系の明るい緑色を呈し、褐釉はＹＲ系の鮮かな褐色を呈し、緑釉と重なる部分は濃緑色を呈している。割れ口を見るとややくすんだようになっているため２次火熱のあとかとも思われる。

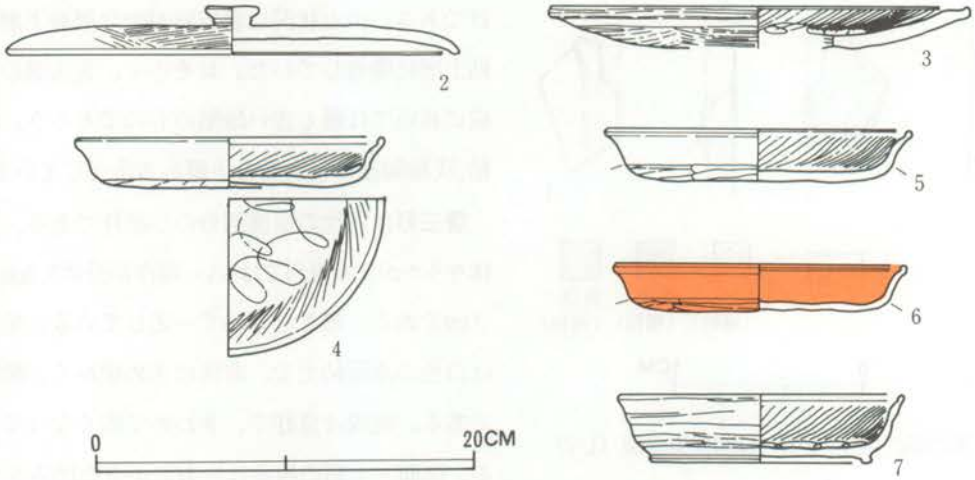
緑釉は底部のみの小破片が１点あるが、図示できるものではない。削り出し高台で、胎土はややあらい乳白色を呈した軟陶である。緑釉は内外に塗られ、色調は変色して、黄土色になっている。京都産の軟陶の緑釉の特色をよく示している。**灰釉**はおそらく椀の見込み部分の小破片だけであるため、図示できなかった。また形態、特徴等も判名しない。

２．搬入土師器（第257・258図）

向台遺跡において明確に搬入したと思われる土師器には畿内産と東北産の２種がある。他にも東海と思われるもの、近隣諸国からのものもあると思われるが、明確な根拠がないので、ここでは除外しておく。ここで取り上げる畿内産と東北産のものは器形、製作技法、胎土、色調等が在地のものとは明瞭に区分することができる。特に畿内産と思われる土師器の破片はかなり多く出土しているが、実測できるものはきわめてすくない。それに比較して東北産の土師器は図示した１点だけであるのは興味深い。

畿内産土師器（第257図）

杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ、皿Ｂ、高杯Ａ等の器種がある。数量的に多いのは杯ＡⅢ（４～６）である。口径は15.2～15.8cmで、器高は2.4～2.6cmである。胎土には白色微粒子、長石粒を含み、



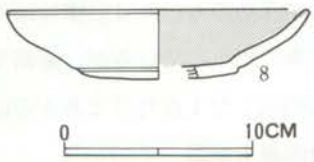
第257図　谷出土畿内産土師器実測図（1/4）

橙褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。体部下端から底部外面をヘラ削りするｂ手法である。内面には幅１㎜の放射状文とラセン文の暗文がつく。６は在地に搬入されてから内外の全面に赤彩されている。そのため暗文は不明である。２は皿ＢⅠに伴う蓋である。口径は23.2cm、器高は2.5cmで、紐の径は2.7cmである。胎土には白色微粒子を多く含み、石英粒と赤色粒をまばらに含む。色調は橙褐色を呈し、焼成は甘いので、表面の遺存はきわめて悪い。天井部は４方向へ丁寧なヘラミガキをしている。３は高杯Ａの杯身だけの遺存である。全面をヘラミガキし、口縁端部の直下５㎜程の幅で強いヨコナデがみられる。胎土には白色微粒子を多く含み、焼成は良好で堅緻である。色調は橙褐色を呈している。内面にはラセン文と放射状文の暗文がある。７は杯Ｂである。口径14.7cm、器高3.4cmで、高台は４㎜の高さである。外面は凸部だけをヘラミガキしている。内面にはラセン文と放射状文の暗文がある。

以上の土器群は平城宮Ⅱ式の新しい段階（天平年間）のものである。他の破片もこれと同時期であると思われるが、なかには２段暗文で底の深いものもあるので平城宮Ⅰ式のものも若干含まれている。

東北産土師器（第258図）

杯が１点だけ出土している。口径16cm、器高3.7cmである。胎土にはやや大粒の長石粒を含み、全体に緻密である。色調は淡黄白色を呈し、焼成は良好である。体部外面から底部はナデ、口縁部から内面全面は丁寧なヘラミガキを施し、黒色処理をしている。底部は丸底で、体部との境に稜をもつのが大きな特徴である。国分寺下層式にあたるものであろう。



第258図　谷出土東北産土師器実測図（1/4）

３．土師器（第259～264図）

土師器には皿、杯Ａ、杯Ｂ、甕、鉢等の器種があり、数量的には甕の破片が一番多いが、個体数からすると杯Ａが群を抜いて多い。特に目につくのは赤彩を施したロクロ使用の杯Ａの存在である。杯Ｂ、皿Ａにも赤彩を施したものもあるが、これほどの比率ではない。奈良時代の土器の特徴をよく示している土器群である。

皿（第259図）

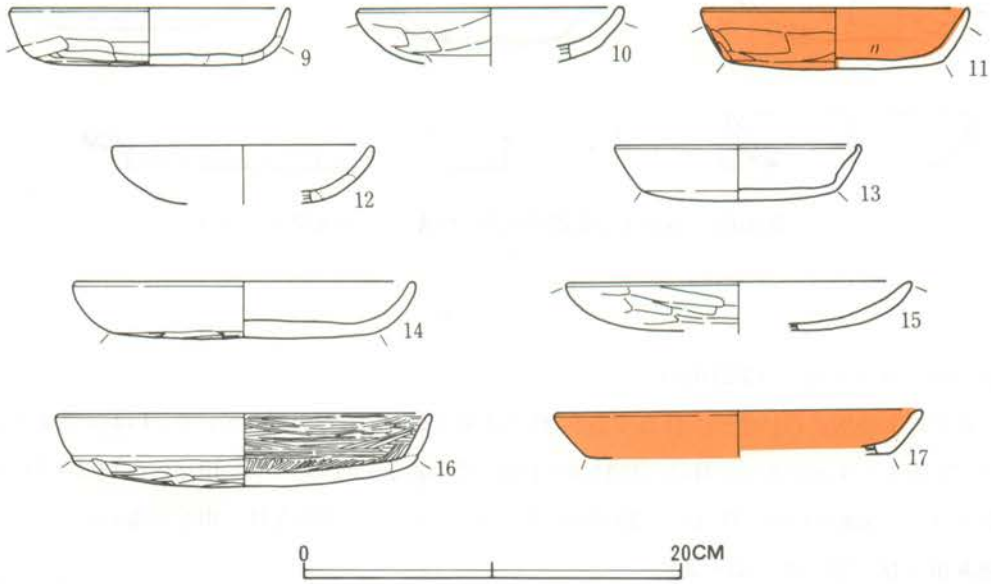
ここではすべて皿Ａである。ここで皿というのは口径に比べて器高の低いものをいう。Ｉは口径12.8～14.5cm、器高2.8～３cmのもの。IIは口径17.8～19cm、器高2.4～3.9cmのものである。

皿ＡＩ（９～13）

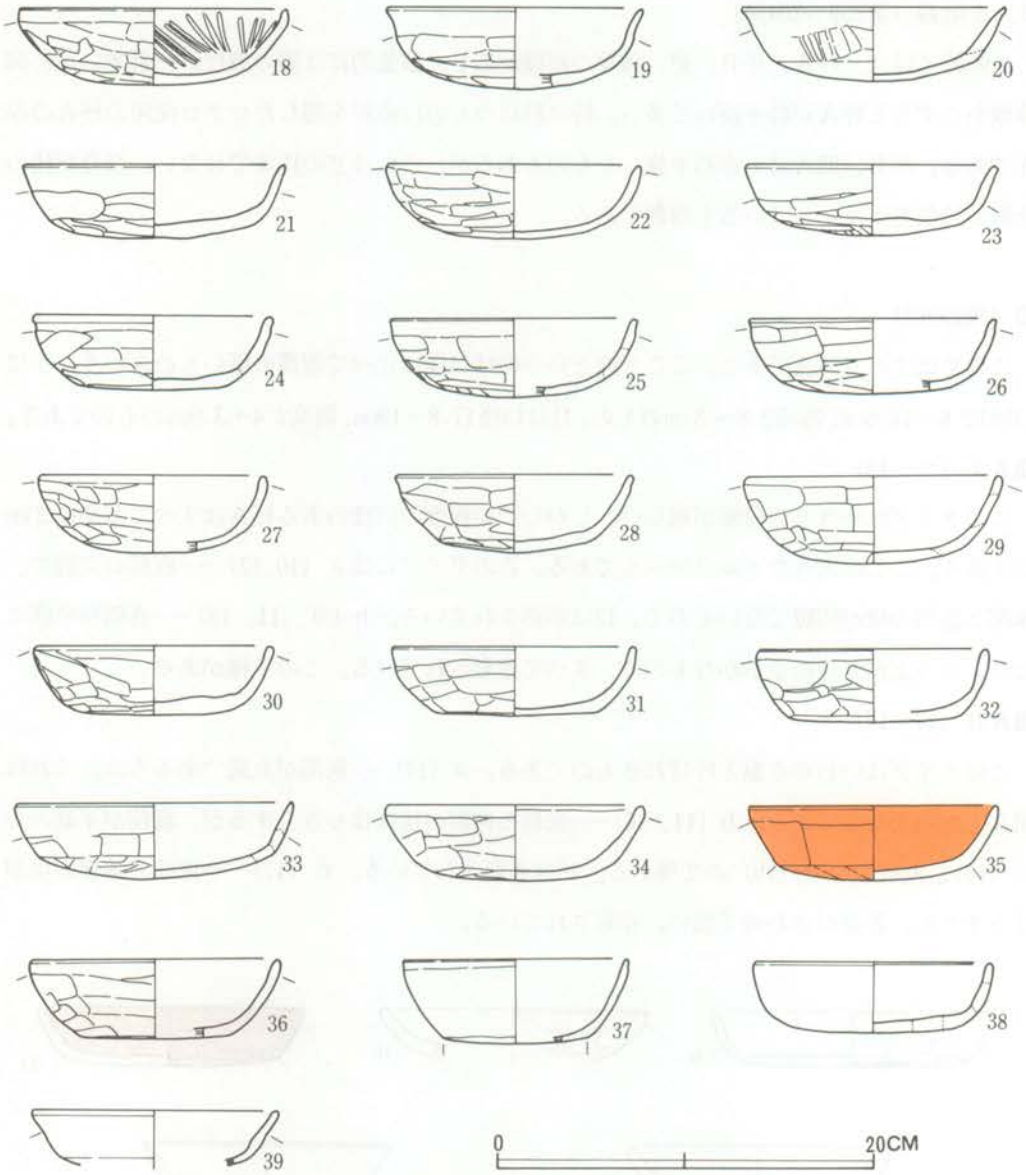
このタイプは杯Ａとの分離が難しい。しかしこの程度の口径のある杯Ａはすべて器高は３cm以上ある。ここが大きなメルクマールである。このタイプにはａ（10.12）──底部が丸底で、体部と底部の境が明瞭でないもので、12は赤彩されている。ｂ（９、11、13）──底部が平底になり、立ち上がりはゆるやかなもので、すべて赤彩されている。この２種がある。

皿ＡII（14～17）

このタイプはいわゆる盤と呼ばれるものである。ａ（14）──底部が丸底であるもの。これは皿ＡＩａの大形品である。ｂ（14、16）──底部と体部の境ははっきりするが、底部が平底のもの（14）、丸底のもの（16）の２種ある。16は赤彩されている。ｃ（17）──底部と体部の境がはっきりし、器高がきわめて低い。赤彩されている。



第259図　谷出土土師器実測図・皿類（1/4）



第260図　谷出土土師器実測図・杯Ａ（ロクロ未使用）（1/4）

杯（ロクロ未使用）（第260図）

ロクロ未使用の杯はすべて杯Ａである。杯の法量は次のように分類している。Ｉは口径９～11.5cm、器高３～４cmのもの。IIは口径11.6～13cm、器高3.5～５cmのもの。IIIは口径13.1～15.5cm、器高３～5.5cmのもの。IVは口径15.6cm以上のもの。ここでは杯ＡII、IIIしかない。

杯ＡIII（18～22、29、33～36）

ａ（18）――丸底で、口縁端部が内傾し、内面に暗文がある。鬼高式の系統をひくものである。

b（19）──丸底で、ヤヤ器高が深くなり、口縁端部が外反する。c（20、21、33～35）──丸底ぎみではあるが、底部と体部の境が明瞭で、立ち上がりはゆるやかである。口縁部下端からヘラケズリを施す。赤彩される例が多い（20、33、35）。d（22、29）──底部は丸底であるが、底部と体部の境は明瞭である。半球状を呈しており、浅いもの（22）、深いもの（29）がある。e（36）──dの深いタイプの底部を平底にしたものである。

杯A II（23～28、30～32、37～39）

b（39）──杯A III bとはおもむきをやや異にするが、口縁部が外反するところには段ができる。c（23、30～32、38）──杯A III cと基本的に同じであるが、平底に近いものが多い。d（25、28）──この２つは杯A III dの浅いほうのタイプの小形品である。e（24、26、27、37）──浅いもの（24、26）、深いもの（27、37）の２種がある。また、27のように丸底ぎみのものもある。

杯（ロクロ土師器）（第261図）

ここでロクロ土師器としたものは、成形、調整のためにロクロを使用して作られた土師器の事である。器形、調整手法は須恵器と同じである。ただ違うのは酸化焔焼成によっているため、色調は土師器と同様のものになっている。その事を重視して土師器として考える。ただ、伝統的な土師器と違い、なんらかの構造窯において一括して生産されているものである。それは製品の規格化、格一化になってあらわれており、須恵器工人とは違う、製作集団がいる事を暗示している。ちなみにロクロからの切離し技法は糸切り技法だけであり、該期に下総において主体的な須恵器の切離し技法はヘラ切り技法であり、好対照をなし、出自の違いまでも暗示しているようである。

ここで出土しているのは杯A、杯B、それにいわゆる内黒土器である。法量分類は先の分類と同様である。

杯A II（42、45、58～61）

３種のタイプがある。a（45）──底部がやや突出し、体部の立ち上がりは大きく外反する。体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリを施す。全面を赤彩している。b（42、60、61）──口径に比して器高が高く、体部の立ち上がりは直線的であるが、体部下端から底部全面にかけてヘラケズリを施しているため、丸味をもっている。42、60は手持ちヘラケズリであるが、61は回転ヘラケズリである。61の底部には回転糸切りの痕跡が中央に残っている。c（58、59）──bに近い形態であるが、底部と体部の境は直線的で、体部下半部から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す。底部も全面手持ちヘラケズリ（58）、あるいは回転ヘラケズリ（59）をしている。

杯A III（43、44、47～49、51～57）

４種のタイプがある。a（43、51）──底部がやや突出するもの（43）と、平底のもの（51）

がある。立ち上がり角度は65°前後ある。体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを施している。赤彩されている。b（53）――口径に比して器高が低く、立ち上がり角高も50°前後である。体部下半部と底部周縁は手持ちヘラケズリを施している。静止糸切りの痕跡がある。赤彩されている。c（54、55、57）――口径に比して底部が少さく、立ち上がりが大きく外反するもの。体部下半部から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを施す。赤彩されている。d（44、47～49、52）――器高が深く、立ち上がりは約60°で急である。杯AⅡcの大形品である。体部下半部から底部全面は手持ちヘラケズリを施す。52には静止糸切り痕がある。すべて赤彩されている。

杯AⅣ（50、64）

タイプとしては2種ある。a（64）――特殊な器形をしており、椀のようでもある。紐積み痕が顕着に残っている。体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリした後に、内外面の全面をヘラミガキしている。赤彩している。b（50）――杯AⅢdの大形品である。赤彩されている。なお、底部外面に「中」と刻書されている。

杯BⅡ（40、41）

2種ある。a（40）――立ち上がりは70°と急な立ち上がりをする箱形に近い形態をし、高台は底部周縁に外側に向いて、しっかりとした作りである。体部下端から底部周縁は回転ヘラケズリである。静止糸切りである。赤彩されている。b（41）――立ち上がりは急であるが、丸味があり、椀に近いものである。高台は低いが、周縁につけられ、しっかりしている。体部下半部は手持ちヘラケズリで、底部は回転ヘラケズリである。赤彩してある。

杯BⅣ（65）

直線的に立ち上がり、口縁端部が大きく外反する。高台は高く、外側にふんばっている。底部は回転ヘラケズリである。赤彩してある。

内黒土器（62、63）

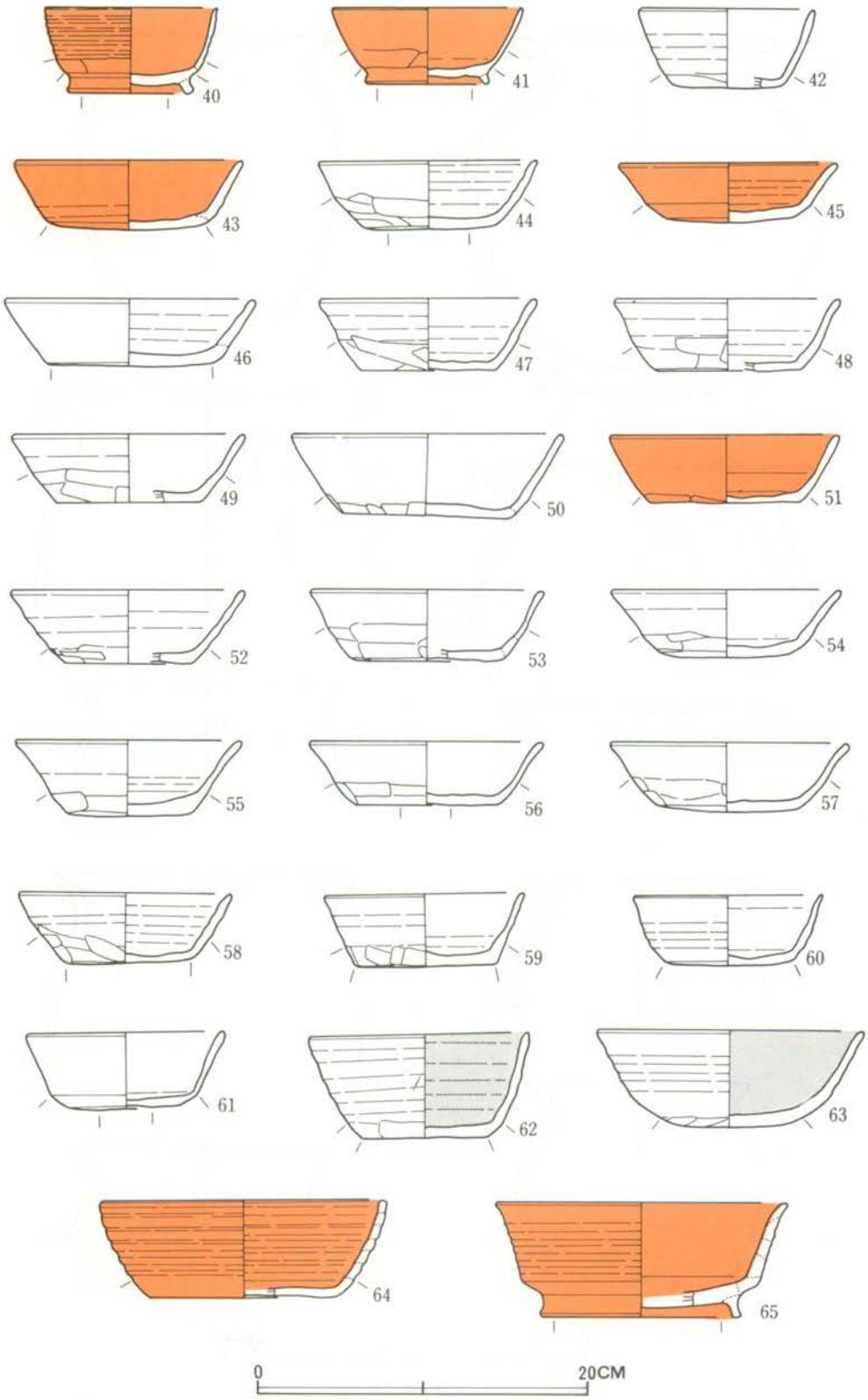
杯AⅢ（62）と杯AⅣ（63）がある。62は椀のように深いタイプである。体部下端を手持ちヘラケズリしている。63は丸底気味で椀ともいうべき器形である。底部全面を手持ちヘラケズリしている。

甕（第262～264図）

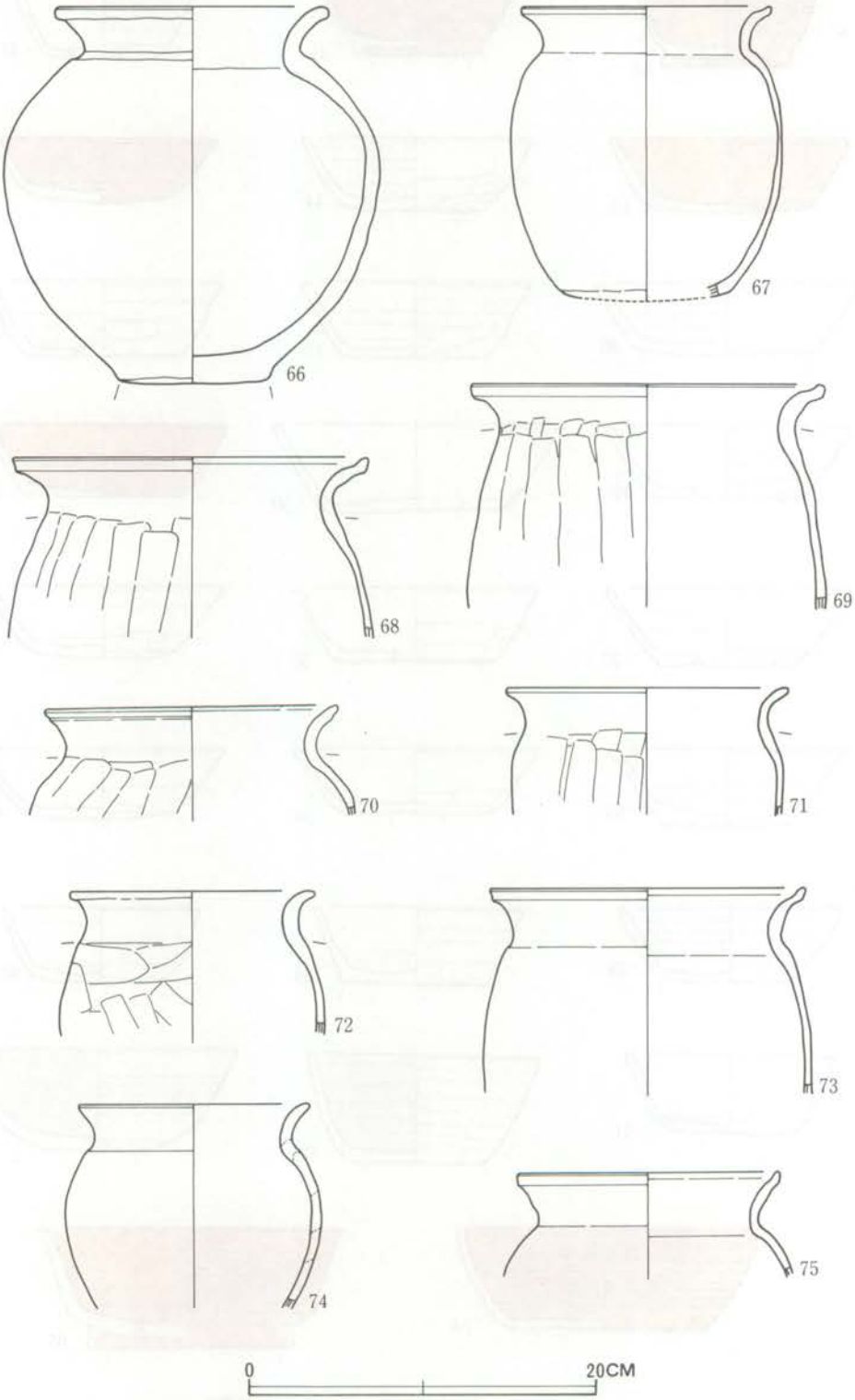
向台遺跡の谷から出土した土器の中で破片の数量が一番多いのは土師器の甕である。しかし、全体を復元できるものはきわめて少い。しかしながら、甕には多くのタイプがあり、それぞれ特徴がある。

A（66）

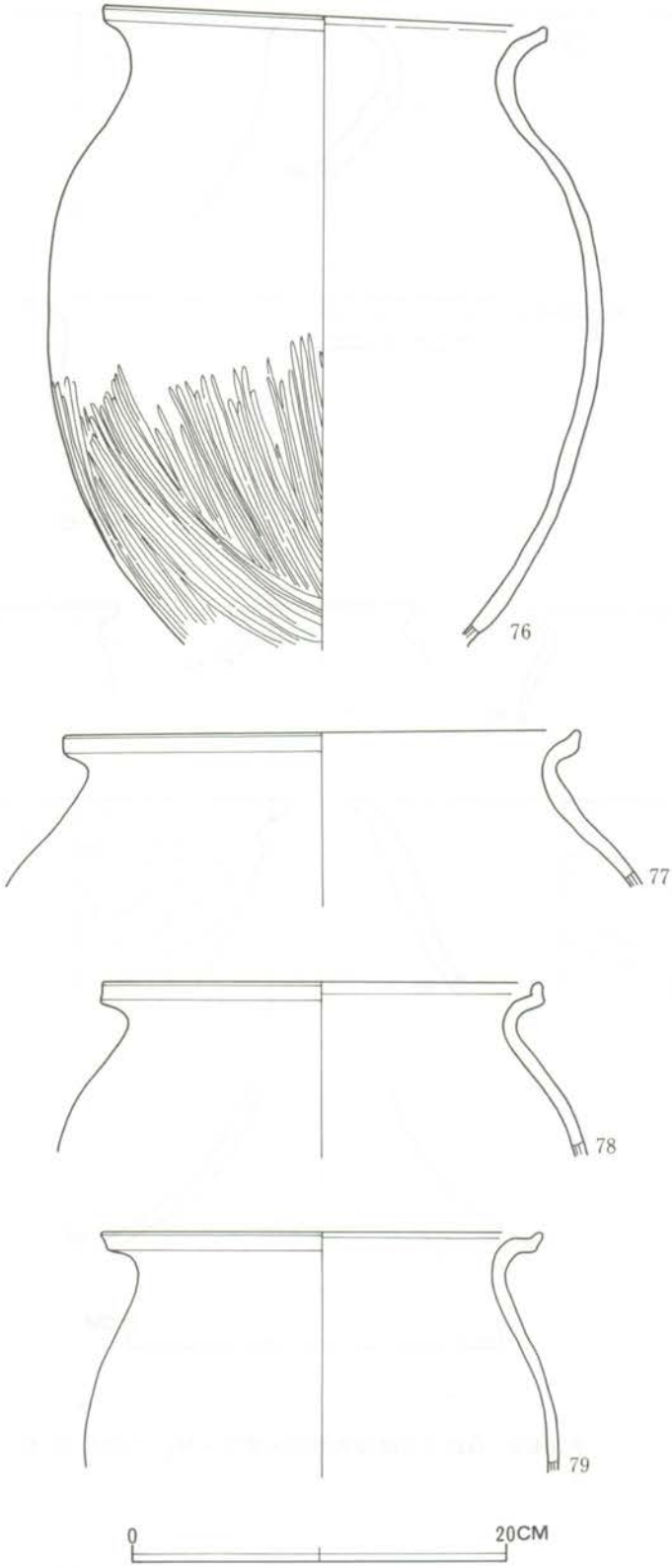
球形に近い胴部をし、口縁は大きく外反する。内外面ともにヘラミガキを施している。底部



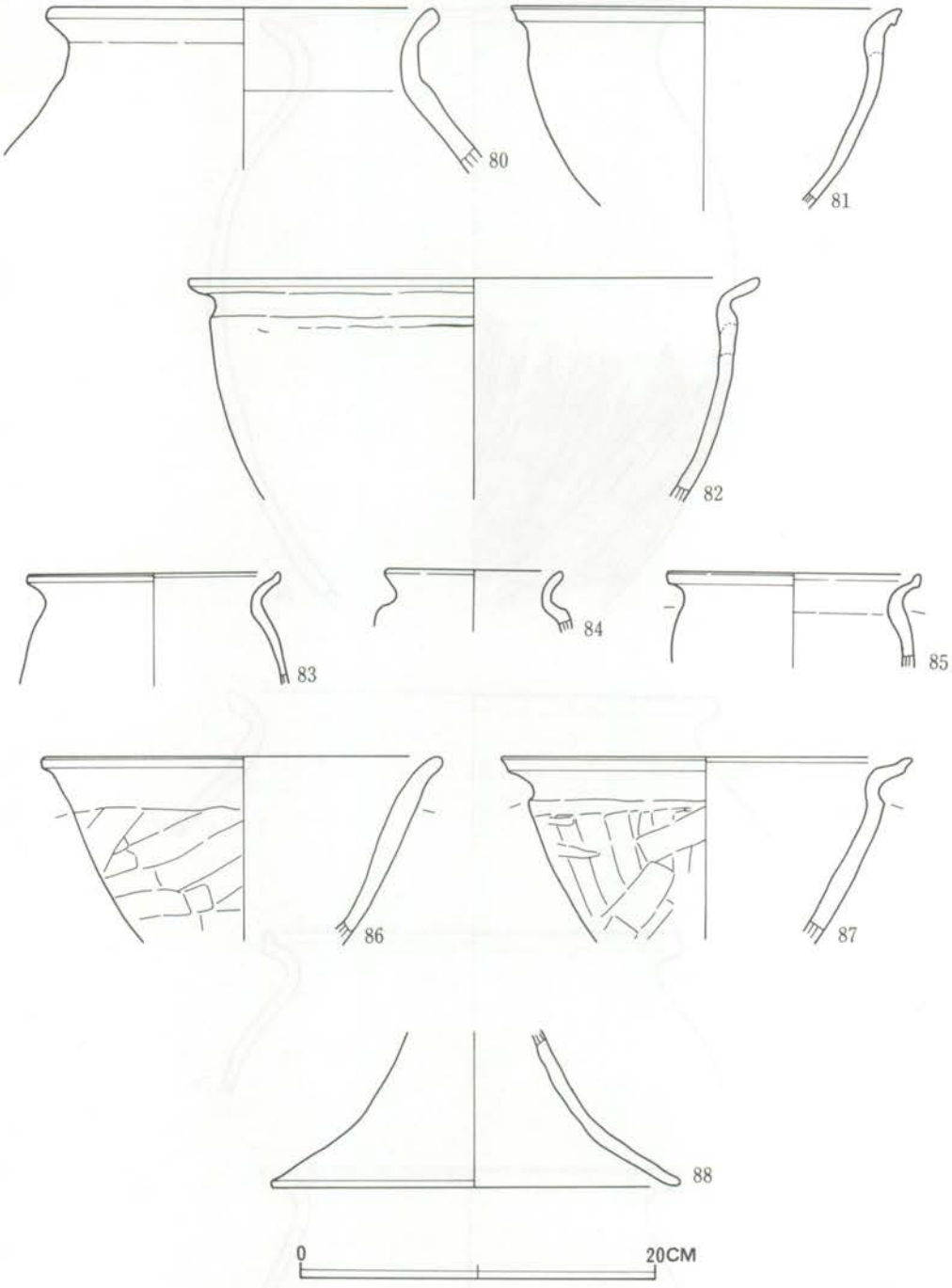
第261図　谷出土土師器実測図・杯Ａ・Ｂ（ロクロ使用）　(1/4)



第262図　谷出土土師器実測図・甕 ①（1/4）



第263図　谷出土土師器実測図・甕 ②（1/4）



第264図　谷出土土師器実測図・甕③・鉢，その他（1/4）

はヘラケズリしているが、やや丸底である。鬼高式の伝統的な甕である。

B（67）

胴部中程に最大径がくるが、それほど丸みをもたない。頸部が直立し、口縁は大きく外反する。外面はヘラミガキを施し、内面にはナデ調整を施している。鬼高式の伝統を受ける土器である。

C（68、69）

長胴の甕である。頸部から大きく屈曲し、口縁端部が直立する。そのため、口縁部は凸帯状になる。外面は頸部より縦方向のヘラケズリを施す。内面はナデ調整である。

D（70）

頸部が直立し、口縁は外反する。口縁端部はつまみ出されているため、外側に段がつく。外面は頸部より縦方向のヘラケズリ、内面はナデ調整である。

E（71）

頸部が直立し、口縁は大きく外反して開く。外面は頸部より縦方向のヘラケズリ、内面はナデ調整である。やや小ぶりの甕である。

F（72、74、80）

このタイプには大小の2種がある。1（72、74）は小形で、2（80）は大形である。胴部にやや丸味があり、頸部が直立して、口縁が外反する。口縁端部は丸味をもつ。72は外面の頸部より下に横方向のヘラケズリをしたのちに縦方向のヘラケズリをしている。内面はナデ調整である。74、80は内外面ともにナデ調整である。

G（73、85）

このタイプは1（73）は大形品、2（85）は小形品である。長期のもので、頸部が直立し、口縁は大きく屈曲して、さらに直立するため、内外面に段ができる。そのために突帯状になる。胴部の器肉はきわめて薄いものである。内外面ともにナデ調整である。

H（75）

口縁は頸部から朝顔形に開き、口縁端部は直立する。そのために突帯状になる。内外面ともにナデ調整である。

I（76～79、83）

この周辺において一番普遍的な甕のタイプである。基本的には丸味のある長胴で、口縁端部が直立するものであり、胎土中に雲母が多く含まれている。口縁端部の形態と調整技法の差異により4種になる。1（76）は口縁端部の直立はあまり顕著ではない。一番の特徴は胴下半分の細いヘラミガキである。内面下半分はヘラケズリを施している。2（77、83）は大形品であるa（77）と小形品であるb（83）の2種ある。頸部から大きく屈曲して、口縁端部をつまみ出して直立させているが、内側にはそれほど段がつかない。内外面ともにナデ調整を施してい

る。3（78）は口縁端部の直立は一番顕著である。頸部から大きく屈曲して、口縁が直立している。この直立した口縁は粘土紐を貼りつけて作りだしてある。内外面ともにナデ調整を施している。4（79）は頸部から大きく屈曲して、口縁端部を上方外側につまみ出している。内面の段も顕著である。内外面ともにナデ調整を施している。

J（84）

特異な形態をした小形甕である。頸部までの器肉は厚く、それより上は薄くなり、大きく外反する。そのため頸部外側に大きな段差がつく。内外面ともにナデ調整である。

鉢（第264図）

数量的にはきわめて少い。ただ、底部まであるのがないために甑である可能性のあるものもあるが、ここでは一応、鉢として考えておく。3種ある。

A（81）

ゆるやかな曲線を描く体部から頸部が直立して、口縁が外側にひらく。口縁端部は面取りされて、突帯状である。外面はヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。

B（82、87）

1は大形品（82）、2は小形品（87）である。体部は直線的に立ち上がり、頸部において大きく屈曲して、口縁は外反する。頸部に沈線状のくぼみがつく。82は頸部外面をのぞいて、全面にヘラミガキを施している。87は口縁端部をつまみ出している。外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。鉢Bは胎土が肌色をしており、中に赤いスコリアを含み、非常に精製されており、他の土師器と明確に分離できる。特殊な形態であるのと考えあわせると生産地が違う可能性が高い。

C（86）

底部から直線的に立ち上がり、そのまま口縁にいたる。外面は口縁直下より横方向のヘラケズリを施し、内面はヘラミガキを施している。このタイプは甑の可能性がある。

その他（第264図—88）

器形が不明である。蓋なのか、脚部なのか判然としない。ただ、内外面ともにヘラミガキを施している丁寧な作りをしているところから、特殊な器形になると思われる。

4．須恵器（第265～283図）

須恵器は生産地別を基本として、大きく4群に分類した。このなかのA～Cの3群は、この地域の周辺においては一般的に多く出土する製品である。しかしながらまだ生産地は確認されていないが、これらが須恵器としては主体的なものであるために、在地の須恵器と考えて、明らかに搬入品と思われるD群と一線を画す。D群は搬入須恵器を一括した分類であるために、

さらに生産地別に細分する事ができる。このなかには生産地を同定できるものもある。以上が須恵器の大分類の前提である。そして、各群のなかは土師器と同様に法量による分類、そして、その中での細分というようになる。法量による分類は土師器とまったく同じである。ただ、細分の方は各群において共通できない部分が多いため、各群ごとになっている。

出土した須恵器は杯A、杯B、椀A、椀B、皿A、皿B、合子、蓋、長頸瓶、短頸壺、甕、甑、片口鉢等があり、かなり豊富な器種構成をしている。なかでも、D群における良質な須恵器の一群は特殊品を多く含み、注目に価するものである。しかしながら、数量的にはA、B群の甕、甑等の大形品の破片が一番多いが、個体数からするとA～C群の杯Aが群を抜いて多い。

A群（第265・266・282・283図）

A群を特徴づける最大の点は胎土に多量な雲母を含む事である。その他に細かい長石、石英を多く含むが、器面はあまりザラついた感じはしない。色調は灰色を基本としている。焼成は良好である。器種は確認できるものは椀、杯A、甕である。

椀（89）

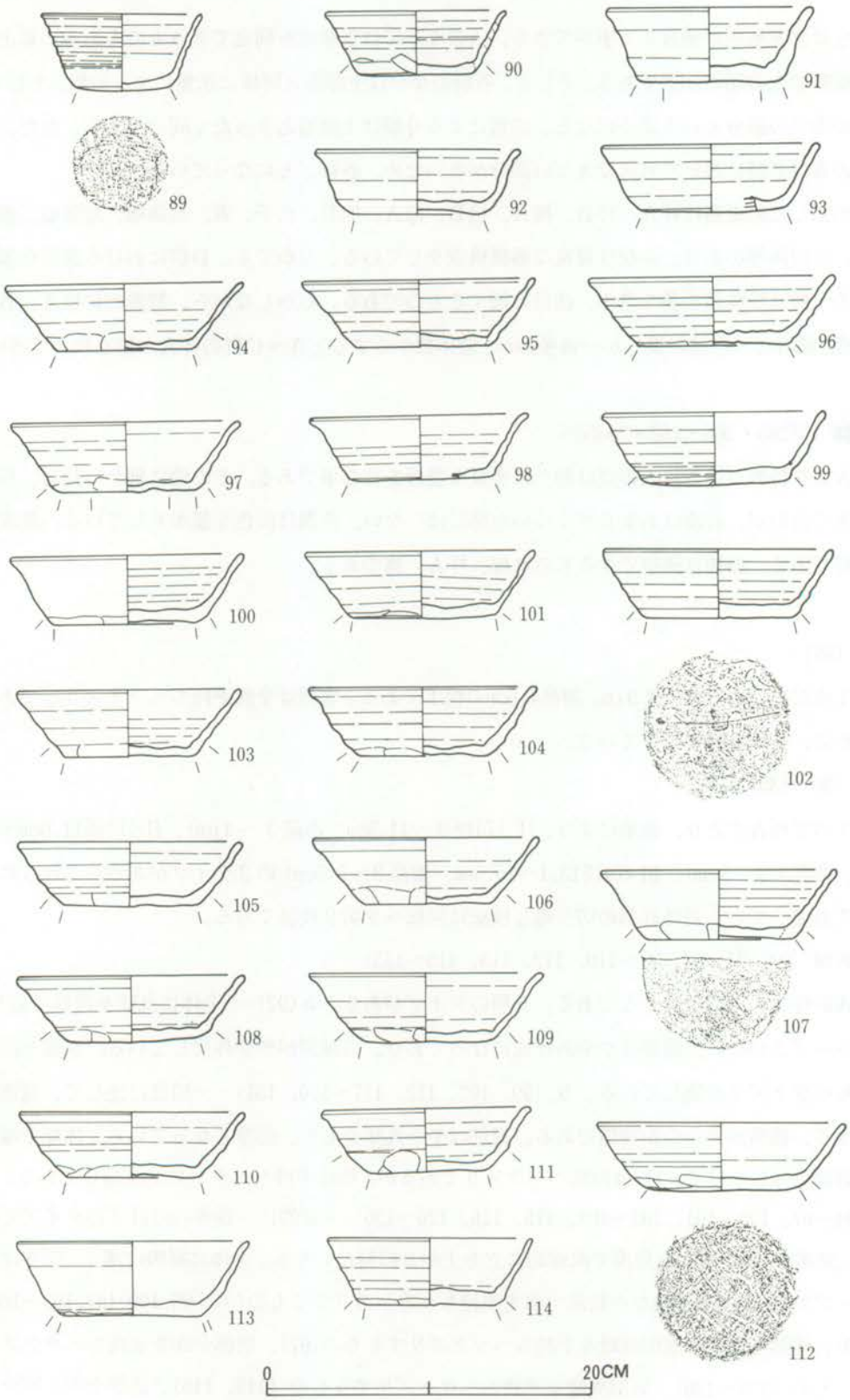
１点だけである。口径９cm、器高4.6cmの椀Ｉである。底部は全面手持ちヘラケズリしてあるために、やや丸味を帯びている。

杯（90～135）

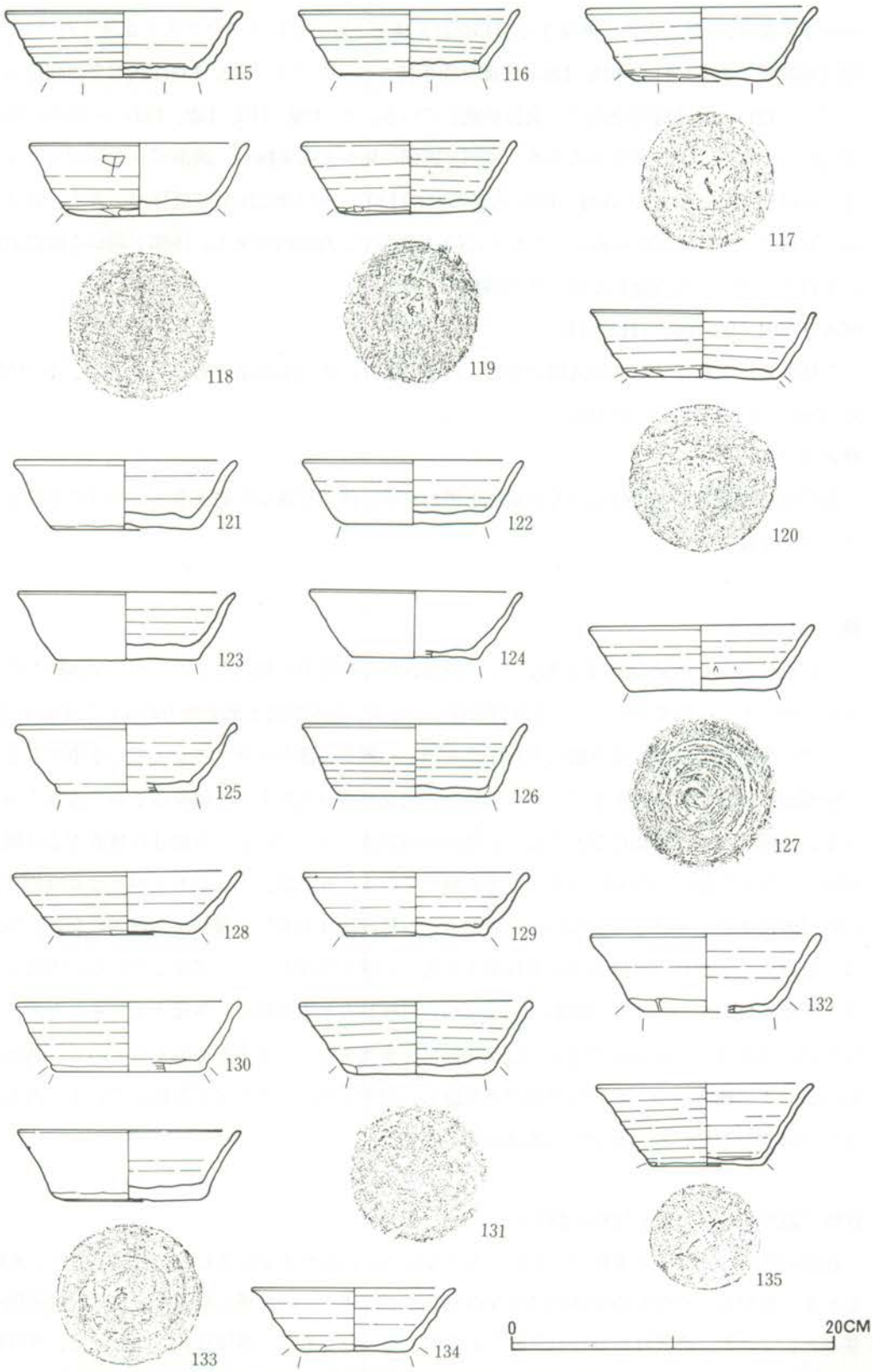
すべて杯Aであり、法量により、Ｉ（口径９～11.5cm、器高３～４cm）、II（口径11.6cm～13cm、器高3.5～５cm）、III（口径13.1～15.5cm、器高３～5.5cm）の３タイプがある。これらにすべて共通しているのは底部の切り離し技法は回転ヘラ切り技法である。

杯A III（92、94～97、99～110、112、113、115～135）

A群杯Aの大部分はここである。６種のタイプがある。a（92）――全体に丸味を帯びており、シャープさがない。底部はややあげ底になっており、口縁部がやや外反している。底部全面手持ちヘラケズリを施している。b（99、102、112、117～120、131）――口径に比して、底部が大きく、器高が高いのが特徴である。底部はやや丸味をもち、部厚くなっている。体部下端から底部全面にかけて、117は回転ヘラケズリであるが、他は手持ちヘラケズリを施している。c（94～97、100、101、103～108、115、116、126～130）――量的に一番多いのはこのタイプである。底部から50°～60°の角度で直線的に立ち上がり口縁にいたる。全体に器肉は薄く、作りはシャープである。体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリするもの（94～96、100、101、103～108、130）、体部下端から底部周縁を手持ちヘラケズリするもの（97）、底部全面を手持ちヘラケズリするもの（128～130）、底部周縁を手持ちヘラケズリするもの（115、116）、底部全面を回転ヘラケズリするもの（126、127）がある。d（113、121～125、133）――杯A III cに比べると底部



第265図　谷出土須恵器実測図・Ａ群杯Ａ①（1/4）



第266図　谷出土須恵器実測図・A群杯A②（1/4）

が少さくなり、口縁が大きく外反する。113だけに体部下端の手持ちヘラケズリが施されており、他は無調整である。113、124、125は底部全面手持ちヘラケズリ、122、133は底部全面回転ヘラケズリ、121、123は底部全面ナデ調整を施している。e（109、110、132、134）──体部下端の手持ちヘラケズリが顕著であるため、体部と底部の境が丸味を持ち、底部が少さい印象を与える。口縁が外反するもの（109、132）もある。f（135）──口径に比して底径が小さく、器高が高いものである。底部からの立ち上がりは60°と鋭角で、直線的である。体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施した後にナデ調整をしている。

杯A II（91、93、98、111、114）

5種ある。これはすべて杯A IIIの分類と同じであり、その小形品である。a（91）、b（93）、c（98）、d（114）、e（111）。

杯A I（90）

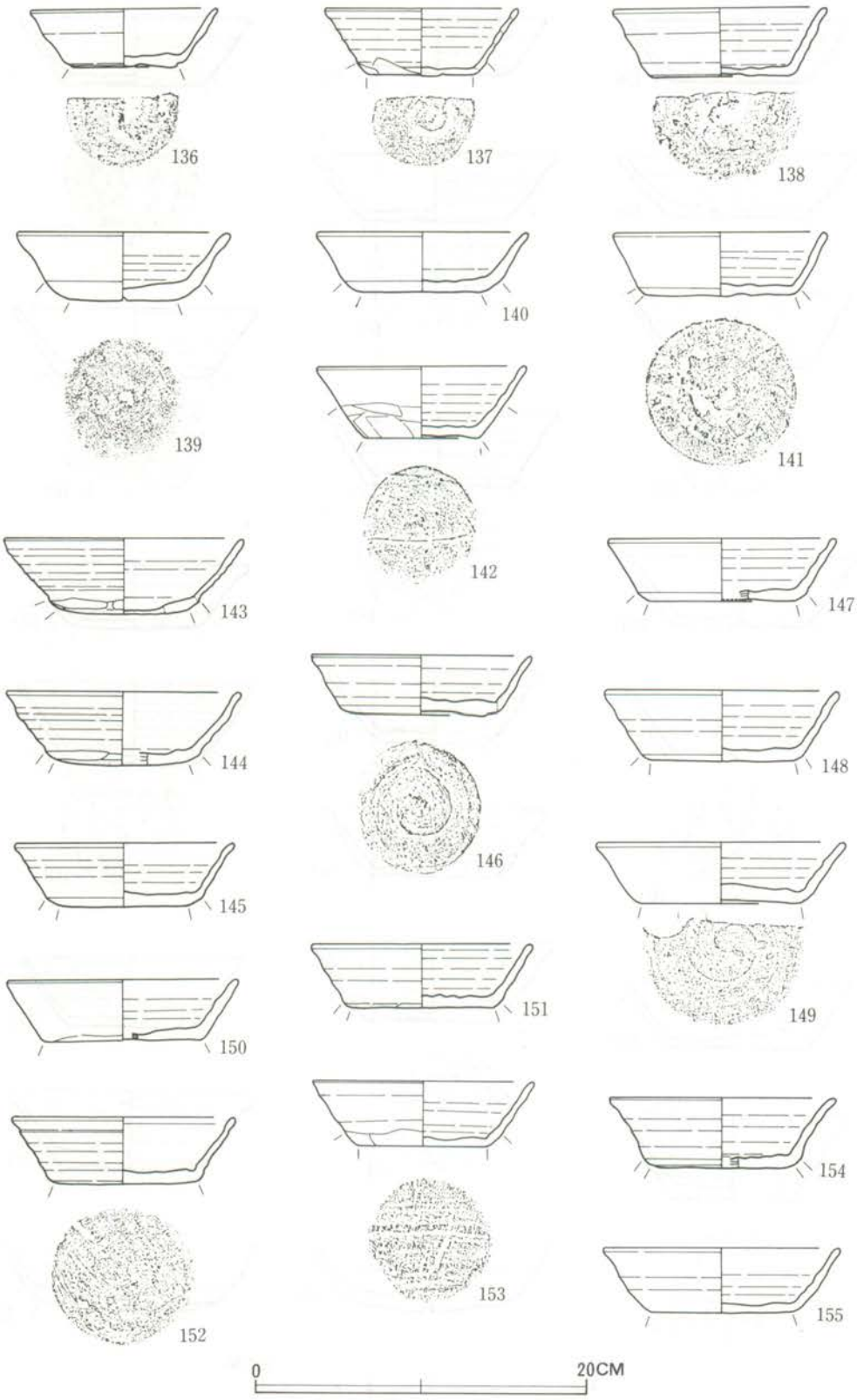
器形的には杯A III a に対応する小形品と思われる。体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを施している。

甕（331～333）

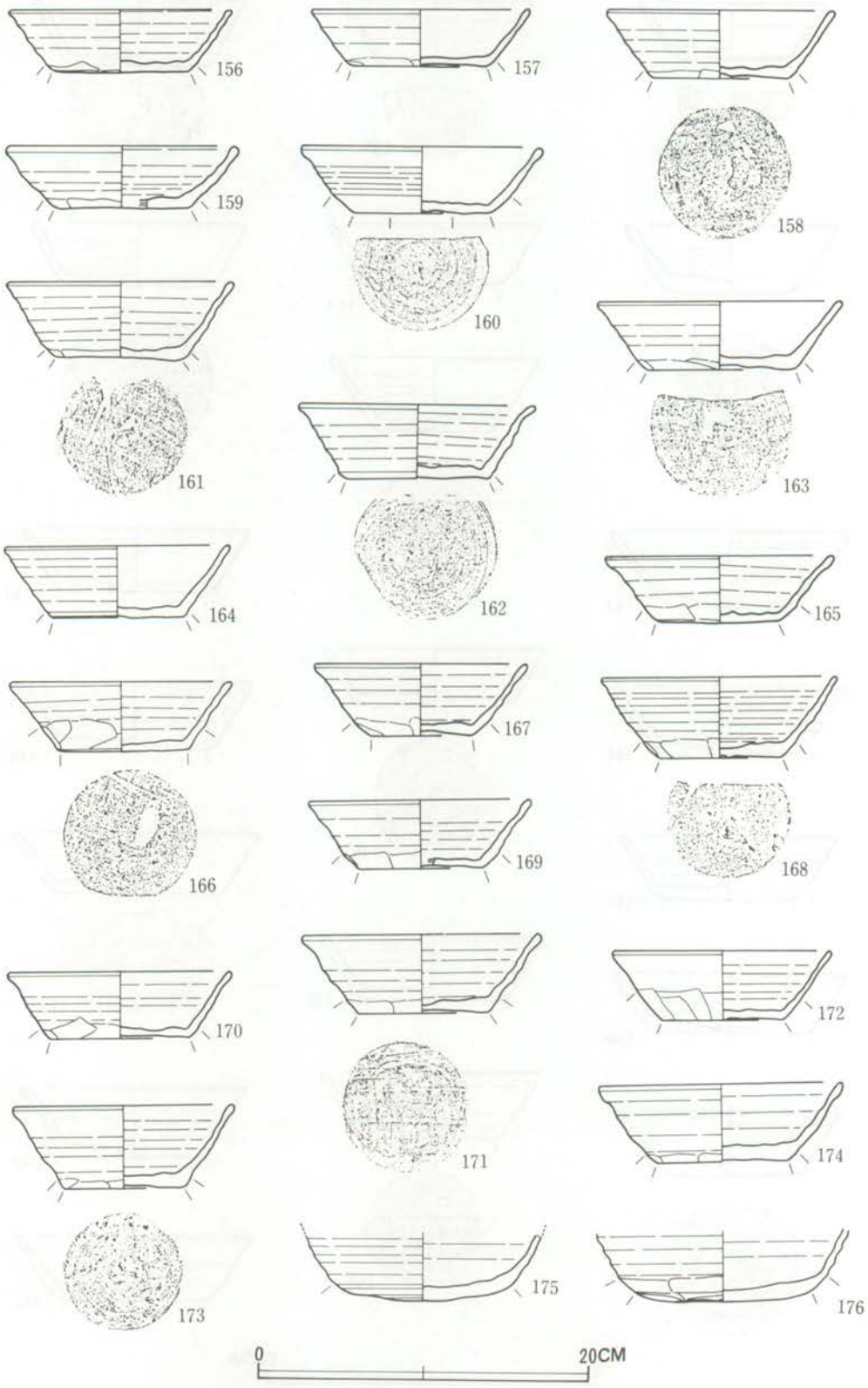
この甕は胎土に多量の雲母を含んでいる点はA群の須恵器と共通しているが、全体的な感じはやや違うものがあるため、しいてA群とはしないで、別の製品と考えた方がよいと思われる。この甕に共通しているのは外面に平行叩きを施し、胴下半部をヘラケズリしている事である。口縁部の形態により3種がある。a（331）──底部からの立ち上がりはゆるやかで大きく外反する。口縁は大きく外側にひねり出し、端部は突帯状になっている。外面は口縁直下より横方向の平行叩きを施し、内面はヘラミガキを施している。b（332）──立ち上がりは直線的で、口縁は外反するがaほどではない。そのため、口縁端部はあまり突帯状が強調されない。外面は口縁直下からきれいな横方向の平行叩きを施し、胴下半部をヘラケズリしている。内面にはナデ調整を施している。c（333）──頸部から口縁が大きく屈曲し、外反する。そのため、頸部外面に沈線状のくぼみができる。口縁端部は突帯状を呈し、上下を面取りしている。外面は頸部より下に横方向のきれいな平行叩きを施し、胴下半部にヘラケズリを施している。内面にはナデ調整をしている。bに比べ器高が低い。

B群（第267～268、275、281～283図）

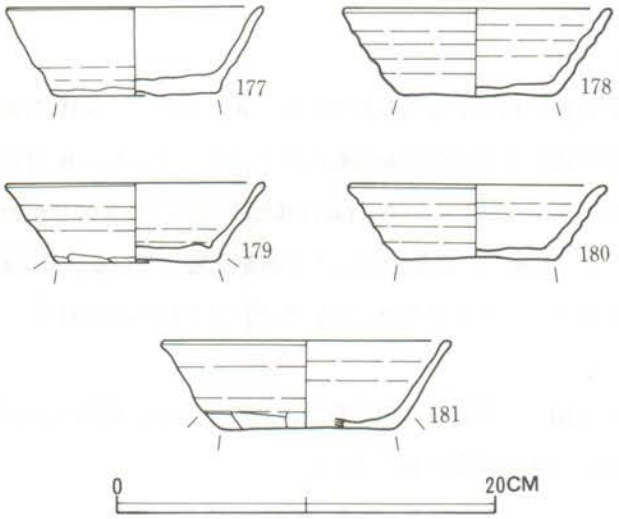
B群の特徴は雲母も含まれているが、大きな長石、石英を多量に含むのが特徴であり、A群と大きく異なる。そのために器面は密な面を呈さずにザラついた感じがする。色調は青灰色を基本としている。焼成はおおむね良好であるが、悪いのもある。器種は杯A、蓋、甕、片口鉢が確認されている。



第267図　谷出土須恵器実測図・A群杯A①（1/4）



第268図　谷出土須恵器実測図・Ｂ群杯Ａ②（1/4）



第269図　谷出土須恵器実測図・Ｂ群杯Ａ③（1/3）

杯（136～181）

すべて杯Ａであり、法量により、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（口径15.6cm以上）の４タイプがある。ここで共通しているのは底部切り離しの技法がヘラ切り技法である点である。

杯ＡⅢ（143～166、168～174、177～181）

Ｂ群杯Ａの大部分はここに所属する。４つのタイプがある。ａ（143･144）――底部が丸底気味になっているため、口径に比して底部が小さい。器高も高い。体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリをしている。ロクロ目が顕著であり、143は器肉の厚さが一定でない。ｂ（145～153、155～157、165）――口径に比して底径が大きく、器高は低い。146、149、152は底部を全面ナデ調整している。体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリするもの（145、153、157、165）、体部下端から底部全面を回転ヘラケズリするもの（147、148、151、156）、底部のみ全面手持ちヘラケズリするもの（150、155）がある。ｃ（154、158～160、162～164、170、177～181）――ｂより器高がやや高くなり、口縁が外反する。ロクロ目が顕著である。体部下端から底部全面を回転ヘラケズリするもの（154、162、164）、体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリするもの（159、163、170、179、181）、底部全面を手持ちヘラケズリするもの（177、178、180）、158は体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリした後にナデ調整を施したもの、160は体部下端から底部周縁を回転ヘラケズリしたものである。ｄ（161、166、168、169、171～174）――口径に比して底径が小さく、器高が高い。ロクロ目が顕著で、底部は概して厚いが、中央はヘラ切り痕のために薄くなっている。すべて、体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリしている。168はヘラケズリの後にナデ調整を施している。166、172はヘラケズリが体部の半分近く

までにおよんでいる。

杯AII（137～142）

すべて、杯AIIIの分類に対応する小形品である。a（139）――全体に厚ぼったい作りで、丸底気味である。体部下端から底部全面を回転ヘラケズリしている。b（140、141）――体部下端から底部全面を回転ヘラケズリしている。140は体部下端のヘラケズリが顕著で、底部との境が丸味をもっている。c（138）――底部全面にナデ調整を施している。d（137、142）――体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施している。特に142は体部半分近くにまでおよんでいる。

杯AI（136）

タイプとしては杯AIIIc、杯AIIcの小形品である。底部の器肉だけが厚い。体部中段に稜ができる。底部全面にはナデ調整を施している。

蓋（253、254）

蓋はすくなく2点だけである。2点ともに杯AIIIaに伴う杯蓋であると思われる。253は口縁からゆるやかな湾曲を示しながら天井部にいたる。紐は扁平で大きなものであり、周縁はくぼみ、中央が盛り上がっている。口縁の内側には非常に退化したかえりがある。天井部は回転ヘラケズリを施している。254は253に比べ、天井部が平坦になっている。両者ともにロクロ目は顕著である。

甕（326、328～330）

甕の破片はかなりの量になるが、全体が復元できるものは皆無である。形態的には以下の3種になる。a（326）――小形の甕で、頸部から直立して立ち上がり口縁は大きく外反する。口縁端部は外側で平坦面になっている。体部外面にはナデ調整を施している。内面には青海波が残っている。b（328）――頸部が長く、口縁はゆるやかに外反する。口縁端部には粘土紐を貼りつけて2段の突帯状になっている。頸部には雑な波状文がある。c（329、330）――体部が直線的に立ち上がり、頸部において90°に屈曲し、口縁にいたる。329は口縁端部がやや肥厚している。頸部直下より縦方向の平行叩きを1段施し、その下からは横方向の平行叩きになる。330は頸部が若干凹み、その下からきれいな縦方向の平行叩きを施している。

片口鉢（335）

1点しかない珍しいものである。底部から直線的に立ち上り、口縁にいたる。口縁端部は丸みをもっている。片口は口縁を上から押し出して作っている。体部上面には平行叩きが交互に施されているため、斜格子状になっている。内面はナデ調整を施しているが、焼成はあまりよくないために器面がザラついている。

Ｃ群（第270～272図）

Ｃ群の特徴はＡ、Ｂ群にくらべて、胎土が非常にきめ細い。そのため器面は大変になめらかな一群である。しかしながら、Ａ、Ｂ群ほど斉一的な特徴は見出しがたい。そのためここでＣ群とした一群はさらに細分できる可能性をもっている。色調は灰白色～灰褐色を呈しており、焼成は良好である。器種は現在のところ椀Ａと杯Ａしかない。

椀（183）

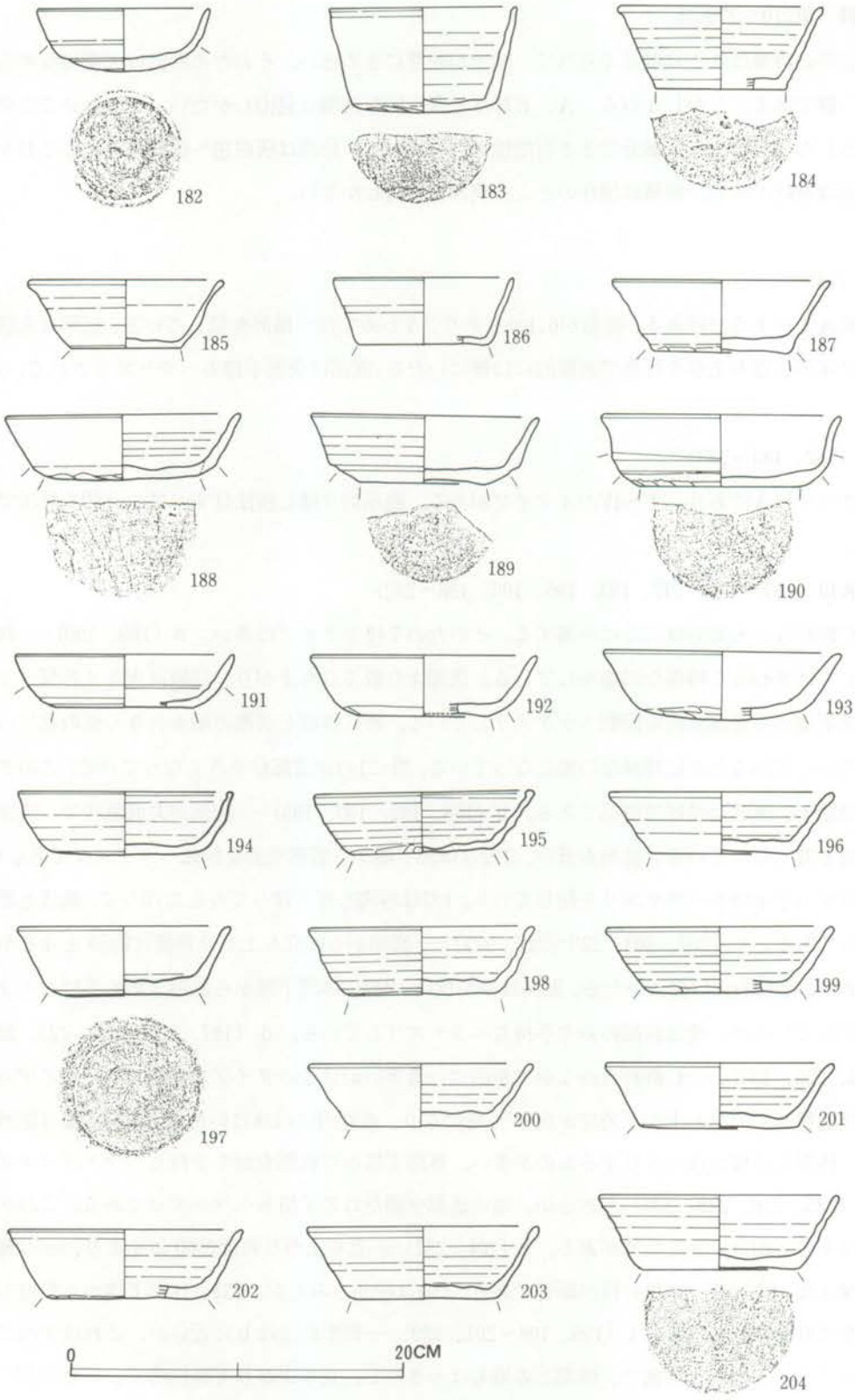
椀ＡⅠが１点だけある。器高が6.1cmもあり、きわめて深く筒形を呈している。底部は丸底気味で体部の立ち上がりは急で直線的に口縁にいたる。底部は全面手持ちヘラケズリされている。

杯（182、184～233）

すべて杯Ａであり、Ⅰ～Ⅳの４タイプがある。底部切り離し技法はすべてヘラ切り技法である。

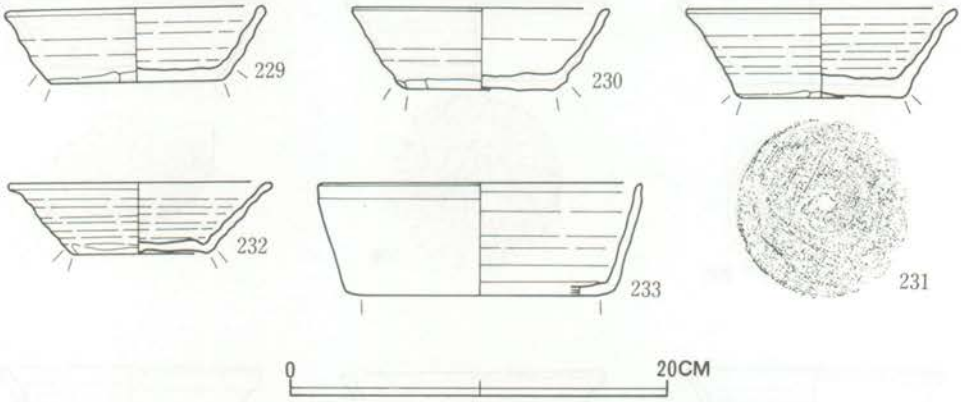
杯ＡⅢ（187～190、192、193、195、196、198～232）

Ｃ群杯Ａの大部分はここに所属する。そのため７種とタイプは多い。ａ（189、190）――杯Ａとしてはきわめて特異な形態をしている。底部より鋭く立ち上がり、口縁は大きく外反する。体部下端から底部全面を回転ヘラケズリしている。特に体部と底部の境を大きく面取状にヘラケズリしているために持異な形態になっている。特に189は底部が小さくなっている。このタイプは胎土、焼成は良好で優品である。ｂ（188、192、193、195）――底部が丸底気味で、体部との境も丸くなっている。器高も低い。192は体部下端から底部全面を回転ヘラケズリであるが、他はすべて手持ちヘラケズリを施している。193は器肉も厚くぼってりした作りで、焼成も悪いものである。ｃ（202、203、220～222、227）――底部からの立ち上がり角度は約55°とゆるやかであり、直線的に口縁にいたる。器高はやや低い。227は体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリしているが、他は底部のみを手持ちヘラケズリしている。ｄ（187、205～219、223、225、226、228、230）――Ｃ群杯Ａのなかで量的に一番多いのはこのタイプである。このタイプの特徴は底部からの立ち上がり角度が約60°と急になり、直線的に口縁にいたる。口縁端部は肥厚して、体部との境がはっきりするものが多い。体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリするもの（225、226、228、230）もあるが、他は底部全面だけの手持ちヘラケズリである。このタイプはもっと細分できる余地がある。ｅ（204、231）――立ち上がり角度が60°以上あり、かつ器高が深くなっている。ロクロ目が顕著である。204は底部のみだが、231は体部下端から手持ちヘラケズリを施している。ｆ（196、198～201、229）――器形的にはｂに近いが、これはすべて直線的である。底部は平底で、体部との境もはっきりし、立ち上がりも直線的で、口縁端部がやや外反する。229は体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを施しているが、他はすべ



第270図　谷出土須恵器実測図・C群杯A①（1/4）

第271図　谷出土須恵器実測図・Ｃ群杯Ａ



第272図　谷出土須恵器・Ｃ群杯Ａ③（1/4）

て底部だけを手持ちヘラケズリしている。G（224、232）──口径に比して底径が小さく、器高が低いため、体部の立ち上がりは大きく、口縁が外反する。ロクロ目が強い。224は底部全面に回転ヘラケズリを施している。232は体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリした後に、底部全面にナデ調整を施している。

杯ＡⅠ（182、186）

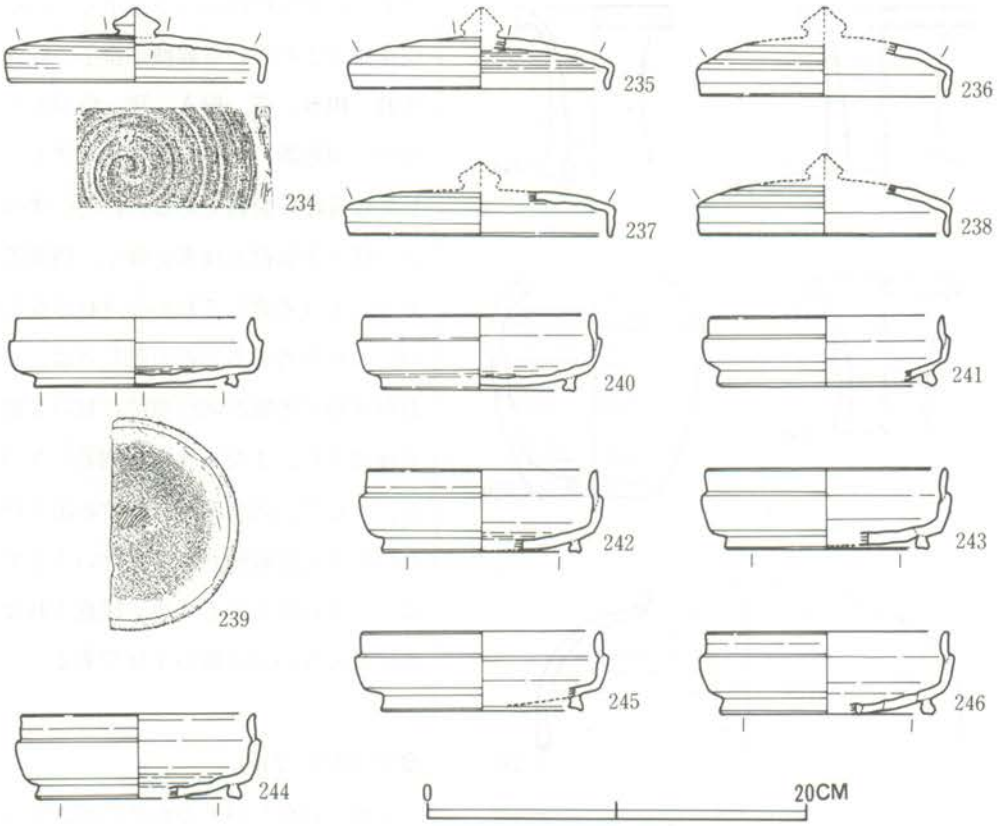
182は丸底を呈し、体部上半から直線的に外反して口縁にいたる。体部下半から底部を全面回転ヘラケズリを施している。色調は灰白色を呈し、焼成は良好で堅緻である。飛鳥時代の所産である。186は底部からの立ち上がり角高は70°と大きく、直線的に口縁にいたる。底部は回転ヘラケズリを施している。大形品に対応するものはない。

杯ＡⅡ（184、185、191、194）

３種あり、それぞれ杯ＡⅢに対応する。b（191、194）──191は体部下半から底部全面を、194は底部全面を回転ヘラケズリしている。d（185）──体部上半の器肉が薄くなり、口縁が外反しているようにみえる。底部全面を回転ヘラケズリしている。e（184）──杯ＡⅢｅに比すとやや器高が高い。底部は全面にナデ調整を施している。

杯ＡⅣ（233）

１点だけである。口径17.1cmと大形である。口径に比して底径が大きいため、体部の立ち上がりは直角に近く、直線的に口縁にいたる。口縁端部は外側が若干薄くなり、直立している。底部全面に回転ヘラケズリを施している。色調は灰色を呈し、焼成は良好で堅緻である。



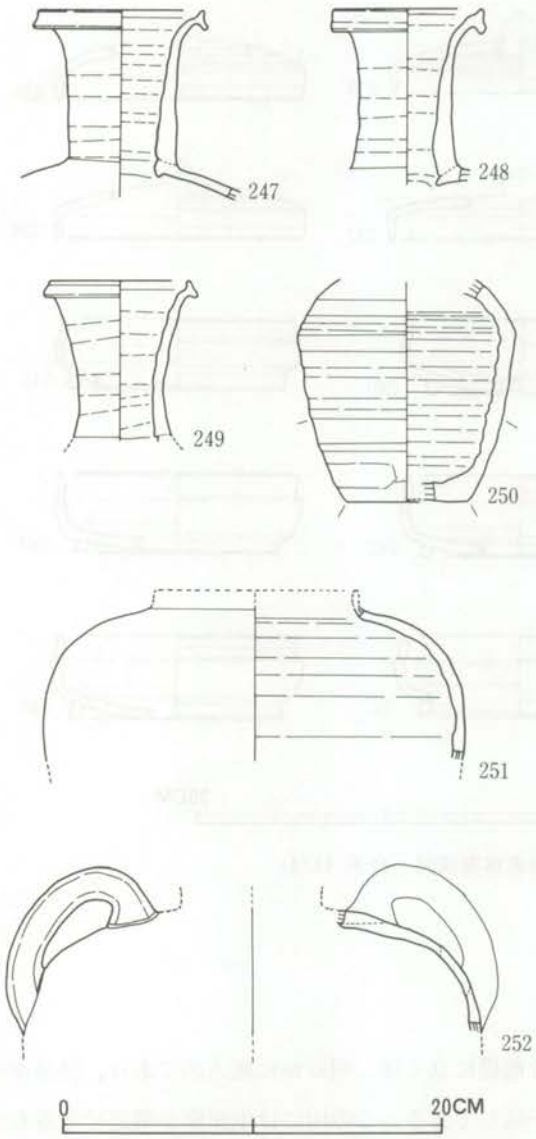
第273図　谷出土須恵器実測図・合子（1/4）

D群（第273～283図）

D群は、A～C群を在地系の須恵器という前提に立てば、明らかに搬入品であり、優品が中心になって構成されている一群の須恵器を一括してある。この中には生産窯が限定できるものがあり、それによってさらに4つの群に細分できる。向台遺跡谷出土の遺物群において最も注目されるのはこのD群須恵器の多量な存在により、今まで不明であった器種等も確認され、また、各生産窯と本地域の土器の様相を比較対照するのも容易になってきたため、奈良時代土器の実態がかなり明確になりつつある。

1類（第273、276～278、280、281、283図）

最も特徴的なのはこの1類である。胎土は非常に精製されており、緻密なものである。中に若干大粒の石英、長石を含んでいる。そのため器面はなめらかですべすべしている。色調は灰黒色を基本としているが、灰色、明褐色もある。焼成は良好で非常に堅緻であり、叩くと金属的な音がするほどである。ここでみられる製品は洗練されたもので、作りはきわめてシャープ



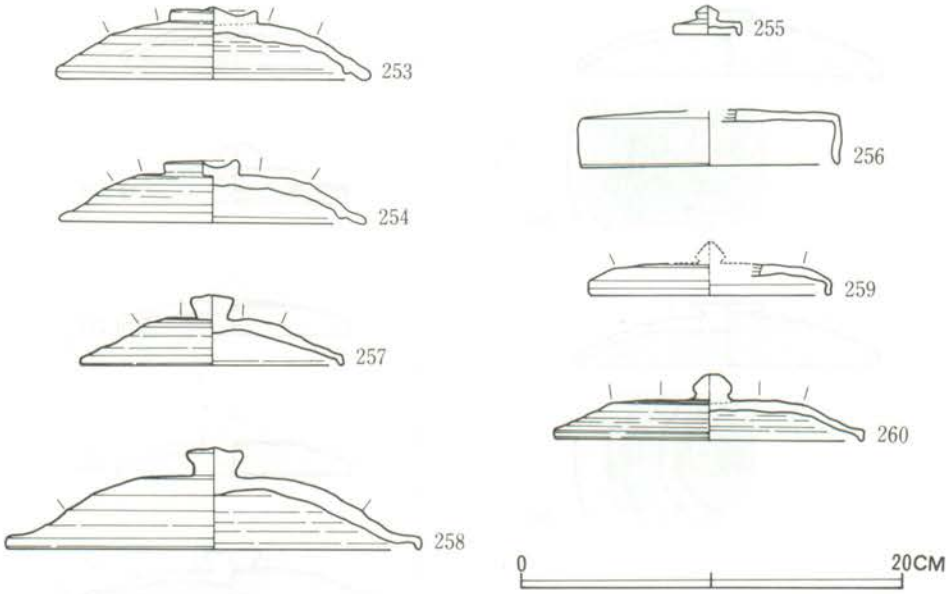
第274図　谷出土須恵器実測図・長頸瓶・壺類（1/4）

であり、製作技術の高さを示している。現在確認されている器種は合子、杯A、杯B、ⅢB、蓋、椀A、甕、甑があり、当時の須恵器のセット関係を示すものとしては良好な資料である。ただ、すべてが一括の土器群とは考え難く、時間差のあることは考慮しておかなければならない。これを考える一番の難しさは、このD群１類須恵器が向台遺跡において初めて確認され、まだ生産地が判名しないこと、そして、向台遺跡以外での出土例がないために比較検討ができないことである。いずれにしても今後、注意されなければならない須恵器の１群である。

合子（234～246）

１類には珍しいものが多いが、この合子はその最たるものである。量的にもまとまっており、その規格性にもおどろかされる。類例はきわめて少く、『平城宮発掘調査報告』でいうところの壺Dに近い形態をしている。また、愛知の岩崎25号窯、静岡の御子ヶ谷遺跡、三新田遺跡からも同様の形態をしたものが出土している。しかしながら、いずれの類例も本例とは違うものである。

身（239～246）は口径12～12.6cm、器高3.6～4.3cm、底径10.2～11.2cmときわめて規格化されたものである。底部はやや丸底気味で、体部の立ち上がりは直角に近く、体部半ばまでくる。そこに受部をつくるため、新たに粘土紐を内側にあわせて貼りつけて、直立の口縁になっている。この貼り付けた部分の外側か内側に段ができ、そこを受部にしているのである。この受部も非常にシャープに作られ、後述する蓋とぴったりと一致する。高台は底部の外周近くに付けられ、台形状で外側にしっかりとふんばるようにしっかりとした作りである。底部は全面回転ヘラケズリをしている。239、246の底部には回転糸切り痕が残っている。この１類須恵器が糸



第275図　谷出土須恵器実測図・蓋 ①（1/4）

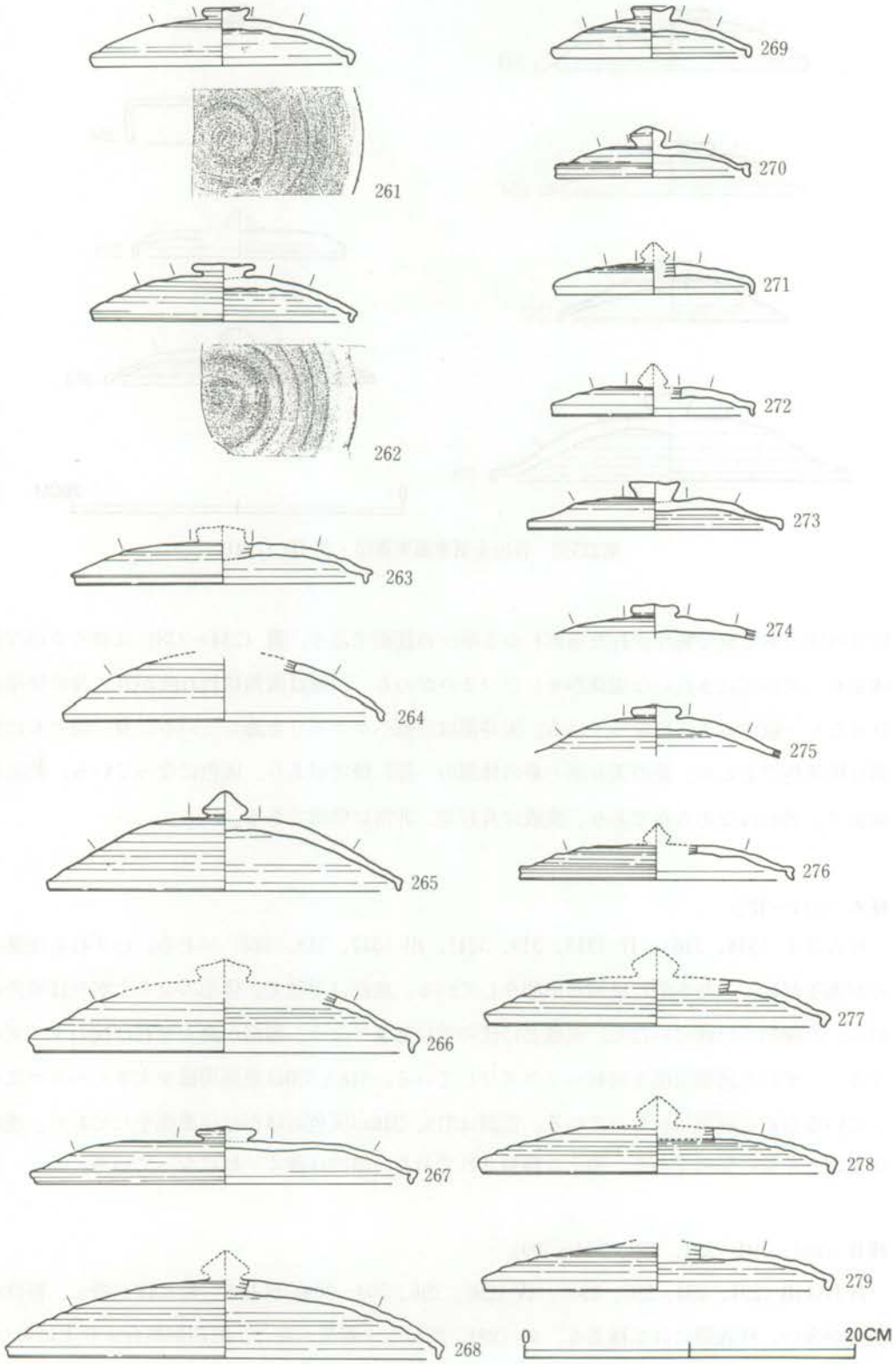
切り技法のある窯で製作された事がわかる唯一の証拠である。蓋（234～238）はゆるやかな丸味をもつ天井部にきれいな宝珠形をしたつまみがのる。口縁は直角に折れ曲がり、身の受部にぴったり一致するようになっている。天井部は回転ヘラケズリを施している。身、蓋ともに色調は灰黒色であるが、蓋の天井部と身の体部の一部に降灰があり、灰色になっている。胎土は緻密で、器面はなめらかであり、焼成は良好で、非常に堅緻である。

杯A（314～321）

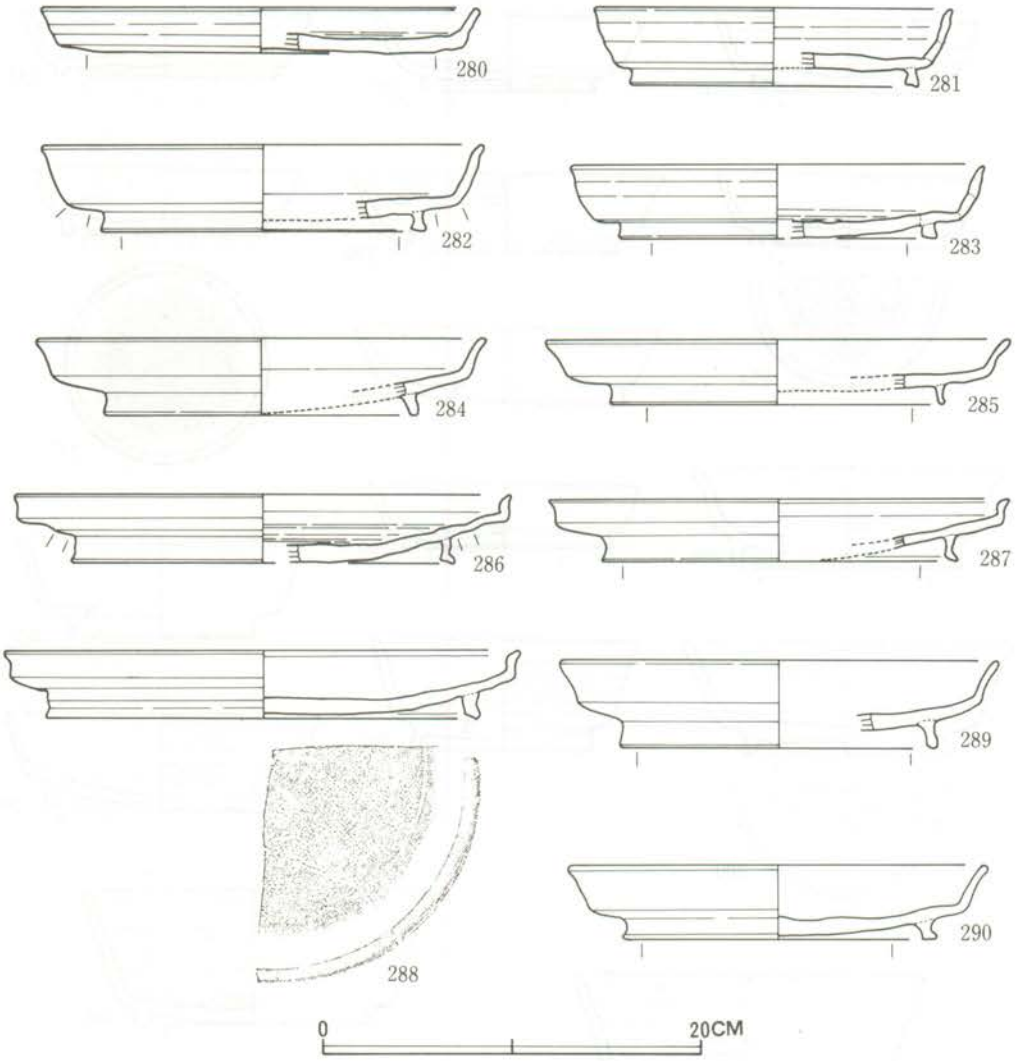
杯AはⅠ（314、316）、Ⅱ（315、319、321）、Ⅲ（317、318、320）がある。いずれも法量の差があるだけで、基本的には同じ形態をしている。底部は平底で、体部の立ち上がりは直角に近く、直線的に口縁にいたる。底径と口径の差はあまりなく、器高が高くなれば椀のタイプになる。いずれも底部全面を回転ヘラケズリしている。318と320は底部周縁を大きくヘラケズリしているために面取状になっている。色調は315、316が灰色のほかは灰黒色をしており、焼成は良好で非常に堅緻である。胎土は精製されており、器肉は薄く一様になっている。

杯B（291、294～297、299、304～309）

杯BはⅢ（291、294、297、299）、Ⅳ（295、296、304～309）がある。特にⅣが多く、特殊な製品が多い。杯AⅢには２種ある。a（291、294）――器高が高く、底部が高台より上にあり、水平になるもの。b（297、299）――器高が低く、底部が高台と同じか突出するもの。いずれも高台は底部の外周につき、しっかりとふんばった作りをしている。いずれも底部全面を回転へ



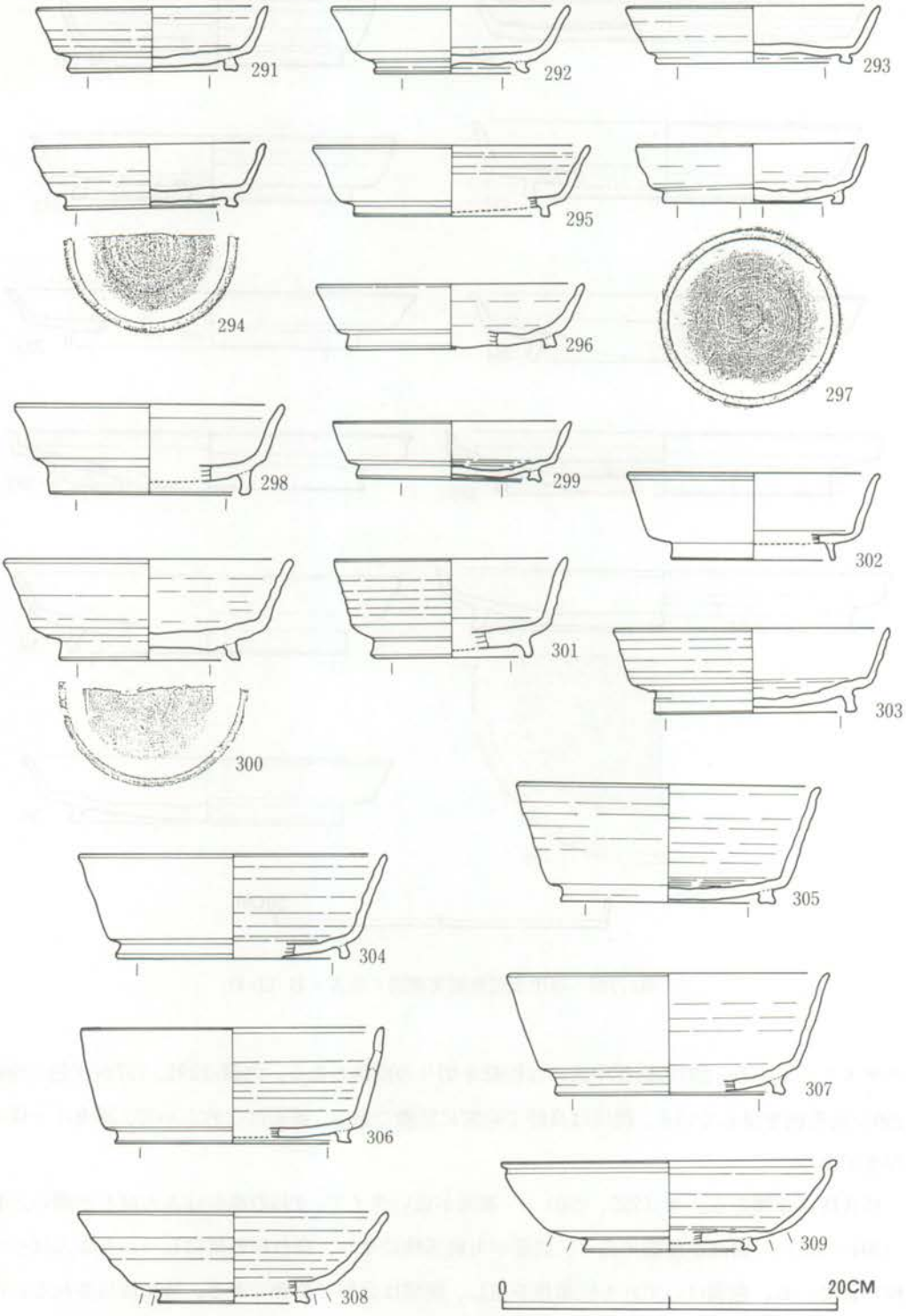
第276図　谷出土須恵器実測図・蓋 ②（1/4）



第277図　谷出土須恵器実測図・皿Ａ・Ｂ（1/4）

ラケズリしている。297の底部中央には回転糸切りの痕跡がある。色調は291、297が灰色、294、299が灰黒色を呈している。焼成は良好で非常に堅緻である。器面はなめらかで、器肉は一様の厚さである。

杯ＡⅣは３種ある。ａ（295、296）――器高が低いタイプ。295の高台はふんばりが弱い。ｂ（304～307）――器高が極端に高く、底部が丸底気味になり、高台が外周にしっかりふんばって作られている。色調はいずれも灰黒色を呈し、焼成は良好で堅緻である。特に注目されるのは305の外面に赤銅色をしたものが吹き出ていることである。これは色までも金属器の模倣をしたものと思われ、その具体的な技法についてはまったく不明である。ｃ（308、309）――これも先のｂと同様に特殊な製品である。体部は丸みをもち、口縁にいたる椀に近いタイプであり、明



第278図　谷出土須恵器実測図・杯Ｂ①（1/4）

らかに金属器の模倣である。特に309は口縁端部が大きく外反するものである。高台は底部の外周にしっかりとふんばるように作られている。底部は回転ヘラケズリを施している。色調は308は暗赤銅色を呈し、305と同じである。309は灰黒色を呈しており、焼成は良好で非常に堅緻である。両者ともに胎土は精製されており、器面はなめらかになっている。

皿B（281～283、286～288）

皿BはII（口径17.8～19cm、器高2.4～3.9cm）、III（口径21.6～27.1cm、器高2.2～4.5cm）がある。皿BII（281）は底部が平底で、体部の立ち上がりは急で、体部半ばにおいて直立し口縁に至る。高台は外周にしっかりとふんばるように付けられている。色調は灰黒色を呈し、胎土に細かい長石を多く含んでいるが、器面はなめらかで光沢すらある。焼成は良好で非常に堅緻である。

皿BIII（282、283、236～238）には2種ある。a（284、285）――体部が外反し、さらに口縁がゆるく外側に屈曲しているもの。283は底部が大きく張り出すが、282は水平である。高台は底部の外周よりやや内側で、しっかりふんばった作りである。底部は全面回転ヘラケズリを施している。色調は灰色で、焼成は良好で堅緻である。b（286～288）――底部の中程からゆるやかに上り、体部は直立し、口縁は大きく外反する。高台は外周のやや中程に薄くて高いが、外側にふんばった作りをしている。底部は全面回転ヘラケズリを施している。色調は灰色で、焼成は良好で堅緻である。器面はなめらかで、重ね焼きの痕跡が見込みに顕著である。

蓋（261～279）

蓋は法量により、5種あるが、組み合う身は確定はできない。a（269～272）――天井部が大きく湾曲し、中央が凹んだボタン状のつまみのついたもので、口縁は直角に折り返されているもの（269）と、天井部は水平で、凝宝珠つまみをつけ、口縁はするどく直角に折り返されたもの（270～272）がある。いずれも天井部は回転ヘラケズリを施している。271の外面には自然釉が付着している。おそらく杯BIIIに伴う蓋であろう。b（273）――天井部は水平で、逆台形をしたがっしりしたつまみがつく。口縁の折り返しは甘い。天井部は回転ヘラケズリを施してある。杯BIIIに伴う蓋であろう。c（261、262）――天井部はゆるやかに湾曲し、扁平で大形なつまみがつく。口縁は内傾するように大きく折り返している。天井部は回転ヘラケズリした後にナデ調整を施している。261の口縁部の内面に自然釉が付着している。杯BIVに伴う蓋であろう。d（263、264、276）――天井部は水平で、口縁の折り返しが極端につまみ出された後に、直立させているもの（263、276）と、天井部が大きく湾曲し、口縁をゆるやかではあるが直角に折り返したもの（264）がある。天井部はいずれも回転ヘラケズリを施しており、263は外面に、264、276は口縁部内面に自然釉が付着している。皿BIIに伴う蓋であろう。e（265～268、277～279）

――天井部はかろうじて水平で、宝珠形のつまみをつけ、口縁は直角に折り返されているもの(265、266)、天井部は水平で、扁平で大形のつまみをつけ、口縁の折り返しは内傾するほどのもの(267、277～279)、天井部が大きく湾曲しており、口縁は直角に折り返されているもの(268)がある。いずれも天井部は回転ヘラケズリを施している。265は外面に、266～268、278、279は口縁部に自然釉が付着している。皿BⅢに伴う蓋であろう。ここの蓋はいずれも灰黒色を基本としており、胎土に細かい長石、石英を含んでおり、焼成は良好で非常に堅緻である。器面はなめらかで、器肉の厚さも一様である。

甕(324)

胴部は球形を呈し、頸部が直立して、ゆるやかに外反して口縁にいたる。口縁端部はT字形をして内傾している。体部には斜めに平行叩きを施し、内面はナデ調整をしている。色調は灰黒色を呈し、一部分に自然釉が付着している。胎土には黒色粒子を多く含んでおり、焼成は良好である。器面はなめらかで光沢があるほどである。

甑(334)

底部よりゆるやかに立ち上がり、頸部が大きく屈曲して口縁にいたる。口縁端部は複雑にひねり出されており、上方と下方に平坦面をつくり出しているため、中央が突帯状になっている。頸部より下に横方向の平行叩きが施されている。体部下端はヘラケズリ、体部内面はナデ調整を施している。底部には5孔が穿たれている。

2類(第274・275・280図)

2類とした須恵器の1群は猿投窯の製品と思われるものである。器種としては長頸瓶、壺、蓋、椀があるが、数量的にはきわめて少ない。

長頸瓶(247～250)

247は太くがっしりした頸部が直立し、口縁は大きく屈曲している。口縁端部はT字形の突帯状を呈し、やや内傾している。色調は鉄分のようなものが浮き出ており、赤銅色を呈している。焼成は良好で非常に堅緻である。口縁部内面に自然釉が付着している。折戸10号窯期の所産と思われる。248、249は頸部がやや細く、ゆるやかに外反しながら口縁にいたる。口縁端部は247と共通しているが、249においては小作りになっている。色調は248が赤銅色を呈し、249は灰黒色を呈している。両者ともに口縁部内外面に自然釉が付着している。250は体部のみで肩の張りのゆるやかなものである。体部下端から底部全面を回転ヘラケズリしている。ロクロ目は顕著に残っている。色調は灰黒色を呈し、焼成は良好で非常に堅緻である。肩部と底部内面に自然

釉が付着している。以上の３点は鳴海32号窯期が折戸10号窯期の所産と思われる。

壺（251・252）

251は肩が大きく張り、口縁が直立する短頸壺であろう。色調は暗灰色を呈し、長石、石英、黒色粒子を多く含んでいるが、器面はなめらかである。焼成は良好で非常に堅緻である。肩部から体部上半にかけて一様な自然釉が付着している。252は肩部に半環状の把手が２つ付く壺である。色調は灰白色を呈し、焼成は良好で非常に堅緻である。外面には一様に自然釉が付着している。両者ともに高蔵寺２号窯期の所産と思われる。

蓋（255、256）

255は折戸10号窯期に特徴的に見られるミニチュア製品の蓋である。天井部は水平で、大きな凝宝珠形のつまみがつく。口縁は直角に折り返えされている。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好で堅緻である。天井部には自然釉が部厚く一様に付着している。256は短頸壺の蓋であろう。天井部は水平で、口縁は直角に折り返えされている。口縁端部は内側が薄くなっている。色調は灰色を呈し、胎土には細かい長石、黒色粒子が含まれており、焼成は良好で堅緻である。器面はなめらかで、器肉の厚さは一様である。鳴海32号窯期が折戸10号窯期の所産であろう。

椀Ａ（323）

底部はやや丸味をもち、体部の立ち上がりは直角に近く、直線的に口縁にいたる。口縁端部は内そぎ状になっている。体部内面にロクロ目が顕著にある。底部全面を回転ヘラケズリしているため、底部と体部の境は丸味をもっている。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好で非常に堅緻である。器面はなめらかで、光沢がある。器面の内外面ともに自然釉が付着している。鳴海32号窯期の所産であろう。

３類（第275・277・278・280・281図）

本類は常陸の木葉下窯の製品と思われるものである。なかでもｃ－５号窯製品に類似しているものが多いのが特徴である。数量的には少いが、器種は蓋、皿Ａ、皿Ｂ、杯Ｂ、椀Ａ、甕とバラエティーがある。

蓋（257・258）

２点とも同じプロポーションをしており、法量の差による違いである。天井部は水平で、ゆるやかな湾曲をもって口縁にいたる。口縁端部は直角に折り返されているが、シャープさがない。つまみは逆台形をしたしっかりした作りのものである。天井部は回転ヘラケズリしてある

が、ロクロ目が残っている。色調は灰黒～暗灰色を呈し、胎土に長石、黒色粒子を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。257は杯BIIIに、258は杯BIVにそれぞれ伴うものであろう。この蓋はc－5号窯製品に類似している。

皿A（280）

底部はやや突出しているが、全体的には水平で、体部の立ち上がりはゆるやかで、直線的に口縁にいたる。底部全面を手持ちヘラケズリしている。色調は灰黒色を呈し、胎土には細かい長石を含んでいる。焼成は良好である。

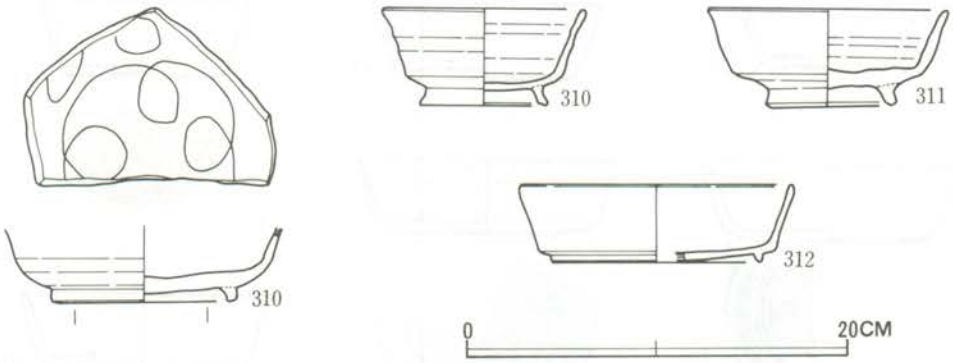
皿B（284・285・289・290）

2種ある。a（284、285、290）――底部がゆるやかにあがり、体部の立ち上がりを軽くひねり出したものである。口縁はやや外反する。高台は細い紐状のもの(284、285)、しっかり外側にふんばったもの（290）の2種ある。色調は灰色で、胎土には黒色粒子を含んでいる。焼成は良好である。c－5号窯製品に類似している。b（289）――aより器高、高台が高くなったものである。底部は全面回転ヘラケズリを施している。色調は灰色で、焼成は良好である。

杯B（292、293、298、300～303）

杯BにはIII（292、293、301、302）とIV（298、300、303）がある。杯BIIIには2種ある。a（292、293）――底部が水平で体部の立ち上がりはゆるやかである。底部と体部の境が丸味をもっている。高台は外周にそって、低いがしっかりと外側にふんばっている。底部は全面回転ヘラケズリを施しているが、292はそのあとにナデ調整を施している。色調は灰色で、焼成は良好で堅緻である。b（301、302）――底部がななめで、体部の立ち上がりは急で、器高は高い。高台は薄くて高いものが外周についているが、ふんばりは弱い。底部は回転ヘラケズリを施している。301はロクロ目が顕著である。色調は灰色を呈し、細かい長石を含み、焼成は良好で堅緻である。このタイプはc－5号窯製品に類似している。

杯BIVには2種ある。a（298、300）――底部がほぼ水平で、底部と体部との境は丸味をもっているが、立ち上がりは急で、直線的に口縁にいたる。高台は高くてしっかりとふんばったものである。底部は回転ヘラケズリを施している。色調は298は青灰色、300は灰色を呈している。焼成は良好で非常に堅緻である。300はc－5号窯製品に類似している。b（303）――底部は中央で大きくくぼみ、体部の立ち上がりは急で直線的である。器高はaより低い。高台は高くてしっかりふんばったものである。ロクロ目が顕著である。色調は暗灰色を呈し、長石、石英を含み、焼成は良好で非常に堅緻である。c－5号窯製品に類似している。



第279図　谷出土須恵器実測図・杯Ｂ②（1/4）

椀Ａ（322）

底部は丸底気味で、体部との境は丸味があるが、立ち上がりは急で直線的に口縁にいたる。底部は全面回転ヘラケズリを施している。色調は灰黒色を呈し、胎土には細かい長石を含み、焼成は良好で非常に堅緻である。器面はなめらかで、光沢がある。ｃ－５号窯製品に類似している。

甕（327）

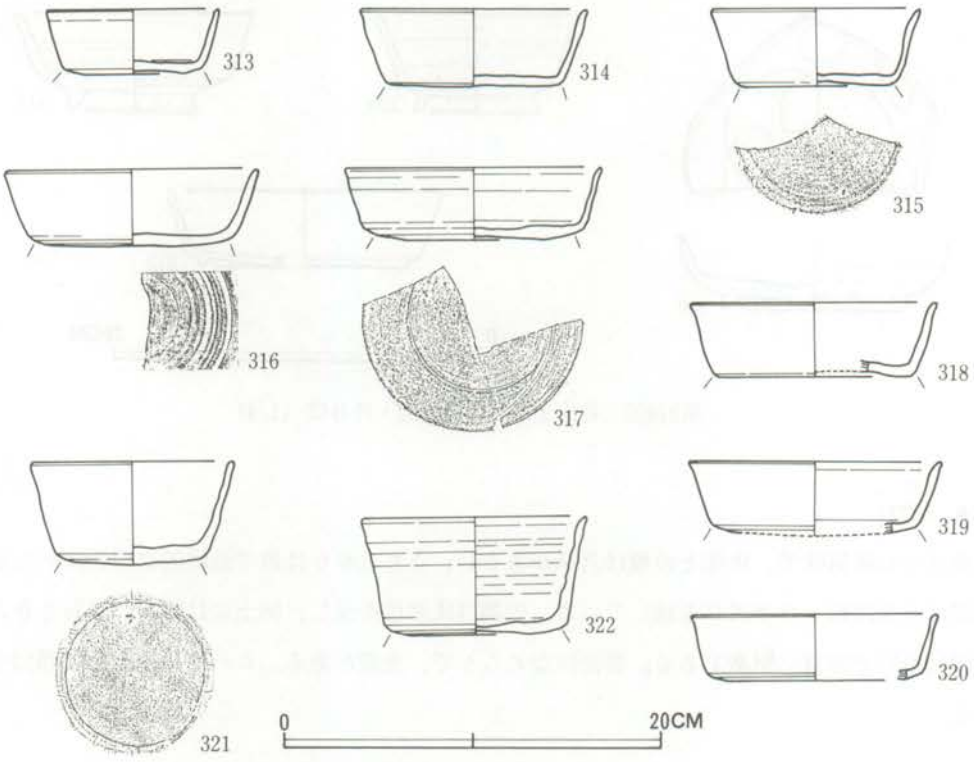
肩部から上の破片しかないが、かなりの大形品である。頸部は肩部より直立して立ち上がり、中程から大きく外反して口縁にいたる。口縁端部は上下に水平面をつくり出しているため、中央が三角形になるＴ字形の突帯状を呈している。口縁直下に断面三角形の細く低い突帯を貼り付けている。この突帯の上と口縁直下の間に雑な櫛描き波状文と列点文を１条入れている。また突帯の下も一条の雑な櫛描き波状文を入れている。この波状文は雑なもので、途中で途切れたりする。内外面ともにナデ調整を施している。色調は灰色で、焼成は良好で非常に堅緻である。ｃ－５号窯製品に類似している。

４類（第275、279図）

本類にまとめたものは今までの群別に入らないものを一括してある。そのためいままでの分類とは性格の違う１群である。ここでは蓋と杯Ｂしかない。

蓋（259、260）

259は小形の蓋である。天井部は水平で、口縁部は直角に折り返されている。天井部には回転ヘラケズリを施している。色調は灰色で、焼成は良好で堅緻である。杯ＢⅡあるいは短頸壺あたりの蓋と思われる。

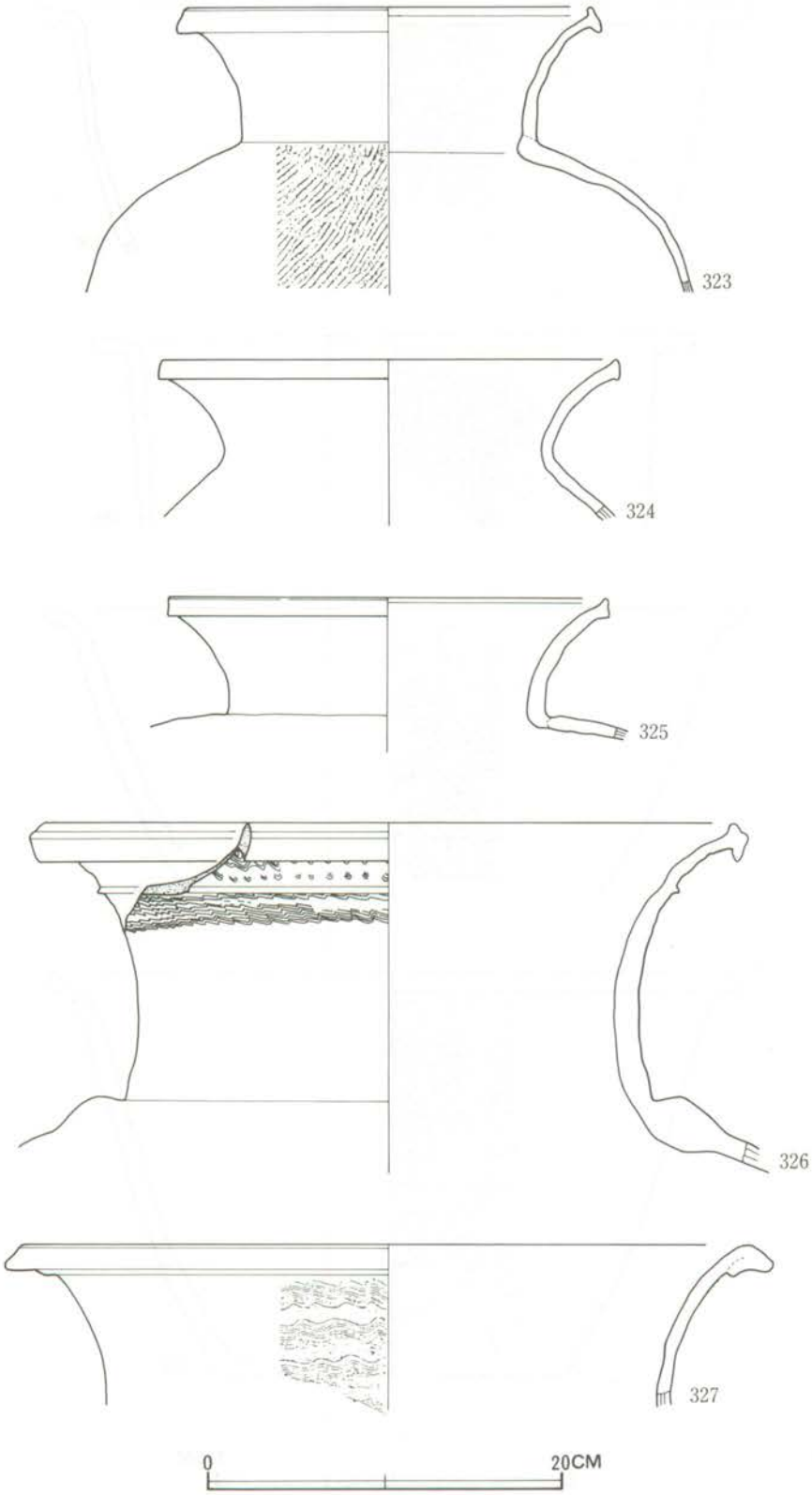


第280図　谷出土須恵器実測図・杯Ａ・椀（1/4）

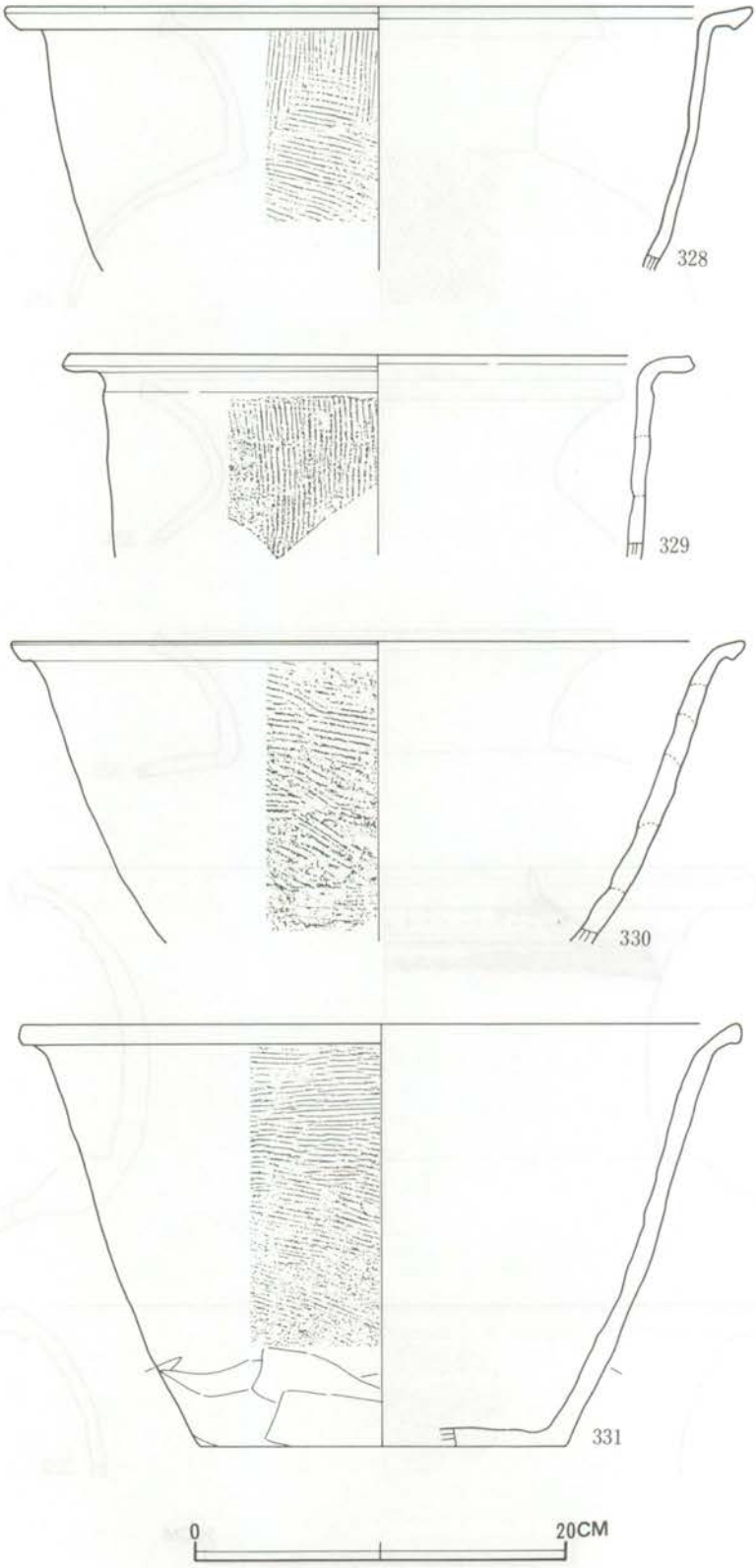
260は天井部が水平で、ゆるやかに下がり、口縁を直角に折り返している。口縁端部はぽってりとしている。つまみは凝宝珠形をしているどっしりとしたものである。色調は灰色を呈し、胎土には白色針状粒子が含まれている。焼成は良好である。皿ＢⅠあるいは杯ＢⅣに伴う蓋であろう。

杯Ｂ（310～313）

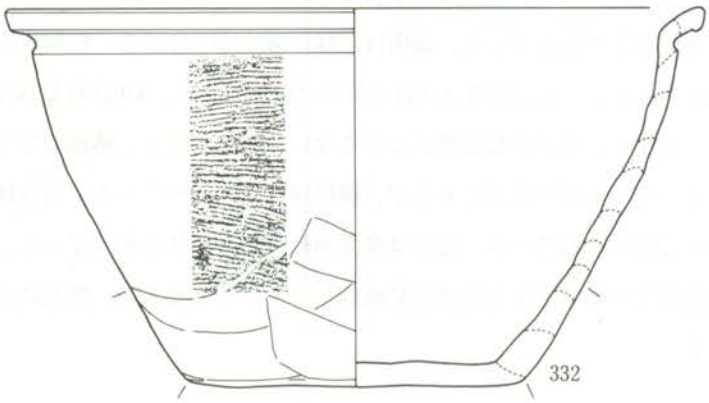
311は杯ＢⅠである。ゆるやかな曲線を描く底部から、体部は急に立ち上がり、直線的に口縁にいたる。底部と体部の境は内外面ともに丸味をもっている。高台は高く、外側にしっかりとふんばっている。ロクロ目は強く残っている。底部は全面回転ヘラケズリを施したのちにナデ調整を行なっている。色調は暗灰色を呈し、胎土には細かい石英を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。このタイプの高台の発達した杯は常陸に多く見られるものである。312は杯ＢⅡである。底部が厚く、体部の立ち上がりは急で、直線的に口縁にいたる。口縁端部はやや外反する。高台は高く、幅広く、外側にふんばっている。底部は全面回転ヘラケズリを施したのちにナデ調整を行なっている。色調は青灰色を呈し、焼成は良好で堅緻である。313は杯ＢⅢである。底部は水平であるが、中央がやや突出している。体部の立ち上がりは急で直線的に口縁にいた

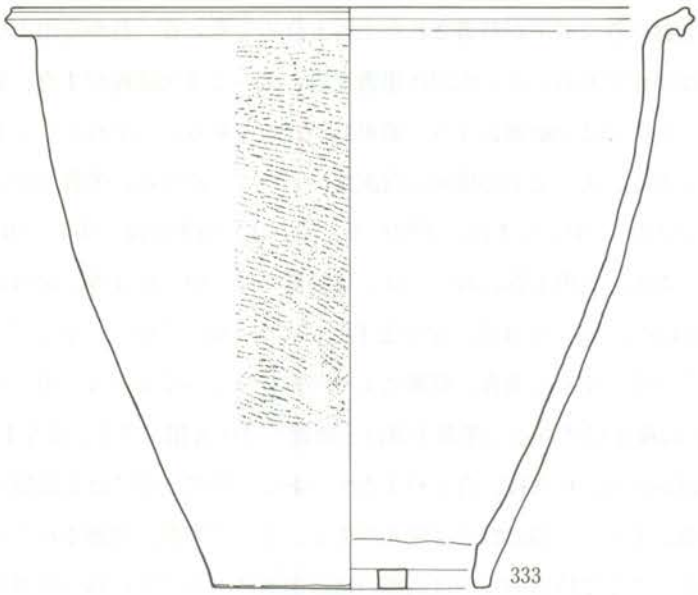


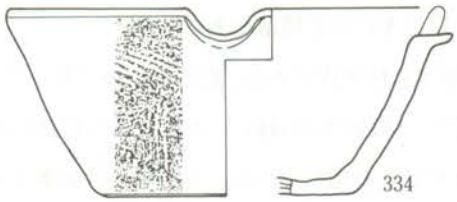
第281図　谷出土須恵器実測図・甕 ①（1/4）



第282図　谷出土須恵器実測図・甕 ②（1/4）







第283図　谷出土須恵器実測図・甕③・甑・片口鉢（1/4）

る。底部と体部の境は角ばっている。高台は外周についているが、低くて細いものである。底部は全面回転ヘラケズリを施している。器肉は一様に薄く均一である。色調は灰黒色を呈し、胎土に長石、石英を含んでいる。焼成は良好で非常に堅緻である。310は杯ＢⅣである。体部上半部が欠失しているため、全体的な器形がわからない。底部は厚く、体部の立ち上がるところから急に薄くなる。立ち上がりは急であるが、境目は丸味をもっている。高台は外周にしっかり外側にふんばって付けられている。底部は全面回転ヘラケズリを施している。この土器の一番の特徴は底部内面にラセン暗文を焼成前に線刻してあることである。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

５．墨書土器（第284・285）

ここでは墨書土器以外に文字が刻書された土器も含めて考える。谷から出土した墨書土器は17点、刻書土器は26点である。その内訳は墨書土器においては土師器が４点、須恵器が13点である。刻書土器においては土師器が４点、須恵器が22点である。いずれにしても須恵器の占める比率は圧倒的である。次に文字の種類の内訳は以下のようになる。墨書土器においては、土師器では「中」が２点、「甲」が１点、不明が１点である。須恵器は「中」が６点、「甲」が１点、不明が６点である。刻書土器においては、土師器では「中」が２点、記号が２点である。須恵器は「中」が12点、「井」が３点、記号と不明が４点、他は「甲」、「小」、「＋」が１点ずつである。このように見てくると墨書、刻書によって書かれている文字は「中」がその大部分を占めている。次に器種を見てみると墨書土器は土師器では杯ＡⅢが３点、皿ＡⅠが１点である。須恵器では杯ＡⅢが11点、杯ＡⅣ、合子が１点ずつある。刻書土器では土師器の４点は杯Ａであり、須恵器は蓋が１点で、他の21点は杯Ａである。そして墨書、刻書されている部位はほとんどが底部である。ここで特徴的なのは底部のほぼ中央に小さくていねいに書かれていることである。これは土師器、須恵器に共通している事である。土師器においては赤彩されているものに例が多い。須恵器はＣ群に多いのも特徴である。

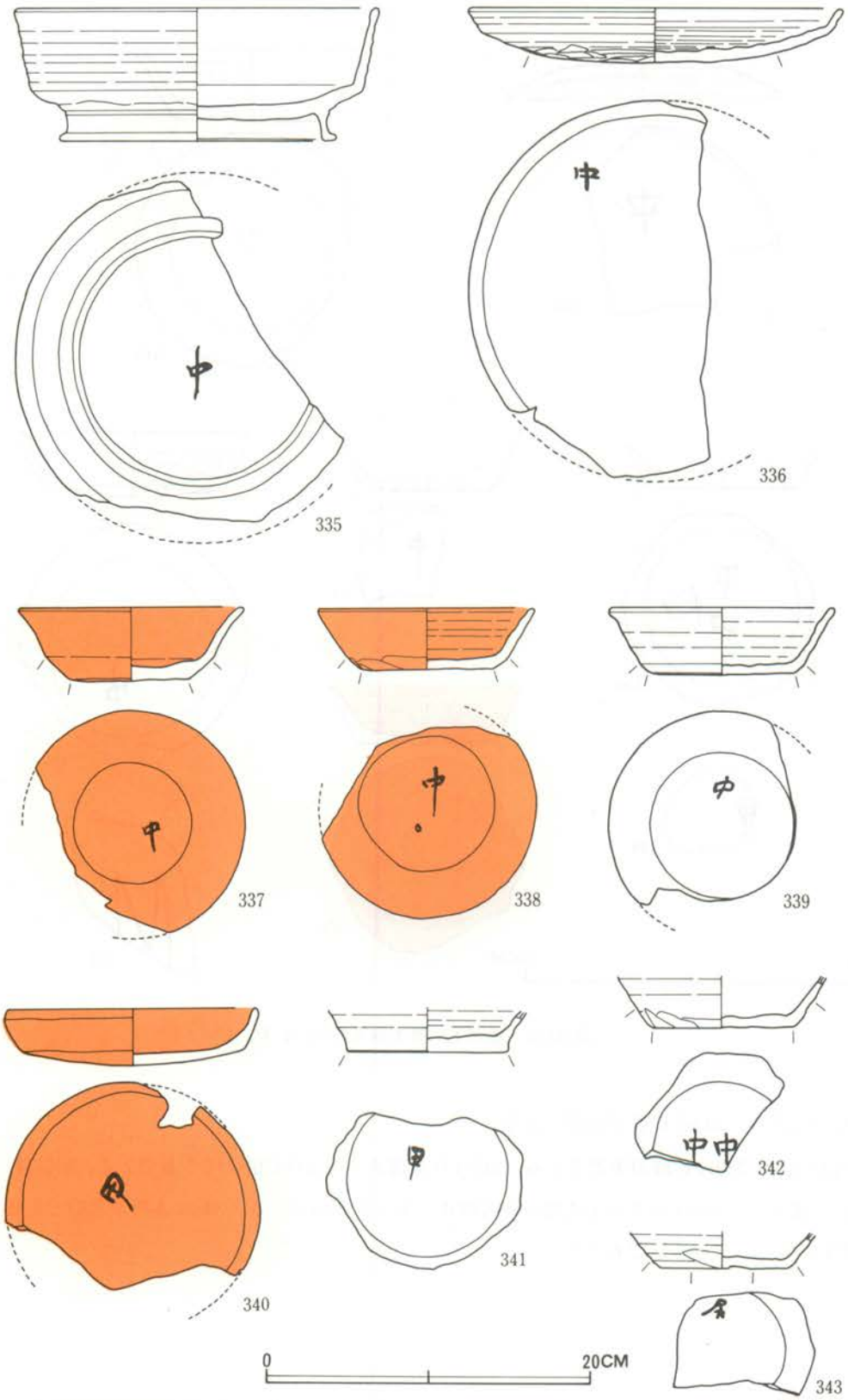
336はＤ群３類須恵器に属する杯ＢⅣである。底部は中央において大きくくぼんでいるが、体部の立ち上がりは直角に近く、直線的に口縁にいたる。高台は高いが外側に大きくふんばっている。底部は全面回転ヘラケズリを施している。ロクロ目は顕著である。色調は灰黒色で、胎土に長石、黒色粒子を含み、焼成は良好で非常に堅緻である。ｃ―５号窯製品に類似している。337はＣ群に属する皿ＡⅢである。底部は大きく突出して丸底になっている。口縁は大きく外反している。そのため、半球状に近い形態になっている。底部は手持ちヘラケズリを施している。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

338、339はロクロ土師器の杯ＡⅢａに属するもので、赤彩されている。341は土師器皿ＡⅠｂに属するもので赤彩されている。340、343、344はＡ群須恵器に属する。340は杯ＡⅢＣに属す

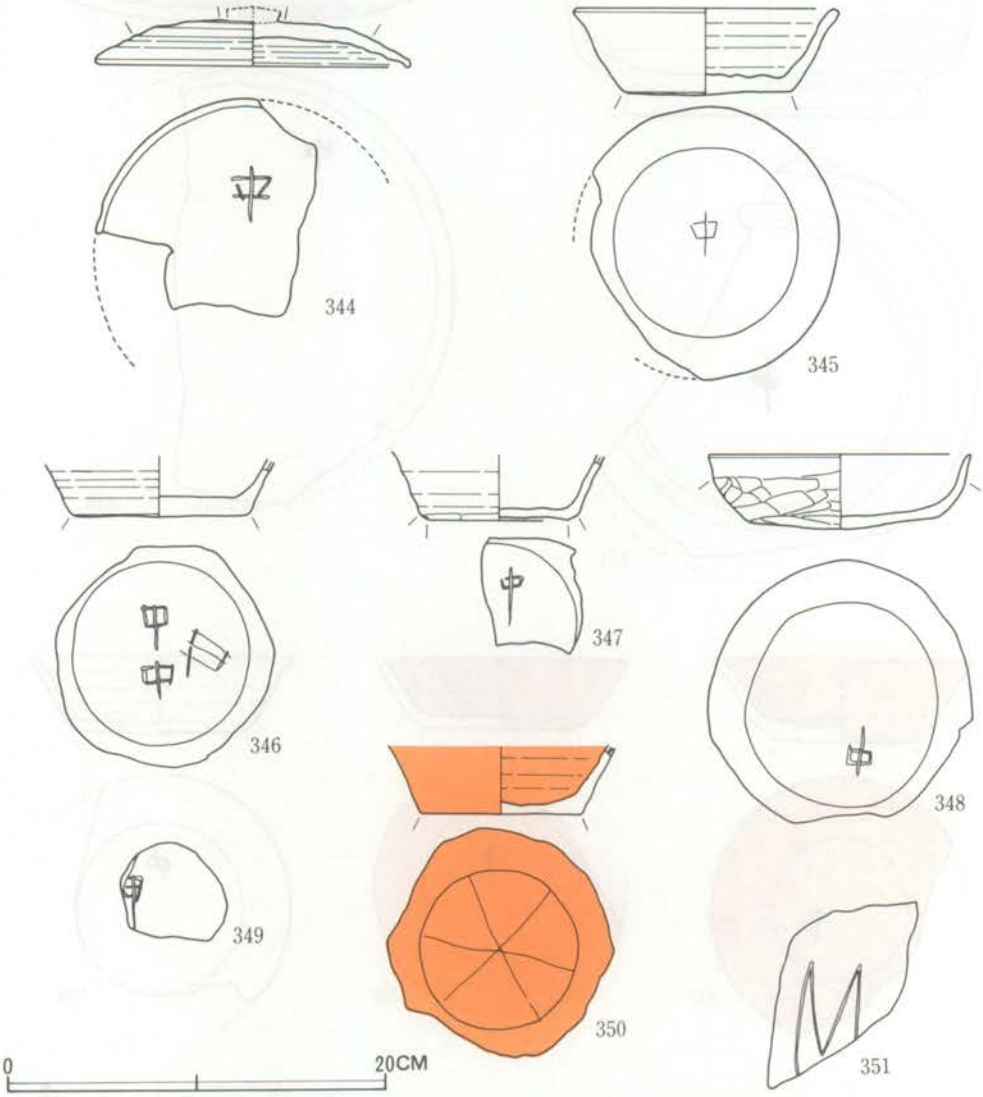
第10表　向台遺跡出土墨書土器一覧表

番号	釈文	器種	部位	出土地点	備考
1	□　□	土師器・杯AIII	底部	谷	4　畿内土師器
2	中	須恵器・杯AIII	底部	谷	97　A群
3	厨　？	須恵器・杯AIII	底部	谷	171　B群
4	□　万	須恵器・杯AIII	底部	谷	173　B群
5	□	須恵器・杯AIII	底部	谷	206　C群
6	中　？	須恵器・合子身	底部	谷	240　D群1類
7	中	須恵器・杯BIV	底部	谷	336　D群3類　PL. 107
8	中	須恵器・皿AIII	底部	谷	337　C群　PL. 107
9	中	土師器・杯AIII	底部	谷	338　赤彩　PL. 107
10	中。	土師器・杵AIII	底部	谷	339　赤彩　PL. 107
11	中	須恵器・杯AIII	底部	谷	340　A群　PL. 108
12	甲	土師器・皿AI	底部	谷	341　赤彩　PL. 108
13	甲	須恵器・杯AIII	底部	谷	342　C群
14	中　中	須恵器・杯AIII	底部	谷	343　A群
15	尿　？	須恵器・杯AIII	底部	谷	344　A群
16	？	須恵器・杯A	底部	谷	PL. 107
17	？	須恵器・杯A	底部	谷	PL. 108
18	中	土師器・杯AIV	体部外面	谷	刻書　50　赤彩
19	メ	土師器・杯AIII	底部	谷	刻書　54　赤彩
20	中	須恵器・杯AIII	体部外面	谷	刻書　118　A群
21	？	須恵器・杯AIII	底部	谷	刻書　143　B群
22	大　？	須恵器・杯AII	底部	谷	刻書　194　C群
23	？	須恵器・杯AIII	底部	谷	刻書　195　C群
24	中	須恵器・杯AIII	底部	谷	刻書　204　C群
25	中	須恵器・杯AIII	体部外面	谷	刻書　211　C群
26	中	須恵器・杯AIII	底部	谷	刻書　218　C群
27	十	須恵器・杯AIII	底部	谷	刻書　226　C群
28	川	須恵器・杯AI	底部	谷	刻書　316　D群2類
29	中	須恵器・蓋	内面	谷	刻書　345　C群　PL. 110
30	中	須恵器・杯AIII	底部	谷	刻書　346　C群　PL. 110

番号	釈文	器種	部位	出土地点	備考
31	中中中	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 347 C群 PL. 110
32	中	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 348 A群 PL. 110
33	中	土師器・杯AIII	底部	谷	刻書 349 PL. 110
34	甲	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 350
35	＊(記号)	土師器・杯A	底部	谷	刻書 351 PL. 109
36	M(記号)	須恵器	体部外面	谷	刻書 352 PL. 109
37	中	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 109
38	中	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 109
39	井	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 109
40	井	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 109
41	井	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 109
42	中	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 110
43	中	須恵器・杯A	底部	谷	刻書 PL. 110
44	仁	土師器・杯A	体部内面	S I 3	11 PL. 105
45	?	土師器・杯A	体部内面	S I 5	PL. 180
46	?	土師器・杯A	体部内面	S I 5	PL. 108
47	千井	土師器・皿A	底部内面	S I 9	5 PL. 106
48	井	土師器・杯AIII	底部内面	S I 12	刻書 1
49	道	土師器・杯AIII	体部外面	S I 19	3 PL. 108
50	福仁	土師器・杯AIII	体部内面	S I 20	4 PL. 105
51	福仁	土師器・杯AIII	体部内面	S I 20	10 PL. 105
52	福口	土師器・杯AII	底部内面	S I 20	14 PL. 105
53	福仁	土師器・杯A	底部内面	S I 20	15 PL. 105
54	福	土師器・杯A	体部内面	S I 20	18 PL. 105
55	林	土師器・杯A	底部	S I 20	16 PL. 108
56	口井	土師器・杯A	体部外面	S I 22	2 PL. 106
57	?	土師器・杯A	底部	S I 22	PL. 108
58	立井	土師器・杯A	体部外面	S I 25	3 PL. 106
59	福仁	土師器・杯A	体部外面	S B 6	PL. 105



第284図　谷出土墨書土器実測図（1/4）



第285図　谷出土刻書土器実測図（1/4）

るものである。342はＣ群須恵器である。

345～347、350はＣ群須恵器である。345は杯ＡⅢあるいは杯BⅢに伴う蓋である。346は杯ＡⅢＣに属する。349はロクロ未使用の杯ＡⅢｄに属するものである。348はＡ群須恵器である。352はおそらく窯じるしであろう。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1	陶　枕 (唐三彩)	厚さ　6㎜	白色、施紬は白→緑→褐の順序、良好、型作り、刷毛目痕がある、釉の遺存はきわめてよい	現存3.2cm×2cmの小片、大安寺跡出土唐三彩と成分は一致
2	蓋	23.2 × 2.5 × —	橙褐色、白色微粒子、不良、天井部規則正しいヘラミガキ・内面中央部ナデ	1/6
3	高　杯	21.6 × — × —	橙褐色、白色微粒子、堅緻、口唇部および体部外面ヘラミガキ、内面に斜放射状暗文→螺旋暗文	1/6
4	杯　A	15.8 × 2.4 × —	橙褐色、良好、底部全面ヘラケズリ・内面底部ナデ、体部内面斜放射状暗文・内面底部螺旋暗文	1/2
5	杯　A	15.8 × 2.6 × —	橙褐色、白色微粒子、良好、底部ヘラケズリ・内面底部ナデ、体部内面斜放射状暗文・内面底部螺旋暗文	1/6
6	杯　A	15.2 × 2.5 × —	橙褐色、白色微粒子、良、底部ユビオサエ、ヘラケズリ・内面底部ナデ	3/4、赤彩
7	杯　B	14.7 × 3.4 × —	橙褐色、良好、体部外面ヘラミガキ・底部内外面ナデ、体部内面斜放射状暗文・内面底部螺旋暗文	1/4
8	杯	16 × (3.7) × 8.4	淡黄白色(内面黒色)、良、体部外面～底部ナデ・口縁部～内面ヘラミガキ	1/6、黒色処理
9	Ⅲ　A	14.5 × 2.9 × 11.4	淡黄褐色、良好、体部外面下端～底部ヘラケズリ、その他はナデ	1/4、赤彩
10	Ⅲ　A	14 × — × —	淡茶褐色、良、体部外面ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/3
11	Ⅲ　A	14 × 3 × 11.4	淡黄褐色、砂粒、良好、体部外面～底部ヘラケズリ・口縁部～内面ナデ	1/4、赤彩
12	Ⅲ　A	13.6 × — × —	淡黄褐色、雲母、良、全面ナデ	1/6、赤彩
13	Ⅲ　A	12.8 × (2.8) × 10.2	暗褐色、堅緻、外面ナデ・内面ヘラミガキ	1/6、赤彩
14	Ⅲ　A	17.8 × 3.8 × 14	淡明茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面～内面ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	1/4
15	Ⅲ　A	18 × — × —	暗赤褐色、砂粒、不良、外面ヘラケズリ・内面ナデ	1/6
16	Ⅲ　A	19.6 × 3.9 × 18	赤褐色、良好、底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/3、赤彩
17	Ⅲ　A	19 × (2.4) × 16	淡黄褐色、堅緻、体部外面～内面ヘラミガキ・底部ヘラケズリ	1/12、赤彩
18	杯　A	14 × 3.9 ×	暗茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ・内面ヘラミガキ、暗文状ミガキ	2/3
19	杯　A	13.5 × (4.2) ×	淡黄褐色、赤色粒子、良、体部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/2
20	杯　A	13.8 × (3.8) × 10.6	淡黄褐色、良、体部外面～底部ヘラケズリ	1/4、赤彩
21	杯　A	13.8 × 3.8 × 11	淡橙褐色、良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	3/4
22	杯　A	13.5 × 3.9 × —	淡黄褐色、赤色粒子、良好、ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	1/2
23	杯　A	13 × 3.7 × —	淡茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/2
24	杯　A	12.5 × 3.8 × 7.7	淡黄褐色、赤色粒子、良好、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/3
25	杯　A	13 × (3.9) × —	暗赤褐色、良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/4
26	杯　A	13 × (3.7) × 10	暗茶褐色、赤色粒子、良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/4
27	杯　A	11.8 × (4.1) × —	淡黄褐色、赤色粒子、良好、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/6
28	杯　A	12.4 × 4.1 × 8	淡黄褐色、赤色粒子・雲母、良好、体部外面～底部ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	2/3
29	杯　A	13.3 × 4.5 × —	暗赤褐色、赤色粒子、良好、体部外面～底部ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	1/2

30	杯	A	12.6 × 3.5 × (8.4)	茶褐色(黒斑有り)、赤色粒子、良好、体部外面～底部ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	½
31	杯	A	12.8 × 3.6 × 9.5	暗赤褐色、良好、体部外面～底部ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	⅔
32	杯	A	12 × 3.8 × 9.2	淡黄褐色、赤色粒子・雲母、良、体部外面～底部ヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	⅓
33	杯	A	14.4 × — × 12.4	淡灰褐色、不良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	¼、赤彩
34	杯	A	13.5 × 3.9 × —	茶褐色、赤色粒子・石英・雲母、良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	⅔
35	杯	A	13.1 × (3.9) × 10.2	淡茶褐色、良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ナデ	⅓、赤彩
36	杯	A	13 × 4.1 × 7.7	淡黄褐色、赤色粒子、良好、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ナデ	⅓
37	杯	A	11.8 × (4.3) × 7.8	淡黄褐色、良、体部外面～底部ヘラケズリの後、全面ナデ	⅓
38	杯	A	12.6 × 3.6 × —	暗褐色(内面淡黄褐色)、良好、全面ヘラミガキ	⅓
39	杯	A	13 × 2.9 × 10	淡茶褐色、良、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	⅓、赤彩
40	杯	B	10.4 × 5 × 7.8	暗黄褐色、良、静上糸切り－L－体部下端～底部周辺回転ヘラケズリ	体部⅚欠、赤彩
41	杯	B	11.5 × 4.4 × 7.6	淡黄褐色、良、?－R－体部下半手持ちヘラケズリ・底部回転ヘラケズリ	⅓、赤彩
42	杯	A	10.2 × 4.5 × 6.6	淡黄褐色、赤色粒子、?－L－体部下端～底部手持ちヘラケズリ	¼、赤彩
43	杯	A	13.5 × 4 × 9.2	淡黄褐色、赤色粒子・石英、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅔、赤彩
44	杯	A	13.2 × 4 × 7.9	暗赤褐色、赤色粒子、良、静上糸切り－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	¼、赤彩
45	杯	A	13 × 3.5 × 7.6	茶褐色、石英、良好、?－R－体部下端底部全面回転ヘラケズリ	⅓、赤彩
46	杯	A	15.1 × 3.9 × 10	淡茶褐色、良好、?－R－底部全面回転ヘラケズリ	⅔、赤彩
47	杯	A	13.2 × 4.2 × 8	淡茶褐色、良、?－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	½、赤彩
48	杯	A	13.6 × 4.2 × 8.7	淡黄褐色、良好、?－R－体部下半～底部全面手持ヘラケズリ	⅓、赤彩
49	杯	A	14 × 4 × 8.6	淡茶褐色、良、?－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	¼、赤彩
50	杯	A	16.6 × 5.1 × 10.2	淡暗灰褐色、不良、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	¾、赤彩、体部外面に刻書「中」
51	杯	A	13.8 × 4 × 8.9	淡黄褐色、良好、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	⅔、赤彩
52	杯	A	14 × 4.4 × 7.6	淡黄褐色、良、静上糸切り－R－体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ	¼、赤彩
53	杯	A	14 × 4.2 × 9.4	淡茶褐色、良、静上糸切り－R－体部下半～底部周縁手持ちヘラケズリ、油煙付着	⅔、赤彩
54	杯	A	13.7 × 4 × 8	淡茶褐色、良好、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	½、赤彩、底部に線刻「メ」
55	杯	A	13.6 × 4.4 × 7.5	茶褐色、不良、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	体部½、赤彩
56	杯	A	14.1 × 3.6 × 8.6	淡黄白色、良、静上糸切り－R－体部下半～底部周辺手持ちヘラケズリ、器面の風化が著しい	⅔、赤彩
57	杯	A	14.2 × 4 × 8.5	淡茶褐色、良好、?－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	⅔、赤彩
58	杯	A	12.8 × 4.1 × 7.5	暗茶褐色、黒色粒子、?－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	¾

59	杯　A	12.1 × 4.3 × 8.5	淡黄褐色、赤色粒子、良、?－L－体部下端手持ちヘラケズリ・底部全面回転ヘラケズリ	3/4
60	杯　A	11.2 × 4.1 × 7.6	明茶褐色、白色微粒子、良、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
61	杯　A	11.9 × 4.4 × 6.7	淡黄褐色、赤色粒子、不良、回転糸切り－R－体部下端～底部周辺回転ヘラケズリ、油煙付着	4/5
62	杯　A	13.3 × 6.1 × 7.5	淡黄褐色、良、－R－体部下端～底部手持ちヘラケズリの後底部・内面ヘラミガキ	3/4、黒色処理
63	杯　A	15.8 × 5.7 × (8)	暗黄褐色、良好、?－L－底部全面手持ちヘラケズリ・内面ヘラミガキ	1/4、黒色処理
64	杯　A	17 × 5.8 × 11.5	茶褐色、白色微粒子、良好、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリの後、全面ヘラミガキ	1/2、赤彩
65	杯　B	17.4 × 6.9 × 12	淡黄褐色、赤色粒子、良、?－?－底部回転ヘラケズリ	1/4、赤彩
66	甕	15.6 × 21.9 × 8.5	茶褐色(黒斑有り)、長石・石英・雲母、良好、体部内外面ともにヘラミガキ・底部ヘラケズリ	口縁部3/4欠
67	甕	14.2 ×(16.3)× 9.6	明茶褐色、良好、体部外面ヘラミガキ・体部内面ナデ	3/5
68	甕	20.2 × － × －	暗黄褐色(黒斑有り)、良、体部外面ヘラケズリ・体部内面ナデ	1/4
69	甕	20.2 × － × －	茶褐色(黒斑有り)、白色微粒子、良好、体部ヘラケズリ・体部内面ナデ	3/4
70	甕	16.6 × － × －	明茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ・体部内面ナデ	3/4
71	甕	16 × － × －	茶褐色、良好、体部外面ヘラケズリ・体部内面ナデ	1/4
72	甕	13.9 × － × －	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ	1/5
73	甕	18 × － × －	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにナデ	1/3
74	甕	13.1 × － × －	暗褐色、良、体部内外面ともにナデ	1/3
75	甕	14.9 × － × －	暗赤褐色、不良、体部内外面ともにナデ	1/3
76	甕	23.7 × － × －	暗褐色、雲母、良、体部上半ナデ・体部外面下半ヘラミガキ・内面下半ヘラケズリ	4/5
77	甕	27.4 × － × －	茶褐色、長石・石英・雲母細粒、良、体部内外面ともにナデ	1/3
78	甕	23.4 × － × －	暗褐色、長石・石英・雲母細粒、良、体部内外外面ともにナデ	1/3
79	甕	23.4 × － × －	暗褐色、長石・石英・雲母、良、体部外面ナデ・体部内面ヘラナデ	1/4
80	甕	22 × － × －	暗黄褐色、赤色粒子、不良、体部外面ナデ・体部内面ヘラナデ	1/6
81	鉢	21.8 × － × －	暗茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラミガキ・体部内面ナデ	1/5
82	鉢	32.2 × － × －	淡黄褐色、赤色粒子、良好、口縁部外面下を除き全面ヘラミガキ	1/4
83	甕	14 × － × －	黄褐色、赤色粒子、良好、体部内外面ともにナデ	5/6
84	甕	10 × － × －	暗茶褐色(内面黒色)、良好、体部内外面ともにナデ	1/4
85	甕	14.2 × － × －	明茶褐色、赤色粒子、良好、体部内外面ともにナデ	1/3
86	鉢	22.4 × － × －	淡黄褐色、白色微粒子、良、体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラミガキ	1/3
87	鉢	23.1 × － × －	淡黄褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ、ヘラミガキ・体部内面ナデ	1/4
88	不　明	－ × － × 23	淡黄褐色、良、裾端部を除き内外面ともにヘラミガキ	1/3
89	椀　A (S)	9. × 4.6 × 5.8	灰白色、雲母・石英・長石、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	2/3
90	杯　A (S)	11.1 × 3.8 × 7.2	淡灰色、雲母、良好、?－R－体部下端～底部手持ちヘラケズリ	3/5
91	杯　A (S)	12.6 × 4.4 × 8.7	灰色、雲母・長石、良好、回転ヘラ切り－R－底部周縁手持ちヘラケズリ	1/3

92	杯　A（S）	13.5 × 3.9 × 8.6	灰白色、雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部全面ヘラケズリ	1/2
93	杯　A（S）	12.9 × 4 × 8.9	淡灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
94	杯　A（S）	14.4 × 3.8 × 7.6	暗灰褐色、雲母、不良、？－L－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	2/5
95	杯　A（S）	14.2 × 3.9 × 8.2	灰色、雲母・長石、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
96	杯　A（S）	14.8 × 4 × 9	灰色、雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
97	杯　A（S）	14 × 4.2 × 8.2	灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ、底部に墨書「中」	1/2
98	杯　A（S）	12.9 × 3.8 × 8.7	灰色、雲母・長石・石英、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/5
99	杯　A（S）	13.6 × 4.3 × 9	灰色、雲母、堅緻、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
100	杯　A（S）	14.2 × 4 × 8.5	灰色、雲母、堅緻、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	4/5
101	杯　A（S）	14.1 × 4 × 8.8	灰色、雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	5/6
102	杯　A（S）	14 × 4.1 × 8.8	淡灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
103	杯　A（S）	13.6 × 3.9 × 8	暗灰色、雲母・長石・石英、不良、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
104	杯　A（S）	14 × 4.1 × 8.2	淡灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	2/5
105	杯　A（S）	14 × 3.6 × 8.2	暗灰色、雲母、不良、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
106	杯　A（S）	13.8 × 4 × 8	灰褐色、雲母、不良、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
107	杯　A（S）	14.3 × 4.2 × 9	灰色、雲母・黒色粒子、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
108	杯　A（S）	14.4 × 3.8 × 8.8	灰色、雲母・長石・石英、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
109	杯　A（S）	13.8 × 4.2 × 8.3	灰色（底部黒色）、雲母・長石、不良、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
110	杯　A（S）	14 × 4.4 × 8.5	淡暗灰色、雲母、不良、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	2/3
111	杯　A（S）	12.6 × 3.9 × 7.1	灰褐色（内面黄褐色）、雲母・石英・長石、不良、？－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
112	杯　A（S）	15.2 × 4.3 × (9)	灰色、雲母・石英・長石、良好、回転ヘラ切り－L－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
113	杯　A（S）	14 × 4.4 × 8.4	灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
114	杯　A（S）	12.4 × 4.1 × 8	灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	2/5
115	杯　A（S）	14.8 × 3.9 × 9.2	灰色、雲母・石英・長石、良好、回転ヘラ切り－R－底部周辺手持ちヘラケズリ	3/5
116	杯　A（S）	13.8 × 3.8 × 9.4	灰色、雲母・長石・石英、良好、回転ヘラ切り－R－底部周辺手持ちヘラケズリ後ヘラナデ	3/4
117	杯　A（S）	14.4 × 4.4 × 8.3	灰色、雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部周辺断続回転利用ヘラナデ（ケズリ？）	3/4、火ダスキ痕有り
118	杯　A（S）	13.6 × 4.4 × (9)	灰黒色、雲母、不良、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/4、体部外面刻書「中」
119	杯　A（S）	13.6 × 4.4 × 8.5	灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/4

120	杯　A（S）	13.9 × 4 × 9.1	灰色、雲母・長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	完形
121	杯　A（S）	13.8 × 4.2 × 9.4	淡灰色、雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部全面ナデ	1/3
122	杯　A（S）	13.7 × 3.9 × (9)	淡灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/5
123	杯　A（S）	13.5 × 4.3 × 8.6	淡暗灰色、雲母、不良、回転ヘラ切り－R－底部全面ナデ	3/5
124	杯　A（S）	13.2 × 4.1 × 8	灰色、雲母・長石、不良、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
125	杯　A（S）	13.8 × 4.1 × 8.8	灰色、雲母・石英、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
126	杯　A（S）	14 × 4.3 × 9.6	暗灰褐色、雲母、不良、回転ヘラ切り－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/2
127	杯　A（S）	13.9 × 3.9 × 9	灰色(内面灰褐色)、雲母・長石、良好、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/5
128	杯　A（S）	14.2 × 3.8 × (8.4)	暗灰褐色、雲母、不良、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
129	杯　A（S）	14 × 3.8 × 9	淡灰色、雲母・石英・長石、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
130	杯　A（S）	14 × 4.2 × (9)	灰黒色、雲母・長石・石英、不良、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
131	杯　A（S）	14.6 × 4.4 × (8.4)	暗灰色、雲母、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
132	杯　A（S）	14.2 × 4.2 × 8	灰黒色、雲母・石英・長石、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
133	杯　A（S）	14 × 4.4 × 9.1	灰色、雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部周辺回転ヘラケズリ・底部中央ナデ	3/5
134	杯　A（S）	13 × 4 × 7.6	暗灰褐色、雲母、不良、？－？－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
135	杯　A（S）	13.6 × 5.1 × 6.8	暗灰褐色、雲母・石英、不良、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面ヘラナデ、ナデ	3/4
136	杯　A（S）	11.2 × 3.5 × 7	青灰色、石英・長石、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面ナデ	1/6
137	杯　A（S）	11.7 × 4 × 6.6	青灰色、長石・石英、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
138	杯　A（S）	12.8 × 4 × 8.8	青灰色、長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部全面ナデ調整	2/5
139	杯　A（S）	12.8 × 4 × 6.2	暗灰色、長石・石英、良好、？－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	3/5
140	杯　A（S）	12.8 × 3.5 × 7.1	暗灰色、長石、良好、？－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	4/5
141	杯　A（S）	12.8～13.2×3.7×9	青灰色、長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	4/5
142	杯　A（S）	12.7 × 4.3 × 6.9	灰色、石英・黒色粒子、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
143	杯　A（S）	14.4 × 4.5 × (9)	青灰色、長石・石英、堅緻、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/2、底部に刻書「？」
144	杯　A（S）	14 × (4.3) × 7.9	青灰色、長石・石英、堅緻、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
145	杯　A（S）	13.1 × 3.8 × 7.6	青灰色、長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
146	杯　A（S）	13.3 × 3.5 × 7.7	灰色、石英・長石、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部全面ヘラナデ	3/5、火ダスキ痕有り
147	杯　A（S）	13.6 × 3.8 × 8.7	灰色、石英・雲母・長石、良好、？－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	1/3

148	杯　A（S）	14 × 4.1 × 8.5	淡灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	1/2
149	杯　A（S）	14.8 × 3.6 × 9.5	暗灰褐色、石英・長石・雲母、良好、回転ヘラ切り－R－底部ヘラナデ、ナデ？	3/5
150	杯　A（S）	13.8 × 3.6 × 9.4	青灰色、長石・石英、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
151	杯　A（S）	13.2 × 3.7 × 8.6	暗灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/2
152	杯　A（S）	13.2 × 3.9 × 8.6	灰色、長石・石英、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリの後ヘラナデ	3/5
153	杯　A（S）	13.4 × 3.9 × 7.8	灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	4/5
154	杯　A（S）	13.4 × 4.2 × 8.6	青灰色、長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ（回転が弱い）	1/2
155	杯　A（S）	14 × 4 × 8.4	淡灰色、石英・雲母・長石、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
156	杯　A（S）	13.3 × 3.8 × 8.1	灰色、黒色粒子・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端手持ちヘラケズリ・底部回転ヘラケズリ	1/4
157	杯　A（S）	13.2 × 3.4 × 8.1	青灰色、長石・石英、堅緻、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	2/5
158	杯　A（S）	13.6 × 4.1 × 8	青灰色、石英・長石・雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部手持ちヘラケズリの後ヘラナデ	3/5
159	杯　A（S）	13.8 × 3.6 × 8	暗灰色、石英・長石、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端ヘラケズリ・底部全面ナデ	1/2
160	杯　A（S）	14.6 × 3.9 × 8.2	淡青灰色、黒色粒子・長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部周辺回転ヘラケズリ	1/2
161	杯　A（S）	13.6 × 4.5 × 7.5	暗灰色、長石・石英、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
162	杯　A（S）	14.2 × 4.4 × 8.6	灰色、雲母・黒色粒子・長石、堅緻、？－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	3/4
163	杯　A（S）	14.6 × 4.1 × 8.6	灰色、石英・長石・雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
164	杯　A（S）	13.4 × 4.2 × 8	灰色、石英・長石、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	1/2
165	杯　A（S）	13.8 × 3.9 × 7.3	灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5
166	杯　A（S）	13.2 × 4.1 × 7.9	青灰色、石英・長石・雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/4
167	杯　A（S）	12.8 × 4.3 × 6.1	青灰色、長石・石英、堅緻、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
168	杯　A（S）	14.2 × 4.8 × 7.5	青灰色、長石・石英、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端手持ちヘラケズリ・底部全面ナデ	1/4
169	杯　A（S）	13.5 × 4 × 7.6	暗灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
170	杯　A（S）	13.5 × 4 × 8.3	青灰色、石英・長石・雲母、堅緻、？－R－体部下端・底部全面手持ちヘラケズリ	2/5
171	杯　A（S）	14.4 × 4.6 × 7.8	灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－体部下端～底部手持ちヘラケズリ	1/2、底部に墨書「厨」？
172	杯　A（S）	13.2 × 4.1 × 7.3	灰色、黒色粒子・石英・雲母、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下半～底部周辺手持ちヘラケズリ（ヘラナデ風）の後底部ナデ	1/3
173	杯　A（S）	13.2 × 5 × 7.1	青灰色、石英・長石、堅緻、回転ヘラ切り－L－体部下端手持ちヘラケズリ	1/2、底部に墨書「?万」
174	杯　A（S）	14.6 × 4.6 × 7.8	灰色、黒色粒子・雲母・石英、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/5

175	杯　A（S）	—　×　—　×(10.7)	灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/4
176	杯　A（S）	—　×　—　× 10.6	灰褐色(内面暗灰褐色)、石英・長石・雲母、不良、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/8
177	杯　A（S）	13.4 × 4.6 × 8.3	灰色、長石・石英、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
178	杯　A（S）	13.8 × 4.5 × 8.1	灰色、長石・石英・雲母、良好、？－？－底部全面手持ちヘラケズリ	
179	杯　A（S）	13.4 × 8.4 × 4	灰色、長石・石英・雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/8
180	杯　A（S）	13.3 × 3.7 × 8.2	灰色・長石・石英・雲母、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	
181	杯　A（S）	13.9 × 4.5 × 8.2	灰色、長石・石英・雲母、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
182	杯　A（S）	10.4 × 3.7 × —	灰白色、堅緻、？－R－体部下半～底部全面回転ヘラケズリ	3/8
183	椀　A（S）	11.4 × 6.1 × 8.9	灰白色、堅緻、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
184	杯　A（S）	13 × 4.8 × 8.5	青灰色、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部全面ナデ	1/2
185	杯　A（S）	11.7 × 4 × 6.6	青灰色、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/8
186	杯　A（S）	10.9 × 3.9 × 7.8	灰色、黒色粒子、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/4
187	杯　A（S）	13 × 4.2 × 8	灰黒色、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
188	杯　A（S）	14 × 3.8 × 9	淡灰褐色、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
189	杯　A（S）	13.7 × 4 × 7.5	灰白色、良好、？－R－体部下端～底部回転ヘラケズリ	1/3
190	杯　A（S）	13.4 × 4.2 × 8.4	灰黒色、堅緻、？－R－体部下半～底部全面回転ヘラケズリ、体部下端部では断続的になっている。	3/8
191	杯　A（S）	13 × 3.1 × 8.2	灰色、堅緻、？－R－体部下半～底部全面回転ヘラケズリ	1/8
192	杯　A（S）	13.7 × 3.5 × 8	灰白色、堅緻、？－R－体部下端～底部回転ヘラケズリ	1/3
193	杯　A（S）	14.2 × 4 × 9.6	灰白色、不良、？－？－底部手持ちヘラケズリ	1/3
194	杯　A（S）	12.7 × 3.7 × 8.7	灰色、黒色粒子、堅緻、？－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	1/2、底部に線刻「大」?
195	杯　A（S）	13.6 × 3.6 × 8.4	暗灰色、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	3/4、底部に線刻「○」?
196	杯　A（S）	13.5 × 3.6 × 8.4	淡灰色、砂粒、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/8
197	杯　A（S）	12.7 × 4 × 8.8	灰白色、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/8
198	杯　A（S）	13.6 × 3.9 × 9	灰色、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/8
199	杯　A（S）	13.6 × 3.8 × 8.5	暗灰色（内面暗灰褐色）、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/4
200	杯　A（S）	13.6 × 3.7 × 8.5	灰色、良好、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	
201	杯　A（S）	13.7 × 3.9 × 9.3	淡灰色、堅緻、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/8
202	杯　A（S）	14 × 4.1 × 9.6	灰色、堅緻、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	3/8

203	杯　A（S）	14 × 3.4 × 9	暗灰色、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
204	杯　A（S）	14.3 × 4.5 × 9.1	淡灰色、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½、底部に刻書「中」
205	杯　A（S）	14 × 4.4 × 8.7	灰褐色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
206	杯　A（S）	13.6 × 4.1 × 8.9	淡灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅚、底部に墨書「○」
207	杯　A（S）	13.7 × 4.4 × 8.5	青灰色、堅緻、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅓
208	杯　A（S）	13.6 × 4.4 × 8.2	淡灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅔
209	杯　A（S）	14 × 4.3 × 9	淡灰色、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
210	杯　A（S）	13.4 × 4.2 × 8.6	灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅔
211	杯　A（S）	14.4 × 4.4 × 8.8	灰色（底部灰褐色）、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅚、体部外面、底部に刻書「中」
212	杯　A（S）	13.9 × 4.4 × 8.6	灰褐色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅓
213	杯　A（S）	13.1 × 4.4 × 8	暗灰色、不良、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	¼
214	杯　A（S）	13.5 × 4.3 × 9.2	灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅖
215	杯　A（S）	14.8 × 4.4 × 8.2	灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅓
216	杯　A（S）	14.5 × 4.3 × 8.9	灰色（底部灰褐色）、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅔
217	杯　A（S）	14 × 4.3 × 9	淡灰色（一部赤褐色）、不良、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
218	杯　A（S）	14.2 × 4.5 × 9	灰色、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅖、底部に刻書「中」
219	杯　A（S）	13.8 × 4.1 × 9.2	灰白色、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
220	杯　A（S）	13.2 × 4 × 8.2	淡灰色、不良、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	¼
221	杯　A（S）	13.2 × 3.9 × 9	灰白色、堅緻、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
222	杯　A（S）	13.2 × 4.1 × 8.9	暗灰色、堅緻、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	¼
223	杯　A（S）	13.6 × 3.3 × 7.8	灰色、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	½
224	杯　A（S）	13.7 × 3.4 × 8	灰黒色、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	½
225	杯　A（S）	13.7 × 3.9 × 7.8	青灰色、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	½
226	杯　A（S）	14.3 × 4.2 × 8.2	暗灰色、雲母少量、良好、?－R－体部下端、底部全面手持ちヘラケズリ	¼、底部に線刻「＋」
227	杯　A（S）	13.1 × 4.4 × 8	灰色、良好、?－?－底部手持ちヘラケズリ	¼
228	杯　A（S）	14 × 4.3 × 8	灰黒色、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅔
229	杯　A（S）	13.6 × 3.8 × 9	青灰色、黒色粒子、堅緻、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	⅝
230	杯　A（S）	13.6 × 4.2 × 8	灰色、不良、?－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	⅔

231	杯　A（S）	14.2 × 4.6 × 8.6	灰白色、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	1/3
232	杯　A（S）	13.8 × 3.6 × 7.2	青灰色、堅緻、回転ヘラ切り－R－体部下端手持ちヘラケズリ・底部全面ナデ	4/5
233	杯　A（S）	17.1 × 5.7 × 14.2	灰色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	1/6
234	合子蓋（S）	13.1 × 3.8 ×	灰黒色、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ、天井部に均一の自然釉がかかる。	1/2
235	合子蓋	13.5 × ×	灰黒色、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ、口縁部内面に自然釉	1/3
236	合子蓋（S）	12.9 × ×	灰黒色（口縁部黒褐色）、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ、口縁部に自然釉	1/6
237	合子蓋（S）	13.9 × ×	灰黒色（一部暗赤銅色）、長石・石英、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ、口縁部に自然釉	1/4
238	合子蓋（S）	12.9 × ×	灰黒色、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ、口縁部内面に自然釉	1/6
239	合　子（S）	12.3 × 3.6 × 10.6	灰黒色、堅緻、回転糸切り－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/5
240	合　子（S）	12 × 3.8 × 10.2	灰黒色、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/4
241	合　子（S）	12.2 × 3.6 × 11.4	灰黒色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ、体部外面が銀色化している。	1/6
242	合　子（S）	12.1 × 4.2 × 10.5	灰黒色、長石・石英、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ。受部に自然釉。	1/3
243	合　子（S）	12.6 × 4.1 × 10.6	灰黒色（内面暗灰色）、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ。体部外面に自然釉。	1/4
244	合　子（S）	12.2 × 4.2 × 10.8	灰黒色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ、受部に自然釉。	2/5
245	合　子（S）	12.6 × 4.1 × 10.6	灰黒色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ、体部外面に自然釉。	1/5
246	合　子（S）	12.6 × 4.3 × 11.2	灰黒色、長石・石英、堅緻、回転糸切り－R－底部回転ヘラケズリ、受部に自然釉	1/2
247	長頸瓶（S）	8.6 × － × －	赤銅色、堅緻、体部内面ナデ、口縁部内面、体部外面に自然釉？	口縁部のみ
248	長頸瓶（S）	7.8 × － × －	赤銅色、堅緻、口縁部内外面に比較的厚い自然釉？	口縁部のみ
249	長頸瓶（S）	7.3 × － × －	灰黒色、長石細粒・黒色粒子、堅緻、口縁部内面に自然釉	口縁部のみ
250	長頸瓶（S）	－ × － × 6.4	灰黒色、堅緻、？－R－体部下半～底部全面回転ヘラケズリ、肩部、内面底部に自然釉	1/2
251	短頸壺（S）	－ × － × －	暗灰色、長石・石英・黒色粒子、堅緻、肩部に厚い自然釉	1/3
252	把手付壺（S）	－ × － × －	灰白色、堅緻、外面全体が灰釉でおおわれていたと思われるが部分的に剝落している。	1/5
253	蓋（S）	15.9 × 3.7 × －	暗灰色（口縁部灰色）、石英・雲母・長石、不良、？－R－天井部回転ヘラケズリ	3/5
254	蓋（S）	16.1 × 3.2 × －	灰白色、石英・雲母・長石、不良、？－R－天井部回転ヘラケズリ	3/5
255	蓋（S）	3.4 × 1.5 × －	灰黒色、堅緻、？－R－？、天井部に厚い自然釉	ほぼ完形
256	蓋（S）	13.5 × － × －	灰色、長石細粒・黒色粒子、堅緻、？－？－？、天井部に厚い自然釉	1/4
257	蓋（S）	13.8 × 3.6 × －	灰黒色、長石細粒、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ	2/5
258	蓋（S）	21.8 × 5.2 × －	暗灰色、黒色粒子、堅緻、？－L－天井部回転ヘラケズリ	1/4

259	蓋（S）	12.6 × — × —	灰色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/6
260	蓋（S）	16.2 × 3.2 × —	灰色、白色針状粒子、?－R－天井部回転ヘラケズリ	3/8
261	蓋（S）	15.6 × 3.4 × —	灰黒色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリの後ナデ、口縁部内面に自然釉	3/4
262	蓋（S）	15.6 × 3.3 × —	暗灰色、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリの後ヨコナデ	1/3
263	蓋（S）	18.1 × — × —	灰黒色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ、外面に自然釉	1/3
264	蓋（S）	19.3 × — × —	赤銅色（口縁部灰黒色）、堅緻、?－?－天井部回転ヘラケズリ、口縁部内面に自然釉	1/6
265	蓋（S）	21.2 × 5.8 × —	灰黒色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ、外面に自然釉	1/2
266	蓋（S）	22.9 × — × —	暗灰色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ、口縁部内面に自然釉	1/6
267	蓋（S）	15.9 × 2.5 × —	暗灰色、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ、口縁部に自然釉	1/4
268	蓋（S）	16 × — × —	灰黒色、長石・石英細粒、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ、口縁部～内面に自然釉	1/3
269	蓋（S）	11.7 × 3 × —	暗灰色、雲母・長石・石英、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	3/4
270	蓋（S）	11.6 × 3 × —	灰黒色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ	3/8
271	蓋（S）	11.8 × — × —	灰黒色、黒色細粒子、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ、外面に自然釉	1/2
272	蓋（S）	12.2 × — × —	暗灰色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/4
273	蓋（S）	15.4 × 2.8 × —	暗灰色、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	3/8
274	蓋（S）	— × — × —	灰色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ	天井部のみ
276	蓋（S）	16.6 × — × —	灰黒色、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ、口縁部内面に自然釉	1/6
277	蓋（S）	20.4 × — × —	暗灰色、長石細粒、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ	1/6
278	蓋（S）	21.2 × — × —	灰黒色、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ、口縁部～内面に自然釉	1/4
279	蓋（S）	20.8 × — × —	灰黒色、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ、口縁部～外面に自然釉	1/8
280	Ⅲ A（S）	23.1 × 2.2 × 21.3	灰黒色、長石細粒、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	1/2
281	Ⅲ B（S）	18.7 × — × —	灰黒色、長石細粒・黒色粒子、堅緻、?－R－底部回転ヘラケズリ	1/3
282	Ⅲ B（S）	23.2 × 4.4 × 17	灰色、堅緻、?－R－底部回転ヘラケズリ	1/4
283	Ⅲ B（S）	21.6 × 3.8 × 17.2	灰黒色、長石細粒、堅緻、?－L－底部全面回転ヘラケズリ	1/2
284	Ⅲ B（S）	23.5 × 3.9 × 16.4	灰黒色、堅緻、?－?－?	1/6
285	Ⅲ B（S）	24.3 × 3.3 × 17.3	灰色、黒色粒子、?－?－底部回転ヘラケズリ	1/6
286	Ⅲ B（S）	26 × 3.5 × 20	灰色、堅緻、?－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/3
287	Ⅲ B（S）	24 × 3.1 × 18.5	灰色、良好、?－R－底部回転ヘラケズリの後、周縁部の一部を手持ちヘラケズリ	1/6

288	皿　B（S）	27.1 × 3.4 × 22.8	灰色、良好、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/4、内面底部に線刻「＝」
289	皿　B（S）	23 × 4.5 × 16.6	灰色、良好、？－R－底部回転ヘラケズリ	1/4
290	皿　B（S）	22 × 3.7 × 16.4	灰色、石英大粒・長石・黒色粒子、堅緻、？－L－底部全面回転ヘラケズリ	1/2
291	杯　B（S）	13.6 × 3.8 × 10.1	明褐色（体部外面暗灰色）、長石・石英、良好、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/4
292	杯　B（S）	14.3 × 3.9 × 9.3	灰黒色（内面灰褐色）、堅緻、？－R－底部今面回転ヘラケズリの後ヨコナデ	3/5
293	杯　B（S）	14.2 × 3.5 × 11.6	灰色、堅緻、？－？－底部回転ヘラケズリ	1/3
294	杯　B（S）	14 × 3.7 × 10.4	灰黒色、堅緻、？－L－底部全面回転ヘラケズリ	3/5
295	杯　B（S）	16.6 × 4.1 × 11.6	暗灰色、堅緻、？－R－？	1/6
296	杯　B（S）	16 × 3.9 × 12.7	灰色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	1/3
297	杯　B（S）	13.9 × 3.4 × 10.9	灰色、堅緻、回転糸切り－L－底部周辺回転ヘラケズリ	3/4
298	杯　B（S）	16 × 5.2 × 12	青灰色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	1/3、火ダスキ痕有り
299	杯　B（S）	14.3 × 3.4 × 11	灰黒色、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	2/3
300	杯　B（S）	17.4 × 6 × 10.9	灰色、堅緻、？－L－底部全面回転ヘラケズリ	2/3
301	杯　B（S）	13.9 × 5.8 × 8.7	灰白色、長石細粒、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	1/3
302	杯　B（S）	15 × 5 × 9.8	灰黒色、長石、堅緻、？－？－底部回転ヘラケズリ	1/6
303	杯　B（S）	16.6 × 5 × 12.1	暗灰色、長石・石英、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	3/5
304	杯　B（S）	18.3 × 6 × 13.8	灰黒色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	1/6
305	杯　B（S）	18.3 × 7 × 12.9	灰黒色（外面がやや銀色化している）、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/3
306	杯　B（S）	18 × 6.8 × 14	暗灰色（一部黒褐色）、堅緻、？－L－底部全面回転ヘラケズリ	1/3
307	杯　B（S）	19.4 × 7.1 × 13.7	灰黒色、堅緻、？－L－底部回転ヘラケズリ	1/4
308	杯　B（S）	18.4 × 5.4 × 9.1	暗赤銅色、堅緻、？－？－底部回転ヘラケズリ	1/6
309	杯　B（S）	19.9 × 5.4 × 10.2	灰黒色、堅緻、？－L－底部回転ヘラケズリ	1/6
310	杯　B（S）	— × — × 9.9	黒褐色、良好、？－R－底部全面回転ヘラケズリ、内面に螺旋暗文	2/5
311	杯　B S）	10.9 × 5 × 6.9	暗灰色、石英細粒、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリの後ヨコナデ	1/3
312	杯　B（S）	12.6 × 5.1 × 6.9	青灰色、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリの後ヨコナデ	2/3
313	杯　B（S）	14.5 × 4 × 11.1	灰黒色、石英・長石、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/4
314	杯　A（S）	9 × 3.3 × 7.3	暗赤銅色、砂粒、堅緻、？－L－底部全面回転ヘラケズリ	2/5
315	杯　A（S）	12 × 3.9 × 9.4	灰色、黒色粒子・石英、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	1/3

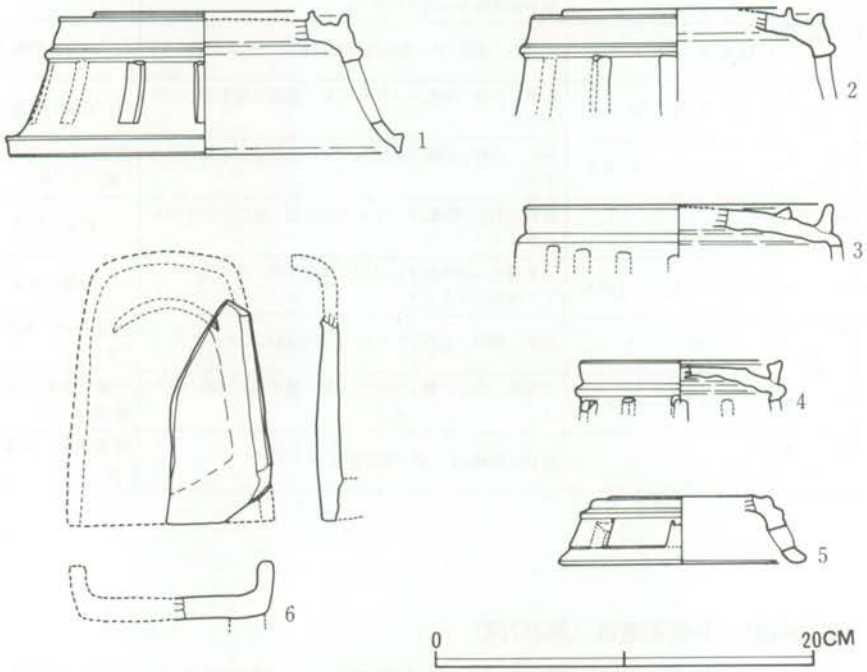
316	杯　A（S）	10.8 × 4 × 8.6	灰色（内面暗灰色）、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ、底部に線刻「川」	½
317	杯　A（S）	13.6 × 4 × 10.5	暗灰色、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	⅔
318	杯　A（S）	13.7 × 3.9 × 11.5	灰黒色（内面赤銅色）、堅緻、？－L－底部全面回転ヘラケズリ	½
319	杯　A（S）	12.9 × 3.9 ×(10.5)	暗灰色、長石細粒、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	¼
320	杯　A（S）	13.2 × 3.7 × 10.7	灰黒色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	¼
321	杯　A（S）	13 × 3.3 × 11.4	灰黒色、堅緻、？－L－底部回転ヘラケズリ	¼
322	椀　A（S）	10.5 × 5.4 × 7.5	灰黒色、長石細粒、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	⅕
323	椀　A（S）	11.9 × 6.2 × 9.7	淡灰色、堅緻、？－？－底部全面回転ヘラケズリ、全体（特に外面）に自然釉	⅕
324	甕（S）	22.7 × － × －	灰黒色、黒色粒子、堅緻、体部内面ナデ	½
325	甕（S）	25.4 × － × －	黄灰色、雲母・石英・長石、不良、体部内外面ともにナデ	¼
326	甕（S）	24.6 × － × －	灰黒色、石英・長石、不良、体部外面ナデ・体部内面に青海波を残す	¼
327	甕（S）	36.2 × － × －	灰色、堅緻、体部内外面ともにナデ、口縁部外面に櫛描き波状文（2段）	⅓
328	甕（S）	40 × － × －	青灰色、長石粒、不良、外面に櫛描き波状文	⅙
329	甕（S）	(40) × － × －	黒褐色、雲母・石英・長石、不良、体部内面ナデ	⅓
330	甕（S）	37.8 × － × －	灰黒色、石英・長石、良好	¼
331	甕（S）	39.2 × － × －	灰褐色（内面褐色）、雲母・長石、不良、体部外面下半ヘラケズリ・体部内面ヘラミガキ	⅖
332	甕（S）	38 × 22.3 × 19.5	灰色、雲母・石英・長石、良好、体部外面下端ヘラケズリ・内面ヘラナデ	⅓
333	甕（S）	37 × 19.4 × 17.9	灰色、雲母、良好、体部外面下端ヘラケズリ・体部内面ナデ	½
334	甑（S）	35 × 30.1 × 14.9	灰黒色、堅緻、体部内面ナデ・体部内面下端ヘラケズリ、5孔？	⅓
335	片口鉢（S）	(23.2)×(9.6)×(13.3)	暗灰色、不良、内面ナデ	¼
336	杯　B（S）	22.2 × 8 × 16.8	灰黒色、黒色粒子・長石、堅緻、？－R－底部全面回転ヘラケズリ	⅘、底部に墨書「中」
337	皿　A（S）	23.8 × 3.3 × 21	灰色、良好、？－R－底部手持ちヘラケズリ	½
338	杯　A	13.7 × 4.4 × 7.2	茶褐色(口縁部の一部黒色)、良好、？－L－体部下半～底部全面手持ちヘラケズリ	¾、赤彩、底部に墨書「中」
339	杯　A	13.3 × 4.1 × 8.2	明茶褐色、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	赤彩、底部に墨書「中」「。」
340	杯　A（S）	13.7 × 4 × 8.8	灰色、石英・雲母・長石、？－R－体部下端～底部全面回転ヘラケズリ	底部に墨書「中」
341	皿　A	15.2 × 3.4 × 13.5	茶褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅘、赤彩、底部に墨書「甲」
342	杯　A（S）	－ × － × 9.9	灰色、堅緻、？－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅘、底部に墨書「甲」
343	杯　A（S）	－ × － × 8.4	灰色、雲母、良好、？－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	底部に墨書「中」、「中」

344	杯　A（S）	― × ― × 7.6	灰色、雲母、良好、回転ヘラ切り－R－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	底部に墨書「尿」
345	蓋（S）	16.6 × ― × ―	灰白色、良好、？－R－天井部回転ヘラケズリ	⅓、内面に刻書「中」
346	杯　A（S）	14 × 4.3 × 8.8	灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	⅓、底部に刻書「中」
347	杯　A（S）	― × ― × 9.3	灰色、良好、回転ヘラ切り－R－底部全面手持ちヘラケズリ	底部のみ、底部に刻書「中」「中」「中」
348	杯　A（S）	― × ― × 7.5	灰色、雲母、堅緻、？－？－体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	⅓、底部に刻書「中」
349	杯　A	13.9 × 3.8 ×(10.6)	明茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面～底部ヘラケズリ・内面ヘラミガキ	⅔、底部に刻書「中」
350	杯　A（S）	― × ― × ―	灰色、雲母、良好、？－？－底部手持ちヘラケズリ	底部破片、外面に刻書「甲」
351	杯　A	― × ― × 8.5	黄褐色、良好、静止糸切り－R－底部周辺回転ヘラケズリ	口縁部欠失、赤彩、底部に線刻「⋇」
352	杯　A（S）	― × ― × ―	灰色、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	底部破片、外面に線刻「M」

６．陶硯（第286図）・不明須恵器（第287図）

陶硯は破片を合せても10点程度と極めて少い出土数である。図示できたものは６点だけである。円面硯（１～５）と風字硯（６）の２種類がある。円面硯はいずれも圏足円面硯であり、有堤式（１～３）のものと無堤式（４）のものがある。圏足部分にはいずれにも長方形の透しがある。１～３は硯面が16cm前後と大きい。３は陸の部分に亀裂が当初より入っていたためかあまり使用された痕跡がない。４、５は硯面が10cm前後と小さい。４は陸の部分が非常によく使用されたために、光沢がでているほどである。硯面の裏側には薄い緑色をした自然釉が一面にかかっている。胎土が灰白色をして、優れた製品であるところから、一見して猿投窯製品とわかる。６は風字硯の破片である。硯頭部分が欠失しているが、形態から類推すると平頭式のものと思われる。また硯面には陸と海の境に堤をもつものである。硯尻裏面には短脚の付いていた痕跡がある。陸はよく使用されていたために光沢をもっている。裏面には一面に自然釉が付着している。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1	圏足円面硯（S）	15.4 × 7.3 × 20.6	暗灰色、良好、長方形透し14孔（復元）？	⅛
2	圏足円面硯（S）	15.3 × ― × ―	青灰色、良好、長方形透し12～13孔（復元）？	⅛
3	圏足円面硯（S）	16.2 × ― × ―	灰黒色、堅緻、長方形透し20孔（復元）？	¼

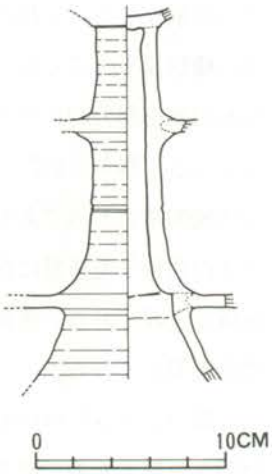


第286図　谷出土陶硯実測図（1/4）

4	圜足円面硯（S）	10.6 × — × —	暗灰色、堅緻、長方形透し12孔（復元）？	½
5	圜足円面硯（S）	9.4 × — × 13	灰白色、堅緻、台形透し9孔（復元）？	¼
6	風字硯（S）	— × — × —	灰黒色、堅緻	⅓

不明須恵器

形態、用途ともに不明な須恵器製品が1点出土している。現存している部分の形態は円筒状で下の方が八字状に開くもので、円筒の外に三段にわたって鍔状になっている。一番上の部分は円筒に乗せて接合してある。円筒の太さから立ち上がっているため、それほど大きく開くとは思われない。ここが一番上の部分である事はまちがいないと思われる。この部分の円筒外径は3.2cmである。2番目は円板状のものを挿し込んで円筒に対して水平に取り付けられている。これは3番目も同じである。ただ違うのは間隔と外径である。一番目と2番目の間隔は4.8cmであるが、2番目と3番目は8.2cmもある。外径は2番目が4cm、3番目が6.8cmと急に太くなっている。これは3番目の直上から急に八字状になり、3番目のところで円筒をも接合している



第287図　不明須恵器実測図（1/4）

事によるのかもしれない。これより下はどんな形態を示すのかまったくわからない。胎土は非常に精製されており、焼成は良好で非常に堅緻である。色調は灰黒色を呈している。技法的には須恵器高杯の脚部と杯部の接合法とまったく同じである。

問題は何であるかであるが、まったく類例がないために見当がつかない。しかしながら形態からすると、多重になってる燭台とも考えられる。あるいは泥塔の例のような塔を模したものとも考えられる。いずれにしても今後の類例の増加をまって考えるべきものであろう。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
	不明須恵器(塔？)	― × ― × ―	灰黒色、堅緻	

７．瓦塼類（第288～290図）

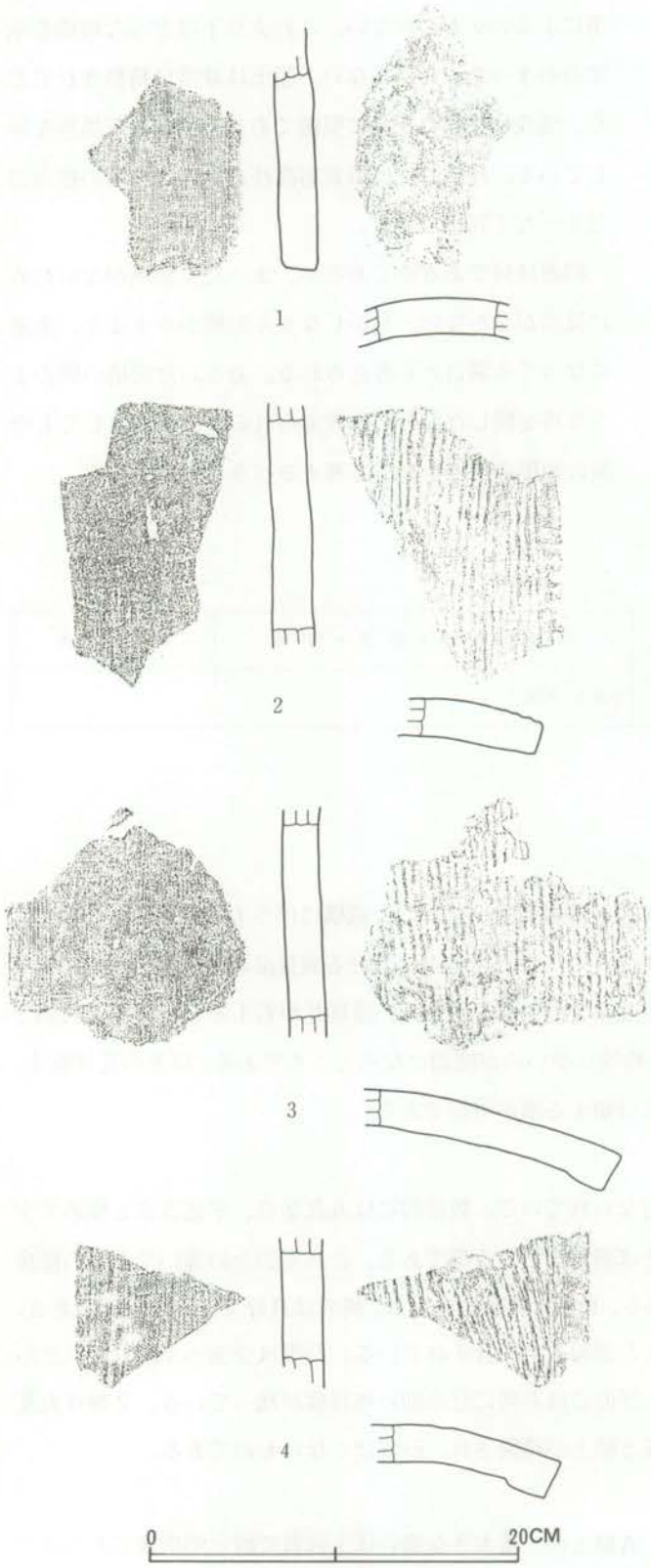
瓦塼類は数量的には表採品も含めて、総数71点（ただし、遺構に伴うものは除く）と極めて少い。特に塼は１点だけの出土である。ここでは台地上における表採品の瓦についても一括して述べる。瓦はいずれも小破片で軒瓦は１点もなく、丸瓦、道具瓦が若干あるだけで、大部分は平瓦である。平瓦に比して丸瓦が極端に少いのが問題になるところである。以上の瓦は胎土、焼成等の差異により、大きく３群に分類する事が可能である。

瓦Ａ群

青灰色を呈し、焼成は環元焔で行なわれている。数量的には丸瓦２点、平瓦３点と極めて少量である。Ａ群の特徴は一口でいえば須恵質という事である。これも胎土の違いで２つの種類がある。９は１類に属する丸瓦である。色調は青灰色を呈し、焼成は良好で非常に堅緻である。胎土には白色粒子を多量に含む。また雲母も若干含まれている。凸面は全面ヘラ削りされているために叩きの手法は不明である。凹面には非常に目の細い布目痕が残っている。２類は丸瓦が１点だけであるが、１類に比べると胎土が精製され、砂質ぽくないものである。

瓦Ｂ群

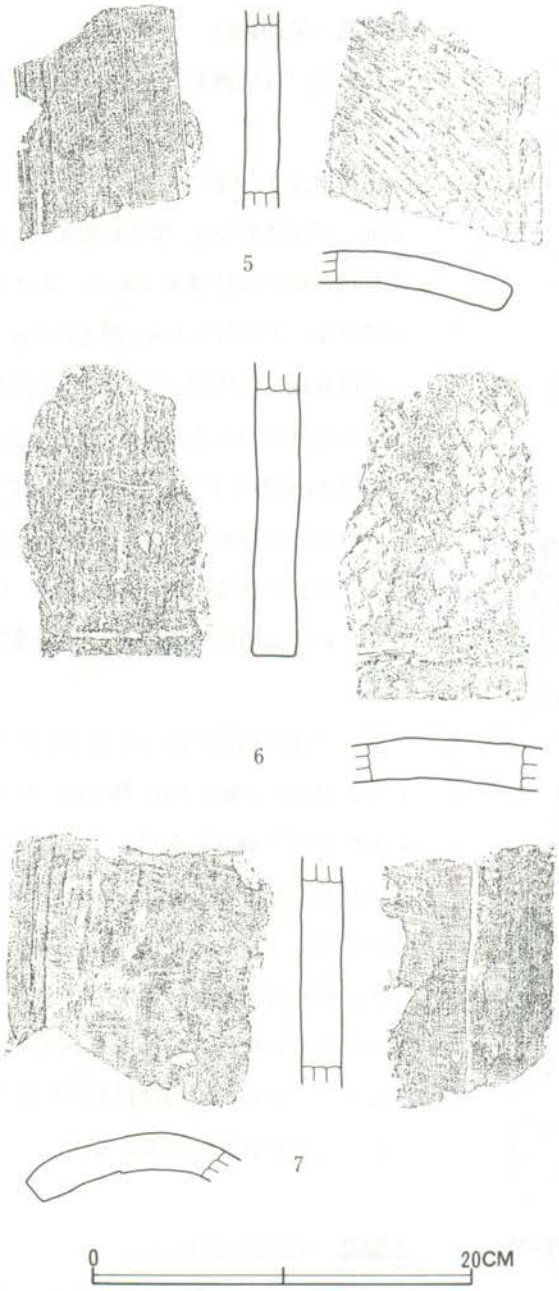
本跡において一般的な瓦である。Ａ群との一番大きな違いは土師質で酸化焔焼成である点である。ここでは凸面の叩きの種類により大きく３つに分類できる。１類（１）は凸面を全面的



第288図　谷出土瓦拓影図・平瓦 ①（1/4）

にヘラ削りしているために叩きの種類は不明である。凹面は布目痕を部分的にヘラ削りしている。厚さは1.2～1.5cmで比較的薄いものである。胎土は白色粒子を多量に含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。

２類（２～５）は凸面に平行叩きを施すものである。図示したものはすべて叩き板の違いがわかり、２類も叩き板の種類によって細分すれば４種類以上になる。２、３、５は胎土に雲母、白色粒子を多量に含み、焼成は良好で堅緻である。色調は赤褐色から黄褐色を呈している。凹面は全面をヘラ削りしているが、部分的に布目痕を残している。以上の３点は共通した属性を有している。４は雲母粒を多く含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。凹面は全面をヘラ削りしているが布目痕をよく残している。端部が厚くなっているのも特徴的である。なお、７の丸瓦も凸面に平行叩きを施してあるため本類に入れて考えておく。凸面は平行叩きの後に全面ヘラ削りをしている。凹面は端部だけをヘラ削りして、



第289図　谷出土瓦拓影図・平瓦 ②（1/4）

ヘラ削りがなされている。

他は布目をよく残している。胎土に雲母を若干含み、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。

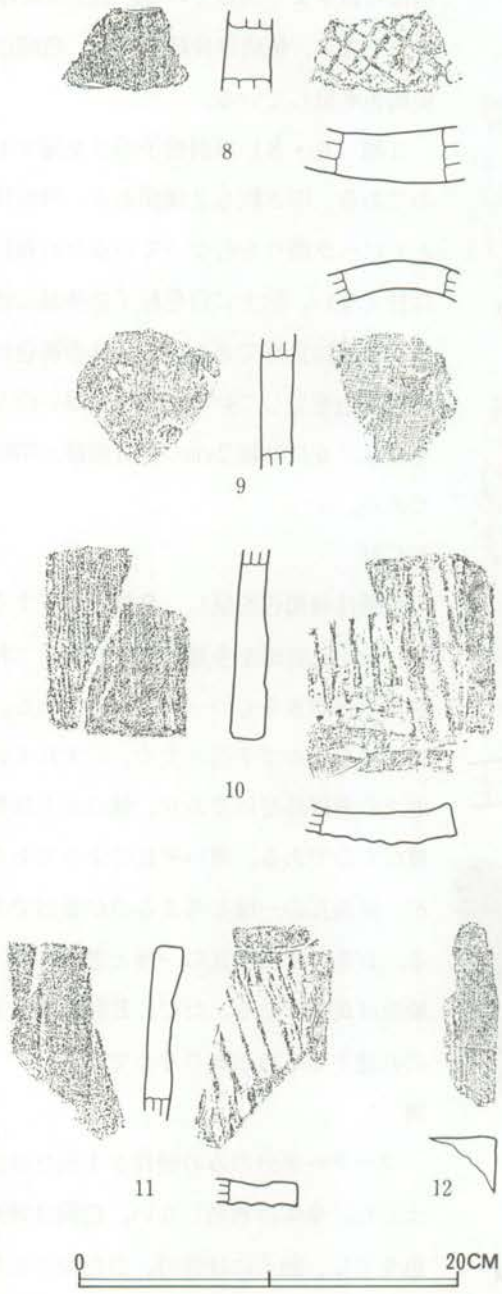
３類（６・８）は斜格子叩きを施すものである。叩き板も２種類ある。凹面はともにヘラ削りを行なっているため布目は見えない。胎土に白色粒子を多量に含み、焼成は良好である。色調は赤褐色から黄褐色を呈している。全体に厚い作りである。６には幅２cmの模骨痕跡が明瞭である。

瓦Ｃ群

色調は黄褐色を呈し、Ｂ群と類似するが、胎土に雲母を多量に含み、薄手で独特な平行叩きをもつ一群のものである。10、11を含めて７点と少く、いずれも台地上の表採品だけであり、他の瓦とは異質なものである。薄い平瓦のようであるが、道具瓦の一種と考えるのが妥当である。おそらく熨斗瓦の一種と思われる。焼成は良好である。ただ、Ｂ群２類の４に共通するものがありそうである。

塼

コーナー部分のみの破片が１点だけ出土した。全体は判名しない。色調は黄褐色を呈し、胎土には雲母、白色粒子を含むが非常によく精製されており、焼成は良好である。側面の１辺には糸切りの痕跡を若干とどめている。他の面は丁寧な



第290図　谷出土瓦塼拓影図・丸瓦・道具瓦・塼（1/4）

８．石製品・土製品

石製品（第291図）

石製品には紡錘車、浮子、砥石がある。

紡錘車は１～４である。１は上面径４cm、下面径4.7cm、厚さ1.2cm、孔の径９㎜の扁平な紡錘車である。２は上面径２cm、下面径3.4cm、厚さ2.1cm、孔の径６㎜で、中間がくびれた変形で小形の紡錘車である。３は上面径２cm、下面径４cm、厚さ1.3cm、孔の径６㎜で、断面台形の紡錘車である。４は半欠品であるが、下面径4.8cm、厚さ２cm、孔の径７㎜で、断面半円形をした紡錘車である。

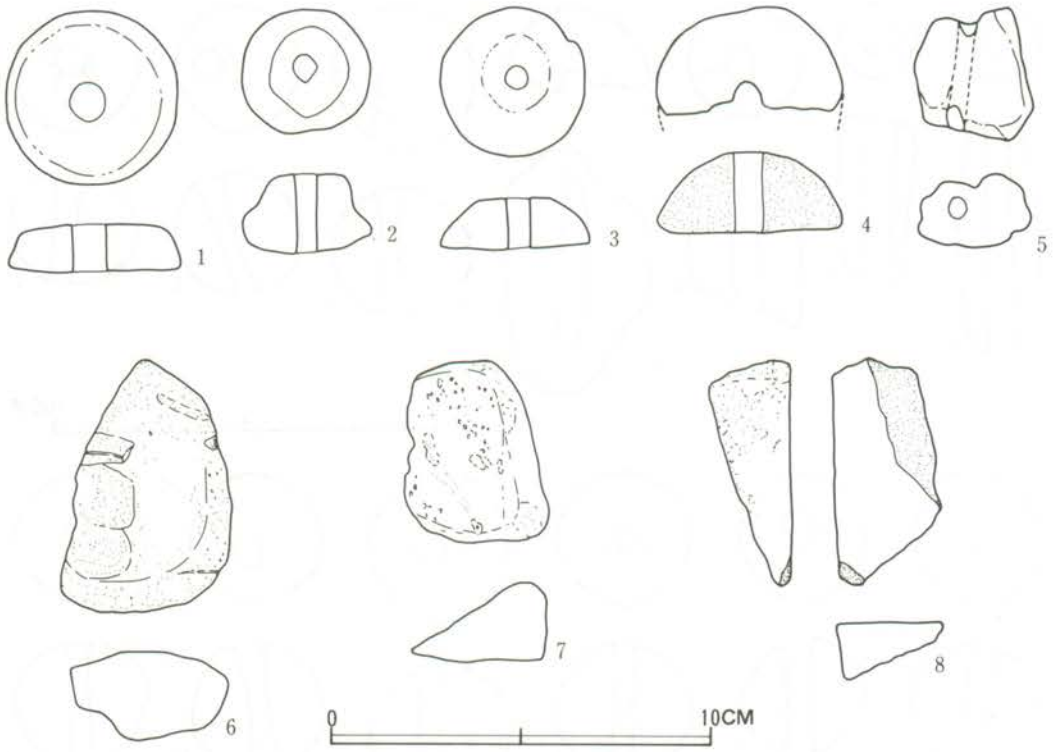
５～７は軽石製の浮子であると思われる。特に５は縦3.3cm、横３cm、厚さ1.8cmで、径５㎜の孔を穿っている。６、７は軽石を扁平にして使用したものと思われる。

８は砥石である。破片であるが、２面がきれいに使用された痕跡が認められるところから、当初は長方形を呈していたと思われるものである。

土製品（第292～294図）

土製品としては土玉がかなり多く出土している。１～４は土玉というよりは土管というべきものであり、細長い形態をしている。規模はそれぞれによって差異がある。１、２の小形のものに比べると４はその倍以上の大きさを呈している。これらの差異は後述する土玉の規模の差異に対応するものであろう。

５～９はいわゆる土玉である。規模の差異が結構あるが、径４cm前後、３cm前後、２cm以下



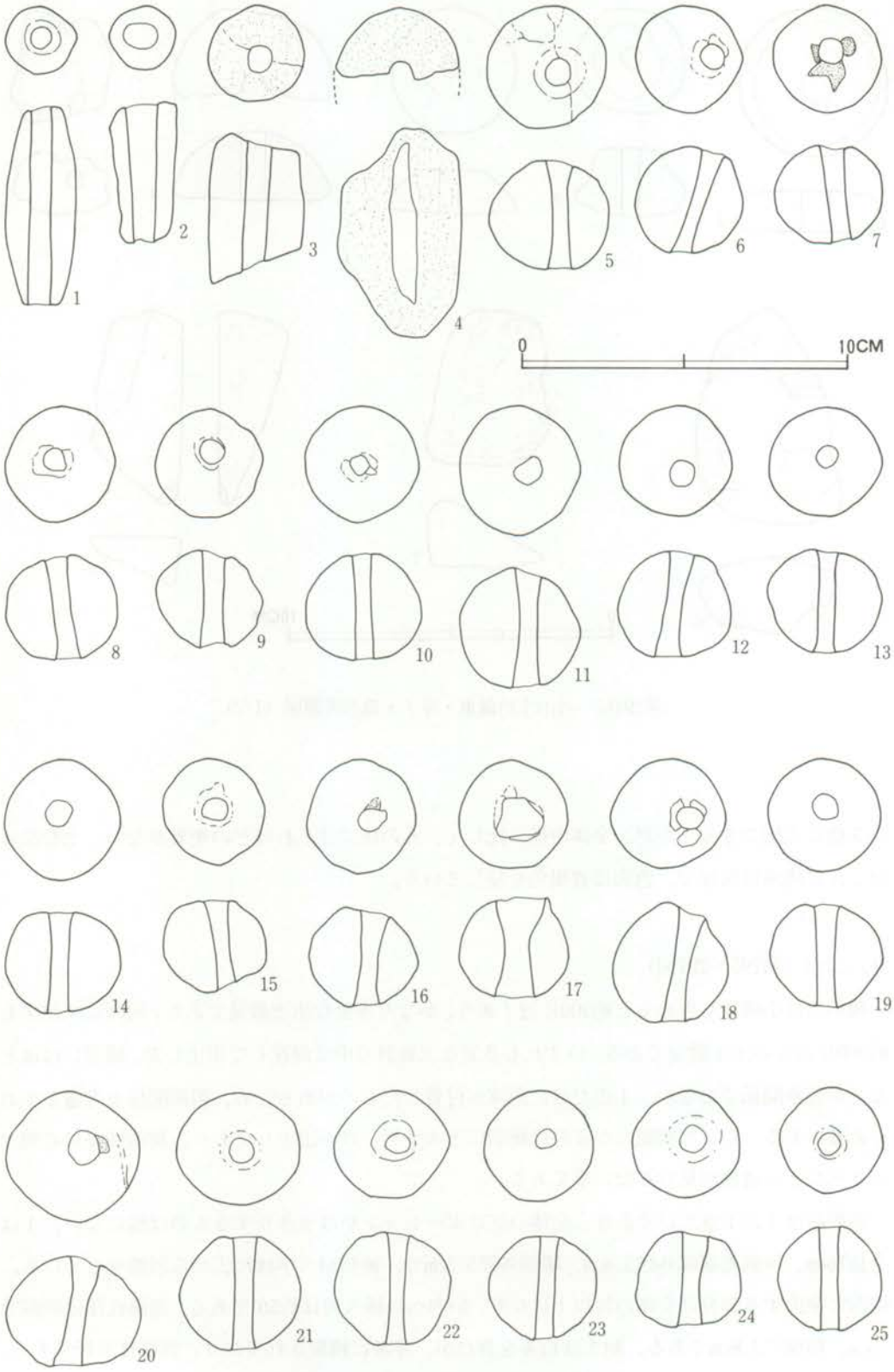
第291図　谷出土紡錘車・浮子・砥石実測図（1/2）

の３種に大別できる。ただ、全体の径に比して、孔の径にはそれほどの差異がない。土製品はほとんど焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。

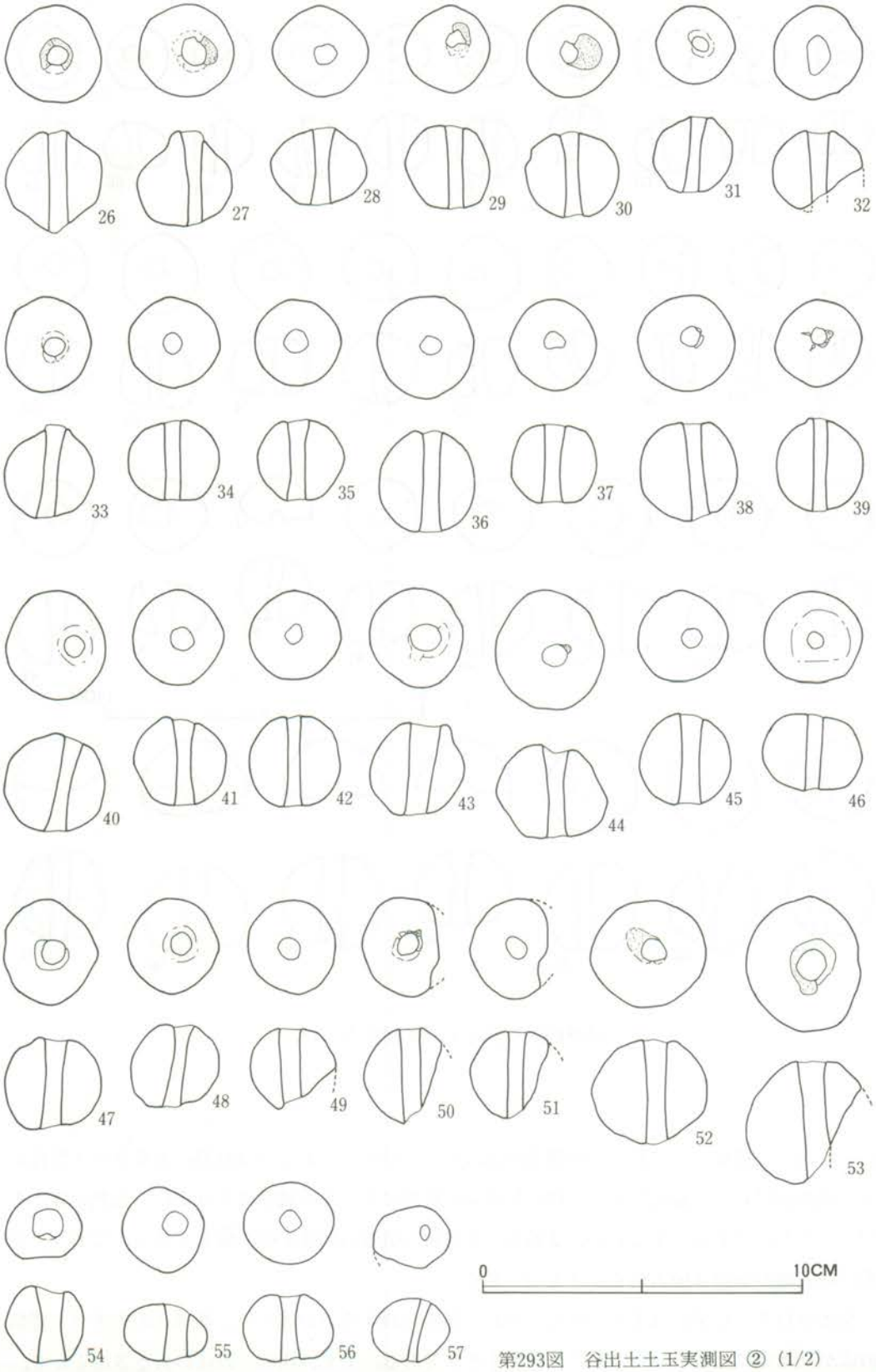
９．羽口（第295～297図）

鞴羽口は小破片も含めると約300片近くあり、かなり多量な出土数量である。同時にスラグも約600片近くの出土数量である。いずれも多量な土器群の中に混在して出土した。鞴羽口はほとんどが製鉄関係であるが、１点だけに銅滓が付着したものがあるため、製銅関係も考慮しておく必要がある。ここで問題となるのは鞴羽口とスラグだけが出土しており、鋳造関係に必要なとりべなどの遺物が見当らない事である。

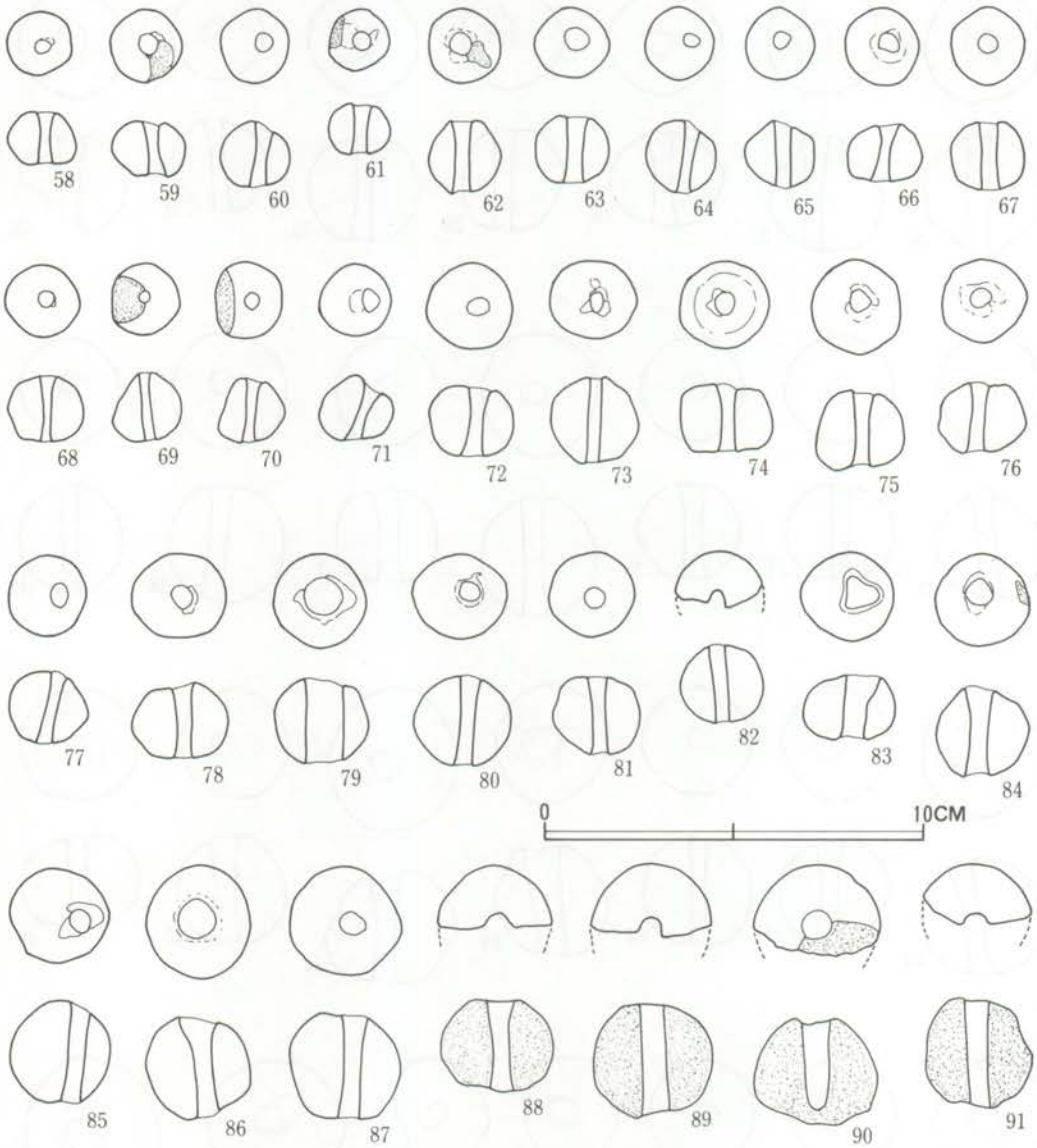
完形品は１の１点だけであり、全体のプロポーションがはっきりするものは他にない。１は全長16cm、炉側先端部外径3.8cm、鞴側外径5.5cmで、鞴側が八字状に広がる形態をしている。炉内に突出する部分は全体の⅔以上になり、炉内への挿入角は約50°である。通風孔径は炉側で２cm、鞴側で3.8cmである。胎土は石英を含むが、非常に精製されており、焼成は良好である。色調は灰白色であるが、炉内に突出していた部分は紫黒色に変色している。なお、掲載した実



第292図　谷出土土玉実測図 ①（1/2）



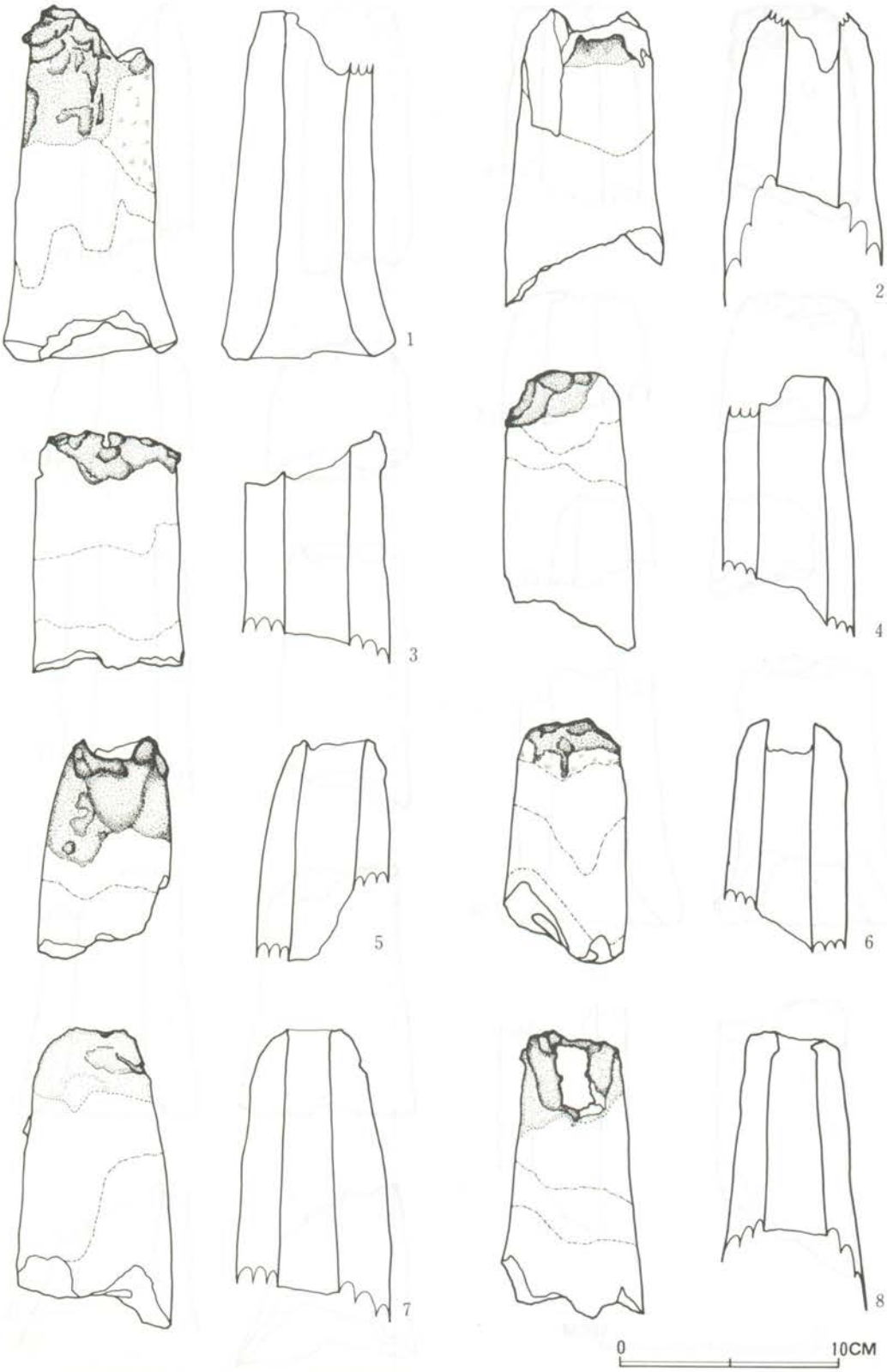
第293図　谷出土土玉実測図 ②（1/2）



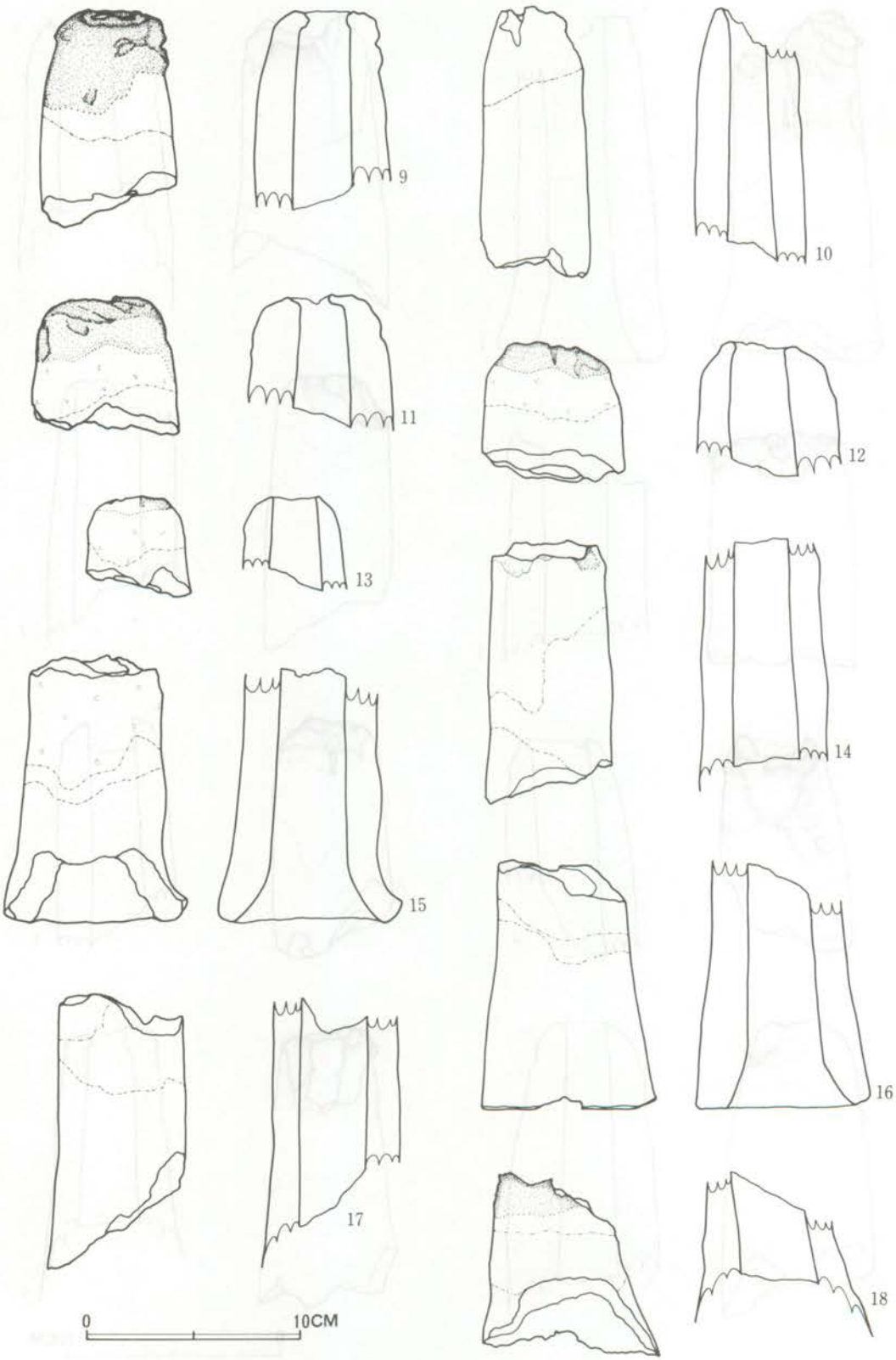
第294図　谷出土土玉実測図 ③ (1/2)

測図に対して補足をしておく。炉側先端部にドットが打ってあるのは高熱によるガラス質化および鉄滓が付着した範囲である。次に炉側から鞴側にかけての破線はそれぞれの火熱の強さを明示したものである。すなわち、2番目と3番目の破線の間は炉壁の幅を示すものであり、3番目の破線の傾斜は挿入角を示すものである。

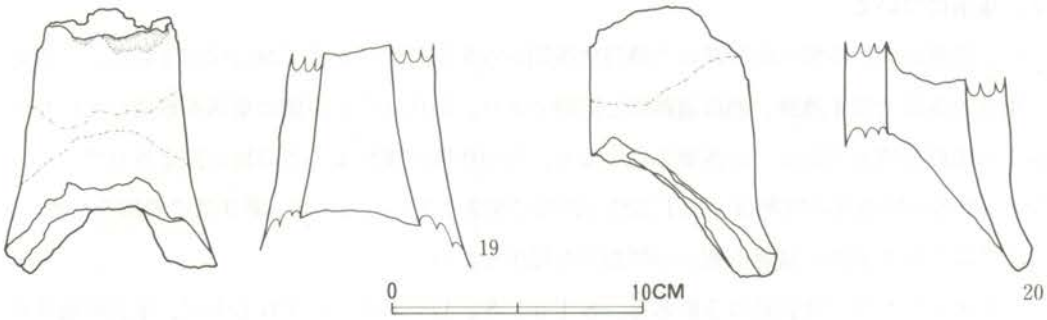
全体が判名する羽口は1点しかないため、形態分類するのが難しい。通風孔の大きさと鞴側の広がり具合によっていくつかに分類できそうである。まず、通風孔の径の大きさによって、



第295図　谷出土羽口実測図 ①（1/3）



第296図　谷出土羽口実測図 ②（1/3）



第297図　谷出土羽口実測図 ③ (1/3)

2cm前後のものと1.5cm前後のものの2種になる。次に鞴側の広がり具合であるが、16のように広がらないもの、八字状に広がるものでも1のように少しのものと、19、20のように大きく広がるものがある。胎土はいずれも精製されており、色調は灰白色を呈している。

第4節　結　　語

以上が向台遺跡の発掘調査の概要である。発掘調査範囲は非常に狭く限定されたものであるが、発掘調査によって得られた成果は非常に大きなものである。この成果には提起される問題点を多く含んでおり、今後の研究の進展にも大きく関わるものである。特に谷から出土した多量な一括遺物は質量共に群を抜いたものであり、東国における奈良時代の代表例ともなりうるものである。ここでは特に豊富な土器群の問題が中心になるが、時間と紙数の制約により、その要点を述べて結語としたい。

1．先土器時代について

成田安食線関係の発掘調査によって先土器時代の遺物とその広がりが調査されたのは、前原Ⅰ遺跡、大畑Ⅰ遺跡、それに向台遺跡の3ヶ所になる。そのなかでも、本跡における出土数はきわめて少く、15点にすぎない。しかし、そのうちの1点は完形の刃部磨製石斧を含んでいる。他の2ヶ所は第Ⅲ層上部からの出土で最終末にあたるものであるが、本跡は第Ⅵ～Ⅶ層にかけてのものであり、より古い先土器時代の遺物である。この地域にも第Ⅶ層までにさかのぼる先土器時代の遺物がある事は大いに注目されなければならない。

２．集落について

向台遺跡における竪穴住居跡は古墳時代後期から平安時代にかけて28軒検出された。この地の集落形成は大畑Ｉ遺跡、酒直遺跡群と同時であり、前代までが東側に集落を形成していたのが、古墳群形成と同時にこの西側の地になり、生活空間が後世までこの地に限定されてくる。なお、集落の展開等の問題は大畑Ｉ遺跡と密接に関係しているために、第９章で取扱うために、ここでは大畑Ｉ遺跡とは違う観点の問題点を提出したい。

瓦を出土した竪穴住居跡は３軒ある。ＳＩ３、８、17である。いずれも丸瓦、平瓦の破片が少量出土したにすぎない。しかし、これらの瓦はいずれも竜角寺所用瓦と共通するものであり、竜角寺の造営時期を裏付けるものとなるものである点で貴重である。これらの少量の瓦は竪穴住居においていかにあつかわれたかは不明であるが、いずれもその竪穴住居跡に伴うものである事はまちがいのない事である。ＳＩ３からは一番大きな平瓦が出土している。この住居の時期は伴出する土器から７世紀第３四半紀である。ＳＩ８は８世紀初頭、ＳＩ17は８世紀第１四半紀の所産である。ここで問題となるのはＳＩ３の７世紀第３四半紀の年代である。これは竜角寺の造営時期を明確に示す最初の資料であろう。これにより、従来からあった天智朝説が妥当のようである事がはっきりとしてきたと思われる。本集落はその造営に際して、中心的な役割を果たしたと考えられる。

次に墨書土器の問題である。８軒の竪穴住居跡と１棟の掘立柱建物跡から総数16点が出土している。いずれも平安時代に属するものである。この集落から出土した墨書土器は谷から出土した墨書土器と違い、すべて土師器の杯Ａに限定されている。また内容的にもその種類は少い。「井」が付くものと「福仁」で大半を占めている。特に「福仁」はＳＩ20に集中して出土している。これは人名のようであり、ＳＢ６からも出土しており、いずれも同筆のようである。明らかに同時期を示すものである。これらは９世紀第２四半紀の所産である。他の種の墨書土器は９世紀後半のものである。

３．谷出土の遺物群について

谷から出土した多量な遺物――大部分は土器類である――はいろいろな問題を提起している。特筆すべき遺物としては唐三彩の陶枕片である。これは小破片にしかすぎないが、全国で９例目の出土であり、東日本においては静岡県城山遺跡例があるだけで、それより東においては最初の出土例になる。唐三彩は現在のところ、国家、中央豪族に関わる遺跡においてのみ出土しているが、本例と城山遺跡例がその例外であるような不思議な出かたをしている。ただ、城山遺跡は大安寺との関連で考えられているが、本例は大安寺と結びつくものが見出せない。ただ、胎土分析の結果によると大安寺出土品とまったく同じデーターを示すため、その周辺より、こちらへもたらされた可能性は非常に高い。その経緯はまったく不明である。

次に搬入土師器として畿内産と東北産の両者がある。畿内産は数量的にはわりとまとまってあるが、図示できたものは少い。図示できなかったものの中には二段暗文をもつ平城宮Ｉのものも若干含まれているが、大部分は平城宮IIのものである。これらの中に１点だけであるが、全面を搬入後に赤彩して使用しているものがあり、在地における該期の土器の考えがうかがえる資料もある。東北産は１点だけであるが国分寺下層式にあたるものである。畿内産は８世紀第１四半紀から搬入されていたが、大部分は８世紀第２四半紀（天平年間）に搬入されたものである。東北産もこの時期に該当するであろう。このように考えると、唐三彩も平城宮IIと同時期にもたらされたと考えるのが一番蓋然性が高いと思われる。

須恵器は大半が常総地域に見られるＡ、Ｂ、Ｃ群の３群のものである。向台遺跡において初めて明らかになったＤ群１類の良質な須恵器は今後注意して見ていかねばならないものである。現在のところ、東海から関東にかけてまったく見られないものである。しかし、技法的には東海系であるため、その系統の中で追求していかねばならない。その他にＤ群２類とした猿投窯製品、Ｄ群３類とした木葉下窯製品がある。またＤ群４類としたものの中には常陸に特有のものがある。その他に、分類はしていないが、美濃須衛窯製品も若干見られる。ここで興味深いのは隣国である武蔵の製品、上総の製品が見られないことである。これは操業時期、交易の問題が大きくからんでいるとしても、今後もっと追求しなければならない問題である。土師器において特に問題となるのは杯ＡIIIａ、IIａとした赤彩されたロクロ土師器の存在である。これらは南武蔵における盤状杯に対応するこの地域の土器であろう。この１群の土師器から土師器生産にロクロ技術が導入された。そして、この技術は糸切り技法をもっている所の影響によって成り立っている事は重要な事である。このロクロ土師器の生産は次の段階になると須恵器の杯Ａに類似するタイプと独自なタイプが同時に行なわれ、下総地域に特有なロクロ土師器生産の基盤が確立してくる。

瓦は数量的には非常に少く、すべて小破片である。Ｃ群とした以外は竜角寺所用瓦と共通したものである。この瓦が、竜角寺以外でこの近くの建物に使用されたものであるかは不明であるが、塼が１点出土している事を考え合せるとこの近くに塼敷で瓦葺きの建物が若干あったと考える方が妥当であると思われる。しかしながら瓦塼類の量は非常に少く、１時期に限られたものであると思われる。谷出土の遺物の中で土器群の他に数量的に目をひくものは鞴羽口である。これもほとんどが細片になっていた。それに伴うスラグは通常の製鉄遺跡に比しては鞴羽口の出土数の割合からしても少い出土数である。今回の調査範囲内においては炉が検出されていないため、その実態は不明であるが、大量の鞴羽口の存在はかなり大規模な建物の造営に伴う小鍛治の存在が近くにある事を示すものなのであろう。また、１点だけではあるが、銅滓の付着した鞴羽口がある事は注意しておかなければならない。この製銅関係に関しては大畑Ｉ遺跡のＳＩ７のカマド脇から銅滓の付着した須恵器片が出土している。また同様のものが２点、

やはり大畑Ｉ遺跡から表採されており、製銅も同時に行なわれたと思われる。ちなみに大畑Ｉ遺跡のＳＩ７は７世紀第４四半期の所産と思われるので、本跡の鞴羽口もその頃より以降のものであろう。以上が向台遺跡の谷から出土した遺物群の要点である。これらを総合して考えるとこれらの遺物群は一般集落に伴うものではなく、官衙に伴う遺物と考える事の方が妥当である。つまり、製鉄、製銅関係の遺物は官衙の造営、修膳に関するものであり、瓦塼類は官衙の中で瓦葺き建物に伴うものである。そして、大量な土器群は官衙において使用された器物であると考える事ができる。この谷は官衙の一部であるが、巨大なゴミ棄て場と考えた方がよいようである。そして、この谷に大きくは数回のピークがあるが、奈良時代を通じて使用されていたと思われる。ただ、問題なのは大畑Ｉ遺跡側から棄てられている気配はなく、むしろ向台遺跡側からである点である。これも官衙のあり方を示すものなのかもしれない。官衙については後章の大畑Ｉ遺跡において詳しく述べる。

４．谷出土土器の年代について

谷から出土した土器群は奈良時代全般に渡るものが混在しているために、良好な一括資料の抽出により、同時期の土器セットを組み立て、編年作業を進めるのはきわめて難しいことである。問題はまず、一括資料として認定できる出土状況がない事が大きい。そのため、ここでは最近の奈良時代土器の研究成果をふまえて、理念的な時期設定をおこなわらずをえない。本来、実証に裏付けられた抽象化作業が編年の基本である事を前提とすれば、ここでは編年にまで抽象化できず、単に土器の変遷の提示にとどまらずをえない。

ここでは大きく６期に分ける事が可能である。ここで最初にことわっておく事は、土師器、須恵器の杯、甕等の器種の組合せで時期を設定するのが本来であるが、土師器、須恵器の甕などにはメルクマールとなる変化がそれほど大きくないために、ここでは除外し、杯を中心として考えざるをえない。

第Ｉ期

須恵器ではＣ群杯ＡＩａ（182）である。この１点だけである。土師器では鬼高式土器そのものである甕Ａ（66）がこの時期のものである。量的にはきわめて少い。７世紀第４四半紀の所産であろう。

第II期

須恵器はＢ群の杯ＡIIａ(139)、杯AIIIａ(143、144)、杯AIV(175、176)、杯AIIIの蓋(253、254）で、土師器はIIIＡ１ａ（12)、IIIＡIIａ（10)、杯はいずれもロクロ未使用のもので、杯AIIIａ（18)、杯AIIIｂ（19）が含まれる。またこの段階にＤ群１類とした合子形土器（234～246）が出現してくる。Ｄ群１類は他にもこの段階に含まれるものがある。この段階は他に平城宮Ｉ式の杯Ａも含まれる。この平城宮Ｉ式の年代を参考にして、この段階は８世紀第１四半紀の前

半が中心となる時期である。

第III期

須恵器はA群の杯AIIIb（99、102、112等）、B群の杯AIIIb（145～151等）、C群の杯AIIIa（189、190）、杯AIIIb（192、193、195）、杯AIIb（191、194）、そして、D群1類の大部分はこの段階のものであろう。またD群2類の壺類（251、252）もこの段階である。土師器はⅢAIb（9、11、13）、ⅢAIIb（14、16）、ⅢAIIc（17）、杯AIIIc（20、21、23等）、ロクロ土師器は杯AIIIa（43、46、51）、杯AIIa（45）である。この段階の土師器の杯Aには赤彩するものが多い。また、この段階から土師器の製作にロクロを使用する一群の土器が出現してくる。この段階には平城宮II式、国分寺下層式の搬入土師器が伴出しているものと思われる。これらの土器を参考にすると天平年間を中心とした8世紀第2四半紀の年代が与えられる。

第IV期

須恵器はA群は杯AIIIc（94～97等）、杯AIIc（98）、B群は杯AIIIc（154、158、159、160等）、C群は杯AIIIc（202、203、227等）、杯AIIId（205～219等）、杯AIIIf（196、198～201）、杯AIIc（197、202、203）、また、D群2類の長頸瓶（247～250）も含まれる。土師器は杯AIIId（22、29）、杯AIIc（23、30、31）、杯AIId（25、28）、ロクロ土師器は杯AIIb（42、61）、杯AIIc（58、59）、杯AIIId（47、48、49等）、杯AIVa（64）、杯AIVb（50）、杯BIIa（40）、杯BIIb（41）、杯BIV（65）である。この段階で特徴的なのはロクロ土師器の量とバラエティーの増加である。この段階はD群2類の鳴海32号窯期の存在によって8世紀第3四半紀の年代としておきたい。

第V期

須恵器はA群は杯AIIId（113、121～125）、杯AIId（114）、B群は杯AIIId（166、168、169等）、杯AIId（167）、C群は杯AIIIe（204、231）、杯AIIe（184）、それにD群3類の蓋（257、258）、ⅢBIII（284、285、290）、杯BIII（301、302）、杯BIV（300）も含まれる。土師器は杯AIIe（24、26、27、37）、杯AIIIe（36）、ロクロ土師器は杯AIIIc（54、55、57）である。この段階から谷出土の土器の数量とバラエティーがへってくる。この段階は8世紀第4四半紀として考える。

第VI期

須恵器はA群は杯AIIIe（132、134）、杯AIIIf（135）、C群は杯AIIIg（232）である。ロクロ土師器としては杯AIII（62）、杯AIV（63）の2点であり、いわゆる内黒土器である。この段階の設定は土器がきわめて少く、また、8世紀代が中心であるので、9世紀代は一括した。須恵器は9世紀の前半のものであるが、内黒土器は後半のものである。

以上が谷出土の土器群の大まかな年代観であるが、まだ具体的な編年にはいたっていない、

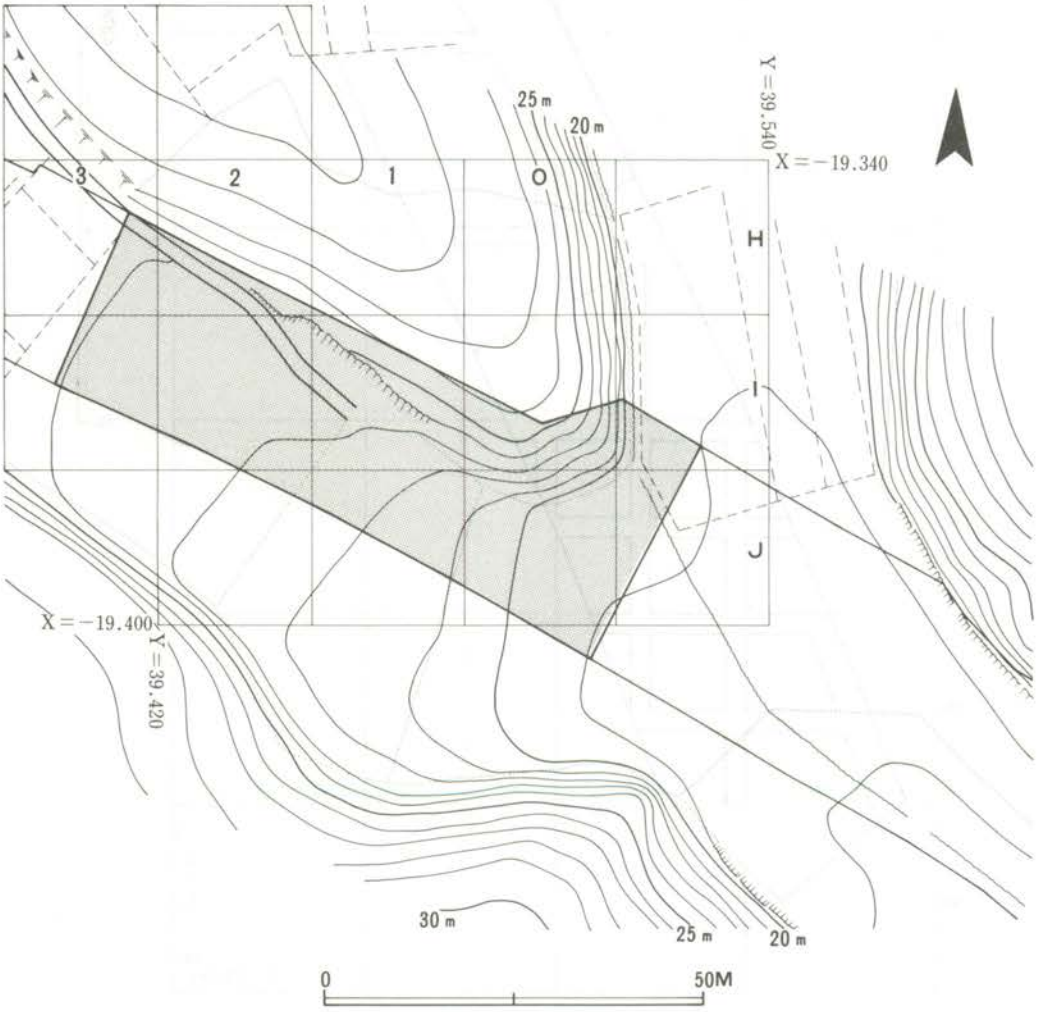
非常に大雑把なものである。ここで、付図3の成田安食線関係土器変遷図にこの谷出土の土器を載せていないのは、各時期の良好な一括資料を遺構毎に選んだためである。谷出土の土器は先の時期別の項でも見たようにまだ、器種構成も明確になっていないという欠陥がある。今後は土器変遷図の一括資料の検討を行なうことにより、谷出土の土器群の変遷をより明確にし、両者の比較検討することにより、奈良時代土器の正確な編年が完成するであろう。

第 8 章
大畑 II 遺跡の調査

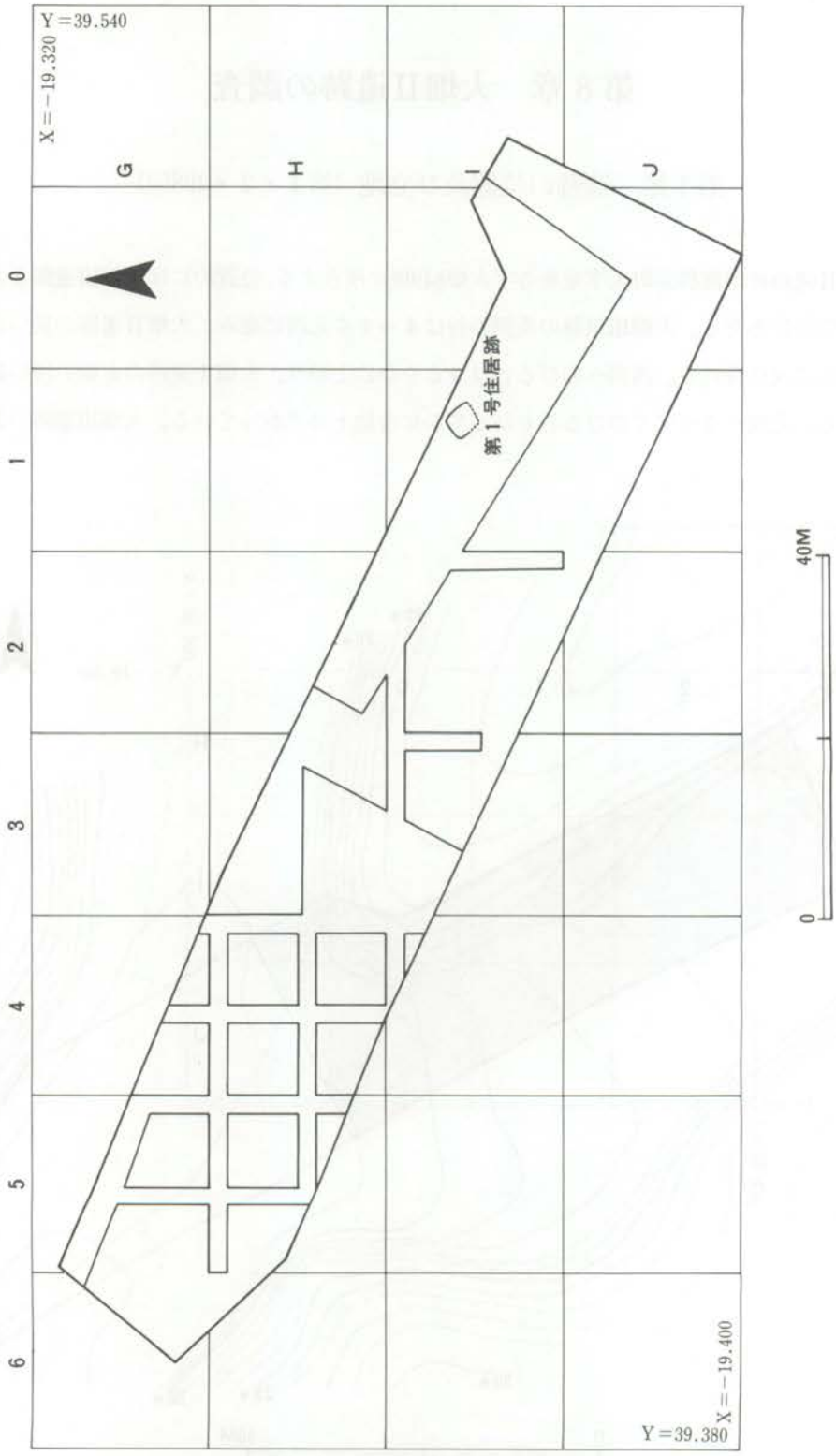
第８章　大畑II遺跡の調査

第１節　遺跡の位置及び立地（第１・２・298図）

大畑II遺跡は印旛群栄町大字竜角寺字大畑849他に所在する。位置的には大畑III遺跡と大畑Ｉ遺跡の中間にあたる。大畑III遺跡の南側の谷はまっすぐ北西に進み、大畑II遺跡の狭い舌状台地を境に二又に分れる。西側へのびる谷はゆるやかに上がり、大畑Ｉ遺跡の北側の浅い谷になっている。北側へまっすぐのびる谷もゆるやかに台地上に上がっている。大畑III遺跡のある舌



第298図　大畑II遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）



第299図　大畑II・大畑Ⅰ遺跡発掘区域図（1/800）

状台地は幅40m前後で、先端部においては平坦面がほとんどないところである。平坦面を形成するのは標高29mぐらいの高さであるが、今回の調査範囲内においては斜面部のみの標高25mより下が対象地となっている。谷との比高は２～４ｍである。この斜面部は古くから削平を多く受けているため、遺構の遺存はあまり期待できるものではなかった。

第２節　遺跡の概要及び調査の方法（第299図）

大畑III遺跡の調査によって検出した遺構は斜面から平安時代の竪穴住居跡１軒だけである。斜面部の他に、大畑Ｉ遺跡と同様に谷にもトレンチを設定して掘り下げたが、遺構は１つもなかった。また遺物は土師器、須恵器の破片ばかりが出土した。

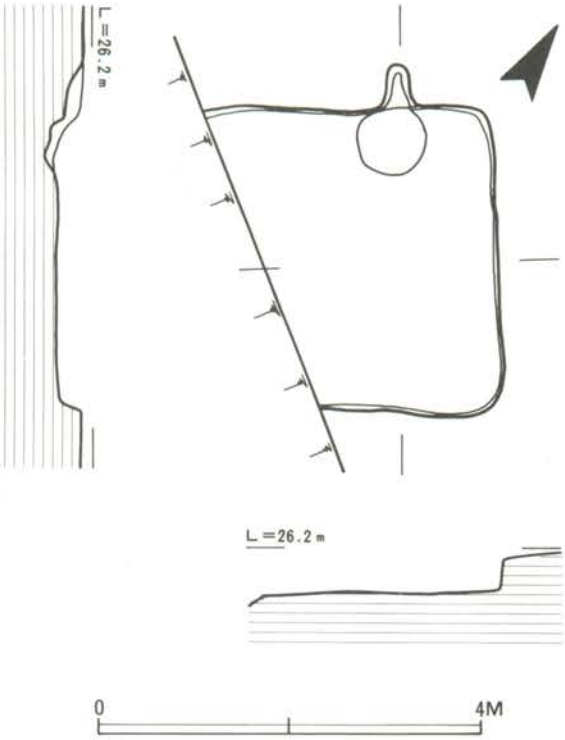
調査の方法は大畑Ｉ遺跡の関連でグリッドも設定してある。とりあえず、大畑II遺跡は斜面部とその前面の谷部の範囲だけで、それより西側は大畑Ｉ遺跡である。すなわち、Ｈ－２、Ｉ－２グリッドより東側が大畑II遺跡である。

第３節　検出された遺構と遺物

第１号住居跡（第300図、ＰＬ130－２）

斜面調査範囲のほぼ中央のＩ－１グリッドに位置している。ほぼ傾斜変換点のいくらか平坦なスペースのあるところに営まれている。規模は南北3.8mであるが、東西は不明である。おそらく隅丸の方形を呈するものである。壁は東辺で40cm、南辺24cm、北辺20cmの遺存で、東辺だけが直線的で垂直に近い立上りを示すが、他辺の立上りはゆるやかである。床面は常総粘土土層まで掘り込んでいるが、踏み固め等の痕跡は認められない。柱穴も検出されない。

カマドは北壁の東に片寄った位置に構築されている。軸等の住居内部の遺存はきわめて悪く不明である。壁外への掘り込みは幅30cmで円筒形に40cmである。立



第300図　第１号住居跡実測図（1/80）

ち上がりはゆるやかである。住居内部には火床としての痕跡は径80cmの不整円形を呈したものとしてある。深さ16cmで焼土は多量につまっている。

遺物は土師杯が完形で出土していたが、残念なことに盗難にあい紛失してしまった。

第4節　結　　語

大畑II遺跡の概要は以上である。当初この地点は調査対象地にはいっていなかったが、大畑I遺跡の東端の谷部は調査対象になって調査に入る時に同時に調査した。そのため、大畑I遺跡とはいくぶん台地の利用のしかたが違うため、大畑II遺跡と新たに命名したしだいである。その結果、斜面部まで利用して竪穴住居跡を構築している新事実をみつけた事は大畑I遺跡を考える上にも重要な事である。

第 9 章
大畑 I 遺跡の調査

第９章　大畑Ｉ遺跡の調査

第１節　遺跡の位置及び立地（第１・２・301図）

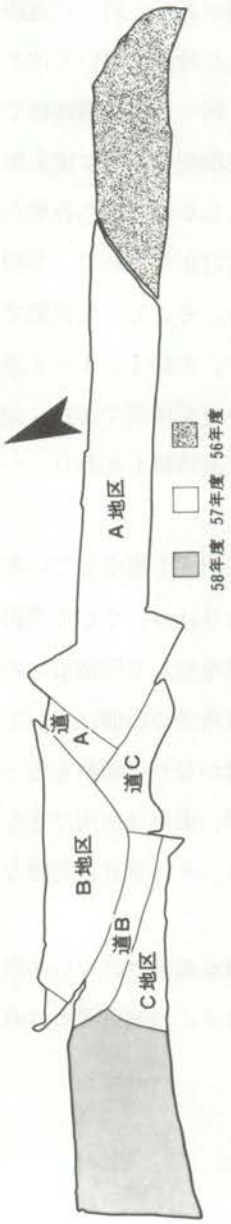
大畑Ｉ遺跡は印旛郡栄町大字竜角寺字大畑870、891他、同町大字竜角寺字台内、同町酒直字向台463－４にまたがって所在する大遺跡である。本来ならば、大畑Ｉ、II遺跡、向台遺跡の一部、それに県単道路として調査した大畑Ｉ－２遺跡はそれぞれ有機的関連があり、同一の遺跡群として把え、大畑遺跡群と命名すべきであろう。しかし、調査に着手した時点においてはそれぞれ地点別に遺跡名を付しており、調査年度もそれぞれ違いがあって、同一性格の遺跡群であるという判断も遅れてしまった。特に奈良時代に関しては下総国の埴生郡衙の有力な推定地となるにたる遺構群と遺物群を検出して、よりその必要性を感じている。しかしながら各地点は単年度事業であり、それぞれ調査は完結しているので、ここではあえて訂正しないで、当初のままで報告する。そのほうが混乱をまねかないと判断したからでもある。そこで、大雑把ではあるが、以下のように考えておくと大畑遺跡群は理解しやすい。つまり、大畑Ｉ、Ｉ－２遺跡は埴生郡衙域であり、向台遺跡の谷の部分は埴生郡衙で使用した器物の廃棄場所であり、向台遺跡と大畑II遺跡はそれを取り巻く集落の１部分である。これには酒直遺跡群も加わり、一帯の歴史性がより明確になってくる。

大畑Ｉ遺跡の立地する台地は標高28～30mで、この周辺では一番広い平担面を形成しているところである。東側は大畑II遺跡の舌状台地で２又に分かれた谷が浅く入り込み、やがて平担面になる。西側は向台遺跡との間の浅い谷であり、南側はほとんどが崖状を呈して印旛沼にのぞんでいるが、ここだけはゆるやかな浅い谷が入り込んでいる。北側は竜角寺の西側に入ってくる深い谷がゆるやかに西側には平坦面に至っているが、南側の台地とはかなりの傾斜をもった谷を形成している。このように、南北の両側は地形的な制約を受けるが、東西は利用できない程の段差のある谷ではない。しかし、東側は古墳群の東端と接しており、その境界は明瞭なものではない。

大畑Ｉ遺跡の平坦面はこの周辺の台地上では一番広いものであり、古墳が築造されない生活空間としての領域であり、東側の五丹歩遺跡周辺の平坦面とは好対照をなす。岩屋古墳とは直線1.3km、竜角寺とは直線0.7kmの位置である。

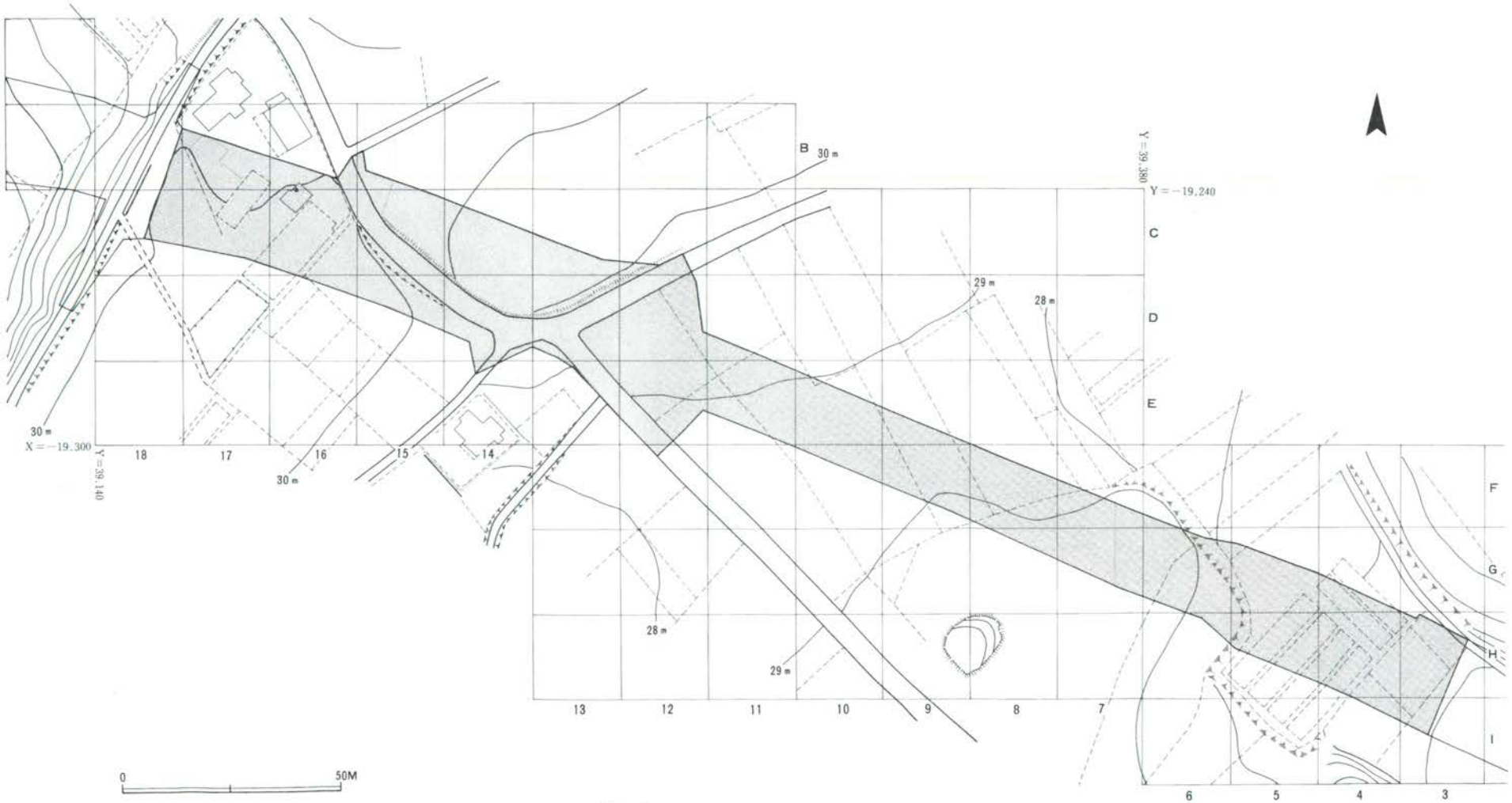
第2節　遺跡の概要と調査の方法（付図2、第302図）

大畑Ⅰ遺跡において検出された遺構と遺物は次のとおりである。先土器時代は2ヶ所の石器集中個所があった。この集中個所は調査区の東側によったところで、2ヶ所は隣接している。今回の調査において先土器時代の遺物が発見された端緒は掘方柱建物跡の掘方を掘り下げていた段階に覆土中から、および掘方の外側のローム層につきささっていたためにその周辺を拡張して掘り下げた。そのために、すでに奈良時代の掘立柱建物を建設する段階でかなりの攪乱を受けていた。ここの石器群の検出は前原Ⅰ遺跡、向台遺跡についで3番目にあたるが、資料的には一番多い。ここでも石器はナイフ形石器が1点だけであるが、他に石核、剝片等がかなりの数量で出土している。石材はメノウ、安山岩、砂岩で他の遺跡と共通している。ここで特徴的なのは礫が多いことである。縄文時代の遺構は調査区の東側から早期後半の時期と思われる炉穴が17基、陥穴5基検出された。いずれもそれぞれまとまりでもって存在している。縄文式土器は調査区全域から早期後半から後期にかけてのものが出土しているが、量的には後期のものが一番多い。竪穴住居跡は古墳時代後期から平安時代までで67軒検出された。その内訳は古墳時代後期（鬼高期）60軒、奈良時代5軒、平安時代2軒である。掘立柱建物跡は65棟検出され、古墳時代後期のもの4棟、奈良時代のものが61棟である。溝は5条検出されており、そのうち3条は奈良時代のものである。井戸は4基検出されており、そのうち3基は奈良時代のものであるが、1基は古墳時代後期のものと思われる。その他に円墳が2基検出され、竜角寺古墳群に新たに追加された。以上の遺構が調査区の全域から検出され、きわめて密度の高い遺跡である。しかしながら、大畑Ⅰ遺跡の最大の特徴は61棟の規模の大きな掘立柱建物跡の存在である。これらは規則的な建物配置をとっており、下総国埴生郡衙の有力な推定地になっている。ただ、線的な調査であるために平面的な構造をとらえることができないが、向台遺跡の谷からの多量な遺物群と考えあわせると郡衙説はがぜん強いものとなってくる。



第302図　大畑Ⅰ遺跡調査年次と調査地区名称

発掘調査の方法は他の遺跡と同様に公共座標の設置からはじめ、20m方眼のグリッドを設定した。大畑Ⅰ遺跡はこの基準点



第301図　大畑Ⅰ遺跡発掘区及び周辺地形図（1/1,000）

の設定は大畑Ⅱ遺跡と同時に行ない、グリッドも同じに設定してある。そのため東側にあたる大畑Ⅱ遺跡からグリッド番号は設定されている。つまり、南北軸は北から南へA、B、C……とアルファベットで、東西軸は東から西へ1、2、3……と数字で表現し、大グリッドはA－1、B－2、C－8というように呼称する。そして、この大グリッドの中をさらに4m方眼の小グリッドで25に分割する。この小グリッドの番号は北東コーナーを1、北西コーナーを5、南東コーナーを21、南西コーナーを25で終りとする。以上の両者を組合せて、それぞれの地区名称を呼ぶことにした。それはA－1－1、B－2－15、C－8－25という表記をする。

大畑Ⅰ遺跡の場合は以上の基本的なグリッド名称の他に調査年度が3ヶ年にまたがったために、その年度を表わす地区名称が付されている。それは第302図に示されているとおりである。東西の両端は56、58年度における一括の調査であるためにそれほど問題はないが、57年度においては、調査区を6分割して発掘を実施した。最終的にはグリッド名ですべてを統一してあるが、なかには表現上でその地区名をあらわしているものがあるので、それは第302図の概念図を参照してもらいたい。

第3節　検出された遺構と遺物

A．先土器時代

位置・層位・出土状況（第303・304図）

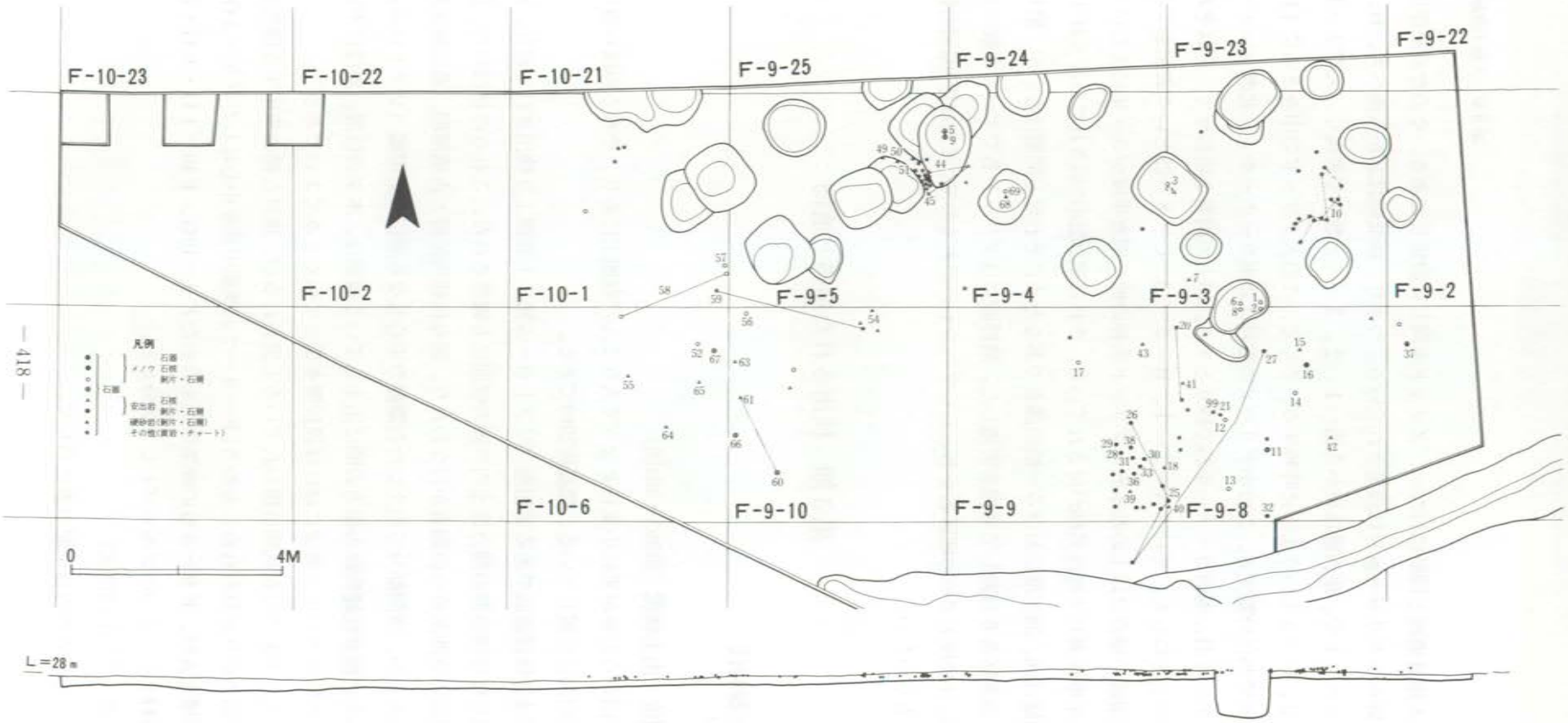
利根川面からの谷が更に小支谷となって入りこんだ台地上にあり、それらの浅い谷に挟まれた狭い平坦部に位置している。標高約29mである。

石器群は遺構確認面である第Ⅲ層（ソフトローム層）上面部より検出されており、更に奈良時代の掘立柱建物跡群の掘方覆土内や掘方壁面にも確認された。これらの状況から、遺構間を含め周辺部の空間部分への調査が行なわれた。掘立柱建物跡群と古墳周堀、溝に挟まれた狭い範囲ではあるが、空間部分で出土した石器群の中心となる層位は第Ⅲ層（ソフトローム層）上部面である。掘立柱建物跡の掘方の間に出土している遺物は、本来の位置、層位に不安が残るものの、空間部での出土層位にはほぼ原位置を保っているとみてよいであろう。

遺構により本来の分布状態は損われていると思われるが、焼けた礫の集中する個所を置いて石器群の広ろがりが見られることから、F－9－2の礫集中部を中心にしたF9－3G・7～9Gの東側域をA群、F9－5Gの礫集中部を含めたF9－10G、F10－1G・6G・10Gの西側域をB群とし、2つのグループとして区分した。

遺物・A群（第305～308図）

A群の石器群の内容は下記の表に示した。

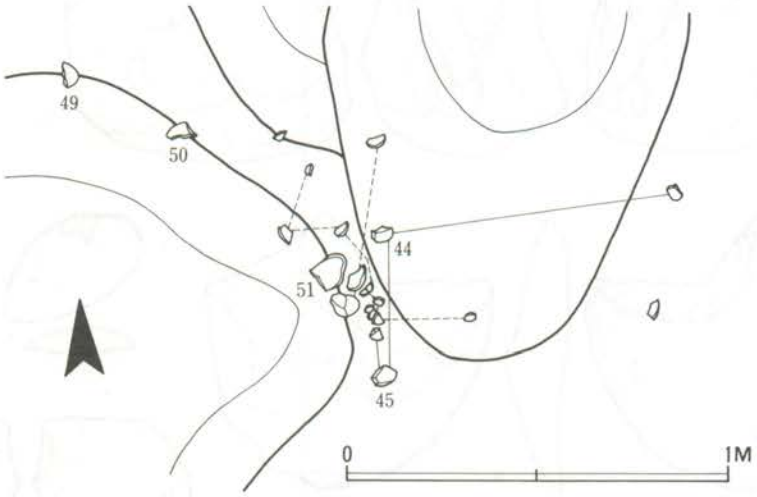


第303図　先土器時代遺物出土状況図（1/120）

第11表　大畑Ｉ遺跡出土先土器時代Ａ群石器組成・石材一覧表

器種 石材	ナイフ形石器	石核＋打面再整剝片	剝片	石屑	計	礫
安山岩		1(?)	11		12	
メノウ	1	3	10		14	
砂岩(?)			20		20	
その他(頁岩・チャート)		1			1	
計	1	5	41		47	29

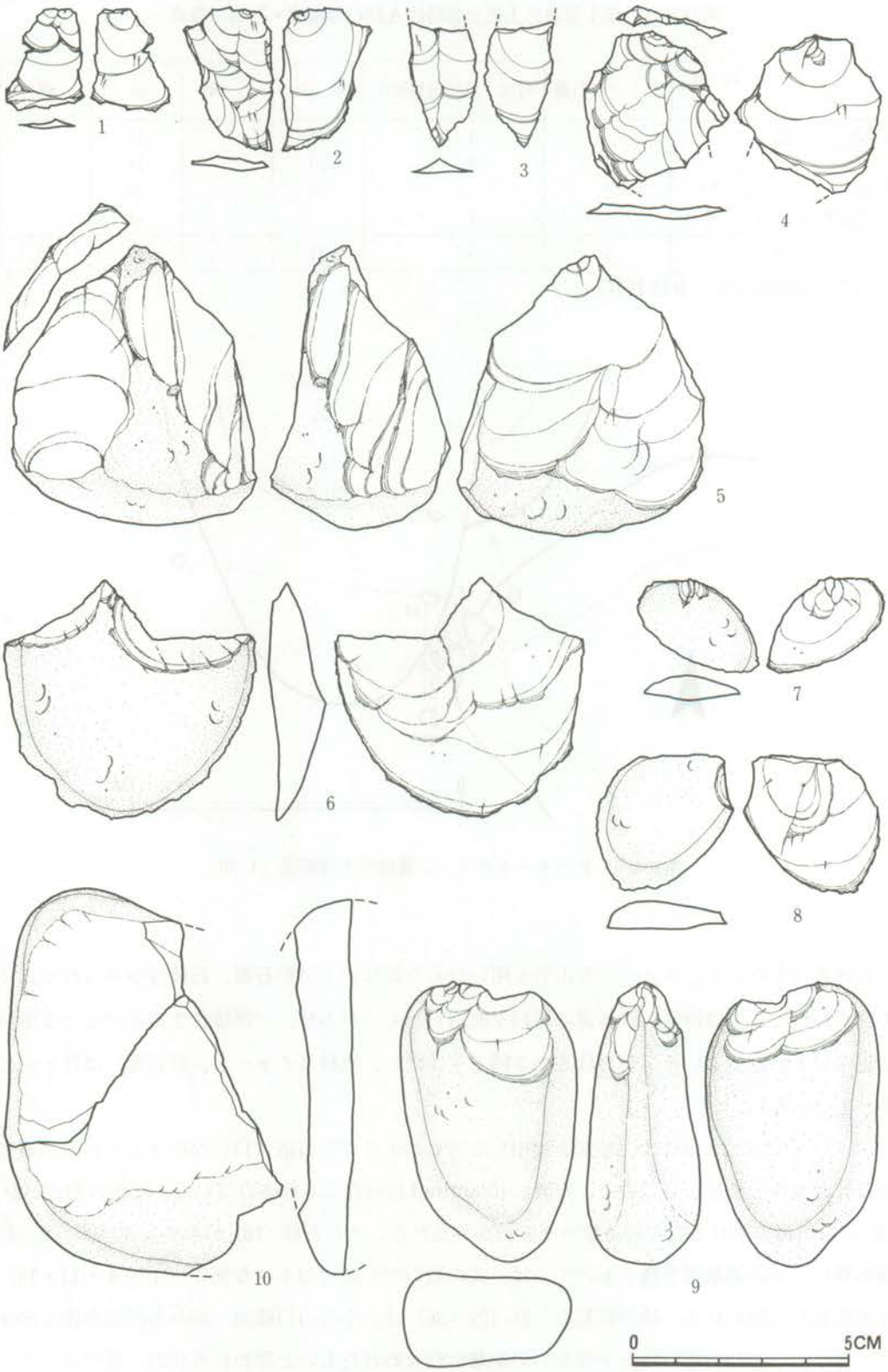
(註・第305図５・９はＢ群)



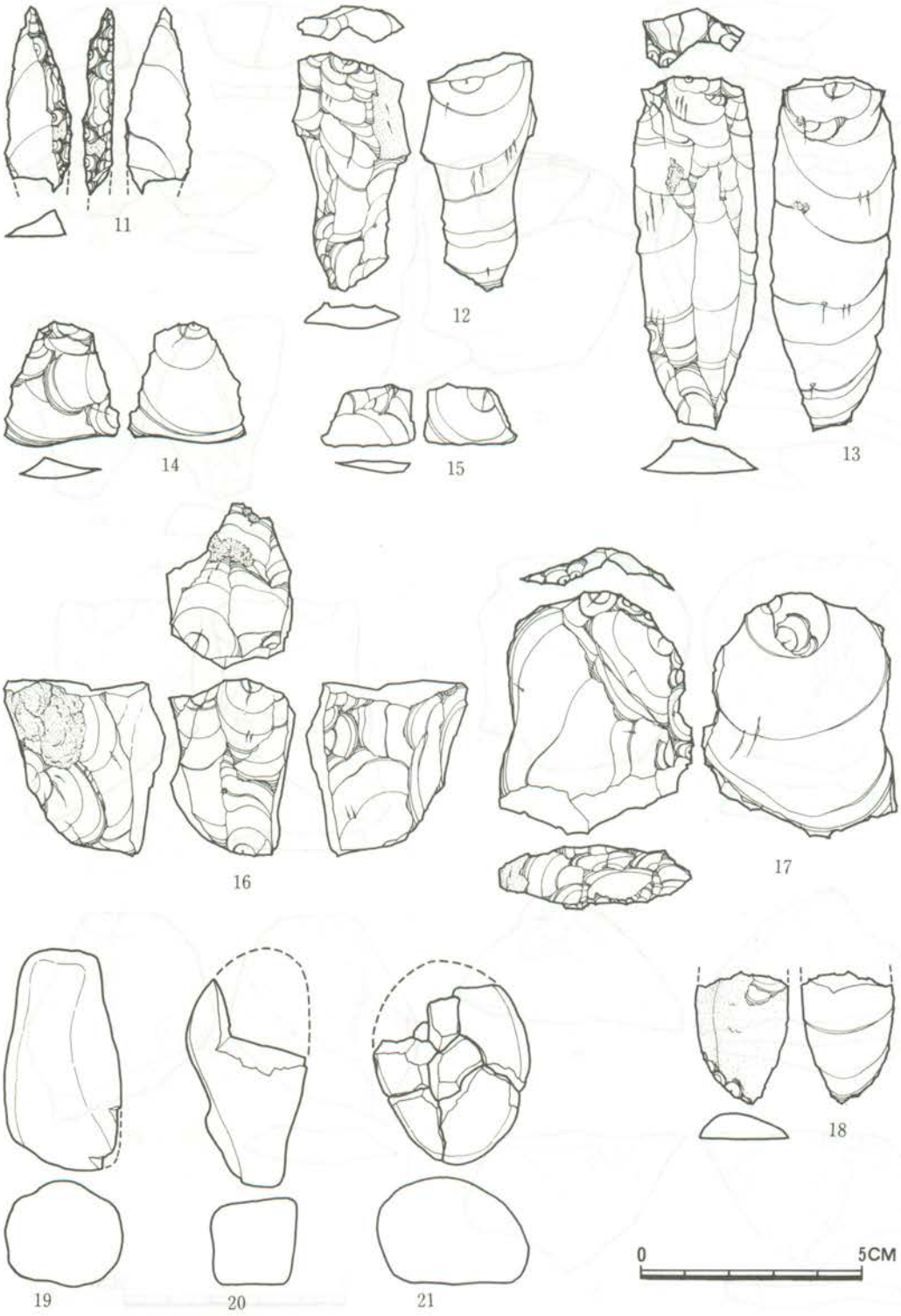
第304図　Ｆ－９－５グリッド遺物出土詳細図（1/20）

石器数は少ないが、メノウ、安山岩を用いたものにはナイフ形石器、石核等がみられる。この他に石材としては特異な砂岩質の材料を使用したものがあり、一部接合するものなど１個所に集中して出土している。石材はこの３種を主体にし、他材（チャート、頁岩等）はほとんど混じえていない。

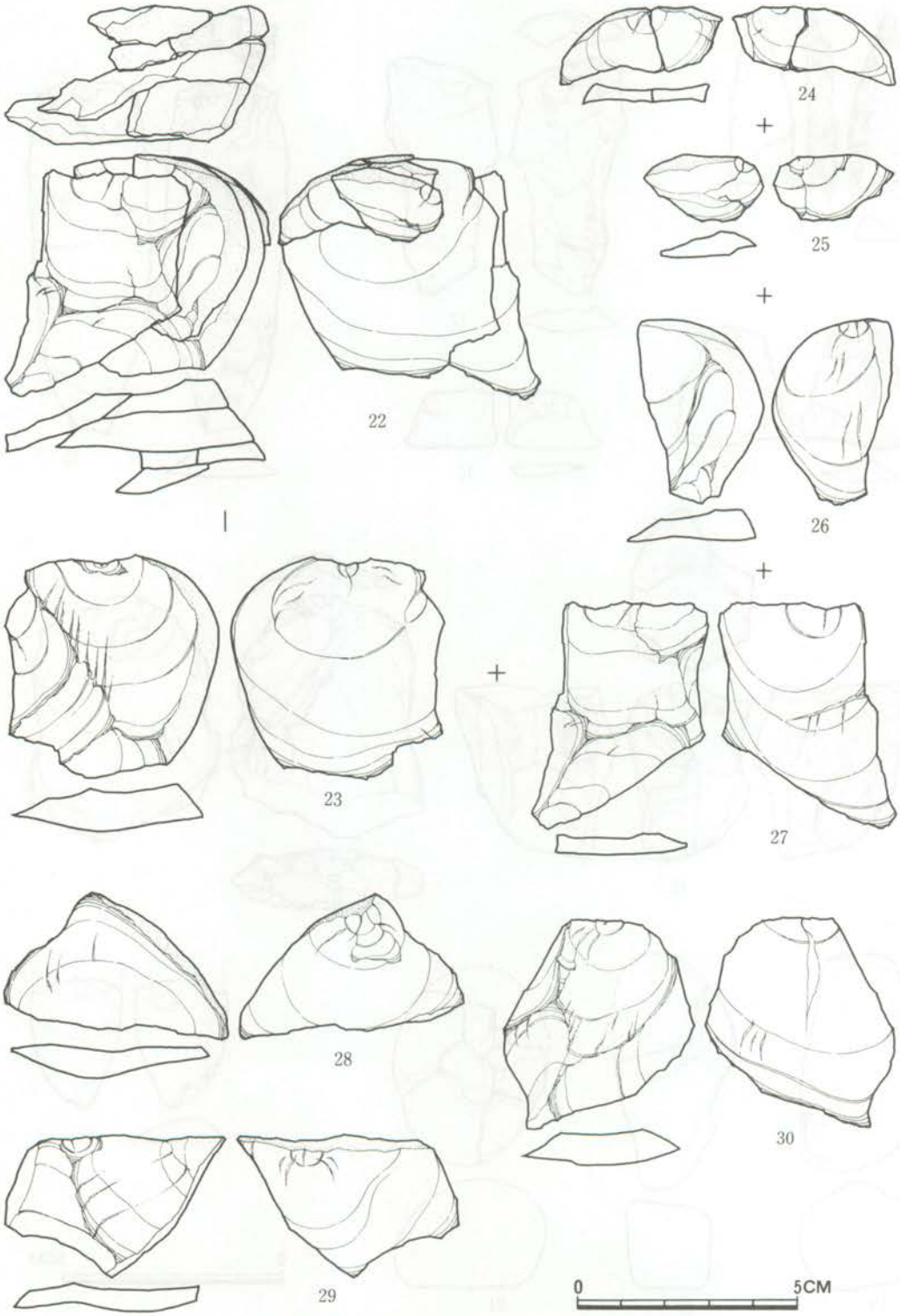
メノウを用いたものには、基部を欠損しているがナイフ形石器（11）が出土している。縦長の良好な剝片を素材にしており、刃潰し (blanting) は両面より施されている。縦長の剝片(12・13) には石器の素材となり得る整ったものがみられる。また石核 (16) が示すように多方面（打面転移）からの剝離面を残すものからは、丈の短いやや幅広の小さな剝片（１～４・14・15）を産出したと思われる。砂岩質製の一群（22～36）は、小形の円礫の一面から打面を作り出すことなく、一方向あるいは上下端からの剝離が行なわれたものと思われる(22)。接合はしていないが（31）の剝片を中心に同様の復元が考えられる。ほとんどの剝片には打面部位、側辺部



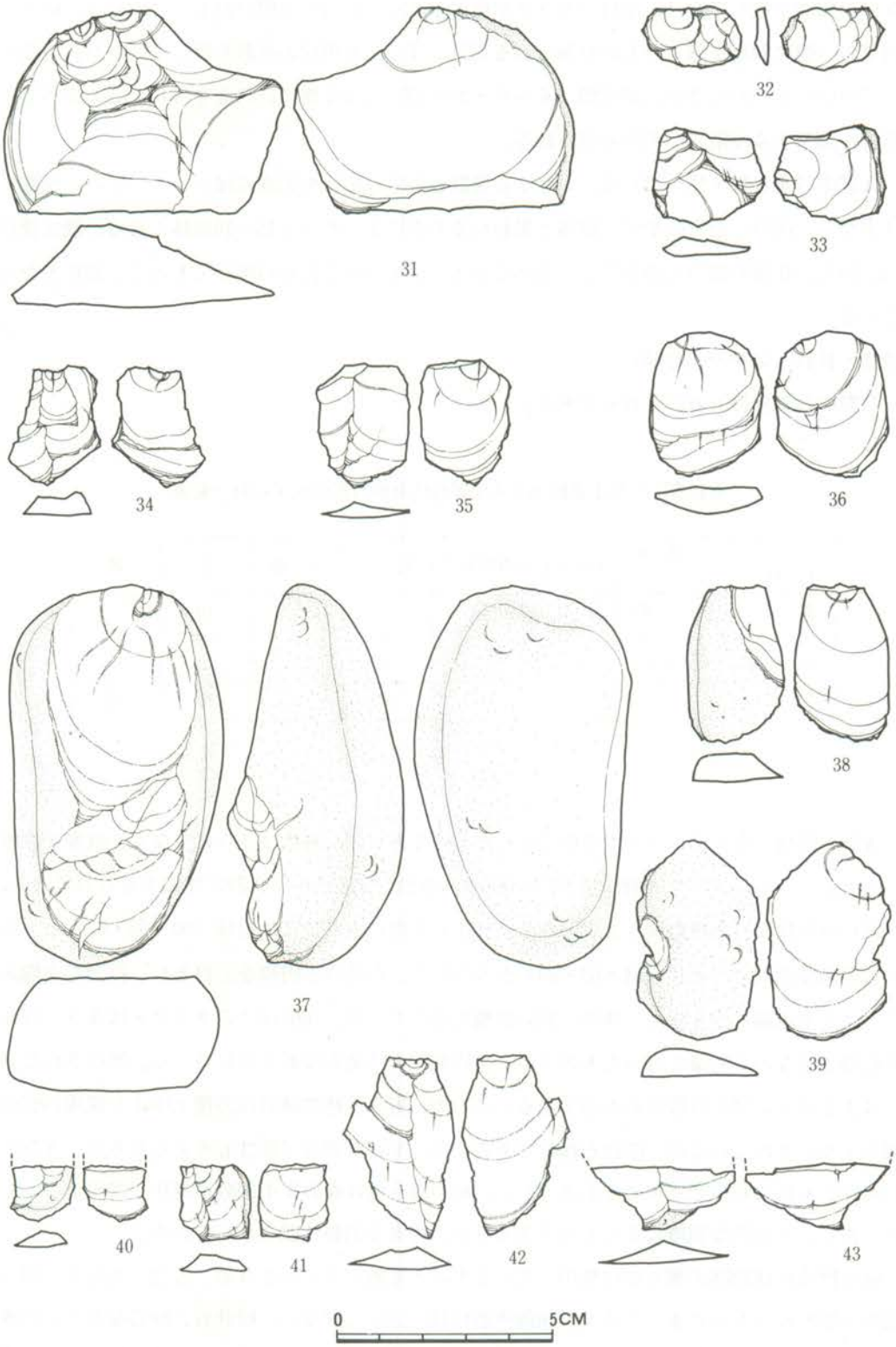
第305図　出土石器実測図 ①（2/3）



第306図　出土石器実測図 ②（2/3）



第307図　出土石器実測図 ③ (2/3)



第308図　出土石器実測図 ④ (2/3)

等に自然面を残しており、原材の大きさが推定される。安山岩を用いたものの中には、扁平な円礫の一面に剝離を施したものがみられる(37)。ほとんど用材の原形を残しているが、石核として用いたものだろうか。剝片類（6～8・38～43）には片面に自然面を残したものが多く、原材を調整する段階での剝片と思われる。

A群中の礫（10・19～21）は、いわゆる礫群としての形状を明確には示していない。礫数量は少なく、接合したものや同一個体と思われるものにまとめると15～16個体となる。礫は硬砂岩、砂岩、花崗岩質のものなどで、全体に小さく、そのほとんどが焼けてもろく、細片となっている。

遺物・B群（第309～312図）

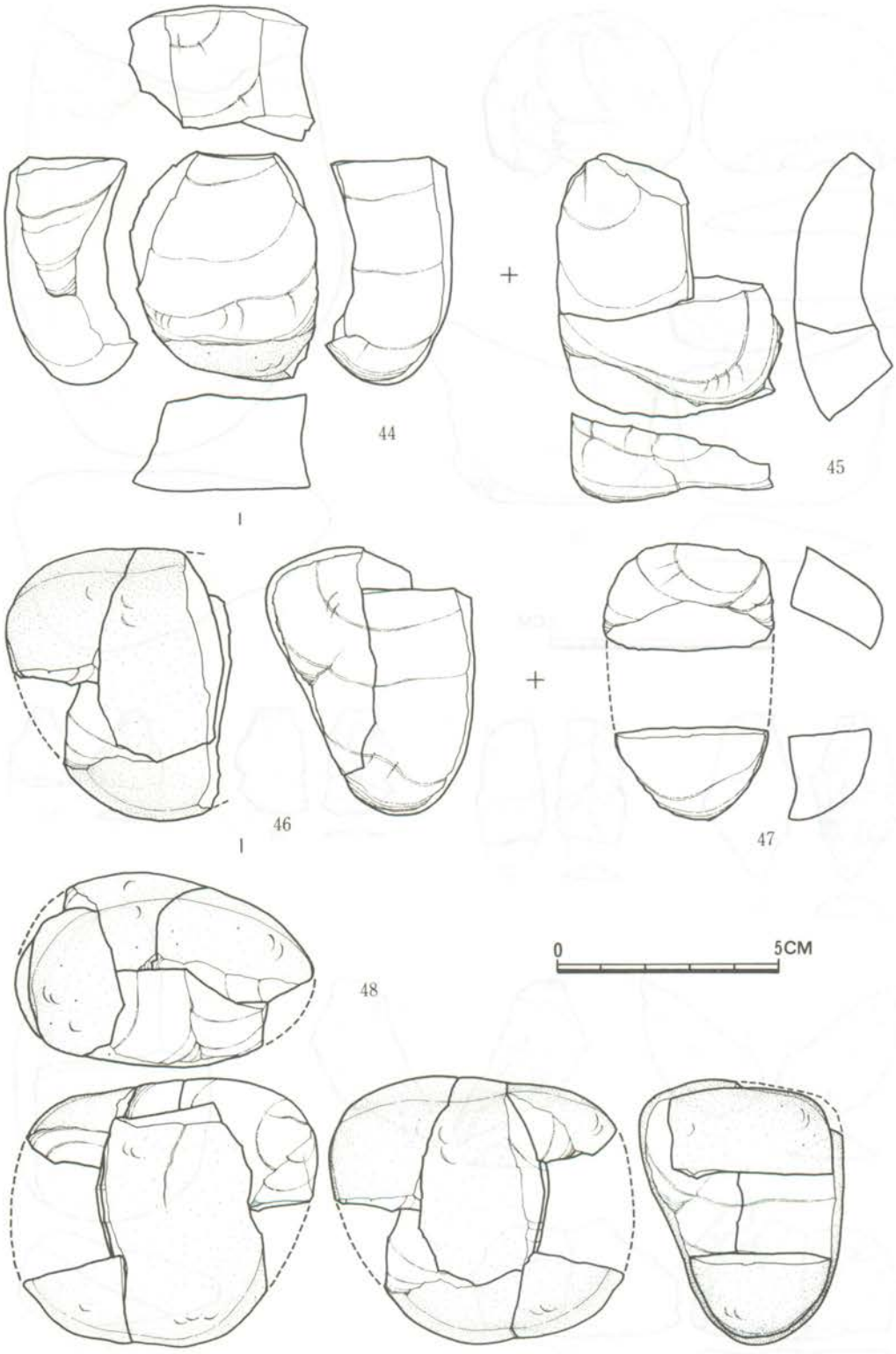
B群の石器群は下表のとおりである。

第12表　大畑Ⅰ遺跡出土先土器時代B群石器組成・石材一覧表

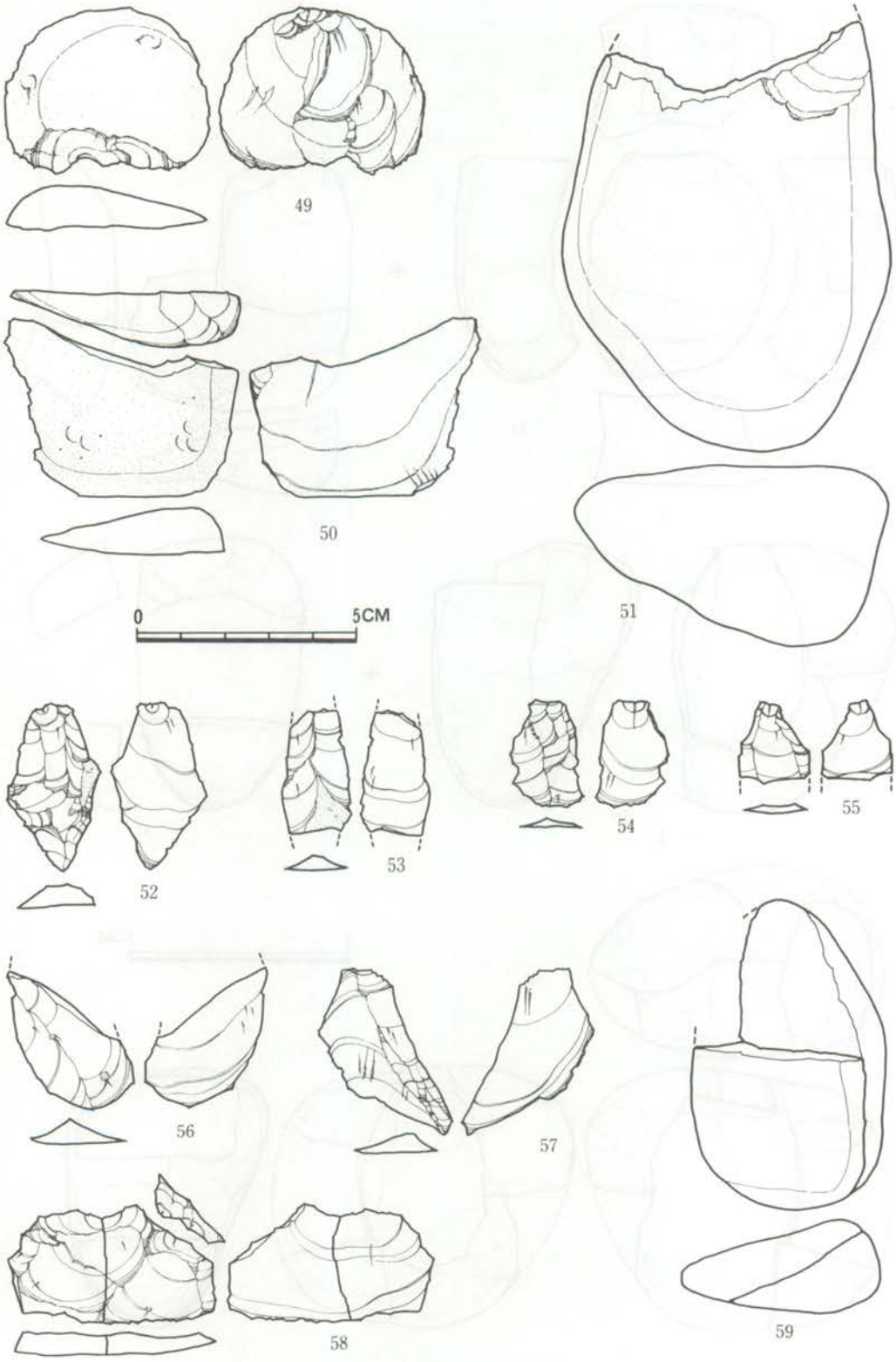
器種 石材	石核＋打面再整剝片	剝片	石屑	計	礫
安山岩	4＋2(?)	8	5	19	
メノウ	1	6	1	8	
その他(頁岩・チャート)		2		2	
計	7	16	6	29	19

A群と同様に安山岩、メノウを中心としたものである。石器数はさらに少なく、散慢な状態で出土している。メノウは剝片類（52～58）のみの出土であるが、A群に類似するものである。（58）は石核の打面再整剝片と思われる。安山岩を用いたものには石核（60・66・67）と、それらの調整段階での剝片（61・63・64）がみられる。石核は小円礫を原材とし、打面を上端あるいは上下両端に作り出し、側面に粗い調整を施している。(66)はこのタイプとは異り、打面を転移させながら剝離を行ったものであり、円盤状の特徴的な形を示している。剝取された剝片はまる味をおびた貝殻状のものである。この他、掘立柱建物跡の掘方覆土中より採集(第305図5・9）されているが、(5)は石核片であろうか。(9)は礫器の可能性も考えられるが、A群の石核様のものに類似したものであろうか。(48)の接合例は礫の集中部分に混在して出土したものである。人為的な剝離によるものであろうか、特異な割裂状態を示している。

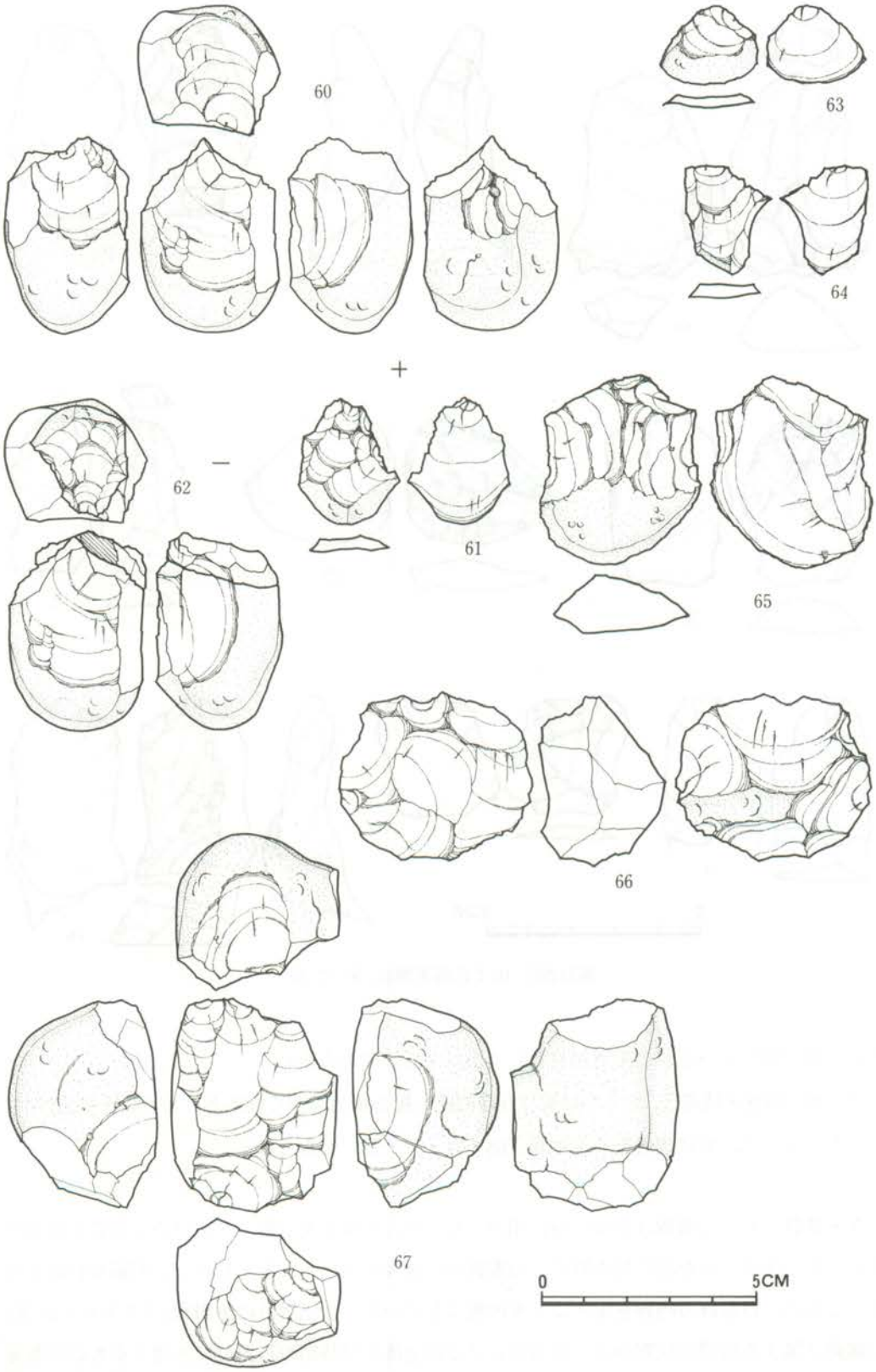
礫は掘立柱建物跡の掘方間に集中しているものと拡散したものを含め、接合したもの、同一個体と思われるものにまとめると、礫個体数は11～12点と少ない。硬砂岩、砂岩などの小円礫であるが、すべて加熱のため赤変してもろく、小破砕片となっている。この礫の集中部に花崗岩の礫（51）が出土しているが、焼けた痕跡はなく、平坦面は磨耗のためか滑ら面となってい



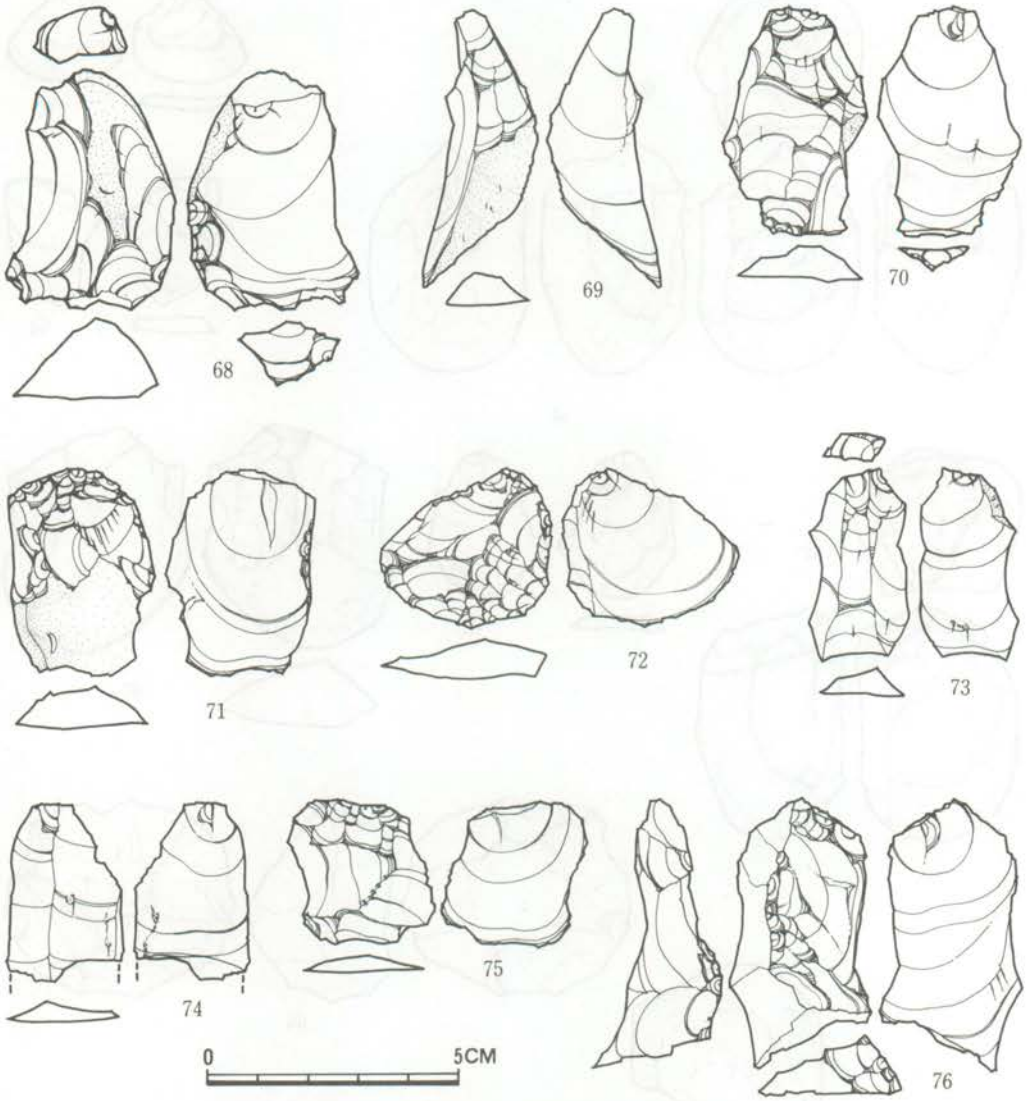
第309図　出土石器実測図 ⑤（2/3）



第310図　出土石器実測図 ⑥ (2/3)



第311図　出土石器実測図 ⑦ (2/3)



第312図　出土石器実測図 ⑧（2/3）

る。一部欠損しているが、生活用具として用いたものであろうか。

この他、調査区域周辺、あるいは掘立柱建物跡の掘方覆上中から採集されたものを第312図に示した。メノウの他に頁岩製の剝片類（68・71・72・75）がみられる。

A・B群ともに石器数は少ないが、相方ともに中心となる安山岩、メノウの石材に石核及びそれらから産出された剝片類を持ち、石器製作の過程が見出される。しかし、明確な石器を欠くことから、石器群の内容を示すことを困難にしている。出土層位の第Ⅲ層（ソフトローム層）上部面に属する時間的位置から、県内における他遺跡の同時期の石器群に共通するものであることは指摘されよう。特に安山岩を用いた石器群のうち、石核の形態に特徴がみられ、メノウ

のそれは近接する前原Ⅰ遺跡においても同様のものが出土している。(接合を試したが不可であった。)

石器群に隣接して礫の集中部がみられるが、いわゆる礫群と呼ばれる形状は示していない。後世の遺構群によって原形を損われている可能性も考えられるが、礫のすべてが加熱を受けた小細片となっていることから、焼礫を使用したことを明示している。礫の集中部が火を使用した生活面とは断定し得ないが、石器群の分布域と礫の集中部分の範囲内に生活域を有していたと考えられる。2つのブロックとして取らえられるものであろう。

第13表　大畑Ⅰ遺跡出土石器一覧表

F－9－3区

遺物番号	類別	石質	出土層	標高	ブロック	備考	挿図番号
0001	剝片	安山岩	Ⅲ・上	28,035	A	小剝片・外皮部	第305図7
0002	円礫小片		〃	28,020	〃	焼け赤変、0007、0009、0014と同一、接合不可	
0003	小円礫小片		〃	28,010	〃	焼	
0004	円礫片	硬砂岩	〃	28,012	〃	3点焼けてボロボロ、0006・8・12・13・15と同一、接合不可	
0005	円礫小片	〃	〃	28,052	〃	焼	
0006	〃		〃	28,045	〃	3点焼けてボロボロ、0004・8・12・13・15と同一、接合不可	
0007	円礫片		〃	28,061	〃	焼けて赤変、0002・9～14と同一、接合不可	
0008	〃	硬砂岩	〃	28,030	〃	焼けてボロボロ、0004・6～12・13・15と同一、接合不可	
0009	円礫小片		〃	28,010	〃	焼けて赤変、0002・7・14と同一、接合不可	
0010	円礫片	硬砂岩	〃	28,020	〃	接合、焼け赤変	第305図10
0011	〃	〃	〃	28,035	〃		
0012	円礫小片	〃	〃	28,050	〃	焼けてボロボロ、0004・6・7・8・13・15と同一、接合不可	
0013	〃	〃	〃	28,000	〃	焼けてボロボロ、0004・6・8・12・15と同一、接合不可	
0014	〃		〃	27,995	〃	焼けて赤変、0002・7・9と同一、接合不可	
0015	〃	硬砂岩	〃	28,000	〃	焼けて赤変、ボロボロ、0004・6・8・12・13と同一、接合不可	
0016	〃		〃	28,035	〃	焼けて赤変	
0017	〃	チャート	〃	27,990	〃	接合、焼けて赤変、F－3－8区	
0018	〃		〃	27,965	〃	0024・26と同一と思われる	
SB18・P6	剝片	メノウ	P覆土中		A	打面部欠損	第305図3
	〃	〃	〃		〃	CRFか？	第305図4
SB19・P群	〃	安山岩	〃		〃	外皮部・調整段階の剝片	第305図6
	〃	〃	〃		〃	〃	第305図8
	〃	メノウ	〃		〃	小剝片	第305図1
	〃	〃	〃		〃	CRFか？	第305図2
	小円礫	石英	〃		〃	径1cmの小円礫	

F－9－4区

遺物番号	類別	石質	出土層	標高	ブロック	備考	挿図番号
0001	欠						
0002	剝片	安山岩	Ⅲ・上	27,910	B	F－9－5区0003・4・12と接合	第306図45
0003	石屑(チップ)	〃	〃	27,890	〃	外皮部	
0004	礫小片	硬砂岩	〃	27,910	〃	焼けてボロボロ	
0005	〃	泥岩	〃	27,963	A	微小片	
0006	欠						

SB17・P4	石　核	安山岩	P覆土中	〃	A		第305図5
〃	石　核	〃	〃		〃	未整品か？	第305図9
SB18・P8	剝　片	メノウ	〃				第312図69
〃	石核片	頁岩	〃			石核片を思わせる	第312図68

F－9－5区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	欠		Ⅲ・上	27,925			
0002	円礫小片	砂岩	〃	27,855	B	焼けてボロボロ、0005・6・8・13・14・16・20と同一接合不可	
0003	剝　片	安山岩	〃	27,860	〃	F－9－4区0002に接合	第309図45
0004	〃	〃	〃	27,824	〃	0012	
0005	円礫小片	砂岩	〃	27,880	〃	焼けてボロボロ、0002・6・8・13・14・16・20と同一、接合可	
0006	〃	〃	〃	27,875	〃	焼けてボロボロ0002・5・13・14・16・20と同一接合不可	
0007	〃	〃	〃	27,874	〃	〃	
0008	〃	〃	〃	27,858	〃	〃	
0009	円　礫	〃	〃	27,844	〃	焼けてボロボロ0015と同一・接合不可	
0010	円礫片	〃	〃	27,821	〃	〃	
0011	礫	花崗岩	〃	27,828	〃	半欠・表面ツルツル感あり。	第310図51
0012	剝　片	安山岩	〃	27,815	〃	2点、F－9－4区0002と0003・4に接合	第309図44
0013	円礫小片	砂岩	〃	27,828	〃		
0014	円礫片	〃	〃	27,818	〃		
0015	〃	〃	〃	27,819	〃		
0016	円礫小片	〃	Ⅲ・下	27,837	〃		
0017	石（チップ）	安山岩	Ⅲ・上	27,930	〃		
0018	剝　片	〃	Ⅲ・下	27,835	〃		
0019	剝　片	チャート	〃	27,868	〃		
0020	円礫小片	砂岩	〃	27,821	〃		

F－9－7区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	剝　片	メノウ	Ⅲ・上	27,962	A	小片・不整形	
0002	石　核	安山岩	〃	28,073	〃	1剝離面あり、こぶし大の円礫	第308図37

F－9－8区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	剝　片	安山岩	Ⅲ・上	28,005	A	小剝片・チップか？	第308図40
0002	〃	硬砂岩	〃	28,004	〃	小剝片、F－9－9区のものと同一、0020・21とF－9－14区0001に接合	第307図25
0003	礫小片	メノウ	〃	27,945	〃	小片	
0004	〃	チャート	〃	27,947	〃	礫小片・焼けて赤変	
0005	円礫小片	花崗岩	〃	28,040	〃	焼けて赤変	
0006	欠						
0007	〃						
0008	小円礫		Ⅲ・上	27,955	A	焼けて赤変、一部欠失	第306図19
0009	〃	硬砂岩	〃	27,967	〃	焼けて割、一部欠失	第306図21
0010	剝　片	メノウ	〃	28,030	〃		第306図12
0011	礫小片	〃	〃	28,055	〃		
0012	ナイフ型石器	〃	〃	28,060	〃	基部欠失	第306図11
0013	欠						
0014	剝　片	安山岩	Ⅲ・上	28,104	A	外皮部分、調整段階の剝片	第308図42
0015	欠						
0016	剝　片	メノウ	Ⅲ・上	28,030	A	小剝片	第306図14
0017	〃	〃	〃	28,095	〃	小形の剝片	第306図15

0018	石　核	〃	〃	27,985	〃		第306図16
0019	〃	安山岩	〃	28,052	〃		
0020	〃	〃	〃	28,038	〃	F－9－9区の一群と同一個体、接合不可	第308図32
0021	〃	メノウ	〃	28,035	〃	素材となる剝片、縦長の整った剝片、加工なし。	第306図13
0022	〃	硬砂岩	〃	27,010	〃	F－9－9区の一群と同一、F9－14区0001に接合	第307図24
0023	〃	安山岩	〃	27,906	〃		
0024	礫小片	チャート	〃	27,940	〃	焼、半欠、0026と同一、接合不可	第306図20
0025	剝　片	安山岩	〃	27,950	〃		第308図41
0026	礫小片	チャート	〃	28,020	〃	0024と同一、接合不可	

F－9－9区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	円　礫　片	花崗岩	Ⅲ・上	27,938	A	焼けて赤変	
0002	C　R　F	メノウ	〃	28,035	〃		第306図17
0003	剝　片	安山岩	〃	27,905	〃	未端部のみ	第308図43
0004	〃		〃	27,945	〃	打面部は自然面、F－9－14区0001に接合	第307図26
0005	〃		〃	27,950	〃	打面部に自然面	第307図29
0006	〃		〃	28,025	〃	〃	第307図28
0007	欠						
0008	剝　片		Ⅲ・上	28,030	A	小剝片	
0009	〃	〃	〃	27,937	〃	打面部に自然面(半割片の石核か？)	第308図31
0010	〃	〃	〃	27,950	〃		第308図30
0011	〃	〃	〃	28,015	〃	小剝片	第308図33
0012	〃	〃	〃	27,935	〃		第308図36
0013	〃	〃	〃	27,922	〃	小剝片・自然面を残す	
0014	〃	〃	〃	27,928	〃	小剝片	
0015	〃	〃	〃	27,950	〃	〃	
0016	〃	安山岩	〃	28,030	〃	外皮部分	第308図39
0017	〃	硬	〃	27,957	〃		
0018	礫小片		〃	27,957	〃	焼けている	
0019	剝　片		〃	27,968	〃		
0020	〃	〃	〃	28,015	〃	接合、打面部に自然面	第307図24
0021	〃	〃	〃	27,947	〃	〃	
0022	〃	頁　岩	〃	27,940	〃	自然面残す	第306図18
0023	〃	硬	〃	27,942	〃		
0024	〃	安山岩			〃		第308図38

F－9－10区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	石屑(チップ)	安山岩	Ⅲ・上	27,890	B		
0002	円　礫　片	花崗岩	〃	28,005	〃	F10-1区0008と接合、肩半円礫	
0003	剝　片	メノウ	〃	27,915	〃	上・下端部欠失・縦長	第310図53
0004	石屑(チップ)	安山岩	〃	27,887	〃	自然面残す	
0005	石　核	〃	〃	27,895	〃	小円礫利用の石核、0007接合	第311図60
0006	〃	〃	〃	27,913	〃	小円礫利用の石核、打面転位、自然面を一部に残す	第311図66
0007	C　R　F	〃	〃	27,920	〃	小さい、0005に接合	第311図61
0008	剝　片	〃	〃	27,990	〃	小剝片・自然面を残す	第311図63
0009	欠						
0010	剝　片	メノウ	〃	27,975	〃	打面部欠失、整った剝片	第310図56
0011	〃	〃	〃	27,910	〃	小剝片・下端部欠失	
0012	石屑(チップ)	安山岩	〃	27,990	〃	一部に自然面	
0013	剝　片	チャート	〃	28,080	〃	加工剝片か？	第310図54

F－9－14区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	剝　片		Ⅲ・上	27,995	A	打面部は自然面、F－9－9区の一群と接合	第307図23
0002	欠						

F－10－1区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	C R F	メノウ	Ⅲ・上	27,975	B	F－10－6区0009に接合、半割	第310図58
0002	剝　片	〃	〃	27,935	〃	打面部欠失・素材にも可能	第310図57
0003	石屑(チップ)	〃	〃	27,968	〃		
0004	円礫小片	チャート	〃	27,870	〃	焼けて少々赤変	
0005	〃	硬砂岩	〃	27,855	〃	焼けて赤変	
0006	円　礫　片	花崗岩	〃	27,855	〃	〃	
0007	欠						
0008	円　礫　片	花崗岩	Ⅲ・上	27,975	B	F9-10区0002に接合	第310図59

F－10－6区

遺物番号	類　別	石　質	出土層	標　高	ブロック	備　考	挿図番号
0001	欠						
0002	欠						
0003	剝　片	メノウ	Ⅲ・上	27,998	B	素材可能	第310図52
0004	石　核	安山岩	〃	28,035	〃	小円礫利用・上下打面、裏面は自然面のまま	第311図67
0005	剝　片	〃	〃	29,935	〃	CRFか？	第311図65
0006	〃		〃	28,000	〃		第311図64
0007	欠						
0008	剝　片	メノウ	Ⅲ・上	27,900	B	下端部欠失、整った剝片	第310図55
0009	C R F	〃	〃	27,930	〃	F－10－1区0001に接合、半割	
0010	欠						
0011	欠						
表採							
F-9区	剝　片	メノウ	炎作土			遺構確認段階で採集	第312図73
	〃	〃	〃			〃	第312図70
F-10区	C.R.F.	〃	〃			〃	第312図76
	剝　片	〃	〃			遺構確認段階で採集、下端部欠失、整った剝片	第312図74
	〃	頁　岩	〃				第312図75
	C.R.F（？）	〃	P覆土中			SB3・P2の覆土中、自然面残す	第312図71
	剝　片	〃	〃			〃　加工片か？	第312図72

B．縄文時代（第313図）

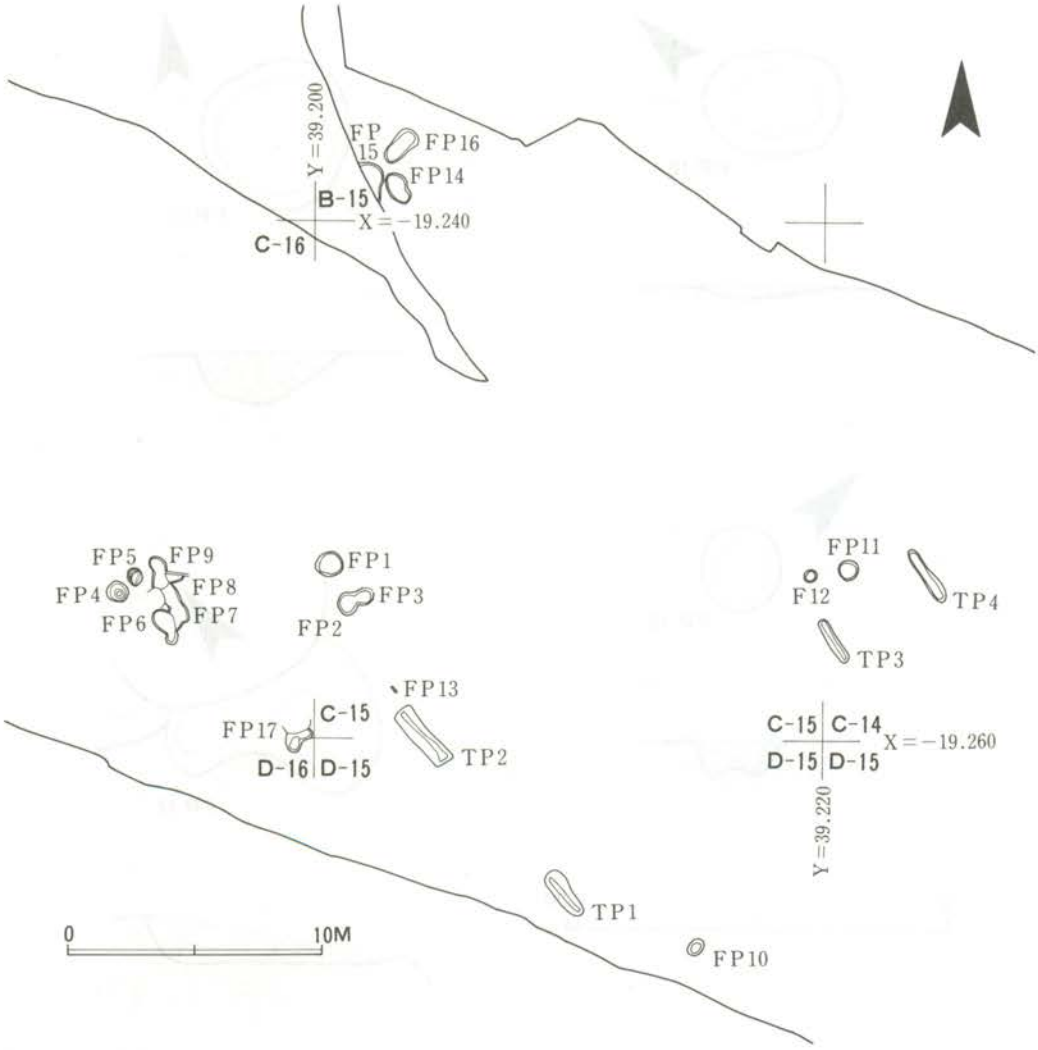
縄文時代の遺構は調査区の西側のC－15グリッドを中心に分布している。この地点は南側からの浅い谷がはいっている、南向の緩斜面にあたり、標高29m前後である。ここに早期後半と思われる炉穴と陥穴がグループをなして営まれている。ただＴＰ５だけは１基単独で東側に存在する。遺物は少量ではあるが調査区の全域から早期後半から後期にかけての土器片が採集されている。数量的には後期のもが一番多い

ｉ．炉穴

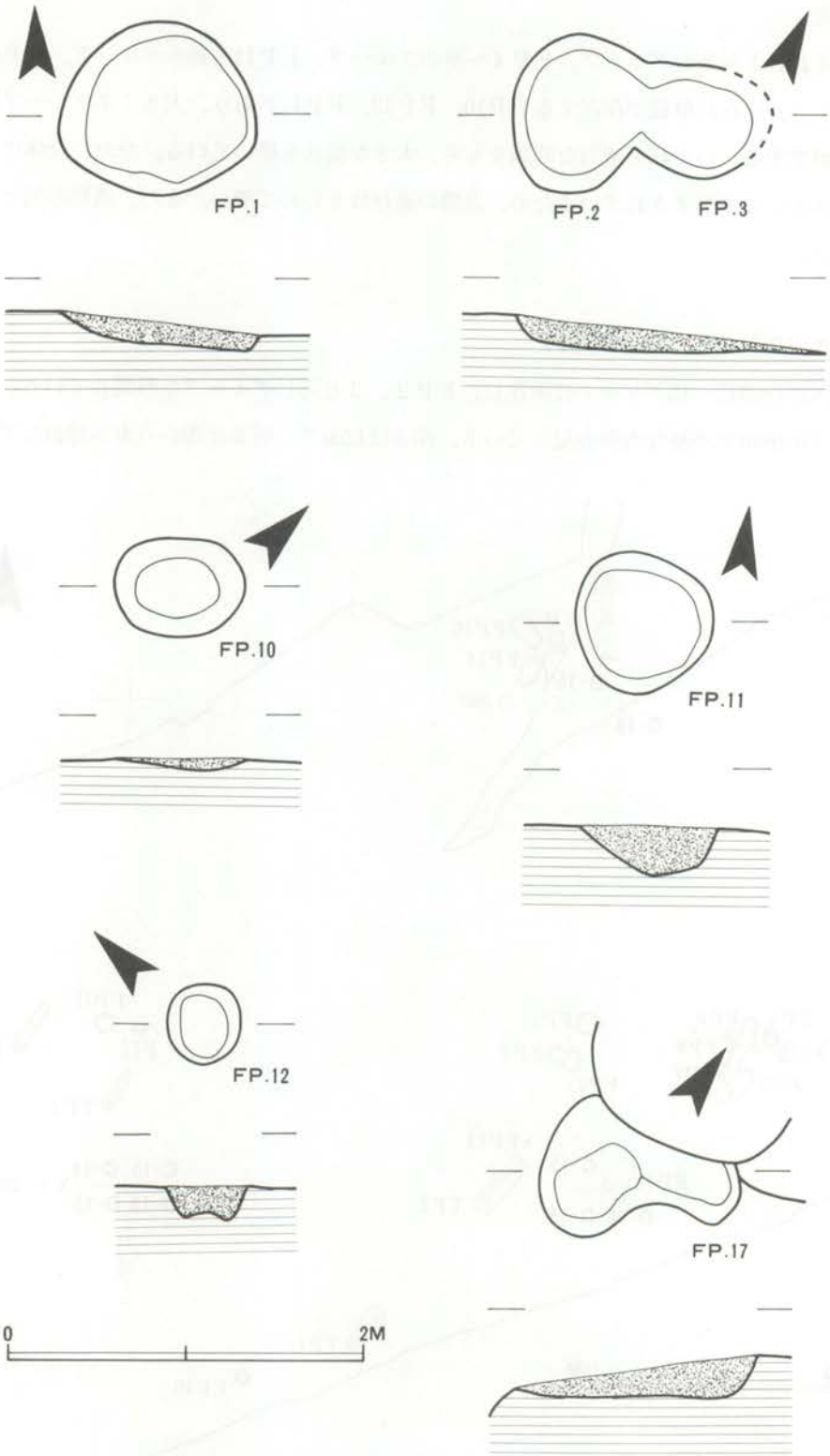
炉穴はＦＰ１～３のグループ、ＦＰ４～９のグループ、ＦＰ14～16のグループ、ＦＰ11、12のグループ、それに単独で存在するＦＰ10、ＦＰ13、ＦＰ17があり、大きく７グループに分けることができる。いずれも適当な間隔をもち、大きな弧状を描いている。ただ、全体にハードローム面近くまで削平されているため、遺構の遺存はきわめて悪い。また、遺物の出土もほとんどない。

ＦＰ１（第314図、ＰＬ147－１）

調査区の西側Ｃ－15グリッドに所在し、ＦＰ２、３と同じグループを形成している。規模は1.11m×0.96mで不整な方形を呈している。深さは12cmで、底面は西から東へ傾斜している。



第313図　縄文時代遺構配置図（1/300）



第314図　炉穴実測図 ①（FP１～３・10～12・17）（1/40）

壁の立ち上がりは東側はゆるやかではあるが直線的ではっきりしているが、西側ははっきりした境界がない。底面、壁ともによく焼けており、焼土も多く堆積している。

ＦＰ２（第314図、ＰＬ147－１）

ＦＰ１の南側に隣接し、ＦＰ３と重複関係にある。先後関係は不明である。規模は88cm×82cmで楕円形を呈している。深さは14cmで底面は水平である。壁の立ち上がりはしっかりしているが、ゆるやかである。底面、壁ともによく焼けており、焼土がよく堆積している。

ＦＰ３（第314図、ＰＬ147－１）

ＦＰ２と重複関係にあり、Ｃ－15グリッドに位置している。規模は80cm×64cmで不整な楕円形を呈している。全体に西から東へ傾斜しており、東側の壁は遺存していない。他の部分で遺存している壁は10cm前後である。底面、壁ともよく焼けており、焼土もよく堆積している。

ＦＰ４（第315図　ＰＬ147－２）

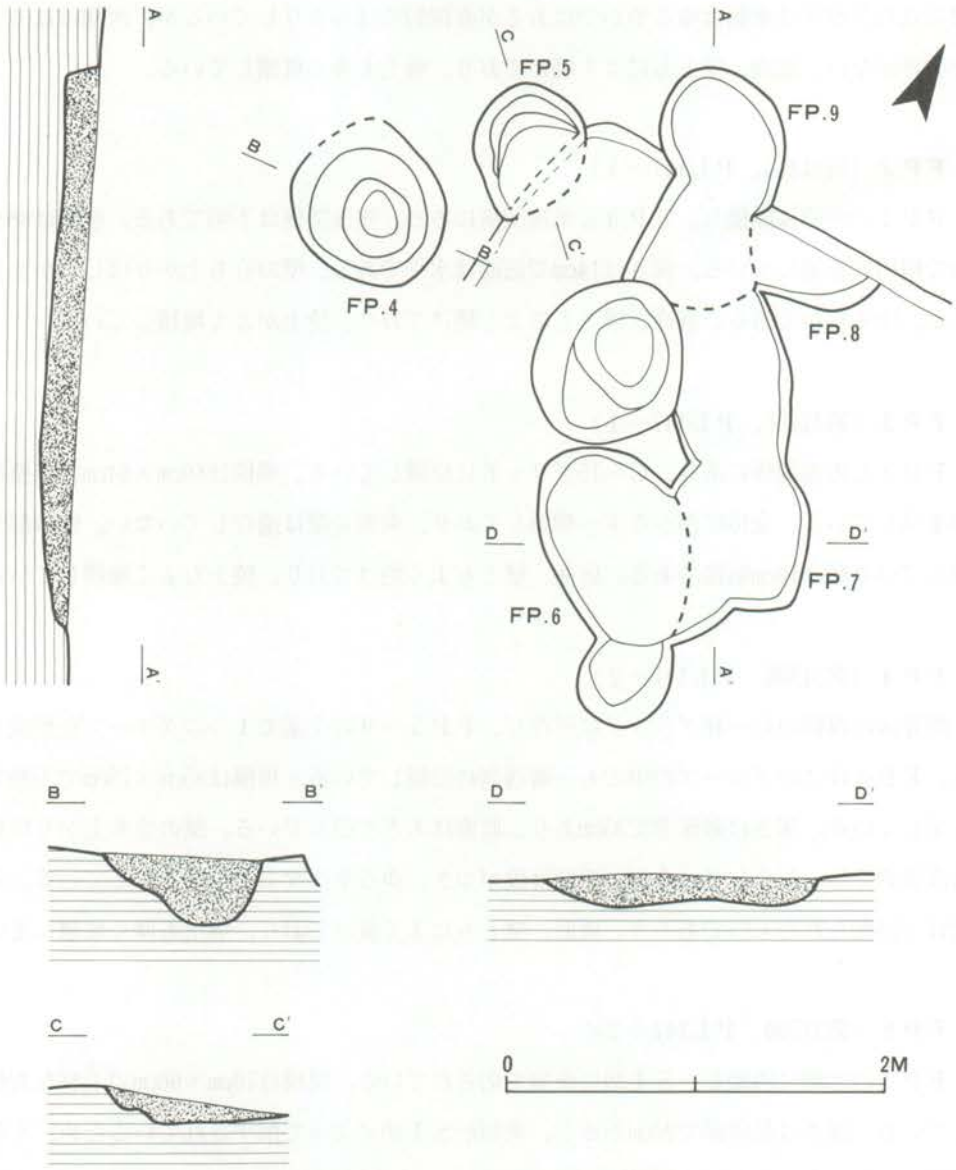
調査区の西側のＣ－16グリッドに所在し、ＦＰ５～９の７基で１つのグループを形成している。ＦＰ４はこのグループの中でも一番西側に位置している。規模は85cm×75cmで不整な方形を呈している。深さは最深部で35cmあり、底面は大きく凹んでいる。壁の立ち上がりは東側では直線的でしっかりしているが、西側は段がつき、ゆるやかな立ち上がりをしている。この炉穴は２回掘られたものであろう。底面、壁ともによく焼けており、焼土も厚く堆積している。

ＦＰ５（第315図、ＰＬ147－２）

ＦＰ４の北側に隣接し、ＳＩ30に東側を切られている。規模は70cm×60cmで不整な方形を呈している。深さは最深部で20cmあるが、東側がＳＩ30によって削平されているため、不明な点が多い。壁の立ち上がりは２段になっているが、それぞれ直線的である。底面はほぼ水平である。底面、壁ともにそれほどは焼けておらず、焼土の堆積も少い。

ＦＰ６（第315図、ＰＬ147－２）

Ｃ－16グリッドに所在し、ＳＩ30に削平され、ＦＰ７と重複関係にある。おそらく後に作られたものであろう。規模は1.17m×0.75mで不整な楕円形を呈している。深さは最深部で18cmで、底面はゆるやかな凹みであり、壁もゆるやかに立ち上がる。壁、底面もそれほどは焼けていないが、焼土の堆積は多い。



第315図　炉穴実測図 ②（ＦＰ４～９）（1/40）

ＦＰ７（第315図、ＰＬ147－２）

ＦＰ６におそらく切られて、ＳＩ30に削平されている。また、ＦＰ８とも重複関係にあるため規模等は不明な点が多い。おそらく規模は80cm×80cmの方形を呈していたと思われる。深さは最深部で15cmで、底面はゆるやかな凹みを呈し、壁の立ち上がりもゆるやかである。底面、壁ともにあまり焼けてなく、焼土の堆積も少ない。

ＦＰ８（第315図、ＰＬ147－２）

ＦＰ７とＦＰ９との間にあり、両者ともに先後関係があり、なおかつＳＩ30によって削平されている。規模、形態等は不明であるが、深さは19cmある。底面、壁はあまり焼けておらず、焼土の量も少い。

ＦＰ９（第315図、ＰＬ147－２）

Ｃ－16グリッドに所在し、ＦＰ８と重複関係にあり、ＳＩ30に削平されている。規模は1.25ｍ×0.67ｍで瓢形を呈している。この形は円形のものを２回掘ったためであろう。深さはともに18cm前後で、底面はほぼ水平に近い。壁の立ち上がりは直線的である。壁、底面ともにあまりよく焼けておらず、焼土の堆積も少い。

ＦＰ10（第314図）

Ｄ－15グリッドに単独で所在、一番南側に位置する炉穴である。規模は72cm×53cmで楕円形を呈している。深さは最深部で７cmで、床面は全体に凹んでおり、壁もゆるやかな立ち上がりをしている。全体に遺存がきわめて悪いのであるが、床面はよく焼けており、焼土も多い。

ＦＰ11（第314図）

Ｃ－14グリッドに所在し、ＦＰ12と２基で１つのグループをなしている。規模は79cm×78cmで不整な円形を呈している。深さは最深部で28cmで、床面は摺鉢状を呈している。壁の立ち上がりは東側は直線的であるが、西側はゆるやかであるが、床面、壁ともによく焼けており、焼土の堆積も多い。

ＦＰ12（第314図）

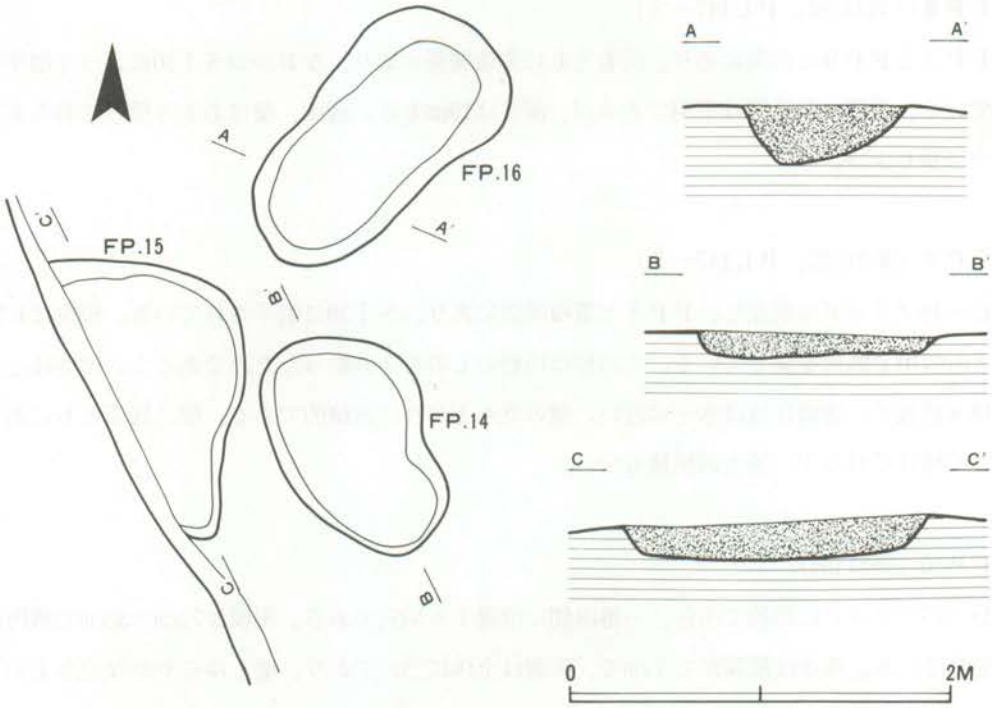
ＦＰ11の西に隣接し、ＳＩ31に削平されている。規模は45cm×41cmで隅丸方形を呈している。深さは最深部で20cmであるが、床面中央は盛り上がっている。壁の立ち上がりは直線的である。床面、壁ともによく焼けており焼土の堆積も多い。

ＦＰ13

Ｃ－15グリッドに所在し、ＳＩ36に大きく削平され、かろうじてＳＩ36の壁に炉穴の痕跡をとどめている。そのための規模、形態等はまったく不明である。

ＦＰ14（第316図）

Ｂ－15グリッドに所在し、ＦＰ15、16ともに一番北側に位置する一つのグループを形成して



第316図　炉穴実測図 ③（FP14～16）（1/40）

いる。規模は1.25m×0.83mで不整な楕円形を呈している。深さは最深部で14cmで、北側の方がやや深く、南側で段がついている。これは形態からもわかるが掘り替えの痕跡であろう。壁の立ち上がりはゆるやかである。床面はよく焼けているが、壁はあまり焼けていない。焼土、灰の堆積は多い。

ＦＰ15　（第316図）

ＦＰ14の西側に隣接しており、西側半分は道路の下のため調査ができなかったため、規模、形態等に不明な点が多い。規模は１辺が1.4m前後の大形の方形を呈するものと思われる。深さは最深部で20cmで、底面はほぼ水平である。壁の立ち上がりはゆるやかであるが直線的である。底面、壁ともによく焼けており、焼土、灰の堆積も多い。

ＦＰ16（第316図）

ＦＰ14、15の北側に隣接しており、一番北側に位置する炉穴である。規模は1.57m×0.86mで隅丸の長方形を呈している。深さは最深部で30cmである。底面は大きく凹み、中央より西側が深くなっている。これは壁の立ち上がりにもあらわれており、西側はするどいが東側はゆるやかである。底面、壁ともによく焼けており、焼土、灰の堆積も多い。

ＦＰ17　（第314図）

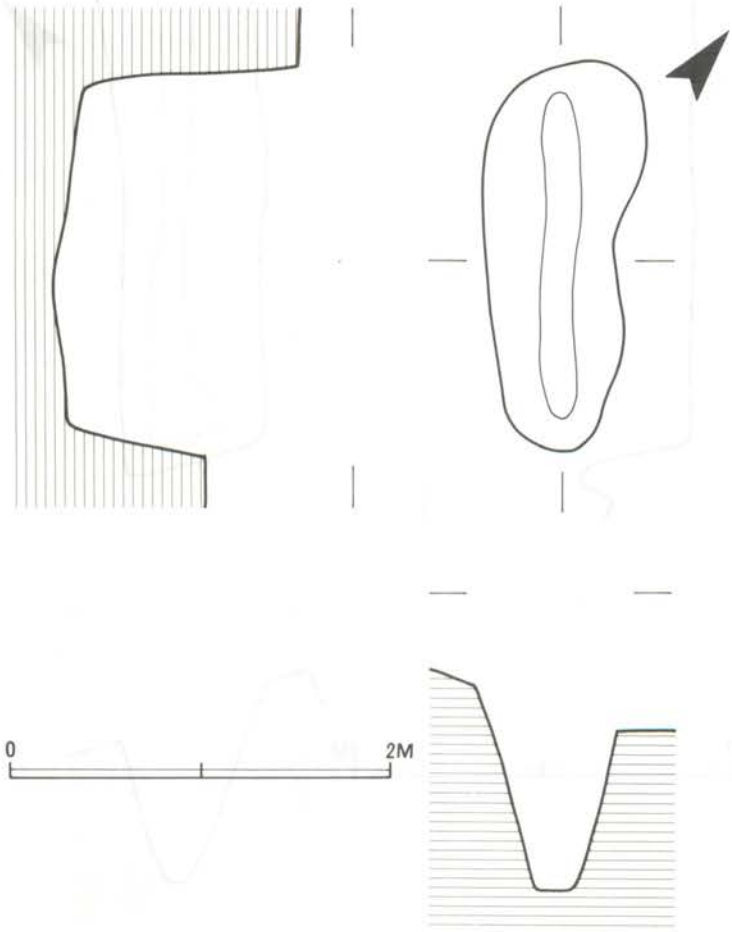
Ｄ―16グリッドに単独で所在し、ＳＩ36とＳＢ40に切られている。規模は1.14m×0.8mで不整形を呈している。深さは最深部で22cmで、底面はほぼ水平である。壁の立ち上がりはゆるやかであるが直線的である。底面、壁ともにあまり焼けておらず、焼土の堆積も少い。

ii．陥穴

陥穴はＴＰ１、２が南北に並び、ＴＰ３、４が東西にそれぞれ並び、この四基は同一の主軸をもって築かれている。すなわち、浅い谷のコンターに直交するように計画された配置をしている。しかし、ＴＰ５だけはまったく離れた位置に単独で築かれている。

ＴＰ１（第317図）

Ｄ―15グリッドに所在し、一番南に位置する陥穴である。規模は２ｍ×0.83mで、隅丸の東

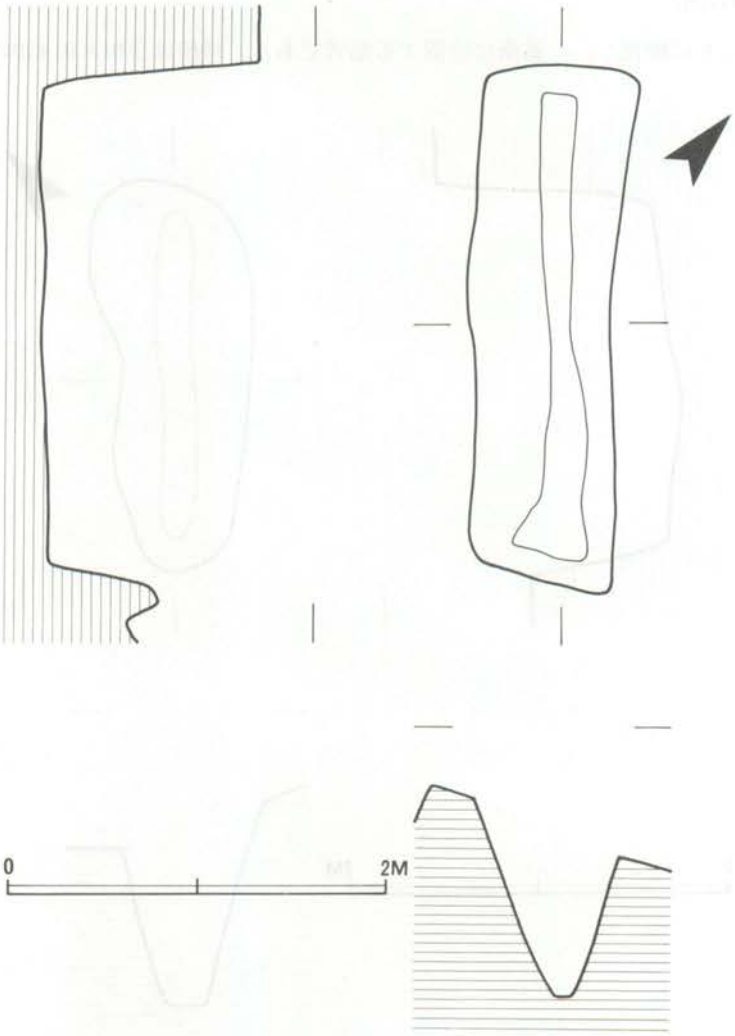


第317図　ＴＰ１実測図（1/40）

辺がややくずれた長方形を呈している。ＳＤ５に大きく切られているため、北西から南東にかけて大きく削平されている。深さは最深部で1.3mあり、中央部がやや凹んでいる。底面の幅は20cmと極端に狭くなっている。掘り込みは直線的で垂直に近い。覆土は黒褐色土の単一層である。

ＴＰ２（第318図）

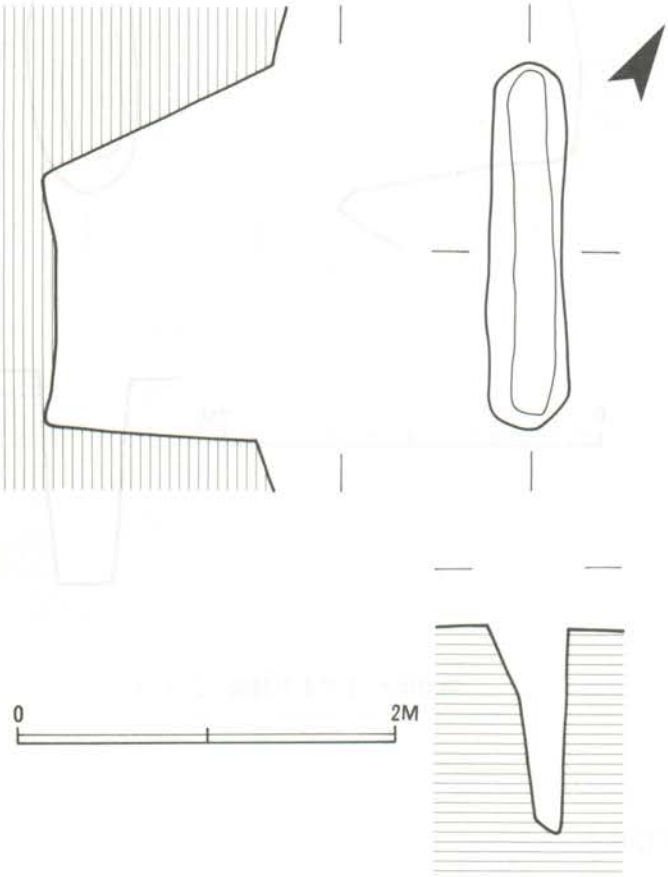
Ｃ―15グリッドとＤ―15グリッドにまたがって所在し、ＳＩ36、ＳＢ39、40に大きく削平されている。規模は2.67m×0.78mで、長方形を呈している。深さは1.15mで、底面はほぼ水平である。底面の幅は10～20cmで、壁の立ち上がりは直線的できれいなＶ字形を呈している。覆土は黒褐色土の単一層である。



第318図　ＴＰ２実測図（1/40）

ＴＰ３（第319図）

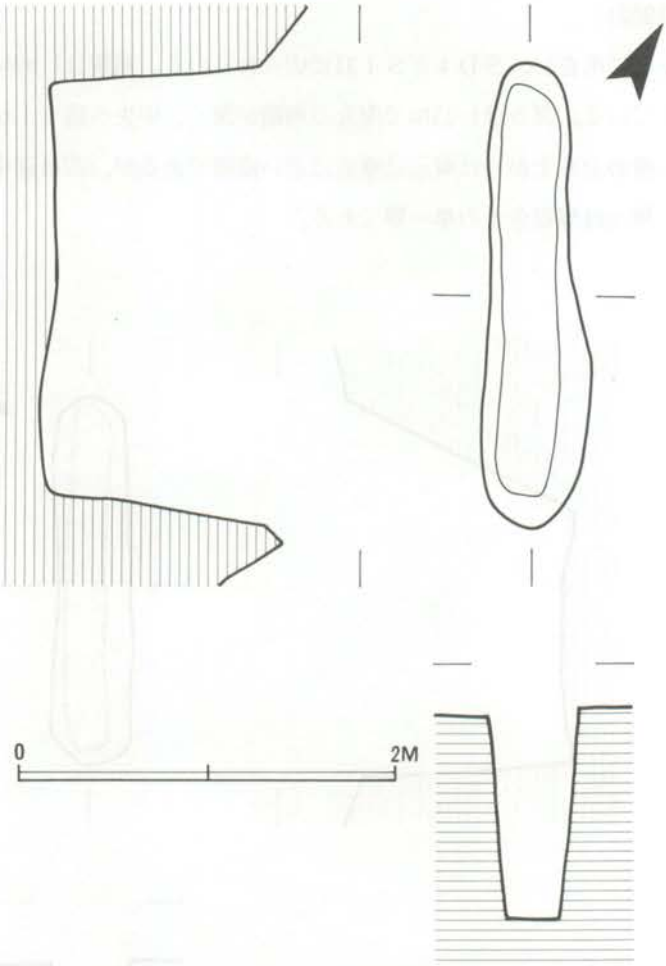
Ｃ―14グリッドに所在し、ＳＤ４とＳＩ31に切られている。規模は1.89m×0.38mで、隅丸の長方形を呈している。深さは1.23mで南北の両端が深く、中央へ盛り上がっている。底面の幅20cm前後で、壁の立ち上がりは東辺は垂直に近い直線であるが、西は途中から大きく開く形態をしている。覆土は黒褐色土の単一層である。



第319図　ＴＰ３実測図（1/40）

ＴＰ４（第320図）

Ｃ―14グリッドに所在し、ＴＰ３の北東に主軸を同じくして位置している。ＳＤ４に大きく切られている。規模は2.38m×0.56mで隅丸の不整長方形を呈している。深さは1.3mで中央部が盛り上がっている。底面の幅は30cm前後で、壁の立ち上がりは直線的で垂直に近い。覆土は黒褐色土の単一層である。



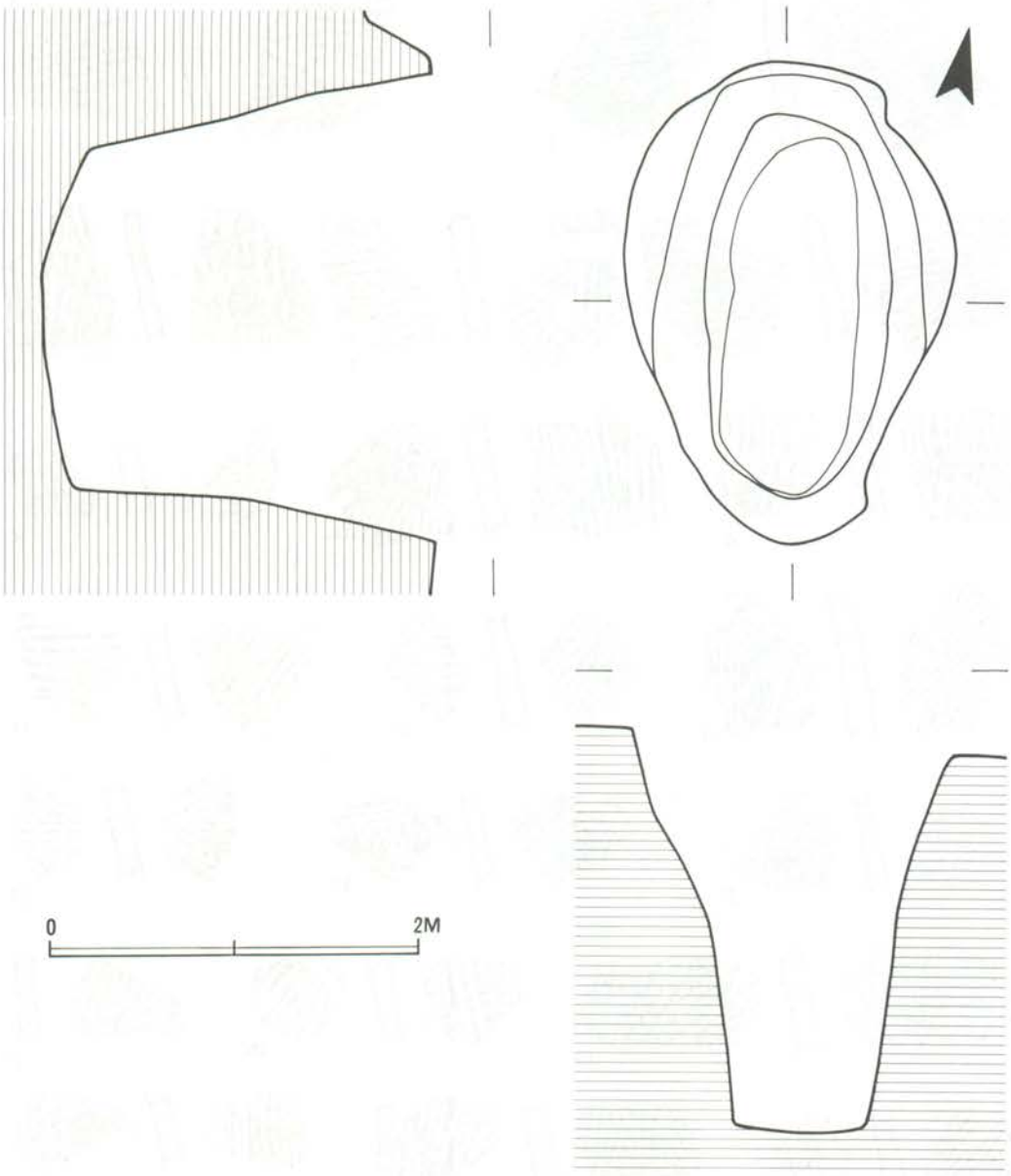
第320図　ＴＰ４実測図（1/40）

ＴＰ５（第321図）

調査区の東側であるＥ－11グリッドに単独で位置している。ＳＢ７に大きく削平されている。規模は2.56m×1.8mで、不整な長楕円形を呈している。深さは2.14mで中央部が凹んだ形態をしている。底面の幅は70cm前後で、壁の立ち上がりは直線的で垂直に近いが中程で大きく開く。西側の４基とはだいぶ趣きがちがうものであるが、覆土は黒褐色土の単一層である。

iii．縄文式土器・石器（第322～326図）

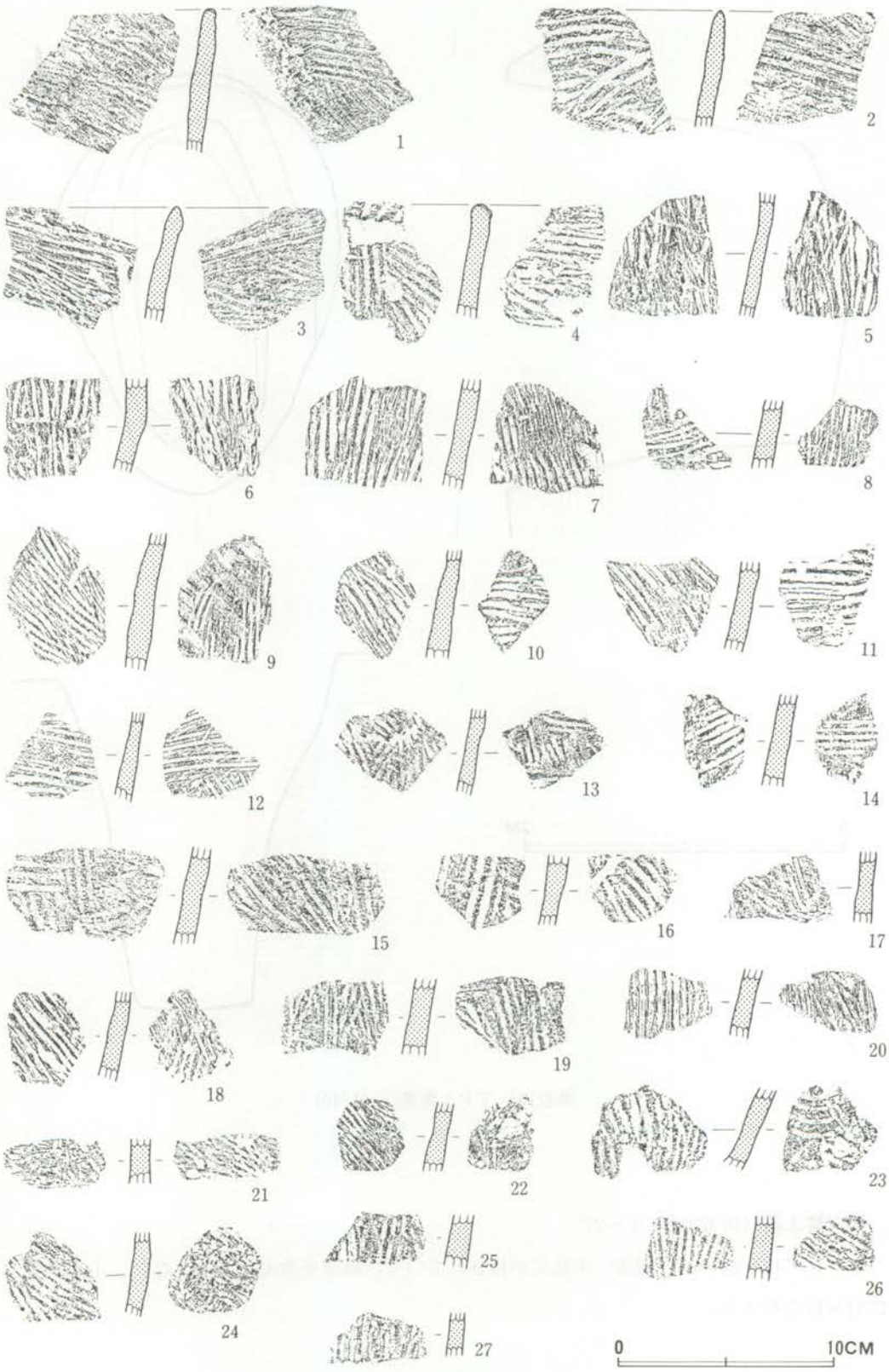
大畑Ⅰ遺跡から出土した縄文時代の土器と石器はここで一括して報告する。遺構に伴うものはまったくなく、すべてが表採品である。土器の分類は本報告書の他の章とも共通している。



第321図　ＴＰ５実測図（1/40）

第Ⅳ群土器（第322図　１～27）

１～16・18～24・26は両面に条痕文が施されている。繊維を含んでいる。なお、４は口唇上に刻み目を有する。



第322図　縄文式土器拓影図 ①（1/3）

第323図　縄文式土器拓影図 ②（1/3）

第Ⅴ群土器（第323図　28・29）

28は撚糸文地に半截竹管による横線文と波状文が施されている。

29は貝殻腹縁文によりジグザグ文が施されている。浮島式に比定される。

第Ⅵ群土器（第323図　30～36、39）

30・31は平行沈線区画による磨消懸垂文が施されている。

32は口縁に沿って指による凹線文が施されている。それ以下は単節ＬＲの斜縄文である。

33～36・39は微隆起線区画による磨消縄文が施されている。

34は波状口縁を呈する。

第Ⅶ群土器（第323図　37・38・40～97・106～121）

１類土器（37・38）

称名寺式に比定されるものを本類とした。

37・38は平行沈線区画による磨消縄文が施されている。

２類土器（40～54）

堀之内式に比定されるものを本類とした。

40～48は口縁部片で、49～54は胴部片である。46は半截竹管文が、53は櫛目文が施されている。

３類土器（55～89）

加曽利Ｂ式に比定されるものを本類とした。

55～57・68は沈線区画による横位の磨消縄文が施されている。

58・59は条線文が施されている。

60～67は口縁に沿って連続刺突文と沈線文が施されている。その他の文様は65だけをのぞいてすべて縄文である。65～67は波状口縁を呈する。

69は格子状の条線文が施されている。

70・87は粗雑な斜縄文が施されている。

71～79・81～84は口縁に沿って指頭圧痕が施された隆帯が貼付されている。他の文様は71～74・76・77・84が斜縄文で、75・78・81・83が斜縄文地に条線文が施されている。

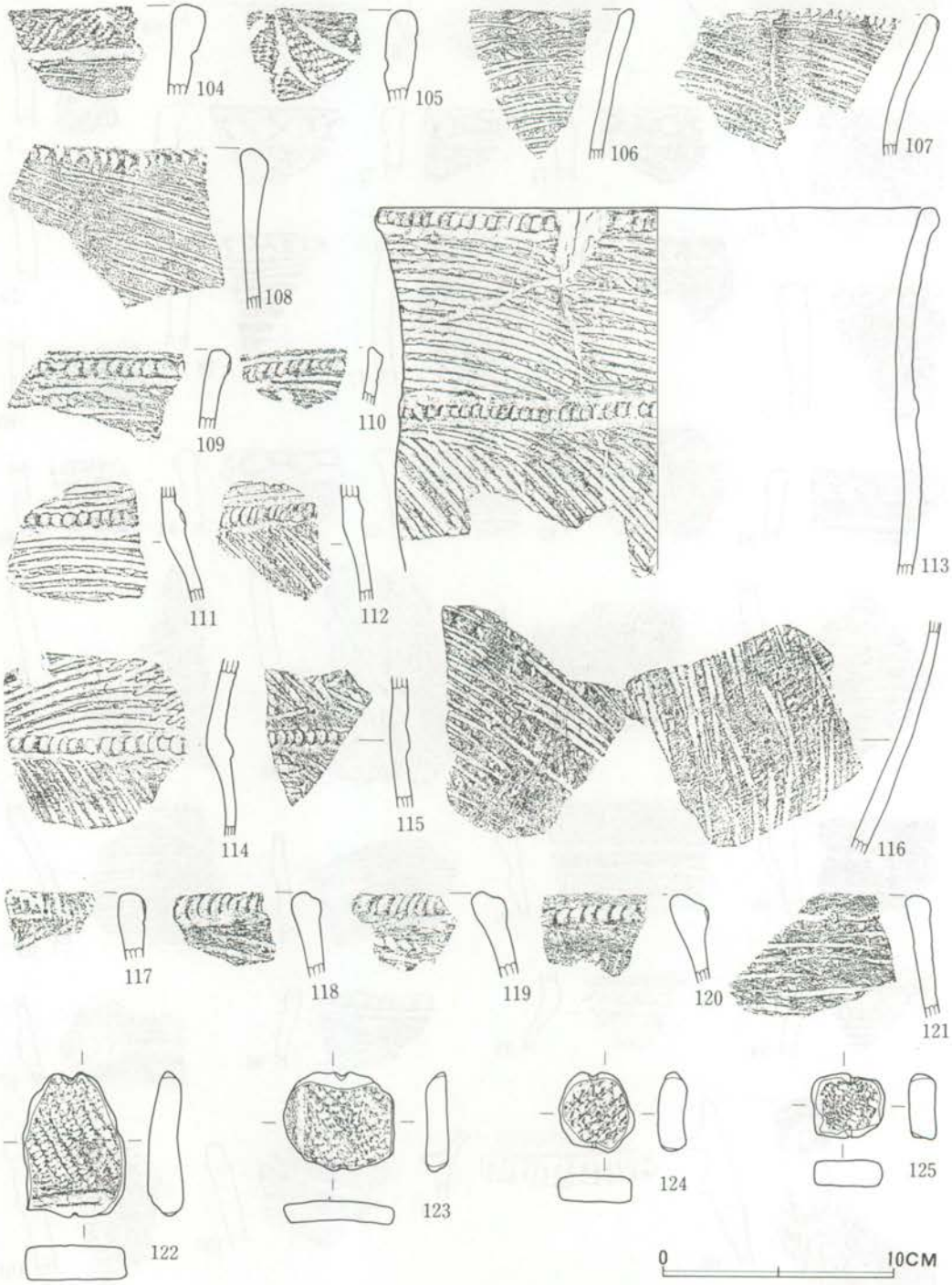
80・85・88・89は縄文地に格子状の条線文が施されている胴部片である。88・89は同一個体で、条線文は半截竹管で施文している。

86は縄文地に横位の条線文が施されている。

４類土器（90～97・106～121）

安行Ⅰ、Ⅱ式に比定されるものを本類とした。

第324図　縄文式土器拓影図 ③ (1/3)



第325図　縄文式土器拓影図 ④・土製品実測図 (1/3)

90・91は平行沈線区画による帯状縄文が施されている。

92・93は同一個体で、平行沈線区画による帯状縄文と条線文が施されている。

94～96は頸れ部に三角形の連続刺突文を有する。

97はブダ鼻状貼付文を有する。

106～121は条線文を地文としている。

107・108は口縁に三角形の連続刺突文が施されている。

109～105・117～120は指頭圧痕の施された隆帯が貼付されている。

第Ⅷ群土器（第324・325図　98～105）

１類土器（98～100）

安行Ⅲａ式に比定されるものを本類とした。

98は山形把手を有し、帯状縄文が施されている。

99は、刻み目のついた突帯を有し、その他は沈線区画による帯縄文である。

100は沈線区画が曲線的になる磨消縄文である。

２類土器（101～103）

安行Ⅲｂ式に比定されるものを本類とした。

101～103は沈線が曲線的に施文されている。

３類土器（104・105）

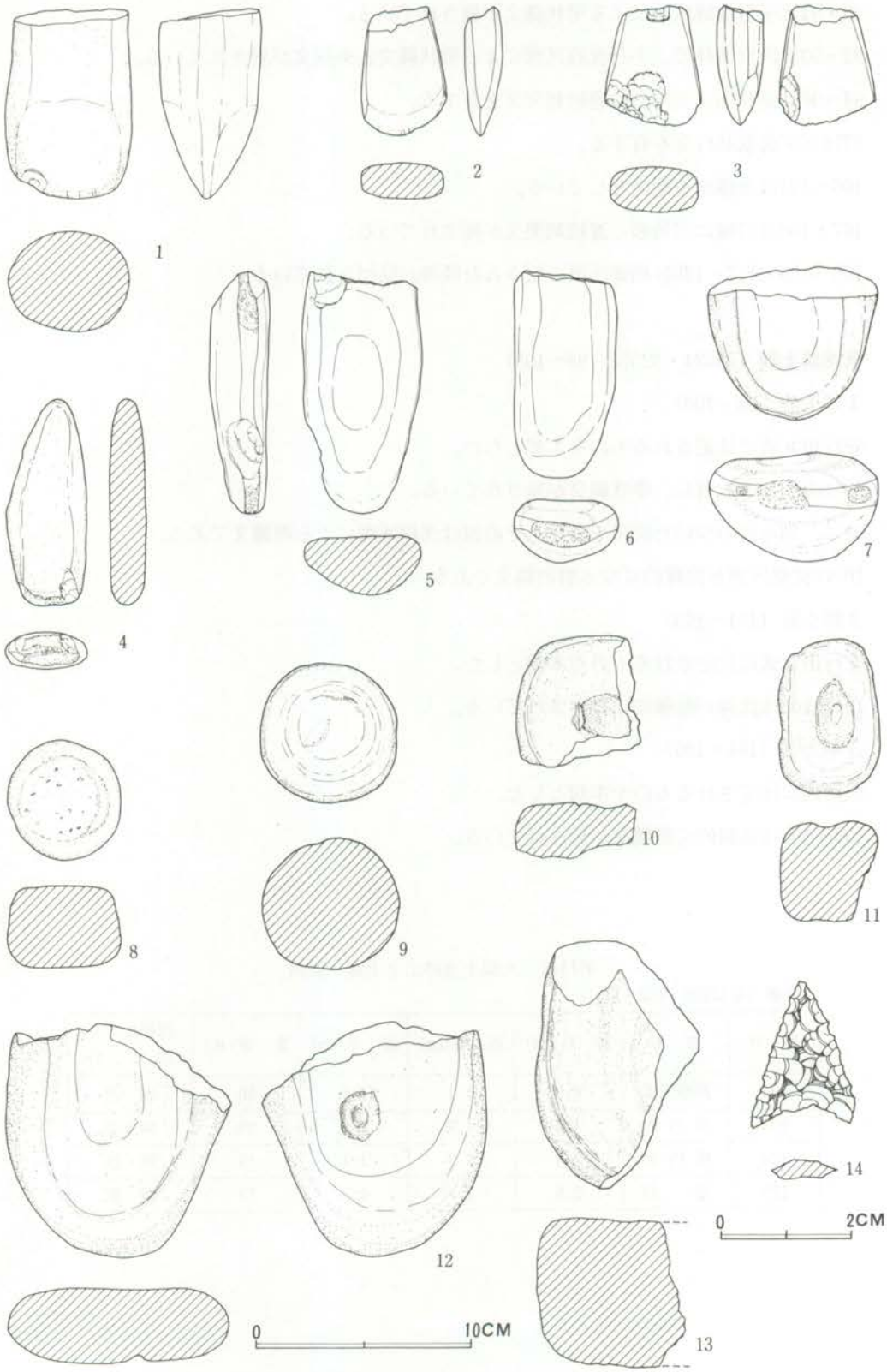
前浦式に比定されるものを本類とした。

104・105は曲線的に帯縄文が施されている。

第14表　大畑Ⅰ遺跡出土土錘一覧表

土錘（第325図　122～125）

番　号	器　形	器　長(cm)	器　幅(cm)	器　厚(cm)	重　量(g)	再利用した部　分
122	長楕円形	6.2	4.4	1.5	50	胴　部
123	楕 円 形	4.3	4.9	0.9	25	胴　部
124	楕 円 形	3.4	3.0	1.1	15	胴　部
125	方　　形	2.9	3.1	1.2	13	胴　部



第326図　縄文時代石器実測図（14は1/1，他は1/3）

石器（第326図）

縄文時代の遺物として土器の他に石器が出土している。しかしいずれも遺構に伴って出土したものではなく、表土層あるいは後世の遺構覆土中から散発的に出土したものである。

１～３は磨製石斧である。どれもが基部の途中で折れており完全な形で残っていない。１は石材に砂岩を用い、断面形が楕円形を呈し、刃部は蛤刃状となっている。いわゆる乳棒状磨製石斧の部類である。２、３は両刃となる定角式磨製石斧である。各面とも入念な研磨によって調整されているが、刃部はどちらかに寄って丸味をもつ。３の刃部には使用によるためと思われる剝離が認められる。また２が偏刃となっているのは、３のように破損した刃部を再調整したことによるかもしれない。石材は２が玄武岩、３が凝灰岩である。

４は敲石である。扁平な細長い礫の幅の広くなる端部に使用痕が残されている。他に手は加えられない。石材は玄武岩で器長9.3cm、厚さ1.6cmを測る。

５～７は磨石と敲石両方の使用が行われた石器である。３点とも途中で折れている。また断面が隅を丸くした三角形状を呈しており、平坦な面を磨面としているなど共通の特徴が認められる。磨面は他の部分と比べると光沢があるかのように滑らかになっている。５は先端部と側縁に敲石として使用した際に生じた敲打痕がみられる。６、７は先端部が主に使用されている。石材は５、６が砂岩、７が流紋岩である。

８、９は磨石である。８の断面形は隅丸の長方形となり、長辺側の両面は使用により平坦になっている。９は球形に近い形状となっている。２点とも石材は安山岩である。

10～12は凹石である。いずれも磨石から転用して凹石として使用したものである。凹みは10、11はあまり深くならず、磨石としてもかなり使用されたと思われる12がやや深く凹んでいる。石材は３点とも安山岩である。

13は石皿の破片と考えられるが、器厚がかなり厚くなることと、古墳時代にも同様な石器が認められるため縄文時代の石皿と断定し難いところもある。石材は安山岩であるが多孔質のものではない。

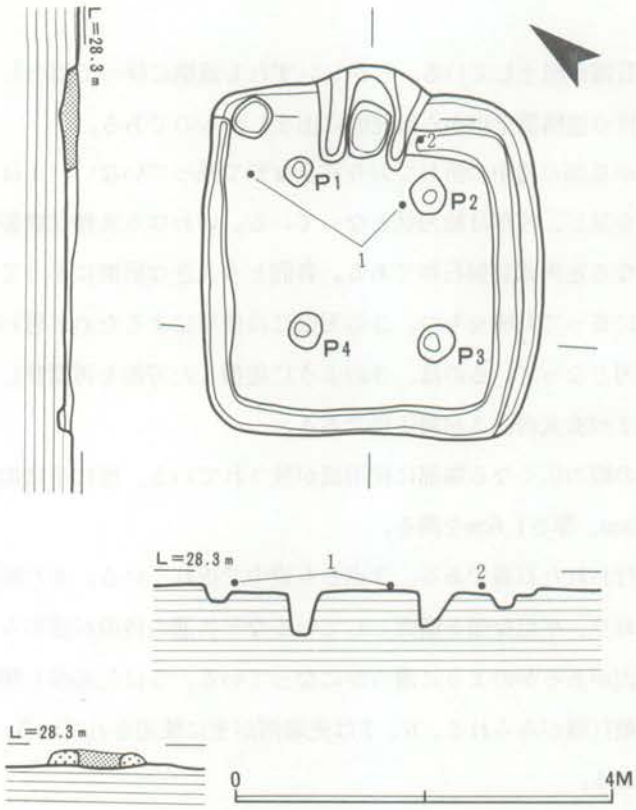
14は黒曜石製の石鏃である。両面から調整され基部に抉りが入るがそう深くならない。

Ｃ．古墳時代

ｉ．竪穴住居跡

ＳＩ７（第327～329図、ＰＬ155－１）

調査区のほぼ中央、Ｅ－11グリッドに位置し、ＳＩ８の南辺に接し、ＳＢ９に切られている。規模は3.8m×3.6mの南北にやや長い隅丸方形を呈し、主軸はＮ－54°－Ｅである。壁の遺存状



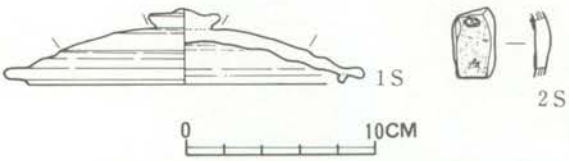
第327図　SI7 実測図（1/80）

態はきわめて悪く、平均12cm程の高さである。壁溝は北辺の西側半分がないほかはすべてある。ただ、北辺の東側半分と東辺の壁溝は壁よりも28cm～14cmなかほどに設けられている。幅は36cm～20cmで、深さは12cm程ある。柱穴は4本検出され、P_1がややずれているほかは、ほぼ1.4m間隔で並んでいる。規模はP_1がやや少さく、24cmであるが、他は38cm前後である。深さは44cm前後である。床面はソフトローム面を利用し、あまり踏み固めていないため、非常に軟弱である。

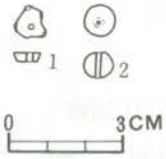
カマドは北辺中央に構築されている。規模は全長112cm、幅108cmである。袖は砂質粘土を15cm程積み上げている。天井部は完全に崩落していた。掘り方は幅122cm、壁外に28cm程に弓状に掘り込んだもので、立ち上り傾斜は40°である。燃焼部の床面への掘り込みは10cmほどあり、擂鉢状を呈している。燃焼部には焼土、ロームブロックがかろうじてある。

覆土は単純な1層である。

遺物は土器と石製品、土製品が出土しているが、量的にはきわめて少い。1は須恵器の蓋であり、明瞭なかえりを有している。2は須恵器杯の破片であるが、内面に銅滓が付着しており、緑青が浮きでている。石製品は滑石製の臼玉が1点出土した。他に土製品として小形の丸玉が1点出土している。



第328図　SI7 出土土器実測図（1/4）

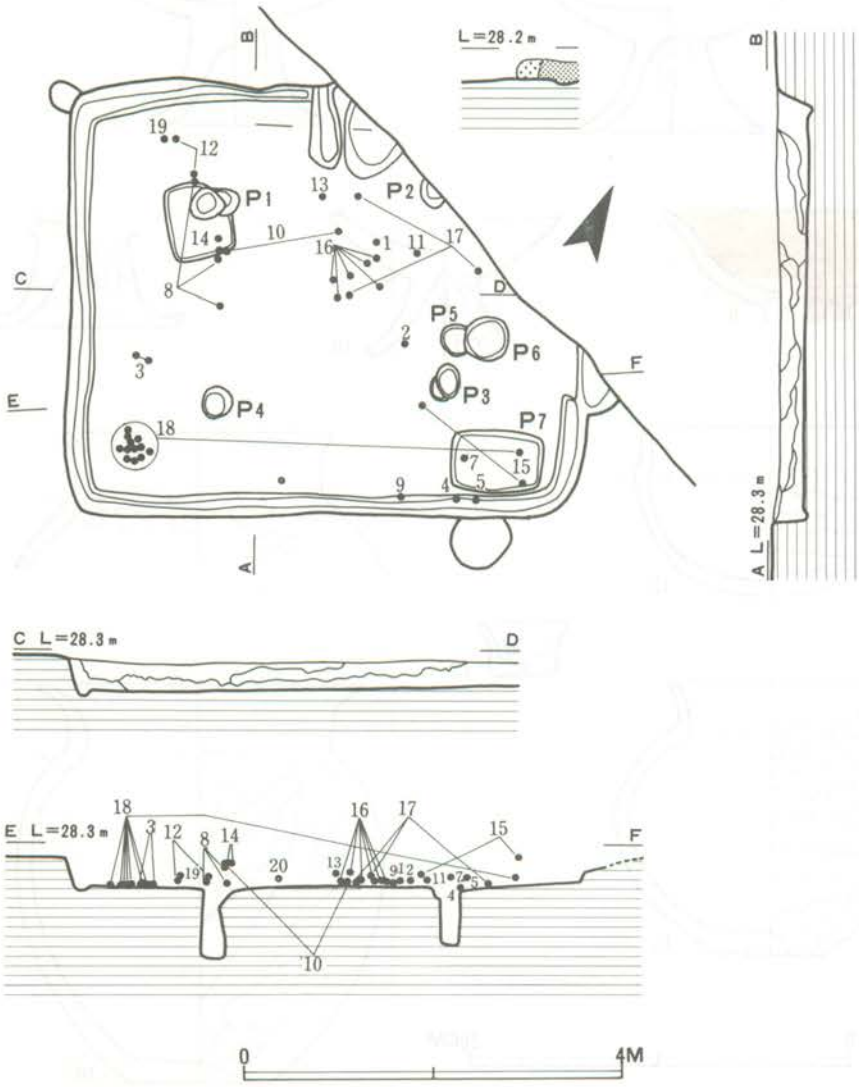


第329図　SI7 出土石・土製品実測図（1/2）

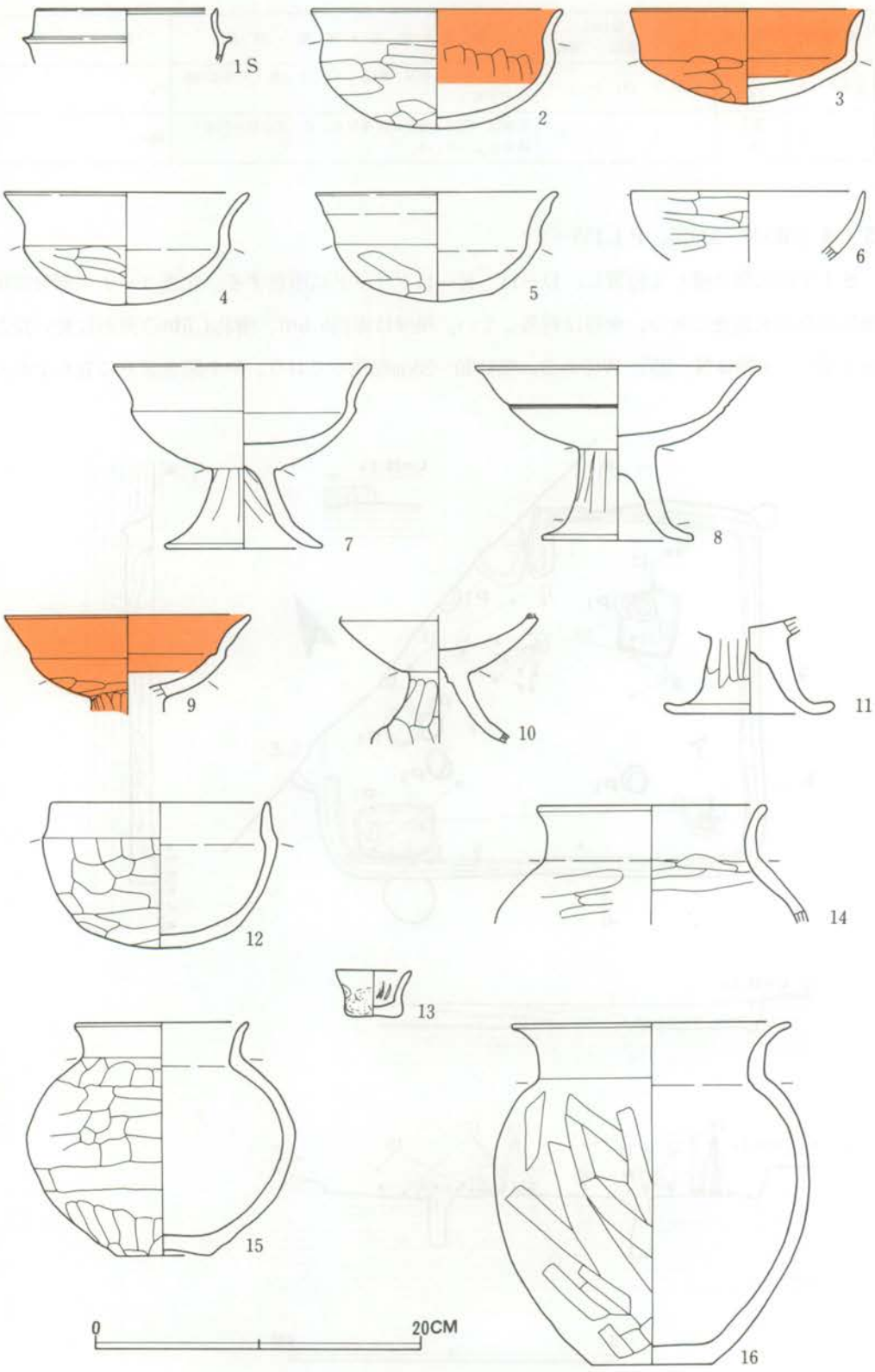
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ７－１	蓋 (S)	(19) × (4) ×	黄褐色、長石・石英・雲母、不良、？－Ｒ－天井部回転ヘラケズリ	⅓
－２	蓋？ (S)	× ×	灰褐色、良好、内面に銅澤付着、又一部に銅も付着し、緑青をふいている。	破片

ＳＩ８（第330～333図、ＰＬ155－２）

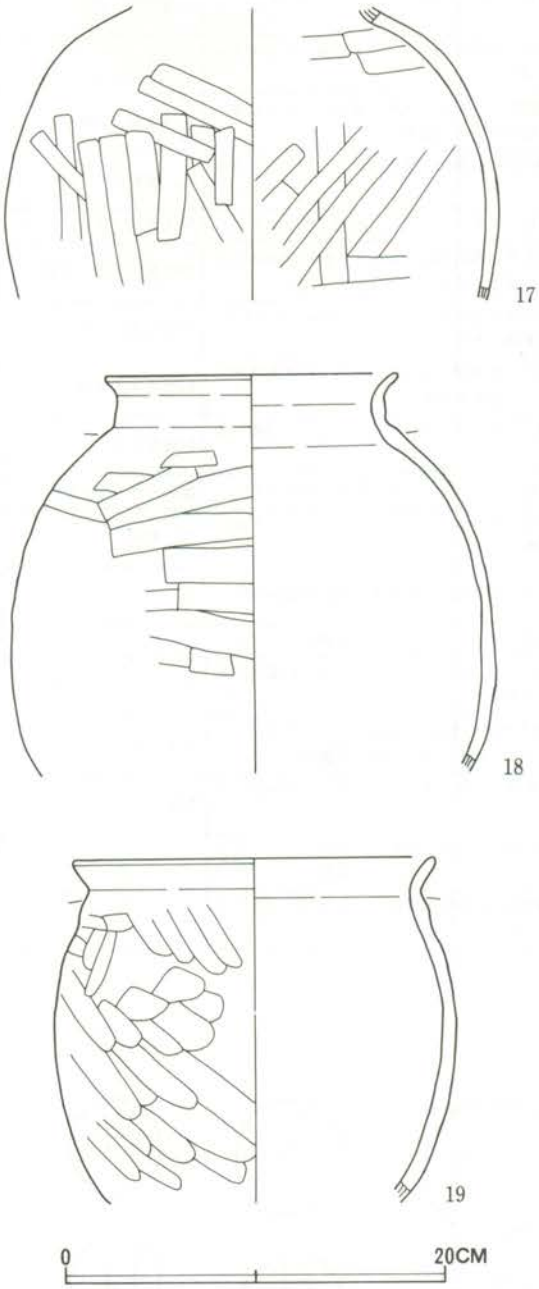
ＳＩ７の北側に接して位置し、Ｄ－11、Ｅ－11グリッドに所在する。北東コーナー部分は用地外のため未調査であり、全容は判名しない。規模は東西5.5m、南北4.5mの東西に長い長方形を呈し、主軸はＮ－25°－Ｗである。壁は30～38cm程残っており、やや開きぎみに立ち上がっ



第330図　ＳＩ８実測図（1/80）



第331図　SI8出土土器実測図 ①（1/4）



第332図　SI８出土土器実測図 ②（1/4）

ている。壁溝はおそらく全周していると思われる。幅は20～38cmで、深さは６～10cmである。柱穴は４本検出されたが並び方はやや不ぞろいである。規模は径30cm前後、深さ60～75cmある。P_1とP_3はそれぞれ建替の痕跡がある。P_6はＳＢ８の掘方であるがP_5は不明である。P_7は貯蔵穴である。規模は100cm×70cmの長方形を呈し、深さ60cmである。床面はソフトローム面を利用して踏み固めているが全体に軟弱である。

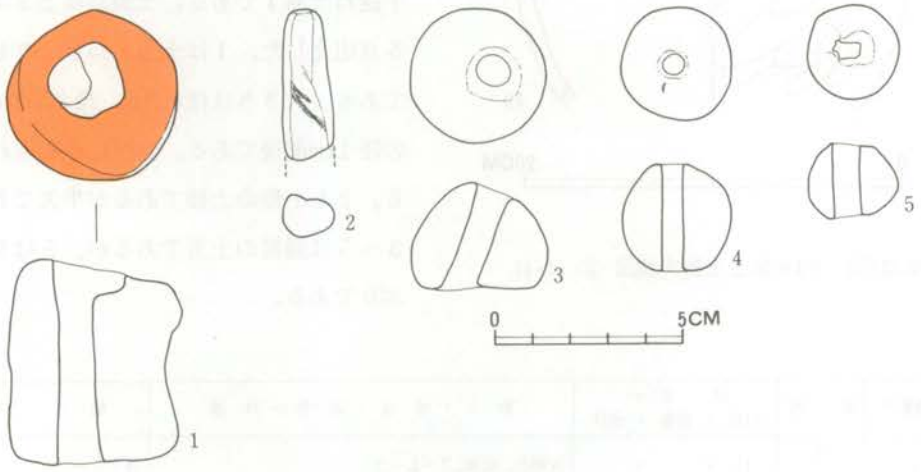
カマドは北辺中央に構築されている。右袖は未調査区に入っているため不明である。袖は20cm程砂質粘土を積み上げて構築している。床面への掘り込みは若干あるが、あまり焼土は含まれていない。

覆土は４層前後に分層できるが、あまり意味を見出せない。

遺物は多量の土器と土製品である。遺物の出土傾向はカマド前面に集中するが、他は散乱しており、全面にほぼ認められる。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯１、杯５、高杯５、広口壺２、甕５、手捏ね土器１である。土製品は土玉ばかり５点出土した。１は土玉というよりも土錘である。大きさは径4.2cm、長さ5.7cm、孔の径１cm前後である。全面に赤彩されている。２も小形の土錘であるが半欠である。３～５は通常の土玉であるが、５はやや小ぶりである。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ８－１	杯 （S）	11　×　　×	灰褐色、堅緻、？－Ｌ－？	体上半⅙

−2	杯	15.4 × 7.1 ×	黒褐色、良好、体部内外面ともにヘラケズリの後ヘラミガキ	ほぼ完形、赤彩
−3	杯	14.2 × 5.6 ×	赤褐色、良好、体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ・体部内面ヘラケズリ	⅔、赤彩
−4	杯	15 × 6.6 ×	赤褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	ほぼ完形、赤彩
−5	杯	14.9 × 6.4 ×	赤褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ヘラケズリの後ヘラミガキ	⅔、赤彩
−6	杯	14.4 × ×	赤褐色、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	体上半¼、赤彩
−7	高杯	15.7 × 11 × 9.6	赤褐色、良好、杯体部内外面ともヘラミガキ、脚部のヘラケズリの後内面上半を除きヘラミガキ	口縁部⅓欠失、赤彩
−8	高杯	17.5 × 10.4 × 9.2	茶褐色、良、口縁部を除き、ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面の器面剝離が進行	杯部⅓欠失、赤彩
−9	高杯	15 × ×	茶褐色、良好、杯体部内面ヘラミガキ・杯体部外面以下ヘラケズリの後ナデ調整	脚部欠失、赤彩
−10	高杯	× × 8.4	赤褐色、良、全面ヘラケズリの後・杯部および脚内面ナデ調整	口縁部欠失
−11	高杯	× × 10.4	赤褐色、良好、ヘラケズリの後裾部のみヨコナデ	脚部のみ¾、赤彩
−12	広口壺	13.2 × 8.7 ×	赤褐色、良好、体部ヘラケズリの後外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	⅔、赤彩
−13	手捏ミニチュア	4.6 × 2.7 × 3	淡黄褐色、良、内外面ナデ調整・内面に瓜痕が残る	⅔
−14	甕	14 × ×	赤褐色、良好、体部ヘラケズリの後外面ヘラミガキ	口縁部¼
−15	広口壺	10.5 × 14.3 × 5.7	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部ヘラケズリの後底部および内面下半を除きヘラミガキ	½
−16	甕	17 × 21 × 7.2	赤褐色(内面黒褐色、全面に黒斑有り)、体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	ほぼ完形
−17	甕	× ×	赤褐色、赤色粒子、良、体部ヘラケズリの後外面ヘラミガキ	胴部⅓
−18	甕	15.4 × ×	赤褐色(内面黒褐色、外面に広範囲の黒斑)、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	⅙
−19	甕	19 × ×	茶褐色(内面暗褐色、外面黒斑有り)、良、体部ヘラケズリの後内外面ともヘラミガキ	½

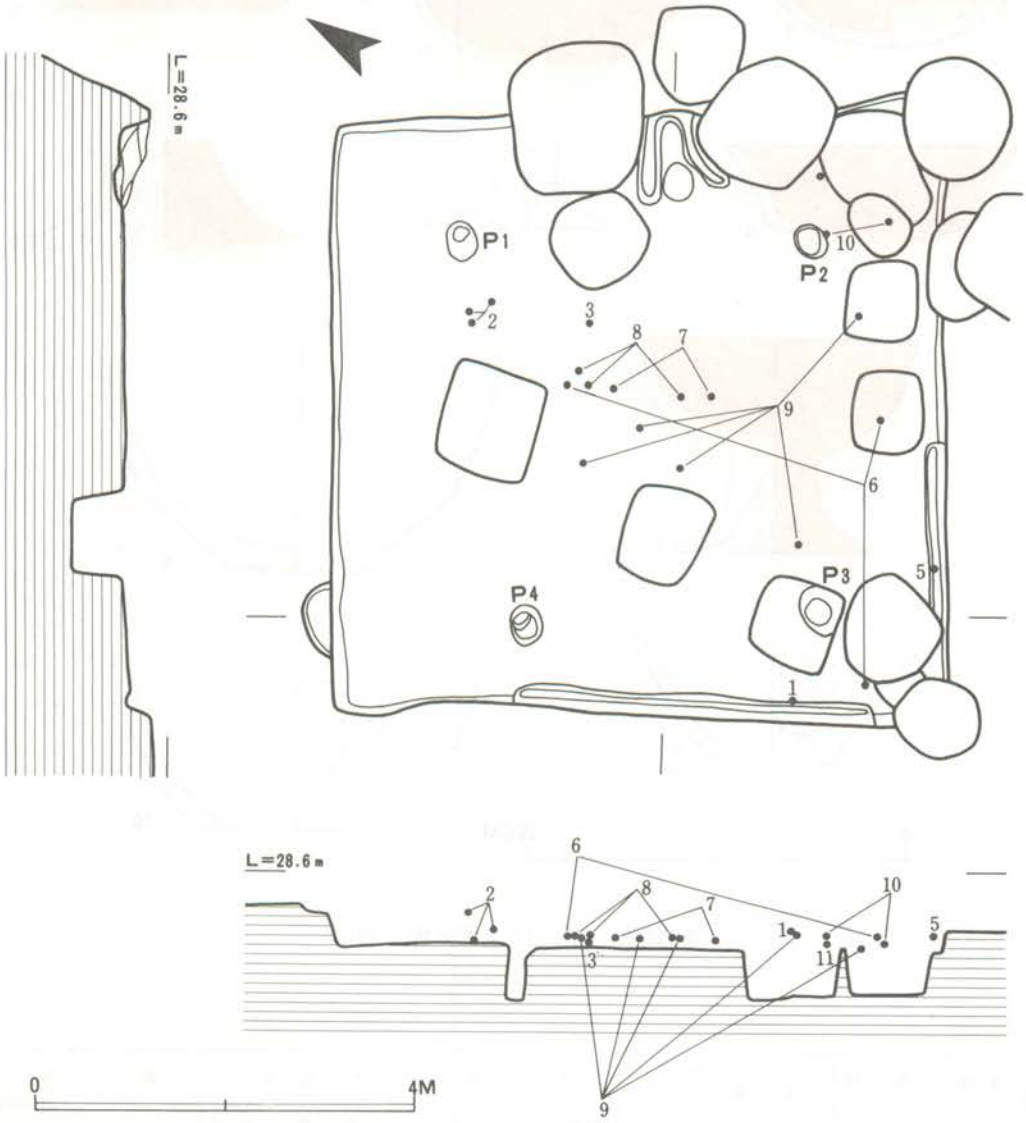


第333図　SI8出土土玉実測図（1/2）

ＳＩ９（第334～336図、ＰＬ156－１）

Ｄ－12グリッドに位置し、北、東辺を掘立柱建物に切られているために遺存状態はあまりよくない。規模は東西6.5m、南北6.2mの東西にやや長い方形を呈しており、主軸はＮ－59°－Ｅである。壁は20cm程の残りで、開きぎみに直線的に立ち上がっている。壁溝は南、東辺の一部にあるだけである。幅は30～20cm、深さ10cm前後である。柱穴は４本検出された。P_4がずれているほかは3.6m等間で並んでいる。径は35cm前後で、深さ60cm前後である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは北辺の中央に構築されている。ただし、ＳＢ４、28に攪乱されているために不明な点が多い。規模は全長、幅ともに１m前後あったと思われる。袖は砂質粘土で構築されている。

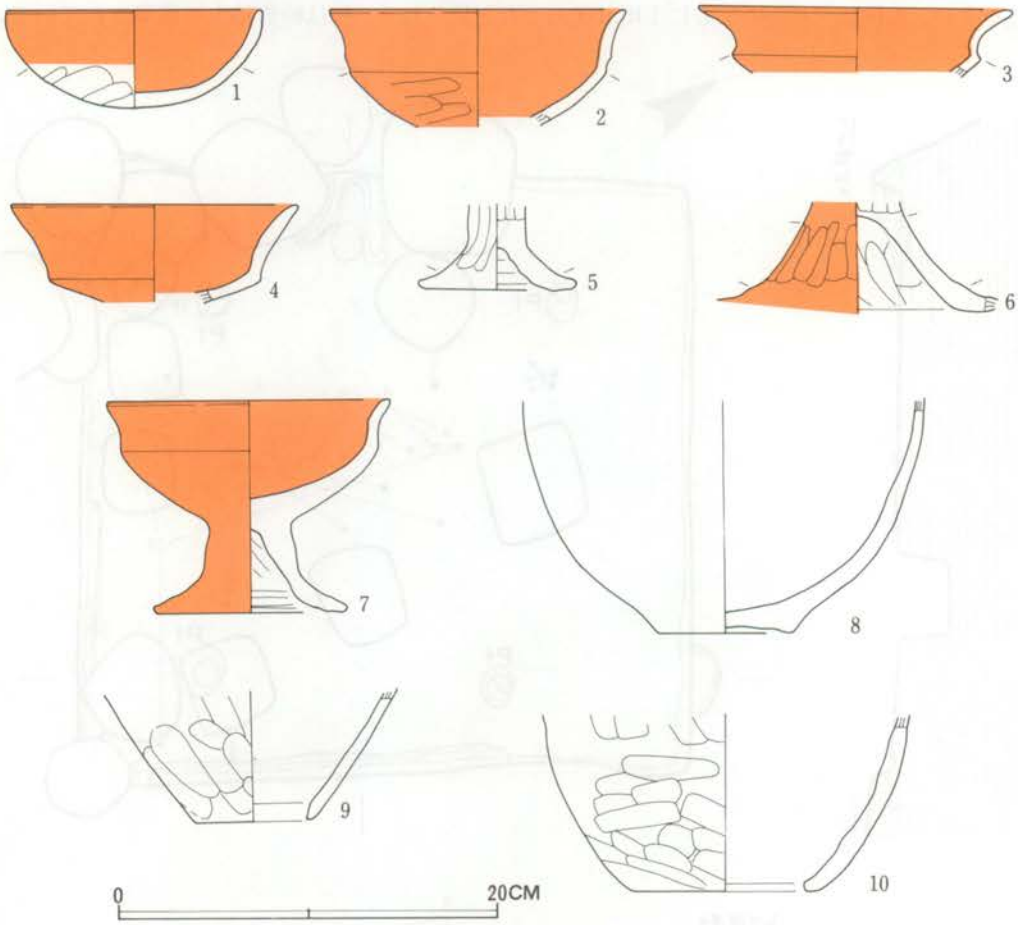


第334図　SI９実測図（1/80）

壁外への掘り込みは若干であり、立ち上がり傾斜は60°である。床面への掘り込みは10cm程であり、焼土が多量に堆積しており、またよく焼けていた。

覆土は単純な１層である。

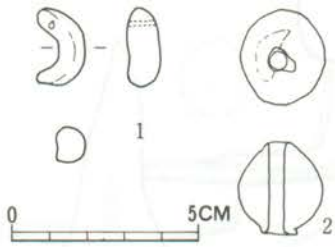
遺物は土器と土製品が出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯４、高杯３、甑２、甕１である。土製品は土製勾玉１と土玉１である。土製勾玉は全長２cm、幅８mmの小形のものであるが、頂部には穿孔もしてある。



第335図　SI９出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ９－１	杯	13.4 ×　　×	淡黄褐色、良好、ヘラケズリの後体部内外面ヘラミガキ	⅓、赤彩

－2	杯	15.8 × ×	暗褐色、不良、体部外面ヘラケズリの後ナデ調整	⅓、赤彩
－3	高　杯	16.6 × ×	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ	杯口縁部¼、赤彩
－4	高　杯	15.2 × ×	淡黄褐色、良、ヘラケズリの後部内外面ともにナデ調整	杯部のみ、⅓、赤彩
－5	高　杯	× × 8.4	茶褐色、良、ヘラケズリの後、ナデ調整	脚部のみ
－6	高　杯	× ×(14.8)	淡黄褐色、良、裾部を除きヘラケズリの後ナデ調整	脚部のみ、赤彩
－7	高　杯	15 × 11 × 10.2	茶褐色、良好、口縁部・裾部を除きヘラケズリの後ヘラミガキ	⅔、赤彩
－8	甕	× × 7.2	暗褐色、良、ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	胴下半½
－9	甑	× × 6	茶褐色(黒斑有り)、良好、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	胴下部のみ
－10	甑	× × 8.6	黄褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後内面ヘラミガキ	胴下半⅙



第336図　ＳＩ９出土土製品実測図（1/2）

ＳＩ10（第337・338図、ＰＬ156－２）

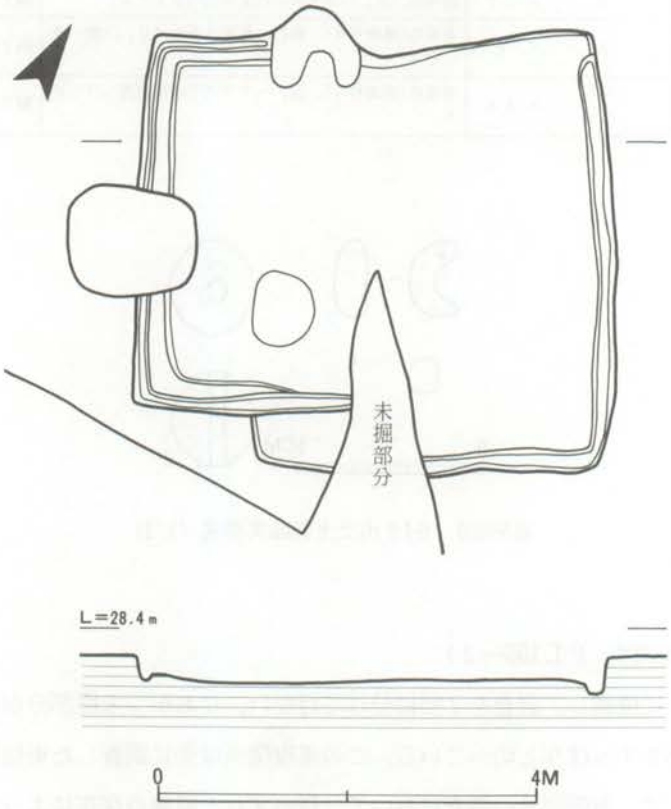
Ｅ－12グリッドに位置し、調査を２回に分けて行ない、なおかつ未掘部分があるため不明な点が多い。ＳＩ68をすっぽりと切っている。この重複関係は先に調査した東側部分において確認することができず、西側部分の調査において、辺のずれと壁溝の存在によってはじめてわかった。規模は3.9m四方の正方形を呈するものと思われる。主軸はＮ－27°－Ｗである。壁は20cm程の残りである。壁溝は西側半分にはあるが、東側では確認できなかったため全周していたかは不明である。幅は20cm前後で、深さ８cmである。柱穴はない。床面はソフトロームを利用してあまり踏み固めていないため軟弱である。この住居で気になるのは壁溝から10cm幅で５cmぐらい高くなっている部分があることである。

ちなみにＳＩ68の規模は南北4.5m、東西3.8mの南北に長い長方形を呈している。壁は25cm程残っており、垂直に近い立ち上がりをしている。壁溝は東辺と南辺の半分にみられる。幅は20～25cm、深さ15cm前後である。柱穴はない。床面もＳＩ10と同様に軟弱である。

カマドは北辺中央に構築されていたが、床面近くの痕跡しかとどめていないため、構造は不明である。全長、幅とも90cm前後であったと思われる。袖には砂質粘土が使用されたようである。掘り方は幅100cm、壁外へ36cm三角形に掘り込んでいる。床面への掘り込みはない。焼土、

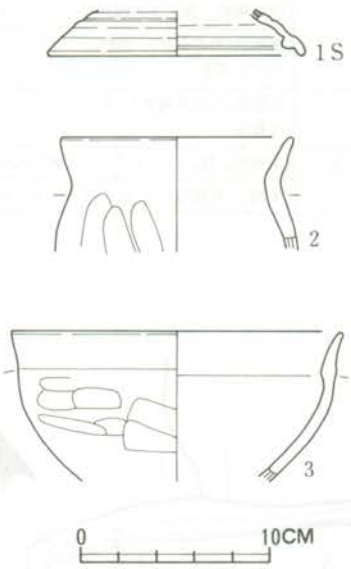
焼けた痕跡がほとんどない。

覆土は単純な1層である。遺物は土器が若干出土している。須恵器蓋1、小形甕1、鉢1である。



第337図　SI10実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI10－1	蓋 (S)	13.6 ×　　×	灰白色、堅緻、？－L－天井部回転ヘラケズリ	口縁部¼
－2	甕	12.2 ×　　×	黄褐色(外面スス付着)、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴上半⅙
－3	甕	17.4 ×　　×	暗褐色、不良、ヘラケズリの後体部内外面ナデ調整	⅙



第338図　SI10出土土器実測図（1/4）

ＳＩ11（第339～341図、ＰＬ157－１）

Ｄ－13グリッドに位置し、ＳＩ16を切っている。規模は南北5.2m、東西５mの北東コーナーでいびつになる方形を呈し、主軸はＮ－26°－Ｗである。壁の遺存はわりと良好で40cm前後である。立ち上がりは直線的だがゆるやかである。壁溝は全周している。幅25cm前後、深さ10cm前後である。柱穴は６本検出された。P_1～P_4は主柱穴で、P_5、P_6は支柱穴である。主柱穴はP_2がややずれるが、他は2.2m等間で並んでいる。規模は径45cm前後、深さ60cm前後である。P_5、P_6の支柱穴は支柱穴からずれた位置で不ぞろいである。平面規模は同様であるが、深さは10cmと非常に浅いものである。床面はソフトローム中であるが、暗褐色土とロームを踏み固めて非常に良好で堅緻である。

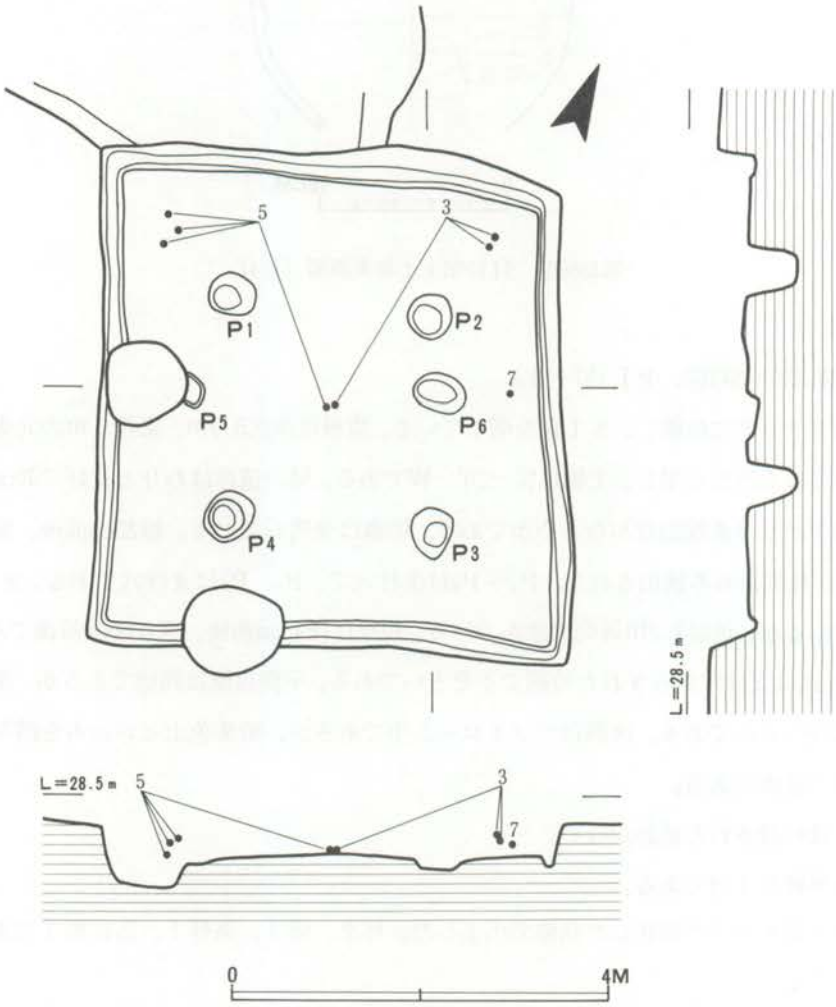
カマドは付設された痕跡がない。

覆土は単純な１層である。

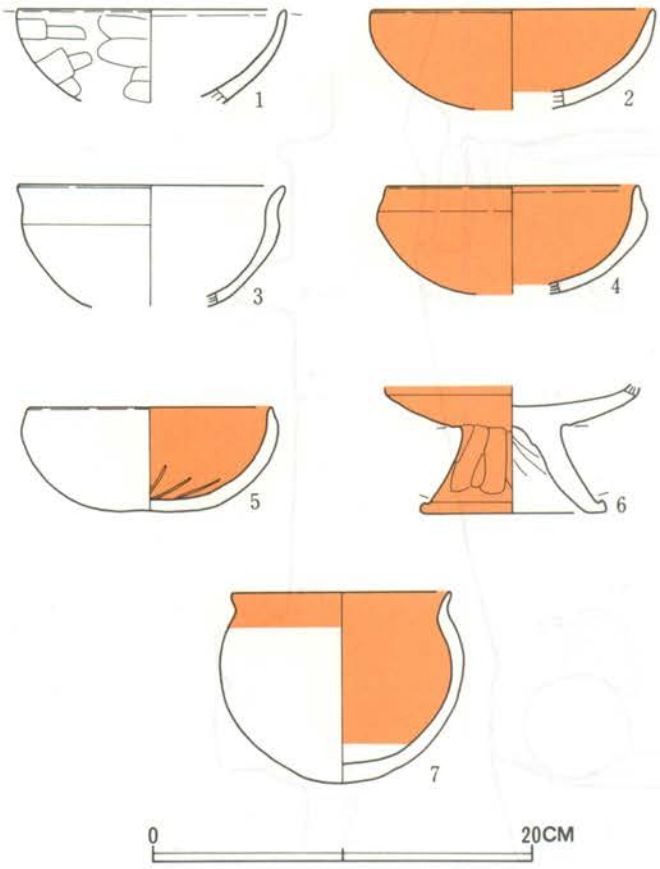
遺物は土器と土玉が散在した状態で出土した。杯２、鉢３、高杯１、広口壺１である。土玉は１点である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ11－1	杯	14.2 ×　　×	暗褐色、良、ヘラケズリの後外面ナデ調整・内面ヘラミガキ	¼

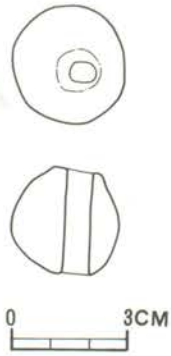
－2	杯	15 × ×	黄褐色(黒斑有り)、良、全面ヘラミガキ	⅕、赤彩
－3	椀	14 × ×	暗黄褐色、良、体部内外面ヘラミガキ	底部欠失、⅕、赤彩
－4	杯	13.4 × ×	黄褐色(黒斑有り)、良好、ヘラケズリの後体部内外面ヘラミガキ	⅗、赤彩
－5	杯	12.8 × 5.4 ×	黒褐色(内面茶褐色)、良、全面ヘラミガキ、放射状暗文有り	⅕、赤彩
－6	高　杯	× × 9.9	茶褐色、良、ヘラケズリの後脚内面を除きヘラミガキ	杯部¾欠、赤彩
－7	椀	11.5 × 9.8 ×	茶褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後全面ナデ調整	ほぼ完形、赤彩



第339図　SI11実測図（1/80）



第340図　ＳＩ11出土土器実測図（1/4）



第341図　ＳＩ11出土
土玉実測図（1/2）

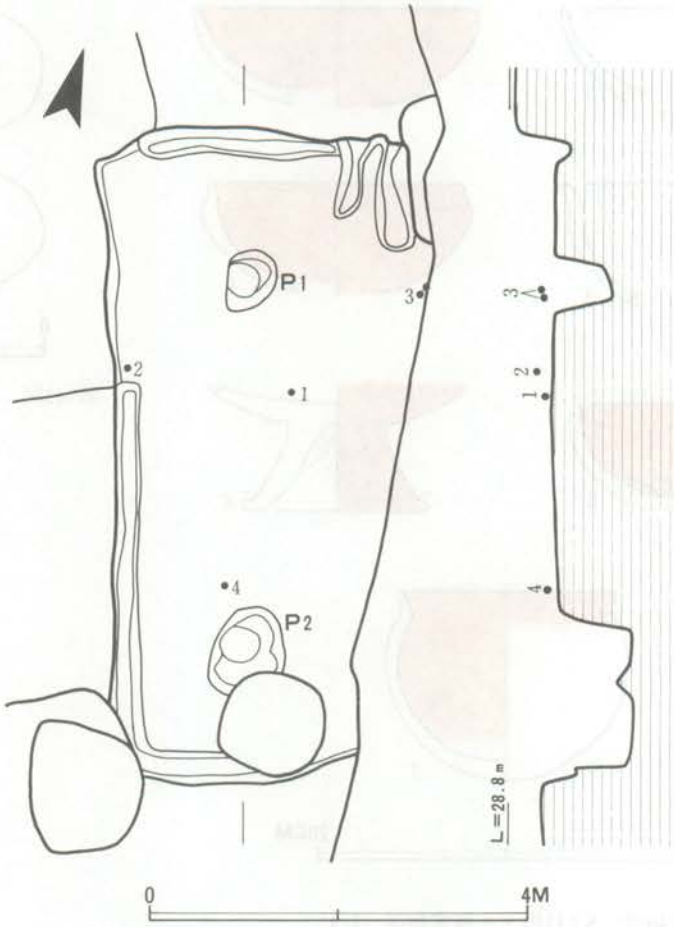
ＳＩ12（第342～344図、ＰＬ157－２）

Ｄ－12グリッドに位置し、ＳＩ13を切り、東側半分は未調査区のため全容は不明である。南北は6.8mを測るので、大形の正方形を呈するものなのであろう。主軸はＮ－14°－Ｗである。壁は40cm前後の遺存である。壁溝はＳＩ13と重複する部分は認められないが、他はある。幅は36～30cm、深さ15cm前後である。柱穴は２本検出されている。規模は大きくてP_1は径50cm、深さ60cm、P_2は径60cm、深さ80cmである。P_2は建替えの痕跡がある。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは北辺に構築されている。遺存度はきわめて悪い。規模は全長120cm、幅80cmである。袖は砂質粘土で構築されている。掘り方は幅20cm、壁外へ10cmほど半円形に掘り込んでいる。床面への掘り込みはない。しかし床面はよく焼けており、焼土も多い。

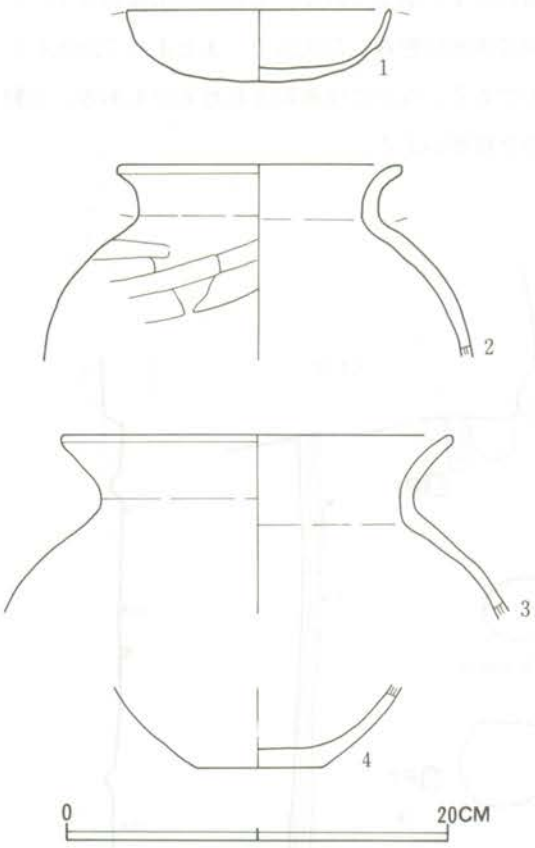
覆土は攪乱が多く、観察できなかった。

遺物は土器と土玉が散在した状態で出土した。土器は杯１、甕３である。土玉は１点である。

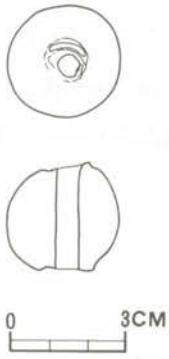


第342図　SI12実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI12－1	杯	13.8 × 3.7 ×	明茶褐色、砂粒、良、外面ヘラケズリ・内面ナデ調整	⅓
－2	壺	14.7 × ×	黒褐色(内面茶褐色)、良、ヘラケズリの後体部内外面ともナデ調整	胴上半⅙
－3	甕	20.4 × ×	黄褐色、砂粒、良好、体部外面ヘラミガキ・体部内面ナデ調整	胴上半¼
－4	甕	× × 6.4	黄褐色、良、外面ナデ調整、内面ヘラミガキ	底部¼



第343図　ＳＩ12出土土器実測図（1/4）



第344図　ＳＩ12出土土玉
実測図（1/2）

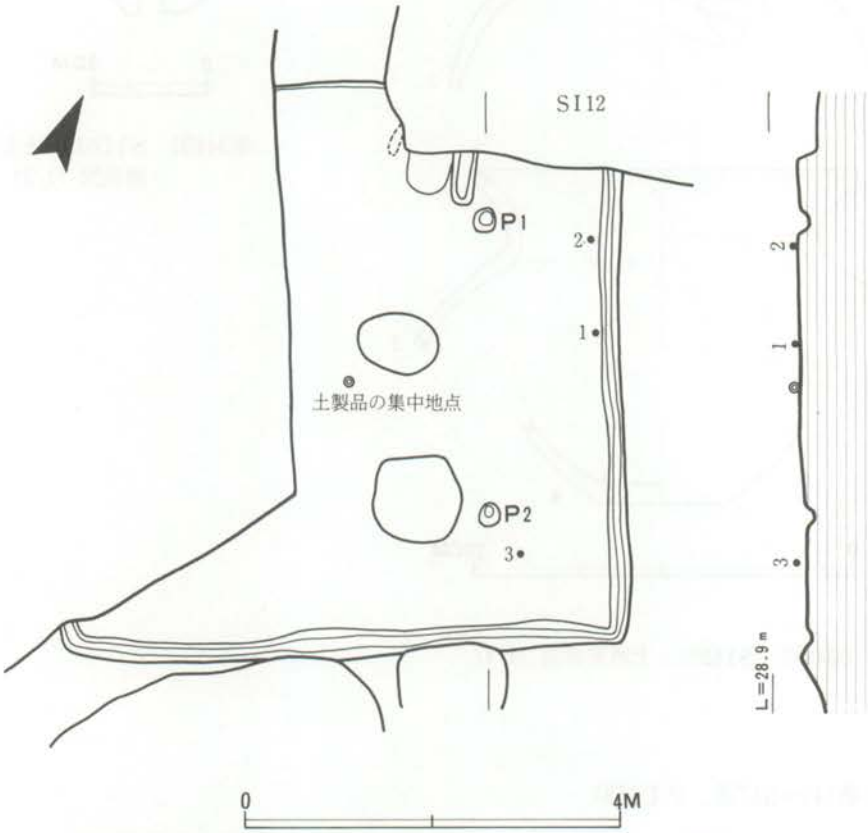
ＳＩ13（第345～347図、ＰＬ158）

Ｄ－12グリッドに位置し、南東コーナーはＳＩ12に切られ、北半分は未調査区のため、全容は判名しない。規模は６ｍ四方の正方形を呈し、主軸はＮ－24°－Ｗである。壁は遺存状態が悪く10cm程の残存である。壁溝は東、南辺にはあるが、北辺の残存部分にはみられない。幅は東辺が20cmで一定であるが、南辺は25～40cmと一定しない。深さは10cm前後である。柱穴は２本検出された。規模は小さく径22cm、深さ10cm前後である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため、堅緻である。この住居は火災にあったと思われ焼土のブロックが床面に散在している。炭化材も少量ではあるが散在している。

カマドは北辺の中央より東側によったところに構築されたと思われる。ＳＩ12によって切られた部分にカマドの袖の残存部分と思われる砂質粘土が若干残っている。また、床面はよく焼けており、焼土も堆積している。規模、形態は不明である。

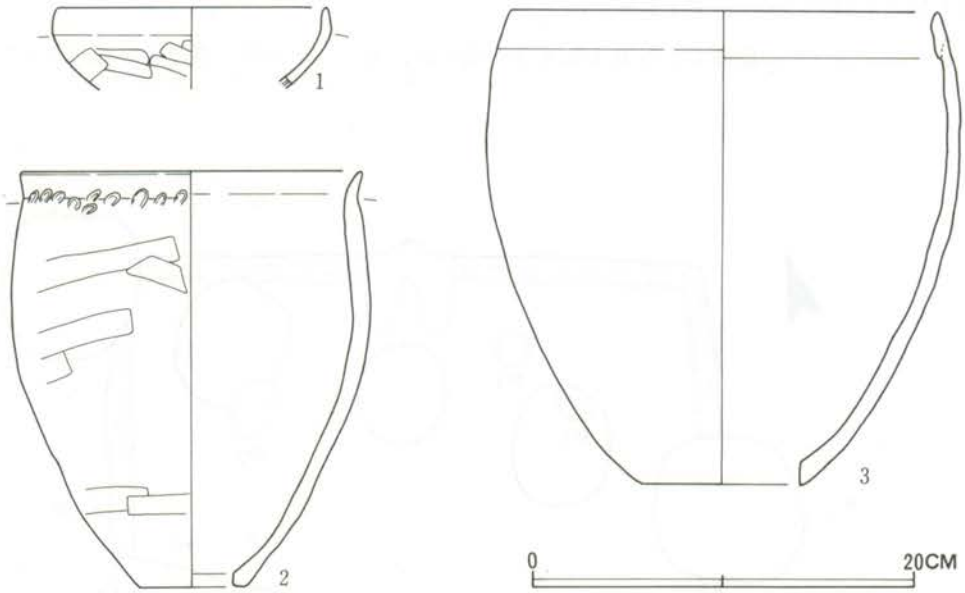
覆土は床面直上の１層が確認できただけである。

遺物は土器と多量の土製品である。土器は杯1、甑2である。土製品は土製勾玉7点、土製丸玉13点である。これらは住居のほぼ中央で床面に密着した状態で一まとまりで出土した。土製勾玉は全長2cm前後、径8mm前後のものである。なかには赤彩されたものもある。土製丸玉は径8mm前後のものと、1cm以上のものの2種類がある。

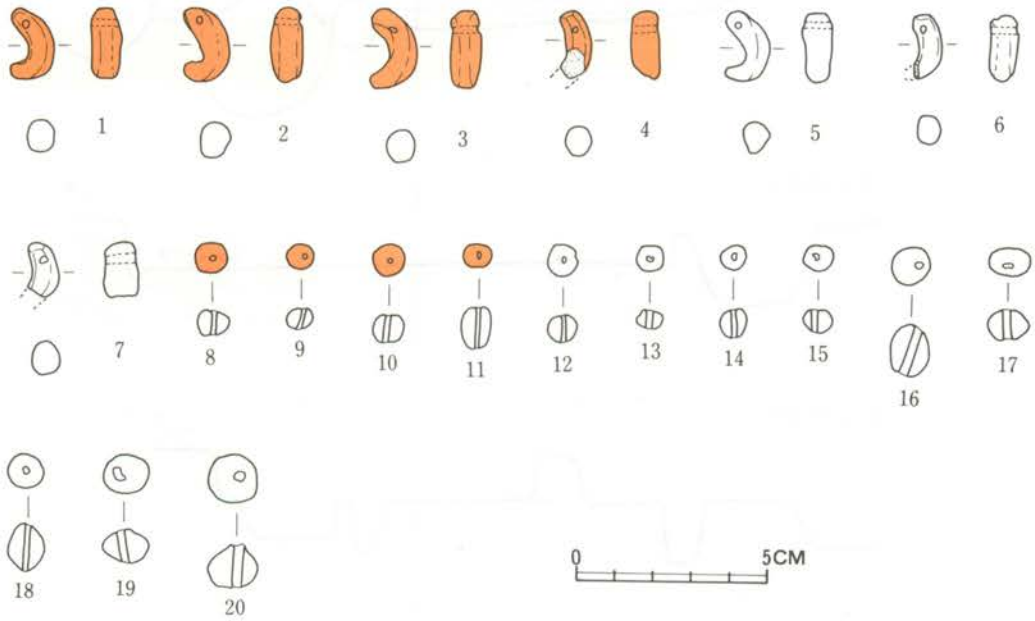


第345図　SI13実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI13－1	杯	14　×　　×	暗茶褐色(黒斑有り)、良、全面ヘラミガキ	1/6
－2	甑	17.8 × 21.4 × 5.6	暗褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後体部内外面ともナデ調整	1/2
－3	甑	22.4 × 24.4 × 8.2	黄褐色(黒斑有り)、良、体部内外面ともにヘラミガキ	1/4



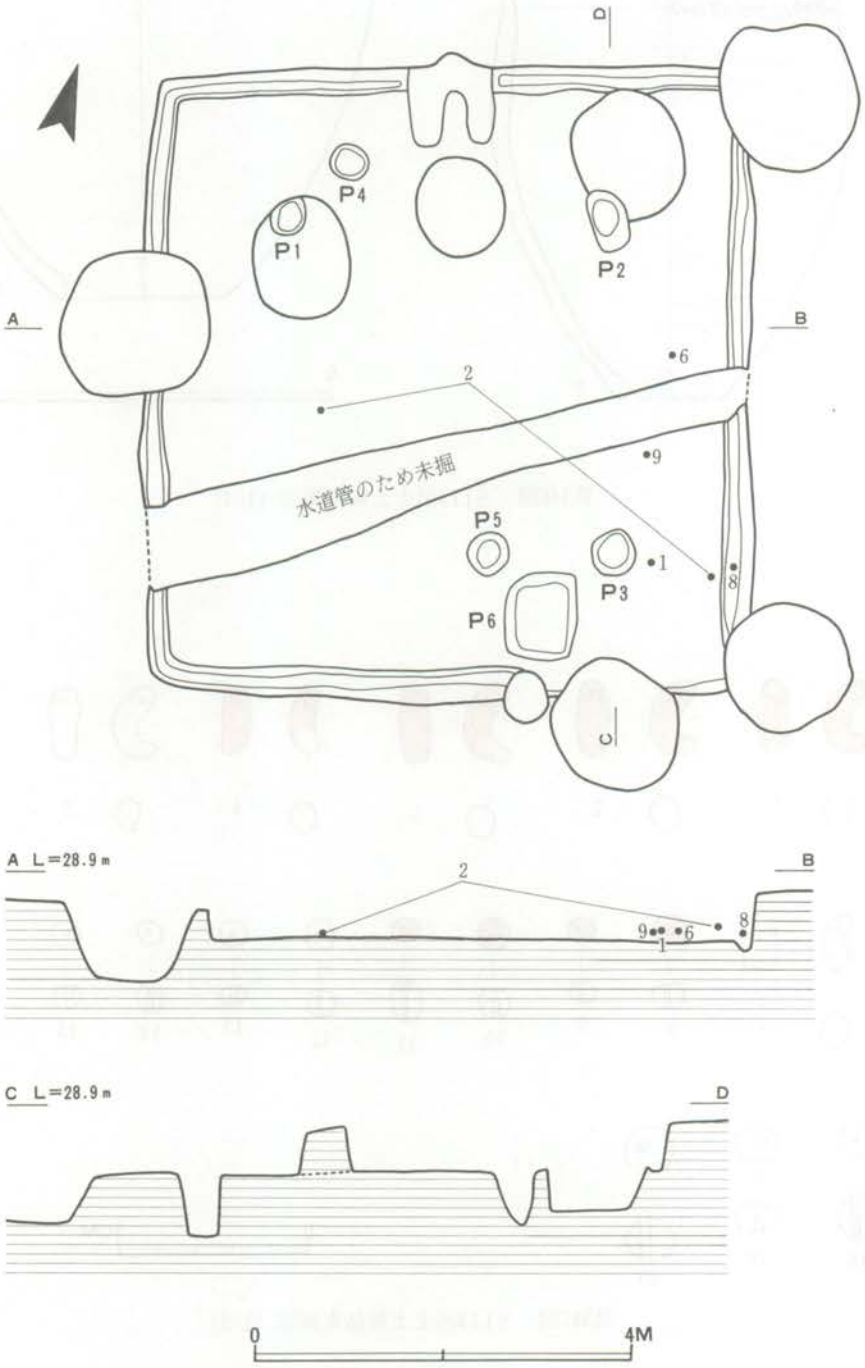
第346図　SI13出土土器実測図（1/4）



第347図　SI13出土土製品実測図（1/2）

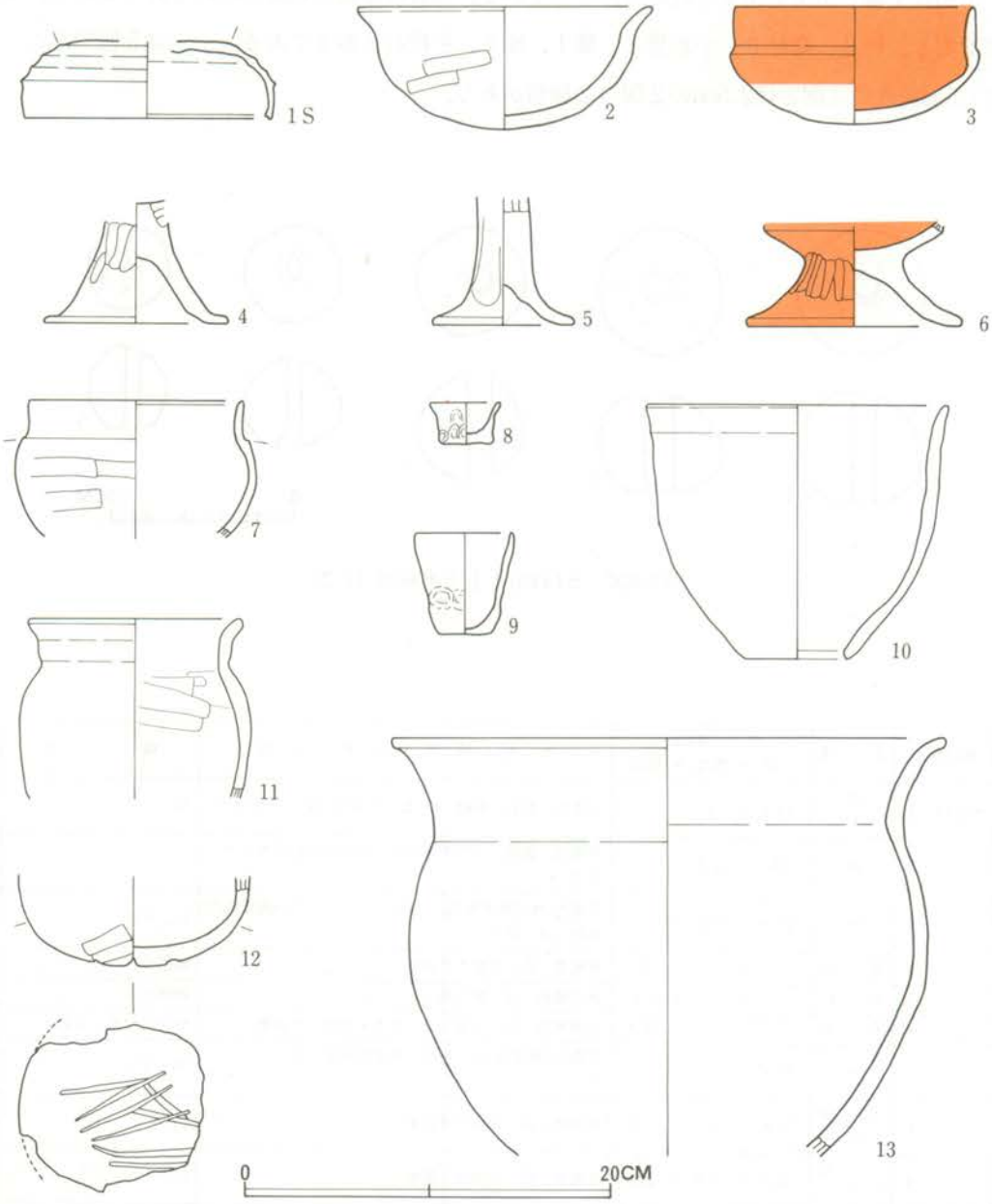
ＳＩ14（第348～350図、ＰＬ159－１）

Ｄ－13グリッドに位置し、ＳＢ１に大きく切られ、またほぼ中央に水道管が埋設されている



第348図　ＳＩ14実測図（1/80）

ために未掘部分もあるため、不明な点が多くある。規模は南北6.6m、東西6.4mの南北にやや長い方形を呈し、主軸はN－16°－Wである。壁はよく残っており、40～50cmを測る。立ち上がりは直線的でほぼ垂直に近いものである。壁溝は南辺東側の部分だけに認められなく、他はすべてある。幅40～30cm、深さ12cm前後である。柱穴は５本検出され、主柱穴はP_1～P_3である。他の１つは未掘部分にあるものと思われる。規模はP_1、P_2もＳＢ１に切られているためはっき



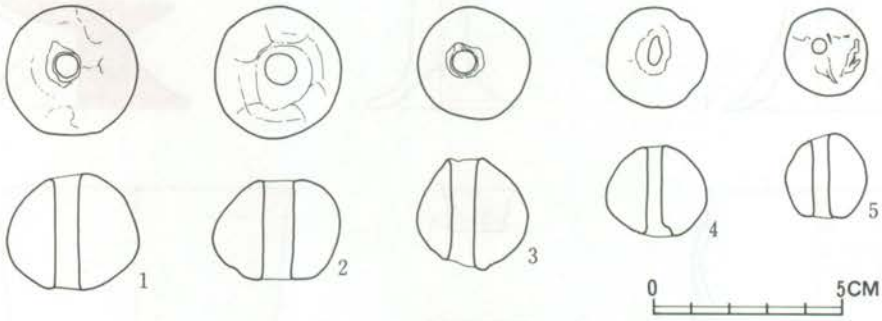
第349図　ＳＩ14出土土器実測図（1/4）

りしないが、P_3は径44cm、深さ70cmある。他も同規模と思われる。P_4、P_5は支柱穴を構成するものであろう。規模は主柱穴と同じである。P_6は貯蔵穴である。95cm×80cmの長方形である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは北辺中央に構築されている。遺存状態が悪く、構造等は不明である。規模は全長100cm、幅90cmである。袖は砂質粘土をほとんど使用していないため明確に確認できなかった。

覆土は3層に分層できたが、一度に埋められている状態をよく示している。

遺物は土器と土玉が南東付近から出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋1、杯2、高杯3、小形甕3、甕1、甑1、手捏ね土器2である。土玉は5個である。径3.5cm前後の3個と径2.5cmの2個の2種類がある。



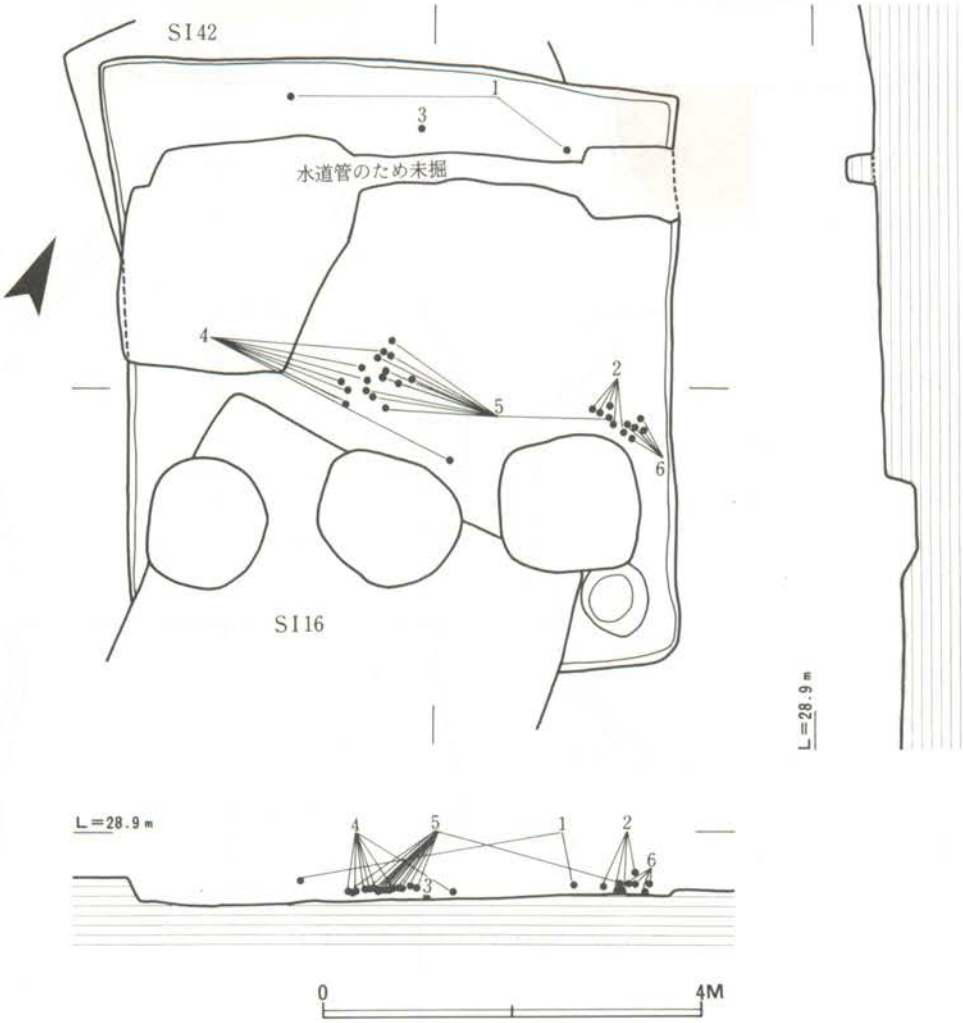
第350図　SI14出土土玉実測図（1/2）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
SI14－1	蓋(S)	13.4 × 4 ×	灰青色、長石、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ	3/8
－2	杯	16 × 6.4 ×	黒褐色、良好、ヘラケズリ後口縁部外面を除きヘラミガキ	3/8
－3	杯	12.9 × 6.2 ×	茶褐色(体部外面黒色)、良好、ヘラケズリの後体部内外面ヘラミガキ	1/2、赤彩
－4	高杯	× × 10	赤褐色、良、全面ナデ調整	脚部のみ
－5	高杯	× × 7.8	淡黄褐色、良、脚外面ヘラミガキ	脚部のみ
－6	高杯	× × 11.8	淡黄褐色、良、外面ヘラミガキ・内面ナデ調整	杯部3/4欠失、赤彩
－7	椀	11.6 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	体上半3/4
－8	手捏ミニチュア	3.8 × 2.2 × 2.6	茶褐色、良、全面ナデ調整	3/8
－9	手捏ミニチュア	5.2 × 5.3 × 2.8	茶褐色、良、全面ナデ調整	3/8
－10	甑	16.2 × 13.5 × 5.4	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	3/4

−11	甕	11.4 × ×	黄褐色、良、ヘラケズリの後体部内外面ともナデ調整	胴上半⅓
−12	杯	× × ×	黄褐色、良、ヘラケズリの後体部内外面ともにナデ調整、砥石に転用？	体部⅗
−13	甕	30 × ×	黒褐色、不良、体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラミガキ	⅙

ＳＩ15（第351・352図、ＰＬ159−１）

Ｄ−13グリッドに位置し、ＳＩ42を切り、ＳＩ16、ＳＢ１に切られている。また、水道管が埋設されているため未掘部分も多く、不明な点が多い。規模は南北6.1m、東西5.7mの北西でいびつになる長方形を呈し、主軸はＮ−24°−Ｗである。壁の残りは非常に悪くて西辺で25cmあ



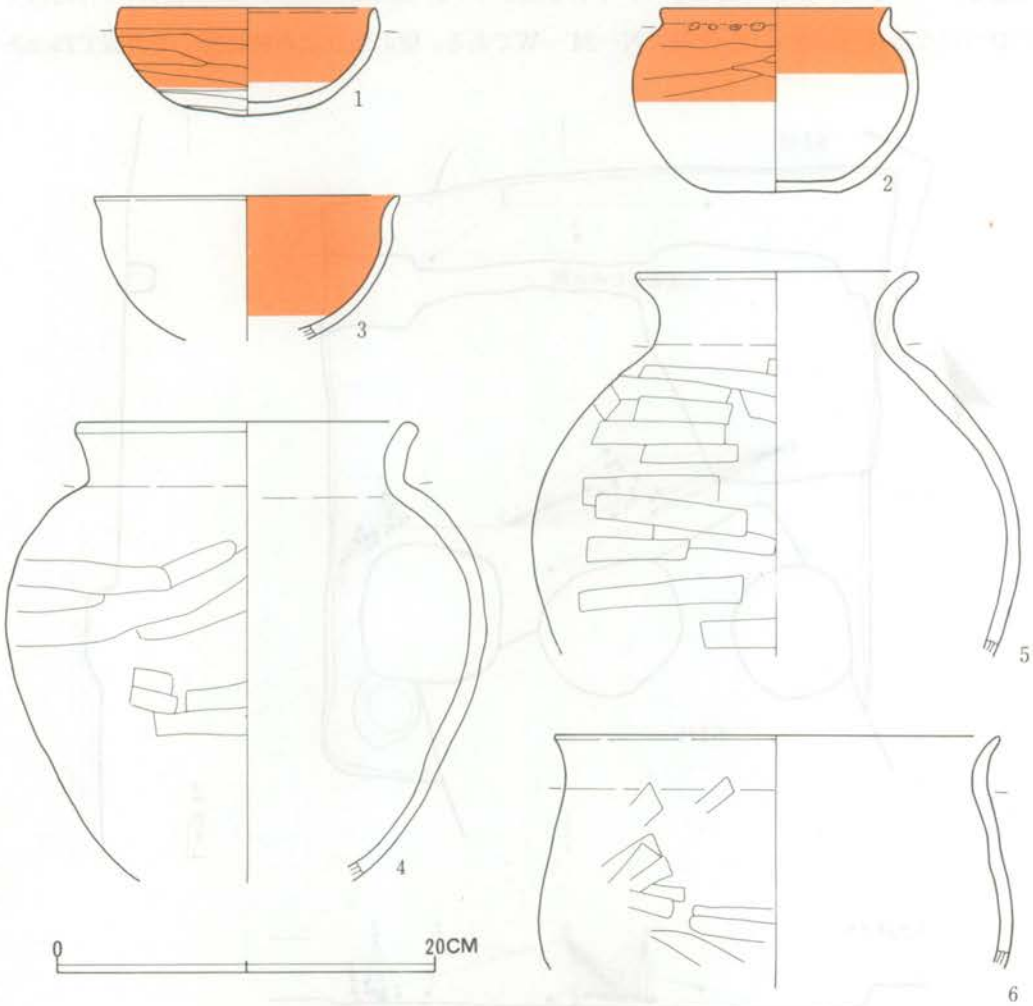
第351図　ＳＩ15実測図（1/80）

る他は10～5cmである。壁溝は認められない。柱穴も南東コーナーの1つ以外は確認できない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

カマドは確認できていない。

覆土も床面直上の一層しか残っていない。

遺物はほぼ中央に土器が集中して出土する傾向を見せている。杯1、鉢1、広口壺1、甕3である。

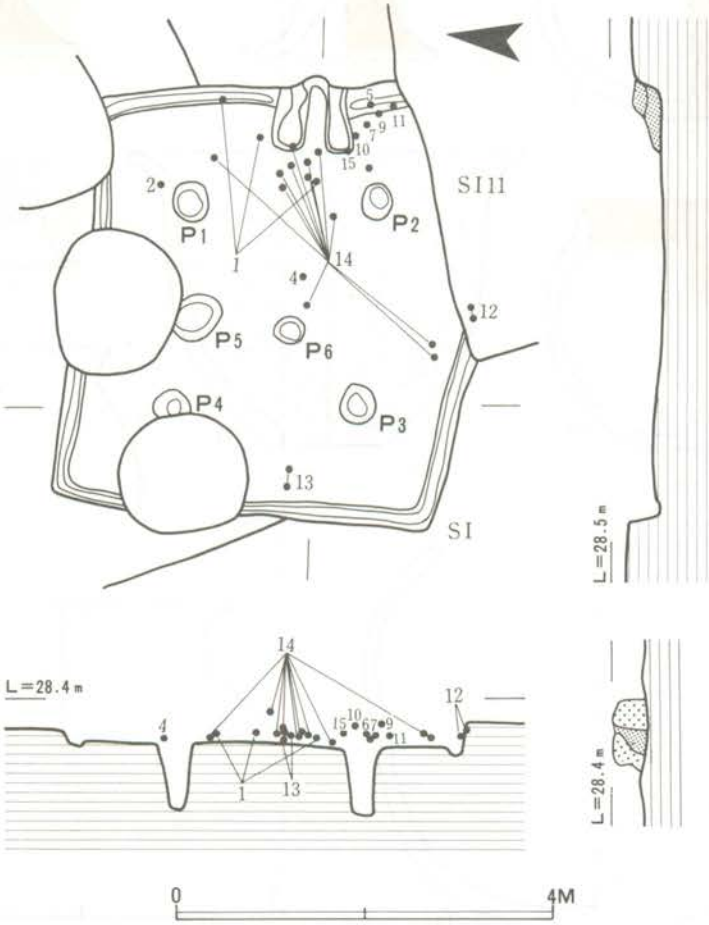


第352図　SI15出土土器実測図（1/4）

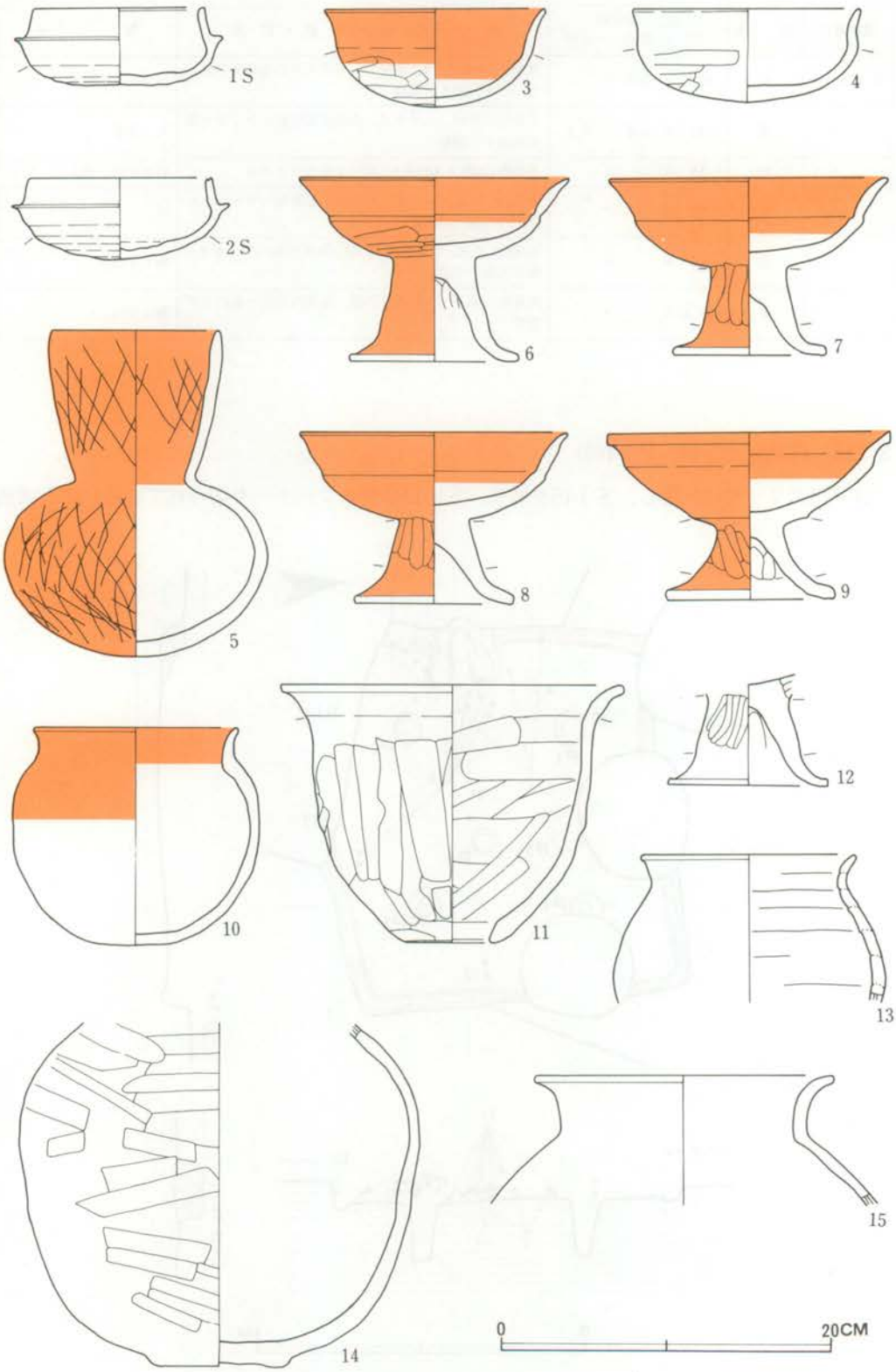
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SⅠ15－1	杯	13.4 × 5.5 ×	黄褐色(黒斑有り)、良好、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ内面ナデ調整	ほぼ完形、赤彩
－2	椀	12 × 9.4 × 6.8	茶褐色、良好、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ体部内面ナデ調整	¾、赤彩
－3	椀	16 × ×	茶褐色(外面スス付着)、良、全面ヘラミガキ	底部欠失、赤彩
－4	甕	18 × ×	黒褐色、不良、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ・体部内外面ナデ調整	½
－5	壺	15 × ×	黒褐色、不良、ヘラケズリの後、体部外面ヘラミガキ・体部内面ナデ調整	胴下半欠失
－6	甕	23.4 × ×	黄褐色、良、ヘラケズリの後、体部内外面ともにナデ調整	胴上半½

SⅠ16（第353～355図、ＰＬ160）

Ｄ－13グリッドに位置し、ＳＩ15を切り、ＳＩ11に南東コーナーを切られている。また北西



第353図　SI16実測図（1/80）



第354図　SI16出土土器実測図（1/4）

部はＳＢ１に切られている。規模は南北4.6m、東西4.2mの不整な方形を呈し、主軸はＳ－86°－Ｗである。壁は北辺がＳＩ15と重複関係にあるため遺存度が悪く15cm前後であるが、他は30cm前後あり、垂直に近い直線的な立ち上がりをしている。壁溝はＳＩ11とＳＢ１に切られている所以外はあるため、全周していたと思われる。幅は20cm前後、深さ10～14cmである。柱穴は４本検出された。２ｍ等間でほぼ並び、規模は径40cm前後、深さ80cm前後である。P_5、P_6は本住居跡にともなうピットではない。床面はソフトローム面を利用して踏み固めており、中央部は特に堅緻である。

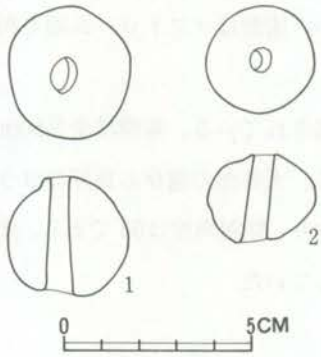
カマドは東辺のほぼ中央に構築されている。規模は全長80cm、幅88cmである。袖は砂質粘土を35cm程積み上げて構築している。天井部の遺存も良好なほうである。掘り方は幅40cm、壁外へ15cmほど半円形に掘り込んでおり、傾斜角度は60°である。床面への掘り込みは若干あるだけである。焼土、灰が多量に堆積していた。

覆土は単純な１層である。

遺物は土器と土玉がカマドの前面および南側に集中して出土している傾向がある。これらの土器は良好な該期の一括資料として重要なものである。１・２は須恵器の杯である。形態的にも陶邑のＴＫ47～ＴＫ208の間に入るものであろう。鬼高式土器の実年代を示す好例である、５は大形の坩であり、内外面ともに赤彩され、なおかつ外面全面と内面は頸部の間に斜格子の暗文を施している。出土土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯２、杯２、坩１、高杯５、広口壺、甑１、甕３である。土玉は２個である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ16－１	杯 (S)	10.2 × 4.6 ×	灰褐色、堅緻、回転ヘラ切り－Ｒ－体部下半回転ヘラケズリ	½
－２	杯 (S)	10.9 × 4.8 ×	灰褐色、堅緻、？－Ｒ－体部下半回転ヘラケズリ	ほぼ完形
－３	杯	13.4 × 5.8 ×	茶褐色、良好、ヘラケズリの後体部外面ヘラケズリ	ほぼ完形、赤彩
－４	杯	13.7 × 5.6 ×	茶褐色、良好、ヘラケズリの後体部内外面ともにヘラミガキ	⅔
－５	坩	10 × 19.2 ×	淡茶褐色(黒斑有り)、良好、全面ヘラミガキ、格子目状暗文を持つ	完形、赤彩
－６	高　杯	16.4 × 10.9 × 10.2	茶褐色、良好、脚部内面指ナデ・その他はヘラミガキ	ほぼ完形、赤彩
－７	高　杯	16.8 × 10.5 × 9.2	茶褐色、良好、脚部内面ナデ調整の他すべてヘラミガキ	〃
－８	高　杯	16.3 × 10.1 × 9.6	茶褐色、良好、脚部内面ナデ調整の他すべてヘラミガキ	脚部⅓欠失、赤彩
－９	高　杯	17 × 9.9 × 10.2	茶褐色、良好、脚部外面ナデ調整の他すべてヘラミガキ	ほぼ完形、赤彩
－10	広口壺	12.1 × 12.8 ×	茶褐色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	完形、赤彩
－11	甑	20.8 × 15.2 × 4.6	茶褐色(黒斑有り)、赤色粒子、良好、ヘラケズリの後体部内面ヘラミガキ	完形

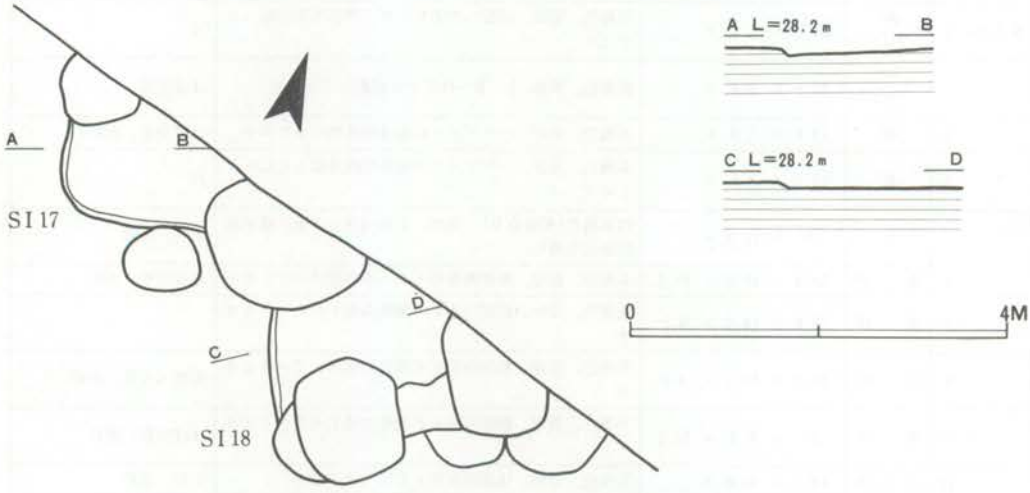
−12	高　杯	×　× 9.6	黄褐色、良、全面ナデ調整	脚部のみ、赤彩
−13	甕	13 ×　×	暗黄褐色(内面暗褐色)、不良、体部内外面ともにナデ調整	胴下半欠失
−14	甕	×　× 7.6	茶褐色、良好、ヘラケズリの後内外面ともヘラミガキ	口縁部欠失
−15	甕	18.1 ×　×	黄褐色、良、体部外面ヘラミガキ・体部内面ナデ調整	口縁部⅓



第355図　SI16出土土玉実測図（1/2）

SⅠ17・18（第356図、PL161−1）

F−8、9グリッドに位置し、北半の大部分は境界外へ出ており、なおかつ、SB21、22に切られているため、2軒の竪穴住居跡に関しては前後関係もおろか、規模もまったく不明である。また、遺存度もきわめて悪く、壁高は5cm前後である。床面はソフトローム面を利用して

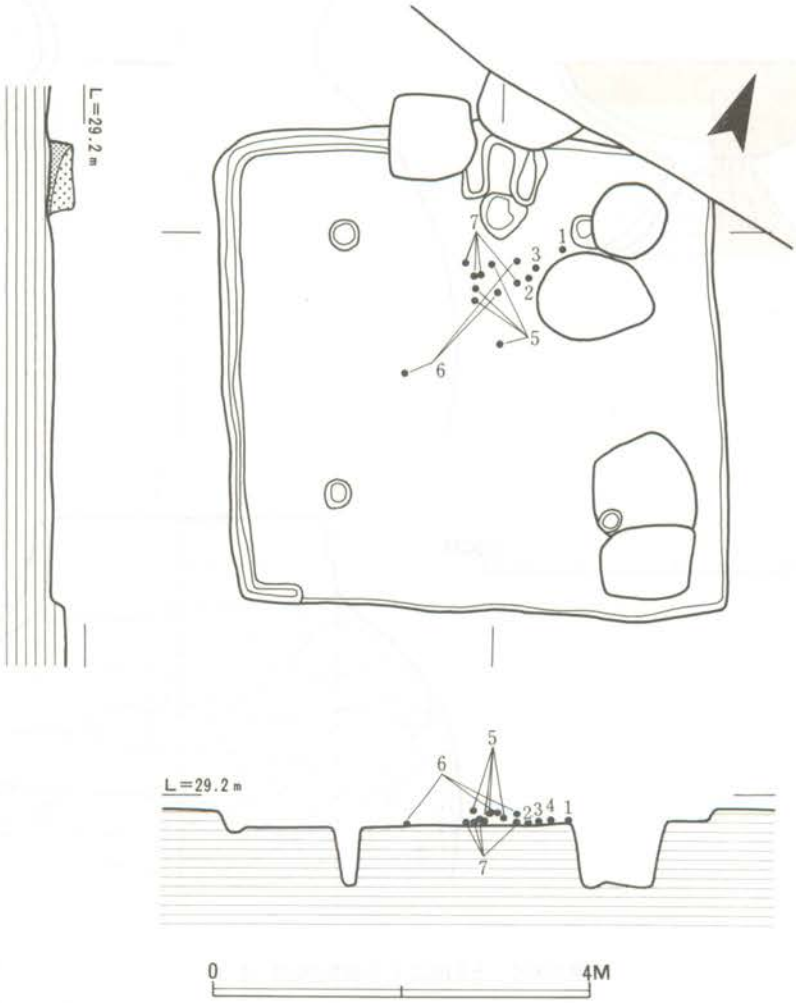


第356図　SI17・SI18実測図（1/4）

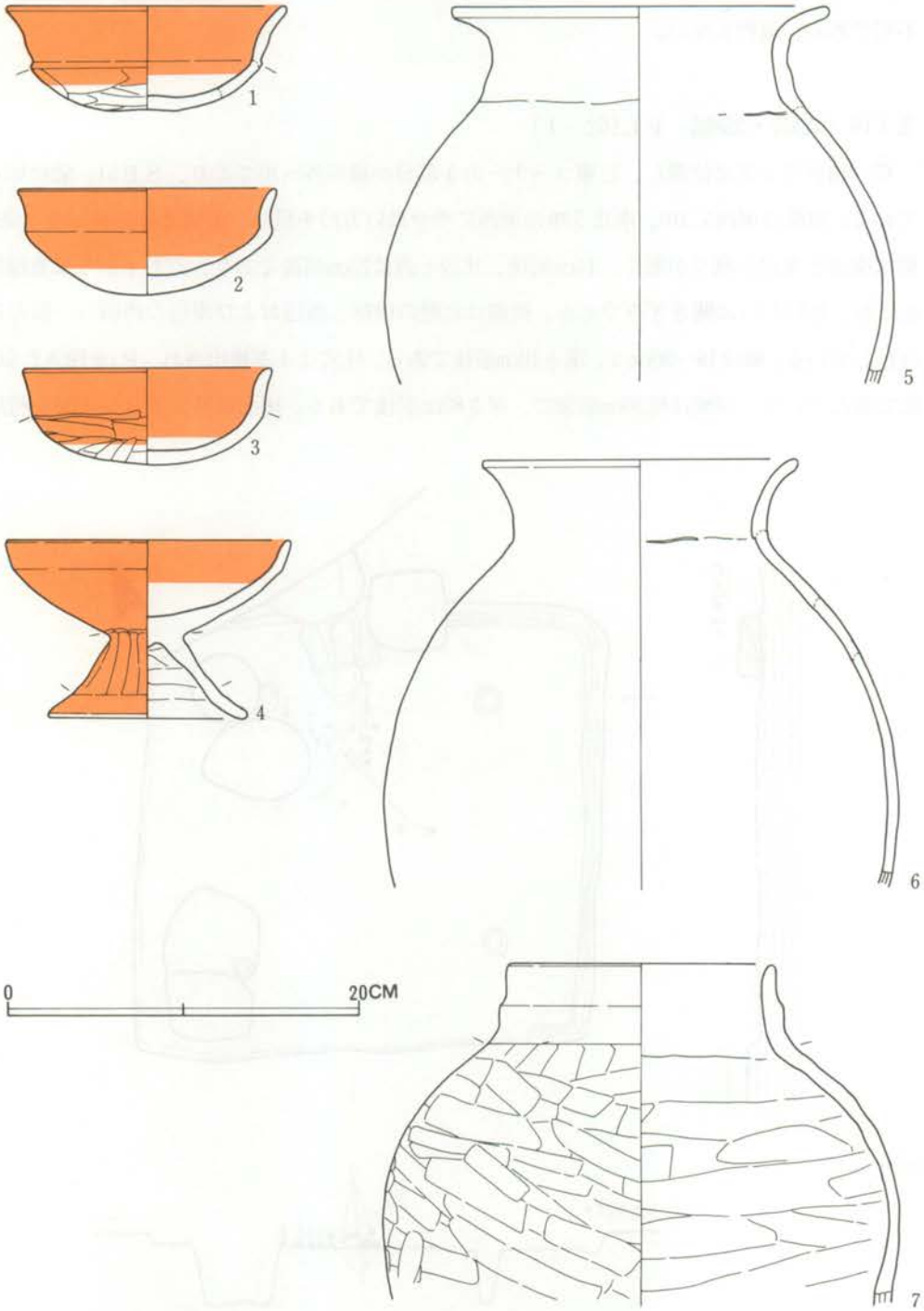
いるが、踏み固めた形跡はまったくみられない。壁溝はない。また、柱穴、カマド等の施設は不明である。遺物もない。

ＳＩ19（第357・358図、ＰＬ162－１）

Ｃ－13グリッドに位置し、北東コーナーの１部分が境界外へ出ており、ＳＢ51、52に切られている。規模は東西5.3m、南北５mの東西にやや長い方形を呈し、主軸はＮ－24°－Ｗである。壁は南辺と東辺の残りが悪く、14cm前後、北辺と西は25cm前後であり、立ち上がりは直線的であるが、外にだいぶ開きぎみである。壁溝は北壁の西側と西辺および南辺の西側の一部のみに存在している。幅は18～30cmで、深さ10cm前後である。柱穴は４本検出され、P_3を除き2.6m等間で並んでいる。規模は径30cm前後で、深さ80cm前後である。床面はハードローム面を利用し



第357図　ＳＩ19実測図（1/80）



第358図　ＳＩ19出土土器実測図（1/4）

て踏み固めているため、非常に堅緻である。

カマドは北辺中央よりやや東側に寄った位置に構築されているが、ＳＢ51、52に切られており、全容は不明である。全長80cm、幅90cm前後の規模と思われる。袖は砂質粘土と暗褐色土の混合を30cm程積み上げている。天井部は崩落している。壁外への掘り込み、煙道等はＳＢ52に切られているため不明である。床面への掘り込みは若干ある。カマドの前面に径50cm、深さ10cm前後の浅い掘り込みがある。

覆土は単純な１層である。

遺物は土器がカマド前面に集中して出土した。土器の器種と数量は杯３、高杯１、甕３である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ19－１	杯	15.9 × 5.7 ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにヘラケズリ	ほぼ完形、赤彩
－２	杯	14.6 × 5.9 ×	黄褐色(黒斑有り)、良、体部内外面ナデ調整。	ほぼ完形、赤彩
－３	杯	14.1 × 5.4 ×	黄褐色(黒斑有り)、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	完形、赤彩
－４	高　杯	16 × 9.8 × 11.2	茶褐色(黒斑有り)、良好、杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	½、赤彩
－５	甕	21.5 × ×	淡茶褐色(黒斑有り)、長石、良、体部内外面ともナデ調整	胴上半½
－６	甕	18.6 × ×	茶褐色、長石・石英・雲母、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラナデ	胴上半⅓
－７	壺	15 × ×	暗褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後体部外面ナデ調整	胴上半⅔

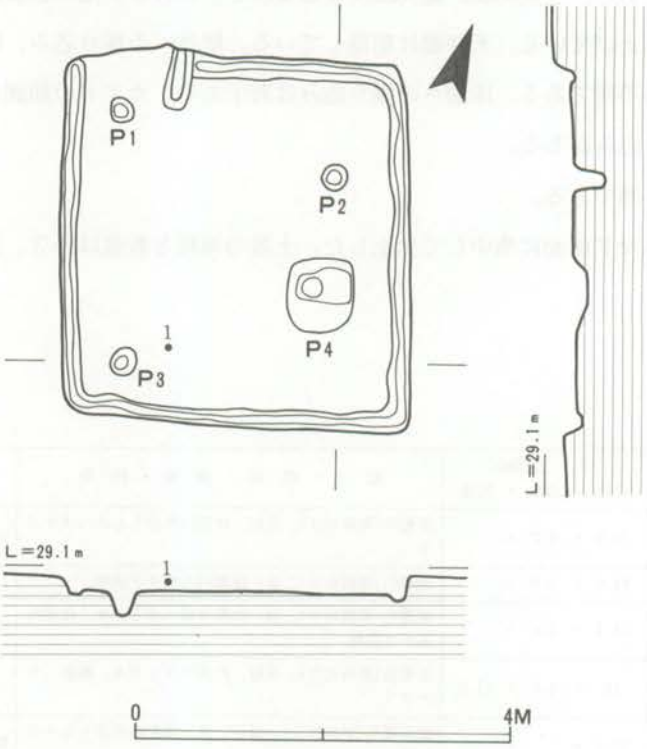
ＳＩ20（第359・360図、ＰＬ163－１）

Ｃ－13グリッドに位置し、ＳＩ19の西に隣接している。規模は南北3.9m、東西3.7mの南北に長い方形を呈し、主軸はＮ－19°－Ｗである。壁は遺存が悪く、20～10cmである。壁溝は北辺西端のカマド部分を除き、全周している。幅は18～24cmで、深さ５～８cmである。柱穴は３本検出されたが、配置が不揃いである。P_1は北西コーナーのカマドの前面にあり柱穴としては疑問が残る。P_2とP_3は対角線上に並んでいる。２本柱だった可能性が強い。規模は径30cm、深さ35cm前後である。P_4は攪乱である。床面はソフトローム面を利用して、踏み固めは中央部だけ行なわれ、周辺は軟弱である。

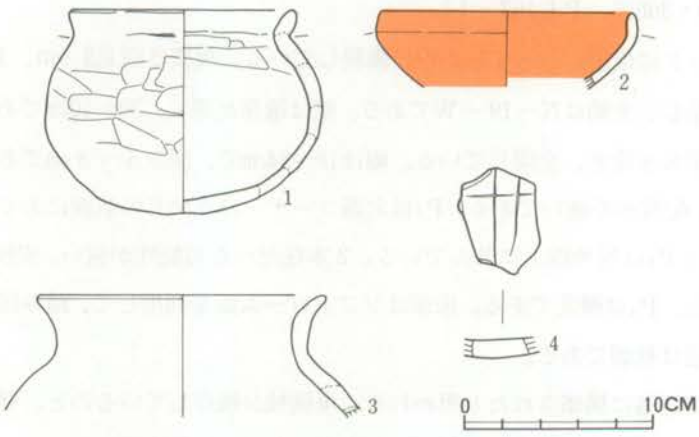
カマドは北辺西端に構築されたと思われる。東側袖が残存しているのと、壁外への掘り込みが認められる以外は焼土、焼け具合等の痕跡もないため、不明に近い。

覆土は単純な１層だけである。

遺物は土器が若干出土した。甕2、杯2である。4の杯底部の破片には外面に「サ」の線刻がある。



第359図　SI20実測図（1/80）



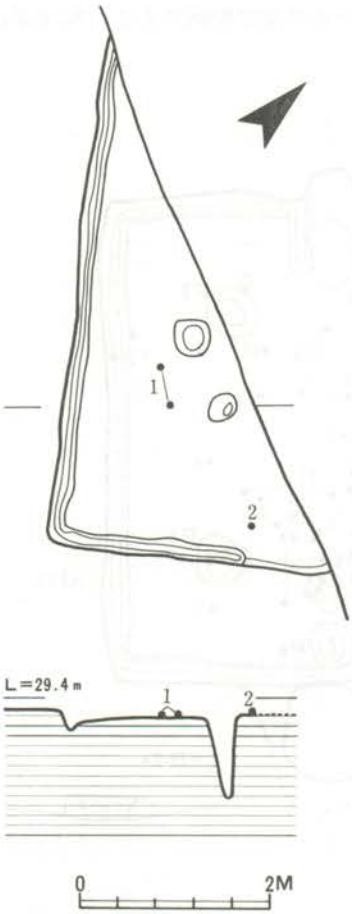
第360図　SI20出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ20－1	甕	12.1 × 10.6 ×	暗赤褐色、赤色粒子、良好、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラナデ	ほぼ完形
－2	杯	13.4 ×　　×	黄褐色、良好、体部内外面ともナデ調整	⅛、赤彩
－3	甕	15.4 ×　　×	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにナデ調整	口縁部⅓
－4	杯	×　　×	黒色、良、外面に「+」の線刻有り	底部破片

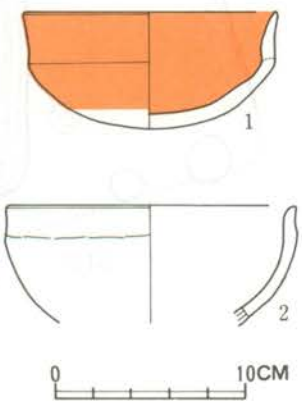
ＳＩ21（第361・362図、ＰＬ163－２）

Ｃ－14グリッドに位置し、大半は境界外にあるため不明な住居跡である。遺存度も悪く壁は10cmも残っていない。壁溝は西辺と南辺の西から２ｍまでは存在する。幅20cm、深さ10cm前後である。ピットは２個検出されているが、２個とも柱穴であるかどうかは不明である。床面はソフトローム面を利用しているが、周辺まではよく踏み固めていないため軟弱である。

遺物は杯が２点床面より出土している。



第361図　ＳＩ21実測図（1/80）

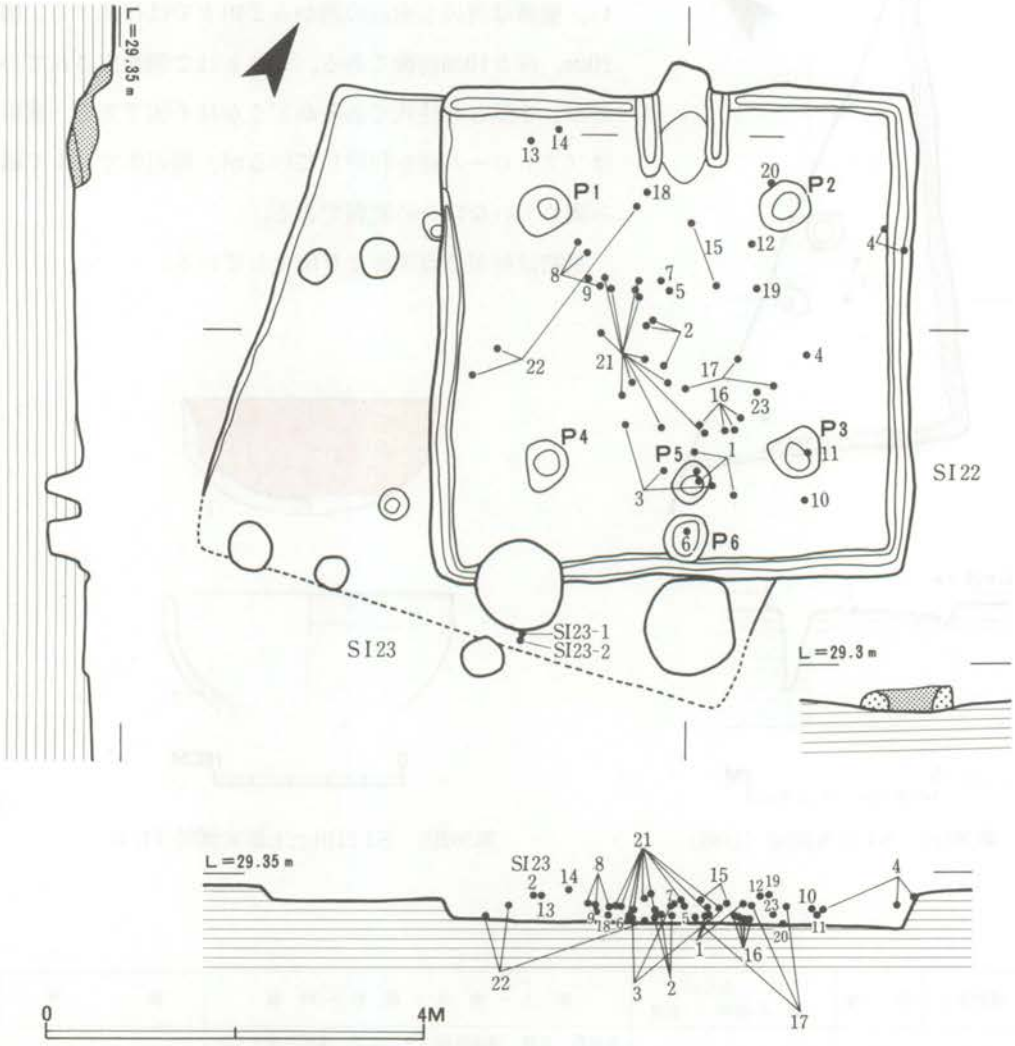


第362図　ＳＩ21出土土器実測図（1/4）

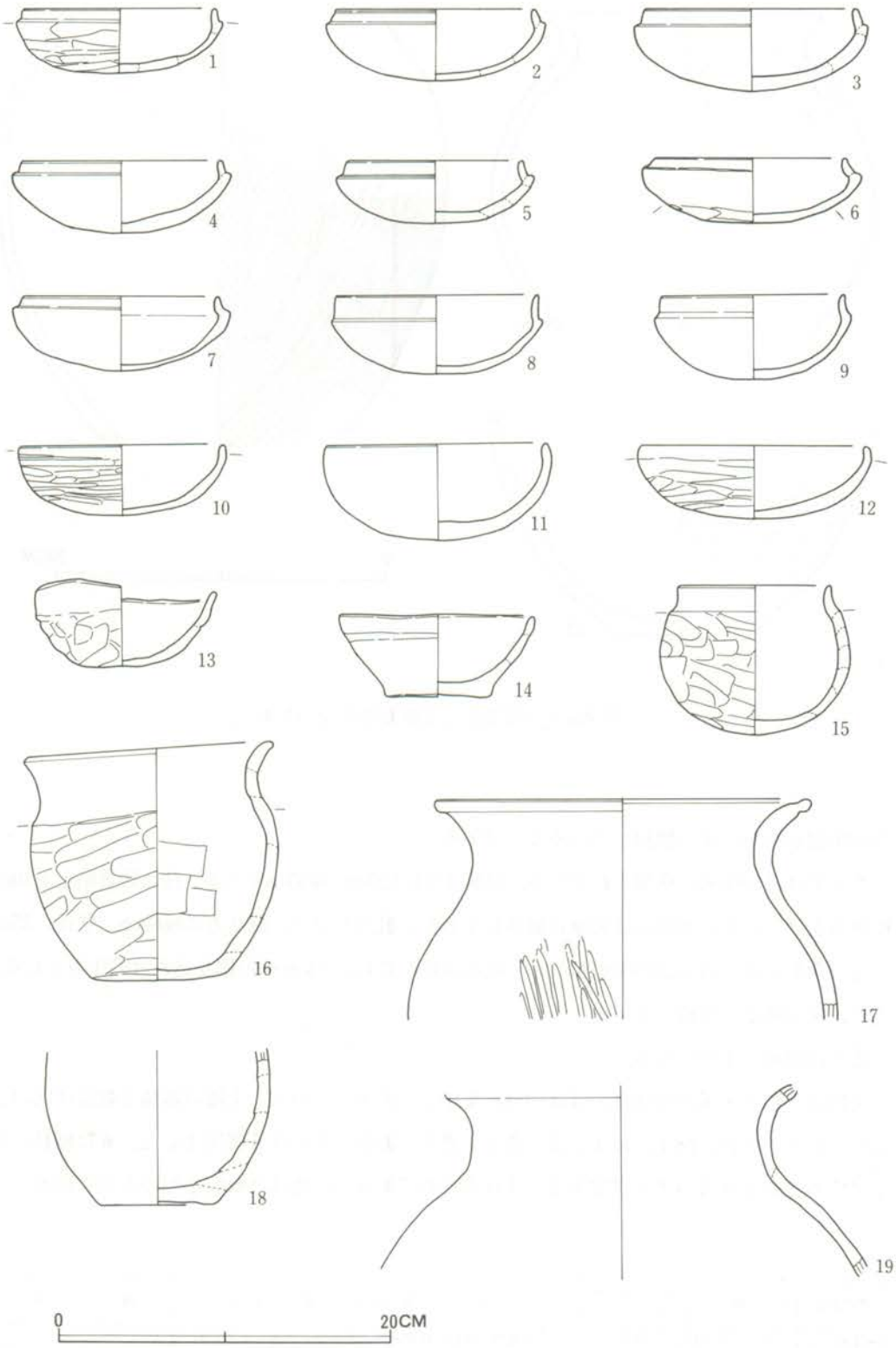
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ21－1	杯	13.2 × 6 ×	赤褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整。	口縁部⅓欠、赤彩
	椀	15 ×　　×	茶褐色、良好、体部外面ナデ調整	⅛

ＳＩ22（第363～366図、ＰＬ164）

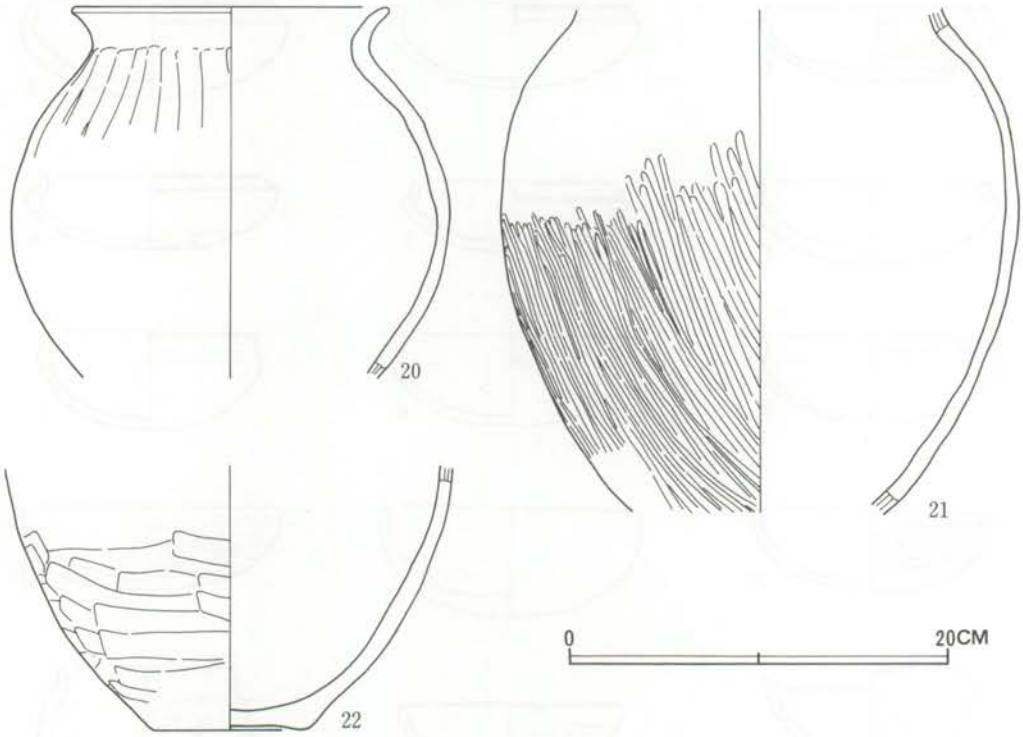
Ｃ－14グリッドに位置し、ＳＩ23を切っている。規模は南北5.2m、東西５mの南北にやや長い方形を呈し、主軸はＮ－31°－Ｗである。壁の遺存はきわめてよく、40cm前後である。立ち上がりは直線的であるが、だいぶ開きぎみである。壁溝は西辺の北端１mとカマド部分以外には認められる。幅は25～30cmであるが、深さはほとんどない状態である。柱穴は６本検出されたが、P_1～P_4が主柱穴で、P_5、P_6は支柱穴である。主柱穴は2.5m等間にきれいに並んでいる。規模は径50cm前後、深さも50cm前後である。支柱穴であるP_5はP_3、P_4のほぼ中間に位置している。P_6はP_5の南側で壁溝に接している。規模は径40cm、深さ40cmで、主柱穴より一回り規模が小さい。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。興味深い



第363図　ＳＩ22・ＳＩ23実測図（1/80）



第364図　SI22出土土器実測図 ① (1/4)



第365図　SⅠ22出土土器実測図 ②（1/4）

のは床面が西から東へ傾斜していることである。

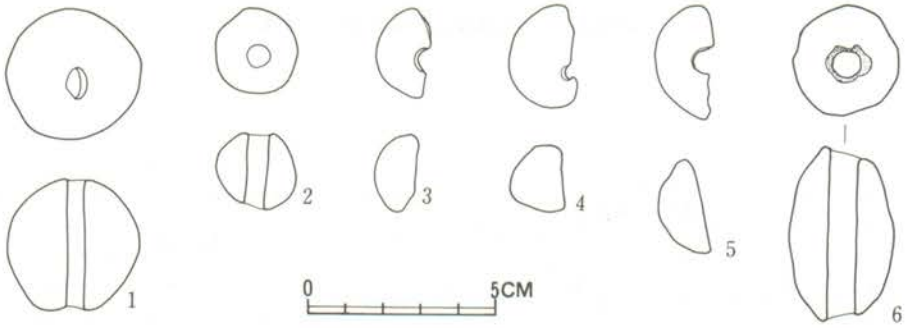
カマドは北辺中央に構築されている。規模は全長120cm、幅95cmである。袖は砂質粘土を30cm程積み上げている。天井部は完全に崩落しており、痕跡もない。掘り方は幅60cm、壁外へ35cmほど三角形に掘り込み、傾斜角度は30°とゆるいものである。床面への掘り込みは若干みられる。焼土、灰が多量に堆積している。

覆土は単純な1層である。

遺物は土器と土玉が住居跡のほぼ中央に集中して出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯12、椀1、鉢1、広口壺1、甕7である。土玉は6個出土した。6は細長いタイプであるが他は丸いタイプである。1は大きめであるが、他は比較的小形のものである。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SⅠ22－1	杯	11.6 × 3.8 ×	茶褐色、良好、体部外面へラケズリの後へラミガキ	7/8
－2	杯	12.1 × 4.3 ×	暗褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面へラミガキ、内面に「十」の暗文有り	3/5

－3	杯	12.8 × 4.9 ×	暗茶褐色、良好、体部内外面へラミガキ	5/6
－4	杯	12.1 × 4.2 ×	暗茶褐色(黒斑有り)、不良、体部内外面ナデ調整	2/3
－5	杯	10.6 × 3.7 ×	暗茶褐色(黒斑有り)、良、体部外面へラミガキ、体部内面ナデ調整	1/3
－6	杯	11.5 × 3.8 ×	黄褐色、良好、体部外面下半へラケズリ、体部内面底部ナデ調整、その他はへラミガキ	完形
－7	杯	11.8 × 4.4 ×	暗褐色(黒斑有り)、良好、全面へラミガキ	底部1/3欠失
－8	杯	12.3 × 4.7 ×	暗褐色、良好、全面へラミガキ	ほぼ完形
－9	杯	11 × 5.1 ×	黄褐色(内面黒色)、良、体部内外面ともナデ調整	2/3
－10	杯	12.4 × 4.1 ×	茶褐色、良好、全面へラミガキ	ほぼ完形
－11	杯	13.3 × 5.6 ×	淡茶褐色、良好、全面へラミガキ	1/2
－12	杯	13.6 × 4.3 ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面へラケズリ、内面底部ナデ調整	1/2
－13	椀	10.5～10.9×4.1～5.3×	茶褐色(黒斑有り)、良、へラケズリの後体部内外面ともにナデ調整	完形
－14	鉢	13.8 × 4.7 ×	黒色、不良、体部内外面ナデ調整、底部に木葉痕が残り	1/2
－15	広口壺	9.1 × (8.7) ×	暗褐色、良、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ調整	3/5
－16	甕	15.2 × 14.2 × 8.2	淡茶褐色、良、体部外面へラケズリ後ナデ調整体部内面へラナデ	4/5
－17	甕	22.7 × ×	淡茶褐色、良、体部内外面ナデ調整、外面一部にへラミガキが加わる	胴上半1/2
－18	甕	× × 7	暗茶褐色、不良、外面ナデ調整、内面ナデ調整	胴下半3/4
－19	甕	× ×	黄褐色、長石、石英、良、体部外面ナデ調整、体部内面へラナデ	頸部1/2
－20	甕	16.6 × ×	黄褐色、良、へラケズリの後体部内外面ナデ調整	
－21	甕	× ×	黄褐色、良好、ナデ調整の後外面中位以下をへラミガキ	胴部4/5
－22	甕	× × 8.2	黄褐色、良、外面へラケズリ、内面ナデ調整	胴下半2/3



第366図　ＳＩ22出土土玉実測図（1/2）

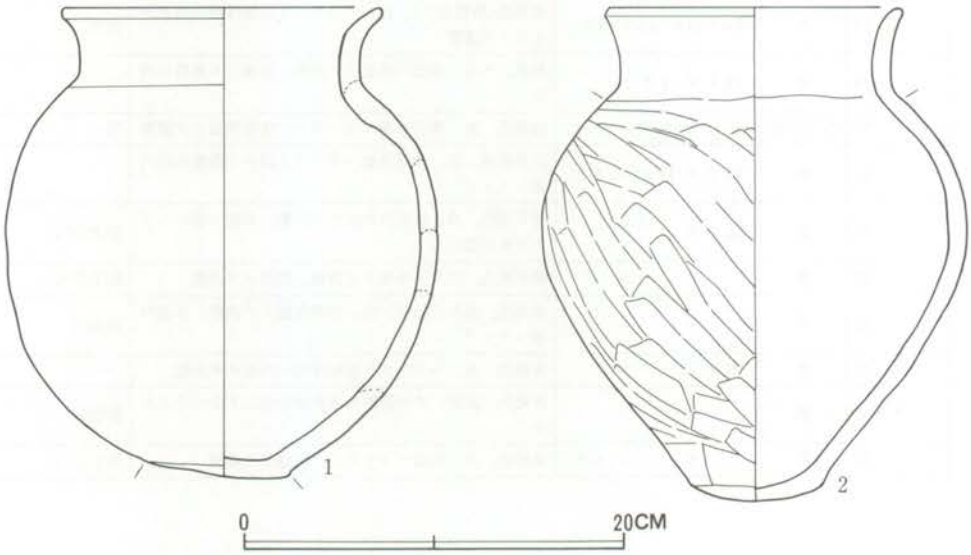
ＳＩ23（第363・367図、ＰＬ164）

Ｃ―14グリッドに位置し、ＳＩ22にすっぽり切られており、また、南辺は遺存していないため不明な点が多い。規模は東西６ｍであるが、南北は不明である。壁は北辺の一部と西辺がか

ろうじて残っており、20cm近くある。しかし、南辺と東辺はその痕跡もない。壁溝は認められない。柱穴は2本検出された。規模は径30cm前後で、深さ20cm前後である。この深さからすると、ＳＩ22に切られている部分では柱穴もとんでしまったと思われる。床面はソフトローム面を利用して踏み固めているが軟弱である。

覆土は床面直上の1層しか確認できない。

遺物は甕が2点出土しただけである。



第367図　ＳＩ23出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ23－1	甕	16.9 × 24.3 × 7.6	暗褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラミガキ・体部内面底部ヘラケズリ	ほぼ完形
－2	甕	15.6 × 25.3 × 7.4	黒色、不良、体部内外面ヘラケズリ	½

ＳＩ24（第368・369図、ＰＬ165－1）

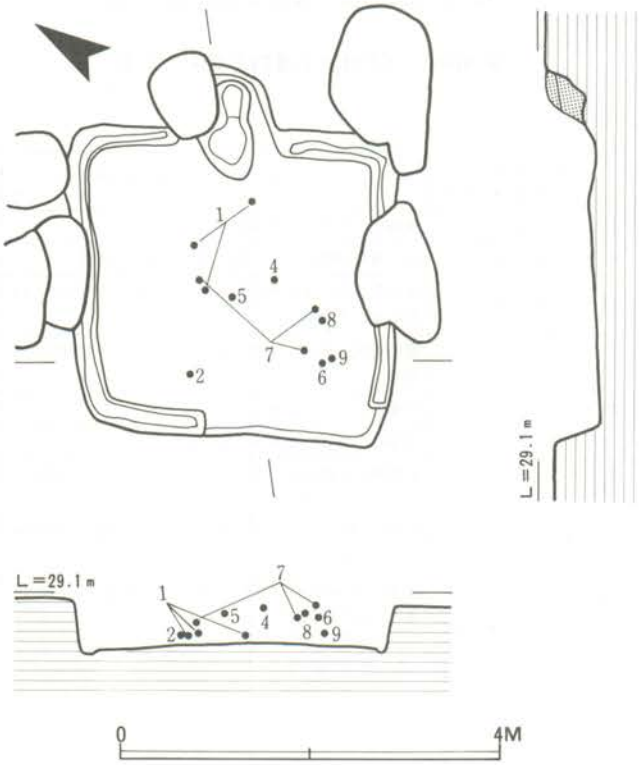
調査区のほぼ中央Ｄ－13グリッドに位置しており、ＳＩ25を切っている。そして、ＳＢ31、50に切られている。規模は南北3.6m、東西3.2mの南北にやや長く、南西コーナーでややいびつになる方形を呈し、主軸はＮ－60°－Ｅである。壁の遺存は良好で、40～50cmである。壁の立

ち上がりは直線であるが、やや開きぎみである。壁溝はカマド部分と西辺の南側を除いて確認できた。幅は22～30cm、深さ6～10cmである。柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。また床面は中央部からカマド前面にかけて盛り上がっている。

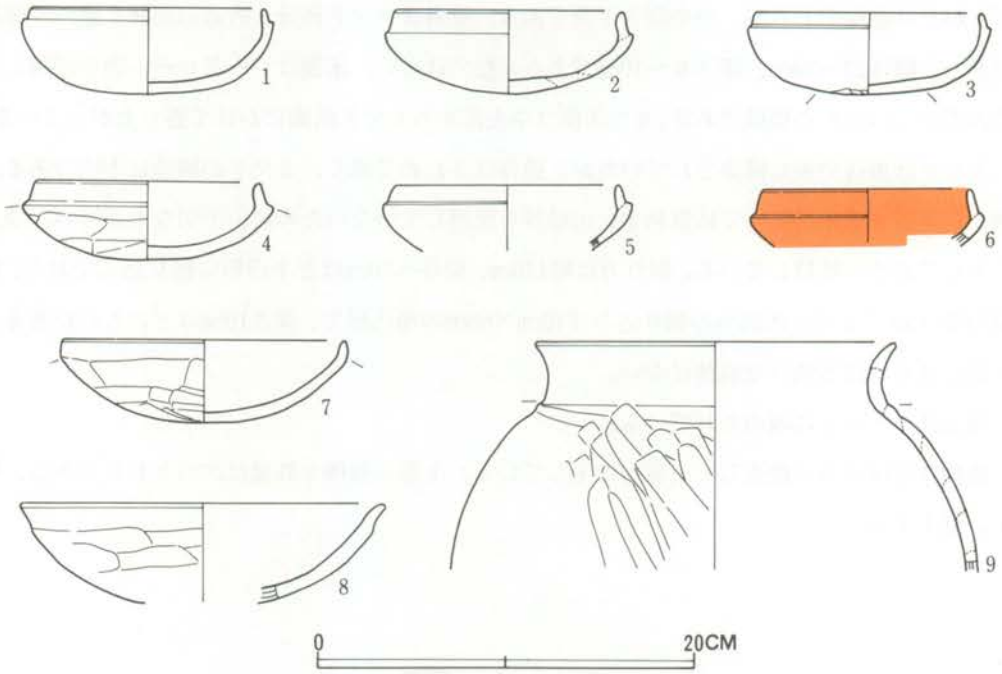
カマドは東辺中央に構築されていたが、遺存はきわめて悪く、カマドの構造は不明である。袖、天井等は構築材として砂質粘土、山砂等を使用していないために、不明な点が多い。焼土は少しであるが堆積している。掘り方は幅110cm、壁外へ70cmほど半円形に掘り込んでおり、傾斜角度は55°である。床面への掘り込みは70cm×60cmの楕円形で、深さ10cmほどのものがある。床面にはそれほど焼けた痕跡はない。

覆土はいっぺんに埋められている。

遺物はほぼ中央に散在して土器が出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯7、甕1である。



第368図　SI24実測図（1/4）

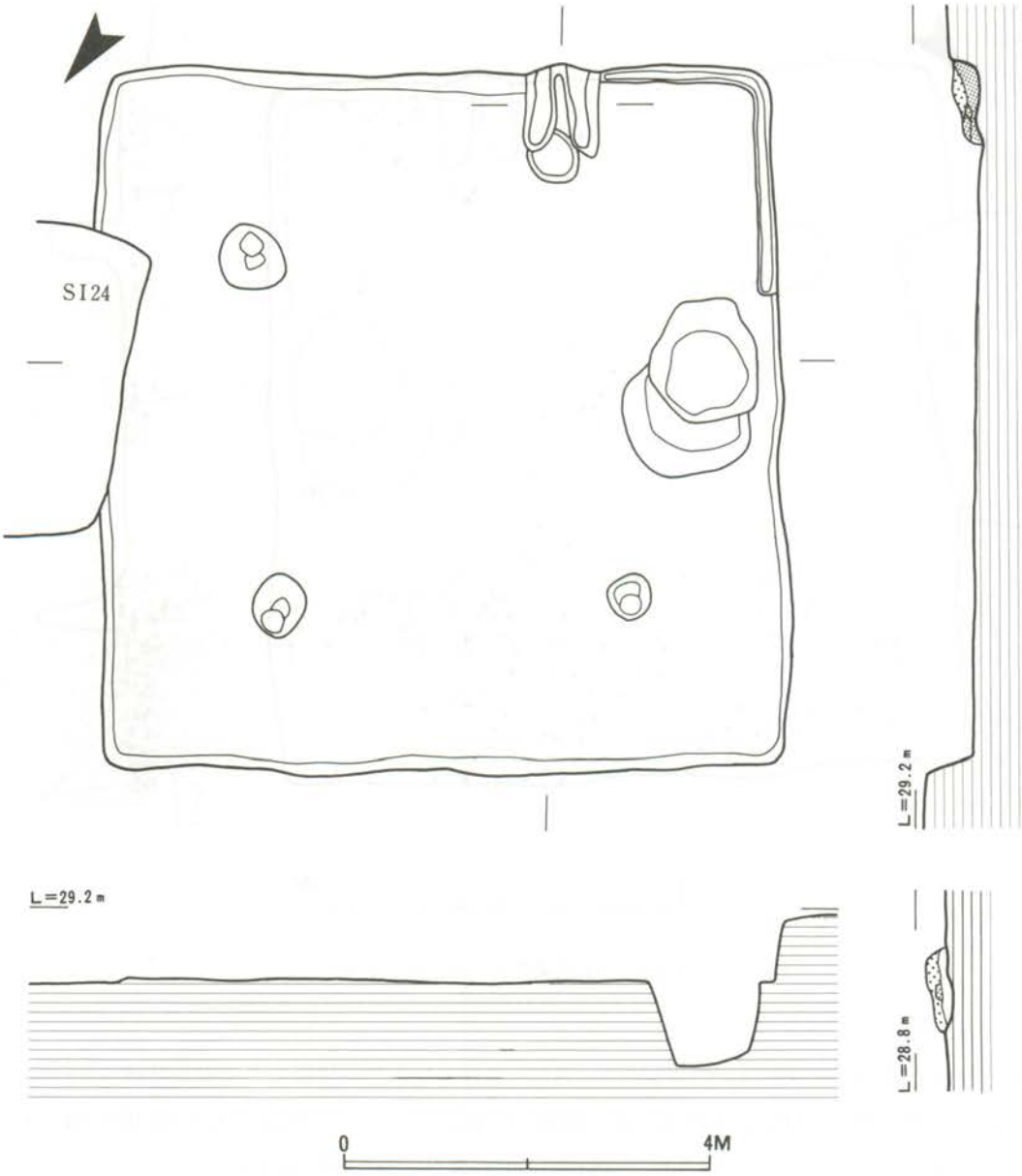


第369図　ＳＩ24出土遺物実測図（1/4）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
ＳＩ24－1	杯	12.2 × 4.4 ×	黄褐色、良好、体部外面ヘラミガキ	¾
－2	杯	12.2 × 4.2 ×	淡茶褐色(黒斑有り)、良、体部外面ナデ調整	⅔
－3	杯	12 × 4.1 ×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	⅔
－4	杯	11.8 × ×	暗黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	
－5	杯	11.8 × ×	暗褐色、良好、全面ヘラミガキ	体上半½
－6	杯	11 × ×	赤褐色、良好、全面ヘラミガキ	体上半⅙、赤彩
－7	杯	15 × ×	暗褐色、赤色粒子、良、体部外面ヘラケズリの他はすべてヘラミガキ	¼
－8	杯	19.2 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラミガキ	⅛
－9	甕	19 × ×	暗褐色(黒斑有り)、長石、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	胴部半⅓

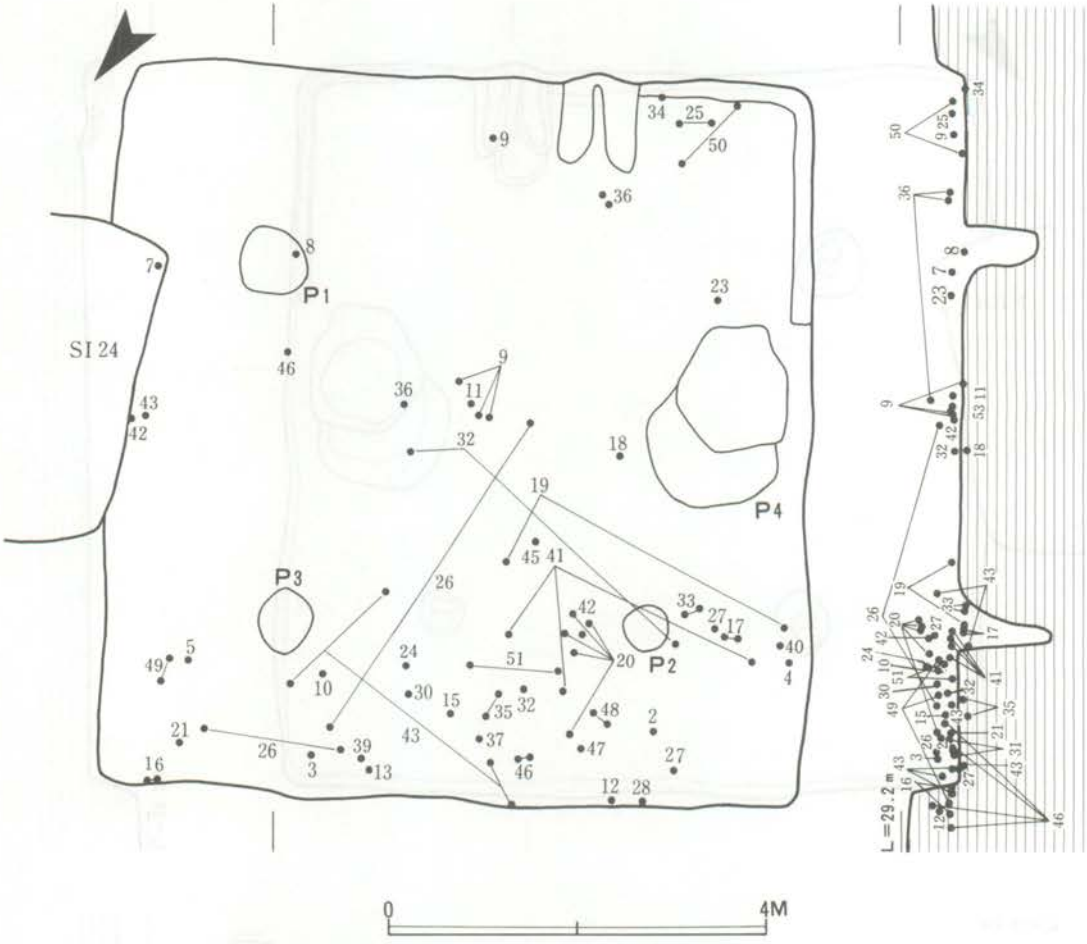
ＳＩ25（第370～375図、ＰＬ165－１）

Ｄ－14グリッドに位置し、東辺のほぼ中央をＳＩ24に切られている大形の竪穴住居跡である。本住居跡の調査は道路の下になっていたため、３回にわたって部分的に掘って図面上で合成したものである。規模は7.5mのほぼ正方形を呈し、主軸はＳ－35°－Ｗである。壁は北、西辺が残



第370図　ＳＩ25実測図（1/80）

りがよく、70～50cmほどあるが、南、東辺はあまりよくなく、40～30cmである。壁の立ち上がりは直線的で、ほぼ垂直に近いところもある。壁溝は南西コーナー部分にのみ確認された。幅は22cm前後、深さは５cm前後である。柱穴は３本検出された。主柱穴としては４本必要と思われるが、３本しか検出できなかった。約４ｍ間隔の等間に並び、規模は径50～80cmとまちまち



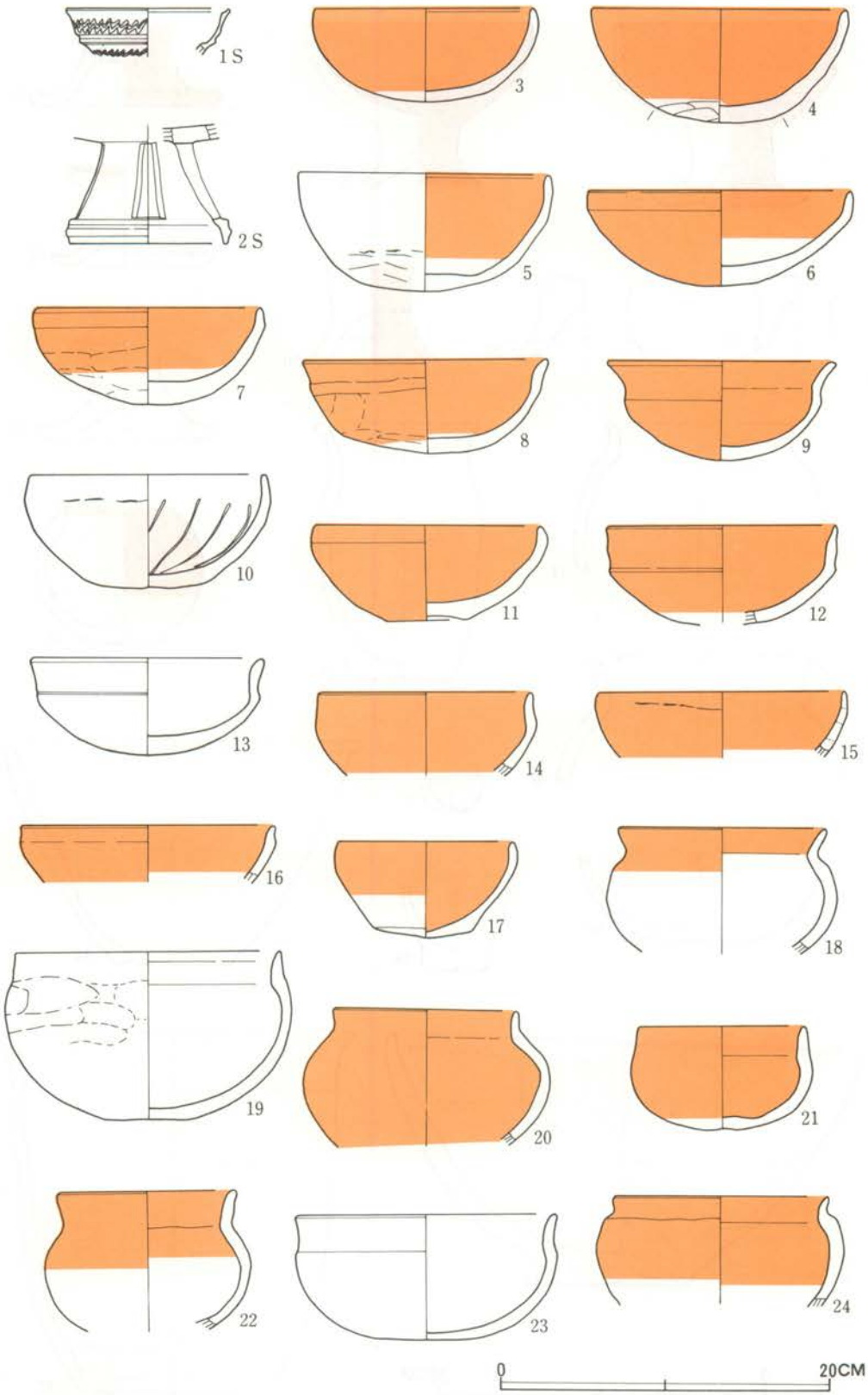
第371図　SI 25遺物出土状況図（1/80）

であるが、深さは80cm前後で同じである。また、それぞれ1回の建替があるのも共通している。西辺のほぼ中央には130cm×110cm、深さ90cmの貯蔵穴がある。この貯蔵穴も1回の作り替がある。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

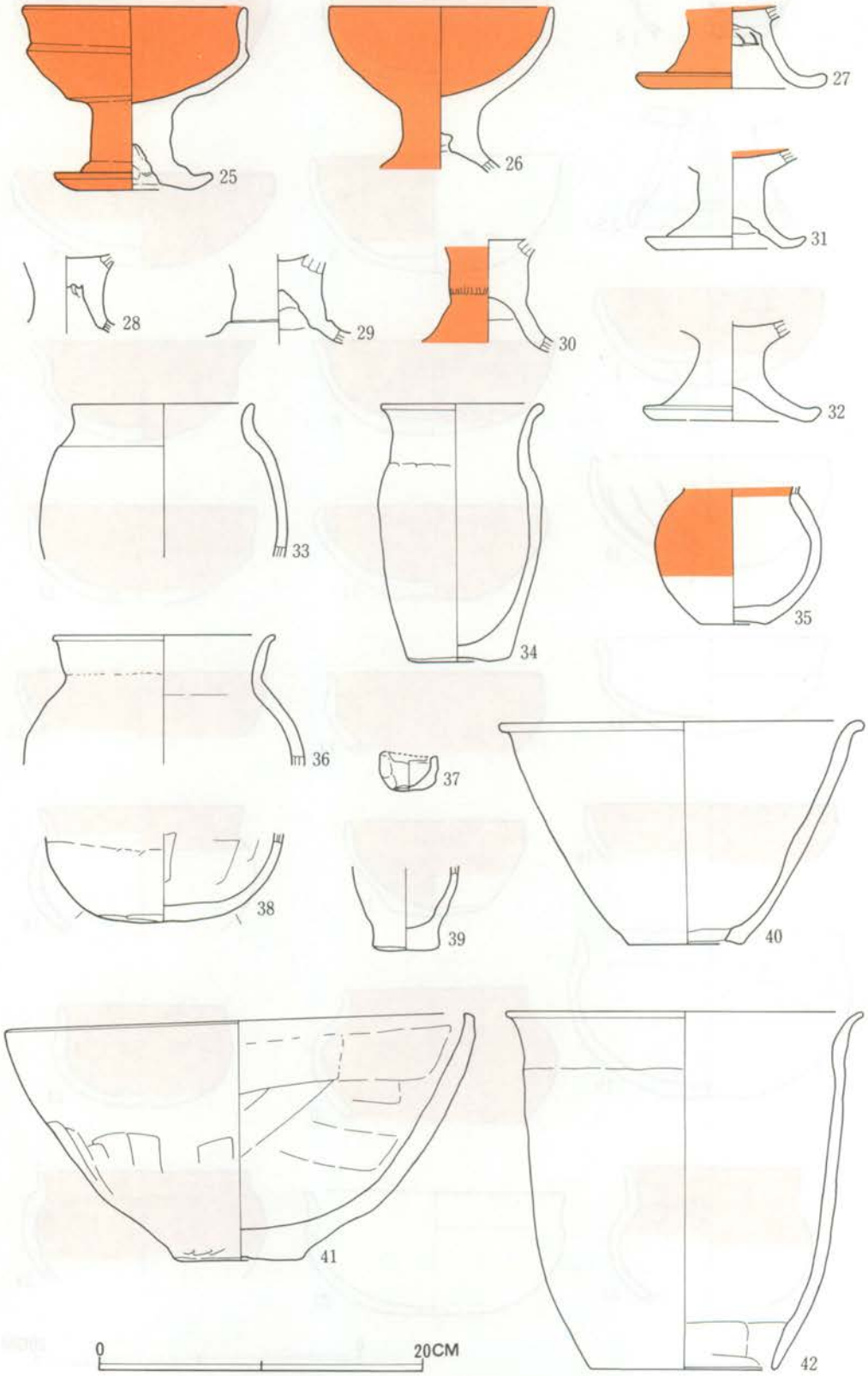
覆土は3層に分層できるが、一度に埋めている状態を見てとれる。

カマドは南辺の中央より西側によった地点に構築されている。全長100cm、幅80cmである。袖は砂質粘土と暗褐色土の混合で20cm程積み上げているが、遺存はあまりよくない。掘り方は幅80cm、壁外へ10cmほど三角形に掘り込んでいる。傾斜角度は70°である。床面への掘り込みは10cmほどで、焼土が少し堆積している。

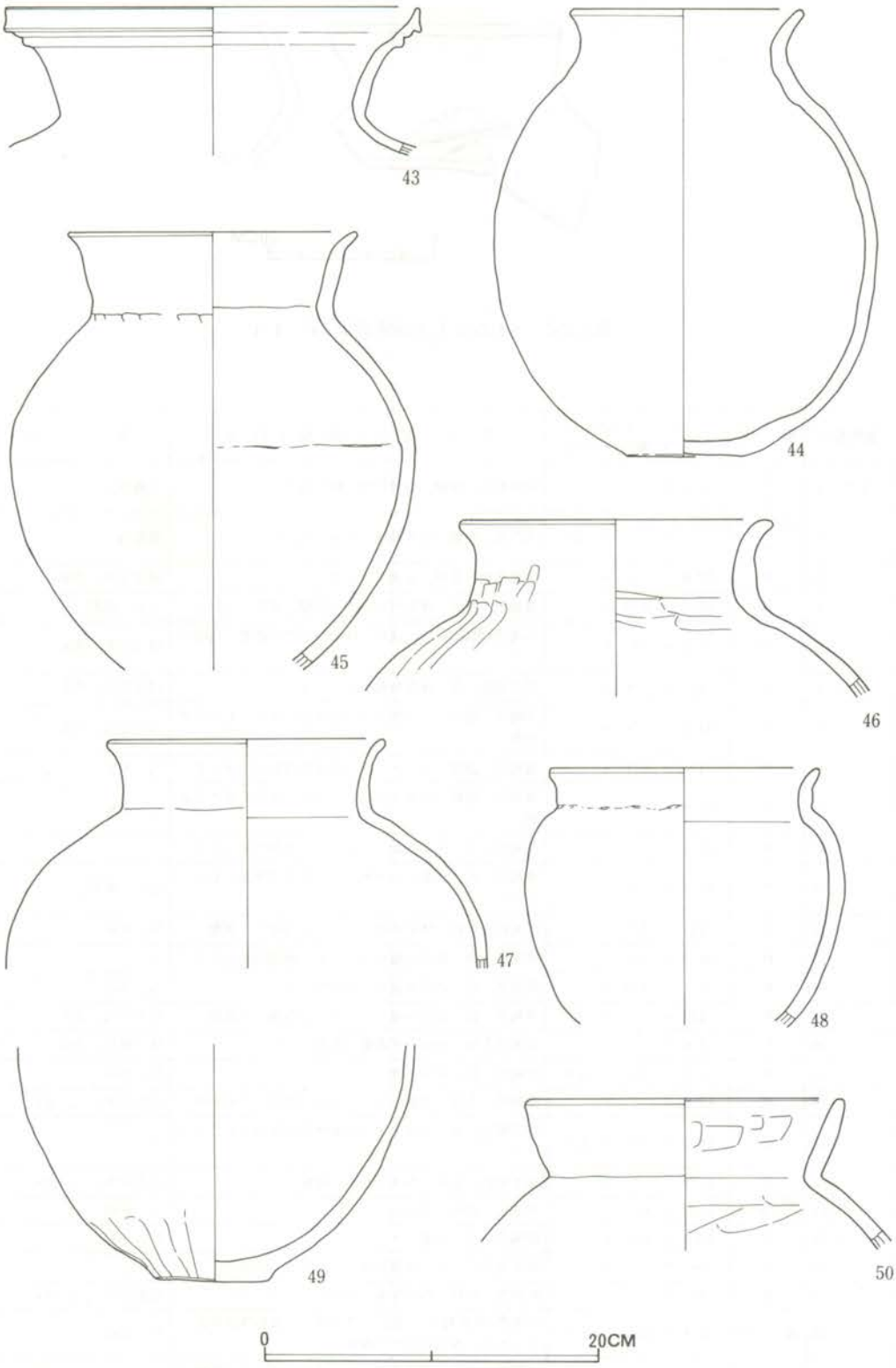
遺物は土器が北辺部に集中して大量に出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器瑞、高杯、甕が各1、杯16、鉢2、壺6、高杯8、甕12、甑2、手捏1である。特に51の甕の破片は砥石に転用されたものと思われる掘り込みがある。



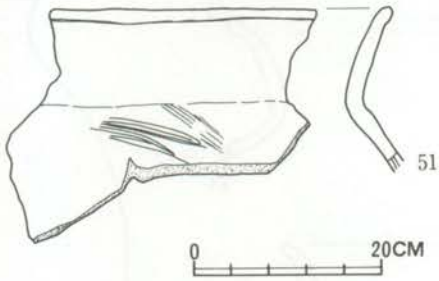
第372図　ＳＩ25出土土器実測図①（1/4）



第373図　SI25出土土器実測図②（1/4）



第374図　ＳＩ25出土土器実測図 ③ (1/4)



第375図　SI25出土土器実測図 ④ (1/4)

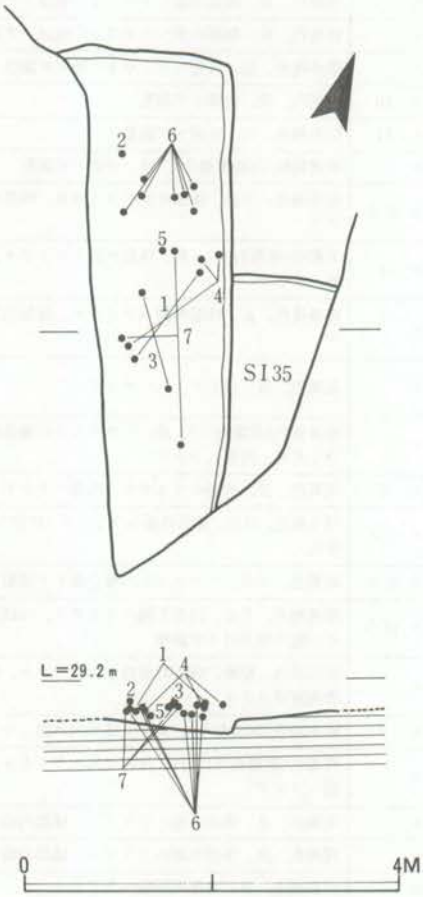
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI25－1	甕 (S)	10.2 ×　　×	暗灰褐色、堅緻、口唇内側に稜を持つ	口縁部⅕
－2	高　杯 (S)	×　　× 10	灰白色、堅緻、長方形透し孔4（復元）	脚部⅙
－3	杯	13.6 × 5.7 ×	明黄褐色、良好、全面ヘラミガキ	ほぼ完形、赤彩
－4	杯	15.7 × 6.9 ×	黄褐色、良好、体部内外面ナデ調整、底部ヘラケズリ	完形、赤彩
－5	杯	15.6 × 7 ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ナデ調整、内面ヘラナデ	ほぼ完形、赤彩
－6	杯	16 × 5.6 ×	明茶褐色、良、体部外面ヘラミガキ	ほぼ完形、赤彩
－7	杯	14.1 × 5.8 ×	茶褐色、良好、ヘラケズリの後体部内外面ともにナデ調整	ほぼ完形、赤彩
－8	杯	15 × 5.7 ×	黄褐色、良好、ヘラケズリの後体部内外面ヘラナデ	⅚、赤彩
－9	杯	13.9 × 6 ×	黄褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	⅗、赤彩
－10	杯	14.4 × 6.7 ×	茶褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	⅙
－11	杯	13.8 × 5.8 ×	赤褐色、良、底部のヘラケズリを除き内外面ともヘラミガキ	完形、赤彩
－12	杯	14 × 5.8 ×	明褐色、良好、体部外面ヘラケズリ内面ナデ調整	⅙、赤彩
－13	杯	14.3 × 5.7 ×	黒褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	½
－14	杯	13.2 × 4.9 ×	茶褐色、良、体部外面および内面ヘラナデ	¼、赤彩
－15	杯	15 ×　　×	茶褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	体上半⅓、赤彩
－16	杯	15.6 ×　　×	茶褐色、良、外面ナデ調整、内面ヘラナデ	体上半⅓、赤彩
－17	鉢	10.7 × 5.7 × 5.9	暗褐色、良、全面ヘラナデ	⅓、赤彩
－18	壺	12.6 ×　　×	明褐色、不良、内面ヘラナデ外面は磨滅のため不明	底部欠失、¼、赤彩
－19	壺	16.2 × 10 × 4.6	暗茶褐色、良、ヘラケズリの後体部内外面ともにヘラナデ	⅓
－20	壺	11.4 ×　　×	暗茶褐色、不良、内外ともナデ調整	底部欠失、¾、赤彩
－21	壺	10.2 × 6.1 ×	茶褐色、良好、全面ヘラナデ	⅓、赤彩
－22	壺	10.9 × 8.6 ×	暗褐色、良、全面ヘラナデ	⅔、赤彩
－23	杯	16 × 7.7 ×	暗茶褐色、不良、体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ	¼
－24	壺	13 ×　　×	明褐色、良好、体部外面、内面ともにヘラナデ	底部欠失、¼、赤彩
－25	高　杯	13.8 × 11.2 × 9.8	暗褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後杯体部外面ヘラミガキ、脚部外面ナデ調整	⅓、赤彩
－26	高　杯	14 ×　　×	赤褐色、不良、体部外面ヘラミガキ、杯および脚部内面ヘラナデ	裾部欠失、¾、赤彩
－27	高　杯	×　　× 11.8	明褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	杯部欠失、赤彩

−28	高　杯	× ×	明褐色、良、脚部内面ヘラケズリの他はナデ調整	脚部のみ、赤彩
−29	高　杯	× ×	明褐色、良、脚部内面ヘラケズリの他はナデ調整	脚部のみ、赤彩
−30	高　杯	× ×	暗赤褐色、良、外面ヘラミガキ内面ナデ調整	脚部のみ、赤彩
−31	高　杯	× × 10	明褐色、良、全面ナデ調整	脚部のみ、赤彩
−32	高　杯	× × 11	明茶褐色、良、全面ナデ調整	脚部1/2
−33	甕	11.1 × ×	暗黄褐色(内面黒褐色)、良、全面ナデ調整	胴上半3/3
−34	甕	10 × 15.5 × 6.3	暗赤褐色、不良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	2/3
−35	壺	× × 4	茶褐色(黒斑有り)、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	口縁部欠失、赤彩
−36	甕	13.6 × ×	暗黄褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	胴上半1/3
−37	手　捏 ミニチュア	3.6 × 2.3 ×	黒褐色、良、指ナデ、ヘラケズリ	ほぼ完形
−38	杯	× ×	暗黄褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ	口縁部欠失
−39	手　捏	× × 4	明褐色、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ	胴上半欠失
−40	甑	22.5 × 18.5 × 7.2	明茶褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、単孔	4/5
−41	鉢	28.8 × 14.8 × 8.1	暗褐色、不良、ヘラケズリの後全面ナデ調整	ほぼ完形
−42	甑	22 × 17.1 × 11.5	暗黄褐色、不良、内面下端ヘラケズリ、口縁部を除くその他の部分はナデ調整	1/3
−43	甕 (S)	25 × ×	淡灰黒色、良、体部外面格子目状タタキ、体部内面青海波状タタキ	口縁部1/4
−44	甕	13.9 × 26.2 × 7	明茶褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ヘラミガキ	5/6
−45	甕	17.2 × ×	明褐色(黒斑有り)、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	底部欠失、3/3
−46	甕	18.7 × ×	茶褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	口縁部1/4
−47	甕	16.6 × ×	黄褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	
−48	甕	16.1 × ×	明茶褐色、良、体部内外面ヘラミガキ	底部欠失、1/2
−49	甕	× × 7	暗茶褐色、不良、ヘラケズリの後内外面ともにヘラナデ	胴上半欠失
−50	甕	19 × ×	明褐色、良好、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ	口縁部1/3
−51	甕	× ×	黄褐色、良、肩部に研かれたような痕跡、砥石に転用されたものか？	口縁部破片

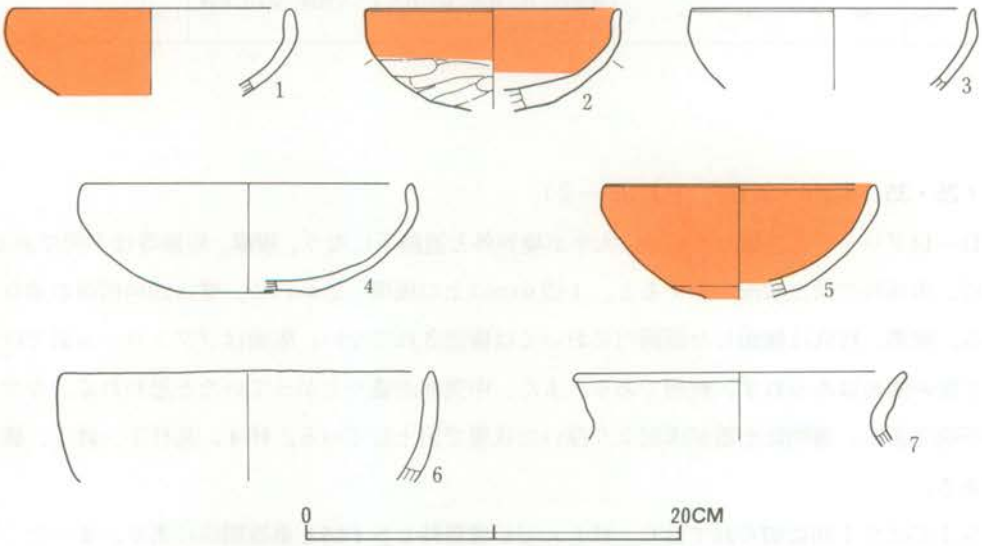
ＳＩ26・35（第376・377図、ＰＬ165−２）

Ｄ−14グリッドに位置している。大半が境界外と道路下になり、規模、形態等は不明である。東辺、床面等の検出状況からすると、１辺６cm以上の規模と思われる。壁は20m前後の遺存である。壁溝、柱穴は検出した範囲内においては確認されてない。床面はソフトローム面でほとんど踏み固めはみられず、軟弱である。また、中央部が盛り上がっていたと思われる。カマドも不明である。遺物は土器が床面より浮いた状態で出土している。杯４、高杯１、鉢１、甕１である。

ＳＩ35はＳＩ26に切られており、ほとんどが境界外とＳＩ26と重複関係にあり、まったく不明である。壁高は10cmもない。他の施設は不明である。床面は軟弱である。遺物はなにもない。



第376図　SI26・SI35実測図（1/80）



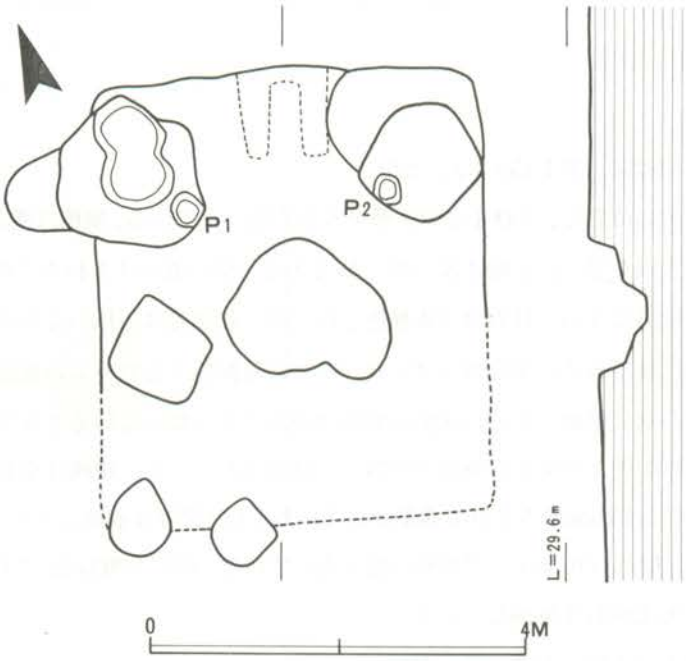
第377図　SI26出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SⅠ26－1	杯	15 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ	体上半⅓、赤彩
－2	杯	13.6 × ×	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	¼、赤彩
－3	杯	15 × ×	暗黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	体上半¼、赤彩
－4	杯	17.4 × 5.7 × 7	赤褐色、良、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	⅔
－5	高　杯	14.4 × ×	茶褐色、良、内外面ともにヘラミガキ	杯部¼、赤彩
－6	鉢	20 × ×	暗褐色、不良、内外面ともに荒いヘラナデ	口縁部⅓
－7	甕	17.6 × ×	暗褐色、良、ヨコナデのみ	口縁部⅓

SⅠ27（第378・379図、ＰＬ166－１）

Ｃ－14、15グリッドにまたがって位置し、ＳＢ34に切られ、また、住居跡自体の掘り込みも浅く、床面が部分的に残っているだけなので規模等も不明である。規模は東西4.1m、と判名するが、南北ははっきりはしないが推定4.8mで、南北に長い方形を呈するものと思われる。主軸はＮ－19°－Ｅである。壁はまったく残存していない。壁溝はないと思われる。柱穴は２本検出された。この２本で主柱穴を構成するのか不明であるが、他には見あたらない。床面はソフトローム面を利用し、暗褐色土とロームの混合をよく踏み固めているため非常に堅緻である。

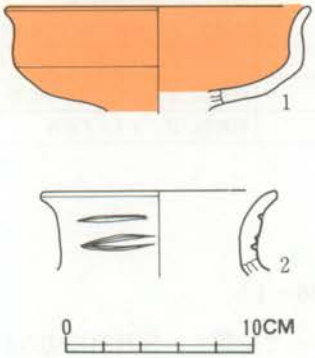
カマドは基底部だけが残存している。それによると規模は全長100cm、幅90cm程度と思われる。



第378図　SⅠ27実測図（1/80）

袖には砂質粘土が使用されていた。掘り方は壁外、床面へも掘り込んでいない。

遺物は高杯１、甕１である。甕には砥石として使用された痕跡がある。



第379図　ＳＩ27出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ27－１	高　杯	16.2 ×　　×	黄褐色、良、体部外面、内面ヘラナデ	杯部¼、赤彩
－２	甕	12.6 ×　　×	茶褐色、良、ヨコナデのみ、外面に研き込まれた痕跡有り	口縁部のみ

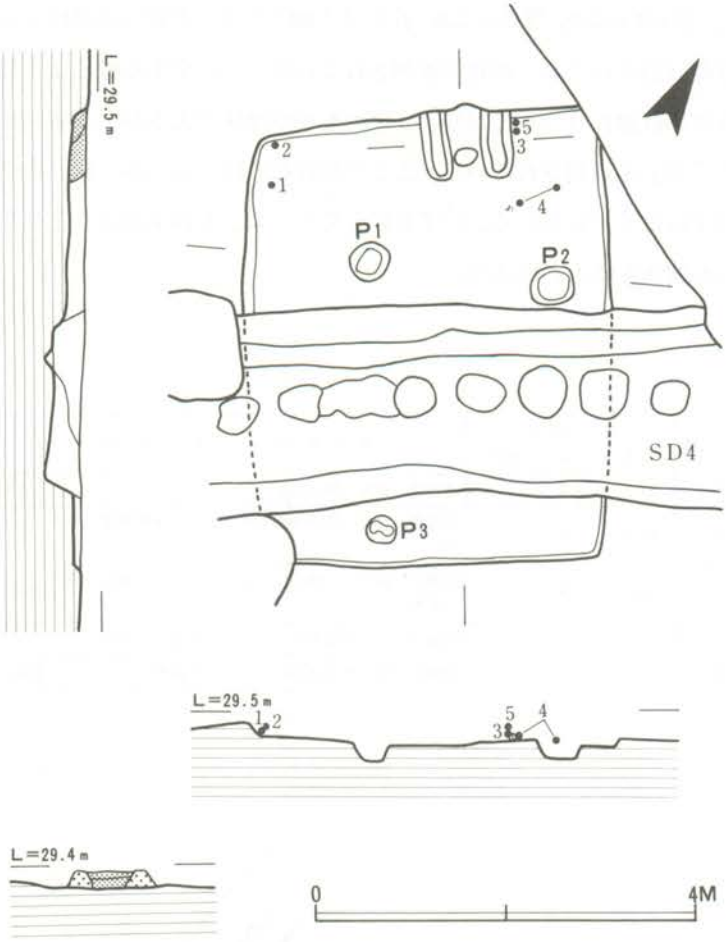
ＳＩ28（第380～382図、ＰＬ150－２、225）

Ｃ－14グリッドに位置し、ＳＤ４に中央部を大きく切られている。規模は南北4.8m、東西3.9mの南北に長い方形を呈し、主軸はＮ－30°－Ｗである。壁の遺存はきわめて悪く、18～８cm程の残存である。壁溝はない。柱穴は３本検出されたが、並び方は不揃いである。規模は径40cm前後、深さ20cm前後である。床面はソフトローム面に暗褐色土とロームの混合土でよく踏み固めているために非常に堅緻である。床面の傾斜は南から北へ傾いているようである。

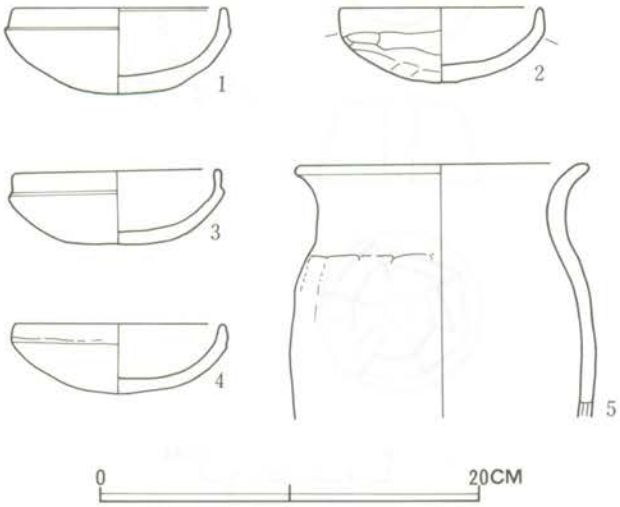
カマドは北辺の中央よりすこし東側に位置して構築されている。規模は全長80cm、幅90cmである。袖は砂質粘土を20cm積み上げて構築されている。天井部等は崩壊してしまい不明である。掘り方は幅30cm、壁外へ10cmほど三角形に掘り込んでいる。傾斜角度は55°である。床面への掘り込みはない。焼土が若干堆積している。

覆土は床面直上の１層しか残っていない。

遺物は土器と紡錘車が北辺よりに出土している。土器は杯４、甕１である。紡錘車は石製で、



第380図　SI28実測図（1/80）



第381図　SI28出土土器実測図（1/4）

上面径3.2cm、下面径4.4cm、厚さ2.1cm、孔の径７㎜である。下面には直孤文状の線刻がしてある。体部には時計回りに「奈」が10個線刻されている。この文字の線刻は非常に細いものである。最初の３文字は重なり合っており、４字目もやや曖昧であるが、５字目から９字目まではしっかりした「奈」と線刻されている。ここで特長なのは「示」が「未」になっている事である。最後の10字目はくずれている。いずれにしても「奈」を10字書こうとしたのか、たんなる習書であるのか興味あるものである。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ28－１	杯	11.1 × 4.4 ×	黄褐色、良好、体部外面ヘラミガキ	完形
－２	杯	10.6 × 3.8 ×	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	完形
－３	杯	11 × 3.8 ×	黒褐色、良好、口縁部～外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	½、内外面黒色処理？
－４	杯	11 × 3.7 ×	暗褐色、良、体部外面ヘラケズリの後ナデ調整	ほぼ完形
－５	甕	15.4 × ×	黄褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半¼

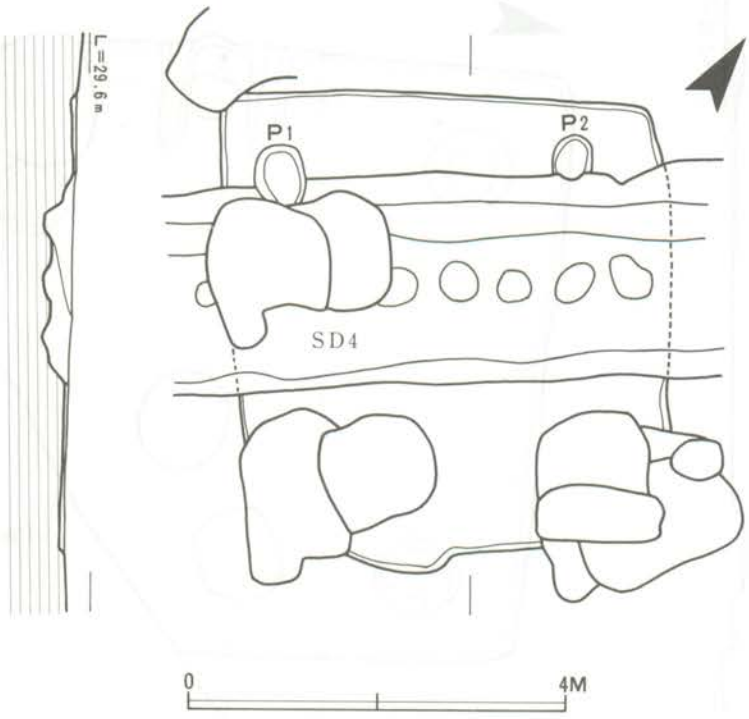
第382図　ＳＩ28出土紡錘車実測図（1/2）

ＳＩ29（第383・384図、ＰＬ150－２）

Ｃ－14グリッドに位置しており、ＳＤ４、ＳＢ34、65に大きく切られており、部分的に残存しているだけである。規模は南北4.8m、東西4.6mの南北にやや長く、いびつな方形を呈している。壁の遺存はきわめて悪く、４～５cm程である。壁溝は残存部分においては認められない。柱穴は２本検出された。規模はP_1が径60cm、深さ60cm、P_2が径44cm、深さ50cmである。床面はソフトローム面を利用して踏み固めているために堅緻である。床面は北から南へかけて傾斜している。

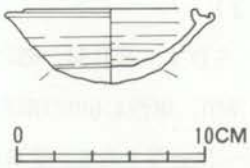
カマドは東辺か西辺にあったと思われるが不明である。

遺物は須恵器の杯身が１点出土している。



第383図　ＳＩ29実測図（1/80）

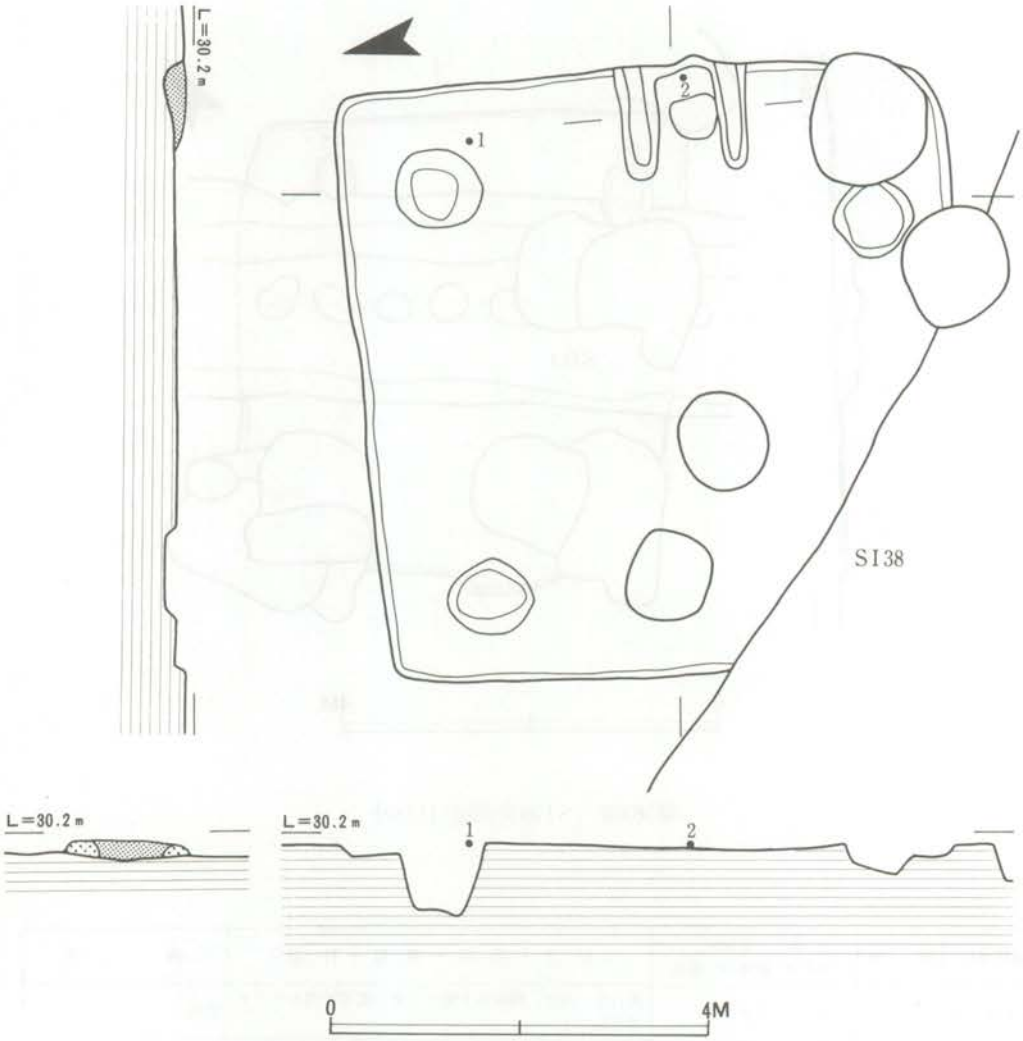
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ29－１	杯 （S）	9　×　3.9　×	灰白色、良好、回転ヘラ切り－Ｒ－底部手持ちヘラケズリ	完形



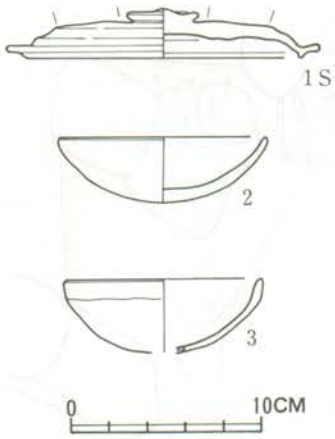
第384図　SI29出土土器
実測図（1/4）

ＳＩ30（第385・386図、ＰＬ166－２）

Ｃ－16グリッドに位置し、北西コーナー部分はＳＩ38と重複関係にあり、切っている。規模は南北6.4m、東西6.3mのやや隅丸の方形を呈し、主軸はＳ－85°－Ｅである。壁の遺存はあま



第385図　SI30実測図（1/80）



第386図　SI30出土土器
実測図（1/4）

りよくなく、16～20cmである。壁溝はない。柱穴は3本検出された。主柱穴として4本あったと思われるが、西南部分はＳＩ38と重複関係にあるため、検出できなかった。並び方はやや不揃いであるが、それぞれコーナーの対角線上には位置している。規模は径80cm前後で、深さはP_1が80cmあるほかは25cm前後である。床面はソフトローム面を利用しているが、踏み固めがなく、きわめて軟弱である。

カマドは東辺の中央よりやや南側に構築されている。規模は全長120cm、幅130cmである。袖は砂質粘土を20cm積み上げて構築されている。天井部等は崩壊している。掘り方は幅40cm、壁外へ10cmほど三角形に掘り込んでおり、傾斜角度は65°である。床面への掘り込みは最も深くて12cmで摺鉢状であり、焼土がかなり堆積している。

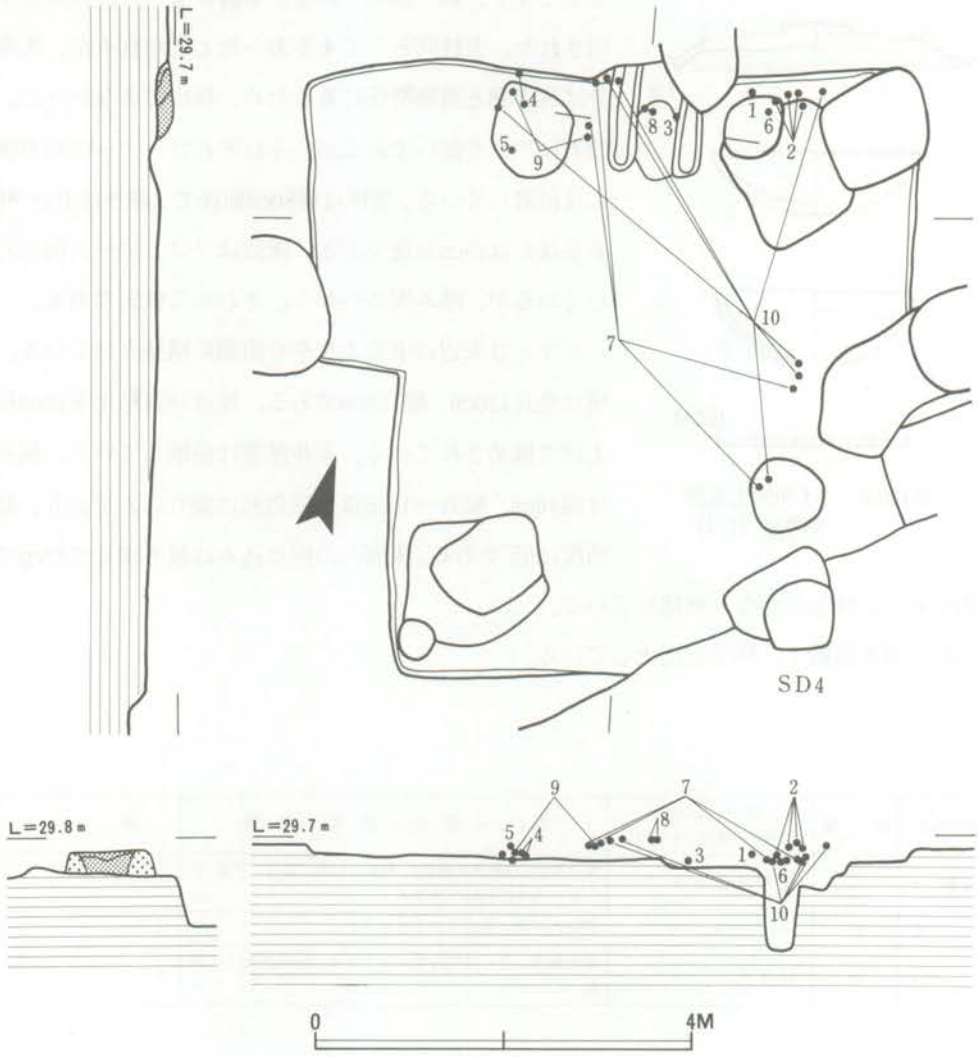
遺物は須恵器蓋1、杯2が出土している。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ30－1	蓋 (S)	16.5 × 2.5 ×	淡灰褐色(内面黄灰褐色)、長石、石英、雲母、不良、? －R－天井部回転ヘラケズリ	½
－2	杯	11 × 3.2 ×	茶褐色、良、全面ヘラミガキ	⅗
－3	杯	10.4 × ×	暗茶褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	¼

ＳＩ31（第387・388図）

Ｃ－14、15グリッドにまたがって位置し、南東コーナーをＳＤ4に、東辺部をＳＢ34、65に切られている。規模は南北6.4m、東西5.4mの南北に長い方形であるが、西辺の北側に3m×1mの張り出し部分がある珍しい形態の竪穴住居跡である。主軸はＮ－16°－Ｗである。壁の遺存は悪く、12～18cmである。壁溝、柱穴はない。床面はソフトロームを利用して中央部はよく踏み固めて堅緻であるが周辺は軟弱である。

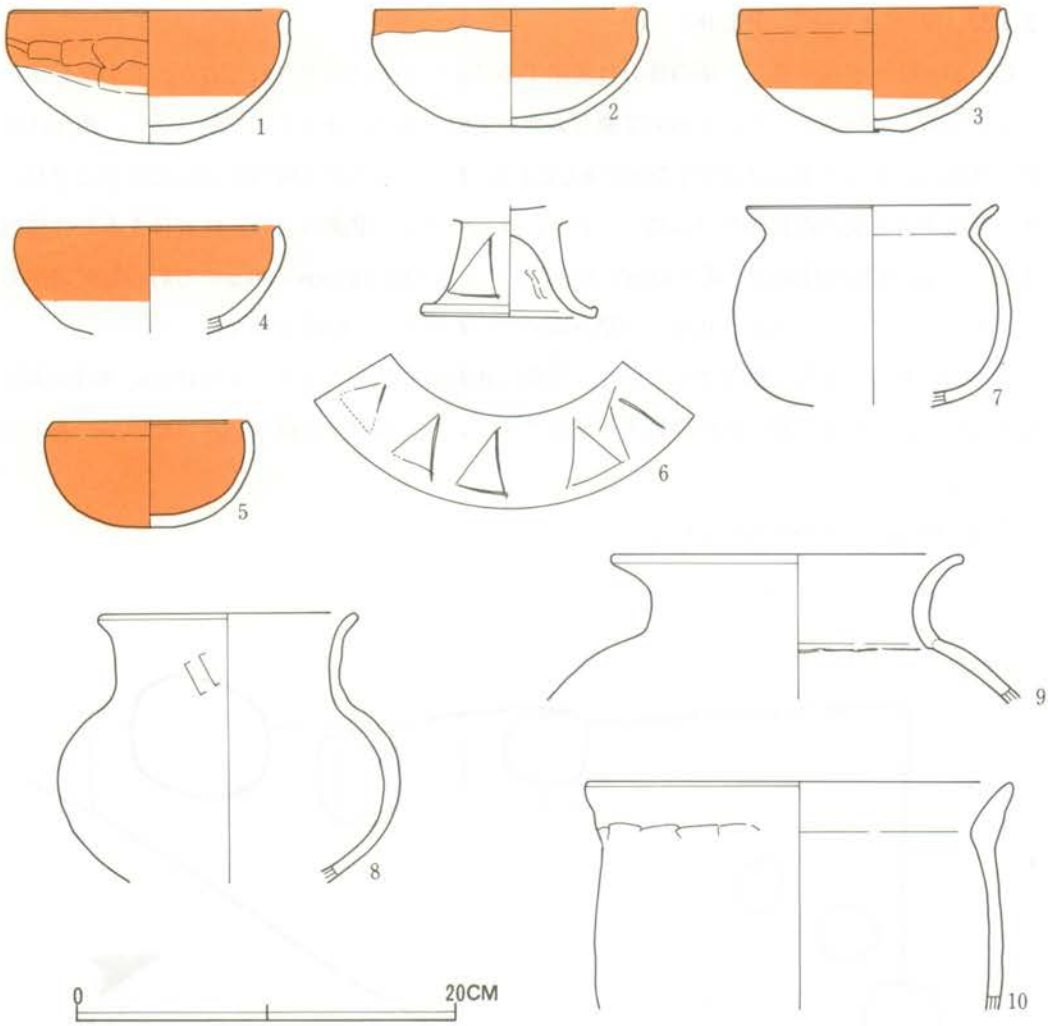
カマドは北辺のほぼ中央に構築されている。規模は全長120cm、幅100cmである。袖は砂質粘土を30cm積み上げて構築されている。天井部等は不明である。掘り方は幅120cm前後、壁外へ18cmほど半円状に掘り込んでおり、傾斜角度は50°である。床面への掘り込みはカマド内部においてはないが、手前で深さ15cm程のくぼみがある。しかしここには焼土等の堆積はみられない。



第387図　SI31実測図（1/80）

遺物はカマドの周辺に集中して土器が出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。杯5、高杯1、壺1、甕2、甑（？）1である。6の高杯は脚部に須恵器の三角透しを模したものである。ただし、線刻で三角形を表現しただけである。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI31－1	杯	14.6 × 6.8 ×	茶褐色、良好、ヘラケズリの後体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	ほぼ完形、赤彩



第388図　SI31出土土器実測図（1/4）

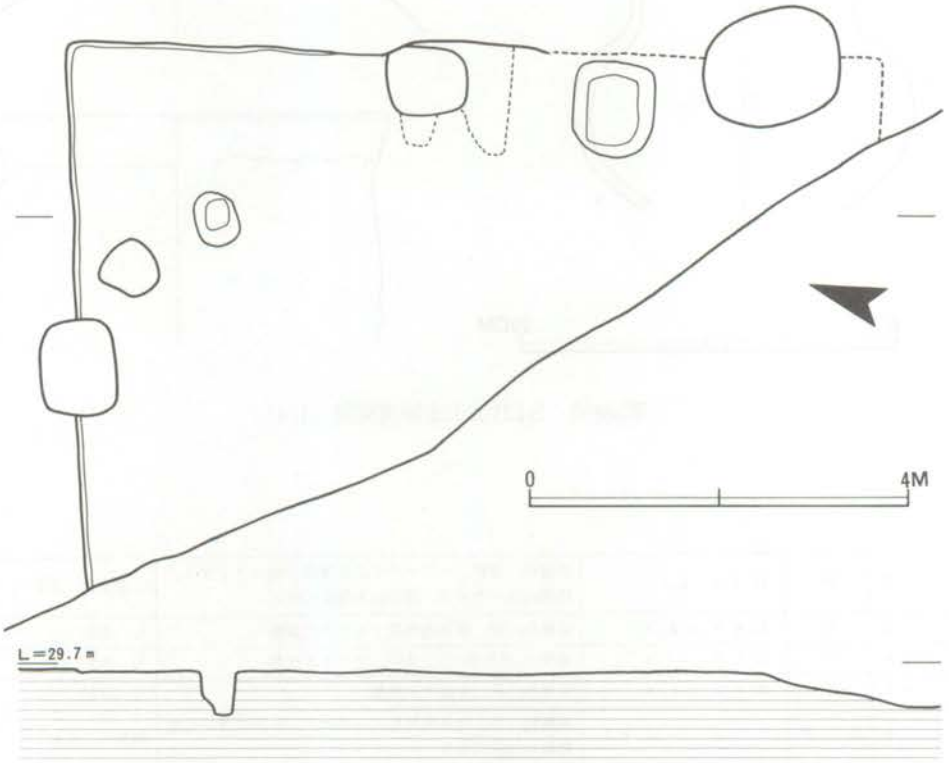
−2	杯	14.4 × 6 ×	茶褐色、良好、ヘラケズリの後体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ、底部に木葉痕が残る	ほぼ完形、赤彩
−3	杯	13.8 × 6.3 ×	茶褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	⅞、赤彩
−4	杯	13.6 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、全面ナデ調整	¼、赤彩
−5	杯	10.2 × 5.4 ×	黄褐色、良、全面ナデ調整	⅜、赤彩
−6	高　杯	× × 9.4	茶褐色、良、内外面ともにヘラナデ、外面に透し孔を意識した線刻有り	脚部⅚、赤彩
−7	甕	13.2 × ×	暗茶褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	⅓
−8	壺	13.6 × ×	暗黄褐色(内面暗褐色)、不良、全面ヘラナデ(ミガキ？)	底部欠失、⅓
−9	甕	18.5 × ×	黄褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	口縁部のみ
−10	甑？	22.4 × ×	茶褐色(黒斑有り)、良、体部内外面ともにヘラナデ	胴部上半½

ＳＩ32（第389・390図、ＰＬ167－１）

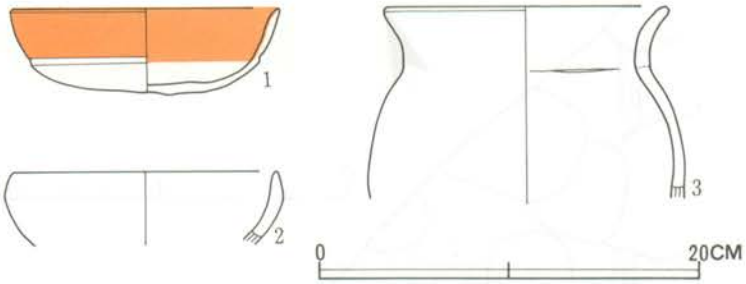
Ｃ－15グリッドに位置し、南西部分は道路工事によりすでに削平されており、北東部分がかろうじて残っているという、きわめて遺存の悪いものであり、ほとんど不明に近い。規模は床面の状況からすると南北は推定8.5m前後と思われ、おそらく大形の竪穴住居跡だったと思われる。壁は北辺と東辺の北側だけが残っており、５cmである。壁溝はない。柱穴は１本だけ検出されている。規模は径60cm、深さ50cmである。カマドの南側に100cm×90cmの方形の貯蔵穴がある。床面はソフトローム面を利用して踏み固めているがあまり堅緻ではない。

カマドは東辺の中央に構築されていた。規模は底面の痕跡からすると全長110cm、幅120cm前後あったと思われる。袖には砂質粘土が使用されていた。床面への掘り込みはないが、若干焼けている。

遺物は杯２、甕１が出土している。



第389図　SI32実測図（1/80）



第390図　ＳＩ32出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ32－1	杯	14.1 × 4.2 ×	茶褐色(黒斑有り)、良、体部外面、内面ともにナデ調整	⅚、赤彩
－2	杯	14 × ×	茶褐色、良、体部外面ナデ調整、内面へラナデ	体上半⅓
－3	甕	15 × ×	暗茶褐色、良、体部外面へラミガキ、体部内面ナデ調整	胴上半¾

ＳＩ33（第391・392図、ＰＬ167－２）

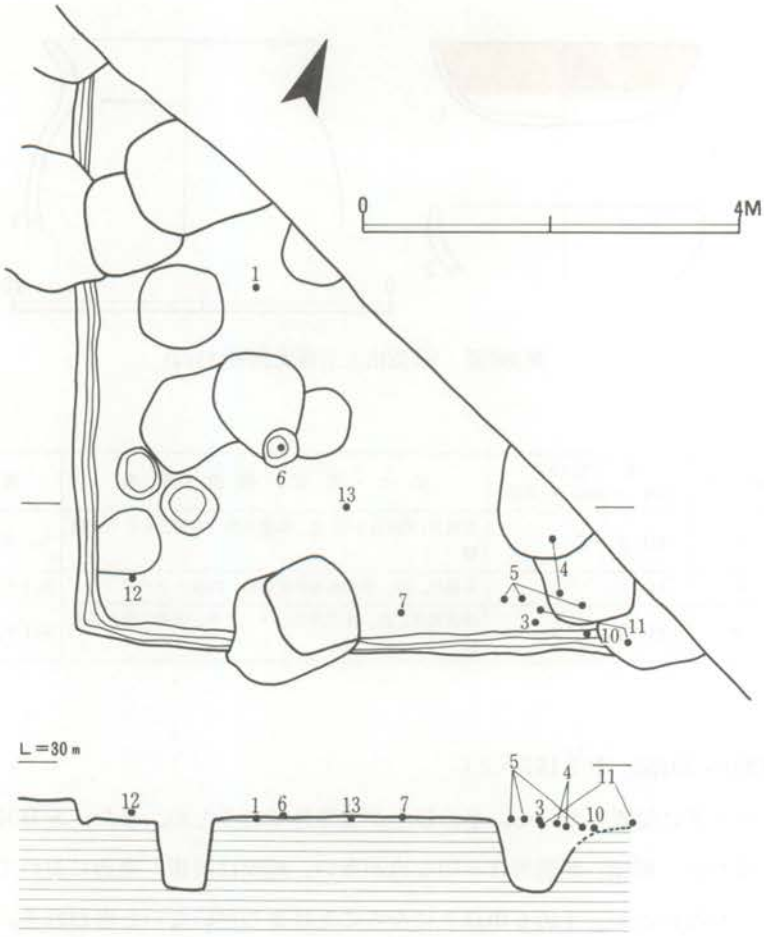
Ｃ－14グリッドに位置している。半分以上が境界外であるため、また、ＳＢ34、65によって切られているため、規模、形態等は不明な点が多い。規模は西辺、南辺において、まだ、カーブするところがないため、１辺６ｍ以上になることはまちがいないと思われる。壁は20cmぐらいの遺存である。立ち上がりは直線的ではあるが開きぎみである。壁溝は検出部分においてはすべてにある。幅は20～24cm、深さ10cm前後である。柱穴は南西コーナーに２本ある。規模は径56cm、深さ80cmである。この２本は１回の建替を示すものであろう。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは北辺か東辺に構築されていると思われるので、不明である。

覆土は単一な土層である。

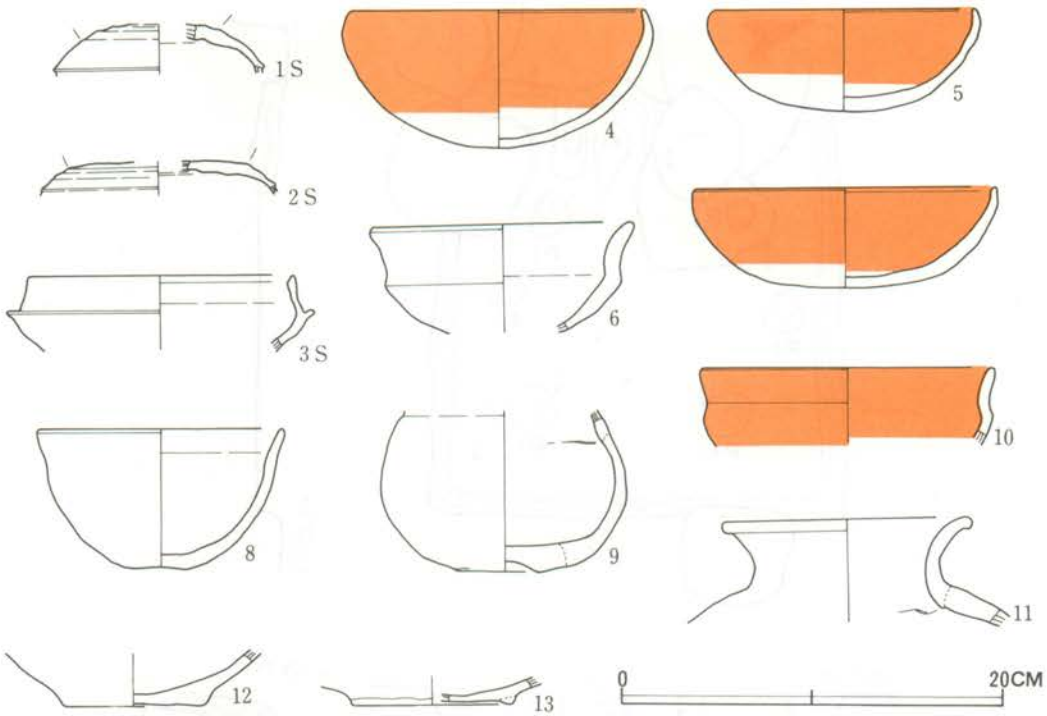
遺物は土器が床面に密着した状態で散乱して出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋２、須恵器杯１、杯５、鉢１、坩（？）１、甕３である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ33－1	蓋 （S）	× ×	灰青色、堅緻、？－Ｒ－天井部回転へラケズリ	⅛



第391図　SI33実測図（1/80）

−2	蓋（S）	× ×	灰青色、堅緻、？−L−天井部回転ヘラケズリ	1/10
−3	杯（S）	14 × ×	灰褐色、堅緻、？−？−？	1/8
−4	杯	15.6 × 7.1 ×	茶褐色、全面ナデ調整	1/4、赤彩
−5	杯	13.8 × 5.3 ×	黄褐色、全面ナデ調整	3/4、赤彩
−6	杯	14 × ×	暗黄褐色、良、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	1/3
−7	杯	16 × ×	茶褐色、良、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	1/4、赤彩
−8	鉢	13 × 7.2 × 5	黄褐色、良好、体部外面ヘラミガキ・体部内面ヘラナデ	1/3
−9	坩　？	× × 3.2	黒褐色、不良、内外面ともにナデ調整、凹み底	口縁部欠失、1/3
−10	杯	15.4 × ×	黄褐色、良、体部外面ナデ調整	口縁部3/4
−11	甕	13 × ×	黄褐色（黒斑有り）、良、体部内外面ナデ調整	口縁部1/6
−12	甕	× × 7.4	暗黄褐色、良、外面ナデ調整、内面ヘラナデ	底部のみ
−13	甕	× × 8.6	暗赤褐色、不良、外面ナデ調整、内面ヘラナデ	底部1/2



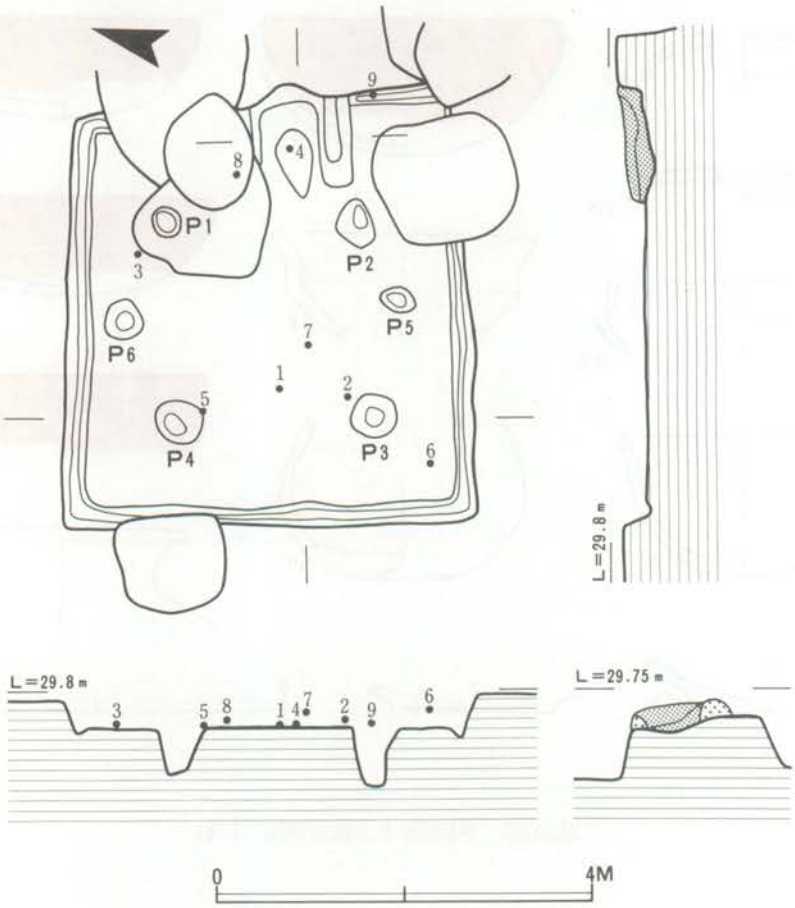
第392図　ＳＩ33出土土器実測図（1/4）

ＳＩ34（第393・394図、ＰＬ168－１）

Ｂ－15、Ｃ－15グリッドにまたがって位置し、ＳＢ38等に切られている。規模は東西4.7m、南北4.3mの東西にやや長い方形を呈し、主軸はＮ－76°－Ｅである。壁の遺存は良好な方で20～30cmある。立ち上がりは直線的であるが、だいぶ外に開きぎみである。壁溝はカマド部分を除いて全周している。幅16～30cm、深さ10～15cmである。柱穴は６本検出された。P_1～P_4の４本が主柱穴で、２ｍ等間で並んでいる。規模は径45cm前後、深さ55cm前後である。P_5、P_6は支柱穴で、主柱穴の並びの外側に位置している。規模は径40cm、深さ30cm前後である。床面はハードローム面を利用して、暗褐色土とロームの混合土を踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは東辺のほぼ中央に構築されている。左側の袖がＳＢ38に切られているので正確な規模は不明であるが、全長、幅ともに120cm前後と思われる。袖は砂質粘土を20cm積み上げて構築されている。天井等は崩壊しているため不明である。掘り方は幅70cm、壁外へ20cmほど三角形に掘り込んでおり、傾斜角度は80°である。床面への掘り込みは深いところで10cmで擂鉢状を示している。底面はよく焼けており、焼土も堆積している。

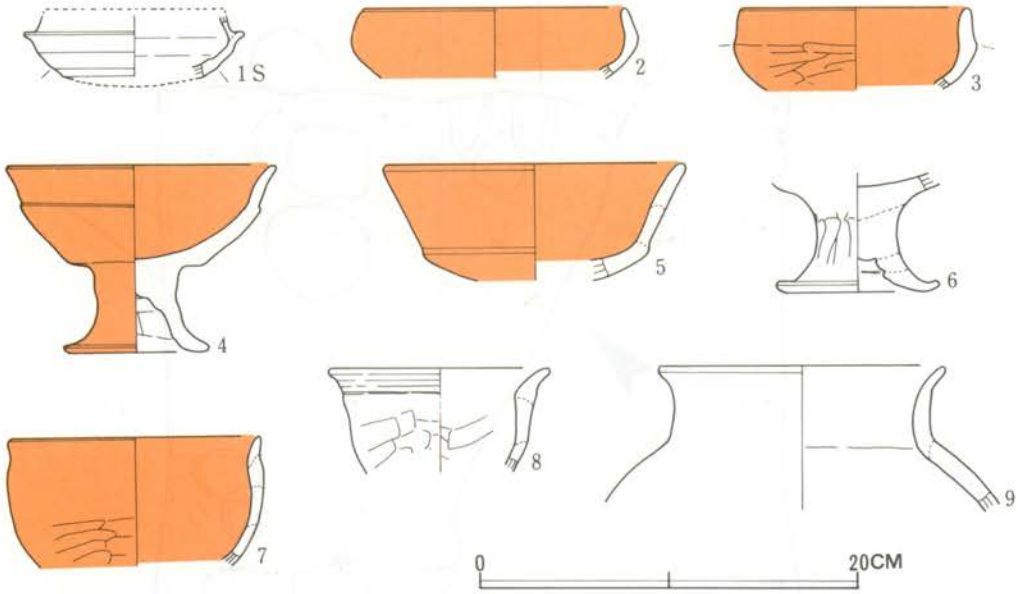
覆土は自然堆積の状態をよく呈している。



第393図　SI34実測図（1/80）

遺物は土器が散乱した状態で出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯1、杯2、高杯3、壺、鉢、甕各1である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI34－1	杯 (S)	× ×	灰褐色、堅緻、?－L一体部下半以下回転ヘラケズリ	⅙
－2	杯	14 × ×	暗褐色、雲母、不良、体部外面ナデ調整、内面ヘラナデ	底部欠失、⅓、赤彩
－3	杯	12 × ×	淡茶褐色、良好、体部外面ヘラケズリ	底部欠失、⅓、赤彩
－4	高　杯	14.3 × 9.7 × 7.8	淡茶褐色、赤色不好、良、杯体部～胴部ヘラケズリの後、外面～底部内面をナデ調整	ほぼ完形、赤彩
－5	高　杯	16 × ×	淡茶褐色、良好、体部外面ナデ調整	杯部¼、赤彩
－6	高　杯	× × 8.6	淡茶褐色、良、杯体部外面～脚部	杯体部上半欠失、赤彩



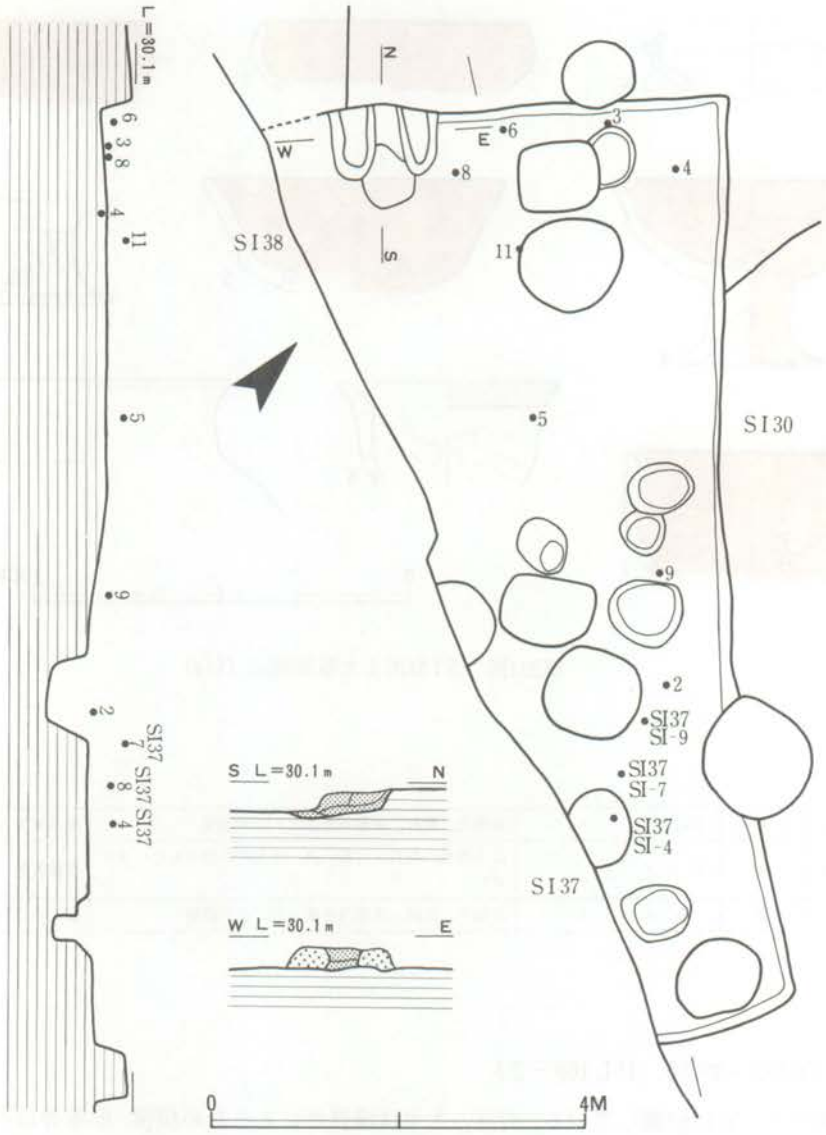
第394図　ＳＩ34出土土器実測図（1/4）

－7	壺	13.3 × ×	黄褐色、良好、体部内外面ともナデ調整	底部欠失、赤彩
－8	鉢	11.8 × ×	淡茶褐色、長石・石英、良、体部内外面ともにヘラケズリ	底部欠失
－9	甕	15 × ×	赤褐色、良好、体部内外面ともにナデ調整	胴上半のみ

ＳＩ37（第395～397図、ＰＬ168－２）

Ｄ－16グリッドに位置している。南側の大半は境界外にあるため規模、形態等は不明である。また、ＳＩ38と重複関係にあるが、ＳＩ30に切られているためにその先後関係は不明である。そのうえにＳＢ41、42に切られている。壁は比較的良好な遺存で36cm前後である。立ち上がりは直線的で、やや外に開きぎみである。柱穴らしきものはあるが、掘立柱建物と重複関係にあるため、断定するのが難しい。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。ただ、ＳＩ38との境界ははっきりしないが、段差は20cm近いものがある。

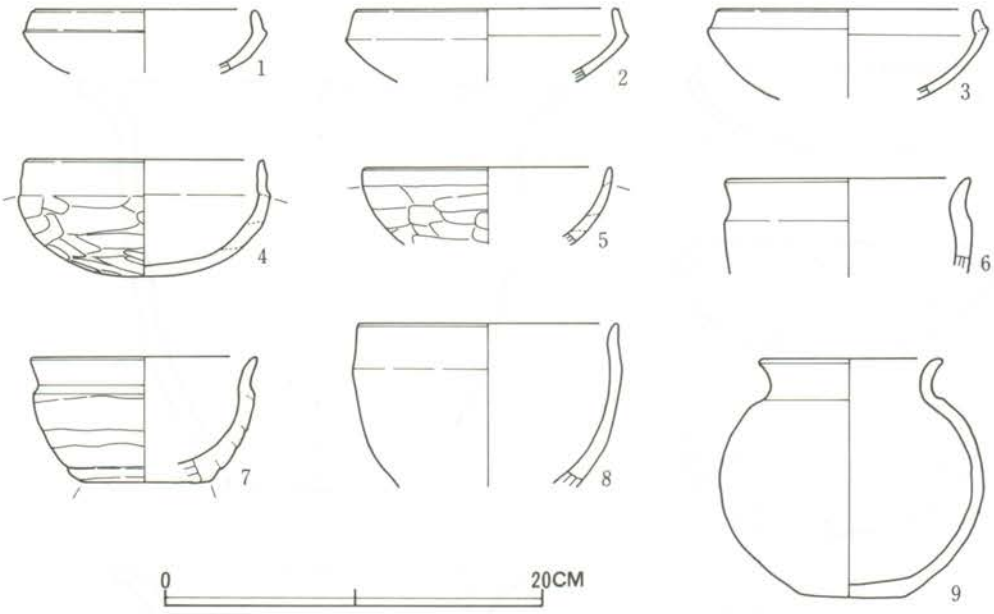
遺物は土器と土玉が床面より浮いた状態で出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯５、甕３、壺１である。土玉は径1.8cm前後の小形のものが２点出土している。



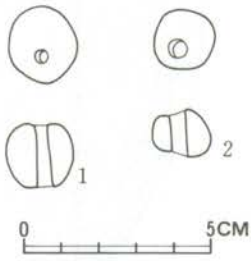
第395図　SI 37・SI 38実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI 37－1	杯	11.8 ×　　×	茶褐色（内面暗褐色）、良、体部外面ナデ調整	体上半½
－2	杯	13.8 ×　　×	暗茶褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅛
－3	杯	13.8 ×　　×	暗茶褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅛
－4	杯	12.6 × 6.1 × 3.2	黄褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	¼
－5	杯	13.2 ×　　×	暗茶褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	底部欠失、¼

－6	甕	12.8 × ×	黄褐色、良、体部外面ナデ調整	口縁部、⅓
－7	壺	11.9 × 6.4 × 7	茶褐色（黒斑有り）、良、体部内外面ともにナデ調整	⅓
－8	甕	13.8 × ×	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部内外ともにヘラミガキ	底部欠失、¼
－9	甕	9.7 × 7.3 × 5.5	暗黄褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	ほぼ完形



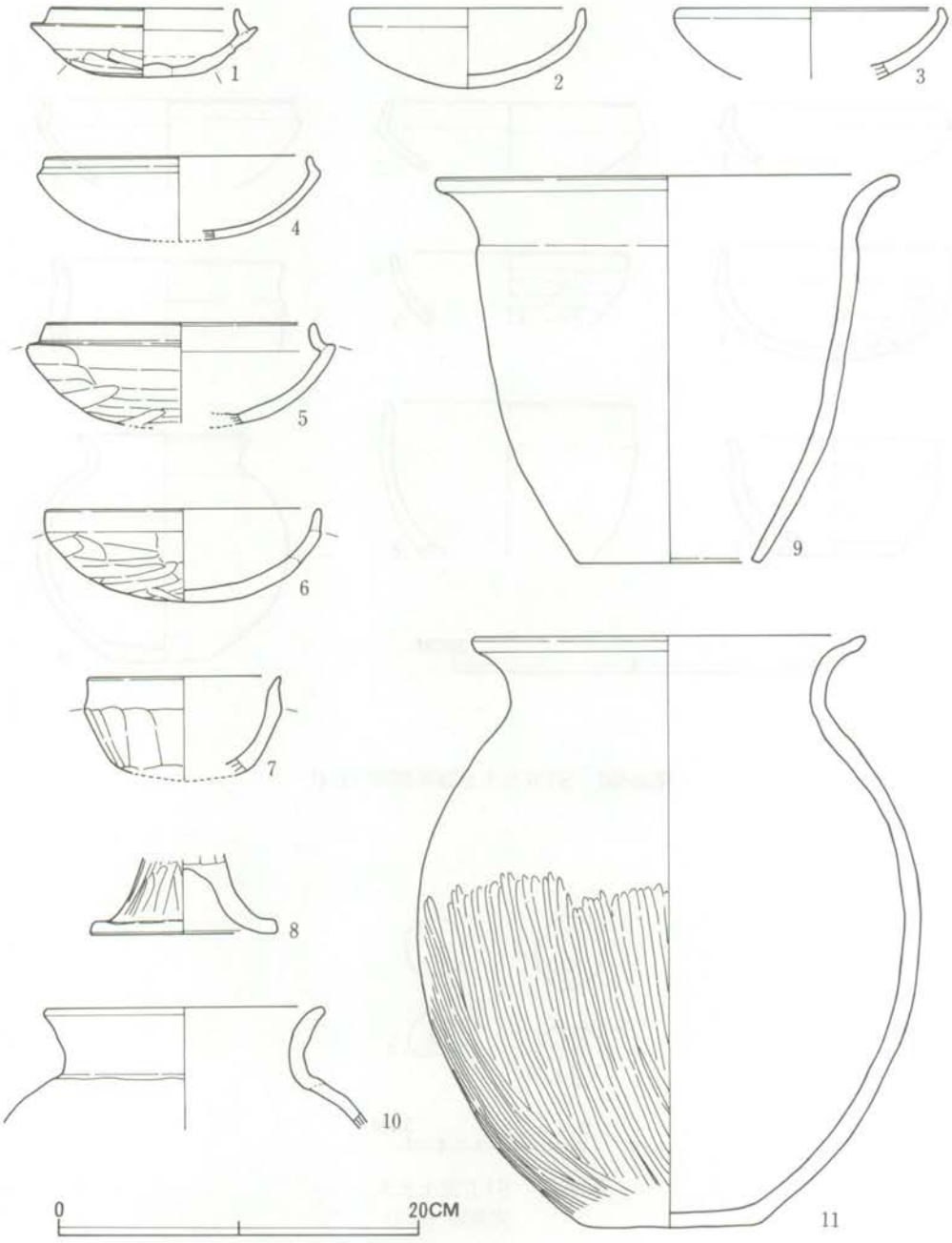
第396図　SI37出土土器実測図（1/4）



第397図　SI37出土土玉
実測図（1/2）

ＳＩ38（第395、398、399図、ＰＬ168－２）

Ｄ－16グリッドに位置し、ＳＩ37の西側で重複関係にある。さらに西側でＳＩ46を切っている。そのため、ＳＩ37と同様に規模、形態等も不明である。主軸はＮ－41°－Ｗである。壁はわ



第398図　ＳＩ38出土土器実測図（1/4）

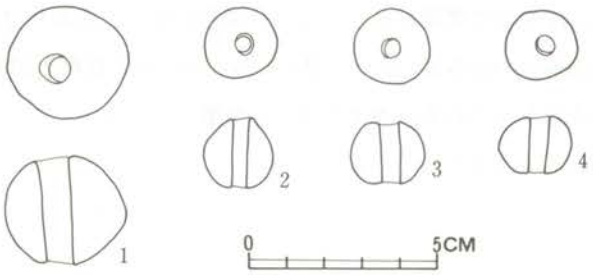
りと良好で40cm前後の遺存である。立ち上がりも直線的で垂直に近い。壁溝はない。柱穴らしきものはあるが、判名しない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

カマドは西辺に構築されている。規模は全長80cm、幅115cmである。袖は砂質粘土を25cmほど積み上げて構築している。天井等は崩壊していて不明である。掘り方は幅120cm、壁外へ10cmほど三角形に掘り込んでおり、傾斜角度は70°である。床面への掘り込みは径60cm、深さ10cmの摺鉢状を呈し、焼土が堆積している。

覆土は上面の攪乱が多いが、おそらく単一の土層と思われる。

遺物は土器と土玉が西辺に散乱した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器杯１、杯５、甕２、高杯、椀、甑各１である。土玉は４点出土している。１は径3.2cmの大形品であるが、他の３点は径２cm前後の小形品である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ38－１	杯 （Ｓ）	10.4 × 3.6 ×	灰褐色、長石・石英、良好、？－Ｒ－底部手持ちヘラケズリ	⅓
－２	杯	13.2 × 4.2 ×	暗茶褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、内面底部ナデ調整	⅔、黒色処理
－３	杯	14.3 × ×	淡茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面ナデ調整の他はヘラミガキ	⅓
－４	杯	14.6 × ×	暗褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともヘラミガキ	½
－５	杯	14.8 × ×	黒色、良、体部内外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	½
－６	杯	15.2 × 5 ×	茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	ほぼ完形
－７	椀	10.6 × × 7.7	黄褐色、良、体部外面ヘラケズリ・内面ナデ調整	¾
－８	高　杯	× × 10.4	淡黄褐色、良、内外面ともナデ調整	脚部⅔、赤彩
－９	甑	25.8 × 20.8 × 10	淡黄褐色(内面スス付着痕有り)、良、体部内外面ともにナデ調整	⅔
－10	甕	15.6 × ×	黄褐色（内面黒色)、良、体部内外面ともにナデ調整	⅓
－11	甕	21.8 × 22.5 × 10.2	淡黄褐色（黒斑有り)、長石・石英・雲母、体部ナデ調整の後外面下半ヘラミガキ	¾

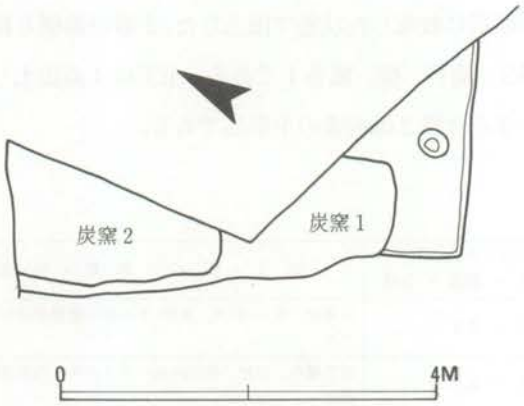


第399図　ＳＩ38出 土土玉実測図（1/2）

ＳＩ39（第400図、ＰＬ171－１）

Ｂ－15グリッドに位置している。大部分が境界外にあり、また、検出した部分の大方が現代の炭窯２基に攪乱されているため、規模、形態等は不明である。壁は一部分が遺存しているが、30cmほどで、立ち上がりは直線的で垂直に近い。壁溝はない。柱穴は１本検出されている。径30cmで深さ30cmの規模の小さいものである。床面はハードローム面を利用して、暗褐色土とロームの混合土をよく踏み固めており、非常に堅緻である。

遺物はなにもない。



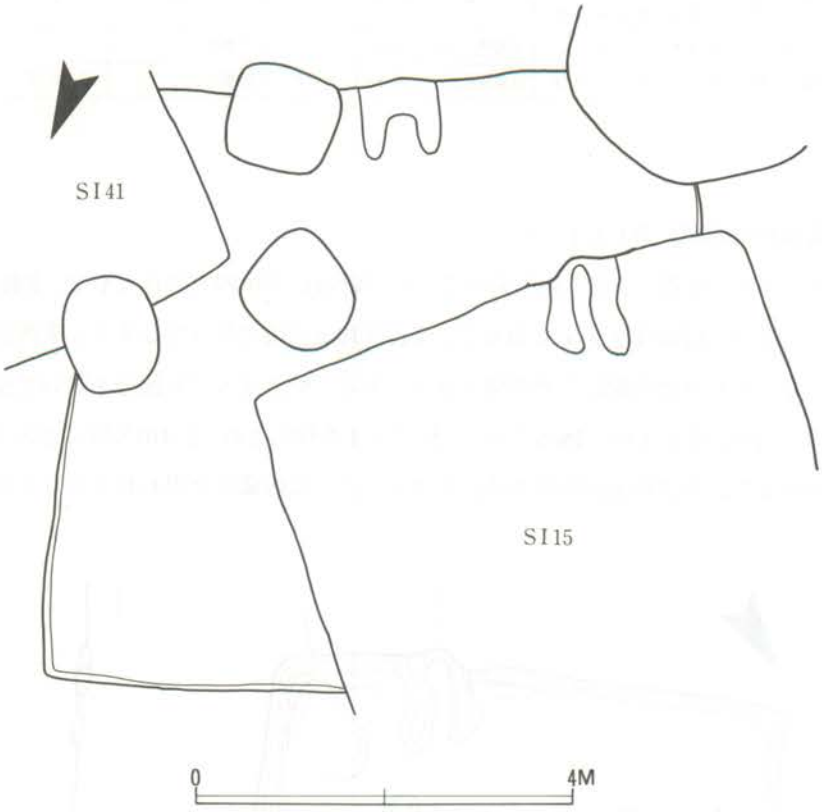
第400図　ＳＩ39実測図（1/80）

ＳＩ40（第401・402図、ＰＬ159－２）

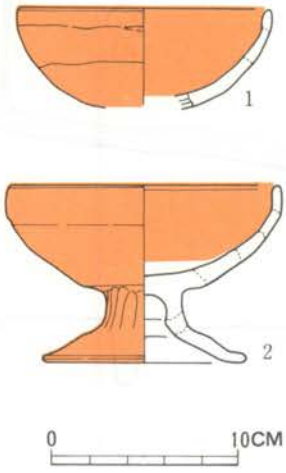
Ｄ－13グリッドに位置し、ＳＩ41、42、ＳＥ３、ＳＢ１に切られており、また道路の下にあったためきわめて遺存が悪い住居跡である。規模は東西6.8m、南北6.3mの東西にやや長い方形を呈しており、主軸はＳ－16°－Ｅである。壁の遺存はきわめて悪く、あるところで５cm前後である。南辺はかろうじてあるにすぎない。壁溝、柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

カマドは南辺のほぼ中央に構築されていたが、遺存が悪く、底面だけが確認できた。それによると、規模は全長80cm、幅85cmぐらいと思われる。袖には砂質粘土が使用されていた。壁外、床面への掘り込みは若干みられる。焼土がすこし堆積している。

遺物は杯、高杯が各１点出土している。



第401図　SI40実測図（1/80）

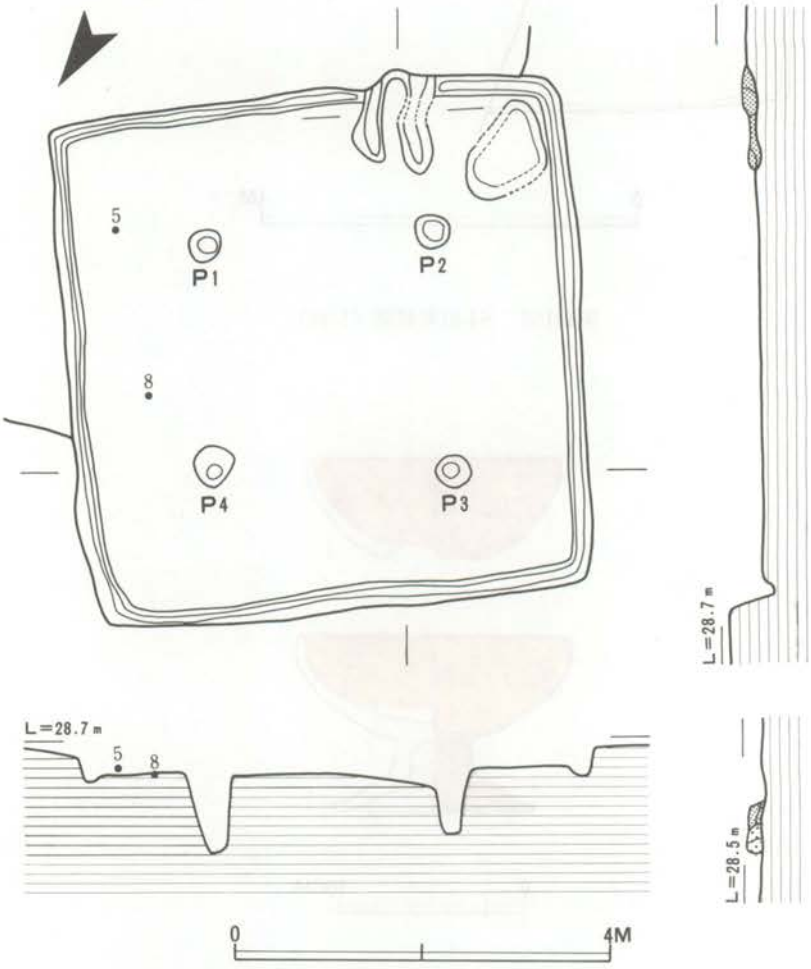


第402図　SI40出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ40－1	杯	13.4 ×　　×	黄褐色、良好、体部内外面ともにナデ調整	¼
－2	高　杯	14.3 × 9.4 × 10.8	暗黄褐色、良、杯体部～脚柱部ナデ調整	9/10、赤彩

ＳＩ41（第403～405図、ＰＬ171－２）

Ｄ－13グリッドに位置し、ＳＩ40を切っている。規模は5.5m四方の正方形で、主軸はＳ－33°－Ｅである。壁は北辺は残りがよく30cmで、南辺は10cm前後になってしまう。東西辺は20cm前後である。立ち上がりは直線的でやや開きぎみである。壁溝はカマド部分を除いて全周している。幅は20～25cm、深さは10～18cmである。柱穴は４本検出され、2.4m等間に並んでいる。規模は径40cm前後で、深さ80cm前後である。南西コーナーに貯蔵穴と思われるピットがある。径



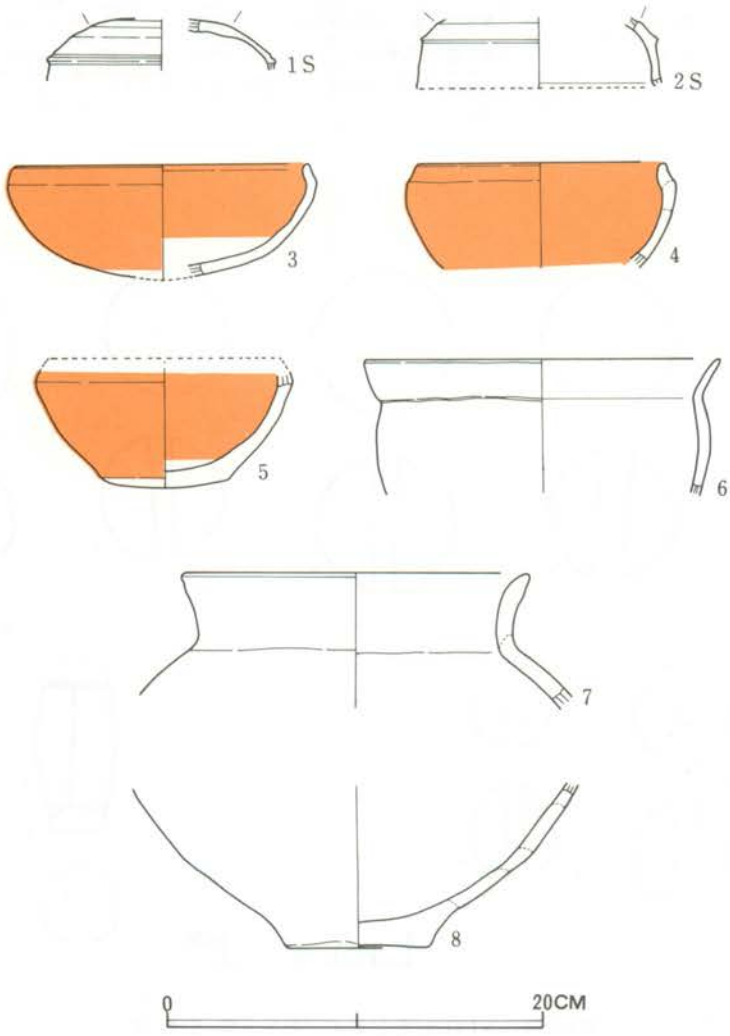
第403図　ＳＩ41実測図（1/80）

１ｍの不整形をなし、深さは60cmである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために非常に堅緻である。

カマドは南辺の中央より西側によったところに構築されている。規模は全長115cm、幅80cmである。袖は砂質粘土を20cm積み上げて構築されている。掘り方は幅60cm、壁外へ15cmほど三角形に掘り込んでいる。床面への掘り込みは５cm前後の浅い摺鉢状を呈して、焼土が堆積している。

覆土は２層に分層でき、人為的に埋められている。

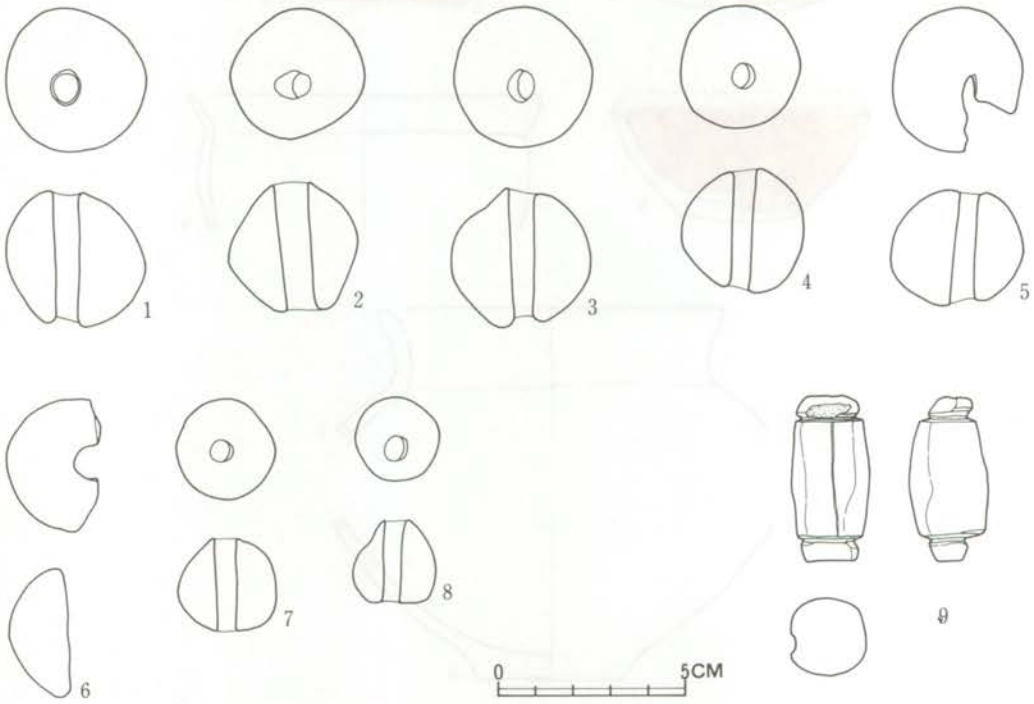
遺物は土器、土玉、石製品が出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋２、杯１、椀２、甕３である。土玉は８点出土している。１～６は径3.5cm前後の大形品で、７、８



第404図　ＳＩ41出土土器実測図（1/4）

は径2.5cmの小形品である。９は滑石製の滕（ちきり）の模造品と思われる。全長4.5cmで胴の最大径は２cmである。両端には切り込みが一周している。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ41－１	蓋 （S）	×　×	灰褐色、堅緻、？－Ｌ－天井部回転ヘラケズリ	⅙
－２	蓋 （S）	(13)　×　×	灰褐色、堅緻、？－？－天井部回転ヘラケズリ	⅒
－３	杯	15.5　×　5.8　×	黄褐色、良好、体部外面ナデ調整、体部外面ヘラミガキ	½、赤彩（体上半）
－４	椀	13　×　×	暗褐色、不良、体部外面ヘラケズリ	底部欠失、⅓、赤彩
－５	椀	×　×　6.8	暗褐色、不良、体部内外面ともにナデ調整	¼口縁部欠失
－６	甕	18.9　×　×	黄褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	⅓、赤彩（外面）
－７	甕	18.4　×　×	暗茶褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともナデ調整	口縁部⅓
－８	甕	×　×　7.8	暗褐色、不良、体部外面ナデ調整、底部ヘラケズリ、内面ヘラナデ	底部¾



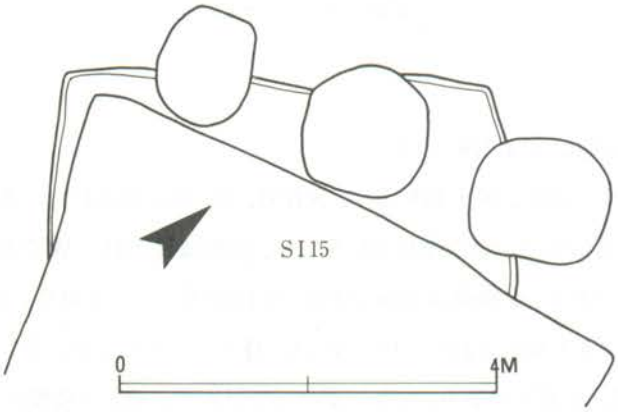
第405図　ＳＩ41出土土玉・石製品実測図（1/2）

ＳＩ42（第406図、ＰＬ159－２）

Ｄ－13グリッドに位置し、ＳＩ15、ＳＢ１に大きく切られて一部分が残存している住居跡で、規模、形態等は不明である。北辺の１辺が4.6mあるので、おそらくこの規模の方形と思われる。壁は10cm前後の遺存である。壁溝、柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

カマドは不明である。

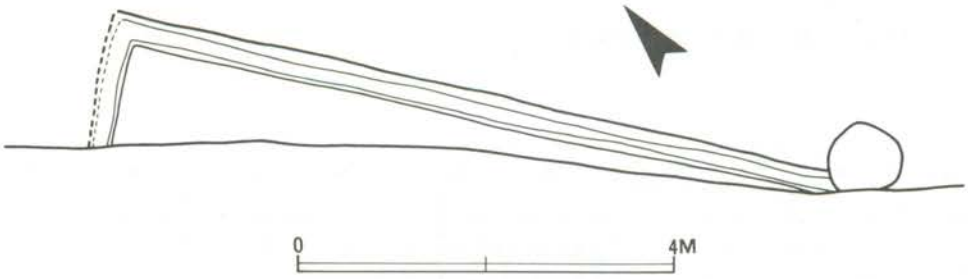
遺物はない。



第406図　ＳＩ42実測図（1/80）

ＳＩ43（第407・408図）

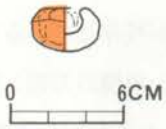
Ｅ－13グリッドに位置している。調査したのは東辺の１部分で他は境界外であるため、規模、形態等はまったく不明である。壁は30cm程の遺存で良好な部類である。壁溝はある。幅は30cm前後で、深さ10cm前後である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻であ



第407図　ＳＩ43実測図（1/80）

る。本住居は火災にあったと思われ、炭化材が多く出土した。

遺物は手捏土器が1点である。



第408図　SI43出土手捏土器
実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI43－1	手　捏	× 2.2 ×	黄褐色、良、ユビオサエ	完形、赤彩

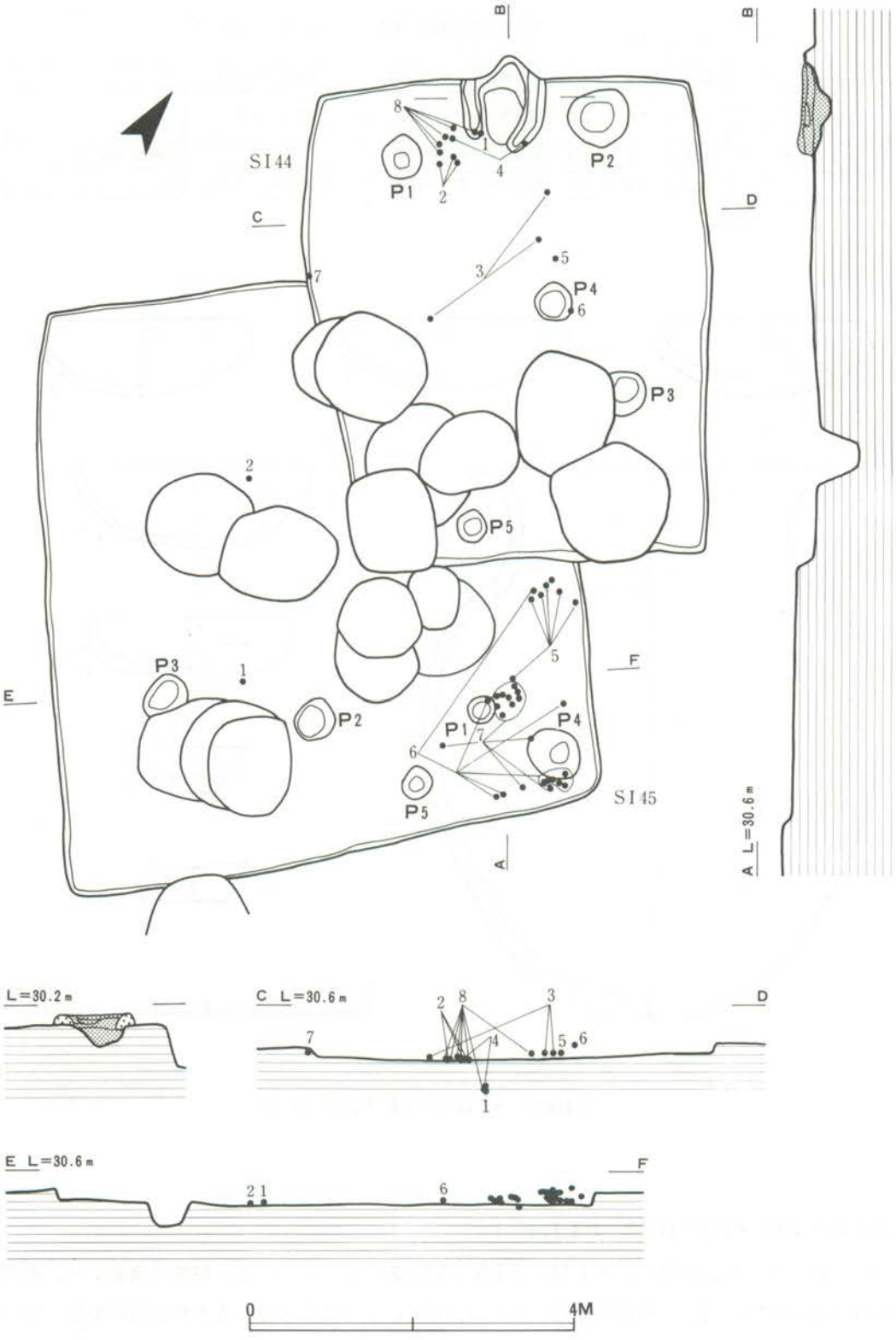
SI44（第409・410図、PL176－1）

C－16グリッドに位置し、SI45を切り、SB53、59、60に切られている。規模は南北5.8m、東西5mの南北に長いややいびつな長方形を呈し、主軸はN－34°－Wである。壁は北半分は残りが悪く10cm程度であるが、南側は20cmである。壁は崩壊しかけており、遺存はきわめて悪い。壁溝はない。柱穴は5本検出された。P_1～P_3は主柱穴と思われるが、並びが不揃いである。特にP_2はカマドの脇に位置しており、大きくずれるのであるが他より規模が一回り大きく径70cmである。他は50cm前後で、深さは40cm前後である。P_4、P_5は支柱穴と思われるが、やはり位置的にずれているように思われる。規模は径45cm前後で、深さは40cm前後である。床面はソフトローム面を利用して踏み固めているが、中央部だけが堅緻であるが、周辺は軟弱である。

カマドは北辺のほぼ中央に構築されている。規模は全長120cm、幅110cmである。袖は砂質粘土を20cm積み上げて構築されている。天井部等は不明である。掘り方は幅70cm、壁外へ30cm三角形に掘り込んでおり、傾斜角度は60°である。床面への掘り込みは70cm×60cmの楕円形を呈し、一番深いところは24cmになる摺鉢状のピットである。この掘り込み底面と周辺によく焼けており、焼土も多く堆積している。

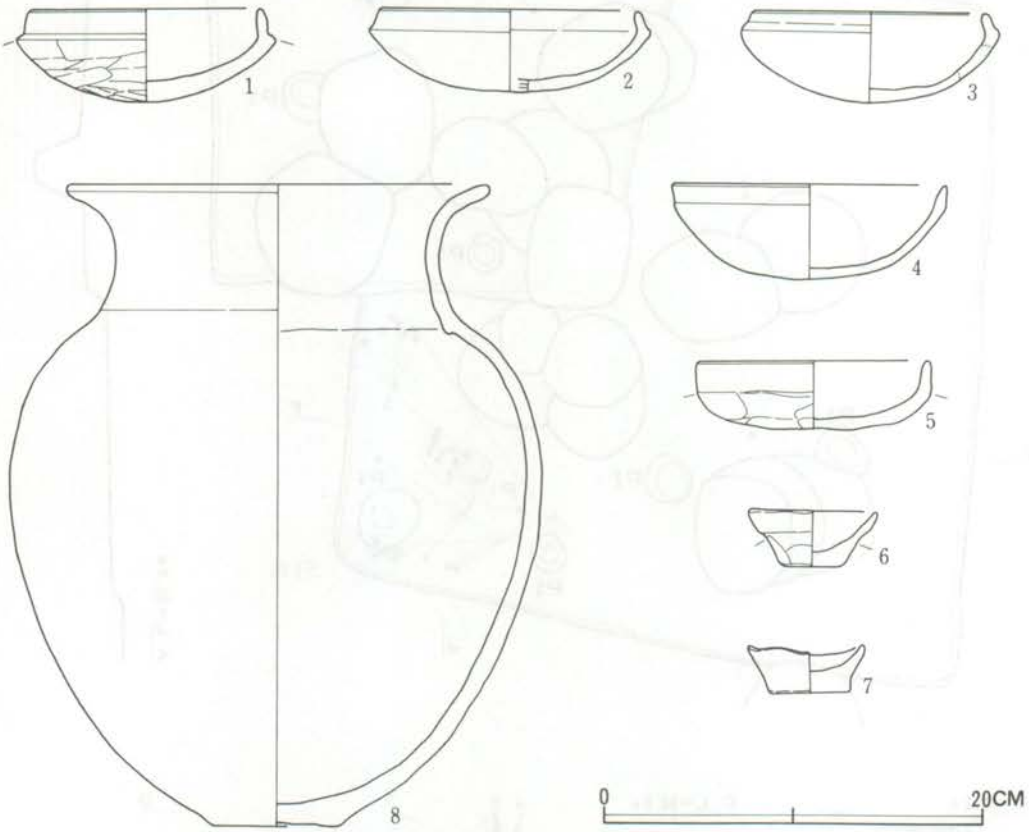
遺物は土器がカマド周辺と中央部に散乱して出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯5、手捏土器2、甕1である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI44－1	杯	12.2 × 4.6 ×	暗褐色、良好、体部外面ヘラケズリの他はヘラミガキ	ほぼ完形
－2	杯	13.7 × 4.2 ×	茶褐色（内面暗褐色）、良好、全面ヘラミガキ	¼
－3	杯	12.2 × 4.5 ×	茶褐色(黒斑有り)、良、体部内外面ともにヘラミガキ	¾



第409図　SI44・SI45実測図（1/80）

−4	杯	14.5 × 4.8 ×	黄褐色(内面暗褐色、黒斑有り)、良、体部内外面ともにヘラミガキ	½
−5	杯	12.2 × 3.6 ×	淡茶褐色（スス付着痕有り）、良、全面ヘラミガキ	½
−6	手捏 ミニチュア	6.8 × 2.8 × 3.6	明褐色、良好、口縁部ヘラナデ、体部ヘラケズリ	
−7	手捏	(6.3) × 3.4 × 4.4	明茶褐色、良、ナデのみ	口縁部一部欠失
−8	甕	2.2 × 32.6 × 6.6	暗黄褐色、長石・石英、不良、体部内外面ナデ調整	¼



第410図　SI44出土土器実測図（1/4）

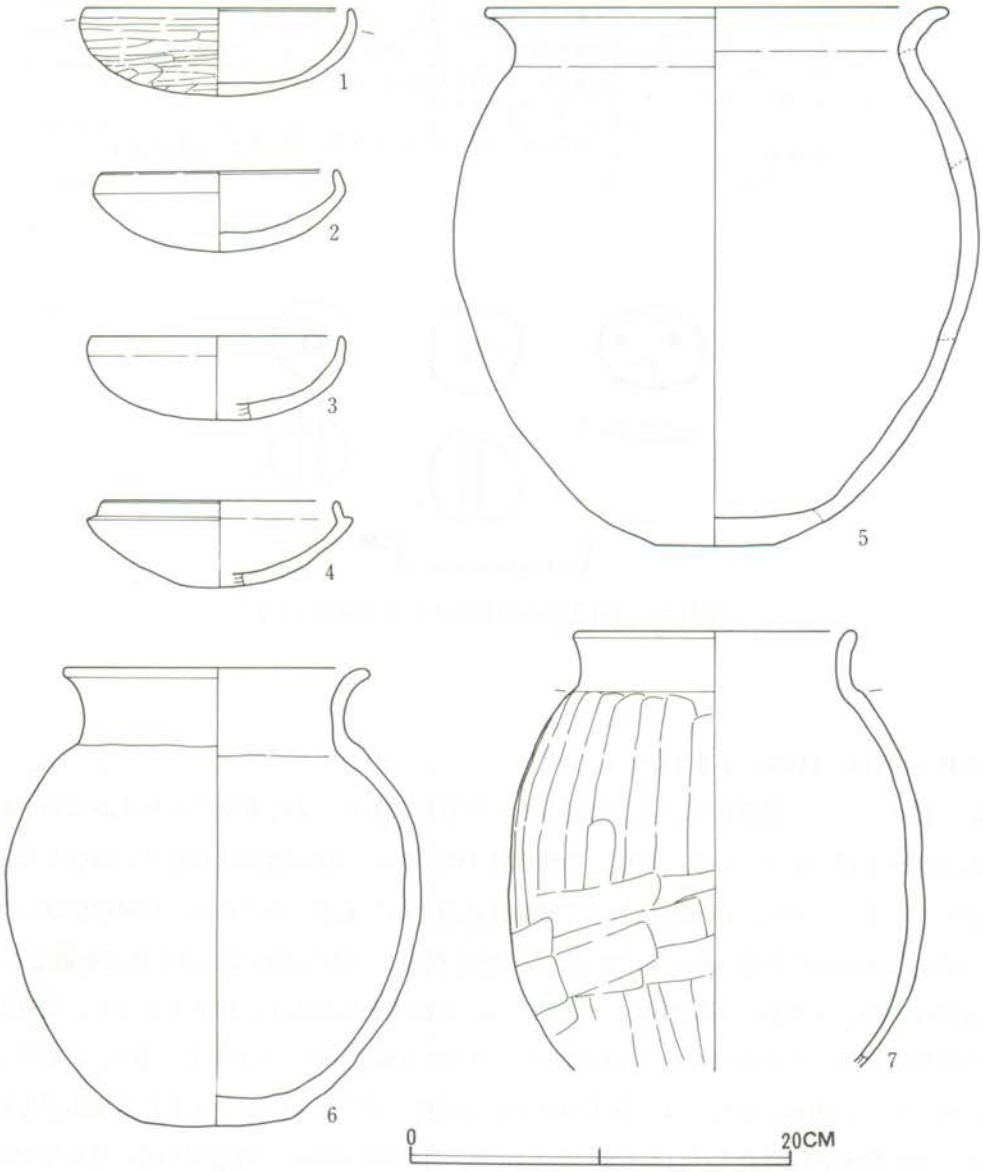
S I 45（第409・411・412図、P L176−1）

C−16グリッドに位置し、S I 44、S B53、59、60に切られている。規模は南北7m、東西6.6mの南北にやや長く、西辺が他辺より長いためにいびつになっている不整な方形を呈している。壁の遺存は東西辺は立ち上がりもしっかりとしており20cmあるが、南北辺は遺存が悪く10cm前後である。壁溝はない。柱穴は5本検出されている。P_1とP_3は主柱穴を構成するものであ

る。規模は小さく、径40cm前後、深さ40cm前後である。P_2は支柱穴である。P_4、P_5も支柱穴と思われる。P_4は径70cm、深さ60cmで一回り大きい。床面はソフトローム面を利用して中央部だけを踏み固めているため、周辺は軟弱である。

カマドは不明であるが、東辺の北に寄ったあたりに構築されていたと思われる。

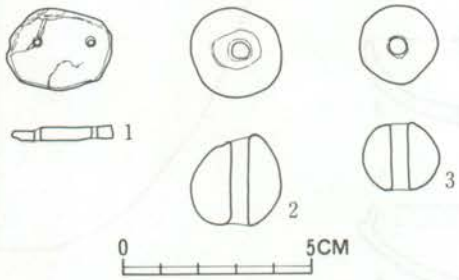
遺物は土器、石製品、土製品が南東コーナーに集中して出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯４、甕３である。石製品は滑石製の双孔円板である。大きさは2.7cm×2.3



第411図　ＳＩ45出土土器実測図（1/4）

cmの楕円形を呈し、厚さは３㎜である。孔は径２㎜である。土玉は径3.5cmの大形品１個と径２cmの小形品１個である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ45－１	杯	14 × 4.4 ×	暗褐色、良好、全面ヘラミガキ	¼
－２	杯	12.4 × 4.1 ×	淡茶褐色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	½
－３	杯	13.2 × ×	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	¼
－４	杯	12.2 × ×	茶褐色（内面黒色）、良好、体部内外面ともにミガキ	⅓
－５	甕	24.3 × 27.6 × 7前後	暗褐色(黒斑有り)、不良、体部内外面ともにナデ調整	⅛
－６	甕	16 × 23.8 × 8	暗黄褐色、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラケズリの後上半をヘラナデ	¾
－７	甕	14.8 × ×	赤褐色、良、体部ヘラケズリの後体部内面上半をヘラナデ	底部欠失

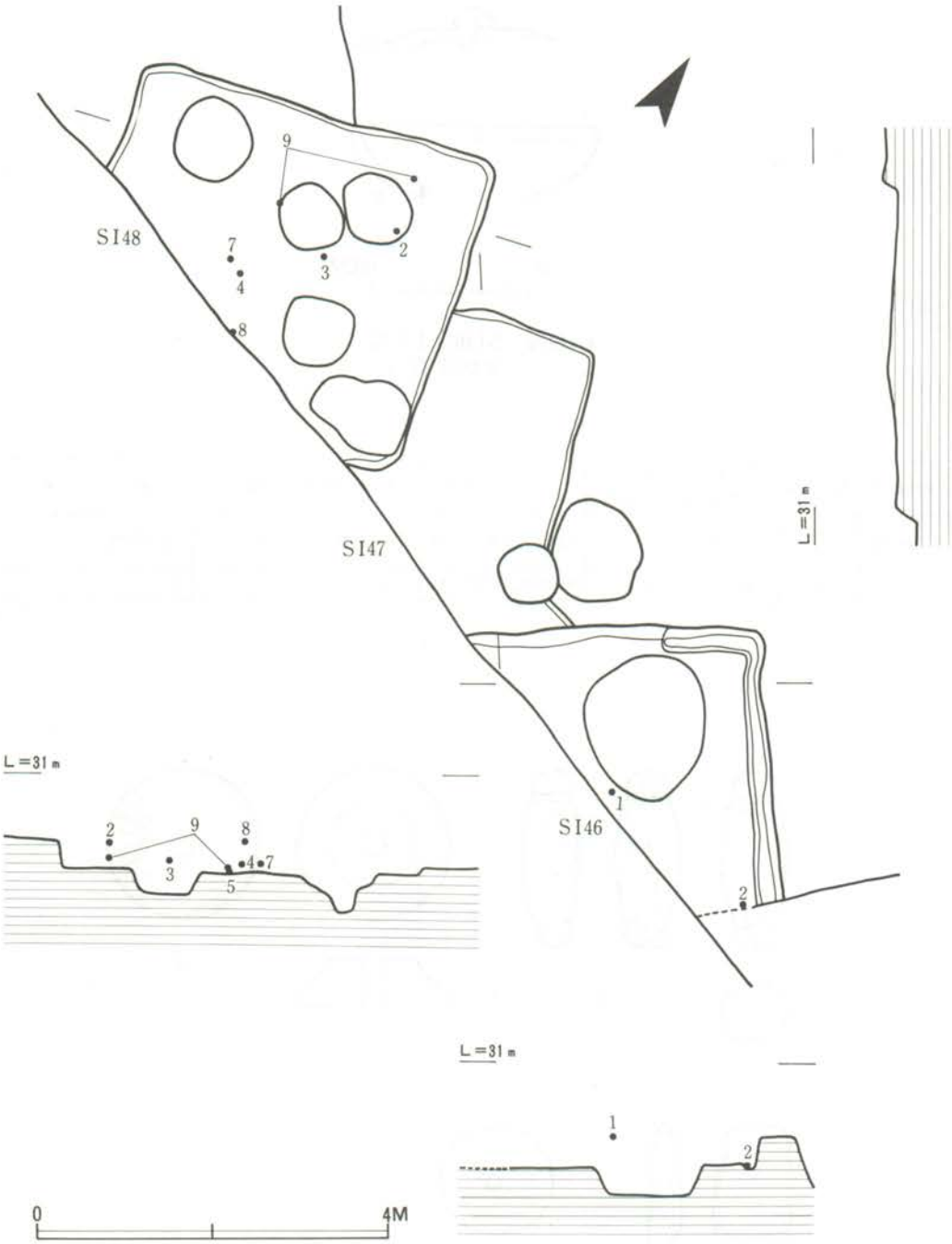


第412図　ＳＩ45出土石製品・土玉実測図（1/2）

ＳＩ46（第413～415図、ＰＬ172－１）

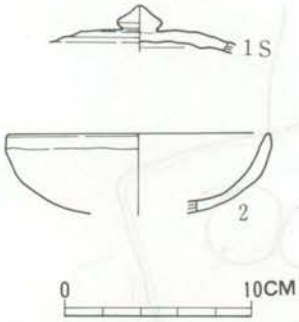
Ｃ－16グリッドに位置している。半分以上が境界外であり、また東側ではＳＩ38に切られ、西側ではＳＩ47を切っている。規模、形態等は不明である。壁の遺存は良好で、直線的で垂直に近い立ち上がりをし、30cm前後ある。壁溝は北辺１ｍと東辺にみられる。規模は幅20～30cmで、深さ10cm前後である。床面はソフトローム面を利用して踏み固めているために堅緻である。

遺物は土器、土製品、石製品が出土している。土器は須恵器蓋１、杯１であるが、須恵器蓋は本住居跡に伴うものではない。土製品としては径3.3cmの大形の土玉が１点ある。石製品としては模造品と紡錘車がある。１はＳＩ41出土品と同様な滑石製の□（ちきり）の模造品と思われる。全長５cmで胴の最大径は1.8cmである。両端には切り込みが一周している。そして両端ともに端部から切り込みにかけて１ケ所刻み目を入れている。２は筬（まち）の模造品である。全長3.8cm、幅2.2cm、厚さ９㎜の長方形を呈している。両端は両面から段を形成し薄く仕上げ



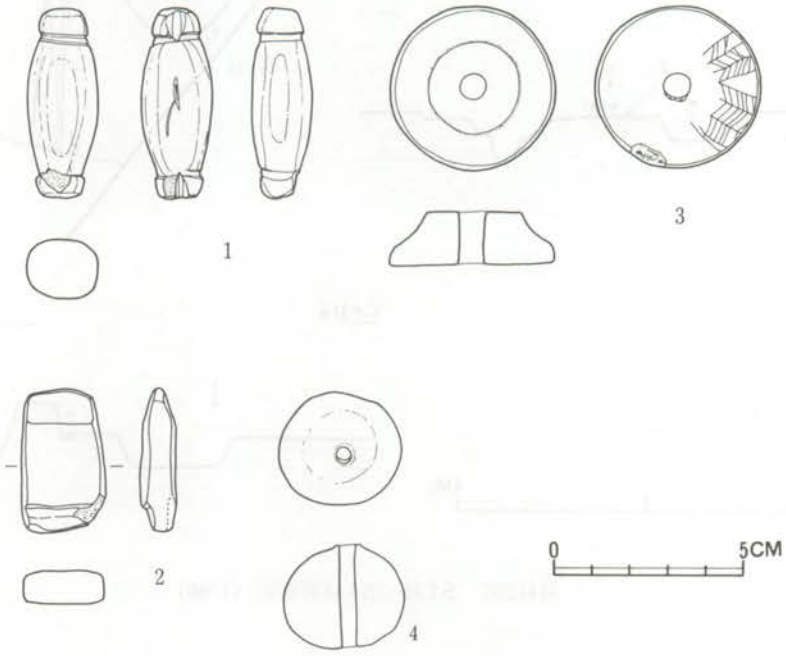
第413図　SI46～SI48実測図（1/80）

ている。3の紡錘車は上面径2.6cm、下面径4.4cm、厚さ1.4cm、孔の径7㎜である。断面は台形状ではなく中間に段を形成している。下面には線刻で矢羽根状の文様を⅓ほど入れている。



第414図　SI46出土土器
実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI46－1	蓋 (S)	×　×	灰白色、堅緻、？－R－天井部回転ヘラケズリ	口縁部欠失¼
－2	杯	14　×　×	明茶褐色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ	¼

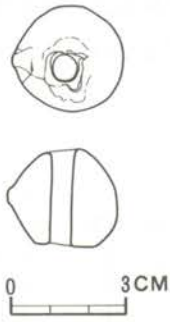


第415図　SI46出土石製品・土玉実測図（1/2）

ＳＩ47（第413・416図、ＰＬ172－１）

Ｃ－16グリッドに位置している。東側をＳＩ46、西側をＳＩ48に切られ、そのうえに半分は境界外であるため規模、形態等は不明である。壁は15cm前後の遺存であり、やや開きぎみの立ち上がりをしている。壁溝、柱穴はない。床面はソフトローム面を利用しているが踏み固めはあまりみられず、軟弱である。

遺物は径2.8cmの土玉が１点だけである。

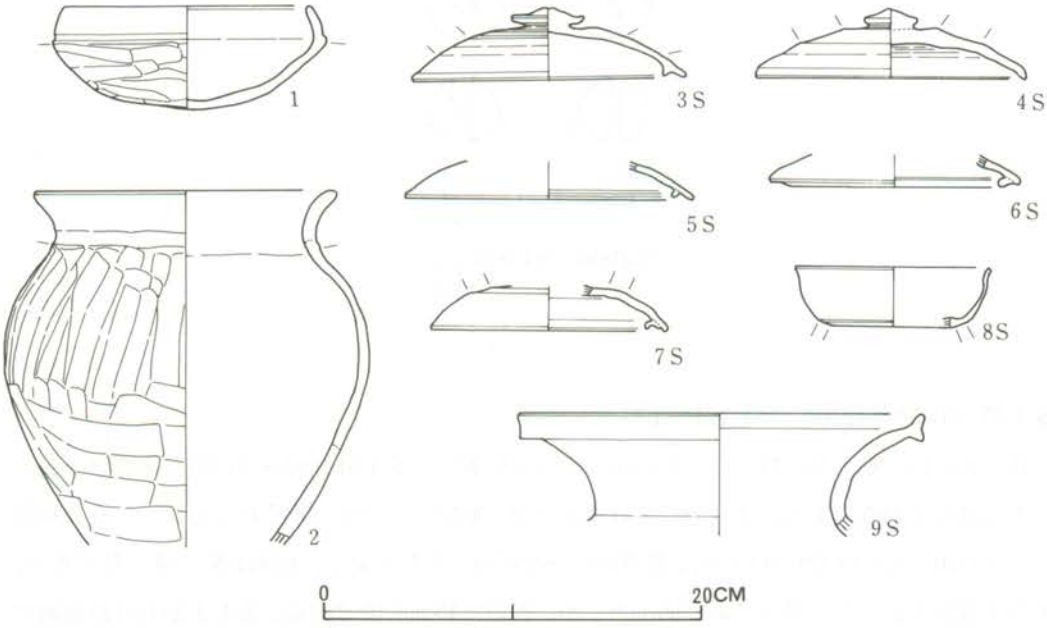


第416図　ＳＩ47出土土玉
実測図（1/2）

ＳＩ48（第413・417・418図、ＰＬ173－２）

Ｃ－16、Ｃ－17グリッドにまたがって位置している。東側でＳＩ47、西側でＳＩ62を切っており、南西部分は境界外のため未調査である。規模は東西4.2m、南北3.8mの東西にやや長い方形を呈している。他の住居と重複関係のあるところの壁は遺存が悪いが、ないところは35cmあり良好である。立ち上がりも直線的で垂直に近い。壁溝はない。柱穴は掘立柱と思われるものが多くあり、不明である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

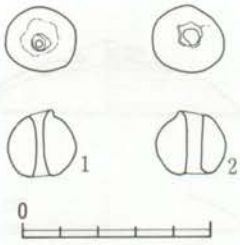
遺物は土器と土玉が散乱した状態で出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。



第417図　ＳＩ48出土土器実測図（1/4）

須恵器蓋5、須恵器杯、壺各1、杯1、甕1で須恵器の量が多いが、4、8は本住居に伴うものではない。土玉は径1.8cmの小形品が2点出土している。

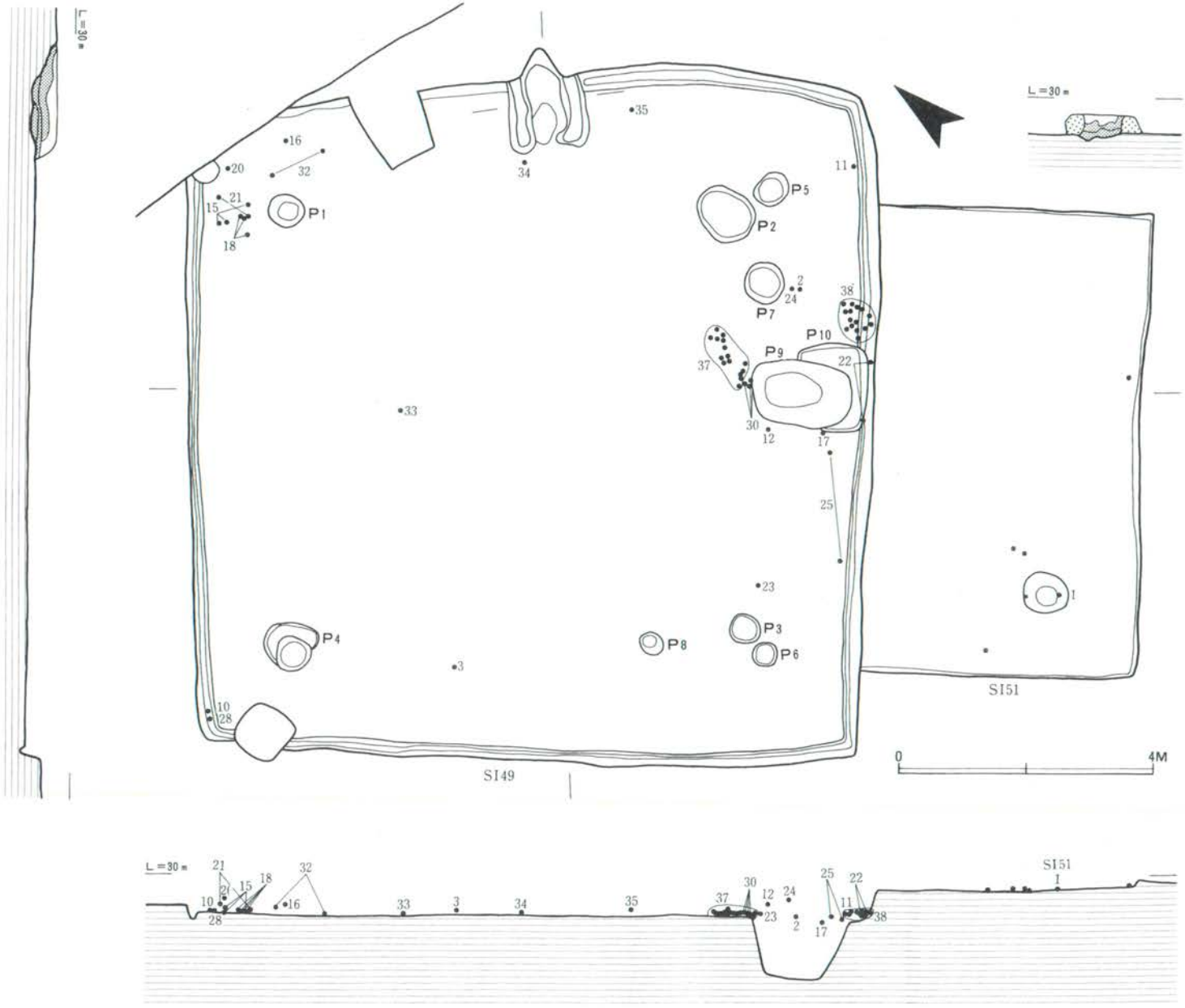
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SⅠ48－1	杯	13 × 5.3 ×	暗褐色、良好、全面ヘラミガキ	3/10
－2	甕	17.8 × ×	暗黄褐色、良好、体部ヘラケズリの後体部内面上半をヘラナデ	底部欠失、1/2
－3	蓋(S)	14.5 × 3.8 ×	灰黒色、良好、?－R－天井部回転ヘラケズリ	1/4
－4	蓋(S)	14 × 3.6 ×	灰白色、堅緻、?－R－天井部回転ヘラケズリ	3/8
－5	蓋(S)	15.2 × ×	灰白色、堅緻、?－?－?	口縁部1/4
－6	蓋(S)	13.2 × ×	灰白色、堅緻、?－?－内面カキ目状のヘラナデ	口縁部1/10
－7	蓋(S)	12.6 × ×	灰白色、堅緻、?－L－天井部回転ヘラケズリ	1/4
－8	杯(S)	10.2 × (4.1)× 8.2	灰褐色、長石・石英、堅緻、?－R－底部回転ヘラケズリ	1/4
－9	壺(S)	21.2 × ×	灰褐色、堅緻	口縁部1/4



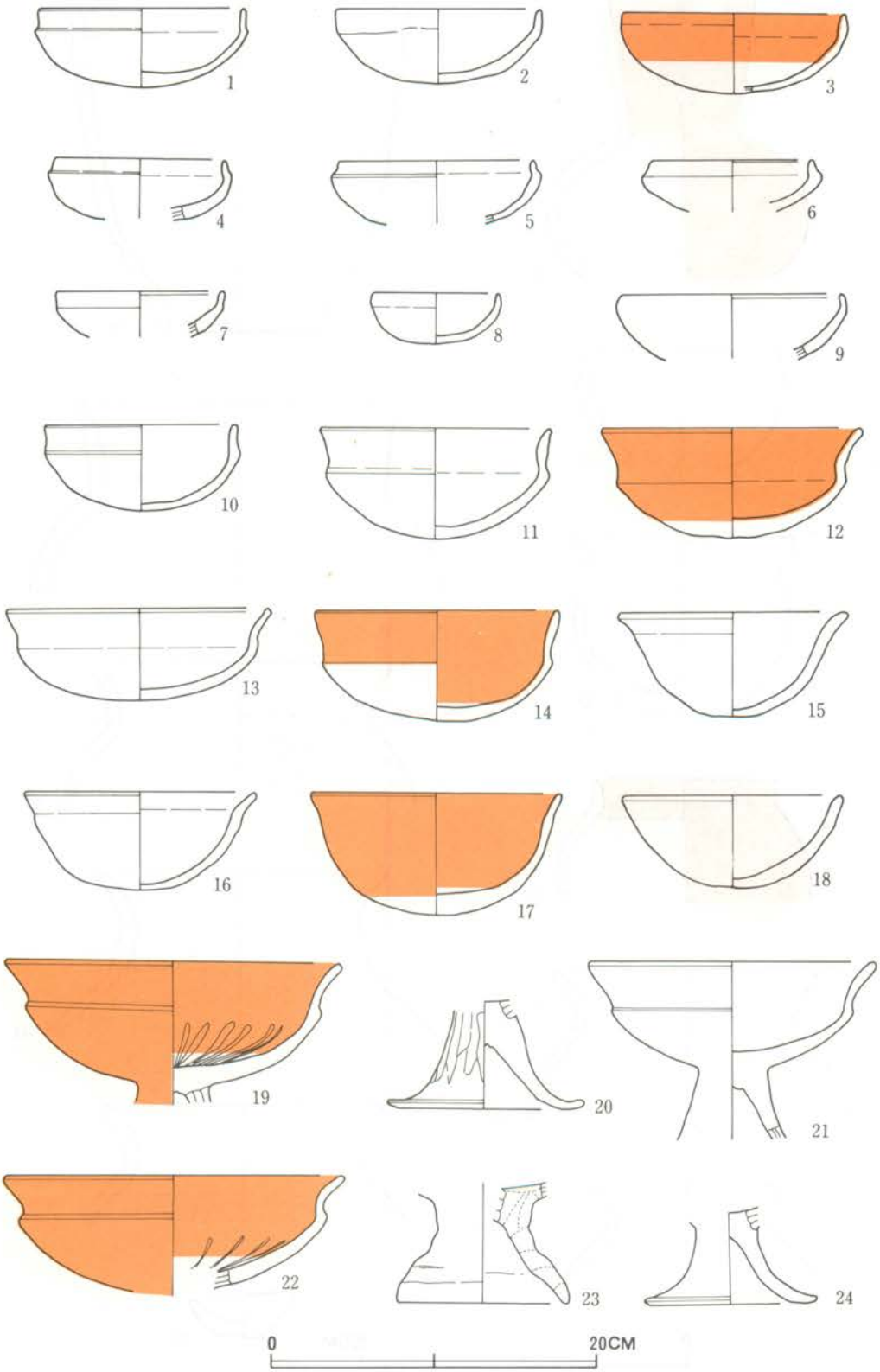
第418図　SⅠ48出土土玉
実測図（1/2）

SⅠ49（第419～423図、PL174－1）

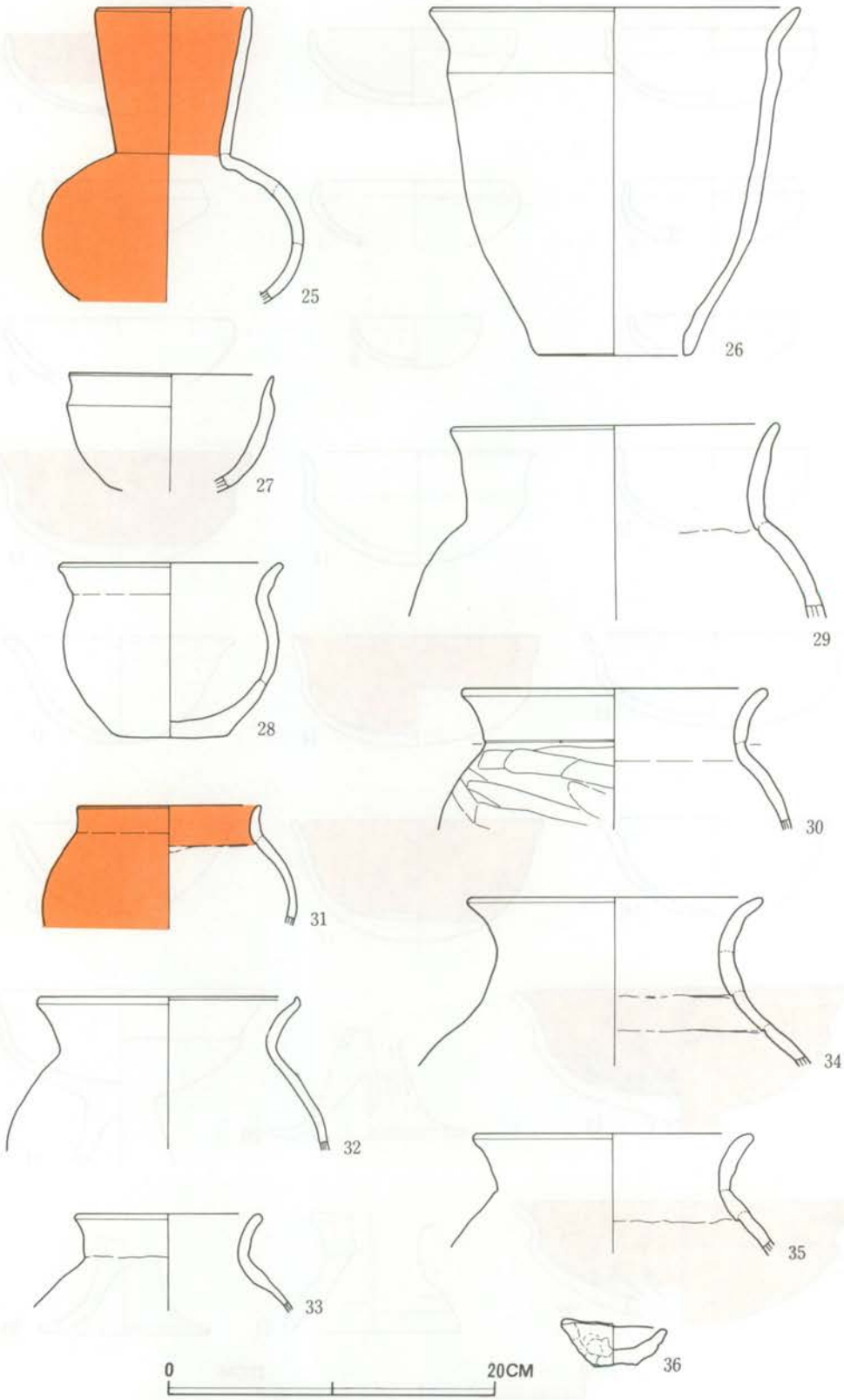
B－16、17、C－16、17グリッドにまたがって位置し、SⅠ51を切っている。北西コーナーの1部分が未調査である。また遺存度は東から西へ傾斜しているためそれに応じている。規模は南北11m、東西10.6mの大形で、北辺がややゆがむが方形を呈し、主軸はN－49°－Eである。壁は東辺が非常によく残っており50cmあるが、西辺は15cm前後である。立ち上がりは直線的で垂直に近い。壁溝は北辺のカマドより西辺を除いて全周している。規模は幅15～35cm、深さ10cm前後である。柱穴は8本検出されている。P_1～P_4が主柱穴である。規模はP_2が大きく100cm×



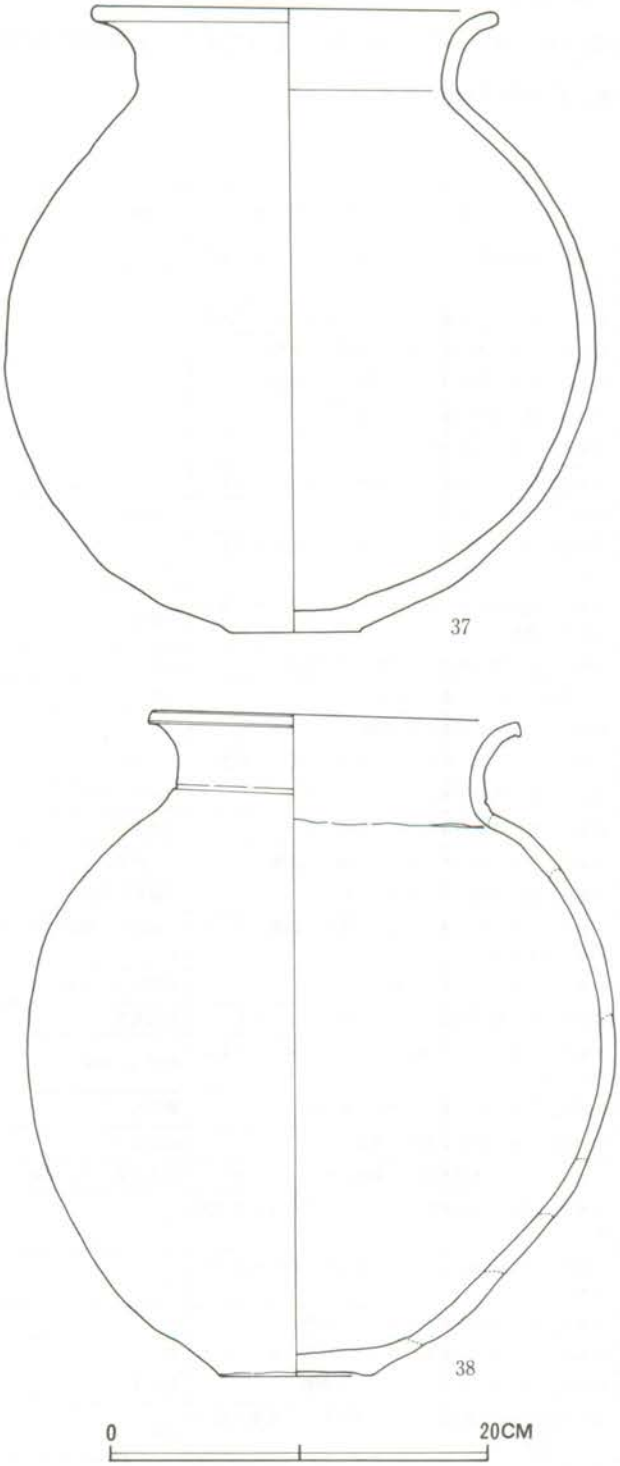
第419図　SI 49・SI 51実測図（1/80）



第420図　ＳＩ49出土土器実測図 ①（1/4）



第421図　ＳＩ49出土土器実測図 ②（1/4）



第422図　ＳＩ49出土土器実測図 ③（1/4）

80cmであるが、他は径60cm前後である。深さは80cm前後である。P_4には明確に建替の痕跡があり、P_2はP_5が、P_3はP_6がそれぞれ建替の柱穴に対応するが、P_1にはその痕跡がない。P_7、P_8は支柱穴と思われるが、建替を実施した方に伴なうものであろう。P_9、P_{10}は貯蔵穴でやはり建替と同じく作り直している。P_9は規模1.6m×１mの長方形を呈し、深さ90cmある。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

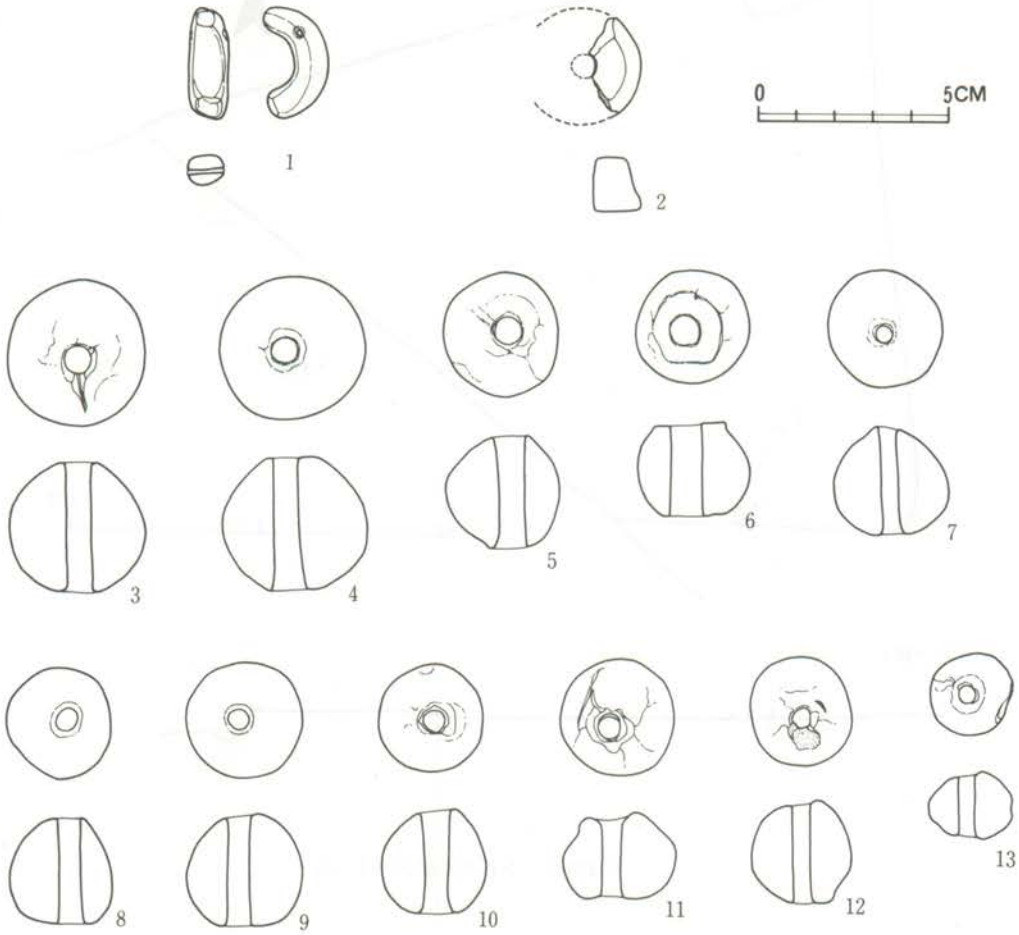
カマドは北辺のほぼ中央に構築されている。規模は全長1.7m、幅1.3mである。袖は砂質粘土を35cmほど積み上げて構築されている。掘り方は幅70cm、壁外へ50cmほど三角形に掘り込み、傾斜角度は30°と非常に緩かである。床面への掘り込みは70cm×60cmの楕円形で、深さ10cmである。底面はよく焼け、焼土、灰が厚く堆積している。

遺物は土器、土製品、石製品が貯蔵穴付近と北西コーナー付近に集中して出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。杯14、椀５、高杯６、甕９、坩、甑、壺、手捏土器が各１である。土製品としては土製

勾玉1点と土玉11点がある。土製勾玉は全長2.9cm、胴最大径1.1cm、孔の径2㎜である。土玉は径3.5cm前後のもの2点、径3cm前後のもの8点、径2cmのもの1点である。石製品は石製紡錘車の⅓の破片である。復元径は3cm、孔の径6㎜である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SⅠ49－1	杯	12.7 × 4.7 ×	明褐色(内面暗褐色)、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	ほぼ完形
－2	杯	12.7 × 4.5 ×	黒褐色、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ調整	⅓
－3	杯	13.6 × ×	黄白色、不良、体部外面および内面ナデ調整	¼、赤彩
－4	杯	10.4 × ×	黒褐色、不良、体部外面および内面ナデ調整	¼
－5	杯	12 × ×	黒褐色、良、体部外面および内面ヘラミガキ	¼
－6	杯	9.6 × ×	黒褐色、不良、体部外面ヘラミガキ	⅓
－7	杯	10.3 × ×	茶褐色、良、体部外面のナデ調整、内面ヘラミガキ	⅓
－8	杯	7.8 × 3 ×	明褐色、良好、全面ヘラミガキ	口縁部⅓欠
－9	杯	13.4 × ×	暗茶褐色(内面赤褐色)、不良、体部内面および外面ナデ調整	¼
－10	杯	11.7 × 5.2 ×	茶褐色(内面明褐色)、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	口縁部¼
－11	杯	14.2 × 5.7 ×	黄褐色、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラナデ	完形
－12	杯	17.8 × 6.6 ×	明茶褐色、良好、全面ナデ調整	完形
－13	杯	16.1 × 5.6 ×	暗褐色、良、体部外面および内面ヘラミガキ	⅔
－14	杯	15 × 6.6 ×	暗褐色、不良、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	⅔、赤彩
－15	椀	13.9 × 6.3 ×	黒褐色、良、体部内外面ともにヘラミガキ	口縁部½欠失
－16	椀	14.2 × 5.9 ×	黄褐色、良、体部内外面ともにヘラミガキ	ほぼ完形
－17	椀	15.4 × 7.3 ×	赤褐色、良好、体部外面および内面ナデ調整	¼、赤彩
－18	椀	13.4 × 5.5 ×	黒褐色、良、全面ヘラミガキ	口縁部⅓欠失
－19	高　杯	20.5 × ×	茶褐色、良好、体部外面および内面ナデ調整、さらに内面に暗文を施す	口縁部⅓、脚部欠失、赤彩
－20	高　杯	× × 12.1	黄褐色、良好、全面ナデ調整	脚部のみ、赤彩
－21	高　杯	17.4 × ×	黄褐色、良、脚部内面ヘラナデの他はヘラミガキ	裾部欠失
－22	高　杯	20.7 × ×	茶褐色、良好、体部内外面ともにヘラミガキ、さらに内面に暗文を施す	杯部⅚、赤彩
－23	高　杯	× × 10.6	茶褐色、不良、脚外面ナデ調整、脚内面ヘラナデ	脚部⅓
－24	高　杯	× × 10.4	明褐色、良好、脚部全面ナデ調整	脚部のみ
－25	坩	9.5 × ×	淡茶褐色、良、体部内面ナデ調整の他はヘラミガキ	底部欠失、¾、赤彩
－26	甑	22.5 × 20.6 × 9.4	明褐色、不良、内面下端ヘラケズリの他は全面ナデ調整	⅓
－27	椀	12.4 × ×	茶褐色、(内面黒褐色)、不良、体部内外面ともにナデ調整	⅓
－28	甕	13.6 × 10.4 × 6.8	明褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	⅔
－29	甕	20 × ×	暗褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	胴上半⅓
－30	甕	18.6 × ×	暗褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半¼
－31	壺	11.2 × ×	暗茶褐色(内面黒褐色)、良、体部内面ナデ調整の他はヘラミガキ	赤彩
－32	甕	16 × ×	黄褐色、良、体部外面ハケ調整、口縁部外面および体部内面ナデ調整	胴上半⅓
－33	甕	11.4 × ×	暗褐色、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラナデ	胴上半

−34	甕	18 × ×	茶褐色、長石・石英・雲母、不良、全面ナデ調整	胴上半¼
−35	甕	17 × ×	黄褐色、良、体部内外面ともにヘラナデ	口縁部⅓
−36	手　捏	6.4 × 2.9 × 3	茶褐色、指オサエ、指ナデ	ほぼ完形
−37	甕	21.3 × 32.3 × 6.8	黄褐色、長石・石英、良、体部外面下半のヘラミガキの他はナデ調整	
−38	甕	19.6 × 34.4 × 8.4	茶褐色(黒斑有り)、良、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整	⅔



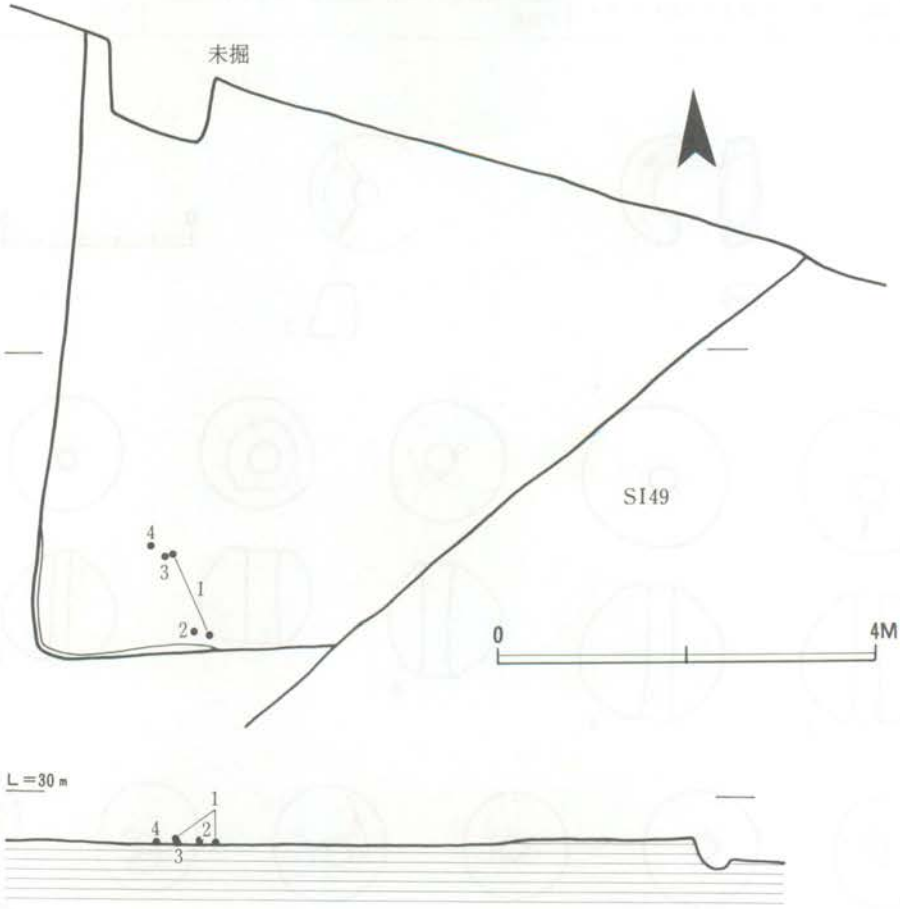
第423図　ＳＩ49出土土製勾玉・紡錘車・土玉実測図（1/2）

ＳＩ50（第424・425図）

Ｂ−17グリッドに位置し、北半部は境界外で、東側はＳＩ49に大きく切られているため規模、形態等は不明である。また遺存はきわめて悪く、壁、床面等も部分的にしか残っていない。壁は南西コーナーのみの残存で、５cmほどである。壁溝、柱穴はない。床面は部分的な残存をみ

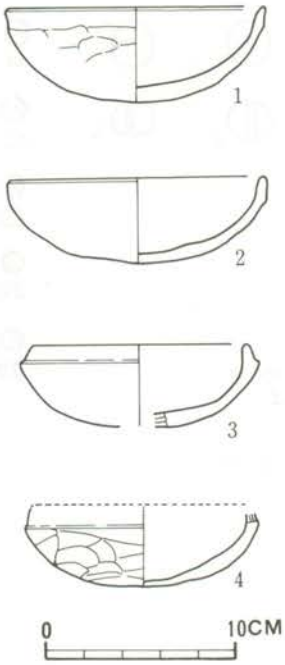
るとハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

遺物は南西コーナーに杯4点が床面で出土している。



第424図　SI50実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI50－1	杯	13.7 × 4.8 ×	暗褐色（黒斑有り）、良、体部内外面ナデ調整	½、黒色処理
－2	杯	13.4 × 4.3 ×	暗褐色、良、体部外面ヘラミガキ、内面底部ナデ調整	⅓
－3	杯	11.2 × (4.4)×	黒褐色(黒斑有り)、良、体部外面、ヘラミガキ、内面ナデ調整	¾
－4	杯	× 3.9 ×	暗褐色、良、体部外面および内面ナデ調整	口唇部欠失、黒色処理



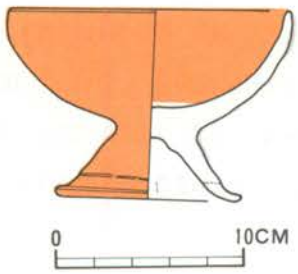
第425図　SI 50出土土器実測図（1/4）

ＳＩ51（第419・426・427図、ＰＬ174－２）

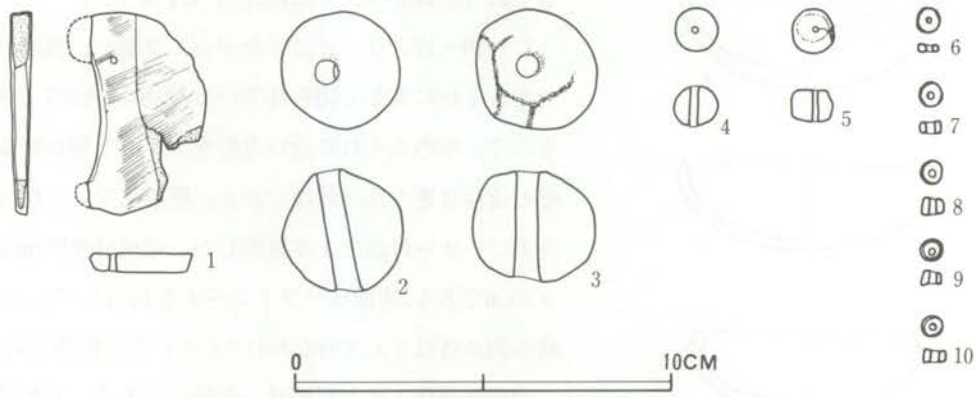
Ｃ－16・17グリッドにまたがって位置し、西側の半分をＳＩ49に大きく切られている。規模は南北7.5mあるので、東西もそれに近い方形を呈すると思われる。壁の遺存は悪く10cm前後である。壁溝はない。柱穴は南東コーナー付近で１本検出した。規模は径70cmで深さ30cmである。床面はソフトロームを利用しているが、踏み固めはほとんど行なわれていないため軟弱である。

遺物は高杯１点と石製品、土製品である。石製品は滑石製の勾玉１点と臼玉５点である。滑石製の勾玉は一部分欠失しているが、全長5.4cm、厚さ５㎜の板状のものである。孔は径２㎜でかなり小さい。臼玉も滑石製で径６㎜、厚さ２～４㎜、孔の径２㎜である。土玉は径３cmのもの２点、径１cm前後の小形のもの２点である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ51－１	高　杯	14.5 × 9.8 × 9.8	暗黄褐色、良、杯部外面へラミガキの他はナデ調整	ほぼ完形



第426図　SI 51出土土器実測図（1/4）



第427図　SI51出土石製品・土玉実測図（1/2）

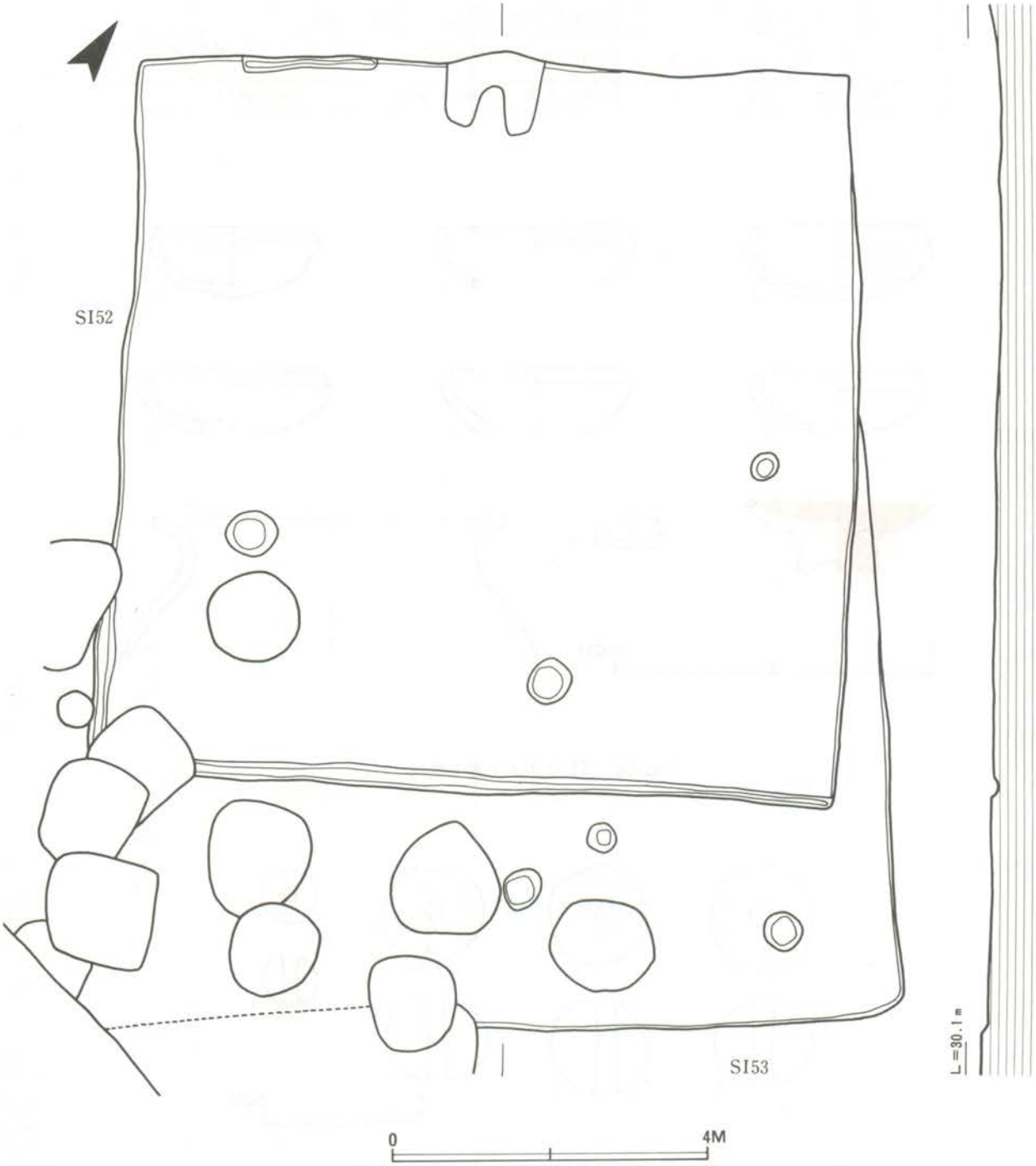
ＳＩ52（第428～430図、ＰＬ176－２）

Ｃ－17グリッドに位置し、ＳＩ53を切っている。本住居跡は攪乱を受け非常に遺存の悪いものである。規模は9.2m四方の正方形を呈し、主軸はＮ－30°－Ｗである。壁はほとんど残っていないが、あるところでも５cm以下である。壁溝は南辺全部と西辺の南端及び北辺の西側に１部分あるにすぎない。規模は幅30～20cm、深さ10cm前後である。柱穴らしきものは３本検出されているが、確実に本住居跡に伴うものかは不明である。とにかく、床面の半分以上が大きく攪乱されているため、他の柱穴を検出できないため不明である。床面は部分的にみるとハードローム面を利用して踏み固めているため非常に堅緻である。

カマドは北辺のほぼ中央に構築されていた。現在は底面における痕跡だけである。それによると規模は全長110cm、幅120cmである。袖、天井等は砂質粘土を使用して構築されていた。掘り方は幅120cm、壁外へ18cmほど三角形に掘り込んでいる。床面への掘り込みはみられない。

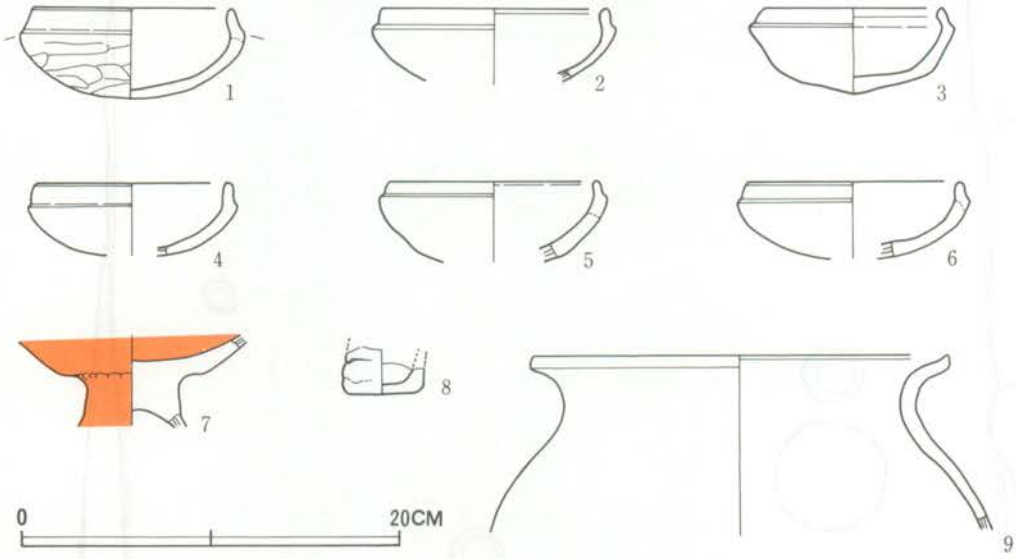
遺物は土器と土玉が覆土中から採集された。土器の器種と数量は次のとおりである。杯６、高杯、甕、手捏土器の各１点である。土玉は径３cm前後のもの４点、径1.7cmのもの１点である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ52－１	杯	10.6 × 4.7 ×	暗褐色、不良、体部外面および内面ナデ調整	½
－２	杯	12 × ×	黄褐色、良、体部内外面ともヘラミガキ	底部欠失、¼
－３	杯	9.4 × 4.4 ×	黒褐色(内面黒色)、良、体部内外面ともにヘラミガキ	¾、黒色処理
－４	杯	10.4 × ×	暗褐色(内面暗茶褐色)、良、体部外面および内面ヘラミガキ	½
－５	杯	11.2 × ×	黒褐色、不良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	底部欠失、¼

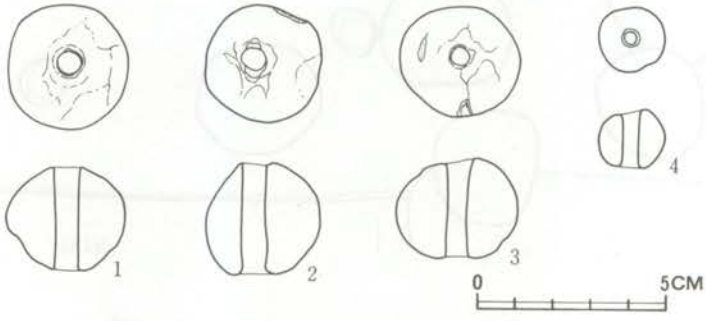


第428図　SI 52・SI 53実測図（1/80）

－6	杯	11.3 × ×	明茶褐色、不良、体部外面および内面ナデ調整	⅓
－7	高　杯	× ×	暗褐色、良、全面ナデ調整	杯口縁部、裾部欠失、赤彩
－9	甕	22.2 × ×	明褐色、石英、良、全面ナデ調整	胴上半⅓



第429図　SI 52出土土器実測図（1/4）



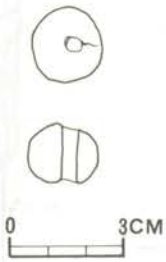
第430図　SI 52出土土玉実測図（1/2）

S I 53（第428・431図、P L176－2）

C－17グリッドに位置し、S I 52に大きく切られ、S B61、62、S I 64にも切られているため、きわめて遺存が悪く、規模、形態等は不明である。壁は南辺と東辺の一部分が残っている

だけで、10cm前後である。壁溝はない。柱穴らしきものは3本検出されたが不明である。床面はソフトローム面を利用して、暗褐色土とロームの混合土を踏み固めているが、部分的に堅緻なところがあるが、全体的には軟弱である。

遺物は径1.8cmの土玉が1点出土しただけである。



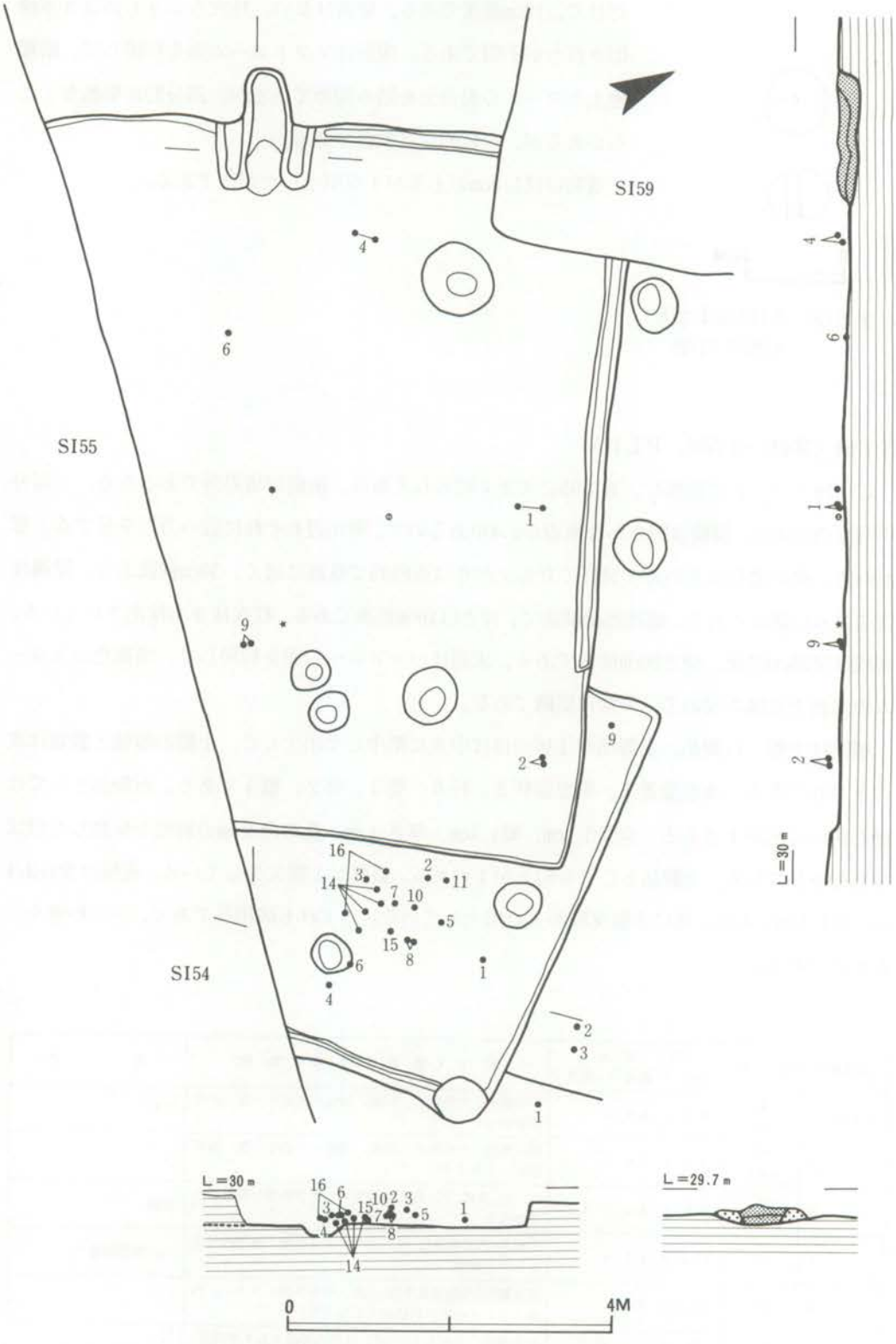
第431図　SI53出土土玉
実測図（1/2）

SI54（第432～435図、PL175）

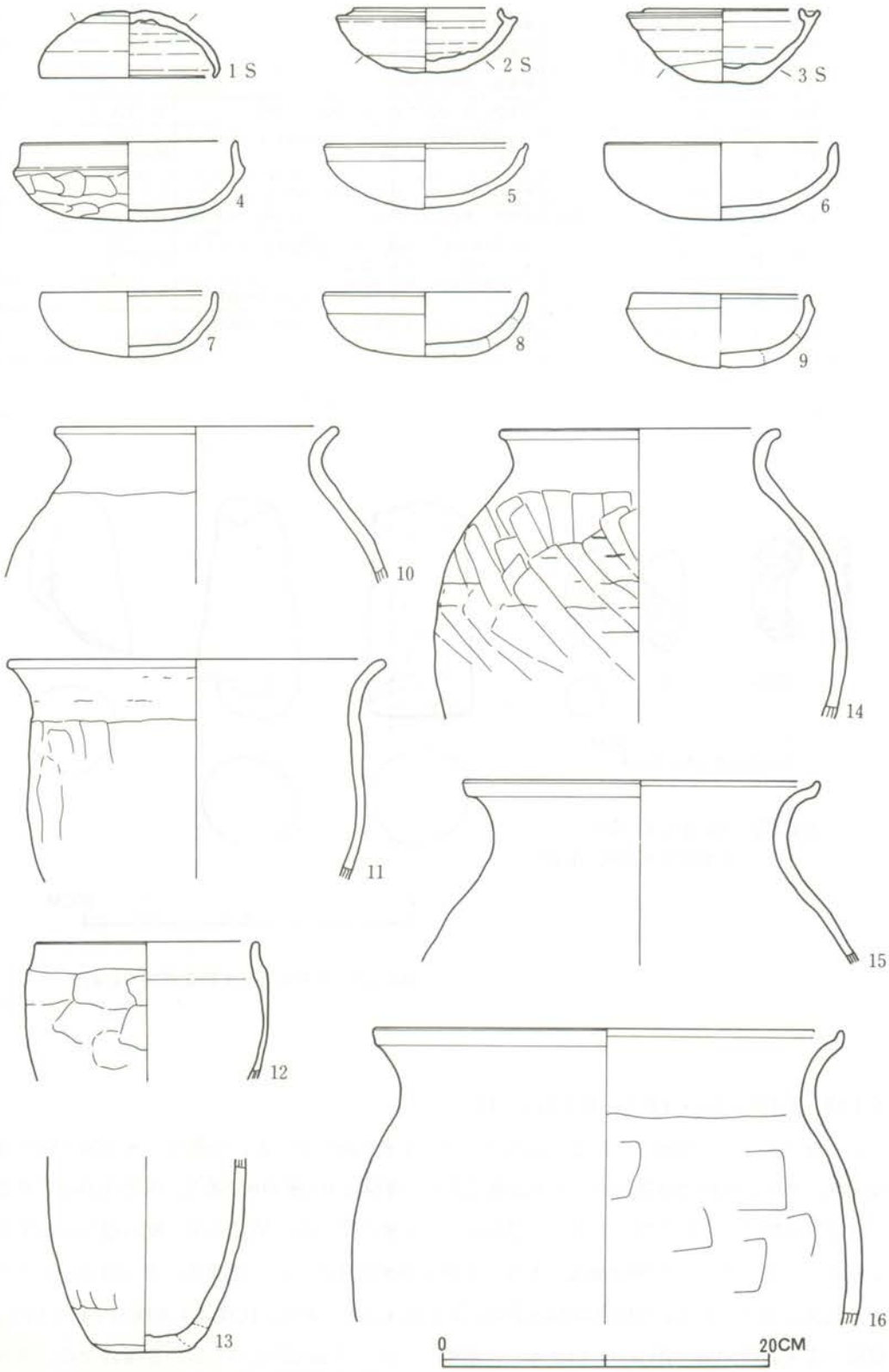
C－18グリッドに位置し、SI55に大きく切られており、南側が境界外であるため、一部分不明な点がある。規模は明らかな東辺が5.4mあるので、南北辺もそれに近い方形を呈すると思われる。壁の遺存はきわめて良好で立ち上がりは直線的で垂直に近く、30cm前後ある。壁溝は南辺のみに認められる。幅は25cm前後で、深さは10cm前後である。柱穴は2本検出されている。規模は径55cm前後、深さ20cm前後である。床面はハードローム面を利用して、暗褐色土とロームの混合土を踏み固めて、非常に堅緻である。

遺物は土器、石製品、土製品が住居のほぼ中央に集中して出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋1、須恵器杯2、杯6、甕4、鉢2、甑1である。石製品としては滑石製の勾玉が1点ある。全長3.2cm、幅1.4cm、厚さ4㎜、孔の径2㎜の両面を研磨した板状の形態をしている。土製品としても勾玉が1点ある。頭部が1部欠失している。規模は全長3.1cm、径1.1cmである。他に土製支脚が3点出土している。いずれも破損品であり、同じ形態をしたものである。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
SI54－1	蓋 (S)	10.3 × 3.9 ×	暗灰褐色、白色粘土、堅緻、回転ヘラ切り－R－天井部回転ヘラケズリ	完形
－2	杯 (S)	9.1 × 4.8 ×	暗灰褐色、白色粘土、堅緻、回転ヘラ切り－R－底部回転ヘラケズリ	⅚
－3	杯 (S)	9.6 × 4.4 × 4.1	灰白色、良好、？－R－体部下半および底部全面回転ヘラケズリ	完形
－4	杯	13.2 × 4.7 ×	黒褐色(内面黒色)、良、ヘラケズリの後、体部内外面ともナデ調整	⅔、黒色処理
－5	杯	12.5 × 3.9 ×	明茶褐色(内面底部黒色)、良、体部外面ヘラナデ、内面ヨコナデ後正方射状暗文を加える	¾
－6	杯	14 × ×	暗茶褐色（黒斑有り）、良、体部内外面ともナデ調整	⅓

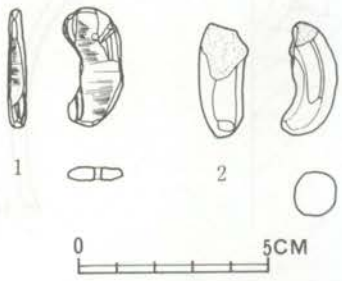


第432図　SI54・SI55実測図（1/80）

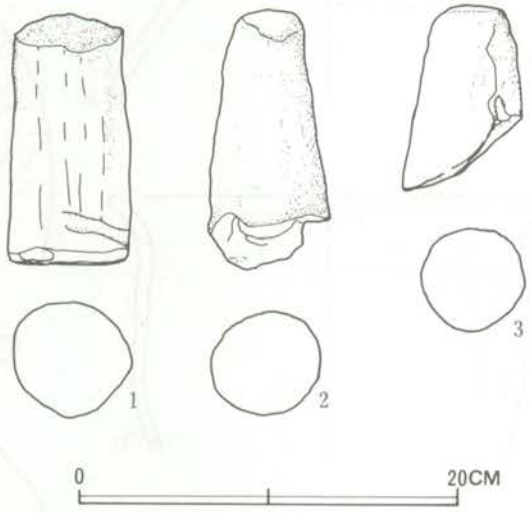


第433図　ＳＩ54出土土器実測図（1/4）

−7	杯	10.7 × 3.8 ×	黄褐色、良、全面ヘラミガキ	ほぼ完形
−8	杯	12.6 × 4.7 ×	暗茶褐色、良、全面ヘラミガキ	½
−9	杯	10.6 × 5.3 ×	黄褐色、不良、全面ヘラミガキ	⅔
−10	甕	17.2 × ×	暗褐色、良、体部外面および内面ナデ調整	胴上半¼
−11	甕	23 × ×	暗茶褐色(黒斑有り)、良好、体部外面および内面ヘラミガキ	胴上半¼
−12	鉢	13.5 × ×	黄褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともにヘラナデ	胴上半⅓
−13	鉢	× × 5.5	黄褐色、赤色粒子、外面ヘラケズリ内面ヘラナデ	胴下半⅓
−14	甕	17 × ×	赤褐色(黒斑有り)、体部外面ハケ調整の後ヘラケズリ、さらに内面とともにナデ調整	胴上半½
−15	甕	21.7 × ×	暗褐色、石英、良、体部外面および内面ナデ調整	胴部⅙
−16	甕	28.7 × ×	暗黄褐色、雲母、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラナデ	胴上半⅓



第434図　SI54出土石製・土製勾玉実測図（1/2）



第435図　SI54出土支脚実測図（1/4）

ＳＩ55（第432・436・437図、ＰＬ175−１）

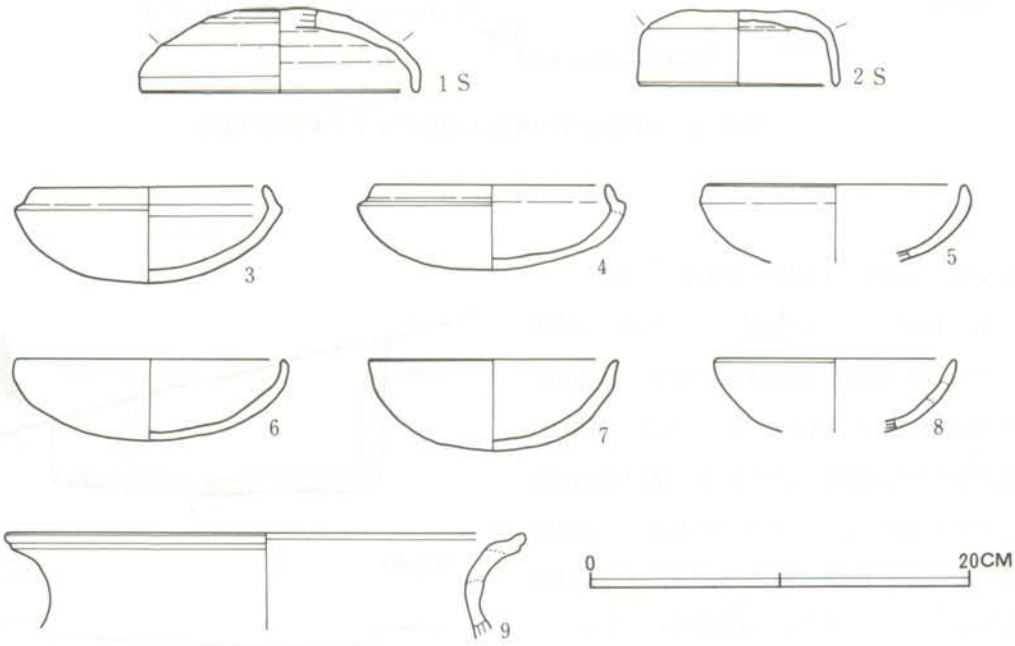
Ｃ−18グリッドに位置している。北西コーナーをＳＩ59に切られ、東側ではＳＩ54を切り重複関係にあり、南側は境界外のため未調査である。規模は東西8.6mである。南北は不明であるがほぼ同規模で、方形を呈するものと思われる。主軸はＮ−60°−Ｗである。壁の遺存はあまりよくなく、北、西辺でも20cm前後であり、東側は10cm前後になる。壁溝は北辺と西辺のカマドより北側に認められる。規模は幅25cm前後、深さ10cm前後である。柱穴は４本検出されている。規模の大きい径90cm、70cmのもの２本と、規模の小さい径50cm前後のものの２種になる。深さはいずれも60cm前後である。規模の大きい方は主柱穴なのであろう。床面はハードローム面を

利用して踏み固めているため堅緻であるが、ＳＩ54との重複部分は軟弱である。

カマドは北辺に構築されている。規模は全長150cm、幅120cmである。袖は砂質粘土を20cmほど積み上げて構築されている。掘り方は幅70cm、壁外へ70cmほど長方形に掘り込んでおり、傾斜角度は60°である。床面への掘り込みは径70cm、深さ15cmの摺鉢形をし、底面はよく焼け、焼土も多く堆積している。

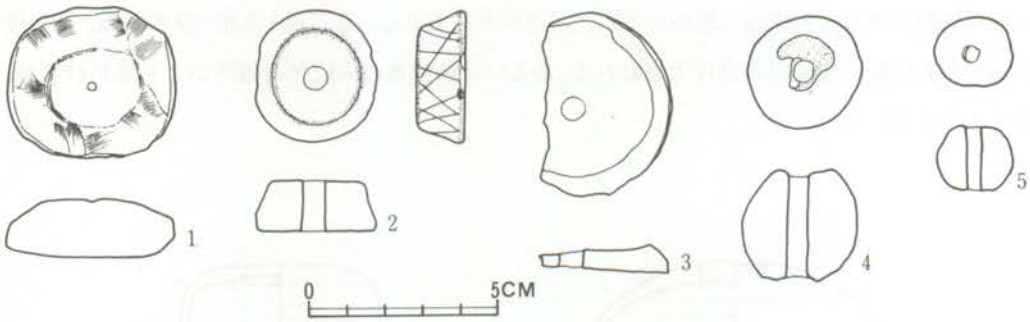
覆土は上面までだいぶ攪乱されており、分層は不可能であった。

遺物は土器と土玉と石製品が散乱した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋２、杯６、甕１である。土玉は径３cmの大形品１と径1.8cmの小形品１の合計２個である。石製品は紡錘車１と滑石製の模造品２個である。紡錘車は上面径2.5cm、下面径３cm、厚さ1.4cm、孔の径６㎜である。体部には線刻で斜格子文を施している。石材は滑石である。１は4.3cm×４cmの亀甲形をした石製品で、中央部の厚さは1.5cmである。中心部には穿孔しようとした痕跡が残る。未成品と思われるが、何だか不明である。３は径4.8cm、厚さ５㎜、孔の径７㎜の有孔円板の未成品の破片と思われる。あるいは紡錘車の未成品の破片かとも思われるが、はっきりとはしない。



第436図　ＳＩ55出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI55－1	蓋 (S)	14.6 × 4.2 ×	天井部回転ヘラケズリ	½
－2	蓋 (S)	10.5 × 3.8 ×	天井部回転ヘラケズリ	⅓
－3	杯	12.4 × 5 ×	黒褐色、良好、全面ヘラミガキ	完形、黒色処理
－4	杯	12.4 × 4.3 ×	暗褐色、良好、全面ヘラミガキ	ほぼ完形
－5	杯	13.6 × ×	全面ヘラミガキ	¼
－6	杯	14.2 × 4.1 ×	黒褐色、良好、全面ヘラミガキ	¼
－7	杯	13.2 × 4.7 ×	良、全面ヘラミガキ	⅓
－8	杯	12.4 × ×	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	⅓
－9	甕	27.4 × ×	暗褐色、石英、良、外面ナデ、内面ヘラミガキ	口縁部⅓

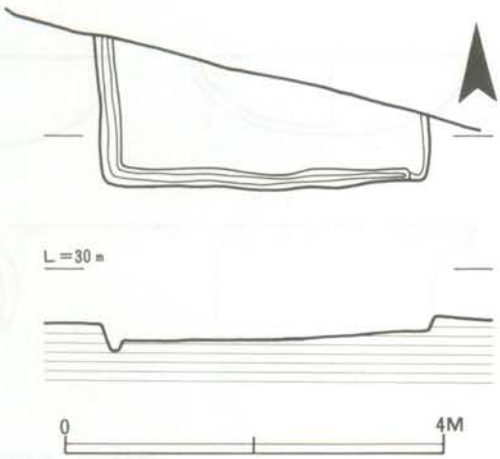


第437図　SI55出土石製品・紡錘車・土玉実測図（1/2）

SI56（第438～440図、PL177－1）

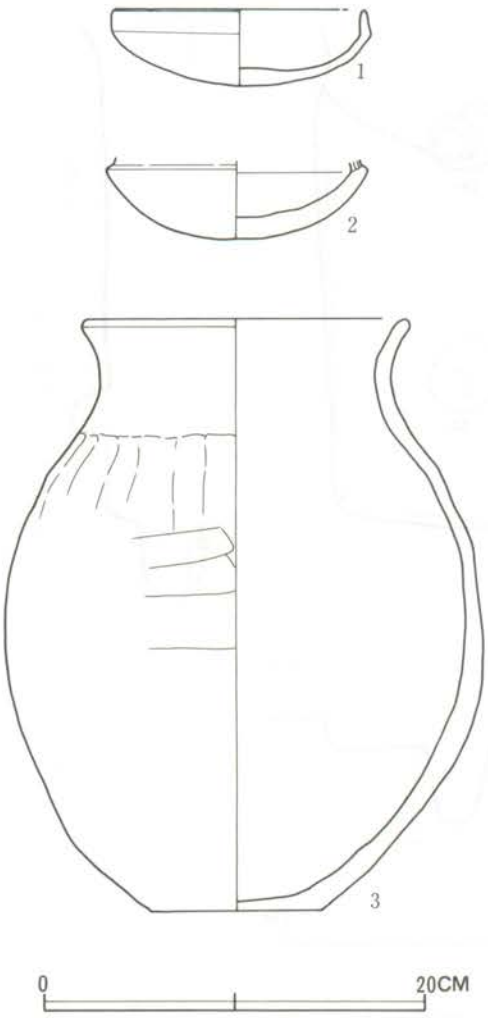
B－17グリッドに位置し、大部分が境界外にあるため規模、形態等に不明な点が多い。規模は南辺が3.5mあるので、おそらく3.5m四方の小形の住居と思われる。壁は20cm前後であまり遺存はよくない。壁溝は南、西辺に認められる。規模は幅16～20cm、深さ15cm前後である。柱穴はない。床面はハードローム面をそのまま利用しているようである。

遺物は土器と石製品が覆土中から出土している。土器は杯2、甕一である。石製品は滑石製の双孔円板である。2cm×1.5cm、厚さ1

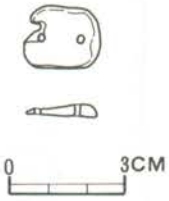


第438図　SI56実測図（1/80）

～3㎜で、孔の径は1.5㎜である。



第439図　SI 56出土土器実測図（1/4）

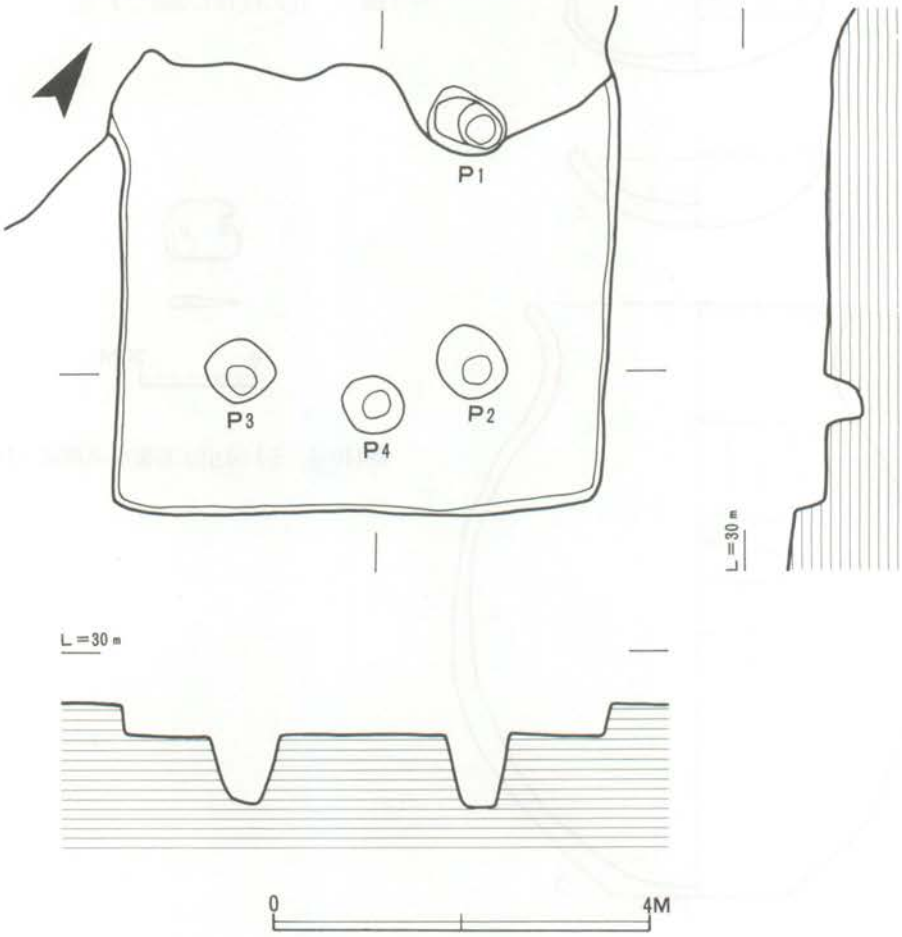


第440図　SI 56出土石製品実測図（1/2）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI 56－1	杯	13.3 × 4 ×	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	3/4
－2	杯	× ×	黒褐色（内面暗褐色）、良、全面ヘラミガキ	口縁部欠失
－3	甕	17 × 30.5 × 8.9	暗褐色、体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ナデ調整	3/4

SI 57（第441・442図、PL177－2）

B－18グリッドで、本跡の最西端に位置する住居である。北側は道路工事等により攪乱されているため不明である。規模は南辺が5.2mあるため、おそらく5.2m四方の方形を呈する住居

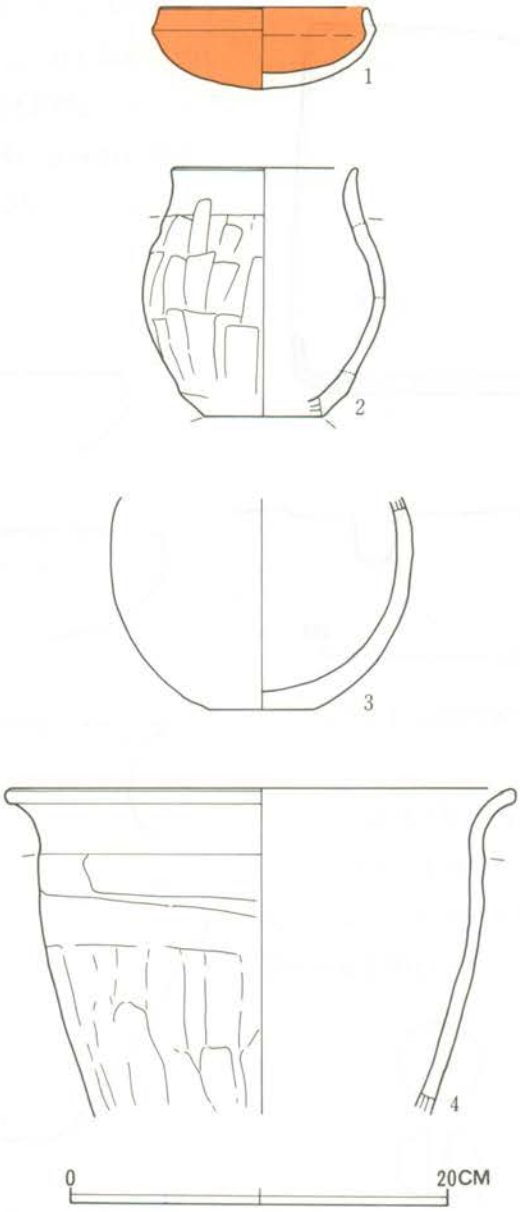


第441図　SI57実測図（1/80）

であろう。壁は35cm前後あり、立ち上がりは直線的で垂直に近い、良好なものである。壁溝はない。柱穴は4本検出された。P_1～P_3は主柱穴で、P_4は支柱穴である。規模はそれぞれ径70cm前後、深さ80cm前後である。P_1には建替の痕跡がある。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために堅緻である。

遺物は土器が覆土中から出土している。杯1、甕2、甑1である。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
SI57－1	杯	10.5 × 4.2 ×	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	⅔、赤彩
－2	甕	9.8 × 12.8 × 6.4	黒褐色(暗褐色)、良、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラケズリ	¼
－3	甕	× × 5.6	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	胴下半⅓
－4	甑	27 × ×	暗褐色、良、体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	胴上半⅙



第442図　SI57出土土器実測図（1/4）

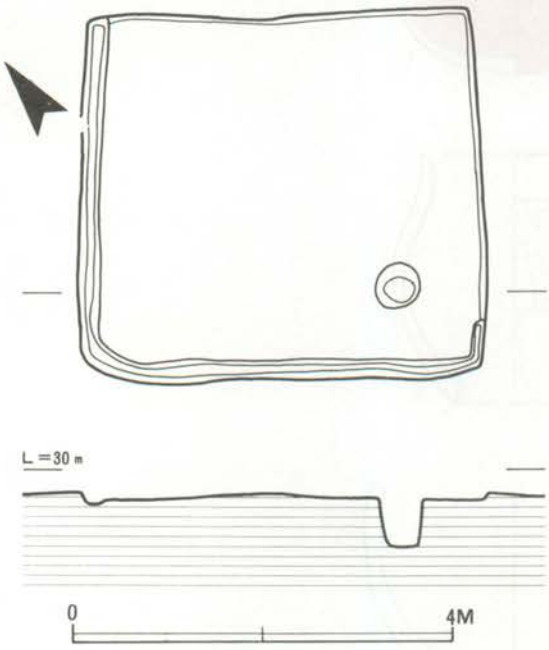
S I 58（第443～445図、P L178－1）

B－17、18、C－17、18グリッドにまたがって位置している。攪乱が激しく床面、柱穴等は不明な点が多い。規模は東西4.2m、南北3.8mの東西にやや長い方形を呈している。壁の遺存はきわめて悪く10cm前後である。壁溝は南、西辺に認められる。規模は幅20～30cm、深さ10cm

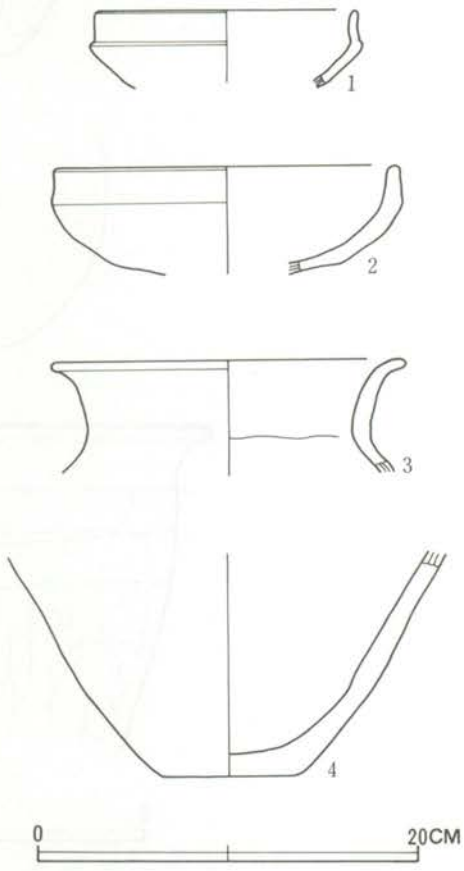
前後である。柱穴は南東コーナーに1本だけ検出された。しかし1本だけだったかどうかは攪乱が激しいため不明である。規模は径50cm、深さ50cmである。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため全体に堅緻であったと思われる。

カマドは付設されていたのかはっきりとしない。

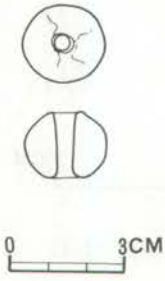
遺物は土器と土玉が覆土中より出土している。土器は杯2、甕2である。土玉は径2cmの小形品が1個である。



第443図　SI58実測図（1/80）



第444図　SI58出土土器実測図（1/4）

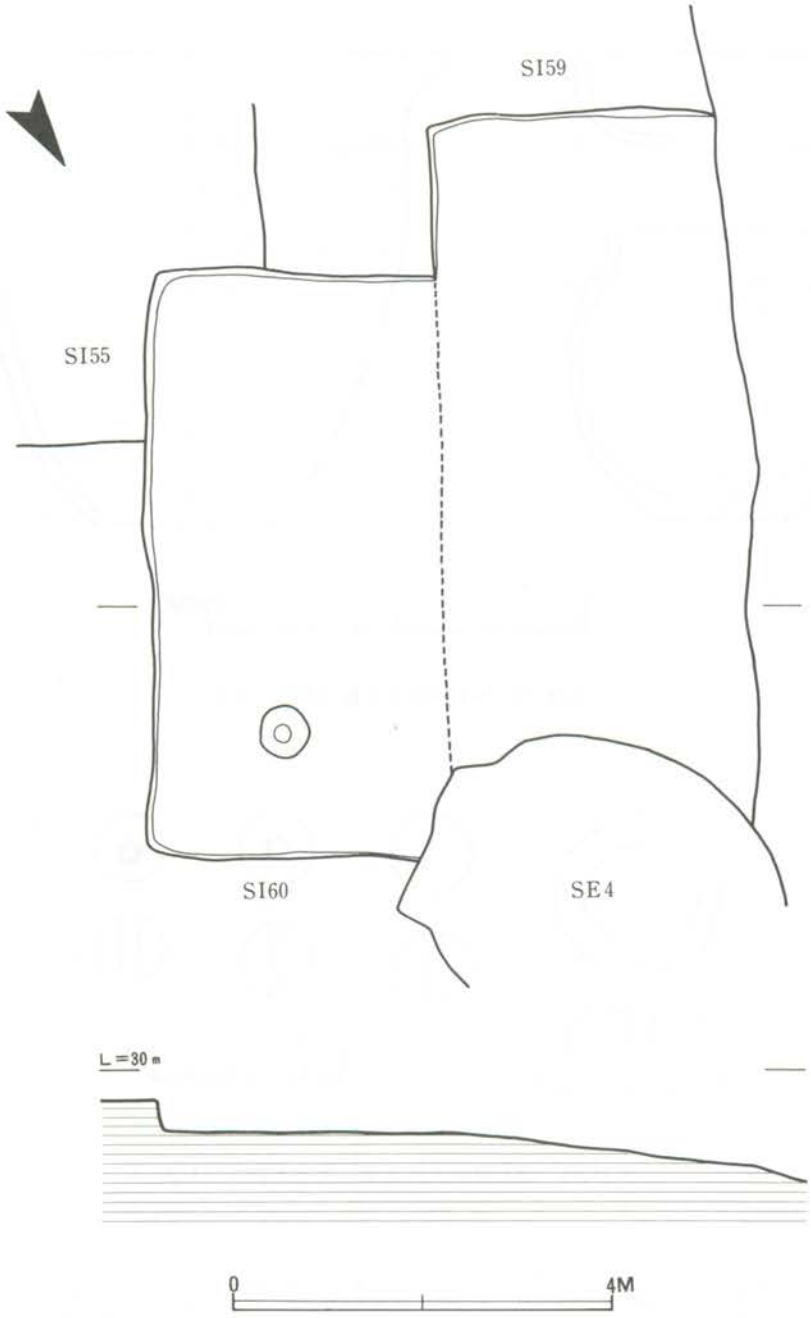


第445図　SI58出土土玉
実測図（1/2）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
SI58－1	杯	13.6 ×　　×	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	体上半¼
－2	杯	18.2 ×　　×	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	⅛
－3	甕	18.6 ×　　×	暗褐色、良、全面ナデ調整	口縁部のみ
－4	甕	×　　× 7	暗褐色、良、全面ヘラミガキ	胴上半⅙

ＳＩ59（第446～448図、ＰＬ179）

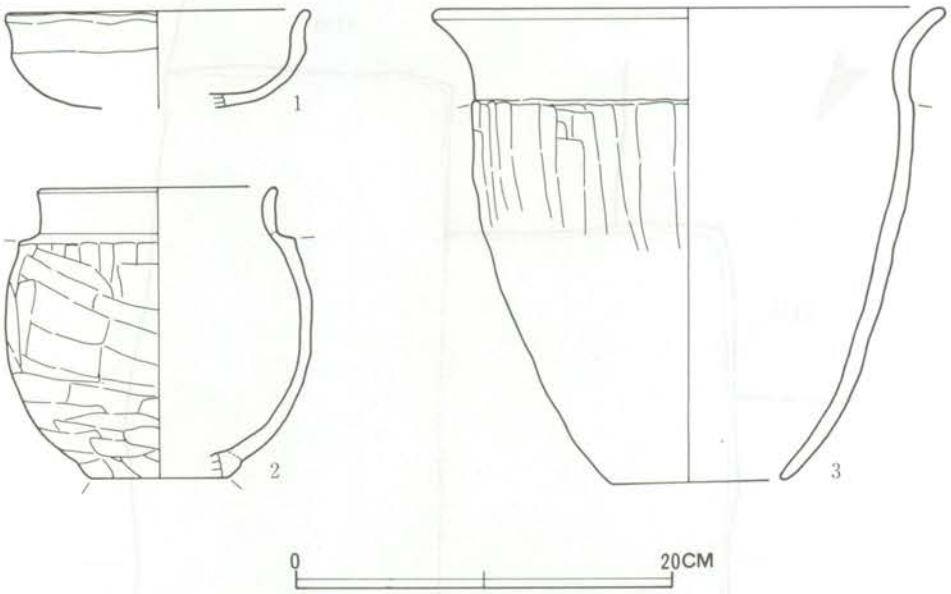
Ｃ―18グリッドに位置し、西側は道路工事により削平されており、東側ではＳＩ60と重複関係にあり、また、北側ではＳＥ４に切られているため規模、形態等は不明である。壁は南辺と東辺の一部に５cm前後の残存があるだけのきわめて悪い遺存状態である。床面はソフトローム



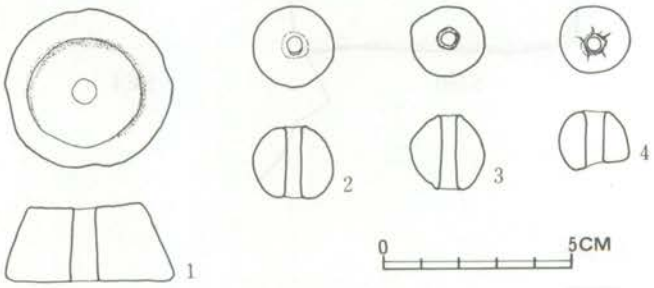
第446図　ＳＩ59・ＳＩ60実測図（1/80）

面そのままであり、ＳＩ60との境もはっきりせず、西側へ傾斜している。

遺物は土器と土玉と石製紡錘車が覆土中から出土している。土器は杯、壺、甑が各１点出土している。土玉は径２cm前後の小形品が３点出土している。紡錘車は上面径３cm、下面径4.5cm、厚さ２cm、孔の径７mmであり、断面は台形状を呈している。



第447図　ＳＩ59出土土器実測図（1/4）



第448図　ＳＩ59出土紡錘車・土玉実測図（1/2）

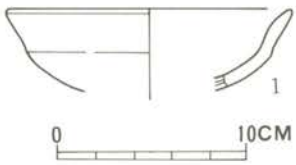
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ59－１	杯	16前後×　　×	暗茶褐色(黒斑有り)、良好、体部内外面ともヘラミガキ	¼

－2	壺	12.5 × 14.9 × 7.2	暗茶褐色(内面および外面下半黒色)、良好、体部外面へラケズリ、体部内面へラナデ	底部欠矢、⅔
－3	甑	27.2 × 24.6 × 9.2	暗茶褐色(黒斑有り)、良好、体部へラケズリの後外面下半および内面下半へラミガキ、内面下半ナデ調整	ほぼ完形

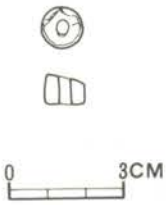
ＳＩ60（第446・449・450図、ＰＬ179）

Ｃ―18グリッドに位置し、南西コーナーでＳＩ55を切り、両側ではＳＩ59と重複関係にあり、一部ＳＥ４に切られている。規模は東辺が６ｍあるので、おそらく６ｍ四方の方形を呈するものであろう。壁は東辺の遺存がよく40cm前後あり、立ち上がりも直線的で垂直に近い。壁溝はない。柱穴は北東コーナー部分に１本検出された。規模は径50cm、深さ40cmである。１本だけだったのかどうか不明である。床面はソフトローム面を踏み固めもせず、そのまま利用したために非常に軟弱である。

遺物は杯１点と臼玉１点が出土している。臼玉は滑石製で径1.1cm、厚さ５～８㎜、孔の径３㎜で、あまり良質なものではない。



第449図　ＳＩ60出土土器実測図（1/4）

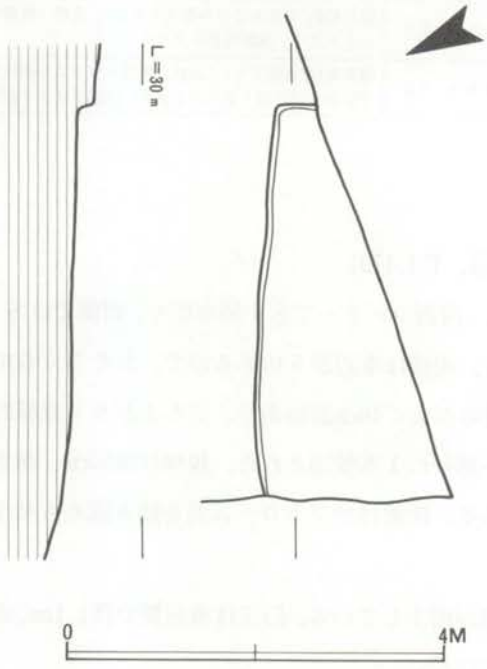


第450図　ＳＩ60出土臼玉実測図（1/2）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ60－1	杯	15 ×　　×	明褐色、良、体部外面および内面ナデ調整	⅓

ＳＩ61（第451図、ＰＬ178－２）

Ｃ―18グリッドで、本跡最西端の住居である。西側は道路工事により削平されており、南側は大部分が境界外のため不明な点が多くて、規模、形態等は不明である。壁は東辺、北辺の東側においては20cmの遺存である。壁溝、柱穴は認められない。床面はソフトローム面そのまま



第451図　ＳＩ61実測図（1/80）

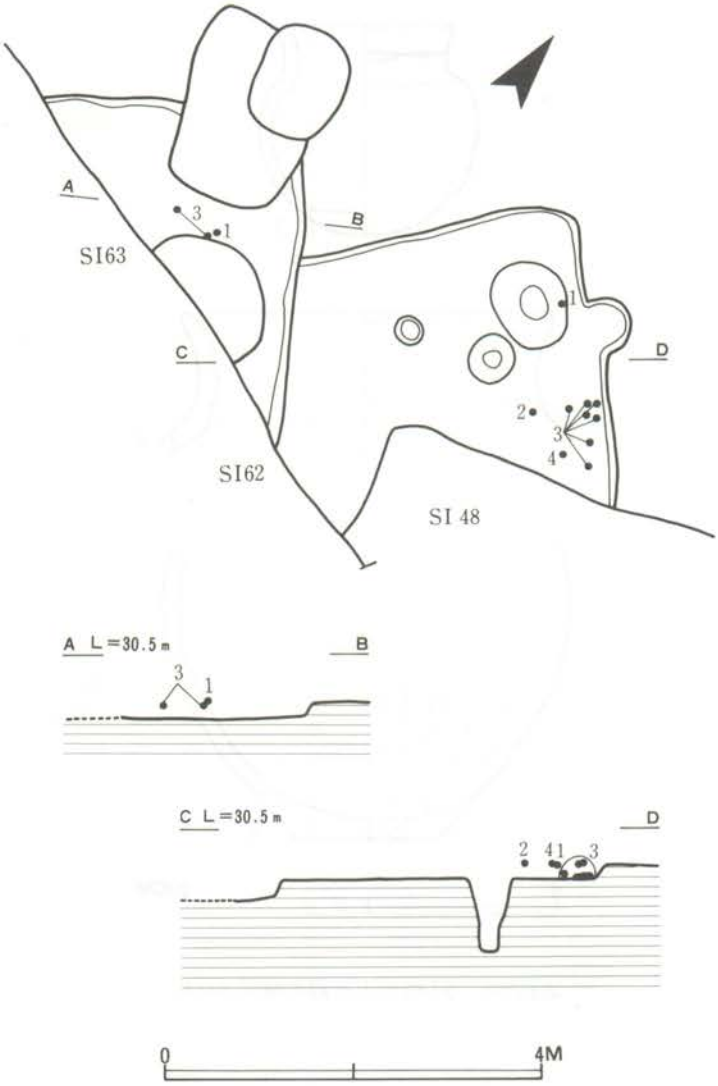
で踏み固めを施していないので非常に軟弱である。

遺物はなにもない。

ＳＩ62（第452～454図、ＰＬ173－１）

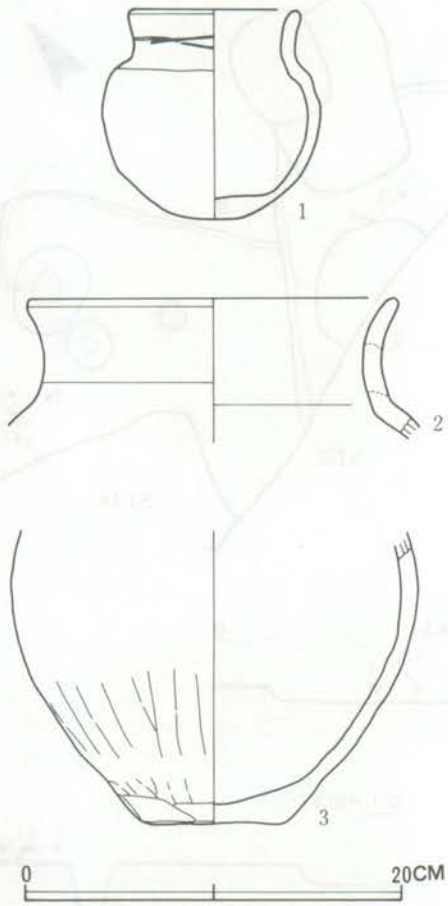
Ｃ－17グリッドに位置し、ＳＩ48、63に切られ、なお南側は境界外のため、規模、形態等は不明である。壁は20cm前後のやや開きぎみのものである。壁溝はない。柱穴ははっきりしない。３本あるが本住居に伴うか不明である。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。

遺物は土器と土玉が東壁よりに集中して出土している。土器は小形壺１、甕２である。土玉は径2.7cmの大形品１個、径1.5cm前後の小形品６個、径１cm前後の超小形品２個の合計９個である。

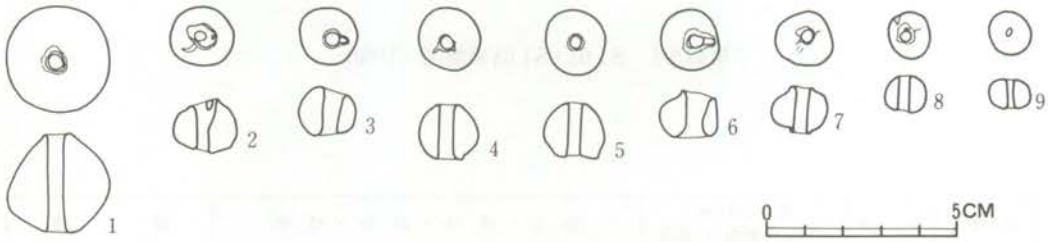


第452図　SI 62・SI 63実測図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI 62－1	壺	9 × 10.8 ×	明褐色、赤色粒子、良好、体部外面および内面ヘラミガキ	完形
－2	甕	19.6 × ×	明茶褐色、赤色粒子、良好、体部外面ナデ調整	
－3	甕	× × 7.6	暗茶褐色、不良、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	胴⅓



第453図　SI62出土土器実測図（1/4）

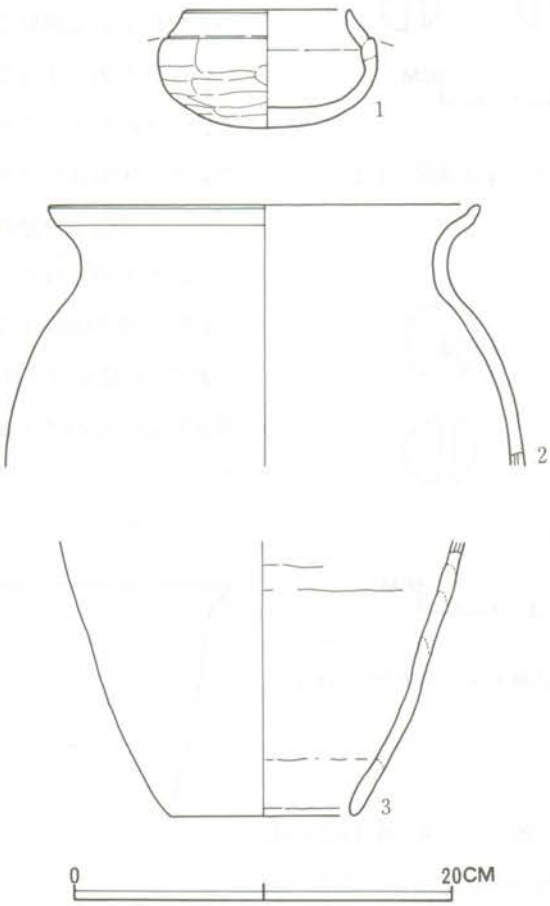


第454図　SI62出土土玉実測図（1/2）

ＳＩ63（第452・455・456図）

Ｃ－17グリッドに位置している。ＳＩ62を切り、ＳＢ61に切られ、なおかつ、南側の大部分が境界外のため、規模、形態等は不明である。壁はやや開きぎみの立ち上がりだが、20cm前後の遺存である。壁溝、柱穴は認められない。床面はハードローム面を利用して、暗褐色土とロームの混合土を踏み固めているために非常に堅緻である。

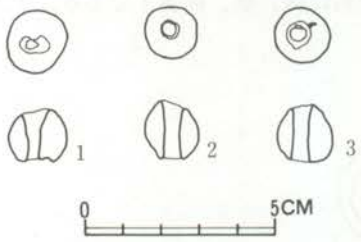
遺物は土器と土玉が散乱した状態で出土している。土器は椀、甕、挿各１である。土玉は径1.5cm前後の小形品が３個である。



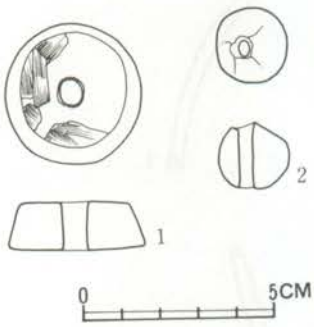
第455図　ＳＩ63出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ63－1	椀	8.8 × 6 ×	明褐色、赤色粒子、良好、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	½

−2	甕	22.7 × ×	暗赤褐色（内面暗黄褐色、スス付着痕有り）、長石・石英、不良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半½
−3	甑	× × 9.8	茶褐色、良好、ヘラケズリの後外面ナデ調整、内面下端ヘラミガキ、単孔	胴下半½



第456図　SI63出土土玉実測図（1/2）



第457図　SI64出土紡錘車・土玉実測図（1/2）

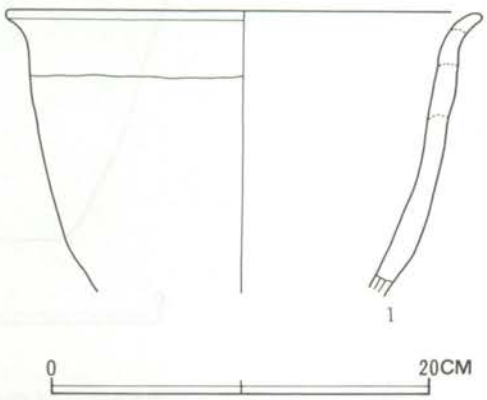
ＳＩ65（第458図）

Ｃ−17グリッドに位置している。ＳＩ52〜54、64、ＳＢ61、62と重複関係にあるが、上部において攪乱がひどいため前後関係はまったく不明である。床面がかろうじて確認されただけである。柱穴らしいものが１本あるが、はたして本

ＳＩ64（第457図）

Ｃ−17グリッドに位置している。ＳＩ53を切り、ＳＩ63、ＳＢ61、62に切られ、なおかつ半分以上が境界外で、床面の一部しか残っていないため、まったく規模、形態等は不明で、住居跡があったと確認できただけのものである。床面はソフトローム中に暗褐色土とロームの混合土を踏み固めて良好な床をつくっていたと思われる。

遺物は径２cmの土玉１個と石製紡錘車１個である。紡錘車は上面径2.8cm、下面径3.6cm、厚さ1.3cm、孔の径７㎜のやや小形のものである。

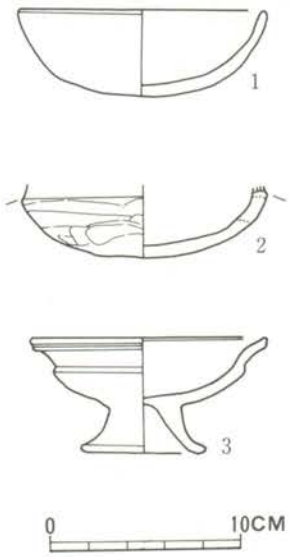


第458図　SI65出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ65−1	甑	25 × ×	明茶褐色、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラミガキ	胴上半½

住居跡に伴うものであるかは不明である。規模、形態等はまったく不明である。

遺物は甑が床面より1点だけ出土した。



第459図　SI66出土土器実測図（1/4）

ＳＩ66（第459図）

Ｃ－18グリッドに位置している。ＳＩ52とＳＩ54の間に遺構確認面であるソフトローム上面において、床面の一部のみが確認されただけであるため、規模、形態等はまったく不明である。床面は踏み固めの部分が若干、残存しているだけである。遺物はその床面の部分から、杯2、高杯1が出土した。

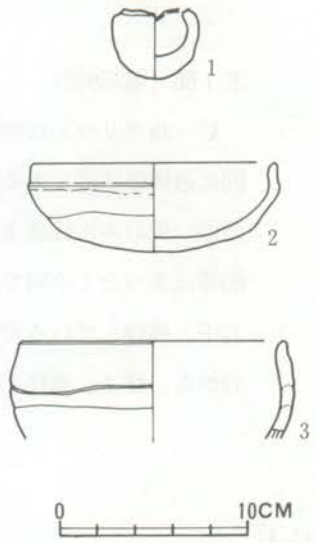
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ66－1	杯	13 × 4.5 ×	暗茶褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅓
－2	杯	× ×	暗褐色(内面黒色)、良、体部外面ヘラケズリの後ナデ調整、体部内面ヘラミガキ	体部⅓、黒色処理
－3	高　杯	12.4 × 5.8 × 6.5	暗褐色、不良、杯体部および脚部外面ヘラミガキ、杯部および脚部内面ナデ調整	⅓

ＳＩ67（第460図）

Ｃ－18グリッドに位置している。ＳＩ52、55、59の間に、遺構確認面であるソフトローム上面において、部分的に床面が確認されただけである。規模、形態等はまったく不明である。柱穴と思われるものが3本あるが、壁溝は確認できないため、はっきりしない。遺物は床面と思われるところより3点出土している。手捏1、杯1、椀1である。ＳＩ65～67に関しては攪乱がひどいために、はたして住居跡であるかどうかは不明であるが、遺物の出土により、住居跡と認定したものであるが、あまりにも不明確である事はいなめないところである。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ67－1	手　捏	× ×	茶褐色、良、内外面ともに指ナデ	口縁部欠失

−2	杯	13 × 4.5 ×	暗褐色、全面ヘラミガキ	⅓
−3	椀	14 × ×	暗黄褐色（内面黒褐色）、良、体部外面ナデ調整	体部¼



第460図　SI67出土土器実測図（1/4）

ii．竜角寺7号墳（PL149−1）

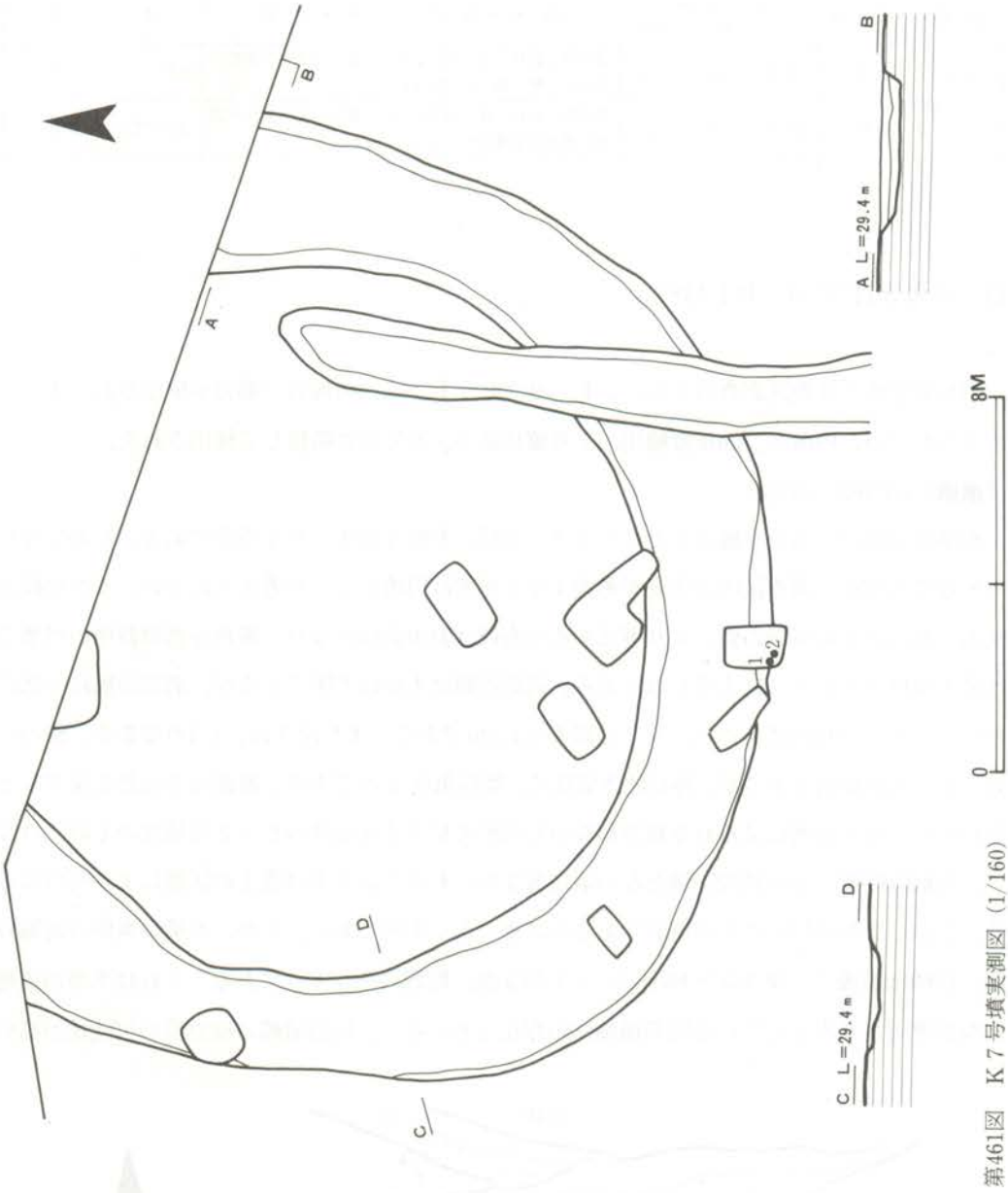
本古墳は昭和56年度の調査において、周堀のみが検出され、初めて古墳の存在が明らかにされ、すでに墳丘が削平され、埋れてしまった古墳がある事が確認された。

〔遺構〕（第461図）

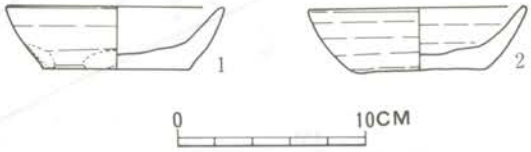
本墳はF・G−7グリッドに位置して、8号墳の北東に隣接している。遺構としては周堀の底面近い部分だけであり、主体部等の諸施設は全く不明である。この地域は薄い表土層の下はすぐにハードローム層になり、早い時期に削平された事を物語っている。北側の⅓弱の周堀は境界外になり、全容は不明である。また、東側においては、南より北に延びる幅1.5m前後の溝に切られている。本墳は径20m前後のやや丸みに欠ける円墳である。周堀は幅2.4〜2.8mでやや不揃いで、深さは20〜40cm前後の非常に遺存の悪い周堀である。後述する112号墳の周堀に比べると掘り込みが非常に浅いのである。これも大きな特徴である。南側には溝、土坑等があり、かなり攪乱されている。

〔遺物〕（第462図）

遺物は土師器が2点出土しているが、本墳に伴うものではない。周堀を切っている土坑中よりの出土で、はたして土坑に伴うのかも不明である。土器は土師器というよりも土師質土器というべき属性をもっている。



第461図　K７号墳実測図（1/160）



第462図　K７号墳周溝内出土土器実測図（1/4）

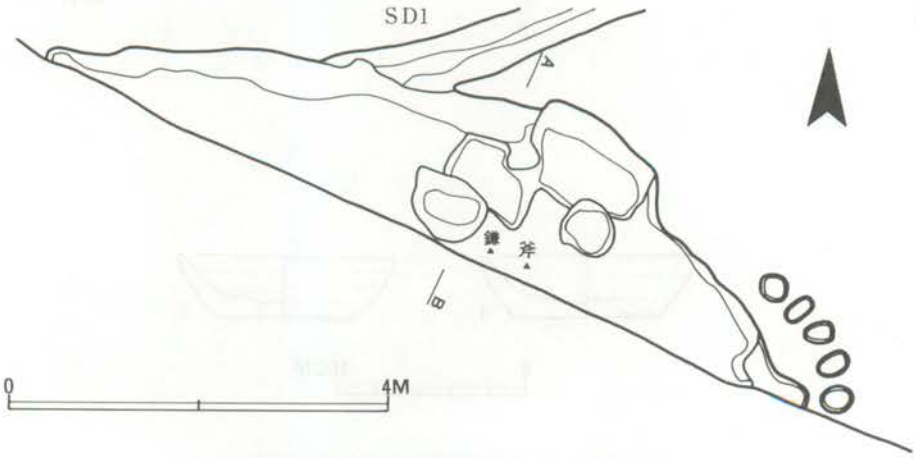
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
K７－１	杯	11.5 × 3.3 × 7.8	黄白色、砂粒、良、回転糸切り－R－内面ナデ調整、外面の一部に指ナデが見られる。	完形
－２	杯	11.5 × 3.4 × 7	黄白色、砂粒、良、回開糸切り－R－内面底部ナデ調整、底部は２度切りになっている。	ほぼ完形

iii　竜角寺112号墳（ＰＬ148）

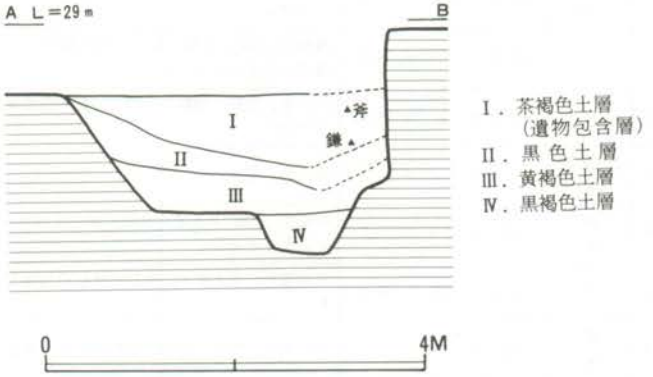
昭和57年度のＡ地区調査のさいに、Ｆ－９グリッドより、周堀の一部分が検出され、すでに削平されていた円墳が、56年度検出の７号墳に続き、８号墳に隣接して検出された。

〔遺構〕（第463・464図）

本墳は周堀の一部分を確認したにすぎず、規模、形態等はまったく不明である。しかしながら８号墳の存在、調査区内の所見を考慮すると形態は円墳としてか考えられない。また規模は検出した⅙以下の周堀の弧により復元すると直径は34m前後になり、竜角寺古墳群中の円墳では最大規模のグループに入るものである。周堀の幅は上面は不明であるが、溝底の幅は一部において立ち上がりが認められ、そこで測ると3.2mである。また深さは、1.4mである。壁の立ち上がりは直線的であるが、外に開き気味で、傾斜角度は50°である。断面は逆台形を呈すると思われる。壁と溝底に見られる長方形ないし円形を呈する土坑状のピットは後世のものではなく、周堀掘削後、そう時間が隔たない頃に営まれたものである事は覆土の状態により明白である。しかしながら何のための施設であるかはまったく不明である。また、本墳の東側の周堀外縁に径60cm前後で、深さ５～10cmのピットが５個、周堀にそうようにある。これは本墳の周堀内及び周辺より出土している円筒埴輪片の存在を考えると、円筒埴輪の樹立痕の可能性が高い



第463図　K112号墳周堀実測図（1/80）



第464図　K112号墳周堀断面図（1/80）

と思われる。

周堀内の覆土は4層にはっきりと分層できる。Ⅰ層は茶褐色土層で遺物を包含する。II層以下には遺物は少い。II層中には火山灰と思われる灰黄褐色を呈し、さらさらしたものが多くあり、掘立柱建物跡の柱穴内に認められるものと同一のものである。この事により周堀は掘立柱建物の時期にはまだ埋没していないで、堀としての機能は有していたようである。それはＳＤ1が周堀に接続して機能した事をも示している。

〔遺物〕（第465～472図）

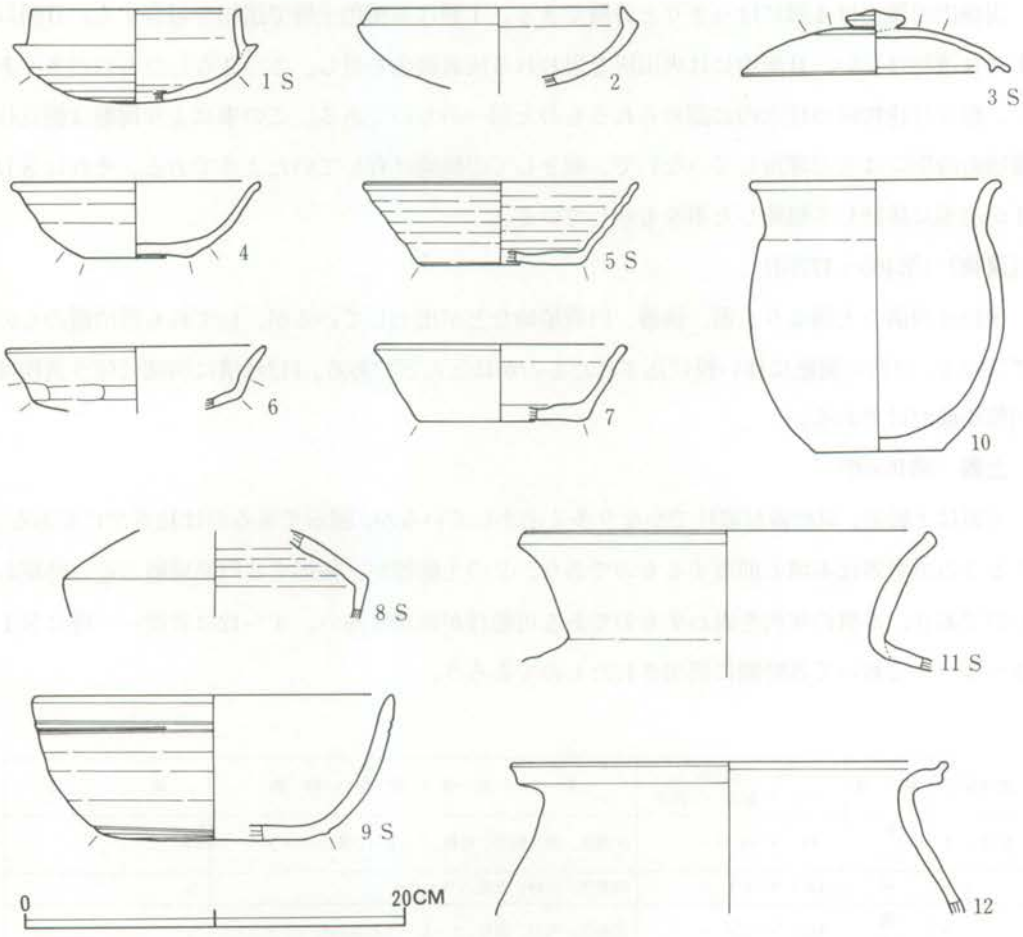
遺物は周溝の上層より土器、鉄器、円筒埴輪などが出土しているが、いずれも原位置のものではなく、官衙の廃絶に伴い投げ込まれたものがほとんどである。112号墳に明確に伴う遺物は円筒埴輪だけである。

土器（第465図）

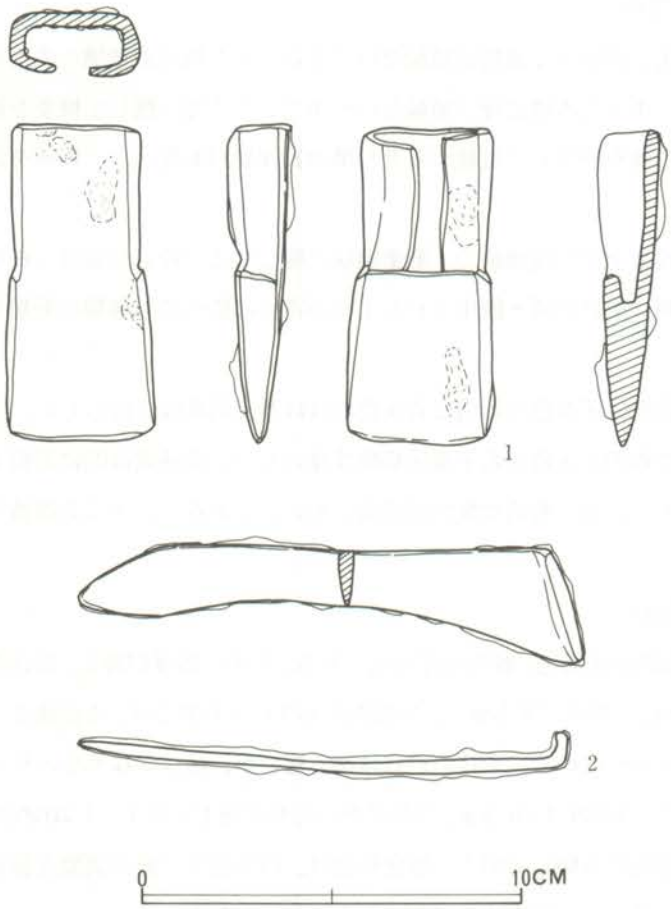
土器は土師器、須恵器が破片でかなり多く出土しているが、図示できるのは12点だけである。1と3の須恵器は本墳と前後するものであり、2の土師器が、後述する円筒埴輪と近い時期のものであり、本墳の年代を表わすものである可能性が非常に高い。4～12は官衙――特にＳＩ3～6――において各時期に使用されたものであろう。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
K112－1	杯 （S）	11　×（4.9）×	灰褐色、黒色粒子、堅緻、？－L－回転ヘラケズリ	¼
－2	杯	13.3 × 4.1 ×	暗褐色、良好、全面ヘラミガキ	⅙
－3	蓋 （S）	14.1 × 3.2 ×	灰褐色、長石、良好、？－L－天井部回転ヘラケズリ	¼
－4	杯	13 × 3.9 × 5.5	淡黄褐色、良好、？－R－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	ほぼ完形

−5	杯（S）	14.6 × 4.6 × 8.6	灰白色、良好、回転ヘラ切り−R−底部全面手持ちヘラケズリ	⅙
−6	杯	13.6 × 3.3 × 10.8	淡褐色、良好、体部下半および底部手持ちヘラケズリ、体部内面下半ヘラミガキ	⅓、赤彩
−7	杯	13.4 × 4 × 8.8	灰白色、良好、回転ヘラ切り−R−底部全面手持ちヘラケズリ	⅙
−8	長頸瓶（S）	× ×	灰白色、堅緻	肩部¼
−9	椀（S）	19 × 7.8 × 12	灰褐色、堅緻、？−R−底部全面手持ちヘラケズリ、ロクロ引き沈線有り	¼
−10	甕	13.1 × (14) × 6.5	暗茶褐色、赤色粒子、不良、体部円外面ともにナデ調整	⅔
−11	甕（S）	22 × ×	暗灰褐色、雲母、良好、体部内面ナデ調整	口縁部⅓
−12	甕	23 × ×	暗黄褐色、長石・石英、不良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半¼



第465図　K112号墳周堀内出土土器実測図（1/4）



第466図　K112号墳周堀出土鉄器実測図（1/2）

鉄器（第466図）

鉄器はⅠ層中より手斧と鎌の完形品が各１点出土している。１の手斧は全長8.2cm、刃部幅3.8cm、刃部厚２㎜、刃角は20°である。有袋式で肩がある。肩は上面より４cmのところで内側に２㎜入る。折り返しの部分は他より薄い作りになっている。袋部の中には柄状の溝も作られている。小形であるが整った造りをした製品である。２の鎌は全長13.2cm、幅は基端部で3.1cm、中ほどで1.5cm、厚さは４㎜である。基端部には折り返しが７㎜ある。この折り返しからすると刃は柄に対してだいぶ開く形態をとると思われる。刃部は全体的に彎曲しているが、峰は直線で、先端部において急に彎曲している。

鉄器は古墳に伴うものではなく、官衙の最終段階において使用され、投げ込まれたものであろう。

埴輪（第467～473図）

本墳において確実に伴出する遺物は埴輪だけである。また周辺の遺構や表土からも破片が採集されているので、すべて本墳に伴う埴輪という事で、ここで一括して概要を報告しておくことにする。また、参考資料として近接する9号墳の表採資料も提示し、理解を深めたいと思っている。

本遺跡出土の埴輪は全て円筒埴輪で、形象埴輪に関しては一片も見受けられない。胎土・焼成の面で大別4種類、更に色調・使用された工具の違いに依って14種類に分類することが出来る。

大別4類は(1)器表面は灰黄色で器肉は青灰色のほぼ還元焔焼成に近いもの、(2)器表面は乳橙色もしくは乳褐色で器肉が灰色の若干還元焔焼成様のもの、(3)焼成は(2)に近似するが、胎土中に石粒を多く含むもの、(4)一般的な酸化焔焼成のもの、である。以下この順番で、解説する。

(1)　1～9（第467図）

堅緻な焼成で、器表面灰褐色、器肉は青灰色である。全体に器厚が薄く、器底面で1～1.2cm、器体部で0.6～0.7cm、口縁部で0.5cmと、本遺跡出土のものの中では、その薄さと堅さで傑出している。皆小破片ばかりなので、全体の形状は摑み難いが、径はかなり小ぶりのものである。凸帯は断面三角形で、突出0.4～0.5cm、凸帯に用いた粘土紐も、幅1～1.2cm程度の小さな凸帯である。口縁は直線的に外傾して開く。器底付近は、内外面共に底部調整を施していない。透孔は資料がないが、恐らく、円形透孔であったろうと思われる。

(2)　10～40（第467・468図）

①　10～30（第467・468図）

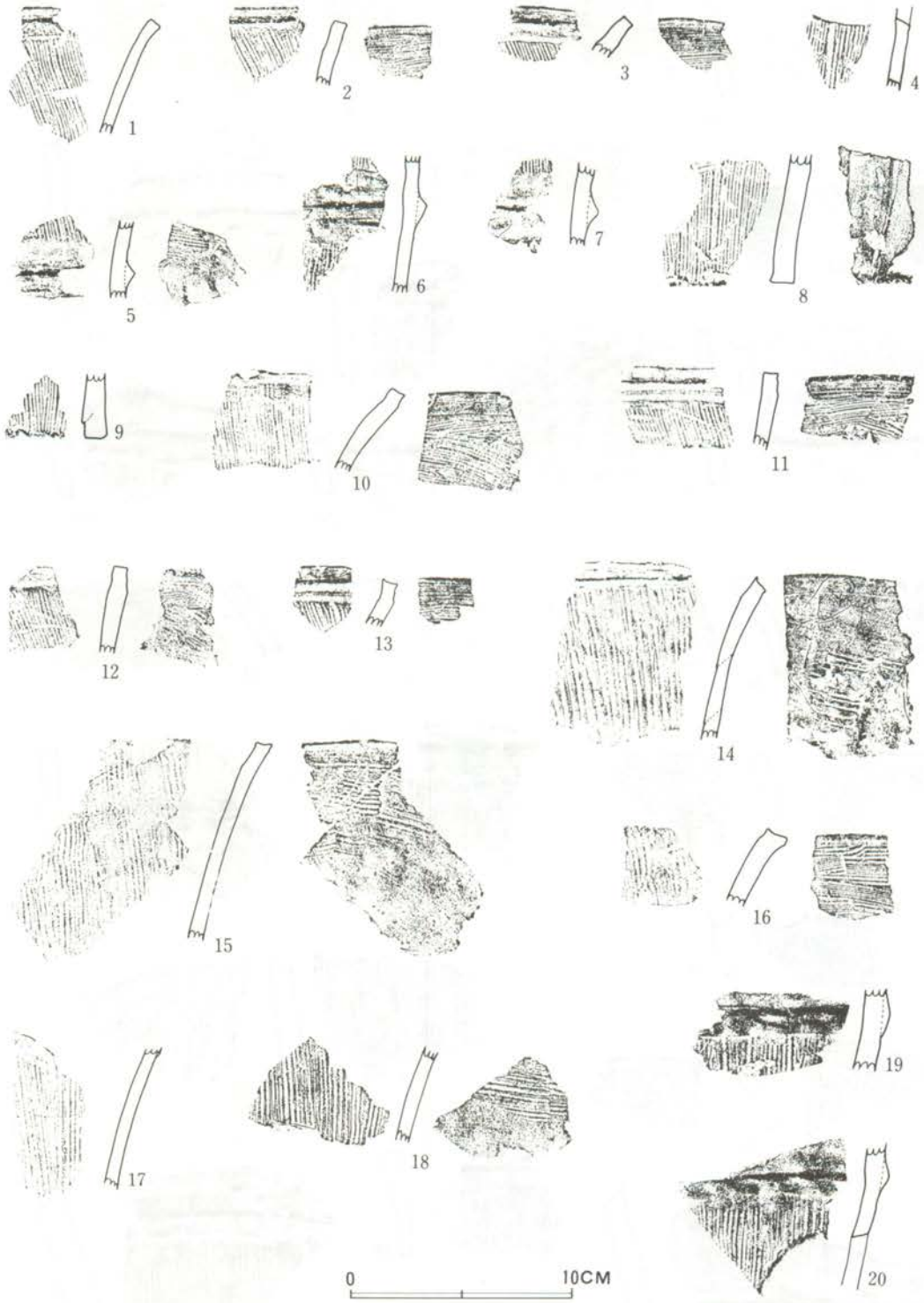
口縁部ばかりの資料である。器表面は橙褐色、器肉は灰色を呈する。(1)のもの程ではないが、焼成は良好で、若干須恵質である。口縁全体は外反するのであるが、口縁端部のみ若干内側に折られる、と云う特徴を持つ。器厚はやはり薄手である。他の部位の形状は全く判らない。

②　14～20（第467図）

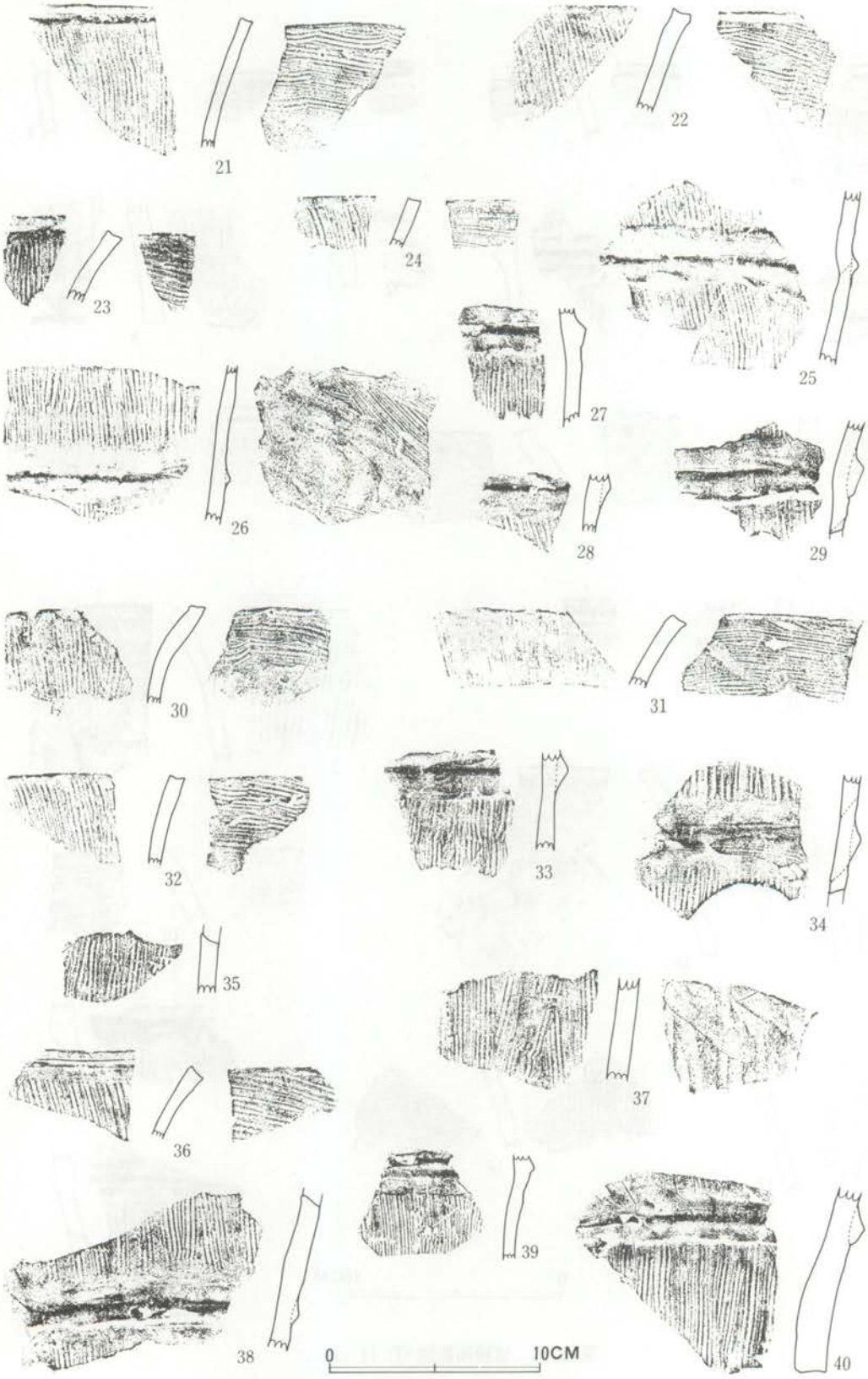
器表面は乳橙色で、器肉は灰色及至青灰色を呈する。器表は柔らか目で、ハケ目の摺れてしまっている部分もあるが、器肉は堅くしまっている。口縁は端部手前で若干外反させている。凸帯は断面三角形で突出は0.3cmと低い。円形透孔を有する。この一群も全体に器肉は薄手である。

③　21～29（第467・468図）

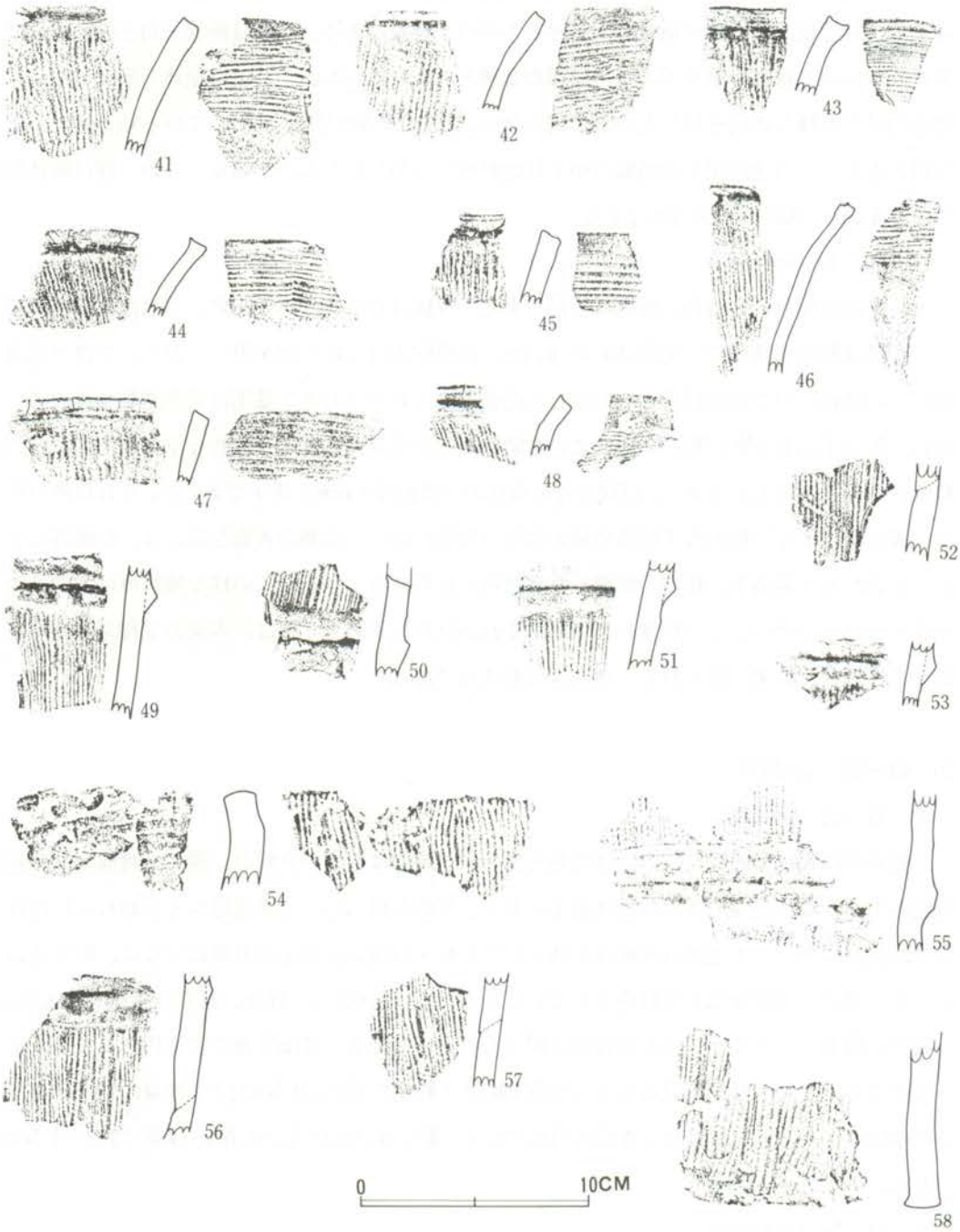
器表面は乳橙色（②よりも色調は暗い）器肉は灰白色を呈する。焼成は良好である。この一群も器厚は全体に薄手である。口縁は直線的に開口する。凸帯は断面三角形で、突出は0.3cm



第467図　埴輪拓影図 ①（1/3）



第468図　埴輪拓影図 ②（1/3）



第469図　埴輪拓影図 ③（1/3）

と低いものである。透孔の形状は判らない。凸帯部で約20cmの径を計る。大きさとしては標準的なものである。

④　30～35（第468図）

器表面は褐色、器肉は灰色を呈する。焼成は良好である。口縁は直線的に開口するものと、端部3cm程手前で外に折り気味に反らせるものの2種類がある。凸帯は断面三角と断面台形の崩れたものの2種類の破片がある。口縁の2種と対応するのか、それとも全体の形状の崩れが部分的にこの様な状況を呈したのかは判らない。突出は0.5cmだが、使用している粘土紐は若干太目のもので、当遺跡出土の埴輪の中では比較的しっかりしたものである。この一群は器体部で器厚1cm、口縁付近で0.7cmである。

⑤　36～40（第468図）

器表面は褐色・乳褐色、器肉は灰色である。焼成はやや良好から良好。口縁は直線的に開く。凸帯は断面三角形で、突出は0.4～0.5cm、比較的太目の粘土紐を用いており、やはり当遺跡出土の埴輪の中では比較的しっかりした凸帯を持つものである。基部は底部調整を施していない。第一段高は凸帯下場で6.8cm。この数値は周辺で見受けられる一般的な下総型円筒埴輪の数値にごく近似のものである。口縁付近の破片のみは器厚0.6cmと薄手であるが、それ以外の部分の破片は、ごく一般的な下総型埴輪の器厚の数値に近い。尚38の表面左端には、乾燥時に生じたと思われる亀裂を、指撫で修整した補修痕が見られる。一般にこの様な補修痕は大型品に見受けられるのだが、この程度の小型品にそれが見られると云う事は、本来の工程をかなり省略して作製した結果と思われる。透孔は円形透孔である。

(3)　41～58（第469図）

①　41～53（第469図）

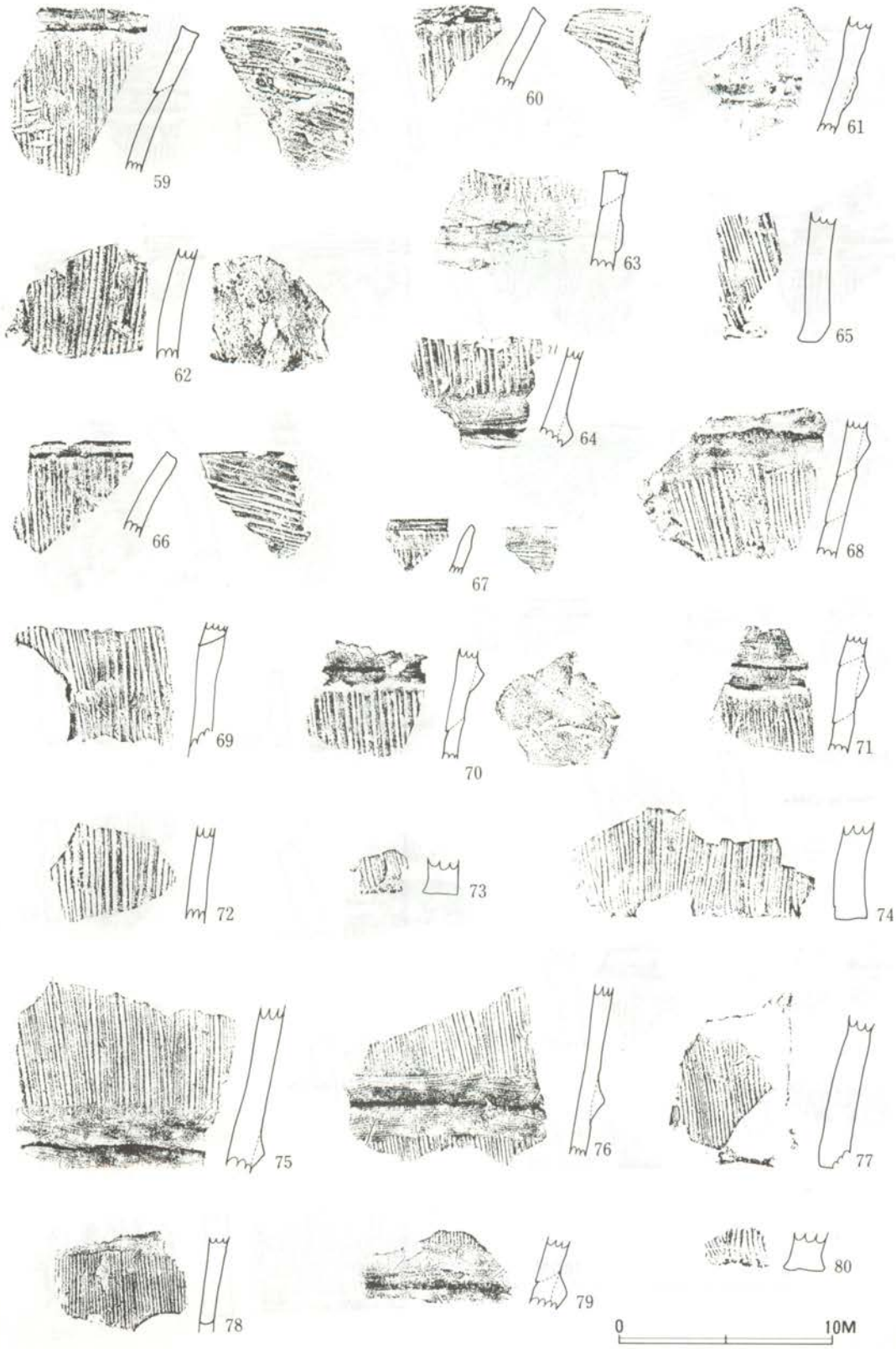
器表面は褐色・乳褐色、器肉は灰色を呈する。焼成は普通～良好の、還元炎焼成と酸化炎焼成の中間的な状況である。特色は胎土にあり、黒色石粒（恐らく黒雲母かと思われる）の含有量が非常に多い。本遺跡の埴輪は全体として石粒・石塊の含有量が非常に少なく、胎土そのものから云えば良好な胎土を特色としていることから、①•②の一群は、目立つ存在と言える。

器形の特徴としては、口縁が直線的に開くものと、端部2～3cm手前で若干折られるように外反するものとの2種類が見られる。凸帯は断面三角形で突出は0.5cmだが、細身の粘土紐を用いた華偖な作りのものである。透孔は円形である。器厚は口縁付近で0.7cm、体部で1.2～1.3cmである。

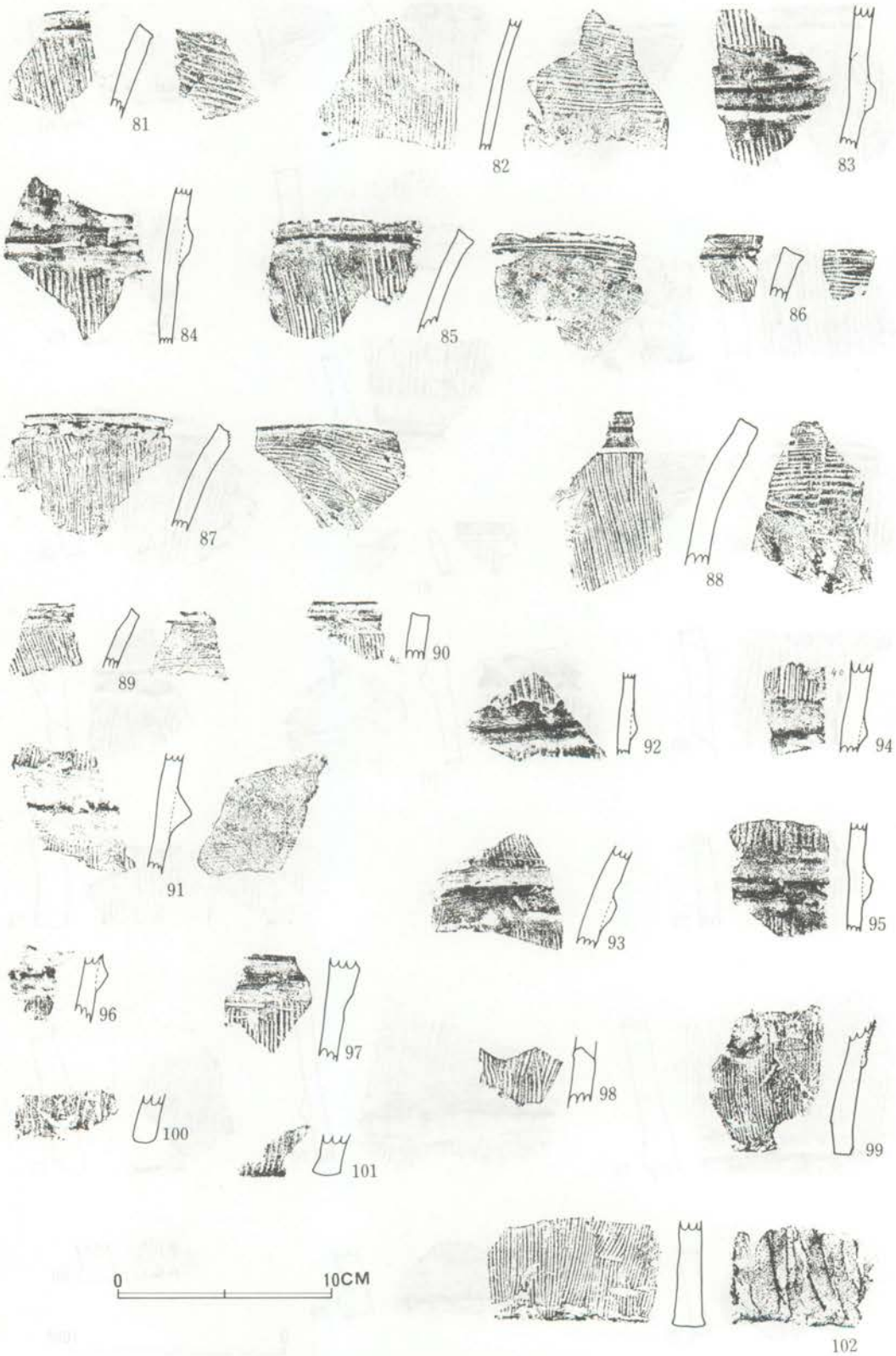
②　54～58（第469図）

器表面は乳褐色・青灰色、器肉は青灰色である。焼成は全体に良好であるが、部位に依って同一個体でも焼成度合の異なるものが見られる事から、この極端な色調の差は解釈されるものと思われる。

胎土に関しては、①の所で記した通りの特徴を示す。凸帯は断面三角形とダレた台形のものが見られる。円形の透孔を有し、基底部が若干開くようにつぶれてしまっている。器厚は、ご



第470図　埴輪拓影図 ④ (1/3)



第471図　埴輪拓影図 ⑤ (1/3)

く一般的な厚さである。尚、口縁付近の破片は見あたらない。

(4)　59～102（第470・471図）

①　59～65（第470図）

器表面は褐色、器肉もほぼ同色である。焼成は普通程度である。調整に粗いハケ目を用いている点に特徴がある。口縁は直線的に開口する。当遺跡のものの中では、凸帯の形状が特異で、断面三角・台形の崩れたもので、明瞭な稜線を有さない丸味を帯びた断面形をしている。基底部は底部調整を施さず、器底面で、内側に若干押し出したような格好になっている。

②　66～72（第470図）

器表面は乳褐色・褐色、内側も同色である。やはり粗いハケ目を用いて表面を調整している。口縁はほぼ直線的に広がり開口する。凸帯は断面三角形で突出は0.5cm前後である。円形の透孔を有する。基底部は存在しないので、判明しない。焼成は普通程度。

③　73～74（第470図）

基底部の2破片のみで、上に接合すると思われる破片は存在しない。器表面乳褐色、器肉は灰褐色である。比較的丁寧な造りで、基底面付近の歪みも全くない。

④　75～80（第470図）

器表面乳褐色、器肉も同色である。焼成は普通。口縁部の破片は存在しない。凸帯は断面三角形で突出0.5cmで、明瞭な布撫での痕跡を持つ。77は基部の破片であるが、凸帯下場迄の第一段高約7cm。底部調整は見られない。表面右側に、亀裂の補修痕が見られる。これも(2)—⑤に見られた例と同様、工程を相当に省略して作製した結果生じたものと思われる。大型破片を2点有しているが、凸帯下場径は約20cmである。

⑤　81～84（第471図）

器表面は褐色・乳褐色、器肉も同色である。焼成は普通。口縁は直線的に広がって開口する。凸帯は断面台形で、突出は部位によって0.2～0.6cmと若干不均一である。口縁部器厚は比較的薄手である。

⑥　85～102（第471図）

分類上は一項を設けているが、(4)の範疇で、今迄どの分類にも属さない種々のものを、〝その他〟としてまとめたものである。

口縁部の破片から基底部の破片へと順を追い、特徴的なものについては若干の説明を加えておく。

先ず口縁部破片で88は胎土的に見ると黒色石粒の含有量は多いが、焼成は完全な酸化炎焼成で、(3)の範疇には入らない。外面左端に亀裂補修痕が見られる。

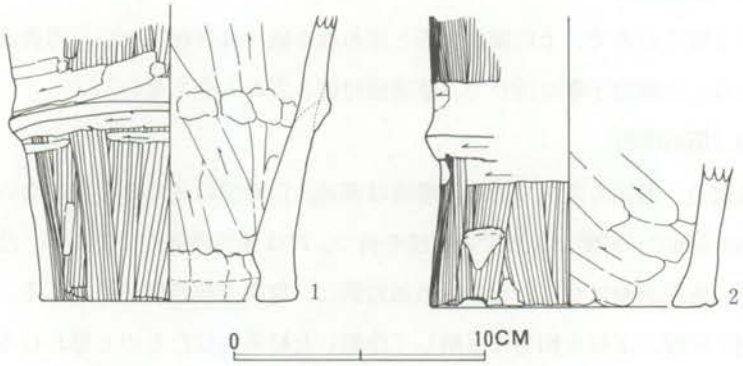
次に体部で91の破片であるが、この破片の凸帯は断面三角で、稜線の非常に明瞭なもので、

突出0.8cmと、本遺跡出土の埴輪破片中では、最も突出した凸帯を有している。100は器表面が暗灰色、器肉が褐色と云う殆ど瓦に近い色調を呈している。本遺跡ではこの類の色調のものは、これ一点のみである。96と92は、凸帯の粘土紐の貼付の際に撫でが雑だったために、完全に擦り消し切れずに、紐巾が明瞭にわかってしまう。

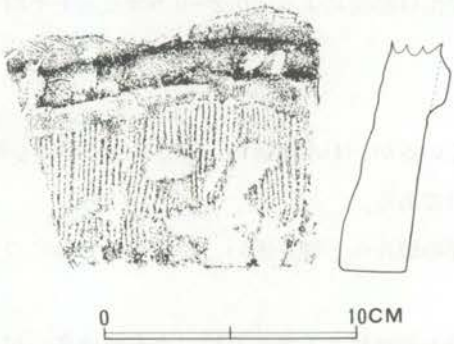
次に99の基底部の破片であるが、凸帯の殆どが剝離しており、一部を留めているのみである。凸帯下場迄の第一段高は4.3cmと低い。

A．103（第472図）

(2)類に属する。器表面乳褐色、器肉は灰白色である。焼成は良好であるが、器表面は若干軟らかい。基底部（第一段）は、粘土版貼り合わせである。内面は、基底周辺を指で丁寧に仕上げ、その後に縦方向の指撫でを行っている。凸帯は崩れた台形で、稜線は余り明瞭で無い。



第472図　埴輪実測図（1/3）



第473図　参考資料・K9号墳表採埴輪拓影図（1/3）

B．104（第472図）

(4)類に属する。器表面は暗乳褐色、器肉も同様である。胎土は、若干黒色石粒の含有量が多いが(3)類ほどでは無い。焼成は普通よりやや良い。基底部（第一段）はやはり粘土版の貼り合わせで、ややひしゃげた格好になっている。凸帯は断面三角形で、突出0.5cmで若干太目の粘土紐を用いている。内面は斜方向の撫でで調整されている。

小結

本稿に掲せた以外に、実測にたえない破片が約2倍以上あるが、分類の結果は以上のいづれかに属するものである。各類の略述につづき、以上の資料から得られた問題点について、簡単ではあるが、まとめてみたい。

1：先ず時期的な問題だが、(1)類が全体の中で特異性を見せているために、一概に言い切れない点があるが、器径・第一段高・凸帯の形状等から見て、まず下総型円筒埴輪の範疇に入ることはまちがいないであろうと思われる。但し、下総型円筒埴輪は各部位の計測から導き出した形態比率を重視して分類されているわけであるから、ここでは、下総型に見られるそれ以外の特徴を幾つか検討したうえでの結果である。轟氏の分析に依れば、下総型の埴輪は新古2期に分かれるようであるが、それもやはり形態比率を主要観点として導き出したものであって、技法等にどれだけの相違が出て来るのか、その詳細は轟氏が『埴輪研究』を著してから、既に10年以上を経ているにも拘らず、殆どはっきりしていない、と云うのが現状である。従って、本遺跡の埴輪から導き出せる絶対年代は6世紀後半以降、と云うことだけである。

2：次に(1)類に属する埴輪の特異性の問題である。その特性は

①器表面は若干黄色がかっているが、その焼成は殆ど還元焔焼成に近い。

②器厚が薄い

と云う2点に凝縮される。器厚は部位によって若干厚くなる部分もあるが、体部から口縁部にかけては、平均0.5～0.7cm程度と云う並みはずれた薄さを示している。この種類の埴輪は、現在周辺――下総地域では見当たらず、又、関東地方でもその類例は殆ど無いのではないかと思われる。畿内ではこの種の須恵質で薄手の埴輪を見ることが出来るが、当地域にのみ、飛び火的に出現するとは思われない。関東地方でも須恵質の埴輪は往々にして見られるのだから、それに加えて、この手の薄手の埴輪がどの程度存在するのか、再確認する必要がある。

又、(2)類の埴輪も(1)類に準じてはいるが、(1)類に見られるような精緻な雰囲気は無い。

3：次に幾つかの破片に見られた亀裂補修痕についてである。本来、埴輪は、赤塚氏等の指摘

されているように、段階的に作製されるものである。ある程度の高さ迄巻き上げたら乾燥させ、その上に又巻き上げると云う順序を踏んで作られる可きものであるが、それ等の工程を著しく省略したために、作成作業終了後、乾燥中に器体に亀裂を生じると云う結果を生み出してしまうわけである。只、概して、このようなことは小型品よりも、大・中型品に多く見られることなのである。だが本遺跡では、小型品であるにも拘わらず、このような現象が見られる。やはり徹底した工程の省略が原因なのだろうと思う。

4：最後に、参考資料として載せた（106）の埴輪片についてであるが、竜角寺古墳群は、その存在や、規模の大きさについては以前より広く知られており、甘粕健氏によって、その構成と変遷などの全体像に関する重要な指摘を受けているにも拘らず、個々の古墳の調査資料は極めて少なく、特に埴輪については資料紹介すら皆無であったため、全く様相が摑めていなかったのが実態である。今回の本遺跡の調査によって、恐らく竜角寺古墳群内では最も新らしい部類に属するであろうと思われる一群の資料が得られた訳であるが、この参考資料は千葉県教育委員会文化課作製の竜角寺古墳群分布図中Ｋ９として表示されている前方後円墳より検出されたものである。これは瞭らかに本遺跡の一群の資料よりも古いものである。厚い器肉、あまり高くはないが、太く、しっかりとした二本の稜線を持つ凸帯。ただ残念な事に第一凸帯までしか残っておらず、第二段のハケ目が縦ハケなのか横ハケなのか全く判らない。従って確実に言える事は６世紀前半以前という事になってしまう。しかし、最近原田昌幸氏によって竜角寺古墳群の墓域の拡大という非常に興味深い試論が出されているが、そういった事を検討する場合においても、比較的古い段階まで、埴輪を有効な資料として利用出来る――という希望を与えてくれる資料だと思う。

＝参考文献＝

赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』90号　昭和53年

甘粕健　「前方後円墳の性格に関する一考察」『日本考古学の諸問題』　昭和39年

川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２　昭和53年

轟俊二郎『埴輪研究』昭和47年

原田昌幸「千葉県立房総風土記の丘周辺の歴史的環境とその変貌」『千葉県立房総風土記の丘年報』７　昭和59年

第15表　大畑遺跡出土埴輪一覧表

実測No.	遺構・遺物No.	色調（外・内器肉）	胎土	焼成	成形	調整	凸帯形整形	凸帯径	第一段高	その他（彩色等）
1	K112-Ⅰ	外一灰褐色 内一橙色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2cm) 内面横ハケ(16/1.5cm) 口縁布撫		不		還元焔焼成
2	F-9表	外一灰褐色 内一褐色 肉一青灰色	還元鉄粒・スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2cm) 内面横ハケ(不明) 口縁布撫		口径 21cm		還元焔焼成
3	F-9表	外一灰褐色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(14/2cm) 内面横ハケ(8/1cm) 口縁布撫		不		還元焔焼成
4	K112-Ⅱ	外一灰褐色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2cm) 内面斜指撫		不		円形透孔 還元焔焼成
4	K112-Ⅱ	外一灰褐色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2mm) 内面斜指撫		不		円形透孔 還元焔焼成
5	K112-Ⅱ	外一乳褐色 内一橙褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(不明) 内面上半斜ハケ(不明)下半縦指撫	断面三角形 0：？：0.5 左方向撫	不		還元焔焼成
6	F-9表 K112-Ⅰ	外一灰褐色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(6/1cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：2.9：0.5 左方向撫	不		還元焔焼成
7	K112-Ⅰ	外一灰褐色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(6/1cm) 内面縦指撫	断面三角形0：3.1：0.5 左方向撫	不		還元焔焼成
8	F-9表	外一灰褐色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	基底部円版成形 ⑥下から	外面縦ハケ(13/2cm) 内面縦指撫		不		還元焔焼成
9	K112-Ⅲ	外一青灰色 内一灰褐色 肉一青灰色	還元鉄粒、スコリア粒を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2cm) 内面縦指撫		不		還元焔焼成
10	K112-Ⅱ	外一橙色 内一橙色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒、スコリア粒を普通に含む。	良	不明	外面縦ハケ(11/1.5cm) 内面横ハケ(15/2cm)口縁布撫		口径 約21cm		口唇彩に特徴
11	K112-Ⅰ	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一灰色	酸化鉄粒・透明石粒、スコリア粒を若干含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2cm) 内面横ハケ(8/10cm) 口縁布撫		口径 約21cm		口唇彩に特徴あり
12	F-9表	外一橙褐色 内一橙色 肉一灰色	酸化鉄粒、透明石粒、スコリア粒を若干含む	優良	不明	外面縦ハケ(13/2cm) 内面横ハケ(8/1cm) 口縁布撫				
13	K112-Ⅰ	外一橙色 内一橙色 肉一青灰色	酸化鉄粒等を少量含む	優良	不明	外面縦ハケ(6/1cm) 内面横ハケ(3/5mm) 口縁布撫		不		
14	K112-Ⅱ	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一橙色	酸化鉄粒、雲母粒、黒色石粒、普通に含む	良	下から見て右巻きの巻き上げ	外面縦ハケ(7/2cm) 内面横ハケ(5/1.6cm)後に指撫		口径 約20cm		
15	F-9表	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、白色石粒、スコリア粒を若干含む	普	不明	外面縦ハケ(12/2.5cm) 内面横ハケ(9/1.8cm) 口縁布撫		口径 27cm		
16	F-9表	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	良	不明	外面縦ハケ(8/2cm) 内面横ハケ(8/1cm) 口縁布撫		約24cm		
17	F-9表	外 内 肉 乳褐色	酸化鉄粒、スコリア粒を少な目に含む	普	不明	外面縦ハケ(10/2cm) 内面指撫 口縁指撫				
18	K112-Ⅰ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰色	黒色石粒、還元鉄粒を普通に含む	優良	不明	外面縦ハケ(7/1.3cm) 内面上半横ハケ(13/2cm) 下半横指撫		不		口縁付近還元焔焼成
19	F-9表	外 内 肉 一乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(10/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.4 布撫左方向	16cm		
20	F-9表	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰白色	酸化鉄粒等を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(11/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：3.4：0.3 布撫左方向	15cm		若干須恵質 円形透孔
21	K112-Ⅱ	外一橙色 内一橙色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒、スコリアを若干含む	良	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面横ハケ(10/2cm) 口唇部指撫		口径 約25cm		

22	K12-Ⅱ	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、白色石粒、スコリア粒を普通に含む	普	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面横ハケ(13/2.2cm) 口縁布撫		口径 26cm		
23	S E2-Ⅲ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰色	酸化鉄粒等を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(11/2cm) 内面横ハケ(10/2cm) 口縁指撫		不		
24	K12-Ⅱ	外一褐色 内一褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	優良	不明	外面縦ハケ(2/2.2cm) 内面横ハケ(9/1cm) 口縁指撫				
25	K12-Ⅱ	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一灰色	酸化鉄粒、透明石粒を普通に含む	良	下から見て左巻きの巻き上げ	外面縦ハケ(10/2cm) 内面横指撫	断面三角 0：2.6：0.3 横布撫左方向			
26	K12-Ⅰ	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一灰白色	酸化鉄粒、透明石粒を普通に含む	良	下から見て左巻き上げ	外面縦ハケ(9/2cm) 内面下半は横指撫 上半は横ハケ(14/2.1cm)	断三角面 0：2.3：0.3 横布撫左方向	凸壺 20cm		
27	K12-Ⅱ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰白色	酸化鉄粒等を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(9/20cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.3 布撫左方向	不		朝顔くびれ部須恵質
28	K12-Ⅲ	外 内 肉 一乳橙色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	良	不良	外面縦ハケ(8/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.3	不		
29	K12-Ⅱ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰白色	酸化鉄粒等を少量含む	良	下から見て右巻きの巻上げ粘土紐巾2.3cm	外面縦ハケ(7/2cm) 内面縦指撫	断面台形 1.1：3.3：0.6 布撫左方向	19cm		還元焔焼成円形透孔
30	D-11表	外 内 肉 褐色	酸化鉄粒、スコリア粒を普通に含む	普	不明	外面縦ハケ(13/2.6cm) 内面横ハケ(9/1.5cm) 口縁指横撫		口径 25cm		
31	E-10表	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一青灰色	酸化鉄粒、白色石粒を若干含む	優良	不明	外面縦ハケ(11/1.5cm) 内面横ハケ(16/2cm) 口縁部指撫で		口径 約25cm		
32	K12-Ⅱ	外一褐色 内一褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、白色石粒、黒色黒色石粒を少な目に含む	良	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面横ハケ(10/2cm) 口縁布撫		約25cm		
33	F-9表	外一褐色 内一乳褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(8/1.4cm) 内面斜指撫	断面三角形 0：？：0.4 布撫左方向	16cm		
34	K12-Ⅰ	外 内 肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少な目に含む	普	下から見て左巻きの巻き上げ粘土紐巾2.8cm	外面縦ハケ(7/2cm) 内面縦指撫	断面台形 0.6：3.3：0.5 布撫左方向	16cm		円形透孔
35	K12-Ⅱ	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	優良	不明	外面縦ハケ(7/1.6cm) 内面横指撫 透孔穿孔後指撫		不		円形透孔
36	S I 12	外 内 肉 乳橙色	酸化鉄粒、白色石粒を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面横ハケ(7/2cm) 口縁部布撫		口径 20cm		
37	K12-Ⅱ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	優良	不明	外面縦ハケ(7/1.5cm) 内面縦横指撫				円形透孔
38	K12-Ⅰ	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一青灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を少な目に含む	良	下から見て右巻きの巻上げ粘土紐巾1.6cm	外面縦ハケ(6/1.2cm) 内面横指撫	断面三角形0：3.3：0.4 布撫左方向	14cm		外面左端に亀裂補修痕あり円形透孔
39	F-9表	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一灰白色	酸化鉄粒等を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(15/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.5 布撫左方向	不		
40	K12-Ⅱ	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一灰白色	酸化鉄粒、白色石粒を普通に含む	普	基底部粘土版成形下から見て◎	外面縦ハケ(13/2.2cm) 内面縦指指撫 基底部内面横指撫	断面三角形 0：3.4：0.6 布撫左方向	11cm	6.2cm 凸帯下段	
41	K12-Ⅰ	外 内 肉 橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	普	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面上半横ハケ(8/2cm) 下半指撫　口縁指撫		不		
42	K12-Ⅲ	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	普	不明	外面縦ハケ(6/2cm) 内面横ハケ(7/2cm) 口縁横方向指撫		口径 27cm		
43	F-10表	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰色	黒色石粒、白色石粒を普通に含む	良	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面横ハケ(15/22cm) 炭縁布撫				
44	K12-Ⅱ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一橙色	黒色石粒、白色石粒を多量に含む	良	不明	外面縦ハケ(10/2cm) 内面上半横ハケ 下半縦指撫(8/2.1cm) 口縁布撫				

45	F-9表	外 内 肉 暗橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	普	不明	外面縦ハケ(6/2cm) 内面横ハケ(7/2cm) 口縁布撫		不		
46	K12-II	外一褐色 内一褐色 肉一橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒、白色石粒を多量に含む	良	不明	外面縦ハケ(11/2cm) 内面横ハケ(10/2cm) 口縁布撫		不		
47	K12-II	外一黄褐色 内一 〃 肉一灰褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	良	不明	外面縦ハケ(7/2cm) 内面横ハケ(9/2cm) 口縁布撫		口径 26cm		25と同一個体
48	S I 12	外 内 肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多目に含む	普	不明	外面縦ハケ(11/2cm) 内面横ハケ(7/1cm) 口縁布撫		不		
49	F-9表	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一青灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を少な目に含む	良	不明	外面縦ハケ(10/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：2.2：0.6 布撫左方向	不		円形透孔
50	K12-I	外 内 肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	普	不明	外面縦ハケ(8/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.4 布撫左方向	不		円形透孔
51	K12-I	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一青灰色	酸化鉄粒、白色石粒、黒色石粒を普通に含む	良	不明	外面縦ハケ(7/2cm) 内面横指撫	断面三角形 0：？：0.4	不		
52	F-9表	外 内 肉 橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	普	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面縦指撫		不		円形透孔
53	K12-II	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一橙色 灰色)2層	酸化鉄粒、黒色石粒を多目に含む	良	不明	外面縦ハケ(不明) 内面指横撫	断面三角形 0：？：0.5 布撫左方向	不		
54	K12-II	外一灰褐色 内一橙褐色 肉一青灰色	酸化鉄粒、白色粒黒色石粒を多目に含む	良	不明	外面縦ハケ(7/1.7cm) 内面横ハケ(6/2.4cm)		底径 約11cm		正立焼成か(？)
55	K12-II	外一橙褐色 内一青灰色 肉一橙色	酸化鉄粒、白色石粒、黒色石粒を多目に含む	良 ＼ 普	下から見て左巻きの巻上げ	外面縦ハケ(8/2cm)	台形 撫巾　4.2cm 凸巾　2cm 高　0.4cm	凸帯径 15cm		
56	K12-II	外一褐色 内一黄褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を多目に含む	普	下から見て左巻きの巻上げ	外面縦ハケ(8/1.4cm) 内面横指撫	断面三角形 0：？：0.3 指撫左方向	不		
57	E-9表	外一褐色 内一橙褐色 肉一灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	普	下から見て左巻き巻上げ	外面縦ハケ(9/1.9cm) 内面縦指撫				円形透孔
58	F-9表	外一橙褐色 内一乳褐色 肉一青灰色	酸化鉄粒、白色石粒、黒色石粒を多目に含む	良	粘土版接合 ◎下から	外面縦ハケ(5/1.3cm) 内面横指撫		底径 約11cm		正立焼成か(？)
59	K12-I	外 内 肉 暗褐色	酸化鉄粒(塊)、白色石粒、黒色石粒を普通に含む	普	下から見て左巻きの巻き上げ	外面縦ハケ(8/2cm) 内面横ハケ(8/2cm)		口径 20cm		酸化鉄塊(径1cm)の混入が特色
60	F-11表	外 内 肉 暗褐色	酸化鉄粒、スコリア粒を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(不明) 内面横ハケ(不明) 口縁布撫		不		
61	K12-I	外 内 肉 暗橙褐色	酸化鉄粒等を少な目に含む	良	下から見て左巻きの巻上げ	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫	断面台形 1：3.9：0.4 布撫左方向	不		
62	F-10表	外 内 肉 暗橙褐色	酸化鉄粒、白色石粒を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(7/2cm) 内面斜指撫		不		
63	K12-I	外 内 肉 暗橙褐色	酸化鉄粒等を少な目に含む	良	下から見て左巻きの巻上げ	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫	断面台形 1：3.8：0.5 布撫左方向	不		
64	F-9表	外 内 肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	普	不明	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.6 布撫右方向	12cm		
65	F-9表	外 内 肉 褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	基底部粘土版成形下から◎	外面縦ハケ(9/2cm) 内面斜指撫		不		
66	F-9表	外 内 肉 褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普 ＼ 不良	不明	外面縦ハケ(8/2cm) 内面斜ハケ(6/2cm) 口縁指撫		口径 24cm		
67	S I 12	外 内 肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(10/2cm) 内面横ハケ(不能) 口縁布撫		不		

68	K112-II	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	普	粘土紐巾2.1cm	外面縦ハケ(8/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：2.7：0.5 布撫左方向	16cm	不	外面左端に亀裂 補修痕あり 円形透孔
69	K112-Ⅰ	外内肉 一乳褐色	酸化鉄粒、白色石粒、スコリア粒を普通に含む	普	下から見て左巻きの巻上げ 粘土紐巾2.7cm	外面縦ハケ(8/2.8cm) 内面縦指撫		不	不	円形透孔
70	F-9表	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	下から見て右巻きの巻上げ 粘土紐巾2.4cm	外面縦ハケ(6/2cm) 内面斜指撫	断面三角形 0：？：0.5 布撫左方向	16cm	不	
71	F-9表	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	下から見て右巻きの巻上げ 粘土紐巾2.1cm	外面縦ハケ(8.2cm) 内面斜指撫	断面三角形 0：3.4：0.5 布撫左方向	不		
72	F-9表	外内肉 一暗褐色	酸化鉄粒、黒色石粒、白色石粒を普通に含む	普	不明	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫 透孔穿孔後指撫		不		円形透孔
73	K112-II	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、黒色石粒、白色石粒を普通に含む	普	基底部円版成形	外面縦ハケ(5/1cm) 内面横指撫		不		底面平坦
74	K112-Ⅰ ・II	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、透明石粒、黒色石粒を若干含む	良	粘土版接合◎下から	外面縦ハケ(9/1.6cm) 内面横指撫		底径 約10cm		
75	F-9表	外内肉 一乳褐色	酸化鉄粒、白色石粒、黒色石粒を少な目に含む	普	不明	外面縦ハケ(11/2.1cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.6 布撫左方向	13cm		
76	S I 4	外内肉 一褐色	酸化鉄粒、白色石粒、スコリア粒を普通に含む	良	不明	外面縦ハケ(8/1.5cm) 内面斜指撫	断面三角形 0.2：2.7：0.5 布撫左方向	20cm		
77	F-9表	外内肉 橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	基底部粘土版成形下から◎	外面縦ハケ(9/2cm) 内面基底部指横撫 上部縦指撫		底径 13cm	7.1cm	外面右端に亀裂 補修痕あり
78	F-9表	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	下から見て右巻きの巻上げ 粘土紐巾1.7cm	外面縦ハケ(12/2cm) 内面縦指撫	不明	14cm		円形透孔
79	K112-III	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、白色石粒、スコリア粒を普通に含む	普	下から見て左巻きの巻上げ	外面縦ハケ(12/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.6	13cm		
80	F-9表	外内肉 褐色	酸化鉄粒、黒色石粒、スコリア粒を普通に含む	普	基底部粘土版成形	外面縦ハケ(9/2cm) 内面指撫		不		基底部
81	F-9表	外内肉 暗褐色	酸化鉄粒、スコリア粒を少な目に含む	良	不明	外面縦ハケ(11/2cm) 内面斜ハケ(6/2cm) 口縁布撫		不		
82	F-10表	外内肉 橙褐色	酸化鉄粒、透明石粒を若干含む	良	不明	外面後ハケ(8/2cm) 内面上位横ハケ(12/2cm) 下位斜撫		約2.2 cm		最上段
83	K112-Ⅰ	外内肉 褐色	酸化鉄、黒色石粒を少量含む	良	粘土紐巾 2.6cm	外面縦ハケ(8/2cm) 内面縦指撫	断面台形 0.9：4.1：0.2 布撫左方向	不		
84	K112-Ⅰ	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒等を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(7/2cm) 内面縦指撫	断面台形 0.8：3.1：0.5 布撫右方向	17cm		
85	K112-Ⅰ	外一暗橙褐色 内一暗橙褐色 肉一暗灰色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(8/1.6cm) 内面上半横ハケ(4/1cm) 下半斜ヘラ撫 口縁布撫		口径 22cm		
86	F-9表	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒スコリア粒を少な目に含む	普	不明	外面縦ハケ(13/1cm) 内面横ハケ(5/1cm) 口縁指撫		不		
87	F-9表	外内肉 暗褐色	酸化鉄粒、スコリア粒を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(19/1.9cm) 内面斜ハケ(15/2cm) 口縁布撫		不		
88	F-9表	外内肉 褐色	酸化鉄粒、黒色石粒、スコリア粒を多目に含む	普	不明	外面縦ハケ(15/2.4cm) 内面横ハケ(20/3.4cm) 口縁布撫		不		外面亀裂補修痕有
89	F-9表	外内肉 乳橙色	酸化鉄粒、黒色石粒を少な目に含む	良	不明	外面縦ハケ(16/2cm) 内面横ハケ(9/1cm) 口縁布撫		不		
90	F-9表	外内肉 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(12/2cm) 内面横ハケ(不明) 口縁指撫		不		

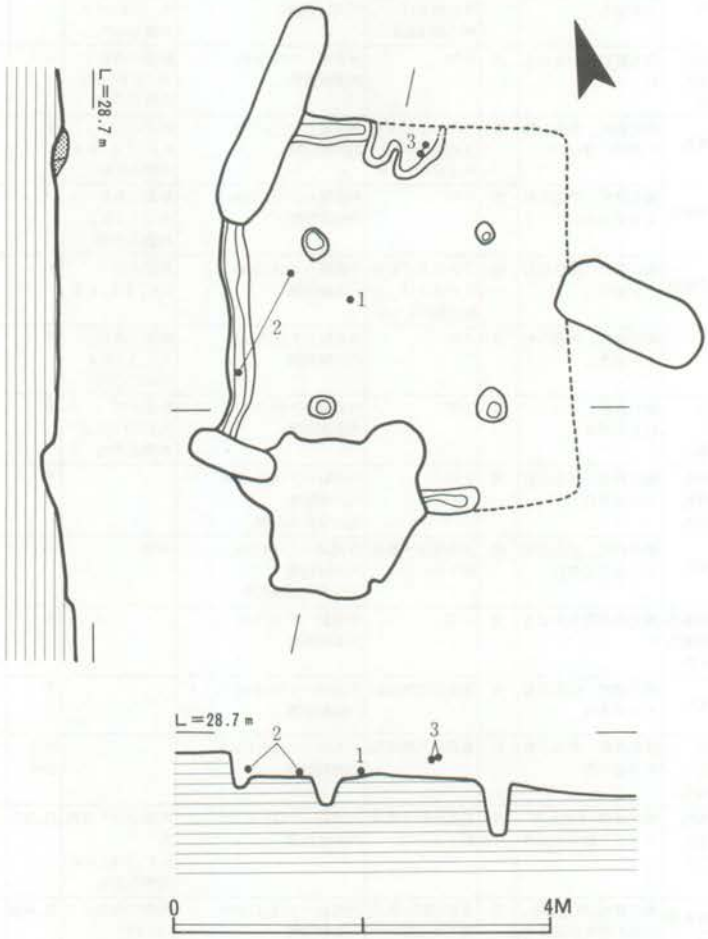
91	F-9表	外 内 肉 } 褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	良	下から見て左巻きの巻上げ 粘土紐巾2cm	外面縦ハケ(14/2cm) 内面斜指撫	断面三角形 0：3.6：0.8 布撫右方向	不		
92	F-10表	外一橙褐色 内一橙褐色 肉一灰色	酸化鉄粒等を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(7/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：2.8：0.3 指撫右方向	不		
93	KⅢ2-Ⅰ	外 内 肉 } 乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を普通に含む	普	下から見て左巻きの巻上げ 粘土紐巾1.7cm	外面縦ハケ(13/2cm) 内面縦指撫	断面台形 0.5：2.8：0.4 布撫左方向	不		
94	KⅢ2-Ⅰ	外 内 肉 } 暗橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	普	不明	外面縦ハケ(11/2cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.5 布撫左方向	不		
95	F-9表	外 内 肉 } 暗橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	下から見て右巻きの巻上げ 粘土紐巾2.5cm	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫	断面台形 0.6：3.4：0.6	不		
96	F-9表	外 内 肉 } 褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(6/1cm) 内面縦指撫	断面三角形 0：？：0.4 布撫左方向	不		
97	S E 2- Ⅲ	外一橙色 内一橙色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、スコリア粒を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(9/2cm) 内面縦指撫	断面台形 0.1：？：0.5 布撫左方向	不		
98	F-9表	外一乳橙色 内一乳橙色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少量含む	普	不明	外面縦ハケ(6/1.2cm) 内面横指撫 透孔穿孔後指撫		不		
99	F-10表	外 内 肉 } 橙褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を少な目に含む	良	基底部粘土版成形下から◎	外面縦ハケ(13/2cm) 内面縦指撫 基底部内面横指撫	不明	不	4.3cm 凸帯下まで	下総型第一段若干須恵質
100	F-9表	外一暗橙褐色 内一暗橙褐色 肉一暗灰色	酸化鉄粒等を少量含む	良	不明	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫		不		
101	F-9表	外 内 肉 } 暗褐色	酸化鉄粒、白色石粒を少量含む	普	基底部同版成形	外面縦ハケ(6/2cm) 内面縦指撫		不		
102	F-9表	外一褐色 内一褐色 肉一灰褐色	酸化鉄粒、黒色石粒を多量に含む	良	基底部円版成形	外面縦ハケ(10/1.6cm) 内面縦指撫		底径 10cm		
103	KⅢ2-Ⅰ ・Ⅱ	外一乳褐色 内一乳褐色 肉一灰白色	酸化鉄粒、黒色石粒、スコリア粒を少量含む	良	基底部粘土版成形下から◎	外面縦ハケ(15/2.3cm) 内面縦指撫	断面台形・三角形 0.4：3.8：0.4 布撫左方向	11.5cm	6.2 〜 6.5cm	残存率60%
104	KⅢ2-Ⅰ ・Ⅱ F一9表	外 内 肉 } 暗乳褐色	酸化鉄粒、黒色石粒、白色石粒を普通に含む	良	基底部粘土版成形下から◎	外面縦ハケ(8/1.1cm) 内面斜指撫	断面三角形0：4.0：0.5 布撫左方向	11.6cm	5.7cm	残存率70%
	参考 資料 K 9	外一暗褐色 内一暗褐色 肉一黒灰色	白色石粒を多目に含む	普	不明	外面縦ハケ(8/2cm) 内面横指撫	断面台形 1.3：4.2：0.7 布撫左方向	約 18cm	7 cm	器厚2.5〜2cm

D．飛鳥、奈良、平安時代

ⅰ　竪穴住居跡

ＳＩ１（第474・475図、ＰＬ153－１）

昭和56年度の調査においてＧ－６グリッドより検出された住居跡であるが、この地域は全般にハードロームまで削平されているために非常に遺存の悪い住居跡である。東側は削平を受け、西側、南側は攪乱を受けているために規模等は不明な点が多すぎる。規模は南北4.2mを測るが、東西は不明である。ただ柱穴の位置から推定すると東西は3.6mとなり，南北に長い方形を呈し、主軸はＮ－14°－Ｅである。壁は西側と北側半分、南側の中央に一部分残っているだけである。西側は残りがよく22cm前後あり、立ち上がりは直線的で垂直に近いものである。他はかろうじ

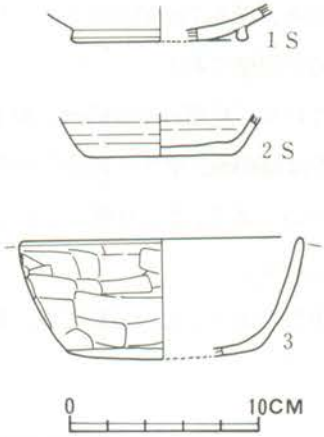


第474図　SI1実測図（1/80）

て壁と認められるにすぎない。壁溝は壁の遺存している部分においてのみ認められる。規模は幅20～30cm、深さ16cm前後である。柱穴は4本検出され、ほぼ1.8m等間で並んでいる。規模は径30cm前後で、深さ60cm前後のものと、径20cm前後で、深さ30cm前後のものの2種類ある。床面はハードローム面を利用して、暗褐色土とロームの混合土を主柱穴間の間だけを踏み固めている。そこだけは非常に堅緻であるが、周辺は軟弱である。

カマドは北辺のほぼ中央に構築されていたと思われる。全長は不明であるが、幅は80cmである。袖は山砂を若干使用しているが、大部分は暗褐色であるために遺存はきわめて悪い。壁外への掘り込みは不明である。床面への掘り込みは5cm程度の摺鉢状であるが、底面は非常によく焼けている。

遺物は須恵器杯A、Bが各1点、杯が1点散在した状態で出土した。

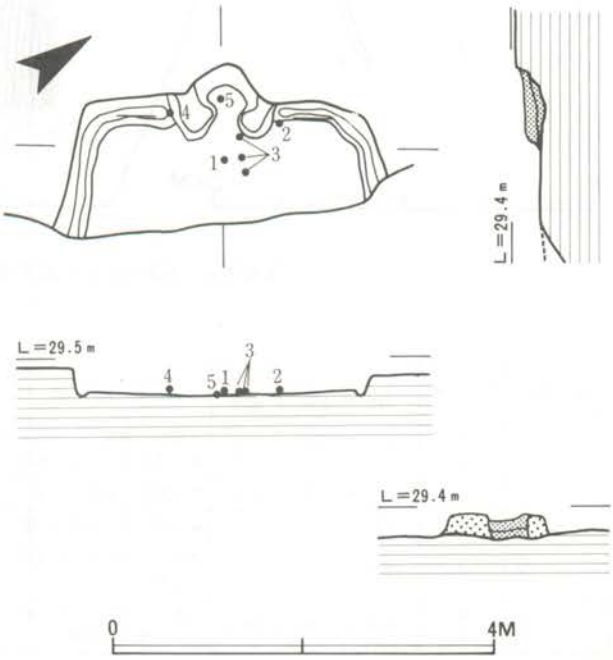


第475図　SI1出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI1－1	高台付杯 (S)	×　×	灰褐色、長石、良好、?－?－底部回転ヘラケズリ	底部⅓
－2	杯 (S)	×　× 7.8	灰褐色、長石、良好、?－R－底部全面手持ちヘラケズリ	体部上半欠失
－3	杯	15 × 6 × 10.2	茶褐色、良好、外面ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	⅓

SI2（第476・477図、PL153－2）

SI1の西側で、やはり56年度の調査により検出された。G－7グリッドに位置し、東側は後世の溝により大きく削平されているので規模、形態等に不明な点が多い。規模は南北3.4mを測るので、東西もその程度の小形の住居跡と思われる。主軸はN－55°－Wである。壁は比較的遺存がよく南側で30cm前後、北側で20cm前後である。壁の立ち上がりは直線的で垂直に近い。壁溝はカマド部分以外にはす



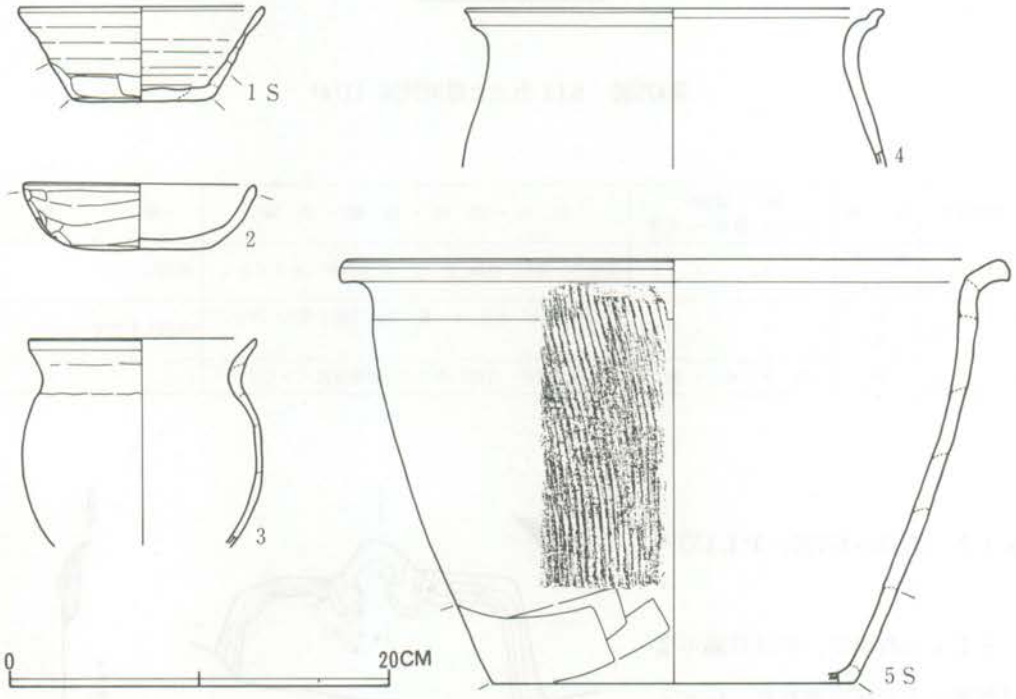
第476図　SI2実測図（1/80）

べて認められる。規模は幅30cm前後、深さ7cm前後である。柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているために堅緻である。

カマドは西辺中央に構築されている。規模は全長85cm、幅1mである。袖は山砂を20cm程積み上げて構築されている。掘り方は幅80cm、壁外へ40cm三角形に掘り込み、傾斜角度は50°である。床面への掘り込みは5cm程の凹みである。あまり焼けていないが、焼土は多く堆積している。

覆土は自然堆積の状況を示している。

遺物は土器がカマド周辺に集中して出土した。須恵器杯、甕各1、杯1、甕2である。

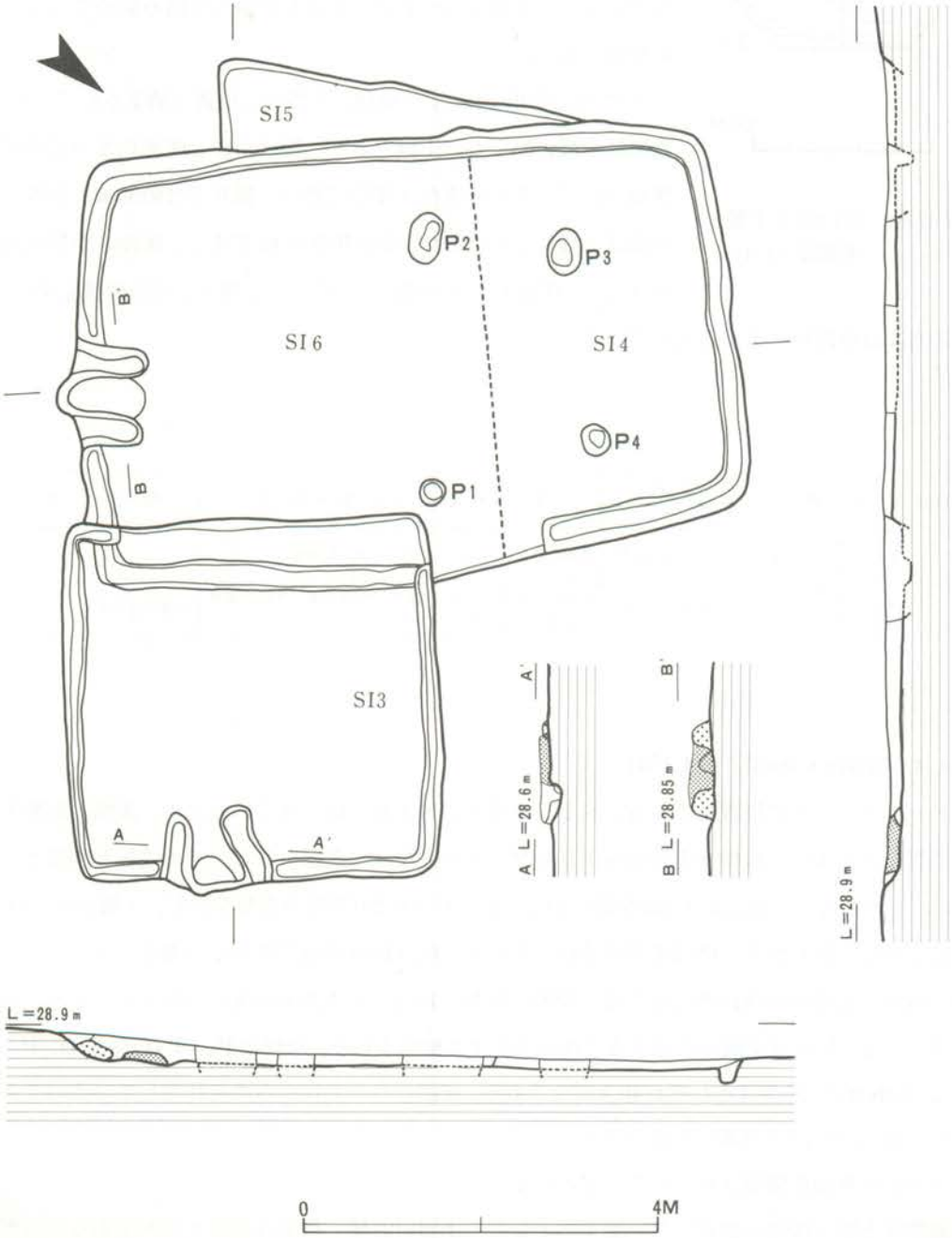


第477図　SI2出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI2－1	杯 (S)	13 × 4.8 × 7.4	赤褐色～黄褐色、長石・雲母、不良、回転ヘラ切り－R－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	½
－2	杯	12.2 × 3.4 × 7.6	暗茶褐色、良好、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整	¾
－3	甕	12 × ×	暗褐色、良、体部内外面ともにナデ調整	⅓
－4	甕	22.2 × ×	黄褐色、長石・石英・雲母、良、体部内外面ともにナデ調整	胴上半1/10
－5	甕 (S)	35.4 × 2.16 × 19.3	灰黄色、雲母、不良、体部外面下端手持ちヘラケズリ、体部内面ナデ調整	⅙

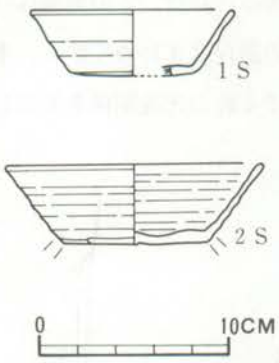
ＳＩ３（第478・479図、ＰＬ154）

Ｆ－８グリッドに位置し、４軒重複している一番新しい住居跡である。ただ、この地域はハードローム上面まで削平され、なおかつ攪乱が多くあるため、遺構の遺存はきわめて悪く、重複関係にも不明な点が多い。本住居跡はＳＩ６を切っている。ここで４軒の先後関係を先にし



第478図　SI3～SI6実測図（1/80）

るしておく。ＳＩ５→ＳＩ４→ＳＩ６→ＳＩ３の順で建替ている。ＳＩ３の規模は4.2m×４mの方形を呈し、主軸はＮ―53°―Ｅである。壁は20cm前後の遺存で、立ち上がりは直線的ではあるが、やや開きぎみである。壁溝はカマド部分とＳＩ６と重複している部分以外には認められる。規模は幅16～24cm、深さ10cm前後である。柱穴はない。床面はハードローム面を利用して踏み固めているため堅緻である。



第479図　SI3出土土器
実測図（1/4）

カマドは北辺の中央より東側に片寄った位置に構築されている。規模は全長、幅ともに１mである。袖は山砂と暗褐色土の混合で構築されているため遺存は非常に悪い。掘り方は幅90cm、壁外へ20cmほど掘り込んでおり、傾斜角度は40°である。床面への掘り込みはなく、床面もあまり焼けていないし、焼土、灰の堆積も少ない。遺物は須恵器杯２点が出土している。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ３―１	杯 （S）	10.7 × 3.3 × 6.6	灰褐色、堅緻、回転ヘラ切り―Ｒ―無調整	½
―２	杯 （S）	13.5 × 4.1 × 7.6	灰褐色、長石・石英、回転ヘラ切り―Ｒ―体部下端および底部周辺手持ちヘラケズリ	口縁部½欠失

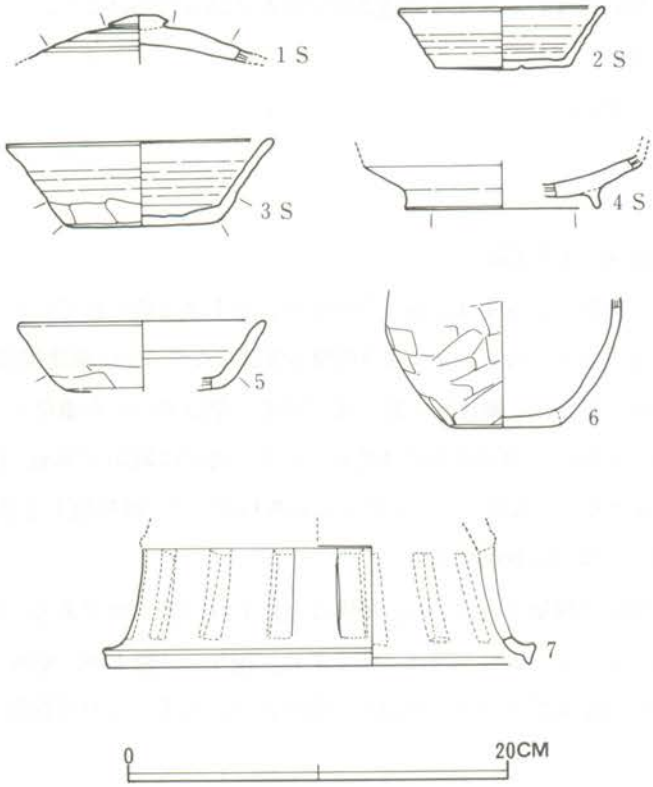
ＳＩ４（第478・480図、ＰＬ154）

Ｆ―８グリッドに位置している。ＳＩ５を切り、ＳＩ６に切られているため、規模、形態等に不明な点が多い。規模は南辺がＳＩ６とぴったり重なり一直線をなし、その境界が判然としない。しかしながら西辺が4.2mを測るので、おおむね4.2m四方の方形を呈し、主軸はＳ―41°―Ｅであると思われる。壁は東辺は遺存しないが、他は10cm前後ではあるが遺存している。壁溝は東辺と北辺の東側以外にはある。規模は幅20～40cm、深さ20cm前後のかなりしっかりしたものである。柱穴は不揃いな並び方ではあるが４本検出された。規模はP_1、P_4が径30cm、P_2、P_3が径40cmで、深さはそれぞれ40cm前後である。床面はハードローム面を利用しているのであるが、踏み固めは中央部にしかみられない。

カマドは東辺に構築されていたと思われる。

遺物は土器と陶硯が散在した状態で出土した。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋１、須恵器杯Ａ２、須恵器杯Ｂ１、杯１、甕１である。７は圏足硯である。圏足部だけの

破片であり、全体は不明である。圏足部には長方形の透孔をもつものであり、全体に自然釉が付着している。



第480図　ＳＩ４出土土器・陶硯実測図（1/4）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
ＳＩ４－1	蓋（S）	× ×	淡灰褐色、黒色細粒子、堅緻、？－Ｌ－天井部回転ヘラケズリ	口縁部欠失
－2	杯（S）	10.6 × 3.2 × 7	灰褐色、石英、良好、回転ヘラ切り－Ｒ－無調整	¼
－3	杯（S）	13.8 × 4.3 × 8.1	淡灰褐色、長石・雲母、良好、？－Ｒ－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	⅓
－4	高台付杯（S）	× × 14.4	淡灰白色、長石・雲母、不良、回転ヘラ切り－Ｌ－底部中央（高台内）手持ちヘラケズリ	底部のみ
－5	杯	12.8 × 3.6 × 8.2	茶褐色、良好、？－？－体部下端および底部手持ちヘラケズリ	⅙、赤彩
－6	甕	× × 6	茶褐色(黒斑有り)、良、ヘラケズリの後、内面ナデ調整	胴下半⅚
－7	圏足硯（S）	× × 22.6	灰青色、堅緻、全体に自然釉、長方形透し（16孔？）	小破片より復元

ＳＩ５（第478図、ＰＬ154）

Ｆ－８グリッドに位置し、ＳＩ４、ＳＩ６に大部分が切られ、規模、形態等はまったく不明である。４軒の重複関係においては最古の住居跡である。一部分残っている壁は10cmほどの遺存である。壁溝、柱穴はない。床面も周辺部だけのため踏み固めはなく、ハードローム面だけのため、軟弱である。

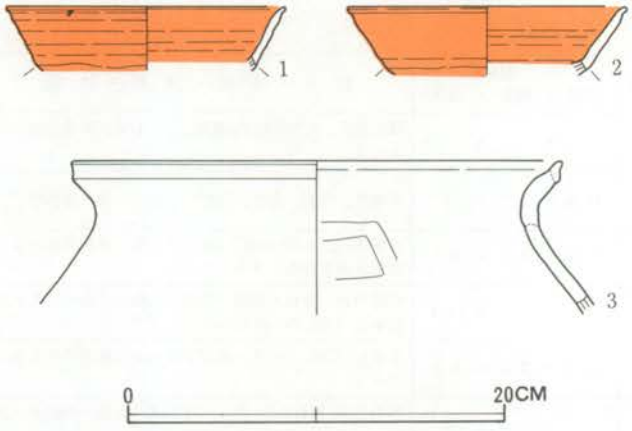
遺物も出土していない。

ＳＩ６（第478・481図、ＰＬ154）

Ｆ－８グリッドに位置し、ＳＩ４、ＳＩ５を切り、ＳＩ３に切られている。ＳＩ４との重複関係はその境界がはっきりしないため、東西規模が明確にならない。南北規模は4.8mを測るので、その程度の方形を呈し、主軸はＳ－35°－Ｅである。壁は東辺しか遺存しておらず18cm前後である。壁溝はカマド部分と西辺以外には認められる。規模は幅30～36cm、深さ20cm前後の深いものである。柱穴はない。床面はハードローム面を利用して、暗褐色土を踏み固めているが、中央部だけが堅緻で、周辺は軟弱である。

カマドは東辺の中央に構築されている。規模は全長１m、幅1.1mである。袖は山砂を20cm前後積み上げて構築している。天井部等は不明である。掘り方は幅１m、壁外へ30cm三角形に掘り込んでおり、傾斜角度は35°である。床面への掘り込みは若干みられる程度である。焼土、灰はよく堆積している。

遺物は杯２点、甕１点が出土している。

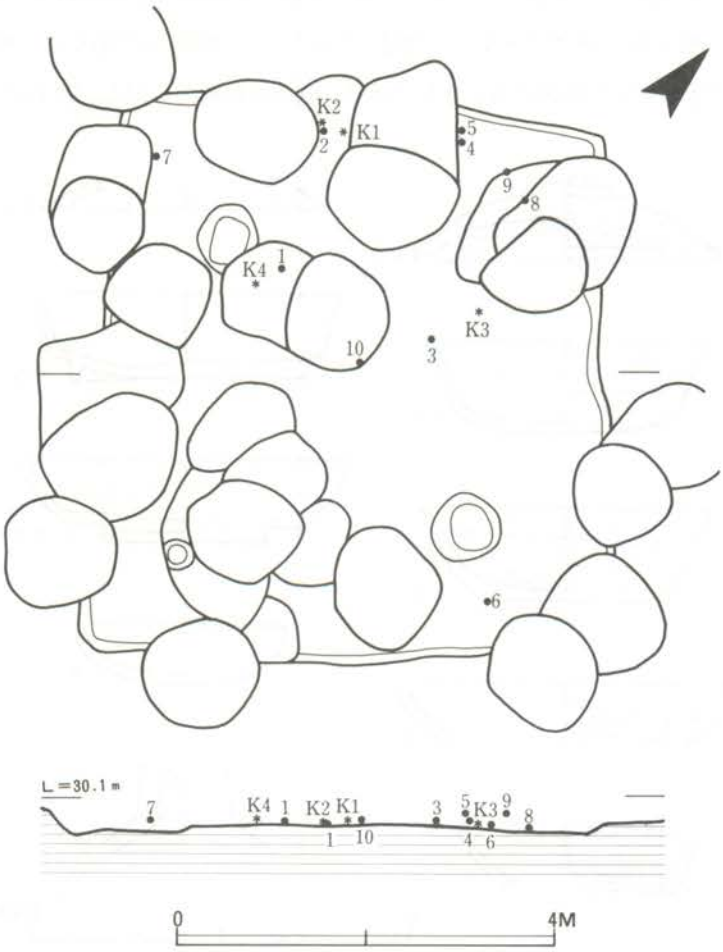


第481図　ＳＩ６出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SI6－1	杯	14.6 ×　　×	暗赤色、良好、?－?－体部下端手持ちヘラケズリ	底部欠失、⅓、赤彩
－2	杯	14.7 ×　　×	暗赤色、良好、?－?－体部下端手持ちヘラケズリ	底部欠失、⅙、赤彩
－3	甕	26 ×　　×	暗茶褐色（外面全体にススト付着）、長石・石英・雲母、不良、体部円外面ともにナデ調整	口縁部⅙

SI36（第482～485図、PL169）

D－15、16グリッドにまたがって位置している。SB39、40等により大きく攪乱を受けている。規模は南北6m、東西5.2mの南北にやや長い方形を呈し、主軸はN－39°－Wである。壁は大部分が掘立柱により攪乱を受けているが、残っている部分でも15cm前後と遺存は非常に悪い。壁溝は認められない。柱穴は径70cm、深さ60cm前後の規模の2本が検出されているので、当初

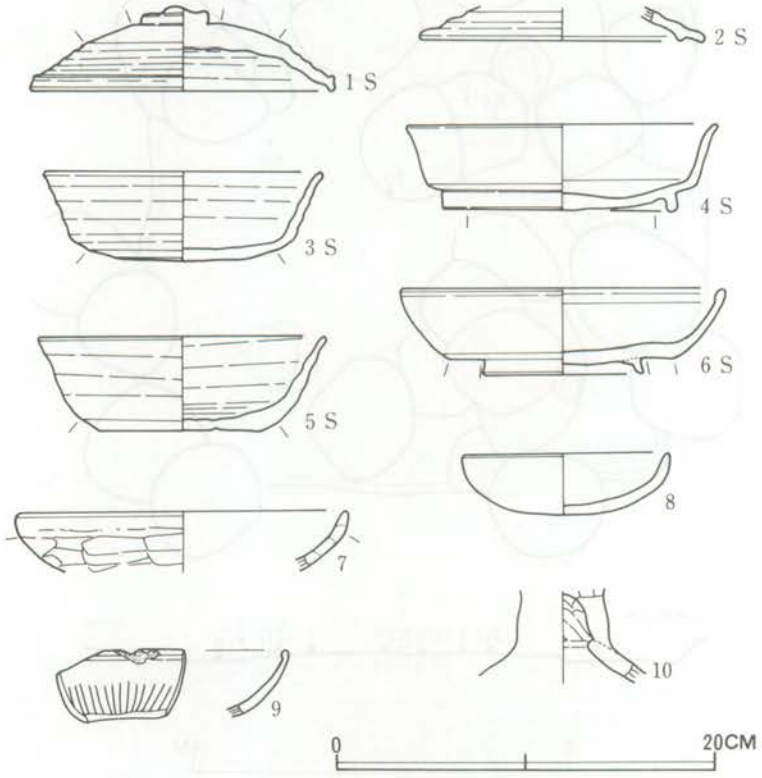


第482図　SI36実測図（1/80）

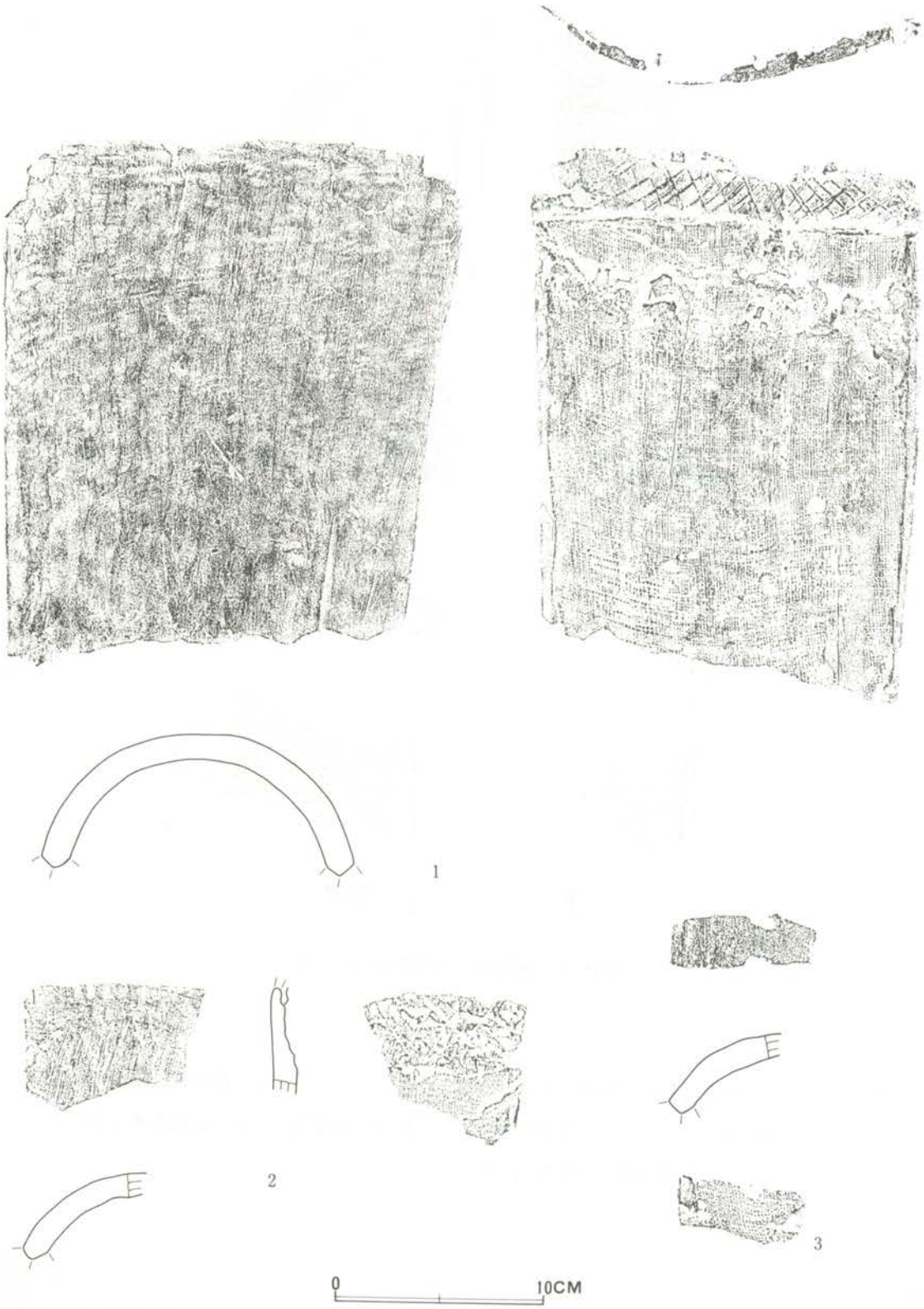
は4本の主柱穴であったと思われる。床面はソフトローム面を利用して、カマドの前面あたりはよく踏み固められているため堅緻であるが、周辺は軟弱である。

カマドは北辺の中央よりやや西に寄ったところに構築されている。規模、形態等は掘立柱に切られているため不明である。ここで注目すべき点は袖の芯に瓦を使用していることである。カマドに瓦を使用するのは本跡において唯一の例である。掘り方は幅80cm前後、壁外へ20cm半円形に掘り込んでいる。床面への掘り込みは若干ではあるがある。底面はよく焼けている。

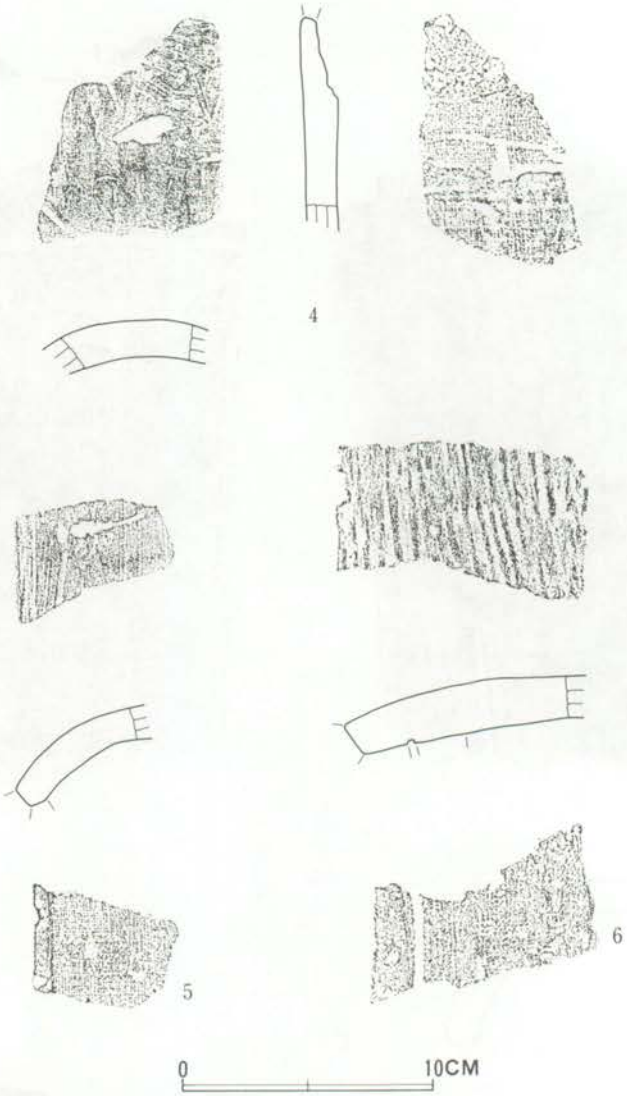
遺物は土器と瓦が散在した状態で出土している。土器の器種と数量は次のとおりである。須恵器蓋2、須恵器杯A2、須恵器杯B2、皿2、杯、高杯が各1である。瓦は丸瓦が5点、平瓦が1点の計6点である。そのうち1、2はカマドの構築材に使用された丸瓦である。1、2、4は軒丸瓦の丸瓦部であり、広端部凹面には幅3cmを薄くし、そこにヘラで斜格子の刻目をつけて瓦当部との接合部を形成している。凸面は叩きのあとに狭端から広端へむけて全面にヘラ削りを施し、その後にナデを施している。凹面は全面に2cm四方で経糸21本、緯糸16本の布目が残っている。模骨痕は確認できない。側縁は凹・凸面の2面をヘラ削りして面取りしている。厚さは平均して1.3cmと比較的に薄い作りである。色調は黄褐色を呈し、胎土にはこまかい砂粒



第483図　SI36出土土器実測図（1/4）



第484図　SI36出土瓦実測図 ①（1/3）



第485図　ＳＩ36出土瓦実測図 ②（1/3）

が多くあるが、焼成は良好で堅緻である。６は１点だけの平瓦である。凸面には平行叩きを施し、凹面は布目痕を消すようにヘラ削りしている。色調は黄褐色を呈し、砂粒を多く含むが、焼成は良好である。焼成はすべて酸化焔である。

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＩ36－1	蓋 （S）	16 × 4.3 ×	淡暗灰色、砂粒、不良、？－Ｒ－天井部回転ヘラケズリ	5/6
－2	蓋 （S）	15 × ×	黄白色、石英、不良、？－Ｒ－天井部回転ヘラケズリ	1/8
－3	杯 （S）	14.4 × 4.6 × 11.8	灰褐色、長石・石英、良好、？－Ｒ－底部回転ヘラケズリ	1/6
－4	高台付杯 （S）	16.4 × 4.4 × 14.2	白色、不良、？－Ｒ－底部（高台内）回転ヘラケズリ	1/5
－5	杯 （S）	15 × 4.8 × 8.5	淡灰黄色、石英・雲母、不良、回転ヘラ切り－Ｌ－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	完形
－6	高台付杯 （S）	17 × 4.4 × 11.8	暗茶灰色、砂粒、良好、？－Ｒ－底部全面回転ヘラケズリ	1/2
－7	皿	17.4 × ×	黄褐色、赤褐色、赤色粒子、体部外面ヘラケズリの他はヘラミガキ	1/4
－8	杯	11 × 3.1 ×	黄褐色、赤色粒子、良好、全面ナデ調整	1/8
－9	皿	× ×	茶褐色、良好、外面底部ユビオサエその他はヨコナデ、内面に放射状暗文	破片
－10	高　杯	× ×	暗黄褐色、不良、脚内面ユビナデ・裾内面ナデ調整	脚部のみ

ii　溝　跡

溝跡は56年度に調査した地点の新しいものを除くと、５条確認されている。いずれも規模、形態等に差異があり、同一計画で掘られたとは思われない。特にＳＤ２・３は規模も小さく、しっかりしたものでなく、掘立柱建物跡に切られており、伴出する遺物もないために不明な点が多いが、古墳時代に作られた可能性が非常に高い。

ＳＤ１（第486・498図、ＰＬ150－１）

Ｆ－８・９グリッドにまたがって位置している。北側はＳＥ２とＳＢ21・22の間を通って南北の主軸に対して45°の振れで112号墳の周溝に接続させている。規模は幅60～120cm、深さ40～60cmで、断面はＶ字形を呈している。本跡における官衙区画の溝として明確なのはこのＳＤ１だけである。この区画の意図は掘立柱建物群と井戸、竪穴住居を隔てるものとしてであろう。しかしながら、全期間にわたって存続したかは不明である。ＳＥ２、ＳＢ21・22とあまりにも接近しすぎているのが気になるのである。またこの溝の特徴は古墳そのものも区画の素材に取り入れていることである。この溝はおそらく板塀を埋めるものと思われる。貝ブロックを形成している箇所を観察すると東側から溝の中心で貝がとまっ

第486図　ＳＤＩ出土鉄鏃
実測図（1/2）

ているのがわかる。これは何かの遮蔽物があった事を示すもので、先の推測を可能にするであろう。

遺物は鉄鏃が1点出土している。広根式のもので、先端が平らな逆刺をもち、腸抉は深い。両丸造で鎬はみられない。篦被は6㎜角で、長さ3.3cmで関にいたる。茎は4㎜角であるが、長さは欠損しているために不明である。

ＳＤ４（第503・504図、ＰＬ150－２）

Ｃ－14・15グリッドに位置している。

ＳＤ５（第504図）

Ｄ－15グリッドに位置している。方向は南北の主軸に対して東へ40°振れている。北側は道路工事によりすでに削平されているためにＳＤ４とどうゆう関係にあるのか不明である。規模は上面で4.3m、底部で3.3m、深さは80～50cmである。壁の立ち上がりは直線的であるがやや開きぎみである。この溝は本跡における最大規模のものであるが、掘開の時期は明らかでない。ＳＢ55を切っているので官衙以降の所産と思われる。

iii　井戸跡

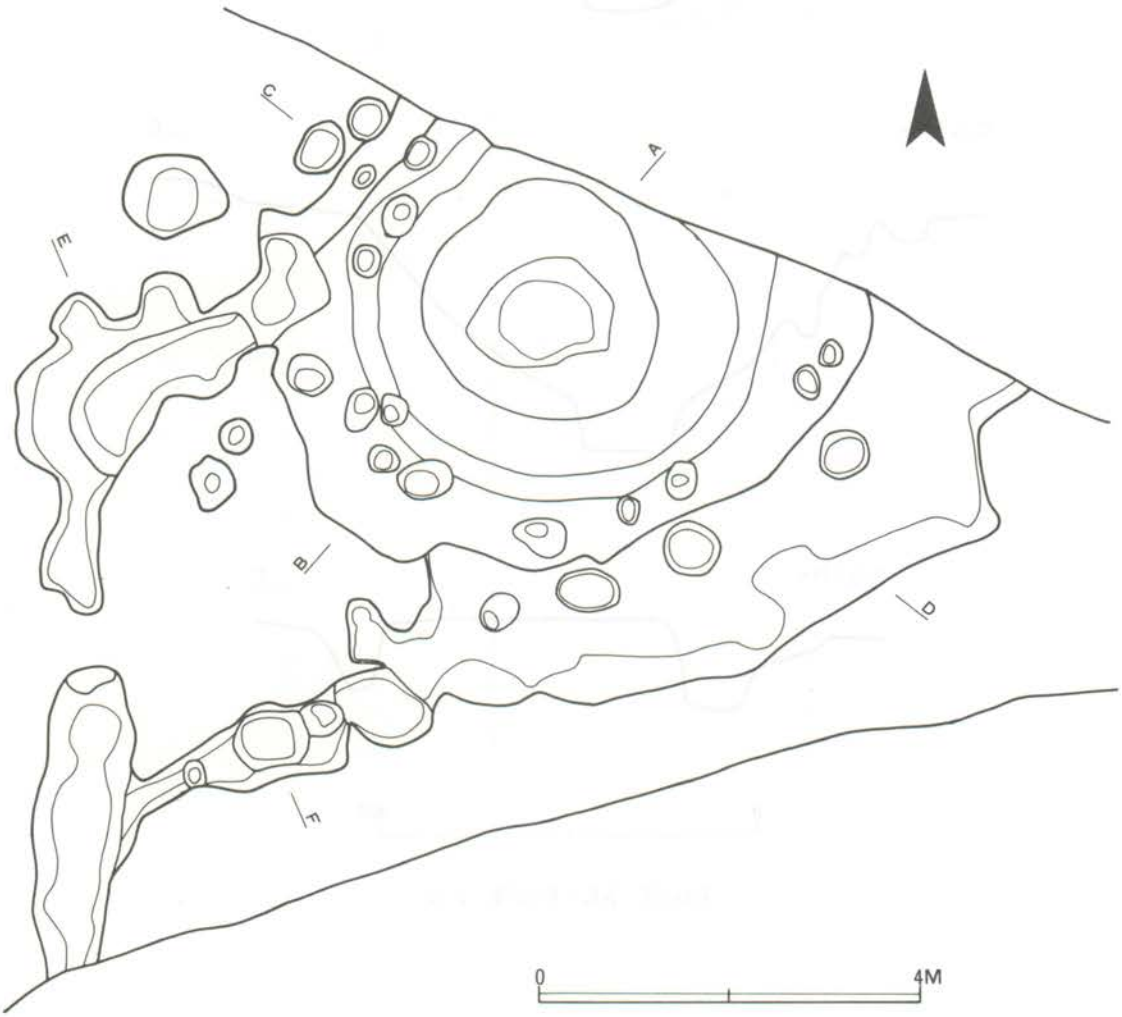
井戸跡は57年度Ａ地区の東端に２基、道Ｃ地区に１基、58年度調査の西端において１基の合計４基が検出された。東端の２基は隣接して構築され、形態も似ている。西側に点在する２基は東側とは形態が違い、構築場所等を考慮すると時間的に先行するものと思われる。

ＳＥ１（第487～489図、ＰＬ151）

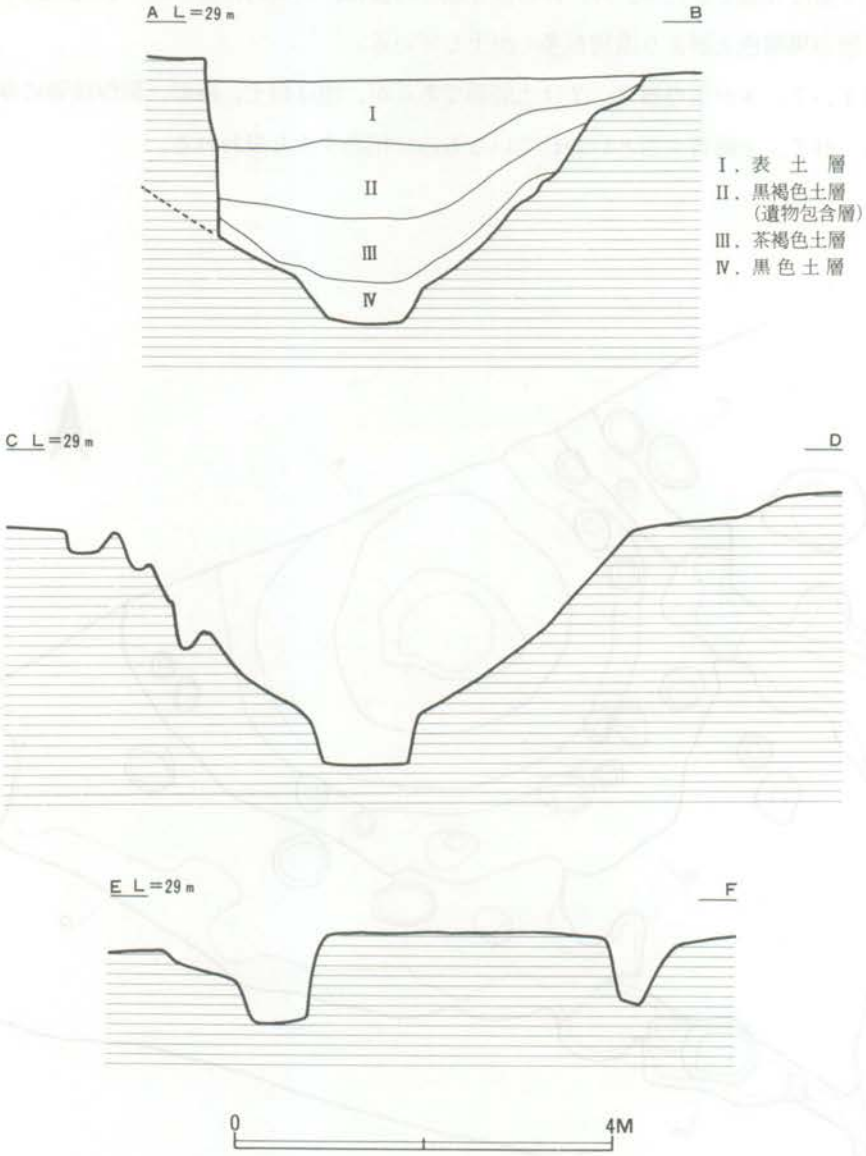
Ｆ－８グリッドに位置している。ＳＤ１によって区画された官衙域の東側に位置し、ＳＥ２、ＳＩ３～６と密接な関係にある１つの区域を構成している。北側の一部分が境界外にあるため規模、形態等に不明な点が少しある。掘方の上面規模は南北は不明であるが、東西は5.4mをはかる。掘方は深さ２ｍまでのところはゆるやかな傾斜を示すが、そこでもう１段の掘方がある。これは長軸1.6m、短軸1.2m、深さ50cmの不整楕円形を呈している。この２段目の掘方の内に井戸枠を組み、まっすぐに上にのばし、脇を埋め戻して井戸として使用したと思われる。上面より1.4m以下は常総粘土層を掘り凹めている。この井戸の特徴は湧水点を掘りあてたものではなく、宙水を集める構造のものである。またこの井戸の構造上の特徴としては、掘方の内外に不規則ではあるが柱穴と思われるピットがまわり、さらに南側には出入口を示すと思われる溝がある。これらを総合すると屋根及び出入口の伴った井戸であったと思われる。

覆土は４層に分層できたが、井戸枠の抜き取りの後に、人為的に埋め戻された状態を示している。Ⅱ層の黒褐色土層より遺物が多く出土している。

遺物は１、７、８が須恵器で、２は土師器であるが、他は胎土、器形、製作法等に非常に特長がある一群で、土師質土器といわれているものに相当すると思われる。



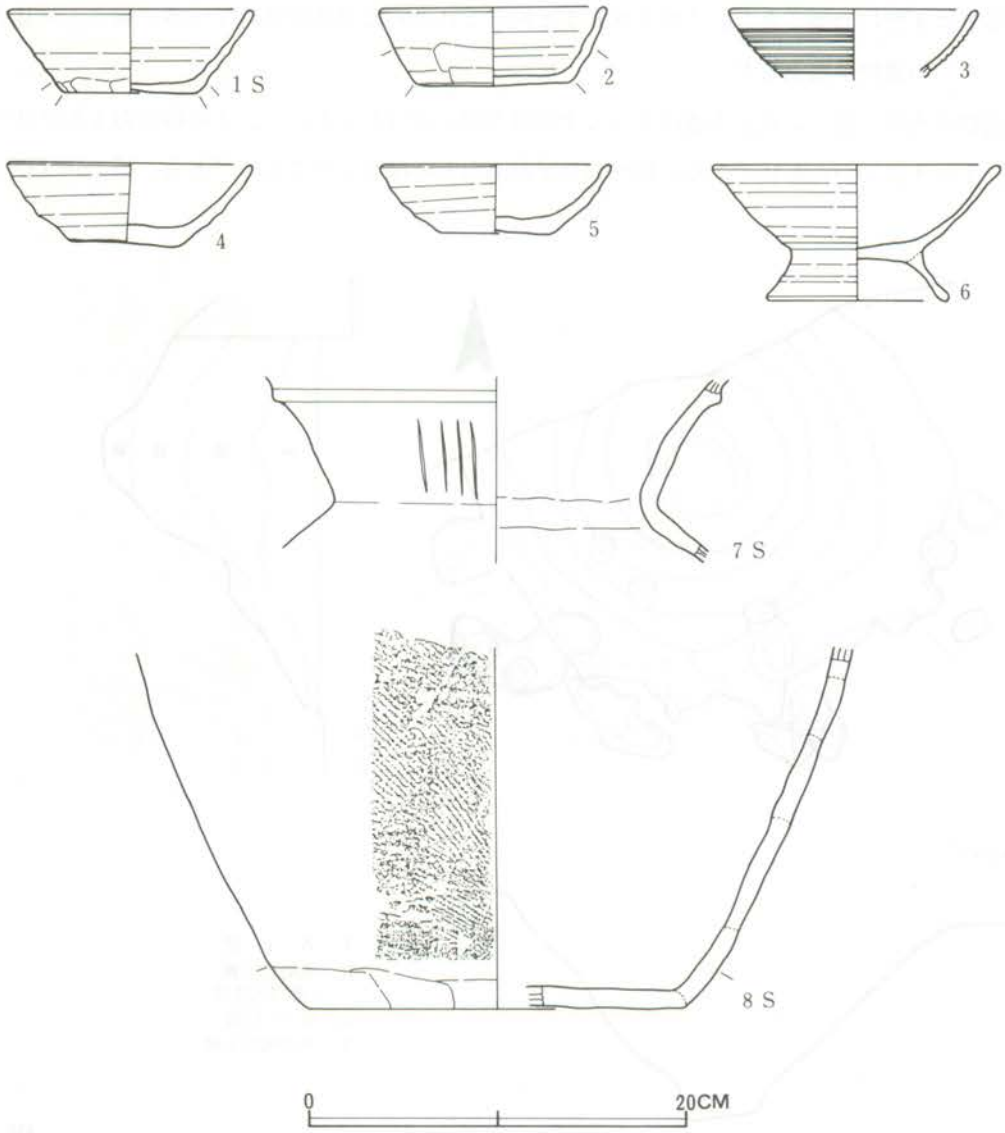
第487図　ＳＥ１平面図（1/80）



第488図　SE1断面図（1/80）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
SE1－1	杯 (S)	12.9 × 4.2 × 7	暗茶色、石英、不良、？－R－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ、底部に指頭痕有り	½
－2	杯	12 × 3.9 × 8	暗茶褐色、赤色粒子、良好、？－？－体部下半および底部全面手持ちヘラケズリ	⅔
－3	杯	13 × ×	黄褐色、良好、？－？－？、ロクロ目が沈線となる(爪のあたりか？)	底部欠失、⅓

−4	杯	13 × 4.4 × 6	黄褐色、良好、回転糸切り−R−無調整	体部½欠失
−5	杯	12.3 × 3.6 × 6	黄褐色、良好、回転糸切り−R−無調整	体部½欠失
−6	高台付椀	15 × 7 × (7)	淡黄褐色、良好、?−R−底部ナデ調整	体部¾欠失
−7	壺 (S)	× ×	灰青色、黒色粒子、堅緻、体部内面ヘラケズリの後ナデ調整	頸部のみ
−8	甕 (S)	× × 9.8	暗褐色、長石・石英・雲母、不良、体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ、内面ナデ調整	胴部下半½



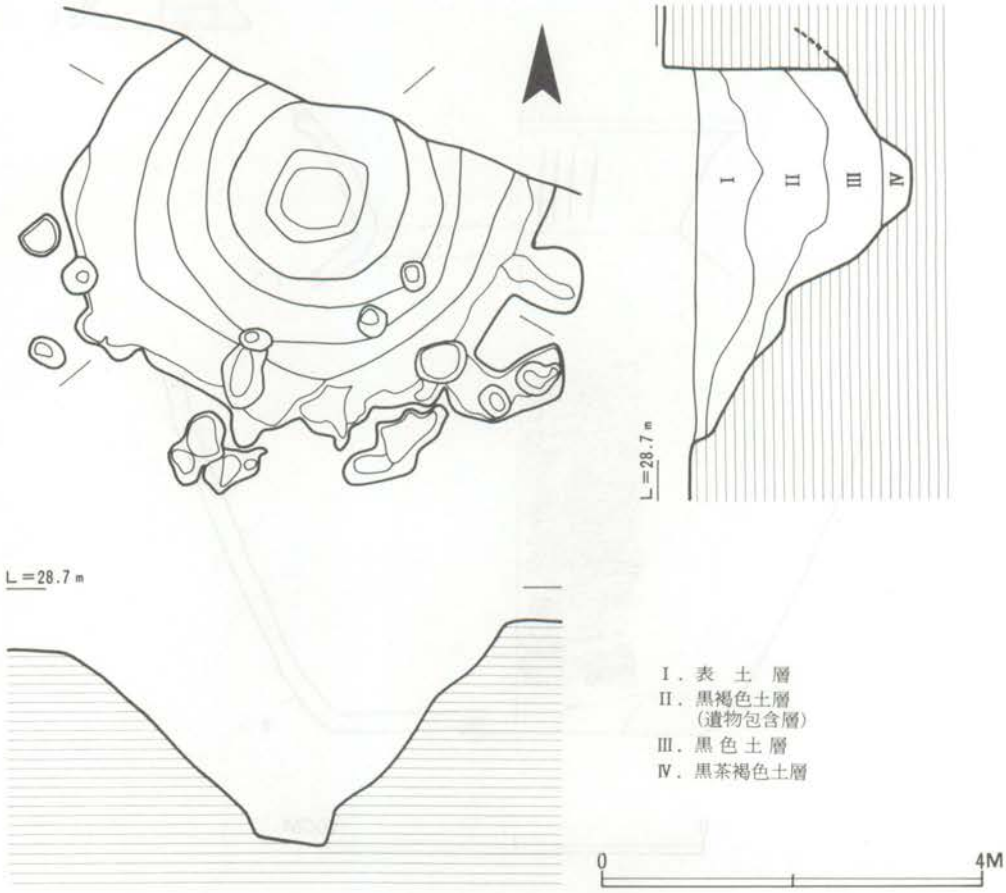
第489図　SE1出土土器実測図 (1/4)

ＳＥ２（第490～492図、ＰＬ152－１）

Ｆ－８グリッドに位置し、ＳＤ１に隣接している。ＳＥ１の北西４ｍの位置で並列している。北側の一部分が境界外のため、不明な点がある。上面の規模は南北は不明であるが、東西は4.6ｍで、隅丸の方形を呈する。上面より1.8ｍまでは軽い段をいくつか作りながら、２段目の掘方上面にいたる。２段目の掘方は長軸100cm、短軸90cm、深さ40cmの不整な方形を呈している。ちなみに全体の深さは2.3ｍである。上面より1.5ｍの深さからは常総粘土層を掘り凹めている。構造等はＳＥ１とまったく同じであるが、規模は一回り小さい。

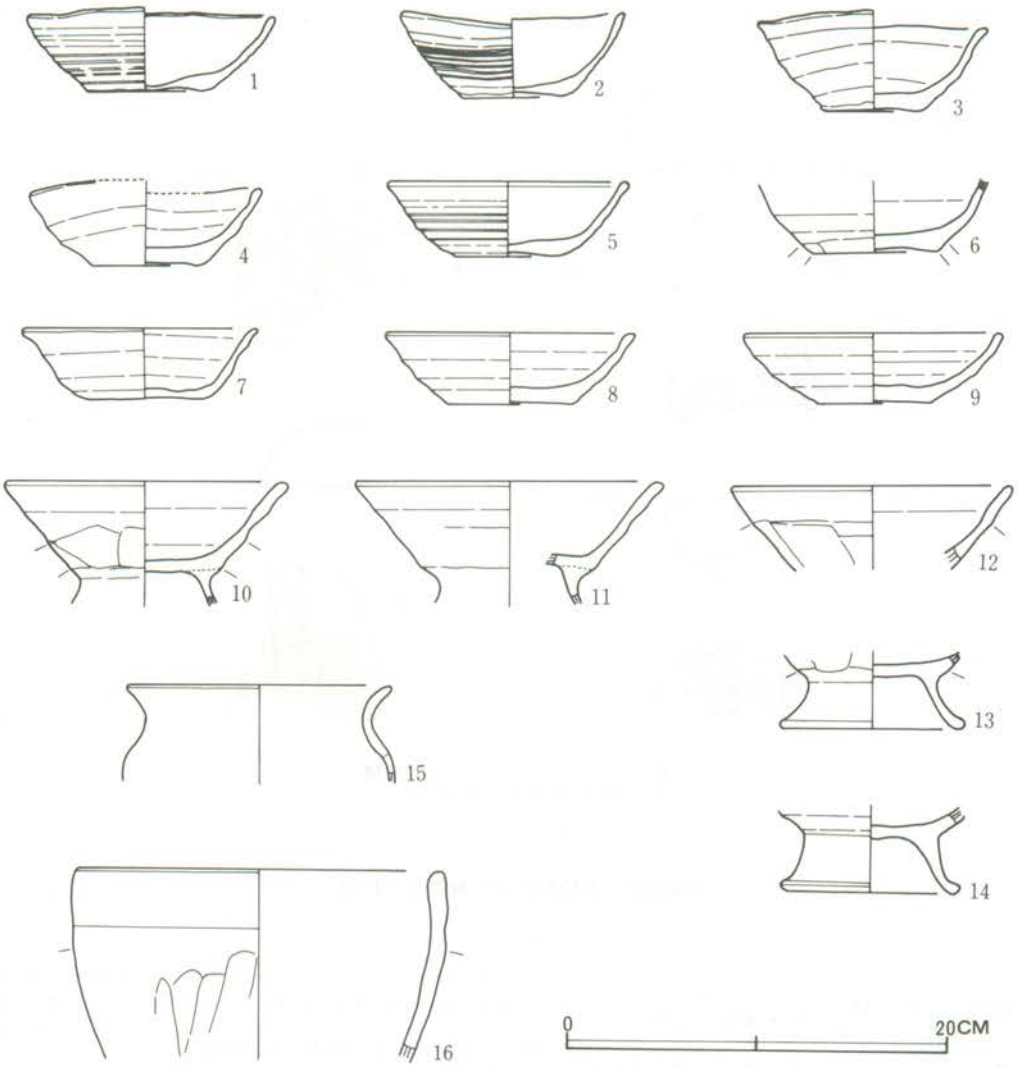
覆土は４層に分層できた。これもＳＥ１と同じで人為的に埋め戻されている。表土、第Ⅱ層から多くの遺物が出土した。

遺物は土器と瓦である。土器はすべて土師質土器と呼ばれるもので、土師器のおもかげはない。１～４はゆがんだ杯である。10～14は足高高台と呼ばれているものである。15、16は甕と

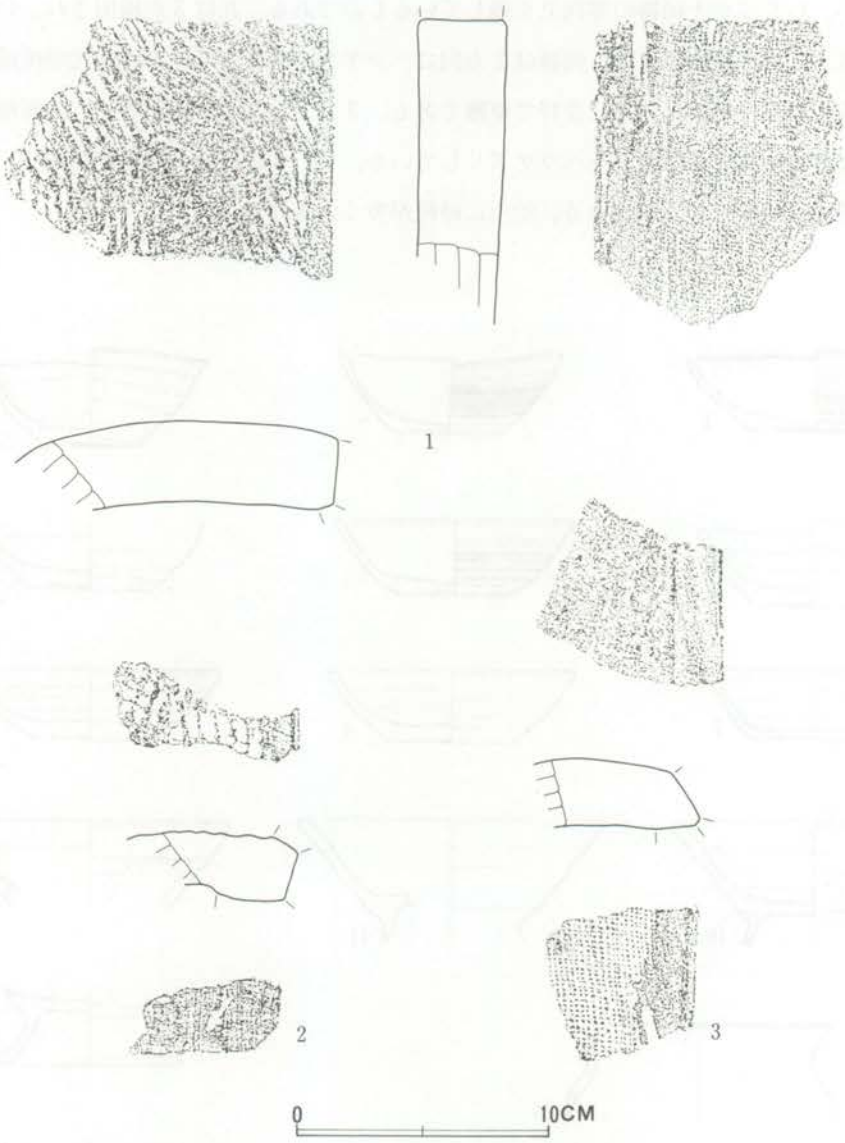


第490図　ＳＥ２実測図（1/80）

鉢であるが、いくらか土師器の雰囲気を残しているものである。瓦は３点検出され、いずれも平瓦である。１は凸面縄叩きで、側縁は２方向にヘラケズリを施している。環元焔焼成で、色調は青灰色を呈し、焼成は非常に良好で堅緻である。２は１より荒い縄叩きで、凹面端部は３cm程厚くなっている。３は凸面をヘラケズリしている。２、３はともに酸化焔焼成で、黄褐色を呈し、焼成は若干甘いものである。胎土に砂粒が多く含まれる。



第491図　ＳＥ２出土土器実測図（1/4）



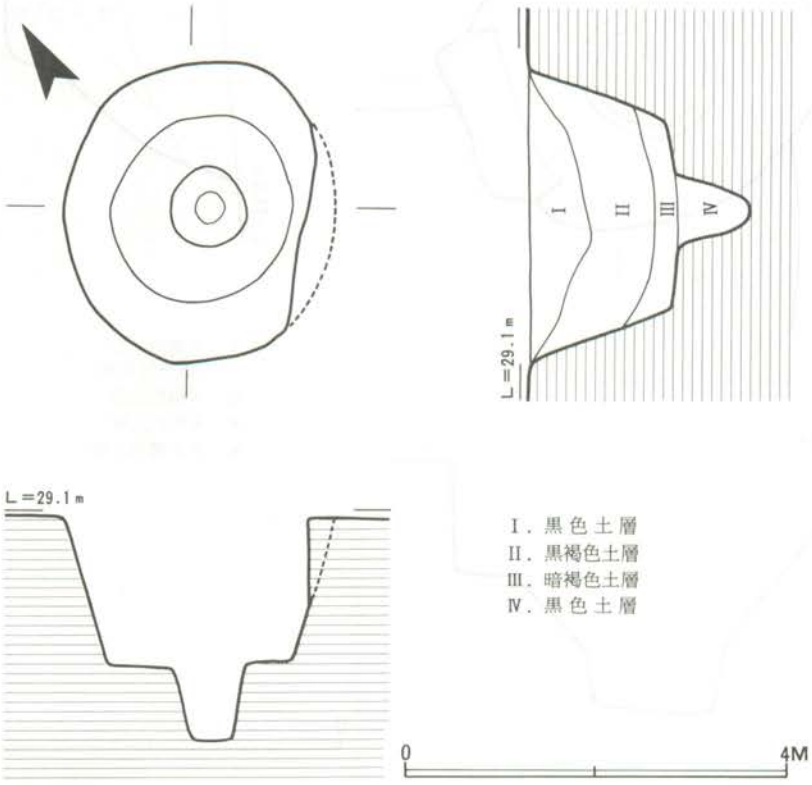
第492図　ＳＥ２出土瓦実測図（1/3）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＥ２－１	杯	12～13×3.8～4.3×　6.2	暗黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－無調整、ゆがみが大きい、ロクロ目が沈線となる	完形
－２	杯	12　×3.7～4.6×　6	黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－無調整、ゆがみが大きい、底部２度切り、ロクロ目が沈線となる	体部1/4欠失
－３	杯	11.8～12.5×4～5.1×　5.5	暗黄褐色、長石、良好、回転糸切り－Ｒ－無調整、ゆがみが大きい	体部1/4欠失
－４	杯	11.8～12.2×3.7～4.3×　6.3	暗黄褐色、良好、回転糸切り－Ｒ－無調整、ゆがみが大きい	体部1/4欠失

−5	杯	12.7 × 3.7 × 5.8	淡黄褐色、良好、回転糸切り−R−無調整、ロクロ目が沈線となる	体部⅔欠失
−6	杯	× × 6.5	淡黄褐色、良好、回転糸切り−R−体部下端手持ちヘラケズリ、底部全面ナデ調整	口縁部・体部⅚欠失
−7	杯	12.4 × 3.8 × 6.8	黄褐色、良好、回転糸切り−R−無調整	ほぼ完形
−8	杯	13.3 × 3.7 × 6.6	黄褐色、良好、回転糸切り−R−無調整	½
−9	杯	13.4 × 3.6 × 6	黄褐色、良好、回転糸切り−R−無調整	口縁部⅔欠失
−10	高台付杯	14.8 × × 8	明茶褐色、良好、？−？−体部下端および底部手持ちヘラケズリ	脚および体部⅓欠失
−11	高台付杯	16.2 × × 9.2	明褐色、良好、？−？−体部下半手持ちヘラケズリ	¼
−12	高台付杯	14.6 × ×	明茶褐色、良好、？−？−体部下半手持ちヘラケズリ	¼
−13	高台付杯	× ×	暗茶褐色、良、？−？−体部外面手持ちヘラケズリ	脚⅓
−14	高台付杯	× ×	暗茶褐色、良好、？−？−ヨコナデのみ	脚⅓
−15	甕	13.8 × ×	暗赤褐色、良、体部内外面ナデ調整	¼
−16	鉢	19.2 × ×	淡茶褐色、良、体部外面ヘラケズリ	体上半⅓

ＳＥ３（第493図、ＰＬ152−２）

Ｄ−13グリッドに位置し、ＳＩ40を切っている。規模は長軸3.2m、短軸2.8mの楕円形を呈し、深さ1.6mの常総粘土層の面まで掘り下げ、そこからもう一段掘り下げている。２段目の規



第493図　ＳＥ３実測図（1/80）

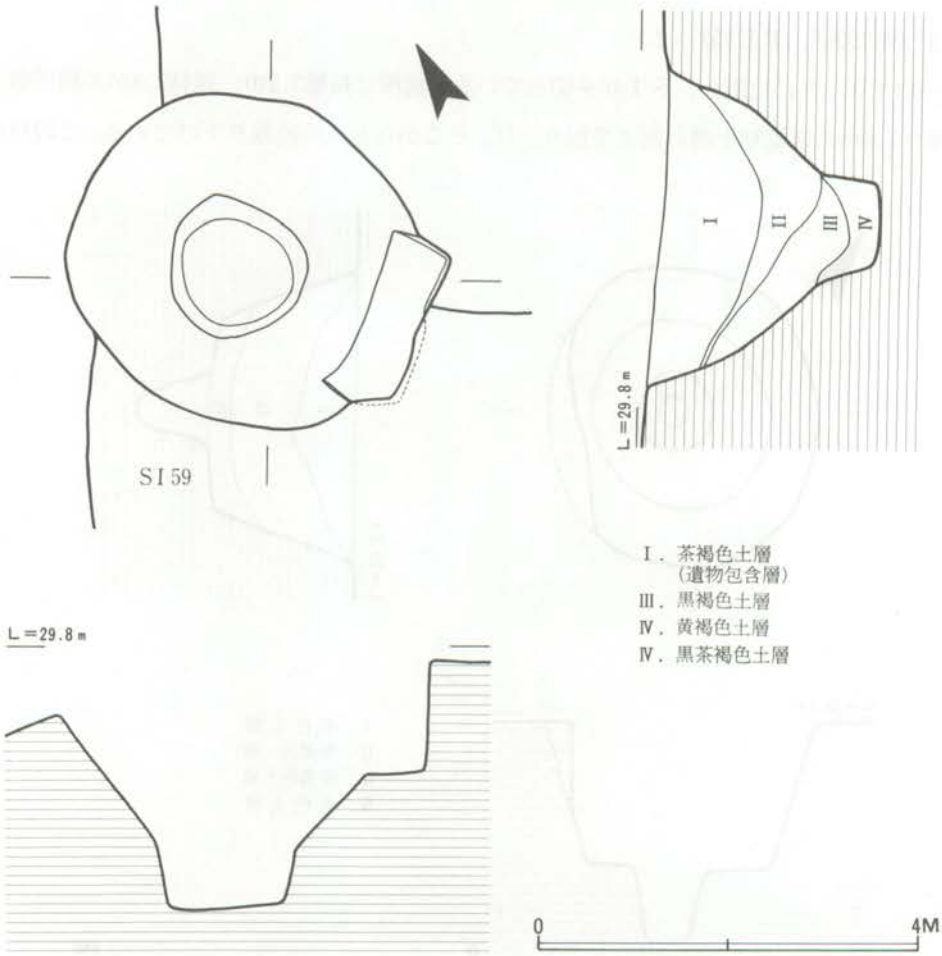
模は径80cmの円形で、常総粘土層を80cm垂直に掘り込んでいる。ＳＥ１、２と構築法に差異があるが、集水方法は同じで宙水を集めるものである。

覆土は４層に分層できる。２段目の掘方からすると丸い井戸枠であったと思われるが、それを抜き取った後に、一度に埋め戻している状況を示している。

遺物は検出されない。

ＳＥ４（第494～497図、ＰＬ179）

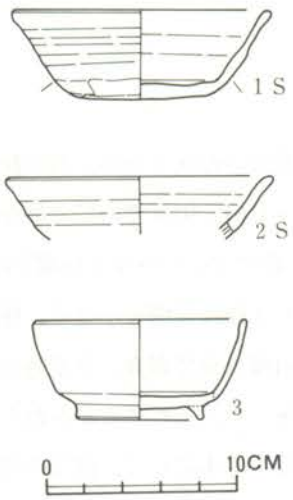
Ｂ－18グリッドに位置し、ＳＩ□を切っている。井戸としては西端に位置するものである。規模は長軸3.8m、短軸3.4mで不整方形を呈している。深さ２mの常総粘土層まではゆるやかに掘り込まれているが、そこから垂直に75cmさらに凹り込んでいる。この平面規模は150cm×140cmの不整円形である。これもＳＥ３と同じ構造、同じ集水方法である。



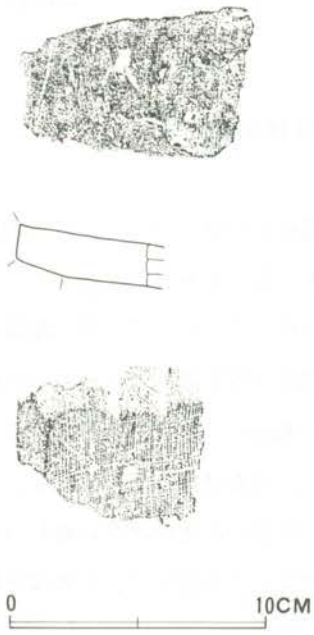
第494図　ＳＥ４実測図（1/80）

覆土は４層に分層でき、一度に埋め戻された状況をよく示している。遺物は１層に集中している。

遺物は土器、瓦、土玉である。土器は須恵器杯Ａ、杯Ｂ各１点と土師器杯Ｂ１点の計３点である。瓦は平瓦が１点である。凸面はヘラケズリを全面施しており、叩き技法は不明である。凹面には布目痕が全面に残るが、端部は２cm幅でヘラケズリされている。酸化焔焼成で、色調は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。土玉は径３、２、５、２cmの３個が出土している。

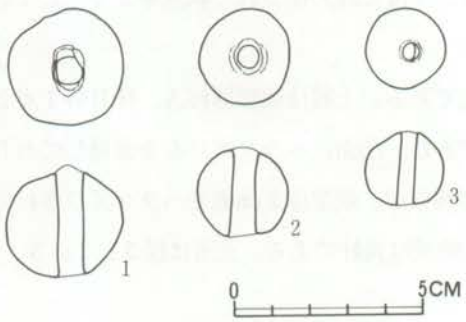


第495図　ＳＥ４出土土器実測図（1/4）



第496図　ＳＥ４出土瓦実測図（1/3）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
ＳＥ４－１	杯 （S）	13.5 × 4.5 × 7.5	淡灰色、長石・石英・雲母、不良、？－Ｒ－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	ほぼ完形
－２	杯 （S）	14 × ×	灰褐色、長石・石英・雲母、不良、？－Ｒ－？	体部¾
－３	杯	11.2 × 5.1 × 8.3	黄褐色（黒斑有り）、雲母、良好、？－Ｒ－底部全面回転ヘラケズリの後全体をヘラミガキする	⅔

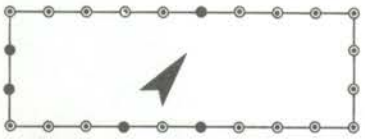


第497図　ＳＥ４出土土玉実測図（1/2）

iv．掘立柱建物跡

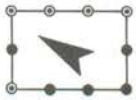
大畑Ｉ遺跡を特徴づけるものは大規模で多量な掘立柱建物跡の存在である。掘立柱建物跡は東はＳＤＩに接するＳＢ21、22から、西はＳＩ53に接するＳＢ61、62までの間に群を構成しながら広く分布している。この間の距離は約185mあり、この範囲内にのみ掘立柱建物跡はある。掘立柱建物跡は現在確認できたものは65棟である。このうち４棟は規模も小さく、柱穴も小形であり、古墳時代に属するものであると思われるが、他の61棟は全て奈良、平安時代に属するものである。調査は柱穴だけでなく、全て掘方の立割を実施した。それにもかかわらず遺物は非常に少く時期の決定が非常に難しい。ここでは若干の遺物を基本にして、掘方の切り合い関係、棟方向などを考慮して、主要な建物については時期決定をしている。

ＳＢ１（第501、506、510図、ＰＬ181、182）



調査区のほぼ中央であるＤ―12、13グリッドにまたがって所在し、ＳＩ14～16、40、42を切っている。全体が判明している建物跡の中では最大規模のものである。桁行９間（2.1～1.8m間隔）、梁行３間（1.9m等間）の大形の掘立柱建物跡である。規模は桁行が17.7m、梁行が5.7mである。掘方は1.3～1.6mの不整は方形を呈しており、深さは55～100cmの間でまちまちである。柱穴は径30～40cmである。掘方埋土はロームブロックを混ぜて、版築状に埋めている。柱穴の上部には火山灰が入っており、しろっぽくなり、非常に固くしまっている。第510図―１の須恵器蓋と３の土師器杯はそれぞれ違う掘方埋土中より出土した。主軸はＮ―60°―Ｅである。第Ⅲ期の主要な建物である。

ＳＢ２（第500・506・510図、ＰＬ183）

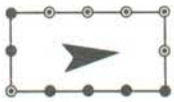


調査区のほぼ中央であるＤ－12、Ｅ－12グリッドに所在し、ＳＢ３、４、30を切っている。桁行３間（1.9m等間）、梁行２間（1.9m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行が5.7m、梁行が3.8mである。掘方は0.9～1.3mの不整な方形を呈しており、深さは30～60cmとまちまちである。柱穴は径20cm前後であり、掘方の中央に柱穴の太さで20cm下がっている掘立柱もある。掘方埋土はロームブロックを多量に含み、よくしめている。柱穴部分には火山灰がはいっている。第510図－７の土師器杯は掘方埋土中より出土した。主軸はＮ－32°－Ｗである。

ＳＢ３（第500・506図、ＰＬ183）

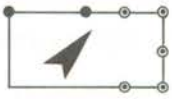
Ｄ－12、Ｅ－12グリッドにまたがって所在し、ＳＢ２に切られ、ＳＢ４、30と重複関係にある。重複の先後関係はＳＢ４→ＳＢ30→ＳＢ３→ＳＢ２の順である。桁行３間（2.4m等間）、梁行２間（2.05m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行7.2m、梁行4.1mである。掘方は0.7～１mの不整は方形を呈しており、深さは40cm前後である。柱穴は径20cm前後である。掘方埋土にはローム粘土を多く含み、よくしまっている。主軸はＮ－33°－Ｗである。第Ⅳ期に属する。

ＳＢ４（第500図、ＰＬ184－１）



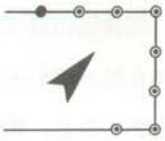
Ｄ－12グリッドに所在し、ＳＩ９を切り、ＳＢ２、３、28に切られている。桁行４間（1.97m）、梁行２間（2.2m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行7.9m、梁行4.4mである。掘方は１～1.2mのしっかりした方形を呈しており、深さ60cm前後である。柱穴は径30cmであるが、なかには四角い柱穴も見られる。掘方埋土には多量なロームブロックを用いて、固くしめている。珍しい南北棟の建物である。主軸はＮ－１°－Ｅである。第Ⅰ期の所産である。

ＳＢ５（第500図、ＰＬ184－２）



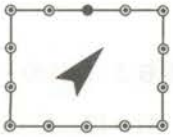
Ｅ－11、12グリッドに所在し、ＳＢ25と重複関係にある。南側が調査区外であるため、やや不明な点がある。桁行はおそらく４間、梁行は２間（2.25m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行６m、梁行4.5mである。桁行は不揃いである。掘方は0.8～1.2mの不整な方形を呈しており、深さは50cm前後である。柱穴は径30cm前後である。柱穴内には火山灰が多く入っている。主軸Ｎ－49°－Ｅである。第Ⅲ期に属するものである。

ＳＢ６（第500・507図、ＰＬ184－２）



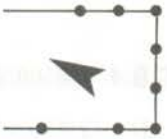
Ｅ－11グリッドに所在し、ＳＢ５の東側に隣接している。南側部分が調査区外のため桁行は不明である。梁行は３間（1.53m等間）である。規模は梁行が4.6mである。掘方は1.1～1.3mの方形を呈し、深さは40cm前後である。柱穴は径30cm前後である。柱穴内に火山灰が多く入っている。主軸はＮ－49°－Ｅである。第Ⅳ期に属する。

ＳＢ７（第500・507・511図、ＰＬ185～187）



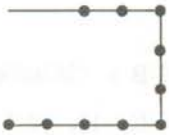
Ｅ－11グリッドに所在し、ＳＢ６と柱筋をそろえて、北側に位置している。桁行４間（1.85m等間）、梁行３間（1.5m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行7.4m、梁行4.5mである。掘方は1.3～1.5mの方形を呈しており、深さは50cm前後である。柱穴は径30cm前後である。柱穴内には多量な火山灰が入っている。北東コーナー掘方の覆土中より土製勾玉が１点出土した。主軸はＮ－48°－Ｅである。第Ⅳ期に属する。

ＳＢ８（第500図、ＰＬ188－１）



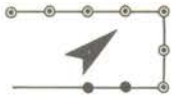
Ｄ－11、Ｅ－11グリッドにまたがって所在し、ＳＢ９、ＳＩ８を切っている。北側が調査区外になっているため、規模は不明である。梁行は３間（1.4m等間）で、規模は4.2mである。掘方は50～60cmの不整な円形を呈しており、深さは50～60cmある。柱穴規模は不明である。掘方埋土は黒褐色土の単一層である。本建物跡は大畑Ｉ遺跡における他の建物跡に比較すると、いちじるしく規模の小さいものであり、古墳時代の所産と考えられる。主軸はＮ－23°－Ｗである。

ＳＢ９（第500図、ＰＬ188－１）



ＳＢ８に切られ、主軸は若干違うが、ほとんど重なっている。ＳＢ８同様に北側は調査区外のため、桁行は不明である。梁行は３間（1.5m前後）で、規模は4.6mである。掘方は40～70cmの不整な円形を呈し、深さは60cm前後である。柱穴規模は不明である。掘方埋土は黒褐色土の単一層である。ＳＢ８に比較すると、一回り大きいが、規模、形態は同じであるため、古墳時代の所産である。

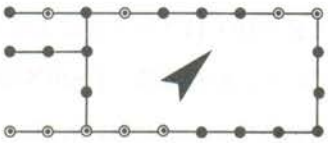
ＳＢ10（第500図、ＰＬ188－２）



Ｄ－11、12グリッドにまたがって所在し、ＳＢ11を切り、ＳＢ28に切られている。北側が調査区外のため、桁行が４間分しか確認できない。梁行

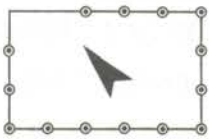
は２間(2.3m等間)で、規模は4.6mである。掘方は１～1.2mの不整な方形を呈し、深さは30～50cmである。柱穴規模は径35cm前後である。掘方埋土には焼土、山砂が多量につまっている。柱穴内には火山灰も入っている。主軸はN－49°－Eである。

ＳＢ11（第500・506図、ＰＬ189）



Ｅ－12グリッドに所在し、ＳＢ25・26を切り、ＳＢ10に切られいている。南側が調査区外に出ているため、桁行は８間分までしか確認できない。梁行は３間(1.8m前後)で、5.3mである。この長大な建物の特徴は北から６間目に間仕切りがはいり、さらに西から１間分のところにも間仕切りがはいり、桁行に平行している。掘方は0.9～1.6mの長方形を呈し、深さは45～70cmである。間仕切り用の掘方の規模は一回り小さい。柱穴は径30cm前後である。掘方埋土には多量のローム粒子が含まれ、版築状になっている。主軸はN－45°－Eである。第Ⅱ期の主要な建物である。

ＳＢ12（第499・507図、ＰＬ192－１）



調査区の東側であるＥ－10グリッドに所在し、ＳＢ14を切り、ＳＢ13、15に切られている。北西の桁行の一部が調査区外にあるが、規模は判明している。桁行５間（2.36m等間）で、梁行３間（1.9m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行11.8mで、梁行が5.7mである。掘方は1.2～1.7mと規模が大きい方形を呈し、深さは60～80cmである。掘方の下半部は粘土層を掘り込んでいる。柱穴は径40cm前後である。掘方埋土は版築状になっており堅緻である。掘方の一部には床面の柱部分が凹んでいるものがある。主軸はN－49°－Wである。第Ⅱ期に属する。

ＳＢ13（第499・507図、ＰＬ192－２）

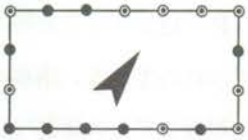
Ｅ－10グリッドに所在し、ＳＢ12を切り、ＳＢ15に切られている。北側が調査区外にあるため桁行規模は不明である。梁行は３間（1.8m）で、規模は5.2mである。掘方は1.1mの方形を呈し、深さは50cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土には多量なロームブロックを使用して、版築状になっている。主軸はN－52°－Eである。第Ⅲ期に属する。

ＳＢ14（第499・507図）

Ｅ－10グリッドに所在し、ＳＢ12に切られている。北側は調査区外になるため桁行規模は不明である。梁行は３間（1.8m等間）で、規模は5.4mであ

る。掘方は1.1～1.5mの大形で方形を呈し、深さは40cm前後である。掘方埋土には多量なロームブロックを使用して、版築状になっている。主軸はN－57°－Eである。第Ⅰ期に属するものではしっかりとした建物である。

ＳＢ15（第499・507図、ＰＬ185・186・191）



Ｅ－10・11グリッドにまたがって所在し、ＳＢ12・13、24を切っている。桁行６間（1.8m等間）、梁行３間（２m）の大形の掘方柱建物跡である。規模は桁行10.8m、梁行6.1mである。掘方は1.2～1.6mの大形の方形を呈し、深さは80cm前後で、粘土層まで掘り込んでいる。柱穴は径35cm前後で、東側桁行には抜取痕もある。掘方埋土はロームブロックを多く使用して版築状になっている。柱穴には火山灰も入っている。主軸はN－54°－Eである。第Ⅳに属するものである。

ＳＢ16（第499・507図、ＰＬ192－２）

調査区東側のＥ－10、Ｆ－10グリッドにまたがって所在し、ＳＢ17、18、20を切っている。桁行３間（2.2m等間）、梁行２間（2.7m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行6.6m、梁行5.4mである。掘方は１～1.3mの不整な方形を呈し、深さは45cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土はロームブロックを多量に含み、版築状にしている。柱穴内に火山灰が入っているものもある。主軸はN－54°－Eである。第Ⅳ期に属すると思われる。

ＳＢ17（第499・507図、ＰＬ192－２、194）

Ｅ－９、Ｆ－９グリッドにまたがって所在し、ＳＢ18、20を切り、ＳＢ16に切られている。北側コーナーの１つだけが調査区外にある。桁行５間（1.86m等間）、梁行３間（1.86m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行9.3m、梁行5.6である。掘方は1.2～1.5mの大形の方形を呈しており、深さは0.85～1.15mある深いもので、下半分は粘土層を掘い込んでいる。柱穴は径40cmある。掘方埋土はローム粒子を多く含み、版築状にしている。柱穴には火山灰が入っているものもある。主軸はN－57°－Eである。第Ⅲ期に属するものである。

ＳＢ18（第499・507・510図、ＰＬ192－２）

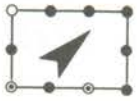
調査区東側のＥ－９、Ｆ－９グリッドにまたがって所在し、ＳＢ16、17、19に切られ、ＳＢ20を切っている。桁行４間(2.1m)、梁行２間(2.25m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行8.7m、梁行4.5mである。掘方は1.1～1.6mの大

形で方形を呈しており、深さは60cm前後である。柱穴は径30cmである。掘方埋土はローム粒子を多量に含み、版築状にしている。柱穴には火山灰が入っている。第510図－４の土師器杯は掘方埋土中より出土した。主軸はN－48°－Wである。第II期の主要な建物である。

ＳＢ19（第499図、ＰＬ193－１）

調査区の東側であるＦ－９グリッドに所在し、ＳＢ18を切っている。桁行２間（1.8m等間）、梁行２間（1.45m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行3.6m、梁行2.9mである。掘方は0.7～1.3mで不整な円形を呈しており、深さは40cm前後である。柱穴は確認できたものは径30cmである。掘方埋土は多量なロームブロックを使用している。主軸はN－55°－Eである。第III期に属する。

ＳＢ20（第499・507図）



Ｅ－９、Ｆ－９グリッドにまたがって所在し、ＳＢ16～18に切られている。大部分の掘方は後に切られているので原形をとどめていない。桁行３間（1.7m等間）、梁行２間（2.25m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行5.1m、梁行4.5mである。掘方は70～90cmの不整は方形を呈しており、深さは65cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土はロームブロックが少量混じっているがあまり固めてはいない。主軸はN－42°－Eである。第Ⅰ期に属するものである。

ＳＢ21（第498図）

調査区の東側であるＦ－８・９グリッドに所在し、掘立柱建物群を区画する東限の溝ＳＤ１に接して、ＳＢ22に切られている。南西コーナーの部分のみが検出されただけで、大部分が調査区外のため、規模等はまったく不明である。また、ＳＩ17、18、ＳＢ22と重複関係にあるためよけいにわかりにくい。掘方の規模は0.8～１mで不整な円形を呈しており、深さは40cm前後である。柱穴は確認できなかった。

ＳＢ22（第498図）

ＳＢ21を切って、接して位置している。ＳＢ21同様に南西コーナー部分だけの確認しかできないため、規模、形態等はまったく不明である。掘方は1.3～1.6mの方形を呈し、深さは60cm前後であり、ＳＢ21より一回り大きなものである。柱穴は確認できなかった。掘方埋土は黒褐色土の単一層である。

ＳＢ23（第500図、ＰＬ195－１）

Ｅ－11グリッドに所在し、ＳＢ15・24に切られている。南側は調査区外のため桁行は２間分しか確認できない。梁行は３間（1.7m等間）で、規模は5.1mである。掘方は１～1.2mでやや不整な方形を呈し、深さは50cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土はローム粒子を多く含み、よくしめている。主軸はＮ－50°－Ｅである。第Ⅱ期に属するものである。

ＳＢ24（第500図、ＰＬ195－１）

Ｅ－10・11グリッドにまたがって所在し、ＳＢ24を切り、ＳＢ15に切られている。南側は調査区外のため桁行は１間分しか確認できない。梁行は３間（1.7m等間）で、規模は5.1mである。掘方は0.9～1.4mでやや不整な方形を呈し、深さは50cm前後である。柱穴は径30cm前後である。掘方埋土はローム粒子を多量に含み、よく固めている。主軸はＮ－52°－Ｅである。第Ⅲ期に属するものである。

ＳＢ25（第500図、ＰＬ195－２）

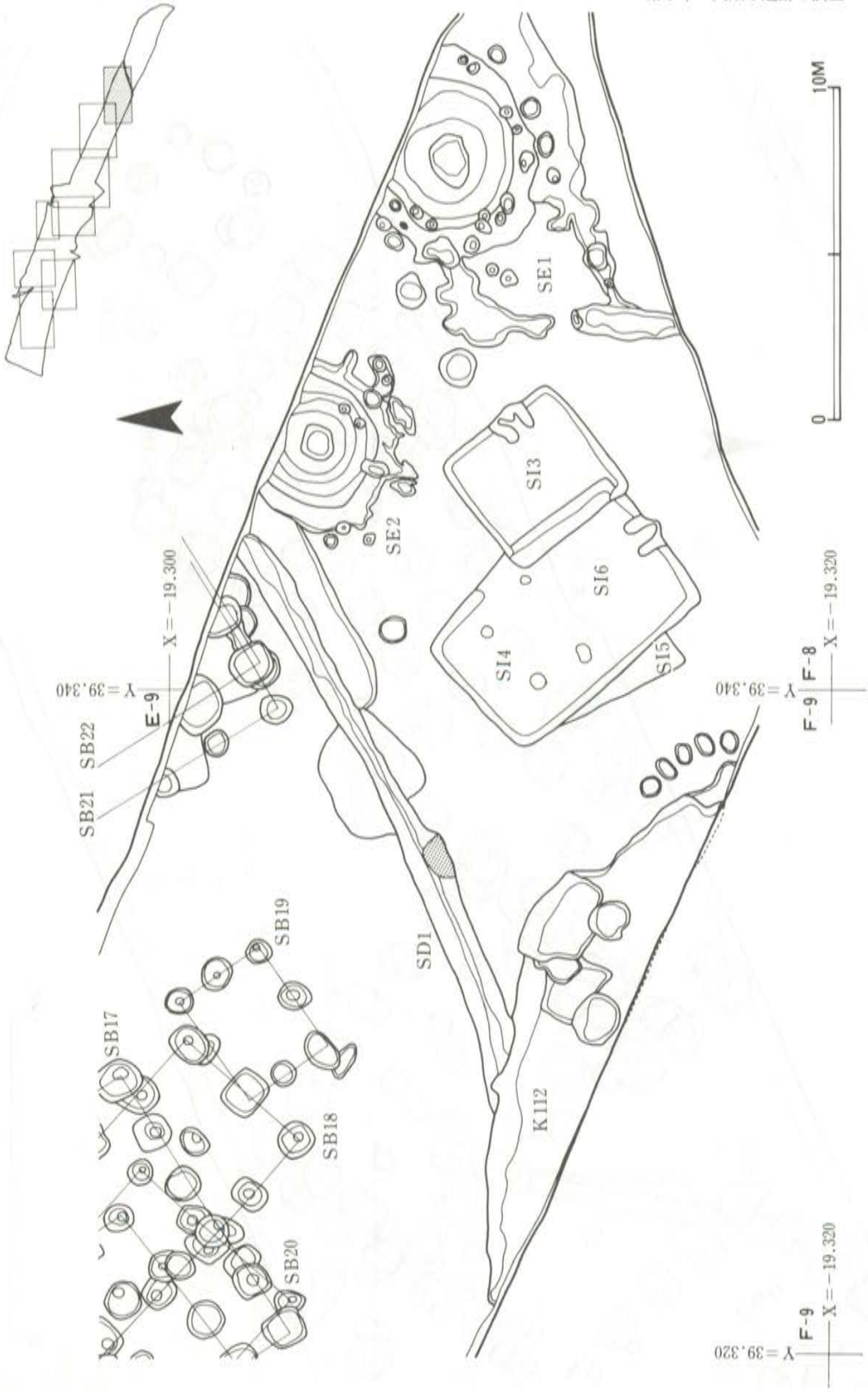
Ｅ－12グリッドに所在し、ＳＢ５、11に切られている。東側桁行の一部が調査区外になっている。桁行３間（2.1m等間）、梁行３間（1.7m）の掘立柱建物跡である。規模は桁行6.3m、梁行５mである。掘方は0.8～１mの不整な方形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴は径30cmである。掘方埋土はローム粒子が多く含まれている。柱穴に火山灰が入っているのもある。主軸はＮ－60°－Ｅである。第Ⅰ期に属するものである。

ＳＢ26（第500図、ＰＬ196－１）

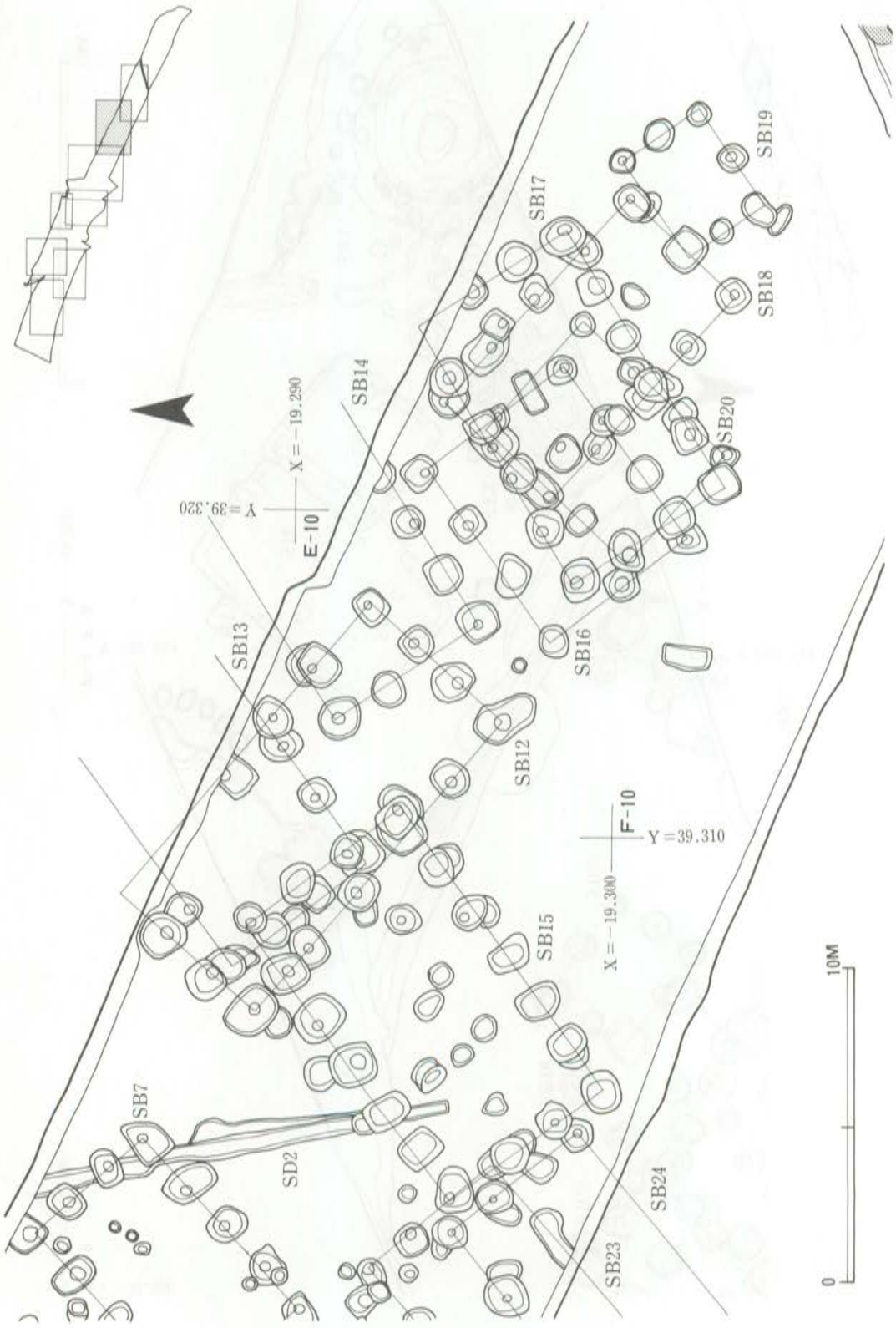
Ｄ－11、Ｅ－11グリッドにまたがって所在し、ＳＢ10・11と重複関係にある。桁行３間（２m）、梁行２間（1.2m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行6.2m、梁行3.6mである。掘方は20～80cmの不整な円形を呈し、規模もまちまちである。深さは30cm前後である。柱穴は確認できない。掘方埋土は黒褐色土の単一層である。規模、形態等からして古墳時代の所産であろう。

ＳＢ27（第500・508図）

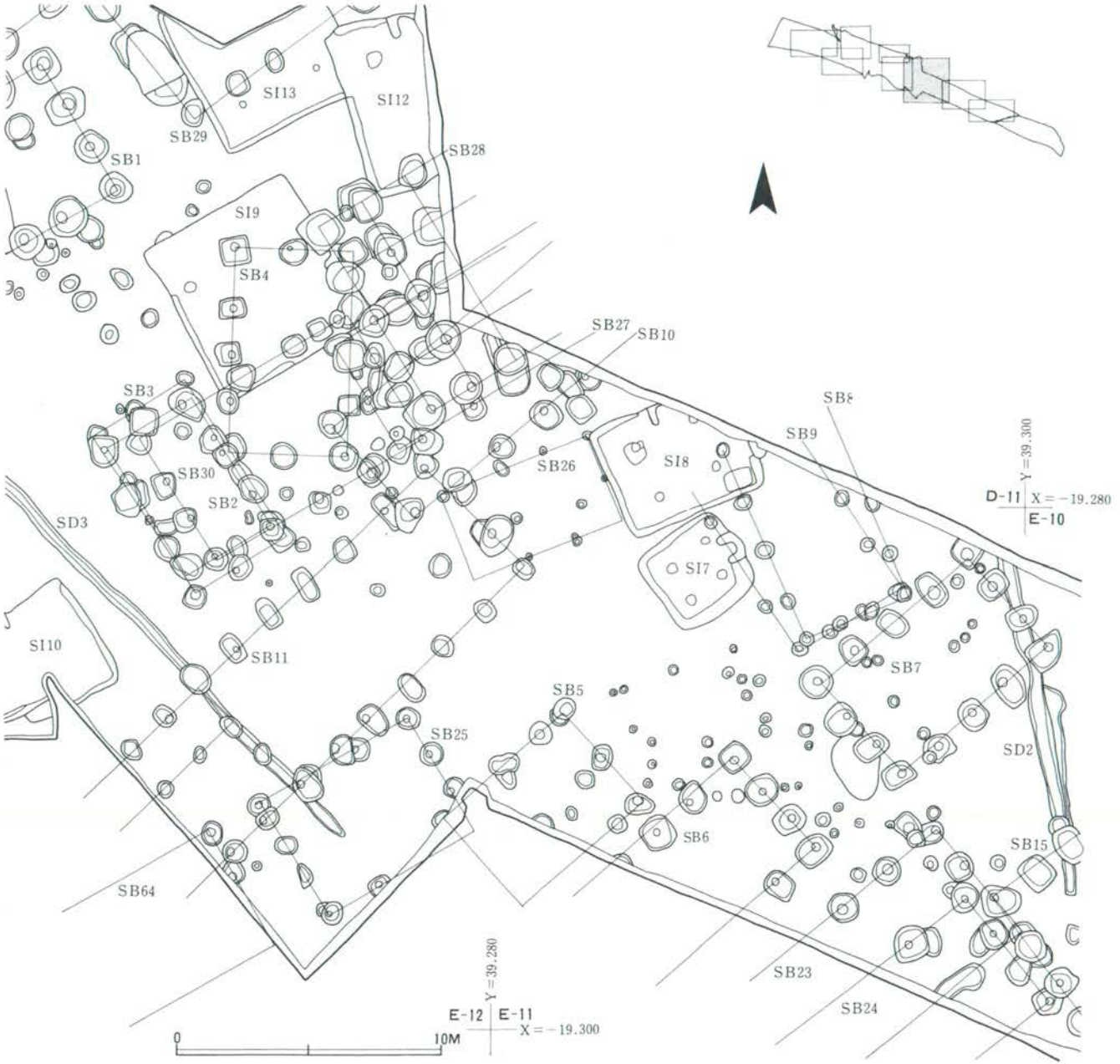
Ｄ－12グリッドに所在し、ＳＢ28に切られている。北側部分が調査区外のため桁行は３間分しか確認できない。梁行は２間（2.35m等間）で、規模は4.7mである。掘方は1.1～1.4mで不整な方形を呈し、深さは20cm前後である。柱穴は径35cm前



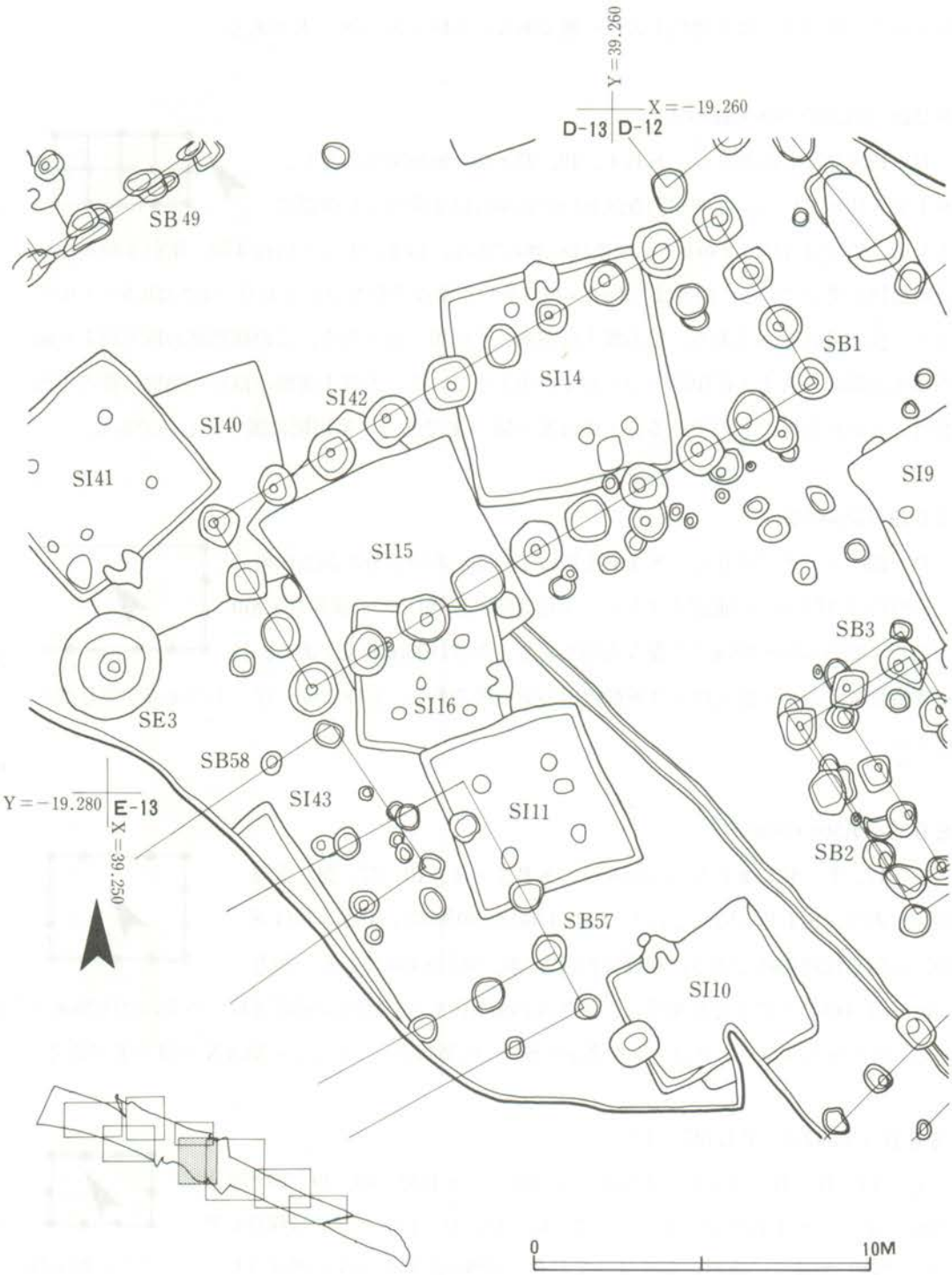
第498図　掘立柱建物跡実測図 ①（1/200）



第499図　掘立柱建物跡実測図 ②（1/200）



第500図　掘立柱建物跡実測図 ③ (1/200)



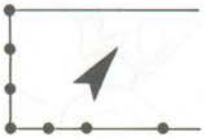
第501図　掘立柱建物跡実測図 ④ (1/200)

後である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－58°－Eである。

ＳＢ28（第500・508・510図）

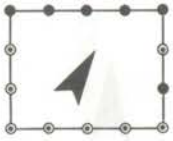
Ｄ－12グリッドに所在し、ＳＢ４、10、27・30と重複関係にあり、ＳＩ９を切っている。北側が調査区外のため梁行は２間分しか確認できない。桁行は４間（２ｍ）で、規模は8.3mである。いまのところ桁行４間、梁行３間の総柱式の建物と考えている。掘方は1.3～1.6mでやや不整な方形を呈しており、深さは0.8～１ｍである。柱穴は径40cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。この建物跡の掘方内より畿内産土師器の杯ＡＩ（第510図－２）が１点出土している。大畑Ｉ遺跡の掘立柱建物跡群の年代を考えるのに良好なものである。主軸はN－58°－Eである。第III期に属するものである。

ＳＢ29（第500図）



Ｄ－12グリッドに所在し、ＳＩＢを切っている。北側部分が調査区外のため桁行は３間分しか確認できない。梁行３間（1.9m）で、規模は5.8mである。掘方は80～90cmで不整な方形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴は確認できない。掘立埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－52°－Eである。第II期に属する。

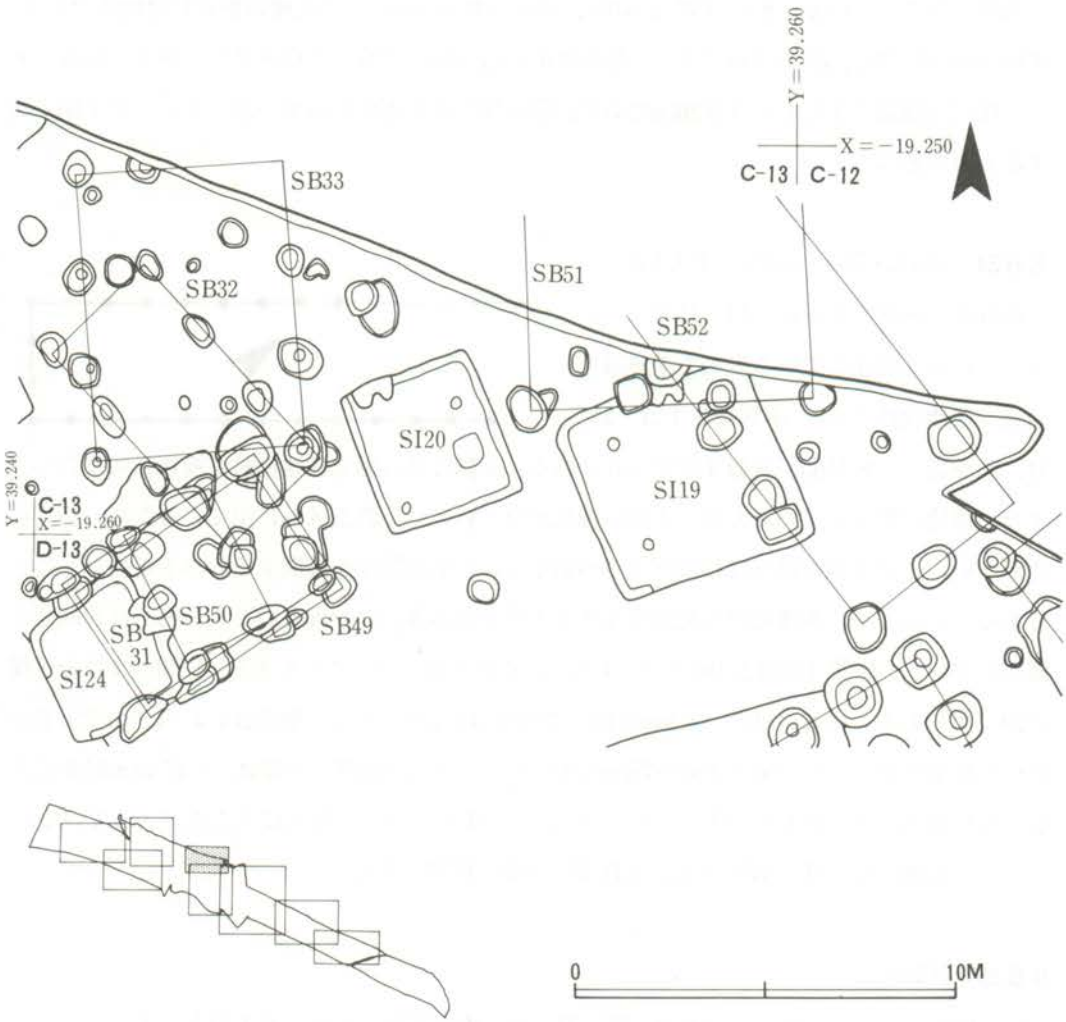
ＳＢ30（第500・508図）



Ｄ－12、Ｅ－12にまたがって所在し、ＳＢ２～４、10、27、28と重複関係にあり、ＳＩ９を切っている。桁行４間(2.3m等間)、梁行３間(1.8ｍ）の掘立柱建物跡である。規模は桁行9.2m、梁行5.6mである。掘方は0.8～1.1mの不整な方形を呈し、深さは75cm前後ある。柱穴は確認されているのは径30cmである。掘方埋土はロームブロックを多量に使い、版築状をしている。主軸はN－58°－Eである。

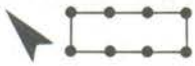
ＳＢ31（第502図、ＰＬ197－１）

Ｃ－13、Ｄ－Ｂグリッドにまたがって所在し、ＳＢ32、33、49、50と重複関係にあり、ＳＩ24を切っている。このＣ－13、Ｄ－13グリッドは篠竹が繁茂していた地域で、根がかなりはっており、遺構の上層がかなり攪乱されているため、掘立柱建物跡の切り合い関係柱穴の確認はきわめて難しい。桁行３間（1.9m等間)、梁行２間（1.65ｍ等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行5.7m、梁行3.3mである。掘方は0.8～1.2mの不整な長楕円形を呈し、深さは40cm前後である。柱穴は不明である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－56°－Eである。



第502図　掘立柱建物跡実測図 ⑤（1/200）

ＳＢ32（第502図　ＰＬ197）



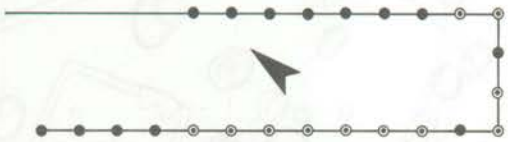
Ｃ－13グリッドに所在し、ＳＢ31、33、49、50と重複関係にある。桁行３間（2.3m）、梁行１間（3.3m）の小規模な掘立柱建物跡である。規模は桁行6.8m、梁行3.3mである。掘方は1.1～1.2mの長楕円形を呈し、深さは40cm前後である。柱穴は不明である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－43°－Ｗである。

ＳＢ33（第502図、ＰＬ197）

Ｃ－13グリッドに所在し、ＳＢ31、32と重複関係にある。北側梁行の一部

が調査区外に出ている。桁行３間（2.4m）、梁行３間（1.8m）の南北棟の掘立柱建物跡である。規模は桁行7.3m、梁行5.5mである。掘方は0.8～1.4mの不整な方形を呈し、深さは50cmである。柱穴は確認できたものは径20cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。第１期に属するものである。

ＳＢ34（第503・508・509図、ＰＬ198）



調査区の西側であるＣ－14、15グリッドにまたがって所在している大畑Ⅰ遺跡最大の掘立柱建物跡である。南側はＳＩ27～29、31、33を切り、ＳＢ65、ＳＤ４に切られている。北側は他の掘立柱建物跡が複雑に切り合い、また、篠竹が繁茂していたため、上面の攪乱がひどい上に、調査区外に出ているため、不明な点が多い。この北側の部分は柱穴どころか切り合いの前後関係を確認するのが不可能なところである。そのため、本建物跡も北側になると不明な点が多いが、現在のところ桁行は12間分を確認している。柱間寸法は2.4m平均であるが、やや不揃いのところもある。12間分までの規模は29.5mである。梁行は３間（1.9m等間）で規模は5.7mである。掘方は1.4～1.6mで大形のやや不整な方形を呈し、深さは55～75cm前後である。柱穴は南側のみ確認され径40cm前後である。掘方埋土は茶褐色土を主体としたもので、よく固めている。柱穴に火山灰が入っているのが多い。主軸はＮ－41°－Ｗである。第Ⅳ期の主要な建物である。

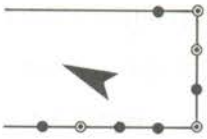
ＳＢ35（第503図）

Ｃ－15グリッドに所在し、ＳＢ34、36、37、48と重複関係にあり、ＳＩ33を切っている。大部分が調査区外にあり、規模、形態等は不明である。南側、東側ともに２間分が確認されている。掘方は1.2～1.3mのやや不整な方形を呈しており、深さは50cmである。柱穴は径35cmである。掘方は茶褐色土の単一層である。

ＳＢ36（第503・509図　ＰＬ200）

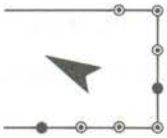
Ｃ－14、15グリッドにまたがって所在し、ＳＢ34、35、37、65等と重複関係にあり、ＳＩ33を切っている。北側が調査区外のため、梁行を２間分確認しているが、２間なのか３間なのかは不明である。桁行は３間（2.4m）で、規模は7.3mである。掘方は0.8～１mのやや不整な方形を呈しており、深さは60cmである。柱穴は確認できたものは径30cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－49°－Ｅである。

ＳＢ37（第503・509・510図、ＰＬ200）



Ｂ－15、Ｃ－15グリッドにまたがって所在し、ＳＢ34～36、38、47、48と重複関係にあり、ＳＩ33を切っている。北側が調査区外のため、桁行は４間分までしか確認できない。梁行は３間（1.9m等間）で、規模は5.7mである。掘方は1.4～1.7mで大形のやや不整な方形を呈しており、深さは70cm前後である。柱穴は径40cm前後である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。柱穴内に火山灰が入っているものもある。第510図－５°の土師器杯と９の土師器杯Ｂは掘方埋土中より出土した。主軸はＮ－22°－Ｗである。

ＳＢ38（第503図、ＰＬ200）



Ｂ－15、Ｃ－15グリッドにまたがって所在し、ＳＢ34～37、47、48等と重複関係にあるが、一番新しい掘立柱建物跡である。北側が調査区外のため、桁行は３間分まで確認しているが、規模は不明である。梁行は３間（1.7m）で、規模は5.3mである。掘方は1.4～1.6mで大形の方形を呈しており、深さは60cm前後である。柱穴は径40cm前後である。掘方埋土は茶褐色土の単一層であるが、よくしまっている。柱穴に火山灰が入っている。主軸はＮ－22°－Ｗである。第Ⅳ期に属するものである。

ＳＢ39（第504・509図、ＰＬ201）

調査区の西側であるＣ－15、Ｄ－15グリッドに所在している。この周辺はＳＢ40～46が複雑に重複しているところである。ＳＩ36は大畑Ⅰ遺跡においては珍しい奈良時代の竪穴住居跡であるため、この周辺の掘立柱建物跡の造営はそれ以後である事がはっきりとしている。ＳＩ36を切り、ＳＢ40に切られている。桁行３間（2.1m等間）、梁行２間（2.05m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行6.3m、梁行4.1mである。掘方は1.1～1.4mで大形のやや不整な方形を呈している。柱穴は確認できたものは径30cm前後である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－30°－Ｗである。

ＳＢ40（第504・509・510図　ＰＬ201）

Ｄ－15、16グリッドに所在し、ＳＩ36、ＳＢ39、43を切っている。桁行３間（1.7m）、梁行２間（1.95m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行5.3m、梁行3.9mである。掘方は1.1～1.5mで大形のやや不整な方形を呈しており、深さは70cmである。柱穴は確認できたものは径30cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。第510図－６の須恵器杯は掘方埋土中より出土した。主軸はＮ－70°－Ｅである。第Ⅴ期に属するものであろう。

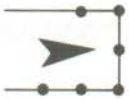
ＳＢ41（第504図、ＰＬ201）

Ｄ－16グリッドに所在し、ＳＩ37、ＳＢ42、43を切っており、ＳＢ40と柱筋をそろえて西側に隣接している。南側は調査区外のため、桁行は３間分までしか確認できないが、おそらく、ＳＢ40と同規模と思われるので、桁行は３間であろう。梁行は２間（2.05m等間）で、規模は4.1mである。掘方は１～1.4mでやや不整な方形を呈し、深さは60cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－70°－Ｅである。ＳＢ40と同じ第Ⅴ期に属するものである。

ＳＢ42（第504図、ＰＬ201）

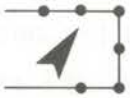
Ｄ－16グリッドに所在し、ＳＩ36、37、ＳＢ40を切っている。南側が調査区外のため、桁行は１間分しか確認できない。梁行は２間(1.8m等間)で、規模は3.6mである。掘方は0.9～1.2mで不整な方形を呈し、深さは40cm前後である。柱穴は確認できたものは径30cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－51°－Ｅである。

ＳＢ43（第504図、ＰＬ201）



Ｄ－15、16グリッドにまたがって所在し、ＳＩ36を切り、ＳＢ39～41に切られている南北棟の掘立柱建物跡である。南側が調査区外のため桁行は１間分しか確認できない。梁行は２間（2.3m等間）で、規模は4.6mである。掘方はほとんどが切られているために原形を推定することはできないが、１つは70cmの不整な方形を呈しており、深さは40cmある。柱穴は確認できない。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－２°－Ｅである。

ＳＢ44（第504図、ＰＬ201）



Ｄ－15グリッドに所在し、ＳＢ39、45に切られている。南側が調査区外のため桁行は２間分しか確認できない。梁行は２間で、規模は3.6mであるが、柱間寸法は不揃いである。掘方は0.8～1.1mで不整な方形を呈しており、深さは30cm前後である。柱穴は確認できなかった。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ－57°－Ｅである。

ＳＢ45（第504図、ＰＬ201）

Ｄ－15グリッドに所在し、ＳＢ39、46に切られている。南側は調査区外のため桁行２間分しか確認できない。梁行は２間（2.35m等間）で、規模は4.7mである。掘方は原形がわかるものがなく規模等は不明であるが、90cm以上の方形を呈し、深さは40cmである。柱穴は径30cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層でる。主軸はＮ－58°－Ｅ

である。第Ⅳ期に属するものである。

ＳＢ46（第504図　ＰＬ201）

Ｄ―15グリッドに所在し、ＳＢ44を切り、ＳＢ39に切られている。南側が調査区外のため桁行が１間分しか確認できなかった。梁行は３間（1.7m等間）で、規模は5.1mである。掘方は規模が判名しているものは1.1mのやや不整な方形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴は径30cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はＮ―44°―Ｅである。

ＳＢ47（第503・510図）

Ｂ―15グリッドに所在し、ＳＢ34、37と重複関係にある。大部分が調査区外のため、規模、形態等は不明である。確認できたのは、建物の南西コーナー部分だけである。掘方は1.2mの方形を呈しており、深さは50cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土はロームブロックを多く含み、よく固くしまっている。柱穴に火山灰がはいっている。第510図―８の土師器杯は掘方埋土中より出土している。

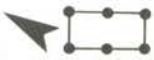
ＳＢ48（第503図）

Ｂ―15、Ｃ―15グリッドにまたがって所在し、ＳＢ34～38、47と重複関係にある。北側と西側が調査区外のため規模、形態は不明である。南側、西側ともに２間分は確認されている。掘方は1.2m以上の方形を呈し、深さは60cmである。柱穴は確認できない。掘方埋土はロームブロックを多量に含み、版築状になっている。

ＳＢ49（第502・510図）

Ｃ―13、Ｄ―13グリッドにまたがって所在し、ＳＩ24を切り、ＳＢ31～33、50と重複関係にある。桁行３間（２m）、梁行２間（2.1m）の掘立柱建物跡である。規模は桁行6.1m、梁行4.2mである。掘方は１～1.5mで不整な長楕円形を呈しており、深さは50cm前後である。柱穴は不明である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。第510図―10の土師器の小形皿は掘方埋土中の上層より出土したものである。主軸はＮ―56°―Ｅである。

ＳＢ50（第502図）



Ｃ―13、Ｄ―13グリッドにまたがって所在し、ＳＢ49に直交するようにすっぽり中に入っている。桁行２間（1.8m等間）、梁行１間（2.7m）の小形の掘立柱建物跡である。規模は桁行3.6m、梁行2.7mである。掘方は70～90cmで不整な長楕円形を呈し、深さは40cm前

後である。柱穴は不明である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－30°－Wである。

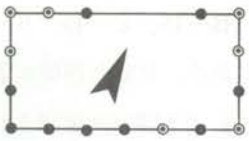
ＳＢ51（第502図）

調査区のほぼ中央であるＣ－13グリッドに所在し、ＳＩ19を切り、ＳＢ52と重複関係にある。南側の一辺しか確認できない。おそらくこれが南側の桁行であろう。３間（2.5m）で、規模は7.6mである。柱穴は確認できない。掘方は0.8～1.3mで不整な方形を呈し、深さは40cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－３°－Wで、珍しい東西棟の建物である。第１期に属するものであろう。

ＳＢ52（第502図）

Ｃ－12、13グリッドにまたがって所在し、ＳＩ19を切り、ＳＢ51と重複関係にある。北側が調査区外のため、桁行は３間分しか確認できない。この桁行は柱間寸法が不揃いである。梁行は２間（2.6m等間）で、規模は5.2mである。掘方は1.2～1.4で方形を呈しており、深さは40cm前後である。柱穴は不明である。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－38°－Wである。

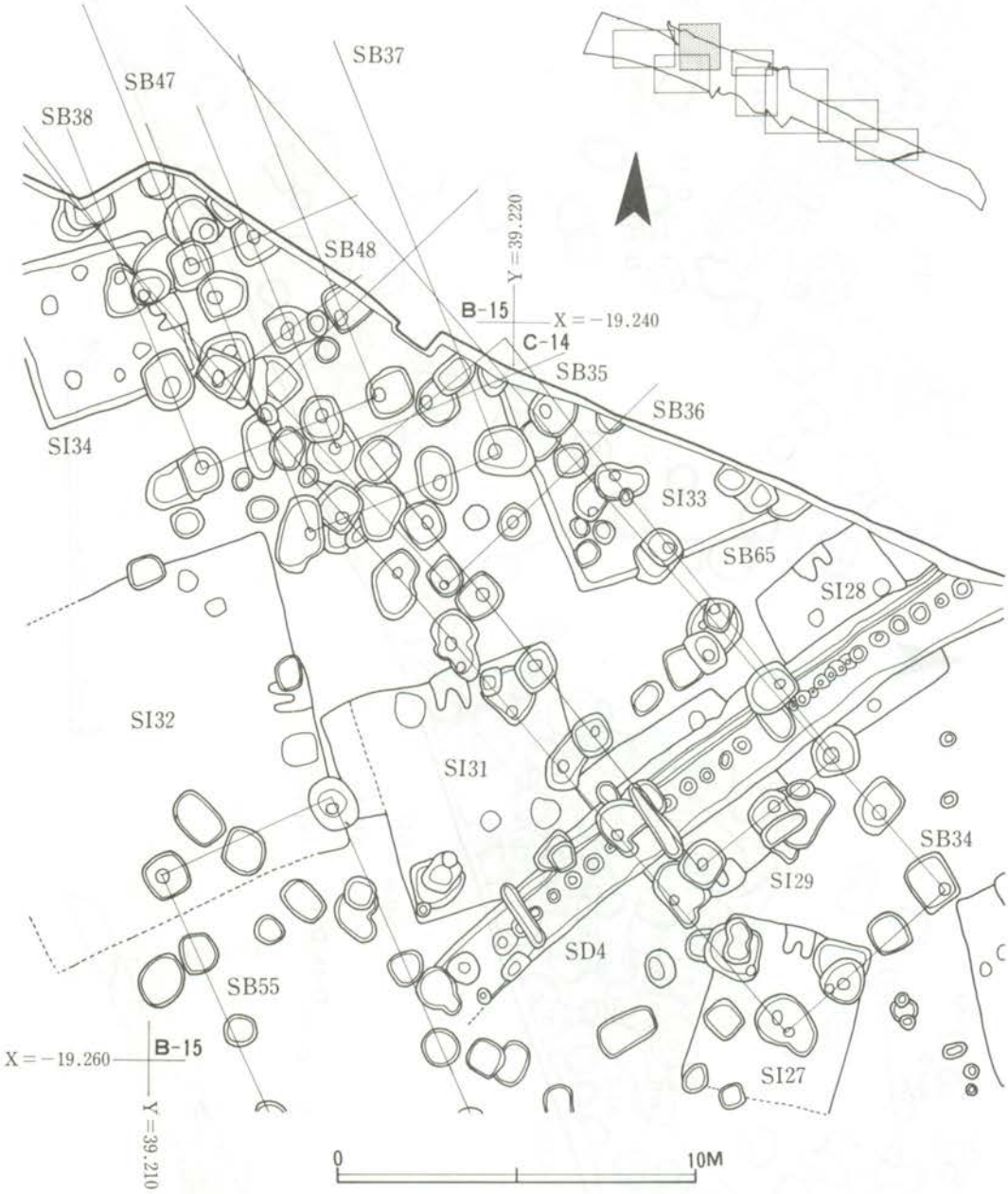
ＳＢ53（第505図、ＰＬ203－１、204－１）



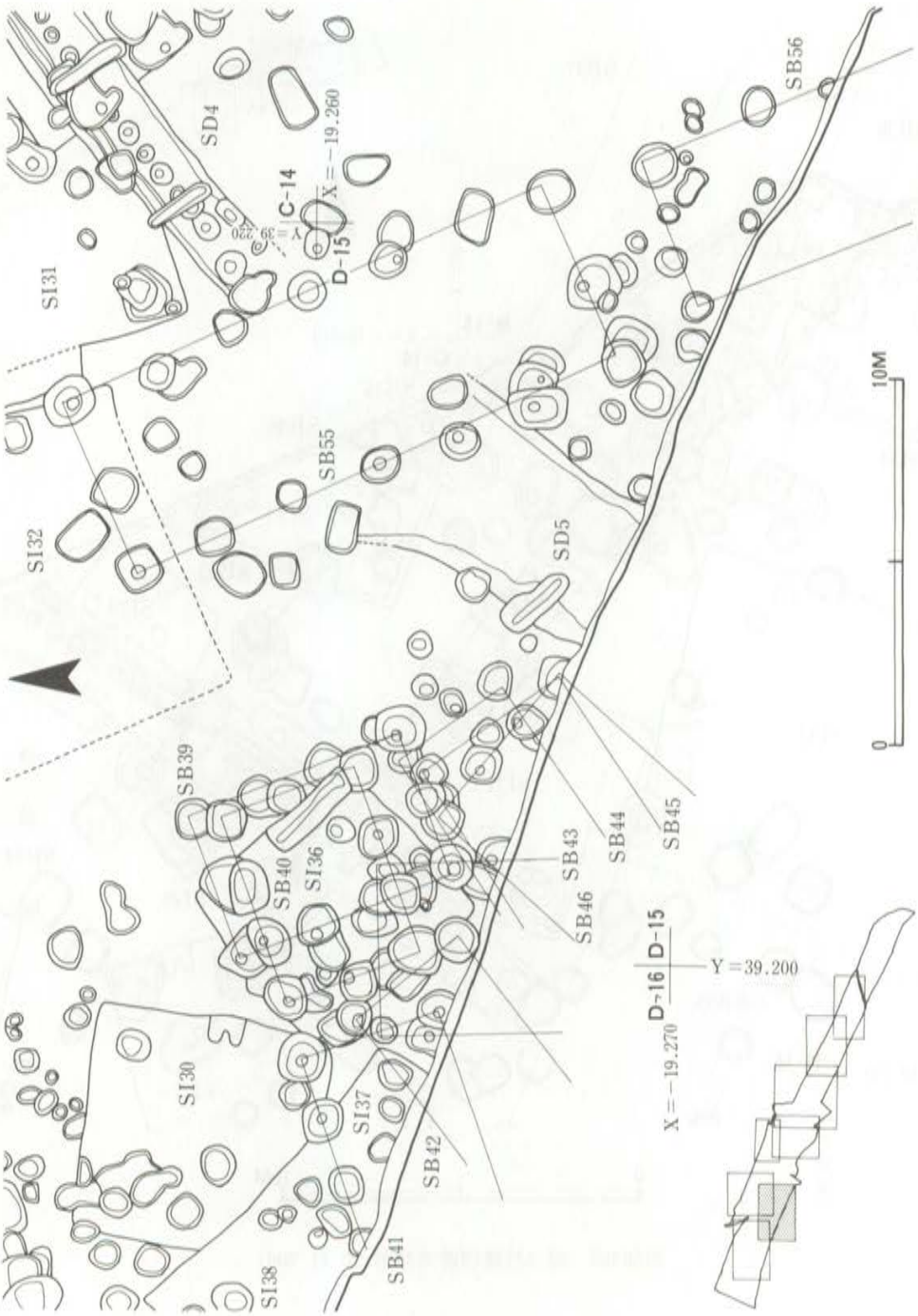
調査区の西側にあたるＣ－16グリッドに所在し、ＳＩ44、45、ＳＢ59、60を切っている。桁行６間（2.6m）、梁行３間（2.5m）の大形の掘立柱建物跡である。規模は桁行15.7m、梁行7.6mである。掘方は0.8～1.8mと大きさにばらつきがあり、不整な方形を呈し、深さは70cm前後である。柱穴は確認できたのは少ないが径35cm前後である。掘方埋土はロームブロックを多量に含み、版築状になっている。柱穴に火山灰がはいっている。主軸はN－68°－Ｅである。第Ⅴ期に属する主要な建物である。

ＳＢ54

調査区の西側、Ｂ－15、16グリッドに所在し、ＳＢ53の東側に隣接している。北西部が調査区外のため、桁行は１間分しか確認できない。梁行は３間（2.7m等間）で、規模は8.1mである。梁行としては規模が大きすぎるが、桁行がはっきりしないため、ここでは梁行と考えておく。掘方は1.1～1.2mの不整な方形を呈して、深さは30cm前後である。道路の下にあったため遺存はきわめて悪く、柱穴も確認できなかった。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－40°－Wである。



第503図　掘立柱建物跡実測図 ⑥ (1/200)

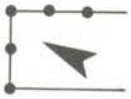


第504図　掘立柱建物跡実測図 ⑦（1/200）

ＳＢ55（第504図、ＰＬ202）

Ｃ－15、Ｄ－15グリッドにまたがって所在し、ＳＩ32を切っている。道路の下にあったため遺存はきわめて悪い。桁行６間(2.4m)、梁行２間(2.55m等間)の規模の大きな掘立柱建物跡である。規模は桁行14.5m、梁行5.1mである。掘方は0.9～1.7mと規模にばらつきがあるが、形態はやや不整な方形を呈しており、深さは40cm前後である。柱穴は径40cmである。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－23°－Wである。第Ⅴ期の主要な建物である。

ＳＢ56（第504図、ＰＬ202）



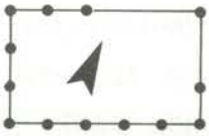
Ｄ－15グリッドに所在し、ＳＢ55に柱筋をそろえて南側に隣接している。南側は調査区外のため、桁行２間分しか確認できない。梁行は２間であるが、不揃いであり、規模は4.3mである。掘方は１～1.3mで不整な方形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴は確認できなかった。掘立埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－22°－Wである。ＳＢ55とともに第Ⅴ期に属するものである。

ＳＢ57（第501図、ＰＬ203－２）

調査区のほぼ中央であるＥ－13グリッドに所在し、ＳＩ11、43、ＳＢ58を切っている。南側が調査区外になるため、桁行は２間分しか確認できない。また、大畑Ⅰ遺跡では唯一の廂付の掘立柱建物跡である。梁行は３間(1.9m等間）で、規模は5.7mである。廂は南側の桁行に1.8m出た所にある。掘方は0.9～1.1mで不整な方形を呈し、深さは40cm前後である。廂の掘方は一回り小さく70～80cmで円形を呈している。柱穴は確認できなかった。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－62°－Ｅである。第Ⅲ期に属するものである。

ＳＢ58（第501図　ＰＬ203－２）

Ｄ－13、Ｅ－13グリッドにまたがって所在し、ＳＩ43を切り、ＳＢ57に切られている。南側は調査区外のため桁行は１間分しか確認できない。梁行は２間であるが不揃いで、規模は4.9mである。掘方は70～90cmのやや不整な方形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴は確認できなかった。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－57°－Ｅである。第Ⅱ期に属するものである。

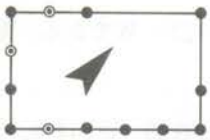


ＳＢ59（第505図、ＰＬ204－１）

調査区の西側であるＣ－16グリッドに所在し、ＳＢ53に切られ、Ｓ

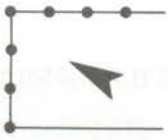
B60と重複関係にある。桁行５間（2.68m等間）、梁行３間（2.4m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行13.4m、梁行7.2mである。掘方は1.4～1.5mでやや不整な方形を呈しており、深さは60cm前後である。柱穴は確認できなかった。掘方埋土はローム粒子を多く含み、よくしまっている。主軸はN－68°－Eである。

ＳＢ60（第505図　ＰＬ204－１）



Ｃ－16グリッドに所在し、ＳＩ44～46を切り、ＳＢ53に切られている。桁行５間（2.62m等間）、梁行３間（2.6m等間）の掘立柱建物跡である。規模は桁行13.1m、梁行7.8mである。掘方は0.9～1.5mとばらつきがあるが、やや不整な方形を呈し、深さは60cm前後である。柱穴は確認できたものは径30cmである。掘立埋土はローム粒子を多く含み、よくしまっている。主軸はN－48°－Eである。第Ⅵ期に属するものである。

ＳＢ61（第505図　ＰＬ204－２）



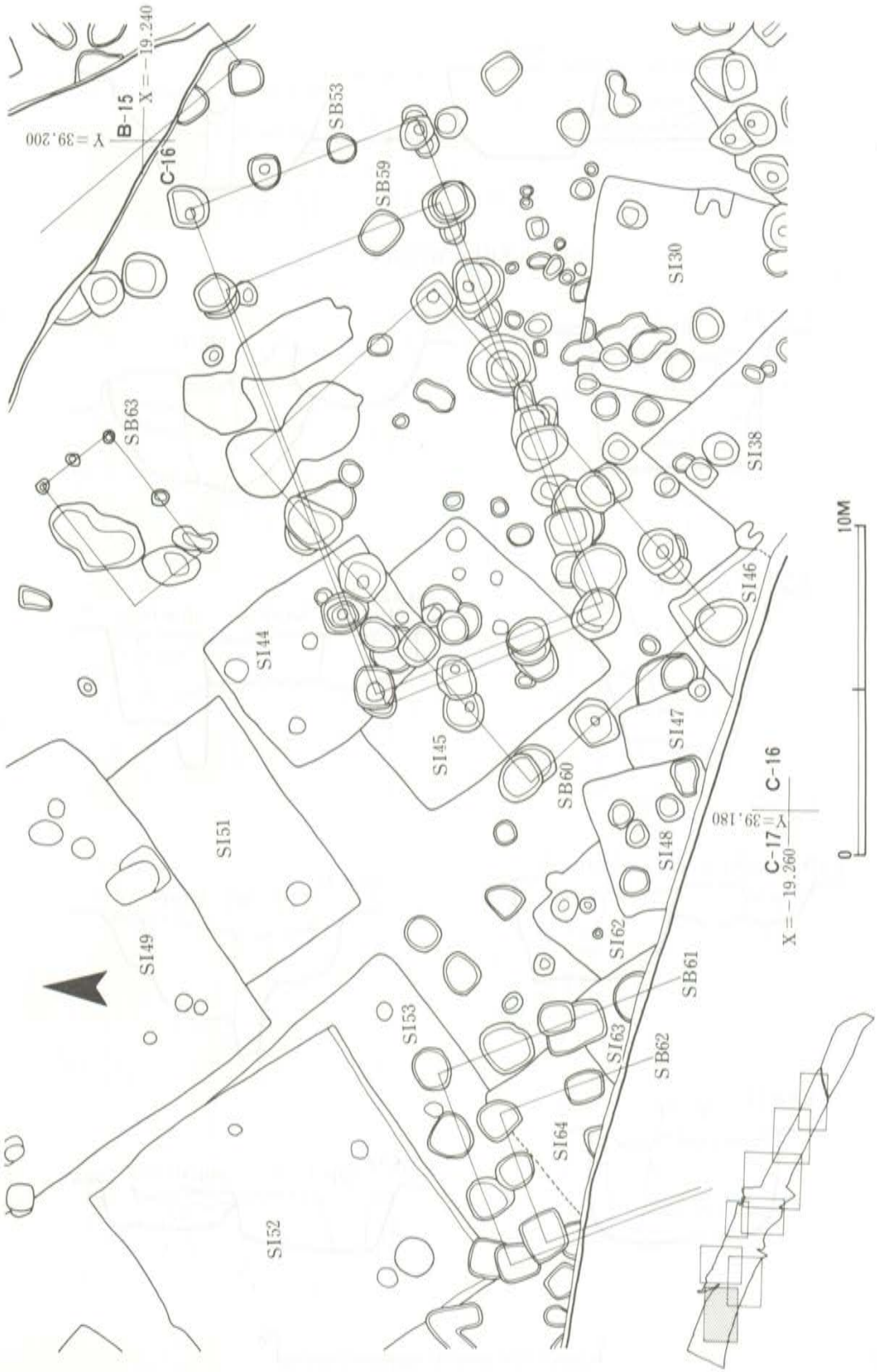
調査区の西端に近いＣ－17グリッドに所在し、ＳＩ53、63、64を切り、ＳＢ62に切られている。大畑Ⅰ遺跡においては一番西に位置する掘立柱建物跡である。南側は調査区外のため桁行は３間分しか確認できない。梁行は３間（2.1m等間）で、規模は6.3mである。掘方は1.3～1.9mの大形で方形を呈している。柱穴は確認できなかった。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－22°－Wである。第Ⅴ期に属するものである。

ＳＢ62（第505図　ＰＬ204－２）

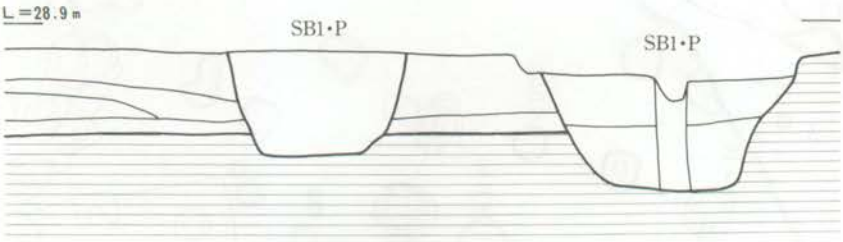
Ｃ－17グリッドに所在し、ＳＢ61を切り、すっぽり中に入っている。南側は調査区外のため桁行は１間分しか確認できない。梁行は２間（2.15m等間）で、規模は4.3mである。掘方は1.3～1.4mで方形を呈している。柱穴は確認できなかった。掘方埋土は茶褐色土の単一層である。主軸はN－22°－Wである。

ＳＢ63（第505図）

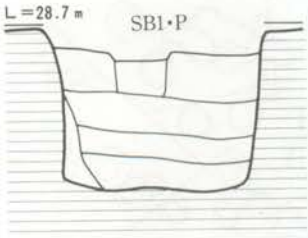
Ｂ－16、Ｃ－16グリッドにまたがって所在し、ＳＢ53の北西に隣接している。桁行２間（2.3m等間）、梁行２間（1.35m等間）の小形な掘立柱建物跡である。規模は桁行4.6m、梁行2.7mである。掘方は30～60cmの不整な円形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴は確認できない。掘立埋土は黒褐色土の単一層である。主軸はN－51°－Eである。規模、形態等からして古墳時代の所産である。

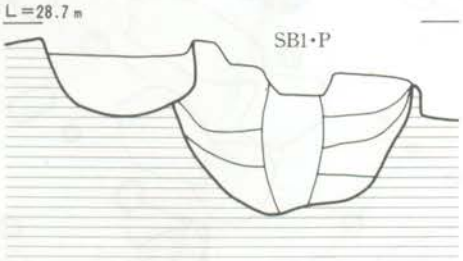


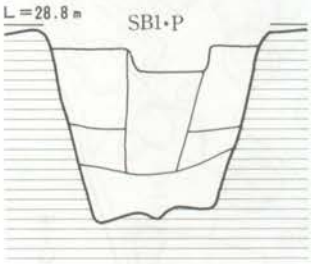
第505図　掘立柱建物跡実測図 ⑧（1/200）

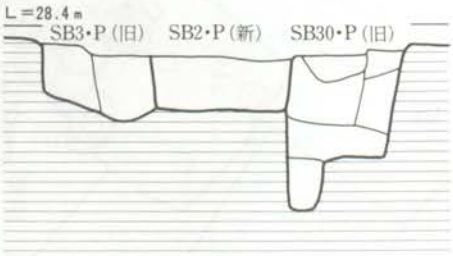


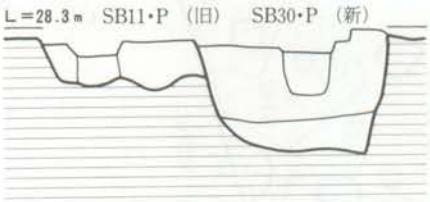
SI 14とSB1 土層関係図

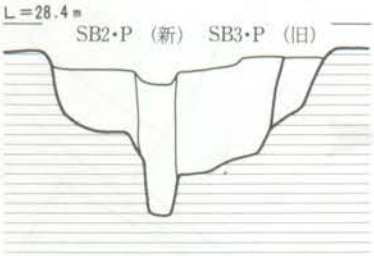


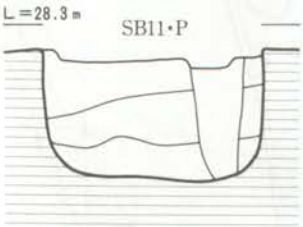


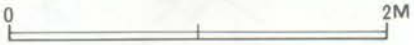




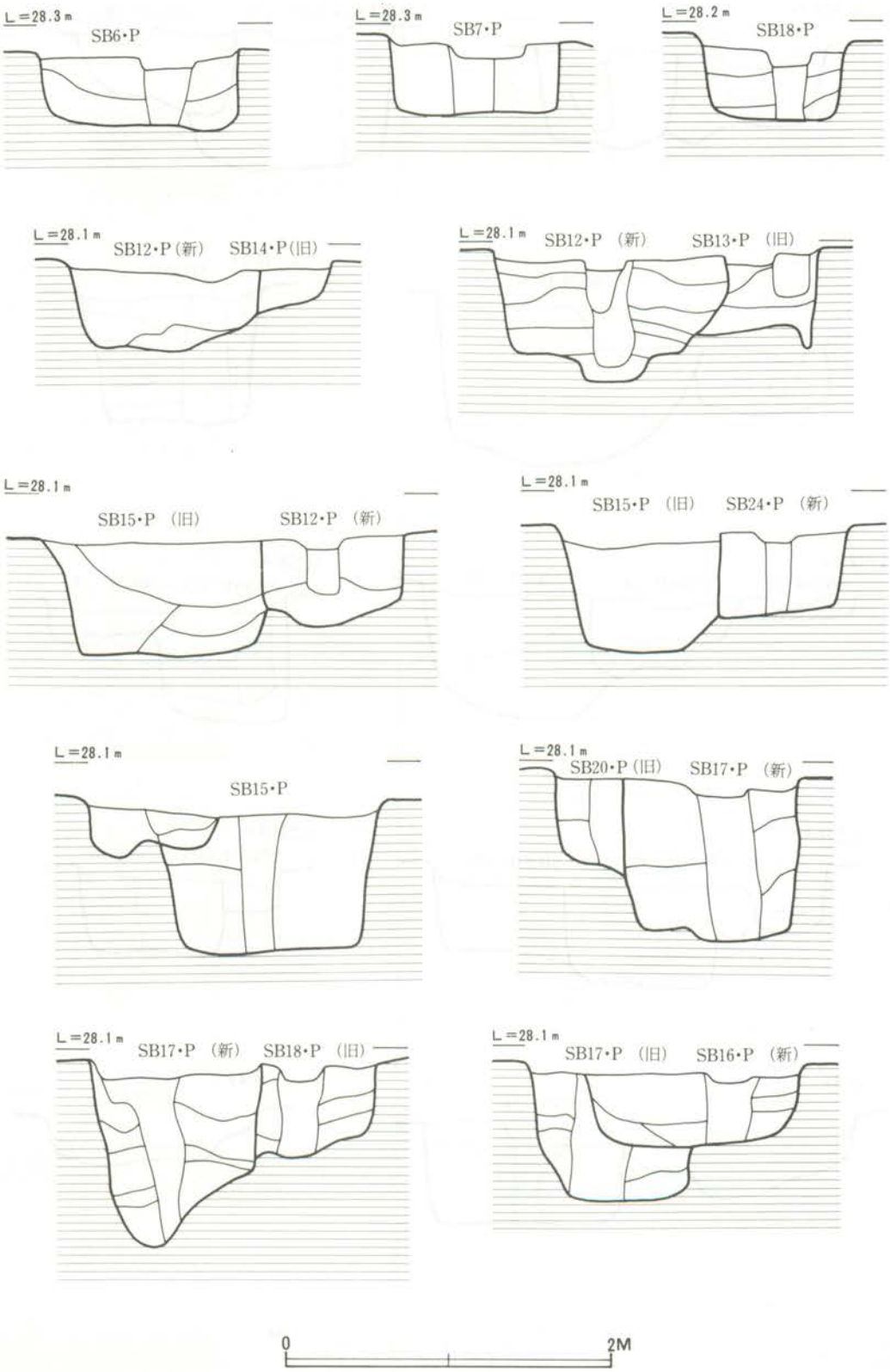




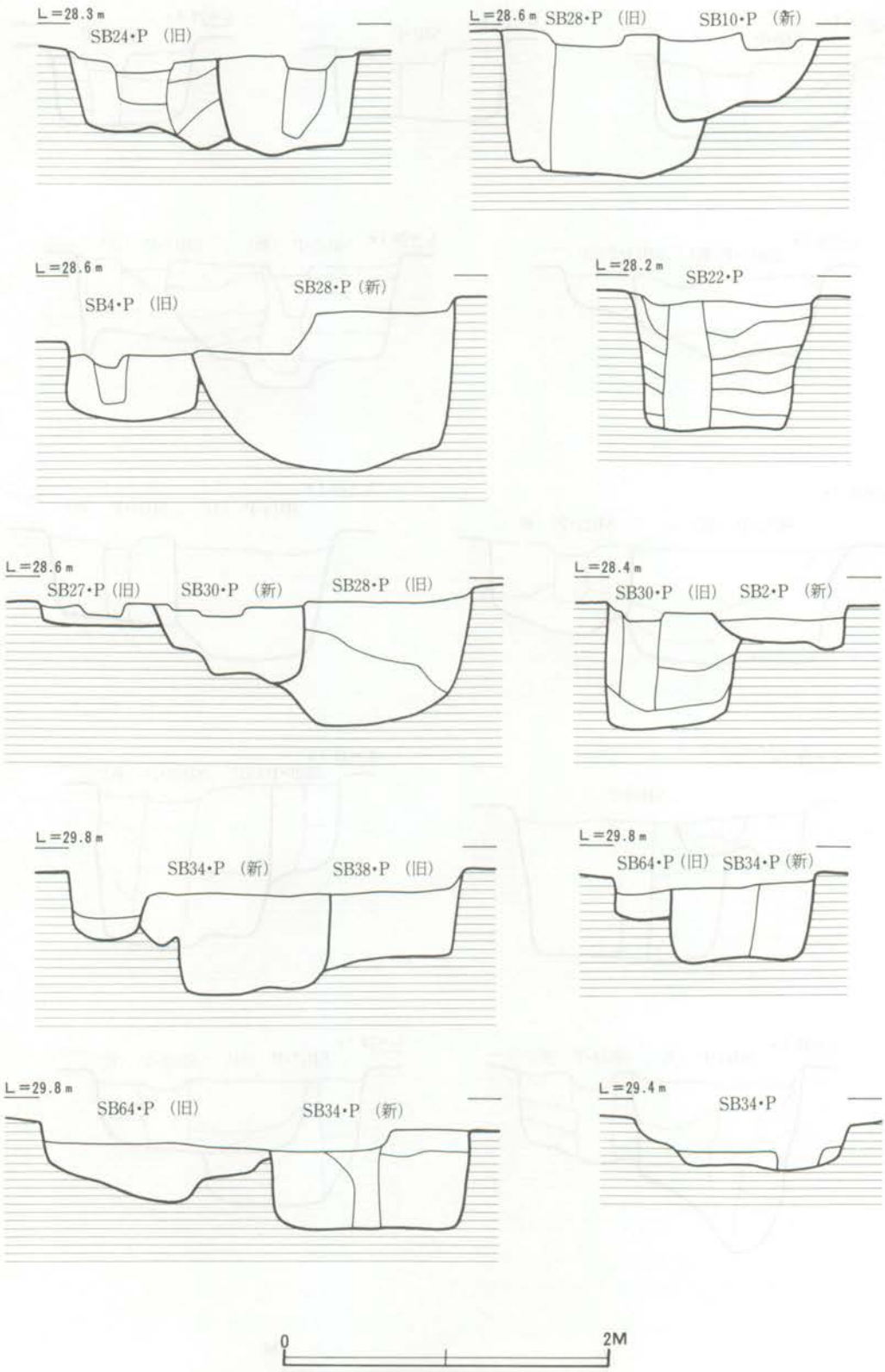




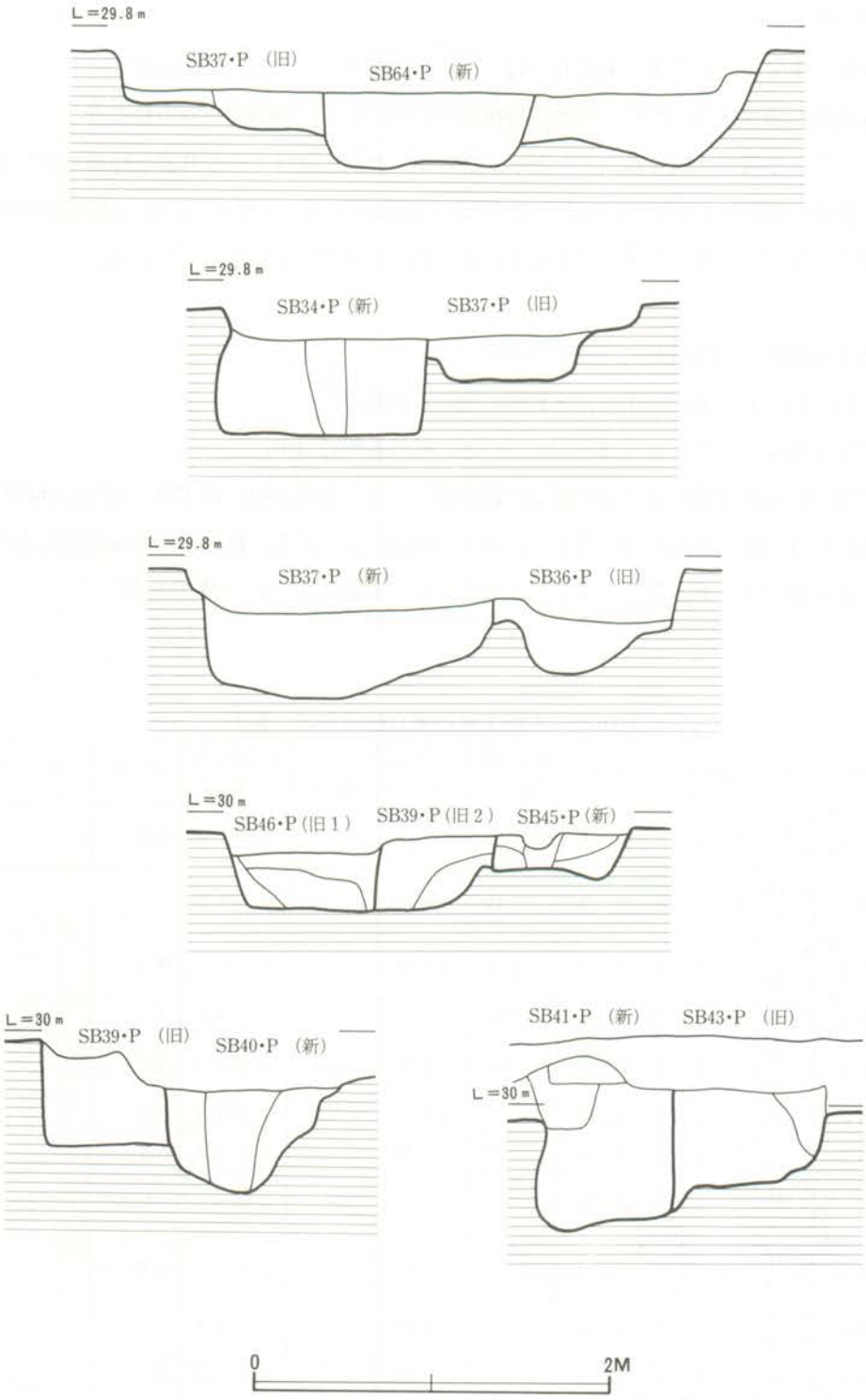
第506図　掘立柱建物跡掘方断面図 ①（1/40）



第507図　掘立柱建物跡掘方断面図 ②（1/40）



第508図　掘立柱建物跡掘方断面図 ③（1/40）



第509図　掘立柱建物跡掘方断面図 ④（1/40）

ＳＢ64（第500図）

調査区の中央よりやや東であるＥ－12グリッドに所在し、ＳＢ11に切られている。大部分が調査区外のため、形態、規模等は不明である。90cmのやや不整な方形を呈している掘方２個を検出しただけであるが、北側に隣接するＳＢ25と柱筋をそろえており、ＳＢ11に切られているもの同じであるため、同規模のものが考えられる。柱穴は形30cmで、掘方埋土にはローム粒子が多く含まれている。柱穴には火山灰がはいっている。

ＳＢ65（第503図　ＰＬ198）

Ｃ－14、15グリッドに所在し、ＳＢ34の南から２間のところから、やや主軸をかえて、すっぽり切っている。桁行６間(2.4m)、梁行２間（2.45m等間）の大形の掘立柱建物跡である。規模は桁行14.6m、梁行4.9mである。掘方は1.1～1.4mで方形を呈しており、深さは60cm前後である。柱穴は径35cm前後である。掘方埋土は茶褐色土の単一層で、よくしまっている。主軸はＮ－38°－Ｗである。

第16表　大畑Ⅰ遺跡堀立柱建物跡一覧表

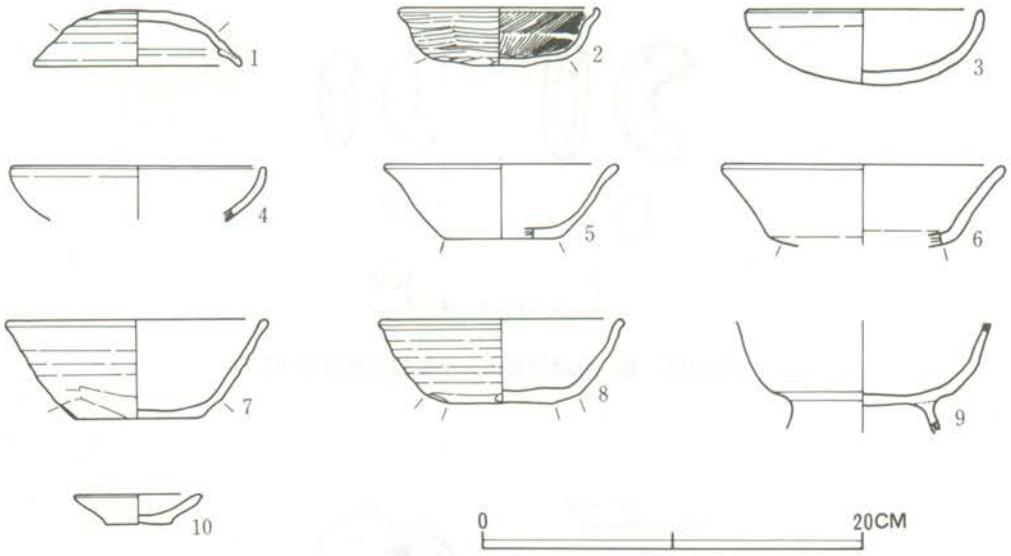
遺構	位置	規模	主・軸	桁行全長 m（尺）	梁行全長 m（尺）	廂 m（尺）	柱穴(廂柱穴) m	時期	備考
ＳＢ１	Ｄ－12 Ｄ－13	９×３	Ｎ－60°－Ｅ	17.7(59)	5.7(19)		1.3～1.6	ⅢＡ	
ＳＢ２	Ｄ－12 Ｅ－12	３×２	Ｎ－32°－Ｗ	5.7(19)	3.8(13)		0.9～1.3		
ＳＢ３	Ｄ－12 Ｅ－12	３×２	Ｎ－33°－Ｗ	7.2(24)	4.1(14)		0.7～1	ⅣＡ	
ＳＢ４	Ｄ－12	４×２	Ｎ－1°－Ｅ	7.9(26)	4.4(15)		1～1.2	Ⅰ	
ＳＢ５	Ｅ－11 Ｅ－12	４×２	Ｎ－49°－Ｅ	6　(20)	4.5(15)		0.8～1.2	ⅢＡ	
ＳＢ６	Ｅ－11	×３	Ｎ－49°－Ｅ		4.6(15)		1.1～1.3	ⅣＡ	
ＳＢ７	Ｅ－11	４×３	Ｎ－48°－Ｅ	7.4(25)	4.5(15)		1.3～1.5	ⅣＡ	
ＳＢ８	Ｄ－11 Ｅ－11	×３	Ｎ－23°－Ｗ		4.2(14)		0.5～0.6	古墳時代	
ＳＢ９	Ｄ－11 Ｅ－11	×３	Ｎ－33°－Ｗ		4.6(15)		0.4～0.7	古墳時代	
ＳＢ10	Ｄ－11 Ｄ－12	×２	Ｎ－49°－Ｅ		4.6(15)		1～1.2		
ＳＢ11	Ｅ－12	×３	Ｎ－45°－Ｅ		5.3(18)		0.9～1.6	Ⅱ	
ＳＢ12	Ｅ－10	５×３	Ｎ－49°－Ｗ	11.8(39)	5.7(19)		1.2～1.7	Ⅱ	
ＳＢ13	Ｅ－10	×３	Ｎ－52°－Ｅ		5.2(17)		1.1	ⅢＡ	
ＳＢ14	Ｅ－10	×３	Ｎ－57°－Ｅ		5.4(18)		1.1～1.5	Ⅰ	

SB15	E−10 E−11	6×3	N−54°−E	10.8(36)	6.1(20)		1.2〜1.6	IVA	
SB16	E−10 F−10	3×2	N−54°−E	6.6(22)	5.4(18)		1〜1.3	IVA	
SB17	E−9 F−9	5×3	N−57°−E	9.3(31)	5.6(19)		1.2〜1.5	IIIA	
SB18	E−9 F−9	4×2	N−48°−W	8.7(29)	4.5(15)		1.1〜1.6	II	
SB19	F−9	2×2	N−55°−E	3.6(12)	2.9(10)		0.7〜1.3	IIIA	
SB20	E−9 F−9	3×2	N−42°−E	5.1(17)	4.5(15)		0.7〜0.9	I	
SB21	F−8 F−9	×					0.8〜1		
SB22	F−8 F−9	×					1.3〜1.6		
SB23	E−11	×3	N−50°−E		5.1(17)		1〜1.2	II	
SB24	E−10 E−11	×3	N−52°−E		5.1(17)		0.9〜1.4	IIIA	
SB25	E−12	3×3	N−60°−E	6.3(21)	5 (17)		0.8〜1	I	
SB26	D−11 E−11	3×2	N−69°−E	6.2(21)	3.6(12)		0.2〜0.8	古墳時代	
SB27	D−12	×2	N−58°−E		4.7(16)		1.1〜1.4		
SB28	D−12	4×	N−58°−E	8.3(28)			1.3〜1.6	IIIA	総柱式？
SB29	D−12	×3	N−52°−E		5.8(19)		0.8〜0.9	II	
SB30	D−12 E−12	4×3	N−58°−E	9.2(31)	5.6(19)		0.8〜1.1		
SB31	C−13 D−13	3×2	N−56°−E	5.7(19)	3.3(11)		0.8〜1.2		
SB32	C−13	3×1	N−43°−W	6.8(23)	3.3(11)		1.1〜1.2		
SB33	C−13	3×3	N−4°−W	7.3(24)	5.5(18)		0.8〜1.4	I	
SB34	C−14 C−15	×3	N−41°−W		5.7(19)		1.4〜1.6	IVA	
SB35	C−15	×					1.2〜1.3		
SB36	C−14 C−15	3×	N−49°−E	7.3(24)			0.8〜1		
SB37	B−15 C−15	×3	N−22°−W		5.7(19)		1.4〜1.7	IIIA	
SB38	B−15 C−15	×3	N−22°−W		5.2(17)		1.4〜1.6	VA	
SB39	C−15 D−15	3×2	N−30°−W	6.3(21)	4.1(14)		1.1〜1.4		
SB40	D−15 D−16	3×2	N−70°−E	5.3(18)	3.9(13)		1.1〜1.5	VA	
SB41	D−16	×2	N−70°−E		4.1(14)		1 〜1.4	VA	
SB42	D−16	×2	N−51°−E		3.6(12)		0.9〜1.2		
SB43	D−15 D−16	×2	N−2°−E		4.6(15)		0.7〜		

SB44	D−15	×2	N−57°−E		3.6(12)		0.8〜1.1		
SB45	D−15	×2	N−58°−E		4.7(16)		0.9〜	ⅣA	
SB46	D−15	×3	N−44°−E		5.1(17)		1.1〜		
SB47	B−15	×					1.2〜		
SB48	B−15 C−15	×					1.2〜		
SB49	C−13 D−13	3×2	N−56°−E	6.1(20)	4.2(14)		1 〜1.5		
SB50	C−13 D−13	2×1	N−30°−W	3.6(12)	2.7(9)		0.7〜0.9		
SB51	C−13	3×	N−3°−W	7.6(25)			0.8〜1.3	Ⅰ	
SB52	C−12 C−13	×2	N−38°−W		5.2(17)		1.2〜1.4		
SB53	C−16	6×3	N−68°−E	15.7(52)	7.6(25)		0.8〜1.8	ⅤA	
SB54	B−15 B−16	×3	N−40°−W		8.1(27)		1.1〜1.2	ⅣA	
SB55	C−15 D−15	6×2	N−23°−W	14.5(48)	5.1(17)		0.9〜1.7	ⅤA	
SB56	D−15	×2	N−22°−W		4.3(14)		1 〜1.3	ⅤA	
SB57	E−13	×3	N−62°−E		5.7(19)	S・1.8	0.9〜1.1 (0.7〜0.8)	ⅢA	
SB58	D−13 E−13	×2	N−57°−E		4.9(16)		0.7〜0.9	Ⅱ	
SB59	C−16	5×3	N−68°−E	13.4(45)	7.2(24)		1.4〜1.5		
SB60	C−16	5×3	N−48°−E	13.1(44)	7.8(26)		0.9〜1.5	ⅣA	
SB61	C−17	×3	N−22°−W		6.3(21)		1.3〜1.9	ⅤA	
SB62	C−17	×2	N−22°−W		4.3(14)		1.3〜1.4		
SB63	B−16 C−16	2×2	N−51°−E	4.6(15)	2.7(9)		0.3〜0.6	古墳時代	
SB64	E−12	×					0.9		
SB65	C−14 C−15	6×2	N−38°−W	14.6(49)	4.9(16)		1.1〜1.4		

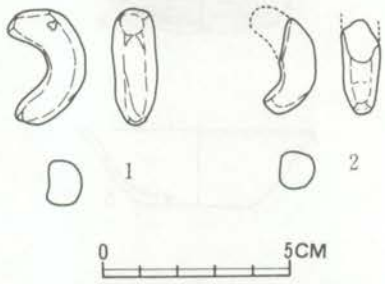
第17表　大畑Ⅰ遺跡出土墨書土器一覧表

番号	釈　文	器種	部　位	出土地点	備考
1	ひ	土師器・杯A	底　部	表　採	1
2	三	土師器・杯B	底　部	表　採	2
3	?	土師器・杯	底　部	表　採	3
4	?	土師器・皿?	体部外面	表　採	4
5	?	土師器・椀B	底部内面	表　採	5

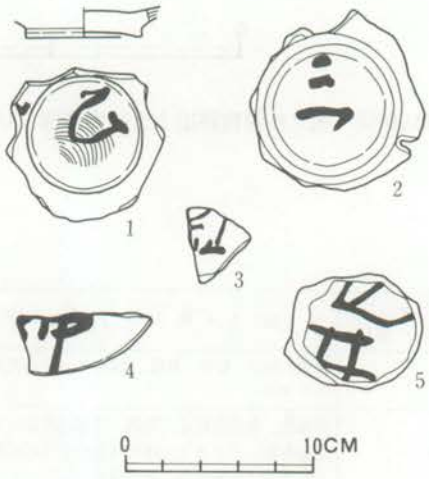


第510図　掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
掘立－1 （SB1）	蓋 （S）	10.9 × 2.8 ×	灰色、長石、石英、雲母、良好、？－R－天井部回転ヘラケズリ	¼
2 （SB28）	杯	10.2 × 2.9 ×	橙褐色、白色微粒子、堅緻、体部内外面ヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、体部内面に2段の斜放射状暗文と見こみに何重かのラセン暗文	畿内産土師器 ¼ 杯AⅠ
3 （SB1）	杯	12.5 × 3.9 ×	暗褐色（黒斑有り）、良好、全面ヘラミガキ	
4 （SB18）	杯	13 × ×	茶褐色、良好、全面ヘラミガキ、口縁部内外面に溝付着	体部¼
5 （SB37）	杯	12.4 × 3.8 × 6	淡黄褐色（黒斑有り）、不良、？－？－底部全面手持ちヘラケズリ	¼
6 （SB40）	杯	14.7 × × 9.8	暗褐色、石英・雲母、不良、？－R－底部回転ヘラケズリ	⅓
7 （SB2）	杯	13.7 × 5.1 × 6.5	茶褐色（体部下半黒色）、良好、？－R－体部下端および底部全面、手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキ	⅓
8 （SB47）	杯	12.9 × 4.3 × 5.5	淡黄褐色、良好、回転糸切り－R－体部下端および底部全面手持ちヘラケズリ	⅓
9 （SB37）	高台付椀	× ×	黄白色（内面黒色）、不良、？－？－底部回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	口縁部および脚部 3/10 欠失、黒色処理
10 （SB18）	ミニチュア	6.6 × 1.5 × 3.5	茶褐色、良好、回転糸切り－R－無調整	½

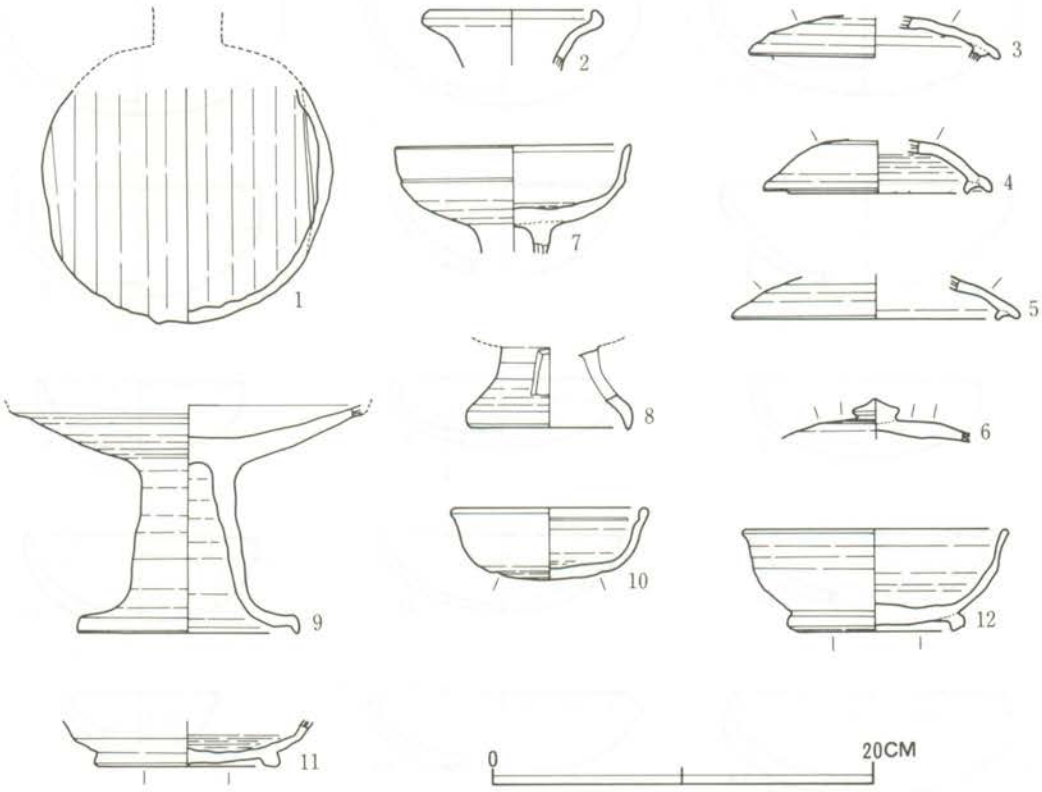


第511図　掘立柱建物跡出土土製勾玉実測図（1/2）



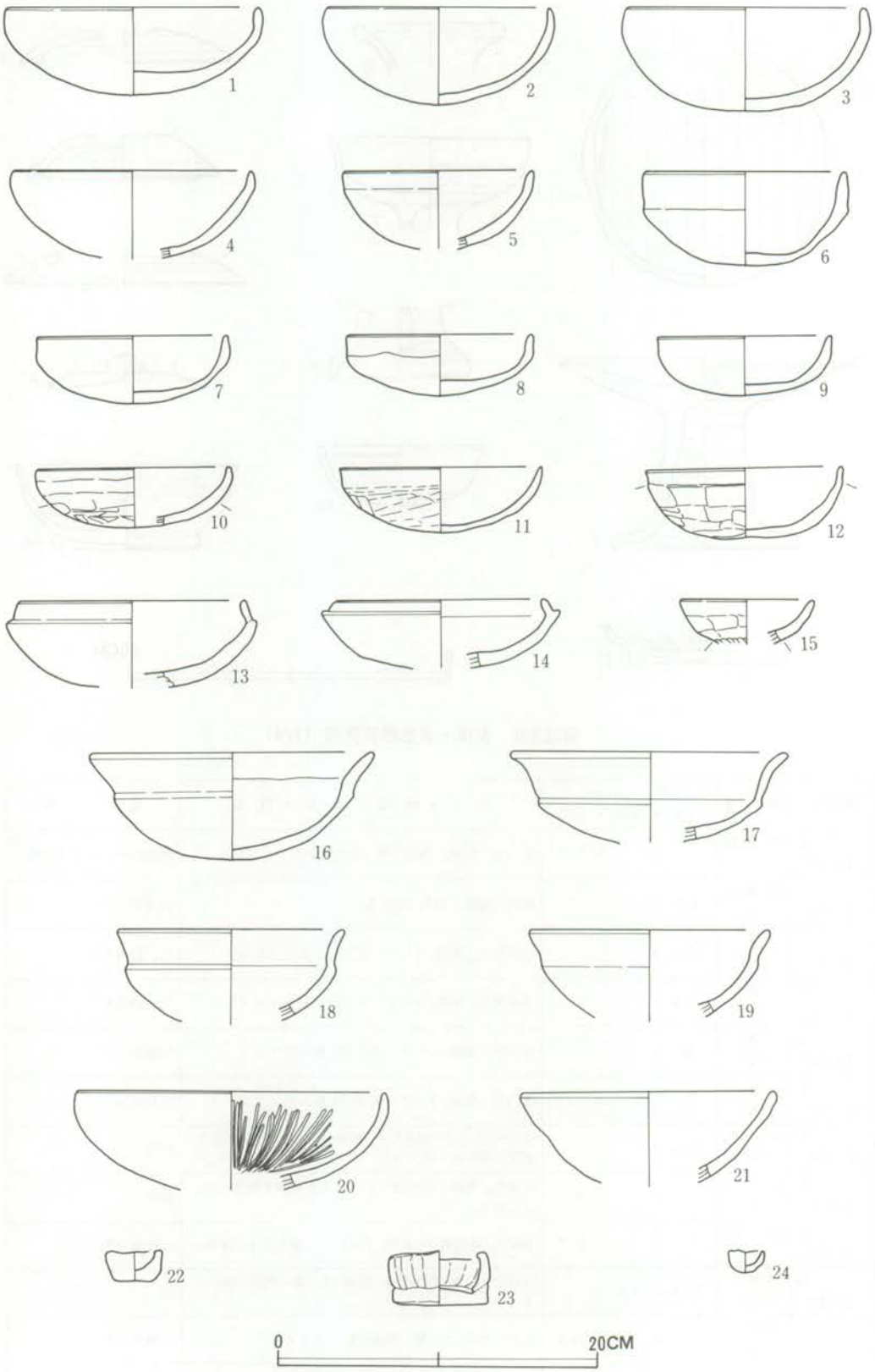
第512図　墨書土器実測図（1/4）

遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1	杯	×　× 6.2	淡茶褐色、良好、回転糸切り－R－内面ヘラミガキ	底部のみ、墨書「ひ」
2	高台付杯	×　× 7.6	黄褐色、良好、？－？－底部手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキ	墨書「三」
3	杯	×　×	杯底部外面	底部破片、墨書「？」
4	皿　？	×　×	口縁部外面	口縁部破片、墨書「？」
5	高台付椀	×　×	杯底部破片	墨書「？」

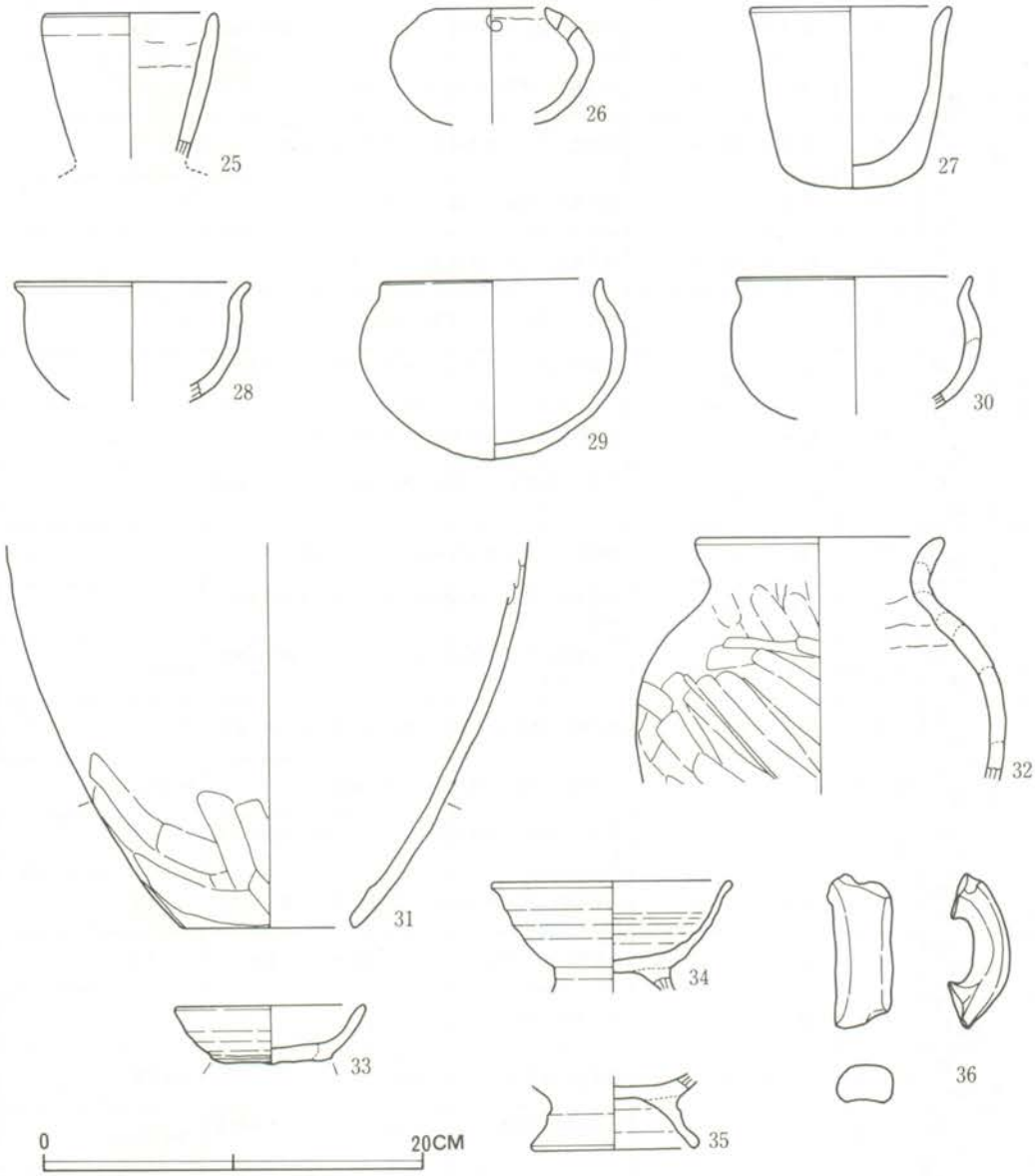


第513図　表採・須恵器実測図（1/4）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備考
1 (C－17)	長頸瓶 (S)	× ×	灰白色、堅緻、外面に厚く自然釉がかかっている	胴部のみ、フラスコ形
2 (C－18)	長頸瓶 (S)	8.8 × ×	灰色、堅緻、内外に降灰有り	口縁部のみ
3 (F－8)	蓋 (S)	13.2 × ×	淡灰褐色、堅緻、？－？－天井部回転ヘラケズリ	⅙、鈕欠失
4 (C－7)	蓋 (S)	11.8 × ×	淡灰褐色、堅緻、？－？－天井部回転ヘラケズリ	¼、鈕欠失
5 (D－16)	蓋 (S)	15 × ×	灰白色、堅緻、？－？－天井部回転ヘラケズリ	口縁部⅓
6 (C－16)	蓋 (S)	× ×	灰白色、堅緻、？－？－天井部回転ヘラケズリ	天井部¼
7 (C－18)	高杯 (S)	12.3 × ×	淡暗灰色、長石・黒色粒子、堅緻、？－L－杯体部上半、脚部外面回転ヘラケズリ	杯部½
8 (C－16)	高杯 (S)	× × 8.5	灰黒色、堅緻、方形透しが3孔入る短脚1段透しのものである。	脚部¼
9 (F－10)	高杯 (S)	× × 11.7	黄白色、赤色粒子、良好、？－R－丁寧なヨコナデのみ	口縁部欠失
10 (C－16)	杯 (S)	10.4 × 3.6 ×	灰白色、長石・黒色粒子、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	⅔
11	高台付杯 (S)	× × 11.9	白色、不良、？－R－底部回転ヘラケズリ	口縁部欠失
12	高台付杯 (S)	13.8 × 5.2 ×	灰褐色、長石、堅緻、？－R－底部回転ヘラケズリ	⅚



第514図　表採・土師器実測図 ①（1/4）

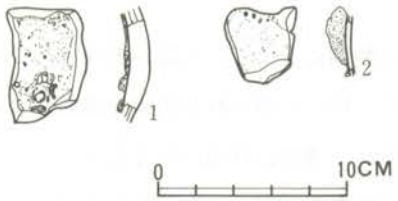


第515図　表採・土師器実測図 ②（1/4）

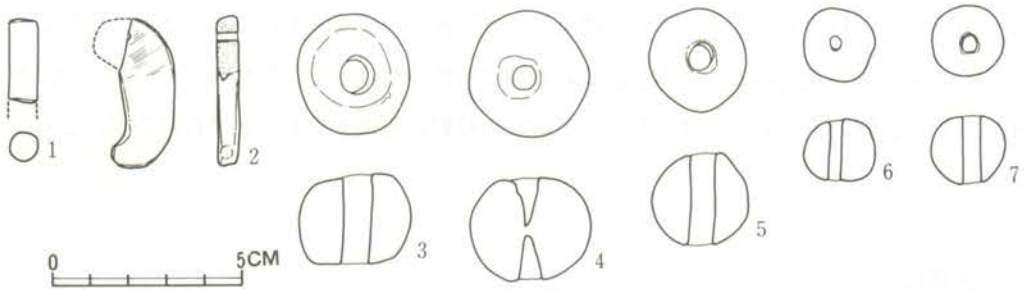
遺物番号	器　種	法　量(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・調整・特徴	備　考
1 (B−12)	杯	15.6 × 5.3 ×	黄褐色(黒斑有り)、良、体部外面へラミガキ、体部内面ナデ調整	⅓、赤彩
2 (C−15)	杯	14 × 6 ×	茶褐色（黒斑有り）、良、体部内外面ともにナデ調整	⅓
3 (E−13)	杯	14.5 × 6.3 ×	明茶褐色、赤色粒子、良好、外面へラミガキ、体部内面ナデ調整	⅓、赤彩

4 (C－14)	杯	14.4 × 5.3 ×	明褐色、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	⅔、赤彩
5 (C－18)	杯	12 × ×	暗茶褐色（黒斑有り）、良好、全面ヘラミガキ	¼
6 (C－15)	杯	12.6 × 5.6 ×	暗褐色、不良、体部外面および内面ナデ調整	⅔
7 (C－18)	杯	11.8 × 4 ×	暗茶褐色、堅緻、全面ヘラミガキ	⅔
8 (C－18)	杯	11.7 × 3.7 ×	暗茶褐色、良好、体部外面ヘラミガキ	⅔
9 (C－18)	杯	10.8 × 3.5 ×	茶褐色（黒斑有り）、良好、全面ヘラミガキ	½
10 (C－18)	杯	12 × 3.6 ×	暗褐色、良、ヘラケズリの後体部外面上半～内面ヘラミガキ	¼
11 (C－18)	杯	12.6 × 4 ×	茶褐色、良好、ヘラケズリの後全面ヘラミガキ	¼
12 (E－12)	杯	12.2 × 4.2 ×	黄褐色(黒斑有り)、不良、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	½
13 (C－17)	杯	14 × 5.2 ×	暗褐色、不良、体部内外面ともにナデ調整	⅔
14 (C－18)	杯	13 × 4.1 ×	淡茶褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	¼
15 (C－18)	高　杯	8.3 × ×	明茶褐色、良好、体部外面ヘラケズリ、口縁部～内面ヘラミガキ	杯部⅗
16 (C－15)	杯	17.6 × 6.7 ×	暗茶褐色(黒斑有り)、良、体部内外面ともにナデ調整	⅚
17 (B－17)	高　杯	17.3 × ×	淡茶褐色、良好、体部内外面ナデ調整	杯部⅚、赤彩
18 (C－18)	高　杯	14 × ×	茶褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	½
19 (表)	杯	14.9 × ×	淡黄褐色、良、体部外面ナデ調整、体部内面ヘラナデ	½、赤彩
20 (C－14)	杯	19 × ×	茶褐色、良、外面ヘラミガキ、体部内面ナデ調整	½、赤彩
21 (道A)	杯	16 × ×	暗茶褐色、良好、全面ヘラミガキ	¼
22 (E－10)	手　捏	× 1.8 ×	明褐色（黒斑有り）、良、指ナデ	ほぼ完形
23 (F－8)	手　捏	× 3.4 ×	暗黄褐色(内面黒色)、不良、指ナデ、底部に木葉痕を残す	口縁部¼欠
24 (C－16)	手　捏	× 1.3 ×	淡黄褐色、良、指ナデ	ほぼ完形
25 (C－14)	坩	9 × ×	淡黄褐色、良、口縁部外面および口縁部内面下半ナデ調整	口縁部⅓、赤彩
26 (道A)	有孔無頸壺	5.8 × ×	暗茶褐色、良、内外面ともにナデ調整	⅔
27 (C－17)	鉢	10.5 × 9.3 ×	明褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、底部および体部内面ナデ調整	¾
28 (C－18)	椀	12.3 × ×	淡黄褐色(黒斑有り)、良、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	¼、赤彩
29 (道A)	壺	10.6 × 9.2 ×	黄褐色(内面茶褐色)、良、外面および体部内面ナデ調整	½
30 (C－14)	甕	12.3 × ×	赤褐色、良好、体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ	¼
31 (B－17)	甑	× × 9	茶褐色(黒斑有り)、良、外面ヘラケズリの後ナデ調整、内面ヘラナデ	胴下半½

32 (C－15)	甕	13 × ×	暗黄褐色、黒色粒子、良、体部内外面ともヘラケズリ	¼
33 (C－15)	杯	10 × 2.8 × 6.4	黄褐色、不良、回転ヘラ切り－R－無調整	½
34 (道C)	高台付椀	12.8 × ×	暗黄褐色、不良、？－R－無調整、杯内面に重ね焼きの痕跡が残る	¼
35 (道C)	高台付椀	× ×(8.8)	黄褐色、良、？－？－？	底部のみ
36	把　手	× ×	茶色、良好、内側ナデ調整外側ヘラミガキ	



第516図　銅滓付着須恵器実測図（1/4）



第517図　表採・石製品・土玉実測図（1/2）

第4節　結　　語

以上が大畑Ⅰ遺跡の発掘調査の概要である。大畑Ⅰ遺跡の発掘調査は足かけ3年に及び、面積に比して非常に多くの遺構が重複した大複合遺跡である事が判明した特に古墳時代後期の大集落と奈良時代の掘立柱建物群の切り替わりが鮮やかな対比を見せ、官衙の成立する過程が具体的にわかる好材料として、非常に興味ある問題をいくつか提起している。以下、時代別に要点を述べて結語としたい。

1．先土器時代について

先土器時代の遺物が出土した成田安食線関係の3ケ所のうちで、本跡は一番まとまった出土数を示している。それにしても礫を含めても147点と少ない。しかし、これは一番集中していたと思われる地点に奈良時代の掘立柱建物が密集して建てられたために、かなりの数がすでに攪乱されていたと思われる。ここでの出土層位は第Ⅲ層上面であり、石材はメノウ、安山岩であり、前原Ⅰ遺跡と共通するものである。また石器もナイフ形石器が1点ときわめて少なく、それに比して石核が多いのも共通している。先土器時代最終末の所産であろう。

2．縄文時代について

縄文時代の遺物は早期から晩期にかけての土器が表採されている。また、土錘、石器も同時に表採されているが、それらに伴うと思われる明確な遺構はない。大畑Ⅰ遺跡における縄文時代の遺構は炉穴と陥穴であるが、遺物の伴出はほとんどない。この縄文時代の遺構は調査区の西側に集中している。特に南側の印旛沼より入ってくる浅い谷の緩斜面にそって分布している所に特長がある。陥穴は特にこの緩斜面に直交するように規則正しく配置されていたと思われる。炉穴は大きく7グループに分かれて分布している。このグループも大小の差はあるが、それぞれ間隔をあけて弧状に分布している。ここの遺構からは遺物が伴出していないが、池上りⅠ・Ⅱ遺跡と同様のものであるので、縄文時代早期後半の所産のものであると考えて差しつかえないであろう。陥穴の方であるが、これも縄文時代早期の所産と思われるが、炉穴の分布と重なるため、同時期のものとは思われず、炉穴の時期に前後するものと思われるが、どちらなのかは不明である。

3．古墳について

大畑Ⅰ遺跡の発掘調査によって、東側から円墳が2基検出された。これは竜角寺7号墳、112号墳と名付けた。いずれも墳丘は削平されてしまっていたため、周堀のみの検出にとどまった。特に112号墳は周堀もほんの1部のみの検出のために規模等について不明な点が多い。しかし、112号墳は埴輪をもっている古墳であるために、古墳群の中にあっても有力なものの1つであったと思われる。そして、この112号墳が古墳群の一番西側に位置するものであり、集落に一番接していた古墳である。

ちなみに、現在のところ竜角寺古墳群は総数112基になっているが、大畑Ⅰ遺跡の発掘調査の所見により、この総数を訂正しておきたい。3号墳と呼ばれていた円墳は実は古墳ではなく、塚である。つまり、大畑Ⅰ遺跡の調査範囲がこの3号墳に接していたのであるが、古墳としての周堀、墳丘の痕跡を認める事ができなかった事、そして、これが一番大きな点であるが、同時期の集落の中に古墳を築造するような事はしないであろうという事である。これは、成田安

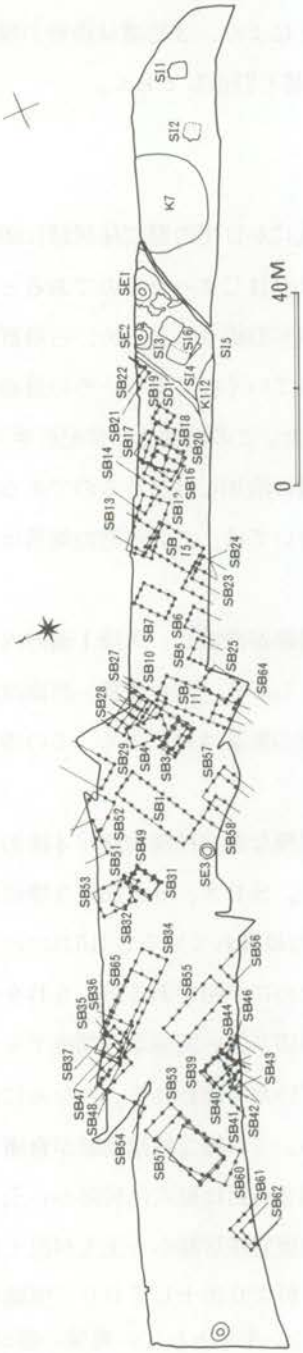
食線の発掘調査によって明らかにされた事であるが、生活空間と墓域は各時代にあっても厳密に守られているという事によってもうなづける。以上のことにより、３号墳は後世の塚であると考えておく。そして、竜角寺古墳群は現在のところ、111基と訂正しておく。

４．古墳時代集落について

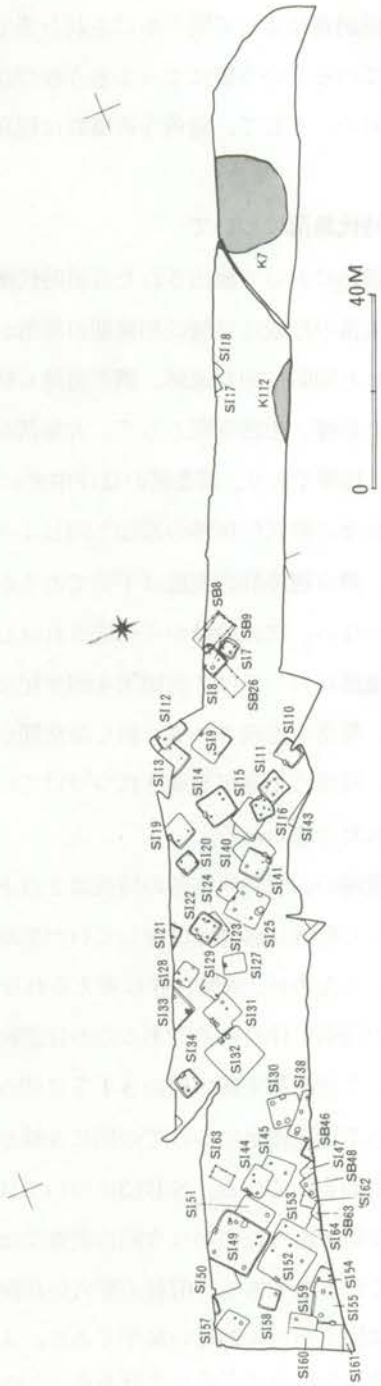
大畑Ⅰ遺跡において検出された古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴住居跡は60軒である。この集落の形成は東側の和泉期の集落が移動した事によりはじまったものであると考えられる。それと同時に向台遺跡、酒直遺跡も軌を一にして集落が形成されはじめ、古墳群より西側の地域は以後、生活空間として、大集落が連綿と形成されていくのである。その最初の段階はＳＩ９、16等であり、調査区のほぼ中央に形成されはじめた。この時期は６世紀前半である。そして、徐々に竪穴住居跡の増加と同じように古墳群も急激に増加しはじめるのである。現在のところ、酒直遺跡群の実態は不明であるが、向台遺跡においては、この段階の集落はまだ形成されていない。次の段階から形成されはじめる。

大畑Ⅰ遺跡においては７世紀第４四半紀になると竪穴住居跡が激減し、大畑Ⅰ遺跡内においては以後、集落が形成されず、新たな空間が出現してくる。しかし、向台遺跡、酒直遺跡群においては、同様に集落が形成されつづけている。大畑Ⅰ遺跡の集落はおそらく、この周辺に分散させられたと思われる。

大畑Ⅰ遺跡の古墳時代集落の特長は２点ある。１点は小規模な掘立柱建物跡が４棟あり、集落内において竪穴住居跡と併存していた事が明確な事である。ＳＢ８、９、26の３棟は重複、隣接しているために、同時存在は考えられない。また、１棟だけ離れているＳＢ63についても、集落のどの段階に伴うものであるのかは遺物の出土がないために不明であるが、ＳＢ９はＳＩ８を切り、７世紀第４四半紀のＳＩ７に切られている。この切り合い関係から類推すると６世紀中葉から７世紀後半にかけての間に３棟が１棟づつ建っていたと思われる。ちなみにＳＢ９はＳＢ８に切られている。ＳＢ63については不明な点が多い。この掘立柱建物跡が倉庫であったのか、住居であったのかは今回の調査では不明である。第２点目は竪穴住居跡から土玉が多く出土している事である。67軒の竪穴住居跡のうち、25軒の竪穴住居跡から土玉が出土している。これは出土率が４割近い高率である。また、紡錘車が６軒より出土しており、機織り関係の石製模造品を出土するのも２軒ある。このように見てみると、生業としての農業の影が薄く、漁業、機織りが中心であるように思えてくる。この傾向は向台遺跡においても同様である。このように農業主体でない生産体制をとっていた事により、この地が急速に発展した土台であるのかもしれない。ちなみに、ＳＩ28から出土した石製紡錘車の側面に「奈」という字が小さく10文字、縦に刻書されている。この竪穴住居跡は７世紀中葉の時期であるため、千葉県内においては最古の文字資料となる。このように新しい文物をいち早く取り入れる気風は、先の生産



第519図　大畑Ⅰ遺跡歴史時代遺構配置図(1/1,600)



第518図　大畑Ⅰ遺跡古墳時代遺構配置図（1/1,600）

体制によるところが大きいのではないだろうか。そして、最終的には竜角寺の造営にいたるのであろう。

５．掘立柱建物跡について

大畑Ⅰ遺跡において一番注目されるのは65棟の掘立柱建物跡の存在である。このうち、規模の小さい４棟は古墳時代後期のものであるが、規模の大きい他の61棟は飛鳥時代から奈良時代のものである。これらの掘立柱建物跡は重複関係の激しい個所と重複のない所があるが、57年度調査区のほぼ全域に分布している。大畑Ⅰ遺跡における掘立柱建物跡の特長は梁行が３間のものが大部分である。また柱間寸法は1.8m（６尺）～2.1m（７尺）と少し狭いものである。そして、棟方向は南北軸に対して、それぞれが45°前後東西に振れている事である。

掘立柱建物跡は切り合い関係、棟方向等により、大きく５期に分けることができる。しかし、調査範囲が狭いため、建物配置の全体を把めないため、切り合い関係のない所はまちがいがあるかもしれない。特に東西では200m近い広がりがあるため、同時存在を認定するのに難しさを感じる。また、それぞれの時期であるが、掘立柱建物跡に伴う遺物はきわめて少ないために、時期決定はすべての時期に対して行なわれるものではない。今後の周辺の調査等により補正されていくものである。

第Ⅰ期

集落としての竪穴住居が大畑Ⅰ遺跡から姿を消し、掘立柱建物が建ちはじめる時期である。ＳＢ４、14、20、23、33、51がこの時期のものである。この時期はまだ規模の小さいもので、また、建物配置にも規格性が強く見られない。

第Ⅱ期

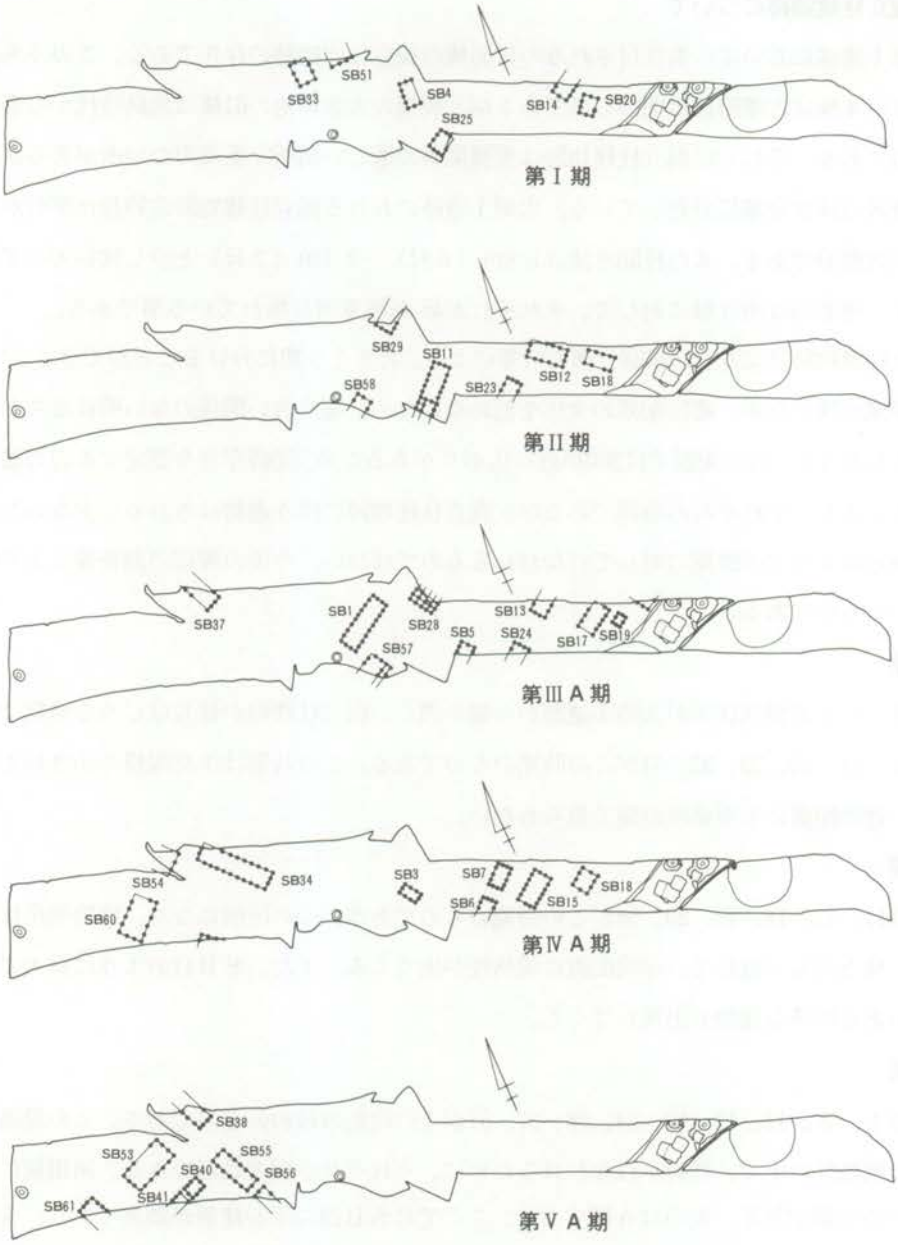
ＳＢ11、12、18、22、29、58がこの時期のものである。この段階になり、建物規模は大きくなり、棟方向も一致して、建物配置に規格性が出てくる。また、ＳＢ11のように長大で、間仕切りのある特殊な建物も出現してくる。

第Ⅲ期

ＳＢ１、５、13、17、19、24、28、37、57がこの時期の最初のものである。この段階から、一定の規格性の中で、建替が行なわれるために、それぞれ小期を設定できる。第Ⅲ期においては４つの小期がある。先のはＡ期である。ここではＳＢ28の所が建替が顕著であり、ＳＢ28→ＳＢ27→ＳＢ10→ＳＢ30となり、それぞれＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ小期になる。第Ⅲ期になると掘立柱建物は西側にも建ちはじめ、空間が大きくなる。また、ＳＢ１のように非常に大形の建物や、ＳＢ28のような総柱式のもの、ＳＢ57のように廂付のものなどがでてくる。このようにバラエティーのある建物が出るのはこの第ⅢＡ期の特徴である。

第Ⅳ期

この時期は２つの小期がある。Ａ期はＳＢ３、６、７、15、18、34、45、54、60であり、全期間を通じて一番広がりをもっている段階である。また、ＳＢ34のように大畑Ⅰ遺跡最大の建物も出現してくる。第Ⅱ、Ⅲ期は一番大きな建物は調査区の中央であったが、この段階から西



第520図　大畑Ⅰ遺跡歴史時代主要遺構変遷図

側へ移っている。Ｂ期はＳＢ34の建替であるＳＢ65、ＳＢ３の建替であるＳＢ２を含めた段階である。

第Ｖ期

この段階になると建物は調査区の西側だけになってくるが、非常に規格性のある建物配置をとっている。この段階も２つの小期がある。Ａ期はＳＢ38、40、41、53、55、56、61で、すべて柱筋をそろえて建てられており、大畑Ｉ遺跡において、一番規格性のある建物配置をとっている段階である。Ｂ期はＳＢ61の建替であるＳＢ62を含めた段階である。

以上が掘立柱建物跡の主要なものについての時期別の概要である。それではこの時期はどのようになるであろうか。掘立柱建物跡の掘方内から確実に伴うものとして出土した土器はきわめて少なく、ＳＢ１とＳＢ28から出土したものだけである。両者は同じ段階のものであるため、良好な資料であるＳＢ28出土の土器を考える。これは畿内から搬入された土師器の杯ＡＩであり、平城宮Ｉに比定されるものである。ＳＢ28の掘方覆土内に混入されている事は平城宮Ｉの次の年代になる事を示している。そこで、この第Ⅲ期を８世紀中葉に位置付け、それぞれの時期を20～25年で割りふると以下のようになる。

第Ｉ期 …… ７世紀第４四半紀

第Ⅱ期 …… ８世紀第１四半紀

第Ⅲ期 …… ８世紀第２四半紀

第Ⅳ期 …… ８世紀第３四半紀

第Ｖ期 …… ８世紀第４四半紀

以上の年代観の補強としては、東側に位置する井戸の前に重複した４軒の竪穴住居跡の変遷とも一致し、また、掘立柱建物の耐用年数もこれらに近いものであろう。

６．埴生郡衙としての大畑Ｉ遺跡

以上の事、および向台遺跡の谷出土の遺物を考慮すると、地方官衙としてしか考えられないものである。とすると下総国埴生郡衙の有力な推定地と考えてまちがいないであろう。最後に現在判明している範囲で埴生郡衙の構造について簡単に述べておわりとしたい。

大畑Ｉ遺跡の調査によって、東西の範囲はおさえられた。つまり、東側は井戸のＳＥ１から、西側はＳＢ62までの範囲である。この範囲は約200mである。南側は印旛沼からの谷が入ってくるために、調査区からそれほどはのびない。北側は50～100m離れた地点を大畑Ｉ－２遺跡として調査したところ、同様に掘立柱建物跡が見られるため、さらに北にのびる可能性があるが、それほどにはのびないと思われる。東西の200mを南北にとると前方後円墳を含む古墳３基を中に入れてしまうことになって、多少の無理がある。これは東端においても古墳を境界にしてはいるが、中に入れていない事を考え合わせての事である。そうすれば、南北の範囲は150～180mであろうと思われる。

掘立柱建物跡は東側においてはＳＤ１に区画され、ＳＤ１より西側に建てられている。ただ

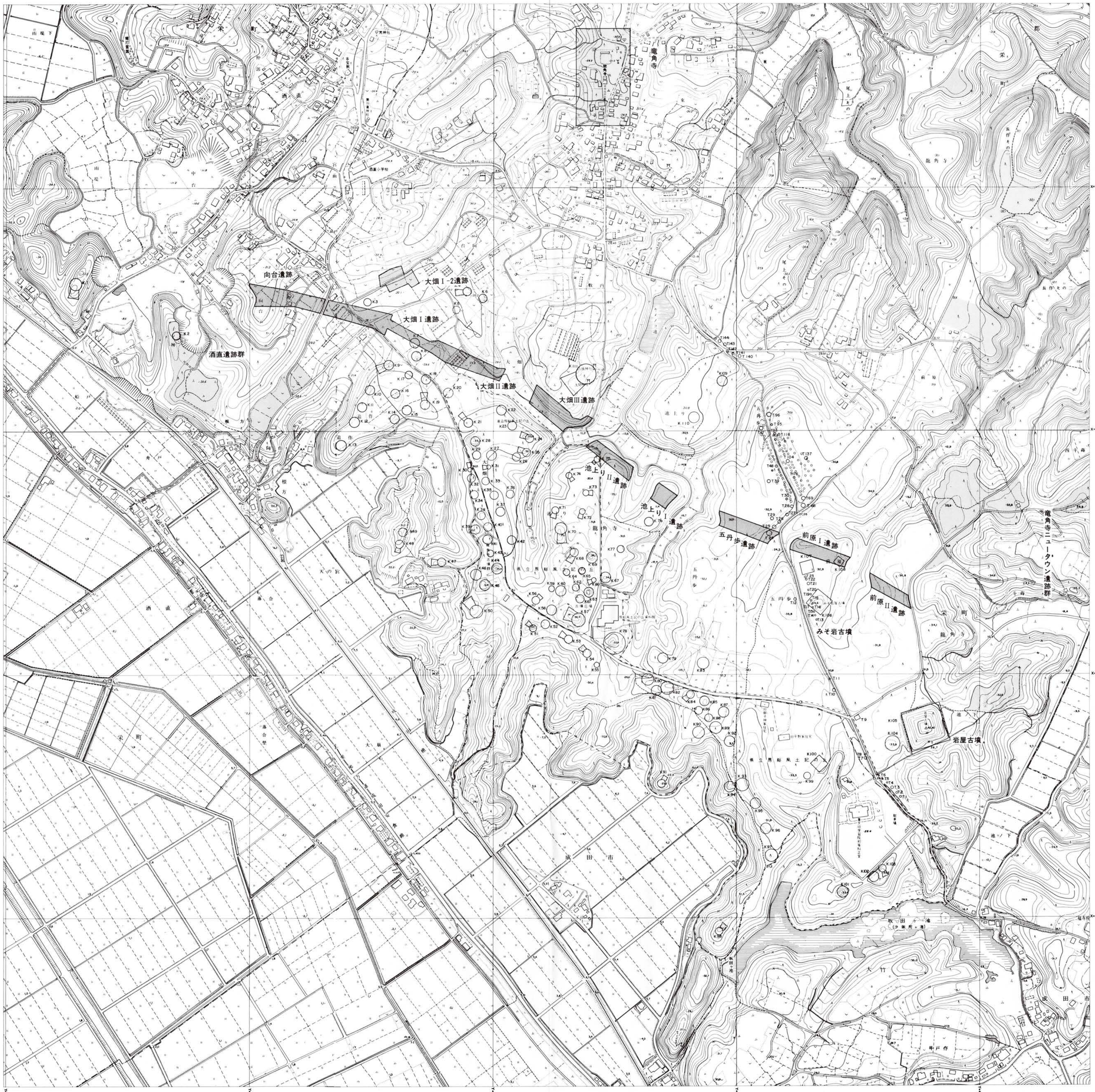
し、西側においては区画する溝はない。向台遺跡との間の谷を利用しただけかもしれない。ＳＤ１は112号墳の周堀に接続させて、112号墳そのものも区画施設として利用したようである。ＳＤ１の東側には井戸が２基と竪穴住居跡が４軒重複して存在している。そして、この井戸の東側には７号墳が隣接している。この井戸と竪穴住居跡は官衙に伴う特殊な施設なのであろう。当初は１基であった井戸も後に２基になるが、竪穴住居跡は常に１軒で４回の建替を行なっている。この竪穴住居の４回の建替は第II期から第Ｖ期に対応するものである。

調査範囲内においては郡衙における主要な施設である政庁、正倉は見あたらない。また大畑Ｉ－２遺跡の調査において、「厨」と書かれた墨書土器が２点出土しており、厨は北側にあるようである。また、「玉作」とヘラ書きされた文字瓦も大畑Ｉ－２遺跡から出土しており、向台遺跡の谷からも少量ではあるが瓦が出土している事、また、軒丸瓦と軒平瓦の破片が表採されている事を考えあわすと瓦葺きの建物も何棟かはあったと思われる。ちなみに、軒丸瓦は単弁８葉のものであるが竜角寺所用瓦とは違うものである。また、「玉作」銘文字瓦も竜角寺所用瓦とは違うものである。大畑Ｉ遺跡において出土している瓦は８世紀前半のものであり、向台遺跡の谷出土のものとも違うものである。特に西側の地区に後半、大形の建物が継続して建てられているのは政庁の近くである可能性が高いと思われる。またこの地区がこの周辺でも一番高地点である事も条件としてはよい。

第Ｉ期が官衙の成立であると考えると、これは郡衙ではなくて評衙の段階のものになってくる。それは第II期とは質的に大きな変化を見せている事からもうなづけるところである。第Ｖ期が８世紀第４四半紀という年代とすれば、９世紀のはじめちかくには、この地の郡衙は廃絶してしまっている。これは一体どういう事であろうか。新しい地に移ったとしても、この地のかっての郡衛の空間は保たれていたようである。この地に竪穴住居が進入できずに、周辺に営まれていることからもうなづけるのである。このように見てみるとこの周辺は７世紀から９世紀にかけてかなり大きな政治的変動の波を何回もかぶった所である事がよくわかる。そして、それがよく考古学的事象に反映されているきわめて珍しい地域である事を再確認できた。

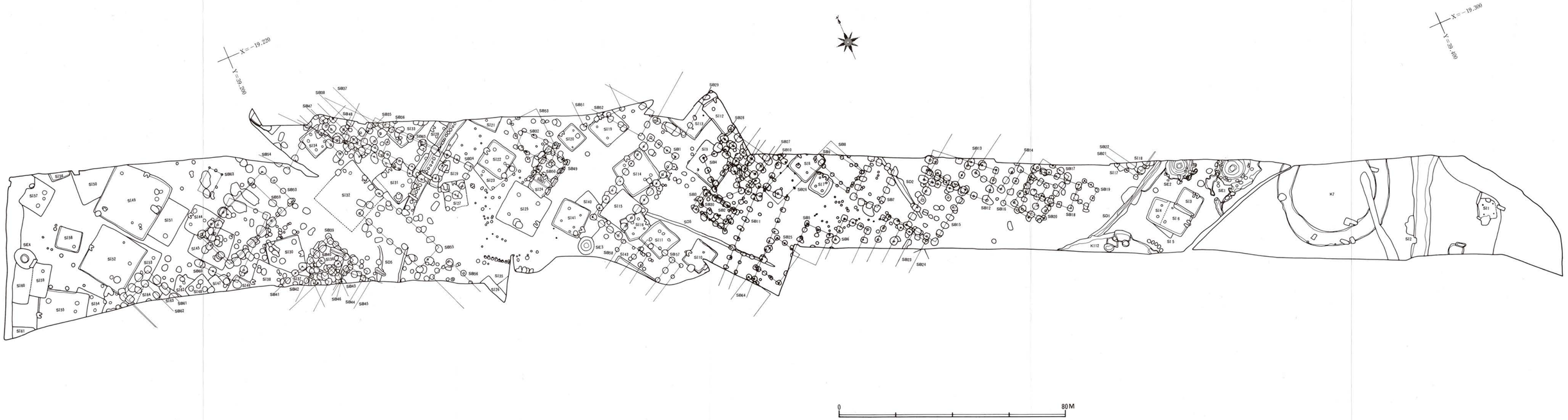
付図１　成田安食線関係周辺地形図及び調査地点

昭和五十七年三月



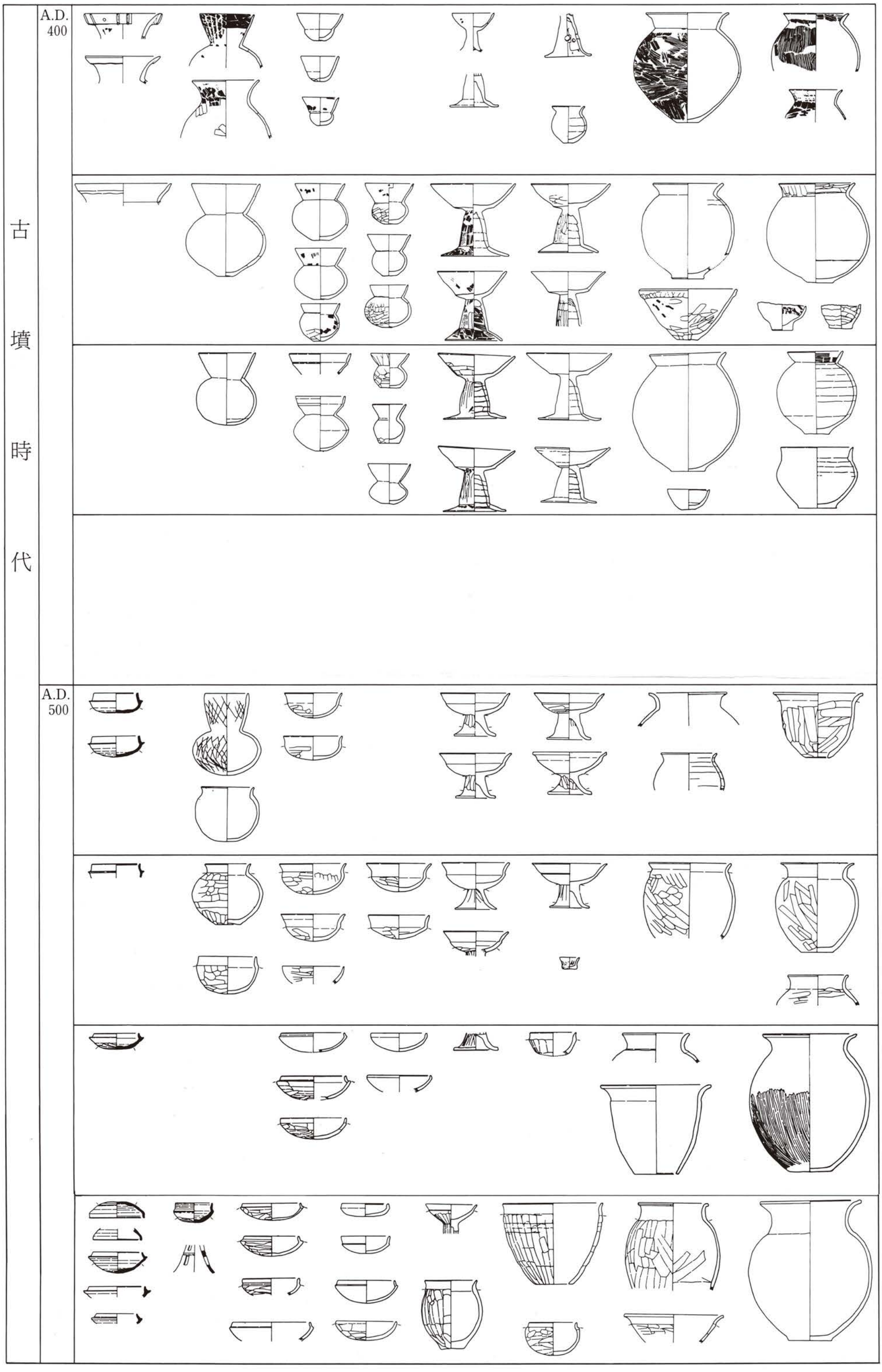
1：5,000

千葉県教育庁文化課提供

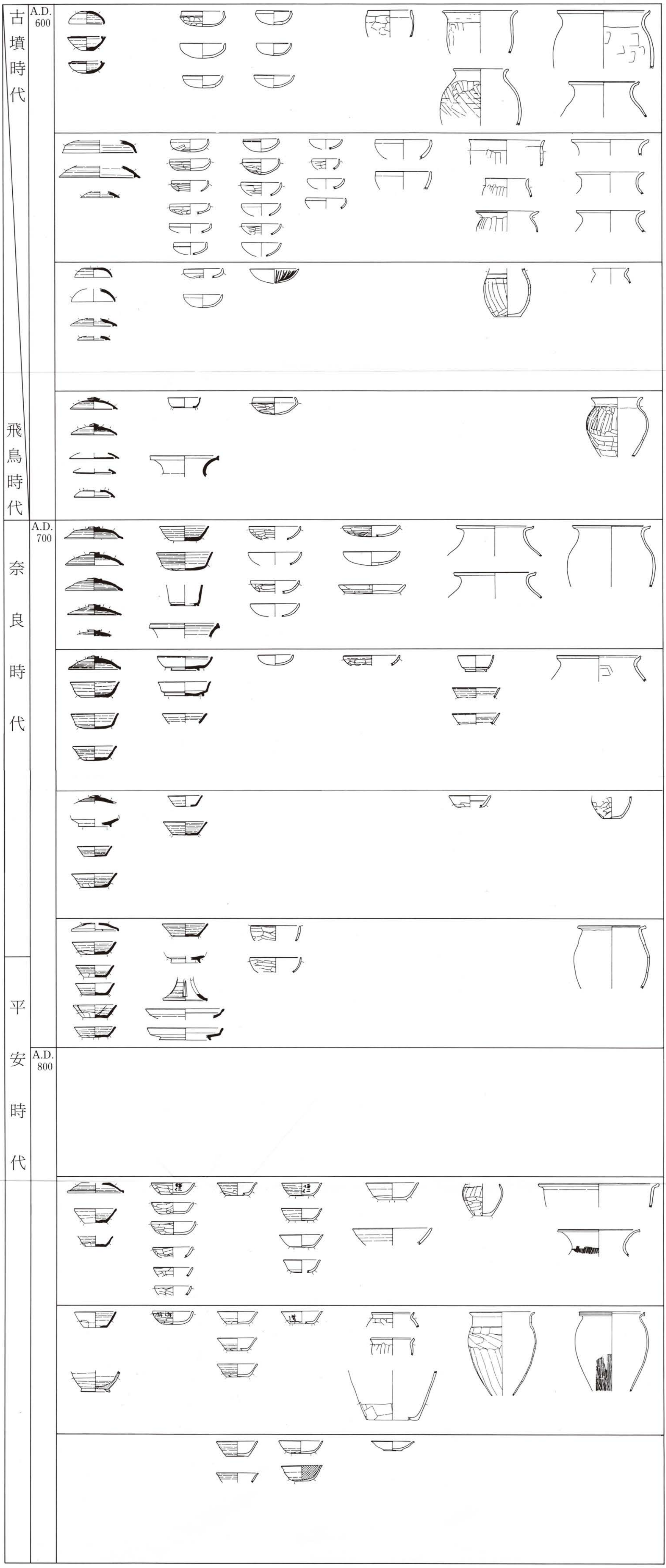


付図２　大畑１遺跡遺構配置図（1/800）

付図３－１図　成田安食線関係土器変遷図 ①　縮尺 1/8



付図３－２図　成田安食線関係土器変遷図 ②　縮尺 1/8



昭和60年３月25日　印刷
昭和60年３月30日　発行

主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書

発行　千　葉　県　土　木　部
千葉市市場町１－１

財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城２－10－１
電 話 0472(25)6478

印刷　株式会社　弘　文　社
市川市市川南２－７－２
電 話 0473(24)5977

成田安食線道路改良工事地内遺跡本文正誤表

頁	行	誤	正
背表紙		主要地方道成田安食線道跡	主要地方道成田安食線道路
		別表・遺跡番号新旧対照表	別表・遺構番号新旧対照表
9	22	八葉単弁	単弁八葉
30	25	第1表	第3表
32	1	第3表	第4表
	2	第3表	第4表
35	32	第4表	第5表
124	31	擢鉢状	擂鉢状
134	11	擢鉢状	擂鉢状
150	3.4	底部から土している。その大部分は土器で本報告書の分類でいう第Ⅰ群土器から第Ⅶ群土器の出。	底部から同じような開き具合で開口する形になると思われる。平口縁で復元径は19cmを測る
153	11	擢鉢状	擂鉢状
169	28	斜行子状	斜格子状
189	3	半分会以下なって	半分以下となって
199	12	擢鉢状	擂鉢状
247	10	稀少させ	稀少さと
247	第8表一番下	緑泥片岩？	流紋岩？
255	27	擢鉢状	擂鉢状
268	表11	高台付盤	高台付皿
284	3	擢鉢状	擂鉢状
287	17	現在部分	現存部分
312	12	擢鉢状	擂鉢状
315	28	擢鉢状	擂鉢状
330	2	数時間	数期間
354	30	堅緻	堅緻
365 〜 374		第279図 〜 第285図	第279図の真中の310が311になり，以下すべて番号が1づつくり下がる。そして、最後が352になる。
428	26	堀方覆上中	堀方覆土中
432	表	F—10—6図の炎作土	耕作土
452	21	擢鉢状	擂鉢状
480	1	「サ」	「廾」

頁	行	誤	正
487	1	直線であるが	直線的であるが
503	12	擢鉢状	擂鉢状
509	31	擢鉢状	擂鉢状
515	6	擢鉢状	擂鉢状
519	5	擢鉢状	擂鉢状
522	24	擢鉢状	擂鉢状
526	30	口（ちきり）	滕（ちきり）
547	4	擢鉢状	擂鉢状
584	31	擢鉢状	擂鉢状
588	33	圏足硯	圏足円面硯
605	3	須恵器杯A，杯B各1点	須恵器杯A 2点
650	21	郡衛	郡衙

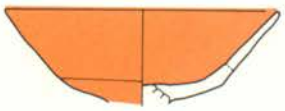
次の模式図を貼ってください。

P．327　SB 8

P．608　SB 9

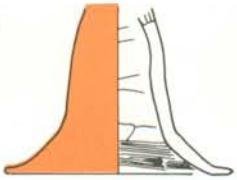
P．634　SB 64

P．634　SB 65

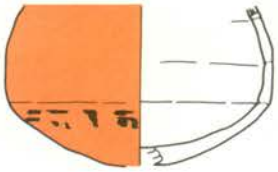


第42図－5

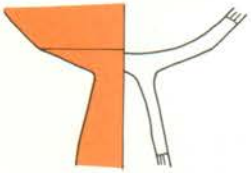
第42図－6



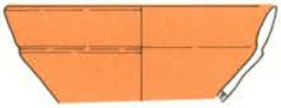
第42図－8



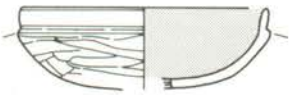
第42図－9



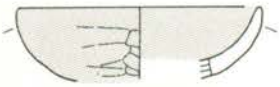
第73図－7



第85図－9



第219図－6



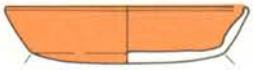
第220図－33

第220図－49

第249図－2

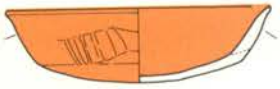
第259図－9

第259図－12

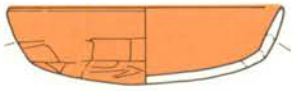


第259図－13

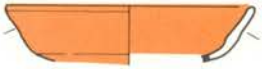
第259図－16



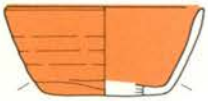
第260図－20



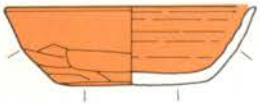
第260図－33



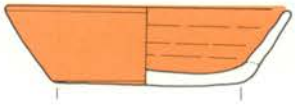
第260図－39



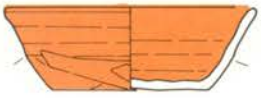
第261図－42



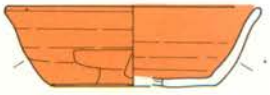
第261図－44



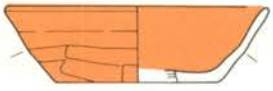
第261図－46



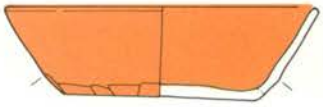
第261図－47



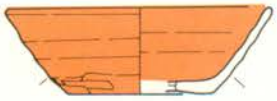
第261図－48

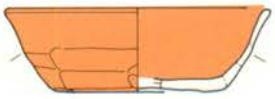


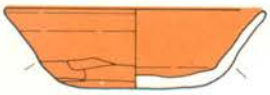
第261図－49

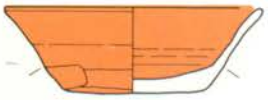


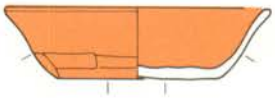
第261図－50

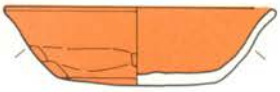

第261図－52

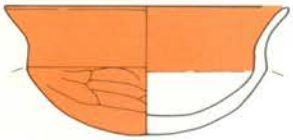

第261図－53

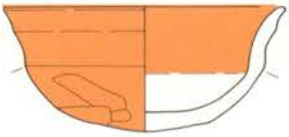

第261図－54

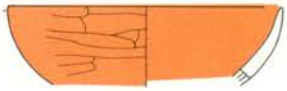

第261図－55

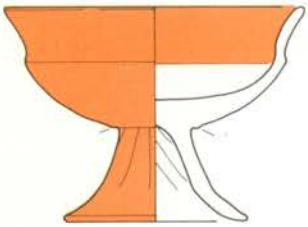

第261図－56

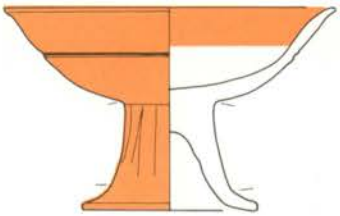

第261図－57


第331図－ 4

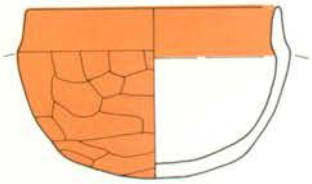

第331図－ 5


第331図－ 6


第331図－ 7

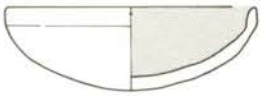

第331図－ 8

第331図－11

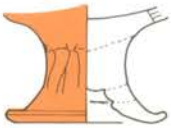

第331図－12

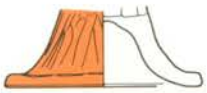
第340図－ 3

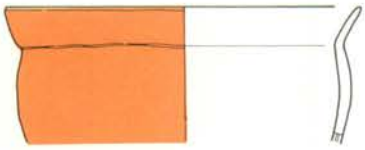
第377図－ 3


第398図－ 2

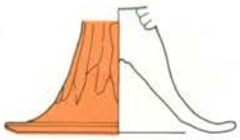
第388図－ 6


第394図－ 6

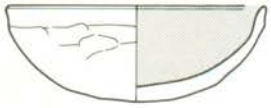

第398図－ 8



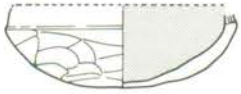
第404図－6



第420図－20

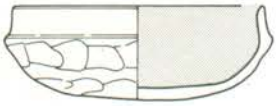


第425図－1

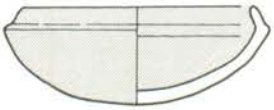


第425図－4

第429図－3

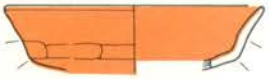


第433図－4

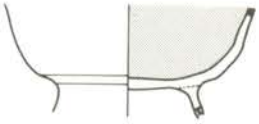


第436図－3

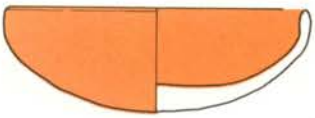
第459図－2



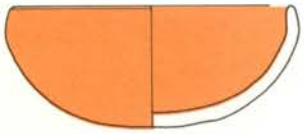
第465図－6



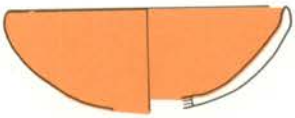
第510図－9



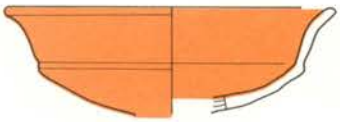
第514図－1



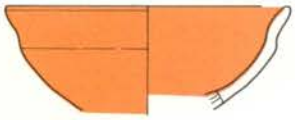
第514図－3



第514図－4



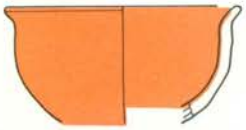
第514図－17



第514図－19

第514図－20

第515図－25



第515図－28

主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書

—図　版—

1 9 8 5

千　葉　県　土　木　部
財団法人　千葉県文化財センター

主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書

—図　版—

1 9 8 5

千　葉　県　土　木　部
財団法人　千葉県文化財センター

図版目次

PL 1　周辺地形航空写真、手前は岩屋古墳（南東より）

PL 2　1．周辺地形航空写真、手前は発掘前の大畑Ⅰ遺跡（南西より）
　　2．周辺地形航空写真、上方は印旛沼（北より）

PL 3　1．航空写真、遺跡全景（上方は岩屋古墳）北西より
　　2．航空写真、遺跡全景（東より）

PL 4　1．第1号住居跡遺物出土状態（南より）
　　2．第1号住居跡（南より）

PL 5　1．第2号住居跡（南西より）
　　2．第3号住居跡（南より）
　　3．第5号住居跡（北より）

PL 6　1．第4号住居跡（南より）
　　2．第1号土坑（北より）
　　3．第2号土坑（北西より）

PL 7　1．K108号墳、発掘前全景(南西より)
　　2．K108号墳　発掘後全景(南西より)

PL 8　1．K108号墳　発掘前遠景(北東より)
　　2．K108号墳　発掘後遠景(北東より)

PL 9　1．K108号墳　墳丘東側断面
　　2．K108号墳　墳丘北側断面①
　　3．K108号墳　墳丘北側断面②

PL10　1．K108号墳　主体部確認状況(北東より)
　　2．K108号墳　主体部蓋石検出状況（南西より）

PL11　1．K108号墳　主体部全景(南より)
　　2．K108号墳　主体部全景(北東より)

PL12　1．K108号墳　主体部近景(北東より)
　　2．K108号墳　主体部堀方全景(南より)

PL13　1．K108号墳　主体部細部①
　　2．K108号墳　主体部細部②
　　3．K108号墳　主体部細部③

PL14　1．第1号住居跡出土坩類一括
　　2．第1号住居跡出土高杯一括
　　3．第1号住居跡出土甕類等一括

PL15　出土土器一括

PL16　出土土器一括

PL17　出土土器一括

PL18　第4号、第5号、第6号住居跡出土一括

PL19　1．第1号住居跡出土土玉
　　2．第1号住居跡出土砥石
　　3．先土器時代石器⑤

PL20　1．先土器時代石器①
　　2．先土器時代石器②

PL21　1．先土器時代石器③
　　2．先土器時代石器④

PL22　1．第3号住居跡出土玉類未成品
　　2．第3号住居跡出土の研磨された

石片
PL23 1．第3号住居跡出土原石
2．第3号住居跡出土石屑
PL24 1．第4号住居跡出土原石⑪
2．第4号住居跡出土原石⑮
3．第4号住居跡出土玉類未成品
4．K108号墳出土鉄刀
PL25 1．航空写真　遺跡全景（北より）
2．遺跡全景（西より）
PL26 1．第1号住居跡（北西より）
2．第2号住居跡（北西より）
PL27 1．第3号住居跡遺物出土状態（北西より）
2．第3号住居跡（北西より）
PL28 1．第4号住居跡（北西より）
2．第5号住居跡（南東より）
PL29 1．第1号住居跡出土遺物
2．第2号住居跡出土遺物
3．第3号住居跡出土遺物
4．第4号住居跡出土遺物
PL30 出土遺物
PL31 1．石鏃、表採
2．第2、4号住居跡出土土玉
3．剣形石製模造品
4．砥石、表採
5．砥石、表採
6．砥石、表採
7．石器、表採
8．凹石、表採
PL32 1．航空写真、発掘前全景（中央部分）（東より）
2．航空写真、発掘後全景(東より)
PL33 1．第1号住居跡全景（北西より）
2．第1号住居跡（南西コーナー部分）遺物出土状況（北より）
PL34 1．第1号住居跡鉄斧出土状況
2．第2号住居跡全景（北東より）
PL35 1．第1号蔵骨器出土状況
2．第3号蔵骨器出土状況
PL36 1．145号塚発掘前全景（東より）
2．145号塚発掘後全景（東より）
PL37 1．145号塚東西断面（南より）
2．145号塚発掘後全景（東より）
PL38 出土遺物
PL39 出土遺物
PL40 出土遺物
PL41 出土遺物
PL42 出土遺物
PL43 1．航空写真、遺跡全景（西より）
2．遺跡遠景（西より）
PL44 1．第1号炉穴遺物出土状態
2．第1号炉穴
3．第3号炉穴遺物出土状態
4．第3号炉穴
5．第4号炉穴遺物出土状態
6．第4号炉穴
PL45 1．第5号炉穴
2．第2号炉穴
3．第7号炉穴
4．第6号炉穴
PL46 1．第10号炉穴
2．第8号炉穴
3．第13号炉穴
4．第11号炉穴
PL47 1．第9号炉穴（左）
第14号炉穴（右）

2．第11号炉穴
PL48　1．第1号土坑
2．第2号土坑
PL49　1．第1号炉穴出土遺物
2．第3号炉穴出土遺物
3．第3号炉穴出土遺物
4．第4号炉穴出土遺物
PL50　第Ⅰ群土器（1～29）
PL51　第Ⅱ群土器（30～65）
PL52　第Ⅱ群土器（66～109）
PL53　第Ⅱ群土器（110～132）
PL54　第Ⅱ群土器（133～155）
PL55　第Ⅱ群土器（156～181）
PL56　第Ⅲ群土器（184～216）
PL57　第Ⅲ群土器（217～251）
PL58　第Ⅲ群土器（252～280）
PL59　第Ⅱ、Ⅲ群土器底部
PL60　第Ⅴ群土器（318～355）
PL61　上、第Ⅴ群土器（356～363）中、第Ⅱ群土器（182、183）下、第Ⅰ、Ⅴ群土器（312～317）
PL63　グリッド出土石器
PL64　1．航空写真、遺跡全景(西北より)
2．遺跡全景（東より）
PL65　1．第1号炉穴
2．第2号炉穴
3．第3号炉穴
PL66　1．第5号炉穴
2．第4号炉穴
3．第7号炉穴
4．第6号炉穴
PL67　1．第8～10号炉穴
2．第11、12号炉穴
PL68　1．K75号墳遠景及びB地点全景(東より)
2．K75号墳周堀検出状態(東より)
PL69　第Ⅱ群土器（6～27）
PL70　第Ⅱ群土器（28～42）、第Ⅲ群土器（43～62）
PL71　第Ⅳ群土器（67～90）
PL72　第Ⅴ群土器（91～116）
PL73　第Ⅵ、Ⅶ群土器（117～127）土製品
PL74　1．遺跡遠景、発掘前（南より）
2．遺跡遠景、発掘後（南より）
PL75　1．第3号炭窯跡（南より）
2．第1、2号炭窯跡（南より）
3．第5号炭窯跡（南東より）
4．第4号炭窯跡（南東より）
PL76　航空写真、遺跡全景（東より）
PL77　1．航空写真、遺跡全景（東より）
2．ＳＩ1、ＳＩ2（南東より）
PL78　1．ＳＩ3（南より）
2．ＳＩ3カマド
PL79　1．ＳＩ4（南より）
2．ＳＩ5、ＳＩ9（南西より）
PL80　1．ＳＩ6、ＳＩ7、ＳＩ8（南東より）
2．ＳＩ8（東より）
PL81　1．ＳＩ10（南より）
2．ＳＩ11、ＳＩ12（南西より）手前がＳＩ12
PL82　1．ＳＩ13（西より）
2．ＳＩ14（北西より）
PL83　1．ＳＩ15（南西より）
2．ＳＩ16（南東より）
PL84　1．ＳＩ16～ＳＩ20（西より）

2．ＳＩ17（南東より）
ＰＬ85　1．ＳＩ18（北西より）
2．ＳＩ19（南東より）
ＰＬ86　1．ＳＩ20（南東より）
2．ＳＩ21（南東より）
ＰＬ87　1．ＳＩ22（南東より）
2．ＳＩ23（南東より）
ＰＬ88　1．ＳＩ24（南西より）
2．ＳＩ25、ＳＩ26（南北より）
ＰＬ89　1．ＳＩ27（北東より）
2．ＳＩ28（北東より）
ＰＬ90　掘立柱建物群（北西より）
ＰＬ91　1．ＳＢ１柱穴（南東より）
2．ＳＢ１掘方（南東より）
ＰＬ92　1．ＳＢ２柱穴（南東より）
2．ＳＢ２掘方（南東より）
ＰＬ93　1．ＳＢ３（南東より）
2．ＳＢ６（北より）
ＰＬ94　1．ＳＡ２（南より）
2．谷（西より）道路手前が遺物集中地点
ＰＬ95　1．谷、遺物集中地点確認状況（東より）
2．先土器時代遺物出土状況（南より）
ＰＬ96　1．先土器時代遺物
2．先土器時代遺物(刃部磨製石斧)
ＰＬ97　出土遺物
ＰＬ98　出土遺物
ＰＬ99　出土遺物
ＰＬ100　出土遺物
ＰＬ101　出土遺物
ＰＬ102　出土遺物
ＰＬ103　出土遺物
ＰＬ104　出土遺物
ＰＬ105　出土遺物、墨書土器
ＰＬ106　出土遺物、墨書土器
ＰＬ107　出土遺物、墨書土器
ＰＬ108　出土遺物、墨書土器
ＰＬ109　出土遺物、刻書土器
ＰＬ110　出土遺物、刻書土器
ＰＬ111　出土遺物、土師器（皿、杯Ａ）
ＰＬ112　出土遺物、土師器（ロクロ使用）
ＰＬ113　出土遺物、須恵器Ａ群
ＰＬ114　出土遺物、須恵器Ｂ群①
ＰＬ115　出土遺物、須恵器Ｂ群②
ＰＬ116　出土遺物、須恵器Ｃ群①
ＰＬ117　出土遺物、須恵器Ｃ群②
ＰＬ118　出土遺物、須恵器（合子、長頸瓶）
ＰＬ119　出土遺物、須恵器（蓋）
ＰＬ120　出土遺物、須恵器（皿）
ＰＬ121　出土遺物、須恵器（杯Ｂ）
ＰＬ122　出土遺物、須恵器（杯Ｂ、Ａ）
ＰＬ123　出土遺物、陶硯
ＰＬ124　出土遺物、瓦
ＰＬ125　出土遺物、瓦、不明須恵器
ＰＬ126　出土遺物、羽口
ＰＬ127　出土遺物、土玉
ＰＬ128　出土遺物、石器
ＰＬ129　1．航空写真、遺跡全景（上方は大畑Ｉ遺跡）東より
2．遺跡遠景（南西より）
ＰＬ130　1．遺跡近景（南東より）
2．第１号住居跡（西より）
ＰＬ131　航空写真、発掘前周辺地形(北より)
ＰＬ132　1．航空写真、周辺地形（上方は利

根川）南より

2．航空写真、周辺地形（竜角寺上空より印旛沼をのぞむ）北より

PL133 1．航空写真、昭和56年度調査地点全景（北より）

2．航空写真、昭和56年度調査地点全景（東より）

PL134 航空写真、昭和57年度調査地点全景（南より）

PL135 1．航空写真、遺跡全景（上方は向台遺跡）北東より

2．航空写真、遺跡全景（北より）

PL136 航空写真、遺跡全景（東より）

PL137 航空写真、D—12、E—12グリッド付近（北東より）

PL138 1．現地説明会風景、昭和57年9月25日（土）説明、あいさつ

2．現地説明会風景、昭和57年9月25日（土）現場見学

3．現地説明会風景、昭和57年9月25日（土）現場見学

PL139 1．発掘風景（昭和58年度）東より

2．発掘風景（SB15）

PL140 1．A地点発掘前全景（東より）

2．A地点発掘後全景（東より）

PL141 1．A地点発掘前全景（西より）

2．A地点発掘後全景（西より）

PL142 1．B地点発掘前全景（東より）

2．B地点発掘後全景（東より）

PL143 1．C地点発掘前全景（東より）

2．C地点発掘後全景（東より）

PL144 1．道路C地区全景（西より）

2．道路C地区東端部（東より）

PL145 1．C地点、道路B地点全景（東より）

2．昭和58年度調査区全景（東より）

PL146 1．先土器時代調査区全景（西より）

2．先土器時代、F—9—5グリッド礫群出土状況（南より）

PL147 1．第1～3号炉穴（手前が1号）

2．第4～9号炉穴

PL148 1．K112号墳周堀全景（東より）

2．K112号墳周堀土層

3．K112号墳鉄器出土状況

PL149 1．K7号墳全景（西より）

2．A地点東端全景（西より）

PL150 1．SD1全景（南より）

2．SD4全景（北より）

PL151 1．SE1、SE2全景（西より）

2．SE1全景（北より）

PL152 1．SE2全景（西より）

2．SE3全景（北より）

PL153 1．SI1（南より）

2．SI2（東より）

PL154 SI3～SI6（南より）

PL155 1．SI7（南西より）

2．SI8（南東より）

PL156 1．SI9（南東より）

2．SI10（南東より）

PL157 1．SI11（南東より）

2．SI12（右）SI13（南東より）

PL158 1．SI13（南西より）

2．SI13土製品出土状態

PL159 1．SI14（西より）

2．SI15（北西より）

PL160 1．SI15（右）SI16（北東より）

2．ＳＩ16、カマド付近遺物出土状態（南より）

ＰＬ161 1．ＳＩ17（左）ＳＩ18（南東より）

2．ＳＩ19、ＳＩ20（手前）西より

ＰＬ162 1．ＳＩ19（西より）

2．ＳＩ25遺物出土状況（東より）

ＰＬ163 1．ＳＩ20（南より）

2．ＳＩ21（南西より）

ＰＬ164 1．ＳＩ22(左)、ＳＩ23(北西より)

2．ＳＩ22、ＳＩ23遺物出土状態(北西より)

ＰＬ165 1．ＳＩ24（手前)、ＳＩ25（北東より）

2．ＳＩ26（右）ＳＩ35（北西より）

ＰＬ166 1．ＳＩ27（東より）

2．ＳＩ30（西より）

ＰＬ167 1．ＳＩ32（北東より）

2．ＳＩ33（南西より）

ＰＬ168 1．ＳＩ34（南より）

2．ＳＩ30、ＳＩ37、ＳＩ38（東より）

ＰＬ169 1．ＳＩ36（北西より）

2．ＳＩ36瓦（カマド構築材）出土状況

ＰＬ170 ＳＩ30、ＳＩ36～ＳＩ38（東より）

ＰＬ171 1．ＳＩ39（南東より）

2．ＳＩ41（北西より）

ＰＬ172 1．ＳＩ46～ＳＩ48（北より）

2．ＳＩ47（北東より）

ＰＬ173 1．ＳＩ48、ＳＩ62（手前）北より

2．ＳＩ48、遺物出土状況(北より)

ＰＬ174 1．ＳＩ49（南東より）

2．ＳＩ51（南東より）

ＰＬ175 1．ＳＩ54、ＳＩ55（手前）西より

2．ＳＩ54、遺物出土状況(北より)

ＰＬ176 1．ＳＩ44（手前）ＳＩ45（北東より）

2．ＳＩ52（手前）ＳＩ53（北西より）

ＰＬ177 1．ＳＩ56（西より）

2．ＳＩ57（南東より）

ＰＬ178 1．ＳＩ58（西より）

2．ＳＩ61（西より）

ＰＬ179 ＳＩ59(左)、ＳＩ60、ＳＥ4（手前）北より

ＰＬ180 1．Ａ地点全景（柱穴検出状況）北西より

2．Ａ地点全景（北西より）

ＰＬ181 1．ＳＢ1南側桁行掘立柱（北東より）

2．ＳＢ1全景（北東より）

3．ＳＢ1南側染行

ＰＬ182 1．ＳＢ1、Ｐ1断面

2．ＳＢ1、Ｐ8断面

ＰＬ183 1．D12、E12グリッド掘立柱建物跡（北東より）

2．ＳＢ2、3、30（南西より）

3．ＳＢ2、3（北西より）

ＰＬ184 1．ＳＢ4（南より）

2．ＳＢ5（手前)、ＳＢ6（北西より）

ＰＬ185 ＳＢ6、7、ＳＢ15（手前）南東より

ＰＬ186 1．ＳＢ6、7、15柱穴検出状況(南西より)

2．ＳＢ6、7、15（南西より）

PL187 1．SB7（南西より）
2．SB7、P4断面
PL188 1．SB8、9（南東より）
2．SB10（南西より）
PL189 SB11（北東より）
PL190 F－9グリッド地区、SB12～19(南東より)
PL191 1．SB15（南西より）
2．SB15、P6断面
PL192 1．SB12、13（南東より）
2．SB16～18（南西より）
PL193 1．SB19（南東より）
2．SB21、22（南西より）
PL194 1．SB17、P4断面
2．SB17、P10（新）SB18、P1（旧）
3．SB17、P10（新）SB20、P8（旧）
PL195 1．SB23、24（北西より）
2．SB25（北西より）
PL196 1．SB26（南東より）
2．D11、12、E11、12グリッド掘立柱建物跡（北東より）
PL197 1．SB31～33（南西より）
2．SB32、33（南東より）
PL198 SB34（南東より）
PL199 C14、15グリッド掘立柱建物跡（北西より）
PL200 1．SB36～38（北西より）
2．SB36～38（南西より）
PL201 1．SB39～46（北西より）
2．SB39～46（南東より）
PL202 SB55、56（北西より）
PL203 1．SB53（南東より）
2．SB57、58（南東より）
PL204 1．SB53、59、60（北東より）
2．SB61、62（北東より）
PL205 出土遺物、SI2－1、SI2－2、SI3－2、SI8－7、SI8－8
PL206 出土遺物、SI8－2～8 I 8－5、SI8－15、SI8－16、SI8－12、SI9－7
PL207 出土遺物　SI9－1、SI11－3、SI11－5、SI11－7、SI12－1、SI14－1～SI14－3、SI14－5、SI14－9
PL208 出土遺物　SI14－4～SI14－6、SI14－10、SI15－1～SI15－5
PL209 出土遺物　SI16一括、SI16－1～SI16－3、SI16－5、SI16－10、SI16－5暗文
PL210 出土遺物　SI16－6～9、SI16－11、SI16～13
PL211 出土遺物　SI19－1～SI19－3、SI22－1、SI22－3、SI22－6～SI22－9、SI22－10、SI22－13
PL212 出土遺物　SI22－15、SI22－16、SI23－1、SI25－40、SI25－41、SI25－20、SI25－35、SI25－44
PL213 出土遺物　SI25－3～9、SI25～11、SI25～17、SI25－19、SI25－25、SI25－38

PL214 出土遺物　SI28－1～4、SI29－1、SI30－1、SI31－1～3、SI31－6、SI31－10、SI32－3
PL215 出土遺物　SI32－1、SI33－1、SI33－9、SI34－4、SI36－1、SI36－4、SI36－5、SI36－6、SI37－9、SI38－9
PL216 出土遺物　SI38－1、SI38－5、SI38－6、SI38－10、SI40－2、SI41－3、SI44－1、SI44－3、SI44－4、SI44－6、7、SI45－1、SI45－2
PL217 出土遺物　SI45－6、SI48－1～4、SI49－1、SI49－11～14
PL218 出土遺物　SI49－2、SI49－8、SI49－10、SI49－15、SI49－16、SI49－18、SI49－19、SI49－21、SI49－22、SI49－25
PL219 出土遺物　SI49－36～38、SI50－1、SI50－3、SI50－4、SI51－1、SI52－1、SI52－3、SI52－8
PL220 出土遺物　SI54－1～5、SI54－7、SI54－8、SI57－1、SI57－2、SI59－1、SI59－3、SI67－1
PL221 出土遺物（墨書）SI59－2、SI62－1、SE1、SD5、表
PL222 出土遺物　SE1－1、SE1－4～6、SE2－1～4、SE2－7、SE2－10
PL223 出土遺物　SE4－1～3、SB28、C－16、C－17、F－8、F－10、B－17
PL224 SI54、SI54－1、SI54－2、SI62、SI54－3、SI13出土土製品（上段は勾玉、中下段は臼玉）
PL225 SI28出土刻書石製紡錘車（1－10刻書文字約2倍）
PL226 石製品
PL227 K112号墳周堀出土遺物
PL228 出土円筒埴輪①
PL229 出土円筒埴輪②
PL230 出土円筒埴輪③
PL231 出土円筒埴輪④
PL232 出土円筒埴輪⑤
PL233 瓦
PL234 先土器時代遺物②
PL235 先土器時代遺物④
PL236 1．先土器時代遺物⑤
2．先土器時代遺物⑥
PL237 1．先土器時代遺物⑦
2．先土器時代遺物⑧

写 真 図 版

周辺地形航空写真　手前は岩屋古墳（南東より）

1．周辺地形航空写真、手前は発掘前の大畑Ⅰ遺跡（南西より）

2．周辺地形航空写真、上方は印旛沼（北より）

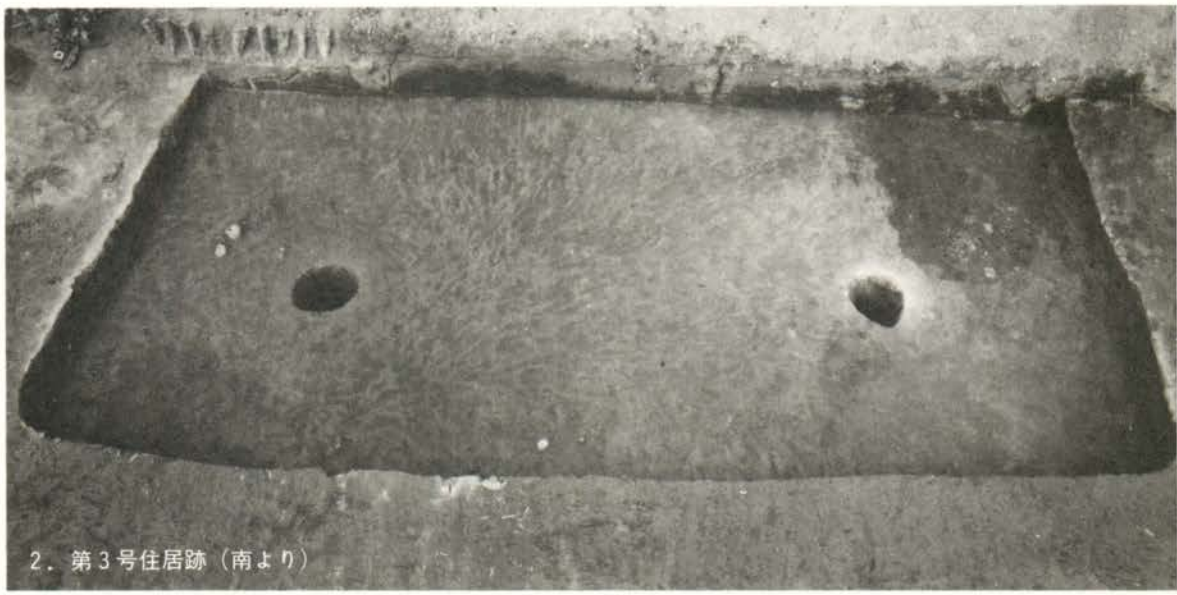
1．航空写真・遺跡全景（上方は岩屋古墳）北西より

2．航空写真・遺跡全景（東より）

1．第1号住居跡遺物出土状況（南より）

2．第1号住居跡（南より）

1．第2号住居跡（南西より）



2．第3号住居跡（南より）

3．第5号住居跡（北より）

1. 第4号住居跡（南より）

2. 第1号土坑（北より）

3. 第2号土坑（北西より）

1．K108号墳・発掘前全景（南西より）

2．K108号墳・発掘後全景（南西より）

1．K108号墳・発掘前遠景（北東より）

2．K108号墳・発掘後遠景（北東より）

1．K108号墳・墳丘東側断面

2．K108号墳・墳丘北側断面①

3．K108号墳・墳丘北側断面②

1．K108号墳・主体部確認状況（北東より）

2．K108号墳・主体部蓋石検出状況（南西より）

1．K108号墳・主体部全景（南より）

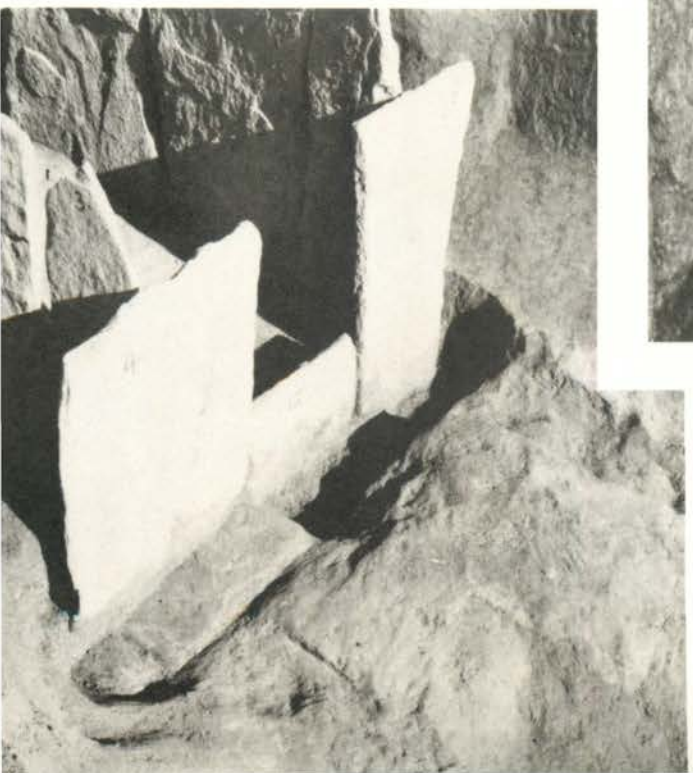
2．K108号墳・主体部全景（北東より）

1．K108号墳・主体部近景（北東より）

2．K108号墳・主体部掘方全景（南より）

K 108号墳・主体部細部①

2．K 108号墳・主体部細部②



3．K 108号墳・主体部細部③

1．第1号住居跡出土
坩類一括

2．第1号住居跡出土
高杯一括

3．第1号住居跡出土
甕類等一括

1住-13

1住-14

1住-34

1住-11

1住-43

1住-39

1住-5

1住-1

1住-2

1住-3

1住-44

1住-26

1住-8

1住-6

2住-1

2住-15

2住-17

2住-18

3住-1

2住-9

4住-1

4住-2

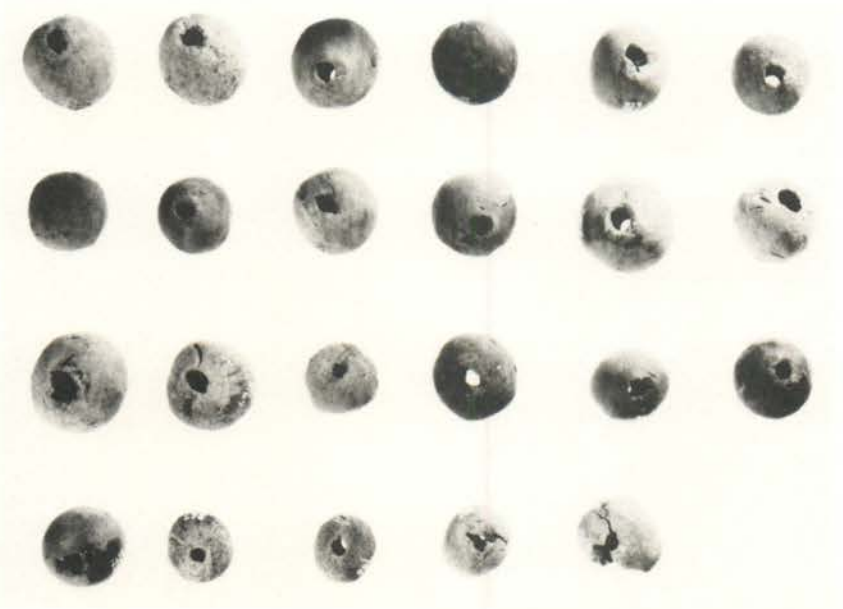
4住-5

4住-6

第4号住居跡出土土器一括

第5号住居跡出土土器一括

第6号住居跡出土土器一括



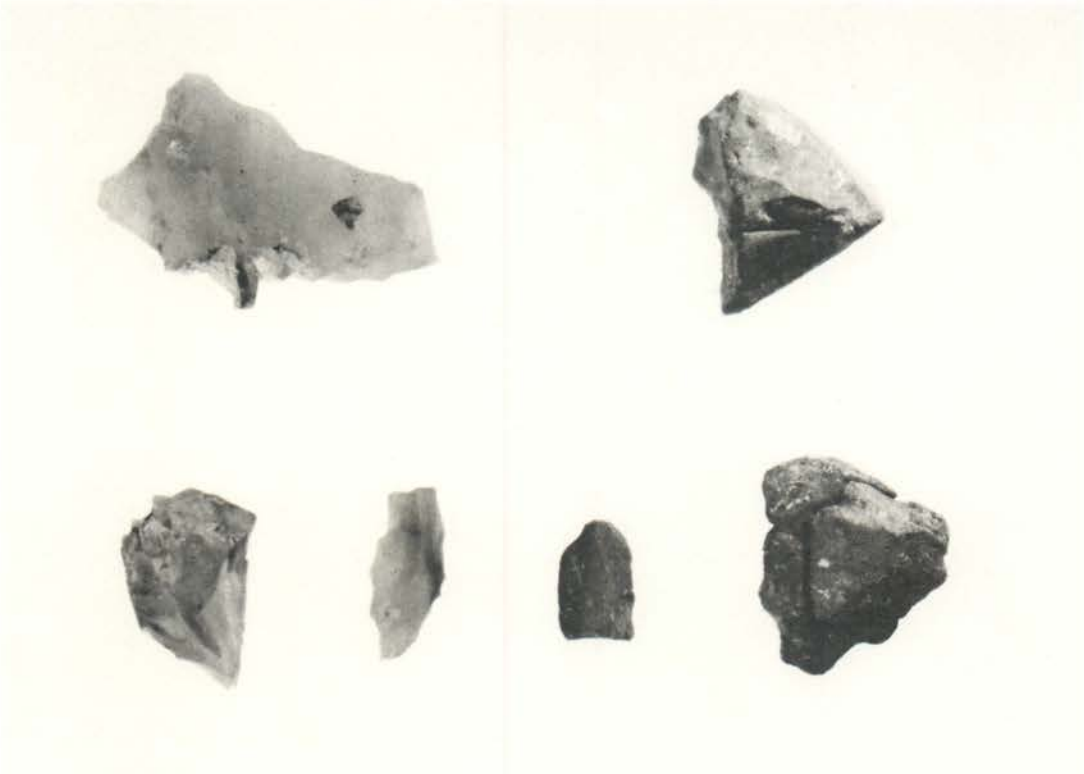
1．第1号住居跡出土土玉

2．第1号住居跡出土砥石

3．先土器時代石器⑤

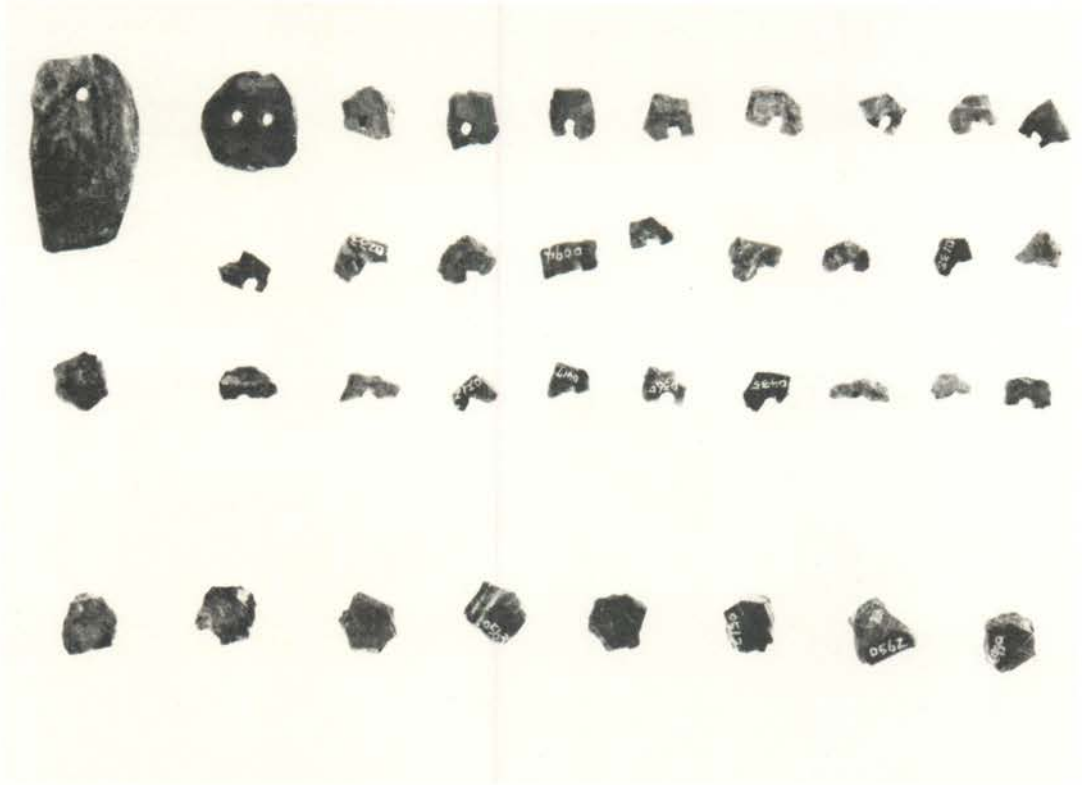
1．先土器時代石器①

2．先土器時代石器②

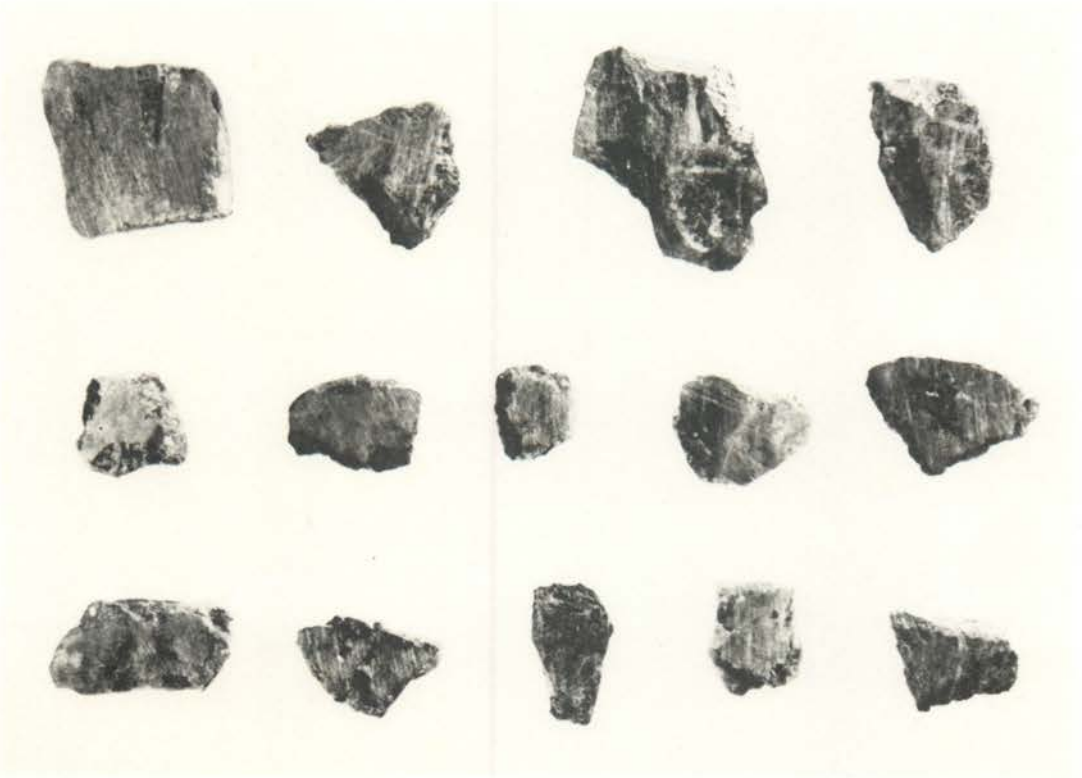


1．先土器時代石器③

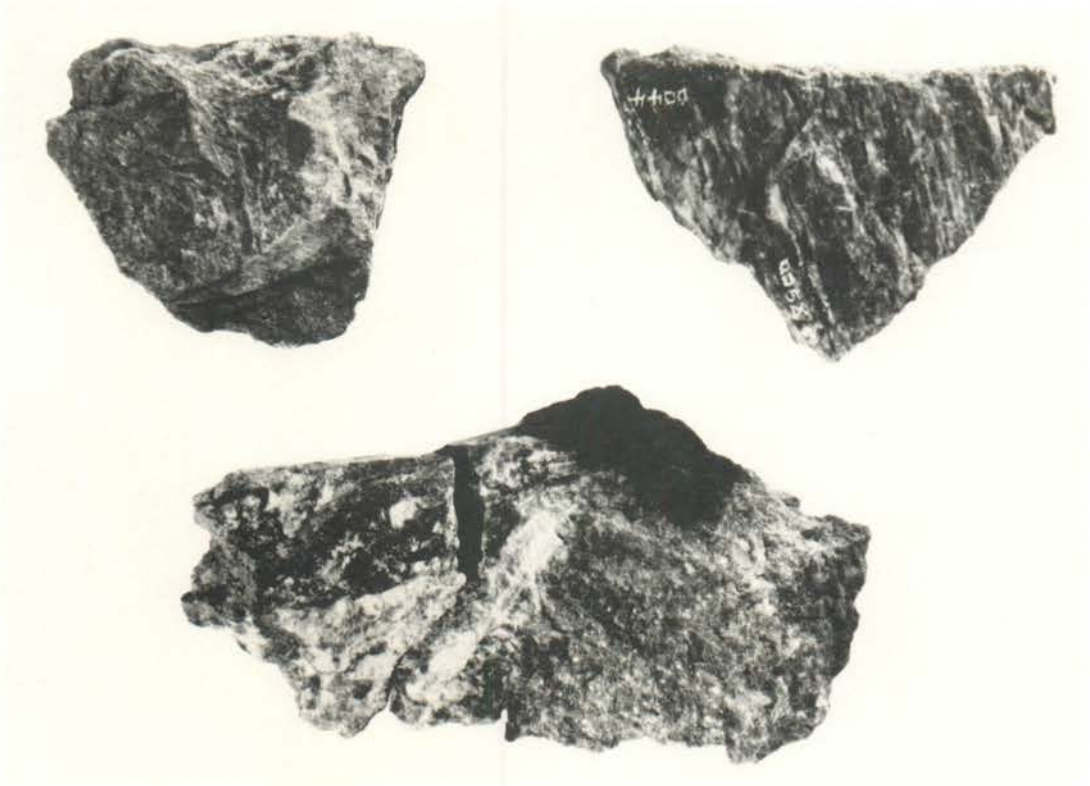
2．先土器時代石器④



1．第３号住居跡出土玉類未成品



2．第３号住居跡出土の研磨された石片



1．第3号住居跡出土原石

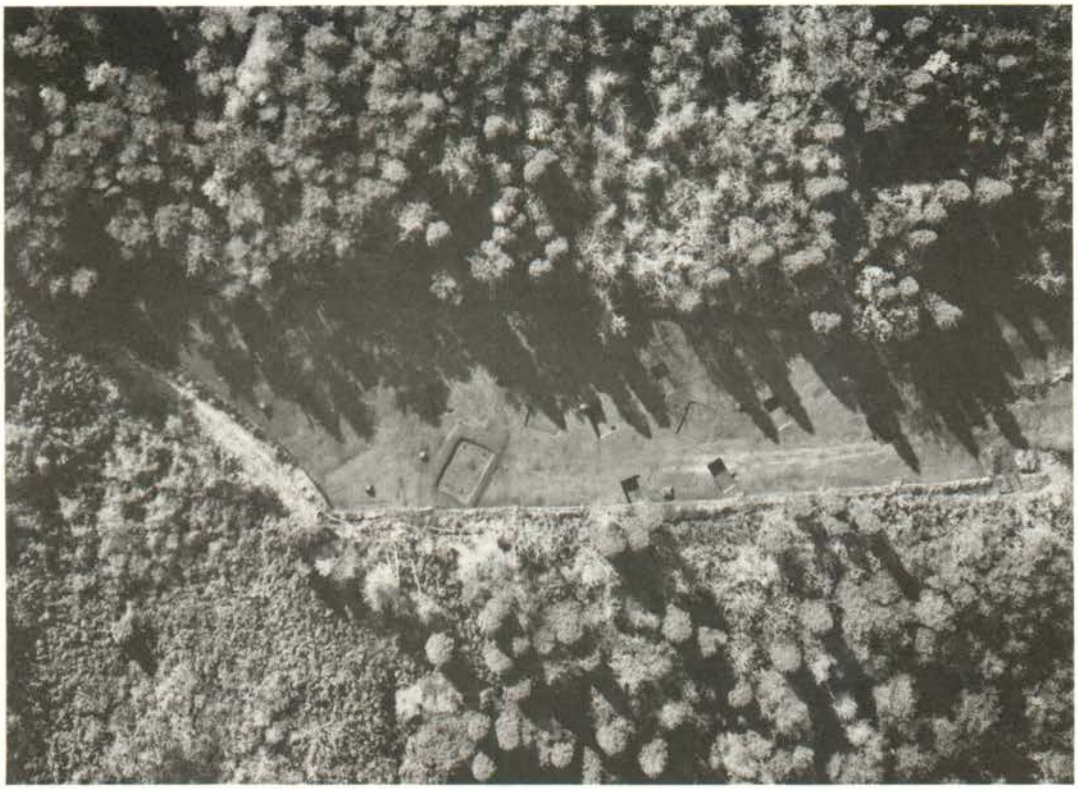
2．第3号住居跡出土石屑

1．第4号住居跡出土原石⑪

2．第4号住居跡出土原石⑮

3．第4号住居跡出土玉類未成品

4．K108号墳出土大刀



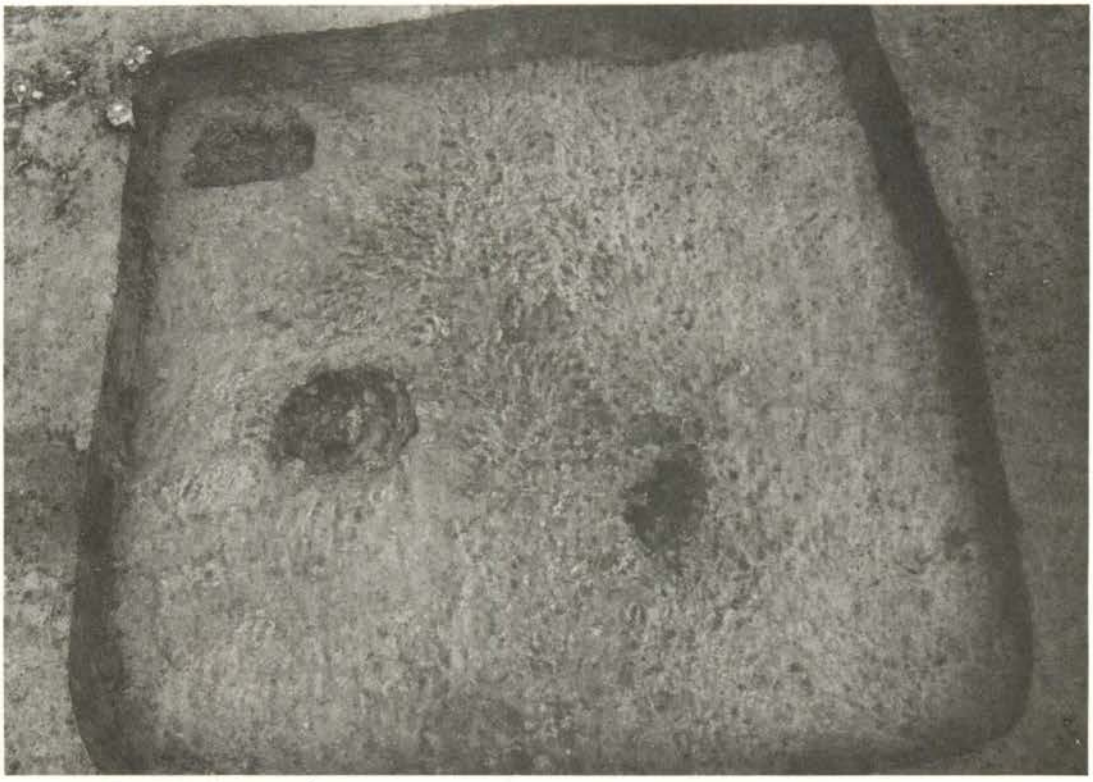
1．航空写真・遺跡全景（北より）

2．遺跡全景（西より）

1．第1号住居跡（北西より）

2．第2号住居跡（北西より）

1．第3号住居跡遺物出土状況（北西より）



2．第3号住居跡（北西より）

1．第4号住居跡（北西より）

2．第5号住居跡（南東より）

1. 第1号住居跡出土遺物

2. 第2号住居跡出土遺物

3. 第3号住居跡出土遺物

4. 第4号住居跡出土遺物

1住-1

2住-2

3住-2

2住-3

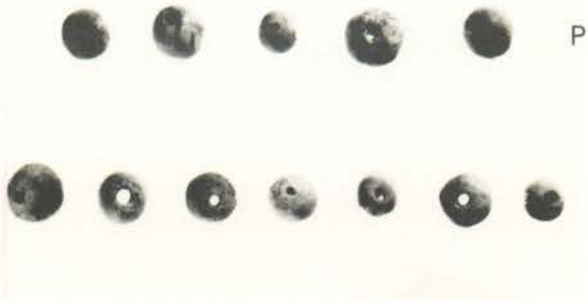
3住-11

3住-10

5住-6

3住-8

1．石鏃・表採



2．第2・4号住居跡出土土玉

3．剣形石製模造品

4．砥石・表採

5．砥石・表採

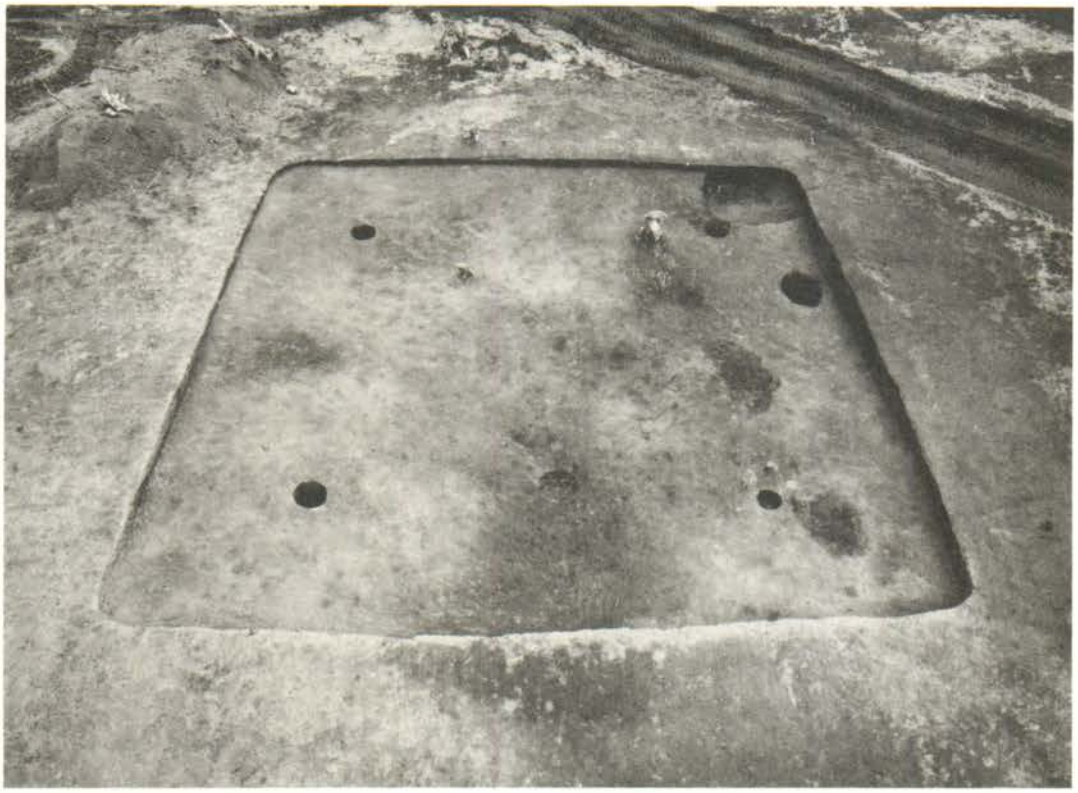
6．砥石・表採

7．石器・表採

8．凹石・表採

1．航空写真・発掘前全景（中央部分）（東より）

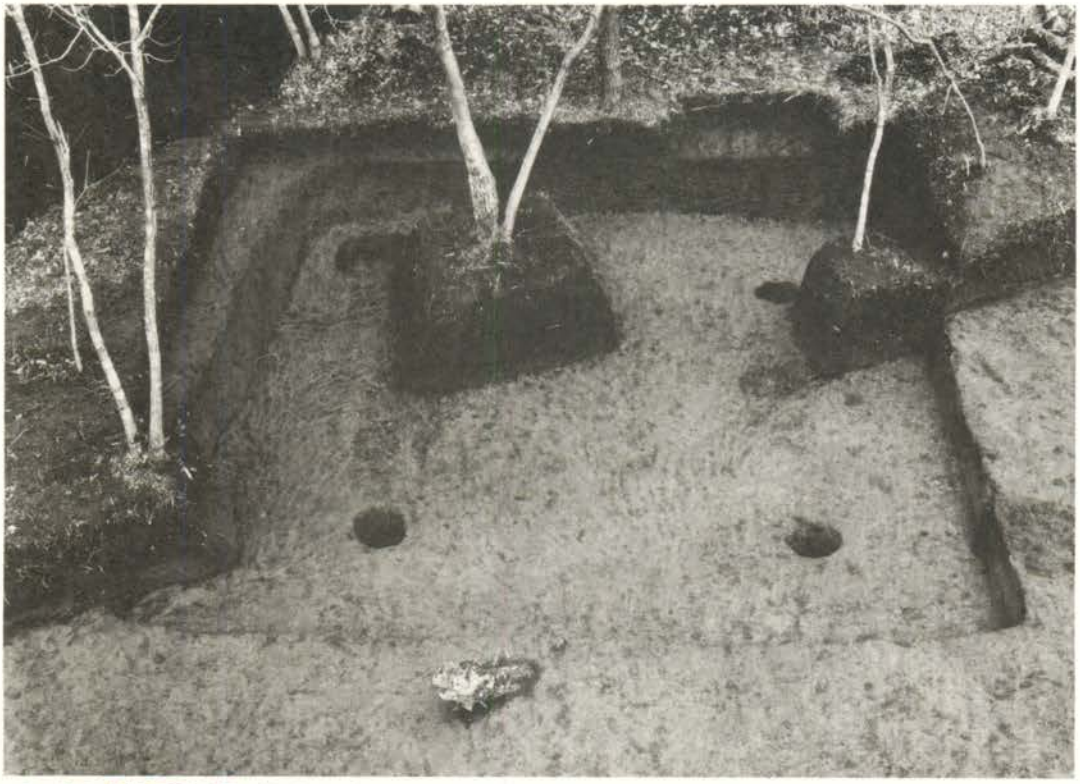
2．航空写真・発掘後全景（東より）



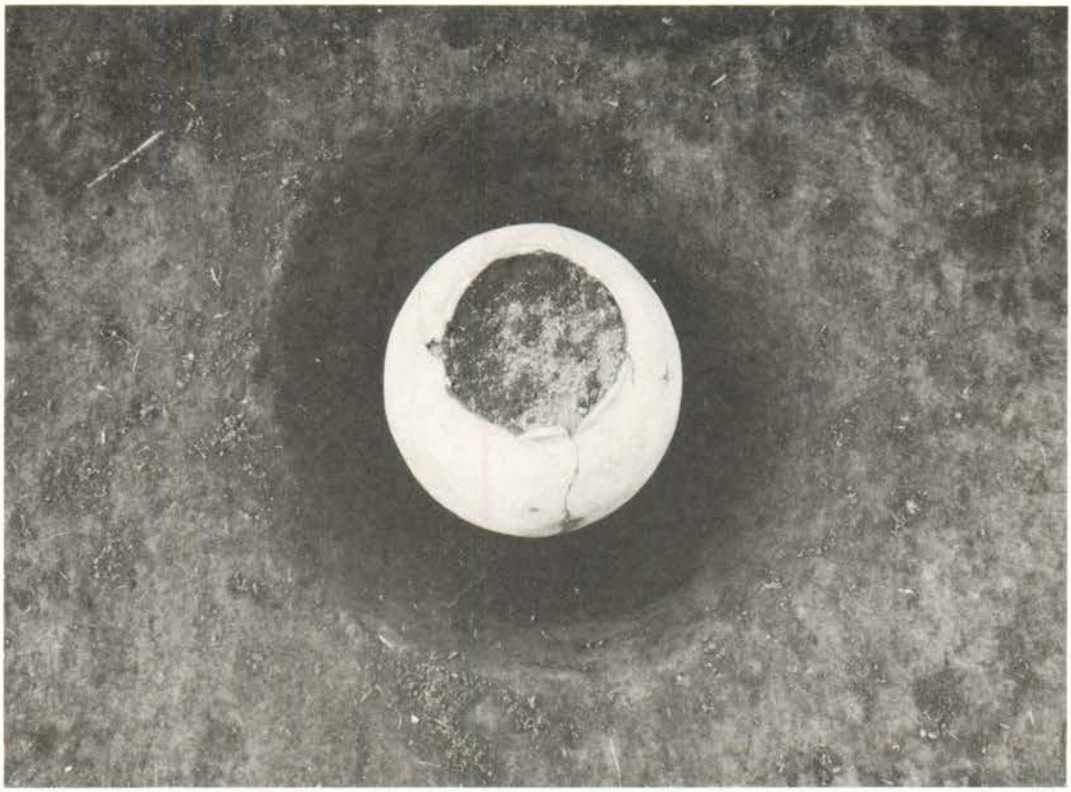
1．第1号住居跡全景（北西より）

2．第1号住居跡（南西コーナー部分）遺物出土状況（北より）

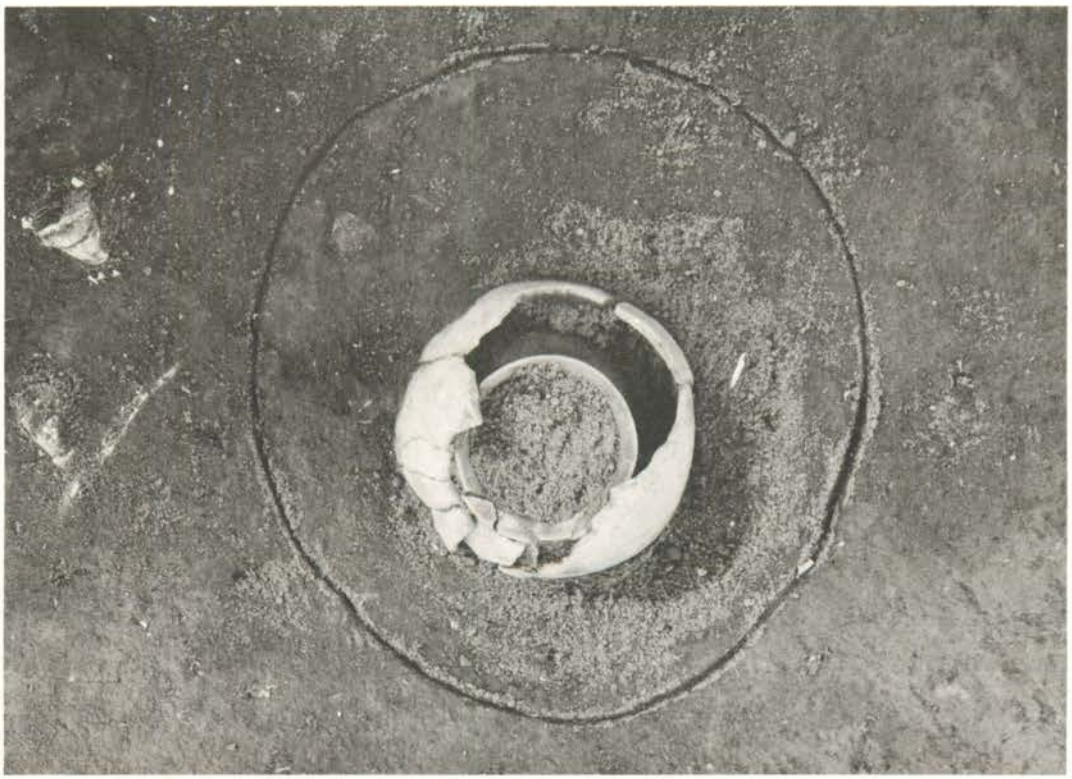
1．第1号住居跡鉄斧出土状況



2．第2号住居跡全景（北東より）



1．第1号蔵骨器出土状況

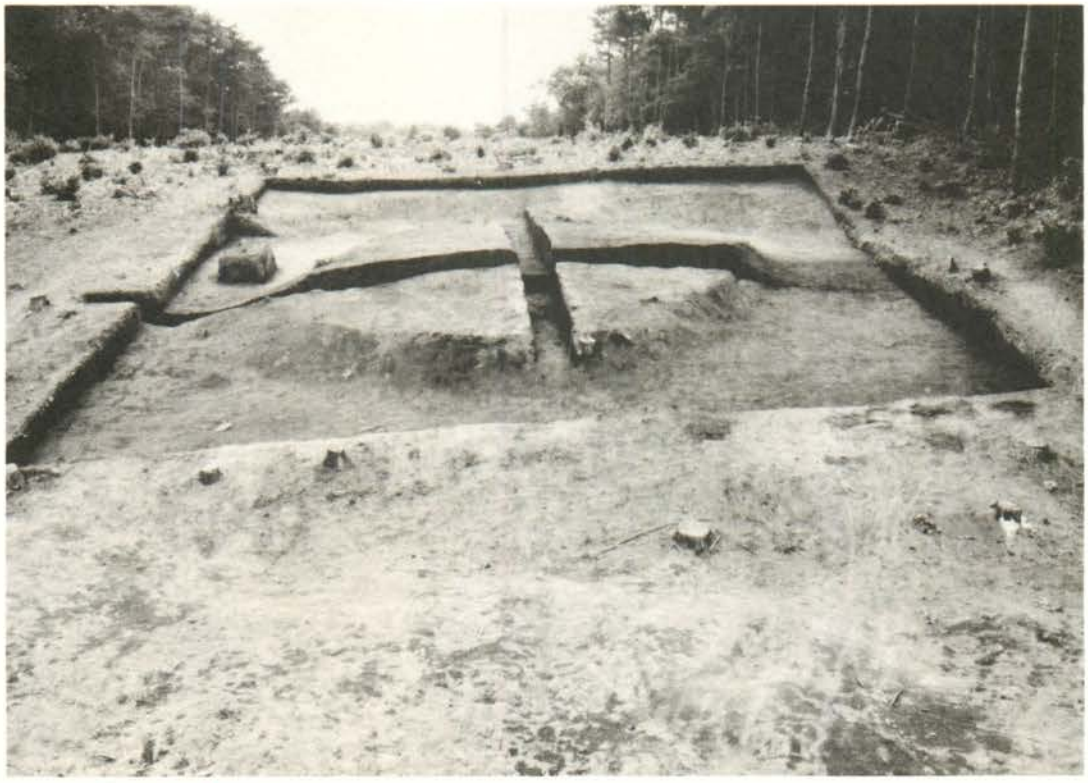


2．第3号蔵骨器出土状況

1．145号塚発掘前全景（東より）

2．145号塚発掘後全景（東より）

1．145号塚東西断面（南より）



2．145号塚発掘後全景（東より）

1住-23

1住-15

1住-22

1住-14

1住-20

1住-25

1住-19

1住-24

1住-21

1住-18

1住-27

1住-26

1住-2

1住-3

1住-8

1住-1

1住-28

1住-12

1住-11

1住-5

1住-4

1住-6

1住-13

1住-7

2住-7

第2号住居跡
一括土器

2住-7（底部）

1蔵-1

3蔵-1

1蔵-2

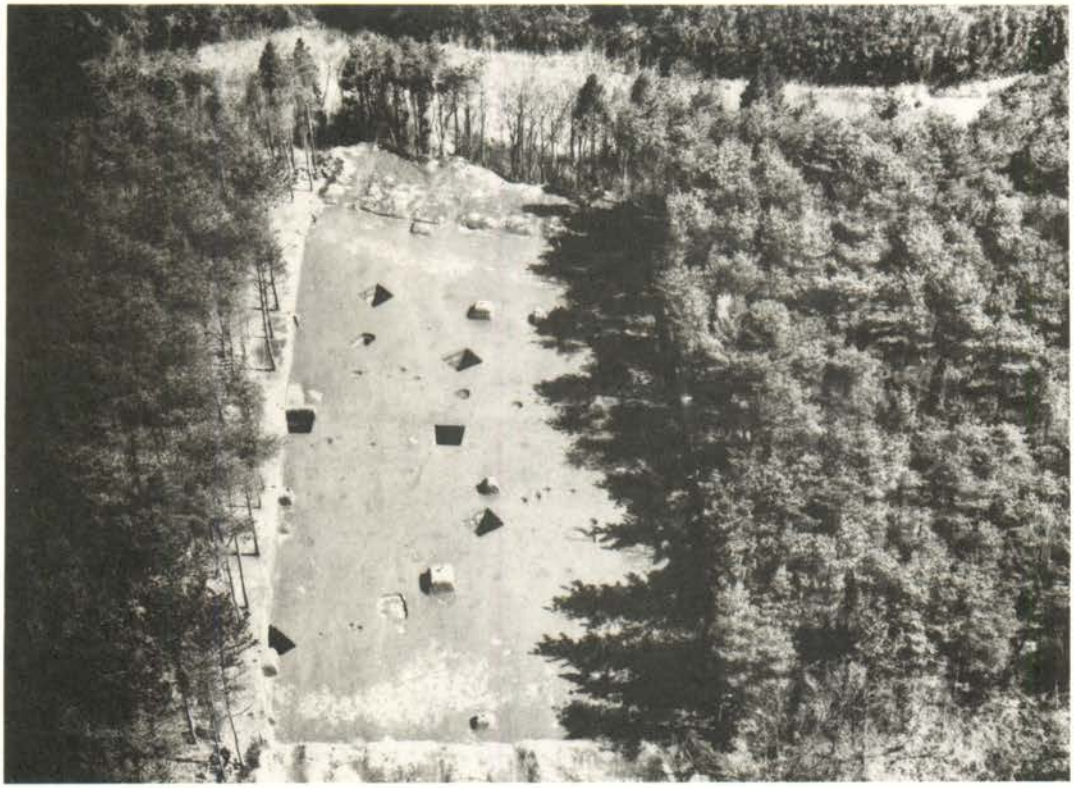
3蔵-3

第1号蔵骨器

2蔵-1

1土-1

第1号住居跡出土鉄斧



1．航空写真・遺跡全景（西より）

2．遺跡遠景（西より）

1．第1号炉穴遺物出土状況

2．第1号炉穴

3．第3号炉穴遺物出土状況

4．第3号炉穴

5．第4号炉穴遺物出土状況

6．第4号炉穴

1. 第5号炉穴

2. 第2号炉穴

3. 第7号炉穴

4. 第6号炉穴

1．第10号炉穴

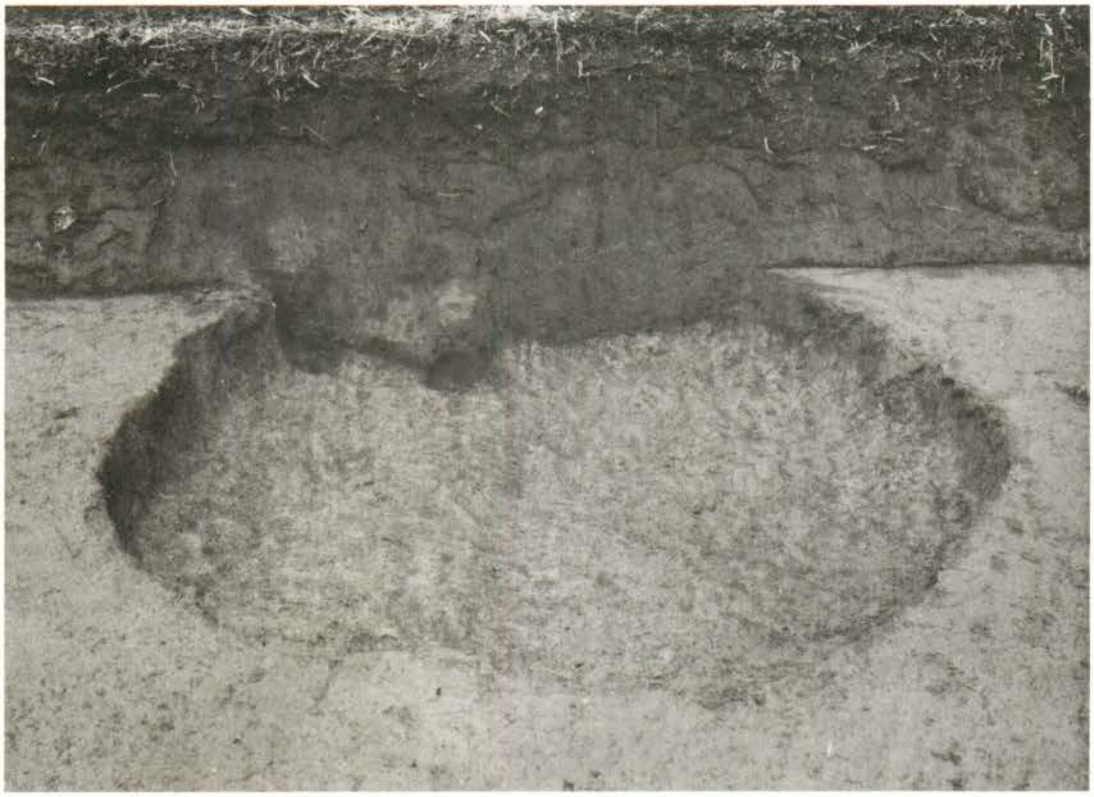
2．第8号炉穴

3．第13号炉穴

4．第11号炉穴

1．第９号炉穴（左）・第14号炉穴（右）

2．第11号炉穴



1．第1号土坑

2．第2号土坑

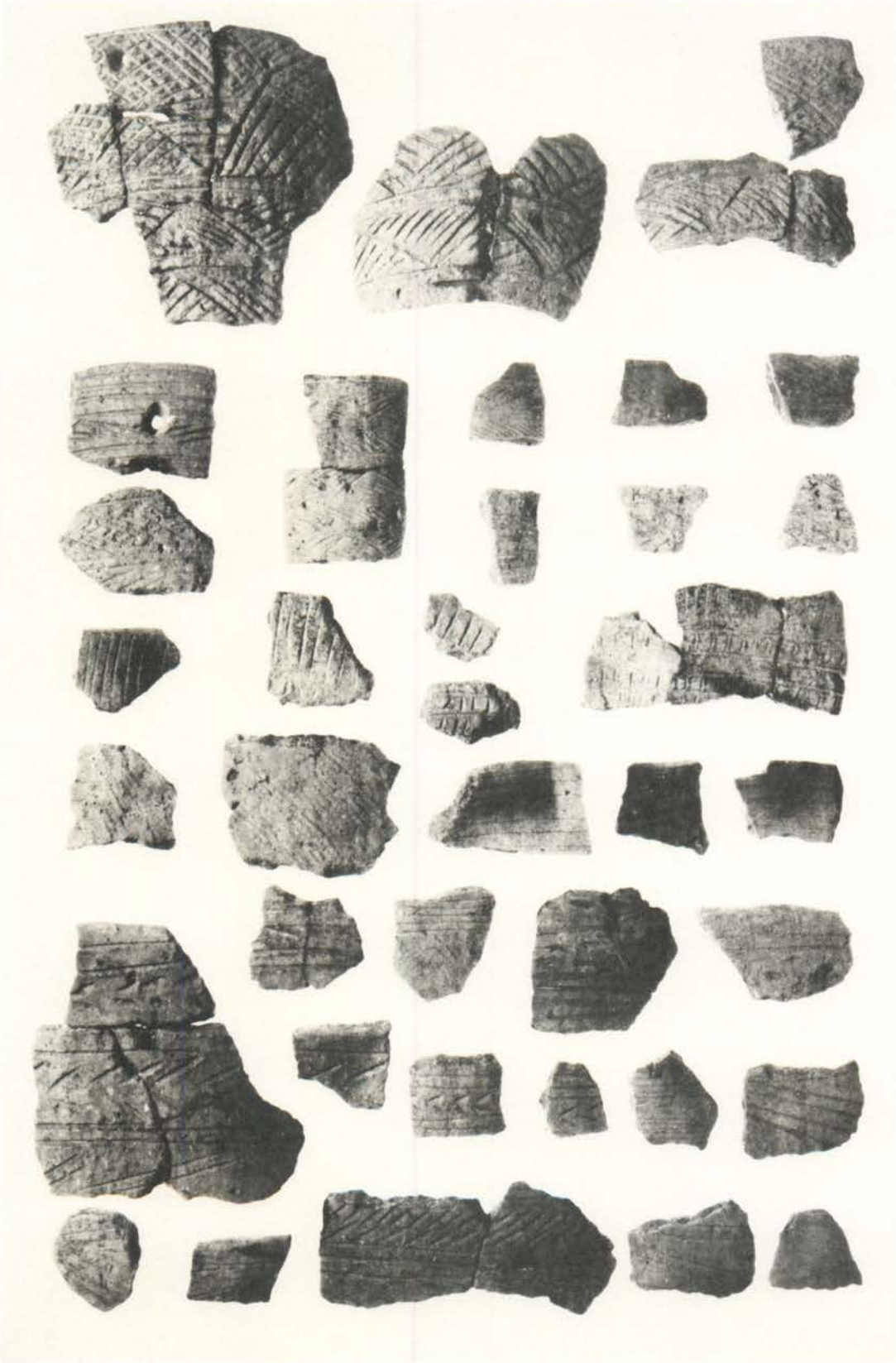
1．第1号炉穴

2．第3号炉穴

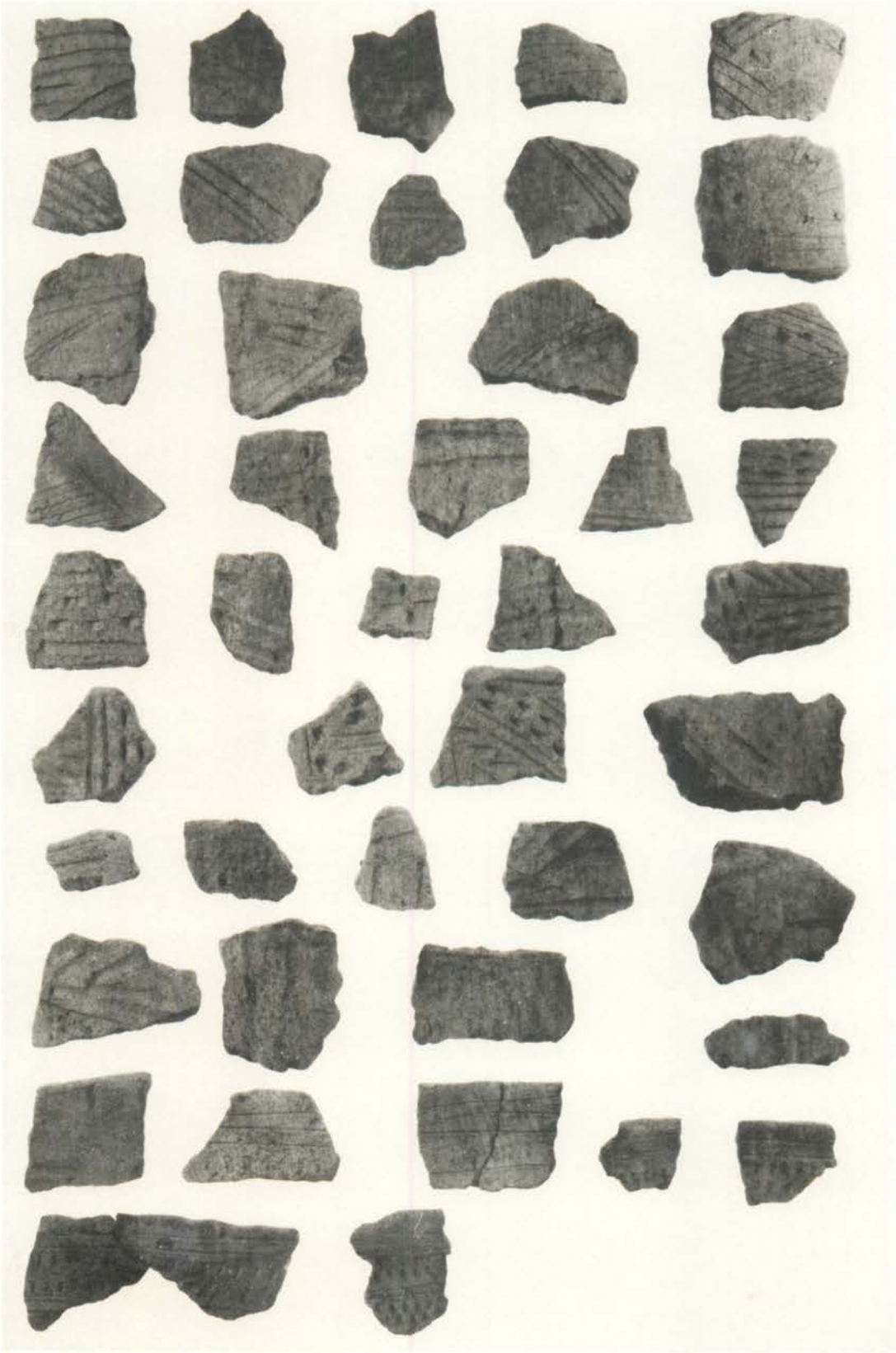
3．第3号炉穴

4．第4号炉穴

第Ⅰ群土器（1～29）



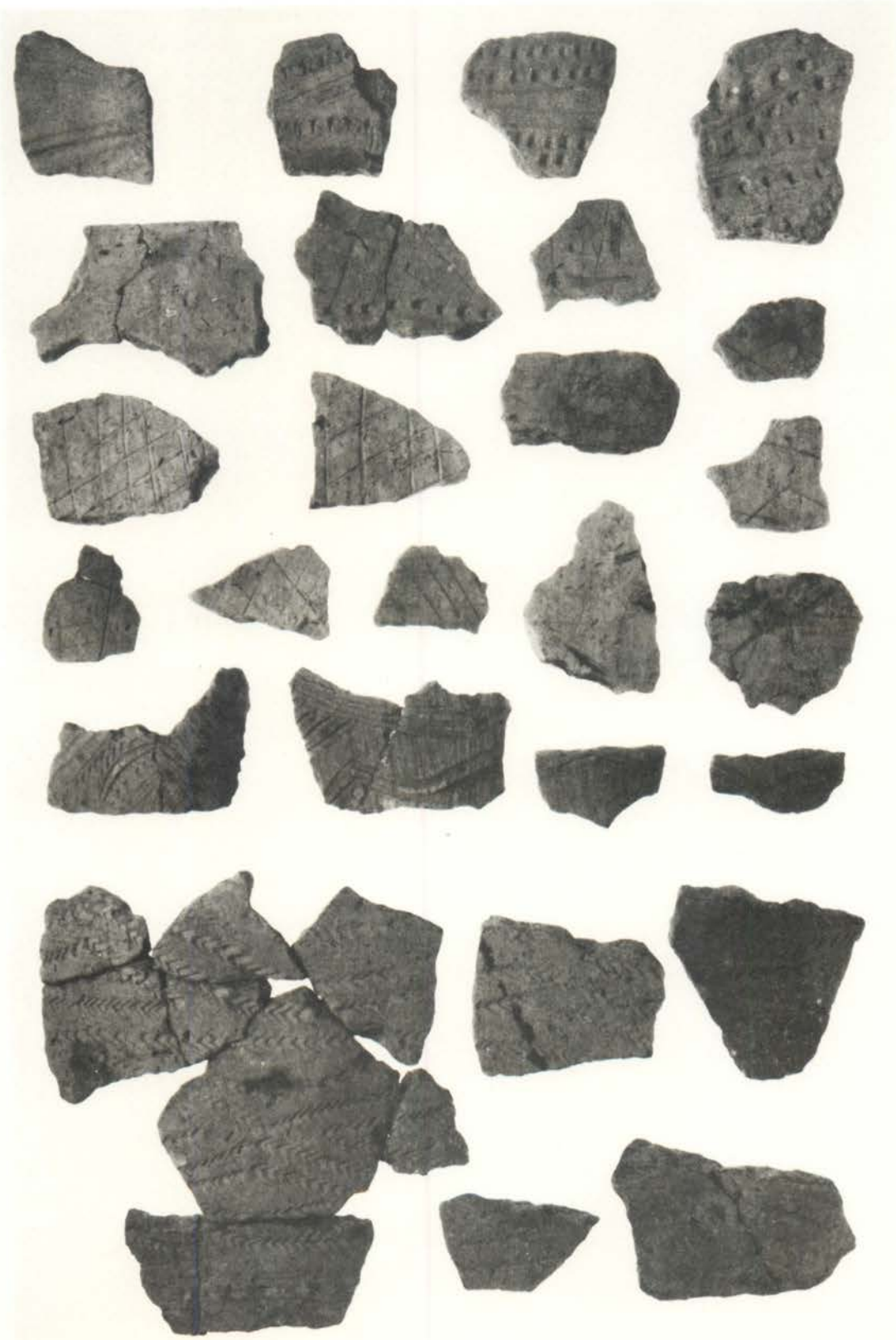
第Ⅱ群土器（30～65）



第II群土器（66～109）

第Ⅱ群土器（110～132）

第II群土器（133～155）

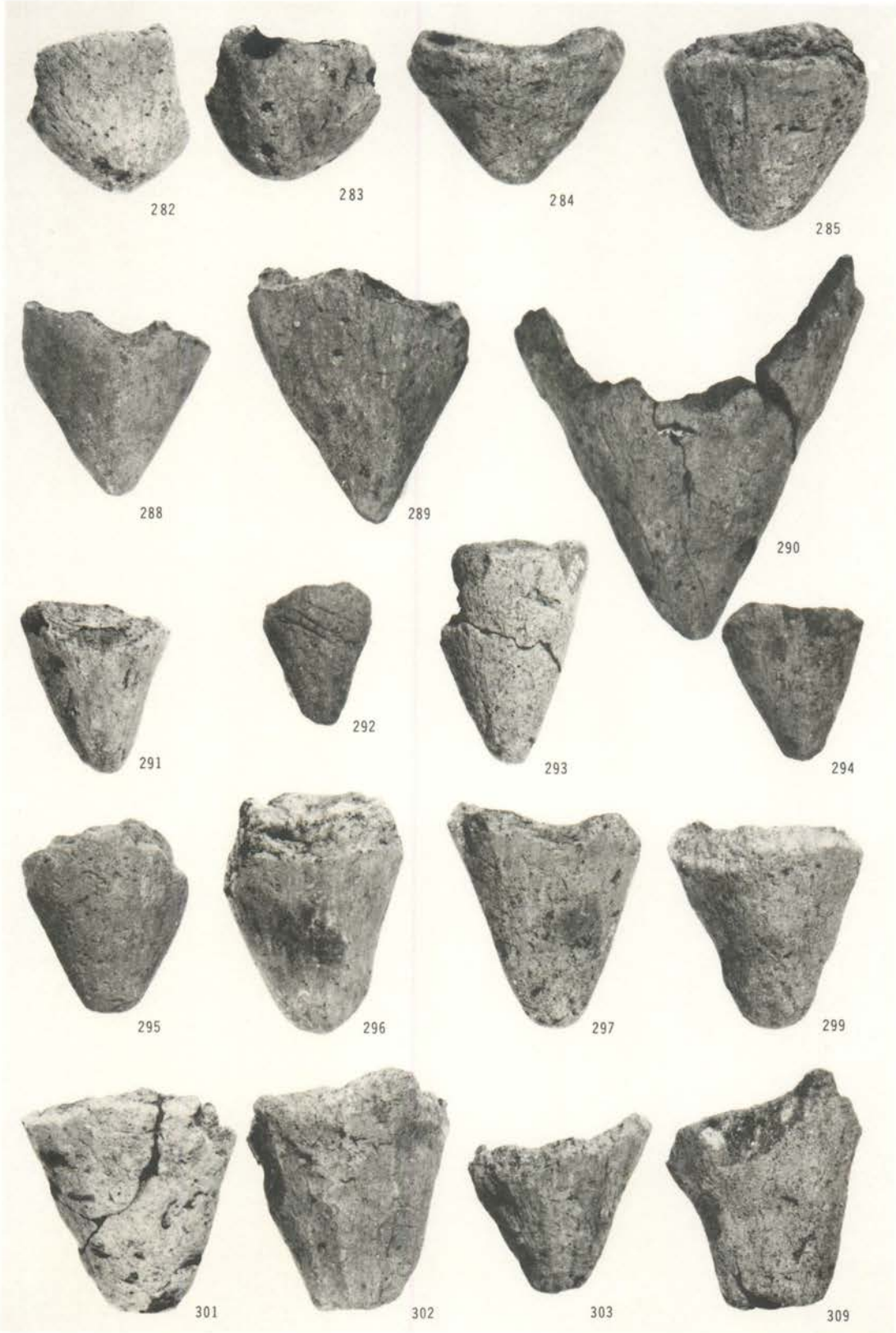


第II群土器（156～181）

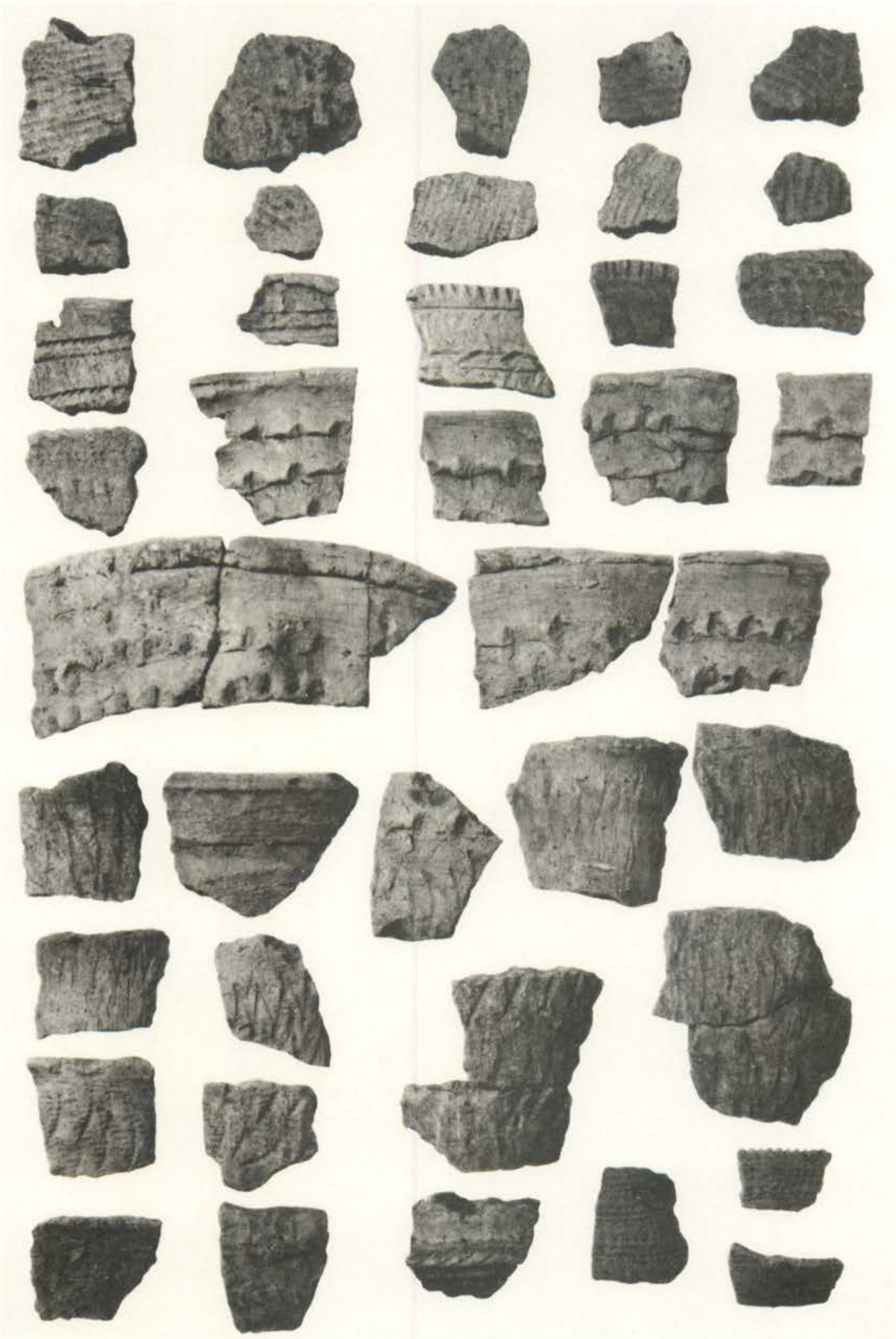
第Ⅲ群土器（184～216）

第Ⅲ群土器（217～251）

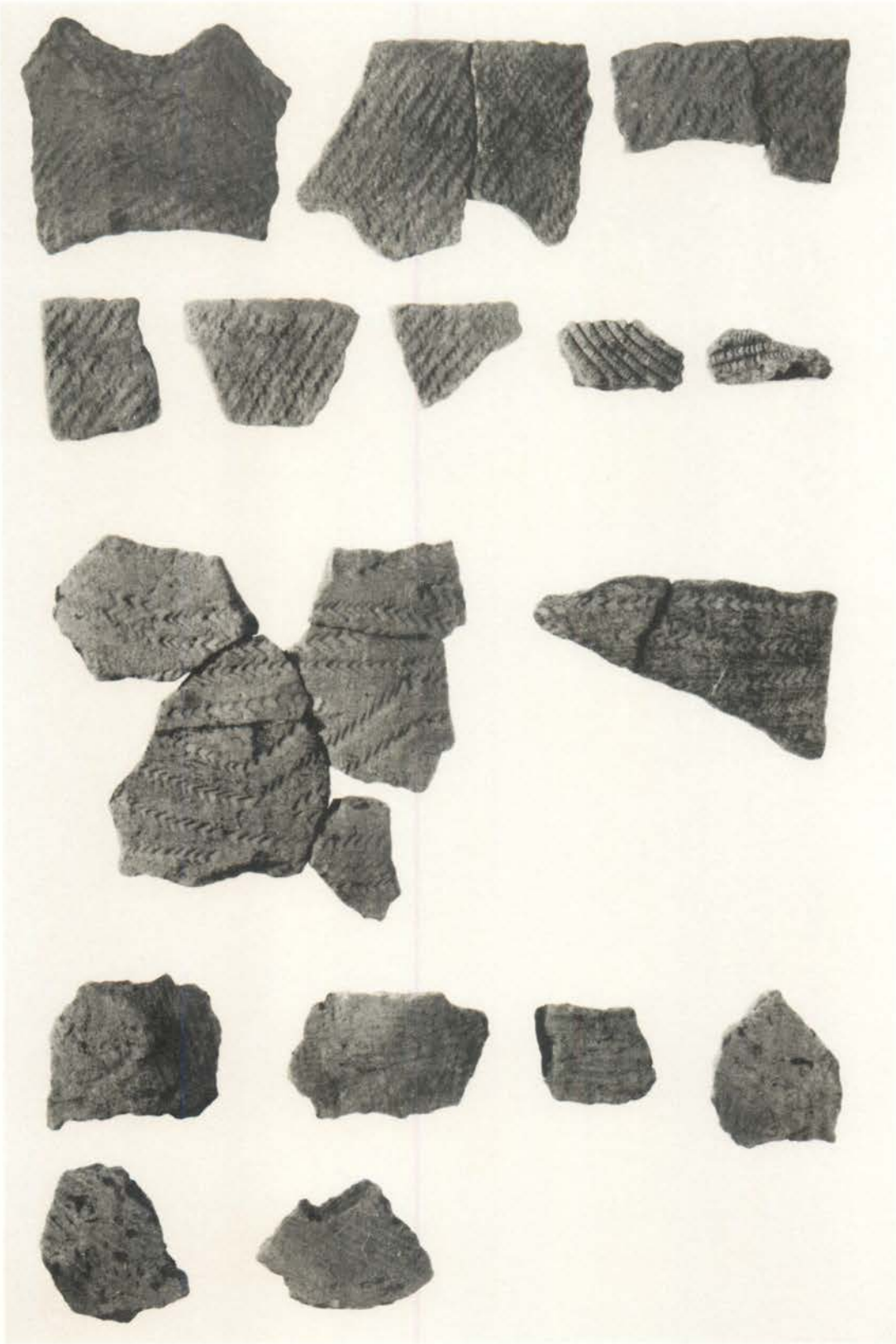
第Ⅲ群土器（252～280）


282
283
284
285
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
299
301
302
303
309

第Ⅱ・Ⅲ群土器底部



第Ⅴ群土器（318～355）



上・第Ⅴ群土器（356～363）、中・第Ⅱ群土器（182・183）、 下・第Ⅳ群土器（312～317）

第Ⅵ・Ⅶ群土器（364～387）

グリッド出土土器

1．航空写真・遺跡全景（西北より）

2．遺跡全景（東より）

1．第1号炉穴

2．第2号炉穴

3．第3号炉穴

1．第5号炉穴

2．第4号炉穴

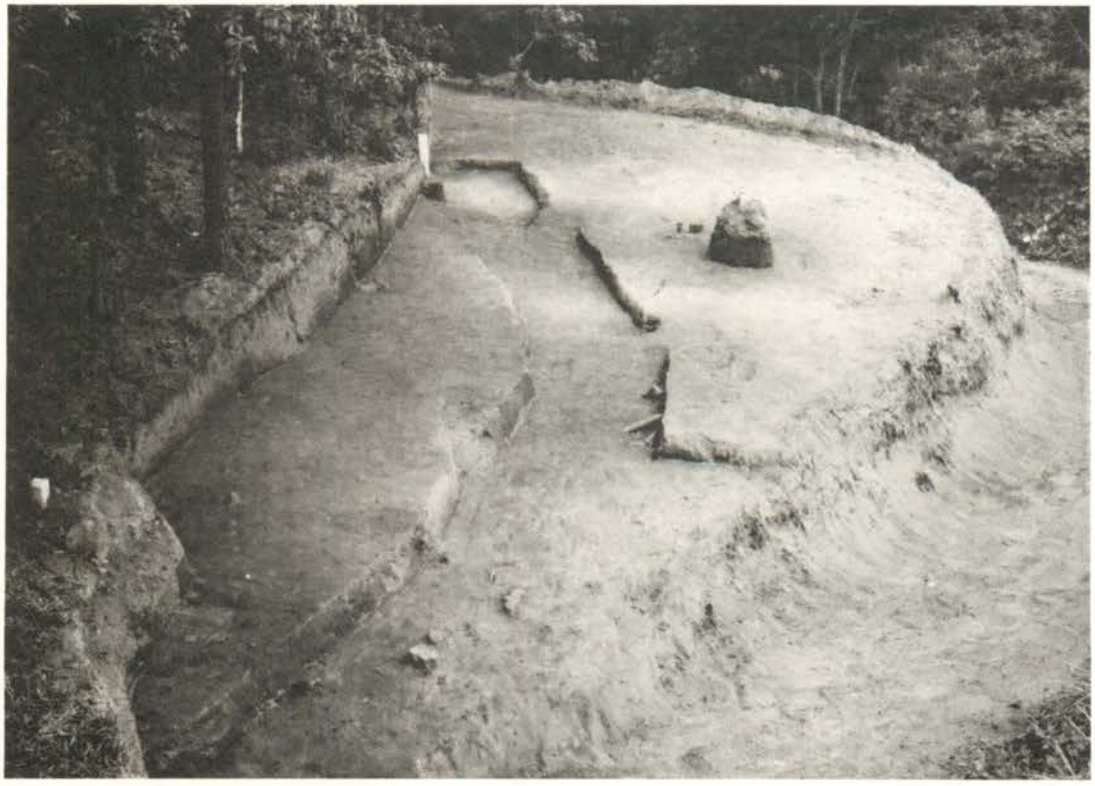
3．第7号炉穴

4．第6号炉穴

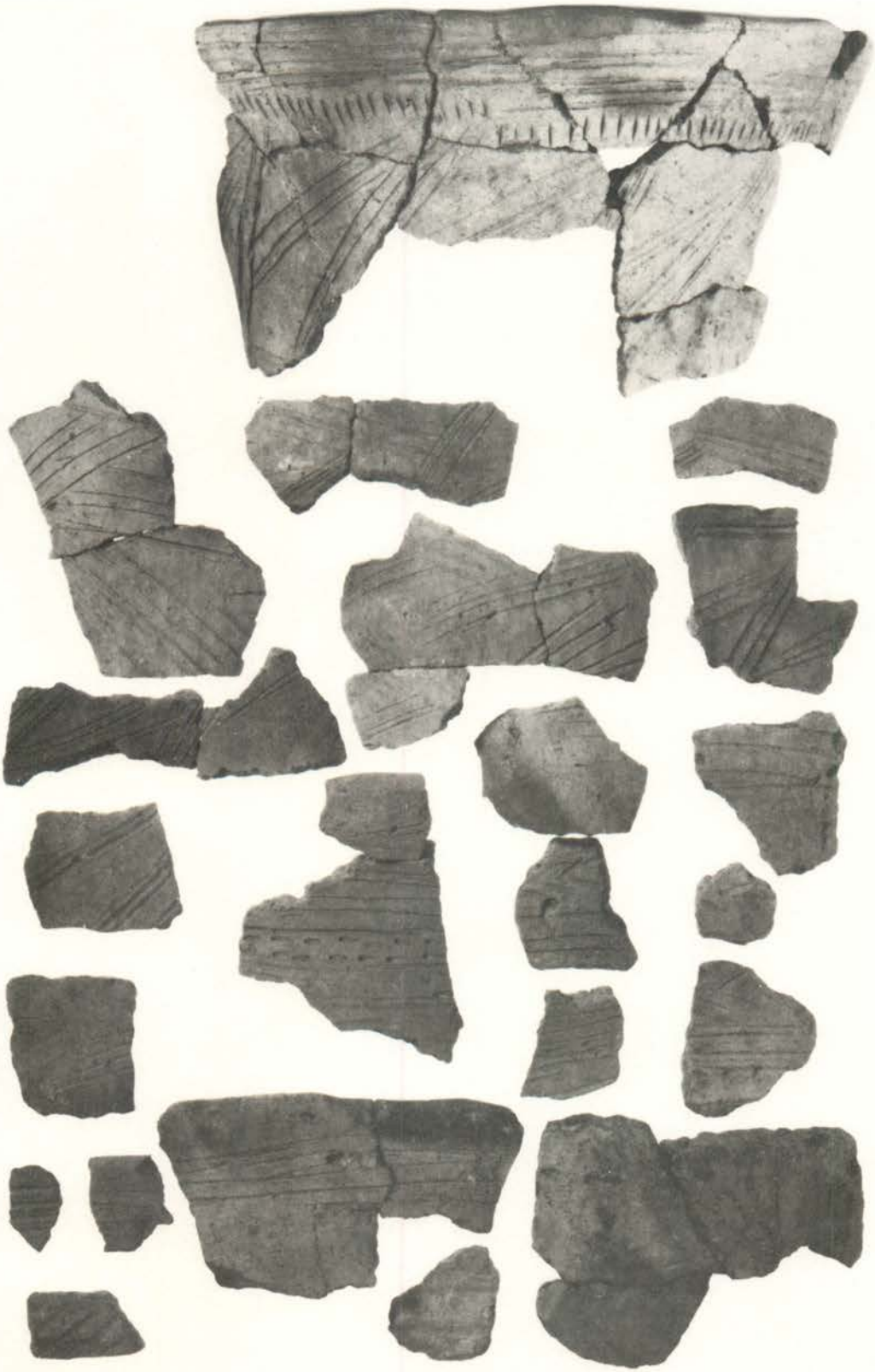
1．第8～10号炉穴

2．第11・12号炉穴

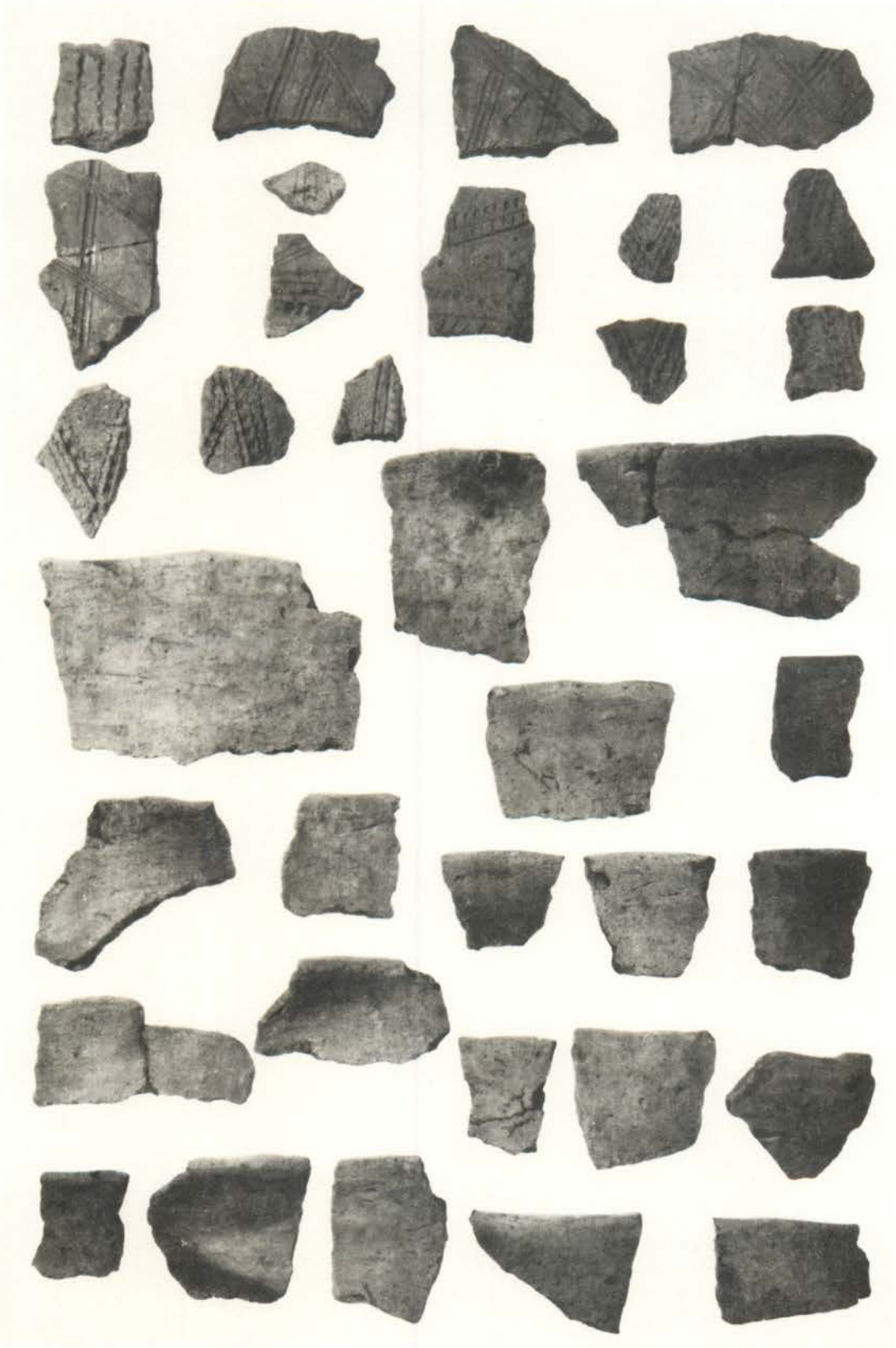
1．K75号墳遠景及びB地点全景（東より）



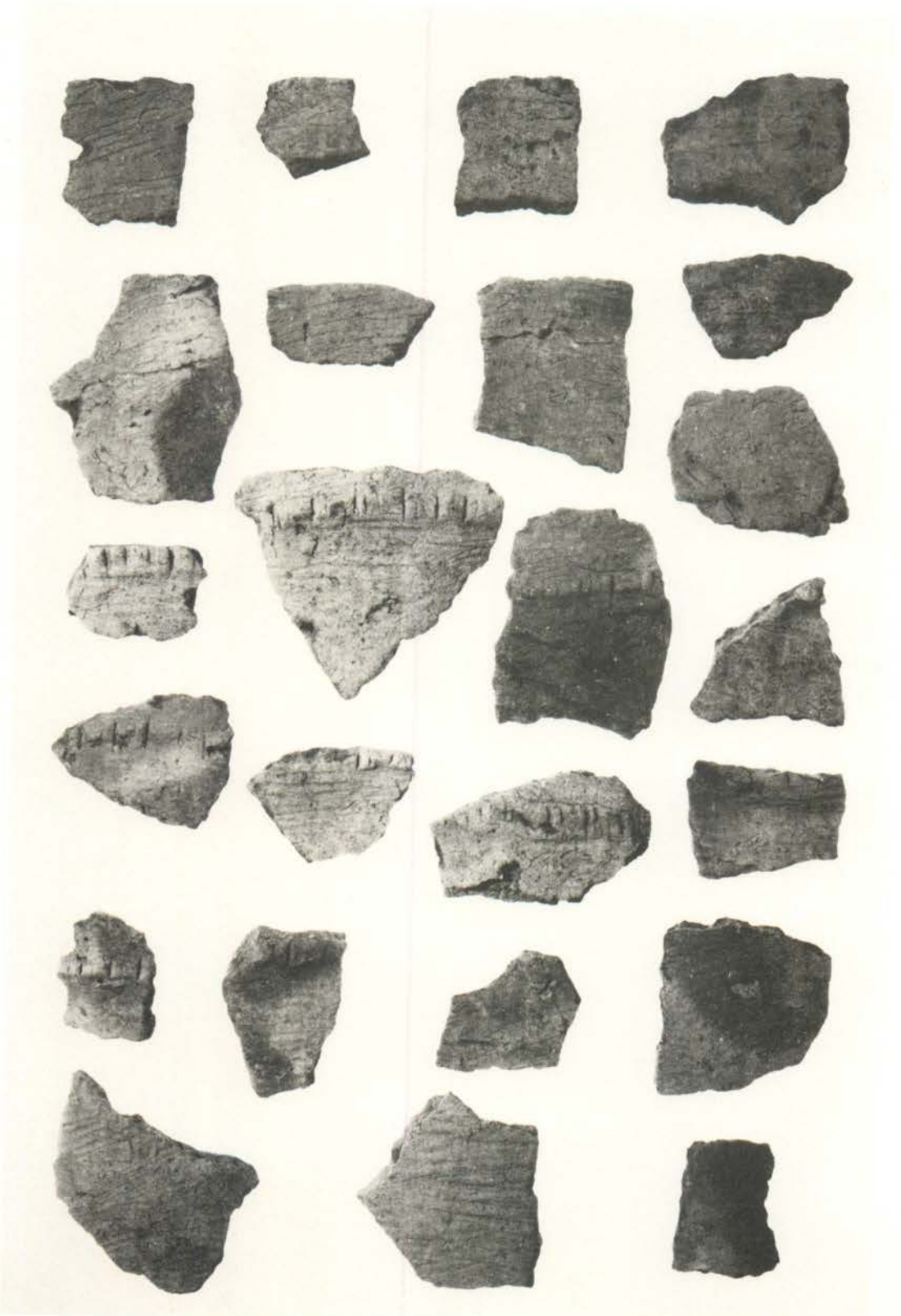
2．K75号墳周掘検出状態（東より）



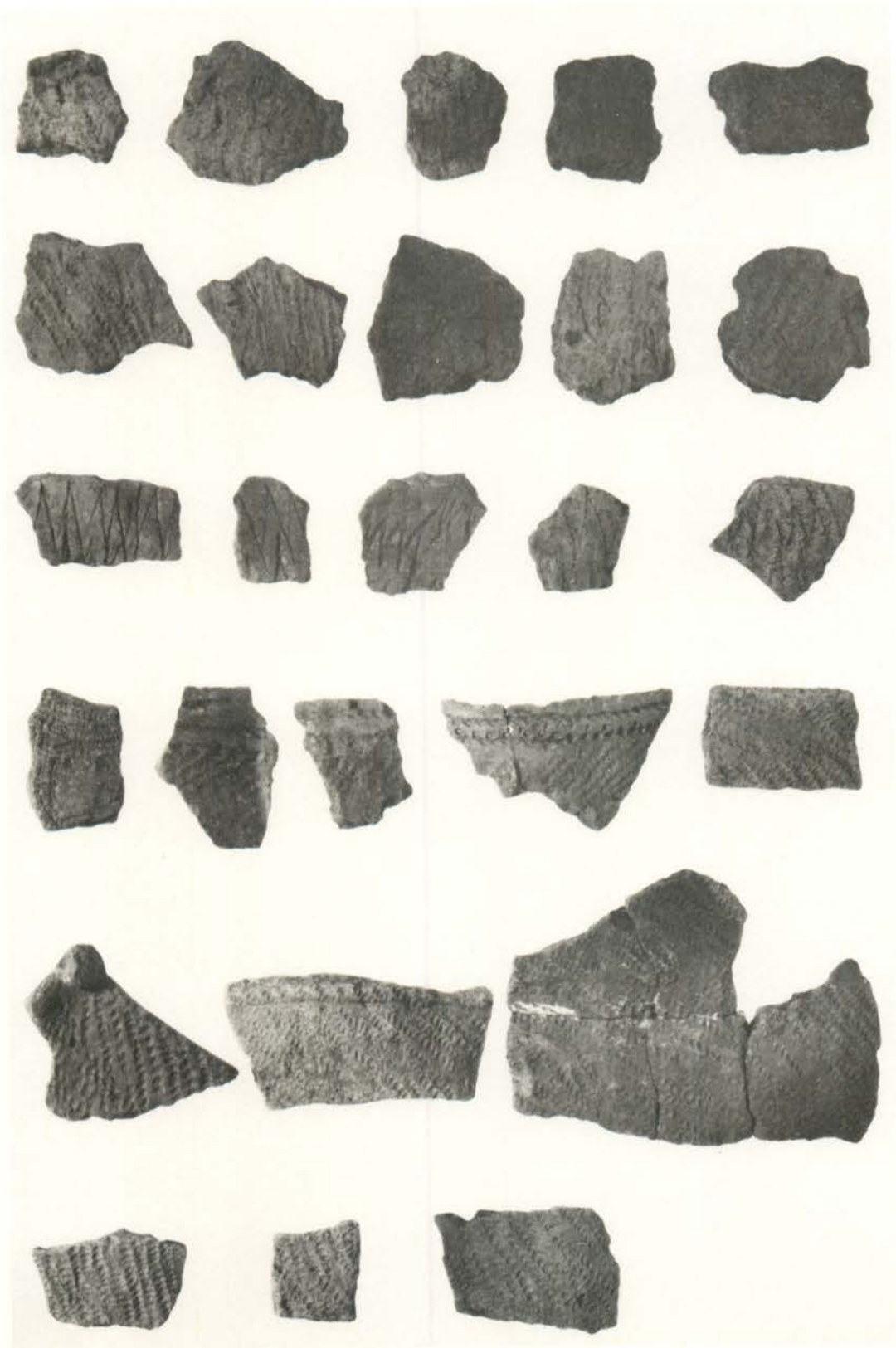
第II群土器（6～27）



第II群土器（28～42）・第III群土器（43～62）



第IV群土器（67～90）



第V群土器（91～116）

第VI・VII群土器（117～127）・土製品

1．遺跡遠景・発掘前（南より）

2．遺跡遠景・発掘後（南より）

1．第3号炭窯跡（南より）

2．第1・2号炭窯跡（手前が1号・南より）

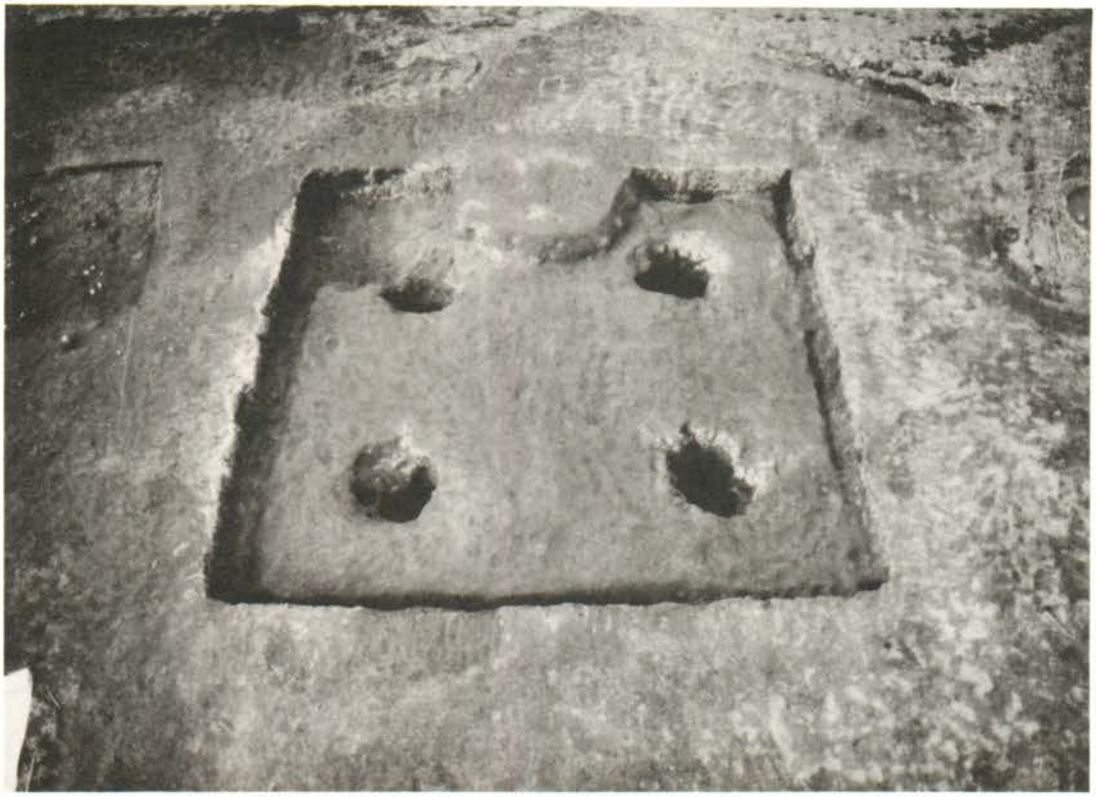
3．第5号炭窯跡（南東より）

4．第4号炭窯跡（南東より）

空写真・遺跡全景（東より）

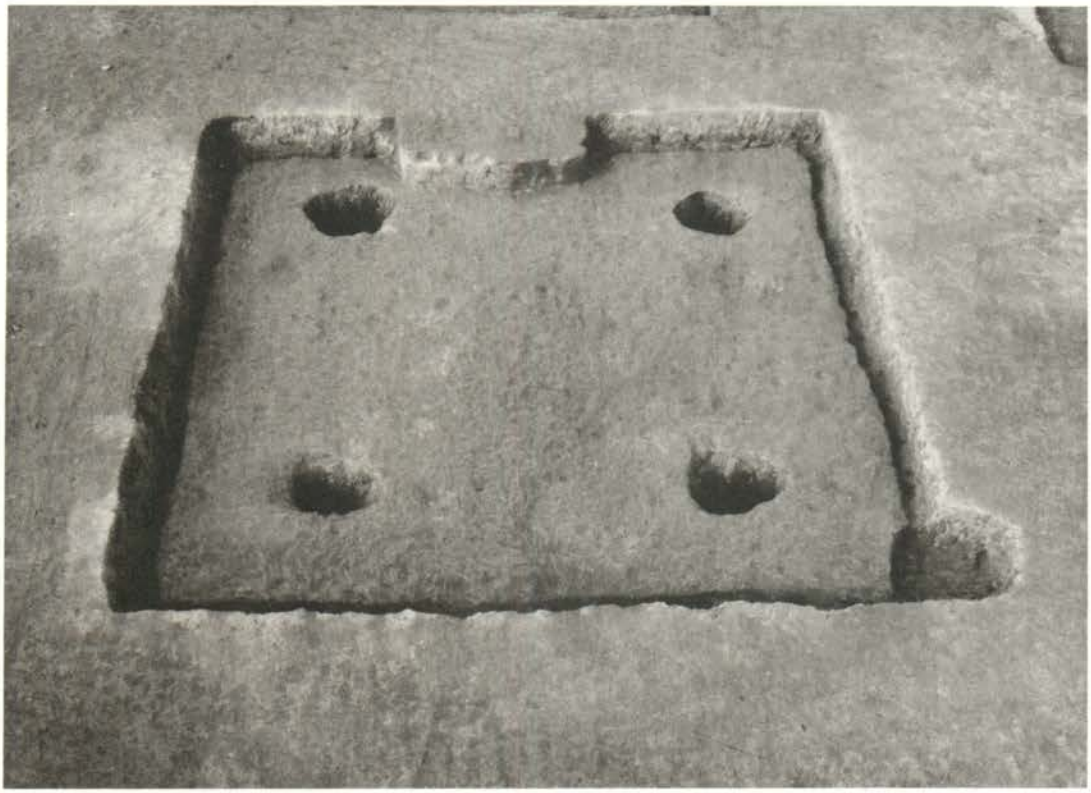
1．航空写真・遺跡全景（東より）

2．SI1・SI2（南東より）



1. SI3（南より）

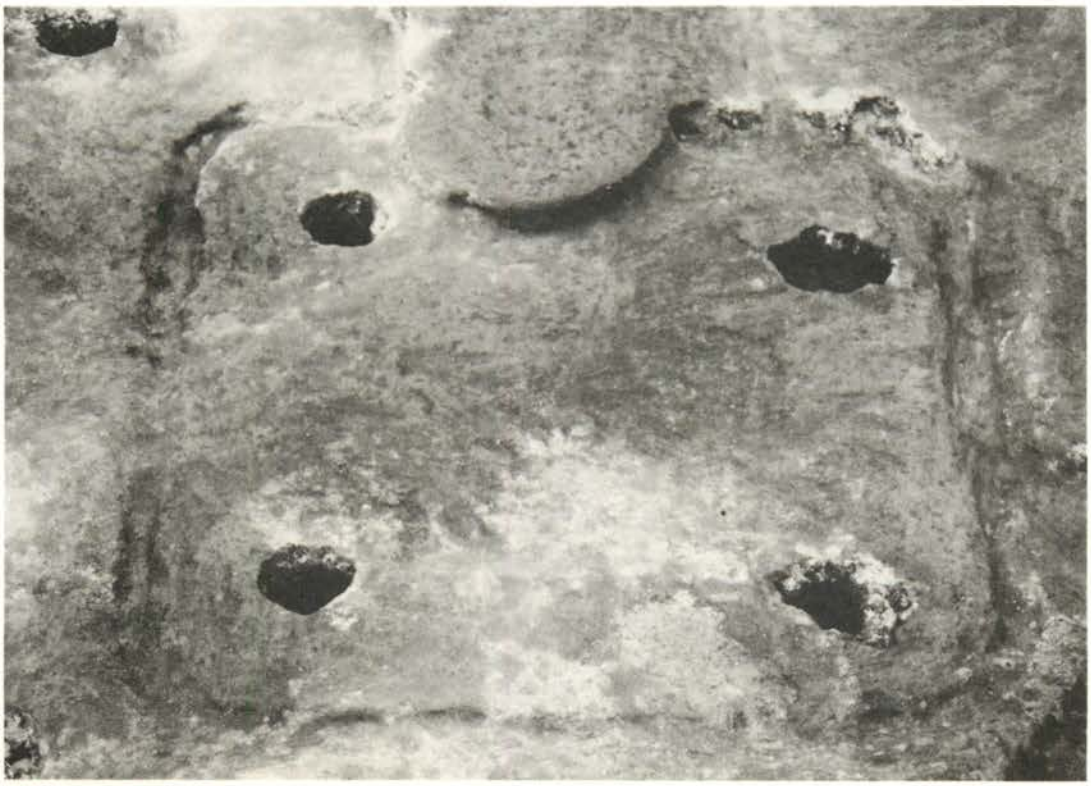
2. SI3・カマド



1. SI4（南より）

2. SI5・SI9（南西より）

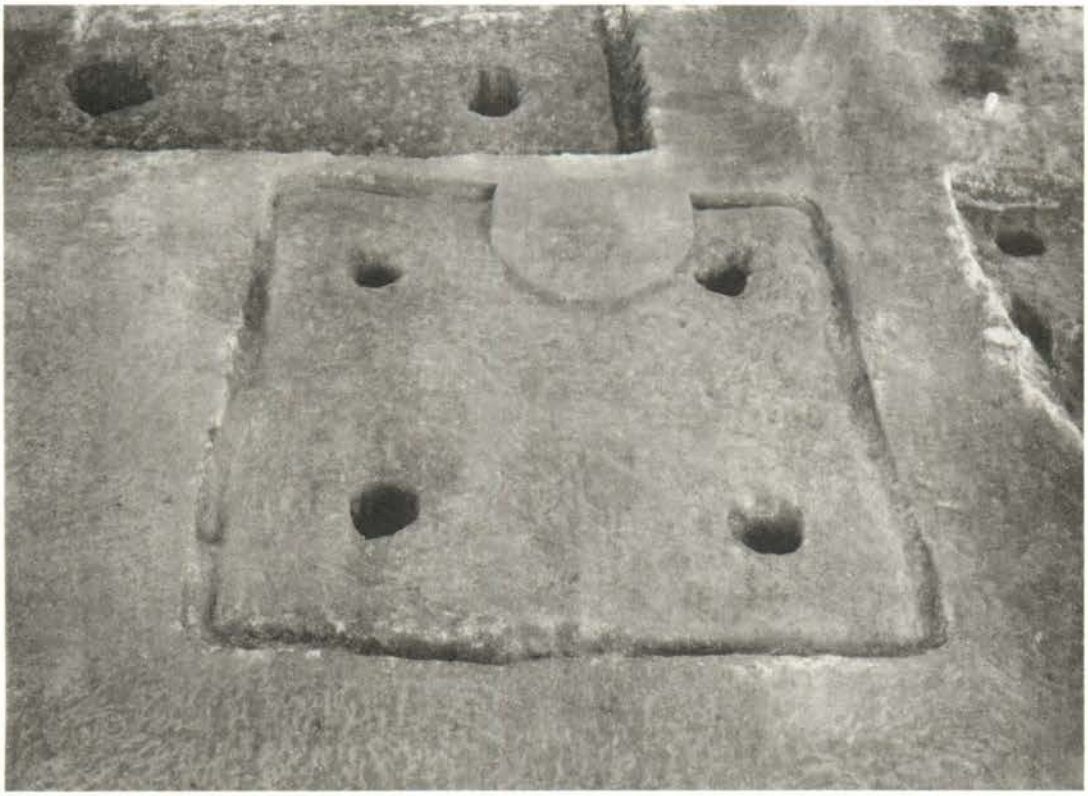
1. SI6・SI7・SI8（南東より）



2. SI8（東より）

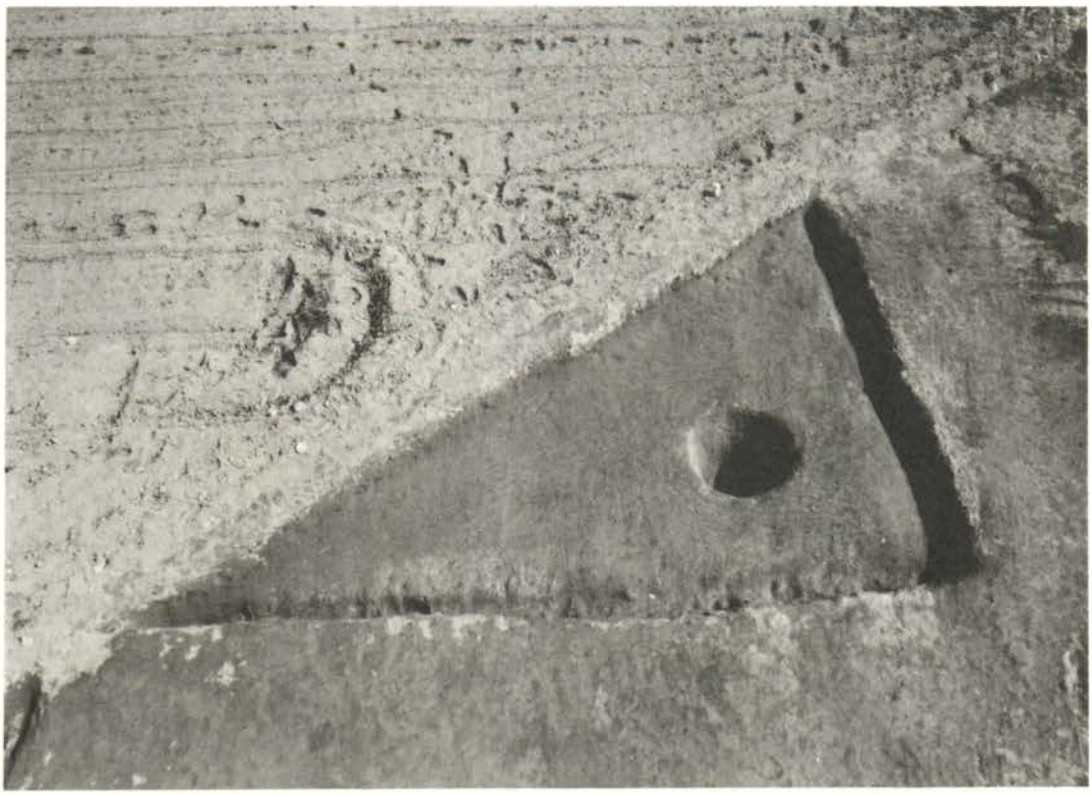
1．ＳＩ10（南より）

2．ＳＩ11・ＳＩ12（南西より）手前がＳＩ12



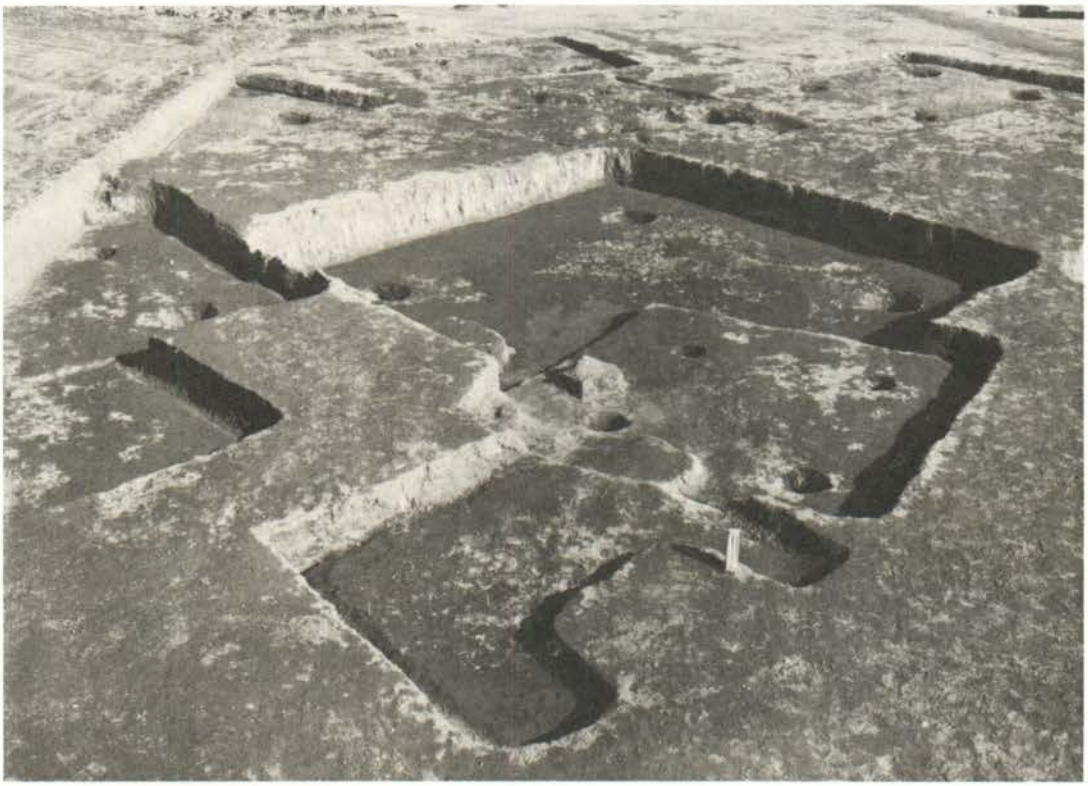
1. SI13（西より）

2. SI14（北西より）



1．ＳＩ15（南西より）

2．ＳＩ16（南東より）



1. SI16～SI20（西より）

2. SI17（南東より）

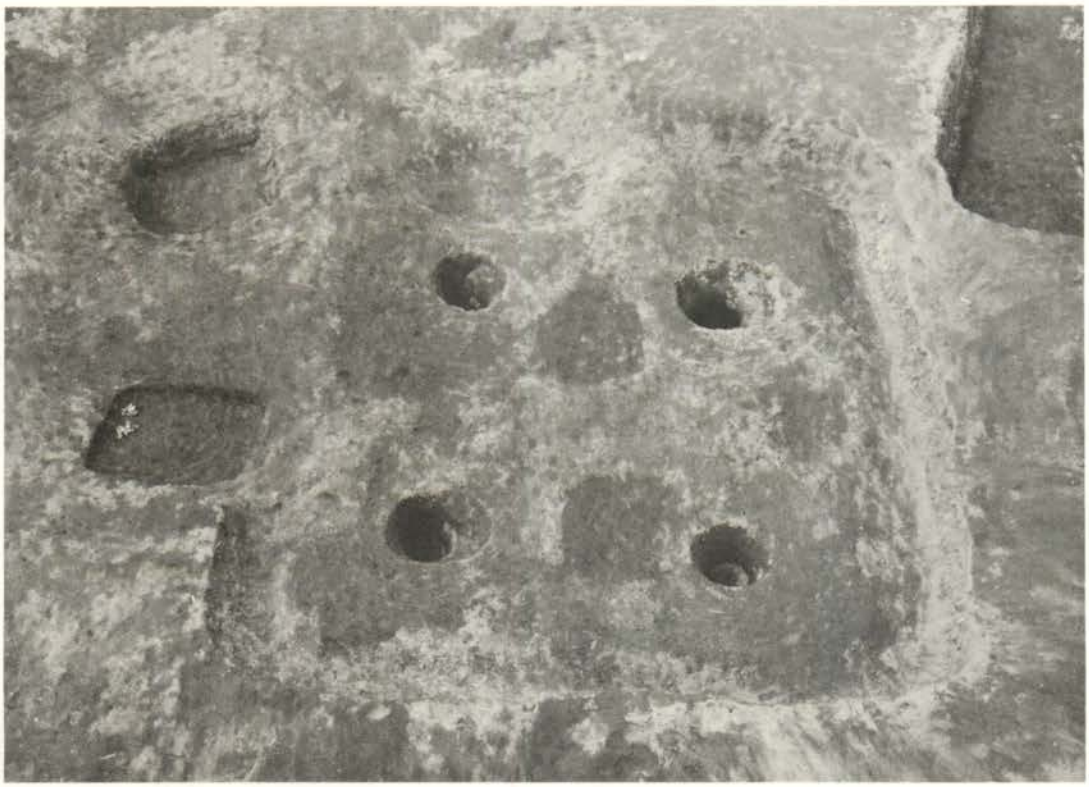
1. SI18（北西より）

2. SI19（南東より）

1. SI20（南東より）

2. SI21（南東より）

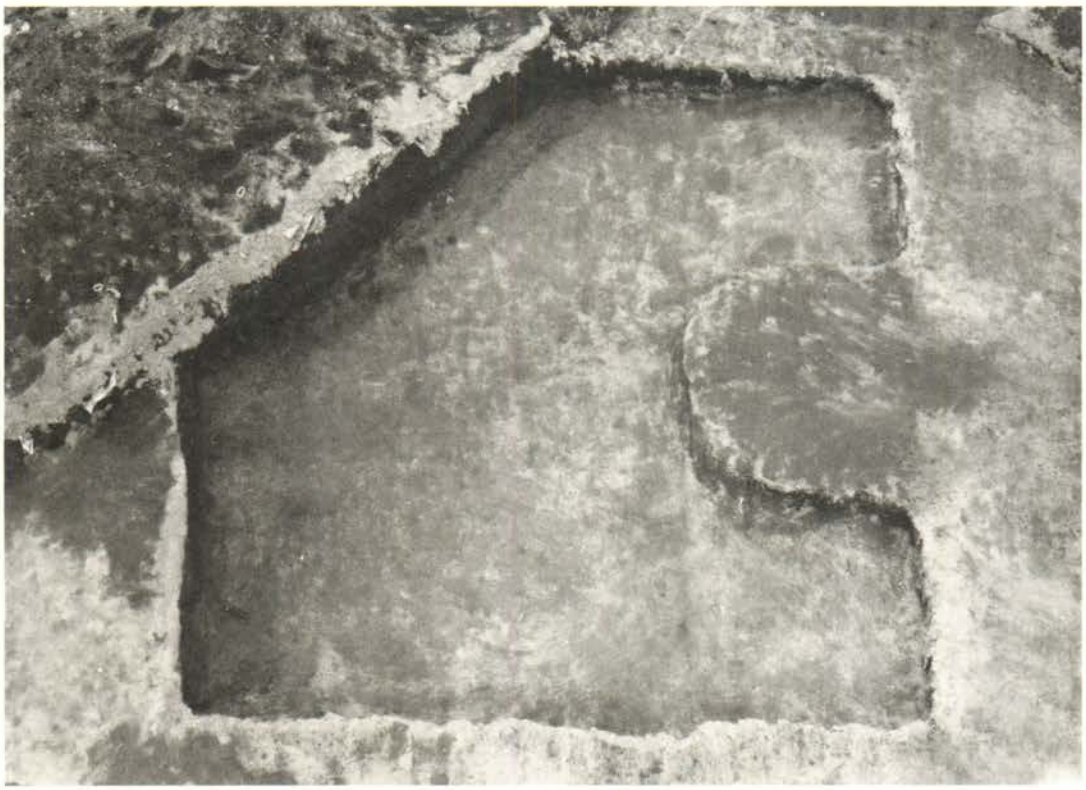
1．ＳＩ22（南東より）



2．ＳＩ23（南東より）

1. SI24（南西より）

2. SI25・SI26（南西より）



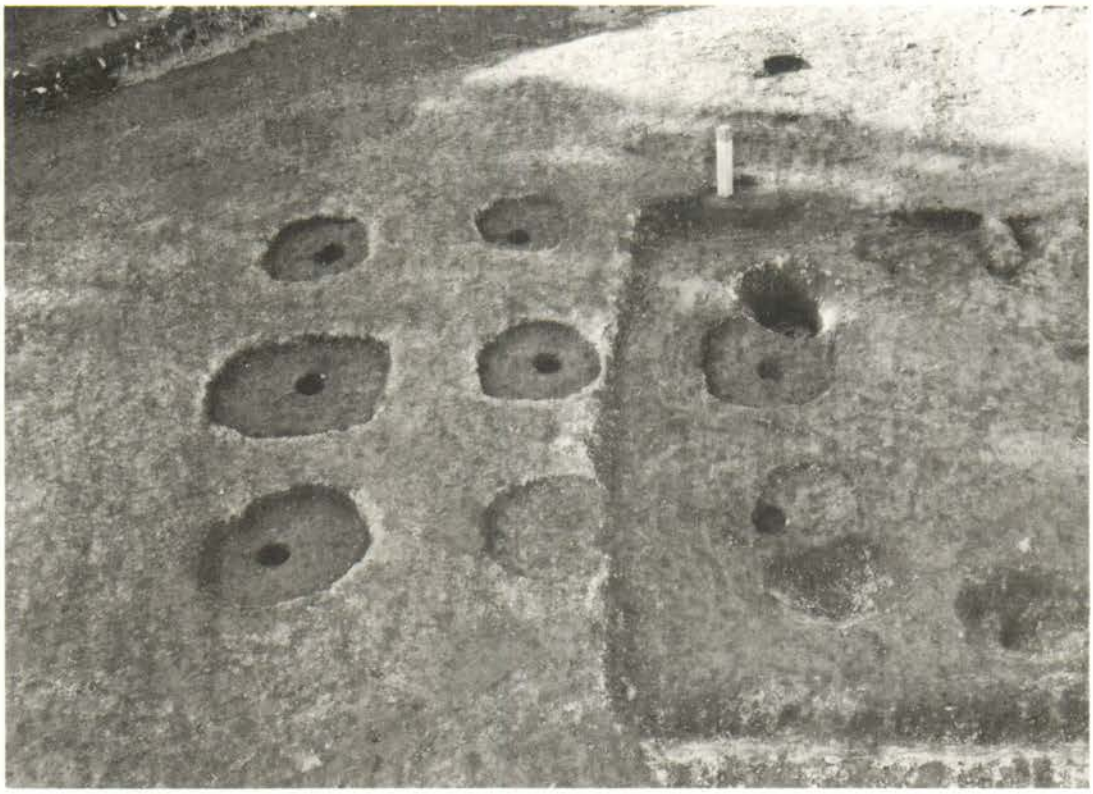
1. SI27（北東より）

2. SI28（北東より）

掘立柱建物群（北西より）

1．ＳＢ１柱穴（南東より）

2．ＳＢ１掘方（南東より）



1．ＳＢ２柱穴（南東より）

2．ＳＢ２掘方（南東より）

1. SB3（南東より）

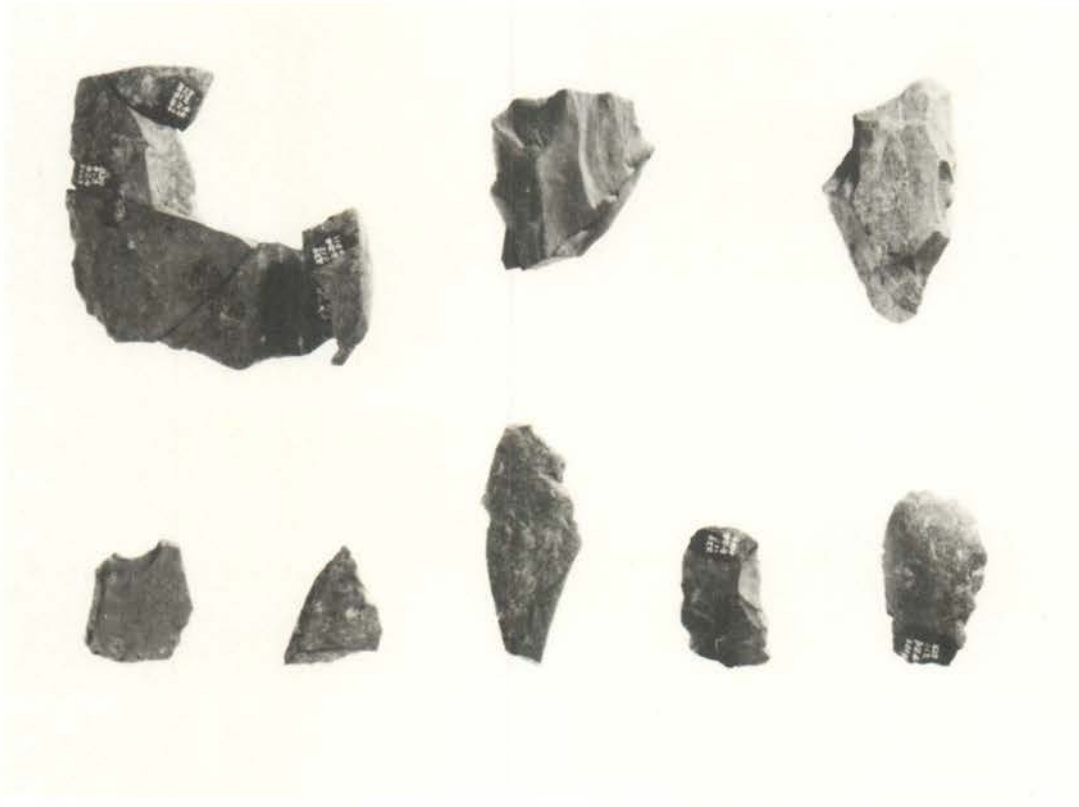
2. SB6（北より）

1．SA2（南より）

2．谷（西より）道路手前が遺物集中地点

1．谷・遺物集中地点確認状況（東より）

2．先土器時代遺物出土状況（南より）



1．先土器時代遺物

2．先土器時代遺物（刃部磨製石斧）

SI1-13

SI1一括

SI1-3

SI1-12

SI1-4

SI1-1

SI1-6

SI3-9

SI3-1

S I 4-6

S I 4-11

S I 4-10

S I 4-14

S B 6

S I 11-6

S I 7-1

S I 11-2

S I 14-1

S I 11-3

S I 12-6

S I 11-1

SI8

SI8一括

SI8-18

SI8-22

SI8-2

SI8-21

SI8-3

SI8-25

SI8-1

SI8-15

SI8-17

S I 16-74

S I 16-80

S I 16一括

S I 16-5

S I 16-10

S I 16-14

S I 16-7

S I 16-52

S I 16-39

S I 16-51

S I 16-50

S I 16-63

S I 16-53

S I 16-54

S I 16-66

S I 16-8

S I 18

S I 17-9

S I 17-10

S I 17-14

S I 19-6

S I 20-19

S I 20-13

S I 19-1

S I 20-5

S I 19-4

S I 21-15

S I 20-21

S I 21-14

S I 21-13

S I 21-4

S I 21-7

S I 24-1

S I 24-6

S I 24-12

S I 24-11

S I 24-4

S I 24-16

S I 25-8

S I 25-6

S I 25-6

S I 25

44 S I 28-9

S I 28-4

S I 28-6

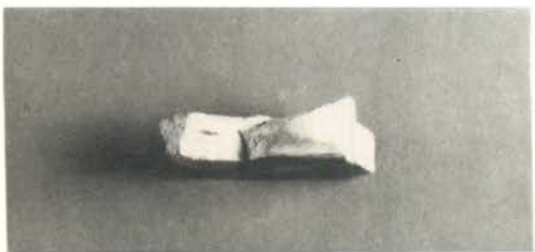
S I 28-2

S I 28-3

谷出土唐三彩陶枕片

側面

正面

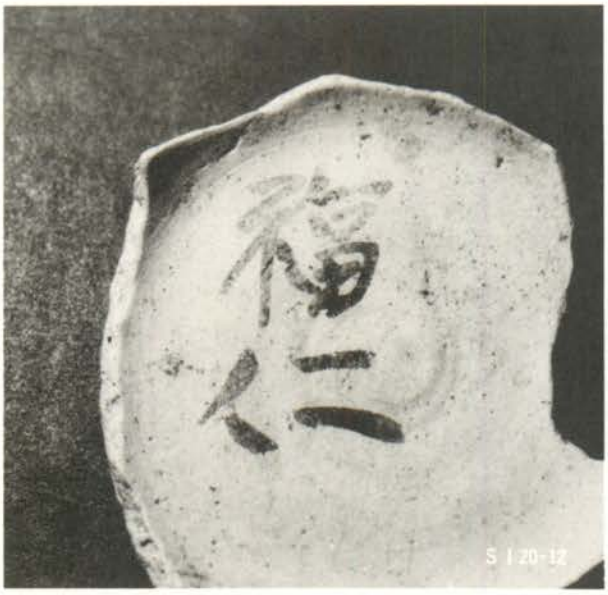


裏面接合痕

SB6

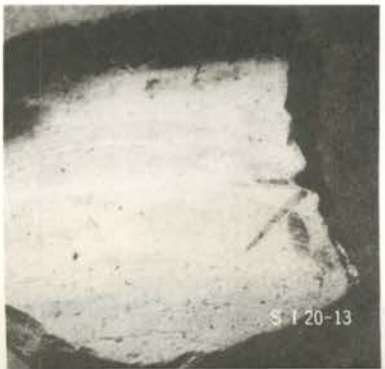
SI20-9

SI20-10



SI20-12

SI20-11



SI20-13

SI3-6

S I 20-1

S I 9-5

S I 25-3

S I 22-2

谷-335

谷-336

谷-337

谷-338

谷-342

谷-341

谷-340

谷

谷

S I 19-3

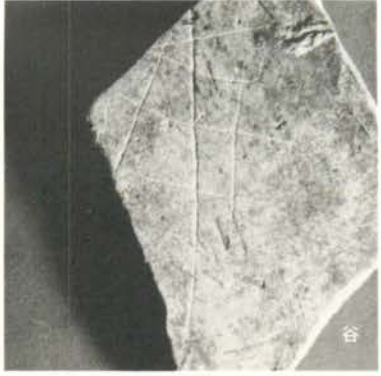
S I 9

S I 20-16

S I 22

S I 9

谷


谷

谷

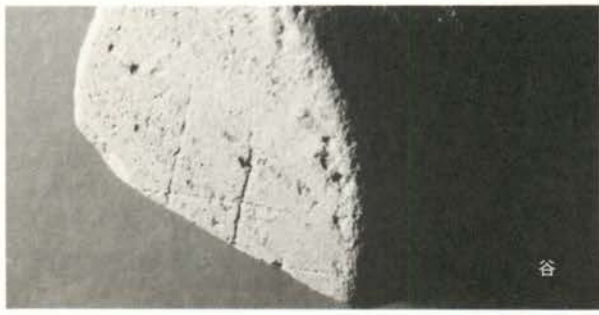
谷

谷

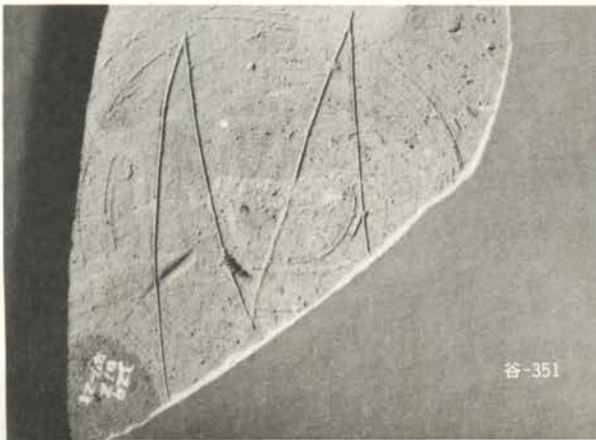
谷

谷

谷


谷

谷-405


谷-351

谷-344

谷-346

谷-347

谷

谷

谷-6

谷-4

谷-14

谷-16

谷-19

谷-22

谷-28

谷-30

谷-29

谷-31

谷-18

谷-23

谷-11

谷-21

谷-55

谷-40

谷-56

谷-52

谷-47

谷-54

谷-43

谷-51

谷-50

谷-46

谷-64

谷-49

谷-135

谷-89

谷-114

谷-90

谷-101

谷-120

谷-117

谷-100

谷-119

谷-133

谷-107

谷-99

谷-131

谷-96

谷-137

谷-166

谷-176

谷-153

谷-143

谷-141

谷-339

谷-151

谷-159

谷-136

谷-173

谷-154

谷-139

谷-140

谷-145

谷-160

谷-162

谷-168

谷-149

谷-163

谷-150

谷-152

谷-167

谷-164

谷-142

谷-157

谷-174

谷-165

谷-185

谷-190

谷-183

谷-233

谷-182

谷-186

谷-184

谷-189

谷-192

谷-188

谷-199

谷-202

谷-206

谷-211

谷-231

谷-197

谷-191

谷-193

谷-229

谷-205

谷-208

谷-219

谷-204

谷-232

谷-235

合子(239)蓋(234)組合せ

谷-242

谷-234

谷-239

谷-240

谷-246

谷-244

谷-249

谷-248

谷-247

谷-256

谷-255

谷-270

谷-253

谷-269

谷-271

谷-261

谷-262

谷-260

谷-265

谷-257

谷-258

谷-280

谷-290

谷-281

谷-283

谷-282

谷-289

谷-286

谷-288

谷-306

谷-305

谷-303

谷-309

谷-297

谷-299

谷-294

谷-291

谷-292

谷-300

谷-301

谷-298

谷-302

谷-313

谷-314

谷-317

谷-315

谷-316

谷-321

谷-322

谷出土陶硯

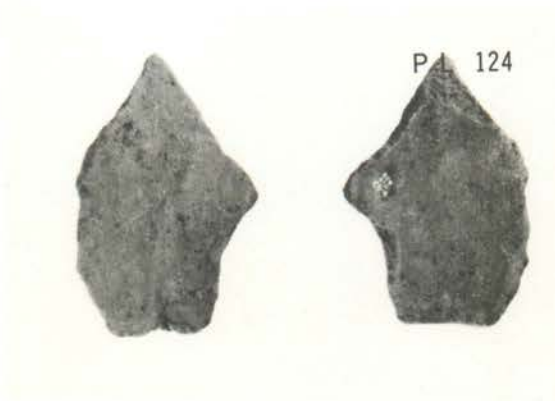
谷-4

谷-3

谷-1

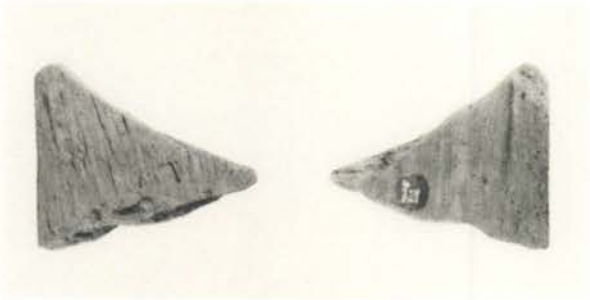
谷-6

平瓦②



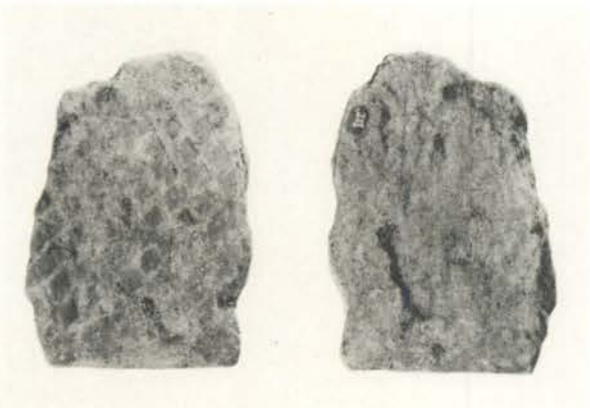
平瓦①

平瓦③



平瓦④

平瓦⑦



平瓦⑥

平瓦⑤

丸瓦⑨

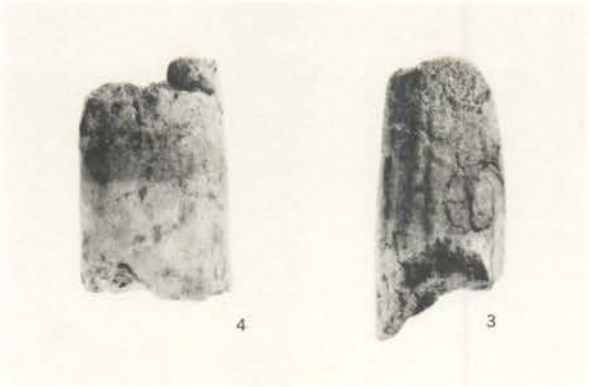
丸瓦⑨

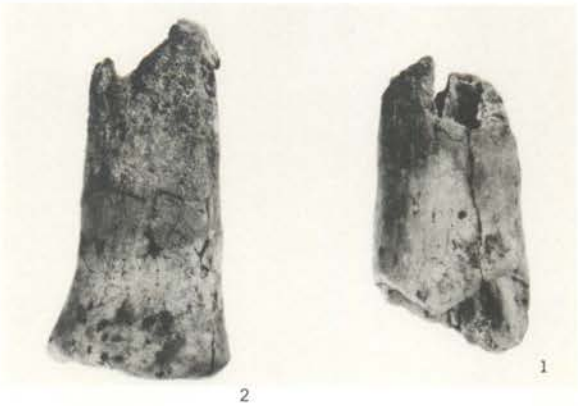
道具瓦⑪

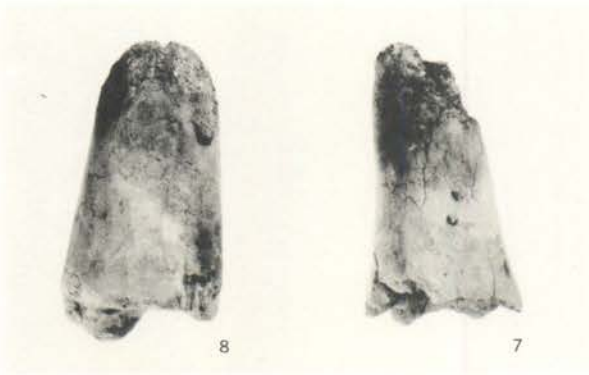
道具瓦⑩

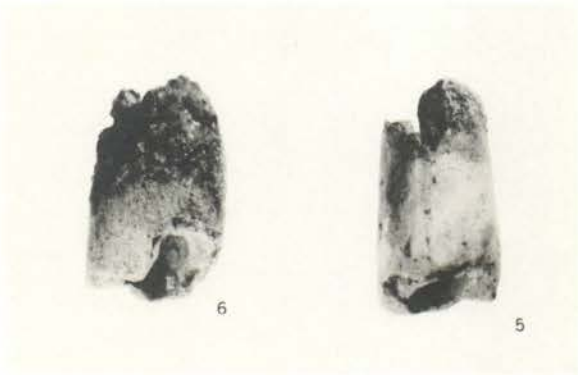
土専⑫

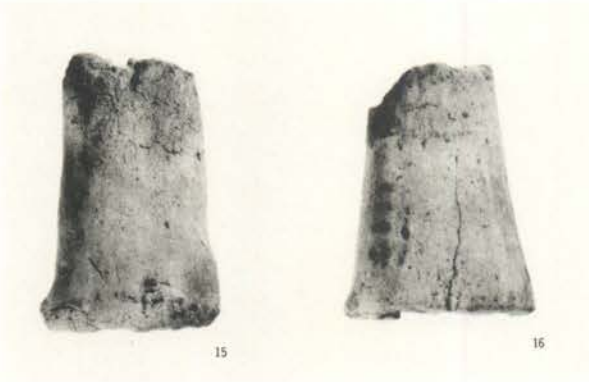
不明須恵器（塔状？燭台？）


4
3


2
1


8
7

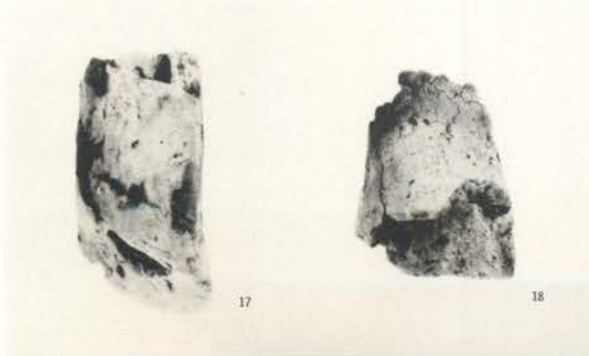

6
5

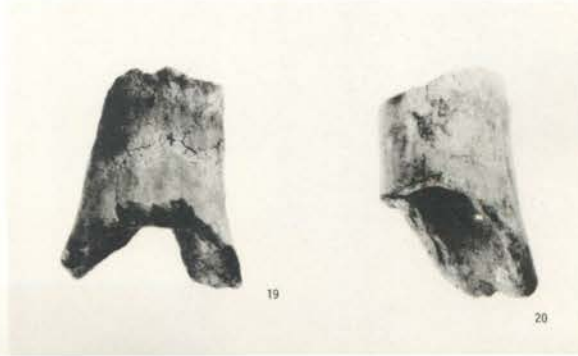

15
16

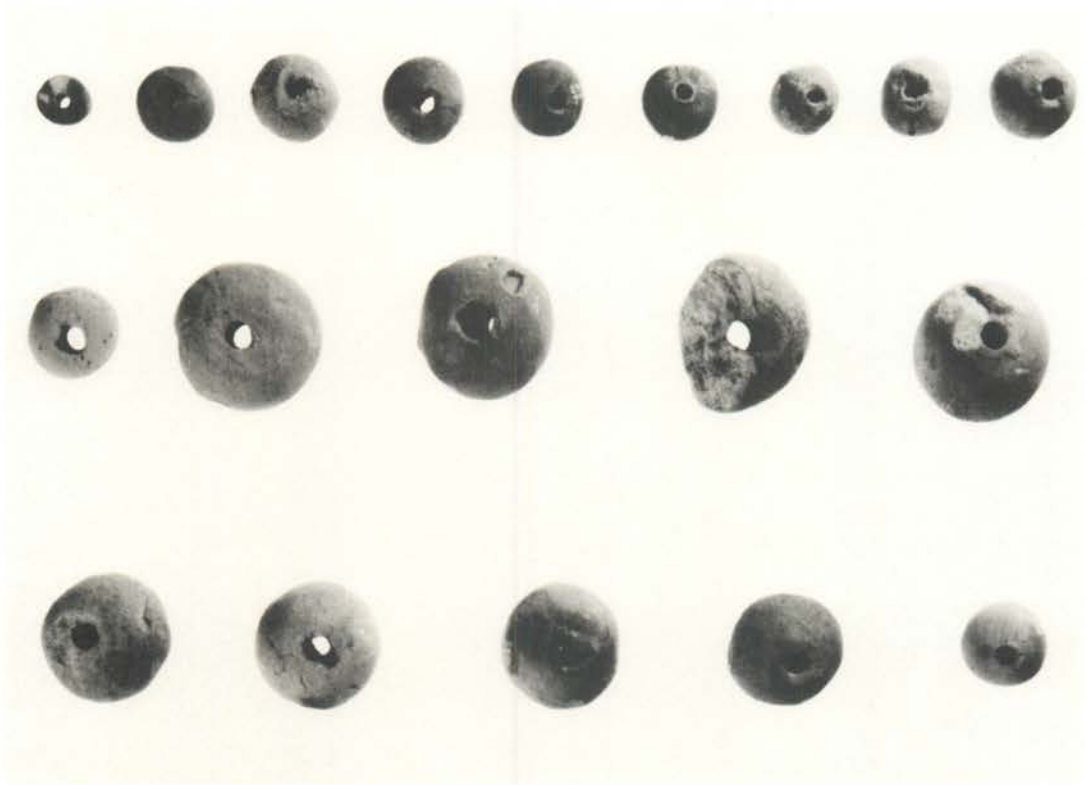
10
9

11
12
13

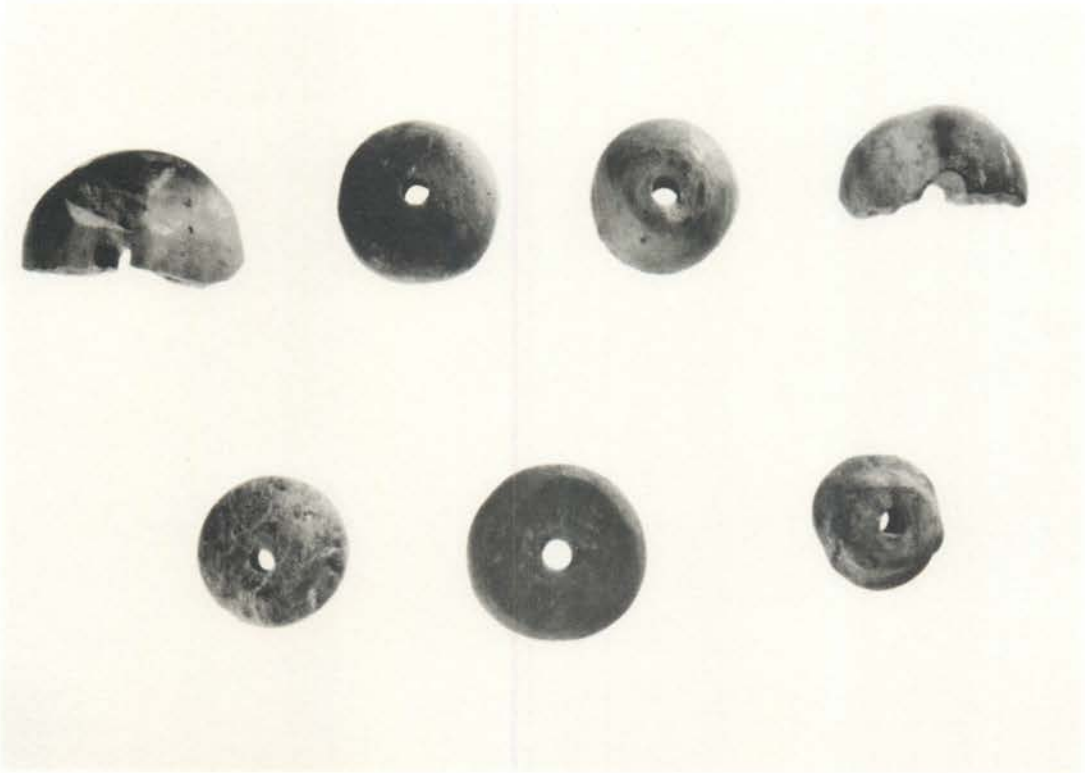
14


17
18


19
20

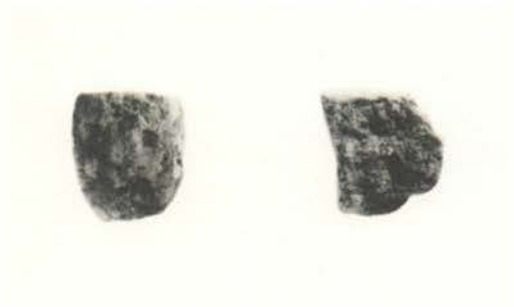


2．谷出土紡錘車　（上段ＳＩ16・中段ＳＩ16・ＳＩ17・下段ＳＩ21）



1．竪穴住居跡出土土玉

谷出土砥石

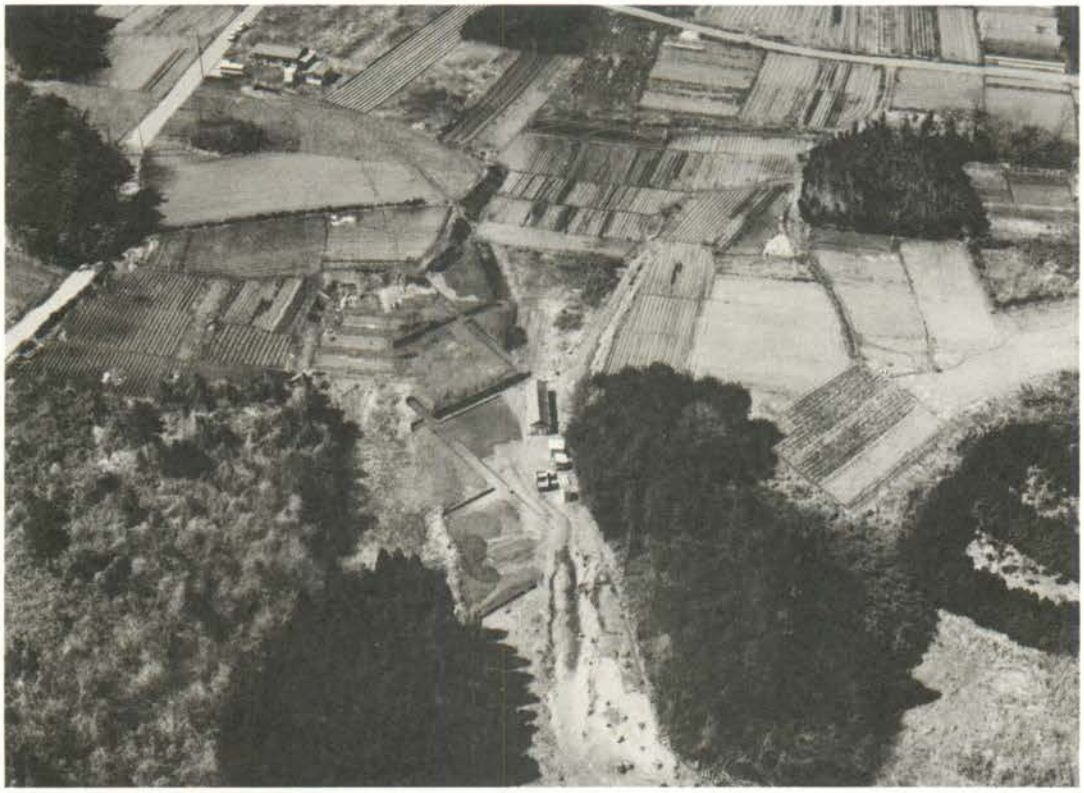


谷出土砥石

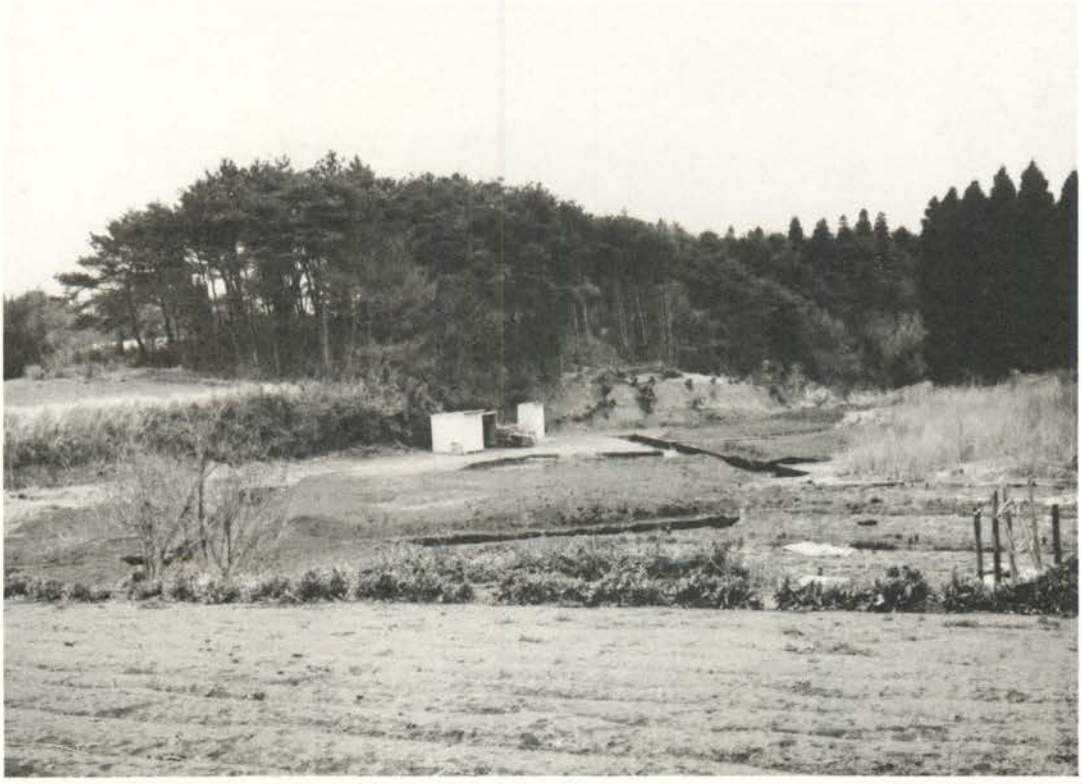
谷出土砥石

谷出土浮子

S I 6出土浮子



1．航空写真・遺跡全景（上方は大畑Ⅰ遺跡）東より



2．遺跡遠景（南西より）

1．遺跡近景（南東より）

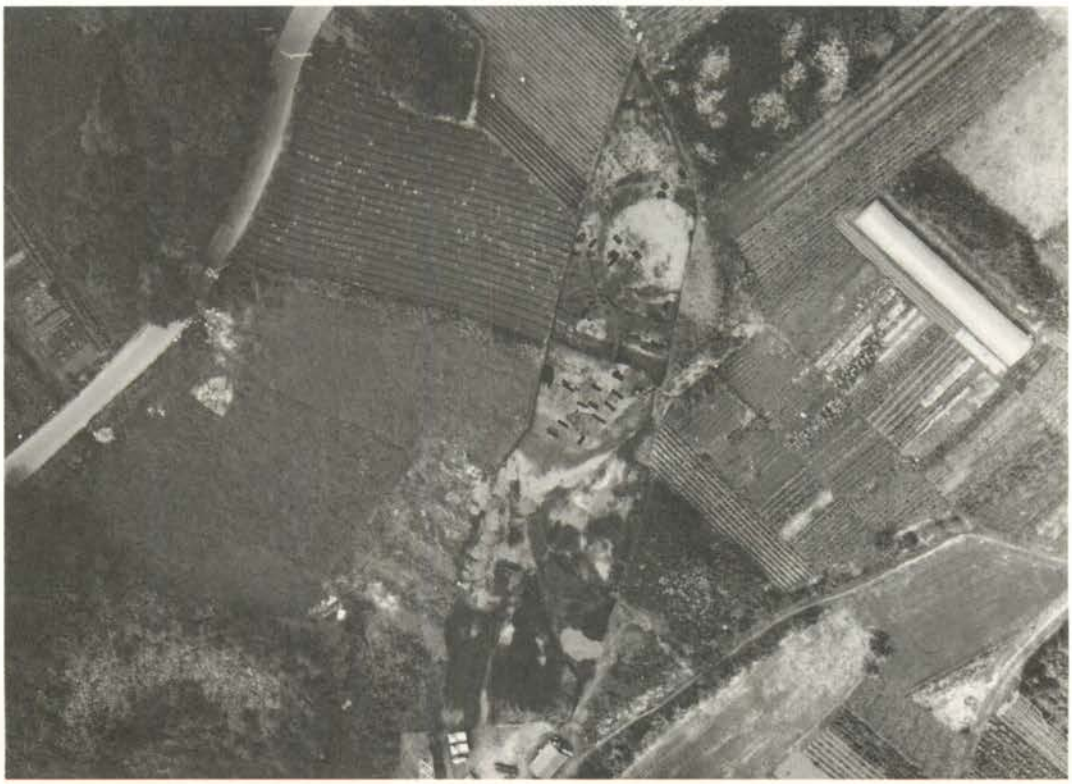
2．第1号住居跡（西より）

航空写真・発掘前周辺地形（北より）

1．航空写真・周辺地形（上方は利根川）南より

2．航空写真・周辺地形（竜角寺上空より印旛沼をのぞむ）北より

1．航空写真・昭和56年度調査地点全景（北より）

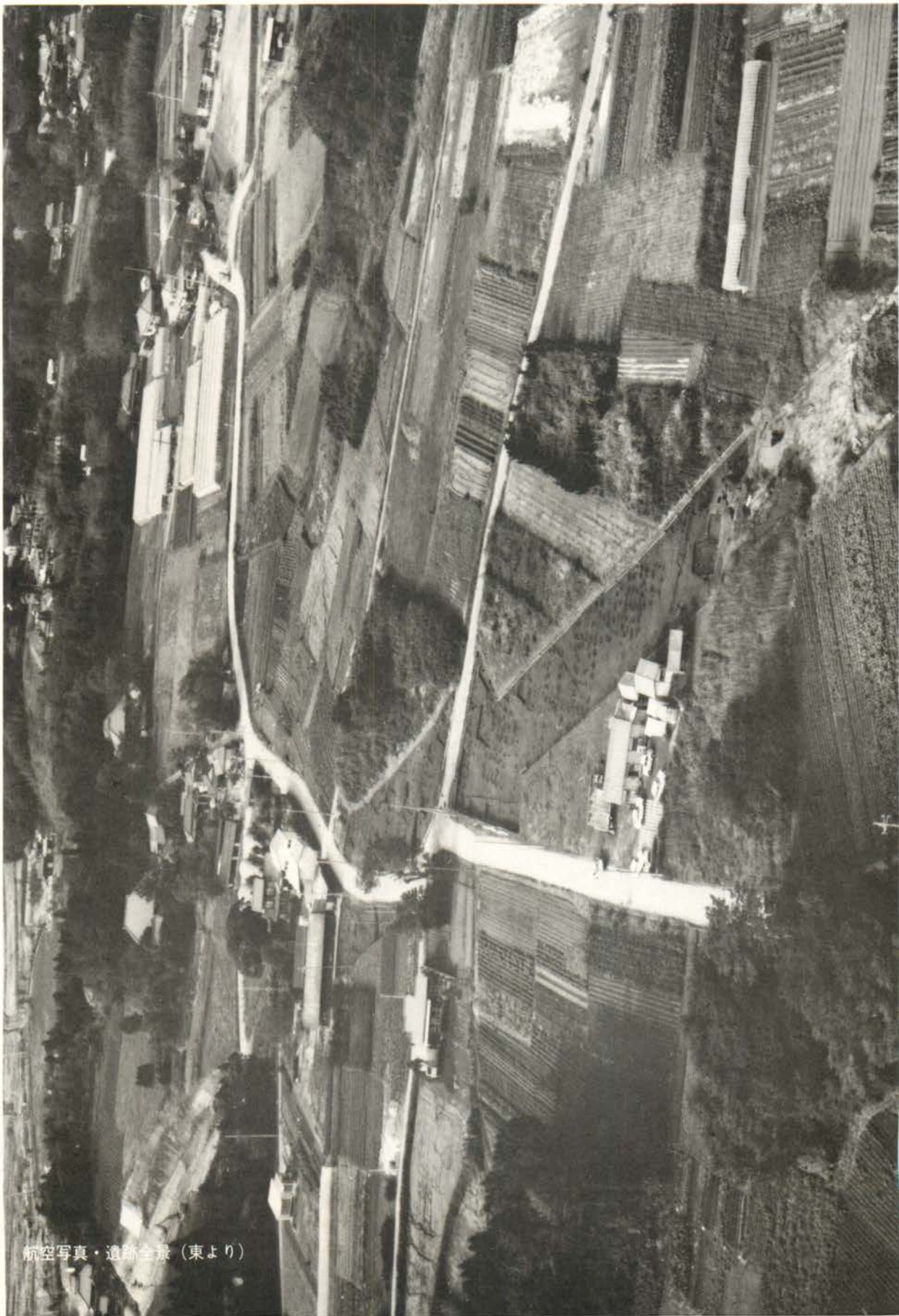


2．航空写真・昭和56年度調査地点全景（東より）

航空写真・昭和57年度調査地点全景（南より）

1．航空写真・遺跡全景（上方は向台遺跡）北東より

2．航空写真・遺跡全景（北より）



航空写真・遺跡全景（東より）

航空写真・D-12、E-12グリッド付近（北東より）

1

2

現地説明会風景

昭和57年 9 月25日(土)

1．あいさつ・説明

2．3　現場見学

3

1．発掘風景（58年度）東より

2．発掘風景（ＳＢ15）

1．A地点発掘前全景（東より）

2．A地点発掘後全景（東より）

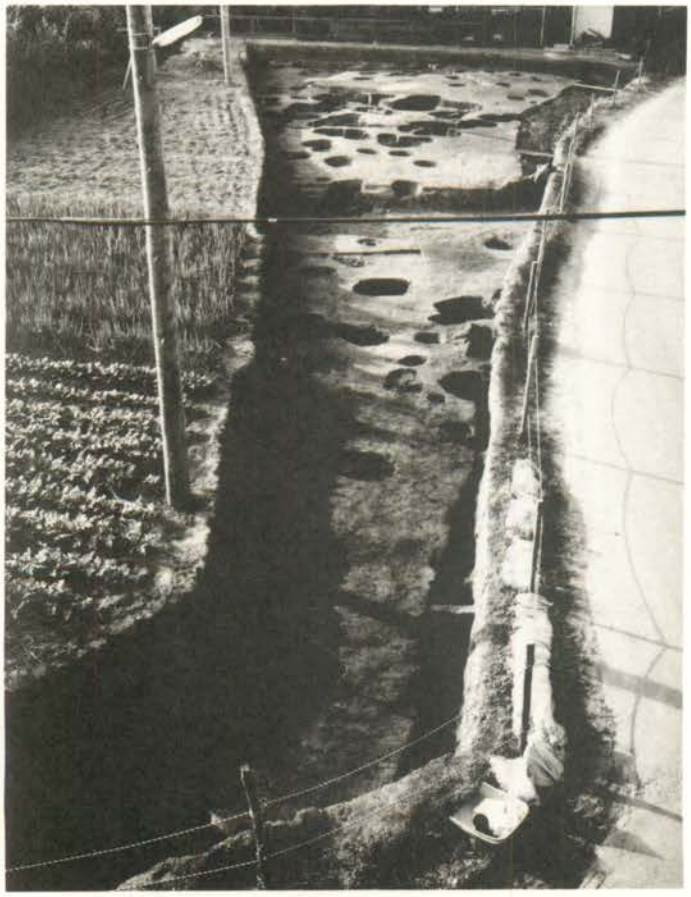
1．A地点発掘前全景（西より）

2．A地点発掘後全景（西より）

1．B地点発掘前全景（東より）

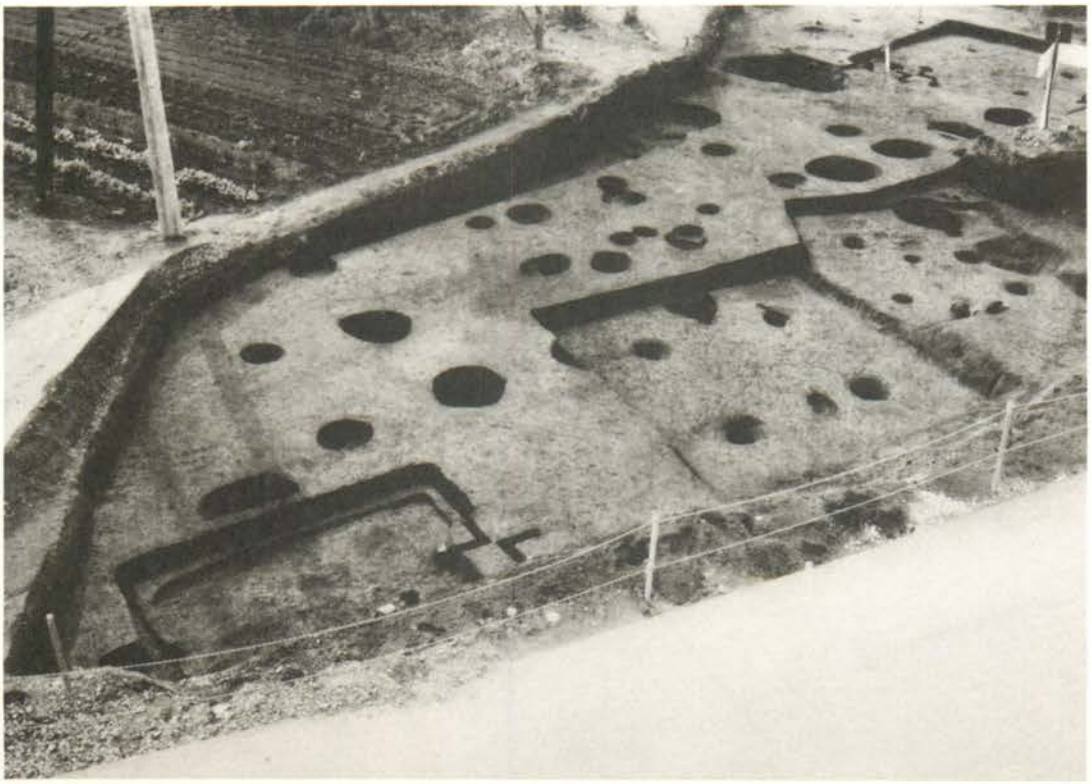
2．B地点発掘後全景（東より）

1．C地点発掘前全景（東より）



2．C地点発掘後全景（東より）

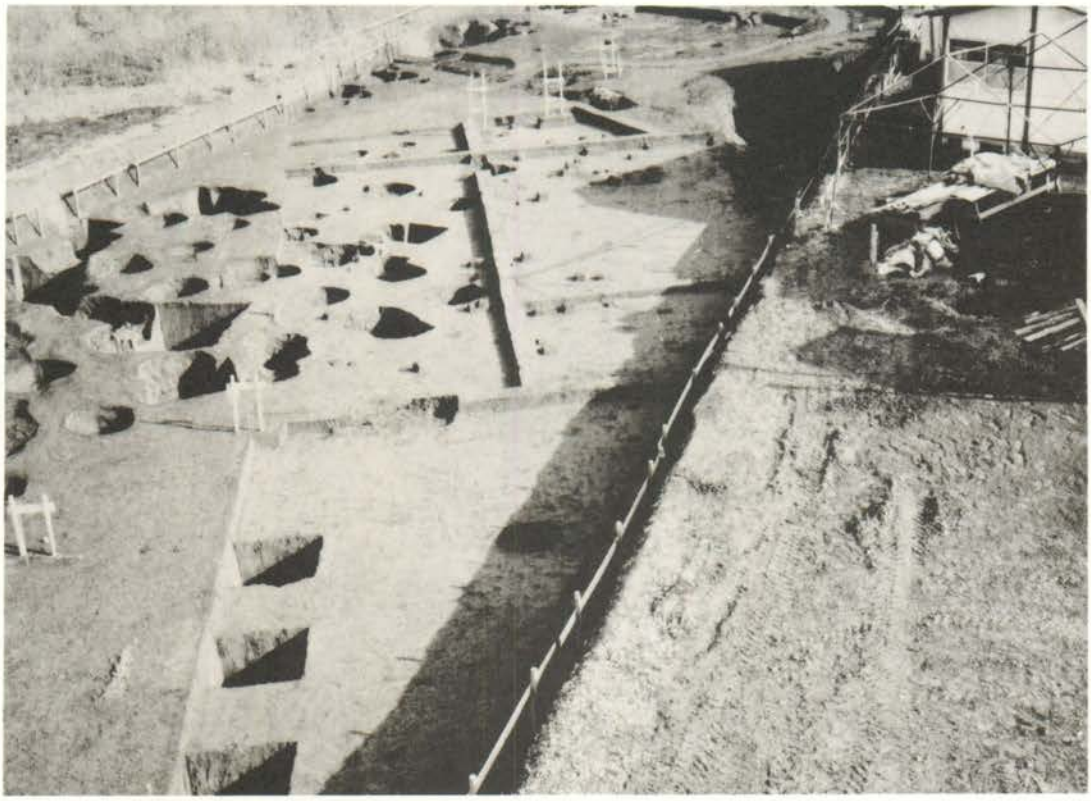
1．道路C地区全景（西より）



2．道路C地区東端部（東より）

1．C地点・道路B地点全景（東より）

2．58年度調査区全景（東より）



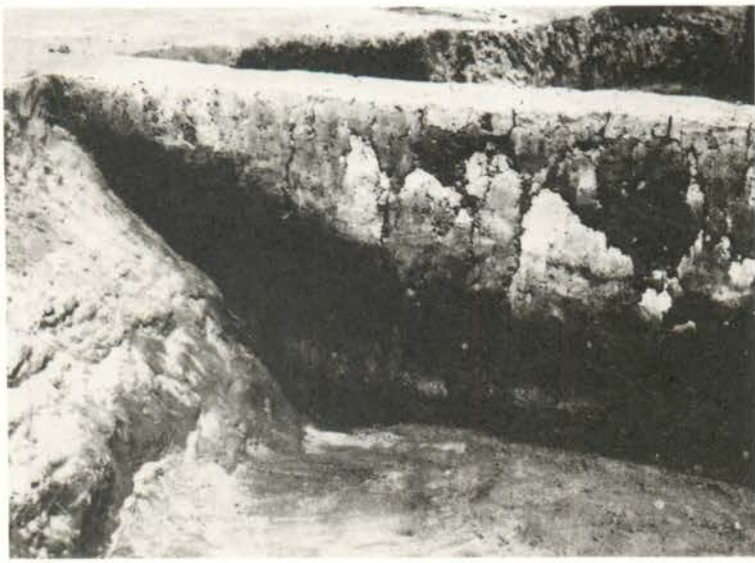
1．先土器時代調査区全景（西より）

2．先土器時代・F-9-5グリッド礫群出土状況（南より）

1．第1～3号炉穴（手前が1号）

2．第4～9号炉穴

1



2

K112号墳

1．周堀全景（東より）

2．周堀土層

3．鉄器出土状況

3

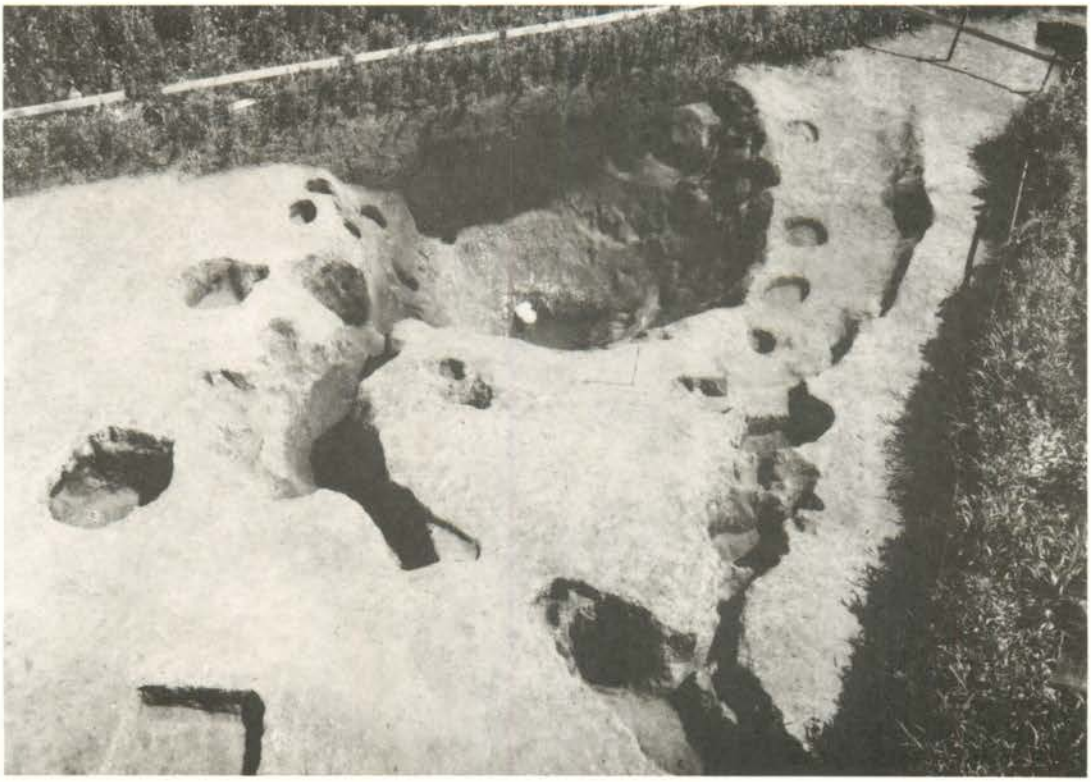
1．K７号墳全景（西より）

2．A地点東端全景（西より）

1. SD1全景（南より）

2. SD4全景（北より）

1．ＳＥ１、ＳＥ２全景（西より）



2．ＳＥ１全景（北より）

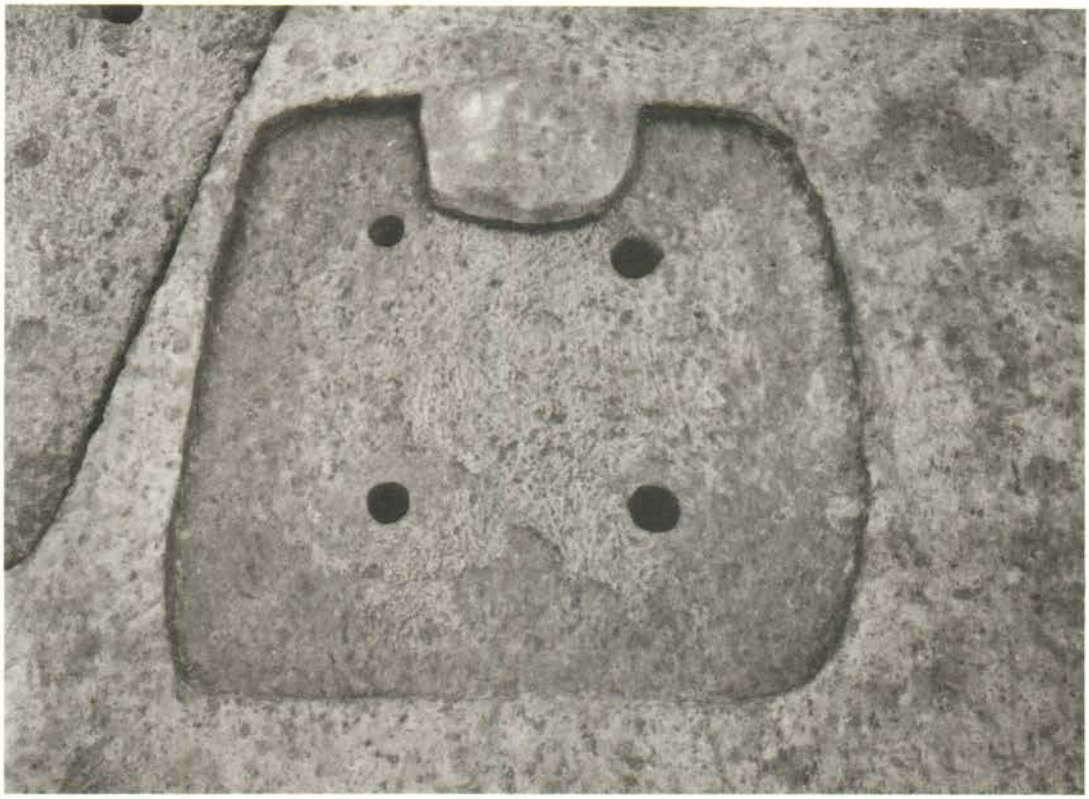
1．ＳＥ２全景（西より）

2．ＳＥ３全景（北より）

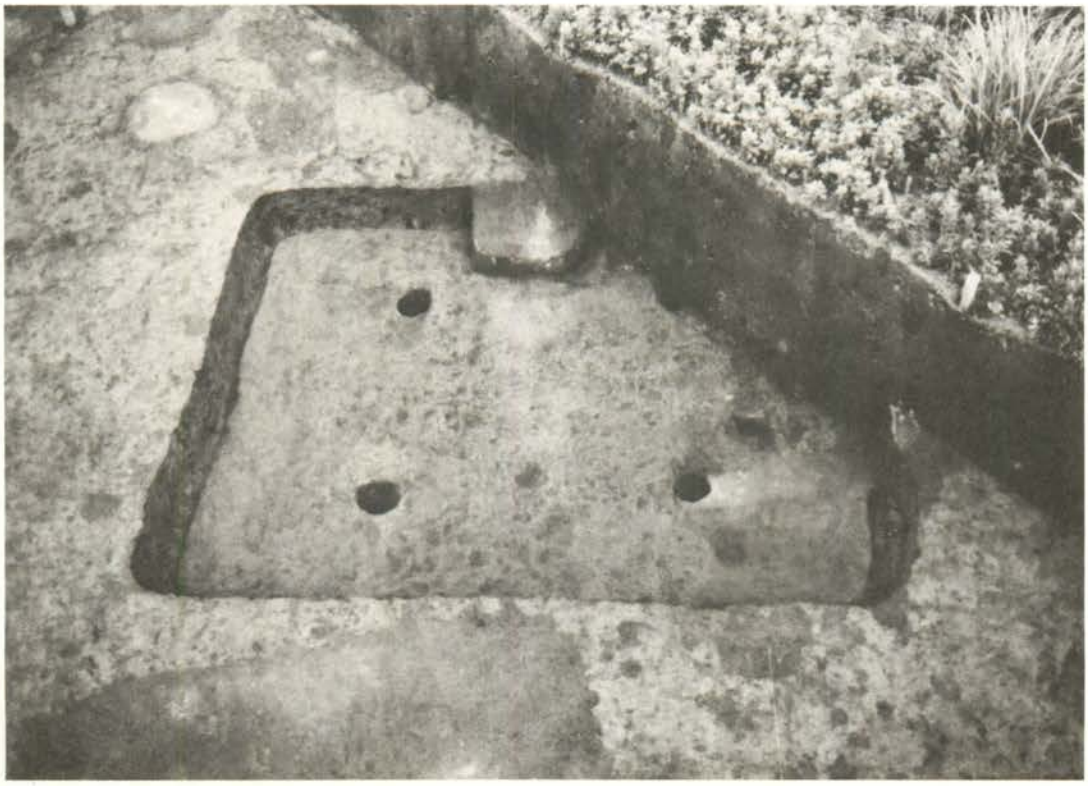
1. SI 1（南より）

2. SI 2（東より）

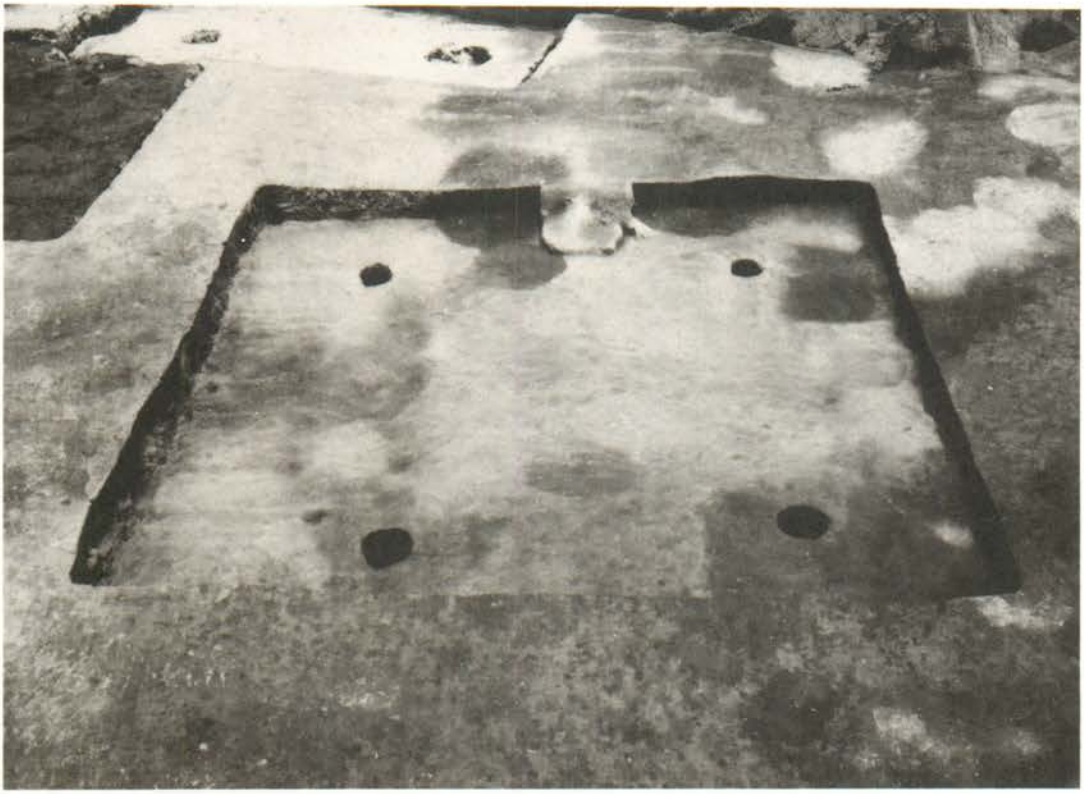
SI3～SI6（南より）



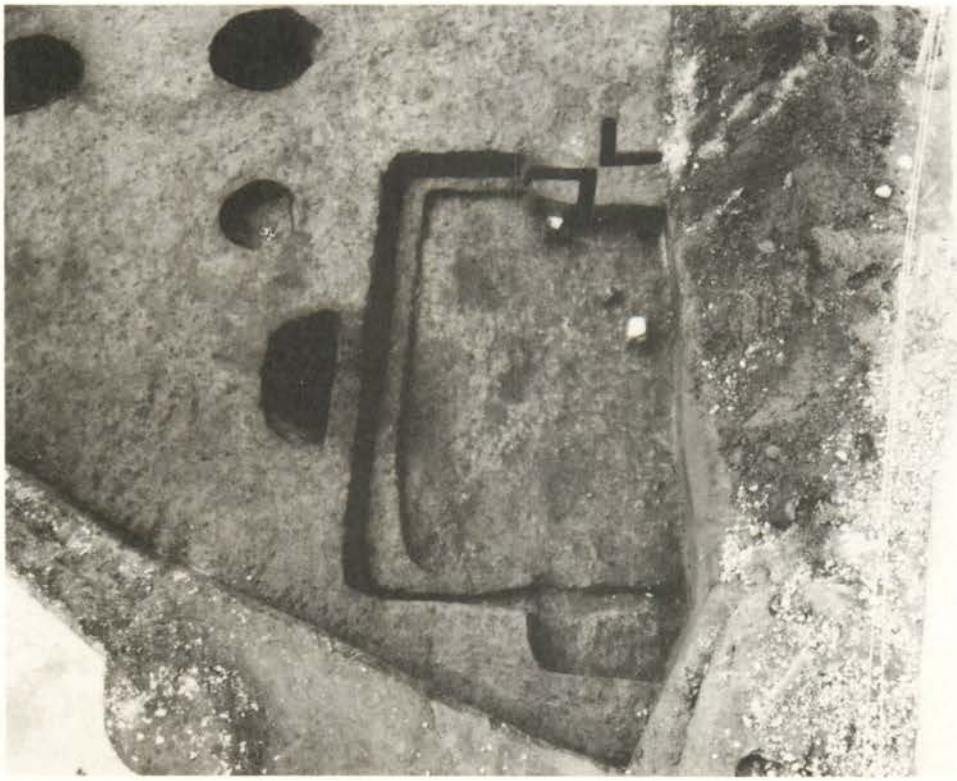
1．ＳＩ７（南西より）



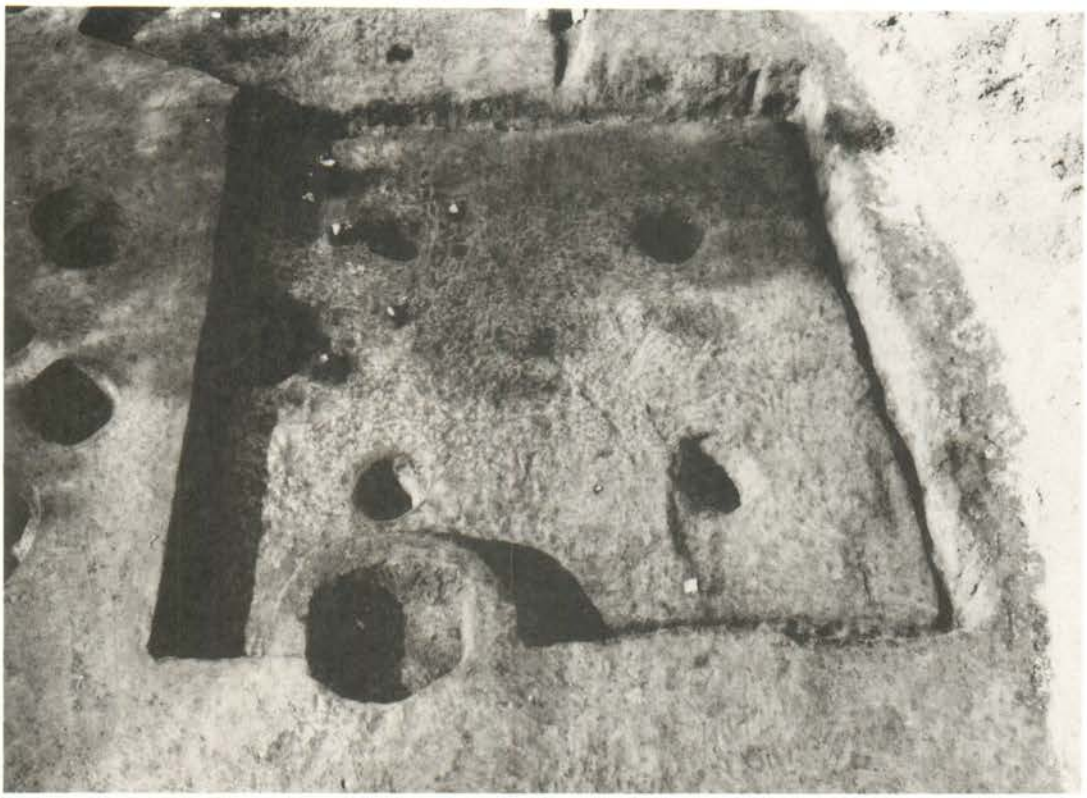
2．ＳＩ８（南東より）



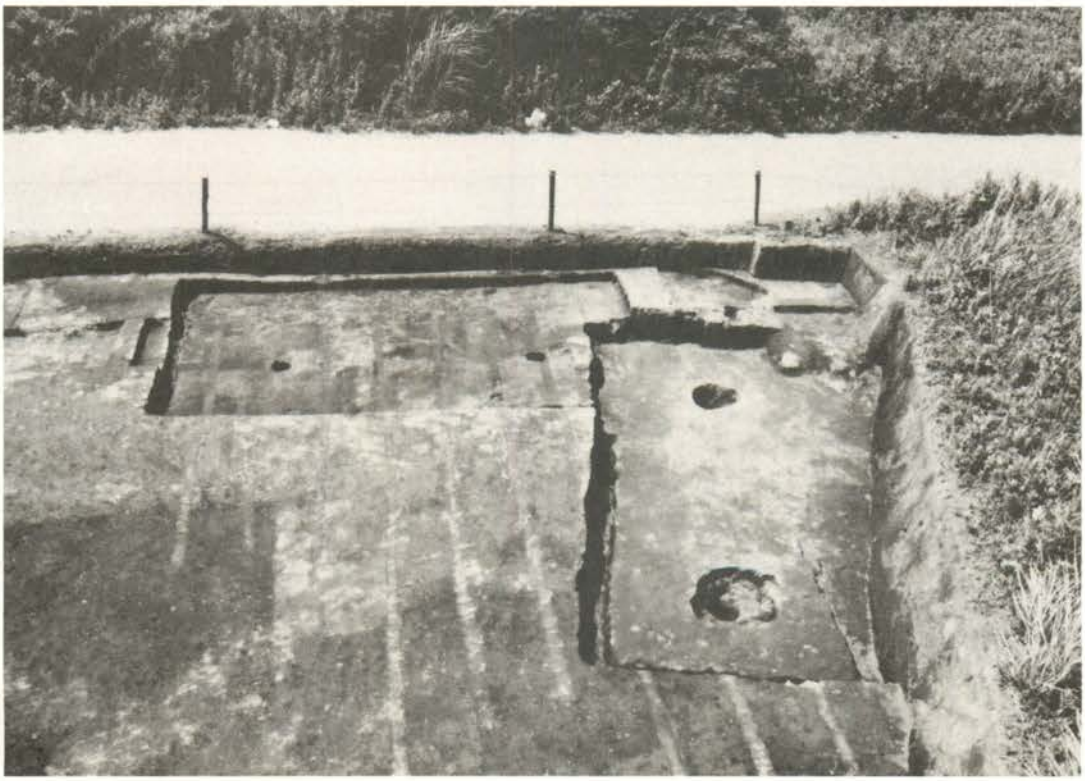
1．ＳＩ９（南東より）



2．ＳＩ10（南東より）



1．SI11（南東より）

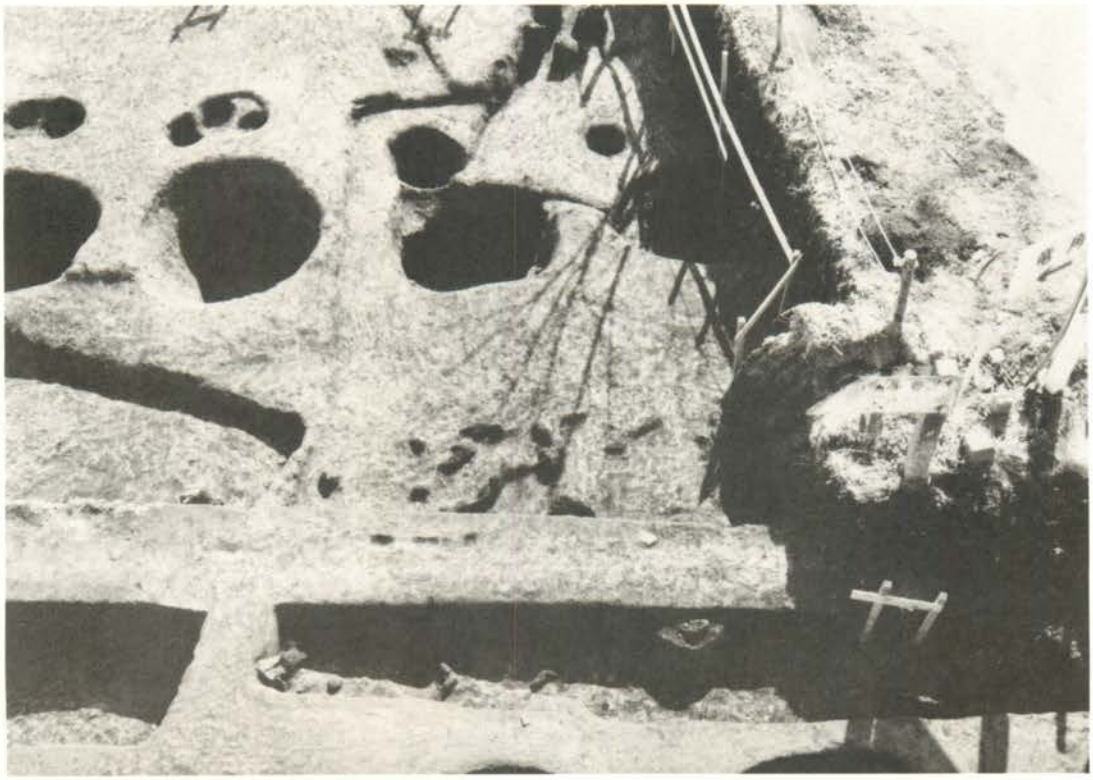


2．SI12（右）、SI13（南東より）

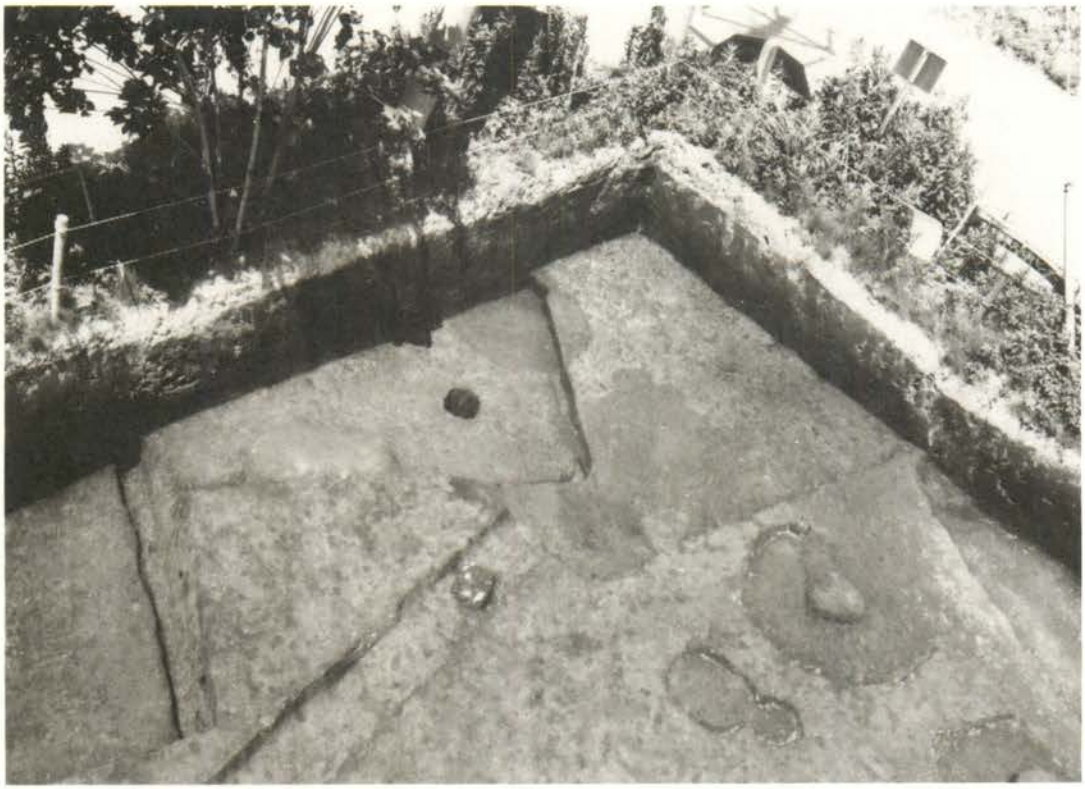
1．SI13（南西より）

1．SI13・土製品出土状況

1. SI14（西より）



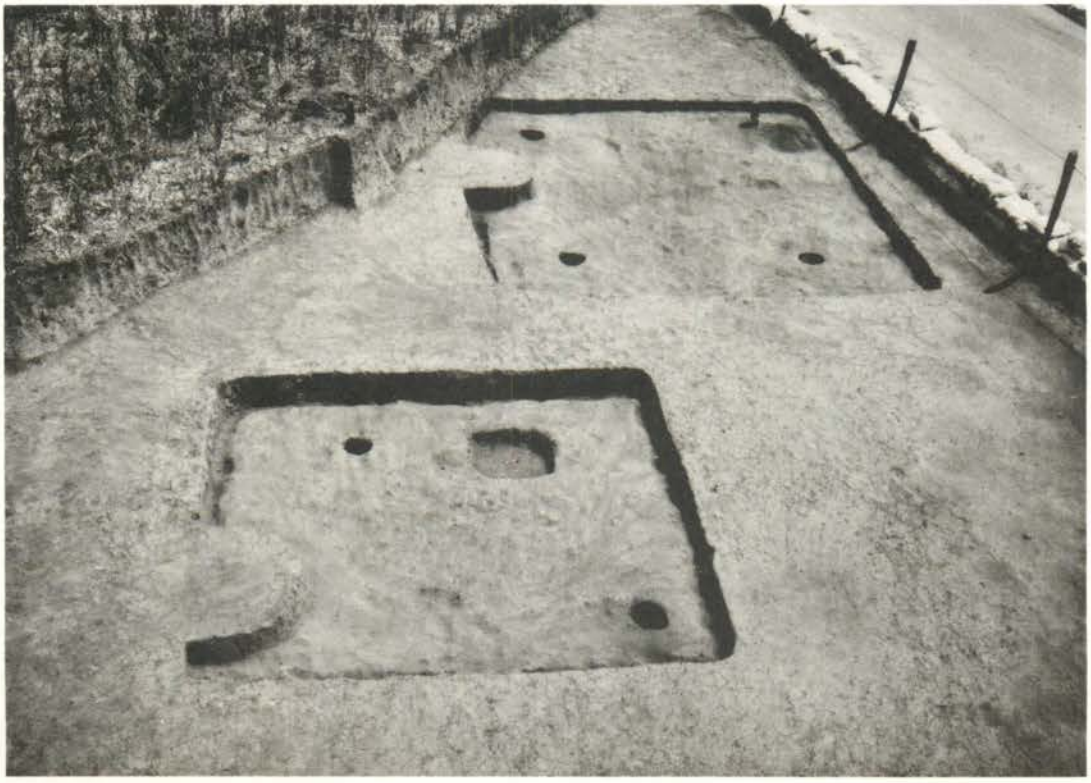
2. SI15（北西より）



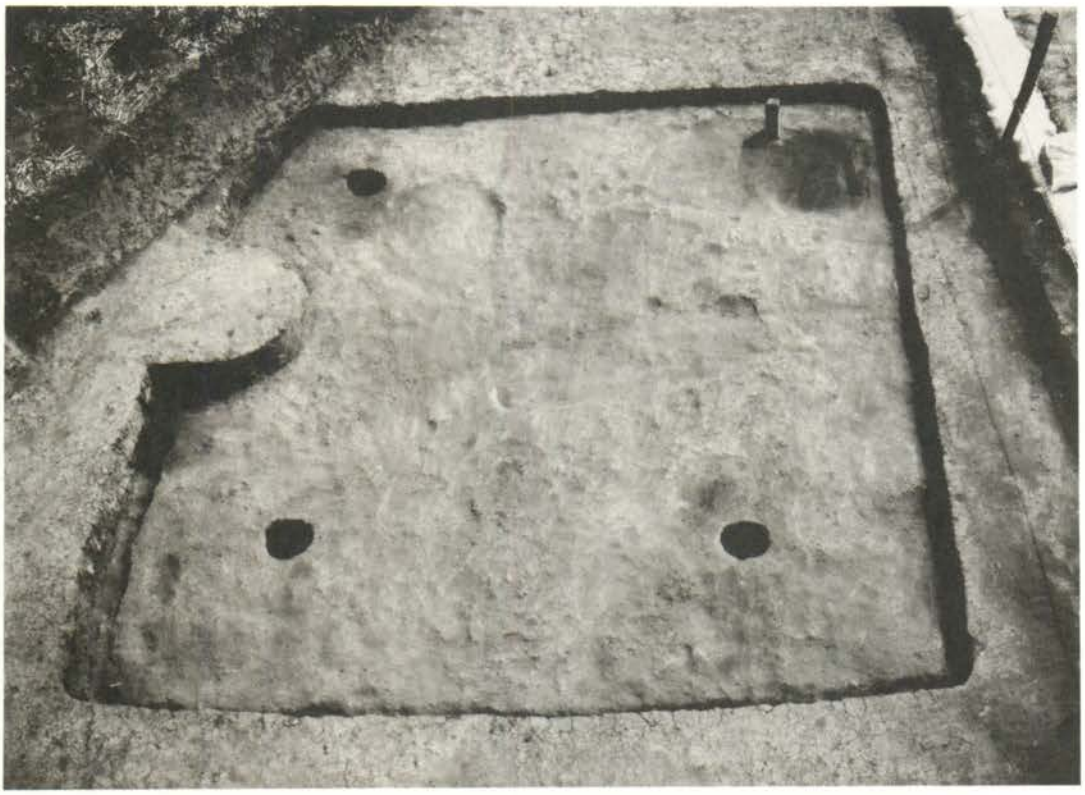
1．SI15（右）・SI16（北東より）

2．SI16・カマド付近遺物出土状態（南より）

1. SI17（左）・SI18（南東より）

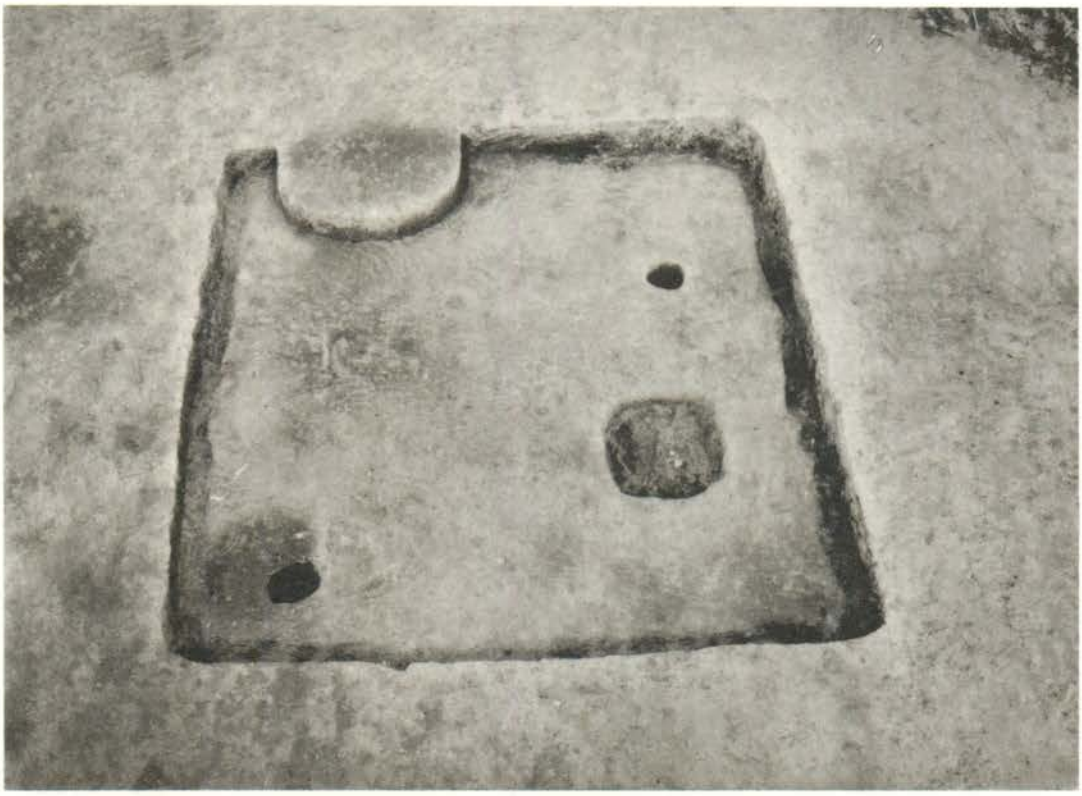


2. SI19・SI20（手前）西より



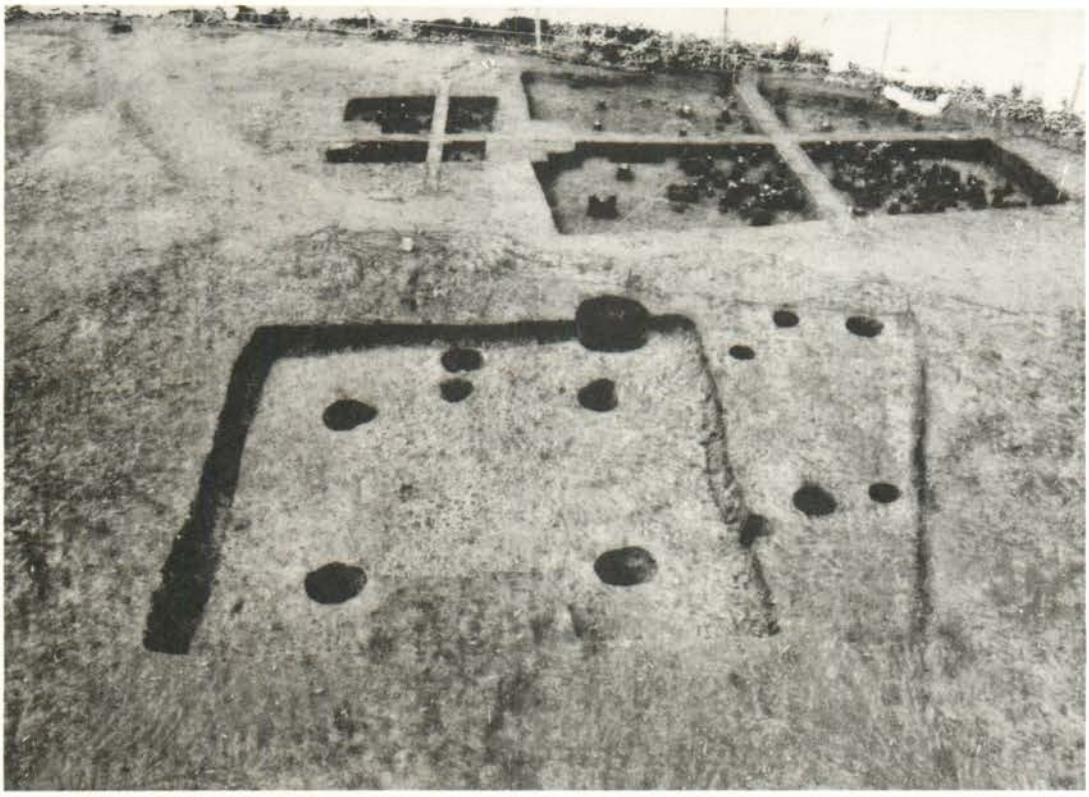
1．SI19（西より）

2．SI25・遺物出土状況（東より）

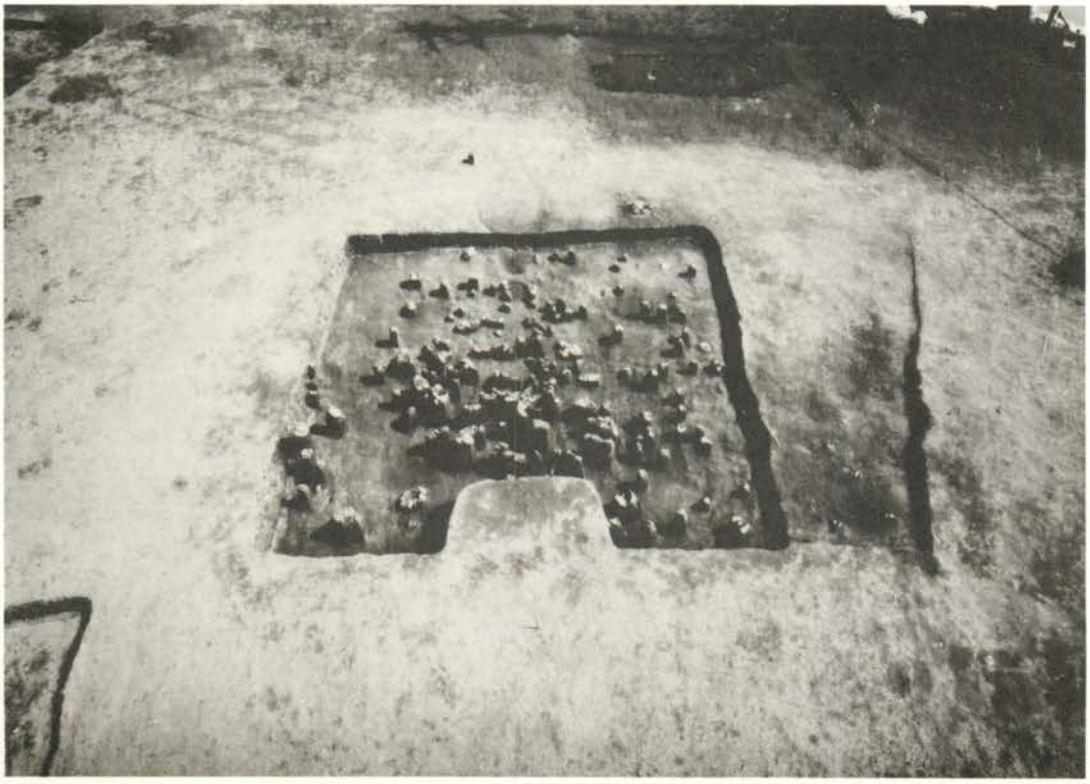


1. SI20（南より）

2. SI21（南西より）



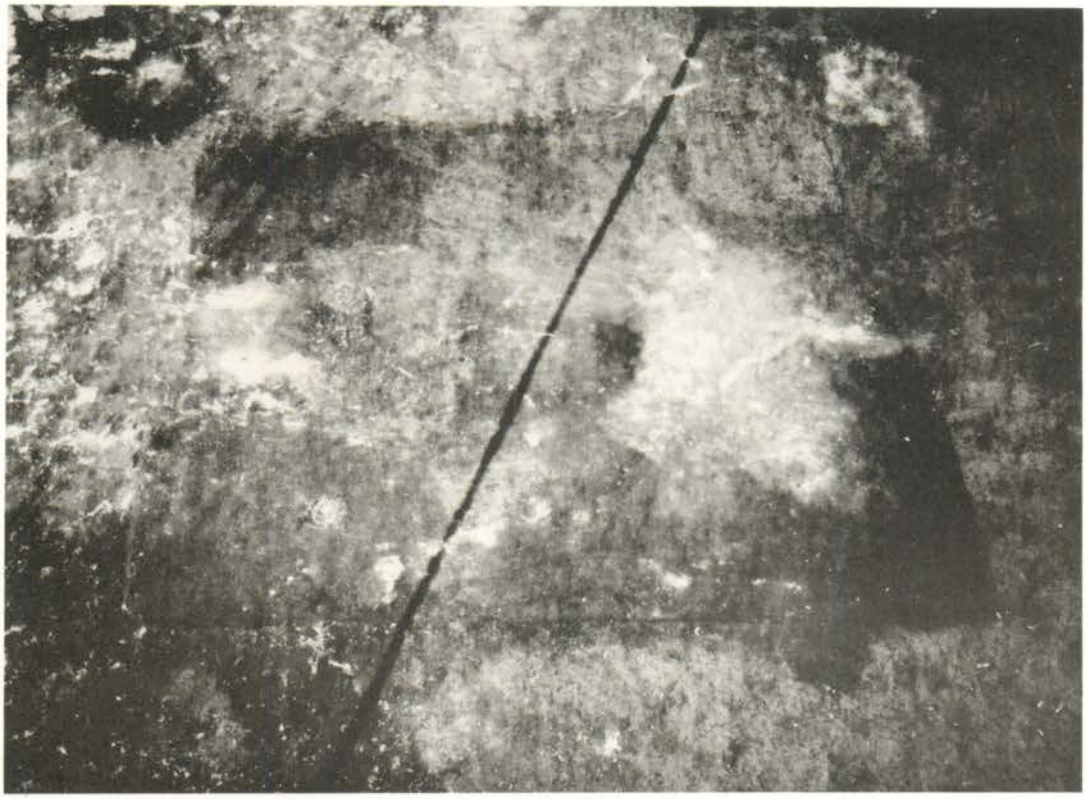
1. SI22（左）・SI23（北西より）



2. SI22・SI23・遺物出土状況（北西より）

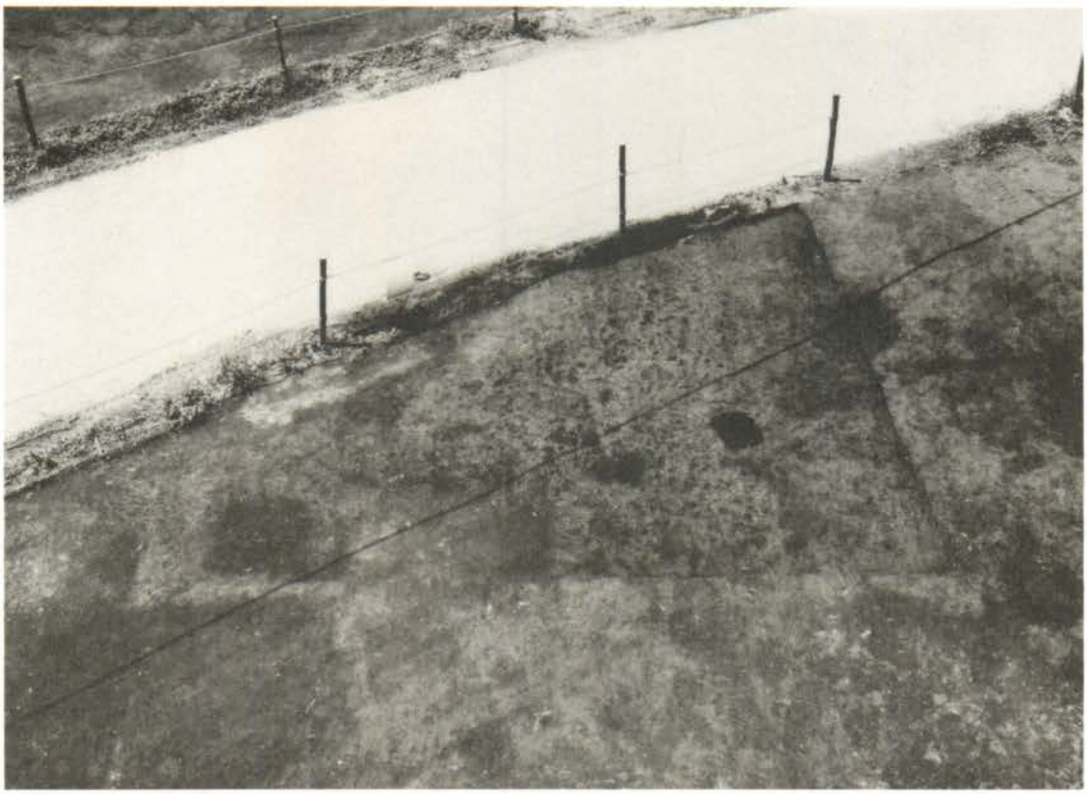
1．ＳＩ24（手前）・ＳＩ25（北東より）

2．ＳＩ26（右）・ＳＩ35（北西より）



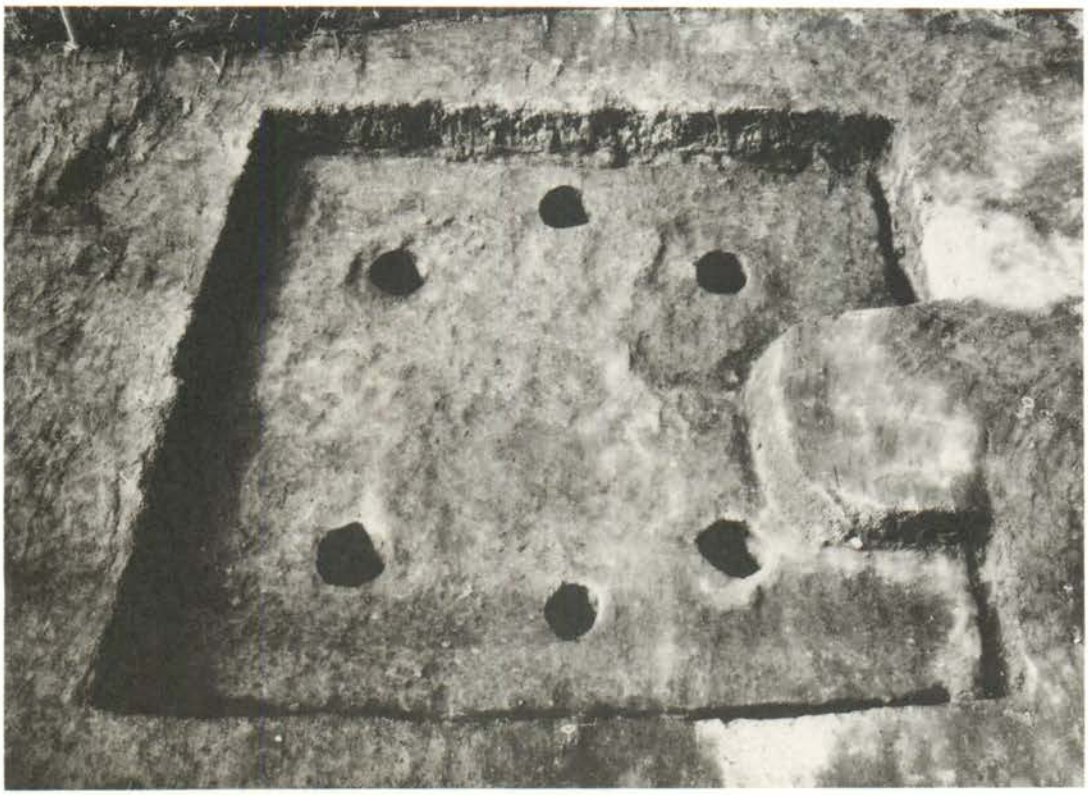
1．ＳＩ27（東より）

2．ＳＩ30（西より）



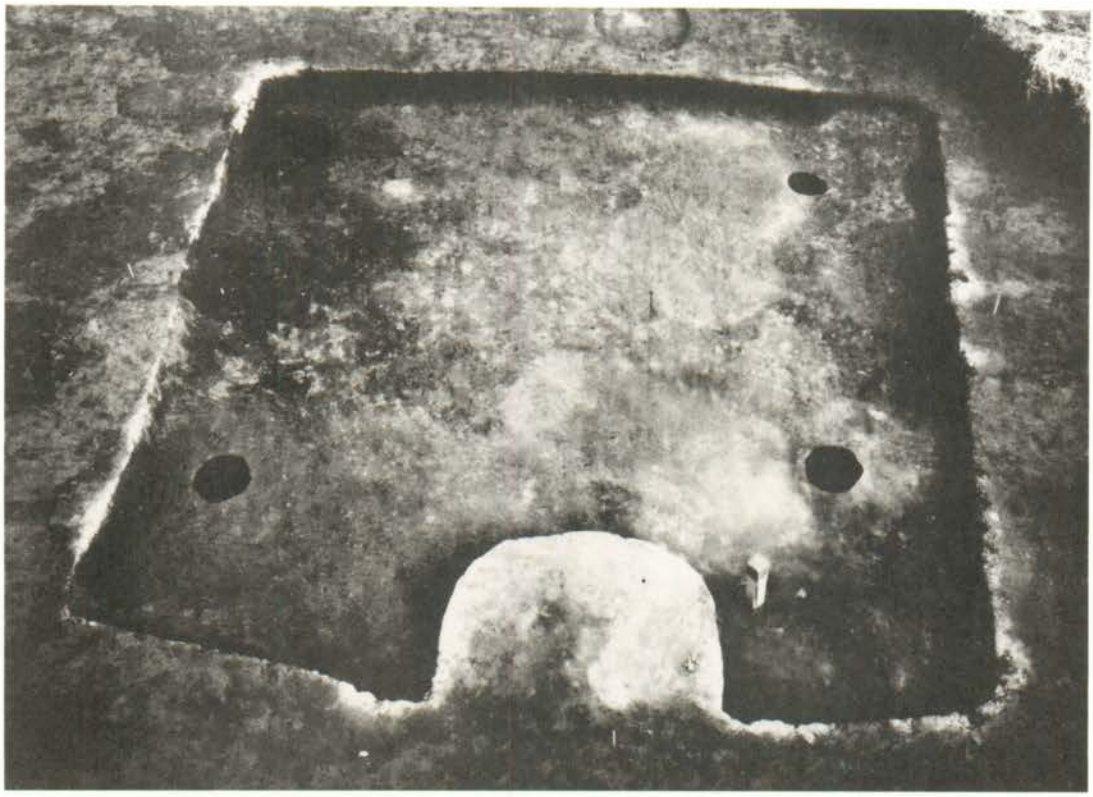
1．SI32（北東より）

2．SI33（南西より）



1. SI34（南より）

2. SI30・SI37・SI38（東より）



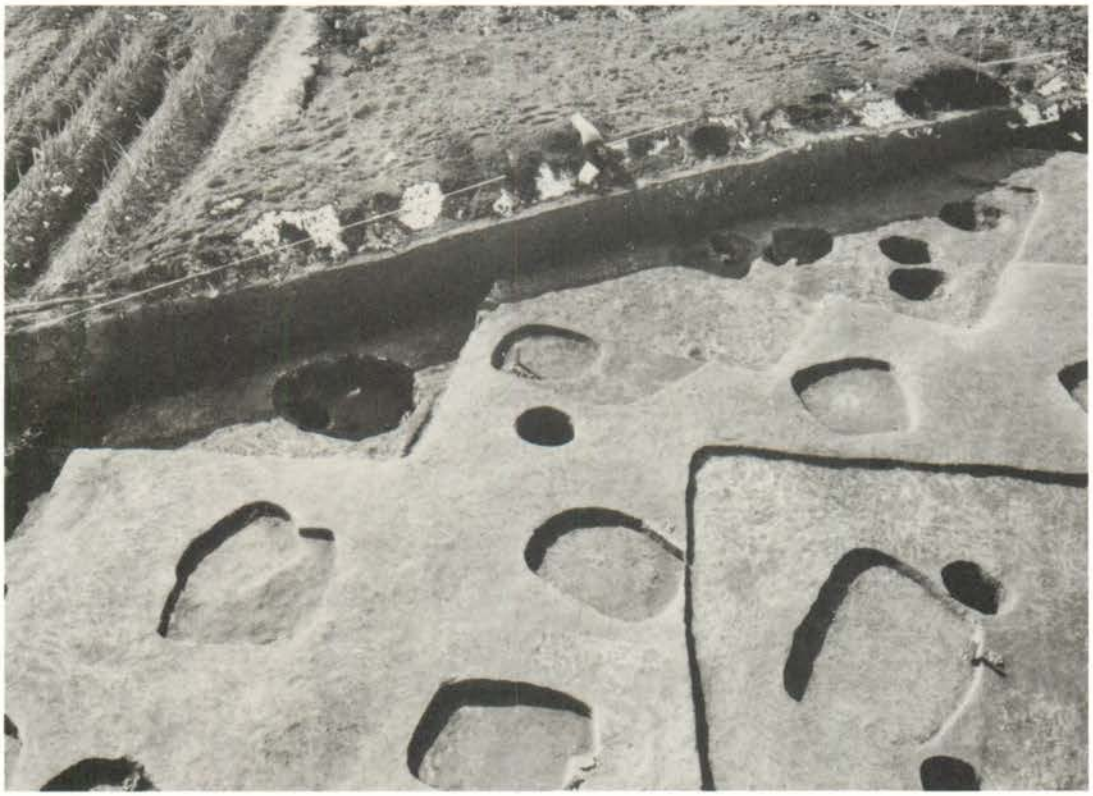
1. SI36（北西より）

2. SI36・瓦（カマド構築材）出土状況

SJ 30・SJ 36・SI 38（東より）

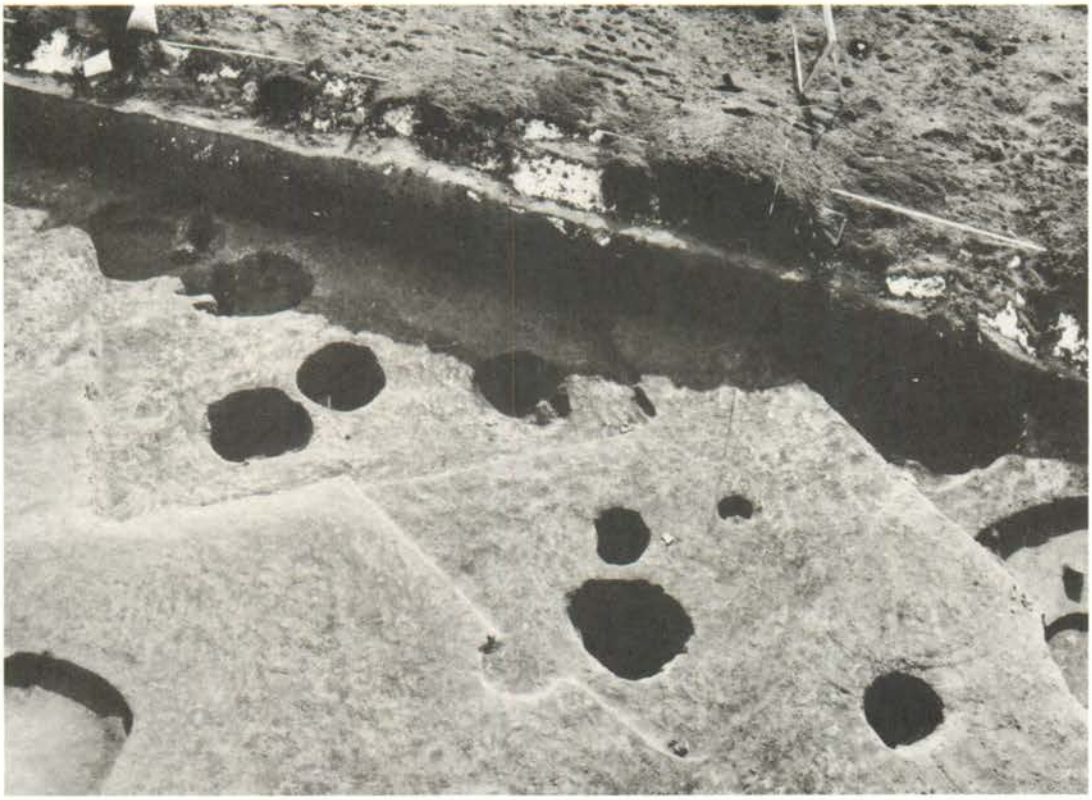
1．ＳＩ39（南東より）

2．ＳＩ41（北西より）



1．ＳＩ46～ＳＩ48（北より）

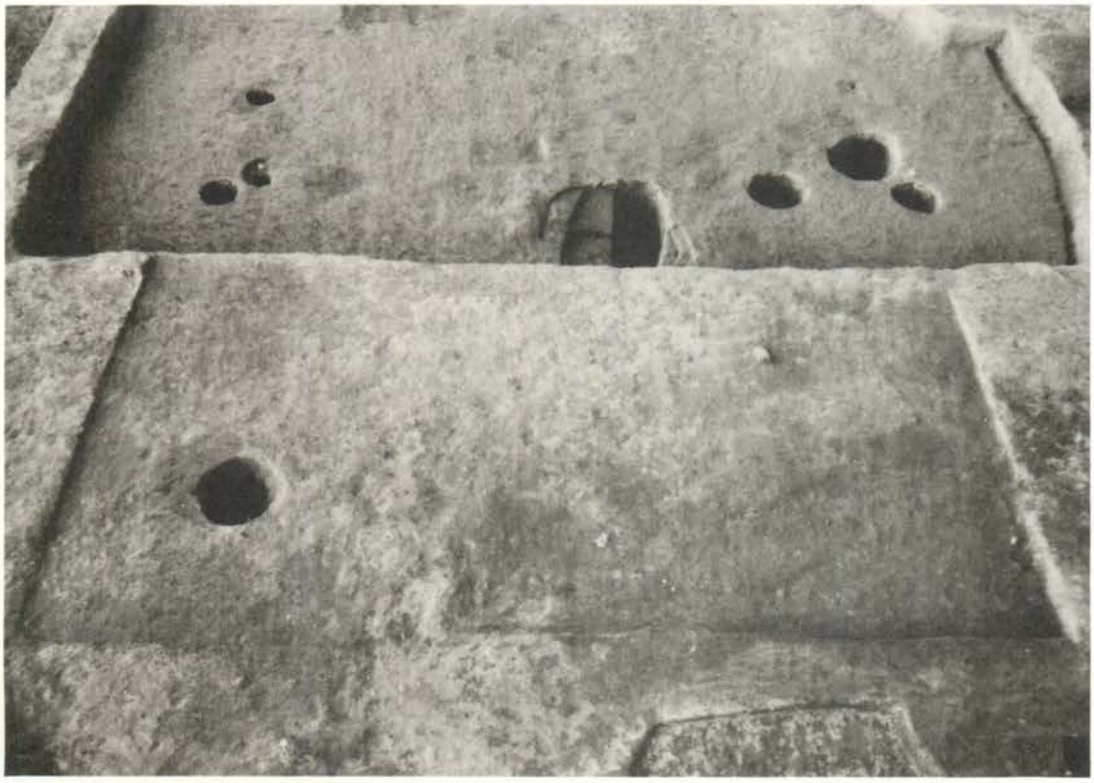
2．ＳＩ47（北東より）



1．SI48・SI62（手前）北より

2．SI48・遺物出土状況（北より）

1. SI49（南東より）



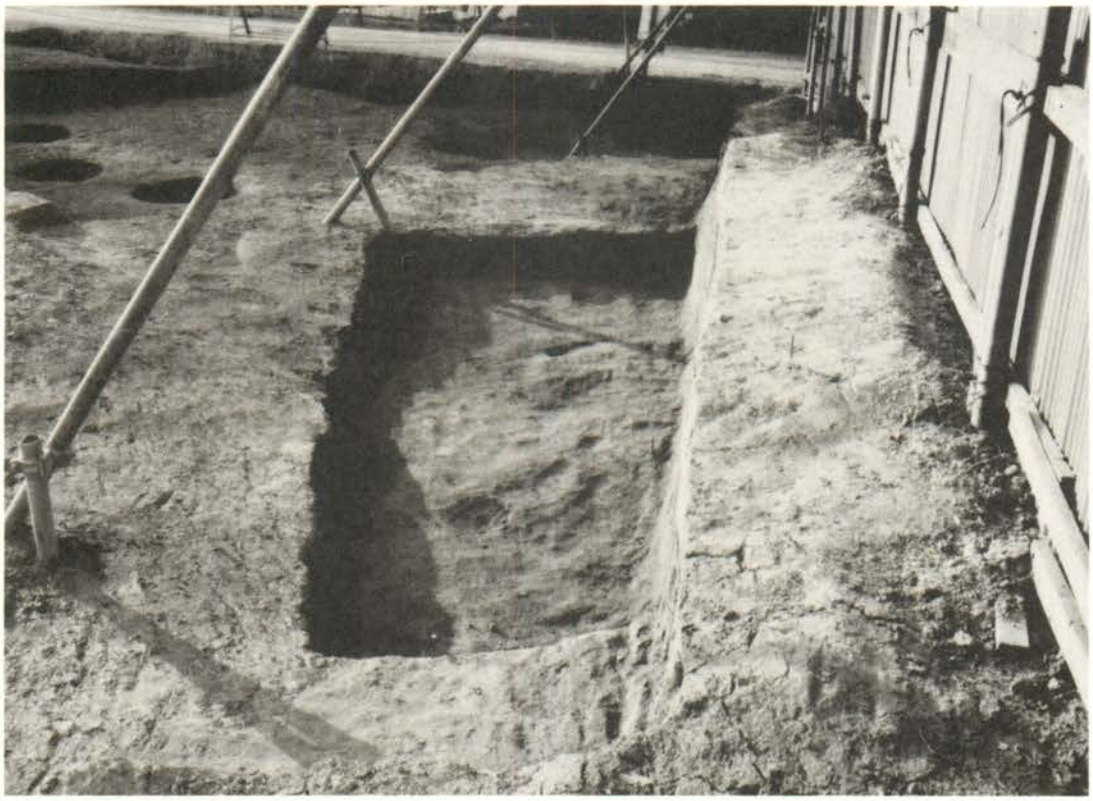
2. SI51（南東より）

1．SI54・SI55（手前）西より

2．SI54・遺物出土状況（北より）

1．SI44（手前）・SI45（北東より）

2．SI52（手前）・SI53（北西より）



1．ＳＩ56（西より）

2．ＳＩ57（南東より）

1. SI58（西より）

2. SI61（西より）

SI59（左）・SI60・SE4（手前）北より

1．A地点全景（柱穴検出状況）北西より

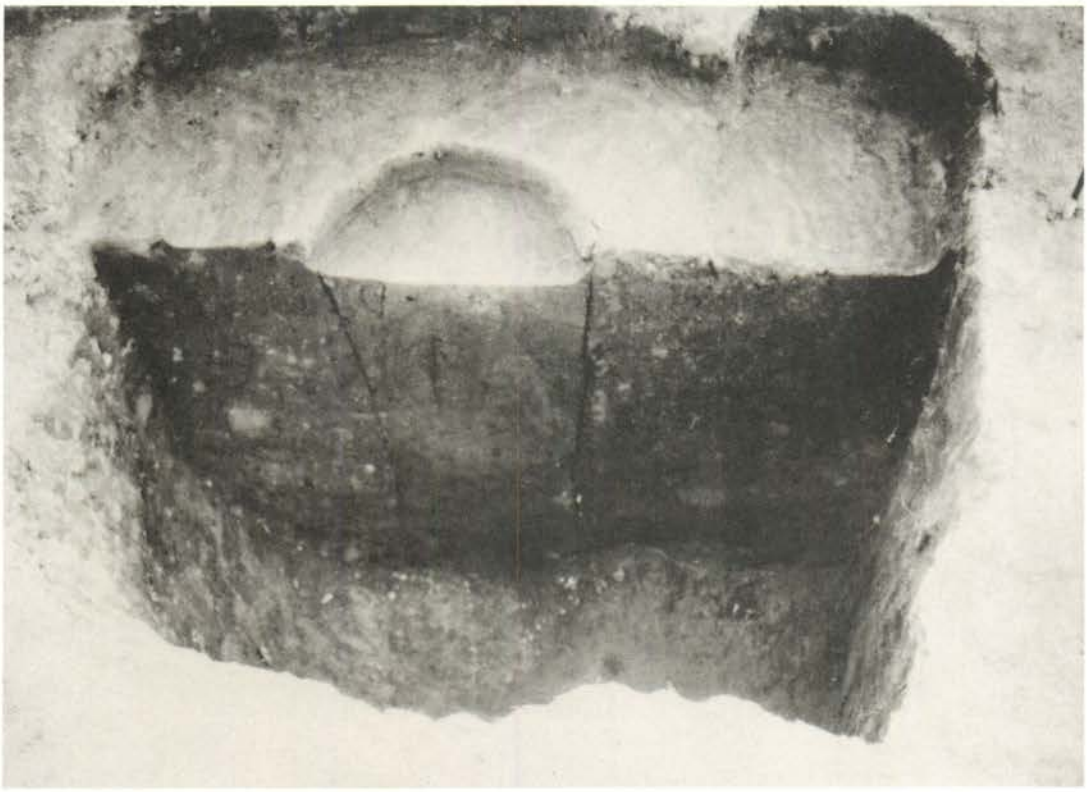
2．A地点全景（北西より）

大畑1遺跡

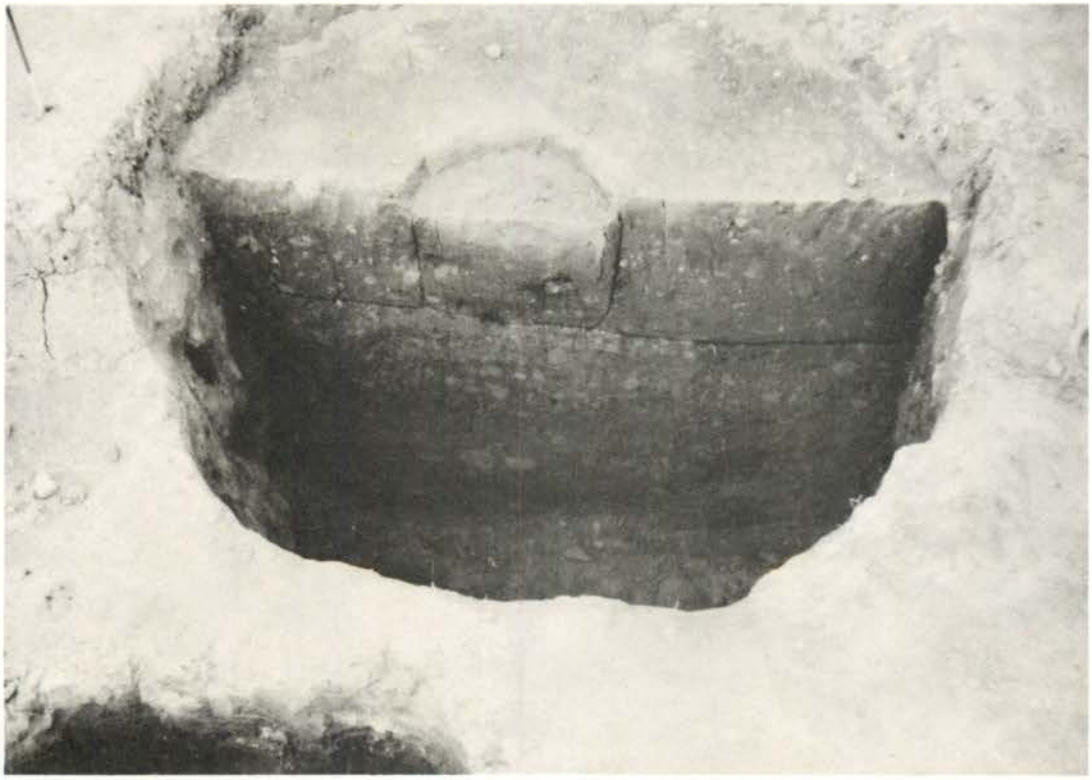
1. SB1・南側桁行掘立柱（北東より）

2. SB1・全景（北東より）

3. SB1・南側染行



1. SB1・P1断面

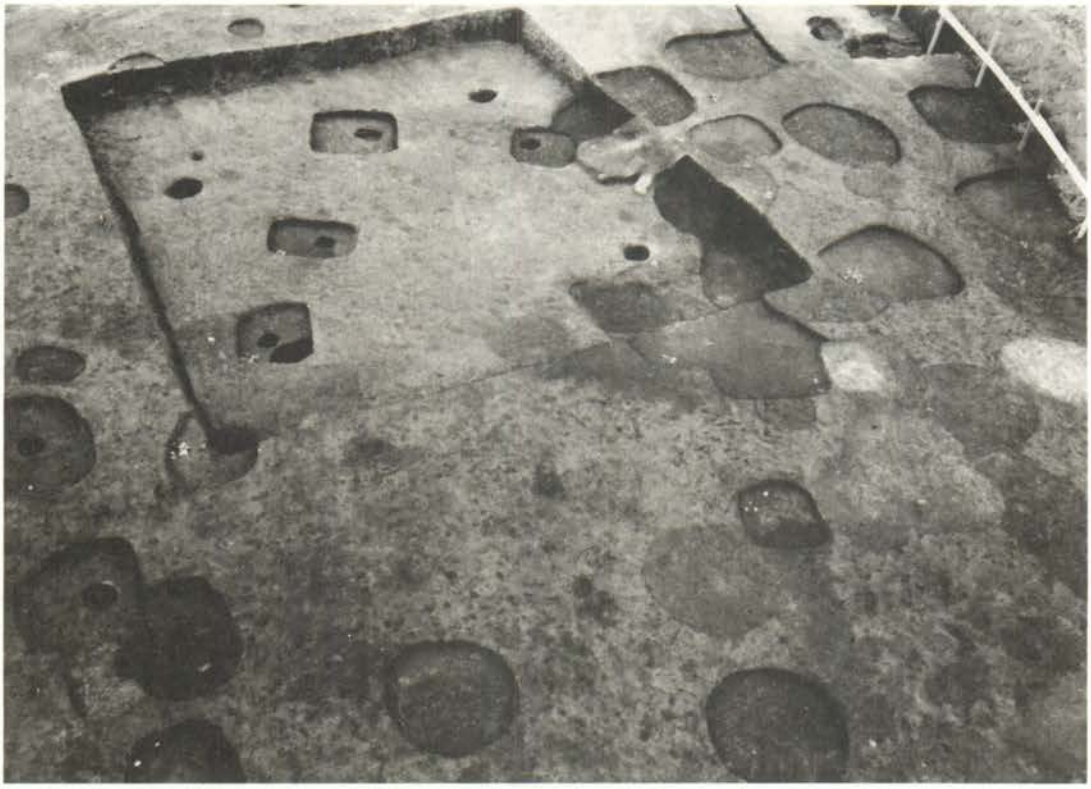


2. SB1・P8断面

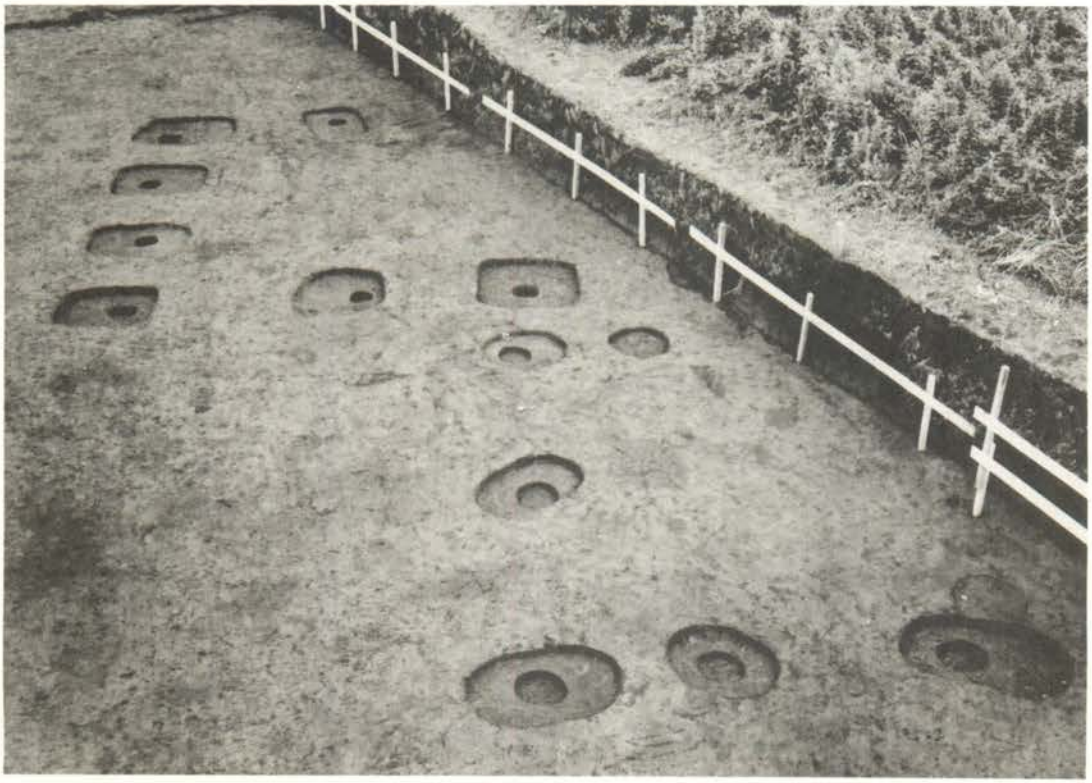
1. D12・E12グリッド掘立柱建物跡（北東より）

2. SB2・3・30（南西より）

3. SB2・3（北西より）



1．SB4（南より）



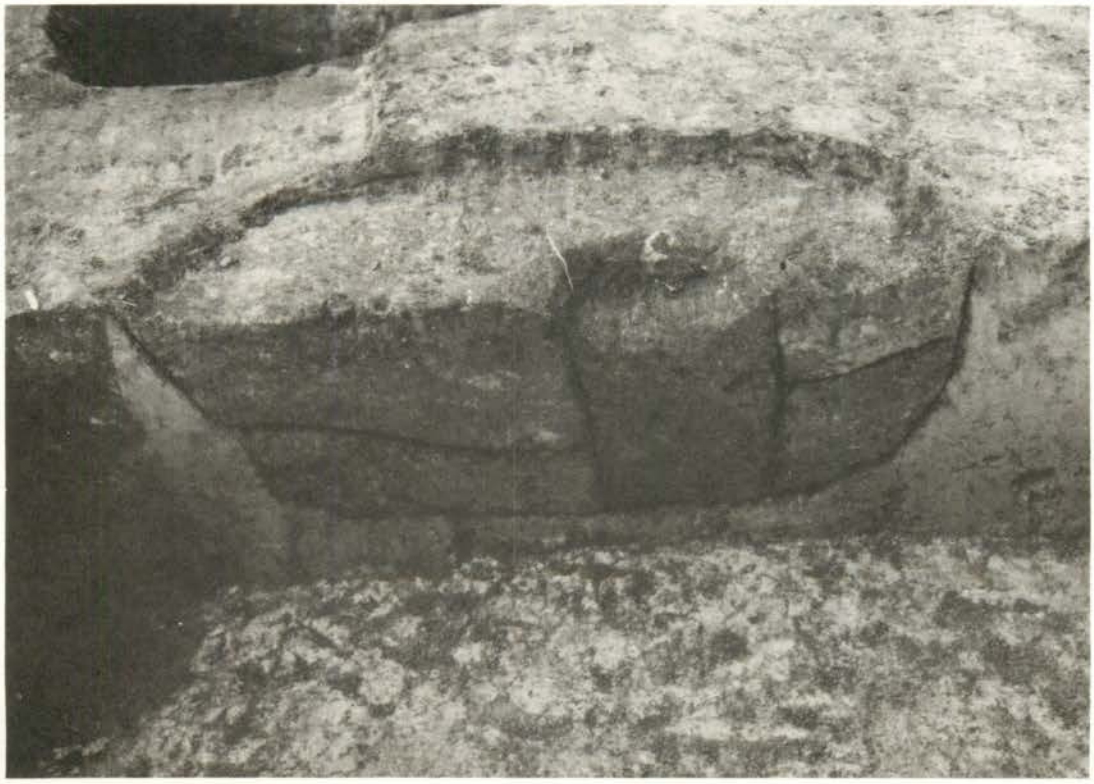
2．SB5（手前）・SB6（北西より）

SB 6・7・15（手前）前　より

1．SB6・7・15・柱穴検出状況（南西より）

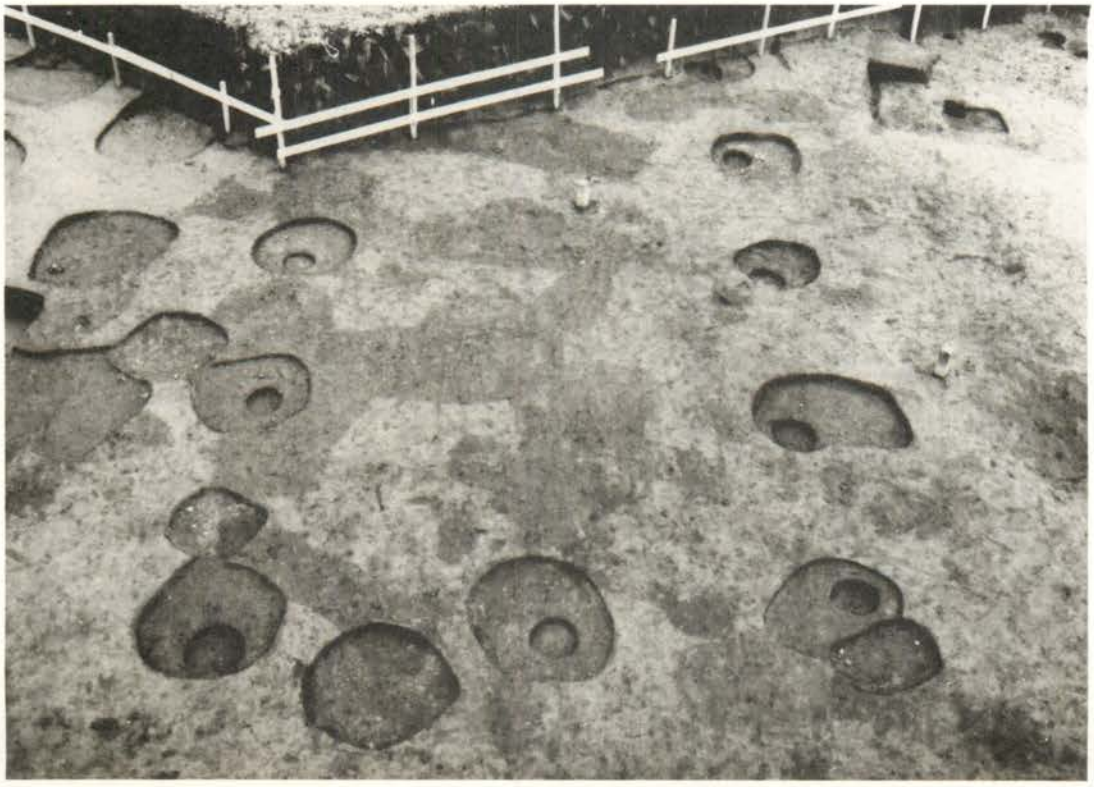
2．SB6・7・15（南西より）

1．SB7（南西より）

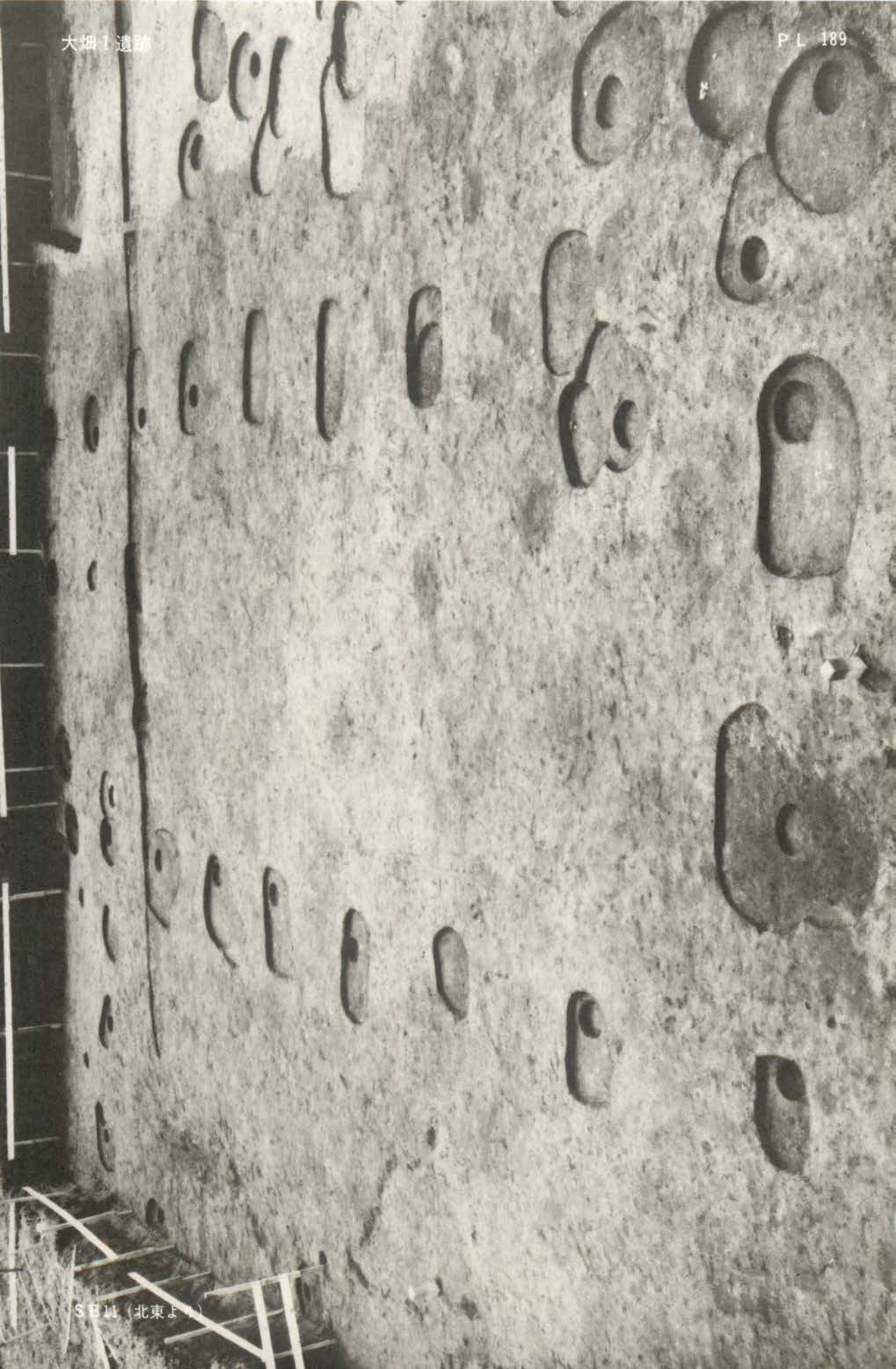


2．SB7・P4断面

1．SB8・9（南東より）



2．SB10（南西より）



SB11（北東より）

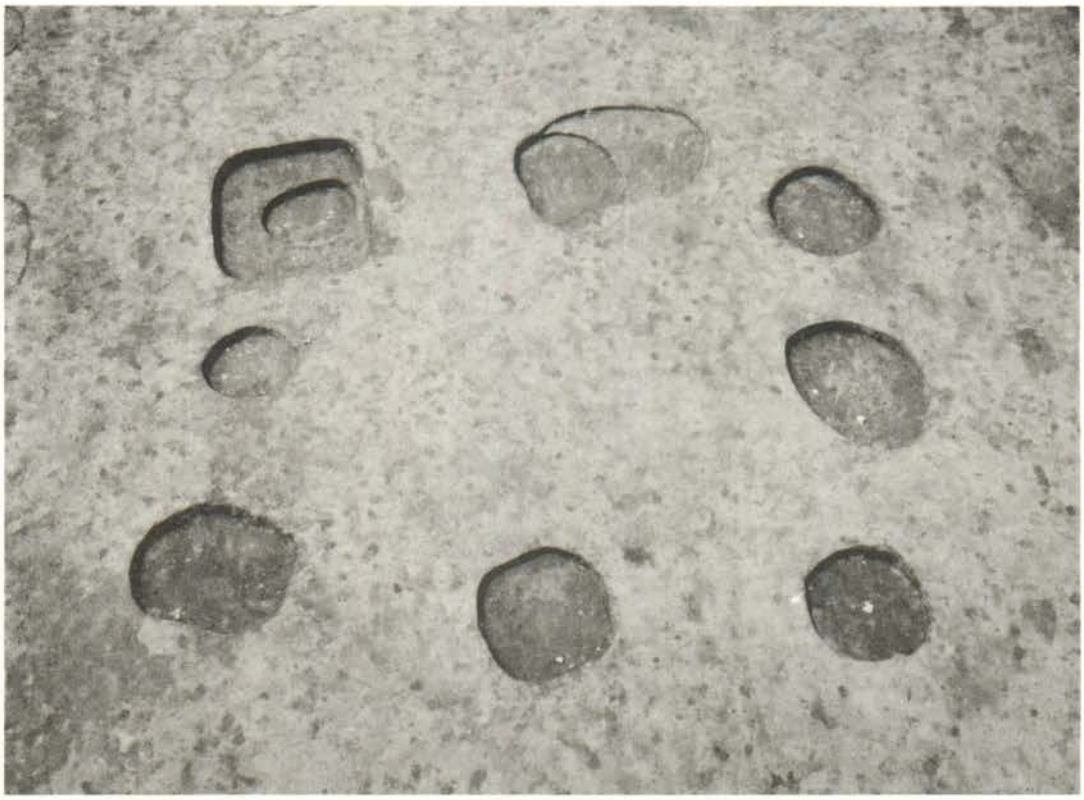
F-9グリッド地区・SB12～19（南東より）

1．SB15（南西より）

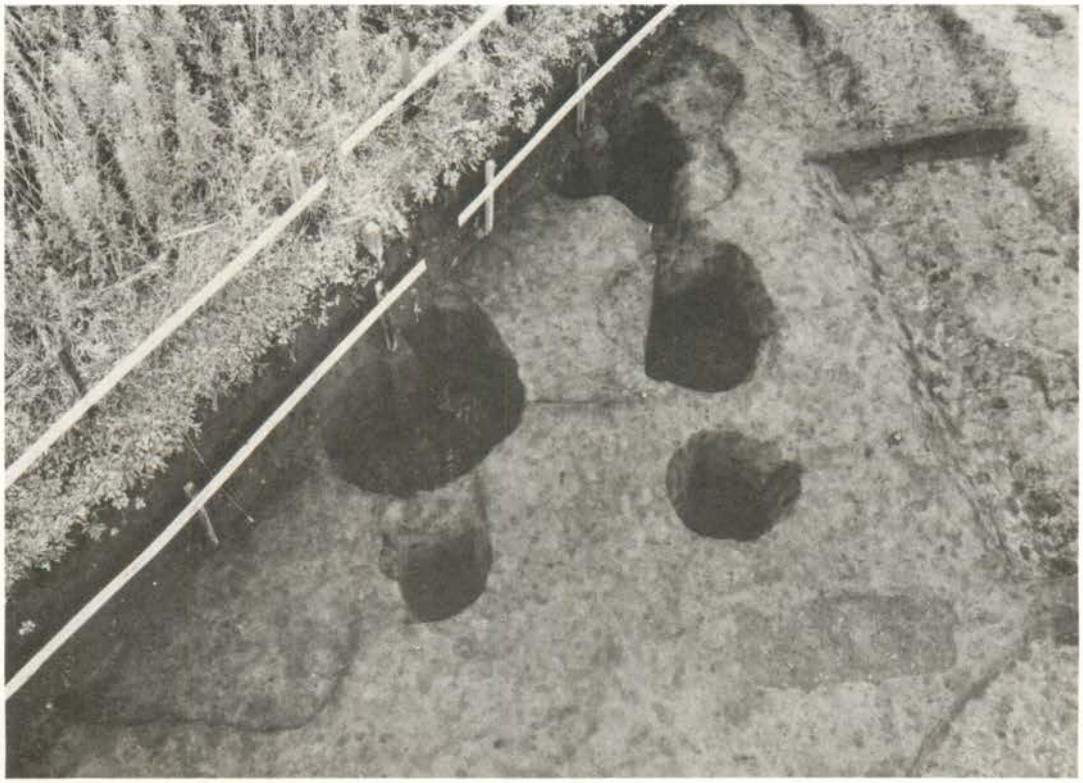
2．SB15・P6断面

1．ＳＢ12・13（南東より）

2．ＳＢ16～18（南西より）



1．SB19（南東より）

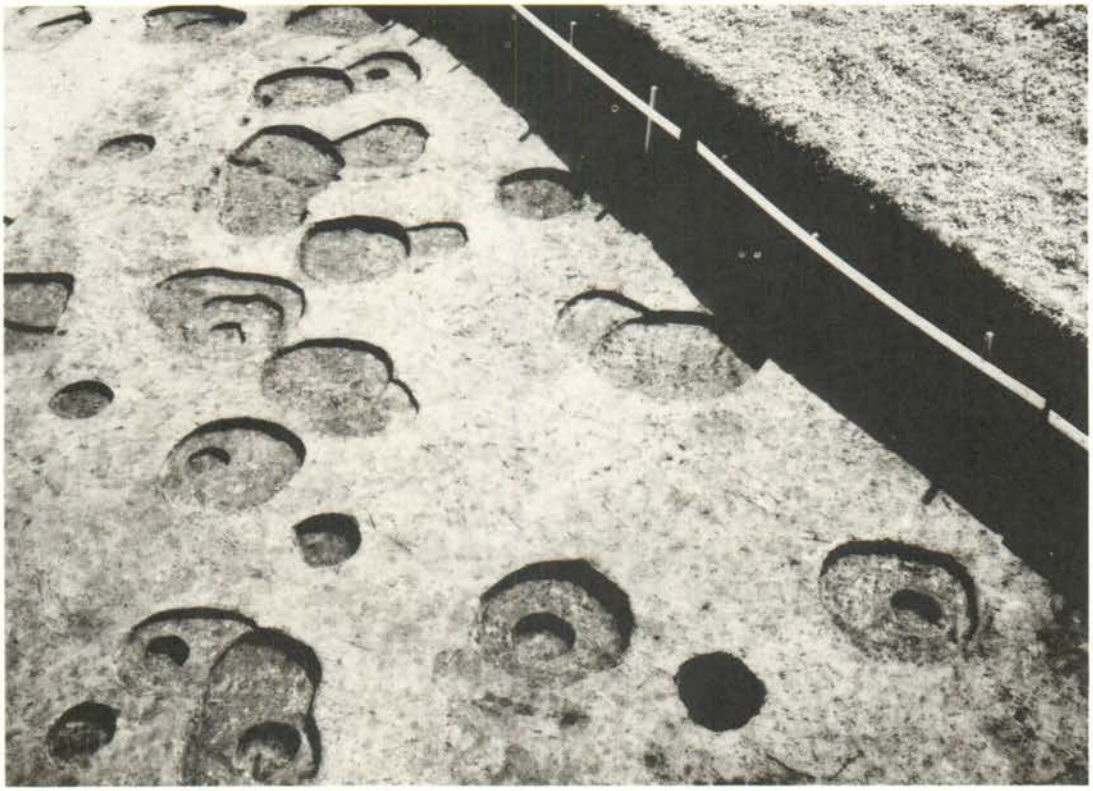


2．SB21・22（南西より）

1. SB内・P14断面

2. SB17・P10（新） SB18・P1（旧）

3. SB17・P10（新） SB20・P8（旧）



1．SB23・24（北西より）

2．SB25（北西より）

1．SB26（南東より）

2．D11・12・E11・12グリッド掘立柱建物跡（北東より）

1．ＳＢ31～33（南西より）

2．ＳＢ32・33（南東より）

S/B34（南東より）

C14・15グリッド掘立柱建物跡（北西より）

1．ＳＢ36～38（北西より）

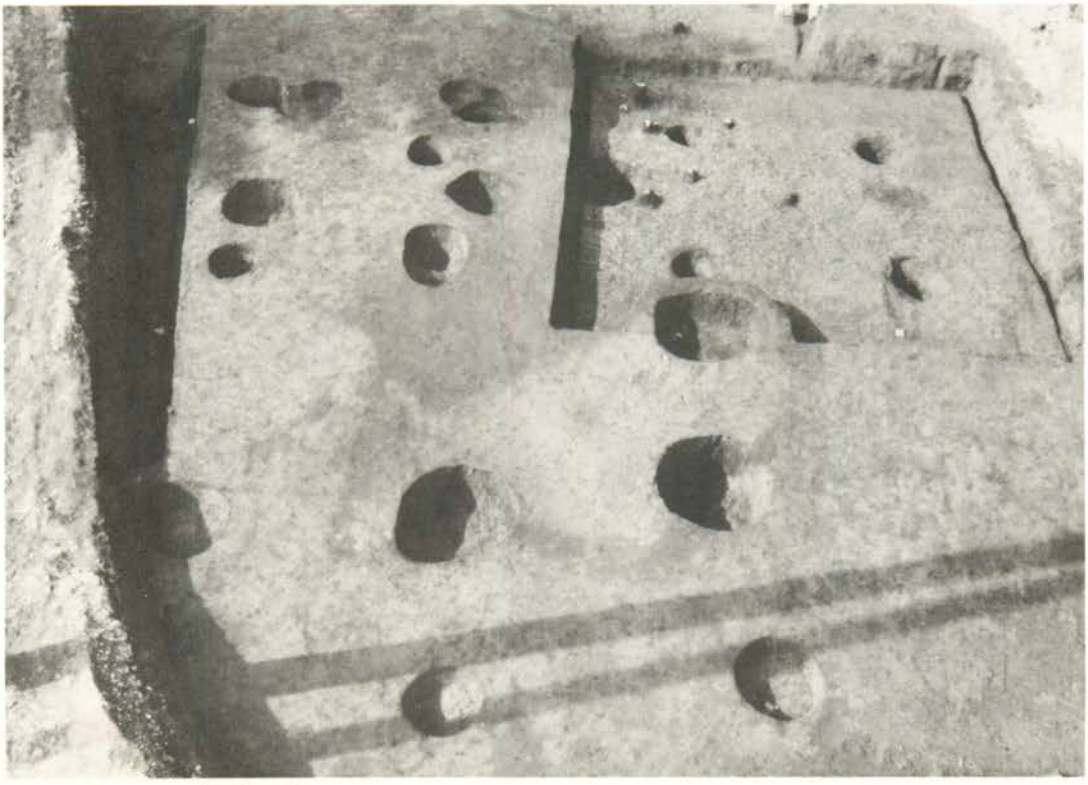
2．ＳＢ36～38（南西より）

1．SB39～46（北西より）

2．SB39～46（南東より）

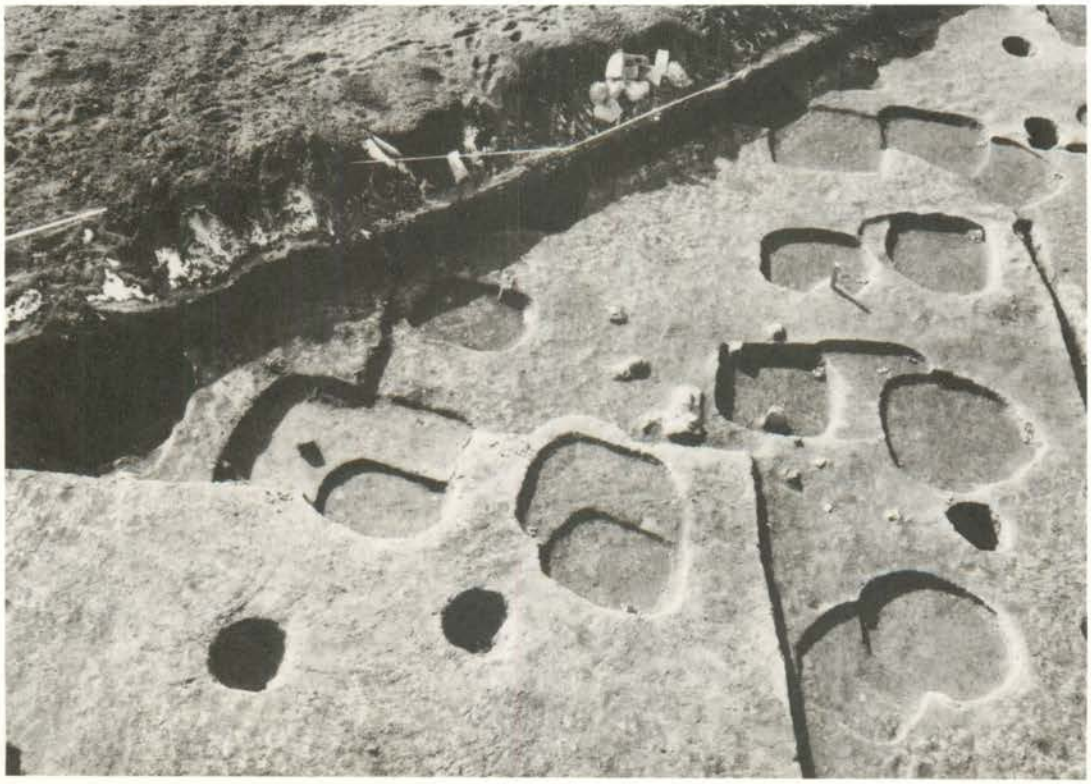
S B55・56（北西より）

1．SB53（南東より）



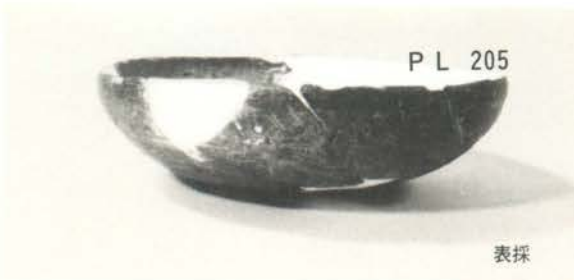
2．SB57・58（南東より）

1．ＳＢ53・59・60（北東より）



2．ＳＢ61・62（北東より）

表採


表採

表採

SI3-2

表採

表採

SI2-1

SI2-2

SI8-8

SI8-7

SI8-5

SI8-3

SI8-4

SI8-2

SI8-16

SI8-15

SI8-12

SI9-7

SⅠ9-1

SⅠ11-5

SⅠ11-7

SⅠ11-3

SⅠ12-1

SⅠ14-9

SⅠ14-1

SⅠ14-5

SⅠ14-2

SⅠ14-3

S I 14-6

S I 14-5

S I 14-4

S I 15-1

S I 14-10

S I 15-3

S I 15-2

S I 15-4

S I 15-5

SⅠ16-括

SⅠ16-2

SⅠ16-1

SⅠ16-3

SⅠ16-10

SⅠ16-5

SⅠ16-5 隆文

S I 16-7

S I 16-6

S I 16-9

S I 16-8

S I 16-11

S I 16-13

SⅠ19-2

SⅠ19-1

SⅠ19-3

SⅠ22-1

SⅠ22-3

SⅠ22-10

SⅠ22-7

SⅠ22-6

SⅠ22-9

SⅠ22-8

SⅠ22-10

SⅠ22-13

S I 22-16

S I 22-15

S I 25-44

S I 23-1

S I 25-35

S I 25-41

S I 25-20

S I 25-40

SⅠ25-3

SⅠ25-4

SⅠ25-5

SⅠ25-6

SⅠ25-7

SⅠ25-8

SⅠ25-9

SⅠ25-38

SⅠ25-17

SⅠ25-11

SⅠ25-25

SⅠ25-19

S I 28-4

S I 28-1

S I 28-3

S I 28-2

S I 30-1

S I 29-1

S I 31-2

S I 31-1

S I 31-6

S I 31-3

S I 32-3

S I 31-10

SⅠ33-1

SⅠ32-1

SⅠ36-4

SⅠ33-9

SⅠ34-4

SⅠ36-1

SⅠ36-6

SⅠ36-5

SⅠ38-9

SⅠ37-9

SI 38-10

SI 38-1

SI 38-6

SI 38-5

SI 41-3

SI 40-2

SI 44-1

SI 44-3

SI 44-4

SI 44-7

SI 44-6

SI 45-1

SI 45-2

S I 45-6

S I 48-2

S I 48-4

S I 48-3

S I 49-1

S I 48-1

S I 49-12

S I 49-11

S I 49-14

S I 49-13

SⅠ49-21

SⅠ49-25

SⅠ49-19

SⅠ49-8

SⅠ49-22

SⅠ49-2

SⅠ49-10

SⅠ49-15

SⅠ49-16

SⅠ49-18

S I 49-37

S I 49-38

S I 50-4

S I 49-36

S I 50-1

S I 51-1

S I 50-3

S I 52-8

S I 52-3

S I 52-1

SI 54-2

SI 54-1

SI 54-7

SI 54-3

SI 54-5

SI 54-8

SI 67-1

SI 54-4

SI 57-1

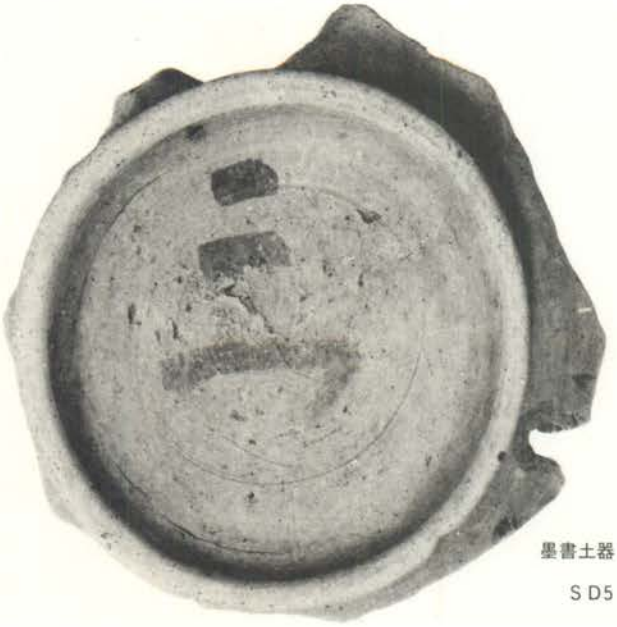
SI 59-1

SI 57-2

SI 59-3

SI62-1

SI59-2



墨書土器

SD5

墨書土器

SE1

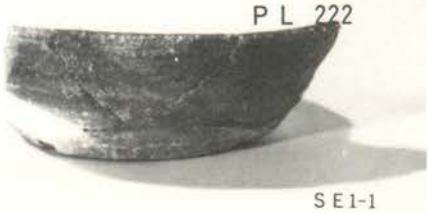
墨書土器

表採

墨書土器

表採

SE1-5


SE1-1

SE1-6

SE1-4

SE2-1

SE2-2

SE2-4

SE2-7

SE2-10

SE2-3

SE4-1

SE4-3

SB28

SE4-2

F-10・表

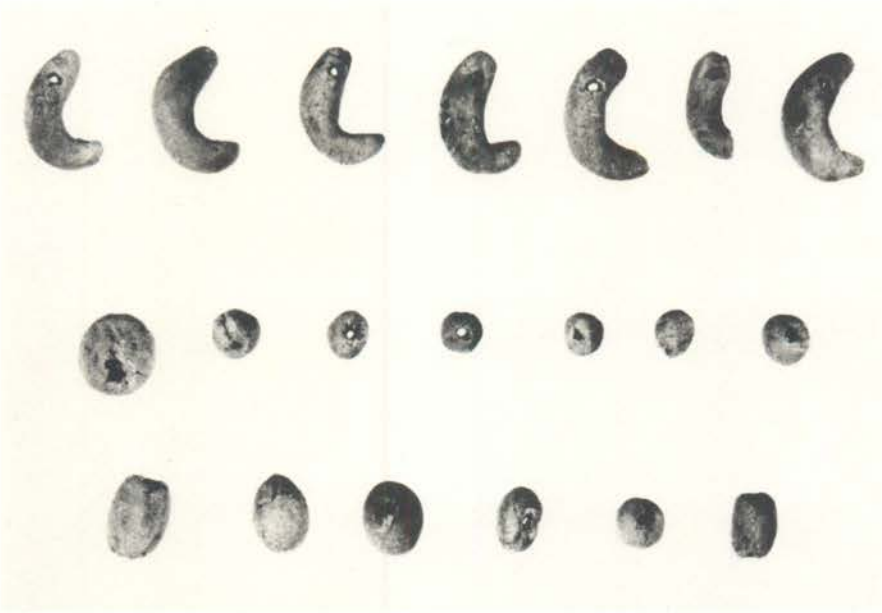
C-17・表

F-8・表

C-16・表

C-17・表

B-17・表



ＳⅠ13出土土製品（上段は勾玉，中・下段は臼玉）

ＳⅠ54

ＳⅠ54-1

ＳⅠ54-2

表採

ＳⅠ62

ＳⅠ54-3

10

1

9

2

全景（刻書状態）

8

3

7

裏面線刻

4

6

5

SⅠ28出土刻書石製紡錘車（1～10、刻書文字約2倍）

石製品

表採

SI41

SI46

SI46

SI60

SI45

SI55

SI51

SI56

SI56

SI55

表採

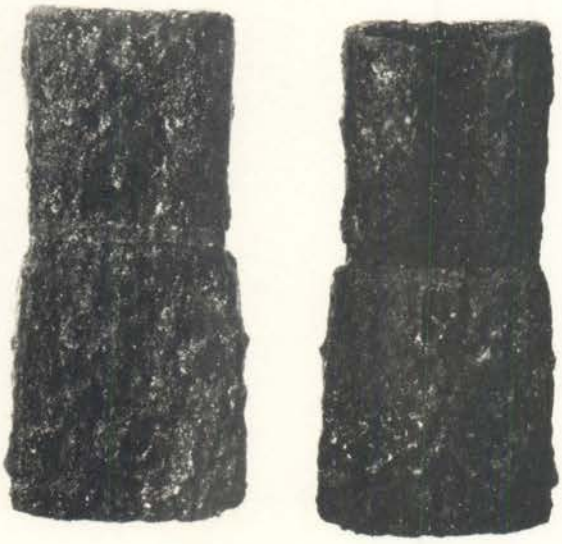
SI55

SI64

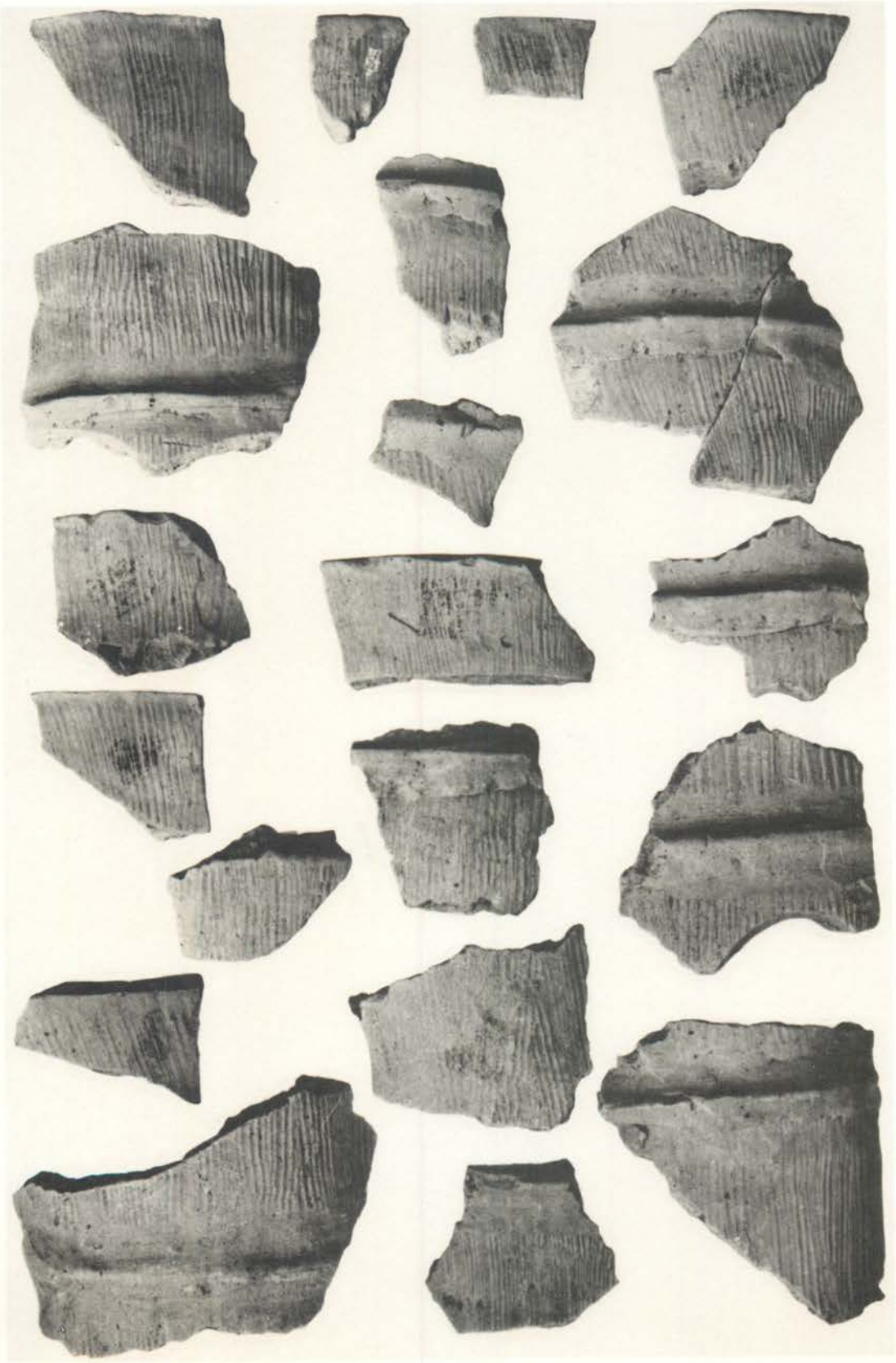
SI59

SI46

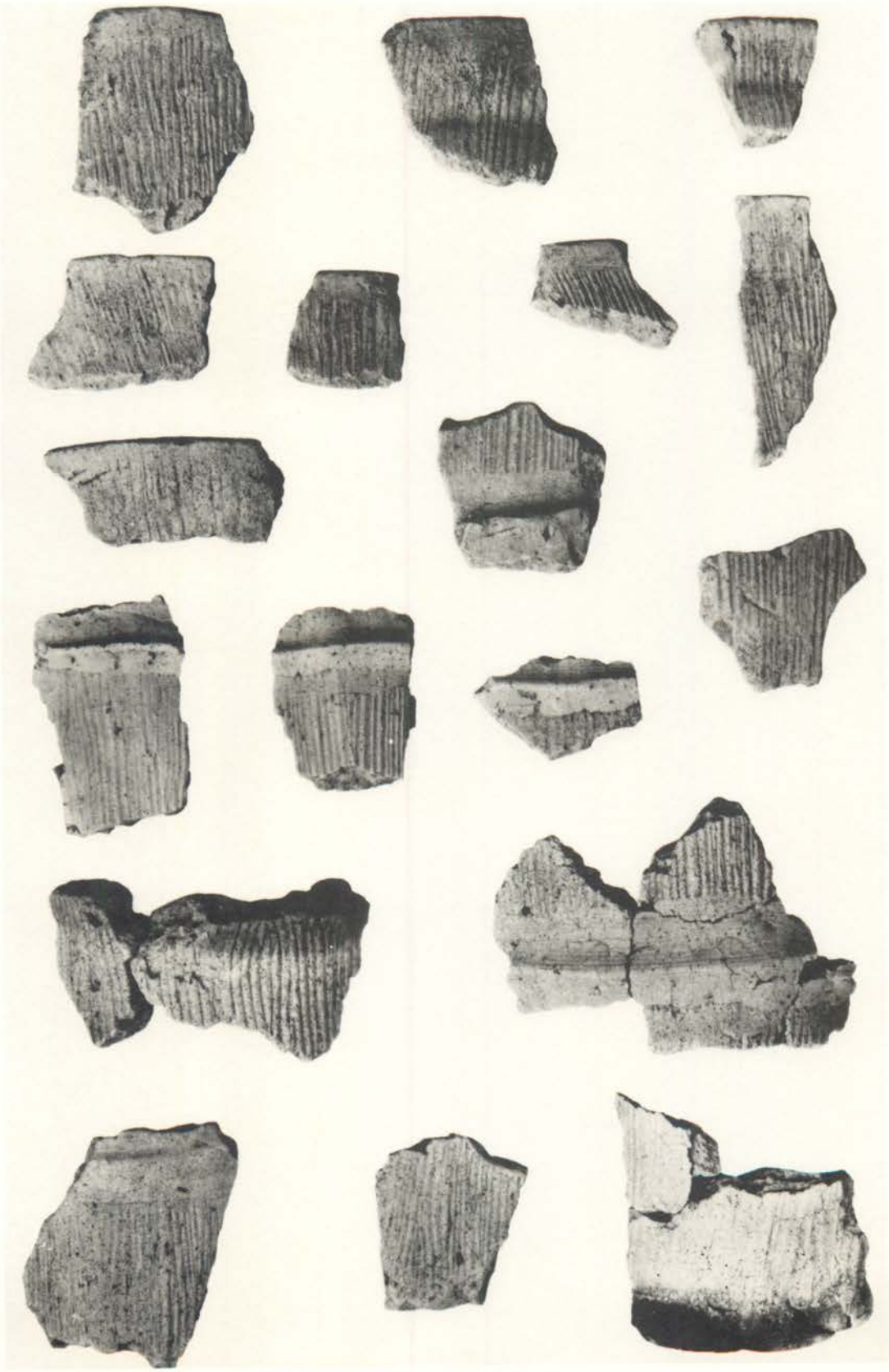
K112号墳周堀出土遺物



出土円筒埴輪①



出土円筒埴輪②



出土円筒埴輪③

出土円筒埴輪④

出土円筒埴輪⑤

SⅠ36出土丸瓦（瓦当接合部）

SⅠ36出土丸瓦

表採・軒丸瓦

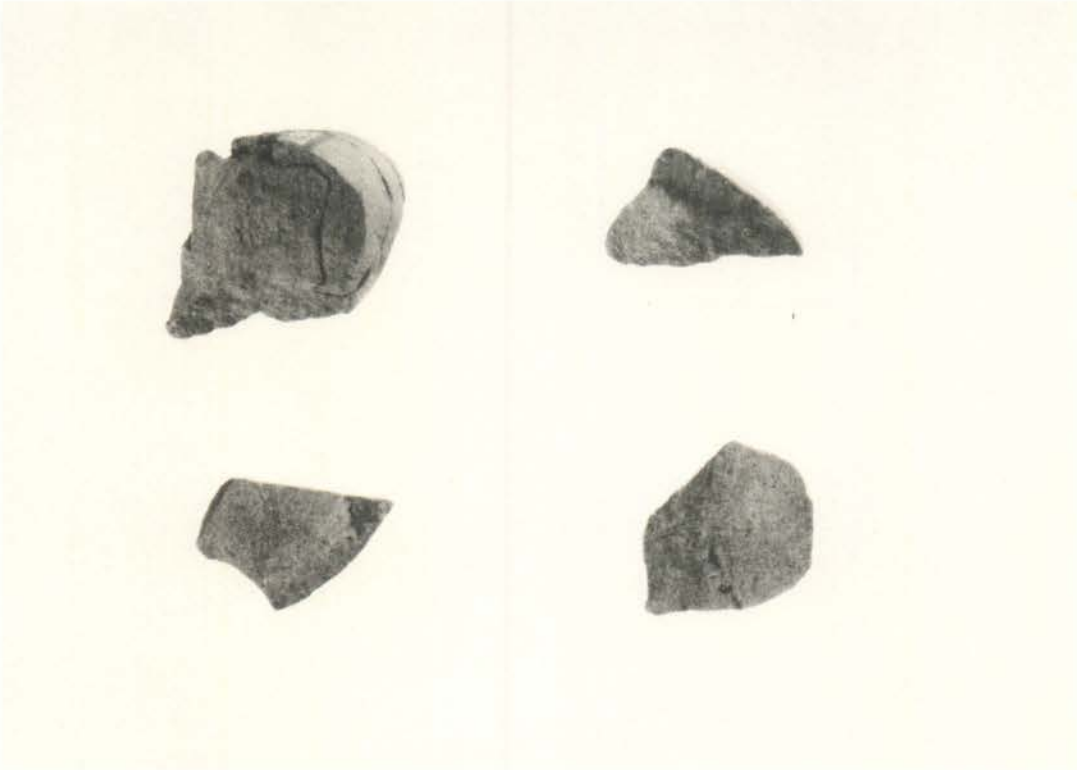
SB60出土軒丸瓦

SB13出土軒平瓦

表採・軒丸瓦

1．先土器時代遺物①

2．先土器時代遺物②

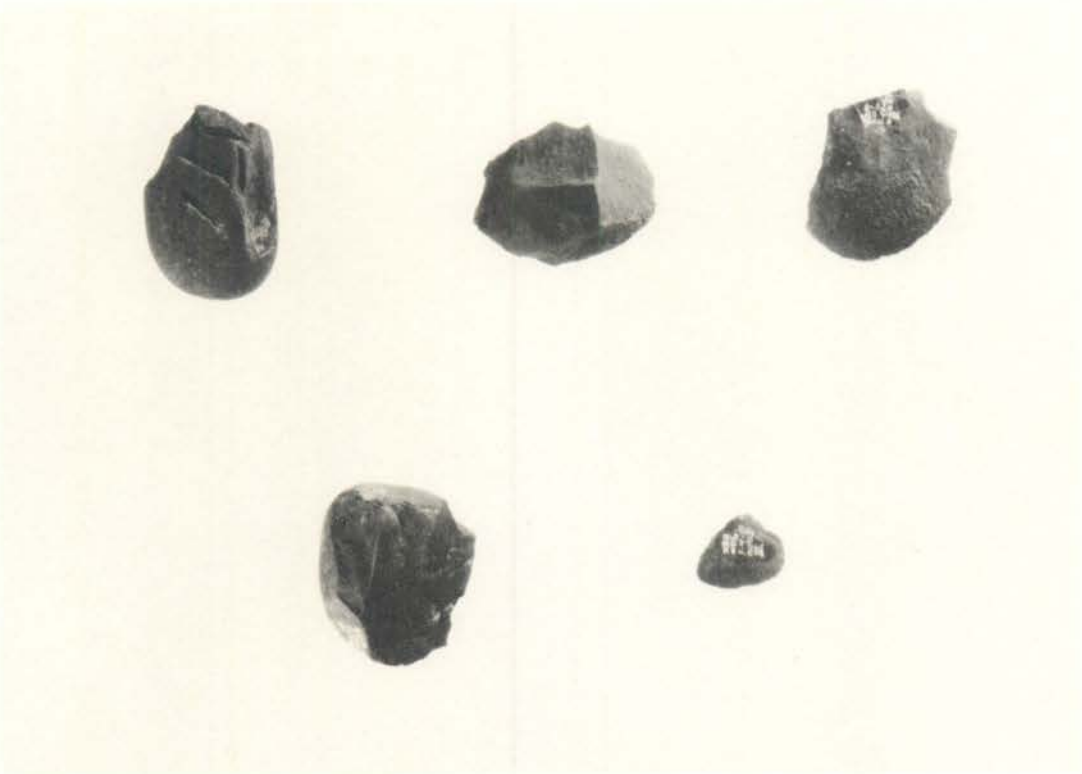


1．先土器時代遺物③

2．先土器時代遺物④

1．先土器時代遺物⑤

2．先土器時代遺物⑥



1．先土器時代遺物⑦

2．先土器時代遺物⑧

成田安食線道路改良工事地内遺跡写真図版正誤表

PL	誤	正
31	3.剣形石製模造品	3.剣形模造品・表採
63	グリッド出土土器	グリッド出土石器
97	SI1－1	SI1－15
98	SB6	SI4－8
104	唐三彩陶枕片　側面	正面
	〃　正面	側面
105	SI20－9 SI20－12 SI20－11 SI20－13	SI20－4 SI20－15 SI20－14 SI20－18
110		上段右側は 谷－348 上段左側は 谷－345
125	土専⑫	塼⑫
127	2.谷出土紡錘車 1.竪穴住居跡出土土玉	1,竪穴住居跡出土土玉 2.谷出土紡錘車
194	1.SB内・P14断面	1.SB17・P14断面
215	左側上より2段目　SI36－4 左側上より3段目　SI34－4	SI34－4 SI36－4